

遊戯王BV～摩天楼の四方山話～

久本誠一

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

デュエルは、進化して「しまった」。実体化し、質量をもつソリッドビジョン。それは、人類には早すぎた。従来のデュエル概念を壊すもの、との期待を込め「BV」、ブレイクビジョンと名付けられたそれが壊したものは、世界だった。かつての世界チャンプは「BV」の全てと共に表舞台から姿を消し、裏社会を牛耳る首領と化す。

…とまあなんか色々書いてますが、要するにオリジナルな世界設定での遊戯王二次です。肩の力を抜いてお読みいただけると幸いです。

追記：拙作は暁様との並行連載を行っています。

目次

File 1―裏デュエルコロシム

| | | |
|-------|-------------|-----|
| ターン1 | 古生代不知火流、参る | 1 |
| ターン2 | 魔界の劇団、開演 | 22 |
| ターン3 | 蕾の中のHERO | 39 |
| ターン4 | 荒波越える五星たち | 68 |
| ターン5 | 多重結界のショータイム | 83 |
| ターン6 | 黄金に輝く太陽の炉心 | 103 |
| ターン7 | 傾国導く闇黒の影 | 132 |
| ターン8 | 最速加速の大怪風 | 160 |
| エピローグ | | 192 |

File 2―精霊のカード

| | | |
|-------|------------|-----|
| ターン9 | 破滅導く魔性の微笑み | 199 |
| ターン10 | 熱血！青春！大暴走！ | 219 |
| ターン11 | 鉄砲水の襲撃者 | 255 |
| ターン12 | 鉄砲水の異邦人 | 276 |
| ターン13 | 太陽と月と罪と罰 | 303 |
| ターン14 | 鉄砲水と手札の天使 | 331 |
| ターン15 | 暗黒の百鬼夜行 | 351 |
| エピローグ | | 369 |

File 3―デュエルフェスティバル―前夜祭―

| | | |
|-------|----------------|-----|
| ターン16 | 燃える魂鋼の風雲児 | 374 |
| ターン17 | 錬金武者対赤髪之夜叉 | 391 |
| ターン18 | もうひとりのエンターティナー | 414 |
| ターン19 | 幕間の妖狐 | 442 |

| | | |
|------------------------|---------------|-----|
| ターソン20 | 独善たる執行者たち | 456 |
| ターソン21 | 歯車たちの不協和音 | 491 |
| ターソン22 | 機械仕掛けの地底神 | 506 |
| File 4 デュエルフェスティバル | — 開幕! — | |
| ターソン23 | かくて語り部は神を称える | 526 |
| ターソン24 | 十六夜の決闘龍会 | 545 |
| ターソン25 | 熱血指導、大熱血 | 568 |
| ターソン26 | 復讐の最終方程式 | 590 |
| ターソン27 | 「呪われし」懐古の悲願 | 617 |
| エピソード | | 641 |
| Last File デュエルポリスの戦い | | |
| ターソン28 | 翠緑の谷の逆鱗 | 645 |
| ターソン29 | 雷鳴瞬く太古の鼓動 | 679 |
| ターソン30 | 幻影の最終防衛ライン | 697 |
| ターソン31 | 新世代の蕾、育むは水源 | 721 |
| ターソン32 | 鉄砲水と古代の叡智 | 748 |
| ターソン33 | 過去からの迷いし刺客 | 776 |
| ターソン34 | 退路なきエンターテイメント | 804 |
| ターソン35 | 家紋町の戦い(前) | 829 |
| ターソン36 | 家紋町の戦い(後) | 842 |
| ターソン37 | 白面金毛の悲願 | 863 |
| ターソン38 | パラダイムシフト | 879 |
| ターソン39 | 伝説の復活 | 893 |
| ターソン40 | 幕開け、あるいは幕引き | 906 |
| エピソード | | 940 |

エンディング

P.S. デュエルポリスの軌跡

File 1―裏デユエルコロシム ターン1 古生代不知火流、参る

「ん……」

あるオフィスの一角。左右には山と積まれた書類に挟まれた状況で、その書類の主がふと目を覚ました。燃えるような赤髪とお揃いの赤いタンクトップの胸元をこんな薄着では足りんと言わんばかりに自己主張の激しい双丘が内側から押し広げる、やや目つきの悪い長身の美女である。

突っ伏していた姿勢からよろよろと上半身を起こして窓の外に視線をやるも外はいまだ闇深く、照明の中でしれっと時を刻む壁際の時計の針は現在時刻が「美容」や「早寝早起き」という概念に真っ向から喧嘩を売っていることを示していた。どうやら、仮眠のつもりが随分と寝過ぎしていたらしい。

それまで腰かけていた椅子の背にひっかけてあつた制服を袖も通さずに羽織つたところで、突然後ろのドアが開き1人の若い男が深夜のオフィスに入ってきた。彼女と同じ制服をボタンまで止めてきつちりと着込むその手には、コンビニのものらしきビニール袋が握られている。男は自分のことを見つめる彼女を見て、少し意外そうな顔をした。

「あれ糸巻さん、起きてたんすか」

「たった今な。で、今日が覚めたのを後悔してるとこ。やっぱアタシ、書類みたいな仕事は向いてないんだよな」

糸巻と呼ばれた女が、背伸びしながら心底嫌そうな声色でそう返す。その仕草は当の本人こそ無自覚ではあるものの、薄手のタンクトップの内側から強調される膨らみとその深い谷間の存在も合わさって人前ならば非常に好色な視線を集めるであろうものだった。だが男はそこに目を奪われる様子もなく、慣れた手つきでビニール袋から取り出したアルミ缶を投げ渡す。

「またその話ですか？そんなこと言ってるから報告書ばかり溜まっ

てくんですよ。ほら、甘酒買ってきましたからもうちよつと気合い入れてください。マジで本部から怒られますよ」

「おつ、サンキュ」

キヤッチしたそののプルタブを器用に左手の親指だけでこじ開け、中身を一息に飲み干す。後ろも見ずに放り投げられた空缶がゴミ箱の中に落ち、ガコンと思いのほか大きな音を立てた。隣近所からの苦情を思い眉をひそめる男に対し、ようやく寝起きの状態から頭が回り始めたらしい糸巻がさらに言葉を続ける。

「そうは言うけど鳥居、ほら今つて月初めだし？月末までに提出すれば問題ないだろ？」

「それ今月分の話でしょ？期限過ぎてんのは先月の報告つすよ」

鳥居と呼ばれた男にとつて糸巻の書類作業への抵抗はよほど慣れたものなのか、どちらが年上かわからないような態度で軽くないなして自分用の缶ジュースを開ける。それでもまだ何か抵抗のネタを探して左右に目を走らせる女上司の姿に、本人から見えないように小さくため息をついた。全くこの人は、有事の際には有能なくせにそれ以外はいつだつてこの調子なのだから。そしてだからこそ、上層部もこの扱いには手を焼いているのだろう。本来この地域は危険区域ど真ん中、本当はもつと人員も予算も回されてしかるべき場所のはずだ。

……鳥居には、今の上層部の考えが予想できていた。腕つぶしだけはやたら強いが、書類には常に真面目に取り組まないうえ独断専行の気が強く協調性も薄い糸巻。そして新人の自分。少数精鋭といえは聞こえはいいが、要するにただの厄介払いを兼ねた捨て石だ。おそろく自分たちは遅かれ早かれ「BV」の餌食になり、その知らせを聞いた上層部は犠牲者が出たという名目で政府予算をさらに巻き上げる。そうとでも考えなければこの「BV」戦線の最前線ともいえる町に、戦闘技能のない一般事務員を除くとわずか2人しか実戦部隊を配属しないなんて馬鹿げた話があるはずがない。

ただ、たとえそうだとしても、鳥居は今自分にできることが糸巻に未提出の書類を催促することぐらいしかないこともよくわかっていた。彼女の素行不良が彼女自身の査定に響く程度なら知ったことで

はないが、自分の給料までも連帯責任によりその減額の対象となりうることに気づいてしまったからだ。そしてこのご時世、他に仕事の当てもない。

「ハア……わーったよ。仕方ないなあ、チャチャつと片付けるか」
「もう30回は聞きましたけどね、そのセリフ」

結局何も思いつかず、抵抗を諦めた糸巻が自分の席にもう1度座りなおす。だが、その手が放り出されたペンを掴むことはついになかった。突如オフィスの空気を切り裂くように、鋭いサイレンの音が鳴り響いたのだ。

「なんだ、強盗か!」

これ幸いとばかりに素早く立ち上がった糸巻が、口元に隠し切れなिकासかな笑みを浮かべながらも手元のデバイスを操作する。ボタンを押すと同時にホログラムによって彼女の目の前に浮かび上がったこの町の地図には、自分の現在地を示す緑の光点と急行地点である赤い光点がリアルタイムの位置情報をもとに示されている。さっと目を走らせた彼女が、感心するかのように口笛を吹いた。

「へえ、いい度胸してんじゃん。鳥居、お前の行ってきたコンビニだろ(こー)」

「え?あ、ホントですね。随分うちの近くですねえ」

「多分、深夜ならアタシらもいないと思っただらうな。でも残念、ちやーんといるんだな。じゃ、軽くシメてきますかね」

「どっかの上司の残業のせいで、でしょう?どうせその辺のチンピラでしょうし、俺が行きますから糸巻さんは書類やってください」

「いいや、これは正義のためだ!アタシが行く、そして終わったら流れで直帰する!」

「本音漏れてますよー……じゃあもう勝手にしてくださいよ、どうせ止めても聞かないでしょうし」

あまり言い争っている時間もないと鳥居が折れ、それを見て我が意を得たりとばかりに逆巻が制服を羽織ったままの格好で飛び出していく。嵐の後のようなオフィス内の惨状と彼女が残していった手つかずの書類の山を見て、1人残された彼は今度こそ深く大きいため息

をつくのであった。

一方、意気揚々と飛び出していった糸巻は。意外にもその表情に先ほどの笑顔の色はなく、それなりに険しい顔で手元のデバイスをのぞき込んでいた。賊は今、通報地点におよそ3分と30秒間留まっている。彼女の予感が正しければ、既に目的は達成できている時間だろう。

……この付近の住民は、決闘者^{デュエリスト}の恐ろしさは身に染みてよくわかっている。台風が近づいているからといって、海辺に出向き仁王立ちでそれを受け止め向きを逸らそうとする馬鹿はいない。むしろ強盗の真っ最中に通報できただけ、このコンビニの店員には根性があるといえるだろう。

「と、なると。こっちか」

コンビニへの最短距離を行くルートから外れ、街灯もない入り組んだ路地にふらりとその身を翻す。その直後、コンビニで停滞していた赤い光点も動きを見せた。追っ手を攪乱しようというのかジクザグに路地を走りながらも、まるで昆虫が光に誘われるかのような確実さで同じく走る彼女に向けて近づいていく。

そして、2つの光点の位置はついに路地1本を挟むのみのところまで近づいた。そこで彼女は1度足を止め、制服に無造作に突っ込んであった煙草を1本取り出し火をつける。それを口にくわえ一呼吸おくと、風のない空に立ち上る紫煙が月光に照らされたなびいた。その軌跡を見つめながら、タイミングを見計らって声をかける。

「……よお、強盗くん。なかなかどうして、いい夜じゃないか」

建物に囲まれる影の世界から、月光の照らす元へ。まさに彼女のいる通りに飛び込もうとしていた人影が、不意を突かれ完全に硬直した気配が闇の中から伝わってきた。その初々しい反応から十中八九場慣れしていない、それも今回が初犯ぐらいのつまらないチンピラだろうと予感を確信に変える。固まったまま動かない人影に近づき、残り5メートルという地点でまた足を止め向かい合う。

「だ、だ、誰だアンタは!?!」

ようやく聞こえてきた声はまだ若く、多めに見積もっても成人した

かどうかといったところだろうか。早くも声に余裕がなく、先ほどの評価に小心者と内心で付け加えておく。

「アタシか？しがない公務員、ゴミ処理業者のおばちゃんだよ。定時はとつくに過ぎてるけどな」

「な、なんだと!?!いいか、それ以上近寄るとな……な、なんだ!?!なんで実体化しねえ!?!」

「『B V』だろ?」

強盗がその唯一の投げ所らしき左腕にはめた機械、通常モデルよりやや大ぶりのデュエルディスクを起動したところで、さらに先回りして忌々しいシステムの名を怒りを込めて吐き捨てる。今度こそチンピラがフリーズしたところで、気を落ち着かせるために煙を強く吐き出しながら畳みかけた。

「あいにく、アタシのデュエルディスクは特別製でな。不完全な携帯式程度なら、妨害電波で無効にできちまうんだよ。さ、わかったら観念しな」

「妨害電波だど?まさかアンタ……デュエルポリス……」

「なんだ、制服まで着てきたのに気づかなかったのか?言ったら、ゴミ処理業者だつて」

デュエルポリス。いまだ不完全な試作品である「B V」システムの脆弱性をついた妨害電波発生装置をデュエルディスクに組み込み、ソリッドビジョン実体化による物理的な危険を中和したうえでデュエルによって犯人の鎮圧を図る、人類に残された最後の切り札となりうる組織。

もつともその性質上人員の大多数は「B V」の影響によりデュエルモンスターズが危険視された結果職を失った多数の元プロやその関係者により占められており、彼女に言わせれば『自分たちの馬鹿な研究のせいであらぬシステムを作った挙句、その後始末に雇用対策の名目で何もしてないアタシらを、それも犯人鎮圧なんて一番危険な仕事に体よく駆り出した嫌味な組織』ということになる。

恐れを込めた声色で放たれたその単語を彼女があつさり肯定すると、闇の中から伝わる恐怖と狼狽がより一層激しくなる。そして彼

女の経験から考えると、この後に考えられるパターンは大まかに分けて2つ。1つは完全に戦意喪失し、この場で自首に走る場合。彼女にとって楽ではあるが、その場合相手の評価に根性なしの一文が追加される。そしてもう1つは、それでも一縷の望みにかけて抵抗する場合だ。どうやらこのチンピラは、若さゆえの無謀さか後者を選ぶらしい。

「クソツタレ！だったらカードで勝負だ、アンタを倒して逃げ切つてやる！」

やぶれかぶれになり、デュエルディスクをそのまま構える強盗。その仕草に好戦的な笑みを浮かべ、彼女もまた自身のデュエルディスクを起動した。

「仕方ねえな。コイツを吸い終わるまでの間なら、アタシも相手してやるさ」

言葉とは裏腹に、彼女の声は明るい。仕事柄投降を勧めてはいたが、彼女は心の底から闘争に魅入られている。ただそれだけの理由ゆえに文句を言いつつも今の立場に居座り、煙草を吸い甘酒を飲み、こうして「BV」を手にしたことによる全能感からかくだらしない犯罪に走るチンピラを締め上げ、時にはさらにその先にも手を出す女として敵味方から一目置かれているのだ。

「デュエル！」

互いのデュエルディスクが同期し、それぞれランダムに選ばれた先行、そして後攻の文字が表示される。

「先攻はアタシか、なら遠慮なくやらせてもらおうよ。来な、不知火のかげもの隠者！」

不知火の陰者 攻500

先手を取った糸巻が呼び出したのは、山伏衣装に身を包む人型のモンスター。手にした錫杖を地面に叩きつけると、その部分を中心に焰が円状の模様を描き始めた。

「そのまま、陰者の効果を発動。自分フィールドのアンデット族1体をリリースすることで、デッキから守備力0のアンデット族チューナー1体を特殊召喚できる」

「させるかよお！この瞬間、手札から灰流うららの効果を発動！デッキからモンスターを特殊召喚する効果は、これを捨てることで無効にできる！や、やったぜ！」

山伏の炎が、突如あたりに舞い散った花吹雪にかき消されて消えていく。貴重な召喚権とリクルーター、そしてデッキエンジンを1度にカウンターされ、小さく舌打ちする糸巻。

「ならアタシは、手札を3枚伏せてターンエンドだ」

「へへへ、俺のターンだ！俺はライトペンデラムゾーンにスケール1のメタルフォーゼ・シルバード、レフトPゾーンにスケール8のメタルフォーゼ・ステイエレンをセッティング！」

「ほう、ペンデラムか」

ちらりと伏せカードのうち1枚に目を落とし……結局、その後の行動を黙って見守る糸巻。そのわずかな動きにまるで気づかない強盗が2枚のカードをデュエルディスクの両端にそれぞれ表側で発動すると、ソリッドビジョンでもそれぞれ1体ずつのモンスターを内包した青い光の柱がフィールドの両端に現れる。それぞれの光の柱にはモンスターの下に独特な字体で「1」、「8」とそれぞれ刻まれていた。「これで俺は、レベル2から7のモンスターが同時に召喚可能だ。赤熱の軌跡描き駆け抜けろ、ペンデラム召喚！行くぜ、メタルフォーゼ共！」

光の柱に挟まれた空間の上部に穴が開き、そこから2筋の光が地面に落ちる。光はそれぞれバイクに乗った2体の人型モンスターとして、騎乗状態のままフィールドに降り立った。

メタルフォーゼ・ゴルドライバー 攻1900

メタルフォーゼ・シルバード 攻1700

「オラオラオラ、バトルだ！行けゴルドライバー、シルバード！」

主人の指示に従い、男女のライダーが赤熱の軌道を後に引き距離を詰める。咄嗟に体の前で両腕をクロスさせることで突撃に備える彼女に、2度の衝撃が襲い掛かる。携帯式「BV」が未成品の劣化コピーならば妨害電波発生装置もまた不完全な代物、実体化による周辺被害こそ辛うじて打ち消せても物理ダメージの全てを幻影に帰すこ

とはできない。それだけ「BV」のシステムはオーパーツ的産物であり、偶然に偶然が重なり生み出されたそれは未完の状態であつてなお人類の手には余る代物だった。

そして、だからこそ日頃からマスコミにデュエルマッスル、などと揶揄されようとも日常的に体を鍛え高い身体能力、及び精神力を持つことが常識となつていたプロデュエリストにこの仕事という白羽の矢、彼女に言わせると貧乏くじが回つてきたのだ。今回もライフの大半をこつそり持っていくほどの激しい連撃を前に、その場で膝をつくこともなく彼女の肉体は耐えきつてみせた。

メタルフォーゼ・ゴルドライバー 攻1900↓糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP4000↓2100

メタルフォーゼ・シルバード 攻1700↓糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP2100↓400

「どうだ！勝てる、このまま押し切れるぜ！」

「……ハッ、ありがとうよ。おかげでアタシも少しは目が覚めた、なにせもう夜遅かつたからな」

耐え切つたとはいえ、ダメージは決して無視できるほど浅くはない。だが彼女は口の端に加えた煙草もそのままに、ふてぶてしく笑つて呟いた。

「リンク・スパイダー」

「何？」

突然目の前で追い込んだはずの相手が口にしたモンスターの名前に、強盗が困惑する。その態度を見て呆れたように紫煙を吐き、仕方がないという態度もあらわに言葉を続ける。

「ゴルドライバー、それかシルバード。どっちでもいい、そいつらレベル4と3だろ？先に通常召喚して攻撃力1000のリンク・スパイダーをリンク召喚、改めて手札とエクストラデッキからペンデュラムすれば総攻撃力は4000超えてたんじゃないのか？」

「え？あつ、う、うるせえ！」

「んだよ、アタシの伏せを警戒したんじゃないでマジで気づいてなかったのか？だったら呆れついでに言わせてもらおうが今、ゴルドライ

バーから攻撃してきた。攻撃力は低い方から殴る程度のセオリーもなつてない、足し算もまともにはできやしない。やだねえ最近のチンピラは、教育水準がどんどん落ちてきちゃって」

「ぐ……」

半ば本気で呆れ気味に、半ば挑発込みの頭から馬鹿にしたような発言。彼女の読み通り人生経験の少ないこのチンピラは煽られることにも慣れていないと見え、強盗の顔がみるみる怒りに赤く染まる。

「うるせえーデカい口叩いたってなあ、最後に俺が勝てばいいんだよ！俺はライトPゾーンから、メタルフォーゼ・シルバードのP効果発動！俺の場で表側のカード1枚を破壊して、デッキからメタルフォーゼ魔法か罠をセツトするぜ。俺が選ぶのは、レフトPゾーンに置いたステイエレンだ！」

「……勝手にしな」

また1瞬だけ自分の伏せカードに視線を送るが、結局その中の1枚たりとも発動することなく強盗の動きを見つめる糸巻。手札にはまだ1枚、未知のカードがある。どうせこれ以上ライフを削られるわけでもなし、まだ止める時ではないと考えたのだ。

「俺がセツトするのは魔法カード、メタルフォーゼ・フュージョン錬装融合。そしてこのセツトした状態から、即座に発動！俺の場のメタルフォーゼ2体を素材に、融合召喚だ。赤熱の奇跡呼び覚ます溶媒よ、この世の全てを溶け合わせちまえ！融合召喚、フルメタルフォーゼ・アルカエスト！」

2体のライダーが空中で渦を描きながら混じりあい、卑金属が貴金属へと物理法則を飛び越え変化するように全く新たなモンスターへと生まれ変わった。バイクを降りてただの人型となったそのモンスターが身に着けた緑色の装甲の背面からは衰えを知らぬ炎がエンジン音と共に吹き上がり、右手に握る本人の背丈ほどもある巨大な杖の先端には無限の力を秘めて自発的に回り続けるタイヤらしき回転物質が備え付けられている。

フルメタルフォーゼ・アルカエスト 守0

「アルカエスト、か」

「ただだぜ、墓地から錬装融合の更なる効果を発動！このカードを墓

地からデッキに戻し、カードを1枚ドロウする。カードを1枚伏せて、ターンエンドだあ！」

ターンエンド。そう宣言した瞬間、ゆったりと事の成り行きを見つめていた糸巻の目がキラリと獲物を見つけた肉食獣のように光った。自由にさせる時間は1度終わりを告げ、ここからは狩りの時間だった。

「ならエンドフェイズにトラップ発動、バージェストマ・オレノイデス。このカードの効果で、相手の場の魔法か罠1枚を破壊できる。アタシが選ぶのはそれ、今伏せたばっかのそのカードだ」

「お、俺の無限泡影！」

「残念だったな。ま、運が悪かったと思って諦めるよ？そしてアタシのターンにもう1枚伏せカード、バージェストマ・マーレラを発動。デッキからトラップ1枚……そうだな、リターン・オブ・アンデットを墓地に。だけどアタシの狙いはそれじゃない、今発動されたトラップに直接チェーンして墓地からオレノイデスの効果を発動！このカードは通常モンスターとなり、アタシの場に特殊召喚される」

2枚目のトラップが発動されたことにより、通常、の一語をいやに強調させながら薄赤色をした平べったい古生物が彼女の場へと呼び出される。

バージェストマ・オレノイデス 攻1200

「おっと。さらに永續トラップ、シエイプシスターを発動！このカードは発動後、通常モンスターのチューナーとなってアタシの場に特殊召喚される。この発動にチェーンし、ついさつき墓地に送ったマーレラをオレノイデスと同じく蘇生する」

さらに2体のモンスターが、召喚権すら使わないうちに場に並ぶ。この効果をフルに使っていけば、先ほどのターンを無傷で凌ぐこともできただろう。だが彼女は自らの身を蝕む物理ダメージをもととせず、ただの1度の迷いすら見せることなくそれをしなかったのだ。そのことに気づいた強盗の顔が、理解できないものを見た恐怖に歪む。

シエイプシスター 守0

バージェストマ・マーレラ 攻1200

「さあ、これでアタシの場には同レベルのモンスターが3体揃ったからな。レベル2のバージェストマ2体と、シエイプシスター1体でオーバーレイ！」

3体のモンスターが光となつて螺旋を描きつつ天に昇り、無音の爆発と共に1つの新たなモンスターへと変化する。その全身はほとんど黒といつてもいいほどに濃い紫色をした棘だらけの外骨格に隙なく包まれ、両腕は鋭い鎌のようにカーブした巨大な鋏がわきわきと生物的にうごめいている。頭部の2つの球体はそのまま全方位を一度に見渡し獲物を探す巨大な目であり、ガラス体がその内側から放つ光にはかすかな知性の色と捕食者の冷徹さが垣間見えた。

「戦場呑み込む妖の海よ、太古の覇者の記憶を覚ませ！エクシーズ召喚、バージェストマ・アノマロカリス！」

☆2＋☆2＋☆2Ⅱ★2

バージェストマ・アノマロカリス 攻2400

「効果モンスターを出したな！ならこの瞬間に、俺のアルカエストの効果が発動！相手ターンに1度、効果モンスター1体を装備カードとして吸収しその攻撃力を守備力に加える！」

アルカエストが杖を掲げると、先端のタイヤがより一層高速回転を始める。回転はさらなるエネルギーを生み、杖から夜空を裂く赤い光線がアノマロカリスめがけ放たれた。

だが、糸巻の目に焦りの色はない。それどころか余裕の表情でそれを眺めていると、アノマロカリスが腕の鋏を無造作に一振りし怪光線を横の壁に弾き飛ばした。

「残念だったな。アノマロカリスはモンスターの効果を受け付けない、よってその効果は不発だ……ってうわっ、これお前が弁償しろよ？」

アノマロカリスが弾き飛ばした光線の着弾点。そこにかすかについてしまった焦げ跡が目に入り、彼女の表情からさっと余裕が消えた。壁のペンキ代は絶対に何があってもこのチンピラに払わせるという決意こそ抱いたものの、結局彼女が書かねばならない要提出の始

末書が1枚増えたことに変わりはないからだ。

だが彼女にとつてはそれなりに大きな問題も、強盗にとつてはその怒りを逆なでするだけに終わってしまう。

「ふざけやがって、ちよつと効果を無効にしたからつてなあ……！」

「あん？ 黙れ馬鹿！ アノマロカリスの効果発動！ 自身のオーバレイ・ユニット1つをコストに、カード1枚を破壊する！ アタシが選ぶのは当然、フルメタルフォーゼ・アルカエストだ！」

もはや当初の飄々とした態度はどこかに消え去り、完全にヒートアップした彼女が始末書への怒りを込めて吐き捨てるように宣言すると、アノマロカリスの周囲を回る3つの光球のうち1つが軌道を変えてその口元へと消えた。すると両手の鋏をクロスさせたアノマロカリスが、そこからお返しとばかりに青い光線を放つ。耐性を持たないアルカエストにその衝撃が耐えきれるはずもなく、あっけなくその場に崩れ落ちる。

強盗の場に、もはやその身を守ってくれるモンスターはいない。捕食者の冷たい瞳が青く輝き、何者も遮ることのないその一本道を大量の節足をワキワキと動かし意外なほど素早く滑らかな動きで迫る。

「ひ、ひいっー！」

「まあなんだ、悪く思いなさんな。アノマロカリスでダイレクトアタック、抜刀乱舞カンブリア！」

バージェストマ・アノマロカリス 攻2400↓強盗(直接攻撃)

強盗 LP4000↓1600

「あ……ぐ……」

「なんだ、まだ意識あるのか？ 少しは見直してやるよ、カードを1枚セツト。さ、かかってきな？ 投降ならまだ受付期間中だけどな」

1発きつい一撃を入れて少し気分が晴れたのか、また当初の落ち着きを取り戻す糸巻。戦いの間にだいぶ短くなった煙草を未練がましく啜えつつ、またしても紫煙をゆっくりと吐き出した。

「……ああそうかい、ならまあせいぜい頑張りな。心の底から馬鹿だとは思うがね、少なくとも玉無しじゃないみたいだね」

強盗はあくまでデュエルディスクを構え、戦闘続行の意志を示す。

追い込まれながらも勝負を捨てないその姿勢に多少表情を柔らかくしつつも、敬意を示したうえで叩き潰さんと腕を組み待ち構える。

だが当の強盗本人には、そんな彼女の変化に気づく余裕はない。迫りつつある逮捕の恐怖と敗北の足音に震える膝、そして先ほどの攻撃による物理ダメージが体の自由を奪っているからだ。

「お、俺のターン！魔法カード、ペンデュラム・ホルト！俺のエクストラデッキに3種類以上のペンデュラムカードが表側表示で存在するとき、カードを2枚ドローする！」

「ふーん、やるじゃないか」

フィールドのカードを根こそぎ失った強盗が手にしたのは、発動後のあらゆるデッキからカードを手札に加える行為が制限される代わりに1枚から2ドローを行う強力なドローソース。共通P効果がデッキから特定カードをフィールドに直接セットするメタルフォーゼにはデメリツトの影響も少なく、使い勝手のいいドローソースだろう。

そこまで考えたところで、強盗がさらに2枚のカードを引いたところが目に入った。注意深く観察を続けていると、その表情がパツと明るくなる。

「来たぜ！来い、レスキューラビット！そしてそのまま効果発動だあ！」

レスキューラビット 攻300

安全帽をかぶった1羽の兎。その姿がふっと消え、同じ顔をした2体のライダーが代わりに呼び出された。

「レスキューラビット……フィールドから自身を除外して、デッキのレベル4以下かつ同名通常モンスター2体をエンドフェイズまで特殊召喚する、か」

「ああそうさ。来な、メタルフォーゼ・ステイエレンども！」

メタルフォーゼ・ステイエレン 守2100

メタルフォーゼ・ステイエレン 守2100

そんな素振りこそ見せなかったものの、ここで1度糸巻は心中逡巡していた。レスキューラビットの召喚あるいは効果発動時、ステイエ

レン2体の展開時……ここで、アノマロカリスの破壊効果を使うべきだろうか。アノマロカリスの起動効果は、トラップをエクシース素材としているときに限り相手ターンであっても発動できる。やろうと思えば、どれかを破壊することも可能だ。

だが、迷った末に彼女はその判断を先送りにした。まだ、あの強盗の手札は2枚ある。それを見極めてから、あるいは無視できないほどのモンスターが出てきた段階でこの効果は使えばよい。そう決めた彼女の判断を、いったい誰が責められるだろうか。だがこの日この時この状況に限り、彼女の判断は間違いない悪手であったのだ。

「そして俺の切り札、超融合を発動！手札1枚、このメタルフォーゼ・ゴルドライバーをコストに、場のモンスター3体全部使ってチェーン禁止の融合だ！」

「くっ……！」

圧倒的優位を強引にひっくり返したことで、険しい顔の糸巻とは対照的に強盗の表情がパツと明るくなる。同時に、街灯すらもまばらな路地裏が明るいオレンジ色の炎に照らされた。3体のモンスターが先ほどよりも強大な渦に巻き込まれ、1つのモンスターへと変異していく。

「赤熱の奇跡呼び覚ます枢機よ、この世全てを緋色に染めちまえ！融合召喚、メタルフォーゼ・カーディナル！」

それはもはやバイクや車というよりも、2足歩行し人が乗って操るパワードスーツのような姿だった。大きく開いた上部ハッチからはヘルメットとライダースーツで全身を覆う搭乗者の姿が見え、かつてはタイヤを備え地を駆けていたのであろう両手両足からはエネルギー源でもある無尽蔵な赤熱の炎が吹き上がる。両腕がそれぞれ握りしめる炎の刃がその熱量で空気を揺らし、赤熱の軌跡が後に続いた。

メタルフォーゼ・カーディナル 攻3000

「行けえ、バトルだ！メタルフォーゼ・カーディナルで攻撃！」

「2回も伏せカードを気にしないで突っ込んでくる根性は誉めてやるが、まだ温い！トラップ発動、バージェストマ・ハルキゲニア！この

カードでカーディナルの攻守はこのターンの間半減するが、それだけじゃ終わらないさね。チェーンして墓地からバージェストマ・マーレラをモンスター化して蘇生する」

地中から姿を現した次なるバージェストマは、全体的に緑がかった色をした背骨を軸に海中を自在に動き回るための葉のようなヒレと無数の細長い節足を持つ平べったい生き物。

メタルフォーゼ・カーディナル 攻3000↓1500 守300

0↓1500

バージェストマ・マーレラ 守0

「させるか！速攻魔法、エネミーコントローラー！このカードの効果で、その気持ち悪いなんかには攻撃表示になってもらう。そのままカーディナルで攻撃だ！」

巨大なゲームコントローラーからケーブルが伸び、マーレラに接続されたそれが何らかのコマンドを送り込むことで強制的にその姿勢を変えさせる。無理矢理臨戦態勢を取らされたマーレラに、やや勢いを減じたとはいえまだまだ燃え上がる炎の刃が深々と食い込んだ。

メタルフォーゼ・カーディナル 攻1500↓バージェストマ・

マーレラ 守0↓攻1200 (破壊)

糸巻 LP400↓100

「どうだ、ポリ公め！もう諦めな、ターンエンドだ！」

メタルフォーゼ・カーディナル 攻1500↓3000 守150

0↓3000

糸巻のライフは風前の灯火。かつてのプロ、デュエルモンスターズの精鋭揃いと名高いデュエルポリス相手に終始優位に立ちまわって勝利が目前に迫っているという自信と深夜ゆえの高揚感が、若き強盗のテンションをさらに高めていく。

その姿に、糸巻が怒りに満ちた目で強く歯ぎしりする。その拍子に唇から落ちた煙草の吸殻をすかさずその残り火ごと全体重をかけて踏みつぶし、地獄の底から響くかのような低い声で強く唸る。

「……じゃねえ……！」

「あ、ああ？なんだよ、文句あんのか！」

目の前で突如激しく燃え始めた怒りを目の当たりにし、強盗の高揚感が嘘のように引いていく。むくむくと頭をもたげてきた恐怖をかき消すように大声を上げるも、そこに含まれた怯えの感情は隠しきれていなかった。

そしてそのなけなしの虚勢を叩き折るかの、恫喝の聲が路地に響き渡った。

「いい加減にしろタコ！とどめ刺せるわけでもないくせにライフ500切った奴相手の、それもたかだか300ダメのためにエネコン切る馬鹿がどこの世界にいる！温存しろよ、伏せとけよ！アタシの場の伏せがハルキゲニア1枚なのは見てただろうが、トップ羽根帯でも警戒してんのかお前は！」

「な、なんなんだよ……」

よほど強盗のプレイングが気に障ったらしく、怒りもあらわに大噴火しつつデュエル中であることも忘れて喧嘩腰に詰め寄ろうとする糸巻。その気迫に完全に気圧された強盗が無意識に後ろに下がり、数歩進んだところで無情にも壁に突き当たった。

「なんなんだよ、じゃねえ！確かにアタシがプロの時だってプレミはあった、別に全員がいつだって最適解ばかりできるわけじゃない。だがな、チンピラ！この際だからお前に言いたいこと全部言わせてもらうがな。お前らのデュエルはどいつもこいつも温い、まるで基本がなってない！カードつてもんはな、1枚1枚リスクとりターンを考えたらうで使うものなんだよ。その足りない脳みそで少しでもその辺考えたうで動いてんならアタシも何も言わない、でもお前らのデュエルはどっからどう見ても将来のことを考えてないだろうが！今だってどうせ、守備表示でアタシが出したから条件反射でそのエネコン使ったんだろ？当然次のターンがアタシに回ってくるわけだが、その時のことなんて一切考慮してないんだろ？つまり、目の前10センチのところまで視界が切れちゃってんだ。アタシらは腐ってもプロ、デュエルモンスターズで飯食ってきた本職だったんだぞ？それをこんな毎日毎日毎日毎日お前みたいに幼稚園児以下のプレイングのド三下ばっつかり相手させやがって、そのくせカードだけは一丁前にレ

アカード用意しやがるから一層性質が悪い！チンピラならチンピラらしく大人しく逃げ帰ってもっと骨のある奴連れてこい！……はあー」

一息にまくしたてるだけまくしたて、ようやく積もり積もった不満由来の怒りの嵐もピークを過ぎたらしい。先ほどこぼれ落ちた吸殻を、さらにぐりぐりと靴の底で念入りに踏みつぶす。

「アタシらも慈善事業やってんじやないんだよ……」

うってかわって弱々しい、諦めたような声音で最後にそれだけ小さく呟く。常人には決して理解できない感情ではあるが、強者との闘争こそがその本質であり存在意義であり、強制的にその生活を奪われた彼女にとってそれはまぎれもない本音の言葉だった。

「はあ……もういいや、アタシのターンな。考えてみりゃ、お前に言つたところでどうにもならないもんな」

心底つまらなさそうな表情と態度のままに、カードを引く。引いたそのカードを一瞥すらせず、流れるような動きでそのままデュエルディスクに置いた。

「不知火の物部もののべ。このカードは召喚時に、デッキから妖刀―不知火と名の付くモンスターを特殊召喚できる。ただしこのターン、アタシはアンデット族しか展開できない」

薙刀を手にした和装の少女が手にした得物をひと振りすると、その刃を包み込むようにしてこの世ならざる妖の焰が灯る。そして1本の妖刀が、天から飛来して音もなく地面に突き刺さった。その段階でようやくこの手のモンスターは道路にいちいち穴が開いて修繕費がかさむから控えてくれと請求書片手に半泣きで訴えてきた部下の顔を思い出したが、もうやってしまったものは止められない。

不知火の物部 攻1500

逢魔の妖刀―不知火 攻800

「レベル4の物部に、レベル3の逢魔の妖刀をチューニング。戦場貪る妖の龍よ、屍闘の果てに百鬼を喰らえ。シンクロ召喚……：レッドアイズ・アンデットネクロドラゴン
真紅眼の不屍竜。そしてこいつの攻守は、互いの場と墓地すべてに存在するアンデットの数だけアップする」

「な……な……」

無数の死霊を従える、争乱極まりしアンデットワールドの首領。かつて誇り高き空を飛ぶ龍であったのだらうその体は、すでに地に墮ちて長い。鱗の隙間から覗き見える腐肉はもはや紫色に染まりきり、生前瞳のあった場所からはとうに腐りきった目玉に代わり鬼火の紅が風に吹かれてもいないのに揺らめきを放つ。そしてその死に絶えたはずの体を動かすエネルギーの源が、全身から常に漏れ出てなお余りあるあの強大な瘴気だった。

真紅眼の不屍竜 攻2400↓2900 守2000↓2400

「は、ははは！なんだ偉そうに、そんなものいくら出したってカーディナルの方が強いぜ！」

「アンデットワールド」

「ははは……は……」

無感情に放たれた死の宣告によって強盗の笑いが乾いたものに変わると同時に、周りの風景が一変する。どこからともなく湧き上がる血のように赤い沼地、腐りきっているにもかかわらずなぜかその形を維持する枯れ木、あたりに散らばった大量の骨の上には同じく自らの骨を一部むき出しにした骨ネズミや死体漁りの蟲の成れの果てが蠢いている。

殺風景でありながら、この上なく動乱に満ちている。生あるものなど絶え果てて、死体が死体を喰らう土地。それこそが、アンデットワールド。糸巻の最も得意とする、ホームグラウンドともいえるフィールドだった。

「アンデットワールドがある限り、互いの場と墓地のモンスターはすべてアンデット族になる。つまりアタシのアノマロカリスも、お前の融合メタルフォーゼ2体も真紅眼の糧になる」

メタルフォーゼ・カーディナル サイキック族↓アンデット族

真紅眼の不屍竜 攻2900↓3200 守2400↓2700

「攻撃力、3200……！」

「もう帰らせてもらおうよ、アタシは。真紅眼の不屍竜でメタルフォーゼ・カーディナルに攻撃、獄炎弾」

真紅の鬼火が、青い瘴気が、勢いを増し膨れ上がる。ゆっくりと開かれた口内から放たれた火炎弾の一撃を、カーディナルが出力を最大まで引き上げた機械の両腕で防ごうとする。

死霊の青と錬金の赤熱、相反する2色の炎が正面からぶつかり合い互いをその熱量で焼き滅ぼさんと燃え盛り、その炎の勢いはほぼ互角……しかしカーディナルの気力だけで支えられる赤熱の炎と違い、死霊の炎はアンデットワールドに立ち込める瘴気を燃料として無尽蔵にその力を増していく。かたやその勢いを加速度的に減じていく赤、相対するは時を経れば経るほどに燃え上がる青。やがてそのバランスが完全に崩れた時、力尽きたカーディナルの巨体は不浄の炎に包まれる松明と化した。

真紅眼の不屍竜 攻3200↓メタルフォーゼ・カーディナル 攻3000 (破壊)

強盗 LP1600↓1400

「ま、まだだーまだ次のドロローで！」

「もう遅いんだよ、全部な。効果発動……真紅眼の不屍竜がいる限りアンデット族モンスターの戦闘破壊はその仲間を、次の死霊を生み出す糧になる。まあここはなんでもいいが、アタシの墓地からアンデット族のアノマロカリスを蘇生する」

バージェストマ・アノマロカリス 攻2400

「ひ、ひいつー！」

腰が抜けて動けないらしく、その場にへたり込んで顔いっぱい恐怖を張り付けた強盗。その無様な姿を無感情に一瞥し、最後の攻撃指令を下した。

「アノマロカリスで攻撃、抜刀乱舞カンブリア」

バージェストマ・アノマロカリス 攻2400↓強盗 (直接攻撃)

強盗 LP1400↓0

「う、うわあああーっ！」

絶叫が夜に響き、そしてまた静寂が訪れる。ソリッドビジョンが、ゆっくりと消えていく。たった1人その場に立っていた糸巻が月光のかすかな輝きを頼りに煙草を吹かそうと口元に手を伸ばし、先ほど

目当てのものを自分で吐き出したことを思い出した。

制服のポケットに放り込んだある箱の中には、あと何本残っていただろうか。給料日までの日数と心もとない財布の中身をざっと計算し、結局それ以上の喫煙は諦める。その代わりに彼女が手にしたのは、先ほど追跡に使用したデバイスだった。慣れた手つきで番号を入力し、画面に向かい語り掛ける。その表情からはもう、先ほどの諦めやどうにもできない苛立ちの入り混じった色はすっかり影を潜めていた。

「おう鳥居、アタシだ。こっちは終わったから、適当に夜勤の事務員集めてくれ。事後処理？んなもん明日で……え、ダメ？わかったわかった、こんな夜中にそう怒鳴るなつての。とりあえずここで見張ってるから、まずこのガキにつける手錠と車転がしてこれる奴頼むわ。アタシ？いやー、急だったから持つてくるの忘れちまってよ。んじやなー」

雷を落とされる前にさっさと通話を切り、流れるような動きで電源ごとオフにする。つかの間の静寂が戻った路地で気を失った強盗の手元に手を伸ばし、その腕のデュエルディスクからデツキを没収する。このカードが持ち主の手元に戻るのには、この男が娑婆に戻ってやらだろう。何気なくその一番上のカード……もしも先のターンでエネミーコントローラーを温存し自分の身を守るために使用していた場合、その稼いだ1ターンで何を引いていたのかを確認する。無論、勝負の世界に「もし」はない。ただの暇潰し、ちよつとした実験程度のお遊びだ。

「永続トラップ、メタルフォーゼ・コンビネーションねえ」

1人眩き、次いで自分のデツキを確認する。デツキトップは魔法カード、おろかな埋葬……無論彼女のデツキには、墓地から効果を発動する蘇生札である馬頭鬼が存在する。

「結局、お前じゃ力不足ってことか。なあ？」

無論、強盗からの返事はない。地面に伸びたままのその姿を見下ろして乾いた笑みを漏らし、誰にも聞こえないような声量で静かに呟いた。

「誰か、たまにはアタシを倒してみてくれよ……」
風に流れたその言葉は、ただ夜だけが聞いていた。

ターン2 魔界の劇団、開演

鳥居浄瑠じょうるは朝が嫌いだ。朝はいつだって、ろくなことが起きない時間帯だと相場が決まっているからだ。その日出勤した彼を真っ先に迎えたのもまた、ろくでもない話だった。

「……鳥居。すまん！」

おはようの一言もなく人の顔を見るなり頭を下げてきたのは、遠くからでもよく目立つ燃えるような赤髪の女上司。最初のうちは殊勝な上司の姿に一体何事かと慌てふためいたりもしたものだ、それはもはや遠い昔の話。毎日のごとく繰り返されるこの光景にもはやすっかり擦れてしまった感性はもはや心動かされることもなく、また面倒事起こしやがったなこのクソ上司、などと怒る段階すらもすでに超えてしまった。

だから、地獄の底から聞こえてくるかのように低く重く暗い無感情な声音で彼はこう問い返す。

「今日は何やらかしたんですか、糸巻さん」

口ではそう言いつつも、どうせ昨夜彼女が捕まえてきたコンビニ強盗関連の話だろうと内心ではあたりをつける。おおかたこの人のことだ、また頼んでもいないのに妖刀―不知火でも召喚して地面にぶつ刺したのだろう。業者に連絡を入れる程度なら、面倒ではあるがさほど手間でもない。

だが彼女の口から飛び出したのは、強盗関連というアプローチこそ正しかったもののその先は彼の予想を大きく上回る思いもよらない爆弾だった。

「ゆうべのチンピラ、もとい強盗だけだな、あれアタシがさつき逃がした」

「……………はっ？」

文字の羅列を彼の脳が意味を成す文章として受け入れることを全力で拒み、そこに含まれた意味からどうにか目を背けようと無駄な努力を繰り返す。そしていかなる努力も徒労に終わった時、ようやく目の前の上司が隠し切れない好戦的な微笑を浮かべている様子が見て

取れた。

「まあ聞けよ、確かに独断なのはアタシが悪かったし、それはきちんと謝るからさ。ただ真面目な話、ちよつとした司法取引ってやつでな。これがまた、結構面白い話が聞こえてきたんだ」

「司法取引、ですか」

手近なところにあつた来客用の椅子に腰掛け、腕組みして話を聞く姿勢に入る。この上司は人格的には手遅れだが、少なくとも腕は間違いない。その彼女が取引に乗ったからには、それなりに信憑性も利益も大きい話だろう。それにこの人は、今の態度を見る限り間違いない口先だけはそれっぽいことを言えど自分が悪いことをしたとは欠片たりとも思っていない。これは、何を言っても聞き流されるのが関の山だろう。その証拠に彼女がその煙草に火をつけ煙を吹かしながら話を再開したのは、以前に彼自らが半ば目の前の女上司への当てつけによつてでかでかと書いた禁煙の張り紙の目の前だった。

「アタシも最初は、ただのチンピラの苦し紛れだと思っただけだな。どうもその割には妙に細かいところまで設定が練つてあるからこれはもしかしたら、と」

「何かあつたら全部うちの上司がやりましたって言いますよ。で、いったい何を掴んだんです？」

「裏デュエルコロシウム、だよ」

ほんの一瞬だけ、何を考えているのかわかりたくない上司の目がスつと細まった。

裏デュエルコロシウム。「BV」により大きく廃れたデュエル産業で、デュエルポリスへの転業を良しとしなかったプロ崩れなアウトローたちのたまり場。密かに観客を集めては、嚴重に隠蔽された空間でデュエルを見せものにし、現金や高額レアカードを賭けの対象とする非合法産業。どれほどデュエルモンスターズが危険視されようと、ほんの数年でそのファンまでもが廃れるわけではない。賭けの胴元となり資金を荒稼ぎする裏家業はもちろんのこと、表の世界からも政治家、アイドル、財界人……彼らのパトロンとなり、嚴重に隠された場所を提供し、自らの逮捕されるリスクを負つてでも失われたかつて

の熱狂をもう一度見たいと願う者はいくらでもいる。仮にそのすべてを摘発したとすれば国ひとつ揺るがすほどの大損害が発生するともいわれ、どこの国も下手に手が出せない頭痛の種である。

「……いいんですか、元同業者だっているでしょうに」

「アタシも、あいつらの考えることがわからないわけじゃない。むしろ、アタシみたいなものの考えがあいつらには理解できないんだらうよ。何せアタシは、尻尾振って公務員に成り下がった犬だからな」

彼ら元プロデュエリストのことを語るとき、いつも彼女は懐かしむような、自虐するような、様々な感情の入り混じった複雑な表情を見せる。この人も、難儀なことだ。鳥居はこの地に配属されてから幾度となく反芻してきたセリフを、そつと胸の内で繰り返した。仕事も生活もその何もかもをイカれた科学者の意味不明な発明によって奪われ、あげくその科学者を雇っていた政府に雇われてかつての仲間とも戦わざるを得ないというのはどんな気持ちなのだろう。

「……それでも、止める必要がある。なにせプロ崩れの集まる大規模な大会みたいなもんだ、かなりレベルの高い奴が集まるだろうからな。そんな上質な戦闘データの回収なんてされてみる、どれだけアップグレードされるかわかったもんじゃない」

デュエルモンスターズを行う、それ自体が違法なわけではない。問題なのはそれに付随する賭け試合の横行、そして「BV」だ。血に飢えた観客を楽しませ勝負に臨場感を持たせるため、この手の裏試合と「BV」は切っても切れない関係にある。そしてデュエルポリスによる妨害電波の及ばない試合ではその戦闘データは根こそぎ回収され、そのアップグレードの糧となる。後者だけでも排除しようにも、今では人の傷つかない裏試合など誰も見向きもしない。皮肉な話ではあるが、確かに「BV」はその目的、デュエルの常識を壊し新たなステージへ進めるという目標を成し遂げているともいえる。

「……なるほど、話は分かりましたよ。それで？いつ始まるんです？」

「明後日の午前0時。場所はほら、数か月前にニュースで見たら？この近くにいる金持ちが、ここに避難用の巨大シエルターを作りますっての。その工事現場の中らしい……うまいこと考えたもんだ、いかに

もデュエルモンスターズは怖いです、みたいなこと言ってる父つあん坊やが場所の提供やってたなんてな。おまけにあそこは個人の土地だから、そうそう疑われない場所だったしな」

「あー、あの城みたいな家の。確かに、なかなか大きなヤマですねこれ。でも、ただのチンピラが何でそんなことまで知ってたんですか？」

大まかな話には納得したところで、ふと気になったことを聞く。これは大規模な話になるだろうに、なぜ口を割りやすい下っ端がそんなことを知っていたのだろうか。同じことは糸巻自身考えていたらしく、その疑問には肩をすくめてあっさりと答えた。

「サクラ頼まれてたんだとよ。なんでもあのチンピラの頭が出場するらしくてな、威圧になるからって子分全員連れてくつもりだったらしい。さ、他に質問がなければ、これからちよつとばかり忙しくなるかな。まずは鳥居、お前は正攻法からコロシアムの内部に突っ込んでくれ。アタシはここに出るような連中には顔が割れすぎてるから、すこし別口から当たってみる」

鳥居浄瑠は昼が嫌いだ。昼はいつだって、朝に飛び込んできた面倒事に対し本格的に向き合わなければならぬ時間だからだ。しかもこの日の仕事は、これまでやってきた上司のやらかしに頭を下げるレベルの話では到底終わりそうにない大物だ。彼が制服を脱いで私の服姿で訪れたのは、例のシェルター建設中の金持ちの自宅。表向きは実体化されたカードにより破壊された建物を復興する際の建設業で財を成した、このご時世では珍しくもなにもない小金持ちでしかない男の住む家の応接間だ。

いかにも成金趣味な家具に囲まれ柔らかすぎるソファに身をうずめることしばし、おもむろにドアが開く。反射的に立ち上がった彼の目に、いかにも人のよさそうな小太りの中年男性がにこやかな笑顔を浮かべながら近づいて手を伸ばす姿が映った。その姿が事前に記

憶しておいたこの家の主、兜大山のものと一致することを確かめ、その手を握り返す。

「やあやあどうも、話は聞いているよ。私の半生なんかを本にしたいだなんて、いきなりだったから驚いたけどね。ええと……」

「初めまして。柘榴出版の鳥居、と申します」

偽の仕事に、偽名すら使わない雑な変装。もしこの兜という男が事前に少しでも調べていたならば、柘榴出版なる会社は日本のどこにも存在しないことに気づいていただろう。普段の鳥居ならば絶対にやりたがらない雑な下準備だが、もとよりこの仮の姿をいつまでも維持する必要もつもりもない。重要なのは彼がこうしてこの男と接触できるか否かのみであり、たった今その目的は達成された。

握手しながらも、気取られない程度に左右に目を走らせる鳥居。彼の視界内に、家族や家政婦といったこの会話を覗く相手は存在しない。

……仕事の、時間だ。

「さて、兜さん」

「なんだい？なにぶん自分の伝記なんて作るのは初めてでね、まだよく勝手がわからないんだ。それで……」

「2日後……ちようど10日ですね、その午前0時」

ピクリ、と中年の眉が動いた。わずかな沈黙を経て取り繕うようにぎこちない笑顔を浮かべたが、鳥居に言わせればその演技の素人臭い青さは誤魔化しきれていない。普段からあまり嘘をつきなれていない人畜無害なタイプの善人、裏との？がりは本来薄い男だと判断して一気に畳みかける方針に切り替えた。

「どうしたんだい、いきなり？」

「兜さん、お互いとぼけるのはやめましょうよ。先に謝罪しておきませんが、取材の話は全て嘘っぱちです」

「そんな……！」

顔面蒼白になり、酸欠の金魚のように口をパクパクさせる姿には同情の念が湧いた。だがそれも無理はないだろう。裏デュエルコロシアムの開催は傷害の発生するデュエルの教唆、「BV」の発展に手を貸

したテロリストへの加担、決闘罪といった様々な罪の複合として処理される。やり方によってはこのネタだけで向こう30年は強請りに使えるほどの大罪だ。これまで重ねてきた罪らしい罪といえればせいぜいそのあたりでの立ち小便ぐらいがマックスであろう善良な市民にとつては、異次元の出来事と言つてもいいほどに遠い世界だろう。

自らの振るつたムチが十分な効果を発揮したことを見て取り、やや口調を柔らかくする。ここで重要なのは、あくまでも自分の今後については匂わせるのみに留め当人に勝手に想像させることだ。うかつに踏み込んで余計なことまで口走ると、恐喝の罪で身内の世話になるのは一転自分の方となる。そしてムチが効果を発揮したら、今度は飴の番となる。

「しかし兜さん、私は別にどうこうするつもりはありませんよ。私も、デュエルモンスターズを愛する身。むしろ今回お邪魔した理由は、その逆です」

「逆……ですと?」

その言葉にあからさまにほっとした様子を隠そうともせず、額に汗を浮かべたまま疲れきつたようにソファーに腰を深くおろす兜。その時点ですでに9割9分交渉がこちらのペースであることを確信しつつも、鳥居はここで気を抜くほど甘くはない。依然として周囲への警戒は続けつつ、最後まで気を抜かずに締めにかかる。

「何を隠そう、私もデュエリストの端くれです。主催者であるあなたからの口添えさえいただければ、今回の裏デュエルコロシアムに今からでも参加できるのではないかと」

「なるほど……」

こちらの狙いを知り、小さくうめく声が鳥居の耳に入った。裏デュエルコロシアムでいい戦績を叩き出したとなれば、当然優秀なデュエリストを囲い込みたいその筋からの勧誘も見えてくる。向こう見ずな若者ならば誰もが1度は夢見る一攫千金のビジョン、おおかたそのたぐいだと思つたのだろう。大概そんな甘い考えでデュエルの世界に足を踏み入れるものはカードを手に取る前に門前払いを喰らうのがオチだが、今回は鳥居が主導権を握っている以上そうもいかない。

そして悩むこと数分、ようやく中年男の唇が動いた。

「わかった。だが、私としてもこの場での一存で結論を出すことはできない。確かに参加者についてはある程度の裁量が私にもあるが、それ相応の実力者でなければ疑われるのは推薦する私なんだ」

「なるほど。下手に目を付けられるぐらいなら、私に屈した方がマシだ」と

「そういうことだ。だが、それもできれば避けたい。君も、一旗揚げるために私のところに来たのだろうか？それを無下にはしたくない」

神妙な顔で大真面目に子供のようなことを口にする兜に、つい鳥居の口元が小さく緩む。大義があるとはいえ、彼のしていることは犯罪すれすれの脅迫まがいの行為だ。にもかかわらず、この男はその彼の思いを無下にしたくないなどのたまう。こうしてわずかに会話しているだけでも伝わってくるお人よしの気配に、それこそがこの男に一代で財を成させた何よりの理由なのだろう、そんな考えも頭をよぎった。そして何かを決心したかのように、兜がその頭をあげる。

「よしわかった、ではこうしよう。私と君で、今からデュエルを行おう。君が勝てばそれでよし、私が勝てば推薦はできない。それでどうだろうか」

「……いいでしょう。その話、乗りましたよ」

即答する。目の前の男が本人もデュエリストであるのはやや意外だったが、そうでなければこんな危ない橋を渡るほどデュエルモンスターズに入れ込みはしないだろう。

「あいにく、数年前に無許可での所持が見つかって以降デュエルディスクの取得許可がまだ下りていなくてね。ブレイクビジョン・システムなど組み込まれていないと言ったのだが……いや、愚痴になってしまったね。ともかく、ソリッドビジョン抜きでいいだろうか」

ソリッドビジョン抜き。デュエルモンスターズの原点に戻った、机なり床なりにカードを置いて行う純粋なカードゲームとしてのプレイのことだ。立体化されるカードの迫力もなければデュエルディスクによる半自動処理も行われないが、その飾り気のない遊び方は1周回って根強い妙な人気のあるスタイルでもある。立ち上がった兜が

部屋の端の戸棚に行き、その中から40枚のカードの束を取り出すと、鳥居もまた肌身離さず身に着けているホルスターから愛用のデッキを引っ張り出した。机を挟んで向かい合い、相手のデッキをカットしたのちそれぞれが自身から見て右下にそれを置く。

「では、始めようか」

「デュエル」

通常このタイミングで挟まるデュエルディスクによるランダムな先攻後攻の振り分け機能、そんなものも当然存在しない。兜の表情をうかがうと、少し思案したのち口を開いた。

「すまないが、私が先攻を取らせてもらおう。一応これは君のテストだから、私がまず盤面を作らせてもらう」

「妥当ですね」

「では、私のターン。スタンバイ、そしてメインフェイズに移行し召喚僧サモンプリーストを召喚、効果発動。このカードは場に出た時、守備表示となる」

召喚僧サモンプリースト 攻800↓守1600

1枚のカードを選んだ兜がそれをまず机の中央に縦向きで置き、鳥居の反応を確かめてから改めて横向きに直す。

「そして何もなければ、サモンプリーストの効果を発動しよう。コストとして手札の魔法カード1枚を捨て、デッキからレベル4のモンスターを1体特殊召喚する。私が選ぶ手札のカードは、通常魔法の究極進化薬だ。何かあるかい?」

「いえ、通しますよ」

「ではデッキから、終末の騎士を特殊召喚する。終末の騎士の特殊召喚成功時、私はデッキから闇属性モンスター1体を墓地に送ることができる。この効果には?」

「どうぞ」

終末の騎士 攻1400

サモンプリーストの隣に縦向きで置かれた、終末の騎士のカード。再び効果の発動に対し問いかける兜の問いに対し鳥居が首を横に振ると、ほっとしたように再びデッキに手をつける。

「ではこのカード、オーバーテクス・ゴアトルスを墓地に。そして効果によって墓地に送られたこのカードの効果により、デッキから進化薬カード1枚をサーチしたいのだが」

「当然、それも通しますよ」

この方式ではデュエルディスクによる補助が一切存在しないために1枚ごとにルールとして、そして何よりもマナーとして相手にチェーンの伺いを立てなければならぬ。これを面倒と捉える人もいれば、ルールとマナーにより支えられた大人の競技として考える人もいる。鳥居自身はどちらかといえば後者よりであり、彼の上司は疑いようもなく前者だった。そういう意味では結果論だが、こちらに潜入するのが彼だったのは僥倖といえる。

「では、2枚目の究極進化薬を手札に。そしてこのモンスター2体を素材として、私から見て右側のエクストラモンスターゾーンに、魔界の警邏課^{けいらか} デスポリスをリンク召喚する」

横に並んだ2枚のカードを手に取り、右端に置かれたゴアトルスの上にその2枚を重ねる。代わりに兜が取り出したのはデッキの反対側、つまり左下に置かれた15枚のカードの束の中の1枚である青い縁取りのカードだった。イラストの周囲に描かれた8方向の矢印のうち、左下と右下の2か所がオレンジ色に塗られている。

魔界の警邏課 デスポリス 攻1000

「では次にこの、究極進化薬を発動したい。私の墓地から恐竜族及び恐竜族以外のモンスターを1体ずつ除外し、召喚条件を無視してレベル7以上の恐竜族モンスターを特殊召喚する。まずコストとして恐竜族のゴアトルスと戦士族の終末の騎士を除外するが、何かあるかい……いいだろう。ではデッキからレベル10、^{アルティメットコンダクターティラノ}究極伝導恐獣を攻撃表示で特殊召喚する」

究極伝導恐獣 攻3500

物々しい雰囲気の中デッキから取り出されたのは、それまでの使用カードとはそのレアリティからして違う1枚のカード。おそらくは、これが兜のエース格なのだろうとあたりをつける。

「さらにここで、デスポリスの効果を発動する。カード名の異なる闇

属性モンスター2体を素材としてリンク召喚された時に付与される効果により、闇属性モンスターのデスポリス自身をリリースして私の場の究極伝導恐獣を選択。破壊に対する身代わりとなる、警邏カウンスターを1つ置く」

究極伝導恐獣(0)↓(1)

「最後に永続魔法、カイザーコロシウムを発動。このカードが存在する限り相手プレイヤーは、私の場のモンスターの数以上のモンスターを並べることができない。今の私の場合には1体しかモンスターが存在しないため、君の出すことができるモンスターも1体だけだ。さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド。すまないが、私も本気でやらせてもらったよ」

「でしようね……」

てつきり金持ちの道楽程度かと思っていた鳥居にとっては悪い知らせだが、なかなかどうしてこの男も素人なりにデュエルモンスターのズをやり込んでいたらしいとその認識を改める。究極伝導恐獣自身の持つ盤面制圧力に、ごり押しによる突破を防ぐ警邏カウンスターの存在。そしてこちらの展開力をほぼ0にまで持ち込むこのタイミングでのカイザーコロシウム。デッキが回っていたのも間違いないが、それでも先攻1ターン目からこれだけの布陣を組むことはただの素人には難しいだろう。

「どうやら少しばかり、相手を侮っていたようだ。そう心の中で呟き、自分の中での本気度を上げる。」

「では私のターン」

1度咳払いし、喉の調子を整える。ソリッドビジョンのないデュエルは、落ち着きこそあるが今一つテンションがうまく上がらない。しかし、それもたつた今まで。すでに勝負の幕は上がり、ギアは完全にいった。自らを鼓舞するために膝のあたりをバシンと叩き、ぱっちり目を見開いて先ほどまでとは違ってかわってよく通る明朗な声でおもむろに口上を述べる。

「さあ御用とお急ぎでない方はお立会い。これよりお目にかけますは、魔訶摩訶不思議のスペクタクル。世にも珍しき一門の、稀代の

ショーにございます』

困惑する兜の表情に、それはそうだろうな、と冷静に分析する自分があることを自覚する。無理もない、なにせいきなり目の前で大人しくカードを見ていた相手が唐突に叫びだしたのだ。しかし、鳥居はそんなことで止まらない。これこそが、彼の長年かけて培ってきたスタイルだった。

鳥居浄瑠。彼は元々、プロデュエリストだったわけではない。彼の青春は演劇と共にあり、学生時代からとある劇団に所属していた。そこで彼らの最も得意としていた演目が、デュエルモンスターズを演劇に取り込み、デュエルを通じてストーリーを紡ぐ独自のスタイルである。ソリッドビジョンと舞台装置を駆使し、演者の動きとモンスターの攻撃や効果、そして魔法や罠の使用タイミングを正確に計ることでさもカードに命が宿ったかのように見せつけるその演目は評価も高く、小規模ながらに決して無視できない存在感を放っていた。

しかし、そんな彼の生活を一転させる出来事が起こる。ブレイクビジョン……「BV」開発着手の知らせである。今となつては思い出すたびに当時の自分への怒りすら湧いてくるが、当時の彼は質量をもつソリッドビジョンとの知らせに対し本気で喜んでいた。モンスターに、魔法に、罠に触れることができるのなら、ワイヤーアクションに頼らずとも龍の背に乗り空を舞うことができる。舞台上に限るとはいえ地を駆けることも、水に潜ることも思いのままだ。背景に使うフィールド魔法も、当然そのリアリティが増すだろう。ある意味で彼らは、「BV」の開発者が当時掲げていた理想に最も近い位置にいたといえたのかもしれない。

『準備はよろしいですね？それではお客様、これより開幕のお時間です』

その結末が、今だ。彼の居場所を、追っていた夢を、その同志さえも全てを奪われ、デュエルモンスターズそのものへのバッシングを受けて劇団は離散。どん底に落ちてなおデュエルに魅入られ、どうしてもカードを捨てきれなかった彼が最後に選んだ道が、デュエルポリスへの就職だった。

『レフト P ペンデュラム ゾーンに手札から、魔界劇団―エキストラをセツティング。そしてペンデュラム効果により、相手フィールドにモンスターが存在することでこのカードを特殊召喚できます』

魔界劇団―エキストラ 攻100

芝居がかった口調を維持しながらも左下、魔法罨ゾーンの端に置いたエキストラのカードを確認させ、手を添えてその真上のモンスターゾーンに攻撃表示で移動させる。この時、兜は1つの決断を迫られた。特殊召喚を通したこの瞬間、究極伝導恐獣のモンスター効果……すなわち自らの手札、フィールドのモンスターを1体破壊することで相手フィールドのモンスター全てを裏側守備表示とする効果を使うか否かである。

兜はまだ、鳥居のデッキ内容を知らない。エキストラ自体はその名の示す通り自身のカテゴリである【魔界劇団】での使用が一般的だが、その汎用性の高いペンデュラム効果と使い勝手のいい種族属性からフィールドへの展開を必要とするモンスターの素材や各種コスト要因として単体採用される可能性があるからだ。カイザーコロシアムの効果が効いている現状、ここで究極伝導恐獣の効果を使えば大きくこの先の動きを制限できる可能性は確かにある。

しかし、と兜はここで、目の前の青年の顔を密かに覗き見た。彼もまた、こちらの究極伝導恐獣の効果は知っている。もし彼のデッキがアドバンス召喚主体のものであり、あのエキストラがリリース要因としての採用であったとすればどうか。あれを裏守備にしたところでリリースとしての価値は何ら損なわれず、例えばアドバンス召喚時にカード1枚を除外する効果を持った邪帝ガイウスなど出されようものならもう目も当てられないありさまとなる。では、彼のデッキが【魔界劇団】であったと仮定した場合はどうだろうか。エキストラはそのモンスター効果からテーマ内の潤滑油となり、あれを放置していれば突破できるかどうかは別としてそれなりにデッキが回ることを覚悟する必要がある。その場合、ここで動きを制限すれば大きく優位に立つことができるだろう。

迷った末に意を決し、すつと片手をあげた。

「すまないね。その特殊召喚成功時、私は究極伝導恐獣の効果を使用する。手札のダイナレスラー・パンクラトプスを破壊することで、エキストラには裏側守備表示となってもらう」

「……」

手札のパンクラトプスを墓地に送ると、了承の証に領き無言でエキストラを裏側にひっくり返す鳥居。この行為が吉と出るか凶と出るか、固唾をのんで見守る兜の視線を感じながら……手札の1枚、ある魔法カードを場に出した。

「『おやおや、なんとということでしょう。私の大切な演者の1人が、舞台上がることを拒否してしまいました。ですが、果たしてそれは真実の全てでしょうか？否、私の紡ぐ演目は、そう単純なものではございません。魔法カード発動、ミニマム・ガッツ！』」

「そのカードは！」

「『その通り。ミニマム・ガッツはモンスター1体をリリースすることで発動し、相手モンスターの攻撃力をこのターンのみ0とします。恐るべき究極伝導恐獣の迫力に1度は舞台を降りたかに見えたエキストラ、しかしその裏では静かなながらも着実な、第2幕への布石が張られていたのです』」

究極伝導恐獣 攻3500↓0

エキストラを表にし、エクストラデッキの上に置く。これこそが、鳥居が最も得意とするペンデュラムカードの最大の特徴。だが、今回それが役に立つことはないだろう。

「『レフト P ^{ペンデュラム}ゾーンには我らが誇る世界の歌姫、スケール0の魔界劇団―メロー・マドンナを。対となるライトPゾーンには、誰もを笑わす最高の喜術師、スケール8の魔界劇団―ファンキー・コメディアンをセツティング』」

ここで1度言葉を切る。「溜め」の意味もあるが、それ以上に発動時にあの伏せカードに動きがないかとの確認の意味もある。何もアクションを起こさないことを確かめてから、次の仕掛けに取り掛かった。

「『それでは此度の対戦を祝し、我らが歌姫に1曲奏でいただきましたま

しよう。メロー・マドンナはそのペンデュラム効果により、1ターンに1度1000のライフを支払うことで新たなる団員をデッキから手札に加えることができます。ただしこの効果を使うターン、歌姫は団員以外が舞台へ上がることを禁止いたします』

「いいだろう、その効果も通しだ」

鳥居 LP4000↓3000

いまだ伏せカードは動かない。その効果「も」、という言い回しは単なる言葉のあやか、それとも何か含まれた意味があるのか。はたまたそう読むことをさらに裏読みしての心理戦ということもある。ソリッドビジョンのない静寂のデュエルでは、相手の表情を、動きを、行動に移るまでのわずかな間を……すべてを読み取ったうえで心理戦の持つ比重が大きい。

『それでは私が呼び寄せるのは、栄光ある座長にして永遠の花形、魔界劇団―ビッグ・スター。そしてこれより行われますは、この最上級モンスターを1瞬にして舞台へと招く魔界劇団の目玉。整いましたるスケールは0と8、よってレベル1から7までのモンスターが召喚可能。ペンデュラム召喚、魔界劇団―ビッグ・スター!』

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

サーチされたそれを、流れるような動きでメロー・マドンナの右上、右から2番目のモンスターゾーンに縦向きで配置した。召喚無効のカウンターカードが存在しないことを無言で確認し、次の効果を発動する。

『ではここで、ビッグ・スターの効果をお目にかきましょう。このカードが場に出た際、相手は魔法、罫を発動することができません』
「どれだけ言葉で盛り上げようと、やっていることは机を前に数枚のカードを置いて1人で無理にテンションを上げているだけである。おまけに観客もおらず、唯一の対戦相手はどうもノリが悪い。鳥居自身もつい昔の調子でデュエルを始めてしまったことに対する後悔など思うところは色々とあるが、ここまできて今更引っ込みがつけられるわけがない。そちらの方がよほど気まずいというのももちろんだが、何よりここまでやっておいて今更いつもの調子に戻るなどとは彼

なりのプライドが許さない。そうだ、人気の出ない頃はいつもこんな調子だった。真面目に見る気もないほんの数人の客を相手に全身全霊で演じて魅せる、そんな下積み時代の記憶も無駄に蘇る。

「『ビッグ・スターの効果発動！1ターンに1度デッキから任意の魔界台本1枚を選び、そのカードをフィールドにセットすることが可能となります。今宵の舞台に相応しき演目は……』」

「いや、ここでリバーカードを発動する。デモンズ・チェーンは相手モンスター1体の効果を無効にし、さらにその攻撃宣言も封じることがができる」

兜が動いた。表を向いたカードは永続罫、デモンズ・チェーン。ビッグ・スターの効果は無効となり、ただそこに立ちすくむのみのでくの坊と化した。仮に究極伝導恐獣の効果を回避しカイザーコロシアムの制約の中にあつてさえなお突破の一手を探し当てたとしても、あのカードがあればさらに1体のモンスターを止めることが可能となる。まさに鉄壁の構えと呼ぶにふさわしい堅牢さを誇る布陣であつた。

だが裏を返せばそれは、もはや兜にも後がないことの証明でもあつた。

「『演目名……魔界台本「魔王の降臨」。私の場で攻撃表示を取る団員の数までフィールドのカードを対象に取り、絶対の力を持つ魔王の一撃がその全てを焼き払います。このときレベル7以上の魔界劇団、すなわちビッグ・スターが存在することにより、相手は一切のカードをチェーンすることができません。さあ囚われの魔王よ、今こそその力の一端を世界に知らしめる時がやってまいりました！』」

「デモンズ・チェーンを破壊する気かい？だが今更それをしたところで、すでにビッグ・スターが自身の効果を使用したという事実が消えるわけでは……」

「『いいいえ、そうではございません。ビッグ・スターが魔王の意向を示すのは、この狭き闘技場。カイザーコロシアムを破壊！』」

「む……う。だが、すでに君はペンデュラム召喚を行ったはず。ビッグ・スターが攻撃できないままでもいいのかい？」

いぶかしげに問いかけつつも、宣言されたとおりにカイザーコロシ
アムを墓地の一番上に置く。それこそが、鳥居の狙い全てだった。

『それではついに満を持し、わが劇団の今宵の主役に登場していただ
きませう。本日このステージを彩りますは、まばゆく煌めく期待の
原石。通常召喚、魔界劇団―ティンクル・リトルスター!』

「そのカードは……なるほど、そういうことか」

魔界劇団―ティンクル・リトルスター 攻1000

主役の言葉通り真ん中のモンスターゾーンに、1枚のカードを配置
する。

『皆さんどうぞ一緒に、本日のファイナーレとまいりましょう。バト
ルフエイズに入り、ティンクル・リトルスターによる究極伝導恐獣へ
の攻撃!』

魔界劇団―ティンクル・リトルスター 攻1000↓究極伝導恐獣

攻0(1)↓(0)

兜 LP4000↓3000

「究極伝導恐獣に乗せられた警邏カウンターを、破壊の身代わりとし
て取り除く。が……」

『ティンクル・リトルスターのモンスター効果!このカードは1ター
ンにきっかり3度、3回までモンスターに対し攻撃を行うことが可能
となります。さあ、この場で幕を引きましょう。もう1度、究極伝導
恐獣に攻撃!』

魔界劇団―ティンクル・リトルスター 攻1000↓究極伝導恐獣

攻0(破壊)

兜 LP3000↓2000

『そしてこの瞬間に此度の演目における陰の立役者、ミニマム・ガッ
ツの更なる効果が発動いたします。この効果を受けたモンスターが
戦闘破壊され墓地へと送られたことにより、相手プレイヤーにその
元々の攻撃力分のダメージを!』

兜 LP2000↓0

「むう……見事だ、君のようなものがこれまで表に出てきていないことの方が意外だよ」

「お世辞として受け取っておきますよ」

再び声の調子を戻し、パツチリと見開いていた瞳も元に直る。この切り替えの早さは様々な役を演じ分ける必要があつた前職に由来しているのはもちろんだが、いちいちその言動に目くじらを立てていては本気で何も進まないほどに問題ばかり引き連れてくる今の上司との付き合いを通じて学んだものも大きいと鳥居自身は分析していた。

「では約束の話だが、確かに君の実力は見せてもらったからね。いいだろう、どうにかしてみよう。開催日が明後日であることを考えると、どう転ぶにせよ明日の今頃までには君に結果が伝えられるだろう。君の連絡先は……」

「いえ、この時間にまた伺いますよ。楽しみにしています」

この善人相手ならば多少のリスクはあつてないようなものだが、ここから先はもう少し裏の世界に近づく。万一のリスクを踏まえると、身バレの可能性に繋がる連絡先を明かすことは控えたかった。少し拒否の仕方が食い気味すぎて逆に怪しまれたかと後悔するが、幸いにもそんな考えは一切よぎらなかつたようだ。

「わかつた。私も明日ならば家にいるから、いつでも来てくれたまえ」
「ええ。それでは、これで失礼します」

そう言つて会釈し、兜宅の門を再び鳥居がくぐつた時にはすでに真正面に月が昇っていた。十分に距離を取り尾行が付いてきていないことを確かめ、そろそろ上司に報告だけ済ませておこうと携帯を取り出す。予想外に時間こそかかつたものの、おおむね狙い通りコロシアの内部に踏み込むことはできたからそう悪くない。

鳥居浄瑠は、夜だけはほんの少し好きだった。

ターソン3 蕾の中のHERO

オフィスを飛び出た糸巻が一直線に向かったのは、とある小さなカードショップだった。その看板には堂々とした書体で「カードショップ 七宝^{しっぽう}」と書かれている。デュエルモンスターズが危険視されて以降、当然ながらどの町でもカードショップは年々縮小傾向にある。この店が続いているのにはまた別の理由があるのだが、自力で細々とした営業を続けている店を見るたびに、彼女はほんの数年前までどこの店でも毎日のようにたくさんの子供が小遣いを握りしめて目を輝かせカードを物色していた様を思い出してなんともやりきれない気分になる。

そんな柄にもないノスタルジックを否定するかのようになり、まさに店内に入ろうとした彼女の向こう側から先ほど閉めた扉が開いた。

「おっと、悪いね」

「いえ、こつちこそすみません」

年の頃は15、6といったところだろうか、と見当をつける。それとも、もう少し上かもしれない。大人びた黒い目が特徴的な1人の少年が頭を下げ、彼女と入れ替わるようにしてその場を去っていった。

「おや、またお客さんかい？ いらつしやい……ああなんだ、糸巻の」

「相変わらずご挨拶だね、七宝寺^{しっぽうじ}の爺さん。客に向かつてなんだはないだろうに」

店の奥から顔をのぞかせたのは、まだわずかに黒いものが混じるとはいえほぼ白髪の小柄な老人。七宝寺と呼ばれた彼が糸巻の姿を認め、小さく笑みを浮かべた。

「ヤニ臭い格好で入ってくるようなのを客と認めた覚えはないよ。この敷地跨ぐならせめて1時間は禁煙しろって言ってるだろう？ 売り物に臭いがうつるし、それに勤務中のデュエルポリスにつかづか入ってこられたらこの近くでの心証も落ちる」

「よく言うよ、どうせ普段から閑古鳥ぐらいしか入ってこないくせに。ピーチクパーチクさえずつてる中にこんな見目麗しいおねーさんが入ってきてやったんだ、むしろアタシには泣いて感謝してもらいたい

ね」

「ひっひっひ、よく言うよ。それに客なら糸巻の、アンタもたつた今すれ違つたらろ？」

しわだらけの顔に浮かべたにやにやとした笑みを濃くしながら、先ほど閉めた扉の方を瘦せた手で指し示す老人。先ほどぶつかりかけた子供の顔を思い出しつつも、

「ああ、あの子供ガキか。おおかた友達との罰ゲームかなんかじゃないのかい？不気味な爺さんがいる店に1人で入ってこい、つてな」

「ひひっ、まあそういう輩がいることは否定しないがね。きつかけてなんてなんだっていいのさ、なあ？私も、アンタも。理由はどうあれ、カードに……デュエルモンスターズに魅入られたからこそ、そこにいまだにしがみついている。私はもう、現役はこりごりだけどね」

この言葉が示すように、この男もまたかつてはプロデュエリストの1人であった。糸巻よりもはるかに前からプロとして生計を立てていた彼には現役時代から彼女自身も何かと世話になってきたのだが、ちょうど「BV」の発表が行われるほんの少し前に寄る年波を理由に引退を発表。その後は直後に起きた事件のごたごたもありすっかり行方不明となっていた彼にこの町の片隅、懐かしい名前に惹かれふらりと入り込んだ先で出会った時には、さすがの糸巻と言えど目を丸くしたものだ。

「もったいないな、爺さん。アンタならまだまだ現役でもやってけるだろうし、こっちはいつだって人手不足だったのに」

「ひひっ、よしておくれ。今の流行にはついていけない、年寄りの体を危険にさらすんじゃないよ」

この会話も、もう何度繰り返したことだろう。糸巻が勧誘し、七宝寺がそれを蹴る。まるで変わらない返答に仕方がないと肩をすくめ、ここに来た本題へ気持ち切り替えた。

「……まあいいさ。爺さん、副業の依頼だ」

「だろいな。新バックも出ないこの時期にアンタがわざわざ顔を出すんだ、どうせまたくだらない話でも掴んできたんだろう？」

「その通りだよ。まず……」

「ああ、少し待っておくれ。その話はまた、もう少し後にしたほうがいいだろうさ。もういいだろう、そろそろ出ておいで！」

「へっ？おじいちゃんいつから気づいて、う、うわあーっ!？」

何の前触れもなく大音量で一喝すると、驚きの声と共に七宝寺の背後にあつた陳列棚に隠れて聞き耳を立てていたらしい1人の少女がバランスを崩しその場で派手に転んだ。すぐ我に返って2人の大人に見降ろされていることに気づいた少女が、床に倒れたままばつの悪そうな笑みを浮かべる。

だがこの時、驚いていたのは糸巻も同じだった。彼女にはプロデュエリストとして、肉体的にもかなりの鍛錬を積んできたという自負がある。素人程度の尾行、具体的にはスキヤンダル狙いのパパラッチ程度なら彼女1人でも気づいたうえで撒くことも可能だ。しかしその研ぎ澄まされていたはずの彼女の感覚は、目の前のまだせいぜい中学生程度であろう少女の存在を今の今までまるで認識できていなかったのだ。

だがその驚きは顔に出さないよう努め、目の前の老人に視線を戻す。

「おじいちゃん？爺さんが？」

「ひひひっ、似合わないと思うかい？でも私の孫じゃないよ、第一私は天涯孤独な独居老人さね。この子は姪の……さ、ご挨拶しな。大丈夫。この人はね、私の古い知り合いさね」

「は、はいっー」

七宝寺が姪と呼んだその少女が慌てて立ち上がり、びしつと背筋をまっすぐに伸ばし糸巻の目を見上げる。仕事柄というのもあるだろうが、今時珍しいほどに純粹な瞳に見据えられてややたじろいだ彼女にはきはきとした大声で告げる。

「先ほどは失礼いたしました！初めまして、最近おじいちゃんの家に越してきました、八卦九々乃と申します！」

「あ、ああ。アタシは糸巻……」

「一昔前は『赤髪の夜叉』なんて恥ずかしい名前と呼ばれてた私の後輩だよ」

「爺さん……別にその名前はアタシが名乗ったわけじゃないっての」

にやにや笑いを隠そうともせず名乗りに横槍を入れてきた七宝寺に、うんざりしたような表情を向ける。彼女が現役だったかつてのプロデュエリストにはほぼ全員、何らかの二つ名がある。それはデュエリストという職業がまさしくエンターテイナーであったことの象徴であり、その中であって1人1人の確かな個性を謳うプロとしての誇りの象徴でもあった。自発的に名乗る場合もあれば、そのファイトスタイルや使用デッキからいつの間にかファン内での相性が定着していく場合もある。彼女の場合は後者の典型的なパターンで、男相手でも容赦なく食らいつき叩きのめすデュエルスタイルからいつの間にか名付けられていたものだ。

彼女にも、そのかつて呼ばれた名前に対する誇りはある。だがプロであることをやめデュエルポリスに再就職した際、それはもはや捨てたものだとも思っていた。自分がプロであった証であるそれを誰よりも大切に思うからこそ、この仕事に身を落とし国家権力の犬となった時に捨てた名前だと。

「糸巻さん、ですね？初めまして！」

キョロキョロと2人の顔を見比べ、糸巻の苦い顔をどう受け取ったのか名乗った名字の方で呼ぶ八卦。自分の娘と言っても通用するような年頃の娘に気を使われたことを悟り、余計に表情が渋くなる。こんな時に煙草が吸えればいいのだが、さすがの彼女も大先輩の目の前、それも仮にも禁煙な店の中で堂々とそれを取り出すほどの凶々しさはない。

「辛い時代だねえ、糸巻の。これぐらいの年の子だと、もはや私たちのことなんて知りもしない。これも時代の流れとはいえ、なんともやりきれないものさね」

「……ああ、そうだな」

にやにや笑いを引つ込めた諦め混じりの表情で呟かれた言葉に、糸巻も神妙な調子で合わせる。その言葉通り、八卦は糸巻の過去を知らない。だがそれは、彼女が無名だったからではない。「BV」事件の後、テロ活動が小康状態になったほんのわずかな平和期間で世界的な

広まりをみせたデュエルモンスターズへのバッシング行為。何冊も
の雑誌が廃刊に追い込まれ、媒体はすべて廃棄され、無数のカード
シヨップが焼き討ちにあった、デュエリストの地獄ともいえる暗黒
期。八卦ほどの年ならば、あの時失われた当時の記録に関する記憶は
もはや忘却の彼方だろう。

「本当に、つまらない話だ」

そしてその時ほとんどの国は、何もなかった。幾度もの被害届や
陳述書にも関わらず何かしら声明を出すでもなく、首謀者の検挙に形
だけでも乗り出すこともなく、ただひたすらに静観を貫いていた。

要するにそれは、世界としても「B V」を機に変わってしまったデュ
エルモンスターズとの新たな関わり方を模索している時期だったの
だろう。有識者に言わせれば、そういうことになっている。あわよく
ばデュエルモンスターズそのものが歴史の闇に葬られ、テロも自然消
滅する……そんな甘い期待があったのかもしれない。しかしそれは
叶わず、デュエルモンスターズは滅びなかった。そして拳句の果て
が、唯一「B V」に対抗する手段としてのデュエルポリス結成、あの
地獄の時期の迫害を黙認してきた元プロへの勧誘という名の手のひ
ら返し。

糸巻自身は、デュエルポリスを激しく嫌悪する元プロの気持ちか痛
いほどによく分かる。今更どの面下げてきた、彼女自身もそう吠えた
記憶がある。それでも彼女は最終的にこの道を選んだし、それはたと
え記憶を消して100回人生をやり直そうとも変わらない選択だろ
うと思う。

「あ、あの、私何か失礼なこと言っちゃいましたか……？」

「いいや、八卦ちゃん。アンタは悪くないよ。それはそうと、八卦ちゃ
んはデュエルやるのかい？」

ここまで口に出した時点で、自分の声がひどく空虚なものに聞こえ
た。露骨な話題逸らした、と心の中で自嘲する。それは、自分自身が
過去の記憶から目を逸らしたがつていることの表れでもある。もし
てそんな思いは露知らず、穢れを知らない純粋な目であっさりこの話
題に食いついた少女を前にまた胸が痛む。

「私ですか？はい！ルールもおじいちゃんに教えてもらって、今は修行中なんです！」

「へえ、爺さん随分面倒見がいいじゃないか」

「つくづく似合わないだろう？だが、この子はなかなか特別でね。まだまだ荒いが、この子には天性のセンスがある。なかなか面白い逸材になりそうだよ」

「お、おじいちゃん……」

もじもじと居心地悪そうに照れる少女を、まじまじと見つめる。人間的にはどうにも胡散臭い印象がぬぐえないが、この七宝寺という男は現役時代から人を見る目に関しては一目置かれていた。暗黒の時代に廃刊となつてしまったとある雑誌では、毎年プロ入りするデュエリストが出るたびに「ご意見番として今後の予想を語る専用コーナーまで作られ、その結果次第でスポンサーの付き方や裏賭博の倍率まで影響を及ぼしたほどだ。」

だが糸巻の目には、目の前の少女がそこまで褒めちぎるほどの天才には映らなかつた。確かにハキハキとした明るい好印象の少女ではあるが、一目見ただけで伝わるような強者の気配は感じない。

そんな半信半疑の表情を目ざとく見て、老人がふと思いついたとばかりの軽い調子で声を上げる。

「おお、そうだ。糸巻の、なんなら今からこの子の相手を頼めないかい？」

「え、アタシが？この子の？」

「論より証拠というじゃないか。それに、この私仕込みのデュエリストだ。腕のなまつた元プロ風情に、そう簡単に勝たせやしないよ」

「そうは言うがなあ」

普段の彼女なら即座にOKを出したであろう誘いだが、彼女にも一応ここに来た理由は別にある。今頃は例の兜宅に潜入しているであろう部下の顔を……正確にはその鳥居に後で仕事放り出して遊んでいたことが発覚した場合に甘んじて受けることになる嫌味と愚痴の嵐を思い浮かべて小さく身震いする。

「よろしいんですか！ありがとうございます、是非お手柔らかにお願い

いします！」

「いや、今はちよつとなあ……」

「私からも頼むよ、もつとこの子には場数を踏ませてあげたいからね。それに糸巻の、ここに来た理由は察しが付くよ。明後日の話がしたいなら、まずこの子の相手をしてやっておくれ。それが、私からの条件さね」

「う……全部お見通ししてわけか、わーったよ。八卦ちゃん、デュエルディスク持っといで。おねーさんが胸を貸したげるよ」

「はいー」

八卦が元氣よく店の奥に駆け出し、デュエルディスクを装着して戻ってくるまでのわずかな間。その一瞬の隙に、彼女には聞こえないよう老人が小声で呟いた。

「兜建設か。ま、あとで出場者リストぐらいなら作つたげるよ」

「悪いな、爺さん」

裏稼業でなければ知りえないはずの、違法行為の詰め合わせである裏デュエルコロシアムの情報。これこそがこの寂れたカードショップがいまだ営業を続け、七宝寺自身の生活を成り立たせている真の理由だった。現役を退いてなお健在な彼の地獄耳は、どこから手に入れてくるのか常に最新の情報を掴んでいる。その理由や情報源については、彼女はいつも詮索しない。準備もなしにうかつに首を突っ込めば、この極めて重要性の高い情報網が絶たれかねないからだ。知らない幸福の存在を、彼女は確かに知っている。

「はあ、はあ……お、お待たせしました！デュエルしましょう、デュエル！」

「この狭い家の中で全力で走ってきたのかい？少し落ち着きな、アタシは逃げやしないからさ」

「す、すみません……ですが、もう大丈夫です！」

「はいはい、若いっていいねえ。それじゃあ……」

「デュエルー！」

カードショップ奥のデュエルスペース。テニスコートの片面ほどもあるその広い空間は、現役時代の資産とこの一帯の安い地価のたま

ものか。先攻を譲ろうか、と提案しようとしたその時には、すでに自分が先攻であるという割り当てがなされていた。少し頭を掻き、仕方がないと息を吐く。

「それならアタシも、本気で相手してあげようかね。アタシのターン、まずはカードを2枚セット。そして牛頭鬼を召喚する」

牛頭鬼 攻1700

糸巻がまず繰り出したのは、筋肉隆々な牛の頭を持つ地獄の門番の片割れ。悪くない滑り出しだ、と心の中で密かに呟く。特に、このカードが初手に来たことは大きいと残る手札の1枚に改めて目を落とす。

「まずは牛頭鬼、こいつの効果を発動。1ターンに1度、デッキからアインデット族を1体墓地に送ることができる。アタシが選ぶのはこのカード、不知火の隠者だ」

「不知火の隠者を……?」

「ほう? 糸巻の、随分と強気だね」

「爺さん、余計なアドバイスは抜きで頼むよ。魔法カード、命削りの宝札を発動。このターンの特殊召喚と相手に与えるダメージを犠牲に、一時的に手札を3枚となるようカードを引くことができる。アタシの手札は1枚だから、追加で2枚をドロ……またカードを2枚伏せてエンドフェイズ、命削りの宝札のデメリットで手札をすべて捨てる」

何かを感じたのか、反射的にデュエルディスクを操作してたった今墓地に送られた1枚のカードを糸巻の墓地から確かめる八卦。その表情がこわばり、あつと小さく息をのんだ。

「妖刀―不知火……!」

「伏せは4枚、しかも墓地にはいきなり妖刀かい。ひひひっ、随分大人げないじゃないか」

非難するというよりはからかうような七宝寺に、ただ獰猛な笑顔をもって応える。彼女に大人げがあったことは35年もの人生1度たりともなく、長い付き合いのある七宝寺はそれを承知したうえでこの姪に彼女をけしかけた。ならば、遠慮する道理は欠片もない。それが

彼女の持論であり、哲学でもあった。

「わ、私のターン！」

干支がひとまわり以上年上の女が平気な顔して初手から敷いてきた手加減などまるで感じられない布陣に緊張感をにじませながらも、恐る恐るカードを引く。

「魔法カード、E―エマーゼンシーコールを発動！デッキからエレメンタルヒーローE・HEROモンスター1体、エアーマンを手札に加えます！」

「ほう、HEROか」

「ひひっ、さて、どうかな？」

初手に繰り出したのは、カテゴリ対応のサーチカード。サーチ先もよほど捻った構築にでもしないかぎりまずデッキの核となるであろうエアーマンと、おおむね無難な立ち上がりである。

さすがにこれだけではまだ、評価もデッキの方向も見えてこない。沈黙のうちに見つめる糸巻の視線を感じながらも、たった今見つけたカードをデュエルデスクに出した。

「エアーマンを召喚し、効果を発動！デッキからさらにもう1体、HEROをサーチすることができません。私が選ぶのはこのカード、シャドー・ミストです！」

E・HERO エアーマン 攻1800

巨大な扇風機のような翼を背負う風のヒーローが、糸巻の牛頭鬼と対峙する。サーチ先は同じくHEROデッキならば大概の型には投入されるであろう万能下級モンスター、シャドー・ミスト。

「ここは、押してまいります！迷ったときは前を向け、です！魔法カード、融合を発動！手札のE・HERO、シャドー・ミストと同じく手札の地属性モンスター、バラ・ラヴァー薔薇恋人を墓地に送り、2体で融合召喚を行います！」

「薔薇恋人……？」

ぴくりと糸巻の眉が動く。薔薇恋人はそれなりに強力なカードでこそあるが、戦士族を軸とするHEROとはシナジーが薄く両者が共存するデッキは限られる。

「【植物HERO】……それとも【捕食HERO】か……？いや、捕食

軸ならあれは入らないか？」

記憶の中から該当パターンを引つ張り出す間にも、融合は進む。黒い巨体に太い両腕をもつ大地の戦士が、エアーマンの隣に降り立った。

「英雄の蕾、今ここに開花する。龍脈の大輪よ咲き誇れ！融合召喚、

E・HERO ガイア！」

E・HERO ガイア 攻2200

「……初手から随分飛ばしてくるじゃないの。それもおじいちゃんの教えかい？」

「はい！この瞬間、融合召喚に成功したガイアと、その素材として墓地に送られたシャドー・ミストの効果を発動します。ガイアの効果でエンドフェイズまで相手モンスター1体の攻撃力を半分にして、その数値を1ターンの間吸収。そしてシャドー・ミストの効果でデッキのHERO、2体目のエアーマンをサーチです！」

ガイアがその両腕を地面に叩きつけると、その衝撃のあまり発生した地割れが牛頭鬼に向かって走る。地割れを通して繋がった2体のモンスターのうち片方からもう片方へと、エネルギーの流れが送られていく。

牛頭鬼 攻1700↓850

E・HERO ガイア 攻2200↓3050

「これで2体の攻撃が通れば……！バトルです、ガイアで牛頭鬼に……」

「なるほどねえ。ガイアの効果を使えば確実に2200ダメージ、そしてエアーマンの1800できつかり4000、か。これでまだ初心者だってんなら爺さん、確かにこの子はなかなかの逸材だ……だが、まだまだ温いね。トラップ発動、不知火流 燕の太刀！」

「あのカードは！」

これまたわかりやすいぐらいはつきりしてしまった、という表情を浮かべる様子に、あとで覚えていたらポーカーフエイスの指南でもしておこうと心に決める。しかし今は目の前の盤面だとばかりに集中を戻すと、ちようど力を吸い取られた牛頭鬼が最後の意地を振り絞り2

体のヒーローに対し手にした巨大な木槌で殴り掛かるところだった。「アンデット族をコストとしてリリースし、フィールドのカード2枚を破壊。その後アタシのデッキから不知火モンスター1体を除外する。当然アタシが選ぶのは八卦ちゃん、アンタのフィールドにいるモンスター2体だ。さすがに今のを通してやるほどお人よしじゃないよ、アタシは」

「で、でしたら！チェインして速攻魔法、フローズン・ロアーズ冷薔薇の抱香を発動します！私のフィールドからガイアを墓地に送り、植物族以外のガイアを選んだことでデッキから植物族モンスター1体をサーチします。私の選ぶカードはこの子、プレデター・フランチ捕食植物オフリス・スコープピオです！」

地面から茨の蔦が伸び、ガイアの巨体を縛り付けて地中へと引きずり込む。除去されるモンスターをその寸前にコストとして利用する、一般的にサクリファイス・エスケープとも称される戦術。

「やるね。でも、燕の太刀には後半の効果がある。デッキから不知火モンスター1体を選び、それをゲームから除外……アタシが選ぶのは不知火の武部。そして武部が除外された場合、プレイヤーはカードを1枚引いたのちに手札を1枚捨てることができる。もつともアタシの手札は0、このデッキトップを手札経由でそのまま墓地に送ることになるがね」

言葉通りに1枚のカードを引き、それをすぐさま墓地へと送り込む。これで互いのフィールドからモンスターは消えたが、いまだ八卦の瞳の炎は消えてはいなかった。彼女に残る手札はオフリス・スコープピオ、そしてエアーマンを含めてもいまだ4枚。

「バトルフェイズを終了します。そして墓地に存在する、薔薇恋人の効果を発動！このカードを除外することで手札の植物族1体を特殊召喚し、さらにこの効果で呼び出したモンスターはこのターンのみトランプの効果を受け付けません。来てください、捕食植物オフリス・スコープピオ！そしてこのカードが場に出た時1度だけ、手札のモンスターを捨てることで私はデッキから別の捕食植物を特殊召喚できます。ロードポイズンを捨てて、ダーリング・コブラを選択！」

サソリのような形をした半動物の植物が両手の鋏を打ち合わせる

と、それに呼応するかのように地面から毒々しい色の蔦のような特徴を持つ蛇が顔を出す。

捕食植物オフリス・スコルピオ 守800

捕食植物ダーリング・コブラ 守1500

「そしてコブラの効果、か。捻りはないが無駄もない、定石通りの一手だな」

「捕食植物の効果で特殊召喚に成功したコブラは、デッキから融合またはフュージョン魔法カードを1枚サーチできます。私が手札に加えるカードは、ミラクル・フュージョンです。このミラクル・フュージョンをそのまま発動！」

「それにしても、まだ融合する余力が残ってたとはね。若い子はタフだねえ」

「ひひっ、なにせ私が手塩にかけてデュエルを教え込んだ自慢の姪だからね」

「すっかり爺バカになっちゃって、まあ。昔のファンが見たら泣くぜ、爺さん」

呑気なことを外野と喋っている間にも、八卦の融合戦術は進んでいく。ミラクル・フュージョンは場か墓地の素材を除外するという極めて緩い条件からE・HEROの融合を行うことのできる同デッキの切り札ともいべきカードであり、当然その恐ろしさは彼女自身も身にしみてわかっている。

「私が選択するのはHEROのエアーマン、そして水属性モンスター
のロードポイズン。英雄の蕾、今ここに開花する。氷結の大輪よ咲き
誇れ！融合召喚、E・HERO アブソルトZero！」

E・HERO アブソルトZero 守2000

雪の結晶を模した穢れなき純白の衣装に身を包む、ガイアとはうってかわってスマートな第二の融合ヒーロー。しかしその体に秘められた脅力は、ガイアのそれに勝るとも劣らない。なんらかの反撃を警戒してかその表示形式こそ守備表示ではあるものの、その状態であつてなお相手を牽制し、威圧するだけの能力がある。

「さらにカードを1枚伏せます。私は、これでターンエンドです！」

アブソルートZero。その姿を前に糸巻は、無性に煙草が吸いたくなつた。ポケットに手を突っ込んだところで、観戦中の老人の非難がましい視線に気づきました手を放す。仕方がないと観念し、デッキトップに手を置いた。

「確かに、こりやアタシでもそれなりに覚悟しないとキツイかもな……ドロー！」

だが、何も手がないわけではない。ちよつと抵抗された程度ですぐ諦めに入るようなメンタルでは、プロなど到底務まらない。すでに彼女の仕込みは進んでおり、あとはそれがどう実を結ぶかだけの話なのだ。にやりと笑い、伏せてあつた3枚のカードのうち1つを表に向けた。

「リバースカード、一撃必殺！居合ドローを発動！手札1枚をコストとして相手フィールドに存在するカードの数までデッキトップからカードを墓地に送り、その後カードを1枚ドローする。さあ、何かあるなら今のうちに申告しときな？」

「デッキ操作もなしに？ギャンブルカード、ですか？」

「いいや、そうじゃない。油断しなさんな、九々乃。『赤髪の夜叉』はあれを起点に、何度も自分の不利を力技で跳ね返してきたんだ」

「ええっ!?そ、それは失礼しました！私からは何もありません、はい！」

「……なあ爺さん。ちよつといい子過ぎないか、この子。本当に爺さんの血縁かこれ？」

90度に腰を曲げてぺこぺこと頭を下げ、平謝りする姿にまたしても毒気を抜かれる。どうにもやりづらいと文句をつける彼女に対し、問われた本人は軽く肩をすくめたのみで、もはやこの態度にも慣れきつたと言わんばかりの調子で答える。

「育ての親は私じゃないよ。それよりほら、何も無いって言ってるんだから早く続けたげな」

「あ、ああ。八卦ちゃん、アンタのフィールドにカードは4枚。だから4枚のカードを墓地に送り……ドロー！ドローカードは屍界のバンシー。居合ドロー以外のカードを引いた場合、今墓地に送った数まで

アタシの墓地のカードをデッキに戻す。今回選ぶのは命削りの宝札、牛頭鬼、燕の太刀、異次元からの埋葬だ」

「た、助かったあ〜……」

ドロカードを見て、その動きを食い入るように見つめていた八卦がほつと胸をなでおろす。だがそれも無理はない、もし今のドロで同名カードを引いていた場合はその効果によりフィールドのカードはすべて破壊され、墓地に送られた枚数1枚につき2000もの特大ダメージが発生していたからだ。無論彼女のライフは、到底それだけの莫大なダメージに耐えきれはしない。

だが、それが決して「はずれ」ではないことを、すぐに彼女は身をもって知ることとなる。

「トラップ発動、バージェストマ・デイノミクス！手札1枚を捨てて、フィールドに表側で存在するカード1枚を除外する。アタシが選ぶのは当然、アブソルートZero。さらにトラップが発動したことでチェーンして、アタシの墓地からバージェストマ・ハルキゲニアの効果が発動。このカードをモンスターとして特殊召喚する」

「ええっ!?わ、私のヒーローが!」

屍界のバンシーが墓地に送られ、うねうねとした半透明の触手を持つ生物が氷のヒーローに絡みつく。その姿が消えた時、緑色の芋虫状の体から何対もの足らしきものや注水機関を生やす、口はあれど目の存在しない得体のしれない生物が入れ替わるように現れる。

バージェストマ・ハルキゲニア 攻1200

「ですがこの瞬間、フィールドを離れたアブソルートZeroの効果が発動です。相手フィールドのモンスターをすべて破壊……あれ？」

氷結の嵐が吹き荒れるが、氷のつぶてを一身に受けながらもハルキゲニアの体はびくともしない。訝しむ少女を前に、大人げない大人が会心の笑みを浮かべた。

「残念だったな、バージェストマは確かに通常モンスターだが、モンスター効果を受けない能力を併せ持つ。まだまだ行くぜ、屍界のバンシーの効果だ。このカードを除外することで、デッキからあるフィールド魔法1枚を直接発動する」

「あるフィールド魔法……?」

「おうおう、随分久しぶりに見るねえ。現役時代を思い出すよ」

困惑顔の八卦に、どこか嬉しそうな七宝寺。真逆の反応を感じながら、勢い良く1枚のカードをデッキから取り出す。

「生あるものなど絶え果てて、死体が死体を喰らう土地。アタシの領土に案内しよう……アンデットワールド、発動！」

捕食植物オフリス・スコープオ 植物族↓アンデット族

捕食植物ダーリング・コブラ 植物族↓アンデット族

バージェストマ・ハルキゲニア 水族↓アンデット族

晴れない黒雲、深き血の沼、穢れた空気、病んだ大地。その中央で1人不敵に笑う赤髪の女に、初めて八卦は背筋にぞくりとするものを感じた。それは強者を目の前にした防衛本能のなせる業だったのか、はたまたその光景から感じ取った破滅的な美によるものなのか。いくら才能があるとはいえいまだ幼い彼女には、その感情を言葉に表すべしは持ち得なかった。言葉を失ったまま目の前の光景を呆然と見つめるその耳に、遠く糸巻の声が響く。

「アンデットワールドがある限り、互いのフィールドと墓地のモンスターはすべてアンデット族に書き換えられる。さらにトラップ発動、バージェストマ・オレノイデス。このカードの効果でゲームから除外されたカード1枚、屍界のバンシーを墓地に戻す。だけどそれで終わりじゃない、トラップの発動にチェーンして墓地のデイノミスクスを特殊召喚」

バージェストマ・デイノミスクス 攻1200 水族↓アンデット族

「召喚条件は、アンデット族モンスター2体。右下と左下のリンクマーカーに、このバージェストマ2体をセット」

8つの印が浮かぶ円がフィールドに現れ、その右下と左下に2体のバージェストマが潜り込む。そしてモンスターの入り込んだ印に、オレンジ色の光が灯った。

「戦場に笑う妖の魔性よ、死体の手を取り月光に踊れ！リンク召喚、ヴァンパイア・サツカー！」

大量のコウモリが黒い渦と見まごうほどにどこからともなく結集し、その渦の中央から1人の少女が退屈そうに欠伸びながら地面に降りる。その開いた口から覗く歯は死体のように白く、ぞつとするほどに鋭い。だが何よりも彼女が人外であることを印象付けているのは、その背から生えた1対の翼の存在だった。

ヴァンパイア・サッカー 攻1600

「モンスターとしてフィールドを離れたことで、バージェストマ2体はゲームから除外される。でもな、これでアタシのフィールドには2本のマーカーが向いたわけだ。墓地に存在する馬頭鬼の効果を発動！このカードを除外することで、アタシ自身の墓地からアンデット1体を蘇生することができる。甦りな、不知火の陰者。と、ここでヴァンパイア・サッカーの効果を発動。互いの墓地からアンデット族が蘇生された際、1ターンに1度だけカードを1枚ドロウすることができる」

不知火の陰者 攻500

引いたカードを一瞥し、さらに次の展開にかかる。元々このドロワーはおまけ程度、既に十分すぎるほどにこのターン攻め込むための材料は揃っているからだ。

「さらに陰者の効果でアンデット族、陰者自身をリリースしてデッキから守備力0のアンデットチューナー、ユニゾンビを特殊召喚する」

居合ドロワーで墓地に送り込んでいた馬頭鬼を足掛かりに不知火の陰者を蘇生し、さらにユニゾンビのリクルート。一度この流れに入った彼女は、もはや誰にも止めることはできない。

ユニゾンビ 攻1300

「ユニゾンビの効果発動。1ターンに1度場のモンスターを選択し、デッキからアンデット1体を墓地に送ることとそのレベルを1上げる。ユニゾンビ自身を対象として、2枚目の馬頭鬼を墓地に。この効果を使うターン、アタシはアンデット以外では攻撃できないけれど……アンデットワールドにいる限り、その制約は踏み倒したも同然」

ユニゾンビ ☆3↓4

「たった今落とした馬頭鬼の効果を発動。また除外して、もう1度だ

け不知火の陰者を蘇生する。レベル4の陰者に、同じくレベル4となったユニゾンビをチューニング!」

そして始まる、シンクロ召喚。その合計レベルは、8。

「戦場潜る妖の電子よ、超越の脳波解き放て!シンクロ召喚、PSYフレームロード・Ω!」

細かく並んだ0と1のノイズとともに、全身を強化服と脳波増幅パーツですっぽりと包んだサイキック戦士が空間を歪めてワープ着地する。かすかに全身に走るプラズマの名残が、その念動力の強大さを示唆していた。

☆4+☆4=☆8

PSYフレームロード・Ω 攻2800 サイキック族↓アンデット族

「あんな状況から、こんなにモンスターを……」

「いいや九々乃、まだ気を抜くんじやないよ。あれはやっぱり、腐ってもプロさね」

「その通りさ爺さん、それに八卦ちゃん。アタシのフィールドにはまだもう1本、ヴァンパイア・サッカーのマークが向いているからね。妖刀―不知火の効果を発動!墓地からこのカードと他のアンデット族モンスターを除外することで、アンデット族のシンクロモンスターを疑似的に呼び出すことができる。そしてアタシが選ぶのは、不知火の陰者!」

ここで、糸巻は少し思案する。彼女のエクストラデッキには、特殊召喚時に相手の墓地からアンデット族を蘇生できるデスカイザー・ドラゴンが存在し、その効果を合わせればもう少しこのソリティアを続けることもできる。

だが現在、八卦の墓地に存在する蘇生可能なモンスターはシャドー・ミストのみ。墓地に送られた際に後続をサーチする効果を持つ以上、そこまでやるのはリスクが高いか。音もなく地面に突き刺さった妖刀に、決して消えないこの世ならざる炎が宿る。その炎は妖刀を軸に不可思議な形に膨れ上がり、やがて1人の剣士の姿を模した。そしてその炎の体が不可思議の力によって一時的に肉体へと変化した

とき、刀を構える1人の剣豪の姿がそこにあった。

「戦場切り込む妖の太刀よ、一刀の下に悪鬼を下せ！逢魔シンクロ、
刀神―不知火！」
かたながみ

☆4＋☆2＝☆6

刀神―不知火 攻2500

「まだまだ終われないね。せっかくだ、ここまで来たらもうアタシが満足するまで付き合ってもらおうよ。不知火の陰者が除外された時、陰者以外の名を持つ不知火1体を除外から帰還させることができる。もう1度蘇つてきな、妖刀。そしてレベル6の刀神に、レベル2の妖刀をチューニング」

妖刀―不知火 攻800

再び地面に突き刺さった妖刀の柄に刀神が手をかけ引き抜くと、再びその刀身が燃え上がる。それに呼応するかのように刀神の全身が元の炎に戻り、2つの炎が共鳴してさらに激しく燃え上がる。その炎を切り裂くように、1匹のドラゴンが不死鳥のごとくアンデットワールドの空に舞い上がった。

「戦場吹きすさぶ妖の烈風よ、水晶の翼で天を裂け！シンクロ召喚、クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン！」

邪悪に病んだ土地にはあまりにも不釣り合いな、澄んだ水晶の翼。足のない純白の龍が両腕を広げてよんだ空気を切り裂き、邪悪な少女の騎士であるかのようにその斜め後ろについた。

☆6＋☆2＝☆8

クリスタルウイング・シンクロ・ドラゴン 攻3000 ドラゴン

族↓アンデット族

「さあお待ちかね、バトルの時間だ。覚悟しな、まずは雑魚散らしからだ。ヴァンパイア・サツカーでオフリス・スコープオに、PSYフレイムロード・Ωでダーリング・コブラにそれぞれ攻撃！」

「うう……！」

守備表示の捕食植物2体に、コウモリと電撃が襲い掛かる。2つの死体はアンデットワールドの大地にのみ込まれ、無数に存在する死霊の一部となって闇にまぎれた。

ヴァンパイア・サッカー 攻1600↓捕食植物オプリス・スコ
ピオ 守800 (破壊)

PSYフレイムロード・Ω 攻2800↓捕食植物ダーリング・コ
ブラ 守1500 (破壊)

「道は開いた。やれ、クリスタルウィング！烈風のクリスタロス・エツ
ジ！」

「まだ退きません！トラップ発動、ガード・ブロック！相手モンスター
の攻撃に対し、私の受けるダメージを1度だけ0に。そして私はその
後、カードを1枚ドロウします！」

「なるほど、つくづくやるじゃないか。まさか、ノーダメージで凌ぎ切
るとはね。八卦ちゃん、元とはいえプロのアタシが保証したげるよ。
アンタの腕は本物だ」

「本当ですか!?!ありがたいとございます！」

守るものなど何もいないかに見えた八卦のフィールドだったが、直
前に現れた半透明のバリアが龍の突撃を辛うじて逸らす。プレッ
シャーのあまりか息を切らせながらも、わかりやすく満開の笑みを浮
かべるその顔につられて糸巻もつい微笑む。だが、ときつちり釘を刺
すことは忘れなかった。

「本物ではあるけれど、格の違いを教えてあげるよ。ターンエンド」

「私のターン、ドロロー！」

このドロローフェイズを迎えてカードを引いたことで、彼女の手札は
先ほどサーチしたエアーマン含め3枚となる。だがその瞬間を見計
らい、糸巻がダメ押しの一手を繰り出した。

「このスタンバイフェイズ、PSYフレイムロード・Ωの効果が発動。
互いの除外されたカード1枚を選んで、そのカードを墓地に戻すこと
ができる。このターンアタシが選ぶのは、馬頭鬼だ」

馬頭鬼を選択することで、さらに次のターンを戦う準備を整える。
だが、Ωの効果は二段構え。追撃の準備を整えるのみならず、相手の
反撃の芽すらも摘み取っていく。

「そしてメインフェイズ開始時、もう1度PSYフレイムロード・Ωの
効果を発動。相手の手札をランダムに選択し、そのカードとこのモン

スターを次のアタシのスタンバイフェイズまで表側表示で除外する」
「私のエアーマン……」

この少女に限りそんな卑怯な技は使わないだろうとは思ったが、一応習性として体に染みついた動きで相手の除外ゾーンを確認する。エアーマン、ロードポイズン、アブソルートZero……そして、2体目のエアーマン。

「魔法カード、一時休戦を発動！このカードの発動時に私たちはカードを1枚ドロウし、次の糸巻さんのターンが終わるまでお互いにダメージは与えられません！」

「チツ……外したか？」

1枚のハンデスも空しく希望を残す形となり、やや不満げに唸る。一方で1ターンの安全を確保したことであからさまにほっとした様子をにじませながらカードを引いた八卦だったが、何かそのカードを使用するわけでもなくターンを終えた。

「モンスターは出しません。これでターンエンドです！」

「いいだろう、ドロウ。このスタンバイフェイズ、アタシのΩとアンタのエアーマンはそれぞれの居場所に戻る」

再び0と1のノイズが空間に走り、サイキックの戦士が帰還する。

この時に最初に特殊召喚した場所とは別のモンスターゾーンを選択することで、マーカー先を1つ空いた状態にするのは忘れない。大量展開における常套テクニクである。

「……とは言ったものの、どうせ何もできないんじゃないやねえ。ヴァンパイア・サッカーの効果を使い、八卦ちゃんの墓地からオフリス・スコピオを守備表示で強制的に蘇生させる。そしてアンデット族モンスターが墓地から特殊召喚されたことで、このターンも1枚ドロウ」

ヴァンパイアの少女が地面に向けて手を差し伸べると、半ば腐って枯れかけたオフリス・スコピオの死骸が小さな穴をあけて生えてくる。ピクリとも動かないその姿を前に、ご満悦そうにくすぐすと小さく笑った。

捕食植物オフリス・スコピオ 守800 植物族↓アンデット族
「これでアタシの手札は4枚。バトルフェイズ、ヴァンパイア・サツ

カードでオフリス・スコアピオを攻撃」

ヴァンパイア・サツカー 攻1600↓捕食植物オフリス・スコアピオ 守800(破壊)

「これで……」

とりあえずモンスターを一掃してメインフェイズに移行しようとした、ほんの1瞬。その隙を、少女は決して見逃さなかった。

「この瞬間、私のフィールドにカードは存在しません。よって手札からトラップ発動、拮抗勝負！」

「何いっ!？」

「取ったか、九々乃っ!」

この試合で初めて糸巻の、そして七宝寺の余裕が崩れた。これまでどうにか保ってきた、余裕ぶった大人の態度をかなぐり捨て、罠にかかった獣めいた唸り声を喉の奥から漏らす赤髪の夜叉とは対照的に、老人はその姪が放った大逆転の一手に対し歓喜に目を光らせる。

この局面で一時休戦を、そして拮抗勝負を引き当てる。それはどれほど訓練を重ねようともそれだけでは決して到達できない高み、そこがまさに天性の才能。老兵が少女に見出した輝きの原石は、疑いようもなく真実だったと確信したからこそその反応であった。

「バトルフェイズ終了時にもみ発動できるこのカードの効果で、相手プレイヤーは私のフィールドのカード数と同じになるように自身のフィールドからカードを裏側表示で除外しなければいけません。さあ糸巻さん、この拮抗勝負1枚分を除く全てのカード、除外していただきます!」

「アタシの選ぶカードは……Ωだ。PSYフレームロード・Ωを選び、後は全部除外してやるよ」

「クリスタルウイングじゃない、のですか?」

死霊の王国が崩れ、再び元の店内に光景が戻る。その戦闘能力とモンスター効果から単体で高い制圧力を誇るクリスタルウイングに対し、糸巻の選んだΩはトリッキーな効果こそ持ち合わせているものの純粋なカードパワーでは下回る。そう思ったからこそその純粋な疑問に答えたのは当の本人ではなく、いまだ興奮冷めやらぬといった面持

ちの老人だった。

「いいや、それは違う。あのモンスターの効果なら、維持さえ続ければ裏側での除外さえ一時凌ぎにしかならないからね。しかもまだ、あちらさんには戦線を維持できるだけのリソースが残っている」

「そういうことだよ、八卦ちゃん。メイン2、墓地から馬頭鬼の効果を発動。自身を除外し、ユニゾンビを蘇生」

ユニゾンビ 守0

「ユニゾンビの効果で、アタシの場のΩを選択。デッキから死霊王ドーハスーラを墓地に。アタシの領土は滅びない、墓地から屍界のバシンの効果！」

「また……アンデットワールドが！」

消え去ったかに見えたのもつかの間、アンデットワールドが即座に再興する。再び場を支配する瘴気溢れる空間で、小さな英雄がたじろいだ。

PSYフレイムロード・Ω サイキック族↓アンデット族 ☆8↓

9

「妖刀はまだ早い、か。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

「私のターン、ドロウします」

「スタンバイフェイズにΩの効果で、また馬頭鬼を墓地に。さらにチェーンしてドーハスーラの効果発動！毎ターンのスタンバイフェイズにフィールド魔法が存在する限り、墓地のこのカードは守備表示で特殊召喚できる。さあ、ドーハスーラはここのお偉いさんだ。こいつの効果はえげつないぜ？」

「させません！チェーンして速攻魔法、サイクロンを発動！アンデットワールドさえ破壊すれば、ドーハスーラは蘇生できません！」

「これも止められたか……！」

一度は蘇ったかに見えた死霊の王国がまたしても崩れ去り、彼女のエースの1体でもあるドーハスーラの効果が発に終わり……このわずかな時間に、糸巻の脳はフル回転した。今のサイクロンは、ドロウした直後に放たれた1枚。この限定されたタイミングで、またしても未来をつなぐ1枚を引き当ててみせたのか。

だが、それはあくまでその場しのぎを積み重ねるだけの後手対応に過ぎない。残る手札は2枚、そのうち1枚はエアーマンであることがわかっていいる。墓地発動のカードも存在しない以上、不確定要素は残りの手札1枚のみ。

「メイソフフェイズ開始時、このターンもΩの効果発動！左側のカードとΩ自身を次のスタンバイフェイズまで表側表示で除外する、テレポーション・パルス！」

2択の賭けだった。不確定の1枚さえ押さえおけば、八卦がこのターンできることはエアーマンを召喚しHEROをサーチすることぐらいとなる。だがサーチしたところでその手に融合のカードはなく、すでにエアーマンに召喚権を使用した以上このターンは手札に遊ばせておくだけとなるだろう。数少ない例外は特殊召喚可能なブルマン、そしてHEROの攻撃力を一時的にブーストするオネスティ・ネオスだが、仮に前者からランク4、あるいはリンク2に繋がったところでこのターンでユニゾンビを排除し彼女のライフを4000削るような動きは不可能だし、後者だとしてもその1度のブーストでこの戦いの大局が動くことはない。そこまで判断したうえで、Ωを離脱させたのだ。すぐさま除外されたカード一覧を確認し……小さく舌打ちする。

「クソツ、またエアーマンかよ？」

「そして私の手札には、このカードが残りました。私の手札が1枚のみの時E・HERO　バブルマンは特殊召喚でき、さらにこのカードが場に出た際に私の手札とフィールドにカードが存在しない場合、2枚のドローを可能とします！」

「嘘だろ……!?!」

E・HERO　バブルマン　守1200

極めて厳しい条件をクリアした時のみ使用可能となる、バブルマンのドロー効果。結果論とはいえ自らの発動したΩの効果がその条件を手助けする形となってしまう、一応相手の年齢に配慮して本人には聞こえないよう小さく毒づく。そんなわずかな唇の動きから言葉の内容を目ざとく読み取り眉を顰める老人の視線には気づかないまま、

少女の動きに従って茨の蔦が地面から飛び出しバブルマンの全身をがんにがらめに縛り付ける。

「速攻魔法、冷薔薇の抱香の2枚目を発動！戦士族のバブルマンを墓地に送ることでデッキの植物族、ローンファイア・ブロッサムをサーチしてそのまま召喚。そして、そのモンスター効果を発動します！」

ローンファイア・ブロッサム 攻500

導火線に火が付いた爆弾をその花の、そして実の代わりに咲かす恐るべき植物。そして、導火線を伝う火がその本体へと届く。

「自分フィールドの植物族モンスター1体をリリースし、デッキから植物族モンスター1体をリクルートします。糸巻さん、ここまでのデュエルはまだまだ前哨戦です！これが私の、八卦九々乃の信じる最強のヒーロー。E・HERO クノスペ召喚！」

いまだ固く閉じられた蕾にそのまま手足が生えた、まるでなんでも擬人化するメルヘンなおとぎ話からそのまま飛び出してきたような異色のヒーロー。しかし八卦はその小さなモンスターを、絶対の自信と共に場に呼んだ。

E・HERO クノスペ 攻600

「クノスペ……？」

「はい！これが私のエースモンスター、クノスペです！そして攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚に成功したことで速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！デッキからさらに2体のクノスペを攻撃表示で特殊召喚しますが、代わりに相手プレイヤーも自分のフィールドからモンスター1体を選んで同名カードを可能な限り特殊召喚できます！来てください、私のヒーローたち！」

さらに2体、蕾のヒーローが並ぶ。一方糸巻のフィールドには、ユニゾンビが1体……だが彼女のデッキに、そのカードは2枚しか入っていない。

E・HERO クノスペ 攻600

E・HERO クノスペ 攻600

ユニゾンビ 攻1300

「クノスペの効果適用！このカード以外のE・HEROが場に存在す

る限り、このカードは直接攻撃が可能となります。3体のクノスペが存在することでそれぞれがこの効果を適用、そしてバトルです、当然私が宣言するのはダイレクトアタック！」

E・HERO クノスペ 攻600↓糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP4000↓3400

「この瞬間、クノスペの更なる効果が適用されます。このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、その守備力100を犠牲とし攻撃力を100アップします！」

戦闘を行うことで成長を遂げた蕾の戦士のその頭頂部に、ほんのり赤みがさす。まだまだ固く閉じられたままの蕾はしかし、確実に花開くための一歩を歩みつつあった。

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

「まだ私のフィールドに、クノスペは2体残っています。続けて連続攻撃！」

E・HERO クノスペ 攻600↓糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP3400↓2800

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

E・HERO クノスペ 攻600↓糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP2800↓2200

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

「ちまちまちまちまと……でも、やるじゃあないか」

「ありがとうございます！これが私の必殺コンボ、八卦九々乃のクノスペシャルです！」

「クノスペシャル、ねえ。そりやまた、随分と大層なネーミングだこつて」

「ひひっ、いい名前じゃないか。私の血縁だけのことはあるよ、そう思うだろう？」

コンボの決まった高揚感からか目をキラキラと輝かせ、満面の笑みで胸を張る少女を優しい目で見る大人が2人。老人の言葉に首を縦に振った糸巻が、だがね、と続けて小さく呟いた。

「まだやっぱり、詰めが甘い。おいおい鍛えていけばいいだろうが、今

はそろそろ本気で締めさせてもらおうよ、八卦ちゃん」

「えっ?」

びつくりしたような表情の八卦を前に、口元を歪めて赤髪の夜叉が笑う。服の埃を軽く手で払い、おもむろにデツキに手をかける。

「もうメイン2での展開はないみたいだね? エンドフェイズに速攻魔法、逢華妖麗譚おうかようれいたん―不知火語を発動! 相手フィールドにモンスターが存在するとき、手札からアンデット族1体を捨てることで別名の不知火1体を蘇生またはリクルートする。2体目の不知火の武部を捨て、逢魔の妖刀―不知火をリクルートする」

先ほどの妖刀とは似て非なる、存在するはずもないもう一振りの妖刀。より赤黒に近い炎を纏うその刀身が、カードショップの店内にふわりとひとりでに浮かび上がった。

逢魔の妖刀―不知火 守0

「そして、アタシのターン。まずはスタンバイフェイズに、除外されたΩとエアーマンが帰還する」

PSYフレイムロード・Ω 攻2800

「メインフェイズ。墓地の妖刀―不知火の効果により、自身と刀神―不知火を除外することで再びシンクロモンスターを呼び出す。戦場切り裂く妖の太刀よ、冥府に惑いし亡者を祓え! 逢魔シンクロ、戦神いくさがみ―不知火!」

妖刀の隣にもう1本の妖刀が浮かび上がり、先ほどと同じように刀身から柄へ、そしてその先へと炎が宿り徐々に人の形を成していく。そこから現れた長い銀髪を無造作に伸ばす和装の男は、二刀流の……その右手には妖刀を、その左手には揺らめく炎の形を模したかのようなオレンジ色の特殊な形状の剣を握る独特な構えをとった。

☆6+☆2=☆8

戦神―不知火 攻3000

「攻撃力3000……ですが、クノスぺにはもう1つだけ効果があります。自分以外のE・HEROが存在する限り、相手から攻撃対象に選ばれない効果……つまりクノスぺが3体並んだことで、いくら糸巻さんがモンスターを並べても攻撃することはできません!」

「わかってるよ、そんなこと。戦神は特殊召喚時に使える効果があるが、今は使わない。代わりにアタシが使うのは、これだ！刀神が除外された時、相手モンスター1体の攻撃力はこのターンの間500ダメージにする。真ん中のクノスぺには、ちよつとばかり火傷してもらおうか」

E・HERO クノスぺ 攻700↓200

「逢魔の妖刀の効果発動。このターンにアンデット族以外の展開を封じる代わりに、自身をリリースすることで除外されたアンデット族2体を守備表示かつ効果無効で特殊召喚する！甦れ妖刀、そして陰者！」

妖刀―不知火 守0

不知火の陰者 守0

「また、チューナーモンスターが……まさか！」

「そのまさかだよ。レベル8の戦神に、レベル2の妖刀をもう1度チューニング！戦場統べる妖の太刀よ、輪廻断ち切る刃を振るえ！シンクロ召喚、ほむらがみ炎神―不知火！」

蹄の音が響き、揺らめく炎が形を成したこの世ならざる幽鬼の軍馬が現れる。そしてその上にまたがるのは、長い銀髪を後ろで縛り黒白の和装に身を包む男。不知火流の原点にして頂点ともいえる、焰と共に邪を裂き闇を切り、ついには自らを縛る輪廻の輪すらも断ち切った伝説の剣聖。

☆8+☆2||☆10

炎神―不知火 攻3500

「ついに抜き放ったか、糸巻の。切り札の一刀、炎神をよ」

「ああ。まさか素人相手にここまで熱くなるとはな、アタシらしくもない……だが八卦ちゃん、なかなか楽しかったよ。炎神の効果発動！特殊召喚時にアタシの墓地、または除外されたカードの中からアンデット族のシンクロモンスターを任意の数だけデッキに戻し、その数のカードを破壊する！」

「そんな、それではー！」

「クノスぺの攻撃ロック効果も、効果破壊には無力。刀神、そして戦神の2体をデッキに戻し、両端のクノスぺを破壊。不知火流・霊宝の太

刀！」

炎神が騎乗状態のままその妖刀を天高く掲げ集中すると、色とりどりの炎がその刀身を中心に燃え広がる。その姿は本人の白装束も相まってそれ自体がまさしく1本の樹……白銀の根、黄金の茎、そして白玉の実を持つとされる伝承の存在、蓬萊の玉の枝のごとし。

「きれい……」

目の前で炎が織りなす幻想的な光景に、八卦が1瞬気を奪われて小さく呟く。まるでその言葉を待っていたかのように、妖刀がその場で振り下ろされた。ただそれだけで、3人肩を寄せ合って攻撃に備えていた蕾のヒーローのうち2人が消滅する。

「これで、邪魔者はもういないね。バトルフェイズ、Ωで最後のクノスぺに攻撃」

PSYフレームロード・Ω 攻2800↓E・HERO クノスぺ

攻200（破壊）

八卦 LP4000↓1400

「うう……」

「ラストだ。炎神でダイレクトアタック、不知火流奥義・蓬萊斬！」

炎神を載せた馬が、初めて動いた。いななきと共に上体を反らしたのち、妖刀を構える主と共に何物も邪魔をする者がいないフィールドを人馬一体となってただ駆ける。見る間に両者の距離は詰まってきた、そして……1瞬のうちに、勝負は決まった。

炎神―不知火 攻3500↓八卦（直接攻撃）

八卦 LP1400↓0

「よし、アタシの勝ち……ん、あれ？おーい、八卦ちゃん？」

音もなく消えていくソリッドビジョンを満足げに見送る糸巻だったが、呆然とその場に座り込んだままの八卦の姿を見て慌てて声をかける。糸巻本人の世代ならばデュエルモンスターズ全盛期であったためにあの程度どうということはないが、彼女のようにデュエルモンスターズとの関わりが薄いままに育ってきた初心者にはこれだけ長

い間のソリッドビジョンの注視は荷が重かったかと思っただのだ。

だが、その心配も杞憂だった。放心状態から我に返った少女はがばりと全力で立ち上がり、今日一番に目を輝かせ頬を上気させて糸巻へと詰め寄る。

「糸巻さん、糸巻さん！私のような未熟者相手に付き合っていたいただき、ありがとうございます！ありがとうございました！八卦九々乃、感激しました！凄いです、あれがプロデュエリストなんですね！」

「あ、ああ……」

あまりの興奮っぷりに百戦錬磨の糸巻も、彼女には極めて珍しいこととやや引き気味になる。しかし興奮のあまり周りが目に入らなくなった八卦の方はそうとも気づかず、その両手で彼女の手を固く握りしめてぶんぶん強く振った。

「糸巻さん、ご迷惑でなければ、また私にデュエル教えてください！私、もっともつと強くなりますから！」

ターン4 荒波越える五星たち

「うし、いよいよ大仕事だぞ鳥居君」

「……えらくノリノリですね、糸巻さん」

時刻は夜。ようやくオフィスに帰ってきた鳥居が目撃したのは、鼻歌でも歌いそうな勢いで待ち構えていた女上司の姿だった。安物のタイヤ付きチェアの上に乗ってくると回ると回ると三十路の上司に警戒を隠そうともせず近寄ると、糸巻が机の上に置いてあった一枚の紙を手にとり立ち上がる。

「まあ、近頃こんなデカイ話とは縁がなかったからな。できるなら今からでもアンタと潜入担当代わってもらいたいぐらいだよ」

「俺もそうしたいんですがね。で、それはなんなんですか？」

「おう、単刀直入に言うぞ。今日のコロシム出場者一覧だ、極秘情報だから間違ってもゲロるんじゃないぞ」

「ええ……どこで拾ってきたんですかそんなの」

「その話は後だ。それよりほら、少し情報アドをくれてやるからよく聞いとけよ」

当然の疑問をばっさり和一蹴し、7人の名前が書かれたトーナメント表を見せる。覗き込んだ鳥居を片目に、手にしたボールペンで一番右端にあつた鳥居の名前を丸で囲む。

「まず、出場者は7人。トーナメント方式だから全3回戦だな。で、これがお前だ。本来この対戦表はシードのこいつ以外ランダムにくじで決まることになってるが……まあこんな表が出てくるんだ、最初から枠の決まったイカサマの茶番だろう。ともかく、お前は1回戦から勝ち抜きで最大3回戦うことになる」

「3回戦ですか。どこもそんなもんなんですかね」

「どこも大体こんなもんだな。今回のお客さんはそれなりに名の売れた映画スターとかアイドルもいるから、主催者側も大事な金づるの次の仕事に支障が出ない範囲で終わらせたいんだろ。まあそんなことはどうだっていい、問題なのは対戦相手だ。まず最初のこいつ」

そうやって、鳥居の隣の枠に書かれた山形仁鈴にすす、という名前に線を

引いて消去する。

「ぶつちやけこいつはアタシも知らん。まあ、つい昨日逃がしてやったチンピラの頭領だろうな。無名は無名どうし潰しあって、少しでもマシな奴だけ勝ち残ってこいつてことだろ。だけどな、いいか鳥居。お前仮にもデュエルポリスの実技試験抜けてきたんだろ？チンピラごときに負けたら承知しないからな」

そんな会話を思い返しながらか、目の前の相手と相対する。お決まりの開会式や仕組まれたくじ引きを終えて向かい合った確かにその男は鳥居よりも背が高く、体格もいい。筋肉で膨れ上がった上腕に刻まれた、黒々とした鮫のタトウのせいでさらに威圧感も割り増しに見える……だが鳥居の眼はそれが実戦的でない、見せびらかすための筋肉でしかないことも見抜いていた。おまけに部下に対して威張り散らすことは日常茶飯事でもこうして観衆の前に出てくることには慣れていないのか、その巨体からは隠そうとしても隠し切れない緊張からくる怯えの色が見え隠れしている。場慣れしていないいかにもな素人だと結論付け、そのまま緊張しているとばかりに自分たちを見つめる観衆の視線に軽く手を振って応えることで自分の余裕を見せつけておいた。実際彼にとってはこの程度の緊張感、むしろ本調子を出すためのスパイス程度にしかかなりえない。そう自らを鍛えてきたからだ。

「さあ、今日も命知らずたちが集まったデュエルの祭典が始まるぜ！観客の皆、お気に入りへの賭けは終わったか？今日は信頼と実績のいつもの奴らだけじゃない、なんと新人が2人も出る日だ。当たればデカイ大穴デュエリスト、ご祝儀代わりに投資してやってくれよ！」

非合法だから当然とはいえ、天井のスピーカーから流れるあまりに堂々とした賭博宣言。その言葉そのものよりもそれにより一層沸き立った会場の空気に辟易としつつも、それを顔には出さずにこやかに手を振り続ける。すでに彼の演技は始まっており、一攫千金を求め無謀にも裏の世界に首を突っ込んできた若いデュエリスト、としての自

分の役柄に徹しているからだ。

「それじゃあ時間も押ししてきた、カウントダウンで一斉にデュエル開始だ！5、4、3、2、1！」

「デュエル！」

すでにトーナメントの割り振りと共に先攻後攻の順番も決まっております、それを決める必要はない。鳥居は今回、後攻……相手の出方を窺おうとした矢先に、後ろで試合がいきなり動いた。

「俺の先攻、デス・メテオを発動。相手ライフが3000以上の時、1000ダメージを与える！挨拶代わりに病院送りにしてやるぜ！」

「ぐわああああ……あれ？なんか……温いぞ？」

「うん？」

「BV」妨害電波は、常に彼のデュエルディスクから垂れ流されている。その有効範囲はこの会場程度なら丸々包み込めるはずだから、彼に疑いの目が向けられるとしてもまだしばらくの猶予はあるだろう。「BV」の効力が薄まり苦痛の悲鳴が上がらないということは、つまりこの会場に公権力が介入していることになる。そのことに気づいた客席がざわめく中、デュエル開始の宣言を行ったスピーカーから即座に先ほどの声が流れる。

「どうだい、今日の趣向は？観客の皆も、今のは心臓掴まれたかと思うくらいビビったろう？大丈夫、ポリ公は俺らのことなんて気づいてねえよ！今日はちよつとしたサプライズ、「BV」の出力を少し落としてみたのさ！今の顔、なかなかに見ものだったぜヒヤッハー！さあてめえら、気にせずデュエルを続けやがれ！」

なんだ心臓に悪い、ただの趣向かと浮足立っていた客席の著名人たちが安堵のため息とともに再び席に戻る。一方で鳥居も平静を装いながら、内心ではその対応の早さに舌を巻いていた。

彼のデュエルディスクは依然として妨害電波を発信し続けている、つまり今の放送内容は何もかも真っ赤な嘘に他ならない。ただデュエルが始まったばかりのこのタイミングで実は情報が洩れて潜入者が公僕から入り込んでいたため全試合中止、ともなれば払い戻しにより生まれる損失は計り知れず、なによりも今後裏デュエルコロシウム

を開く際のグループとしての信用問題にも大きく関わってくる。このまま踏み込まれて実害が出るよりも先に、彼らは「侵入者」を排除して全てを握りつぶすつもりなのだ。

もちろん、妨害電波を出したまま入り込めば遅かれ早かれこうなることは彼自身よく承知していたし、むしろそのため^に苦勞して入り込んだのだ。それでもこの的確な早期対応を目の当たりにして、「BV」案件の根の深さを痛感する。

「……オイ！オイ、聞いてんのかこのもやし野郎！」

そこまで思考したところで、ようやく目の前で叫んでいる男の存在に気づいてようやく自分もデュエルの最中だということ^を思い出す。周りを見れば、すでに他のリングでも一時のパニックは落ち着き試合が再開されていた。ここでいつまでも固まっていたは、かえって怪しまれるだろう。

『なあに、いざとなったらアタシもいる。めったなことにはならんようにするさ。だからそっちはあれだ、いらんことは任せて目一杯暴れてこい』

そう言つて笑つた女上司の顔を思い出しつつ、フィールドに目をやる。セットモンスター1体に、伏せカード1枚。その見かけに反して随分と静かな滑り出しだが、だとしても彼に支障はない。

「……コホン。『本日こちらの会場にお集まりの皆様、これより目くるめく世界へのご案内するショーの開演をお知らせいたします』」

「は、はあ？」

がらりと雰囲気の変つた対戦相手に不気味さを感じ、やや引け腰になる山形。しかし彼に言わせれば、観客のノリが悪いからといって思考停止でファイトスタイルをマイルドなものに切り替えるのは2流のやることでしかない。

まずはやりきること。それでまだノリが合わないようなら、その時にアドリブでどうにかすればいい。

『この大観衆を前に先陣切つて皆様にご挨拶するのは、怪力無双の剛腕の持ち主……レフト P^{ベンデユラム}ゾーンにスケール1、魔界劇団―デビル・ヒールをセッティング！』

先日の卓上デュエルとは異なり、今回はソリッドビジョンによる視覚効果をフルに利用することができる。勢い良くカードを置いた彼の左手に光の柱が立ち、その中央では1、と書かれた数字の上に腕を組んで仁王立ちする青黒い体に太い腕を持つ巨漢の演者。

「ペンデュラム、それも【魔界劇団】か」

「『ご明察。それではここでもう1人、目くるめく世界への案内人に登場していただきましょう。ライトPゾーンにはスケール8、誰もを笑わす最高の喜術師。魔界劇団―ファンキー・コメディアン！』」

その言葉に反応したかのように、彼の右手側にも光の柱が立ち上る。8と書かれた光の数字の上にはおどけたように4本の手を広げてみせる、黄色い体を丸々と太らせた相方に比べれば小柄な演者。これで彼のフィールドにはスケール1と8が出そろい、一気にレベル2から7のモンスターをペンデュラム召喚することが可能となった。だが。

「この瞬間に永続トラップ、ヴァニティ・スペース 虚無空間を発動！このカードが存在する限り、互いにモンスターを特殊召喚することが封じられる！」

「『ああっと、これはどうしたことでしょう。これはいかなるアクシデントか、この空間のある限り当劇団の目玉、ペンデュラム召喚を執り行うことができません』」

「余裕ぶっこきやがって……」

当然だ、と心の中で小さく呟く。デュエルモンスターズと演劇を両立させるこのスタイルを確立するまでに、あの子役時代に仲間と共にどれほどの修練を積んできたことか。たとえどんなピンチに陥ろうとも、どれほどアウェーとなろうとも、彼の芝居が揺らぎはしない。そう言い切るだけの自信が、彼にはある。

「『と、あらばこれよりお見せするのは、予定を急遽変更しまして下級モンスターによるソロ演舞と相成ります。ご登場いただきましょう、舞台駆けまわる若きショーマン。魔界劇団―サツシー・ルーキー！』」

ジャンプからの空中縦回転を決めながら着地する、もじやもじや頭にトンガリ帽子を乗せた新たななる演者。その登場にPゾーンではファンキー・コメディアンが隠し持っていたクラッカーを引き、デビ

ル・ヒールがどこからともなく取り出したシンバルを力任せに打ち鳴らす。

魔界劇団―サツシー・ルーキー 攻1700

『それではバトルと相成ります。サツシー・ルーキーがセットモンスターに攻撃し、今ここにバトルの火蓋を切ろうとしております！』

鋭い爪を振り下ろし、セットモンスターに突撃をかける。正直なところ、ここは結果がどうなってもいい。破壊できたならばそれはそれでよし、仮に耐え切れられ返り討ちにあつたとしてもいわゆるひとつのオイシイ場面となる。そしてその一撃は、果たしてモンスターを切り裂いてみせた。

魔界劇団―サツシー・ルーキー 攻1700↓?? 守400(破壊)

『さあお集りの皆さん、拍手をもって勝者の凱旋にお応えしてください！』

口ではそう言いつつも、目だけは鋭く光らせる。あの1瞬の攻撃の際見えた相手モンスターの独特のシルエツト、あのカードには見覚えがある。もしかすると今の攻撃は悪手だったかもしれない、そんな思いが彼の脳を占める。

「そうなるよなあ、当然。特殊召喚を封じられたから、下級モンスターでとりあえず攻撃する……その通りだぜ、もやし野郎。気持ちいいぐらい俺の思い通りに動いてくれてな！俺の墓地にカードが送られたことで虚無空間は自壊するが、そんなことはもうどうでもいい。今戦闘破壊された俺のモンスターの名は、スクリーチ！こいつが戦闘破壊されたことにより、俺はデッキから水属性モンスター2体を墓地に送ることが可能となる。次の出番を待ちな、伝説のフィッシュマン！黄泉ガエル！」

「フィッシュマン？なるほど、そういうデッキか……なら、『なんとということでしょう、手のひらの上で哀れに踊る道化、サツシー・ルーキーの打ち抜いたモンスターの名はスクリーチ！果たしてこれはこれから押し寄せる荒波の序曲なのか、はたまた凧いだ海を行く航海の船出なのか。いずれにせよ、ここはわが劇団にとっても雌伏の時。カードを1枚伏せ、ターンエンドです』」

このとき彼の手札にはレベル7、魔界劇団―ビッグ・スターが既に存在していた。虚無空間が自壊したことで当然それをメイン2にペンデュラム召喚することも、その効果を使うことも。あるいはリンク2モンスター、ヘビーメタルフォーゼ・エレクトラムを呼び出すこともできただろう。

だが今回、彼はそれをしなかった。その理由こそがたつた今墓地に送られたモンスター、伝説のフィッシャーマンである。あのカードが採用されるとすれば、その理由は1つ。その召喚を止められるカードがない以上、手札は温存しておきたかった。

「俺のターンだ、そして最後のな。まずはこのスタンバイフェイズ、俺の場に魔法、罨カードが存在しないことで墓地の黄泉ガエルを蘇生することができる」

黄泉ガエル 攻100

「そしてこの黄泉ガエルを、真下のリンクマーカーにセット。召喚条件はレベル1モンスター1体、リンク召喚！ 電脳の荒波に飲まれる豆粒、リンクリボー！」

天使の輪を頭上に付けたカエルが、山形の前に現れた8つの印が浮かぶ円のうち真下の印へとその身を飛び込ませる。その印がオレンジ色の光を放つと、円の中から丸い体に小さな足と尾の生えたモンスターが飛び出す。

リンクリボー 攻300

「魔法カード、蛮族の饗宴LV5を発動！ 俺の手札または墓地から合計2体、レベル5の戦士族モンスターを効果無効、このターンの攻撃不可にして特殊召喚することができる。来な、手札の剛鬼ライジングスコルピオ！ そして墓地の伝説のフィッシャーマン！」

対象こそ極めて限定的であるものの発動さえ成功してしまえば侮りがたき性能を持つ魔法カード、蛮族の饗宴により呼び出された2体のモンスター。出そろった3体のモンスターに身構える鳥居を、徐々に調子づいてきたらしい山形が笑い飛ばす。

剛鬼ライジングスコルピオ 攻2300

伝説のフィッシャーマン 攻1850

「どこのもやしかは知らねえがざまあねえな、ええ？おかげで1回戦を楽に勝ち上がれるんだ、感謝はしてやるぜ！」

「『いえいえ、勝負はまだついたわけではございません。クライマックスはまだ遠い、もう少しばかり演目の続きをお楽しみいただきましょう』」

「勝手に抜かしてな。もう俺の手札には、必殺のコンボが揃ってるんだからよ！俺のフィールドに存在する伝説のフィッシュャーマンをリリースすることで、手札のこのカードは特殊召喚することができる！語り継がれし波濤の英雄、伝説のフィッシュャーマン三世！」

伝説のフィッシュャーマン三世 攻2500

2体の戦士のうち鮫にまたがり鉈を持った海の男の姿が消え、一回り大きく鋭角的なシャチに乗り鉈撃ち銃を片手で振り回す進化した伝説の戦士が場に現れる。すでに手札に握っていたか、と歯噛みする鳥居をよそに、腰に付けていた投網を大きく広げて海の男が放つ。

「伝説のフィッシュャーマン三世が場に出た時、相手フィールドのモンスター全てを一網打尽に除外することができる。1体だけだろうが容赦はしねえ、サツシー・ルーキーを除外だ！さらに相手の除外されたカードをすべてその墓地に送り込むことで、このターン相手の受けるあらゆるダメージは1度だけ2倍になる！」

投網に絡めとられたサツシー・ルーキーが涙目のまま勢いよく網ごと投げ飛ばされてどこかへ消えていき、デュエルディスクからもはじかれ墓地に送られる。蛮族の饗宴で特殊召喚されたライジングスコーピオはこのターン攻撃できず、除外効果を使用した伝説のフィッシュャーマン三世もまた攻撃はできない。つまり今の山形が攻撃可能なモンスターはリンクリボーしか存在しない……だが、まだ彼には召喚権が残っている。

「俺は剛鬼ライジングスコーピオをリリースし、アドバンス召喚するぜ。こいつで締めだ、魔装戦士 ヴァンドラー！」

魔装戦士 ヴァンドラー 攻2000

サソリを模した戦士もまたフィールドから消え、竜のような被り物に金色の武具を左腕のみに装着した青い戦士が入れ替わるように

フィールドに現れる。そのモンスターは攻撃力こそライジングスコーピオを下回るものの、ダメージ2倍の状況でライフ4000を削り取るにはいまだ十分な数値であった。

「ライジングスコーピオがフィールドから墓地に送られた時、俺はデッキから別の剛鬼カード1枚を手札に加えることができる。剛鬼マンジロックをサーチし、バトルだ！やれ、ヴァンドラ！奴にダイレクトアタックしろ！」

「おーっと、Cブロックで動きがあった！ルーキー同士の対戦とはいえ山形選手、デビュー戦にしていきなりワンショットキルを成功させるのか！」

デュエルの流れを追っていた運営が注意を促し、元プロの対戦を見ていた観客の視線が一時的とはいえ彼らに向けて一斉に注がれる。その中央で竜の戦士が、青い軌跡と共に一直線に駆けた。このままワンショットキルで勝負が付くかと思われた寸前、鳥居のフィールドで動きがあった。Pゾーンの光の柱を内部から叩き壊し、紫の巨漢がヴァンドラの行く手を遮るように立ち上がったのだ。

『攻撃宣言時に永續トラップ、ペンデュラム・スイッチを発動いたします。このカードは1ターンに1度モンスターとして、あるいはスケール要因としてフィールドに存在するペンデュラムカード1枚をそれとは逆の位置に移動させるカード。それでは皆様、改めまして彼の名を紹介いたします。彼こそは怪力無双の剛腕の持ち主、馬鹿力ならば誰にも引けを取りません。魔界劇団―デビル・ヒールです！』

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000

自分よりも攻撃力の高いデビル・ヒールの登場により、1瞬だけヴァンドラが動きを止める。だが山形は、その努力をすぐさま笑い飛ばした。彼にも地元のチンピラをまとめる頭としての意地があり、この程度の反撃で立ち止まる程度の実力ではそれすらも成り立たないからだ。

「モンスターを出してくる、だからなんだ！魔装戦士 ヴァンドラは、相手フィールドにモンスターが存在しても直接攻撃することができ

る！そんな凶体だけのでの坊飛び越えちまえ、イーサルウエポン・ハイキック！」

言葉通りにヴァンドラが上空へ飛びあがり、両腕を広げ通せんぼするデビル・ヒールの頭上を軽々と飛び越える。しかしそのまま空中からの飛び蹴りで強襲しようとする竜の戦士に対して剛腕の演者がその太い腕を振り向きざまにかざすと、広げた手のひらから衝撃波が放たれた。

「何っ!？」

『「デビル・ヒールのモンスター効果を発動、ヒールプレッシャー！このカードが場に現れた時、自分フィールドの劇団員の数だけ相手モンスター1体の攻撃力をこのターンのみダウンいたします。私のフィールドにはデビル・ヒール1体のみのソロパート、よってヴァンドラの攻撃力は1000ポイントダウン！」』

魔装戦士 ヴァンドラ 攻2000↓1000↓鳥居（直接攻撃）

鳥居 LP4000↓2000

「ぐっ……」

攻撃力こそ半減したものの、ダメージ倍加の効力によりその威力は2000。大幅に効力が薄まっているとはいえ「BV」によりそのダメージは実体化し、武闘家の一撃を喰らったような衝撃がとつさにガードした彼の両腕を痺れさせる。

「俺の必殺コンボを耐えきったか。まあいい、ターンエンドだ」

魔装戦士 ヴァンドラ 攻1000↓2000

ダイレクトアタッカーを持ち出しているより確実なワンショットキルを狙った山形、それを紙一重の防御で回避してのけた鳥居。誰にとってもノーマークだったであろう新人2人の思いもよらぬ攻防に、会場に小さなどよめきが起こる。そして、そんな観客の注意を掴めそうな絶好のタイミングを鳥居淨瑠は見逃さない。

『「それではお次は私のターン、場面は変わり再び我らが舞台に。ドロー、先ほどデビル・ヒールの参戦により空白となりましたレフトPゾーンにスケール2、数字を操る凄腕の新人。魔界劇団―ワールド・ホープをセツティング！」』

再びファンキー・コメディアンの対となる位置に光の柱が立ち、その内部には2と書かれた光の数字とおもちやのようにカラフルな銃を手にウエスタン風の装いをしたモンスターが映る。

『そして私のPゾーンにカードが存在することで通常魔法、デュエリスト・アドベントを発動。デッキからペンデュラムの名を持つ魔法、罨、あるいはモンスター1枚を手札へと加えます。選ばれしカードの名は、永続魔法魂のペンデュラム！このカードを発動しまして、これにて揃いしスケールは2、そして8。よってレベル3から7を、同時に召喚することが可能となりました。現れよ、栄光ある座長にして永遠の花形。ペンデュラム召喚、魔界劇団―ビッグ・スター！』

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

デビル・ヒールと共に並び立つ、鳥居のエースモンスター。除外経由で墓地に送られたサツシー・ルーキーを呼び戻すことはできないが、それでも彼にはこの2体のモンスターがいる。

『この瞬間、魂のペンデュラムの効果が発動いたします。私がペンデュラム召喚を成功させるたびにこのカードへとカウンターを1つ乗せ、その数1つにつき300ポイント、私のペンデュラムモンスターたちはその力を増します』

魂のペンデュラム(0)↓(1)

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500↓2800

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000↓3300

『そして名優、ビッグ・スターの効果発動！1ターンに1度デッキから今宵の演目となる魔界台本を選択し、そのカードを私のフィールドにセットいたします。ビッグ・スターにデビル・ヒール、大物演者2人が織りなすその演目名は……魔界台本「魔王の降臨」！そしてセットしたこのカードをそのまま開演、いまここに恐るべき2人の魔王が舞台を支配するためにやってまいりました』

魔王の降臨のカードが表を向くと同時にビッグ・スターが漆黒のマントを身にまとい、デビル・ヒールがおどろおどろしい悪役メイクを全身に施された。そして魔王の暴力が、フィールド内を吹き荒れる。

「魔王の降臨は私のフィールドに攻撃表示で存在する魔界劇団1体に

つき一枚、場のカードを破壊。そしてこの際にレベル7以上の魔界劇団が存在するならば、魔王の暴威に屈することとなる相手はこの発動に対しチェーンを行うことができませぬ。ビッグ・スターはレベル7、デビル・ヒールはレベル8。よって私の選ぶカードは、2枚!」
「だ……だがな、伝説のフィッシャーマン三世は戦闘で破壊されず、魔法も罨もその効果を受け付けない!いくらチェーンができなからうと、効果そのものを受けないフィッシャーマンには無力だ!」

「いかに。今宵魔王が対峙するのは、荒れ狂う海を縦横無尽に行き来する伝説の漁師。海の力が彼についている以上、魔王の脅威も通用しないでしょう。よって私が破壊対象に選ぶのは、リンクリボー……そして私のフィールドより、ワイルド・ホープ!」

「ヴァンドラを放置して……自分のカードを選ぶだど?」

宣言通りに2枚のカードが魔王の力をもって簡単に破壊され、フィールドに再びつかの間の平穏に戻る。だが無論、それだけで終わりはしない。

「この瞬間に私は、破壊されたワイルド・ホープの効果を発動いたします。このカードが破壊された場合、デツキより次なる演者を1体手札に加えることが可能となります。ここでデツキという名の舞台袖より日の当たる場面へと呼び出されるのはこのカード。魅力あふれる魔法のアイドル、魔界劇団―プリティ・ヒロイン!そしてこのヒロインには、この華の足りないフィールドに早速登板いただきましよう!」

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500↓1800

コウモリ柄の魔法使い帽に、スカートから延びる2本の足をすっぽり包むハイソックス。緑色の三つ編みを揺らしつつ、いかにも魔法少女といったいでたちの新たな劇団員がステッキ片手に呼び出される。登場早々に久々に見る大観衆を見回して目を輝かせ、ぶんぶん大きく手を振りファンサービスに余念のないその姿に、いまだに魔王ルックをバシッと決めたままの背後の団員2人がやれやれと肩をすくめてみせた。

「それではご挨拶はこれぐらいにして、そろそろ場面を次のステージ

へと移しましょう。ファンキー・コメディアンのペンデュラム効果発動！私のフィールドに存在する魔界劇団1体をリリースすることで、このターンのみその攻撃力を別の魔界劇団へと移行させます。リリースするのはビッグ・スター、そしてその力を得るのはもう1人の魔王、デビル・ヒールです！ああ、なんということでしょう。恐るべき2人の魔王の争いは、デビル・ヒールが辛くも勝利。敗者ビッグ・スターは、その力全てを吸収されてしまいました！』

ビッグ・スターがそのとんがり帽子を上空に放り投げ退場すると、デビル・ヒールがくるくると落ちてきたそれを器用に自らの頭で受け止める。明らかにサイズの合っていないそれをうまいことバランスを取ることで頭上に安定させ、改めて巨体を揺らしポーズを決めた。

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3300↓5800

『そしてこのターンもまた、ペンデュラム・スイッチの効果を発動。今度は私のライトゾーンより、たった今ひと仕事こなしたファンキー・コメディアンに登場していただきましょう！』

彼の右側にあつた光の柱がふつと消え、その中央に浮かんでいた肥満体の芸人が突然浮力を失ったことで4本の手をばたつかせながら真下に落ちる。丸々と太ったその体はボールか何かのように地面で1度バウンドするも、どうにか2度目の着地はその両足で決めることに成功した。

魔界劇団―ファンキー・コメディアン 攻3000↓6000↓1500

『ファンキー・コメディアンは舞台が賑やかになればなるほど力を発揮する根からの芸人、場に出た際に魔界劇団の数1体につき300の自己強化をターン終了時まで行います。そしてもう1つのモンスター効果が続けて発動、ハイテンション・エール！このカード自身による攻撃を封じる代わり、自らの攻撃力を他の魔界劇団1体へと分け与えることが可能となるのです。私の選ぶモンスターは当然、大魔王デビル・ヒール！』

いつの間にもやら4本の手それぞれポンポンを装着していたファンキー・コメディアンが若干引き気味の視線を送るプリティ・ヒロイ

ンにお構いなくその場でノリノリの動きによるチアダンスを行い、デビル・ヒールの見せ場をさらに盛り上げる。

魔界劇団―デビル・ヒール 攻5800↓7300

『それでは皆さんお待ちかね、一世一代の大バトルと参りましょう。背負いしすべての力を胸に、大魔王デビル・ヒールによる魔装戦士ヴァンドラへの攻撃です!』

「Cブロック、今度は鳥居選手が動いた!放たれたその攻撃力の差は……4700!ワンショットキルに対するワンショットキル返し、これは今年の新人はレベルが違う!さあ、今ならまだ賭けの相手は自由に変えられるぜ!」

デビル・ヒールが力強く拳を握りしめると、その太い腕に筋肉が盛り上がる。問答無用で振りぬかれた拳が、回避する暇もなくヴァンドラに襲い掛かる。

「もやし野郎のくせにやるじゃねえか……でもなあ、手札から剛鬼マジンロックの効果発動!相手の攻撃によるダメージ計算時、このカードを捨てることで俺の受けるダメージを半分にする!」

ヴァンドラをかばうようにして1瞬、デビル・ヒールの拳の前にタコのような被り物をした怪しい人影が見えた気がした。しかし止まらない魔王の一撃は、そんなことお構いなしに2体まとめて打ち砕く。

魔界劇団―デビル・ヒール 攻7300↓魔装戦士 ヴァンドラ
攻2000 (破壊)

山形 LP4000↓1350

「うおおおお……!ど、どうだ!耐え切ってやったぜ!」

『いえいえ、すでに幕は降りようとしております。ご来場の皆様方、どうかファイナーレまで目を離さずにお楽しみくださいませ!』

「なんだと?」

『プリティ・ヒロインのモンスター効果を発動、メルヘンチック・ラブコール!どちらかのプレイヤーが戦闘ダメージを受けたその時、甘美なる彼女の魔法がフィールドへと降り注ぎます。すなわち相手モンスター1体を対象に取り、そのダメージの数値だけ攻撃力をダウン

させる魔法が！私が選択するのは当然、荒波越えし偉大な漁師！伝説のフィッツシャーマン三世です！」

伝説のフィッツシャーマン三世は強固な耐性を持つが、破壊以外の作用をもたらすモンスター効果に対しては無効。プリティ・ヒロインがステッキを向けるとその先端から星型のカラフルな魔法弾が連射され、それをまともに受けた漁師とシャチが力を失いぐったりとなった。

伝説のフィッツシャーマン三世 攻2500↓0

「フィッツシャーマン！」

『それでは宣言通り、これにて幕引きといたしましょう。プリティ・ヒロインのラストキツスにより、ジ・エンドです！』

何が勝者と敗者を分けたのか、と問われれば、攻撃できるわけでもない伝説のフィッツシャーマン三世をわざわざ攻撃表示で呼び出したことが勝負の分かれ目だったのだろう。そもそも先のターンでほぼ確実にワンショットキルが成立していた状況や貫通能力を持つモンスターへの警戒、さらに油断なく手札に加えていたマンジロックの存在を踏まえると、一概に致命的なミスであったと言い切ることもかわいそうなほどにほんのわずかな差。しかしその差が積もり積もった結果、勝敗へとダイレクトに結びつく。

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1800↓伝説のフィッツシャーマン三世 攻0

山形 LP1350↓0

「決まったあーっ！Cブロック勝者は新進気鋭の大新人、鳥居浄瑠！これは今夜の大会、思わぬダークホースとなりうるのかあ!」

勝敗を見届けたスピーカーから、熱の冷めぬうちにと景気のいい言葉がぼんぼんと飛び出して観客を沸きたてる。声援と熱気を一身に受け、鳥居は消えゆくソリッドビジョンと共にその場で一礼してみた。

優勝まで、あと2戦。

ターン5 多重結界のショータイム

鳥居淨瑠が戦いを始めていた、ちょうどそのころ。ドーム状の建物を前に片手で風を避けながら、啞えた煙草にライターで火をつける女が1人いた。燃えるような赤髪が夜風に揺れ、細い煙がそれに乗って流れていく。ドーム内部での喧噪も、充実の防音設備によって彼女の元までは届かない。

それが誰、などとは言うまでもない。赤髪の夜叉、糸巻^{だゆう}太夫である。体の線を惜しげもなく強調する黒のライダースーツ姿は、闇夜にあってひとときわ目立つその赤髪も相まって近くに人間がいたらさぞかし人目を惹いたことだろう。もつとも、今この場には彼女しかない。表向きはあの会場も工事中の建物であり、街灯すらもついていないからだ。そんな場所に好き好んで入りたがるのは、それこそ訳ありか自殺志願者ぐらいのものだ。

「ふーっ……」

ここまで乗ってきたらしいバイクに腰かけ、退屈そうな表情で煙を吐く。その姿は、まるで何かを待っているようだった。いや、事実彼女は何かを待っている。なんとはなしに丸めた紙を取り出し、ガサゴソと広げて中身に目を通す。昼間にも鳥居に見せた、今頃行われているであろう裏デュエルコロシアムのトーナメント表である。そのまま目を落としたのは、その中の名前の一つ。シード枠にエントリーされた、7人目のデュエリスト……彼女は、その名前に覚えがある。あれは、まだデュエルモンスターズに活気があったころの話。若かりし彼女自身が、そしてかつての仲間が、大歓声を受けて日夜しのぎを削っていた栄光の日々。

だが、回想にふける時間は与えられなかった。代わり映えない風景から特有の勘で何かを感じとったその目に力がこもり、バイクから降りてぱっと身構える。たっぷりと煙を吐き出すと、一度煙草を口から外し闇の中に向けて話しかけた。

「思ったより遅かったじゃないか、ゆっくりでいいから出ておいで」
「……」

闇の中から返事はない。だが確実に、無言のまま動揺する気配だけは伝わってきた。どうあっても自分から名乗る気がないのならと、ゆっくりとした手つきで腰かけていたバイクのハンドルに手をかける。そして次の瞬間、おもむろにエンジンをかけながらその向きを大きく回転させた。

「む……」

瞬間的に点いたライトが、光の線を闇にくっきりと差し込む。そしてその中央には逃げ損ねた、黒いスーツ姿で闇に同化していた男の姿がくつきりと映っていた。年はせいぜいこの事件の発端となったコンビニ強盗のチンピラと同程度だろうが、全身から立ち上る気配の質はまるで違う。こういった闇家業を生業として生きてきた、プロ特有の匂いを彼女は敏感に感じ取る。おおかた、今回の用心棒役か何かだろう。

「元プロ舐めんじやないよ。昔はやべーフアンだって多かったからね、そんな程度じゃ尾行にもなっていない」

「……気づいていたようだな」

「おうともさ、そしてアンタが一等賞さ。上から言われてきてんだろ？アタシを探して潰してこいって」

「話が早いな」

「最近アタシも暴れたりないんでね。アンタが少しはマシな相手であることを祈るよ」

そう言って明るく笑うと、男は理解できないと言わんばかりのうんざりした表情で首を振る。ややあつて、小さく呟いた。

「……なるほどな。この街には赤髪の戦闘狂がいる……事前に聞いてはいたが、これほどの狂人とはな」

「ご挨拶だねえ、初対面の妙齢の美女に対する礼儀ってもんがまるでなっていない。アンタとこのボスは、随分と社員教育に力を抜いてきたみたいだね」

返事はない。おしゃべりに付き合うつもりはないというわけだろう。会話の強制終了に肩をすくめデュエルディスクを構えた糸巻が、油断なく男のデュエルディスクに目を走らせる。「BV」は、案の定組

み込まれている。

当たり前だ。とにかくここで敵を引き付け、内部の鳥居に疑いの目がかかるまでの時間を少しでも稼ぐ。それが、今夜の彼女の仕事だった。

「あんたもプロなら、最後に名乗るときな。アタシは知っての通り糸巻、しがない公務員だよ」

「……いいだろう。俺の名は蜘蛛……無論、本名ではないがな」
「デュエル！」

蜘蛛、と名乗った男がデュエルディスクに目を通し、小さく頷く。

「先攻は俺だ。糸巻太夫、クライアントからその名は聞いている。そしてその実力のほども、デッキの傾向もな」

「そうかいそうかい。で、だったらどうしてくれるんだい？」

「こうするまでだ。魔法カード、強欲で金満な壺を発動。エクストラデッキからランダムに裏側でカードを6枚まで除外し、その数3枚につき1枚のカードを引く。俺が除外するのは、この6枚だ」

先攻1ターン目から放たれた強力なドロースーツ、強欲で金満な壺。あいにく、彼女にそれを止める手段はない。

「そして通常魔法、強欲で謙虚な壺を発動。デッキの上から3枚をめぐり、その中から1枚を選んで手札へ加える」

「好きにしな」

そう吐き捨てながらも、すでに彼女の脳内はフル回転を始めていた。初手ドロースーツに、手札の質を高めるためのサーチカード。なにか、どうしても引きたいカードがあるのだろうか？

「1枚目、強欲で謙虚な壺。2枚目、苦渋の転生。3枚目……」

ここで、わずかに蜘蛛の口元が緩んだ。お目当てのカードを見つけたらしい。

「3枚目、盆回し。このカードを手札に加え、そのまま発動する。速攻魔法、盆回し！俺のデッキからフィールド魔法2種類を選択し、互いのフィールドにそれをセットする。そしてそのカードが裏側で存在する限り、互いにそれ以外のフィールド魔法を使用することができない」

「……なるほど。アタシの領土を封じに来たつてわけか」

「気休め程度になれば十分だがな。俺のフィールドにはオレイカルコスカオス・フィールドの結界を、お前のフィールドにはさら、混沌カオス・フィールドの場をくれてやろう」
「盆回しで混沌の場、か。定番通りの動きだわね」

余裕めいたことを口にしながらも、糸巻の表情は険しい。混沌の場は発動時に強制的に特定のカードをサーチさせるフィールド魔法であり、逆に言えばデッキ内にそのカードがない限りとりあえず発動することすら不可能なカード。これを裏側で送り付けフィールドの使用を禁じる盆回しは、まさにフィールド魔法に依存するデッキにとつては悪夢のようなカードである。

そして当然、彼女のデッキにカオス・ソルジャー及び暗黒騎士ガイアの入るだけの空きスペースはない。

「オレイカルコスの結界を発動。発動時に俺のフィールドに特殊召喚されたモンスターをすべて破壊する処理が挟まるが、見ての通りこの場にモンスターは存在しない。そしてこのカードは1ターンに1度だけ効果によって破壊されず、このカードが存在する限り俺はエクストラデッキのモンスターを特殊召喚できない」

蜘蛛の足元を中心に、2人のプレイヤーをすつぽりと囲むように不気味な光を放つ六芒星の陣が地表に描かれる。エクストラデッキを使用しないことが前提となるオレイカルコスと、エクストラデッキをコストにドローする強欲で金満な壺。よくできたカードだ、と毒づく彼女をよそに、あらゆるデュエリストの抵抗を封じ絡めとる蜘蛛の「巢」はすでに張り巡らされようとしていた。

「そして通常召喚、豪雨の結界像。このカードが存在する限り、互いに水属性以外のモンスターを特殊召喚することは不可能となる。さらにオレイカルコスの力により、攻撃力アップ」

「お前、【結界像】か！」

「プロにしては察しが悪いな、まあ無理もないか」

蛙の姿を模した緑色の像がごとりと地面に置かれると、その額に足元のオレイカルコスと同じ六芒星の模様が浮かぶ。

豪雨の結界像 攻1000↓1500

「さらにカードを1枚伏せ、レフト ペンデュラム P ゾーンにE エンタメイト Mドラミング・コングをセツティング」

光の柱が結界から天空めがけて伸び、その中央に2、という数字と両胸がドラムになったゴリラが浮かび上がる。一見するとペンデュラム召喚の下準備に見える光景だが、糸巻はそうではないことを知っていた。ドラミング・コングは1ターンに1度、自身のモンスターが相手モンスターと戦闘を行う際にその攻撃力をバトルフェイズの間600だけアップさせるペンデュラム効果を持つ。十中八九蜘蛛の狙いはペンデュラム召喚ではなく、その効果そのものを永続魔法と割り切って使うやり方。それは単純ながらも効果的で、これで豪雨の結界像は2枚の強化カードにより実質2100の攻撃力を手に入れたことになった。

それを彼女はこれから、水属性以外を特殊召喚できないこの状況で打ち破らねばならないのだ。ターンエンド、という初手からコンボを決めた余裕さえも透けて見える言葉を彼女はしかし、面白いじゃねえかと笑い飛ばしてみせる。

「アタシのターン、ドロロー。さーて……ユニゾンビを召喚し、効果発動。豪雨の結界像を指定し、デッキからアンデット族1体を墓地に送り込むことでそのレベルを1だけ上昇させる」

ユニゾンビ 攻1300

彼女が召喚したのは、攻撃力では結界像に遥か及ばないユニゾンビ。多少のダメージは必要経費と割り切り、とにかくこの状況を打破するための破壊カードを1ターンでも早くドロローするためのデッキ圧縮を狙ってのことである。

それは極めて妥当な、動きを封じられた彼女に可能な最善手。だが、それは同時に極めて読み切られやすい諸刃の剣でもあった。

「手札から灰流うららの効果を発動。このカードを捨てることで、デッキからカードを墓地に送る効果を無効にする」

桜吹雪が結界を流れ、力を奪われたユニゾンビが互いの肩に掴まりどうにか倒れ込まないようにバランスをとる。出鼻をくじかれた彼女を無感情に眺める蜘蛛の眼は、獲物の抵抗を見つめる異名通りの捕

食者のそれであった。

「……カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「もう威勢が弱まってきているようだが？俺のターン、ドロ。このターンも魔法カード、強欲で謙虚な壺を発動。デッキの上から3枚はそれぞれ大革命返し、月鏡の盾、ガリトラップ、ピックアップの輪か。月鏡の盾でもいいが……ここは大革命返しを手札に加える。多少は運がいいようだな、2種目の結界像はいまだに俺の手札にはない」

「はっ、アンタの日頃の行いが悪いんだろ？」

「その元気がいつまで続くのか、見せてもらおうとしよう。ライトPゾーンにスケール6、EMリザードローをセッティング。そしてEMセカンドンキーを召喚し、オレイカルコスの効果で攻撃力上昇。さらにセカンドンキーが場に出た際に俺はデッキのEM1体を墓地に送るが、この瞬間に俺のPゾーンのカードが2枚揃っているのならそれサーチに変更することができる。2枚目のドラミング・コングを手札に」

次に蜘蛛が召喚したのは、その名の通り茶色いロバのモンスター。その額にもオレイカルコスの印が光る一方で、糸巻は何か引っかかるものを感じていた。この蜘蛛という男と彼女にこれまで面識はないが、どこかに懐かしさを感じる。

EMセカンドンキー 攻1000↓1500

「EMリザードローのペンデュラム効果を発動。このカードの対となるPゾーンにEMが存在するとき、このカードを破壊して1枚ドロースることができる。そして空いたライトPゾーンに、手札に加えたドラミング・コングを発動」

その直後、糸巻の思考を断ち切るかのように蜘蛛の左側に右側と全く同じ光の柱がそびえ立った。

「メインフェイズを終了し、豪雨の結界像でユニゾンビへ攻撃。さらにその攻撃宣言時、ドラミング・コング2枚のペンデュラム効果を発動。バトルフェイズの間、豪雨の結界像の攻撃力は600ずつアップする」

青い石像の眼が不気味に光り、その体色と同じ青い光線を放つ。両

端のゴリラが同時に胸を打ち鳴らし、その衝撃が光線の威力をさらに倍加させていく。

豪雨の結界像 攻1500↓2100↓2700↓ユニゾンビ
攻1300（破壊）

糸巻 LP4000↓2600

「痛い一撃だな。セカンドンキーで、さらに追撃のダイレクトアタックを行う」

「冗談言ふなよ、トラップ発動！バージェストマ・ハルキゲニアの効果でセカンドンキーの攻守は、このターンのみ半分になる」

EMセカンドンキー 攻1500↓750 守2000↓1000

「そして永続トラップ発動、闇の増産工場！まあ、こいつの効果は今はどうでもいい。大事なのは、これがトラップだってことだ。トラップの発動に直接チェインし、墓地のハルキゲニアの効果を発動！このカードをモンスターとして、アタシのフィールドに特殊召喚する」

用途不明のメーターや排気パイプの付いた不気味な機械が糸巻の場に現れると、そのベルトコンベアを通って緑色の古代生物が呼び出される。

バージェストマ・ハルキゲニア 攻1200

「攻撃を中止し、苦渋の転生を発動。相手は俺の墓地に存在するモンスター1体を選択し、エンドフェイズにそれを手札へと回収する。もっとも……」

「アンタの墓地にモンスターは灰流うらら1体のみ、選択の余地もクソもないってか」

「その通りだ。そしてカードを伏せ、ターンを終了する」

「なら、その回収前に増産工場の効果を発動。アタシの手札かフィールドからモンスター1体を墓地に送り、カードを1枚ドロウする。手札の不知火の隠者を墓地に」

豪雨の結界像 攻2700↓1500

幸いにもコンバットトリック系のカードは蜘蛛の手には存在しなかったらしく、どうにかモンスターを残したまま糸巻にターンが戻

る。これは、彼女自身にとつてもかなり危険な賭けだった。もしセカンドンキーがハルキゲニアを戦闘破壊するようなことがあれば、次のターンの彼女の行動は極めて制限されていたからだ。それでもハルキゲニアをこのタイミングで蘇生させることを選んだのは、ここで蜘蛛が何もしてこないことを確かめたかったからだ。危険を冒すことで初めて、それに見合ったリターンが得られる。

「そしてアタシのターン、ドローだ」

ドローカードは、アンデットワールド。普段なら彼女の力を増すためのカードも、現状ではドローロックに等しい足枷としかかなりえない。そして蜘蛛の場の伏せカードは十中八九先ほど手札に加えた大革命返し、あのカウンタートラップによってカード2枚以上を同時に破壊する効果を無効にすることができる。

「だが、まだだ。妖刀―不知火を通常召喚！」

妖刀―不知火 攻800

「だが、豪雨の結界像により水属性以外の特殊召喚は封じられる」

「わかってるよ、そんなこと。そんな余裕見せて、後で吠え面かいても知らないぜ？アタシはレベル2のバージェストマ・ハルキゲニアと、妖刀―不知火でオーバーレイ！」

2体のモンスターが赤と青の光となって螺旋を描きつつ上空に昇り、おもむろに向きを変えて足元に発生した宇宙空間へと飛び込んで爆発を起こす。

彼女のエクストラデッキには耐性と破壊効果、そして攻撃力を持ち合わせるバージェストマ・アノマロカリスのカードが存在するが、その召喚条件はレベル2モンスター3体以上と重くこの状況で特殊召喚するすべはない。だがそれとは別にもう1枚、その手元には水属性モンスターが控えている。この状況を打破するだけの力を持ったモンスターが。

「戦場^{いくさば}た^{あやかし}ゆたう妖の海よ、原初の楽園の記憶を覚ませ！エクシーズ召喚、バージェストマ・オパビニア！」

☆2+☆2||★2

バージェストマ・オパビニア 守2400

「ほう……！」

バージエストマ第二のエクシースモンスター、攻めのアノマロカリスと対になる守りのオパビニア。大地低くから頭上に存在する5つもの目で全方位への視界を確保する、不釣り合いなほどに巨大な口吻から油断なく息を吸い吐きする奇怪な古代生物が糸巻の場に現れる。「オパビニアの効果を発動！トラップをエクシース素材に持つオパビニアは1ターンに1度オーバーレイ・ユニット1つを取り除くことで、デツキからバージエストマ1枚を手札に加えることができる。1つ断っておいてやるが、このモンスターはあらゆるモンスター効果を受け付けない。つまりご自慢の灰流うららでも、このサーチ能力は止められないぜ。カンブリアの奉納！」

デツキを取り出し、素早く中身に目を通す。この状況でサーチの候補となるバージエストマは全部で3種類、そう彼女は考える。まず1つが、モンスターを裏守備にすることで一時的にロックを解除するカナディア。だが召喚権を失いアンデットワールドの使えない彼女にそこから展開するすべはなく、何らかの方法でこのターンを防がれば再び反転召喚によりロックが戻ってしまう。次に候補となるのがドラミング・コングの破壊から混沌の場の解除まで魔法・異破壊能力を用い柔軟な対応が可能となるオレノイデスだが、これも破壊したい候補が多すぎて焼け石に水でしかない。

となると、彼女の腹は決まった。

「バージエストマ・ディノミクスを手札に加える。そしてオパビニアの更なる効果により、アタシはバージエストマを手札から発動することが可能となる！」

手札1枚を捨てると同時に場の表側カード1枚を除外するディノミクス。【結界像】はそれぞれが別の属性の特殊召喚を封じ込めるその性質上特殊召喚のギミックに乏しく、そして除外されたカードを無条件にサルベージする方法は数少ない。

だが、そこで蜘蛛が動いた。すべては網の中の抵抗でしかないといわんばかりに、伏せられたカードのうち最初から場にあった1枚が表を向く。

「待った。カウンタートラップ、強烈なはたき落としを発動。相手がデッキからカードを手札に加えた際、そのカードを捨てさせる。そして通常トラップでしかないディノミスクスを、この発動に対しチェーン発動することは不可能」

「ぐっ……！」

手札に加えられた逆転のカードが、何もなしえることなく墓地に落とされる。だが、これは彼女のミスでもあった。見せつけるようにして蜘蛛の手札に舞い戻った灰流うららへと意識を向けるあまり、これまで沈黙を保ってきた場の伏せカードに対する注意力が落ちていたのだ。モンスター効果を受けつけないオパビニアのサーチ能力の高さに胡坐をかき、わずかな油断がにじみ出ていたともいえる。

「……どうした？ 吠え面とやら、いつかかせてくれる？」

「うるせえ、このターンも増産工場効果を発動！ 手札の不知火のみやつかぎ宮司を墓地に送り……さあ、アンタはどうしたい？」

「無差別な1枚のドロローに望みを託すか。ここで1度止めたところで、闇の増産工場は毎ターン効果の発動が可能なカード。いいだろう、それぐらいは通してやろう」

またしても不気味な機械がガタゴトと稼働し、ベルトコンベアから1枚のカードが流れてくる。それを手にした彼女が、そのカードをすぐさまデュエルディスクに叩きつける。

「オパビニアの効果により手札から、バージェストマ・オレノイデスを発動！ 場の魔法か罠1枚を破壊する……アタシが選ぶのはあれだ、レフトPゾーンのドラミング・コングー！ さらにトラップの発動にチェーンし、アタシの墓地からアンタが捨てたディノミスクスをモンスターとして蘇生する」

「なるほど、そのドロロー運は腐ってもプロか。だがそれもその場凌ぎ、後手対応にすぎない」

平べったい体の古代生物が跳ね、光の柱の中にいるドラミング・コングへと襲い掛かる。これで相手の攻撃力はわずかに下がり、彼女のフィールドにはモンスターが増えた。

だが、彼女の表情に明るさはない。守備力0の下級バージェストマ

は、文字通りたった1度の壁にしかない。蜘蛛の言葉通り、これが後手対応でしかないことは彼女自身がよく分かっていたからだ。

バージエストマ・デイノミクス 守0

「だがな、まだ、まだだあ！魔法カード、一撃必殺！居合ドローを発動！手札1枚をコストにアンタの場のカード数だけデツキからカードを墓地に送り、その後1枚ドローしてそれに応じた処理を行う！手札コストとしてアンデットワールドを捨て、効果発動！」

「無効を承知の上で発動するとは、よほど切羽詰まっているようだな。望み通りにしてやろう、手札から灰流うららの効果を発動。このカードを捨てることで、デツキからカードを墓地に送る効果を無効とする」

蜘蛛の言葉通り、増産工場を通した時点でこの居合ドローを止められることは最初から彼女も承知の上である。ハンデス手段のない彼女のデツキでは、見えている手札誘発を潰すためにはそれを使わせるしか方法がないからだ。確かに灰流うららの脅威こそ去りはしたが、その代償は大きい。この無茶な動きのせいで、彼女の手札は0となったからだ。

しかし、ターンエンドを告げる彼女の闘志はいささかも揺らいではない。獲物の魅せるこれまでになかった新鮮な反応を前に、蜘蛛が興味深そうに眉をよせた。

「俺のターン、ドロー。業火の結界像を召喚し、オレイカルコス力で攻撃力が上昇する」

業火の結界像 攻1000↓1500

そして召喚される、炎属性以外の特召喚を縛る第2の結界像。この瞬間、あらゆる属性を封じ込める蜘蛛のロックが完成した。

「俺の場に存在する攻撃力の等しい攻撃表示モンスター2体、この2種類の結界像を指定することで魔法カード、クロス・アタックを発動。その効果によりこのターン豪雨の結界像は攻撃できず、業火の結界像はプレイヤーへの直接攻撃を可能とする」

「おいおい、オパビニアが突破できないからってロックの上からダイレクト戦法か？一体いくつ手があるんだ、ったく」

「それをお前が知る必要はない。バトルフェイズ、業火の結界像でダイレクトアタック」

ドラミング・コングの片方が破壊され、オパビニアの守備力2400はそう簡単に突破されない壁となった……などと一息つく暇すらもなく、即座に変更された攻め手にぼやく糸巻。炎を模した赤い結界像の目が光り、赤い光線がバージェストマ2体の間をすり抜けて彼女へと直撃する。

業火の結界像 攻1500↓糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP2600↓1100

「今のダメージを受けても平気で立っているとはな。妨害電波機能付きデュエルディスクだったか？それを加味してもさすがは元プロデュエリスト、そのフィジカルの強さは大したものだ」

「ようやく世辞のひとつでも言う気になったのかい？それよかせっかく炎の攻撃なら、こいつに火をつけてもらいたいんだがね」

それは純粹な賞賛なのか、相手の心を折るための詭弁なのか。蜘蛛の表情からはどちらとも判断つかない糸巻だったが、いずれにせよ彼女の返答は決まっている。皮肉に笑ってニヒルに返す、それが彼女にとってのいい女というものだ。懐から取り出した煙草をひらひらと振って見せ、結局自分で火をつける。

「今更だが、アンタ煙草はやるのかい？どっちにしろ、アタシは1人で吸わせてもらうがね」

「好きにしろ……赤髪の夜叉、糸巻太夫。バージェストマと不知火の2テーマを軸とした混成デッキの使い手にして、デュエルポリス家紋町支部現代表」

「おう、なんだなんだアタシのプロフィールなんぞ並べたてて。ストーカー業も請け負ってるのかい？」

煙草の力もあつてかいささか落ち着いた調子でのんびりと返す糸巻の皮肉には答えず、蜘蛛が試すように問いかけを続ける。

「どんな気分だ？常に自分の武器としてきた水と炎、その2つの属性により行動を縛られる気分は」

「はっ、そこまで調べてきたうえでわざわざ豪雨と業火の2枚をチョ

イスしたのかい？ご苦労なこつたね……いや、そうか。そういうことか」

吸いなれた味とニコチンによって、糸巻の頭も次第に冴えてきた。普段よりも鋭さを増す思考回路がふと、今の言葉をきっかけとして彼女の頭脳に不意のひらめきを送り込む。1人で勝手に納得する彼女に怪訝そうな表情を向ける蜘蛛に、にやりと笑った彼女が口から離れた煙草を手札のない右手に持ち替えて言い放つ。

「悪いね、蜘蛛とやら。この勝負、アタシの負ける道理はない」

「……なんだと？」

またしても、風が吹いた。あたりに漂っていた紫煙がゆっくりとどこかに流れていく中を、彼女の言葉が突き抜ける。

「アンタのデッキを見た時から、どうも引つかかかってたんだ。結界像とその打点を上げるオレイカルコス、そして使い減りしない強化手段のドラミング・コング……まあ、ここまではわかる。別に普通のデッキ構成だもんな。だけどな、問題はその後だ。リザードロー？セカンドンキー？そこまで来たらもう、アンタのデッキはただの【結界像】じゃない、【EM結界像】とでも言うべき別のデッキだよ」

「……何が言いたい？」

真意を測りかねる蜘蛛に、ますます笑みを深くする糸巻。気づかぬうちに、もはや精神的な優位関係は完全に逆転していた。獲物を自らのロックで封殺しその抵抗が弱まるのを待っていたはずの蜘蛛は、いつの間にか糸巻の言葉という糸によって逆に絡めとられていたのだ。「アンタは【結界像】に重要なメタカードや防御手段を削ってまで、【EM】の攻撃性能をデッキに組み込もうとした。ドラミング・コングもセカンドンキーも獣族、その比率が多いところを見ると、そうだな。おおかたファイニッシュャー用のハンマーマンモ、守備メタのラクダウン、強化にブーストをかけるチアモール……まあキリがないからこのぐらいにしておくが、そのへんあたりも入ってるんじゃないか？」

「……だからなんだ？笑いたければ笑うがいい、俺は最後に勝つ。そうあり続ける限り、誰にも文句など言わせはしない」

「笑わないよ」

即答だった。不意に笑みを消して真剣な表情になり、彼女にしては珍しくまっすぐに蜘蛛の目を見据える。その視線の強さに気圧されて何も言えなくなった蜘蛛の耳に、続いて語られる言葉が届く。

「笑うわけがない、文句だって言いやしない。逆に、もしそんな奴がいたらアタシの方がぶっ飛ばしてやる。あのな？プロってのはな、デッキのカード1枚1枚を選ぶことの重さを誰よりもよく知ってるもんなんだ。どれだけ無茶なコンボだろうと、たとえ上位互換がいくつあるとしても。そのカードが好きでデッキに入れた奴がいるなら、それは絶対に替えが効かない1枚だから。アタシはプロを辞めて随分になるが、それでも同じさ。ほんの少しでもプロの心構えを持つてる奴なら、人様が本気で組んだデッキを笑ったりなんてしない……なあ、アタシはアタシのデッキについてもある程度は下調べしてきたんだろ。そもそもなんでアタシは、不知火とバジエなんてわざわざ違う要素を組み合わせたデッキを使うのか。考えたことはあるかい？」

「何？」

不意に話を変える糸巻に、そう問い返すのが精一杯の蜘蛛。完全に相手のペースにのみ込まれていることに対し彼の心の中では警鐘を鳴らしながらも、それでもその話に引き込まれてしまう。

「先に言つとくが、これはアタシに限ったことじゃない。もちろん例外だつて多いが、あの時アタシと同期世代だったプロには結構いるんだぜ、混成デッキ使い。なんでだと思っ？」

「……」

「別にそういうルールだったわけでもない、暗黙の了解なんてものもない。ただそういう奴が自然と集まってきたんだよ、あの頃のプロリーグには。昔のアタシらの仕事はプロだ、スポンサーからの旗背負ってお客さんの前でデュエルを魅せる、エンタメに振り切った職」

そこで1度言葉を切り、わずかに目を閉じてかつての生活に思いをはせる。しかし、センチメンタルは彼女の好むところではない。いくらでも湧き上がってくる思い出を振り切るように再び目を開き、口を開く。

「考えてもみろよ。アタシらはその自分の代名詞となるデッキを使っ

て何十回、いや何百回も、同じ客が見てる前で戦うんだぜ？もちろん勝つことは大事だけどな、毎回全く同じカードから同じ動きで全く同じ盤面を作って、たまに妨害が入ればそのリカバリ。そんなの、本当に見たいと思うか？そりゃ当然、そこまで割り切った方が強いだろうさ。極限まで勝利パターンを絞りきって、たった1つのルートに最短でたどり着きつつ空きスペースに展開補助と妨害カードをフルに突っ込む構築が一番強いだなんて、そんなの小学生だってわかる話だ」

誰よりも勝敗に貪欲なはずのプロデュエリストが、勝利への最短距離を取らないという矛盾。それを笑い飛ばす彼女に、蜘蛛も何か思うところがあるのか大人しく耳を傾ける。

「でもな、プロデュエリストはプロのエンターテイナーだ。そんな風に毎回戦術が固定されてたら見てる方だって、何よりいつかは必ず本人に飽きが来るに決まってるじゃないか。そうなった時に自分が使ってて楽しくないデッキを見せて、それで何がどうなるってんだ？そんなの、アタシに言わせりゃプロ失格だ。だから、デッキに『遊び』を作るんだよ。どんな相手にも決まった盤面で対抗して、それができるようにカードを選ぶんじゃない。戦ってみればそのたびに戦術や着地点が変わる、お決まりのカードから今日は何が飛び出してくるのかわからない。ただ強いテーマだからその時だけ使う、そんなスタイルは許されない」

「……どうやら、正体を現したようだな。人のデッキに文句をつけないなどと、口では立派なことを言っておきながら舌の根も乾かないうちにデッキ批判か？」

自嘲的な笑みを浮かべながらの指摘に、しかし彼女はそうじゃないと首を横に振る。

「言いたいことはもつともだが、これはそういう次元の話じゃない。アタシもさんざん見てきたからよく知ってるが、そういう奴は大抵次に強いカードが出たらそこに乗り換える。公式戦以外で遊ぶ分には勝手にやってくれりゃあいいが、プロはイメージ商売でデッキはその顔。使い始めたデッキは、基本的に一生ものなんだ。勝てるデッキで

勝つんじゃない、自分のデツキで勝つんだよ。その瞬間を見るために客は集まってくるんだし、その瞬間をモチベーションにアタシらは戦い続け、デツキと自分を進化させてきたんだからな」

「それで、混成デツキを？だが、その話が何の関係があるというんだ」「おう、今からその話に入るとこだ。演説代は請求しないでおいでやるから、耳の穴かっぽじって聞いとけよ」

糸巻なりのプロ観に、蜘蛛は何を思ったのか。その顔からはいまだ何も読み取れないが、彼女の目には最初の出会いよりもほんのわずかに、それこそ比べてみないとわからないほどにその表情が柔らかくなっているように映った。それとも、たまたま光の当たり方が変わっただけなのか？いずれにせよ、彼女としては言いたいことを言わせてもらうだけだ。

「アンタのデツキはな、見たところまさに昔のプロの考え方そのままなんだよ。アタシらの時代でのデツキの組み方の流行りは、大まかに2種類あった。1つが、デツキの全てをたった1種類のエースのためだけに特化させる……マスコミからは過労死スタイルなんて名前付けられてたな、ネーミングはともかくそれはそれで面白いもんだつた。そしてもう1つがアタシや、今のアンタのデツキと同じ。シリーズやテーマを組み合わせるワンパターンにならないように、そのくせ実戦に耐えうるだけの動きを模索した結果の型だ。だからそういう意味で懐かしい、アタシはそう思ったね」

「…………ふん」

「そして、だからこそ、だ。アンタがこの稼業をどれだけ続けてきたのかは知らないが、プロデュエリストとしてのファイトスタイルならアタシに一日の長がある。いうなればアンタはアタシの後輩、その後輩相手に初見の状態で負けてやるほどにアタシの腕は鈍っちゃいないよ。さあ、おしゃべりはもう終わりだ。ターンエンドを宣言してみない？元プロの本気、たっぷり思い知らせてやるからよ」

喋り続けるうちに手の中で短くなった煙草を未練がましく口の端に咥え、とびつきりの好戦的な笑みを浮かべてみせる。そしてその挑発に、蜘蛛は応えてみせた。

「いいだろう。その大口が嘘ではないと、俺に証明してみせろ！ター
ンエンドだ！」

「いいねえ、今のはなかなかいいお膳立てだ。フィールドはアンタが
圧倒的に有利、アタシにはもう手札もない。でもご期待通り、1発で
ひっくり返してやるよ！アタシのターン、ドロー！」

素早く唯一の手札に目を走らせ、その目を輝かせる。

「このターンもバージェストマ・オパビニアの効果を発動。オーバー
レイ・ユニット最後の1つを取り除くことで、デッキからバージェス
トマを手札に加える。バージェストマ・マーレラをサーチだ」

「マーレラ……デッキからトラップ1枚を墓地に送るカードだった
か。そんなものを今更サーチして、何ができる」

「何ができるって？盤面だけ見りや、確かにアンタがこのまま勝つ
のが道理ってもんだろうさ。でもな、アタシは道理なんざぶち壊して、
理不尽に無理を通してみせる。魔法発動、一撃必殺！居合ドロー！」
「何かと思えば……居合ドローだと？引くというのか、この1回で？」

居合ドローは墓地にカードを送ったのちにカードを引き、その後
墓地から落とした数だけカードを選びデッキに戻す効果があるが、
それだけではなくもしそのドローカードが2枚目、あるいは3枚目の居
合ドローだった場合にのみ発動する真の効果がある。フィールドを
すべて破壊し、その破壊し墓地に送ったカードの数1枚につき200
0ものダメージを相手に与える文字通り一撃必殺となりうる効果が。
そしてその性質上発動時には破壊が不確定であるために、カードが何
枚出ていようが蜘蛛は大革命返しを発動することも不可能。

「ああ、そうさ。引くんだよ、これからな」

彼女はそう言つて不敵に笑う。だが、その確率はあまりにも低い。
同名カードを引かねばならないという性質上、デッキの残り枚数に
よつて若干の確立変動こそあるもののその成功率はデッキ内に同名
カードが2枚残っている最初の1撃が最も成功率が高いからだ。す
でにその1撃を無効にさせた糸巻のデッキに、残る居合ドローは1枚
のみ。彼女がこれまでのデュエルで使用してきたカードによつて多
少デッキが掘り進められているとはいえ、まだ30枚近く存在する

デッキの中からピンポイントでそれを引き抜かねば彼女に勝機はない。しかも仮に最後の居合ドロローがデッキの上の方にあつたとしても、これから行う蜘蛛のフィールド上カードの枚数分の墓地肥やし……つまり墓地に落とす6枚のカードの中にそれが含まれていた場合には、ドロローを行うまでもなくその失敗が確定する。

馬鹿馬鹿しい、ただの運のみに頼った苦し紛れのギャンブル。蜘蛛の理性は、そう彼女の行動を否定する。それでも彼女は、その限りなく低い可能性に対し気負わずに笑ってみせた。

「アンタのフィールドにカードは6枚。そうら、1枚ずつ見てこうぜ。1枚目、不知火流―燕の太刀。2枚目、牛頭鬼。3枚目、命削りの宝札。4枚目、馬頭鬼。5枚目、迷い風。6枚目、死霊王。ドーハスーラ……ここまではセーフ、いよいよお楽しみの7枚目だ。アタシはとつくに終わらせたが、アンタのお祈りはもう済んだか？」

デッキトップに文字通りの居合抜きを行う侍のように中腰で手をかけ、7枚目のカードに添えられた指先が白くなるほどに力がこもる。

「……はああっ！」

周りの音が消えた。裂帛の気合とともに、運命を握るカードが引き込まれる。そして、次の瞬間。

「一撃」

ずるり、と空間が動いた。2体の結界像が、セカンドンキーが、ドラミング・コングが、伏せられていた大革命返しが、横一文字に両断された断面から徐々にずれていく。

「必殺」

そしてそれは、蜘蛛の場のみに限ったことではない。糸巻本人のフィールドでもオパビニアが、増産工場の装置が、そしてフィールドゾーンに浮かび上がった混沌の場のカードが、同じくその断面から次第に上下がずれていく。

「……居合ドロロー」

「馬鹿な、そんなことが……俺のフィールドが！」

低く呟いた糸巻が、果たして引いてみせたカード……最後の居合ドロ

ローを表にする。ゆっくりと崩れていくフィールドに、呆然としたような蜘蛛の叫びがこだました。特殊召喚を封じ、手札もほとんど使い切らせていた。守りの準備も万全、勝利は目前のはずだった。

しかし、その道理は打ち壊された。馬鹿馬鹿しいほどあっけなく、そして理不尽に。自らの叫び声を遠く聞きながらも蜘蛛はしかし、どこか納得めいた感情を感じていた。追い詰めていたはずの自分と彼女の立場が逆転し、相手が精神的に優位に立ったその時点で、すでに勝負はついていたのかもしれない、と。

彼が諦めて目を閉じたその瞬間、両断されたカードが一斉に爆発を起こした。破壊され墓地に送られるカードはペンデュラムカード、及び1ターンに1度だけ破壊されないオレイカルコスを除く計6枚。12000ポイントのダメージが妨害電波による軽減をもつてなおその体をぼろくずのように簡単に吹き飛ばし、地面に何度も転がしながら叩きつける。

蜘蛛 LP4000↓0

「あ……………」

全身を打ち据えられながらもどうにか立ち上がりとうして地面に手をつき、またその場に崩れ落ちる。打ち所がよほど悪かったのか、全身だけでなく頭が割れるように痛い。目はかすみ、ぐるぐると不安定に世界が揺れている。そんな横向きの風景を、燃えるような赤色が自分に向けてゆっくりと近づいてくる様子が辛うじて彼の視界に映った。やがて目の前で立ち止まったその人影が、おもむろにかがんでこちらに手を伸ばす。朦朧とした頭でその真意を判断することもできず、反射的に手を伸ばしてそれを掴むと、力強く自分の体が引つ張り上げられて近くの木にもたれかけるような姿勢に直される。

「なに、を」

「軽い脳震盪か。あとはまあ、骨折があるかどうか。痣やらなんやらはキリがないから放っておくぞ、勝手に自分で治しとけよ。じゃあアタシはぼちぼち移動するから、いい人に拾われな」

「……………待て！」

軽く全身を見渡し、ざっくりと緊急性はないと判断。さっさと背後

のバイクに乗り込もうとする彼女に、ほんの少しだけ持ち直した蜘蛛が苦しげに声をかける。

「んだよ、これ以上ぐずぐずしてたら雑魚がわんわん集まってくるだろうが。いくらアタシでも馬鹿正直にその辺のチンピラレベルの奴なんざ1人1人相手してらんないぜ、それこそ朝になっちまう。これも仕事だ、もうちよつとこの辺一帯をひっかきまわしてやらないとだしな」

バイクの側面にひっかけてあったヘルメットを無造作にかぶり、発車のために地面を蹴る。再びぼやけてきた蜘蛛の視界の中で闇に消えようとするその背中に、力を振り絞ってもう一言だけ叫んだ。

「……覚えていろ、次こそは、必ず……！」

無理に叫んだことで、蜘蛛の体力に今度こそ限界が来た。完全に視界がブラックアウトする寸前、場所を変えつつある彼女が振り返りもせず片手を上げて彼に応える姿が見えた。

ターン6 黄金に輝く太陽の炉心

時間は再び前後して、糸巻と蜘蛛のデュエルに決着がつき、彼女が次の陽動に移る少し前。防音遮断された兜建設謹製ドームの内部では、外の闘争など知る由もなく。申し訳程度の休憩時間の後、今まさにコロシアム2回戦が始まろうとしていた。

「よろしく」

鳥居と向かい合うなりそう言うって頭を下げたのは、この華やかな場にはあまりにも場違いなぐれびれたグレーのスーツ姿の男。やや薄くなった頭に若干突き出た腹、そしてよく言えば人畜無害だが悪く言えば何の特徴もない顔つきの、極めて平凡極まりない中年。大げさな仕草で一礼を返ししながら、この平凡な男が勝ちあがってくることを予想していた女上司の言葉を思い出す。

『で、だ。1回戦はこんなもんだが、次は2回戦だな。多分勝ち上がったくるのはこっち、青木のおっさんだろうな』

そう言うって彼女は、何のためらいもなく隣のブロックの結果を予想したものだ。

『この青木のおっさんだがな、アタシより年は上だがプロ入りしたのはアタシより後だ。なんでもその前はどつかのブラック会社でソーラーパネルの営業やってる社畜だったらしいんだが、ある時に死んだ目でフラフラ外回りしてたら偶然カードを拾ったらしくてな』

『は、はあ』

そしていきなり始まった謎の語り困惑する彼の反応を知ってか知らずか、赤い髪を揺らしながら丸暗記しているらしいその後輩の話をペらペらと続けたのだ。

『それまでデュエルモンスターズには興味もない、ルールも何も知らないおっさんが、そのカードにだけは何かを感じたんだろうな。なんとなく拾ってお守り替わりに持ち歩き、イラストを見ては強いのかどうかも全く分からないテキストを何度も読んで、それだけを心の支えにしてたらしい。あ、本人に直接聞いた話だから信憑性は確かだぞこれ。で、そんなときにその会社が倒産したわけだ。急に仕事がなく

なつた青木のおっさんは少ない貯金でどうにか凌ぎながら、次の仕事を探す時間を丸々つき込んで手探りでルールを覚えてデッキも作り、はじめは町内大会あたりからだんだん勝ち上がっていった。どう見ても素人の、明らかに浮いてるおっさんの姿がマスコミの目について、面白がったスポンサーが付き、あとはとんとん拍子のプロ入りだ』なるほど、と目の前の青木の姿を見て、彼はその時の糸巻の言葉にようやく得心がいった。13年前の「BV」事件よりも前の世界では、老若男女のあらゆる人間がデュエルを楽しんでいたといっても過言ではない。町内大会に中年男が出場する光景も、それ自体は何もおかしなことではなかった記憶が彼にははつきりと残っている。

だが目の前のこのくたびれた男は、なんというか覇気が薄いのだ。デュエリスト特有の匂いというか気配が、妙に薄くしか感じられない。あれから長い時がたつた今ですらこの調子なのだから、当時は確かに目立って仕方なかっただろうと心の中で頷く。例えるならば英語版のキラール・トマトがずらりと並んでいる中に、1枚だけ日本語版を紛れ込ませるようなものだ。

『だがな、経歴が浅いからって油断すんなよ。青木のおっさんのプロとしての2つ名は「太陽光発電」……すぐにその意味も分かるだろうが、なかなかどうして骨のある相手だぜ。あのおっさんは正直デュエルポリス側に来ると思ってただけだな……最後に会った時はローンやらなんやらで首が回らないとか言ってたから、まずいところに金借りちまって断り切れなかったんだらうな。なにせ、薄給のアタシらと違って動く金はあつちの方が桁違いだ』

そこまでの会話を思い返したところで、頭上のスピーカーがタイミングよくがなり立てた。

「さあ、いよいよ準決勝。2回戦の始まりだぜ！今注目度の高いブロックはBブロック、新進気鋭の大型新人の鳥居浄瑠……そして対するは中年の星、輝け太陽光発電！今大会の最年長選手、青木勝まきひる！時間も押ししてるからじゃんじゃん行くぜ、さあ……」

会場に設置された時計の秒針がきっかり真上を向いた瞬間、2か所のデュエルフィールドで同時に試合が始まる。今回は鳥居が先攻で

あり、じつくりと布陣を整えることができる。

「デュエル！」

「さあさあさあ、ご用とお急ぎでない方はお立会い。これより始まりますは、魔界劇場は第二幕。次なる演目を皆様にお目にかけてましよう！」

大見得を切ったところで、彼は会場の反応から確かなその手ごたえを感じていた。先の1回戦を経て、確実に会場の注目は自分へと注がれている。無論、そうは言ってもまだ大した程度ではない。自分たちの反対側にあるデュエルフィールドではシード枠がデュエルを始めしており、つい昨日まで無名の新人でしかなかった自分よりもそちらの優勝候補が注目を集めるのは当然だろう。

しかし、そんなことは彼にとつて気にならなかった。大事なのは1回戦よりも会場の熱気が確実に上がっており、それに自分が一役買っているという事実だけだ。視線を集め、熱狂を注がれ、そしてそれを自分が巻き起こす快感。それこそが、彼にとつて一番のモチベーションだった。

「それでは、開演のお時間がやってまいりました。路傍に佇む要石、魔界劇団―エキストラを通常召喚！」

最初に鳥居が繰り出したモンスターは、上部に穴が開いた小型の円盤のような物体。そこからむくむくと3つの人型が持ち上がり、やがてそれぞれがお揃いの帽子をかぶり赤、黄、緑の3色のチョッキをそれぞれ羽織った個別のモンスターとなる。

魔界劇団―エキストラ 攻100

「おやおや、これは大変です。エキストラばかりが舞台を練り歩き、肝心の主演役者の皆様も影も形もございません。どうやら彼らはこの大一番に出番を忘れてしまった模様、大至急呼び出してもらいましょう。エキストラのモンスター効果、発動！このカードをリリースすることでデッキから別の魔界劇団1体を選択し、そのカードを^{ペンデュラム}ゾーンへと直接発動いたします。レフトPゾーンにスケール0、世界が誇る我らの歌姫。魔界劇団―メロー・マドンナをセツティング！」

3体のエキストラが一斉に元の円盤の中へと引つ込むと、まるで本物のUFOよろしくそれがふわりと浮き上がる。そのままふわわたと鳥居の指示した左手の方向まで移動した円盤が白い煙を吹き出して視界を遮り、その煙が晴れた時その位置には光の柱、そしてその中心には大胆なスリット入りの黒い服にピンクの長髪をなびかせる女性型モンスターが静かに目を閉じて自らの出番を待っていた。

『さらにここで、前奏曲としてメロー・マドンナのペンデュラム効果を発動いたしましょう。私のライフ1000をコストに、彼女は仲間を呼び込む戦いの歌を歌います。その歌声につられることで、私はさらなる魔界劇団を手札に加えることが可能となるのです』

鳥居 LP4000↓3000

「ならばここで、手札から幽鬼^{ゆき}うさぎの効果を発動しましょう。相手フィールドに表側で存在するカードが効果を発動した際、このカードを捨てることでそれを破壊」

『おおっと!?!』

「そして使い手の君に言うまでもないでしょうが、メロー・マドンナはその性質上、発動にチェーンして破壊された場合にサーチを行うことはできない」

腰に手を当て、光の柱の中で今まさに歌い出さんとした歌姫に鋭い鎌の魔の手が迫る。銀髪の少女によって光の柱を両断された歌姫はやむなくその歌を中断し、その場から一時的に退場した。

『嗚呼なんということでしょう、興奮した少女による客席からの乱入により、前奏曲は一時中断となりました。しかし、演者のいない舞台などはあまりにも締まりません。ここは一時幕を引き、仕切り直しといたしましょう。ライトPゾーンにスケール7、魔界劇団カーテン・ライザーをセッティング！そしてカーテン・ライザーは自身の効果により、演者のいない舞台に対し1度だけ緊急登板することを可能とする能力を持っています。カーテン・オン・ステージ！舞台を回す転換の化身、カーテン・ライザーの登板です！』

鳥居の右手に光の柱が立ち上り、まるで開いたテントから手足が生えたような人間離れした姿の劇団員がその中に浮かぶ。その団員は

しかしPスケールの中で大人しくしていることを良しとせず、すぐに光の中から飛び出して自らの体をパラシユート代わりにしてふわふわと宙を舞い誰もいない舞台の中央に着地した。

魔界劇団カーテン・ライザー 攻1100↓2200

「カーテン・ライザーは場面に自身しか存在しない時、その攻撃力を1100ポイント上昇させる不思議な力の持ち主。さらにそのカーテンの内部は摩訶不思議、彼らの楽屋と舞台袖を繋ぐ四次元通路。カーテン・ライザーの体を通じて舞台袖デツキから魔界台本1冊を墓地に送り、エクストラデツキ楽屋に表側で存在する魔界劇団1体を私の手札へと呼び寄せるのです。魔界台本「オープニング・セレモニー」を墓地に送り、メロー・マドンナを手札にて再スタンバイしていただきましょう。このまま効果へと繋げたいところですが、あいにくと彼女がそのたぐいまれなる美声を披露するのは1ターンに1回のみ。私はこれで、ターンエンドです」

手痛い妨害を受けつつも、どうにか最低限のリカバリーを終えてターンを終える鳥居。しかし目の前の冴えない男は仮にも1回戦を勝ち抜いてきた強者、彼としてはデュエル中1度しか使えないカーテン・ライザーの効果まで切ってこれでは不服な結果である。

「では、私のターン。鳥居君、でしたか。先ほどのデュエル、拝見させていただきましたよ。実に見事なショーでした」
「……」

ターンが移る。だが青木がカードを引くよりも先に口にしたのは、対戦相手への称賛の言葉だった。その真意を測りかねる鳥居に、しかし、と言葉を続ける。

「君のように未来ある若者には大変申し訳ありませんが、私にとってもこの1戦は生活のかかった大事な試合。決して手を抜くような真似はしませんので、そのことだけはお覚悟ください」

『当劇団はいつでもどこでも真剣勝負。そして勝利の瞬間をお届けする。筋書などはありませんが、結末は常に1つをモットーとしております』

「そうですね。ですが私も、負けるためにこの場へと来た覚えはあり

ません。私のターン、ドロロー。私のフィールドにモンスターが存在しない時にS R ベイゴマックスは手札から特殊召喚でき、さらにこのカードが場に出た際に私はデッキから別のSRモンスター1体をサーチします。タケトンボークを手札に加え、そのまま効果を発動。タケトンボークは自分フィールドに風属性モンスターが存在するとき、手札から特殊召喚が可能です」

無数に連なったコマのようなモンスターに、竹トンボが変形して小型ロボットのようになつたモンスター。召喚権すら使わずに手札消費1枚からモンスターを2体並べるこの強力なコンボは、本家「SR」のみならずあらゆるデッキに採用の余地がある。

そして逆に言えば、この段階では幽鬼うさぎ含めまだ汎用カードしか使用していない青木のデッキ内容はわからない。いずれにせよ、次に出すカードでその内容も見えてくると気を引き締めた。

SR ベイゴマックス 攻1200

SR タケトンボーク 守1200

「チューナーモンスター、^{アーリー}A・ジェネクス・ケミストリを召喚します」

A・ジェネクス・ケミストリ 攻200

そして通常召喚されたのは、機械の体を持つ小柄なチューナー。紫の体の背中には赤と緑のボンベを背負い、カラフルな印象を抱かせる。

「風属性モンスターであるレベル3のベイゴマックス、及びタケトンボークに、レベル2のケミストリをチューニング。レアルの炉心に集いし風よ。声なき彼らの祈りに応え、いざ戦場の神風とならん！シンクロ召喚、レアル・ジェネクス・ヴィンディカイト！」

「『ジェネクス……』」

ベイゴマックスとタケトンボークが連なって飛び、それを包むようにケミストリが2つの光の輪となる。合計レベルは、8。

☆3 + ☆3 + ☆2 || ☆8

レアル・ジェネクス・ヴィンディカイト 攻2400

全体的に緑色のカラーリングを施された、後部に巨大なジェット噴射器を持つ平べったい近未来的な戦闘機。先端の赤い2つの丸みを

帯びた窓も相まって、鳥居にはそのデザインは全体的に昆虫のような印象を抱かせた。

「バトルフェイズ。ヴィンディカイト、カーテン・ライザーに攻撃！ブローエネミー・スカイハイ！」

戦闘機が垂直上昇し、その上部に備え付けられた機銃から無数の弾丸を撃ちつける。カーテン・ライザーの体はすぐにその着弾による爆風にのみ込まれ、やつと煙が晴れた時には跡形もなくなっていた。

レアル・ジエネクス・ヴィンディカイト 攻2400↓魔界劇団
カーテン・ライザー 攻2200（破壊）

鳥居 LP3000↓2800

「なんということでしょう、カーテン・ライザーが無慈悲なる戦闘機による空襲によりその身を炎に焼かれてしまいました！第一幕にて立ち向かいし海の脅威に引き続き、第二幕における今明かされた敵襲の名はジエネクス！声なき鉄の兵器に対し、魔界劇団はどう立ち向かうのか!?まずは手札より、メロー・マドンナの効果を発動！私のペンデュラムモンスターが戦闘破壊されたタイミングで、歌姫は戦場へと勇敢なる戦士を称える鎮魂歌を奏でるために手札より特殊召喚が可能となります。そしてメロー・マドンナの攻撃力は、私の墓地に存在する魔界台本1冊につきぴつたり100ずつ上昇いたします！」

「ではこちらも、モンスターを戦闘破壊したヴィンディカイトの効果が発動しましょう。デッキからジエネクスを1体手札に加える……私が選ぶのはこのカード、ソーラー・ジエネクス！」

魔界劇団—メロー・マドンナ 守2500 攻1800↓1900

黒衣の女性、メロー・マドンナがヴィンディカイトの前に立ち塞がると同時に、青木がデッキから1枚のカードを引き抜く。遠目から見ても一目で判別できるほどにぼろぼろの、まるで長いこと屋外に放置されていたようなカード。それを見て、改めて上司の言葉が鳥居の頭に蘇る。あの1枚が話に聞いた、この冴えない中年の人生を大きく変えるきっかけとなった1枚なのだろうとはすぐに察しがついた。

そういうこだわりは、彼自身も決して嫌いではない。

「カードを一枚伏せ、ターンエンドです」

「なるほど、先ほどのターンでは妨害、そして展開と見事に我々の先を行かれてしまいました。しかし一方的にしてやられるのみではショーになりませんし、なにより私自身も性に合いません。場面代わりまして魔界劇団反撃の狼煙、私のターン、ドロー!」

ハードルを上げるだけ上げてからカードを引く。レアル・ジエネクス・ヴィンディカイトは攻撃力こそそこまで高いわけではないが、強力なサーチ効果の他にも相手モンスターからの攻撃対象とならない効果を持つ。つまり、あのカードのみが居座っている限り鳥居は一切の攻撃宣言が封じられたに等しい。

しかし、その程度で攻め手がまごつくようなことはない。この手札であれば、十分に勝機はあると彼は見た。

「魔法カード、魔界台本「ファンタジー・マジック」を発動! 私のフィールドに存在する団員であるメロー・マドンナを選択することで、このターン彼女がバトルを行ったモンスターをバウンスすることが可能となります。鋼鉄の侵略者に立ち向かうは、剣と魔法が世の習い。我が歌姫には、脅威に立ち向かう女勇者の役を演じていただきましょう!そしてメロー・マドンナの攻撃力は、私の墓地に存在する魔界台本1冊につきぴったり100ずつ上昇いたします」

マドンナが片手に持った分厚い台本にパラパラと目を通し、身にまとった黒衣をさっと脱ぎ捨てる。外から見えぬよう巧みに隠されていたその中には、惜しげもなくその体の線を強調する明るい色の軽装にクールさを印象付ける青い首元のスカーフ。腰にはこの手のお約束として細身の長剣を下げ、強気に腰へ手を当てヴィンディカイトと向かい合う……女勇者が、そこにいた。

「……うだが、ヴィンディカイトは攻撃対象とならない。ファンタジー・マジックを使おうとも、戦闘を行えなければ意味はないはずですが」

「いかにもその通り。残念ながら、今回のファンタジー・マジックそのものに意味はありません。ですがこの瞬間、私の求めた真の狙い。メロー・マドンナのモンスター効果を発動いたします!このカードが

モンスターゾーンに存在し、魔界台本の封が切られたその瞬間。デッキよりレベル4以下の魔界劇団1体を、彼女の歌に合わせて踊るダンサーとして配備することが可能となるのです。再び出でよ、エキストラ！』

メロー・マドンナが剣を抜いて高く掲げると、そこに従う従者といった雰囲気のエキストラが再び円盤に乗ってふよふよと近寄ってくる。

魔界劇団―エキストラ 攻100

『そして、このターンもエキストラのモンスター効果を発動。このカードをリリースし、新たな団員をレフトPゾーンへと配置いたします。そう、彼こそはスケール8にて波乱を起こすアドリブの達人。魔界劇団―コミック・リリーフの登場です！』

左手に上がった光の柱には、8と書かれた光の数字……そして、その中でジャグリングをしつつぐるぐる模様の瓶底メガネの奥から舞台の様子に目を光らせるむっちりとした悪魔の姿。

ここは本来ならば目当てのコミック・リリーフを直接持つてくるのではなく、まずもう1体のメロー・マドンナを発動し、そちらのP効果を經由してリリーフをサーチするべき場面であった。そうすればデッキの圧縮に繋がるだけでなく、左右で0と8のスケールを描くこともできただろう。

しかし、彼はそれを選ばなかった。その躊躇いの理由こそが青木が先ほど伏せたカードの存在であり、もうひとつが先のターンにサーチされたソーラー・ジエネクスの存在である。彼自身【ジエネクス】にはそこまで詳しいわけではないが、あのカードがバーン効果を持つているということは頭の片隅に覚えていた。まだまだ数字に余裕があるとはいえたでさえ減っているライフをさらに減らすことを、彼の勘は良しとしなかったのだ。

『そして私の手札には、こちらの団員がもう1体。魔界劇団―コミック・リリーフを通常召喚！』

魔界劇団―コミック・リリーフ 攻1000

光の柱の中にあるコミック・リリーフが短い手を振り回して指示す

ると、その真下からもう1体、そっくり同じ瓶底メガネの小さな悪魔が自分の背丈ほどのサイズのボールで玉乗りすることでその低い身長をごまかしながらも出陣する。ただしその恰好は適用中のファンタジー・マジックの世界観に合わせて妖精のような羽根を背中に装着し、手には魔法の杖らしき棒を握りしめてのまるで似合わない妖精スタイルであり、その姿に客席から思わずといった様子の失笑が漏れる。

「さあ、舞台は整いました。カードを1枚セットして、コミック・リリーフのP効果を発動！相手モンスター1体と私の魔界劇団1体をそれぞれ選択し、その2体のコントロールを入れ替えたのちに自らを破壊してしまおうのです。レアル・ジェネクス改め魔界劇団―ヴィンデイカイトには、彼らの専用機となっていたきましよう！」

妖精ルックのコミック・リリーフが魔法の杖を放り投げ、代わりに懐からペンキとハケを取り出してヴィンデイカイトを魔界仕様に塗装すべく指をワキワキとさせながら玉乗りしたままの怪しい笑顔でにじり寄っていく。

これが通りさえすれば、もはや勝負の大勢は決するほどの一手。事実そこいらのチンピラが相手であれば、これは必殺の一撃となりえたであろう。しかし、青木はプロデュエリストだった。

「させるものか！永続トラップ、デイメンション・ゲートを発動！このカードは発動時に私のモンスター1体を除外し、このカードが墓地に送られた際にそのモンスターを再び特殊召喚する。また相手プレイヤーが直接攻撃を宣言した際、表側のこのカードを破壊することができ」

コミック・リリーフから逃れようと大急ぎでジェットを全開にし垂直直急上昇した緑の機体が、そのまま上空に突然開いた次元の裂け目の中へと消えていく。効果が空振りに終わったリリーフが残念そうにペンキをしまい、玉乗りを崩さないままに鳥居の元に帰還する。

そうして青木がコントロール交換を回避した一方で、悩ましい選択を迫られたのが鳥居である。このままコミック・リリーフで攻撃を行えば、青木は確実にヴィンデイカイトを帰還させるだろう。リリーフ

のP効果は1ターンに1度しか発動できないため、そのままターンを終えるしかない。となれば何もせずにターンエンドを行う、それも1つの選択ではある。しかし、ディメンション・ゲートはただ漠然と回避に使うよりもどちらかといえばコンボ向けのカードであり、あのカードを場に残すことでそのコンボ成立の手助けをしてしまう可能性も高い。永続トラップを墓地に送ることで2枚ドロウするマジック・プランターや、自分フィールドにモンスターがいない状態でなおかつ表側のカードを破壊することを要求するものの古代の機械を無条件にリクルートできる古代の機械射出機アンティーク・ギアカタバルトをモンスターを帰還させつつ発動できる、などがその最たる例だろう。

攻撃するか、しないか。どちらにせよ、ダメージを与えることはできない。ほんの1瞬だけ悩んだのち、鳥居は場に向けて言い聞かせるように指示を出した。

『それでは、メロー・マドンナは守備表示のままに。反撃の狼煙も不発に終わり、いまだ長い冬、雌伏の時を迎えし魔界劇団は、果たしてここからどのような大逆転を果たすのか。どうか皆さん、この息詰まる戦いを最後までお楽しみください。私はこれにて、ひとまずターンエンドといたしましょう』

「では私のターン。攻撃を行わず、ヴィンディカイトを除外ゾーンに残すことを選んだ……その判断は残念ながら、あまり正しくはなかったようです。通常魔法、予想GUYガイを発動。私のフィールドにモンスターが存在しない時、デッキからレベル4以下の通常モンスター1体を特殊召喚することが可能となります。ジェネクス・コントローラーを特殊召喚！」

ジェネクス・コントローラー 攻1400

金属製の顔に小さなタイヤの足が生えたようにも見える、声なき機械生命体。ジェネクスの原点にしてその核、コントローラーが青木の場に呼び出される。

「そして手札のこのカードはレベル7であるものの、ジェネクスをリリースする場合消費1体のみでアドバンス召喚することが可能。我が人生に光を差した、決して消えない不屈の太陽。たとえ幾たび沈も

うと、明日が来ればまた日は昇る。アドバンス召喚……さあ行きましよう、相棒！ソーラー・ジェネクス！」

ソーラー・ジェネクス 攻2500

ゆつくりと腕を伸ばし高く天を指した青木の頭上で、突如爆発的にオレンジの光が弾けた。眩く暖かい光の粒子を身にまといそこに現れたのは、すらりとした人型のジェネクス。両腕と背中には戦闘機の翼を思わせる意匠が取り込まれ、その胸の中央には太陽の光を受けて輝く黄金の炉心が無尽蔵とも思える光を放つ。

しかし、そのソリッドビジョンはどこか不安定だ。具体的にどこが、というわけではないが、微妙にその細部には通常よりも粗が見られる。カードそのものがボロボロであるせいか、読み取りに若干の不具合が生じてしまっているのだろう……過去に様々なカードを見てきた経験から、そう鳥居は推測する。

正直な話ソーラー・ジェネクス自体はさほどレアリティが高いわけでもなく、いまだ営業を続けている適当なカードショップにでも行けば、それこそワンコインでもっと状態のいいものが買えるであろう。それでも青木は、この1枚を自らの相棒と呼んだ。この傷ついた1枚こそが彼の人生を一変させた恩人であり、彼のデュエリストとしての第二の人生の象徴でもあるからだ。これは、社会の荒波の中で自分を信じる気持ちを失った彼にとつての心の拠り所。このカードと共に戦う時だけは、不思議と負ける気を感じなかった。

『ついに輝く太陽が、我々の頭上に昇ってしまいました！風、そして太陽。鋼鉄の兵団ジェネクスは、恐るべきことにその空の全てを手中に収めてしまったというのでしょうか！大いなる海に引き続き、偉大なる空を敵に回すこととなった魔界劇団。果たしてこの状況からどのように勝利という名のエンディングを導くのか、皆様どうか最後まで目を離さずにご鑑賞お願いします！』

しかし、それは鳥居も同じこと。青木が人生をカードに救われたというのなら、彼もまたその人生をカードに導かれた存在。物心ついたときから肌身離さずカードに親しみ、舞台をそれらと共に駆け回り、まるで生あるもののように接してともに成長してきた彼の半生こそ

が、たとえばどんな相手にどれほど追い詰められようとも最後の最後までこの演劇デュエルという自信の信じるデュエルスタイルを、そしてエンタメを捨てない確固たる自信とプライドの源だった。それにそもそも、まだデュエルは始まったばかりなのだ。

「通常魔法、サモン・ダイスを発動。ライフ1000を支払うことでサイコロを1度振り、その出た目に応じた効果を発動します。私の出す目は……3！よって私の墓地から先ほどリリースしたジェネクス・コントローラーをそのまま蘇生。そして永続魔法、マシン・デベロップを発動。このカードが存在する限り、互いのフィールドに存在する機械族モンスターの攻撃力は200ポイントアップします」

青木 LP4000↓3000

ジェネクス・コントローラー 攻1400↓1600

ソーラー・ジェネクス 攻2500↓2700

再び現れたコントローラー含め、2体のジェネクスのステータスが上昇する。それは数値こそわずか200にすぎないが、今この場では計り知れないほど大きな意味を持っていた。メロー・マドンナの守備力と拮抗していたソーラー・ジェネクスの攻撃力が、ほんのわずかにだがそのバランスを崩したのだ。

「バトルフェイズ。まずはジェネクス・コントローラーでコミック・リリーフに攻撃！」

『『ならばこちらも、コミック・リリーフのモンスター効果にてお相手いたしました。このカードが戦闘を行う際、彼の産み出す不可思議なギャグ補正の空間に相手をいざなうことでプレイヤー、つまり私を受ける戦闘ダメージは0となるのです！』』

玉乗りしたままぐるりと反転し、デュエルフィールドを駆けまわって逃げるリリーフに、そのタイヤを目一杯に回転させたジェネクス・コントローラーが追いつく。最後には途中でバランスを崩したりリリーフが短い両手を必死にばたつかせながらも派手な音とともに顔面から地面に激突したところに、勢いよくジャンプしたコントローラーがその背中へとのかかった。

ジェネクス・コントローラー 攻1600↓魔界劇団―コミック・

リリース 攻1000 (破壊)

「戦闘ダメージは入らずですか。それでも構うことはない、ソーラー・ジェネクスでメロー・マドンナに攻撃。ソーラーショット・HINODE!」

太陽の名を持つジェネクスの背部装甲がかすかな唸りを上げてゆつくりと開き、格納されていたソーラーパネルが表を向く。天井から降り注ぐ電灯の光を一身に吸収し、胸の炉心がひとときわ鋭く光り始めた。そしてソーラー・ジェネクスがその腕を前に突き出すと、肘から手首の部分にかけて巨大なレーザー砲がその内部から展開される。「撃てえっ!」

主の号令をトリガーとし、レーザーが破壊の光を解き放つ。腰に差した長剣を抜いてそれを正面から切り捨てて防ごうとするメロー・マドンナの抵抗も無尽蔵な光の奔流には耐えきれず、先に限界を迎えた剣がその手の中から弾かれる。そしてそのまま、女勇者の姿は光の中に消えていった。

ソーラー・ジェネクス 攻2700 ↓魔界劇団―メロー・マドンナ
守2500 (破壊)

「ああ、これは予想外の番狂わせです! 鋼鉄埋めつくす暴虐の空へと反旗を翻すべく立ち上がった今回の主役、勇者メロー・マドンナはしかし、天より降り注ぐ太陽の鉄槌の前にはかなくも力尽きてしまいました! それでは、今宵の演目はこのままバッドエンドにて終了してしまおうのか!?! いえいえ、ご安心ください。勇者とはすなわち英雄。とあれば、その英雄の心は決して挫けません。何度でも立ち上がり、勝利のために戦い抜くのです……そう、ペンデュラムの力によって! 無論言うまでもありませんが、メロー・マドンナはペンデュラムモンスター。フィールドから墓地へと送られる場合、墓地ではなくエクストラデッキへと送られます。正義求める不屈の魂に終わりなどありません。何度傷つき力尽きても、勇者は必ず立ち上がるのです!」

再びがら空きになった鳥居のフィールドの空白を埋めるように、朗々とした彼の声が響き渡る。いささかもその闘志に揺らぎがないことを示す言葉のリカバリーに、わずかに青木の表情が変わる。

「なるほど、どうやらあなたのことを私は誤解していたようです。これだけの観衆を前にしながら、まるで衰えないその自信。私があなたほどの年の頃には、決して持ち合わせていなかった……いえ、つまらない話でした。私は、これでターンを終了します」

『それではこれより私のターン、ドロー！』

彼の手札は、このドローを含め残り2枚。だが、まだ足りない。彼の今求めるカードは、手札にない。

『ならば、このターンは……私はライトPゾーンにスケール2、魅力あふれる魔法のアイドル！魔界劇団―プリティ・ヒロインをセットイング。これにて描かれしスケールは2と8、すなわちレベル3から7のモンスターを同時に召喚可能となりました。ペンデュラム召喚！』

彼のエクストラデッキに、表側で存在するペンデュラムモンスターは全4体。しかしリンクマーカーが1つも向いてない彼のフィールドにそこから呼び出せるのは、そのうちわずか1体のみ。そして彼がこの局面で選んだのは……フィールドが丸い影に覆われたかと思うと、体を開くことで空気抵抗を一杯に生かし、ふわふわとテントに手足が生えたような奇抜な団員が最初のターンと同じように降りてくる。

魔界劇団カーテン・ライザー 攻1100↓2200

ここで、彼にはもう1つの選択肢があった。彼のPゾーンにはいまだ、コミック・リリーフが生きている。適当にペンデュラム召喚を行い、直後にその効果を発動すれば青木の場合からソーラー・ジェネクスを奪い取ることもできたろう。その際にもう1体のコミック・リリーフを送り付けさえすればその効果……コントロールが移った際に元々の持ち主が自身のセットされた魔界台本を破壊できる強烈な能力を発動することも、十分に狙えたはずだ。

それでも彼がその選択肢を選ばなかったのには、いくつかの理由がある。まずソーラー・ジェネクス自体の効果がジェネクス専門であり、彼のデッキではその力をまるで発揮できないこと。またこのターンに何をしたらとところでディメンション・ゲートとその先に帰還するレ

アル・ジエネクス・ヴィンディカイトの布陣を突破し青木のライフを0にすることまでは不可能で、それならばペンデュラム効果の発動後に自壊してしまうリリーフをプレッシャーとしてこのままPゾーンに置いておくのも悪くない、そう判断したからだ。だが何よりの理由としては、あくまでデュエルを演劇として捉える彼自身のファイトスタイルにある。自他ともに認めるほどのエースモンスターを奪い取るのならば、それなりの下地と脚本を演出しなければならない。なんの脈絡もなかった相手のエースを寝返らせるような真似はしない、それが彼の美学だった。

『カーテン・ライザーの効果を発動!といってもすでに、その力のほどは皆さんもお分かりですね?デツキより魔界台本「火竜の住処」を墓地に送り、エクストラデツキから勇者メロー・マドンナをまたしても私の手札へと帰還。この帰還も本来ならば勝利の凱旋といきたいところでしたが、なかなかそううまくは参りません。死んだら終わり、逃げるが勝ちとも申します。永続魔法、魔界大道具「ニゲ馬車」を発動!カーテン・ライザー、そして私自身の身をこの馬車に預け、空の色が変わるよりも速いスピードでの逃避行へと移りましょう!』

鳥居の背後から突然に、どこからともなく現れた魔界の馬車がその蹄に紫の炎を纏いながら駆け抜けていく。その右端からは鳥居自身が、そしてその左端からはカーテン・ライザーが、同時にジャンプして小人の御者の両隣へと滑り込む。

奇想天外なプレイングに観客がどよめいたちようどその時、タイミングよくスピーカーの主もまた彼らのデュエルに目を移したらしい。驚愕の色を隠しきれない、すつとんきような実況が大きく響いた。

「決まったあーっ!Aブロック、準決勝は試合終了だ!強い、強すぎるぜチャンピオン!今年も優勝候補の大本命は格が違うってもんよ!さーって、お隣のBブロックは……な、なんだあ!?!彗星のごとく今年現れた期待の新人、鳥居浄瑠が、「BV」を利用して永続魔法に直接乗り込んでいるぞおっ!?!」

まず最初に彼が感じたものは、まるで雲の上にも乗っているかのように不安定で頼りない感覚だった。馬車のしつかりとした座り心

地はそこにはなく、いまにも自分の尻の下で消え失せてしまいそうな幻影の座席。

そして、その理由はわかっている。投影された粒子の固定化、質量の一次的増加。いまだ人類には早すぎた、世界を壊すソリッドビジョン……ブレイクビジョンが本来の力を発揮できていたならば、その感触すらも正しく見た目通りのものが伝わってきただろう。それを妨害し抑え込んでいるからこそその、この中途半端な実体化によるふわふわとした感覚。

しかし彼はそれを喜ぶべきか悲しむべきか、その判別がつかなかった。こうして質量を得たカードと共に彼自身のデュエルを行うことができるというのは、元劇団員としての彼の夢であった。しかしデュエルポリスとしての彼にとつて、今この状況は間違つても喜べるものではない。会場の中と外で彼自身、そして糸巻が今現在も「BV」妨害電波を2人がかりで垂れ流しているこの状況下にあつてさえ、こうして人間1人をどうにか支えられるほどのビジョンを生み出すほどに「BV」の力は強い。それはとりもなおさず、デュエルポリスとテロリストの技術の差を物語っているからだ。

「……くそっ」

今まさに完成へと近づいているかつての夢の実現を、その全てを壊すために今の自分はいはいる。「BV」の力を目の当たりにして、この仕事を選んだ時にはわかっていたはずの現実が再び彼の方を向く。誰にも聞こえないように、小さく吐き捨てる。歯を食いしばったその表情は、カーテン・ライザーの横に長い体が覆い隠してくれた。ぐっと力を入れて両目を閉じ、鋭く息を吸い、吐く。彼はどこまでもエンターテイナーであり、観客の前では絵に演者のあるべき姿を魅せねばならない。どうにか気持ち落ち着かせてカーテン・ライザーの影から飛び出し、青木の周りに円を描くよう走り続けるニゲ馬車の上に立ち、そのまま大きく両手を広げる。

「さあ、まだまだ勝負はここからです！朝に昇りし太陽は、夕には沈むが世の習い。ならばその時その瞬間を、皆様に見極めていただきましょう！私はここで今現在私自身が乗り込んでいる忠実なる大道具、

ニゲ馬車の効果を発動！1ターンに1度自分フィールドの魔界劇団1体を選択してこの馬車へと乗り込まずことで、次の相手ターン終了時までそのモンスターを相手の効果対象に選べない状態にします！』

そう言うなり、カーテン・ライザーの全身がニゲ馬車の炎と同じ紫のオーラに包まれる。そのオーラ自体はすぐに消えてしまったが、付与された耐性が消えることはない。

『これにてターンエンド……と、申し上げたいところですが、その前に最初の反撃を。バトルフェイズに移行し、カーテン・ライザーでジェネクス・コントローラーへの攻撃！』

攻撃宣言と同時にニゲ馬車がその向きを変え、青木の……いや、正確にはその横に佇む小さなジェネクス・コントローラーへと爆進する。無論それを操るのは、御者から一時的に手綱を受け取ったカーテン・ライザーだ。そして駆け抜ける勢いそのままに、コントローラーを跳ね飛ばす。

魔界劇団カーテン・ライザー 攻2200↓ジェネクス・コントローラー 攻1600 (破壊)

青木 LP3000↓2400

「ぐうぐうぐう……！しかしこの瞬間、マシン・デベロッパ及びソーラー・ジェネクスの効果が同時に発動！まずは機械族モンスターが破壊されたことで、マシン・デベロッパにはジャンクカウンタが2つ乗ります」

マシン・デベロッパ (0) ↓ (2)

「そして、ソーラー・ジェネクスの効果発動！私のフィールドからジェネクスが墓地に送られるたび、500ポイントのダメージを受けてもらいましょう。ソーラーシュート・NIC^ニHIRI^リN！」

太陽のジェネクスのソーラーパネルに、墓地に送られたコントローラーの魂が光となってまっすぐに向かった。そしてその光をまたしても吸収したソーラー・ジェネクスが、そのエネルギーを凝縮させることで額から細いものの力強い一筋の光線を放つ。いくら直進するニゲ馬車といえど、光よりも速く走ることは不可能。背後からみるみ

るうちに距離を詰めた光線は、座席に穴をあけつつ鳥居の体を突き抜けた。

鳥居 LP2800↓2300

『ぐっ……ですが今度こそターンエンド、ターンエンドです！』

軽い火傷の痛みが服を、そして胸を突き抜けて彼を襲う。しかし「BV」の効力が弱まっているうえに元のダメージ自体も500と微量、すぐに冷やしておけば跡が残るようなこともないときっぱりとその痛みを脳から遮断した。エンタメを行う演者として、舞台上で役としての演技ではなく自分自身の苦しみをあらわにすることは本来あってはならない。例え舞台上で骨が折れたとしても、それを客に悟られるようではまだ二流。彼はそう教わってきたし、それが正しいことだと思う。

「馬車に……いや、魔法カードに直接自分が乗り込んでデュエルとは、まったく恐れ入りました。しかし、いくら常識破りのことをしたとしてもデュエルには影響を及ぼさない、それだけで勝利を掴むことは不可能。私のターン、ドロ。通常魔法、マジック・プランターを発動。永続トラップ一枚をコストに、カードを2枚ドロ」

青木がカードを引く様子を、やはりあのカードが入っていたか、とニゲ馬車から冷静に観察する鳥居。となると、彼のデッキにはほかにも永続トラップが何枚か入っている可能性は高い。しかし、彼はここまでにまだ1枚しか永続トラップを使用していない。となると、確率的にもそろそろ他を引いてもおかしくない頃か？

「そしてディメンション・ゲートがフィールドから墓地に送られたことで、除外されていたヴィンディカイトは再びフィールドへと帰還。マシン・デベロップの効果により攻撃力アップ！」

レアル・ジエネクス・ヴィンディカイト 攻2400↓2600

「さらに私はここで、ジエネクス・サーチャーを通常召喚。そしてこのカードも機械族、よって攻撃力がアップ」

ジエネクス・サーチャー 攻1600↓1800

装甲に覆われていないむき出しの配線や、体のあちこちから飛び出るコードもそのままに上級ジエネクスと並んで召喚された、メインカ

メラの代わりらしき赤色ランプをゆっくりと回転させる機械の兵士。今にも機能停止してしまいそうなその体はしかし、そのフレーム丸出しの細い両足で会場の床をしつかりと踏みしめていた。

「バトルフェイズ。まずはジェネクス・サーチャーで、カーテン・ライザーに攻撃！」

サーチャーが赤色ランプを走り続けるニゲ馬車に向け、ぎこちない動きで小型ミサイルを放つ。だがそれよりも早く敵襲を察知したカーテン・ライザーが再び手綱を操り、いくつもの小爆発を巧みに潜り抜けてその発射元を再びニゲ馬車と共に引き潰した。

ジェネクス・サーチャー 攻1800(破壊)↓魔界劇団カーテン・ライザー 攻2200

青木 LP2400↓2000

「そしてこの瞬間、再びマシン・デベロッパ及びソーラー・ジェネクスの効果が発動。ソーラーシュート・NICHIRIN！」

マシン・デベロッパ(2)↓(4)

鳥居 LP2300↓1800

「さらに、戦闘によって破壊されたジェネクス・サーチャーの効果が発動。このカードが戦闘破壊された時、デッキから攻撃力1500以下のジェネクス1体を攻撃表示でリクルートできる。私が選ぶカードは、タービン・ジェネクス！そしてこのカードが表側で存在する限り、すべてのジェネクスの攻撃力は400ポイントアップ。そしてタービン自身もマシン・デベロッパの効果を受け、さらに攻撃力200ポイントアップ」

大量の蒸気とともに、文字通り回転し続けるタービンがその体の大部分を占めた更なるジェネクスがサーチャーの残骸から現れる。

タービン・ジェネクス 攻1400↓1800↓2000

ソーラー・ジェネクス 攻2700↓3100

レアル・ジェネクス・ヴィンディカイト 攻2600↓3000

『空の鋼鉄兵団、逃避行へと追いつきその先鋒を務めたのは攻撃力で劣るジェネクス・サーチャー！それを辛くも撃退したカーテン・ライザーですが、しかしそれさえも全てはその鋼鉄の手のひらの中で行

われた遊戯にすぎなかったというのでしょいか！この圧倒的な布陣を前に、どうするカーテン・ライザー！』

「リアル・ジエネクス・ヴィンディカイト、追撃のブローエネミー・スカイハイ！」

再び上空に浮かび上がった緑の戦闘機が、空高くからニゲ馬車周辺にいくつもの爆弾を落とす。しかし爆風で何度も転びそうになり、その熱であちこちに焦げ跡を作りつつも、どうにか炎に包まれてその歩みを止めることなくカーテン・ライザーたちはその爆心地からの脱出に成功した。

リアル・ジエネクス・ヴィンディカイト 攻3000↓魔界劇団
カーテン・ライザー 攻2200

鳥居 LP1800↓1000

『この瞬間、ニゲ馬車の更なる効果適用！ニゲ馬車がフィールドに存在する限り、私の魔界劇団はすべて1ターンに1度だけ戦闘によって破壊されません。さらに私が戦闘ダメージを受けたことでプリティ・ヒロインのペンデュラム効果発動、メルヘンチック・ラブコール！相手モンスター1体を選択し、その数値だけ攻撃力を永続的にダウンさせます。キュートな彼女の愛の魔法で、太陽すらも包み隠してみせましょう！』

ニゲ馬車について回っていた光の柱の片方で、魔法少女が杖を振るう。無数のカラフルな星型弾がソーラー・ジエネクスの周辺を包みこむと、その黄金の輝きがほんのわずかに弱まった。

ソーラー・ジエネクス 攻3100↓2300

「無論、ここでその効果を使うことも承知の上のこと。攻撃力が下がろうと、いまだソーラー・ジエネクスの攻撃力はカーテン・ライザーを上回る。攻撃せよ、ソーラーショット・HINODEE！」

またしてもソーラーパネルを展開したソーラー・ジエネクスが、その勢いで体の周りを包む星型弾を弾き飛ばす。自由になった太陽が再び腕を伸ばしレーザーを放つと、その一撃は今度こそ回避に失敗したニゲ馬車の中央を打ち抜いた。突然の衝撃から鳥居はニゲ馬車の背にしがみついて持ちこたえたものの、カーテン・ライザーの方は急

停車の衝撃に耐えきれず吹き飛ばされて退場してしまう。

ソーラー・ジエネクス 攻2300↓魔界劇団カーテン・ライザー
攻2200(破壊)

鳥居 LP1000↓900

「魔界劇団が戦闘によって破壊されたこの瞬間、手札からメロー・マドンナの効果を再び発動！歌姫の勇者メロー・マドンナは、味方の危機を見捨てはしません。正義のために立ち上がり、三度この場に参上します！」

地面にだらりと垂れたニゲ馬車の手綱を、どこからともなく現れた女勇者が優しく手に取った。時同じくしてその馬たちもレーザーの衝撃から立ち直り、礼儀正しくその新たな御者の指示を待つ。ひらりと華麗な動きで空いた座席に飛び乗ったメロー・マドンナが3体ものジエネクスを横目に見ながら手綱を引くと、再びその蹄に魔界の炎をともしてニゲ馬車は走り出した。

魔界劇団—メロー・マドンナ 守2500 攻1800↓2100

「確かに守備表示ならば、タービン・ジエネクスでの自爆特攻も不可能……ですが、まだ私のターンは途中。このメインフェイズ2にマシン・デベロッパの更なる効果を発動。このカードを墓地に送ることで、その時に乗っているジャンクカウンターの数以下のレベルを持つ機械族モンスター1体を私の墓地から蘇生。ジャンクカウンターの数は4、よって私が選ぶのはレベル3のジエネクス・コントローラー」

ジエネクス・コントローラー 攻1400

タービン・ジエネクス 攻2000↓1800

ソーラー・ジエネクス 攻2300↓2100

リアル・ジエネクス・ヴィンディカイト 攻3000↓2800

「ともに機械族モンスターのタービン・ジエネクス及びジエネクス・コントローラーをそれぞれ右、そして下のリンクマークにセット。声なき者の祈りに応え、勝利と未来が今その両腕に繋がれる。追撃のリンク召喚、機関重連アングラー・ナツクル！」

それは、途方もなく巨大な機械の両腕を生やす列車型モンスター。文字通り行く手にあるはずの勝利と未来をすべてこの手でつかみ取

ると言わんばかりの質量で迫るそれが、ソーラー・ジエネクスの正面にくるようにして鳥居の前に立ち塞がる。タービン・ジエネクスがフィールドから消えたことで2体の最上級ジエネクスの攻撃力はさらに低下するが、それでもなお太陽のジエネクスはその身を輝かせた。

機関重連アングラー・ナツクル 攻1500

ソーラー・ジエネクス 攻2100↓1700

レアル・ジエネクス・ヴィンディカイト 攻2800↓2400

「今、私のフィールドからは2体のジエネクスが墓地へと送られた。しかし、そのタイミングが同時であったためにダメージは1度しか与えられない……ソーラーシユート・NICHIRIN!」

鳥居 LP900↓400

「ぐぐぐ……っ!い、いよいよ追い込まれてまいりました!しかし、デュエルとはすなわち最後の最後まで結末の見えない台本なき演舞。その結末を直接見届けるまではどのようなどんでん返しが何度起こるかもわからない、それゆえに面白い。どうか最後の最後、おそらくは次の私のターンまで、どうか目を離さずにお待ちください!」

「このターンで終わらせられなかった私の言えたことではないが、まだそこまで言い切ることができるとは。それが若い力というものか……だとしても、私にも勝つ理由がある。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

心底感心したように頷き、最後の手札を伏せる青木。おそらくは、次のターンで勝負が決まる……それは、互いにとつての共通認識であった。このドロウで鳥居が何を引くか、それによってすべてが決まる。いよいよ長い戦いもクライマックスに至ったとあって、観客の視線が彼の手元を集まる。

「私のターン、ドロウ……来ました!魔法カード、デュエリスト・アドベントを発動!私のPゾーンにカードが存在することをトリガーに、デッキからペンデュラムと名の付くカード1枚をサーチします!私が選ぶのは通常魔法、ペンデュラム・ホルト!このカードは私のエクストラデッキに表側のペンデュラムモンスターが3種類以上存在

するときのみ発動でき、このターン他の効果によるドロワーが行えなくなる代わりに2枚ものドロワーを可能にいたします。続けて、ドロワーっ!」

サーチカードを經由してのドロワーソース。土壇場で手にした2枚のカードに目を走らせ、大きく息を吸う。

「『それでは皆様お待ちかね、いよいよ第二幕のクライマックスシーンがやってまいりました。この圧倒的に不利な状況を、いったいどのよう覆すのか? まずはお決まり、ペンデュラム召喚から参りましょう。スケールはまだ組み合わせられたままの2と8、よってレベル3から7のモンスターが召喚可能! 手札より満を持して現れよ、栄光ある座長にして永遠の花形! 魔界劇団―ビッグ・スター!』」

どこからともなく射し込んだスポットライトの光に照らされて、上空高くからスタイリッシュなポーズを決めつつ名優、ビッグ・スターが走り続けるニゲ馬車の上に着地する。その座席の上で左右をメロー・マドンナとビッグ・スターに挟まれる格好となった鳥居が、指をパチンと打ち鳴らす。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

「『そして、ビッグ・スターの効果発動! デッキより台本1冊を選択し、私のフィールドへとセットいたします。選び抜かれし演目の名は……ここは王道を行く、私の一座で最も人気の高いあの演目といたしますよう。魔界台本「魔王の降臨」をセット!』」

ビッグ・スターがニゲ馬車に座り込んだまま横に手を伸ばすとその手の中に光が集まり、次の瞬間には分厚い1冊の台本が握られる。まさにそれを開こうとしたタイミングで、青木が最後の抵抗に打って出た。

「この瞬間に永続トラップ、デイメンション・ガーディアンを発動。私のフィールドで表側攻撃表示のソーラー・ジエネクスを選択し、このカードが存在する限り選択したモンスターは戦闘及び効果によって破壊されない!」

「『なるほど、太陽は沈まない、というわけですか。ですが、もし私がそれを待っていたとしたら、どういたしますか?』」

「な、なに？」

困惑と同時にかすかな後悔が、青木の表情をよぎる。その姿が、ニゲ馬車の上にいる鳥居からははっきりと見えた。まさに彼が狙っていたのは、あの唯一の不確定要素であった伏せカードが表を向くこの瞬間。この瞬間、彼の勝利は決定した。

「あなたにとってそのソーラー・ジエネクスは、相棒と呼ぶほどに大切なモンスター。そして先ほどあなた自身が使用していたマジック・プランター。この2つの要素が明らかになった時から、想像はついていました。おそらくあなたの伏せカードは永続トラップ……それもソーラー・ジエネクスを蘇生させるリビングデッドの呼び声、あるいは破壊から守る安全地帯のように防御的なカードだろうとは感じていましたが、どうやら当たりだったようですね」

「私の伏せカードを読んでいた、と？」

「ええ。ですがそれはただの予想であり、確信には至る証拠はない。そこで、ビッグ・スターには一芝居打っていたいただきました。レベル7以上の魔界劇団が存在するときには相手からのチェーンを許さない魔王の降臨をセットすれば、もしその伏せカードがフリーチェーンで発動できるタイプのカードならばその発動タイミングはセットから発動までのほんのわずかな隙間、まさにこの瞬間しかありませんからね。とはいえかなり綱渡りでしたよ、もしソーラー・ジエネクスをフィールド外へと逃がすデイメンション・ゲートのようなカードを伏せられていたら、私としてもかなり困った状況に追い込まれていました」

隣で手綱を取る女勇者に合図して、ニゲ馬車をその場に停止させる。馬車の上と下でわずかに向かい合い、最後の手札をデュエルディスクに置いた。

「それではここまでの激闘に敬意を表し、ジエネクスの皆様を私たちの劇場へのご案内いたしましょう。フィールド魔法、魔界劇場「ファンタステイックシアター」を発動いたします！」

そう宣言した瞬間、コウモリをかたどったオレンジ色の風船が一斉に空に浮かんだ。風もないのに同じ方向へと流れていく風船たちの

向こうでは花火が上がリ、クラッカーが弾け、どこからともなく楽しげな音楽を奏でる楽団の音色が会場に響く。スポットライトが舞台を照らし、色とりどりのネオンが彩る。

ここはまさに、魔界劇団による魔界劇団のための劇場。糸巻の領土がアンデットワールドというのなら、このファンタステックシアターこそはまさしく彼の本拠地だった。

「……………これは……………」

「『それでは皆様お待ちかね。リバーズカードオープン、魔界台本「魔王の降臨」！攻撃表示で存在する魔界劇団の数までフィールドのカードを選択し、魔王の暴威でそのまま破壊！ヴィンディカイト及びアンガー・ナツクルのご両名は、これにて退場と相成ります』」

女勇者の格好のままのメロー・マドンナの横で、ビッグ・スターが以前と同じく漆黒のマントを体に巻き付ける。再び走り始めたニゲ馬車による人馬一体の突撃は緑色の戦闘機が張ったバリアをもものともせずに突き破り、そのままの勢いで隣にいた腕の生えた列車も跳ね飛ばした。

「『そしてあなたのフィールドからジェネクスが墓地に送られたことで、ソーラー・ジェネクスの効果が発動します』」

太陽のジェネクスが、まるで鳥居の書いた台本に従うかのように正確なタイミングでレーザーを放つ。狙いすまして放たれた、本来ならば彼のわずか400しか残っていないライフを奪い取るほどの一撃。しかし、それが彼の体を射抜く時はついに訪れなかった。彼がその寸前にニゲ馬車の足元から取り出して体の前で構えた、1冊の魔界台本。分厚いそれを最後まで貫くことができず、レーザーそのものが霧散したのだ。

「『ですが、ファンタステックシアターの特殊な能力を適用。ペンデュラム召喚された魔界劇団が私のフィールドに存在する限り、あなたの発動するモンスター効果は1ターンに1度だけ「相手フィールドにセットされた魔法・罫カード1枚を選んで破壊する」と書き換えられるのです。私のフィールドに伏せカードはわずか1枚、それがこの魔界台本でした。そしてこの瞬間、たった今相手によつて破壊された

この台本……我々にとつても最高にして至高の演目、魔界台本「魔界の宴^{エンタメ}咤女」の効果を発動!」

ステージの両端から白いスモークがたかれ、色とりどりのライトがまぶしくフィールドを照らす。ニゲ馬車の上では女勇者がその剣を抜いてすらりと高く上に掲げると、その合図に応え大きいものから小さいものまでいくつもの影がスモークの中から飛び出した。

「私のエクストラデッキに表側表示の魔界劇団ペンデュラムモンスターが存在し、フィールドにセットされた魔界台本が相手の効果で破壊されたその瞬間。その1冊につづられたもうひとつの筋書に従い、タイトルこそ同じなれどそれ以外は全くの別物、ここでは魔界の宴咤女を開演いたします!その内容はすなわち、私のデッキより魔界劇団を任意の数だけ選択しフィールドへと一斉に特殊召喚する……まずは怪力無双の剛腕の持ち主、魔界劇団―デビル・ヒール!」

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000

「続いては舞台駆けまわる若きシヨーマン、魔界劇団―サツシー・ルーキー!」

魔界劇団―サツシー・ルーキー 攻1700

「そしてまばゆく煌めく期待の原石、魔界劇団―ティンクル・リトルスター!さあ皆様、万雷の拍手をもって彼らをお迎えください!」

魔界劇団―ティンクル・リトルスター 攻1000

割れんばかりの拍手を浴びながら、3体のモンスターがフィールドに並ぶ。カゴぶを作ってアピールするデビル・ヒールや特に意味のないジャンプからの空中回転を決めてみせるサツシー・ルーキーに対しティンクル・リトルスターのみはおずおずとニゲ馬車から恥ずかしげに小さく手を振るのみと、その反応は三者三様。そして一通りのアピールを終えたところで、デビル・ヒールがその大きな手をぐわつと開き衝撃波を放つ。

「『デビル・ヒールのモンスター効果発動、ヒールプレッシャー!このカードが場に出た際に相手モンスター1体を選択し、私の場の魔界劇団の数だけその攻撃力をターンの間だけダウンさせましょう。今の私のフィールドには魔界劇団が計5体、よってソーラー・ジェネクス

の攻撃力は5000ポイントダウン!』

ソーラー・ジエネクス 攻1700↓0

『さて、どれほど楽しい時間でも、いつかは必ず終わりが訪れるもの。長いようで短い第二幕も気づけばすでにフィナーレの瞬間、その幕はやはり勇者の手によって下ろしていただきましょう。魔王の降臨、魔界の宴咤女が墓地に送られたことで、メロー・マドンナの攻撃力はさらに200ポイントアップいたします』

魔界劇団―メロー・マドンナ 攻2100↓2300

ニゲ馬車から飛び降りたメロー・マドンナが、剣を手にスクラップ寸前のソーラー・ジエネクスへと近づいていく。胸の炉心もすっかり勢いを弱め、辛うじてかすかな輝きを見せるのみ。先ほどの拍手とは打って変わって静まり返った会場の中心で、その切っ先がゆつくりと落日の太陽へ向けられた。

『では、最後のバトルフェイズ。魔界劇団―メロー・マドンナで、ソーラー・ジエネクスに攻撃です』

言葉は、もはや必要ない。静寂の中で放たれる女勇者の剣のひと突きが、炉心の中央を正確に貫いた。

魔界劇団―メロー・マドンナ 攻2300↓ソーラー・ジエネクス

攻0

青木 LP2000↓0

『ハア、ハア……それでは魔界劇場第二幕、これにて終演と相成ります。大いなる海、そして偉大なる空へとその名を刻んだ魔界劇場第三幕、開演をしばしお待ちください!』

特大ダメージでのワンショットキルを狙いに来ていた1戦目とは打って変わって、細かなダメージを積み重ねての勝利を狙われた今回の戦い。辛くも勝利したものの、この2つの戦いを経たその代償は決して軽くない。あちこちにできた軽度の火傷痕、そして打撲……どこもかしこも痛みを訴える体を強いて動かし、観客の前でゆつくりと一礼する。そのまま裏手に引っ込もうとしたところで、倒れたままの青

木がわずかに呻く様子が彼の目に入った。

「う、うう……」

「ほれ、立てますか？」

さすがに見捨てるわけにもいかず、いいから早く休ませろとストライキを起こす全身を無理に引つ張ってそちらへと向かわせる。ただでさえ頼りなく見えたそのスーツ姿の中年の姿は敗者となった今よりいっそう小さく、そして弱いものに見えた。

差し出した手をどうにかといった様子で握り返され、そのまま上に引つ張って親子ほどに年の離れた男の体を起こす。

「ああ、ありがとう。このデュエル私の完敗だ、君に敬意を表そう」

そう言っただュエルディスクに乗ったままのカードを一枚ずつ取り外しては、自らのデッキに戻していく青木。最後に残った一枚、傷だらけのソーラー・ジエクスを大切にそと眺め、愛おしげに指で撫でるその姿を前に、鳥居は知らず知らずのうちに一礼していた。それと同時に、なぜあの口が悪い女上司がこの男に対してはいつもの毒舌も控えめだった理由も理解する。

彼女は鳥居に言わせれば、彼のタイプでこそないものの客観的にはまあ見てくれだけはそれなりの三十路で、口も性格もお世辞にもいいものではない。しかし、彼女の人を見る目に関しては彼も一目置いていた。

「……？」

「俺の方こそ、あなたに敬意を表させてください。あなたのカードを愛する心は、確かに本物です」

「そうか。ありがとう。決勝戦、影ながら応援しているよ」

今度は青木の側から差し出された手を、力を込めて握り返す。この裏デュエルコロシウムも、ついにあと一戦を残すのみ。

ターン7 傾国導く闇黒の影

「ハア、ハア、ハア……クソツ」

夜の月に照らされて、肩で息をしながらボロボロの体で前方を睨みつける赤髪の女——糸巻。その口の端の煙草は彼女の呼吸が乱れている証拠に、不規則に先端の火が強まっては弱くなりを繰り返していた。特にひどく痛むらしい右肩を起動中のデュエルディスクをつけた左手で庇いながらも決して膝をつこうとはしないその表情は、まさに手負いの獣といった様子だった。

「おやおやおや、あなたこんなに弱かったでしたっけ？家紋町の守護神、デュエルポリスの古株……元プロデュエリスト、『赤髪の夜叉』さん？」

「……はっ、最初のひとつは初耳だな。それに精々抜かしてな。公務執行妨害、暴行、凶器準備集合罪、まだまだ罪状盛りだくさんのお得セツトだ。泣いて謝ったつてしよっ引いてやるからよお！」

言い返す口調だけは威勢がいいが、もはや逆転の目が薄いことは彼女自身がよく自覚していた。まだ可能性はゼロでこそないが、このままではその残り火が費えるのも時間の問題だろう。

なぜ、なぜ、こうなってしまったのか。それを語るには、ほんの少し時間を巻き戻らねばならない。

ソーラー・ジエネクスによるバーン効果を逆手に取る形で、傷だらけとなりながらも鳥居が2勝目を挙げたちょうどその時——
外。蜘蛛とのデュエルを終えた糸巻は試合中のドームを中心に円を描くように動き、直線上で1キロほど離れた自然公園でいつも通りに煙草をふかしていた。常人ならばとうの昔に胸焼けして煙を見るのも嫌になるようなハイペースだが、1カートンをわずか3日で吸い尽くすほどに重度のヘビースモーカーである彼女の肺は、この程度のこととで音を上げる様子はない。

(さて、そろそろか?)

心の中で呟き、ここまで乗ってきたバイクの元に向かう。蜘蛛とのデュエル後から会場と一定の距離を保ったまま適当に走っては一服し、追っ手の気配がなければもう少し走りまた一服する。その繰り返しだ。今回の裏デュエルコロシウムは、参加メンバーのネームバリューからいってもかなりの金が動く。当然、追っ手があの蜘蛛1人で済むはずがない。まして彼女は、その蜘蛛を既に返り討ちにしていくのだ。

「こんばんは。随分好き放題やってくれましたねー、おかげでこっちはえらい騒ぎですよ」

「おう、遅かったじゃないか。ようやく2人目の……」

はたして、彼女の予感的中した。背後から掛けられた、軽い調子の声に応え振り返る……その寸前、膨れ上がった背後の殺気に彼女の体はほぼ無意識のうちに動いていた。軽口を途中で切り、煙草の始末をする暇もなく地面に転がって前転、声の主から距離をとる。

その直後、先ほどまで彼女が立っていた位置に巨大な、銀色の槍のようなものが突き刺さった。いともたやすく地面を貫いたそれが直撃していたら、明日の朝刊は一面記事の内容をすべて差し替えることになっただろう。さらに続けて2回ほど、転がった彼女の後を追うように同じような何かが突き刺さる。

「こんの……!」

さらに1回転してようやく片膝で起き上がり、声の方を睨みつけながらもデュエルディスクを構える。突然現れた得体のしれない凶器、こんなものを可能にするのは「BV」しかありえない。だがわからないのは、今の実体化の力強さだ。彼女のデュエルディスクは、間違いなく妨害電波を流し続けている。にもかかわらず、一撃で地面を貫くほどの質量が召喚されている。ということとは……しかし、彼女に深く考えているだけの時間は与えられなかった。

「うーん、やっぱり反応が早いですね。今ので終われば、私も色々と楽だったんですがね」

サク、サク、とかすかに土を踏む音とともにこちらに歩いてきたのは、すらりとした長身の男。口元はにこやかに笑みを浮かべているも

のその目は細く、その奥にある瞳はまるで笑っていない。

この男、彼女にとっては知った顔だった。それも、できれば会いたくない部類の。

『おきつねさま』……随分久しぶりだね。てっきりその辺でくたばっててくれたもんだとばかり思ってたよ」

「ええ、お久しぶりです。貴女の方こそ、そんな恥知らずな職でまだ生き恥さらしてたんですか？」

おきつねさま、とは無論、この男がかつてプロデュエリストで活動していた時の異名である。本名を巴光太郎^{ともえ}。当時から不仲だった彼と糸巻の関係は彼女がデュエルポリスに再就職した時点で決定的に破壊されつくし、いまやその間には2度と埋まらず互いにその気すらもない溝が深々と横たわっている。それは時間とともに修復されるどころかますます深く広くなり、もはや憎しみと呼ぶ方がふさわしいほどに変化している。

そして彼女にとっては厄介なことこの男、目的のためならば一切の手段を選ばないことで当時から悪評が広まっていた。今の攻撃にしても、あれは断じて演技ではない。あれで彼女が死ねば面倒が一つ省けて楽だった、その程度にしか感じていない。はじめに声をかけたのも、不意打ちひとつで即死させるのではなくそもそも誰が自分を殺したのか、それを本人に理解させるため以外の目的はない。全く気付かないうちに痛みを感じる暇もなく死んでしまっただけ、彼の恨みが晴らせないからだ。

総じて彼は危険人物であり、極めて面倒なことに腕の立つ狂人でもあった。

「……どこでテロやってんのかと思ったら、まさかこの町に来てるとはね。どれ、そろそろお縄につく気になったかい？」

「貴女こそ、10年以上前にも私言いましたよね？そろそろ死ね」

口元の笑みは絶やさずに手元のデュエルディスク、そのモンスターゾーンにパチパチパチパチと流れるような動きで4枚のカードをセツトする。一番右端にはすでにカードが置かれている……おそろく、最初に不意打ちを仕掛けてきたモンスターの物だろう。そして

「BV」により彼の周囲に一斉に実体化したのは、計4体の白面金毛を持つ美しい妖狐……鬼火とともに現れる9の尾を持つ大妖怪、九尾の狐。それらが一斉にその尾をゆらりと持ち上げ、振り下ろされる槍の嵐のように彼女めがけてその先端を突き刺しにかかった。

「こんのリアリストが、舐めてんじゃねえ！」

ここで彼女が並のデュエルポリスであれば、自身のデュエルディスクが放つ妨害電波がなぜ通用しないのかを理解する暇もなく串刺しの肉片となっていただろう。しかし彼女は少なくとも並ではなく、なによりも目の前のこの男のことをよく知っていた。おきつねさまが動くということは、なんらかの勝算あるいは理由があるときに他ならない。しかし1体につき9本、合計36本もの鋼鉄のように鋭く尖った尾からはいくら彼女の身体能力をもつてしても逃れきれないだろう。そこで彼女が見出したのは、自身のデュエルディスクだった。咄嗟にどれともつかぬカード1枚を手に取り、モンスターゾーンに置く。理由はわからないが、あの「BV」はこれまでの物とはわけが違う。ならば、当然その恩恵は彼女も受けることができるかと踏んでのことだ。果たして彼女の目の前に、腐肉に鬼火を纏う黒き竜が現れる。

「来な、レッドアイズ・アンデットネクロドラゴン真紅眼の不屍竜！」

開いた口から体内に蓄積された腐敗ガスを煙草の煙めいて吐き出しつつ、堕ちた竜がその腐肉にへばりつく鱗で36本もの九尾の尾を弾き返す。ギリギリの賭けではあったが、彼女のカードもまた「BV」処理を経て一時的な実体化に成功したのだ。

そして訪れる、一時的な膠着。先にカードを引つ込めたのは、巴の方だった。

「はいはい。仕方ありませんね、実力で片付ければいいんでしょ？」
面倒そうに肩をすくめて5枚のカードを回収してポケットに入れ、代わりに自らのデッキを取り出してデュエルディスクに改めてセットする。それを見た彼女も攻撃を防いだ真紅眼の不屍竜を取り出し、再びエクストラデッキに裏側で戻す。彼がカードを引つ込めた際に真紅眼に攻撃させれば、確かにこの一件のすべては終わるかもしれない……しかし彼女がそれを良しとしないことは、お互いに知り尽くし

ている。彼女にとってカードは断じて殺人の道具などではなく、そのために「BV」を利用することはデュエルポリスの道を選んだ彼女の全てを否定することに他ならない。

それがわかっているからこそ、彼もわざと彼女の目の前で隙を作るような真似をしてみせたのだ。口先だけのくだらない綺麗事に囚われて最も合理的な手段をとれないでいる彼女にその矛盾を突き付け、嘲笑うために。

「おう、余計なことしないで初めからそうすりやいいんだよ。アタシはいつでも受けて立つぜ？アタシと違って、アタシは負ける気なんてさらさらないからな」

「貴女のそのいちいち余計な一言を挟まないと気が済まない性分、私は大嫌いなんですがねえ」

「知ってるに決まってるだろ？わっかんないかな、だーかーらーやっつてんだよスカポントン。それともうひとつ、アタシもアタシのその厭味ったらしくて胡散臭い態度は昔っから生理的に受け付けないんだわ」

「貴女の方こそ、ヤニ臭いところも昔から変わりませんね。もういい歳でしょうに」

「おう、仮にも女に向かって真正面から歳の話たあい度胸だな。安心しな、裁判の時はアタシの権限の全てを使って、アタシの罪状に猥褻物陳列罪もおまけで付けといてやるよ」

互いに軽口を叩きあうような気軽さで挑発を繰り返しながらも、その目はともに全く笑っていない。次第に張り詰めていく空気が限界を迎えた時、同時にデュエルディスクを構えた。

「デュエル！」

「アタシが先攻だ、不知火の隠者を召喚！」

不知火の隠者 攻500

先攻を取った糸巻が吠え、「不知火」のみならず【アンデット族】全般の起動エンジンといっても過言ではない山伏のモンスターを召喚した。アンデット使いの彼女にとって、このカードを初手に引けたことはスタートダッシュのアドバンテージ面で一気に優位に立つこと

と同義であり、それほどに大きな意味を持つ。

しかし、同じく元プロである巴がそれをただ許すはずもなく。

「おっと、ならそこで増殖するGの効果を発動。隠者棒立ちエンドなんてつまらない真似、当然できるわけがないですよね？」

「増G……ケツ、だったら次善の策でいかせてもらおうか。アタシはこのまま不知火の隠者の効果を発動、自身をリリースすることでデツキから守備力0のアンデットチューナー1体を特殊召喚する。来な、ユニゾンビ」

「なら私も、貴女がモンスターを特殊召喚したことで増殖するGによりカードを1枚ドロ」

ユニゾンビ 攻1300

同じくアンデット使いならば誰もがその名を知る、二人三脚するほそつちよとでぶつちよの仲良しゾンビ2人組。そのボロボロになった服の隙間から1匹の黒光りする虫が這い出し、フィールドを飛んで巴の手元へと吸い込まれ1枚のカードに変化する。

「やら(こ)いで、ユニゾンビの効果発動。アタシの手札1枚を捨てて、フィールドに存在するモンスターのレベルを1上げる。ユニゾンビを対象に屍界のバンシーを捨て、そのレベルを4に。そのままバンシーの効果を発動！このカードを除外することで、デツキからアタシの領土を呼び起こす。生あるものなど絶え果てて、死体が死体を喰らう土地……アンデットワールド、発動！」

その瞬間、公園の空気が一変した。2人を取り囲む木々は不自然にねじれ、枯れ、その表面に苦悶の表情にも見える瘤を作り出す。澄んだ夜の空気を駆逐するようにあちらこちらから瘴気が吐き出され、急速にぬかるんでいくその足元では半分骨になった虫が蠢き、血のように赤い沼が沸き上がる。

ユニゾンビ ☆3↓☆4

「相も変わらず、汚らしい」

「自己紹介なら他所でやってくれ、あいにくこっちは聞き飽きてんだ。ユニゾンビのもうひとつの効果発動！デツキからアンデット族を墓地に送ることで、フィールドに存在するモンスター1体のレベルを1

だけ上げる。当然これにもユニゾンビを選択し、デッキからグローアップ・ブルームを墓地へ。この瞬間、ブルームの効果発動！」

ユニゾンビ ☆4↓☆5

本来は下級モンスターに過ぎないユニゾンビが、2つの効果の重ね掛けによりレベル5にまで成長を遂げる。

が、糸巻の狙いはそんなところにはない。彼女の足元で沼地がもそもぞと揺れ、瘴気と共に血のように赤い一輪の花が開く。この生なき世界にはあまりにも不釣り合いな、咲くはずのない場所に開いた仇花。その花卉から放たれるかすかに紅い色のついた芳香が、アンデットワールドに新たな活気をもたらす。

「グローアップ・ブルームが墓地に送られた場合、このカード自身をゲームから除外することでデッキからレベル5以上のアンデット族モンスター1体を選択し、そのカードをサーチできる。だがアンデットワールドが存在する場合、サーチの代わりにそのモンスターを特殊召喚することもできる。さあ、ひれ伏しな生者ども！ここじゃあ現世の威光だなんて、クソの役にも立ちやしない。死霊を統べる夜の主、死霊王 ドーハスーラ！」

ずるり、とどこかで音がした。常に薄暗いアンデットワールドで、確かに何か巨大なものが動く気配がする。それは、巨大な蛇の下半身。それは、右手に握る黄金の杖。それは、両肩を守る髑髏の鎧。それは、朽ちて肉なき龍の顎。そしてその上で不気味に光る、冷たく知性を湛えた瞳……彼女のエースモンスターの1体にして時に追撃、時に滅殺とその気のむくままにあらゆる死霊を手玉に取る、アンデットワールドに潜むもうひとりの主。その名を、ドーハスーラと人は呼んだ。

死霊王 ドーハスーラ 攻2800

「なるほど。では増殖するGにより、もう1枚カードを引かせてもらいます」

「おう、引け引け。精々それで足掻いてみせな、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

余裕ぶった態度……だが内心、糸巻は冷や汗をかいていた。はつき

りいつて今の彼女の初期手札は、あまり良いとは言えない状況だった。カードパワーが低いわけではない。実際アンデットワールドとドーハスーラ、そしてこの2枚の伏せカードは並大抵の相手であればそのまま蹂躪できるほどの布陣だろう。だが、目の前の男が相手となるとやや話が変わる。彼女の出した4枚のカードに、彼のエースモンスターへの有効打は存在しない。まして今回は、増殖するGによつてすでに2枚の追加ドロウを許してしまっているのだ。しかしそんなことはおくびにも出さず、不敵な笑みを浮かべて次のターンに備えてみせる。

「では私のターン、ドロウ。そうですね……では、パラディン・オブ・フェルグラント 巨竜の聖騎士を召喚」

巴が先陣切つて召喚したのは、神聖な光に輝く鎧と剣を身につけた青年剣士。しかしその両足が地につくかつかないかのうちに、生身の体はみるみる腐り落ちていく。

巨竜の聖騎士 攻1700 戦士族↓アンデット族

「本来ならば召喚時の効果として私はデッキまたは手札からレベル7、8のドラゴン族1体をこのモンスターの装備カードにできるのですが、今はアンデットワールド適用中。下手に動くとき女の王様が目を光らせていますからね。効果は使わないでおきましょう。代わりに魔法カード、テラ・フォーミングを発動。この効果によりデッキからフィールド魔法1枚をサーチします」

「ちっ、引いてやがったか」

「それはお互い様でしょう？あなたの領土だけで戦うのは不公平というものですからね、ここはひとつ私の世界にも来ていただきましょう。サーチしたフィールド魔法、闇黒世界―シャドウ・ディストピアを発動！」

薄暗いアンデットワールドに、さらに濃い闇が訪れた。歪んだ木々の落とす影がふわりとその場で立ち上がり、悪意にまみれた表情の影法師となって死霊の間を駆け抜ける。聞いているだけで不安を煽るような嘲笑の音が四方八方から遠く、近くに反響して鳴り響き始める。死霊の土地であるアンデットワールドとはある意味でどこより

も近く、そしてどこよりも遠いはずの光なき世界。ここは闇黒に満ち溢れた、彼の最も得意とする空間。

「シャドウ・ディストピア……」

「ええ。っ存じでしょうが、このカードが存在する限り互いのフィールドに存在するすべてのモンスターは闇属性となります。ただでさえ種族を上書きされているというのに、属性までいじられてはもはや原形ありませんね」

巨竜の聖騎士 光↓闇

「さて、ですがそんなことはどうでもいいです。私は魔法カード、おろかな埋葬を発動。デッキからモンスター1体、九尾の狐を墓地に送ります」

「……待った！この瞬間にリバースカードオープン、バージェストマ・カナディア！相手フィールドのモンスター1体、巨竜の聖騎士を選択して裏側守備表示になってもらう！」

巨竜の聖騎士 攻1700↓???

「ふうむ、なるほど？ま、いいんじゃないですかね。私は続けて、墓地に存在する九尾の狐の効果を発動。私のフィールドのモンスター2体をコストとしてリリースし、墓地から自身を蘇生。この瞬間にシャドウ・ディストピアの効果により、私のモンスター1体の代わりに相手フィールドの闇属性モンスター1体をリリースします。ドーハスーラ及び巨竜の聖騎士の魂2つを生け贄とし、黄泉より還れ九尾の狐！」

ドーハスーラの周りを、どこからともなくわらわらと群がってきた実体のない影法師が取り囲んだ。影に飲まれた死霊の王は少しずつ、少しずつ、その体色が濃くなり輪郭がぼやけ、やがて本体の存在しない巨大な1つの影法師と化していった。影だけとなったかつての王が地面に溶け崩れると、墨のように黒いその闇の中からぬるり、と9本の尾を持つ白面金毛の大妖怪が口が耳まで裂けているかと思まごうような邪悪な笑みを浮かべつつ黄泉よりフィールドへと還ってきた。

九尾の狐 攻2200 炎↓闇

そして、彼女にはこのカードに嫌というほど見覚えがある。たった今彼女の命を物理的な方法で狙ってきたのがこのカード、というだけではない。それ以前の彼女がプロだった際にも、彼の試合が組まれるたびにその狐顔を見てきたモンスターだ。

何度死してもその黄泉の淵より平気な顔をして帰ってくる、しかも絶対にただでは死なない。まさに巴という男を体現したようなこのカードは、いつしか彼の2つ名の由来ともなっていた。

「来やがったな、『おきつねさま』。ええ？」

「そうですね、ですが攻撃の前に、まずは1つだけ言わせていただきます。貴女は本当に、本当に用心深い方です」

まるで心のこもっていない形だけの拍手をパチ、パチと2度ほど行い、同じく感情のこもっていない冷酷な笑みを浮かべる巴。

「ですが、普通ならばプレイングミスと受け取られても仕方ないですよ、今のは？蘇生した九尾の狐ではなく、その前にフィールドに出しただけの巨竜の聖騎士に対し貴重なカナディアをわざわざ発動するだなんて」

「あいにく、アタシは用心深いんでな」

「ええ、貴女は昔からそうでしたね。さも自分が豪快奔放な性格であるかのように装っておいて、その実は緻密な策略家としての顔を合わせ持つ。精密にして思慮深く……詰まるところは、どこまでも臆病な小心者だ」

「あー？」

ぴくり、と糸巻の眉が動く。それに気づいてか気づかずか……いや、間違いなく気付いているのだろう。その上で彼女の反応をいちいち楽しみながら、流暢な調子で言葉を続ける。

「おや、何か間違いでも？だってそうでしょう、結局のところ貴女が恐れているのは、私の手札にあるかどうかともわからない1枚のカードなんです。違いますか？それを臆病と言わずしてどう称すればいいのか、ねえ？少々私の理解の及ぶところではありませんので、ぜひとも貴女自身にご教授願いたいですね」

「……さっきも言ったとおり、アタシは用心深いんでな。狐畜生風情との化かしあい、アタシみたいな人間様が遅れを取るわけにやいかないのさ」

嫌味たっぷりの毒舌にはノータイムで返事を返したものの、その表情は硬い。巴の発言は、そのなにもかもが凶星だったからだ。彼女があのだイミングでカナディアを巨竜の聖騎士に発動したのは、要するにたった1枚のカードを警戒しているからにすぎない。彼のエースモンスターの1体である最上級ドラゴン、闇黒の魔王ディアボロス。それはアンデットワールドにおけるドーハスーラと同じく自身の根城であるシャドウ・ディストピアにおいて最大の力を発揮し、ひとたび場に出ることを許せばかなりの苦戦を強いられることは目に見えている。そしてそのカードを特殊召喚するための条件は、「自分ワールドの闇属性モンスターがリリースされた時」。

つまり彼女がカナディアを使ったのは、巨竜の聖騎士をシャドウ・ディストピアの適用範囲から外れた裏側守備表示にすることでその属性を書き換えられた闇から本来の光へと戻す、たったそれだけの意味しかない。あるかないかすらわからないカードに対し過大に警戒し、あげく使い勝手のいい妨害札を1枚消費した。巴は、その意図に気が付いた。本来ならばただの馬鹿げたミスとして流してもおかしくないプレイングに感じた小さな違和感を紐解き、彼女に関する彼の記憶や印象と照らし合わせたうえでその意図を見破った。そしてその上で彼は、彼女を臆病と嗤っているのだ。

「それに、だがな。アタシにだってそれなりの理屈はあるんだぜ？ 教えてはやらんけどな」

表情の硬さがどうにか取れ、にんまりとその口角が持ち上がる。今度は、糸巻がふてぶてしく笑う番だった。確かに彼女のプレイングはよく言えば慎重、悪く言えば被害妄想の激しいものだったかもしれない。だが、彼女の言葉はただの負け惜しみなどではない。巴光太郎が糸巻太夫の言動をその憎しみがゆえに予見できると同じように、糸巻太夫にも巴光太郎の思考パターンは頭に染みついていて。彼は基本的に合理的であり、しかもそれを突き詰めることに快感を感じる

タイプの人間である。そんな彼が、何の躊躇もなくそのディアボロス
をデッキから装備カードとして引き出せる巨竜の聖騎士を使い捨て、
墓地に送ることができるとおろかな埋葬を九尾の狐のために使った。
つまりそれは逆説的に考えれば、その効果をディアボロスに対し使う
意義が薄い状態にある……すなわちディアボロスは、すでに彼の手の
内に存在するということに他ならない。これが同じ元プロでも他の
相手ならば、さすがの糸巻もそんな細かい理論だけで判断を下さな
かっただろう。

しかし、彼女はこの男をよく知っていた。互いにある種の同族嫌悪
めいた匂いを感じ取る彼らはどこまでも対局的であり、同時に限りな
く似通った存在だったからだ。

「では、そういうことにおきますよ。どうせ、その減らず口もそろ
そろ聞き納めなわけですしね。バトル、九尾の狐でユニゾンビに攻
撃。九尾槍！」

彼女のもう一枚の伏せカードは、バージュエストマ・ハルキゲニア。
相手モンスター1体を対象に取りその攻守をターンの間だけ半減さ
せるこのトラップをダメージ計算時に発動すれば、ユニゾンビであの
狐を返り討ちにすることもできる。

だが、彼女はそれを見送った。確かにユニゾンビをここで守ること
ができれば、次のターンで更なるアンデットを彼女の墓地に送ること
もできる。しかしそれに待ったをかけるのが、九尾の狐の持つもうひ
とつの特殊能力である。破壊された時に弱小ステータスの狐トーク
ン2体を場に残すその能力を、何らかの形で利用されることは避けら
れない。ゆえに彼女は、伏せカードを沈黙させたままでその攻撃を受
けた。

そして、その判断を即座に後悔することになる。

九尾の狐 攻2200↓ユニゾンビ 攻1300 (破壊)

糸巻 LP4000↓3100

「……！」

声すらも出ないほどに鮮明な、自分の腹部を直接えぐられるような
痛み。暴走した痛覚がためらめに体を刺激することでこみ上げたあ

まりの吐き気にその場に膝をつき、呼吸もめちやくちやに土下座するように両手を地面についでえづく。胃の中身をすべて吐き出さなかったのは、彼女にとつて僥倖だった。

「おやおや、随分鈍ってますね。私の知っている貴女であれば、その程度のダメージに膝をつくような真似はしないと思っていたのですが。ま、おかげでいいものを見せてもらいましたよ」

「ごっけんじゃねえよ、タコ……！」

冷静な煽りがかえって彼女の闘志に油を注ぎ、燃え上がる感情が自身の苦痛をねじ伏せる。脂汗をかきながらもどうにかその両足で立ち上がった彼女に、上品に口元を手で押さえてのくすくす笑いが降りかかる。

彼は合理的だ。だが、その人格を構成する要素はそれだけではない。例えば彼はプロ時代、相手が誰であろうともその1戦のみのメタカードをデッキに仕込むような真似はしてこなかった。彼に言わせればそれは負かした相手にメタを張られたから負けたのだ、などという余計な言い訳を与えるだけの利敵行為であり、完膚なきまでに正面から捻り潰したうえで自分が弱いから負けたのだという事実を2度と消えないほど相手の心に強く刻み込む、そこに愉悦と快感を覚える彼の性癖に反していたからだ。そんな彼にしてみれば、さぞかし今の彼女は愉快的な姿に見えたことだろう。

「愉快的なものを見せていただいたお礼といっってはなんですが、そろそろ種明かしぐらいはしてあげましょうか。どうせここで黙っているも、すぐに貴女方も知ることになる話ですからね。まずお察しの通り、私のデュエルディスクは新型です。今はまだデータ収集中の試作品ですが、見ての通りその鬱陶しい妨害電波に無効化されることなくブレイクビジョンを展開及び固定でき、さらに特筆すべき点として起動時から微弱な電波を発信することにより、その効果範囲に存在する人間の痛覚をより鋭敏なものとする機能が追加されています。貴女にも理解できるようにより噛み砕いて言えば、衝撃増幅装置としての機能を併せ持っているわけですね」

「なんだと……!?!」

「どうです、素晴らしいものでしょう？どうも最近、裏デュエルコロシ
アムもマンネリ化が進んでいましてね。ダメージがこれまで以上に
より鮮烈な痛みとして現れるこの新型デュエルディスクが普及すれ
ば、彼らもより真剣にデュエルを行うようになるでしょう」

投げかけられる言葉を、目を丸くして聞く糸巻。しかし、それも無
理はない。彼がなんとということもなしに放ったその言葉は、今後の世
界情勢を一変させかねないともない爆弾だった。

そもそも「BV」を利用してのテロ行為が今現在冷戦状態にとど
まっているのは、全世界に散らばるデュエルポリス達が実体化した
カードを近づくだけでその片端から元のソリッドビジョンに戻し、使
い手を純粹なデュエルの腕で制圧することにより睨みを利かせて押
さえつけているからというだけに過ぎない。テロリスト側が攻めあ
ぐねているからこそ成り立つ危うい均衡の元で保たれてきた、常に後
手対応に回らざるを得ないかりそめの平和。その条件がひとたび崩
れたとなれば、パワーバランスは変化する。デュエルの相手をして勝
利せずとも実体化したカードが消えないとなれば、テロリストがわざ
わざデュエルに付き合う義理はない。勝負を受ける理由も、その旨味
も何もかもが失われるからだ。

「そんなものを、本気で作りやがったのか……？」

だが、彼女が呆然となったのはその部分ではなかった。彼女にとつ
て一番信じられなかったのは、痛みを増幅するデュエルディスクとい
う概念そのものだった。

これまで彼女は心のどこかで、デュエルポリスであることを良しと
せず非公認の場での闇稼業に進んだ彼のような元プロたちも、プロ
デュエリストとしての誇りと矜持は失っていないと勝手に思ってい
た。国家の犬になる気はないが、デュエルモンスターズは続けたい。
その目的があったからこそ、こうして日の当たらない道を選んだのだ
と。だが、今の言い草はどうだ。まるで、人を傷つけ痛めつけること
がその目的の一番上に来ているようではないか。デュエルモンス
ターズを続けることが結果的に人を傷つけることとなる、というのな
らば彼女にも理解できる。だがその目的が入れ替わるというのは、ま

さに彼女にとって異次元の思考回路だった。

「ええ。いやあ、その顔が見られただけでも今日までひた隠しにしてきた甲斐があるというものですよ。とはいえ、繰り返しになります。まだまだ試作品ですからね。この実地試験の被験者^{パトナー}は貴女です、せいぜい壊れるまでは付き合っていただきますよ。カードを2枚伏せ、ターンエンド……そしてこの瞬間、シャドウ・デイストピアの更なる効果が発動します。互いのターンのエンドフェイズごとに、このカードの存在する状況の下でリリースされたモンスターの数までシャドウトークンをターンプレイヤーのフィールドに産み出しますよ。さしずめリリースされたモンスターどもの怨霊、といったところでしょうか」

シャドウトークン 守1000 悪魔族↓アンデット族

シャドウトークン 守1000 悪魔族↓アンデット族

「アタシの……ターン」

再び糸巻にターンが移り、カードを引く。今の話を聞いたあまりの衝撃に、痛みはすっかり追いやられていた。そして血色の沼が奥底から泡立ち、果てしない底から杖を持つ黒い手が伸びる。

「このスタンバイフェイズ、墓地に存在するドーハスーラの効果を発動。フィールドゾーンにカードが存在することで、スタンバイフェイズごとにこのカードは守備表示で復活する。帰ってきな、ドーハスーラ！」

死霊王 ドーハスーラ 守2000

「ありがとうございます、わざわざそのようなモンスターをご用意ただいて。トラップ発動、影のデッキ破壊ウイルス。守備力2000以上の闇属性モンスターをリリースすることで発動するこのカードは相手プレイヤー周辺にウイルスを撒き散らすことで、守備力2000以下の相手モンスターすべてに感染。破壊され墓地へと送られま^す。そしてシャドウ・デイストピアの効力により、私は九尾の狐ではなく貴女のドーハスーラをこの媒体とします」

「しまったっ！」

後悔するが、もう遅い。甦ったはずのドーハスーラが再び消えてい

き、その体から黒い煙のような勢いと密度のウイルスが無数に噴出する。意志を持つウイルスの塊はフィールドをぐるりと回り感染できるモンスターが存在しないことを確認したのち、彼女の手札に向けてその進路を変える。

「手札を見せていただきましょうか。当然、守備力2000以下のモンスターはその場で破壊ですよ？」

「勝手にしろー！」

彼女の手札は、残り2枚。それを表にして巴に広げてみせると、そのうち片方がボロボロに崩れて灰となって落ちていく。

「手札に残ったものが不知火流 輪廻の陣……先のターンに伏せない理由もなし、そちらが今のドロウカードですか。そして破壊されたカードがなるほど、不知火の宮司みやつかぎと。たしかそのカード、召喚時に不知火1体を蘇生できましたよね？惜しかったですねえ、その2枚さえあればこのターンも隠者の蘇生、リクルートからスタートしてそれなりの布陣を組むことができたでしょうに」

「よく言うぜ、アタシがドーハスーラをスルーしたところで九尾の狐は守備力2000、しかもシャドウ・ディストピアで属性は闇。媒体とタイミングが違うだけじゃねえか」

「おや、さすがに気づいていましたか」

いけしやあしやあと云つてのける巴に苦い顔をし、手元に唯一残ったカードをフィールドに伏せた。しかし、その正体はすでに割れている。そして彼女のフィールドにドーハスーラの置き土産ともいえる、シャドウトークンが現れる。

シャドウトークン 守1000 悪魔族↓アンデット族

「ターンエンドだよ、畜生。さっさと続けやがれ」

「汚い言葉遣いですねえ、では仰せのままに。私のターン、ドロウ」
「スタンバイフェイズ、このターンもアタシの墓地からドーハスーラを……」

「ではチェーンしてトラップ発動、フレンドリーファイア。相手のカード効果が発動した際、別のカード1枚を破壊します。この効果により私のフィールドに存在する九尾の狐を破壊します……ああそう

そう、ちなみにこのトリガーとなつて頂いた貴女の死霊王ですが、その復活はさせませんよ？もう1枚チェーンして速攻魔法、墓穴の指名者を発動。相手の墓地からモンスター1体を除外し、さらにそのカードおよび同名カードの効果は次の貴女のエンドフェイズまで無効となります。今回は無事に処理できましたが、そのカードにあまり生き返られては厄介極まりないのでね」

デュエルディスクから弾き出されたドーハスーラを、無言のままにキヤッチする。彼女を取り囲む状況は、確実に悪化の一途をたどっていた。しかし、それを理解しつつも彼女にはどうすることもできない。

「九尾の狐は破壊された際に、私の場に狐トークン2体を特殊召喚します。おやおや、随分とフィールドが賑やかになりましたね。どこかのだれかとは大違いです」

「それは結構なことだがな、たかだか攻守揃って1000以下の奴ばっかじゃないか。いつからアンタの職業は、幼稚園児みたいな奴らの引率になつたんだい？」

減らず口だけは叩きつつも、それが負け惜しみでしかないことは彼女自身がよく理解していた。ひと昔前ならいざ知らず、今の世の中にはリンク召喚というものが存在するのだ。いくらトークンを並べてもチューナーが、あるいは融合や儀式、場合によっては強化のカードがなければ時間稼ぎにしかないという時代はとうに過去のものとなり、いまやこの状況からでもエクストラデッキの枠さえ十分に確保してあれば様々なモンスターを下準備なしで展開できる。

狐トークン 守500 炎↓闇

狐トークン 守500 炎↓闇

だが、彼女はただ減らず口を叩くのみで指を啜えてこの後の展開を見守るような真似はしない。すでにネタの割れた手ではあるが、あの手札の中に何らかの対抗策さえ握っていないければまだ、粘ることはできるのだ。彼女の背後に音もなく巨大な社やしらが出現し、その足元には地面のぬかるみを上書きするようにまつすぐな石畳が敷き詰められる。揺らめく炎が円を描くように結び合わされ、決して消えない不知火の

渦が冥界と現世を繋ぐ道と化する。

「永続トラップ、不知火流 輪廻の陣！そしてアタシは早速、この効果を使わせてもらおうぜ。1ターンに1度アタシのフィールドからアンデット族1体を除外することで、このターンに受けるあらゆるダメージを0にする！」

糸巻のフィールドに唯一残っていたシャドウトークンが、炎の円へと吸い込まれる。瞬間彼女の足元を中心に不知火の紋様を描くように炎が走り、浄化の炎による強固な結界が発生した。

「まあ、そうするでしょうね。私も残念ながら、このターンのうちにその発動を妨害することはできません。その意地汚い延命処置がどこまで続くか、は気になるところですが……チューナーモンスター、クレボンスを召喚します」

「あん……っ？」

クレボンス 攻1200 サイキック族↓アンデット族

このターンでの攻め手を遅らされた巴が繰り出したのは、全く関係のないチューナーモンスター。そしてそのシンクロ素材の相方として選ばれたのは、たった今九尾の狐が現世に残っていた忘れ形見の狐火だった。

「レベル2の狐トークン2体にレベル2、クレボンスをチューニング。異邦と化した故郷ふるさとに、悪しき聖霊の夜を引く音がこだまする。シンクロ召喚、オルターガイスト・ドラッグウイリオン」

合計レベル6のシンクロモンスターは、何とも言い難い異形の姿をした怪物だった。2本の両足に獣のような体、そして2対4本の細く小さな両手が生える肩から上には異様に長い首が伸び、その先端にある頭には笑顔の仮面を張り付けたような顔面とその上部に生える緑の頭髮。体の背部からは先のとがった3本の太い尾が伸びて、それぞれが気ままに揺れている。

☆2+☆2+☆2||☆6

オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻2200 魔法使い族
↓アンデット族

「貴女のシャドウトークンが消えてしまったのは残念ですが、そりゃ

あの程度は読まれますよね。墓地に存在する九尾の狐は、ドラッグウイリオン及びシャドウトークン1体をリリースしてこのターンも黄泉還りの効果を使います」

そして何事もなかったかのように、死してなお当然のような顔をして蘇る大妖怪。シャドウ・デイストピアによるリリースの肩代わりを使えない以上、彼は自分のモンスターのみを2体リリースして蘇生効果を使うしかない。

しかし彼は、そのデイスアドバンテージを軽減させる方法をいくらでも知っている。

九尾の狐 攻2200 炎↓闇

「では自身がリリースされた墓地のドラッグウイリオン及び、フィールドで闇属性モンスターがリリースされた際に手札に存在する闇黒の魔王ディアボロスの効果を同時に発動。それぞれ自身をフィールドへと特殊召喚」

オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻2200 魔法使い族
↓アンデット族

闇黒の魔王ディアボロス 攻3000 ドラゴン族↓アンデット族

そして巴のフィールドに並び立つ、3体もの上級モンスター。やっぱり握ってたんじゃねえかと心中で毒づく糸巻に、わざとらしい動きで自分のフィールドを眺めまわしてみせる。

「九尾の狐、ドラッグウイリオン、ディアボロス……おやおや、私はあまり子供は好きではないので知らなかったのですが、近頃の幼稚園では随分と物騒なものを教えているようですね。ターンエンド、これでは貴女の身を守るその貧弱な結界が消えると同時に私のフィールドにはシャドウトークンが生み出されます。私のフィールドに空きは1か所しか存在しないので、呼び出せるトークンも1体のみですが」

シャドウトークン 守1000 悪魔族↓アンデット族

再び訪れる自らのターンを前に、ボロボロだ、と彼女は思った。こちらのフィールドはすでに壊滅寸前、対する巴の場にはその代名詞たる九尾の狐を筆頭に癖のあるモンスターが勢揃いしている。おまけ

にまだフィールドを感染対象求め蔓延している影のデツキ破壊ウィルスの効力により、ドローカードはすべて公開されその守備力が2000以下ならば問答無用で破壊される。

……それがどうした。だからこそ、逆転が燃える。突き抜けた理不尽で相手が築き上げてきた道理をぶち壊す、それこそが彼女の最も得意とするところだった。常に綱渡りの勝負ばかりのくせに、なぜか戦績は圧倒的に高い。その粘り強さこそが、かつて名もなき1人の女デュエリストを『赤髪の夜叉』と呼ばれるまでにのし上げた最大の武器だった。

だからこそ、彼女の心は決して折れない。その身が追い込まれるほどにその闘志は、彼女の長い髪のように赤く熱く燃え盛る。骨の髄まで闘争に魅入られたこの狂人が掴み取ったデュエルモンスターズという戦場は、彼女にとって無間地獄か極楽浄土か。それすらも、彼女にとってはどうでもいいことだった。

「ドロー！」

そしてその理不尽な勝利を幾度となく目にしてきたからこそ、それを見つめる巴の目に油断はない。彼は彼女を憎むがゆえに、その実力に色眼鏡をかけることもない。属性を操作する巴に、種族を操作する糸巻。2人は根本的に違う人間ではあると同時に同族嫌悪を感じる程度には似通った部分を持つ者同士であり、その強さゆえに相手の力量が一定以上のものであることについてはかえって冷静な評価を下していた。

だからこそ内心、彼はこう断じる。この女はこのターン、間違いない反撃に出るだろう。それを可能とするだけの理不尽が、あのドローカードにはあるはずだ。そして案の定糸巻はたった今手に入れた唯一の手札を見て、にやりと渾身の笑みを浮かべた。

「まずはこのドローカード、見せなきゃいけないんだろ？ほらよ。アタシの引いたカードは守備力800のモンスターだから、ウィルスカードに感染して即座に破壊される。そしてメインフェイズ、アンタがたった今墓地に送ってくれたこのモンスター。馬頭鬼の効果を発動！」

ウイルスカードは破壊とビーピングを同時に行う強力な効果を持つが、その効力がフィールドに及ぶのはあくまで1度きり、その後は手札のカードにしか感染しない。発動に成功したその瞬間以降、手札を經由しない展開に対しては無力となるのだ。

ユニゾンビ 攻1300

「そら、ユニゾンビの効果発動！アンタの九尾の狐を対象に、デッキからアンデット1体を墓地に送るぜ。レベルアップさせてやるよ、嬉しいだろ？さあ行きな、馬頭鬼。そしてこの馬頭鬼もまた効果発動、自身を除外してアンデット1体を蘇生する」

九尾の狐 ☆6↓☆7

不知火の隠者 攻500

それは、根拠のない彼女の予感通りに。それは、記憶に裏付けされた彼の予想通りに。わずか1枚のドロローをきっかけに、ウイルスの効力を逆手にとって2体のモンスターを並ばせる。そしてその合計レベルは、7。

「レベル4の隠者に、レベル3のユニゾンビをチューニング。戦場貪る妖の龍よ、屍闘の果てに百鬼を喰らえ。シンクロ召喚、レッドアイズ・アンデットネクロドラゴン真紅眼の不屍竜！」

先ほども九尾の狐の攻撃を受け止めた腐肉の龍が、再びアンデットワールドの上空に鬼火と共に浮かび上がる。その咆哮は大気を揺らし、アンデットワールドの主が凱旋する様はただそれだけで実体のない影法師のいくつかを霧散させた。

真紅眼の不屍竜 攻2400↓3400 守2000↓3000

「真紅眼の不屍竜のステータスは、常にすべての死霊どもの魂を取り込むことで強化される。互いのフィールドと墓地に存在するすべてのアンデット族モンスター、その数1体につき100ポイントだな……だがな、もう温存する意味もない。大サービスだ、こいつも持つてけ！トラップ発動、バージェストマ・ハルキゲニア！このカードでオルターガイスト・ドラッグウィリオンの攻守を半減させるついでに、チェーンして墓地からバージェストマ・カナディアの効果を発動。トラップが発動したことで墓地のこいつはモンスターとして、アン

デット化したうえで甦る！」

オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻2200↓1100
守1200↓600

バージェストマ・カナディア 攻1200 水↓闇 水族↓アン
デット族

真紅眼の不屍竜 攻3400↓3500 守3000↓3100
「……ちっ」

「おっ、スカした態度はもう品切れか？アンタも年取ってだいぶ気が短くなつたみたいだな、現役のところならこの程度じゃまだまだ、その嫌味仮面は剥がれなかったと思つたんだがな」

ギリギリと音が聞こえてきそうなほどに強く歯を噛みしめる姿にやや留飲を下げた糸巻が、自らの堕ちた龍に合図する。その攻撃目標は今しがた攻撃力を下げたドラッグウイリオン……ではなく、その隣に潜む魔王の名を持つ悪意の龍。

「バトルだ。さっきの札をしてやるよ、真紅眼の不屍竜で闇黒の魔王に攻撃。獄炎弾！」

真紅眼の不屍竜 攻3500↓暗黒の魔王ディアボロス 攻3000（破壊）

巴 LP4000↓3500
「ぐ……」

ただ500ポイントのダメージが通つた、戦術的には今はまだそれだけに過ぎない。しかし実体化し、鋭敏となつた感覚を刺激するその痛みは、ただのダメージでは済まないほどにその体を苛む。

「どんな気分だ、ええ？先に言つとくがな、アタシはちつとも面白くないぜ。なあ、こんなもんが、アンタらのやりたいデュエルだったのか？」

苦痛に歪む顔を見てもまるで晴れやかにならない気分を抱えながら、返事の返つてこないであろう問いを、承知の上で口に出す。彼の言いたいことは、彼女にはよく分かつていた。13年前、徹底的に彼女たちデュエリストを否定した世界。その平和にまだ固執するのか、矜持を忘れないように利用されるだけの裏切り者。この溝は決して

埋まることはないし、互いに歩み寄るつもりもない。だからこそ、百万の言葉よりも一枚のカードで語るのだ。

「……真紅眼の効果発動！このカードが存在してアンデット族モンスターの戦闘破壊が発生した時、互いの墓地に存在するアンデット1体を蘇生する！ドーハスーラは除外されちまったが、ちようどいいもんがアンタの墓地の一番上に落ちてんじゃねえか。アタシが選ぶのは、たった今破壊したディアボロスだ！」

地に堕ちた魔王の軀が、その全身を鎖に縛られた状態で瘴気に照らされ浮かび上がる。もはや立ち上がることはないかに見えた、腐り果てるのを待つだけの縛られた死体。だがピクリ、とその腐った指が動いた。ポロボロになり穴だらけの翼がベリベリベリ、とその身を縛る鎖によって破られるのも意に介さずに強引に広げられた。そしてその瞳がゆつくりと開くと、既に中身が存在しなくぼんだ左の眼窩にぼわり、と鬼火が灯る。骨の見える腕の腐った筋肉に再び生前の力がかもり、1瞬の静寂。破碎音と共にすべての鎖がはじけ飛び、ちぎれたその破片が血色の沼地へゆつくりと沈んでいった。

暗黒の魔王ディアボロス 攻3000 ドラゴン族↓アンデット族

「さあ、アタシのバトルフェイズはまだ終わってないからな。ディアボロスでドラッグウィリオンに攻撃、アフター・ザ・カラストロフ！」闇黒世界よりもなお暗い漆黒のブレスが闇を裂き、弱体化したドラッグウィリオンに襲い掛かる。ひとたまりもなくその姿は闇に消え、巴による怨嗟のような苦痛の声で闇に響き渡った。

暗黒の魔王ディアボロス 攻3000↓オルターガイスト・ドラッグウィリオン 攻1100 (破壊)

巴 LP3500↓1600

「ぐあああああ!!」

悲鳴を聞きながら、先ほど自分が受けたダメージを彼女は思い返していた。あの時彼女が受けたその数値は、900。今発生したダメージのほぼ半分、つまり単純計算で彼の肉体にかかる負荷はあの時の倍近いことになる。それがどれほどのものなのか、彼女には予想もつか

なかった。いくら世界に一度は見捨てられた身とはいえ、なぜそんな痛みを受け入れてまで、「BV」の開発を……その先にある世界への復讐を推し進める必要があるのかも。そして、その先にどんな未来が待っているのかも。

「これでアタシは、ターンエンド。このターンは1体もリリースが行われていないことで、シャドウ・デイストピアの効果は発動しない。そうだな？」

「ああ、この痛み……やはり、既製品とは一味も二味も違いますね。だからこそ、私たちの新たな武器に相応しい！」

「聞く耳持たず、か。もう勝手にしてろ」

「ええ。私どもは勝手にやりますから、貴女もいちいち目障りに首を突っ込まないでいただけると有難いのですがね。現役を引退し、縁側で茶をすする余生というのも乙なものですよ？もつともそんな穏やかな老後など私が断じて許しはしません、それでもその前に泡沫の夢ぐらいは見せてあげましたよ。もつとも、それすらも全ては終わった話。今となつては何の意味もない仮定でしかありませんね。そろそろ無駄話はやめましょう、私のターンです」

再び形勢が逆転したにもかかわらず、それを微塵も感じさせない態度のまま。

「サイバー・ヴァリーを召喚」

サイバー・ヴァリー 攻0 光↓闇 機械族↓アンデット族

「サイバー・ヴァリーは3つの効果を持ちますが、今回私が使うのは2つ目の効果。このカードおよび私のモンスター1体を除外することで、カードを2枚ドロウします。選ぶのは当然、シャドウトークンのうち1体」

金属製の蛇のようなモンスターが現れたかと思えばすぐに消え、巴が追加で2枚のカードを引く。そして、その手に掴んだカードは。

「手札を1枚捨てることで速攻魔法、超融合を発動。貴女のフィールドに存在するバージェストマ・カナディア、闇黒の魔王ディアボロスは丁度どちらもトークン以外の闇属性、よってその2体を素材とします。確か貴女のバージェストマ、モンスターとしてフィールドから墓

地に送られる場合には除外されるんですけどよね？」

超融合。相手フィールドのモンスターも素材として融合召喚を行うことのできる、チェーン不可の速攻魔法。その特性上ディアボロスや輪廻の陣で除外することもできず、ただ墓地に戻るのを見つめることしかできない。彼の世界の中では、トークン以外のあらゆるモンスターが強制的にそのドラゴンへの素材モンスターに相応しい存在として書き換えられる。

「重なりし闇よ、そして集いし漆黒よ。千紫万紅をただ闇黒に塗りつぶし、咲き誇れ紫毒の仇花よ！融合召喚、スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン！」

それは紫色の触手、ではない。何本もの植物、闇を吸い瘴気を喰らう貪欲な蔦が伸びる。太さも長さもまちまちではあるが、いずれも共通点としてその先端にはぷっくりと膨れた花の蕾がある。そしてそのうちの1つが、息をのむ糸巻の前でゆっくりと開いた。

だがそれは間違っても真つ当な、どころかどれだけ花の定義を拡大解釈してもその範疇には引つかからないような代物だ。動物の口のように中央から2つに割れたその内側には控えめながらもびつりと牙が生え、花卉らしきものは存在しない。辺りを見回した彼女の目に飛び込んできたのは、いつの間にか彼女の周りを取り囲んでいた他の蔦から生える蕾もまた、同じように開き始める光景。どれも最初のひとつと同じく、植物とは思えない獲物への貪欲さをむき出しにする動物的な代物。べちゃり、と湿った音がしてそちらに視線を動かすと、輪廻の陣の社を侵食するかのように這っていた「蔦」から生える「花」が「咲いた」拍子に、貪欲気に真下の石畳まで「蜜」……いや、「涎」を垂らしていたところだった。

スターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴン 攻2800 ドラゴン族↓アンデット族

「スターヴ・ヴェノムは召喚成功時、相手フィールドに存在する特殊召喚されたモンスター1体の攻撃力をエンドフェイズまで吸収する。せっかく残しておいてあげたんです、真紅眼の不屍竜にはこのまま上質の肥料となつて頂きましょう」

「冗談言うなよ、輪廻の陣！このターンもアンデット族の真紅眼を除外して、アタシの受けるダメージを0にする！」

鶯の浸食を止めて焼き尽くすかのように、決して消えない妖の炎による不知火の紋様が彼女の周囲を覆う。しかし、その代償はあまりにも大きい。確かにこれで、このターンの安全は確保されたかもしれない。だが、この次のターンはどうなるというのだろうか。ウイルスカードははまだ生きており、すべてのドローカードは巴に筒抜けとなる。彼女と共に戦うモンスターたちはすべてフィールドを離れ、もはや彼女の手元には輪廻の陣たった1枚しか残されていない。ライフはまだ、辛うじて彼女が有利。しかしその優位性が、この状況で何の役に立つというのだろうか。先ほど逆転に繋いだウイルスカードを逆手にとつてのコンボも、既に残り1枚しかデッキ内に馬頭鬼の残っていない彼女に2度使うことは不可能。脈がわずかに早くなり、血流の加速が傷の痛みをぶり返す。呼吸も、普段に比べほんのわずかに浅く速い。気持ちを奮い立たせるために懐に手を伸ばし、馴染みの煙草に火をつける。

そして舞台は再び、冒頭へと巻き戻った。巴は、目の前の女が1度は逆転してくるだろうとは読んでいた。そして事実彼女は先のターン、素引きした馬頭鬼から一時は盤面をひっくり返した。しかし彼は同時に、その火事場の馬鹿力は1度しか保たないだろうとも読んでいた。プロ時代の全盛期ならいざ知らず、普段の相手がプロデュエリストからそこらのチンピラに格下げされたことで勝負勘の鈍りつつある今の彼女に2度も3度も奇跡を起こすだけのスタミナは残されていない。先のターンを耐えきったその瞬間、彼の勝利はほぼ揺るぎないものとなった。それが、今の彼女と実際に戦ったことで彼が得た結論だった。

「さあ、アタシのターンだ。もたもたしてたら夜が明けちゃう、そろそろ終わりにしようぜ」

そんな分析など知る由もなく、デッキトップに力を込めて指をかける糸巻。そして、このデュエルの最後の流れを決定づけるドローが……。

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

しかし、そのカードが引かれることはついになかった。夜の闇を引き裂くような音の不快な警告音が3度鳴り、盤面に異常が起きる。スターヴ・ヴェノムが、九尾の狐が、シャドウトークンが……それだけではない。糸巻の張った輪廻の陣、そしてアンデットワールドとシャドウ・デイズトピアがいびつに混じりあった空間が、すべて絵の具をぶちまけたようにぐちゃぐちゃになってひとかたまりに溶け崩れていく。

「な、なんだ?！」

「ふむ。フィールド2種を常に維持し続けたうえであの数のモンスターを「BV」による同時展開を異常検知と判断しての安全装置の強制展開……なるほど、確かにこの試作品にはまだ負荷が強すぎましたかね。こんな形での中断とは私にとっても不本意ですが、いい実戦データが取れたので今回は良しとしておきましょう。ですがその前に、九尾の狐!」

主の声に応えた九尾の狐が、その全身を溶かしながらも槍の尾のうち2本を同時に伸ばす。糸巻めがけ飛んできたそのうち1本は辛うじて身をひねり躲したものの、彼女のバイクを狙い撃ちにしたもう1本はどうすることもできない。愛車がスクラップになるさまに気を取られた彼女がわずかに巴から目を離れたすきに、彼の姿はもう公園から消えていた。

「ふざけやがって、何勝手にケツ捲って逃げてやがる……!」

『ああ、そうそう。ひとつ大事なことを伝え忘れていましたよ』

どこからともなく、エコーのかかった巴の声が響く。反射的にあたりを見回そうとして、すぐにやめる。どうせどこかにスピーカーでも仕掛けてあるのだろう、ならばそれに踊らされるのも物笑いの種になるだけだとの判断である。彼女の脳は実際、ようやく効いてきたニコチンと勝負を途中で捨てられた上にその相手を取り逃がした自分へのあまりの怒りのせいで逆にぞっとするほどに冴え渡っていた。その彼女の理性が、この話は聞いておくべきだと訴えかける。

『鳥居浄瑠君、でしたか?ああ、否定はしなくて構いませんよ、もう完

全に調べはついていますので。まったくやってくれましたね、まさか客席ではなく選手として潜り込んでいたとは。逆に発見までに時間がかかりましたよ、それなりに参加メンツは厳選していたはずですので』

「……」

裏デュエルロシアムに潜り込んでいる部下の名に、煙草を啜えたままの糸巻の眉がわずかに上がる。ここで彼がデュエルポリスだと掴まれたということは、少々まずいことになった。今すぐにも回収に向かわねばならないが、そのための足はたった今お釈迦になったところだ。しかしこの後の行動パターンを脳をフル回転させて模索する彼女を遮るかのように、巴の声が続く。

『とはいえ、ある意味では幸いだったとも言えますね。ご安心ください、私たちは今回、彼に対し一切の手出しは致しませんよ。理由は貴女のことです、明日の朝には気づくでしょう。あまり愉快な話ではありませんが、モグラが我々の中にいたのは不幸中の幸いですよ、本当に。彼が今戦っているであろう決勝の相手は「後ろ帽子のロブ」……愛すべき我々の元同僚、ロベルト・バックキャップですが、少しばかり彼に、いえ、彼だけの話ではないですね。今回に限り、貴女の部下以外の誰に優勝されても困る状況なのです。それでは、また近いうちにお会いしましょう』

「……？」

不可解な話に眉をひそめるが、当然それに対する返事は返ってこない。夜の公園は、最初に彼女がここに来た時と同じように静まり返っていた。ただあの時と違い彼女のバイクは鉄くずとなり、地面には九尾槍による無数の穴が無残に開いている。明日の朝この公園の清掃人は、ここで地獄を見ることになるだろう。そして彼女の体に今も小さくうずく、あのデュエルを通しての痛み。それだけが、今の戦いが夢ではないと物語っていた。

ターン8 最速加速の大怪風

『さーとと、アンタが青木のおっさんに勝ったとして、そーすつと決勝の相手は、と。お、なんだロブか。こりや考えるまでもないな』

外の状況など知る由もなく、いよいよ裏デュエルコロシムも決勝3分前。ここに来る前に聞いてきた、上司からの最後の話を鳥居は思い出していた。

『通称後ろ帽子バックキャップのロブ、ロベルト・バックキャップ。こいつなあ……アタシの記憶通りのデツキ、今でも使つてんだろなあ』

『はあ?』

『ああいや、すまん。ただ、アイツは強いぞー。せめてライフが8000ぐらいありやあもう少し持ちこたえられるんだろなあ。一応アタシは相性有利だったから勝ち越せてたんだが、それでも割と綱渡りだったんだよな。ただ鳥居、案外アンタとは馬が合うかもな。特に共通点があるわけじゃないんだが……なんつーか、アタシの勘だ』

『いやそこでめんどくさくなつて説明放棄はやめてくださいよ』
お世辞にも役に立つ情報だったとは言いがたい。それでもあの女上司が、どこにも根拠のない自信だけはやたら満ち溢れたためんどくさいアラサーがそこまで言うだけの実力のある相手だということだけは彼も理解できた。

「鳥居浄瑠さーん、スタンバイお願いしまーす」

「はーい」

呼びに来たスタッフに促され、そこまでで回想を中断する。しかし椅子から立ち上がったろうとしたところで、体中に疼くような痛みを感じその場で固まる。休憩といってもほんの数分のこと、ここまでの2連戦による疲労、そして受けてきた火傷と打撲はまるで治癒しきっていない。

「ふうーっ」

固まっていたのは、ほんの数秒のことだった。軽く息を吐いて再び動き出したその時には、すでに体の不調など感じさせない滑らかな動きを取り戻している。彼は幼少期から仕込まれ続けたプロのエン

ターティナーであり、観客が待つ舞台にはたとえ墓の中からでも立ち上がるのだ。

「今行きますよ」

頬を両手で張ることで気合を入れ直し、改めて入場口へと歩き出す。明かりの下に出る少し前から聞こえてきた司会の声に歩みを速め、ほとんど飛び出すようにして最高のタイミングで観客とスポットライトの前に姿を現した。

『さあ、今日もいよいよ最終決戦、長かったデュエルもお開きの一戦だあ！だけど今夜は一味違うぜ、まさかまさかの大番狂わせ、ここに集まったお前らは今、裏デュエル界の伝説の生き証人になったんだぜ！なにせここまで勝ち進んできたのは全く無名の新人……！』

『やあやあやあ遠からん者は音に聞け、近くば寄つて目にも見よ。とは申しませんが、こちらにいらつしやる皆様にそのようなことを申し上げるのはいささか野暮というものでしょう。今宵皆様のお目にかけますは大いなる海、偉大なる空に続く魔界劇場の第三幕にしてそのファイナーレ！提供は私、鳥居浄瑠が全責任を持って皆様にお届けいたしますよう！』

スピーカー越しの声を半ば押しつけるように、即興で作った声高らかな口上とともにオーバーな一礼。それなりの拍手をもって迎えられたことにやや満足するも、それもスピーカーが再び主導権を取り戻すまでだった。

『……あー、ここまで勝ち上がってきたチャレンジャーに対するは俺たちのチャンピオン！国籍不明、本名不明の大怪人、誰が呼んだかロベルト・バツクキヤップ……人呼んで後ろ帽子バツクキヤップのロブだあっ！』

派手なスモークがたかれ、噴出する煙の向こうからスポットライトに照らされて巨漢の影がゆらりと見える。清明かに先ほど鳥居に向けられたものよりも大きな拍手の鳴り響く中、その男がステージに現れた。

その身長は、2メートルあるかどうかといったところ。がっしりとした四角い顔立ちにくすんだ金髪と碧眼が、彼が生粋の日本人ではないことを強く主張している。決して初戦で彼が当たった山形のように

に無駄な筋肉による過剰装飾があるわけではないが、しかしよく鍛え抜かれていることがわかる無駄のない体つき。13年前にプロだったことを考えると少なくとも30は越えているはずだが、まるで肉体的全盛期は過ぎ去ったことを感じさせない。もつとも、彼はそこに驚きは感じなかった。彼の身近にも、見てくれといい中身といいまるで年を感じさせない女上司がいるからだ。そしてひとときわ目を引くのがその名、バックキャップの由来ともなった前後さかさまにかぶられた帽子。本人なりのファッションなのかはわからないが、少なくともトレードマークであることは間違いない。糸巻から聞いてきた話によると、あの帽子を取った彼の頭を見たものは誰もいないのだとか。

「……」

寡黙な巨人といった雰囲気そのままに、割れんばかりの大歓声にはピクリとも反応を示さずのっしのっしとステージ中央へ向けて歩みを進めるロベルト。鳥居と向かい合う形で足を止め、40センチ近い身長差のある彼を必然的に見下ろす格好で目を合わせる。

「お前、今日の俺の相手か」

「お手柔らかに。それはそうと日本語、上手っすね」

「この国来て、20年になる。最初に習った相手、悪かった。ほとんど単語。もう癖取れない」

ほとんど単語、というわかるようなわからないような会話の流れにほんの少し考え込むも、最初に方言でその国の言葉を習うともう標準語のアクセントで喋れなくなる現象と同じようなものだろうとすぐに納得する。随分横着な講師を選んだものだやや同情するが、意味が通じないというほどではない。

『ここからじゃ何を話しているのかは聞こえねえが、チャンピオンとチャレンジャーがどうやら試合前の舌戦を繰り返しているみたいだぜ！ただ俺たちやデュエリスト、そろそろカードでしゃべってもらいたい、なあ観客の皆もそう思うだろ!？』

スピーカーの流す言葉に、会場が歓声をもって応える。さっさと始めろ、という言葉の裏に込められた若干の非難に同時に苦笑しながらも、先手を取った鳥居がアクロバットにバク宙を決めつつロベルトか

ら距離をとる。2度3度と回転して再び着地した時には、すでに彼も演者の顔に戻っていた。

『それではお待たせいたしました、レディース・アード・ジエントルメン！魔界劇場は最終公演、いよいよ開演のブザーと参りましょう！』

先攻はチャレンジヤーたる彼のもの、手札誘発でも飛んでこない限りは落ち着いて布陣を固めることができる。そして幸いにも、彼の手札は今回かなり初手向きのものだった。それを確認し、大きく息を吸う。

『それでは私のフィールドに、此度の演者をお呼びいたしました。』
ライト P ^{ペンデラム} ゾーンにスケール1、怪力無双の剛腕の持ち主！魔界劇団―デビル・ヒールを。そして対となるレフトPゾーンには同じくスケール2、数字を操る凄腕のガンマン。魔界劇団―ワイルド・ホープをセツティング！』

両手を大きく広げた彼の両端に光の柱が昇り、そのうち片方では1と書かれた光の数字の上でボディビルめいて筋肉を強調する巨漢が、そしてもう片方では数字の2の上で素早い動きのガンスピンをこなす西部劇から飛び出たようなガンマンが浮かび上がる。ここまで終えたところでさつと客席全体を見渡し、オーバーに肩をすくめてみせる。

『おやおや、これはどうしたことでしょう。私の設置したペンデラムスケールは1と2、このままではどのレベルのモンスターも呼び出すことができませぬ。ですがご安心ください、こちらにセツティングされましたるワイルド・ホープはモンスターとして、そしてスケールとして。あらゆる場所において自在に数字を操る、魔法の弾丸を撃ち放つ銃の持ち主なのです。ワイルド・ホープのペンデラム効果の名は、チェンジスケール・バレット。対となるPゾーンに魔界劇団が存在するときのみ装填可能となるこの弾丸は、そのスケールのみを正確に撃ち抜くことで止まった振り子を大きく揺らし、その数字を1ターンの間のみ9へと変化させるのです。さあ1発のみのシヨータイム、見事デビル・ヒールの掲げる1を打ち抜きましたらばご喝采。

チェンジスケール・バレット!」

口上が終わるのを狙いすましたタイミングで、弾丸の音が会場に響いた。全くのノーモーションから目にも止まらぬ動きで早撃ちを仕掛けたワイルド・ホープが、デビル・ヒールの足元で光る1の数字を正確に打ち抜いたのだ。そしていまだ硝煙立ち上る銃を再びガンスピンしたのちホルスターに収めた瞬間とほぼ同時に、弾痕穿たれたその数字が9へと変化する。

少しでも冷静に考えればこれはギャンブル要素も含まれないただの効果の発動であつて、何らかの妨害がなければたとえ何ターン繰り返そうとも失敗するわけがない。しかしそれでも、場の空気に飲まれていた客席からはパラパラと拍手が起きてしまう。それはまさしく場の空気を鳥居が握っていることの何よりの証拠であり、幼いころからそれを飯の種にしてきた彼にとっては面目躍如の瞬間であつた。

魔界劇団―デビル・ヒール スケール1↓9

「さあさあそれでは皆様गत、これにて長らくの下準備は終了と相成ります。ただいま私の場に並べられしスケールは2と9、よつてレベル3から8の魔界劇団を召喚可能。今こそ満を持して舞台へと現れよ、栄光ある座長にして永遠の花形!ペンデュラム召喚、魔界劇団―ビッグ・スター!」

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

そして彼の場に呼び出される、魔界劇団の中核にしてその花形。三角帽子を持ち上げて深々と一礼し、再び深々とかぶり直したところで鳥居の指示が飛ぶ。

「それでは早速挨拶代わりに、ビッグ・スターによる今宵の演目を発表いたしました。1ターンに1度デッキから魔界台本1冊を選択し、私のフィールドにセットします。最初的一幕はこちら、安定と安心のレギュラー公演。魔界台本「魔王の降臨」!今回は最終決戦といふこともあり、我々としても大盤振る舞いの出し惜しみなしで参りましょう。魔王の降臨を発動!さあプロローグからいきなり舞台を支配する、恐ろしき魔王が登場いたしました!攻撃表示の魔界劇団は魔王ビッグ・スター1体のみ、よつて1枚のカードを破壊いたします。

私を選択するのは、レフトPゾーンに存在するワイルド・ホープ！」
漆黒のマントを羽織ったビッグ・スターがおもむろに大ジャンプし、光の柱のうち片方の中央にきりもみ回転からの恐るべき鋭角飛び蹴りを敢行する。たやすく碎け散った光の破片はフィールド中に降り注ぎ、まるで無数の蛍が飛び回るかのような幻想的な光景を作り出す。

「うわあ……」

「きれい……」

客席からの眩きを鋭く聞きつけ、すぐさま予定を変更して少しの間だけ口を閉じて光が舞うに任せる。静寂が包むフィールドをキラキラとした光が彩るさまをたつぷりと客席に堪能させたのち、ようやく次の段階に進む。

「そしてたつた今破壊されましたワイルド・ホープ、そのモンスター効果を発動。このカードが破壊されたその瞬間、私はデッキから別の団員1体を手札に加えることが可能となります。舞台袖にてスタンバイする次なる魔界劇団の演者は、路傍に佇む要石。魔界劇団―エキストラをサーチ！さらにカードを2枚伏せ、これにてターンエンドでございます。さあチャンピオン、お手並み拝見と参りましょう」

魔界劇団―デビル・ヒール スケール9↓1

お世辞にも固い布陣とは言えないが、それでも胸を張ってターンを終える。先ほどの青木戦の裏で行われていたロベルトのデュエルを彼は見る余裕がなかったため、彼がどのような戦術を使うのかはわからない。だがたとえどのような戦術で来ようとも、彼は彼のデュエルでそれを迎え撃つまでだ。

「俺のターン。お前はペンデュラム、ならば俺もペンデュラム。魔法発動、妖仙獣の神風！俺のフィールドにモンスターがいない、デッキからこの2枚を直接発動。妖仙獣……出でよ右鎌神柱、ウレンシンチュウ 応えよ左鎌神柱！」

「よ……【妖仙獣】!？」

驚きの声をよそに、ロベルトを挟み込むように2つのつむじ風が巻き起こる。風はそのまま天まで上る小規模な竜巻となり、その中から

鳥居のものと同じ2本の光の柱が現れた。5の数字の上では、赤い鬼の面が取り付けられた右半分のみ鳥居が。そして対となる3の数字が光るその中には、青い鬼の面が張り付けられた左半分のみ鳥居が。それぞれ半身のみの鳥居が、頭上高くでその真なる姿を取り戻す。

「右鎌神柱、ペンデュラム効果。反対側に妖仙獣カード、スケールを1に変更する」

ふたつがひとつとなり、真の力を取り戻した右鎌神柱の下で光の数字が大きく動いた。それは先ほど鳥居自身も行ったスケール変更の技、しかしその結果として完成したスケールの広さは彼の作り上げたそれを大きく上回る。

してやられた、と心の中で歯噛みする。これではまるで先ほどのワイルド・ホープの効果がこの右鎌神柱の、ひいては使い手である彼自身がロベルトの引き立て役に徹したようなものだ、そんな思いも駆け巡る。しかしすべては手遅れであり、結局は今回に関してはこちらの負けだと潔く認めざるをえなかった。

もつとも、まだ勝負そのものまで投げ捨てたわけではない。

妖仙獣 右鎌神柱 スケール5↓1

「効果発動ターン、妖仙獣しか無理。仔細なし、ペンデュラム召喚！」
先ほどの比ではない大竜巻が、鬼の面持つ鳥居に挟まれる形でフィールドに2つ吹き荒れる。そして紅く輝くそれからは古傷残る独眼の紅龍が、緑がかったそれからは赤い両目が不気味に光る四つ足の妖獣が、それぞれ鳥居をくぐりフィールドに降り立った。

「逢魔が刻。妖魔の神域脅かされし時、その怒り星々さえも揺るがす大怪風となる！ 妖仙獣……吹き荒れよ独眼群主！^{ヒトツメノムラジ}解き放て大刃禍是！^{ダイバカゼ}」

妖仙獣 独眼群主 攻2000

妖仙獣 大刃禍是 攻3000

2体もの妖仙獣の一斉召喚。降臨と共に巻き起こった風は会場内を所狭しと荒れ狂い、「BV」により実際のエネルギーとなったその風圧はその場に固定されていない椅子、あるいはうっかり掴む手の緩

んだ観客の荷物など手につく限りあらゆるものを吹き飛ばした。

そしてそれは、真正面でそれと対峙する鳥居にとつても例外ではない。手札が吹き飛ばされることこそどうにか防いだものの、彼自身の体がともすれば浮かび上がりそうになる。ただ一人ロベルトのみはその中央、台風の目に位置する場所ですらほとんどその影響を受けぬままに仁王立ちして風に翻弄される周りの様子を見据えていた。そしてその手が、その口が、動く。

「独眼群主、大刃禍是の効果発動。独眼群主は召喚、ペンデュラム召喚時に1枚。同じ時に大刃禍是は2枚バウンスする」

召喚の余波も収まりきらないうちに独眼の紅龍が赤い竜巻を1つビッグ・スターに、四つ足の妖怪が緑の竜巻を2つ鳥居の伏せカードに向け発生させ、またもや空気がうねり切り裂かれる。この畳みかけにはついに鳥居の我慢も限界に達し、風圧に耐えきれなくなった彼の体がなすすべなく浮きはじめ、抵抗空しくその両足がついに地面から離れた。

みるみるうちに上昇して何メートルも回転しながら天井近くへと飛ばされていく彼の姿を見上げ、その後に起きる悲惨な光景を想像した観客から小さく悲鳴が上がる。しかし誰よりも早く叫んだのは、ほかならぬ彼自身だった。

「『なんとということでしょう、まさに大怪風！おまけにこの効果が決まってしまうばもはや私のフィールドはカラも同然、神域の獣たちの連携攻撃によってこのライフはすべてが失われてしまうでしょう……ですが！』」

その直後会場の皆が見たものは、空中に突如浮かんだオレンジ色のクツシヨンのようなものが飛ばされ続けていた彼の体を受け止めた光景だった。そのクツシヨンのようなものはみるみるうちに乱気流に乗って会場を飛び回り、そのうちのひとつがたまたま1回戦から彼の試合を間近に見ていた1人の観客の手元に届く。思わずといった様子で手を伸ばしてそれを掴んだその男が、あつと驚きの声を上げる。

「これ、風船だ！しかも、これってきつきも……」

その言葉に周りの客も、もう一度自分たちの周りを飛び回るオレンジの物体へとその目を凝らす。そう、それは確かに無数の風船……コウモリを模した形の、オレンジ色の巨大な風船だった。そして彼らは最初の男の言葉通り、これと同じものをつい先ほどの試合でもその目にしてはいる。そのことに観客の大多数が気づいたタイミングで、おもむろに天井から明るい笑い声が会場中に響く。

「これは失敬。私としたことが、少々注意が至りませんでしたね。確かにお客様のの中にいらっしやるかもしれない心臓の弱い方にとって今的一幕は、少しばかり刺激が強すぎるものとなってしまいました」
そう明るく謝罪する声の主は、当然に鳥居浄瑠その人である。ではなぜ、いまだに天井からその声がするのか？その理由は、彼の左手にあった。手札を持ったままの右手は垂らしたまま、空いた左手で彼はいくつものコウモリ型風船をかき集めてその紐を握りしめていたのだ。ふわふわと浮く巨大な風船は、それをいくつも束ねることで彼一人程度の体重であれば十分空中に留まっていられるだけの浮力を生み出す。

となると当然次に生ずるであろう疑問は、なぜその風船を生み出すカードが発動されたのかということになる。その答えを説明すべく彼は手にした風船をぱつと手放し、猫のように空中で一回転することでバランスを取りつつ着地する。

「それでは皆様、そろそろ何が起きたのかの説明に移らせていただきます。私の場に伏せられ、チェーン2の大刀禍是によってバウンズされそうになった2枚の伏せカード。私はそれに合わせてさらにチェーン3、そのうち1枚を発動したのです。その名はトラップカード、メタバース！このカードは発動時にデッキからフィールド魔法1枚を選択し、手札に加えるか場に直接発動することが可能となります。となれば、もうお分かりですね？先ほども皆様を幻想の世界に招待した魔界劇団の本拠地、魔界劇場「ファンタステイックシアター」。そのカードを発動したのです！」

そう言い切ると同時にポーズをとった彼をめぐらせてファンタステイックシアターの小道具であるスポットライトに光が灯り、同じく

小道具である無数のクラッカーが小気味いい音と共にカラフルな紙吹雪を放つ。

『もうお分かりですね？確かに私のフィールドに今、ペンデュラム召喚された魔界劇団であるビッグ・スターはおりません。ですがファンタステイクシアターの発動時はまだチャンピオンの操る独眼群主の効果適用前であり、確かに魔王はそこにおりました。つまりファンタステイクシアターの効果は有効となり、大刃禍是の効果は「相手フィールドにセットされた魔法・罫カード1枚を選択して破壊する」と書き換えられたのです！』

「書き換え……い！」

『そう。一見あっさりとあやかしの長の手によって敗北したかに思われた大魔王ビッグ・スターでしたが、実はそれすらも彼の大いなる計画の一部だったのです。彼がその身を犠牲にしてまでも、現世へと遺した1冊の本。それはすなわち、復活の秘術。1度は舞台を降りたかに見えたビッグ・スターが、さらなる仲間を得て再び表舞台へと駆け上がるための奥の奥の手。大刃禍是の効果によって破壊されたことで、その本に込められた魔力の全てが解放されようとしております』

ビッグ・スターの消え去った鳥居のフィールドにポツンと残された、1冊の魔界台本。風になびかれてそのページが猛スピードでめくられていき、やがて中心付近でひとりでに止まる。ページ内部に見開きでびっしりと書き込まれた文字が光を放ち、フィールドを覆いつくすほどのスモークが沸き上がる。

『その本の名は……魔界台本「魔界の宴咤女」！先ほどの第二幕でも大きな役割を果たしたこの演目は、この最終幕でも大きな役割を果たすこととなるでしょう。さあ、魔界の宴咤女の効果を発動！私のエクストラデッキに表側の愛劇団が存在し、フィールドにセットされたこのカードが相手の効果によって破壊されたこの瞬間。私はデッキから可能な限りの魔界劇団を選択し、私のフィールドへと一斉登板いたします！魔王ビッグ・スターが手札へと戻ったことにより、私のメイモンスターゾーンの空きはなんとこの5枠全て。ここまで続いた

長い長いプロローグもいよいよひと段落、まずは本演前の舞台挨拶と参りましょう。一齐に現れよ、私のモンスターたち！』

スモークにまぎれ、煙の間を潜り抜けて5人もの演者がフィールドに飛び出し魔妖仙獣の2体と睨みあう。その体軀では1人1人は遙かに小さいが、合計すれば数では勝りその闘志も十分。

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000

魔界劇団―サッシー・ルーキー 守1000

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500

魔界劇団―ワイルド・ホープ 守1200

『さすがに数が多いですからね、申し訳ありませんが1人1人の口上は割愛させていただきます。ともあれこの瞬間に特殊召喚に成功したデビル・ヒールの効果が発動、ヒールプレッシャー！相手モンスター1体を選択し、このターンの間だけその攻撃力を魔界劇団1体につき1000下降させます。私が選択するのは当然、魔妖仙獣 大刃禍是！』

巨漢の演者が、今日だけですすでに3度目となるヒールプレッシャーを挨拶代わりにその大きな手から放つ。しかし巨大な妖獣はさすがにそれだけで吹き飛ばされるようなことはなく、4本の足で踏ん張ってその衝撃に耐える。

魔妖仙獣 大刃禍是 攻3000↓0

『だが俺も、独眼群主の効果。フィールドのカードが手札かデッキに戻る、そのとき1枚につき500妖仙獣パワーアップ！』

魔妖仙獣 独眼群主 攻2000↓2500

魔妖仙獣 大刃禍是 攻0↓0

『全体強化……ですが大刃禍是の攻撃力は表記上0となっておりませんが、ヒールプレッシャーによってダウンした数値は本来5000。たとえば500ポイントの強化が入ろうと、その攻撃力を再びプラスにするためにはあと1500ポイントほど足りませんね』

『承知。ゆえにこのターン、大刃禍是はもう使わない。リリース、アドバンス召喚。妖仙獣……荒れ狂え、凶旋嵐！』

妖獣が再び竜巻と共に消え、その痕跡すらも残らないフィールドにひらひらと枯れ葉が舞い落ちる。どこからともなく無尽蔵に現れては落ちていく枯れ葉はみるみるうちにうずたかく積まれた山となり、その山を跳ね除けてポロボロの和装に首から下げた赤い数珠、そして幅広の湾曲した、異形の刀を持つ二足歩行の獣人が現れた。そして獣人がおもむろに首の数珠を取り外して地面に叩きつけると、地面に生じたひび割れから更なるつむじ風が巻き起こる。

妖仙獣 凶旋嵐 攻2000

「凶旋嵐の効果。召喚成功時、デツキから同胞を呼び寄せる。跳ね回れ、鎌参太刀！」

妖仙獣 鎌参太刀 攻1500

「バトル。独眼群主、プリティ・ヒロイン！」

「ああ、なんということでしょう。荒ぶる風の主、その双壁をなす赤き龍がその独眼にて見据えた獲物は、我らが魅力あふれる魔法のアイド……うわっ！」

咄嗟のセリフすらも言い終わらぬうちに、独眼の龍が竜巻を吐き出して緑髪の魔法少女を狙う。体の防御そっちのけでスカートを押さえながら、その体が吹き飛ばされていく。

魔妖仙獣 独眼群主 攻2500↓魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500 (破壊)

鳥居 LP4000↓3000

「ですがこの瞬間、プリティ・ヒロイン最後の魔法が発動！私の受けた戦闘ダメージ1000をそちらのモンスター……ここは凶旋嵐の攻撃力から差し引きます、メルヘンチック・ラブコール！」

妖仙獣 凶旋嵐 攻2000↓1000

デビル・ヒールともどもすっかりおなじみとなった、攻撃力ダウンの恋の魔法が獣人を包む。しかし、今回行われる処理はそれだけでは終わらない。

「さらにプリティ・ヒロインがモンスターゾーンにて破壊された時、すぐれた語り部でもある彼女は新たな演目をしるべとして場にセツトすることが可能となります。私の宣言する次の演目はこのカード、

魔界台本「オープニング・セレモニー！」

「鎌参太刀の効果。妖仙獣が戦闘ダメージ与えた、1枚サーチ行う。
妖仙獣……響き返せ、木魅！」

『木魅……?』

ここで予想外の一手に不意を突かれたのが、鳥居である。彼は鎌参太刀の効果を知っており、サーチ効果を止めるすべがない以上ここは必要経費と割り切るつもりでいた。だがそのサーチ先は万能力ウンターである妖仙獣の秘技、あるいは攻撃反応の手札誘発である大幽谷響といったカードだろうと読んでいたのだ。相手ターンでは特に何ができるわけでもなく、手札に置いておく意味も限りなく薄いあのカードを、ロベルトは迷う様子もなくわざわざこのタイミングでサーチした。その理由は、真意はどこにあるのか。

しかし、彼にそれを長々と考える余裕はない。刻一刻と変化するデュエルの最中、急に立ち止まって相手の考えを長考するなどエンターテイナーとしては論外だ。まして彼のスタイルは、常に動き続けるアドリブばかりの即興劇。考え続けることを辞めるのは勝負を捨てるのも同然だが、エンタメを捨てることもまた彼にとってはそのれと等しい意味を持つ。結局彼は結論を出すのを後回しにし、サーチ後に何をしてくるのかに神経を集中させる。

「凶旋嵐、鎌参太刀はお前のモンスターに勝てない。カードを2枚伏せる、ターンエンド」

妖仙獣 右鎌神柱 スケール11↓5

『「エンド?……なるほど、ようやく私にも読めてきましたよ。チャンピオンの手札はこれで残り1枚、そしてそれがモンスターカードの木魅であることは揺るがない事実。つまり今伏せられた2枚のカードのうち、どちらか片方は何らかの手札コストを要する罠、あるいは速攻魔法といったところでしょうか』

木魅は、妖仙獣の中でも珍しい特色として墓地から発動できる誘発効果を持ち合わせている。それはつまり言い換えれば、テーマ内で最も手札コストに適したカードということだ。そう考えれば、なぜ今のターンに選んだのかの説明もつく。どうやらあの伏せカード、手札を

捨ててでも発動したいようなよほど強力な見返りを持つカードらしい。肝心のロベルトは沈黙を保ったままだが、代わりに風がごう、と吹いた。独眼の紅龍の全身がつむじ風に包まれて、来た時と同じように天へと昇っていく。

「ターン終了時、特殊召喚された独眼群主は手札戻る。鎌参太刀は特殊召喚された、だから手札戻らない」

ターンの終わりごとに、手札に戻る。この特色こそが鳥居の「魔界劇団」とロベルトの【妖仙獣】の複雑な力関係を生み出す要因であり、最初に彼のデッキがそれであると知った時に微妙な反応をした理由でもある。もつともそこにはそれらしい顔して自分は相性有利などとほざいていた上司の顔を思い出したせいも、無論あるのだが。

まず魔界劇団側の強みとしては、毎ターン手札に戻り盤面がりセツトされる妖仙獣は再び展開するためにいちいちモンスター効果を発動する必要があり、それがつまりファンタステックシアターのいい書き換え先であることを意味している。またペンデュラム全体の特色である大量展開と一斉召喚は、同じくテーマの特色であるバウンス能力に対してある程度は強く出ることができる。

しかしだからといって一方的有利と言い切れないのが、まさにこの手札に戻る能力の存在である。切り札である魔王の降臨をはじめ魔界台本はどれも手札に逃げたカードに対しては手出しができず、団員の中にもそこに干渉できるモンスターはいない。あくまで魔界劇団は観客あいてがいる舞台でこそその実力を完全に発揮できるテーマであり、空っぽのフィールドが相手だと微妙にその力も空回りしてしまうのだ。

どちらが有利で、どちらが不利なのか。きわどいバランスで成り立つ両テーマの関係は複雑怪奇そのものであり、だからこそ使い手の腕が如実に表れる。

『それでは皆様お待たせしました、私のターン！』

ここで鳥居は残る魔界劇団から強力なリンクモンスターであるヘビーメタルフォーゼ・エレクトラムをリンク召喚してさらに場を整えることも、あるいはさらに高リンクのモンスターを呼び出すこともで

きた。しかしそれをためらわせるのが、ロベルトが伏せた2枚のカードである。先ほども彼の頭をよぎった万能カウンター、妖仙獣の秘技。もしあのカードをこちらの展開に対しづつけられた場合、目も当てられないことになるのは容易に予想が付いた。

『まずは、そうですね。先ほどの攻防はあくまでも本編開始前のプロローグ、いよいよ物語の動き出すオープニングと参りましょう。守備表示だったサツシー・ルーキー及びワイルド・ホープを2体とも攻撃表示に変更し、ビッグ・スターの効果発動！デッキから魔界台本1冊をフィールドに直接セットします』

「……」

ロベルトの答えは、沈黙。伏せカードに妖仙獣の秘技があるという恐れがそもそも彼の杞憂なのか、あるいはビッグ・スターの効果ならば通してもよいとの判断か。まだ、判断材料は出揃っていない。

魔界劇団―サツシー・ルーキー 守1000↓攻1700

魔界劇団―ワイルド・ホープ 守1200↓攻1600

『そして私が選択いたしますは、2枚目の魔界台本「オープニング・セレモニー」！ですが、こちらの開演はもう少し後といたしました。路傍に佇む要石、魔界劇団―エキストラを召喚。よろしければ、そのまま効果へと移らせていただきます。自身をリリースすることで、デッキから異なる演者を私の空いたPゾーンに直接発動！ただしこのターン、私は魔界劇団以外の特殊召喚が行えません』

「……」

魔界劇団―エキストラ 攻100

『ここで呼び出しましたるはスケール8、酸いも甘いも知り分けた古老。ダンディ・バイプレイヤーをセッティング！』

ペンデュラムカードを張り直したことで、最初にセッティングされていたデビル・ヒールと合わせて描かれたスケールは1と8。しかしこれにも、ロベルトは動かないままの姿勢を維持していた。まるで何かのタイミングを待っているかのような沈黙にやや引っかけかきりを感じるも、だからといって彼にできることがあるわけではない。

『それでは参りましょう、ペンデュラム召喚のお時間です。先ほど手

札に戻りし魔王、魔界劇団―ビッグ・スター！そしてエクストラデッキから呼び出しますは、魅力あふれる魔法のアイドル。魔界劇団―プリティ・ヒロイン！』

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500

『忘れぬうちにここで、たった今ペンデュラム召喚に成功したビッグ・スターの効果を発動いたします。このカードの召喚または特殊召喚の際、相手は魔法及び罫を発動することはできません。さらにダンディ・バイプレイヤーを利用してのペンデュラム召喚に成功した際、私は舞台袖たるエクストラデッキからレベル1、または8の魔界劇団1体を手札へと呼び戻すことが可能となります。再びエクストラを手札に！』

小太りの小さな老人がトランプを明るく吹き鳴らすと、対となるペンデュラムゾーンではデビル・ヒールがどこからともなく取り出したシンバルを調子よく打ち鳴らす。簡易的なセッションの音楽に、ファンタスティックシアターの内部から目は見えない裏方の楽団がさらに調子を合わせて音色を奏でる。

『素晴らしい演奏に拍手を。そして先ほどビッグ・スターの手によって伏せられましたこのカードを発動いたしましたよう、魔界台本「オープニング・セレモニー」！私のフィールドに存在する魔界劇団1体につき、500のライフを回復いたします』

カラフルな花火が一斉に上がり、場に残った演者たちが賑やかな音楽を背後に観客たちに手を振って開演の挨拶を行う。これで彼が先ほど受けたダメージは帳消しとなり、それどころか莫大なおつりまで帰ってきた計算になる。2体の魔妖仙獣に圧倒されていた観客も、この華やかな舞台挨拶でまた少し関心を取り返すことに成功した。

鳥居 LP3000↓6000

とはいえ、ライフ差が付いたからといって彼に安心できる要素が増えたわけではない。6000のライフは確かに高い数値ではあるが、2体の魔妖仙獣が本気を出しさえすればいまだ即座に吹き飛ばような数値でしかない。そしてここまでの動きに一切の邪魔が入らな

かったことで、またしても選択の余地が生まれた。すなわちここでバトルフェイズに入るのか、それともペンデュラム召喚した方のビッグ・スターの効果を先に使うかの2択である。

少し迷った末、彼はもう少しだけ慎重に戦いを進めることにした。下手に魔王の降臨を持ってこずともこのモンスターたちによる一斉攻撃が通りさえすればロベルトのライフは十分0になる、ということも大きい。

「では最後に、モンスターとしてのワイルド・ホープの効果を発動。1ターンに1度そのターンの間、場に存在する魔界劇団1種類につき100ポイントだけ攻撃力をアップします。そして私の場の魔界劇団は、恐るべき分身の秘術により2体に増えましたビッグ・スターを含めた計5種類。チェンジパワー・バレット！」

魔界劇団―ワイルド・ホープ 攻1600↓2100

「お待ちせいたしました、場面変わりました我々の反撃！バトル、ワイルド・ホープで……！」

「バトルフェイズ？時は来た。速攻魔法、妖仙獣の風祭り！妖仙獣モンスターカードが3枚以上、その中のモンスター全てバウンス。さらに、手札5枚になるようドロウする」

ロベルトのワイルドに妖仙獣モンスターは凶旋嵐、そして鎌参太刀の2体しかない。しかし風祭りのカードが発動条件に指定するのは妖仙獣「モンスターカード」であるため、今は魔法カードとして場に存在してもその本質はモンスターである右鎌神柱、そして左鎌神柱もその数としてカウントされる。それでいてバウンスされるのは妖仙獣「モンスター」、つまりモンスターとして場に出ている2体だけ、ということになる。

「ですがいくら手札を増やそうと、そのカードを使えばチャンピオンのワイルドはがら空きになってしまいますが……！」

「当然、計算済み。速攻魔法、マスク・チェンジ・セカンド！手札1枚捨て、風属性モンスターの凶旋嵐を対象として墓地に。属性の等しい^{マスクドヒーロー}M・HEROを呼ぶ。変身召喚、M・HERO カミカゼ！」

木魅が墓地へと送られ、凶旋嵐が風と共に飛び上がる。空中で懐か

ら取り出した鳥めいた仮面をかぶると、ボロボロの装束とは打って変わって清潔感漂う純白のマントが、そして明るい緑色の戦闘スーツがその身を包み込んだ。

M・HERO カミカゼ 守2000

『変身……召喚……！』

読み切れなかったことに、小さく歯噛みする。彼が「手札コストの必要な伏せカード」についてマスク・チェンジ・セカンドにまで考えが至らなかったことを責めるのは、果たして酷だろうか。

少なくとも、彼自身はそうは思わなかった。確かに「妖仙獣」はあまり混ぜ物に適しておらず、使う場合はなるべく純構築でのデッキが好ましいとされるテーマである。しかしロベルト・バックキヤップ、^{バックキヤップ}後ろ帽子のロブは、あの糸巻と同じ元プロデュエリストだ。プロのデッキは混ぜ物が多い……奇しくも彼女自身がつい先ほど刺客に対して論じた言葉は、鳥居自身も幾度か聞いて来た覚えがある。それでも、その存在にまで考えが至らなかった。それは、彼にとっては不覚以外の何物でもない。しかもあのカミカゼは戦闘破壊されない効果を持つため、強引に力技で押し通す手も使えない。

『ならばメイン2に移行し、もうひとりのビッグ・スターの効果をついに発動。今回紡がれし演目名は、魔界台本「魔界の宴咤女」！』
彼が選んだカードは、先ほども彼のピンチを救った魔界台本。しかし彼の狙いは、もはやそこではない。

『ですがこの台本、今回は先ほどまでとは一味違う筋書きを皆様にはお見せいたしました。セット状態から永続魔法、魔界の宴咤女を発動。このカードは1ターンに2度まで魔界劇団をリリースすること、墓地に存在する他の演目をアンコール上演、すなわち私のフィードに再びセットすることが可能となるのです。まずはサツシー・ルーキーをリリースし、魔王の降臨を再セット。さあ、再び開かれるその台本の力によって魔王の威光をもう1度天下に知らしめる時がやってまいりました！魔王の降臨を発動、魔王ビッグ・スターをはじめめとしデビル・ヒール、プリティ・ヒロイン、ワールド・ホープの4種類の魔界劇団が存在することで私の破壊できるカードは4枚まで、

よって右鎌神柱、左鎌神柱、カミカゼの3枚を破壊!』」

カミカゼはどうか処理したものの、厄介なサーチ能力を持つ鎌参太刀に逃げ切られてしまったことは大きい。しかも風祀りにチェーンして手札の木魅と場の凶旋嵐が同時に墓地へと送られたことで、その枚数だけドロートしたカードの枚数も余分に増えている。

ちなみに右鎌神柱、及び左鎌神柱に関しては、元々妖仙獣の神風によって発動されたカードであるためにこのターンの終わりが来れば自壊する。あまり戦術的に意味のある行為だとは言いが、だからといって何かを損じたわけではない。それは彼にとって、なけなしの抵抗だった。

『そして、手札に残る最後のカードをセット。これで、私はターンエンドです。そしてこの瞬間、ビッグ・スターの効果により場に置かれた魔界の宴咤女は墓地へと送られます』」

魔界劇団―ワイルド・ホープ 攻2100↓1600

「俺のターン。魔法発動、妖仙獣の神風。このターンもデッキから2枚を発動、そのまま効果でスケール上げる。もう1度出でよ右鎌神柱、再び応えよ左鎌神柱!」

妖仙獣 右鎌神柱 スケール5↓11

まるで何事もなかったかのように破壊されたはずの一組の鳥居が甦り、先ほどのリフレインのようにそのスケールが大きく動く。これで再び、レベル10を誇る魔妖仙獣を呼び出すための準備が整ったこととなる。

しかし、前回に不意を突くことで大きくその目論見を崩したファンタステイクシアターはすでに存在が見えている。当然、あの時と同じ展開だけで終わるはずもなく。

「妖仙獣 鎌参太刀を召喚。召喚成功時、同名以外の同胞を通常召喚できる」

『くっ……ファンタステイクシアターは、最初に発動した効果を強制的に書き換えます』」

妖仙獣 鎌参太刀 攻1500

鳥居の伏せカードは、2枚。そのうち1枚はプリティ・ヒロインの

効果でセットしたオープンング・セレモニーであることが公開情報として開示されており、もう1枚の後から伏せた1枚はロベルトにはわからない。わずかな間が空き、ロベルトが破壊を選んだのはオープンング・セレモニーのカードであった。鎌参太刀の放り投げたどんぐり製の独楽がその上にふわりと乗り、高速回転の後にそのカードごと小規模な爆発を起こす。

『そして私のエクストラデッキに表側の魔界劇団が存在し、セットされた状態から破壊されたオープンング・セレモニーの効果を発動。私の手札が5枚になるよう、カードをドロウします。嗚呼なんということでしょう、これは単なる偶然の一致なのか、あるいはなんらかの運命だともいうのでしょうか？これはまさに先ほどチャンピオン自身が使用した妖仙獣の風祀りと同じ「手札が5枚になるまで」ドロウを行う効果です』

一気に潤沢となった手札を互いに抱え、相手の次の出方に目を光らせる。彼は運命論者ではないが、ある程度の筋書のようなものが人生にあるとは感じていた。その中の1つがこの戦いなのかは、いまだ判別つかなかったのだが。

「墓地の木魅、効果発動。このカードを除外、手札の妖仙獣を通常召喚。妖仙獣……吹き抜ける、侍郎風！」
サブローカセ

編み笠がやたらと特徴的な、和装には珍しい金髪の獣人が特に意味もなく天を指さしたポーズで現れる。もっとも、特に意味もなく天を指すのは彼の操るビッグ・スターも似たようなものであるのであまり人のことを言えた立場ではないのだが。

妖仙獣 侍郎風 攻1700

「他の妖仙獣がいる時、侍郎風召喚。この瞬間効果により、妖仙獣のペンデュラムをサーチ。レジェンドコンボ・ワン！来たれ、大刃禍是！」
『なんとということでしょう、またしても手札に加わるは先ほどもフィールドへと降り立った魔妖仙獣の双璧、その名も独眼群主！烈風の神域より再び降臨の準備を着々と進める妖獣軍団に対し魔界劇団、これをどう立ち向かうのか？』

「侍郎風の更なる効果発動！フィールドの妖仙獣を選択、デッキから

特定のカード2枚から1枚を選ぶ。それをフィールドに表側で置き、最初のカードをデッキへ戻す。レジエンドコンボ・ツー！左鎌神柱を対象に発動せよ、妖仙郷の眩暈風！」

「『永続トラップをフィールドに伏せることなく直接発動する効果！演者たちの周りを、気が付けば不吉な風が巻き起こっております！この圧倒的攻勢を前に、どのように彼らは耐えきるといえるのでしょうか？運命の瞬間は、もうすぐ訪れます。どうかごゆるりと、このままにお楽しみください』」

言葉とは裏腹に、鳥居は自分の浮かべたその笑顔がぎこちなくなってきたのを感じていた。このターンだけなら、まだどうにかなる。だが、妖仙郷の眩暈風がこのタイミングで飛んでくるのはさすがにまずい。

「手札から3度目の左鎌神柱を、レフトPゾーンにセッティング。ペンデュラム召喚！」

これまでで最大の規模を誇る大怪風が、天から地上に向けて叩きつけられる。鳥居は寸前で大きく後ろに飛んで壁にぴたりと背をつけたために再び上空に巻き上げられるような事態こそ防いだものの、それでも壁と風に前後から押さえつけられて息ができなくなるほどの力に襲われる。

「逢魔が刻。妖魔の神域脅かされし時、その怒り星々さえも揺るがす大怪風となる！魔妖仙獣……吹き荒れよ独眼群主！ヒトツメノムラジ解き放て大刃禍是！ダイバカゼそして巻き起これ、妖仙獣 ヤマミサキ閻魔已裂！」

魔妖仙獣 大刃禍是 攻3000

魔妖仙獣 独眼群主 攻2000

魔妖仙獣 大刃禍是 攻3000

妖仙獣 閻魔已裂 攻2300

「『これだけの上級モンスターを同時にペンデュラム召喚……！これはチャンピオン、本気で勝負を決めに来たということでしょうか！』」
「独眼群主、大刃禍是、閻魔已裂の効果を同時に発動！独眼群主でモンスターゾーンのデビル・ヒールを。大刃禍是でそれぞれビッグ・スター2体とワイルド・ホープ及びプリティ・ヒロインを手札に戻す

……だがこの瞬間、妖仙郷の眩暈風の効果！このカードが存在する、よって妖仙獣以外のモンスターに対するバウンスはすべてデッキバウンスと書き換えられる……妖仙ロスト・トルネード！」

「これは魔界劇団、最大のピンチ！ペンデュラムモンスターにバウンスは効果がありませんが、デッキバウンスともなれば話は別でございませぬ。眩暈風に誘われてふらふらとデッキに帰ってしまう彼らを正気に返すすべは、果たしてあるのでしょうか？その答えはイエス、です！速攻魔法、魔界台本「ロマンティック・テラー」を発動！」

最後の伏せカードが表を向いた瞬間、フィールドに地面から巨大な石造りの塔が生える。荒ぶる風にもびくともしない堅牢なその塔の上部に空いた窓から、いつの間にかドレス姿となっていたプリティ・ヒロインがよほど自分の格好にご満悦なのか喜色満面の笑みで顔をのぞかせた。そしてその視線の先にはこういう舞台は苦手なのか、見るからにげんがりした顔で薔薇の花束を手に糊のきいたスーツ姿を風になびかせるサッシー・ルーキーの姿が。

飛び上がった彼はそれでも台本通りに塔を駆け上つてその窓までたどり着き、半ば押し付けるようにして囚われの姫役に花束を手渡す。ロマンスの欠片もない相手役の態度にやや不満げな表情のヒロインはそれでもオーバリアクションで喜びをあらわにしてみせ、そのままとんでもない怪力でとつとと降りたがるサッシー・ルーキーを塔の中に引きずり込む。しかしその数秒後にはスーツを脱ぎ捨てていつもの格好に戻った当の騎士役が、また窓から外へとすたこらさつさと逃げ出していく。そんなことをしているうちに、すっかり風は風いでいた。

「ロマンティック・テラーは発動時に私の場から魔界劇団を1体手札に戻し、その後エクストラデッキから異なる魔界劇団を守備表示で特殊召喚する能力を持ち合わせた当劇団には珍しいロマンス重視の作品。もつともこの騎士役は、自身の役に若干の不満があるようだがね。エクストラモンスターゾーンに存在したプリティ・ヒロインを手札に戻し、先ほどリリースされたサッシー・ルーキーを特殊召喚！」

魔界劇団―サッシー・ルーキー 守1000

ほとんどのモンスターがデツキに戻ってしまうも、ギリギリのサクリファイス・エスケープでどうにかフィールドが空になることだけは防いだ鳥居。しかしまだロベルトのフィールドには、もう1体のペンデュラム召喚された妖仙獣が存在する。鬼の角を生やす大柄な僧衣の獣人が、包丁のような形をした恐ろしく巨大な刀を片手で軽々と地面に叩きつけて旋風を巻き起こした。

「閻魔已裂がペンデュラム召喚に成功した、効果発動。相手フィールドのカードを1枚破壊、対象はファンタスティックシアター！」

「度重なる嵐に耐え切れず、ついに魔界劇場が崩れ落ちてしまいました！それでも我々は決して挫けません、この最終幕を閉じきるまでは！」

「このターンで、幕は落ちる。私が落とす。独眼群主の効果！カードが手札及びデツキに戻ったことで、妖仙獣パワーアップ！」

3体もの魔妖仙獣の怒りにより、このターンデツキに戻ったカードは鳥居の4体。1枚につき500もの強化が、エクストラモンスターゾーンも含め6つのモンスターゾーン全てを埋め尽くしたロベルトの妖仙獣を劇的にパワーアップさせていく。

魔妖仙獣 大刃禍是 攻3000↓5000

魔妖仙獣 独眼群主 攻2000↓4000

魔妖仙獣 大刃禍是 攻3000↓5000

妖仙獣 閻魔已裂 攻2300↓4300

妖仙獣 鎌参太刀 攻1500↓3500

妖仙獣 侍郎風 攻1700↓3700

「閻魔已裂でサッシー・ルーキーに攻撃、鞍馬山おろし！」

巨体の重さを感じさせない軽々とした動きで、必殺の凶刃が迫る。振り切られる最中、その刀身に風がまとわりついて渦を巻くさまが鳥居にはくつきりと見えた。

「閻魔已裂が風属性以外とバトルする。その時、ダメージステップ開始時に相手は破壊される」

「『ならばこちららも、サッシー・ルーキーの効果を発動！このカードは

1ターンに1度のみ、戦闘及び効果によっては破壊されません!」
「無論。だがこの効果はダメージ計算前、続く戦闘破壊は受けきれない」

その言葉通り、振りぬかれた刀によってサッシー・ルーキーの細い体はいとも簡単に吹き飛ばされる。そのまま後ろまで吹き飛ばされたその体は、派手な破壊音と共に壁にぶつかってクレーターを作った。

妖仙獣 閻魔已裂 攻2300↓魔界劇団―サッシー・ルーキー
守1000 (破壊)

「まだです!サッシー・ルーキーがモンスターゾーンにて破壊された時、その効果を発動!デッキからレベル4以下の仲間を選び、私のフィールドに特殊召喚いたします。残念ながらプリティ・ヒロインは既に私の手札にありますゆえにその呼び声に応えることはできませんが……ワイルド・ホープを特殊召喚!」

魔界劇団―ワイルド・ホープ 守1200

「無駄な抵抗。鎌参太刀で攻撃!」

妖仙獣 鎌参太刀 攻3500↓魔界劇団―ワイルド・ホープ 守
1200 (破壊)

「ワイルド・ホープが破壊されたことで、効果発動!デッキから魔界劇団を選択し、手札へと加えます。今回私が選ぶのはスケール8にて波乱巻き起こすアドリブの達人、魔界劇団―コミック・リリーフ。さらに私のペンデュラムモンスターが戦闘破壊されたことにより、手札からメロー・マドンナの効果を発動!仲間を吊う鎮魂歌を奏するため、このカードを特殊召喚いたします。我らが誇る世界の歌姫、魔界劇団―メロー・マドンナ!そしてその攻撃力は、墓地に存在する魔界台本1冊につき1000アップ!」

魔界劇団―メロー・マドンナ 守2500 攻1800↓2300
サッシー・ルーキー、ワイルド・ホープ、そしてこのメロー・マドンナ。切れ目なく続く戦線が、辛うじて直接攻撃から鳥居を守り続けていく。まさに綱渡りでの攻防に、あきらかにロベルトは痺れを切らし始めていた。

「だが守備力2500、壁としても不足。侍郎風でさらに攻撃！」

「確かにこのままでは、いまだ後ろに控える魔妖仙獣の恐るべき猛攻をしのぎ切ることは不可能でしょう。しかしそれは、あくまでも魔界劇団の独力に限った話。それではここで、特別ゲストのご登場です！」

「ゲスト……？」

何かを感じ取り、不愉快そうに眉をひそめるロベルト。刀を手に風と共に駆け抜けてメロー・マドンナを切りつけに迫っていた侍郎風の斬撃は、しかしそのドレスに届くことなく空を切った。慌てたように編み笠を持ち上げて視界を広げ獲物を探す侍郎風の頭上に、ふっと黒い影が差す。咄嗟に上を見た獣人が目にしたのは、手にした杖を空中に浮かべてそれに片手で掴まり、もう片方の手でメロー・マドンナの手を掴み空中に引き上げた長身の魔法使いの姿だった。

「それではその名をお呼びしましょう、彼こそは稀代の大スペクタクルサーカス団、EMエンタメイトからいらつしやった特別ゲスト。EMオッドアイズ・デイゾルヴァーの登場です！」

妖仙獣 侍郎風 攻3700↓魔界劇団―メロー・マドンナ 守2500

EMオッドアイズ・デイゾルヴァー 守2600

「オッドアイズ・デイゾルヴァー……！」

「その通り。オッドアイズ・デイゾルヴァーはペンデュラムモンスターが戦闘を行う際に手札から特殊召喚を行うことができ、さらにその戦闘によってはトリガーとなったモンスターが破壊されなくなる効果を持ちます。よって、侍郎風との戦闘から歌姫メロー・マドンナは守られました！」

悔しそうに地団太を踏みながら侍郎風が引き返す風景を背後に、魔術師が歌姫をそつと地面に下ろす。しかし、そんな彼らに対し真の暴風が唸りをつけて今まさに襲い掛からんとしていた。

「独眼群主でメロー・マドンナ、大刃禍是でオッドアイズ・デイゾルヴァーに攻撃！」

魔妖仙獣 独眼群主 攻4000↓魔界劇団―メロー・マドンナ

守2500 (破壊)

魔妖仙獣 大刃禍是 攻5000↓EMオツドアイズ・ディゾル
ヴアー 守2600 (破壊)

「これで、全ての壁は消えた。大刃禍是、ダイレクトアタック！」

魔妖仙獣 大刃禍是 攻5000↓鳥居 (直接攻撃)

鳥居 LP6000↓1000

「ぐ……ぐわああーっ!!」

力業でこじ開けられたフィールドに、今コロシウムで発生した中でも最大級のダメージである5000もの攻撃力が圧倒的な暴力として振り下ろされる。叫んだのは痛みからではなく、叫びでもしないとそのまま意識が消えて最悪目覚められなくなりかねないという本能的な恐怖からの防衛手段だった。

「あ……ぐ……げほっ！げほっ！」

ぼろ雑巾のように床に叩きつけられ、勢い余ってさらにバウンドしてまた叩きつけられる。どうにか止まったところで手をつけて必死に起き上がろうとするも、手足にうまく力が入らないうえに散々吹き飛ばされたことによるカラの吐き気に脳を揺さぶられてまたしてもその場に崩れ落ちる。それでも必死になって床を這い、自身の作り出した光の柱……ペンデュラムスケールにしがみつくようにしてどうにか体を持ち上げる。

「ぐ……ぐぎぎ……ぐ……！まだ……まだ、です……！まだ、私のライフは、尽きてはいません……！さあ、舞台を、続けましょう！」

「……承知。鎌参太刀の効果。妖仙獣がダメージを与えた、よってデッキから妖仙獣の秘技を手札に。カードを伏せてターンエンド。そして特殊召喚された独眼群主、大刃禍是、閻魔已裂。通常召喚された鎌参太刀、侍郎風の効果発動。すべて手札に戻る」

フィールドを埋め尽くしていた6体のモンスターが、嘘のように風と共に消えていく。今度フィールドが空になったのは、このターンに決めきることのできなかつたロベルトの方だった。デュエリストならではの回復の速さでどうにかその隙に体勢を立て直した鳥居が、今にも倒れそうに膝を震わせながらも自分の足だけで再び立ち上がる。

『いよいよ勝負も大詰め、クライマックスが近づいてまいりました。これが最後のドロ―となるか、はたまた次のターンに再びあの嵐のような軍団が今度こそ私にとどめを刺すのか。もう同じ防御の手は使えません、いずれにせよこれが真正銘のラストターンと相成りました。いまだ無傷のチャンピオンのライフをこのターンが終わるまでにすべて奪われぬ限り、私に勝ちはありません』

言いながら、デッキトップに手をかける。そして、その言葉に嘘はない。そもそもが、結果論とはいえ今のターンを凌ぎ切れたこと自体が奇跡のようなものだ。もしロベルトがフィールドに存在したモンスター^の全デッキバウンスを狙わずに1体でも攻撃表示のまま残しておいていたら、いくら防御を繋ごうとも超過ダメージで鳥居のライフは尽きていただろう。

そして彼は、それを偶然とは捉えない。むしろその小さな奇跡をこのターンに繋がる勝利への前兆と捉えているからこそ、その意識を手放すことなく力強くカードを引く。

『それでは皆様ご覧あれ……ドロ―っ！』

そして引き抜かれる、最後の一枚。そんな彼の腕の動きを会場中が固唾を呑んで見つめていることを、心のどこかで感じていた。いまやこの会場の中心にいるのは元プロとしての長い経歴と実績を持つチャンピオン、後ろ帽子バックキャップのロボではなく、ほぼ無名の劇団にいた元子役でしかない鳥居だった。

『永続魔法、魂のペンデュラムを発動！このカードは私がペンデュラム召喚を行うたびにカウンターを乗せ、カウンター1つにつき私のペンデュラムモンスターは攻撃力が300アップいたします。そしてこの場に張り巡らされしペンデュラムスケールは、1と8。よってこのターンもまた、レベル2から7のモンスターを同時に召喚可能！長かったこの最終幕もいよいよファイナーレの時を迎えます、最後まで目を離さぬよう心よりお願いいたします！』

そして行われる、ペンデュラム召喚。演者たちが、最後の出番に取り掛かる。

魂のペンデュラム(0) ↓ (1)

「まずはエクストラデッキより、数字を操る凄腕のガンマン。魔界劇団―ワイルド・ホープ！」

魔界劇団―ワイルド・ホープ 攻1600↓1900

「そして手札より魅力あふれる魔法のアイドル、魔界劇団―プリティ・ヒロイン！波乱を起こすアドリブの達人、魔界劇団―コミック・リリーフ！まばゆく煌めく期待の原石、魔界劇団―ティンクル・リトルスター！」

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500↓1800

魔界劇団―コミック・リリーフ 攻1000↓1300

魔界劇団―ティンクル・リトルスター 攻1000↓1300

「そしてもちろん、この方を忘れるわけにはいきません。当劇団における栄光ある座長にして、永遠の花形……魔界劇団―ビッグ・スターです！」

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500↓2800

「ワイルド・ホープの効果を発動、チェンジパワー・バレット！4種類の魔界劇団が存在することで、その攻撃力は400アップいたします！」

魔界劇団―ワイルド・ホープ 攻1900↓2300

本来ならばこのターンも魔王の降臨をビッグ・スターの効果で取り寄せ、ワイルドに残る右鎌神柱と左鎌神柱をきちんと露払いしたうえで攻撃するのが彼の流儀である。だがそれをさせないのが、ロベルトの場に伏せられているはずの妖仙獣の秘技の存在である。妖仙獣以外のモンスターが存在せず、かつワイルドに妖仙獣カードが存在するときのみ発動可能な万能カウンターをビッグ・スターに使われては、さすがに勝利も望めそうにない。神域へ続く神々の通り道は放置して、その奥の使い手に狙いを定める。

「それではいよいよ真正正銘のクライマックス、最終幕はラストシーンと参りましょう！プロローグにて世界を支配していた恐るべき魔王ビッグ・スターとその愉快な仲間たちは長き時を経て紆余曲折の末に失われた力全てを取り戻して現世への帰還を果たし、神風の神域との最後の戦いに決着をつけに参りました。先陣を務めるはコミック・

リリース、まず最初のダイレクトアタックです！」

魔界劇団―コミック・リリース 攻1300↓ロベルト(直接攻撃)

ロベルト LP4000↓2700

セオリー通りに行われる、攻撃力の低いモンスターからの攻撃。それが通った時、ふと鳥居は妙な感覚を覚えた。何がおかしいというわけではない。ただロベルトの態度がこれから敗北を受け入れようとしている人間のそれに見えない、そんな気がしたのだ。

「……? ティンクル・リトルスター、続けてダイレクトアタック！」

魔界劇団―ティンクル・リトルスター 攻1300↓ロベルト(直接攻撃)

ロベルト LP2700↓1400

しかし、この攻撃にもロベルトは反応しない。

「プリティ・ヒロイン！」

「手札から妖仙獣の閻魔已裂を捨てる。これにより、このカードを特殊召喚する！ 妖仙獣……轟け、オオヤマビコ大幽谷響！」

妖仙獣 大幽谷響 守?

天を突く山のように巨大な、妖仙獣最後の守りの要。その攻守の数値は叫びをそのまま跳ね返すやまびこの名の示す通り、相手によって目まぐるしく変化する。

「大幽谷響の攻守は、戦闘する相手の元々の攻撃力と常に同じ。尤も……」

「私のモンスターはすべて、魂のペンデュラムにより強化されている、ですか。攻撃は止めず、このままプリティ・ヒロインで大幽谷響に攻撃！」

魔界劇団―ビッグ・スター 攻1800↓妖仙獣 大幽谷響 守?

↓1500 攻?↓1500

「左鎌神柱、ペンデュラム効果！ 妖仙獣の破壊、身代わりとする！」

攻撃力で劣る大幽谷響はしかし、星型の魔法弾を受けてなお耐えきった。変わらずそびえ立ち両手を広げてとおせんぼするその巨峰に、ガンマンがその銃を両手で構えて狙いを定める。

「ワールド・ホープで続けて攻撃！」

魔界劇団―ワイルド・ホープ 攻2300↓妖仙獣 大幽谷響 守
?↓1600 攻?↓1600 (破壊)

「大幽谷響が破壊、妖仙獣1体サーチ。来い、独眼群主！」

そして手札に加わったのは、このデュエルの始まりからずっと彼を苦しめてきた独眼の紅龍。しかし、その偉容が再びフィールドに現れることは、ない。

「これにて終演、ここまでのご観覧誠にありがとうございました。魔界劇団―ビッグ・スターでダイレクトアタック、フルスロットルオベーション！」

ビッグ・スターが飛んだ、飛んだ。三角帽子を風に揺らし、その細い手足が猛スピードできりもみ回転してのドリルさながらの飛び蹴りが天空高くから強襲する。最終幕は、花形の手によつて閉じられた。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500↓ロベルト (直接攻撃)

ロベルト LP1400↓0

『き……決まったあーっ！まさかまさかの大波乱、優勝はチャレンジジャー、鳥居浄瑠だあーっ！』

スピーカーから声が響き、1瞬の沈黙。次の瞬間、会場全体が揺れたかと思まごうほどに観客が湧いた。鳥居の勝利に賭けて莫大な配当金を手にしたごく少数、ロベルト勝利の当てが外れて大損が確定した者、賭けには参加せずにただデュエルを楽しみにしていた者……様々な悲喜こもごもの感情が爆発するも、その反応はやがてひとつに纏まっていった。いったい誰が最初に始めたのか、最初は小さかった2人の勝負をたたえる拍手が、やがて全体に広がっていったのだ。

そしてそんな全方位から浴びせられる拍手を受けてほとんど反射的に深々とした礼を返しながらも、鳥居は自身の目頭が熱くなるのを感じていた。これがかれこれ10年以上ずっと味わう機会のなかった、もはや記憶の中だけの皆を楽しませるデュエルの形。

「う……い」

そんな彼の視界の端に、うめき声と共に起き上がるうとするロベルトの姿が見えた。そのトレードマークである後ろ向き帽子は、あれだけのデュエルを経てもなお頭から外れる気配はない。

「チャンピオン！」

近寄って手を差し出し、巨人が起き上がる手助けをする。その手を掴んで頭を振りつつ起き上がったロベルトもまた割れんばかりの拍手を見渡し、小さく微笑んで一礼する。

「見事。俺も現役と比べ腕は鈍っている、だがお前は強い、それに変わらない。生まれる時代が違えば、立派なプロになれた男だ」

「あいにくだけど、プロ入りには興味がないですよね」

肩をすくめてそう返すと、何がおかしいのか轟くような大声で体を反らせて笑い出すロベルト。その発作が落ち着くまでには、30秒近い時間が必要になるほどだった。

「とぼけるな、お前は表舞台に立つ。そうすべき男だし、実際そうだったはずだ。あの場慣れした雰囲気は、素人に出せるものではない」

「……さて、なんのことやら」

「まだとぼけるか？ まあいい、今日は楽しかった。これは礼だ」

あまり深く追及は行わず、代わりにロベルトが取り出したのは一枚のカードだった。差し出されたそれを見た鳥居が、思わずその顔を見上げて問い返す。

「こ、これって？」

「このカードをどう使うか、俺の感知するところと違う。使いたければ使えばいい、そうでなければ仕舞うなり売り払うなり、自由だ。だが俺はお前が戦士として気に入った、これはその敬意の証だ」

「あ、ありがとうございます……ごさい、ます？」

戸惑いながらも受け取ると、その反対の手をいきなり掴んだロベルトがおもむろにその手を上に掲げる。されるがままに手を高くあげさせられ混乱する鳥居の耳に、頭上から低いがよく通る彼の声が響いた。

「今回は俺の負けだ。この男に、もう一度祝福を！」

チャンピオン直々の言葉に、より一層の拍手が巻き起こる。ふと最

後の攻防についてどうしても聞きたくなくなり、他人に気取られないように小さく問いかける。

「そういや最後、どうして大幽谷響の効果を使っただんです？」

例え大幽谷響と左鎌神柱のコンボで持ちこたえたとしても、魔界劇団の一斉攻撃を受けられるほどではない。それは、ロベルト自身もよく分かっていたはずだ。にもかかわらず、彼は最後まで粘ろうとした。その理由を問おうとしたのだ……しかし、答えは鳥居にもすでに予想がついていた。それは質問というよりも、確認としての意味合いが強い。

そして案の定、ロベルトはさも当然のことのような口ぶりで予想通りの答えを返す。それは鳥居好みの返答であり、そして彼の女上司もそう答えただろうことは容易に想像がついた。その部分において馬が合うからこそ、彼は口ではさんざん言いつつも彼女の部下としての地位に居座っているのだから。

「お前も知っているはずだ。最後の最後まで戦う、それがエンターテインメントだ」

エピローグ

その日の朝に糸巻が自らの事務所で最初に目にしたものは、以前なけなしの予算をつぎ込んでリサイクルショップから掘り出してきた箱型おんぼろテレビの前で今日の日付の新聞を万力のような力で握りしめつつ画面を穴が開くほどに睨みつけていた部下の姿だった。彼女のために断っておくと、本来彼女はトラブルに目がない性格だ。人の愚痴を肴に一服たしなむのは、数少ない彼女のデュエル以外の趣味のひとつである。

ただ、その日の朝に限っては若干調子が違っていた。消化不良のままに打ち切られたデュエル、いまだ体から抜けきらない無茶な連戦による痛みの残滓、妨害電波の通用しない進化した「BV」、賠償もとれぬままスクラップと化した愛車……いかに百戦錬磨の彼女といえど、昨夜の出来事は少々逆風が強かったのだ。いつもの元気に若干の陰りが生じていたとしても、誰も彼女を責めることはできないだろう。「……」

「あ、糸巻さん。おはようございます……」

自分以上に負のオーラを全開にしている鳥居にくるりと背を向けて気づかれぬうちに退室しようとした矢先、かすかな気配を感じ取ったのを見るからにげんなりした様子の声をかけられる。最初にこの部屋へ足を踏み入れた瞬間から回れ右をしなかった自分のうかつさに心中呪いの言葉を吐き捨てながらも、諦めて胸ポケットから煙草を1本抜き出しつつ椅子に腰かける。

「よう、鳥居。ひっどい面してんなお前」

「お互い様っすね。んなことより糸巻さん、ニュース見ましたかニュース」

「あー？」

堂々とした喫煙にもまるで無反応で……というよりは、それすらも目に入っていないのだろう。テレビを腕で示しながら、同時にくちやくちやの新聞を放り投げる。とくに強く握られていたのであろう箇所を開いて目を通すと、次のような記事タイトルが彼女の目に飛び込

んだ。同時にテレビからも、慌てた様子のキャスターの声が聞こえてくる。

『デュエルポリスフランス支部、大手銀行の摘発!』

「おはようございます、まずは臨時ニュースです。日本時間で先日の深夜3時に行われたフランスの大手銀行、フルール・ド・ラバンク社へのデュエルポリスによる強制摘発ですが、現地では今まさにデュエルポリスフランス支部代表、鼓千輪主任つみせんりんによる記者会見が行われます。現地の門部もんぶさん？」

「鼓い!? 待って待って、あいつ、今そんなに偉くなつてたのか!？」

すつとんきような大声に、さすがの鳥居も思わずといった様子で視線を糸巻に向ける。しかし肝心の彼女はといえば、もはや新聞も鳥居もそつちのけにして彼を押しやるようにしてテレビの前に慌てて陣取っていた。そんな様子など当然知る由もなく、画面はフランスに移り変わる。

『はい、こちら現場の門部です。今……あ、鼓さんが出てきました!』

またもやカメラが動き、現地のレポーターから記者会見用の簡易セットへとピントが合わせられる。そこに現れたのは整った顔立ちに浮かぶ理知的な表情と赤い縁のメガネが特徴的な、腰まで伸びた銀髪を肩あたりでゆる三つ編みに結う日本人女性。きつちりと着込んだ制服をその内側から決して慎ましやかではない程度に盛り上げて自己主張するふたつの膨らみに対し報道陣から向けられる好色な視線もどこ吹く風に、糸巻の記憶通りの女性が一礼の後に口を開く。

『まずはじめに断っておきますが、今からこちらの申し上げる内容はあくまで要点のみです。より細かい内容は判明次第追って何らかの形で公表いたしますが、今の段階では現時点でこちらが突き止めた事実のみを明らかにさせていただきます』

その顔立ちに似合った理知的な冷たい声が、フランスの街に凜と響く。質問を受け付けるつもりはない、との言外に込められたプレッシャーに静まり返った会場に対し、まるで記憶の中にあるそれと変わらない戦友の姿にかすかな小気味よさを感じて、テレビ越しに糸巻は自分の口元が緩むのを感じていた。

『ご理解いただけただけなようですので、手短かに説明に当たらせていただきます。まず結論ですが、フルール・ド・ラバンク社は黒でした。我々の押収した資料からは、彼らが組織ぐるみで「BV」への資金援助、及び裏デュエルコロシウム関連で動いた金の資金洗浄、果ては身分を偽ったテロリストへの保証人……叩けば埃だらけ、とはこのことを言うのでしようね。一般の口座開設者の方への補填に関してはこちらも今後この国と協議していく予定ですが、少なくともフルール・ド・ラバンクの名がこれ以降日の当たる場所で経営を続けることはないでしょう』

「しかし、フルールがねえ。鼓の奴、ずいぶん思い切ったことしたもんだ」

独り言ちながら、ずっと啜えたままだった煙草にようやく火をつける。フルール・ド・ラバンク、銀行としての経歴こそ比較的浅いものの比較的緩い条件で融資を受け付けることに定評があり、そのトップは世界の長者番付に常連として名を連ねる程度には羽振りがいい。それだけの会社にメスを入れたということは、かなり入念な根回しと証拠の入手が必要だったはずだ。

ゆっくりと吐き出された紫煙に遮られ白く染まったテレビ画面の中では、今の簡潔にして簡素な説明に対しその張本人とは対照的に慌てふためく報道陣の様子がよく映っていた。そしてその様子を尻目に、あっさりと背を向けて立ち去ろうとする鼓。しかしその中で一人、まだ青年と喋っているいいほどに若い一人の記者が立ち上がってマイクを向ける。

『ご、これだけは教えてください！どうして、今回の強制捜査に乗り出したんですか？そのきっかけは？』

『……私も代表としてこれから今回の件について処理しなければならぬことは数多いので、質問を受け付けるつもりはありませんでした。ですが、そのひとつだけ答えましょう。私が個人的にフルールに疑念を抱いたのは、かなり前……かの銀行の名を最初に耳にした時でした』

『そ、それは、どういう……』

『フルール・ド・ラバンク、直訳で「銀行の白百合」。決して間違った語ではありませんが、普通この語を用いるのなら「白百合の銀行」とするのがベターでしょう。それを知りつつあえてその名前にしたという可能性もゼロではありませんが、それよりも私はこの名前そのものが、自分たちの存在をテロリストどもに伝えるひとつの符丁なのではないかという可能性に思い至りました。結果は、案の定でしたよ』

そう言いつつ、制服から一枚のカードを取り出して質問した青年に見えるようにする鼓。何か聞くよりも早く、彼女自身が先手を打ってその口を開く。

『これは私が社長室へ踏み込んだ際、進退窮まった社長が「BV」を用いての違法デュエルを持ち掛けてきた際に使用していたカードです。大した腕ではありませんでしたが……いえ、話が逸れました。このカードですが、見ての通り日本版におけるその名はフルール・ド・シュヴァリエ。直訳で「騎士の白百合」……もちろん証拠が当時は存在しなかったためつい先ほどまで手出しはできませんでしたが、この摘発に「きつかけ」などというものが存在したとすればそれは、このカードとのネーミングの類似からです。このフルール・ド・シュヴァリエはフルール・ド・ラバンクの設立以前から存在するカード、つまり彼があえてデュエルモンスターズのカード名に類似した名前を付けたことになりますから』

『そんな乱暴な理由で……』

失言に気づき慌てて口を閉じる記者だが、それを聞きつけてなお鼓の表情は変わらなかった。代わりにただ肩をすくめ、ため息混じりに片手でメガネを上押し上げる。

『その通り、乱暴な推測です。それゆえにかえって誰も思いつかず、見るものが見れば一目瞭然であるにもかかわらずこれまでは疑いの目をかけられることすらなかった。実際見事な隠蔽でした、我々としても「必ず何かを隠している」という視点の元で何度も洗い直してようやく尻尾を掴めたようなものですか』

その言葉を最後に、今度こそ背を向けて去っていく鼓。その後ろ姿を呆然とした風に映す映像が流れたところで、彼女はテレビの電源を

落とした。

「いやー、面白いもん見た。んで鳥居君や、君は一体なーにをいつまでもうじうじしてるのかね。おねーさんが聞いたげようじゃない、うん？」

続けて目を向けたのは、記者会見が終わってもいまだに負のオーラを放出し続けている鳥居。彼はそのかつての仕事上テンションの切り替えがうまく、何があつたにせよここまで目に見える形で引きずり続けている時点でかなりの異常事態があつたことはわかる。

そして返事代わりに彼が投げつけてきたのは、新聞以上にぐちゃぐちゃに丸められた薄い紙きれだった。いい度胸だこの野郎と怒鳴りつけようとするのを寸前でぐつとこらえてその紙を開くと、すぐにその正体が分かった。小切手、それもその数字には随分とたくさんのお金が並んでいる。

「この記号、確かユーロか？日本円だとぎつと、あー、500万つてとこか。どうしたんだ、これ？」

「昨夜の優勝賞金つすよ。表彰の後に貰った」

「羨ましいこったねえ、アタシが現役の時でもこんなゼロだらけの額めつたに拜んだことないよ。おい鳥居、先輩には当然何割か奢るんだぞ」

「1円でも入ってくりや喜んで奢りますよ、もつとよく見てください」「あー……」

その時点で流石の彼女にもオチは予想がついたが、一応小切手をさらに広げて確認する。くつきりと印刷されたその銀行名は、案の定フルール・ド・ラバンクとあつた。ただでさえ違法な金であるうえ、おまけにその銀行は摘発真っ最中。どう控えめに表現しても、もはやこの小切手の換金が絶望的だろうということは彼女にも理解できる。

「まあ、なんだ。ドンマイ」

「俺の金えー……」

デュエル中の生き生きとした様子からは想像もつかないほどに俗物らしさを全開にして嘆く鳥居。つまるところこちらが彼の素であり、デュエル中の人格は半ばカードを手にしたときに切り替わる二重

人格のようなものである。そのことを改めて実感しつつ眺めながら、昨夜彼女自身が戦った宿敵である巴光太郎が去り際の最後に残して言った言葉を思い出す。彼はあの時、今回の裏デュエルコロシウムは鳥居が優勝しないと困る、そう言っていた。おそらくあの時点ですでに摘発によつて小切手が紙切れになった、あるいは近いうちにそうなるであろうことは彼には分っていたのだろう。そしてあの参加者のうち他の誰かが優勝していたら、そんな銀行を経由して賞金を用意しようとした彼ら自身の裏社会での信用も地に堕ちる。

だからこそこんなゴミを掴まされてもその経歴上どこかに訴えるわけにもいかず泣き寝入りするしかない彼が優勝し、この小切手を受け取る必要があった。彼女の中でようやく、パズルのピースがはまる。

「なるほどねえ。まんまとアタシらは、狐に化かされたつてわけだ」「なんですつて?」

「あーいや、こつちの話だよ。でもほら、優勝したつてことは、お前も自分のデュエルがやりきれたんだろ?ならまあ、それはそれでいいじゃねえか」

「そりやそうかもしれないですけどさあ……でもこれだけの元手があれば、昔解散の時に置く場所もないからつて二束三文で売つ払つた大道具、ちゃんと買い戻して保管用の倉庫ぐらい兜建設に頼んで割安で建てさせて、また昔の仲間と連絡とつて……つて、俺も結構大真面目に考えてたんですよ?それがさあ、こんなことつて……あー、俺の金えー……」

彼は彼なりに、皮算用ではあつたもののそれなりに切実な理由からこの賞金を当てにしていたらしい。だからだろうか、柄にもないことを彼女が口走つたのは。

「……しようがねえなあ、昼はラーメンぐらい奢つてやるから少しは元気出せつて」

「なら俺、プラス150円の大盛で……」

「駄目。80円の煮卵トッピングまでなら許してやる」

きつぱりと言い切る糸巻に、ようやく元気が戻つてきたのか呆れた

ような鳥居の視線が向けられる。

「……俺の立場で言うのもなんですけど、そういうところケチですねえ、糸巻さん」

「るせい、アタシだって毎日金欠なんだよ。奢ってやらないぞ」

こうして、ひよんなことから首を突っ込むこととなった彼女らの家紋町裏デユエルコロシアムを巡る戦いはひとまずの解決を見ることがとなった。互いにその結果には釈然としないものを残しながら、それでも戻ってきたつかの間の日常に帰っていく2人。ただ、糸巻は半ば確信していた。近いうちに、また面倒事に巻き込まれるのだろうと。

File 2―精霊のカード ターン9 破滅導く魔性の微笑み

「はあ？幽霊が出るなあ？」

あの目まぐるしい一夜から、一か月ほど過ぎたある日の朝。最初に糸巻の元へその話を持ってきたのは、彼女の小さな協力者だった。

「はい、お姉様！私はまだ見たことがないのですが、最近学校では噂になってるんですよ。女の子の幽霊が出るって」

そう尊敬に満ちたキラキラした瞳で元気いっぱいにも、もし尻尾があればぶんぶんとちぎれんばかりに振り回しているだろうことは想像に難くない様子で話すのは、八卦九々乃……元プロデュエリストの中でも屈指の実力者である七宝寺の姪であり、彼のデュエルセンスを最も受け継いだ少女である。

以前相手してやってからというものの彼女の何がそんなに気に入ったのか、あれからほぼ毎日学校帰りに煙草の匂いが染みついた彼女たちの事務所に通い詰めては嫌な顔ひとつせず彼女が溜まりに溜まった書類と大格闘する様をじっと観察しており、3日目にして音を上げた糸巻が見られてばかりだと調子が狂うということでお茶くみや資料整理をやらせはじめ、本人の飲み込みの早さもあって今では軽い雑用程度ならてきぱきとよく手伝ってくれる事実上のスタツフとなっていた。

そしてその仕事ぶり自体には彼女も文句はない。だが、そんな糸巻を唯一閉口させているのがこの、お姉様なる自分に対する呼称である。他のことならば糸巻の言葉は何でも素直に言うことを聞く彼女だが、この一点に関してのみは頑として譲ろうとしない。その頑固さにはさすがの彼女も歯が立たず、若干自分が折れかかっていることを自覚しながらも、もはや何の重みもないいつもの言葉を返す。

「そのお姉様ってのはやめてくれって言ってるだろ、八卦ちゃん。なんかこう、背中がぞわぞわするんだ」

「駄目……ですか……？」

かすかにうつむき、やや目元を潤ませる少女。その後ろで明らかに面白がっている表情で「事案ですか？」と言いたげな視線を向けて事の成り行きを見ていた鳥居をきつと睨みつけると、その効果はてきめんこれ見よがしに身震いして助け舟を出した。よりによつて八卦の方へ。

「気にすることはないよ、八卦ちゃん。この人も単に照れてるだけなんだから、何ならもつともつと言つてあげれば」

「テメエ！」

「そうだったんですか、お姉様！」

またしても喜色満面でがばつと身を乗り出す少女に対しあまり強気に出ることもできず狼狽する糸巻と、それを後ろから眺めつつ声を出さないように腹を抱えて笑う鳥居。彼の目には、糸巻が会話のペースを握られるこの光景がよほど物珍しいものに映つたようだ。

「そ……それで、だ。話を戻すと、幽霊つてのはなんなんだい？」

強引な話題逸らし。しかしどこまでも純真な少女はその誘導にころつと引つ掛かり、彼女の差し出した餌にすぐさま食いつく。

「はい！実は私、もう調べてきたんです！これを見てください、お姉様！」

横に置いてあつたバッグを開き、教科書やノートの中から一枚の紙を引つ張り出して机の上に広げる八卦。そこに描かれた手書きと思しき家紋町の地図には、端のあたりにいくつもの赤い点と小さな文字で日付が書きこまれていた。後ろからどれどれと覗き込んだ鳥居が日付に目を通し、ふむと小さく唸る。

「日時は……一か月前から、場所もおおむね同じあたり……でも、なんで幽霊？ソリッドビジョンの線は？」

「はい、鳥居さん。私も最初はそう思つたんですけど。でもなんでもこの幽霊さん、物に触ることができるといいます！怖がつて投げつけられた石がぶつかったと思つたら飛んで逃げていったとか、そういう話が多いんですよ」

「実体があつて……」

「飛んで逃げた……？」

ここで、糸巻と鳥居の表情が変わる。2人のデュエルポリスは、全く同じことを考えていた。これは、自分たちの仕事案件ではないかと。

まだ幼く実際に「BV」を見たことのない八卦の思考回路は、このぐらいの年ごろの子供にはさぞ魅力的であろう幽霊という言葉にすっかり心奪われておりまだその可能性には至っていない。興奮したままにまくしたてる少女がそれに気が付かなかったのは、果たして不幸か幸いか。ともあれ、やや姿勢を正して糸巻が問う。

「……なあ、八卦ちゃん。その幽霊、どんな格好だったかとかは聞いてきたかい？女の子ってこと以外にさ」

「はい、お姉様！空に浮かんでいたとか足を動かさずに動いていたとか体全体がほんの少し光っていたとか……とにかく、小さな女の子らしいですよ」

「要するにあれか、恰好まではわからないってか。わかった、ありがとな。それはそうとそろそろ家に帰らないと、七宝寺の爺さんも心配するんじゃないか？」

「そうそう。幽霊騒ぎはこっちでも調べてみるけど、今日はもう帰った方がいいよ」

時計を振り返りながらさりげなく発した糸巻の言葉に、鳥居が素早く真意を察して同意する。しゅしゅ時計を見てそうですね、とうなずいた少女が、座っていた椅子から立ち上がる。

「あ、ちよい待ち。この地図、置いてってもらっても構わないか？」

「はいお姉様、実はもうコピーもとつてあるので大丈夫ですよ。では、今日もお邪魔しました！」

別れの言葉と共に少女が退出してからたっぷり1分間、何かの拍子に戻ってくるようなことがないか時間を置く。改めてこの場に残された手書きの地図を見下ろした2人の顔は、すっかり真剣そのものだった。

「糸巻さん、この辺って何がありましたっけ」

最初に口火を切った鳥居が、件の幽霊の目撃情報が特に集中している箇所に指を置く。現在地である彼らの事務所は町の東に広がる海

に近く、大量の赤い点が配置された西の一角とはあまり縁がない。

「図書館だな。半年ぐらい前に廃業して、今残ってるのは外側^{ガワ}だけだったはずだ。そのうち取り壊すとは言ってたが、今はまだ次の施設も決まってないから残ってる。アタシも行ったことあるけど、あの辺は人も少ないんだよな……おいちよつと待て、なんでそこで目え剥いてんだ」

「いや、糸巻さん本とか読むんすね」

「どーいう意味だコラ。読んでたのは大体漫画だけどな」

じろりと睨みつけるも、まあいいと首を横に振る。

「それより、女の子ってのが最高に面倒だな。どう頑張っても気が滅入る話にしかならなさそうだし、八卦ちゃんには悪いが聞かせられないなこりゃ」

「え、どういう……?」

「なんだお前、デュエル^{デュエル}ポリス入るときに研修受けてこなかったのか?じゃあヒントだ。13年前と今を比べた時に一番衰退したのはデュエル産業だが、その次に落ちぶれた産業はなーんだ?」

「え?あー、ああ……」

やりきれないといった表情を隠そうともせず煙草に火をつける糸巻に、遅ればせながら得心のいった鳥居が同じようなしかめっ面でゆっくりとうなずいた。

あえてどちらも明言を避けた今のクイズの答えは、性産業……それはまさに、人間の業の深さを全面に表したような話だ。異形のモンスターや無機物も数多く存在するデュエルモンスターだが、少し視線を横に向ければいわゆる美少女モンスターも数多く存在する。そしてそれが「BV」を使えば、質量を持った存在として実体化する。

肉体こそ実体化しているものの物言わぬ彼女たち、あるいは彼らは「その手」の病気感染やそういった施設を利用したとの話を漏らされるリスクとも無縁であり、それは「BV」黎明期におけるテロリストたちの有力な資金源であった。かつてのプロリーグトップともなれば政界や財界へのパイプも当然持ち合わせており、腐りきった欲望はそのパイプをとめどなく汚い金と共に流れていく。

だからデュエルポリスの間では現在でも、その産業へ真つ先に目をつけて最優先で踏み込んだからこそ今日に至るまでのテロ活動が少なくとも資金面ではスムーズに行われているのだとまことしやかに語られているのだ。

「アタシらの目が届きにくい、しかも人気がない場所……つまりは、そういうことだろうな。つたく、気が滅入る話だ」

「……なんつーかこれ、心底やってらんない話っすね」

「ああ、同感だ。だからアタシは、この仕事は嫌いなんだ。どう頑張っても、ただデュエルして勝てばいいスカツと終わる話にはならない。そんな事案から目を逸らせないからな」

「俺も、後味悪い悲劇よかハッピーエンドの方が好きなんすよ。特にこーいう生々しいのは趣味に合いません。一部に熱狂的なファンはつくんですけど、やっぱ一般受け悪いんすよね」

うんざりしたようなため息を2人同時につき、諦めたように立ち上がってそれぞれが動き出す。糸巻は現場近くで過去にしょつ引いたチンピラの情報から今回の件のバックにいる者のあぶり出しにかかり、鳥居は土地の権利移転の流れや現在の登記者の洗い出しに着手する。

性に合わない書類仕事と格闘しながら、糸巻はふと昔のことを思い出していた。あれは、彼女がまだデュエルポリスになって日が浅かったころ。今回の件と同じような流れから経営元を追い詰めた彼女は、やぶれかぶれになって最後の抵抗に打って出たそのトップと「BV」付きのデュエルをすることになったものだ。おそらく、今回も最後はそうなるだろう。それが彼女自身なのか、それとも隣にいる鳥居がその役を担うか程度の違いだけだ。あの時のデュエルで、彼女は後攻だった。その閃きをきっかけに、もう長いこと思い出すこともなかった記憶が彼女の脳内に蘇る。確かあの時も、こんな夕暮れ時だった。

「糸巻、お前がデュエルポリスに魂売ったという話は俺も聞いていた。だが、それで俺を逮捕とはな。この裏切りは高くつくぞ」

「おうおう、風営法違反のご立派な犯罪者殿は言うことが違うねえ。ごたごたうだうだ抜かしてないで、男ならさっさとかかって来いってんだ」

「なるほど、それもそうだ。では、その言葉に甘えるところ」
「デュエル！」

誰も見る者のいない、誰が楽しむわけでもない。ただ戦いの道具となったデュエルモンスターズに抵抗を感じなくなったのはおそらくこのあたりからだっただろう、そう今の彼女は自己分析している。それはひどく寂しい考えだったし、ひどくつまらない考えでもあった。

「俺が先攻だ。少し手が悪いな、カードを3枚伏せてカードカー・Dを召喚」

カードカー・D 攻800

「こいつを召喚するターンに俺は特殊召喚ができないが、それを補って余りある効果がある。召喚されたこのカードをリリースすることでカードを2枚ドロウ、直後にエンドフェイズとなる。ターンエンドだ」

「アタシのターン。まあこんなもんか、馬頭鬼を召喚だ」

馬頭鬼 攻1700

男……無論彼にもれつきとした名前はあるのだが、どうしてもそこだけは思い出すことができなかった。ともあれそのから空きになった場に一撃を叩きこむべく彼女が召喚したのが、馬頭鬼。

しかし、その地獄の番人が手にした斧を叩きつける機会は、ついに巡ってはこなかった。

「トラップ発動、奈落の落とし穴。攻撃力1500以上のモンスターは破壊したうえで、さらに除外させてもらう」

「ちっ……」

馬の頭を持つ地獄の番人の蹄を、地中から延びた手が掴む。地獄よりもなお深い奈落の底へとその魂が引き込まれ、消滅する様を彼女は見ていることしかできなかった。彼女のデツキは当時から除外と縁が深く、そこからの帰還手段も通常のデツキに比べはるかに多い。だ

がそれらはいずれも即効性を欠き、このターン格好の攻撃チャンスを逃したという事実に変わりはない。

「……なら、カードを3枚伏せる。アタシもこれでターンエンドだ」

「俺のターン。カズーラの蟲惑魔を召喚」

カズーラの蟲惑魔 攻800

地面にぽっかりと穴が開き、その内部が水のような液体で満たされていく。よく見るとその穴に見えたものはあきれるほどに巨大な植物によって作り出された縦長の空洞であり、いつの間にかその縁にはポツンと腰かけて涼む少女が1人現れていた。ふわりと腰まで伸びた豊かな金髪はキラキラと輝き、肩を丸出しにした大胆な服装は女性である糸巻から見ても人目を惹くであろうことは容易に想像できる。

だがそれはすべて疑似餌、仮初の姿でしかない。少女がその小さな両足をつっ込んで気持ちよさげに揺らす液体は断じて水などではなく、目を凝らせばその奥底にはほんのわずかにだが前回の犠牲者である哀れな獲物の白骨がまだ消化されきらずに残っている。金髪にしてもその輝きは人間の頭髮というよりもむしろ丁寧に編み込まれた植物の繊維のそれに近く、無邪気そうな瞳の奥底には冷たい理性の色が垣間見えるはずだ。

「【蟲惑魔】か。アンタの商売にやピッタリだな、ええ？」

「最高の皮肉だろう？カズーラの蟲惑魔1体を、真下のリンクマーカーにセット。誘われ誘われ欲望渦巻く森の奥、食肉の宴は開かれる。リンク召喚、リンク1。セラの蟲惑魔」

セラの蟲惑魔 攻800

新たに召喚された蟲惑魔は、素材となったカズーラと比べてもその攻撃力は同じ。カズーラの作り出した植物の穴が消え、先ほどまでぽっかりと開いていた地面からはその代わりに無数の細かい、まるで絨毯のような毛が草原のように周りにへと広がった。そのすべてが先端に水滴のような雫をつけており、さながらタンポポの綿毛のように風になびいてそよそよと揺れるさまはいかにも手を伸ばしてその水滴を触ってみたい衝動を刺激する。いったい、どこに危険があるだろうか？現にこの草原の中央では、小さな少女が楽しそうに手を伸ばし

ては水滴ごと摘み取っているではないか。

そんな思考が頭をかすめていたことに気づき、彼女はすぐさま頭を振って妄言を打ち消した。無論、あれもまた罨でしかない。水滴はすべて極めて高い粘性を誇り、わずかでも触れたが最後彼女を離しはしないだろう。パニツクになつて暴れるほどに余計な水滴に触れてしまい、ようやく気が付いたころには指一本まともに動かせない高カロリーな栄養の塊が出来上がるばかりとなる。これがただのデュエルであれば、それもまたお笑いで済んだだろう。だがこのソリッドビジョンはすでにソリッドビジョンにあらず、実体と質量を持つ「BV」だ。実際に人を食うまでは至らずとも、逃れられない粘性までは間違ひなく備えているはずだ。

「ではここで通常トラップ、強欲な瓶を発動。デッキからカードを1枚ドロ―する……が、この瞬間にセラの蟲惑魔、その最初の効果が発動。通常トラップが発動したことにより、デッキから同名モンスターが存在しない蟲惑魔1体を特殊召喚する。トリオンの蟲惑魔を特殊召喚」

トリオンの蟲惑魔 攻1600

沸き立つ砂ぼこりとともに、短髪に頭の上の二本角が特徴的な次なる蟲惑魔が呼び出された。それまでの2体とは違い全体的に茶色のカラーリングのファッションに身を包む少女は、一見すると罨の要素などないようにも思える。

しかしそれは、彼女がほかの蟲惑魔とは罨を張る場所が違うというだけの話でしかない。トリオンの本体は地中に潜む捕食者の昆虫であり、その足元では極力目立たないように隠されてはいるものの常に流砂が渦を巻く。さらにその足元を観察し続けていけば、地中から外を窺う本体の瞳に光が反射して不気味な光が断続的に点滅している様子さえも見る事ができるはずだ。

「トリオンが特殊召喚に成功した際、相手フィールドの魔法、または罨1枚を破壊できる。右のカードを選択しよう」

糸巻の伏せた右端のカードの下に突如として流砂が発生し、すり鉢状に崩れ落ちる砂の中に伏せカードがずぶずぶと沈んでいく。

「勘のいいヤローだ、ただ破壊されるよりかはマシか。チェーンして速攻魔法、逢華妖麗譚おうかようれいたん―不知火語しらぬいがたりを発動！相手フィールドにモンスターが存在する場合、アタシの手札からアンデット族1体を捨てることでデツキか墓地から捨てたモンスターとは名前が違う不知火1体を特殊召喚するぜ。アタシが選ぶのはデツキの……」

「手札から灰流うららを捨てて効果発動、デツキからモンスターを特殊召喚する効果を含むそのカードは無効となる。言うまでもないが手札コストは返ってこない……いや、むしろそれが狙いの一つ、というわけか。さすがに抜け目がない」

手札コスト付きのカードを無効にしたことでアドバンテージ面で優位に立った男はしかし油断ない動きで素早く墓地に目を通し、呆れ半分称賛半分といった口調で苦笑いする。言うまでもなく、彼女がコストに落としたモンスターを見てのことだ。

「さて、なんのことだかな。おかげでこっちは大損だ」

「白々しいな。前々から思っていたが、そこで否定することに何か意味があるのか？」

「アタシが楽しい」

きつぱりと言い切った当時の彼女に、男は呆れたように首を振り……そして、再び彼女を見据える。

「だろうな。では、そろそろ本題に戻るとしよう。セラの蟲惑魔の更なる効果を発動。自身以外の蟲惑魔、この場合トリオンの効果が発動したことにより、デツキからホールまたは落とし穴トラップを1枚フィールドにセットできる。では……そうだな、2枚目の奈落の落とし穴をセット。バトルフェイズ、セラにトリオンの蟲惑魔で攻撃」

セラの蟲惑魔 攻800↓糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP4000↓3200

「こんのっ……」

中和されているとはいえ、確実にその体を苛む鈍い痛み。当時の彼女は当然ながら今よりも「BV」経験も浅く、わずか800のダメージであってもあからさまに怯んでいた。若かったものだと振り返る。

トリオンの蟲惑魔 攻1600↓糸巻（直接攻撃）

「ターンエンド。ずいぶんと、哀れな姿だな。俺はお前に対し特別悪い印象は持っていないかったが、このまま邪魔を続けるとあらば攻撃を容赦する気はない……これは、俺たちデュエリストの世間に対する復讐なんだ。この店も、その資金稼ぎのための一環に過ぎない。お前にも俺たちの気持ちはわかるだろう、なのになぜそちら側にいる？どうしてこちらに来ない？」

「アタシは……」

ああそうか、とそこまで振り返ったところで思い出した。この一戦は、彼女にとつて今に繋がるある種の転機。どこぞの馬鹿狐のような憎しみ主体の皮肉ではなく、純粋な疑問として彼女がデュエルポリスとしての道を選んだ理由を正面から問われた初めての戦いだった。確かあの時、自分はこう答えたはずだ。

「……理屈なんざないよ。理由はどうあれ、プロデュエリストの求められる時代はあそこで一回終わったんだ。老兵のくせに大人しく消え去れないアンタらみたいな老害どもに引導叩きこんでやる、それがアタシの今の存在意義さ」

「なんのために？かつての同胞とそうやって敵対して、その先に何をみる？」

「そんなもんアタシに聞くなよな。それこそ鼓のやつとか、もつと口達者なのだっていっぱいいるだろ？ただまあ、確実にこれだけは言ってみよう。アンタらがそうやって怒り任せにテロリストやってみる以上、デュエルモンスタースはいつまでたっても戦争の道具から抜け出せない。小難しい話は他所でやって欲しいもんだが、あえて答えるとすりゃ……未来だよ。アンタらに尻尾振ってついていったところで、娯楽としてのデュエルモンスタースが帰ってくることは絶対になさそうだからな。どうせ犬だってんなら、狂犬病撒き散らす野良犬よりかは御上に尻尾振る飼い犬の方がまだマシさ」

「そうか、わかった。どうあっても、相容れることはできなさそうだな」

「残念な話だな。さ、お喋りはもう終わりさ。エンドフェイズにト

ラップ発動、バージェストマ・レアンコイリア。このカードはアタシの除外された馬頭鬼を、改めて1度墓地に送り込む」

ここで答えた内容は、あれから何年も経った今でもほぼ変わらない。もつとも同じことを問われたとして、この時ほど素直な気持ちで答えるだろうか。良くも悪くも、当時の彼女は今よりも擦れていなかった。

「アタシのターン。不知火の宮司みやつかきを召喚、この召喚時に効果で手札か墓地の不知火1体を特殊召喚できる」

不知火の宮司 攻1500

「ここで……いや、奈落の落とし穴は発動しない。不知火の宮司、除外された際にカード1枚を道ずれとして破壊するカードだったか」

「さすがに引つかからないか。さあ来な、不知火の陰者かげもの」

不知火の陰者 攻500

オレンジ色の衣をまとう神主が炎を前に祈禱を行い、その炎から揺らめく人影が現れる。これでモンスターが2体、だが彼女はまだ止まらない。

「永続トラップ発動、闇の増産工場。まずはトラップが発動したことで、アタシの墓地のレアンコイリアをモンスターとして蘇生させる。おっと、これは永続だからセラの蟲惑魔のトリガーにはならないな」

バージェストマ・レアンコイリア 攻1200

「んじゃ改めて、増産工場の効果を発動。アタシの手札かフィールドのモンスター1体を墓地に送り、カードを1枚ドロウする。アタシが選ぶのは不知火の宮司だ」

「つくづく抜け目がないな。もし俺が最初の召喚時に奈落の落とし穴を発動してたとしても、そのケアは万全だったということか」

「ああ、何しろアタシは強いからな。その証拠に、ほれ。今引いた魔法カード、強欲で貪欲な壺を発動。デッキトップ10枚をコストとして裏側で除外し、カードを2枚ドロウする」

ピンポイントで引いてみせたドロウソースで、それ1枚だった手札を2枚に増やしてみせる。だが彼女の展開に、それは単なる副産物に過ぎない。

「墓地にさつき送り込んだ妖刀―不知火の効果発動、このカードと墓地のアンデット1体を素材として除外することで、疑似的にシンクロ召喚を行う。戦場切り込む妖の太刀よ、一刀の下に悪鬼を下せ！逢魔シンクロ、刀神―不知火！」

☆4＋☆2＝☆6

刀神―不知火 攻2500

突如弾けた爆炎と共にフィールドへ現れたのは、燃え盛る炎をかたどった刀を手にする和装の剣士。意志持つ邪悪な植物を、悪意に満ちる捕食者を、全て焼き払わんと燃え盛る炎に照らされて、2体の蟲惑魔がはつきりと戸惑う様子を見せた。

「ここで使えと言わんばかりだが……いや、もう少しだけ奈落は温存しておこう」

「それでもスルーか？しやらないな、除外された宮司の効果だ。相手フィールドの表側表示のカード、トリオンの蟲惑魔を破壊する」

「なんだ、トリオンでいいのか？ならば好都合だ、チェーンして地霊術―鉄くろがねを発動。地属性モンスターのトリオンをリリースし、レベル4以下の地属性モンスターを墓地から特殊召喚する。カズーラを蘇生し、さらに通常トラップが発動したことでセラの効果が発動。アトラの蟲惑魔をデッキから特殊召喚」

そして現れた第4の蟲惑魔は、蟲惑魔の中でも最大級の攻撃力を持つ暗い髪色の少女。その足元でわずかに胎動するその捕食者は、冷徹に網を張る大蜘蛛だ。少女の足元を中心としてさりげなく、ゆっくりと、だが確実に、その粘度の高い網が徐々に広がっていく。地面の暗がりにまぎれ、鋭い爪の付いたその8本もの足が地中からその間合いを示すかのようにわずかに地上にその先端を覗かせる。

カズーラの蟲惑魔 守2000

アトラの蟲惑魔 攻1800

「こいつも躲されたか……面倒くさい奴だな、ホントに」
「お互い様だ」

宮司の効果は対象を取るものであり、今のリリース・エスケープによってその発動は実質不発となった。しかも通常トラップを使わせ

たため、セラの効果まで通してしまうというなんともありがたいおまけ付きだ。

「なら、これならどうだ？炎属性の不知火の陰者、そして刀神をそれぞれ右下、及び左下のリンクマークにセット。戦場燃え盛る妖の霊術よ、燃え尽きた魂に今一度生命の火を灯せ！リンク召喚、灼熱の火霊使いヒータ！」

灼熱の火霊使いヒータ 攻1850

2体のモンスターを惜しげもなく使い呼び出されたのは、ある意味では蟲惑魔以上に肌を露出させた赤い髪の少女。大胆にほぼすべてのボタンが外された白いシャツは上から胸当てで固定することでうにか維持され、魔法使いらしい茶色のローブは本人の嗜好ゆえかその肩があらわになるまでずり下げられている。

「この瞬間、宮司の効果によつて特殊召喚された陰者はゲームから除外される。だがこの瞬間、除外された陰者の効果発動！同じく除外された不知火を1体選択し、アタシの場に特殊召喚するぜ。甦りな、妖刀」

妖刀―不知火 攻800

「なるほど、一見すると数は同じ。しかしリンク2が1体、か。当然打開策もあるんだろうが、かといって使わない手もないな。トラップ発動、奈落の落とし穴！」

「ま、通すわけないだろ？速攻魔法、禁じられた聖槍。ヒータの攻撃力を800ダウンさせ、このターン魔法と罠に対する完全耐性を与える。もつとも攻撃力の下がった時点で奈落の適用範囲からは外れたから、そこまで意味はないけどな」

灼熱の火霊使いヒータ 攻1850↓1050

「だろうな。だが落とし穴が発動したことに変わりはない、カズーラの効果を発動。デツキから別の蟲惑魔1体を選択して手札に加える、あるいは特殊召喚することができる。この効果でランカの蟲惑魔を手札に加え、カズーラの効果をトリガーにセラの効果を発動。デツキから……そうだな、特に今のタイミングで欲しいものもない。絶縁の落とし穴でもセットしておくか。さて、次は何を出す？」

見えていたとはいえ強力な除去をあつさり回避されたというにもかかわらず別段驚いた様子もなく、それどころかまたしても別の落とし穴を用意しつつ次の一手を催促する男。その問いかけに、彼女はすぐに答えてみせた。

「こうするのさ。レベル2の妖刀、そしてレアンコイリアでオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！戦場呼び込む妖の魔猫よ、百鬼呼び寄せその目に見染めた戦乱を打ち破れ！No.29、マネキンキャット！」

2体のモンスターが渦を巻くように飛び上がり、地面に落下して爆発を起こす。妖刀の効果、ヒータのリンク召喚、その全てはこの1枚のカードをどうにかして呼び出すために使われた壮大な布石だった。球体関節の目立つ猫娘の人形が、ウインクしつつ左手を数度折り曲げて手招きの姿勢をとる。

No.29 マネキンキャット 攻2000

「マネキンキャットの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ消費することで相手の墓地からモンスター1体を強制的に蘇らせる、千客万来の小判振る舞い！」

「墓地のモンスターを？だが……いや、そうか。そういえばあれがあつたな」

「なんだ、今頃気が付いたのか？灼熱のヒータには1ターンに1度、相手の墓地から炎属性モンスターを奪い取る効果がある。おかしいと思わなかったのか、だつてのにアタシがそのモンスターを放置してたことによ！アタシが選ぶモンスターは灰流うらら、攻撃表示だ！」

猫娘が髪飾りに付けていた小判を取り外して放り投げると、フィールドにじゃらじゃらと黄金色の小判の雨が景気よく降り注ぐ。落ちたは消えていく黄金の輝きに誘われて、白装束の少女が地面からひよっこり顔を出した。

No.29 マネキンキャット(2) ↓(1)

灰流うらら 攻0

「そして当然、ただのプレゼントじゃ終わらないからな。マネキンキャットの更なる効果発動、百鬼夜行の小判振る舞い！相手フィール

ドにモンスターが特殊召喚された際、相手フィールドのモンスター1体を選択することでそれと種族、または属性の等しいモンスター1体を手札、デッキ、墓地のいずれかから特殊召喚できる。アンデット族の灰流うららを選択し、アタシのデッキに眠るアンデット族。死霊を続ける夜の王、死霊王　ドーハスーラを特殊召喚するぜ！」

黄金の輝きに誘われたのは、亡霊の少女だけではなかった。大蛇の体に人の上半身を持つ死霊の中の死霊、アンデットワールドにおけるもうひとりの主たるドーハスーラでさえもその例外ではない。

死霊王　ドーハスーラ　攻2800

「さあ、形勢逆転だな」

「使いどころは……さすがにこれ以上の出し惜しみは意味がない、か。ドーハスーラの特殊召喚時、俺はアトラの蟲惑魔の効果を適用して手札から落とし穴及びホールを発動できる。電網の落とし穴を発動、デッキから特殊召喚されたドーハスーラは裏側で除外される」

「ドーハスーラ……だがアンタがトラップを発動したことで、たった今マネキンキャットのオーバーレイ・ユニットとして墓地に送られたレアンコイリアはもう1度特殊召喚が可能になるぜ。等価でもなんでもねえ、随分と損する交換だな」

完全に不意を突く形で0と1の世界のはざまに追いやられたドーハスーラだが、それと入れ替わるようにしてレアンコイリアがまたしてもその歩脚をわさわさとうごめかせながらフィールドに舞い戻る。もつともその攻撃力は本来そこにいるはずだったドーハスーラの半分以下、彼女の言う通りモンスターの総数こそ変わらないとはいえない。そんな取引であることは間違いない。

それでもこうやって後になって思い出す分には、あの時はうまくしてやられたと素直に相手のプレイングを褒める気分にもなるというものだ。

バーjestマ・レアンコイリア　攻1200

「とはいえ、やられたもんは仕方ないな。バトルだ、マネキンキャットで灰流うららに攻撃！」

No. 29　マネキンキャット　攻2000↓灰流うらら　攻0

(破壊)

男 LP4000↓2000

「ぐ……」

「追撃だ。次に攻撃力の高いのは……ヒータは禁じられた聖槍受けるもんな、んじやお前かよ。レアンコイリア、セラの蟲惑魔に攻撃」

バージェストマ・レアンコイリア 攻1200↓セラの蟲惑魔 攻800 (破壊)

男 LP2000↓1600

「さあ、これでライフが並んだわけだが。感想あるなら聞いてやるぜ？」

「ようやく振出しに戻っただけだ、ノーコメントで頼む」

「ああそうかよ、ならメイン2だ。つってもやることは少ないな、とりあえず今度こそヒータの効果を発動、アンタの墓地から炎属性の灰流うららをリンク先に蘇生する。さらにカードを伏せて、ターンエンドだ」

灰流うらら 守1800

「俺のターン。今のままだと、どうにもな」

彼の場合に存在するのは、先ほどセットした絶縁の落とし穴。その効果はリンクモンスターとのリンク召喚時にリンク状態以外のモンスター全てを破壊するという豪快なものであり、ホール及び落とし穴の効果を受け付けない蟲惑魔にとっては相手モンスターを一方的に破壊できる心強い除去カードとなる。だがそれは、相手のリンク状態がまだ整っていないことが前提。糸巻は絶縁を見た瞬間にリンクモンスターであるヒータを絡めた盤面づくりを心砕いており、今の状態でカズーラ、あるいはアトラを素材としてセラを召喚したとしても破壊できるのは単体では弱小モンスターに過ぎないレアンコイリアと破壊された時にサーチを行うヒータの2体しか存在しない。しかもその手を使うものならセラのリンク召喚に反応し、マネキンキャットにもう1度モンスターを呼び込む隙を与えてしまう。

「とりあえず、だ。ランカの蟲惑魔を召喚し、効果発動。デッキから更なる蟲惑魔、ティオの蟲惑魔を手札に加える」

地響きと共に人間さえもすっぽりと包み込めるほどに巨大な花卉が現れ、その固く閉じられた蕾がゆっくりと開き内部に腰かける少女の姿を白日の下にさらす。しかし、その花びらは開ききつてなおも呼吸するかのようにかすかに揺れている。どこかが光に反射して、硬質の輝きを放ったようにも見えたのは彼女の目の錯覚だろうか。少女の部分とはまた違う、その周辺から刺すような視線を感じるのは気のせいなのだろうか。ただその身を疑似餌のそばに隠すのではなく、自らも花に擬態し、動きを絶ち、獲物を待つ……たとえばそう、少女が腰かける花のような何かのように。

ランカの蟲惑魔 攻1500

「あの伏せカードがどうにも気になるところだが、今の手札でトリオンを特殊召喚する手段はない。ならば、次善の策で満足するほかないか。万一を考えるとさすがにこのライフでセラをもう1度召喚する気にはならないな、レベル4のカズーラとランカでオーバーレイ」

先ほど糸巻が行ったように、2体の蟲惑魔が光となって絡み合う。その爆発の中からフィールドに降り立ったのは、これまでで最大のサイズを誇る超巨大な花卉。そしてその中央ではたおやかに寝転がって糸巻を見下ろす、なまめかしい肢体とあどけない顔つきには不釣り合いなほどの色香を放つ少女。すべての蟲惑魔を統べる、リーダー的存在がついにこの場を制するためにその蕾を開いたのだ。

「その身に余る欲望に、払えぬ対価の清算の時は来た。エクシーズ召喚、フレシアの蟲惑魔！」

フレシアの蟲惑魔 守2500

「またか？なら、相手フィールドにモンスターが特殊召喚されたことでマネキンキャットの効果発動。フレシア……確か自分以外の蟲惑魔に完全破壊耐性と対象耐性の付与だったか？ならフレシア自身を選択して同じ属性、つまり地属性モンスターを特殊召喚する。百鬼夜行の小判振る舞い！」

再びマネキンキャットが髪飾りの小判を取り外し、空中に放り投げようとする。しかし男は、それを興味なさげに見つめるのみだ。

「愚かな。なぜセラではなくフレシアの召喚を最優先したのか、考え

てはみななかったのか？確かに残りライフの問題もある、だが同時に、このカードの使用条件を満たすためでもあった。カウンタートラップ、エクシーズ・ブロックを発動！自軍に存在するオーバーレイ・ユニット一つをコストに、相手モンスターの効果の発動を無効にし破壊する」

「そんなもん初手からずつと伏せてやがったのか……！」

「驚くことはないだろう。落とし穴の攪乱にでもなるかと思ったが、そのまま発動の機会が来た、ただそれだけのことだ。速攻魔法、ハーフ・シャツを発動。場のモンスター1体の攻撃力はこのターン半減し、さらに戦闘破壊されない。そして装備魔法、やりすぎた埋葬を発動。手札からレベル6のギガプラントを捨て、それよりもレベルが低いモンスター1体を効果を無効として特殊召喚してこのカードを装備する。トリオンよ、今一度甦れ」

息をのむ糸巻の前で、レアンコイリアの体が縮んでいく。弱った獲物を前にした蟲惑魔たちの瞳が一斉に妖しく輝き、獲物の気配に誘われた地中の蟲惑魔が再びそのショートカットをひよつこりと覗かせる。

バージェストマ・レアンコイリア 攻1200↓600

トリオンの蟲惑魔 攻1600

「バトル。アトラの蟲惑魔でバージェストマ・レアンコイリアに攻撃」アトラとトリオン、2体の蟲惑魔の攻撃力はそれでもわずかに彼女のライフを削るには足りないが、破壊耐性を盾にサンドバックとするならば話は別だ。まして今現在その2体は、フレッシュの効果により強固な耐性を付与されている。今更、何を恐れることがあるだろうか。大方そう考えていたんだろう、そう彼女は回想する。実際に、その見立ては正しい。バージェストマは対象を取るカードばかりであり、対象耐性を持つ相手は天敵に等しい。これで勝ったと思ったとしても、それは無理のないことだろう、と。

そしてだからこそあの時の彼女は笑い、その瞬間を思い出した現実の彼女もまた会心の笑みを浮かべる。

「残念だったな、この勝負アタシの勝ちだ！ダメージ計算時にトラッ

プ発動、バイバイダメージ！」

「バイバイダメージ、だど?!」

「そうさ、こいつはアタシのモンスターが攻撃されて戦闘を行うダメージ計算時、モンスターを対象を取ることなく効力を発揮するカード！その効果によりレアンコイリアは戦闘で破壊されず……まあ、それは元からだがな！」

アトラの蟲惑魔 攻1800↓バージュエストマ・レアンコイリア
攻600

糸巻 LP1600↓400

突然のカードに何かを察したのか、慌てて身を引き攻撃を止めようとしたアトラ。しかし身軽な疑似餌部分はいざ知らず、本体である大蜘蛛はすでに勢いに乗ってしまっているその体を急に止めさせることはできない。先端に鋭い爪の生えた8本の足が躍りかかり、古生代生物の硬い表皮を無残に切り裂いた。

「痛つつ……そしてこの戦闘でアタシの受けるダメージ、その倍の数値の効果ダメージをアンタにも受けてもらう。これで、終いだ！」

「……！」

男 LP1600↓0

「……巻さん、糸巻さん！ヤバいつすよこれ、流石に洒落になんないです！」

ようやく糸巻が目を開けた時には、あたりはすでに暗くなっていた。昔の記憶に思いをはせる最中、いつの間にもやら居眠りしていたらしい。とりあえずいつも通り口先だけでも謝罪の言葉を述べようとして、すぐにやめた。あの鳥居が普段の態度はどこへやら、血相変えて彼女の体を揺り動かしている。それはつまり、それだけのことが起きたということだ。寝起きで半覚醒状態の頭に無理に活を入れ、無理な姿勢での睡眠がたたり固くなった体を伸ばしてどうにか立ち上がる。

「起きたぞ。で、どうした一体」

「今、カードショップ七宝って店の店主のじーさんから電話が
ありまして。八卦ちゃん、あれからまだ帰って来てないそうです！」
「何!?!」

今度こそ、完全に目が覚めた。

ターソン10 熱血！青春！大暴走！

デュエルポリス2人が七宝寺から八卦が帰宅していないとの知らせを受け取った、ほんの少し前。糸巻らの元を後にした、それからの少女の足取りを追ってみよう。その純真さとポジティブ思考は自分がうまいこと締め出された、などという可能性には少しも結びつかず、敬愛する「お姉様」の言葉に従いいったんは家の方角に向け歩き出したものの、ほんの数歩も進まないうちにその足が止まってしまった。

「あんなに喜んでもらえるなんて、思わなかったな。お姉様、実は怪談とか好きな人なのかな？」

ほんの話の種になれば、そんなつもりで持ってきた幽霊騒動に関するうわさ話は、少女の想像を超えて糸巻らの興味を引いていた。しかしその真意がまるで予想もつかない少女は無邪気に、幽霊という言葉に対し彼女らが食いついたのだとすつかり思い込んでいた。日が傾いているとはいえまだ夜にはわずかに時間があり、小さな背中を押す太陽の残滓が少女の心に余計な弾みをつける。

「今から私も、この図書館のあったところに行ってみようかな？もしかしたら、幽霊さんに会えるかもしれないですし。お姉様の調査の役に立つものが見つかるかも！」

そうと決めれば、若い少女のフットワークは軽い。学校帰りの女の子にしか見えない彼女はあくまでもごくありふれた学生でしかなく、いつもの帰り道とはまるで違う方向にふらりと踏み込んだ人影に注意を払うものは誰もいなかった。

いくつもの路地を越え、信号を渡り。歩くにつれてまばらになってゆく周りの人影と比例するかのようには、太陽の面積も小さくなってゆく。少女が目的の場所にたどり着いたときには既に、その上端がわずかなオレンジの光をどうにか浮かべているのみ。すぐ後ろまで忍び寄っていた夜の気配に多感な少女は身震いして躊躇するも、敬愛する彼女の顔を思い浮かべて自問自答する。お姉様ならば、夜になったからといって躊躇するようなことがあるだろうか？いや、答えはノー、

だ。ならば、自分がここで躊躇するわけにはいかない。そんなことで、いつまでたっても追いつけやしない。

当然それは、勝手な思い込みでしかない。もしこの場所に当の糸巻本人がいれば、血相変えて止めに入ったであろう。しかしその彼女は現在、煙草を片手に大量の検拳記録を目を皿のようにして睨みつけている真つ最中だ。

「……………す、少しだけ。鍵がかかってたら、そこで帰りましょう」

そうは言っても、怖いものは怖い。迷った末に妥協案を心に決めて封鎖された裏門に回り込み、それを乗り越えて音もなく着地。かつて司書たちが使っていたのであろう勝手口のドアノブを掴み、そつとひねる。彼女にとって幸か不幸か、そのドアは開いていた。油がしっかりと残っているのかすんなりと開いたドアの前でまたもや固まるも、気を取り直してその体を屋内に滑り込ませる。きつちりとドアを閉めると、暗い廊下にはなぜかまだ生きているらしい非常口のランプが緑色の光を唯一の光源として不気味に落としているのみ。

「ゆ、幽霊さん、いらつしやいますか？」

かつては人もいたであろう無人の廊下に、わずかに震えた声が響く。少女自身この問いかけに何か反応があるなどと期待していたわけではなかったが、意外にもそこで動きが起きた。視界の端に見えていた、2階と地下に繋がる最も大きな一般客が利用するための大階段。そこで彼女の声に驚いたように小さな人影が立ち上がり、逃げるようにして2階へと走り去っていったのだ。それは遠目の、しかもほんの1瞬の邂逅でしかなかったが、デュエリストとしての卓越した少女の動体視力はそれを確かに捉えていた。

そして確信する。あれこそが最近話題の、少女の幽霊だと。自分と同じく幽霊のうわさを聞き付け、肝試しに来た子供という線はあり得ない。なぜならば走り去っていくあの瞬間、確かに幽霊と後ろの階段は重なっていた。にもかかわらず、少女の目には終始階段が見えていた。つまり、その体はかすかに透けていたのだ。

「……………!!」

興奮が恐怖を一時的に追いやり、無鉄砲な好奇心がその足を前へと

動かす。埃の積もったカウンターから一定間隔に並んだがらんどうの本棚を抜け、足音を殺すことも忘れてパタパタと走る。

それほどまでに興奮していたからだろう、すぐ近くにいた2つの人影に、手遅れになるまで気が付けなかったのは。

「ん？誰だー！」

「どこの……って、なんだ子供か」

その足音に振り向いたのはよれたGパンに「熱血」と力強い字体でプリントされた赤いTシャツ姿の青年に、その相方としてはあまりに不似合いな黒いスーツ姿にサングラスをかけた髭面の男。1人1人ならまだしもコンビとなるといかにも怪しい2人組に、少女は1瞬言葉に詰まる。そもそも今いる場所は立ち入り禁止であり、忍び込んだ自分以外に人がいるはずはないのだ。その場でフリーズする少女に、髭面の男が相方を手で制して優しく語り掛ける。

「嬢ちゃん、肝試しか何かかい？ここは立ち入り禁止だろう？」

「お、おじさんたちだって、入っているじゃないですか」

咄嗟に口を突いて出た反発の言葉に、言い切ってからしまったと後悔する。そもそも同じ状況でも堂々と開き直れる糸巻や平然とすつとぼけられる鳥居とは違いまだ世間に擦れていない少女は自分が悪いことをしているという自覚と罪悪感が強く、生真面目な少女の感性はこれだけで今のは言いすぎたと感じたのだ。

そして熱血シャツの青年がむっとした顔になった様子を見て、より一層罪悪感が強くなる。

「おじさんだど？待てい、俺はまだお兄さ……」

「わかったわかった、お前は黙っとけって。んで嬢ちゃん、確かにこりゃ一本取られたな。んー……おじさんたちはな、実はデュエルポリスなんだよ。知ってるだろう？あんまり評判良くないけどな」

「ええっ!？」

この突然の宣告に、目を見開く少女。デュエルポリスということはお姉様の同業者で、しかもデュエリストとしても大先輩。しかし、その発言に戸惑ったのは1人だけではなかった。隣にいた熱血シャツもまた、慌てた様子で口をはさむ。

「ちよ、ちよつと、朝顔さん!？」

「いーからいーから、お前は黙ってるよ?で、この辺で最近話題になつてる幽霊騒ぎ。とりあえず、近場にいた俺たちが今日は様子を見に来たのさ」

朝顔と呼ばれた髭面の男は、なぜか2方向から注がれた驚愕の視線もどこ吹く風にそう言つて小さく笑う。その笑顔にはとても裏があるようには見えず、少女もその言葉を信じかける。しかしその心のどこかには、ほんのわずかに引つかかるものがあつた。そうとも知らず、朝顔が笑みを絶やさぬままに畳みかける。

「なあ嬢ちゃん、ここはひとつ俺たちに任せて、嬢ちゃんはお家に帰つてくれないかな。危ないことはないと思うが、一応こつちも仕事だからな」

「あ、あのー!」

「うん、どうしたい?」

ぬぐい切れぬ違和感。意を決して声を発した少女に、朝顔がにこやかな笑顔のまま聞き返す。

少女は、ここでひとつミスを犯した。ここで彼女が取るべき最適解は、大人しく彼の言うことを聞いて外に出たと思わせておいてから糸巻お墨付きの隠密能力によりその後をつけるなり最初に見た少女の方向へ向かうべきだったのだ。しかし少女はまっすぐで、どこまでも純真だった。そのような相手の裏をかく手など思いつくはずもなく、正面から違和感の元を口に出してしまう。

「おじさん達、デュエルポリスなんですよね」

「ああ、そうだが……」

「この町のデュエルポリスは、お姉様……糸巻さんと、鳥居さんのはずです。あの2人でも私が今日教えてはじめてこの幽霊の話を知ったのに、どうしておじさん達がそのことを知っているんですか」

ぴしり、と音がしそうなほどに空気が凍り付いた。たつぷり10秒ほど沈黙が流れ、朝顔がぎこちない笑みで諦めたように近くのテーブルに腰かける。

「……なるほど。咄嗟に出たにしては、俺にしちや結構うまい詭弁だ

と思ったんだがな。まさか嬢ちゃんが巻の字の知り合いだったとはな、裏目にもほどがあるつてもんだ」

「え、えつと……う？」

「いいか、そもそも俺たちがデュエルポリスだつてのは真つ赤な嘘だ。むしろその正反対、巻の字に言わせればテロリスト。それが俺たちだ」

「そ、そんな——」

「おつと、逃がさないぞー！」

まるで笑つていない目を見た瞬間に身の危険を感じ、咄嗟に身を翻して逃げ出そうとする少女。しかしその細腕を、熱血シャツの青年が寸前にがっしりと掴んで止める。大人の男と少女では腕力の差は歴然、いくら身をひねって逃れようとしても頑としてその手が緩む気配はない。その様子を確認し、朝顔がまた口を開く。

「嬢ちゃんがここに来たのは、おおかた巻の字に何か頼まれたからか？この辺の様子を探つてこい、とかな」

「ち、違います！私が、勝手に……！」

「そうなのか？まあ、どっちでもいい。巻の字がこの幽霊騒ぎを聞きつけたつてことは、奴のことだから当然俺らがらみだと思うだろうなあ……明日、下手すれば今夜。怒り狂った赤髪の夜叉が、ここに突っ込んでくる様子が目に浮かぶ」

「うう……！」

朝顔の独り言も耳に入らず、動く範囲でじたばたと暴れる少女。拘束を抜け出せる気配はまるで見えはしなかったが、動いた拍子にバッグが床に落ちてその中身をぶちまける。教科書やノートの中に混ざり、デュエルディスクと彼女のデツキ。それを見た朝顔の目が、興味深そうな光を放った。

「そうか、嬢ちゃんもデュエルやるのか。なあ、嬢ちゃん。ひとつここで、俺らとアンティ勝負をやってみる気はないか？」

「うう、痛いです……え？」

アンティ勝負。互いに了承の上で何か……通常はレアカードを賭けて行われる、俗に言う賭けデュエルである。「BV」の誕生する以

前、糸巻らがまだ表舞台で喝采を浴びていた過去にはこのシステムがデュエルモンスターズの楽しみ方の一形態である合法賭博として受け入れられていた時期もあったが、それはすでに昔の話。デュエルモンスターズそのものにすら色々と規制のかかる現代では、当然違法行為として名を連ねている。

「ああ。嬢ちゃんはこの暑苦しい格好の奴、夕顔ってんだがな、こいつがデュエルをする。サイドなし、時間無制限の純粋な一本勝負だ」
「え、俺？」

抗議の声をきっぱりと無視し、朝顔の説明は続く。その内容は理不尽この上ないはずなのに、なぜか引き込まれる語り口。いつの間にか少女は脱出も忘れ、真剣にその声に耳を傾けていた。

「とはいっても、別にレアカードが欲しいわけじゃない。嬢ちゃんに賭けてもらうのは、自由だ」

「自由、ですか？」

「そうだ。夕顔の奴が勝てば、嬢ちゃんには俺たちについてきてもらう。とはいえ安心しな、その場合でも海の底で石抱いて眠ってもらうことにはならないだろうからな。なにせ巻の字は甘ちゃんだ、可愛い妹分が人質に置いてあるのは俺らにとつて相当大きい。まあ、家に帰れるのはかなり後のことにはなりそうだがな」

私が負けたら、お姉様に多大な迷惑がかかる。あまりに現実離れした展開のせいではなかなか湧いてこなかった実感が、今になってようやく追いついてくる。そして彼女がまず最初に感じたものは、そこまで追い込まれた自分自身のふがいなさに対しての強い怒りだった。口を開くこともできずうつむいたままで小さく震える少女。その姿を恐怖由来のものと判断し、朝顔はあえてそれには触れずルール説明の続きに移る。

「嬢ちゃんが勝てば、このまま何もせず逃がしてやる。嬢ちゃんはその後で巻の字にチクるなりなんなり自由にすればいいが、少なくとも俺たちは今日は誰にも会わなかった体でいく。おい、お前もそれでいいいな」

「勝手にしてくれよ、朝顔さん。俺は別に異論はないぜ、人質つてのは

「どうも卑怯だからな」

「そう綺麗ごと言ってられるのも、巻の字に敵として覚えられるまでの話だろうな。さあ、嬢ちゃんはどうしたい？」

「……もし私が断ったら、どうするつもりなんですか」

にやり、と髭面の下で朝顔の口元が笑みを浮かべる。それは下卑た笑みというよりも、むしろ目の前の少女を認める称賛の表情のように見えた。

「なかなか肝が座ってるな、嬢ちゃん。その場合扱いとしては、夕顔の不戦勝だ。当然、最初に言った通り嬢ちゃんには誘拐されてもらう。ただ、その時はこっちも多少手荒な真似になるかもな」

「もうひとつ、聞かせてください。私が勝てば逃がしてくれるというのは、本当ですか」

「ああ。嬢ちゃんが巻の字からこいつを聞いてるかは知らんが、なんなら誓ってやろう。デュエリスト、朝顔涼彦すずひこ。プロネーム『二色のアサガオ』の名前でな」

一見何気ない宣言。だがデュエリストにとって、その名前は大きな意味を持つ。かつて糸巻から聞いた話が、少女の脳内でリフレインする。

『……だからな、八卦ちゃん。実力はもちろんだがイメージ商売でもあるプロデュエリストは、名誉と名前を何よりも重視する傾向がある。アタシも絶対に破れない約束をするときは糸巻太夫の名前にかけて、そして赤髪の夜叉の名において誓いを立ててやったもんさ。そいつを代価に置いた以上、その約束を破ることはデュエリストとしての名誉を全部捨てたうえで踏みにじるのと同じ。例えるならデュエリストの魂、ずつと戦ってきた命より大事なデツキを一枚一枚自分の手で破いてヘドロの中に捨てるようなもんだ』

その言葉の意味を何度も頭の中で繰り返し、目の前で注意深く様子を窺っている朝顔の目をまっすぐに見つめる。あるいはここでもう少し粘っていれば、危険な賭けに首を突っ込まずとも朝顔自身が危惧していたように糸巻が介入する可能性もある。

だが、少女はその可能性をあえて自分から切り捨てた。お姉様に、

迷惑はかけられない。

「わかりました。その勝負、お受けします」

ほこりっぽいがらんだものの図書館、その元閲覧スペース。邪魔な机や椅子が脇にのけられることで作られた空間で、男女2人のデュエリストが対峙する。そのうち男の腕に装着されたデュエルディスクは、通常サイズよりも一回り大きい。正規品とは規格の違う、内部機構に「BV」の組み込まれた真つ赤な違法品だ。緊張感を隠しきれずやや動きの硬い少女に、男がさわやかに笑いかける。

「おいおい、随分と緊張してるじゃないか。そんなことじゃあ、デュエルモンスターズは応えてくれないぞ?」

返事はない。すでにこの状況だけでいっぱいっぽい少女は、そこに割くだけの余裕がなかったからだ。

「放っておけ。夕顔!子供だからって油断はするなよ。あの巻の字の妹分なら、下手に扱うと手え噛まれるぞ」

「いや犬かよ!まあいい、それじゃあ……」

「デュエル!」

先攻後攻がランダムに選ばれ、それぞれのデュエルディスクに互いのデッキ、手札、エクストラデッキの枚数と共に表示される。男が先攻で、少女が後攻……だがそんなことよりも少女が目を疑ったのは、そこに記されたひとつの情報だった。

「エクストラデッキの枚数……6枚!」

「おお、そうだ。俺のエクストラにカードはきっかり6枚、それで十分だ。何か問題でも?」

「い、いえ!失礼しました、私、つい……」

慌てて謝罪する少女だが、その驚きも無理はない。百万喰らいのグラットン、強欲で金満な壺。いまやある種の聖域であったエクストラデッキそのものをコストとして力を発揮するカードも数多く、たとえばエクストラデッキに入るモンスターを使わないデッキであってもそういうカードの使用を見込んで15枚ギリギリまでカードを入れ

る、それがスタンダードなデッキ構築だ。唯一の例外がサポートカードのほぼすべてにエクストラデッキにカードが存在しないことを要求する【帝】だが、そのデッキは基本強力なサポートが腐ることを危惧し最初からエクストラ0枚で勝負することが多い。

つまり、男の提示した6枚という数字は0か15、という二極化が進むデュエリストのエクストラ事情に真つ向から抗う極めて異例な構築なのだ。

「気持ちにはわかるぞー、嬢ちゃん。俺も最初は同じことを思ったからな」

なぜか相手側の朝顔から飛んでくるフォローに目をぱちくりとしたりまま頭を下げつつも、頭の中では必死に相手の狙いを定めようとする。しかしカードショップという叔父の職業柄カード知識はそれなりに豊富な少女でも、このエクストラの枚数から相手のデッキを絞ることができることは至難の業であった。

「さあ、俺の先攻だ少女よ！俺のフィールドにモンスターが存在しないとき、フォトン・スラッシュャーは特殊召喚できる！」

先陣切って図書館に呼び出されたのは、銀の刃を光らせる大剣を手にした単眼の光輝く戦士。

フォトン・スラッシュャー 攻2100

「そして、召喚僧サモンプリーストを召喚！このカードは召喚成功時、守備表示となる！」

召喚僧サモンプリースト 攻800↓守1600

「フォトン・スラッシュャーにサモンプリースト……【ランク4】？でも、それだとエクストラデッキの枚数が……」

「考えているな少女よ、では答え合わせの時間だ！サモンプリーストの効果発動、手札の魔法カードをコストにデッキからレベル4モンスターを呼び出す詠唱呪文を唱える！俺はこの魔法石の採掘を捨て、ギヤラクシー・ウイザード銀河の魔導師を特殊召喚する。さらにこの銀河の魔導師は、1ターンに1度自身のレベルを4つ上げることが可能となる！」

銀河の魔導師 守1800 ☆4↓8

「さあ、開幕だ！魔法カード発動、ギヤラクシー・クイーンズ・ライト

オオオオオオ！」

ただでさえ無意味に声の大きい夕顔がさらにオーバーなりアクションと共に声を張り上げ、その魔法カードを高々と掲げる。朝顔は彼のこうした行動にも慣れていいのか彼が全力で声を張る数秒前にはすでに両手で耳をふさいで防御姿勢をとっていたが、そんなこと知る由もない少女は近距離で大音声をまともに聞く羽目となってしまうった。

「このカードは俺のフィールドのレベル7以上のモンスターを選択し、他のレベルを持つ俺のモンスター全てをその数値に合わせる！燃え上がれ、俺のモンスター！」

そのフィールドに存在するのは、レベル8となった銀河の魔導師。その数値に合わせ、残る2体のモンスターもまたそのレベルを倍加させる。

フォトン・スラッシュャー ☆4↓8

召喚僧サモンプリースト ☆4↓8

「1ターン目からレベル8モンスターが、3体……！」

「俺はレベル8となったフォトン・スラッシュャー、サモンプリースト、銀河の魔導師でオーバーレエエイ！3体のモンスターで、オーバーレインネットワークを構築！」

3体のモンスターが光となつて絡み合いながら宙に飛び、地面に落下して大爆発を引き起こす。真っ赤に燃える光の中から、その背にくくりつけた大量の竹刀やバット、そして剣道着のような完全武装の防具の重さをもとせせずにその重武装で腕立て伏せをする巨人の姿が浮かび上がった。

「沈みゆく夕日に俺は誓う、青春と血と汗と、そして永遠の熱血を！エクシーズ召喚、ランク8！熱血！指導！王！ジャイアントレーナーアアアア！」

「おーおー、熱血は今日も元気だ」

よほど慣れているのか冷めた目で呟く朝顔を尻目に、夕顔が力強くその拳を振り上げる。それと同時にようやく腕立て伏せを止めた巨人が、体の周りに浮かぶ3つの衛星のような光の弾を従えて仁王立ち

した。

熱血指導王ジャイアントレーナー 攻2800

「いくぞ少女よ、覚悟はいいかああ！ジャイアントレーナーの熱血効果、発動！オーバーレイユニットを1つ使い、カードを1枚ドロ！そのカードがモンスターカードだった場合、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！」

ジャイアントレーナーの持つ竹刀に光の弾のうち1つが吸い込まれ、その力を解放した竹刀を巨人が力強く振りかぶる。

熱血指導王ジャイアントレーナー(3) ↓(2)

「熱血指導イチの太刀、青春！ドローカー드는……魔法カード、戦士の生還！」

自信満々に引き抜かれたカードはしかしモンスターではなく、まずは助かったと少女が小さく息を吐く。しかしそれを目ざとく見つけた夕顔が、またしても声を張り上げる。

「甘い、甘いぞ少女！確かにモンスターエクシーズは通常、1ターンに1度しか自身の効果を使用できない。しかああし、このジャイアントレーナーはたゆまぬ血と汗と涙と青春と熱血の鍛錬により、その枠を突き破ることに成功した絶対無敵の熱血王！俺は再びジャイアントレーナーの熱血効果発動、熱血指導二の太刀、闘魂！」

「1ターンに2度、効果を使うエクシーズ!？」

「そいつは違うぞ、嬢ちゃん。夕顔の使うジャイアントレーナーは、同名縛りで1ターンに3度まであの効果を使うことができる。初手で出されたのは、まあ事故だと思つて諦めな」

背負った無数の得物からゴルフクラブをおもむろに引き抜いて竹刀の代わりに構えてまたしても素振り始める熱血指導王に驚愕する少女に、冷静に訂正を入れる朝顔。少女の専門はHERO、つまり融合召喚であり、エクシーズモンスター……ましてランク8もの大型モンスターの知識はまだ乏しい。

熱血指導王ジャイアントレーナー(2) ↓(1)

「ドローカー드는……ちっ、今日は調子が悪いみたいだな。永続トランプ、リビングデッドの呼び声。またしてもダメージは発生しない

が、ならば最後の1回だ！おい、いいか少女よ。熱血指導に最も必要な要素、それは一体なんだと思う！」

「え、ええ！えつと……」

なぜか唐突に自分に話が降られ、そもそも飛んできた質問の意味もよく分からず返事に詰まる少女。見かねて助け舟を出したのは、このままだと話が進まないと察した朝顔だった。

「嬢ちゃん、わからないときは素直にわからないって言つといた方が楽だぞー。どうせ大したこと考えて聞いているわけじゃないんだ、真面目に考えてると考えただけ損だからな」

「え、えつと、その……申し訳ありませんがわかりません、まだ私が至らなくて、ごめんなさい……？」

「そうか、ならば仕方がない！この俺が直々に、熱血指導の在り方について教えてやろう！いいか少女よ、熱血指導に最も必要となる要素……それはずばり、愛だ！」

「愛、ですか？」

「あーあ。適当に聞き流しときやいいものを、真面目だな嬢ちゃんは」

あまりに唐突かつ不釣り合いな単語について、オウム返しに聞いてしまふ少女。呆れ気味の相方の言葉は相変わらず無視したままで、夕顔がそうだ、と大きく頷く。

「ただ痛めつけるだけの指導、そんなものは熱血の風上にも置けはしない！熱血指導とはすなわち相手に対する愛、ラブ、アモーレ、ローマ字で言えばエルオーブイイー！それが根本にあつてこそ、真の熱血は成立する！少女よ、わかるかあああ！」

「LOVEってラブじゃねーか、そんなものローマ字読みしてもロベだぞロベ」

喉元まで出かかっていたものの少女には遠慮のあまりなかなか言い出せなかった一言を、何の躊躇もなく突き刺していく朝顔。そんな冷静なツツコミも相変わらず聞こえていないのかはたまた聞こえていて無視しているのか、ともあれ熱血指導王がまたしても武器を持ち変える。最後に選ばれたのは、その巨体に見合った特大サイズのフェ

ンシング用フルーレだった。

「熱血指導サンの太刀、愛！ドローカードは……来たかモンスター、
バーニングナックラー

B K ベイル！喰らえ、800のダメージを！」

「きやあつー！」

振りぬかれたフルーレの先端から稲妻が走り、容赦なく少女の身を焦がす。糸巻らデュエルポリスとは違い八卦の持つデュエルディスクは市販品であるため、「BV」の元素固定による実体化ソリッドビジョンの結合を弱めダメージを和らげる妨害電波発生機構はついていない。それでも大人であればまだその場に踏みとどまることもできただろうが、それよりはるかに軽い少女の体は勢い余って吹き飛ばされ、そのまま押しつけられていた机の角に背中からぶつかってしまふ。幸いなことに手ひどくぶつけたにもかかわらず骨に異常はないようだったが、それでも背中を走る熱い痛み息が詰まる。

熱血指導王ジャイアントレーナー(1) ↓ (0)

八卦 LP4000 ↓ 3200

「おいおい嬢ちゃん、大丈夫か？」

「起き上がれるか、少女！」

「い、痛たた……はい！まだまだ、問題ありません！」

「よおし、その意気だ！なかなか見込みがあるぞ、少女よ！カードを1枚伏せて、俺はこれでターンエンドだ！さあ、どんと攻めてこい！」
壁に手をつきながらも立ち上がりきっぱりと宣言する少女に、そのガッツが気に入ったらしい夕顔が破顔して自らの胸をどんと叩く。吹き飛ばされる最中も手放さなかった自らの手札をぐつと力を入れて握り、彼女もまたカードを引く。

「私のターン、ドロー！……ここは……魔法カード、融合を発動！」

「ほう、嬢ちゃんは融合使いか」

エレメンタルヒーロー

「私が素材とするのは手札に存在するE・HERO クノスぺ、HEROモンスターであるこのカードを2体。英雄の蕾、今ここに開花する。幻影の大輪よ咲き誇れ！融合召喚、V・HERO アドレイション！」

彼女の最も信頼する蕾のヒーロー2体を墓地に送り呼び出された

のは、青黒い地肌に黒い衣装を着こんだ八頭身のヒーロー。その腰からは左右に3本ずつ計6本もの装飾が、まるで影の触手のように風もないのにはためいている。

V・HERO アドレイション 攻2800

「さらに永続魔法、増草剤を発動します。これは1ターンに1度、私の通常召喚権を放棄することで墓地に存在する植物族モンスター1体を蘇生させることのできるカードです。私はこのターンその効果を使い、今墓地に送ったクノスペのうち1体を蘇生させます！」

その言葉通りに表を向けられた増草剤のカードの中から、固く閉じられた花の蕾が擬人化したかのような異色のヒーローが飛び出してアドレイションの隣に並ぶ。これは少女のエースにしてこのデッキの軸となる、ヒーローの中でも珍しい植物族の特性を持つこのカードだからこそできる芸当である。

E・HERO クノスペ 攻800

「行きますーアドレイションは1ターンに1度自分以外の私の場のHERO、そして相手モンスター1体を対象とし、選んだ相手モンスターの攻守をこのターンの間だけ選んだHEROの攻撃力分ダウンさせます。私が選ぶのは当然、クノスペとジャイアントレナーです！」

熱血指導王ジャイアントレナー 攻2800↓2000 守2000↓1200

「俺の熱血指導王が！」

「これでアドレイションの攻撃力は、あなたのモンスターの攻撃力を越えました。このままバトルに入ります、まずはアドレイションで攻撃です！」

弱体化した巨人の放つ力任せの一撃を、漆黒のヒーローが難なく回避する。まさに自身の所属が示す幻影のごとく滑らかな動きで背後に回り込んだアドレイションが、分厚い防具の隙間に鋭く正確な反撃の手刀を叩きこんだ。

V・HERO アドレイション 攻2800↓熱血指導王ジャイアントレナー 攻2000(破壊)

夕顔 LP4000↓3200

「なかなかいいパンチだ、少女よ！だが、そんな程度ではまるで効かないぞ！」

「まだです！クノスペでそのままダイレクトアタック！」

蕾のヒーローが懸命に飛び上がりその小さな体を精一杯に使って蕾の腕で夕顔を殴りつけると勢い余ったその衝撃で派手に埃が舞い上がり、少女の視界を1瞬ふさぐ。再びその目が夕顔の姿を捉えた時、空になったはずのその場には両腕で巨大な盾を構えるオレンジ色のアーマーを着込んだ戦士が立ちはだかつていた。

E・HERO クノスペ 攻800↓夕顔（直接攻撃）

夕顔 LP3200↓2400↓3200

BK ベイル 守1800

「そんな、ダメージが!?!」

「今のも悪くない一撃だった……だがしかああし！俺はクノスペの攻撃を受けた瞬間、手札からBK ベイルの効果を発動させてもらった！ベイルは俺が戦闘ダメージを受けた際に手札から特殊召喚でき、その時受けたダメージを回復する！」

「回復、ですか。あれ、でしたら最初にアドレイションの攻撃でダメージを受けた時にその効果を発動していれば、クノスペの攻撃も受けずに済んだのでは？」

ふと感じた疑問が、少女の口をついて出る。実際にクノスペの攻撃力ではベイルの守備力を突破できず、ベイルの発動タイミングによっては夕顔のライフは結果的に全く減っていない状態のままターンを迎えることもできたはずだ。だがそれを聞いていた朝顔が、代わりにやれやれとたしなめる。

「おいおい嬢ちゃん、素直に質問するのも大事だが、勝負中はやめときな」

「は、はい！ですが気になったので、つい」

「あのな、嬢ちゃん？嬢ちゃんがそう思ったってことは、つまりアドレイションに戦闘ダメージを受けたタイミングでベイルの効果を発動していたらクノスペでは勝てなかった、そう言いたいんだろう？つて

ことはつまり、だ。嬢ちゃんは今自分から、私の手札には手札から捨てることでHEROの攻撃力を2500上昇させるカード、オネスティ・ネオスは入っていませんよーって大声でばらしてるのと同じなんだよ」

「え？……あ、ああつ！」

「やーっぱり気づいてなかったのか。発言にはもつと気を付けときなよ、嬢ちゃん」

「す、すみませんーご指導のほど、ありがとうございます！」

ペコペコと何度も頭を下げてお礼を言う少女の姿に、どこかやりにくそうな表情でそっぽを向く朝顔。負けたら自分が誘拐されるといふのにその理不尽な勝負を持ち掛けた相手にすら素直に礼を言う、その純真さはすっぴん裏稼業に染まった大人には眩しすぎるものだった。

「じゃああなたは、モンスターをより確実に残すためにベイルを……？」

「さあな、どう思う少女よ。だがその答えは、今にわかる！」

「で、ですか。ならば気を取り直しまして、相手に戦闘ダメージを与えたクノスぺの効果を発動！攻撃力が100上昇し、守備力が100下がります。さらにカードを2枚伏せて、ターンエンドです」

E・HERO　クノスぺ　攻800↓900　守1000↓900

クノスぺの頭頂部にほんの少し赤みが差し、ごくわずかにその蕾が緩む。まだまだその英雄としての素質が花開くには時間が必要だが、それでも確実に成長を重ねていた。

しかし今のクノスぺはまだまだ弱小モンスターにすぎず、パワーアップしたところでそのステータスは下級モンスターからの攻撃ひとつで簡単に倒れてしまう程度のものに過ぎない。その欠点をカバーするために少女が今伏せたカードのうち1枚が通常トラップ、ピンポイント・ガードである。相手モンスターの攻撃宣言時にレベル4以下のモンスターを1ターン限定の完全破壊耐性付きで蘇生できるこのカードを使えば、墓地に眠るもう1体のクノスぺを蘇生することができる。そしてクノスぺには自身以外のE・HEROと同時に並ん

だ時、攻撃対象とすることができなくなる効果がある。つまり朝顔が攻撃宣言を行ったが最後、アドレイション以外のモンスターに攻撃ができなくなる簡易ロックが完成するのだ。

彼女の計画に穴はない。密かな自信とともにターンが移り、夕顔がデッキに手をかける。

「俺のターン、ドロー！相手フィールドに攻撃力2000以上のモンスターが存在するとき、限界竜シュヴァルツシルトは手札から特殊召喚できる！さらに伏せてあったリビングデッドの呼び声を発動、墓地から召喚僧サモンプリーストを熱血大復活！さらにこのターンもサモンプリーストの効果により、戦士の生還を捨てることで銀河の魔導師、その2体目をデッキより特殊召喚する！」

限界竜シュヴァルツシルト 攻2000

召喚僧サモンプリースト 攻800

銀河の魔導師 攻0

「そして、先ほどとは違う銀河の魔導師もう1つの効果を発動！このカードをリリースすることで、デッキからギャラクシーの名を持つ魔法、または罠1枚を手札に加える！」

「ギャラクシー、そしてシュヴァルツシルトはレベル8……まさか!」「どうやら気づいたようだな、少女よ。そのままかだ、俺はこうして手札に加わった2枚目のギャラクシー・クイーンズ・ライト、はつどおとおおう！」

召喚僧サモンプリースト ☆4↓8

BK ベイル ☆4↓8

サモンプリーストとベイルのレベルが、シュヴァルツシルトのそれに等しくなるまで一気に引き上げられる。気づいたときにはもう遅い、再び熱血の幕は上がろうとしていた。

「俺はレベル8となったサモンプリースト、ベイル、そして元からレベル8のシュヴァルツシルトでオーバーレイ！3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！俺たちの青春はまだ終わらない！この熱い魂が燃え盛る限り、熱血全開大噴火ああ！ランク8、熱血指導王！ジャイアントレーナーアア！」

熱血指導王ジャイアントレーナー 攻2800

「ま、またそのモンスターを！もしかして、そのエクストラデッキの6枚のカードって……」

「いい着眼点だ、少女よ！だがまずは全国五千万人の熱血ファンがお待ちかね、熱血指導のはじまりだ！ジャイアントレーナーの熱血効果発動、1回目！熱血指導イチの太刀、青春！」

熱血指導王ジャイアントレーナー(3)↓(2)

早速先ほどと同じようにその得物を、だが今回はテニスラケットを素振りしてその効果を発動する巨人。

「ようし、来たな！モンスターカード、炎の精霊 イフリート！喰らえ、800のダメージを！」

「うう……！」

八卦 LP3200↓2400

「更に熱血指導二の太刀、闘魂！魔法カード魔法石の採掘、よってダメージは無しだ！だが、次はどうだ？熱血指導サンの太刀、愛！」

2度目の効果が不発に終わったと見るや、続けざまに3度目の効果に繋げる夕顔。それに従いフィールドの巨人もその手にした武器を最初のテニスラケットから砲丸投げの弾、そして薙刀へと素早く入れ替えてはそれぞれのフォームでの素振りに繋いでいく。

熱血指導王ジャイアントレーナー(2)↓(1)↓(0)

「ドローカードは……少女よ、どうやら先ほどの疑問に対する答え合わせの時間が来たようだな。俺は今の熱血効果で引いた3枚目のカード、ランクアップマジック R U M—アージェント・カオス・フォースを発動！このカードは俺のランク5以上のモンスターエクシーズを選択して発動し、ランクが1つ上のモンスターへとカオス化させ、ランクアップさせる！熱血進化だ、ジャイアントレーナー！お前に秘められた真の熱血、今こそ解き放ち熱血界の神となれ！カオスエクシーズ・チェンジ！」

「ランクアップ……それじゃあ、やっぱり！」

「その通り！俺のエクストラデッキにはジャイアントレーナーが3枚、そしてこのカードが3枚の計6枚しかカードは入っていない！他

のカードなど不要、俺のデュエルはこの熱血のみがあればいい！出でよ、カオスエクシーズC X！熱血！指導！神！アルティメットレナーアアアアア！」

この時点で薄々そうではないかと思っただけ、改めて明言されたあまりといえはあまりの宣言に言葉を失う少女の前で素材全てを使い果たした熱血指導王が真つ赤に燃える光となって宙に飛び、空中でエクシーズ召喚に特有の爆発を引き起こす。燃える瞳と共にその爆発より降り立ったのは、防具という名の拘束から解き放たれた真にして神なる熱血指導の姿だった。

CX 熱血指導神アルティメットレナー 攻3800

「いやいやいや、え、ええ……？！」

「嬢ちゃんは礼儀正しいなあ。でも大丈夫だぞ、思いつきり馬鹿にしてやって。わざわざエクストラ半分以上空けてまで好き好んでこんな縛りプレイやってるような奴、馬鹿じゃなけりゃなんだってんだ」
「行くぞおおお、少女よ！ジャイアントレナー改めアルティメットレナーの、超・熱血効果発動！このカードがオーバレイユニットにモンスターエクシーズを保持している場合！1ターンに1度オーバレイユニットを1つ使い、自分のデッキからカードを1枚ドロロー！そのカードがモンスターカードだった場合、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！超熱血指導ヨンの太刀、熱血！」
伸ばした拳に飛び込んだ光の弾をアルティメットレナーが力強く握りつぶし、光り輝く6本もの拳が空を裂く。突如として始まったシャドーボクシングと共に拳を突き出しながら、夕顔がカードを引く。

「ドロローしたのはモンスターカード、グラナドラー！喰らえ、800のダメージを！」

八卦 LP2400↓1600

無数の拳がもたらす風圧が、またしても軽い少女の体を後ろに飛ばす。先ほどの手痛い一撃による学習のおかげで今度はきちんと受け身の姿勢をとれたものの、それでも勢いを殺しきれず床にバウンドして叩きつけられながら転がってしまう。

「うう……！」

「どうだ、少女よ！このターンもジャイアントレーナーの効果を発動したため、俺はバトルを行うことができない。カードをセットし、ターンエンドだ！」

まだ1度も攻撃を受けていないというのに、すでに少女のライフは初期値の半分を割ってしまった。効果ダメージの積み重ねに対しては、せっかく伏せてあるピンポイント・ガードも何の役にも立ちはない。そして目の前にそびえ立つのは、攻撃力3800ものランク9モンスター。

「それでも、私は負けません！ドローです！」

「おお、いい闘魂だ！なかなか熱血の見込みがあるぞ、少女！」

「……まあ、巻の字の妹分ならなあ。どうしても似るんだらうなあ、かわいそうになあ」

三者三様の反応の中で、少女が素早く自身の手札に目を走らせる。「私は装備魔法、薔薇の刻印を発動！墓地の植物族モンスターを除外することで相手モンスターにこのカードを装備し、私のターンの間だけそのコントロールを……あれ？」

彼女が引いた起死回生の一手のはずの装備魔法、薔薇の刻印。しかしアルティメットレーナーに装備しようとするもデュエルディスクはエラーメッセージを吐き出すのみで、ソリッドビジョンが現れない。その様子を見て、夕顔が高らかに笑う。

「わっははは、残念だったなあ少女よ！アルティメットレーナーは自身の持つ熱血耐性により、互いのプレイヤーのカード対象とならない！そして装備魔法は必ず対象を取るカード、アルティメットレーナーしかないオレのフィールドに対してそのカードを発動することは不可能だ！」

「そんな効果があるなんて、やっぱりもつとカードの知識を増やさない。対象に取れないと、アドレイションの効果も意味がない……ですが、まだ手はあります！除外ができないのならこのターンも増草剤の効果により、墓地のクノスぺを蘇生召喚です！」

E・HERO クノスぺ 攻800

「そしてこの瞬間、クノスペ2体の効果が適用されます。自分以外のE・HEROが存在するときこのカードは相手プレイヤーにダイレクタアタックができ、さらに攻撃対象に選ぶことができます！これが私の必殺コンボ、クノスペシヤルです！」

「おお、必殺コンボか！いいぞいいぞ、そう来なくてはなあ！」

「……まあ、うん。いいんじゃないかな嬢ちゃん、まだ子供だもんな。それはそれとして朝顔、お前はもうちよつと大人になれ。こんな嬢ちゃんと同レベルよりちよい下で張り合っでどうする」

「バトルです。クノスペが自身の効果を使用して、そのまま直接攻撃！」

E・HERO クノスペ 攻800↓夕顔(直接攻撃)

夕顔 LP3200↓2400

E・HERO クノスペ 攻800↓900 守1000↓900

「ぐふっ……やるじゃねえか！」

「クノスペはもう1体います。最初に場に出ていた方のクノスペで、連携直接攻撃です！」

「その攻撃宣言時にトラップ発動、ドレインシールド！相手モンスターへの攻撃を無効とし、その攻撃力の数値だけ俺のライフを熱血回復させええる！」

「お、ここで切るのか。もったいない使い方だ」

「くっ……私のクノスペの攻撃が！」

夕顔 LP2400↓3300

予想外の回復が挟まったために結果的に与えられたダメージは小さく、それどころかむしろライフをバトルフェイズに入る前よりも増やす結果となってしまうことに少女は小さく歯噛みする。

ふざけた態度こそ取ってはいるが夕顔本人は2ターン連続でレベル8モンスターを3体フィールドに並べるほどのセンスと腕の持ち主であり、このまま勝負が長引けば残るライフがあつという間に燃やし尽くされるのも時間の問題だろうということは容易に想像がついた。むしろ800ポイントのバーンが5回決まればそれだけで勝負が決まることを考えると、そのチャンスが8回もありながら今こうし

てライフが残っていること自体が少女にとってはかなり幸運だ。

「メイン2にアドレイションを守備表示に変更。これで、ターンエンドです……」

V・HERO アドレイション 攻2800↓守2100

「いよいよ俺のターンだな、ドロー！参ったな、熱血指導神がエクストラモンスターゾーンにいるままでは、次の熱血指導王を呼び出せない……とても思っていたか！魔法カード、極超辰醒を発動！このカードは俺の手札及びフィールドから通常召喚不可能なモンスター2体を除外し、2枚のカードを引くことができる。俺は手札のイフリートと場のアルティメットレナーを除外し、ドロー！」

確かにアルティメットレナーが居座っている限り、リンクモンスターも採用していない夕顔は3体目のジャイアントレナーをエクシーズ召喚することは不可能。そしてアルティメットレナーは自前の攻撃力とその耐性から、相手にとってもそう簡単に除去できるわけではない。そのため、自分からエクストラモンスターゾーンを解放できる極超辰醒の採用は、ある意味では理にかなっているといえるだろう。

それでも、である。そもそもそれだけアルティメットレナーの場持ちがいいのであれば、それを軸に攻め立てればいいだけなのでは？わざわざ大型モンスターを切り捨ててまで場所を空けようとするプレイングは、ただの本末転倒ではないだろうか。なにか根本的に不条理なものを感じつつも、少女は熱血の神がフィールドから消えていく様を見送った。

「これでよし、だ。魔法カード、魔法石の採掘を発動！手札を2枚捨てることで、俺の墓地に存在する魔法カード1枚を再び手札へと戻す。俺が選ぶのは当然、ギャラクシー・クイーンズ・ライトだ！」

「またですか!?なら、もしかして……!」

「その通り！すでに俺の熱血脳細胞には、次なる熱血への方程式が浮かび上がっている！なぜ俺が先のターン、攻撃力わずか900のクノスペからの攻撃に対しドレインシールドを発動したのか、その理由を教えてやろう！魔法カード、ソウル・チャージを発動！俺の墓地から

任意の数だけモンスターを蘇生できる代わりに、蘇生させた数1体につき1000ものライフ及びこのターンにバトルフェイズを行う権利を払わねばならない。俺が選ぶのは、魔法石の採掘の手札コストとして墓地へと送ったモンスター。グラナドラ2体を蘇生！さらに銀河の魔導師もだ！」

「グラナドラ？確か、あのカードの効果は……」

テキストを思い出そうとする少女の目の前でその目の前に甦る、とても地球の生命とは思えない異形の爬虫類型生物と、このデュエルでは毎ターンその顔を見ている純白のローブを着た魔法使い。

グラナドラ 攻1900

グラナドラ 攻1900

銀河の魔導師 攻0

夕顔 LP3300↓300

「そうだ、このモンスターにもまた効果がある。この瞬間、グラナドラ2体の効果を発動！このカードが召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、俺は1000ものライフを回復する！」

夕顔 LP300↓1300↓2300

目まぐるしくライフが動き、最終的には手札のソウル・チャージ1枚とわずか1000のライフから3体のモンスターを蘇生したに等しい結果だけが後に残る。これで彼のフィールドにはレベル4のモンスターが3体、だがまだそれで終わりではない。彼の熱血指導には、最後の仕上げが残っている。

「もうわかってるな、少女！銀河の魔導師の効果により、このターン自身のレベルを4上昇！そして……ギャラクシー・クイーンズ・ライトオオオオ！」

「またですかー!?!」

銀河の魔導師 ☆4↓☆8

グラナドラ ☆4↓☆8

グラナドラ ☆4↓☆8

恐ろしく強引な展開により、その過程はどうあれまたしても3体のレベル8モンスターが揃う。エクストラモンスターゾーンにも、モン

スターを呼び出すための空きができた。そして夕顔のエクストラデッキには、まだあと1枚のあのカードが出番を待っている。

「俺はレベル8となった銀河の魔導師と、グラナドラ2体でオーバーレエエエイ！俺の熱血はここから始まり、そして永遠に終わらない！熱血こそが我が人生、世界に轟け熱き生き様！エクシーズ召喚、ランク8ツ！これが最後の熱血指導王！ジャイアン……トレーエエエナアアアーツ！」

熱血指導王ジャイアントレーナー 攻2800

「ですが、まだ……！」

腕立て伏せとともに三度現れる巨人を前に、ちらりと手札に目を落とす。そこにあるのは先のターンに使えなかった装備魔法、薔薇の刻印。アルティメットレーナーと違い耐性のないジャイアントレーナーならば、今度こそこのカードを装備することは可能。これから始まる3度のドローでモンスターを2回以上引かれなければ、確実に勝利できる。やや分の悪い賭けではあるが、それでも運の勝負にもつれ込んだ。

だが夕顔もまたその視線に気づき、ちつつちと指を振る。

「甘い甘い甘い、甘すぎるぞ少女！俺はこの瞬間、墓地に存在するRU M-アージェント・カオス・フォースの効果を発動！ランク5以上のモンスターエクシーズがエクシーズ召喚に成功した際、墓地に存在するこのカードをデュエル中に1度だけ手札に戻すことができる！」

「そんな、それじゃあ！」

「ドローは計4回、万一外しても立ちちはだからのはアルティメットレーナー。ちと厳しい賭けだな、嬢ちゃん」

「だが、もう遅い！まずはジャイアントレーナーの、熱血効果発動！」
ジャイアントレーナーが7度目に振るう得物は、ウエイトリフティングのバーベル。巨人のサイズに合わせ果てしなく巨大なそれをえいやつとばかりに持ち上げて頭上にキープするさなか、そのバーベルに光弾が吸い込まれる。

熱血指導王ジャイアントレーナー(3) ↓ (2)

「トラップカード、エクシーズ・ソウル……だと……!?ならば二の太刀、サンの太刀だああ！闘魂、そして愛！」

まずは1度目、しかし引いたのはまたしてもトラップカード。ならばと飛んだ次なる命令に巨人が応え、ずつと持ち上げていたバーベルを下ろし背中から取り出した新たな武器は、ゲートボールのスティックだった。

「3枚目のギャラクシー・クイーンズ・ライト……え、ええい！まだまだ俺はへこたれないぞ、次でモンスターカードを引き、アルティメットレナーでもう1枚！それできっかり俺の勝ち、何も問題はなあああい！」

スティックでの素振りをそそくさと終えた巨人がいよいよ最後の得物、金属バットを振りかざす。最後の光弾を吸収して満ち溢れるエネルギーに光り輝くそのフルスイングが、強大な風圧と共に夕顔のデッキトップを巻き上げる。

「うおおおおー！モンスターカード、BK ベイル！来たぜ来たぜ来たぜ、喰らえ、800のダメージを！」

「キヤアアーツ！」

八卦 LP1600↓800

「お、やっと引いたか。首の皮1枚で勝機が繋がったな」

「いよいよリーチのようだな、少女よ！泣いても笑っても次が最後の1枚、俺は全身全霊の熱血指導でかかる！少女よ、お前も男……じやないが、もはや性別などはどうだっていい！その燃え盛る魂で、見事俺の思いに応えてみせる！」

「はいっ！不肖この八卦九々乃、全身全霊で受けて立ちましょう！かかって来ててください、夕顔さん！」

「……なんだこの茶番」

ぽつりと呟かれた呆れた一言は、もはやどちらの耳にも入らなかった。最初から最後まで無駄に燃えに燃えている男と、その素直さゆえにあっさり感化されてつられ熱血に陥った少女。いつのまにやら完全に2人だけの世界で行われていたこのデュエルは、最終盤になるにあたっていよいよ熱く激しく燃え盛っていた。最後のドロウを行う

ため、先ほど手札に加えた1枚の魔法カードを取り出す……その寸前、なぜか夕顔が少女へと声を張り上げる。

「RUM—アージェント・カオス・フォースを発動！ランク8のジャイアントレーナー1体を素材として、熱血大進化あぁー！さあ少女よ、ともに叫ぼう！」

「ええっ!?わ、私もですか!？」

「大丈夫だ、恐れることはない！その胸に秘められた熱き魂を、この口上に載せて解き放つのだ！俺も共に叫ぶ！」

「で、では—」

対戦相手の召喚口上を一緒に叫べというもはや理解不能を通り越してこの男は本当に大丈夫なんだろうかと勘繰りたくなるような訳の分からない誘いに、しかしすっかり場の空気に飲み込まれ熱血に感化されきった少女は元気よく了承する。そして欠片も間を置くことなく、2人の声が図書館いっぱいに響き渡った。

「熱血の前に熱血なし、熱血の後に熱血なし！燃えよ青春燃えよ闘魂、そして何より燃えよ、俺（私）！全ては愛の指導の下に、カオスエクシーズ・チェンジ！CX 熱血指導神！アルティメットレーナーアアア!!」

「いやなんで息ぴったり合うんだよ仲良しだなお前ら」

CX 熱血指導神アルティメットレーナー 攻3800

「息が合う？それは違うぜ、朝顔さん！俺たちは今、魂の奥深くで分かりあった！そう、熱血の魂でだ！そうだろう、少女よ！」

「はい！まさにそういうことです！」

「……あ、そ。もうなんでもいいけど、まあ……早よ終わらせてくれないや」

ついに朝顔が突っ込みを放棄したところで、改めて夕顔が少女の方へと向き合う。モンスター越しに2人の視線がかち合ったところで、ついに少女の運命を決める最後の号令が下された。

「アルティメットレーナーの、超熱血効果発動！」

CX 熱血指導神アルティメットレーナー(1) ↓(0)

そして勢いよく引き抜かれる、そのデッキに眠る一番上のカード。

2人のデュエリストが息をのんで熱い視線を送る中、ゆつくりとそのカードが表を向けられた。

「それは……!」

「トランプカード、エクシーズ・リボーンだと……!?!」

ダメージを与えるという観点から見れば、それはまたもやはずれの1枚。よほど精神ダメージが大きかったのか、夕顔の体がカードを手にしたままその場でよろめく。

「ゆ、夕顔さん!」

「俺のデッキはどちらかといえば、モンスター比率を高めに組んである。なのになぜだ、なぜここまで引きが偏る!」

「夕顔さん……」

しかしその場に崩れ落ちそうになった彼は、土壇場で大きく床を踏みしめて持ちこたえた。にやりと笑みすらも浮かべながら、再びまっすぐに立ち上がり少女と向かい合う。

「いや、恐らくこれが、この熱血指導の答えなのだろう。ならば少女よ、今度はお前の番だ!お前なりの熱血を、この次のターンで見事この俺に示してみせろ!」

「私なりの、熱血を?」

「そうだ、俺は逃げも隠れもせん!俺の度重なる熱血指導により少女よ、今のお前には熱血の魂が息吹いている!ならばその魂を持って、見事この俺を打ち砕け!それが俺の与えられる最後の課題、最後の熱血指導だ!ただしこの俺も、ただでやられはせん!俺はカードを2枚。このエクシーズ・ソウル、そしてエクシーズ・リボーンを伏せてターンエンドだ!」

「わかりました、夕顔さん……いえ、夕顔師匠!これが私の、私なりの熱血指導です!ドローツ!」

どうせ正体の見えているカードとはいえ、わざわざカードを見せつけてからフィールドに叩きつけるようにして置く夕顔。そのまっすぐな瞳に対し全身全霊で懸命に応えようとする少女もまた、音が聞こえるほどに勢いよく運命を決めるカードを引き抜いた。

「さあ来い、少女よ!ただしこのターンで俺のライフを削りきれな

かった場合、俺は今伏せたエクシーズ・リボーンを発動し墓地のジャイアントレーナーを蘇生、さらにエクシーズ・リボーン自身をその素材とする。その熱血指導をもって少女よ、その熱血にとどめを刺そう！」

「……いいえ師匠、その必要はありません！私は今、あなたを超えてみせます！」

大胆な宣言を受けて夕顔はにやりと笑い、朝顔も興味深げにサングラスの奥の目を光らせる。その挙動に注目が集まる中、少女が動き出した。

「まず私は、守備表示にしたアドレイションを攻撃表示に変更します」

V・HERO アドレイション 守2100↓攻2800

「アドレイションを攻撃表示に……？」

「そして、一気にバトルフェイズに移行します。まずはクノスペ2体で直接攻撃、熱血クノスペシャル！」

主に影響されてか、その漫画チックな瞳の中に炎を宿した蕾のヒーロー2体がそれぞれ仁王立ちするアルティメットレーナーを左右から潜り抜けて夕顔に手痛い一撃を叩きこむ。

E・HERO クノスペ 攻900↓夕顔(直接攻撃)

夕顔 LP2300↓1400

E・HERO クノスペ 攻900↓1000 守900↓800

「ちっ……」

「いいですよ、クノスペ！そのままもう一撃です！」

E・HERO クノスペ 攻900↓夕顔(直接攻撃)

夕顔 LP1400↓500

E・HERO クノスペ 攻900↓1000 守900↓800

この瞬間夕顔の脳内で、あらゆる可能性へのシミュレーションが行われる。彼の実力は本物であり、そのカード知識もまだまだ才能の開花しきっていない少女に比べはるかに多い。

まず最初に思い浮かんだのは当然、打点増強カードの存在。アルティメットレーナーを正面から超えてみせようというのだろう。ここまでの立ち合いから相手のデッキがやや変則的とはいえ【HERO

〇」の範疇であることを理解した彼は、もつともそのデッキに入ることが多くなおかつアドレイションの打点をアルティメットレーナー以上に引き上げる2枚のカードに思い至る。

まず1枚が、先ほどの話にも出ていたHEROの攻撃力をフリーチェーンで2500アップさせるオネステイ・ネオス。そしてもう1枚が融合モンスターの戦闘を行う攻撃宣言時に発動し相手モンスターの攻撃力をそのモンスターにそのまま加算する速攻魔法、決闘融合―バトル・フュージョンである。

「(だが、その2枚はないな)」

思いついたものの、彼の頭脳はすぐにそれを否定した。理由は単純、前者であればクノスぺの攻撃にそれを使わない理由がなく、後者であったとしてもそれだけではこのデュエルを制することなど不可能なのである。

それが彼の伏せたカードのうち1枚、エクシーズ・ソウル。発動時に彼の墓地に存在するエクシーズモンスター1体を選択し、そのランク1つにつき300もの全体強化を行うことのできるカードである。彼の墓地に存在するジャイアントレーナーを選択すれば、アルティメットレーナーの攻撃力は6200にまで上昇する。

仮に少女がバトル・フュージョンを握っているとしても、発動タイミングが攻撃宣言時に限定されている関係上アドレイションの攻撃力は6600。これではアルティメットレーナーを倒すことはできても、その後ろに控えた夕顔自身のライフを削りきることはまだ不可能。

「(だが、あの目……)」

その1瞬の間に、少女と目が合う。その目は嘘偽りなく本気であり、このターンで勝利を掴むという少女自身の自信のほどを何よりも雄弁に物語っていた。ならば、どうして出し惜しみする理由があるだろうか？彼の腹は、そこで決まった。

「俺が戦闘ダメージを受けたこの瞬間、手札からBK ベイルの効果を発動！特殊召喚すると同時に、俺のライフを今受けたダメージの数値だけ熱血大回復する！」

BK ベイル 守1800

夕顔 LP500↓1400

「さあ、これで俺のライフにはまだ余裕があるぞ！」

その言葉を聞いて、しかし少女は……静かに、しかし会心の微笑みをその口元に浮かべた。

「ありがとうございます、師匠。私はこのターン、いくつかの賭けをしていました」

「何……？」

「ほう、面白そうな話だな。続けてくれ、嬢ちゃん」

抑えきれない喜びが、その言葉の端々に出る。それは、勝利を確信した者に特有の現象。それを察知した朝顔が、後ろから油断ない目で催促する。

「アドレイションを攻撃表示とし、クノスペでライフを限界まで削る……そうすれば、師匠は先ほどドロしたベイルを出す。まず、これが最初の賭けでした」

それを聞いた2人の男が、同時にアルティメットトレーナーの横に並び立つベイルへと目を向ける。そんな視線の動きと合わせるかのように、少女の声が続いた。

「そして2つ目は師匠がそのベイルをこうして、守備表示で特殊召喚するということ。私もこれは知っていましたが、エクシーズ・ソウルは全体強化のカード。つまり攻撃力が0のベイルであっても、ランク8のジャイアントレーナーを選択すればその数値は2700まで上昇する。それを狙う可能性も捨てきれませんでしたから、どちらかといえばこちらの方が分の悪い賭けでした」

それは、どこかひとつが崩れればあっさりと瓦解する、一見すればごく小さな希望。それでもライフが追い込まれればベイルが回復のために出てくる、そして攻撃力0のベイルはいくら強化カードがあつたとしても守備表示で呼び出される……それはすべて、きわめて合理的な戦術。だからこそ、少女はその目が出ることを信じた。

ゆつくりと、少女が笑う。その微笑みに2人の様子を観戦していた朝顔は、ふとかつての同僚がよく見せた姿を思い出す。

「……ふん。巻の字直伝のポーカークーフエイスカ。通るわけない希望をなぜか予定調和のごとく押し通す、あれもそういう奴だった」

その言葉通り、堂々たる態度でのハツタリを少女に教え込んだのは糸巻本人である。相手にこちらの自信を嘘でもいいから伝えることで勝手に深読みさせ、その思考をドツボにはまらせることでこちらの狙い通りの結果へと暗に誘導する。まさに彼女の得意としていた盤外戦術を、この1か月で少女の柔軟な脳と純粹な頭は乾いたスポンジが水を吸い取るかの如く吸収していた。

もつとも、少女にとつてもこの戦法を実践に使うのは初めてのことである。本人の気質からはかけ離れたこのような盤外戦術を、しかもぶっつけ本番で成し得たのはまさしく七宝寺が見出し、糸巻が感じた少女自身の持つ天性のセンスの賜物か。

「ありがとうございます、お姉様。お姉様のおかげで、またひとつ私は成長することができました。では師匠、参ります！」

「なにがなんだかわからんが、ああ来い！言っただろう、俺は逃げも隠れもせん！」

その声に背中を押されるように、少女が1枚のカードを表に返す。それはピンポイント・ガードと共に1ターン目からずっと伏せられ、しかし使う機会のこれまで訪れなかったカード。満を持して、その力が牙をむく。

「トランプ発動、メテオ・レイン！このカードの効果によりこのターン、私の全てのモンスターは守備モンスターに対する貫通能力を得ます！」

「なるほど、それでベイルを叩くつもりか？だがアドレイションの攻撃力は2800、貫通で1000ダメージを与えようが……」

「さらに！手札から速攻魔法、フォーム・チェンジを発動します！」

「ほう……！」

興味深そうに、朝顔が唸る。それこそが少女がこのターンに引いたラストドローであり、勝利へと続く奇跡の一本道を辿る最後のパーツだった。

「このカードは発動時に私のフィールドから融合HEROを1体エク

ストラデツキに戻し、戻したHEROと同じレベルで名前の異なるマスクドヒーローM・HERO1体をマスク・チェンジの効果によるものとして特殊召喚します。戻りなさい、アドレイション……そして！」

闇のヒーローがその名の通り幻影へと消えていき、深くて暗い影のみがその場に残る。主を失った影はしかし消えるどころかますます色濃くなり、その中央から硬質な光を反射し輝く細身の剣を握った1本の腕が伸びた。そして同じく硬質な仮面が、その全身が、青いマントが、影を通り廃図書館に飛び上がる。

「英雄の蕾、今ここに開花する。金剛の大輪よ咲き誇れ！変身召喚、レベル8。M・HERO……ダイアン！」

M・HERO ダイアン 攻2800

その攻撃力は、戻したばかりのアドレイションと同じ。しかし、この戦術には意味がある。少女のデッキのエースにしてフェイバリットカード、あらゆるカードの全てはその力を最大限に生かすために収束する。

「ダイアンでベイルに攻撃します。そしてメテオ・レインの効果により、貫通ダメージの発生です！」

「ぬぐ……ぬおおおっ！」

M・HERO ダイアン 攻2800↓BK ベイル 守1800

(破壊)

夕顔 LP1400↓400

「この瞬間、ダイアンの効果発動です！このカードが戦闘でモンスターを破壊した時、デッキからレベル4以下のHERO1体をリクルートすることが可能となります。そして私が呼び出すのは、私のエースモンスター。最後のクノスペを特殊召喚します！」

E・HERO クノスペ 攻800

「やつぱりな、嬢ちゃん」

「ここでクノスペ……そういうことか、少女よ！」

フォーム・チェンジを認識した時点ですでにこの結果を察していた朝顔にやや遅れ、夕顔も少女の狙いによく思い至る。そして、バトルフェイズ中に特殊召喚された蕾のヒーローは、当然まだ行ってい

ない攻撃を行うことが可能。

「これが最後の攻撃です！クノスペは場に自分以外のE・HEROが存在するとき、相手プレイヤーにダイレクトアタックできる……必殺コンボ、クノスペシャル！」

クノスペが走り、アルティメットトレーナーの股下を潜り抜ける。反応が遅れた1瞬の隙に、蓄の両腕はその後ろに立つ夕顔の体へと届いていた。

E・HERO クノスペ 攻800↓夕顔（直接攻撃）

夕顔 LP400↓0

「や……やりました師匠、お姉様！」

精神的プレッシャー、そして肉体的負担。大きく肩で息をしながらも、抑えきれない喜びに少女の目は輝く。パチパチパチ、とゆっくりとした拍手が響いた。

「おー、まさか本当に勝っちゃうとはなあ。大したもんだ、嬢ちゃん。で、お前はいつまで寝てるつもりだ」

その言葉に、クノスペによる最後の攻撃で殴り飛ばされてからずっと床に寝転がっていた夕顔がむくりと上半身を起こす。

「痛つつ……見事だった、少女よ！よくぞ熱血魂をものにし、そしてこの俺をも超えた！少女よ、お前にはもう俺が教えられることはない。熱血免許皆伝だ！」

「なにがだ」

「ありがとうございます、師匠！」

「だからなにがだ……まあいいか」

結局この2人の世界へのツツコミは放棄されたところで、朝顔がくるりと少女に背を向ける。

「それはそうとして、負けたものはしょうがないな。帰るぞ、夕顔。この件はこの勇気ある嬢ちゃん、デュエルポリスに丸投げだ」

「ま、待ってくれよ朝顔さん！」

「阿呆。早くしないと……」

そう言い終えるよりも先に派手な音が閲覧室の向こう、入り口付近から響く。まるで停止した自動ドアを叩き割ってこじ開けたような……というよりも、まさにそれそのものの破壊音。そしてワントンポ置き不機嫌と苛立ち、そして焦りを隠そうともしていない女の声。「ここにいるテメエら全員動くんじゃねえ、とつくに調べはついてんだ！家紋町デュエルポリス、糸巻太夫！証拠隠滅なんてくだらない真似、アタシが通すと思うなよ！」

「同じく家紋町デュエルポリス、鳥居浄瑠。現在時刻午後7時31分、これより強硬捜査に入る。これはデュエルポリスの権力に基づく正式な捜査であり、一切の反抗及び抵抗は現行犯として即時拘留の対象となることを宣言します。つーか糸巻さん、これぐらいの宣言自分でやってくださいよ。一応形式だけでも言つとかないとあとあと面倒なんすよ」

「うるせえ馬鹿、こちとら緊急事態だぞ。八卦ちゃん、いるかー!」
「お姉様……!」

聞き覚えのあるその声に、少女の顔がぱあつと晴れやかになる。声の方向に走りだそうとするも、しかしその両足は少女の意志に反してうまく動かない。それでも無理に歩き出そうとするも数歩も進まないうちに両足から力が抜け、なかばその場に倒れるようにしてへなへなど座り込む。

しかし、それも無理はない。先ほどまでは勝負に全神経を集中させて全身をアドレナリンが駆け巡っていたためにさほど感じてはいなかったが、一切の軽減がなされていない「BV」による3200ものダメージは、少女の体を確実に蝕んでいた。気持ちばかりがはやるもまるで言うことを聞かない体を床の上でもがらせる少女に、朝顔が一つため息をつく。

「ほらな。まあ思ったよりちよつと早かったが、おおむねこんなもんだ。巻の字には見つかるよとめんどくさい、とつと帰るぞ夕顔。と、そうだ。最後に嬢ちゃん、ひとつ伝言を頼まれてくれないか」

「伝言、ですか？」

相変わらず起き上がることもできないまま、どうにか首だけを傾け

てそちらに視線を向けて見上げる。すでに日は沈んでいるにもかかわらず付けっぱなしのサングラスに隠れその目の中の感情を窺うことはできないが、男はああ、と頷いた。

「巻の字に伝えといってくれ。信じようが信じまいが勝手だが、今回の幽霊騒ぎに俺らは一切関与してないからな。むしろ誰の仕業なのかかわからねえから、こうして調べてこいなんて上に使われてんよ。んで今回俺らは、嬢ちゃんとのアンティに負けたから大人しくこの件からは手を引かせてもらう。協力する気はないが邪魔する気もないから、まあデュエルポリスの方で頑張つといってくれ、つてな。ほれ行くぞ、夕顔。そろそろ巻の字なら焦れて踏み込んでくる」

「応・さらばだ少女よ、俺とお前の熱血魂、もし縁があればまた会おう！」

「はっ、やめてやれよ夕顔。嬢ちゃんにとっちゃ、俺らとなんざもう会わない方がいいに決まってるさ。じゃあな嬢ちゃん、いいデュエル見せてもらったぜ」

その言葉を最後に2人は身を翻し、糸巻の怒声が聞こえた方向とは反対側へと姿を消す。彼らの気配を感じられなくなつてからわずか数秒後、どたどたと足音を響かせながら怒り狂った赤髪の夜叉が戦場の跡へと飛び込んできた。

「アタシを無視たあい度胸じゃねえか、その喧嘩買つ……八卦ちゃん！」

荒っぽい言動とは裏腹に、踏み込むや即座に閲覧室全体のクリアリングを行う糸巻。そんな彼女が真っ先に目にしたものは閲覧室の真ん中にある明らかに人為的に机や椅子をどけて作られた不自然な空間と、その中央で倒れ込み彼女の方へ向き直ろうともがいている少女の姿だった。

「ちよつと糸巻さん、だから踏み込むの早いですって！施設封鎖もまだ終わってないんすよ!?!」

遅れて飛び込んできた鳥居もまた、倒れた少女と駆け寄る女上司の姿を目にする。

そして、肝心の少女はといえば。見慣れた2人の顔を見て、張り詰

めていた緊張の糸が切れたのか。自分は助かったのだという実感が、ようやくその身に湧き上がったのか。堪えきれないほどの感情がその小さな胸のうちでいつぱんに爆発し、その視界がにじむ。息が詰まり、呼吸が熱くなる。

……そして。

「う、うぐ、ううう……」

「おい、八卦ちゃん？」

「う、うわーん！お、お姉様ー！ごべんなざい、わだし、私ーっ！」
軽々と自分を抱き上げた赤髪の豊かな胸にしがみつき、普段の彼女らしくもなく全力で泣きはらすのだった。

ターナー 鉄砲水の襲撃者

「だいたいだ、この馬鹿！」

「すみませんでした、お姉様……」

時刻はすでに、完全な夜。今なお明かりの灯る非常灯が照らす緑色のわずかな光とそれ以上の圧力を持った圧倒的な暗闇の中には、3つの人影。そのうちひとつはうつすらと埃の積もる床に正座し、ひとつはその影を上から見下ろすようにいらいらと動き回りながら立っている。最後のひとつはそんな2人からはやや距離を取り、適当な机に腰かけて暇そうに足を揺らしていた。

それが誰である、などとは問うまでもない。正座して甘んじて説教を受ける八卦とその説教の主体である糸巻、そして適当な段階でフオローに入ろうと様子を窺う鳥居である。結局先ほどまでこの場所にいた2人のテロリスト……朝顔と夕顔のコンビに逃げ切られた彼女らは、いまだ痛みと疲労から体の動かない少女の元へと事情を聴き出すために戻ってきたのだった。

自らの自由を賭けたアンティデュエルと、その結末。開いた口が塞がらない思いでその話を聞き終えた彼女たちは、わずかな沈黙ののち……こうして、説教の時間が続いている。

「確かにアタシも不注意だった。そもそもこの幽霊騒ぎの地図、アタシに渡したの他にコピーがとってある時点で八卦ちゃんも正直、どっかで1回は来る気満々だったってことだもんな。それに気づけなかったのはアタシの責任でもある」

「は、はい……」

「はいじゃないー」

「わあ理不尽」

いかにもやる気なさそうに入れられる鳥居の茶々に氣勢を削がれながらも、目の前でしょぼんと座り込む少女を改めて見下ろす糸巻。この忠犬のような少女に尻尾が生えていれば、今はべったりと地面に垂れ下がっているだろうことは容易に想像できるだろう。

「今回は確かに、八卦ちゃんが勝ったかもしれない。けどな、勝負な

んて所詮は時の運だ。どれだけ実力差があろうとも、絶対に勝てる相手なんてどこにだっていやしない。まして八卦ちゃんの今日の相手は、道は違えどアタシと同じその道のプロだったんだろ？ どれだけ自分が危ない橋渡ったのか、頭冷やしてもう一回考え直してみな」

「はい……」

しよんぼりとうつむく少女。そんな彼女の頭に、糸巻の大きな手がポン、と優しく置かれる。

「え？ あなの、お姉様？」

「はい終わり、ここまでがデュエルポリスとしてのアタシからの話で、だ。こつからはデュエリスト、糸巻太夫として話をしようじゃないの。まず、アタシから言えることはひとつ……よく頑張ったな、八卦ちゃん。さすが、アタシの妹分だ」

「お、お姉さ……」

ぐるりと殺風景な廃図書館の内部を見渡し、その頭を撫でる手に力がこもる。おずおずと見上げた先の見たこともないような優しい微笑に、少女は自分の頬が意図せず熱くなるのを感じた。

『BV』は初めてだったんだろ？ しかも、こんなひとりぼっちの場所です。痛かったよな、辛かったよな。よく頑張った。本当に、よく頑張った」

何か言おうとして口を開けるも、胸が詰まって言葉は何も出てこない。わけもなく胸が、頬が、そして目頭が我慢できないほどに熱く火照り、潤んだ視界がぼやけ……それでもなお、目の前にいる彼女の赤い髪色だけがただ鮮烈にその目に映る。つう、と一筋の涙が、ようやく乾いてきたその頬を再び流れ落ちた。そんな様子に糸巻はおおいと苦笑し、固まった少女をその胸元に引き寄せてできるかぎり優しく抱きしめる。

ちなみにその後ろで鳥居は、「あ、これ堕ちたわ」と冷めた目を送っていた。

「……」

この糸巻太夫という女、現役時代においては男性よりもむしろ女性ファンの方が多かったことでも当時のデュエリストからは知られて

いる。テレビ中継には親衛隊が黄色い声援を飛ばす様子がいよつちゆう映り込み、バレンタインには並の男プロよりうず高く積まれたチョコレート mountain が積みあがる。ひとたびインタビュー等で何か欲しいと眩こうものなら、その翌日には熱烈なラブレターと共に各地から最高級品が送られる。普段の性格からは想像もつかない時たま見せる優しさのギャップは、スキンシップを特に意識しないその気性も相まって数多の女性を虜にしてきた。そして恐ろしいことに、それだけ見境なしに墮としておいて本人には全くその気がない。そう、ちようど今のように。

赤髪の夜叉がかつて無自覚系女たらしとまで言われていた所以を現在進行形で目の当たりにし、貴重なものを見たとき心の中で手を合わす。

「なんつーか、糸巻さん」

「ん、なんだ？」

「……いえ、なんでもないっす」

よほどその口から出ようとしていた「でも厳しくしてから急に優しくするのって女たらしってよりかはDV夫のやり口ですね」などという言葉を寸前で呑み込む程度には彼は賢明であり、また自分が大事でもあった。

「妙なやつだな。さて、アタシらも帰るとするか。今日はもう遅い、とりあえず出直した。八卦ちゃん、そろそろ離れてくれると嬉しいんだが」

「えへへー。お姉様柔らかくてあったかいです〜……」

「デレツデレじゃないですか。よかったですね糸巻さん、ひゅーひゅー」

「あのなあ……鳥居、お前がアタシ馬鹿にしてる時の煽り方ってなーんかいつつも雑なんだよなあ。あ、こら八卦ちゃん、どこ触ってんだちよつと!?!」

「ふえつ!?!え、あ、し、失礼しましたお姉様っ!つ、つい……」

「しゅ〜!?!」

雑に羽織っただけで前も留めていない制服の下、薄手のシャツ越し

にその存在感を強く主張する彼女の双丘。しがみついて泣きはらすところまでは許容できても、さすがに直接まさぐるのはいくら彼女であつてもNGらしい。しかし慌てて手を放して頭を下げた少女の目に、その顔がほんのかすかに赤くなつていたように見えたのは光の加減だつただろうか。その真相は、ただ彼女本人のみが知る。

しかし、大量のお姉様成分のドーピングによりようやく力が入るようになってきたその足で立ち上がりとした少女の動きはまたしても途中で止まる。熱血指導のインパクトでいつの間にも頭からすつ飛んでいた、そもそもの自分がここに来た理由を今になつて思い出したのだ。

「あのお姉様、それに鳥居さんも。すみませんがもう少しだけ、私に時間をくれませんか。私は確かに、ここで女の子の幽霊さんを見たんです」

決意を秘めたその言葉に、デュエルポリス2人がなんとも言えない表情で顔を見合わせる。この件にテロリストと「BV」の関与がないことをまだ少女から聞いていない彼女たちにとってはこの幽霊騒ぎそのものが薄汚れた欲望にあふれる茶番、幽霊の正体も実体化したブレイクビジョンでしかない。これ以上この件に首を突っ込ませたとことで、子供には刺激が強すぎるだろうという考えあつてのことだ。

だが結局、大人2人が少女の満足のいく答えを返すことはなかった。閲覧室の端の方から、落ち着いた調子の少年の声が響いたのだ。「申し訳ないけど、それは勘弁してほしいかな。ちよつとばかり厄介なことになつててね、今はあの子を下手に刺激してほしくないのよ、これが」

「誰だ!」
「!？」

突然の第三者に対し、その場にいた3人のとつた反応は様々だった。咄嗟に振り向いて臨戦態勢となると同時に少女の手を取り自分の背中側に引っ張り込んで防御姿勢も同時にとる糸巻に、不意打ちに押しフリーズしてしまい対応の遅れる八卦。

そして唯一手の空いていた鳥居が、そんな女性陣の前にゆらりと立

ち上がる。

「……いつから、そこにいた？」

いつもの軽い態度は鳴りを潜め、ドスの利いた低い声で本棚の向こう側、声の聞こえた暗闇の中に問いかける鳥居。普段見慣れていたうだつの上がない苦労人としての彼とはあまりに違うその調子に、少女が小さく息をのむ。あるいは、これも彼の得意とする演技の一環なのかもしれない。いずれにせよその声に応え、足音と共に声の主は現れた。

「どうどう、そう怒りなさんな。で、いつからだっけ？そつちの子がデュエルするちよつと前ぐらいからかな。さすがにまずそうだし負けたら止めとこうかとは思ってたけど、普通に勝っちゃったからすっかり出そびれてね」

「アンタ……」

「あなた、確か……」

暗闇から出てきたのは黒目黒髪の、姿だけ見ればせいぜい15、6程度の少年。しかしその雰囲気はまだ子供らしさの残る顔立ちからは不自然なほどに大人びており、実年齢はまるで読めない。見方によつては外見相応にも、あるいはそれよりも10も20も年上にも捉えられる。

そして糸巻と八卦の2人には、この少年に対して見覚えがあった。あれは、彼女たちが最初に出会った日。カードショップ七宝に訪れた糸巻がすれ違った、それよりも前に店に来ていた少年。あの時は外見相応に見えたそのにこにこ人懐っこい笑みは、暗闇の中で影が差した結果その見た目のアンバランスさを余計に強調しなんとも怪しいものに見えた。

「はい、そつちの2人は久しぶり……ってほど認識もないか。なんでもいいけどとりあえず、今日のところは帰つてくれると僕としては大変嬉しいかな。説明しろってんならやってもいいけど、とりあえず今は立て込んでるから次にして、次に」

どこかのんびりとした口調ではあるが、少年はそれなりに真剣な顔である。だが糸巻が何か返すより先に、鳥居が1歩進み出る。

「悪いが、そうはいかないな。俺らも仕事で来てるんだ、胡散臭いガキの言うこと聞いて帰ってきましたじゃ話にならない」

「あ、やっぱり?」

その返事も想定内なのか、特に気にした風もなく肩をすくめる少年。これに関しては、糸巻も同意見だった。一面識と呼べるものがあるかどうかすら怪しい通りがかり程度の少年の言葉と、近辺に集まる状況証拠の数々。さすがにここで引くという選択肢は、デュエルポリスとしては論外でしかない。

それであつてもなお、糸巻が動かなかつたのには理由があつた。それが目の前の年齢不肖な少年からかすかに感じる、得体のしれない何かだった。全盛期に比べれば錆びついているとはいえかつて培ったプロとしての本能が、この男は危険な相手だと警鐘を鳴らす。自分だけなら笑い飛ばして喧嘩を売るのもいいが、この部下は?そしてデュエルポリスですらない、巻き込まれただけの妹分は?背中に庇う少女の手を握る腕に、ぐつと力がこもる。

「んー、じゃあこうしましょ。申し訳ないけど、今はちよつと本気で立て込んでるからね。誰でもいいけど、僕とデュエルして決めようじゃない。さつきはなかなか面白い話を聞かせてもらったけど、アンティールの拡大解釈つてやつ。僕が勝つたら、悪いけど今日のところは退いてもらうよ。そっちが勝てば……まあ、僕も含めて好きにすればいいよ」

「条件に差があるな、随分と余裕じゃないか」

「そりゃ僕だつて、自分が無茶言ってる自覚はあるもん。勝負仕掛けてるのもこつちなんだから、条件ぐらいいは譲歩しとかないと申し訳ないでしょ」

あつさりと告げるその表情からは、相手を馬鹿にするどころか本当に申し訳なさそうに思っている様子が読み取れる。だが逆に言えば、これはこの少年にとつても最大限の譲歩ライン。これ以上の好条件を引き出そうとしても、もはや首を縦に振ることはないだろう。そのあたりの駆け引きは慣れたものな糸巻が視線を向けると、わずかに振り返った鳥居も同じことを考えていたらしくそれを受けて小さく頷

く。

「俺が相手になろう。それでいいな？」

「オーケイ、そうこなくっちゃ。ここに来てから初めての实战なんだ、楽しいデュエルと洒落込もうじゃないの！」

デュエルディスクを展開すると同時にさらに1歩前に出て、後ろの2人との距離をさりげなく広げる鳥居。それに対してにやりといたずらっぽく笑った少年がその左手首に付けていた青い腕輪に手をかけると、かすかに光ったそれが音もなく展開される。一体どのような素材からできているのか、半透明な膜のようなものが発生したのだ。よく目を凝らすとその膜は常に流動を続けており、少なくとも液体であることがわかる。

「なんですか、あれ……？」

八卦の眩きは、この場の全員の気持ちを代弁していた。なるほど確かに、あの腕輪の変形したその姿はシルエットだけ見ればデュエリストの必須アイテム、デュエルディスクに酷似している。だが、その姿は例えるならば色違いモンスター、ホーリー・エルフとダーク・エルフほどになにもかもが違う。

そして重要なのは、かつてプロとしてデュエル界の最先端を突っ走っていた糸巻。そして子役時代からあちこちで演劇デュエルを繰り返し、その都合上デュエルディスクの開発会社ともコネが強かった鳥居。デュエル用のアイテムに関してはスポンサーからの試作品等でかなり詳しい知識を持つはずの両者ともに、あの腕輪から展開するデュエルディスクは見たことがない品だという点だ。

……やはり、この男は何かが怪しい。意見が一致した鳥居が、警戒をより一層色濃くする。そして視線を自らのデュエルディスクに向ければ、問題なく相手のそれと同期したとの情報。どんな代物なのかはともかく、内部処理的には正規品と変わらないものようだ。そして表示される、自分が先攻を取ったことを告げる表示。

「……ゴホン。『それではお集りの皆様方……』とはいえ、今宵の観客はあいにくと数が少ない模様。しかし世の中には少数精鋭との言葉もございませぬ、願わくば皆様方がそうですありますように』」

目がぱつちりと開き、背筋も伸び、優雅に深々と一礼する。少年はいきなり態度の豹変した彼の様子にやや眉をひそめるが、特に何も言うことなく自らのデュエルディスクを構える。

「デュエル！」

「『それでは私の先攻、普段であれば目くるめく演劇の世界へのご招待するところですが、どうやら本日のお客様はいささかお急ぎの用がある模様。とあらば今回は少々趣向を変え、私としてもやや珍しい異色の演目。ワンターンキルの妙技をば、お目にかけてと致しましょう』
「ワンキル？」

「鳥居の奴がワンキルか、確かに珍しいな」

不穏な単語に反応する少年と、感心したように呟く糸巻。その後ろで少女は初めて見る上級者同士の戦いに引き込まれたのか、食い入るようにデュエルの流れを見つめていた。

「『まずはメイン1の開始時に魔法カード、強欲で金満な壺の効果を発動。このターン他の方法によるドロローが不可能となるかわりに、エクストラデッキからランダムにカードを6枚まで裏側で除外することとその数3枚につき1枚のドロローを行います。上限いっぱい6枚をコストに、2枚ドロロー！そしてライト P ペンデュラム スケールにスケール7、舞台を回す転換の化身。魔界劇団カーテン・ライザーをセッティング！そしてカーテン・ライザーはデュエル中に1度のみ、私のフィールドにモンスターが存在しない際にそのペンデュラム効果によりフィールドへとたった1人の演者として舞い降りることが可能となります。カーテン・オン・ステージ！そしてカーテン・ライザー以外のモンスターが私のフィールドに存在しないことで、その攻撃力は1100ポイントアップ！』

赤と黄色のカーテンに顔と手足が生えたようなモンスターが鳥居の右側に立った光の柱の中に浮かび上がり、そうかと思えばそこから飛び出してその体をパラシュート代わりにふわふわと地面に降りる。

魔界劇団カーテン・ライザー 攻1100↓2200

「おー……これが、これがペンデュラム！」

一方、まるで最初に火を見た原始人のような驚きもあらわにフィー

ルドを見つめるのが対戦相手の少年である。まるでペンデュラムカードを初めて目にするかのようなその新鮮な反応に、糸巻ばかりか八卦までもが怪訝な顔つきとなった。ペンデュラムカード自体は珍しくもなんともなく、その使い手も別に絶滅危惧種というわけではない。考えられるのはこの少年が完全なデュエル初心者でありソリツドビジョンなど見たこともないというパターンだが、それだと糸巻と鳥居が感じたあの得体のしれない威圧感の説明がつかない。アタシの勘も錆びついたかと首をひねる糸巻だが、どちらにせよ鳥居に手を抜くつもりはない。

『魔法カード、簡易融合を発動。私のライフ1000ポイントをコストとし、エクストラデッキに眠るレベル5以下の融合モンスター1体を融合召喚扱いで特殊召喚いたします。暗夜に羽ばたく自由の翼、リリカル・ルスキニア L—インディペンデント・ナイチンゲール!』

L—インディペンデント・ナイチンゲール 攻1000↓1500

魔界劇団カーテン・ライザー 攻2200↓1100

青を基調とした暗い色の羽毛に身を包む、女性的な風貌の鳥人。一見すると彼の「魔界劇団」とは一見シナジーが皆無なようにも見える……だが、それはあるカードの存在を考慮に入れなければ、の話である。

『彼女の攻撃力は、常に自身のレベル1につき500ポイントアツプ。それではまずは挨拶代わりに、彼女のさえずりをお聴きいただきませう。インディペンデント・ナイチンゲールの効果発動!このカードは他のカード効果を受け付けず、1ターンに1度自身のレベルの500倍ものダメージを相手に与えます。このカード本来のレベルは1、ラピスラズリ・ノクターン!』

「く……い」

ナイチンゲールがその両翼を口元にやり、空気をつんぎくような音の衝撃波を放つ。

??? LP4000↓3500

『そして歌い終えた気まぐれなる青い小鳥は、再びまだ見ぬ空へと飛

び立ってゆきました。私はレベル1のインディペンデント・ナイチンゲールを、真下のリンクマーカーにセット!」

「リンクマーカー……? あー! なるほどわかるわかる、これが噂のリンク召喚ってやつね!」

空中に浮かび上がった8つの矢印に囲まれる陣と、そのうち真下の矢印に渦となって吸い込まれる鳥人。なるほど、確かにペンデュラムを見たことがないというのはまだ納得がいかなくもない。デュエリストの人口が減っているのは間違いない、少年が純粹にデュエル歴の浅い素人だとすればあり得なくもない話だ。だが、リンクモンスターはエクストラデッキを扱うのならば実質的に必要不可欠ともいえる存在。それすらも使ったどころか見たことすらないというのは、いくらなんでも無理がある。

彼女等にとっては見慣れたリンク召喚の演出を純粹なキラキラとした目で見つめて外見年齢相応な子供のようにはしゃぐ少年の姿に強い違和感を覚え、糸巻はそつと後ろにいる八卦に問いかけた。

「なあ八卦ちゃん、アイツ七宝に來た客だったんだろ? その時はなにしてたんだ?」

「えつとですね、おじいちゃんからデュエルモンスターのルール……特にペンデュラムやリンクについて聞いてました。儀式、融合、シンクロ、エクシーズはよく知っているみたいなので、私も変だなどは思っていたんですが……」

「なんだその半端な知識。融合シンクロエクシーズは知ってるのにリンクは知らない? まずは胡散臭いな」

小声の情報交換は、この距離なら聞こえないはずだった。まして目の前では今まさにリンク召喚が行われ、それなりに音も出ている状況だ。だが少年はふとそちらに顔を向け、片目をつぶってわざとらしく肩をすくめてみせた。まるで彼女たちの会話がすべて聞こえたうえで色々あるのさ、といわんばかりに。

『おっと、公演中に余所見ですか? リンク召喚、リンク1! データの海へと潜る矢印、リンクリボー!』

リンクリボー 攻300

「リンクリボー……」

「定番だな。と、くればお次は、だ」

『通常召喚。酸いも甘いも知り分けた古老、魔界劇団―ダンディ・バイプレイヤー！』

魔界劇団―ダンディ・バイプレイヤー 攻700

次いで召喚されたのは、トランペットを手にした豊かな白髭の持ち主である小柄な老人。本来このモンスターはステータスも効果もお世辞にも戦闘向きではなく、コンボ前提のカードである。だがそれはあくまでも通常は、の話である。

『さあ皆様お立会い。これよりお目にかけますは、無から有を生み出す稀代の召喚術。かたやカーテン・ライザー、そしてかたやダンディ・バイプレイヤー。彼らはともに、その代わりのいない唯一無二の効果を持つ私の演者たち……ですが、あくまでも単体ではただのモンスターにすぎません。しかしそんな彼らが一堂に揃う時、紫毒の竜牙がその目を覚ますのです。私のフィールドに揃いし闇属性ペンデュラムモンスター、カーテン・ライザーとダンディ・バイプレイヤーとともにリリース！』

「ペンデュラムモンスターをリリース……？」

「やーっぱりな」

2体の魔界劇団が飛び、空中でひとつの渦となつて溶け合い混じりあう。そしてその渦中から、全く新たな姿となつたドラゴンが現れる。

鳥居の【魔界劇団】は本来、メインデッキのペンデュラムカードだけでなく十二分の戦闘力を誇るカテゴリである。しかしエクストラデッキに「頼らなくてもよい」と「頼らない」のには天と地ほどに違いがある。いかなる場合も柔軟な発想を持ち、あらゆる局面に持てる手札と力を存分に使い対処する。それは一見すると当たり前のことを言っているだけのようだが、基本的なことだからこそそれを守ることが彼なりの美学であった。

『この方法をとることで、このカードは融合魔法なしでの正規召喚が可能となります。融合召喚、千の顔持つ蟲毒の竜！霸王眷竜スター

ヴ・ヴェノム！』

かつての閲覧室に積もった埃を巻き上げつつ、紫の竜がその両足で床を踏みしめる。微かに発光する明るい緑色のラインを全身に走らせたその竜は、しかし同じスターヴ・ヴェノムの名を持つスターヴ・ヴェノム・フュージョン・ドラゴンよりは全体的にやや小柄な印象を持つ。その特徴である全身に実る果実のようなエネルギーの塊もあちらと比べると明らかに少なく、異様に長い鳶のような尾もやはりあちらと比べ短い。

しかしその小柄さは、決して両者の間の力の差を感じさせるものではない。全身を小さくまとめることで余分なパワーを削ぎ落とし、より小回りとスピードに特化した変種といった佇まいすらも感じさせる。

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2800

『それではいよいよクライマックス、スターヴ・ヴェノムのその力を今こそ開放いたしましょう！スターヴ・ヴェノムは1ターンに1度、互いのフィールドまたは墓地に存在するモンスター1体を選択することでそのターンの間だけ選んだモンスターの名前と効果を我が物とし、さらに私のモンスター全てに貫通能力を付与いたします。私が選ぶのは当然、私自身の墓地に存在するインディペンデント・ナイチンゲール。ペルソナ・チェンジ、インディペンデント・ヴェノム！』

紫毒の竜が吼え、茨のような無数の触手を背中から一斉に伸ばす。触手は突如として空中に開いた冥界へとつながる魔方陣に吸い込まれ、その先ですでに墓地へと送られた青い小鳥を絡めとった。触手を通じてその生体情報は貪欲なスターヴ・ヴェノムへと流れ込み、掲げたその片手にはそのデータをもとに再現された、鳥の顔を模した仮面が浮かび上がる。

スターヴ・ヴェノムのレベルは8、これが通りさえすればカードの効果を受け付けず、攻撃力は6800。しかも毎ターンメインフェイズに致死量もの4000バーンを無造作に放つ恐るべきコンボが成立する。だが勝ちを確信した彼の耳に、少年が動くさまが見えた。

「とんでもないコンボだ……でもその仮面を被る前、今この瞬間なら効果が通る。幽鬼うさぎの効果発動！既にフィールドに存在する

カードが効果を発動した時、このカードを捨てることでそれを破壊する！派手にやっちゃって、うさぎちゃん！」

瞬間、銀色の閃光が走った。1度ならず2度、3度と、今まさにその仮面を装着しようとしていたスターヴ・ヴェノムの体を断ち切るかのように硬質な輝きが尾を引く。

そして次の瞬間、その手にした仮面が最初に走った銀の軌跡に従うように2つに割れた。次いで、2番目に走った銀の軌跡によって無数の触手が一斉に断ち切られ、拘束から解放放たれて再び自由を手にした青い小鳥の体が力なく墓地へと帰っていった。さらに3度目、4度目の軌跡が残した残光に従うかのように紫毒の竜の体が切り裂かれ、切断面からゆっくりと別れていく。

そして勝利の咆哮は断末魔の呪詛へと代わり、大地に倒れ込んだ竜の頭部に駄目押しのように凄まじいスピードで飛来した鎌が深々と突き刺さった。その投擲主は、和装に身を包み靈魂を従える銀髪の少女。竜の瞳から完全に生気が消えたことを確認した少女は、自らの主たる少年に対したった今見せた鬼気迫る攻撃とは裏腹に小さく微笑むと、夢げに手を振って消えていった。

『幽鬼うさぎ……まさか握っていたとは』

失敗した、そんな思いを込めて呟く鳥居。先攻1ターン目からパーツの揃った今のワンターンキルを止める手段は、数あるデュエルモンスターズのカードの中でもかなり限られている。スターヴ・ヴェノムそのものを無力化するエフェクト・ヴェーラー、インディペンデント・ナイチンゲールを墓地から引きはがすD・D・クロウ、効果ダメージへのメタとなるライフ・コーデイネーター……いずれにせよごく一部の手札誘発のみであり、カードパワーはともかく現環境においてサイドデッキならばまだしもメインからの投入率はどれもお世辞にも高いとはいえない。そしてその中の1枚が、まさに今仕事をした幽鬼うさぎである。

「僕が握ってたんじゃない、基本的にこの子はいいい子だからね。僕を助けに来てくれたのさ」

そう茶目っ気たっぷり笑って返す少年が、そつと幽鬼うさぎの

カードを指で撫でてから墓地へと送る。今のワンターンキルが失敗したことで鳥居の場に残るモンスターはリンクリボー1体のみ、そして手札も残るは3枚。しかし、それで終わらないのが鳥居浄瑠という男の本領だった。

『ならば演目変更、今こそ我々魔界劇団の底力を見せる時。ライトPゾーンにスケール0！世界が誇る我が歌姫、魔界劇団―メロー・マドンナを……そして対となるレフトPゾーンにはスケール9、まばゆく煌めく期待の原石！魔界劇団―ティンクル・リトルスターをセツティング！』

彼の両端に立ち並ぶ光の柱。0と描かれた数字の上では黒衣の歌姫がその髪をなびかせ、9と描かれた側ではサイズが大きいのかずり落ちてきた三角帽子を少女の演者が持ち上げる。

『メロー・マドンナのペンデュラム効果発動！私のライフを1000支払うことで、デツキから更なる魔界劇団1体サーチいたします。ただしこの効果の発動後、私はターン終了まで魔界劇団以外の特珠召喚が不可能になるデメリットを受けますが』

鳥居 LP3000↓2000

「なるほど、それで今のワンキルコンボを先にやったわけね」

『ご明察。それではいよいよお楽しみ、ペンデュラム召喚とゆきましよう！セツティングされたスケールは0と9、よってレベル1から8の魔界劇団が同時に召喚可能！ペンデュラム召喚、まずはエクストラデツキより、魔界劇団カーテン・ライザー！』

リンクリボーのマークー先に、先ほどリリースされたカーテン・ライザーが帰還する。しかし、この場で呼び出された演者はそれだけではない。その隣にもう1人、彼にとっても代表カードたる魔界劇団の顔が呼び出される。

魔界劇団カーテン・ライザー 守1000

『そしてやはり、彼の存在なくして私のデュエルは語れません。栄光ある座長にして永遠の花形、魔界劇団―ビッグ・スター！』

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

「1度に2体のモンスターを……しかも1体はエクストラデツキから

？なるほど、これがペンデュラム……」

『『そうですとも、素晴らしいでしょう？ビッグ・スターの効果発動！1ターンに1度デッキから魔界台本を1冊選択し、このフィールドにセツトします。ここまでの展開で私のライフも少々減りすぎてしまいました、ここでひとつ息を整えると致しましょう。たった今セツトしたこのカード、魔界台本「オープニング・セレモニー」。これより開演いたします！』』

ビッグ・スターが空中から飛んできた分厚い台本を掴み、素早くパラパラと目を通す。最後のページをめくり終えたその瞬間、フィールドで花火が爆発した。カラフルなバルーンアートがひとりでに浮かんで宙を舞い、色とりどりの光の模様が閲覧室に浮かんで消えていく。その中央ではビッグ・スターとカーテン・ライザー、そしてリンクリボーが歓迎のポーズをとっていた。

『『オープニング・セレモニーはその効果により、私のフィールドに存在する魔界劇団モンスター1体につき500のライフを回復いたします。該当カードはビッグ・スター及びカーテン・ライザーの2体、よって私が得るライフは10000！』』

鳥居 LP2000↓3000

これでライフこそ3000まで持ち直したものの、やはり頼りない布陣であることに変わりはない。しかしすでに手札も残り1枚、これ以上打つ手もないのが事実。胸をよぎる一抹の不安はおくびにも出さず、ゆっくりと一礼する。

『『永続魔法、暗黒の扉を発動。このカードが存在する限り、互いにバトルフェイズにはモンスター1体のみでしか攻撃をすることができません。私はこれでターンエンドです。さあ、そちらの力を見せていただけますでしょうか』』

「よしきた。せっかく面白いものを見せてもらったんだ、ここで引くのはあり得ないね。僕のターン、ドロー！」

この場にいる3人の視線が、一斉に少年に集中する。それに気づいているのかいないのか、楽しげな微笑を浮かべて少年がカードを繰り出した。

「僕はまず魔法カード、妨げられた壊獣の眠りを発動！場のモンスターをすべて破壊し、デッキから壊獣2体を選択して互いの場に攻撃表示で特殊召喚する！」

「おいおい、いきなりの初手ぶっぱか？派手な真似するじゃねえか」

「リセットカード……！」

破壊の嵐がすべてのモンスターを巻き込んで吹き荒れ、全てのモンスターが消えたフィールドへと我が物顔で現れた壊獣が対峙する。

壊星壊獣ジズキエル 攻3300

海亀壊獣ガメシエル 攻2200

「これでよし。手札の白棘ホワイト・ステインクレイは、手札から別の水属性モンスター1体を捨てることで特殊召喚できる。グレイドル・イーグルを捨てて、このカードを特殊召喚」

最初に少年が選んだカードは、純白のエイのような姿のモンスター。そして捨てたモンスターがグレイドル・イーグル。ここまでで2人のデュエルポリスは相手のデッキを「水属性」系統だと当たりをつける。

白棘白棘 攻1400

「そして相手フィールドにモンスターが存在し、僕のフィールドに攻撃力1500以下のモンスター1体のみが特殊召喚されたこの瞬間。速攻魔法発動、地獄の暴走召喚！」

「しまった、このコンボは……！」

「僕はこの発動トリガーとなった白棘白棘を手札、デッキ、墓地から可能な限り攻撃表示で特殊召喚する代わりに、相手もまたそのフィールドに存在するモンスターと同名モンスターを可能な限り手札、デッキ、墓地から特殊召喚できる。でも、それが成り立つことはあり得ない。なぜなら……」

「私のフィールドに唯一存在するそちらから押し付けられた壊獣カードは、いずれもフィールドに1体しか存在できない特性を持つ。仮に私のデッキにガメシエルが入っていたとしても、すでに1体が存在している以上追加召喚は不可能、ですか」

「明察。こっちが一方的に展開させてもらうよ、白棘白棘！」

白棘☒ 攻1400

白棘☒ 攻1400

「さつきお手本を見せてくれたのには礼を言っておくよ。僕は水属性モンスターの白棘☒2体を左、及び真下のリンクマーカーにセット！」

「リンク召喚、か。確かあの向きで水属性縛りは……」

いつの間にかちやつかり啜えていた煙草をふかしながら、糸巻が目を細める。すでに彼女の目には、このデュエルの結末が映っていた。もちろんまだ勝負はわからないとはいえ、なんとなく予感がした。今回は鳥居の、ひいてはアタシらの負けだろう。

「千波万波を揺りかごに、水面に踊れ南海の乙姫！リンク召喚、リンク2！海晶^{マリンス}乙女^{セス}コーラルアネモネ！」

右と下に2か所のマーカーを持つそのモンスターは、スカートと袖の端からそれぞれ延びるその名前の由来ともなったイソギンチャクの触手めいた意匠のドレスを身にまとう茶髪の女性型モンスター。しかし自分で呼び出しておいて、一番感動しているのはなぜか当の少年本人であった。

「なるほど、これがリンク召喚、ね。それでこの……エクストラモンスターゾーン、だっけ？最初はここにしか呼び出せない、と。オーケーオーケー、シンクロやエクシーズの時も思ってたけどやっぱり実戦で覚えるのが一番早いね、こーいうのはさ。ん？ごめんごめん脱線してた、それじゃあ続きと洒落込もう！コーラルアネモネの効果発動！1ターンに1度、自身のリンクマーカー先に墓地から攻撃力1500以下の水属性モンスター1体を蘇生する。甦れ、白棘☒！そしてこのカードは墓地から蘇生した時、このターンの終わりまで自身をチューナーとして扱うことができる」

白棘☒ 攻1400

「『チューナー……シンクロ召喚か！』」

「その通り。レベル4の白棘☒に、チューナーになった白棘☒をチューニング。光機^{こうきざんぜん}燦然日輪^{にりん}の元、語り継がれし波濤^{いなな}の勇魚^{ゆうぎょ}！シンクロ召喚、白鬪^{ほう}気白鯨^{きせう}！」

そして呼び出されたのは、かつて激戦区とも呼ばれた層の厚いレベル8シンクロモンスターの中でもかなり高水準なスペックを誇る巨大な白鯨。そのクジラが重々しくその大口を開き、大気を揺るがすパルスをフィールド全体に放つ。

☆4＋☆4＝☆8

白鬪気白鯨 攻2800

「白鬪気白鯨の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールドに攻撃表示で存在するモンスター全てを破壊する！」

先ほど引き出されたばかりのガメシエルがあつさりと破壊され、鳥居の場は完全になら空きとなる。もし暗黒の扉が存在しなければ、ワントーンキルを防いだばかりか返しのワントーンキルすらもありえた布陣。内心舌を巻く糸巻の前で、少年が生き生きと手を伸ばす。

「暗黒の扉を破壊する手段は、今の僕の手札にはない。だけど、なら一体の攻撃のみで終わらせればいい！ジズキエルとコーラルアネモネをリリースし、アドバンス召喚！これが僕の切り札、霧の王！」

ジズキエルの体が、そしてコーラルアネモネの姿が、ともにあつさりと霧散する。霧に包まれ消えていくその向こう側に佇むのは、全身を鎧に包み大剣を手にした魔法剣士。

霧の王 攻0↓5300

「そして霧の王の攻撃力は、リリースしたモンスターのその合計値となる」

「『く……』」

「これで終わり。バトルフェイズ、霧の王でダイレクトアタック。ミスト・ストラングル！」

霧の王 攻5300↓鳥居（直接攻撃）

鳥居 LP3000↓0

「……はい、終わり。悪いね、今回はさすがに悠長なことは言ってもらえないのさ。ほれ、立てる？」

「こーんな子供にワントーンキル返し、それもオーバーキルなんて喰らうと

は……俺もだいぶ焼きが回ったかね」

ぼやきながらも少年が伸ばした手を掴み、身軽に立ち上がる鳥居。意外にもこのデュエル、「BV」の管理下にはなかったらしい。となると、少なくともこの男はテロリストとは関係がないのか？

尽きない疑問は一度脇によけ、試合終了と同時にちようど吸い終えた煙草を携帯灰皿に放り込んだ糸巻がとりあえずヤジを飛ばす。

「なーに言い訳してんだアホ、負けは負けだろうが」

「いやま、そりやそうっすけどさあ」

「じゃあ3人とも、悪いけど約束は守ってもらえるかな。こつちも、できるだけ早めに取り掛かりたくて」

よほど時間に余裕がないのか、明らかに落ち着かない様子で少年が声をかける。正直糸巻も鳥居も納得できないことは多いが、それはそれとして彼らにもデュエリストとしての矜持はある。洩々ながらも頷くと、少年は明らかにほっとした顔になった。

「ならよかった。じゃ、まったねー！」

こちらが約束を守ることを疑ってすらいいいのか、立ち去るのを確かめようともせずにくるりと向きを変えて闇の中へと走りだす少年。その背中に、糸巻が最後に声をかける。

「待った。まだアタシら、アンタの名前も聞いてねーぞー！」

その言葉に足を止めた少年が、ほんの1瞬だけ振り返る。

「……遊野。遊野清明、別に覚えなくてもいいよ」

その言葉だけを残して今度こそ、その姿は消えた。

「あ、あの……」

「何も言わないでほしいね、八卦ちゃん。糸巻さん、今日のところはもう帰りましょう」

「そーだな」

そんな会話を最後に、残る3人の姿もまたその場を後にする。数か月ぶりに賑わっていた廃図書館に、再びいつもの静寂が戻ってきた。

そしてその翌日。とりあえずいつも通りに出勤したはいいが昨夜の「幽霊騒ぎ」の顛末が気にかかりなんとなく仕事に集中できない――

――糸巻の場合は鳥居曰く「いつでもなんのかんの理由付けて仕

事しないから平常運転」な時間を過ごしていたところに、突如事務所の電話が鳴り響いた。本来彼らの配置的に電話に近いのは糸巻の方なのだが、電話番すらまともによろうとしない彼女に代わり応対するのは基本的に鳥居の仕事である。

だがこの時受話器を取ったのは、意外にも糸巻だった。それはいかなる気の迷いか、天変地異の前触れか……あるいは彼女には何か、予感がしたのかもしれない。そして、その予感は的中する。果たしてその向こうから聞こえた声は、彼女の妹分のものであった。

『あの、お姉様ですか？私です、八卦九々乃です！お姉様、それに鳥居さんも。お姉様相手にぶしつけなお願いですが、今から少しだけ七宝うちにご足労頂くわけにはいきませんか？その、昨日のことで少し……あ、おじいちゃん！ううん、なんでもな……え、昨日の話？何かって？え、えつと……と、とりあえず切りますねお姉様！』

それきり切れた電話を戻すと、いつの間にか横に来て立ち聞きしていたらしい鳥居と目が合った。ちゃっかりした奴だと半ば呆れつつも、説明の手間が省けたと単刀直入に問いかける。いや、それはもはや問いかけてすらなく、ただの確認だった。いつだって糸巻太夫とは、そういう女なのだ。

「行くぞ鳥居、ちゃんと戸締りやっつけよ。うちが泥棒なんてやられたら笑いもんだ」

「はい。よくわかんないけど行ってみますか、糸巻さん」

そしてそこで一切の不平不満を口にせず、きっぱりと行動に移る。鳥居淨瑠もまたそういう男であり、このように根本的などころで変に気が合うからこそこの性格も何もかもが違う2人はタッグを組んでいるのだ。

そしてどちらも、いざ行動となるとその判断も含め妙にその動きが素早いという点で一致する。「カードショップ 七宝」に2人が辿り着いたのは、電話を受けてからきっかり15分後のことだった。

「たあのもおーうー！来たぜ、八卦ちゃん！」

「同じく……つて、ええ……」

「あ、こんにちわー」

相も変わらず閑古鳥が鳴くどころか巢まで作って越冬していそうな店内の奥、デツキ構築や卓上デュエル等の需要にこたえるために設置されたのであろうテーブルスペース。その一角に座ってなんとも困った笑顔の八卦と共に屈託のない笑顔を浮かべ彼女たちに手を振るのは……遊野清明と名乗った少年、その人だった。

ターン12 鉄砲水の異邦人

「ええと、あれだ。ちょっと状況を整理させてくれ」

「はいはい」

カードショップ七宝の店内にて。糸巻と鳥居を迎え入れた時と変わらずニコニコと人懐っこく笑う遊野清明ゆうのあきらを前に、当の2人はしかめっ面でこめかみを押さえていた。彼がこれまでに語ったあまりといえばあまりに荒唐無稽な話を前に、聞いているうちに頭が痛くなってきたのだ。

「まずアンタ、遊野つつたか？あの図書館にいるのは幽霊なんかじゃなくて、カードの精霊だよ」

「うん、ありや間違いないね。それと清明でいいよ」

カードの精霊。無論、糸巻もいちデュエリストとしてその概念は知っている。大事にされた、あるいは特別なカードにはいつしか意思を持つ精霊が宿り、その持ち主を影ながら支えるという……要するに、根も葉もない噂話だ。糸巻自身は、そんな話を信じる気はまるでなかった。

とはいえ、それは決して彼女に夢がないだとかそういういった結論に繋がるわけではない。彼女がそう感じる理由は単純明快にただひとつ、デュエリストというものを彼女が信じているからだ。デュエリストとは自分のデツキに、そしてそのカードに特別な愛着を大なり小なり抱くものであり、もし大事に使うだけでカードに精霊が宿るのならは今とはかく13年前、「BV」の手によりデュエルモンスターズを囲む世界が様変わりする前の彼女の周りには精霊にあふれていたはずだ。だが彼女は、そんなものの気配を感じたことは1度もない。

「精霊、ねえ」

信じる信じないは他人の勝手。「もしかしたらいるかもしれない……そう感じたい、信じたいという気持ちも決してわからなくはない。それでも結局は子供に語るようなおとぎ話の世界でしかなく、どこまでいってもその空想は現実との境界を越えはしない。それが、夢のある話を信じた元・少女の心と世間に擦れていく一方の赤髪の夜

又との間で折り合いをつけた、糸巻太夫としての結論でありスタンスだった。

一方、その隣の鳥居淨瑠は。彼の本来の姿は劇団員であり、ソリツドビジョンや小道具を駆使して観客に夢を見せることがその本業である。しかし……あるいはだからこそ、というべきか。当の彼自身は彼の普段から魅せるそれよりももう少し現実よりの冷めた目線から世界を眺めており、カードの精霊などという胡散臭い存在にはよく言っても懐疑的である。無論彼自身も自分の使う魔界劇団カードへの愛着は人一倍大きいのだが、それはあくまでお気に入り道具、信頼できる自分の一部に対するものでしかない。自分の体が大事でない人間はいないだろう。しかし、その手や足に自分と異なる人格が宿るなんて話が果たしてどこまでありうるだろうか？

どちらの視線も、一言で表せば懐疑的。しかしその内訳には、決して無視できないほどの違いがある。

「ま、信じる信じないはどっちでもいいさ。これを最初に話したのは、あくまでも僕自身のため。お望みなら、もつとそれっぽい作り話を持ってきてもよかったんだよ？ただこの精霊騒ぎ、多分お二人さんとは何度かかち合うことになりそうだからね。変に嘘を積み重ねてどこかでボロが出たりしたら、それこそ目も当てられないぐらいやらしいことになりそうだからさ……つて、うちのブレインが言ってた」「ブレイン？」

「そ、僕の神様……あー引かないで引かないで、今のは僕の言い方が悪かったから」

一気に3割増しで険しくなった視線に失言を悟り、ぱたぱたと手を振って発言を打ち消す清明。だがそんなフォローも時すでに遅く、八卦のみがはらはらと見守る冷たい空気の中でうむむと小さく唸った。「別にここでダークシングナーになってもいいんだけど、それやっても精霊の証明にはならないもんねえ。何か手っ取り早い方法……となると、やっぱこれしかないか」

さも仕方なさそうな口調とは裏腹に、妙にウキウキした表情と態度を隠そうともせず左腕の腕輪に手をかける。次の瞬間にはそのデユ

エルディスクが、カード置き場となる水の膜と共に勢いよく展開された。昨日に引き続きまたも目の当たりにしたその機構に、糸巻の目がすつと細まる。

「……まさに、それなんだよな」

「え？」

「はつきり言つて、アンタの話は一から十までどうにもこうにも胡散臭い。だが、そのデュエルディスクの機構はやっぱりアタシでも見たことない。なあ爺さん、そっちはどうだい？」

「ああ、その通りだね。私もこの業界に首突っ込んでから随分になるが、そんなモデルのデュエルディスクが開発されているなんて話は噂のレベルですら聞いたことがないよ」

店の奥に向かつて張り上げられた声に反応して、店の主である七宝寺の返事がすぐに届く。本来彼女らの座る位置は、ショーケースの並び替えにいそしんでいる老人の位置からは死角になっているはずなのだが……この老人の地獄耳っぷりに慣れている糸巻は今更余計な反応はしない。重要なのは、その内容だ。

「だろうな。アタシはおろか七宝寺の爺さんすら知らないデュエルモンスターズ関連の話……そんなもんがそうそうあるとは思えない。だから、その与太話はともかくアンタ個人にはアタシも興味がある」

「ふむふむ、つまり？」

続く言葉を察したのか、神妙そうに催促する清明。それに張り合うかのように、糸巻もまたふてぶてしく笑う。

「その喧嘩、このアタシが買ってやるってんだ」

「デュエル！」

そして店の奥、以前彼女が八卦とデュエルしたデュエルスペースに移動して。向かい合った彼女らに、一緒についてきた2人から黄色い声援とやる気のない茶々が飛ぶ。

「頑張ってください、お姉様！」

「糸巻さん、これで負けたら最高にカツコ悪いっすよー」

「おう、八卦ちゃん！……うるせえ鳥居、後攻ワンキルが何言つてんだこのやろ」

ファンに応じて対応はきっちり変える。いわば客いじりの基本、プロの常套手段のひとつである。糸巻も無論、その技能はしっかりと押さえている。

「アウエーだねえ。しゃーないか」

「そりやまあな。なんなら、先攻は譲ってやろうか？」

「いやいや、レディーファーストでお先にどうぞ」

ランダム機能は使用せず、先攻の押し付け合いにより結局は糸巻が先手を取る。そして、すでにこの時から心理戦は始まっていた。実はこのデュエル、互いの思惑は偶然にも一致していた。どうか後攻の欲しい清明と、うまいこと先攻の欲しかった糸巻……その構図が、勝負の始まる前からできていたのだ。にもかかわらず彼女があえて最初に先攻を譲ることを示唆したのは、こうして彼の警戒を誘い相手の自由意思により確実に先攻を取るためである。

「後悔するなよ？アタシのターン。不知火の隠者かげものを召喚！」

そして望みどおりに得た先攻1ターン目、先陣切って召喚されたのは数あるアンデット族の中でも随一の実力を誇るデツキエンジン。とくれば、ここから先の動きは目を閉じていても暗唱できる。

不知火の隠者 攻500

「隠者の効果発動！自分フィールドのアンデット族1体をリリースすることで、デツキから守備力0のアンデット族チューナー1体を特殊召喚できる。ユニゾンビを特殊召喚し、そのまま自身の効果発動。モンスター1体を選択してデツキからアンデット1体を墓地に送り込み、選んだモンスターのレベルを1上げる。アタシが選ぶのは当然ユニゾンビ自身、デツキから選ぶのは当然馬頭鬼のカードだ」

ユニゾンビ 攻1300 ☆3↓☆4

「出たな、糸巻さんのド定番コンボ」

「定番……確かに以前お姉様とデュエルさせていただいたときも、この動きは見たことがあります」

「なら話は早い。よく見とくといいよ、別にこれは糸巻さんだけの

専売特許じゃない。アンデ使い全員の常識みたいなもんさ」

外野がわちやわちやと喋るのをよそに、糸巻は迷いない動きでカードを動かしていく。

「墓地から馬頭鬼の効果発動、自身を除外することで墓地から別のアンデット1体を蘇生する。来な、不知火の隠者」

不知火の隠者 攻500

「なるほど、それでもう1回リクルートってわけ？」

「馬鹿言うなよ、冗談はロンファだけで十分だ。なにせ、こいつのリクルート効果は1ターンに1回しか使えないからな。だが、これでアタシの場にはチューナーとそれ以外のモンスターが出揃った。レベル4の隠者に、同じくレベル4となったユニゾンビをチューニング。戦場潜る妖の電子よ、超越の脳波解き放て！シンクロ召喚、PSYフレームロード・Ω！」

全身を強化服ですっぽりと包む超能力戦士。細かなプラズマをその全身から放ちつつ空中浮遊するその顔が動き、今回の敵である清明の姿を捉えたその目がフルフェイスヘルメット越しにキラリと光った。

☆4+☆4=☆8

PSYフレームロード・Ω 攻2800

「……手札1枚からレベル8のシンクロモンスターとはね。なかなかやってくれるじゃない」

「もっと褒めてもいいぜ。あいにくと何も出ないがな！カードを3枚伏せて、ターンエンドだ」

「なら、何か出すまで揺さぶってみようかね。僕のターン、ドロー！」
初手に糸巻の場で空中仁王立ちするPSYフレームロード・Ωに、3枚もの伏せカード。一見するとそれは、除去と制圧の蔓延する現環境においてはあまりに時代錯誤な布陣に見えるかもしれない。実際清明自身はそう捉えたのだろう、まるで恐れる様子もなくカードを引く。

……だが、彼はすぐに思い知ることになる。糸巻太夫がなぜ夜叉の名で呼ばれるに至ったのか、その実力の一端を。

「おっと、まずはスタンバイフェイズだ。Ωの効果発動！除外されているアタシのカード、馬頭鬼を選択して墓地へと埋葬し直すぜ。さあ、もう1度墓場で出番を待ちな！」

「また馬頭鬼……まあいいさ、まずはこのターンだもんね。メインフェイズに移って」

「まあ待てよ、ここでもう1度待ったをかけさせてもらう。メインフェイズ開始時、Ωの更なる効果を発動！ランダムに選んだ相手の手札1枚と場のこのカードを、次のスタンバイフェイズまでフィールドから除外する！」

「げっ!？」

0と1のノイズを後に残して電腦戦士の姿が電子の海へと消えていく。そしてそれを見た清明の表情が、すぐに取り繕ったとはいえ明らかに1瞬強張った。

「思った通り、これは予想外だったかい？」

「……やってくれるじゃないの……!？」

にやにやと笑う糸巻に、同じく笑い返すも明らかにその表情には余裕の足りていない清明。まだよく自体の呑み込めていない八卦が、隣にいた鳥居に小声で問いかける。

「あの、鳥居さん。お姉様のフィールド、モンスターいなくなっちゃいましたよ」

「確かに。でも八卦ちゃん、これでいいんだ。だって……」

「待ちな鳥居、そいつはアタシが答えるよ。清明、アンタのやらかした最大のミスは、アタシの前で鳥居とのデュエルを見せたことだ。それもワンキルとはいえ、かなりデッキ内容を絞るようなものをな」

黙って耳を傾ける清明に、一字一句聞き漏らすまいと真剣にお姉様の講釈に聞き入る八卦。少なくとも外面だけは少年少女に囲まれて、糸巻の声が朗々と響く。

「デッキ内に2体の壊獣が必要となる妨げられた壊獣の眠りを採用できる程度には多い壊獣カード、それに手札コストとして捨てていたグレイドル。確か地獄の暴走召喚、なんてのも使ってたよな？グレイドルの能力で相手モンスターの数を減らしたうえで相手フィールドに

押し付けた壊獣のデメリットを逆手にとって、地獄の暴走召喚で自分だけがモンスターを大量リクルートする。確かにえげつない戦術だ、それはアタシも素直に褒めてやるよ。だがな、そのどれもがまず最初に相手フィールドにモンスターが存在しなければ真の実力を発揮できない弱点を抱えている。それをよく理解しているからこそアタシは、このデュエルで後攻を取ろうとした。違うか?」

「最初っから計算づくだった、と?」

「さあて、な。どちらにせよ、アタシは先攻が欲しかったのさ」

飄々とうそぶく赤髪の夜叉に、まんまと踊らされた清明が手札に目を落とす。視線の先にあるそれは壊獣か、あるいはグレイドルか……いずれにせよ、Ωの退避によって何らかの計算を狂わせたことは間違いないだろう。だが、それだけでは夜叉の一撃は止まらない。

「そして、だ。今のΩで除外したアンタのカードは……通常魔法サルベージ、墓地の攻撃力1500以下の水属性2体を手札に回収するカードか。さすがにそれを返すわけにはいかないよなあ?トラップ発動、バージェストマ・レアンコイリア!このカードはゲームから除外されたカード1枚を選択し、それを持ち主の墓地に送り込む。アタシが選ぶのは当然、今除外されたサルベージだ。これで次のスタンバイフェイズが来ても、もうそのカードがアンタの手札に戻ることはない」

「ぐわっ!」

モンスターとトラップの連続コンボにより、徹底的に昨日見た限りで掴んだ清明のデッキの強みを潰していく糸巻。だがこれは、別に彼個人に対しメタを張った結果ではない。彼女の使ったカードはどれも彼女自身が普段から愛用しているものであり、デッキの柔軟性はいささかも損なわれていない。彼女は自分にとれる戦術を最大限のやり方で叩きこむために先攻を取り、彼はまんまとそれに引つかかった。ただそれだけのことだ。

「……まだまだあーマーマイド・シャークを召喚、効果発動。このカードが召喚にしたとき、デッキからレベル3から5の魚族を1体選んで手札に加えることができる。そして自分フィールドに水属性モンス

ターが存在するとき、今サーチしたサイレント・アングラーは手札から特殊召喚できる！」

しかし、清明にもまた彼なりの意地がある。次善の策とばかりに呼び出されたマーメイド・シャークから手札を補充し、すぐさまワールドに2体のモンスターを整える。

マーメイド・シャーク 攻300

サイレント・アングラー 守1400

「そしてフィールド魔法KYOUTOUウォーターフロント、発動！」拳を握り締める彼の背後に音を立てて巨大な灯台がせりあがると、周囲の風景もまた水辺に面した近未来都市へと変化する。そしてそこに佇む2体の魚が、同時に青い渦となって上空へと吸い込まれた。

「僕は魚族モンスターのマーメイド・シャーク及びサイレント・アングラーの2体を、それぞれ左下及び右下のリンクマークにセット！一望千里の海洋に、忘却の都より浮上せよ女王の威光！リンク召喚、リンク2！水精鱗マーメイド—サラキアビス！」

やや縮れ気味なその髪と同じ紫色のビキニアーマーに、黄金の輝きを放つトライデント状の王笏。その姿は一見すると極めて人間に近くはあるが、その海のように深い色を湛えた瞳はやはり彼女の人外性を強く物語る。

水精鱗—サラキアビス 攻1600

「そしてフィールドに存在するカードが墓地に送られたことで、ウォーターフロントには壊獣カウンターが1枚につき1つ乗せられる」

その言葉に反応するかのように、背後にそびえ立つ灯台に光が灯った。先端から放たれる2筋の光が空を裂き、遙か海の果てへとKYOUTOUの位置を示す。

KYOUTOUウォーターフロント(0) ↓ (2)

「モンスターがいないのは結構だけどね、ならこっちも好きに攻撃させてもらうよ。サラキアビス、ダイレクトアタック！」

サラキアビスがその王笏を掲げると、先端から目もくらむような輝きが放たれる。Ωが退避したことによりその身を守るモンスターの

存在しない糸巻に、その輝きが直撃した。

水精鱗―サラキアビス 攻1600↓糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP4000↓2400

「ちっ……」

「お姉様！」

小さく舌打ちする糸巻に、ほとんど悲鳴のような声が出る八卦。無論このデュエルに「BV」の出る幕はなく、ダメージの実体化もありはしない。それはわかっていても、憧れの対象がダメージを受ける光景は気味のいいものではないのだろう。

「カードをセットして、これでターンエンド。まんまとしてやられたお返しは、まだまだこんなもんじゃないからね。反撃開始と洒落込ませてもらおうよ！」

「はっ、寝言は寝てから言ってくれや。たかがリンク2の1体出した程度でドヤ顔か？アタシのターン、ドロー！このスタンバイフェイズ、アタシのΩはフィールドに戻る。アンタのサルベージはまあ、運が悪かったと思つて諦めな」

PSYフレイムロード・Ω 攻2800

「さて、と。このまま攻撃してやってもいいんだが、それじゃいくら何でも芸が足りないよな？まずは通常召喚だ、来い、イピリア！この爬虫類はなかなかできた奴でな、1ターンに1度場に出た際、アタシはカードを1枚ドローすることができる。そして墓地から馬頭鬼の効果発動、除外して不知火の隠者を蘇生！」

「また……」

イピリア 攻500

不知火の隠者 攻500

「ああ、また、さ。このまま効果発動、アンデット族の自身をリリースしてユニゾンビを特殊召喚。ユニゾンビの効果で自身を対象に馬頭鬼を墓地に送り、そのレベルを4に。そして馬頭鬼の効果で、隠者を対象として発動！」

「このお姉様の動き、さつきと同じ……」

「ああ。しかも、今度は1ターン目と違って墓地リソースだけで回し

てるからな。さつきよりもっとひどい」

目まぐるしくモンスターたちが動き回るその光景は、先攻1ターン目のリフレイン。ひとたびこの流れが完成すればデッキ内のユニゾンビ及び馬頭鬼が切れるまで毎ターンこの動きが可能となる、これまたアンデット族の常套手段である。

ユニゾンビ 攻1300

不知火の陰者 攻500

KYOUTOUウオーターフロント(2)↓(3)

「レベル4の不知火の隠者に、レベル4となつたユニゾンビをチュウニング！戦場切り裂く妖の太刀よ、冥府に惑いし亡者を祓え！シンクロ召喚、戦神いくさがみ—不知火！」

それは、両の手にそれぞれ形の違う二振りの刀を握る銀髪の和装剣士。赤い上着が風もないのにゆらりとはためくと、そこに描かれた揺れる炎の意匠に動きを合わせるかのようにその刀身を伝い浄化の炎が空中に高熱の軌跡を描く。

☆4+☆4||☆8

戦神—不知火 攻3000

KYOUTOUウオーターフロント(3)↓(5)

「攻撃力3000のシンクロモンスター……だけど、このシンクロ召喚によってウオーターフロントの壊獣カウンターはマックスの5つまで貯まった」

「そんなもん承知の上さ。それに、3000どころじゃ済まないね。戦神は特殊召喚に成功した時、墓地のアンデット1体を除外することで1ターンだけその攻撃力を吸収することができる。アタシが選ぶユニゾンビは攻撃力1300……不知火流・火鼠の皮衣！」

戦神—不知火 攻3000↓4300

「手札1枚も使わずに、1ターンだけとはいえ攻撃力4300とはね。正直、すっごく嬉しいよ」

「あん？」

単純な数値だけの強さとはいえ、初期ライフをも上回る4300も
の打点。しかしそれを前にしてなお清明は恐怖するでもなく、むしろ

喜びを抑えきれないとばかりにその目を輝かせる。

「やっぱり、僕の思った通りだ。こんな世界は広いんだから、まだまだ僕の知らないとんでもなく強いデュエリストが星の数ほどいるはずだって。偶然とはいえここにきて、お姉さんみたいな人とデュエルができて。本当に心底、僕は嬉しいよ」

妙に引つかかる物言いではあるが、糸巻には目の前の少年がいわゆるとしてこの本質はよく理解できた。そしてその理解と同時に、どこか親近感に似たものを抱く。

ああ、この子供はアタシと同じなんだ。デュエルに魅入られて骨の髄まで闘争に浸かり、そこに幸福を見出すタイプの戦闘狂。戦い続ける限りどこまでも強くなるだろうし、常により強い相手を求め続ける。誰にも見られないように心の中で小さく苦笑し、条件反射で返そうとした皮肉を飲み込んでもう少し素直な言葉を探す。

「……ありがとな。その褒め言葉、素直に受け取ってやろうかね。さて、ユニゾンの効果を使ったターン、アタシはアンデット族でしか攻撃宣言が行えない。でもな、だからってΩを遊ばせておくのももつたないよな？ せっかくこうしてアンタの陣地に連れてきてもらったんだ、今度はアタシの領土に案内してやるよ。生あるものなど絶え果てて、死体が死体を喰らう土地。アンデットワールド、発動！」

そして、周囲の風景がまたも一変する。近未来的な海辺の街には重くて黒い暗雲が果てしなく遠い水平線の向こうまで切れ目なく立ち込め、その海の色はこれまでの青から一転して血の赤色へと染められていく。何匹もの魚が腹を上にしてその水面へとぶかりと浮かび、水中の何かに引きずり込まれでもしたのかまた血の奥底へと沈んでいく。立ち並ぶビルや舗装された道路は風と共にみるみるうちに荒廃し、ゴーストタウンと化したそのメインストリートを何匹もの骨ネズミがギイギイと聞くものを不快にさせる鳴き声と共に駆け抜ける。

そんな恐ろしい風景を、しかし見学中の少女は熱に浮かされたような表情で見つめていた。この荒涼として、それでいて混沌とした景色にあつてこそ、領土の主たる糸巻の美しさはもつとも色鮮やかに輝く。現役時代から変わらない、幾人もの女性を本人の与り知らぬとこ

ろで虜とした……いくなれば破滅の中にあつてこそ光り輝く魔性の美である。

「ここがアタシの領土、アンデットワールドだ。そしてこの場所に生者は相応しくない、このカードがある限り互いの場、及び墓地のモンスターには全員アンデットになつてもらうぜ」

イピリア 爬虫類族↓アンデット族

PSYフレームロード・Ω サイキック族↓アンデット族

水精鱗―サラキアビス 海竜族↓アンデット族

全身を強化スーツで包むΩは、その内面はともかく外面だけは一見アンデットワールドの影響など受けていないようにも見える。それとは対照的に目に見えて変化が起きたのが、清明のフィールドにいる海の女王だった。サラキアビスの健康的な肌色はみるみるうちに青白く変化していき、その瞳だけがただ血の色に赤く紅く輝きを放つ。舌なめずりする口元からは、先ほどまで影も形も見えなかった鋭い犬歯が覗いていた。

「サラキアビス！」

「おっと、心配してる余裕なんてないだろう？ バトルフェイズ、ここは……戦神でサラキアビスに攻撃！」

「なら、ここでサラキアビスの効果発動！ 相手ターンに手札を1枚墓地に送ることで、デッキから仲間の水精鱗1体をサーチする。そしてこの攻撃に対し、手札から今サーチした水精鱗―ネレイアビスの効果を発動！」

炎を纏った剣士が音もなく間合いを詰め、燃え盛る太刀をさながら逆鱗に触れられた龍のごとく怒涛の勢いで、それでいて舞を踊るかのような優雅ささえも感じられる動きで5度振るう。咄嗟に手にした王笏で応戦しようとするサラキアビスの全身に、突如青いオーラが立ち上った。

「ネレイアビスは自身を手札から捨てることで場か手札の水属性モンスター1体を破壊して、その攻守の値を発動時に選んだ水属性モンスター1体に1ターンの間だけ加算できる。僕が破壊するのは攻撃力2500、カイザー・シースネーク！」

「悪くない手だが……まだ戦神には遠い！不知火流・龍玉五連斬！」

一時的に劇的なパワーアップを果たしたとはいえ、不知火の剣士の技量はそれをなお上回る。反応速度こそ間に合いはしたものの、辛うじて初撃を受け止めたところであっさりと力負けしてそのまま流されるように病的なほど白いその柔肌が切り裂かれていく。

戦神―不知火 攻4300↓水精鱗―サラキアビス 攻1600
↓4100（破壊）

清明 LP4000↓3800

「くっ……！だけど、サラキアビスには更なる効果があるもんね。相手によって破壊されたこの瞬間にデツキから水属性モンスター1体を墓地に送り、その後墓地の水属性モンスターを守備表示で蘇生する！」

「そんなことは承知の上さ。そしてアンタのデツキの傾向と今の盤面から考えて、選ばれるモンスターはまず1択。だがな、アタシはさらにその上を行く。チェーンしてトラップ発動、幻影騎士団^{ファントムナイト}ロスト・ヴァンブレイズ！このカードは場のレベルを持つモンスター1体を対象として発動し、その攻撃力600を削ったうえでレベルを強制的に2に変更、そしてこのカード自身を攻守0のモンスターとして特殊召喚するのさ」

「なるほど、ダメージステップでも攻守変動が効果に含まれていれば発動はできる……ってわけね」

「理解が早くて助かるな。そしてアタシがこの効果を使うのは戦神、お前だ！」

戦神―不知火 攻4300↓3700 ☆8↓☆2

幻影騎士団ロスト・ヴァンブレイズ 守0 戦士族↓アンデット族
鬼火に包まれたとうに着込む者もないボロボロの鎧が、地の底からゆっくりと浮かび上がる。

「お姉様、いったい何を……？」

いくら攻撃を終えた戦神だから攻撃力ダウンの影響も皆無とはいえ、このタイミングで特に戦闘に参加できるわけでもないロスト・ヴァンブレイズの発動。一見不可解に見えるプレイングに、しかし当

の清明は思い切り苦虫を噛み潰したような表情を浮かべていた。

「もう……！本当、ほんつとにやりづらい……！このタイミングでそんなカードをわざわざ使うってことは、もう何を落とすつもりかわかってるんでしょ？」

「ああ、まあな。だけどアタシがやりづらいんじゃない、アンタの行動が単純に読みやすすぎるんだよ。さ、早いとこ奴を呼びな」

余裕たっぷりの笑みを浮かべる糸巻に対し、清明もまたどこか楽しそうにその拳を握りしめる。それは、彼が純粹にデュエルを楽しんでいる何よりの証拠でもあった。

「その喧嘩買った、やあああつてやろうじゃないの！サラキアビスの効果、デツキから海亀壊獣ガメシエルを墓地に送り、そのままガメシエルを蘇生対象に！来い、ガメシエル！」

血の海が割れ、その海中から巨大な2足歩行する大亀のようなモンスターが翼もないのに暗雲漂う空へと舞い上がる。しかしその全身はすでに得体のしれない傷だらけであり、両の目は本来の知性をかなぐり捨てた狂暴な真紅の光を放っていた。

海亀壊獣ガメシエル 守3000 水族↓アンデット族

「壊獣カウンター5つでのガメシエル……糸巻さん、どうする気だ？」
「あの、鳥居さん。あのカード、そんなに強いんですか？」

あのカード、というのは無論、清明の出したガメシエルのことだ。今時守備力3000というだけでは壁としての信頼感は薄く、八卦の壊獣に対する知識はリリースという方法を使った除去要因という間違ってはいないが中途半端なところで止まっている。【壊獣】ならではのファイトスタイルは、少女にとってはいまだ未知の世界であった。それを察した鳥居が、できる限り細かく噛み砕いて説明する。

「ああ、正直かなりキツイ。奴には場の壊獣カウンターを2個コストとして、あらゆる効果に対しそれを無効にしたうえで除外する万能カウンター能力がある。それを単純計算で2回は打てるうえに、ウォーターフロントはカードが墓地に送られるたびにそのカウンターを片っ端から補充するんだ」

「無効にして、除外……で、でも！お姉様はこうなることをわかってい

て、その上であえて攻撃したんですよね？」

「まず間違いないだろうね。糸巻さん、ほんと何企んでるんだ？」

ゴーストタウンと化したKYOUTOUの街に仁王立ちするガメシエルと、それを下から見上げる糸巻。動いたのは、糸巻の方だった。「トランプ発動、ワンダー・エクシーズ！このカードの効果により、アタシはこの場でエクシーズ召喚を行うことができる。さあ、どうするよ？」

「ワンダー・エクシーズ……ガメシエルの効果は……」

そこで清明が、わずかに言いよどむ。このカードの発動を通せば糸巻はこのバトルフェイズ中でのエクシーズ召喚が可能となるが、ランク2の中にガメシエルの守備力を単純な打点だけで突破できるモンスターはいないはずだと彼は推測する。となるとあれはただのブラフで、少しでもこちらの壊獣カウンターを削るための罠。それにこのカードを止めたところで、ランク2を呼ぶだけならばそもそもメイン2まで待てば何も消費することなく可能となる。

となれば、ここで止める意義は薄い。彼の腹は決まった。

「……使わない！さあ、なんだか知らないけど呼んでみなよ」

「おお、望みどおりに呼んでやるよ……だがその前に、このトランプの発動に直接チエーンすることで墓地に存在するバージェストマ・レアンコイリアの効果を発動！墓地からこのカードを、レベル2のモンスターとして特殊召喚するぜ？ただしこの効果で特殊召喚されたカードは、墓地に送られる場合に除外されるがな」

「蘇生？それは……止める。下手に残すと遺恨が残るからね、ガメシエルの効果発動、渦潮！壊獣カウンター2つをコストに、発動したカード効果を無効にして除外する！」

一見すれば、これこそ止めるまでもないかに見える一手。しかし、清明にも考えがあった。彼はいまだ新マスターールの概念に触れて日が浅いが、リンクモンスターの持つ底知れない実力はこの短い日数でもよくわかっていた。増えた戦略と新たな概念は、それだけ彼のデュエルを高みに押し上げたからだ。

それを念頭に置いたうえで、このレアンコイリアの発動である。条

件さえ満たせば緩い条件から自己再生が可能であり、除外デメリットもエクシーズ素材とすることで関係を断ち切れればリセットされる。ここで止めなければ恐らくあのカードは蘇生後にそのままエクシーズ素材となり、そしてもう一度トラップに反応して復活したのち、次なるリンク召喚やシンクロ召喚、悪くすればまたもエクシーズ召喚に使われて何度でも素材として帰ってくるだろう。今後の展開まで考えるところはガメシエルの効果を打つ価値がある、そう判断したのだ。また糸巻の手札は残り1枚であり、何を握っていたとしても抑えきることは可能との状況判断もある。そして主の命に応えたガメシエルが大きく天に吼えると巨大な水の渦がその手の内から巻き起こり、糸巻の墓地からレアンコイリアのカードを跳ね飛ばした。

KYOUTOUウオーターフロント(5)↓(3)

「悪いけど、後に繋がるそのカードは通せないよ」

「やってくれたな……なんて言っていてやりたいとこだがな。あいにくアంతはもう、かなりデカイミスをやらかしたんだよ」

「えっ?」

怪訝そうな顔になる清明。にやりと浮かべた糸巻の笑顔に嘘はないことを、敏感に察知したのだ。

「大方ガメシエルの守備能力ならランク2程度じゃ太刀打ちできないとでも踏んだんだろうが……甘いぜ!ワンダー・エクシーズの効果によりアタシはエクストラモンスターゾーンのレベル2となった戦神、そして同じくレベル2のロスト・ヴァンブレイズ及びイピリアの3体でオーバーレイ!」

「素材3体のランク2……!」

「こりゃ出るか、糸巻さんの真打!」

「お姉様、頑張ってください!」

LOVEなどと書かれたうちわでも振り回しそうな勢いで顔を興奮のあまり真っ赤にしつつ飛び跳ねて応援する八卦の声援に片手を上げて軽く応え、そのまま3体のモンスターが変化した3つの光が足元に発生した宇宙空間へと飛び込むさまにあわせて両腕を勢い良く広げる。

「さあ行くぜ！戦場呑み込む妖の海よ、太古の覇者の記憶を覚ませ！
エクシーズ召喚、バージェストマ・アノマロカリス！」

血の海からガメシエルに遅れて飛び出したのは、原始的な青い外骨格に全身を覆う太古の海の覇者の生霊。血色の雫を全身を揺すって振り飛ばし、その体の下側に見える無数の節足をべきべきと音を立てて蠢かせる。

バージェストマ・アノマロカリス 攻2400 水族↓アンデット族

「攻撃力2400、ねえ。とりあえずチェーン処理が終わってワンダー・エクシーズが墓地に送られたことで、ウォーターフロントの壊獣カウンターはまた補充されてもらうよ」

KYOUTOUウォーターフロント(3)↓(4)

「今更構うかよそんなもん、アノマロカリスの効果発動！1ターンに1度オーバーレイ・ユニットを1つ使い、カード1枚を破壊する。アタシが選択するのはガメシエルだ！」

「ガメシエルを……？どうせ罠なんだろうけど、ここで見過ごす理由もないか。お望みどおりにガメシエルの効果発動、渦潮！壊獣カウンター2つをコストに、その発動を無効にして除外する！」

☆2+☆2+☆2||★2

バージェストマ・アノマロカリス(3)↓(2)

KYOUTOUウォーターフロント(4)↓(2)

アノマロカリスが体の前面でその巨大な鋏をクロスさせ放ったX字の衝撃波と、ガメシエルが再び生み出した水の大渦がフィールドの中央でぶつかり合う。互いに押し合うその力が拮抗していたのは、しかしわずかな時間だけだった。大渦を真正面から断ち切った衝撃波が、そのままの勢いで本来の目標たるガメシエルの巨体をあつさりとは斬り飛ばしたのだ。

「そんな!？」

「悪いな、ご期待に沿えなくてよ。残念ながらバージェストマは永続効果として、モンスターの際には相手モンスターの効果を一切受け付けない。つまり、ご自慢の無効効果も効きやしないって寸法よ」

「まんまとしてやられた、か。最初からワンダー・エクシーズは囷どころか、ド本命一直線だったってわけね……!」

ガメシエルを失ってもなお不敵な笑みこそ浮かべているものの、その笑みはややぎこちなく頬にはかすかに冷や汗が伝っている。今の一撃は、間違いなく予想外の一手だったはずだ。それを確認し、糸巻の笑みは対照的にますます深くなる。

KYOUTOUウォーターフロント(2)↓(3)

「さあ、一気にバトルフェイズといこうじゃないか。アノマロカリスでダイレクトアタック、抜刀乱舞カンブリア!」

「くっ……!」

バージェストマ・アノマロカリス 攻2400↓清明(直接攻撃)

清明 LP3800↓1400

「なかなか面白かったが、これでラストだな。PSYフレイムロード・Ωでダイレクトアタック!」

サイキック戦士が伸ばした手の平から空気がねじれるほどに強大な念動波を放ち、最後の追撃にかかる。この瞬間、場を支配しているのは完全に糸巻だった。もうこれで終わるだろう……誰もかそう思った。ただひとり、彼を除いては。

「永続トラップ発動、バブル・ブリンガー!このカードが場に存在する限り、互いにレベル4以上のモンスターでのダイレクトアタックは宣言できない!」

立ち上る泡の壁が、念力の波に大きく揺れ動きながらも割れることなくその勢いを弱めて逸らす。そして糸巻の場に、これ以上追加攻撃が可能なモンスターはいない。墓地に目をやっても、バブル・ブリンガーの発動をトリガーとして出てくるはずのレアンコイリアはガメシエルによって除外されている。大きく肩で息をしながらも、清明は自らのライフを次のターンに繋いでみせたのだ。

「……やるじゃねえか。ターンエンドだよ」

「お褒めにあずかりまして。じゃあ反撃と洒落込もう、ドロー!」

彼の手札は、このドローを含め残り3枚。そしてKYOUTOUウォーターフロントの効果は……糸巻が、何かされる前に先手を打つ

て動き出す。

「このスタンバイフェイズにΩの効果を発動、また除外された馬頭鬼を墓地に。さらにアノマロカリスはトラップをオーバーレイ・ユニツトに持つとき、相手ターンでもその効果を発動できる。ロスト・ヴァンブレイズを取り除き、バブル・ブリンガーを破壊！」

三度振るわれたその鉢から放たれた衝撃波が、Ωの攻撃でもびくともしなかった泡の壁をいともたやすく切り裂く。しかしそれに呼応して、廃墟と化したはずの灯台に4つ目の光が灯った。そしてその光は、冥府から現世への境界をも越えて大宇宙の彼方から侵略者たちを呼び寄せる。

バージエストマ・アノマロカリス(2) ↓ (1)

KYOUTOUウォーターフロント(3) ↓ (4)

「ならまずは1ターンに1度、壊獣カウンターが3つ以上存在するウォーターフロントの効果を発動。デッキから壊獣を手札に呼び寄せる、さあ来い多次元壊獣ラディアン！」

「Ωの効果は……いや、使わない方がよさそうだな。さあ、今度は逃げも隠れもしないぜ」

「その意気やよし、ってね。グレイドルの寄生か、壊獣のリリースか……多分どっちかを警戒してのアノマロカリスの早撃ちだったんだろうけど……ま、やられたもんは仕方ないか。アノマロカリスをリリースして多次元壊獣ラディアンをそっちのフィールドに、そして相手フィールドに存在する壊獣反応に呼応して手札の粘糸壊獣クモグスを僕のフィールドに、それぞれ特殊召喚する！」

多次元壊獣ラディアン 攻2800 悪魔族↓アンデット族

粘糸壊獣クモグス 攻2400 昆虫族↓アンデット族

KYOUTOUウォーターフロント(4) ↓ (5)

「お姉様のモンスターを勝手に使って、自分も最上級モンスターを特殊召喚するなんて……！こんなの、止めようがないじゃないですか！」

「それが壊獣だからな。相手が何をしようがお構いなしに、自分のやりたい盤面を強引に作り出す……ある意味じゃ俺の魔界劇団と一緒

でエンタメ性の塊なんだがな、相当うまくやらないと腹立つだけなのよなあれ」

「なんか好き放題言われてるけど、いいのか放つといて?」

どこか面白そうに相変わらずわーきやー騒いでいる外野を顎で指し示す糸巻。それに対して一度展開の手を止めた清明が、諦めたように小さく息を吐いた。

「そりゃねえ。グレイドルも大概だけど、ビジュアルも効果もどー見ても正義の味方のやることじゃないでしょこの子たち。典型的な悪役よ」

「お、おう」

「でも、この子たちは僕のことを助けに来てくれた。それはもう何年も昔の話だけど、それからこんな僕とずっと一緒にいてくれるんだ。この子たちが悪だっつてんなら、そんな正義はこっちから願ひ下げ。どうぞいくらでも喜んで悪魔の化身にでも地獄の使者にでもなつてやるともさ」

そう穏やかながらも硬い意志を秘めた目で言い切つて、愛おしそうに自身のフィールドにいたクモグスの長い足を丁寧に撫でる清明。気持ちよさそうに壊獣なりの甘え声のような鳴き声を漏らすクモグスに小さく微笑むその姿は、先ほどまでの子供っぽい様子とは打つて変わつて急激に大人びているように見えた。先ほどまでのあまりの違いに思わず目をしばたかせる糸巻の前で、またしても大人びた態度は影をひそめ見た目通りの少年のように明るく笑う。

「さ、デュエルを続けようか。今のままだと、クモグスだけじゃさすがに力不足だからね。ツーヘッド・シャークを召喚し、さらに自分フィールドに水属性モンスターがいることで2体目のサイレント・アングラーを特殊召喚するよ」

ツーヘッド・シャーク 攻1200 魚族↓アンデット族

サイレント・アングラー 守1400 魚族↓アンデット族

「またリンク召喚……ってわけじゃなさそうだな」

「ご明察。やっぱり目には目を、エクシーズにはエクシーズで返さないとね。僕は2体の水属性レベル4モンスター、ツーヘッドとアング

ラーでオーバーレイ！三千世界を張り巡れ、海原に紡がれし一筋の希望！エクシース召喚、ナシバースNo.37！希望識竜スパイダー・シャーク！」
そして清明が手札をすべて使い切ってまで呼び出したのは、地を這う蜘蛛と海を行く鮫の意匠が共に混ざり合った純白の海竜。アンデットワールドの瘴気に飲まれたその姿はすぐさま死体となり果てたが、その誇り高き威容は死してなお少しも損なわれてはいない。

☆4＋☆4＝★4

No.37 希望識竜スパイダー・シャーク 攻2600 海竜族
↓アンデット族

「ここでスパイダー・シャーク、か……」

「これで奴のフィールドには、攻撃力だけなら2400のクモグスと2600のスパイダー・シャーク」

「そしてお姉様のフィールドには攻撃力2800の多次元壊獣と同じく2800のPSYフレイムロード。ですが、きつとそれだけじゃすまないんですね？」

鳥居からセリフの後半を引き継いだ八卦が、確かめるように問いかける。ああ、と彼が短く答えるのと、清明のフィールドに並ぶ2体の蜘蛛型モンスターが動き出したのはほぼ同時だった。

「バトル！まずはスパイダー・シャークでPSYフレイムロード・Ωに攻撃、スパイダー・トルネード……そしてこの瞬間、スパイダー・シャーク自身の効果を発動！1ターンに1度だけモンスターの攻撃宣言時にオーバーレイ・ユニット1つを消費することで、相手フィールドに存在する全モンスターの攻撃力をこのターンの間だけ1000ダウンさせる！オーバー・レイン！」

No.37 希望識竜スパイダー・シャーク 攻2600 (2) ↓
(1)

多次元壊獣ラディアン 攻2800↓1800
PSYフレイムロード・Ω 攻2800↓1800

スパイダー・シャークの体に自身の周りを浮遊していた光球の1つが吸い込まれると、それをエネルギー源として体表に浮かぶ赤い光球から一斉に粘性のある純白の糸を噴出させる。糸は縦横無尽に

フィールドを走ると、糸巻のフィールドで防御姿勢をとる2体のモンスターに全身に絡みついて明らかにその動きを鈍らせた。

そしてその機を逃すことなく、狙いすました捕食者の一撃が超能力戦士へと叩きこまれる。

No. 37 希望識竜スパイダー・シャーク 攻2600↓PSY
フレームロード・Ω 攻1800 (破壊)

糸巻 LP2400↓1600

「まだまだあー！クモグスでラディアンに追加攻撃！」

その言葉通り、同じ蜘蛛型モンスターゆえかスパイダー・シャークの糸に一切その足を取られることなく速やかに距離を詰めたクモグスが、ラディアンの首筋にその毒牙を音もなく深々と食い込ませる。

粘糸壊獣クモグス 攻2400↓多次元壊獣ラディアン 攻1800 (破壊)

糸巻 LP1600↓1000

「クツ……案外やるじゃないか、まさかこの1ターンでここまで捲り返してくるとはな」

「伊達に場数は踏んでないってことさ。ターンエンド！」

この1ターンで再び盛り返した清明の声には、心なしかまた余裕が戻ってきている。しかし、それを慢心だと責めるのはさすがに酷というものだろう。

彼の場合にいるのは相手ターンでも攻撃力ダウン効果は使えるうえに、自身が破壊された時に墓地から別のモンスターを蘇生できるという最後の能力を持つスパイダー・シャーク。そしてモンスターの召喚、特殊召喚に反応して壊獣カウンターを消費することで、1ターンの間そのモンスターの攻撃と効果を封じ込めるクモグス。対する糸巻の手札はこれから引くドローを合わせても、その枚数はわずか2枚。そのフィールドにはモンスターも伏せカードもなく、あるのはアインデットワールドただ1枚のみ。仮にこの盤面を100人に見せて判定させたとしても、そのうち100人ともが清明が優位だと判断するだろう。

だが、それでも。

「なら、アタシもいよいよ本気出さないと。アタシの……タアアア
ンッ！」

「お姉様！」

どれほど追い詰められて追い込まれようと、糸巻太夫の闘志が陰ることはない。それどころか逆境をそのまま燃料に、さらに激しくその炎は死霊の土地に燃え盛る。

遊野清明のデツキは、その使い手の決して諦めず最後までデツキを信じる心に応えて逆転の一手をもたらした。ならばどうして、それと同じ奇跡を彼女に起こせない道理があるだろうか？果たしてこの土壇場で引いたカードを見た彼女は、喉の奥で低く笑った。

「残念な話だが、このデュエルも今度こそ終わりみたいだな。スタンバイフェイズに速攻魔法、逢華妖麗譚——不知火語を発動！手札のアンデット1体を捨てることで、それとは名前の異なる不知火1体をデツキか墓地から特殊召喚できる！」

「墓地……戦神！」

「ああ、そうさ。甦れ、戦神！」

再び2刀を手に墓地から蘇るは、浄化の炎纏いし火焰の剣士。その背後には、先ほどのターンで墓地に送られた青い古代生物の姿が半透明の霊体となって浮かんで消える。

戦神——不知火 攻3000

「特殊召喚に成功した戦神の効果で、墓地からアンデット族になったアノマロカリスを除外することでその攻撃力を吸収する。不知火流・火鼠の皮衣！」

「クモグスの特殊能力、縛鎖！壊獣カウンター2つを消費して、このターン戦神を封じ込める！」

もう1法の蜘蛛が糸を吐き、粘性の高いスパイダー・シャークの糸とはまた異なる硬質なそれが今まさに炎の衣をその身に宿そうとしていた戦神の全身をギリギリと縛り上げる。長くはもたない封印ではあるが、ほんの一次的にだけでもその体は完全に身動きが取れなくなった。

KYOUTOUウォーターフロント(5) ↓ (3)

「これで……」

「いや、甘いな。なぜなら、アタシの狙いは戦神の蘇生じゃない。この瞬間に手札コストとして墓地に送られたモンスター、グローアップ・ブルームの効果を発動！墓地のこのカードを除外することでアタシのデッキからレベル5以上のアンデット1体を選択し、そのカードをサーチする。ただしこの発動時にアンデットワールドが存在する限り、アタシはそのサーチを場への特殊召喚に変更することができない」
「最初からリクルートが目的だった、ってわけ？でも、どんなモンスターが出てこようともクモグスにターン制限はない。壊獣カウンスターはまだ残ってる、みんなまとめて縛鎖してやるまでさ！」

威勢よく啖呵を切る清明だが、それを糸巻は笑い飛ばす。

「はっ、そりゃあ一理ないな。確かに並みのモンスターなら、この場で出しても縛られちまうのがオチだろうよ。だが、こいつは一味違うぜ？アタシが呼ぶのはレベル8、死霊を統べる夜の王。来な、死霊王ドーハスーラ！」

アンデットワールドに巣くう死霊どもが、一斉にその王の帰還を讃える嘆きの歌を歌う。生者の心を荒ませるその悲鳴のような泣き声のようなもの悲しい響きの満ちる中、とうの昔にボロボロに風化してあちらこちらでむき出しの地面がのぞくかつてのメインストリートを湿った重いものを引きずるような音と共に恐るべき死霊の王がやってきた。

死霊王　ドーハスーラ　攻2800

「ならもう1度クモグスの効果発動、縛鎖！」

「させるか、ドーハスーラの効果発動！」

再び指令を受けたクモグスが、またしても大量の糸を噴出させてその新たななる獲物を縛り上げようとする。だがその瞬間、ドーハスーラがその手に持つ杖を振り上げた。見るものを幻惑させる光がその先端に灯り、その光に誘われてアンデットワールド中からどこからともなく、戦闘にも参加できずデュエルに影響を与えることもできないほどに低級な死霊が電灯に集う羽虫のようにうじゃうじゃと集まってくる。

そしておもむろに、十分な数の死霊が集まったところでドーハスーラが自分へと向かってくる糸の奔流へと杖を向ける。集まっていた死霊どももまたその動きに吸い寄せられるように音もなく動き、そんな死霊の肉盾に糸が命中して四散した。

KYOUTOUウオーターフロント(3) ↓ (1)

「クモグスの効果が……え？だあから、そんなの知ってるなら先に教えてってば！自分で失敗して体で覚えろってのはよくわかったから、たまにはもうちよつと甘やかしてくれたっていいじゃない！」

驚愕の表情から一転、突然明後日の方向を向いてぶんぷんと怒り出す清明。とはいえそれは本気で怒っているわけではなく、どちらかといえば動物がじやれているだけのようにも見えた。

ただ問題は、いるはずのその相手が糸巻たちには影も形も見えなかったことだけだ。

「えつと……あの人、誰と喋っているんでしよう……？」

「聞いてやらないほうがいいと思う。妄想癖は刺激しない方が安全だから」

さすがの純真な少女も、目の前で突如繰り広げられたこの一幕にはやや引き気味となる。逆に鳥居が割と本気で彼と距離を取ろうとしているのは元からなので、その態度にはあまり変化がない。もとより長いプロ生活で様々な奇行を見慣れてきた糸巻も、形のいい眉を小さくひそめるのみだ。

「誰と喋ってんだお前。まあ一応教えといてやるが、ドーハスーラはアンデット族の効果発動に反応して、2つの効果から1つを選択して発動できる。今アタシが使ったのはそのうちの1つ、発動した効果を無効とする能力だ」

「ああうん、そうらしいね……でも！まだ僕にはスパイダー・シャークがいる、この子がいる限りドーハスーラの攻撃は僕のモンスターに届かない！」

「確かにな。だがスパイダー・シャークの能力は攻撃宣言時にしか発動できない、ならその前に潰してやるまでだ。墓地から馬頭鬼の効果発動、このカードを除外してもう1体の馬頭鬼を蘇生する……そして

この効果に反応して、ドーハスーラの効果を発動！アンデット族が効果をを使用した時、互いの場か墓地に存在するモンスター1体を選んで除外する！」

「除外じゃあ、ラスト・リザレクションも使えない……！」

息を呑む清明の前で、ドーハスーラが今一度その杖を振る。いまだその杖の周りに浮遊していた残り半分の死霊どもが、今度はアンデットワールドの主の命に合わせて明確な敵意と共にスパイダー・シャークの全身に絡みついていく。鰭や尾を動かしてどうにか振り払おうとするスパイダー・シャークだったが、実体を持たない死霊には何の意味もなくその体が大量の死霊を道連れに消えていった。

馬頭鬼 攻1700

「これでドーハスーラの効果も打ち止め……だが、この馬頭鬼を縛るための壊獣カウンターはもう残ってない」
「ぐ……」

「もう今度こそ、何もないみたいだな。まあアタシ相手によく粘った方だ、なかなか燃えられたぜ。バトル、ドーハスーラでクモグ스에 攻撃！」

死霊王 ドーハスーラ 攻2800↓粘糸壊獣クモグス 攻2400 (破壊)

清明 LP1400↓1000

「これでとどめだ、馬頭鬼でダイレクトアタック！」

馬の頭を持つ冥界の門番が、手にした大斧を無慈悲に振り下ろす。勝負は、決した。

馬頭鬼 攻1700↓清明 (直接攻撃)

清明 LP1000↓0

「……っだあー、負けたーっ！」

「ああ、相手が悪かったと思つときな」

悔しそうに、しかし清々しく言い切つて笑う清明に、糸巻も不敵な笑顔を返す。そして互いの健闘を認めあつたデュエリスト2人がひ

としきり笑ったところで、ふつと真面目な顔に戻る。

「しかし、どうしよつかね。はつきり言っただ僕としては、最悪手伝ってくれなくてもいいから邪魔さえしなくてももらえればそれでいいんだけど」

最初に口火を切ったのは、清明だった。邪魔しないで、というのは、やはりすべての発端となった幽霊騒ぎ……彼の言う精霊についての件だろう。デュエルを挑んでおいて負けた以上、もはや彼に決定権はない。しかしそう告げる彼の眼はどこまでも真剣そのものであり、よほどの事情……それもかなり切羽詰まった内容のものがあることを感じさせるには十分なものだった。

「……ま、とりあえずアタシらに話してみなよ。アンタが何でこの幽霊騒ぎに固執するのかを、さ」

「え？」

「おっと、勘違いするなよ。アタシは別に、アンタの与太話を信じてやろうってんじゃない。ただ今のデュエル、アンタは紛れもなく本気でぶつかってきた。どんな理由があるにせよ、真剣に通したい何かがなければ、あの気迫は出るもんじゃない。アンタ個人を信じたわけじゃないが、アンタのデュエルを信じてやろうってんだ」

予想外の言葉にきよとんとした顔になり、じわじわとほっとしたような笑みが広がっていく清明とは対照的に。鳥居がまた増えた面倒事にやれやれとこめかみを押さえながらも、最後に諦め混じりに小さく呟いた。

「あーあ。やーっぱりこうなったか、糸巻さん。あの人根っこが甘ちゃんだからなあ」

ターン13 太陽と月と罪と罰

「……色々知っておいた方がいい前提はあるんだよ。でも、それやっていると長くなるから今この瞬間に必要な要点だけ。それでいい？」

七宝店内で再び机を囲み、最初に口火を切ったのは清明だった。

「なんだ、けち臭いな。アンタの知ってることとやら、とりあえず全部話してみればいいじゃねえか」

「そうは言うけどね。そもそもなんで、僕があの幽霊をカードの精霊だとわかったのか……とかそういう話だよ？特にそっちの彼なんて、絶対聞きたくないような話でしょ」

とりあえずといった風に噛みついた糸巻に、肩をすくめてさらりと隣の鳥居に話を回す清明。急に話を振られた彼が何か言おうとするのに先回りして、そのままじっとりとした視線を向ける。

「俺は……」

「あれ、違うの？」

「……まあ、否定はしない。正直俺としては、お前そのものに対してまじく懐疑的だからな」

「だろーね。だからその辺の前提は全部すつ飛ばして、あの子が精霊なことは確定情報として喋らせてもらうよ」

さもそれっぽい理屈を述べて澄ました顔こそしているが、それは詐欺師の口口に他ならない。仮定の話にまた仮定を積み重ね、それを前提としてさらに仮定を上塗りする。そうやって話を膨らませるうちに、気が付いたときには一番最初に作られたはずの仮定はもう確固たる「事実」にすり替わる。あえて何も言いはしなかったが、糸巻の心の中でのこの少年に対する警戒レベルはまた1段引き上がった。

デュエリストとしては信用できる。しかし、人間としてはどうだろうか？そんな疑心の視線を知ってか知らずか、しかめっ面を浮かべた彼の話はいよいよ本題に入る。

「ブレイクビジョン……「BV」だっけ？随分とまあ、とんでもないもの作ってくれたもんだね。本来カードの精霊ってのは、精霊だけの世

界にいるものなんだよ？だけど持ち主がカードを大事にして、さらにたまたま精霊とデュエリストの……なんて言うのかな、波長が合った場合？うん、大体そんなときにだけそのカードを扉にして次元を越えて、こつち側に來ることができるとわけよ」

ここで一度言葉を切り、周りの3人にじろりとかすかな非難混じりの視線を送る。しかしどんな目で見られようと、そもそも彼女たちもまた「BV」に人生を狂わされた被害者でしかない。同意のこもった表情で肩をすくめて先を促す糸巻に、また口を開く。

「そうやってこつちに來れた精霊も、基本的には人間からは見る事ができない。こればかりはどうしようもないけど、そもそも精霊を見ることのできる人間はかなり数が少ないんだ。まあ精霊側の世界に行けば話は別だし、たまーにこつちの世界でも自力で実体化できるような子もいるから例外も多いけど」

「いよいよもって胡散臭い話だな。つまり、お前にはそれを見ることができると？」

「色々あったのよ、色々ね。でも案外何かのきつかけさえあれば、ひよこつと見えるようになるかもね」

「本当ですか!？」

そこで食いついたのが、やはりといえればやりの八卦であった。精霊が見えるようになるという言葉に、誰よりも純真で眩しいほどに純粹な反応を見せる少女。そんな姿に何を思い出したのか目を細め、かすかな微笑を口元に浮かべて優しい声でしつかりと頷いた。

「結局は、わかんない話だけどね。でも僕はそうだったし、僕の親友もそうだった。精霊の見える目は決して先天的な才能じゃなくて、後から何かのきつかけで開花することもある。それは間違いなく保証するよ」

「へえ……」

顔を輝かせて自分のデッキを取り出す八卦。その姿を前にしてまた会話がずれてきたことを察した糸巻がわざとらしく咳払いすると、ややきまり悪そうに清明が頭をかく。

「ごめんごめん、また脱線したね。で、話を戻すと。ふつうそういった

精霊は、自分を呼び出すきつかけになったデュエリストと目に見えなくとも繋がってるものなんだ。たとえばどれだけ持ち主から引き離されてもその？がりがあるからこそ、精霊たちはこの世界に留まっていられる……まあ、これも例外はあるけど。割とよくいるのよね、自分1人でも問題なく精霊としての存在を維持できるぐらい強い個体や、逆に自分の維持に必要なエネルギーが低すぎて、その？がりがなくてもぴんぴんしてるような個体が」

「ん？要するにお前、何が言いたいんだ？」

今一つ先の見えてこない話に焦れてきた糸巻が、一気に核心に踏み込もうとずばり問いかける。これ以上話を伸ばすのは悪手と悟った清明も、すぐにそれに応える。

「悪いねえ説明下手で。じゃあ、もつと要約するよ。要するに、あの幽霊はカードの精霊。だけど、どこをどう探してもそのカード自体の持ち主がいらないかなりのイレギュラー存在。あの子がどういうタイプの精霊かはわかんないけど、下手すると近いうちに存在が保てなくなつて消えちゃう。だから早いうちに手が打ちたい、具体的にはカード自体を回収して誰かにあげる、以上」

「いや、以上って……まあだいぶわかりやすくはなつたな。最初からそう説明してくれ」

「幽霊さん……じゃなかった、あの子、消えちゃうんですか？」

「かもしれない、ね。ただ、今のままだとあんまりよくないことは間違いないかな」

この中では唯一件の精霊を直接その目で見た八卦の問いかけに、ややためらつたのち返事する。その言葉にやや安心はしたものの、それでも少女の脳裏にはあの時1瞬だけ出会つた半透明の少女の姿が蘇つた。

「イレギュラーって、なんか理由の当てでもあるのかい？アンタの話を聞くかぎり、また同じことが起きないとも限らないからな」

「外に出たら宝くじの当たり券拾つて宇宙から隕石が落ちてくるぐらい無茶な確率だろうけどね。ただ今回に限っては、あの「BV」が一枚かんでるんじゃないかと思つてるよ」

「B V」が？」

カードの精霊というファンタジー概念から、ここに来て再び自体は現実の脅威に急転換する。聞きなれた名前に眉をひそめる糸巻に、ため息をつけて先ほどと同じ非難混じりの視線を送る。

「そ。多分あれであのカードを实体化した時に、なんかの拍子でその肉体側に精霊の魂が引つ張られちゃったんだろうね。实体化するソリッドビジョンなんて、まさかオカルト抜き科学の力だけで完成させたところがあるなんて思いもしなかったよ。三沢……昔の親友だけど、あいつが聞いたらなんて言うのかね」

「そんなこと、本当にあるのか？」

「あるのか？ たって、実際あるんだからねえ。ただ少なくとも、今こうして幽霊騒ぎが起きてるのは本当。でしょ？」

当然の疑問を問いかける鳥居には肩をすくめ、あっさりと返す。

「さ、これで僕からの話はおしまい。そっちがこの情報掴んでるかどうかは知らないけど、僕はもう少ししたら行かせてもらうよ。今すぐ出てもいいんだけど、あの子はどうも日が落ちてからしか实体化できないみたいだからね。今行っても時間の無駄ってもんさ」

「はい！確かに私の調べたときも、確かに目撃情報は全部夜になってからでした。あの、私、お茶でもお持ちしますね」

席を外した八卦からのお墨付きを得て満足そうに頷き、ひよいと立ち上がる清明。そのままショーケースまでふらりと歩き、中身を外から順番に眺め始めた。完全に時間つぶしモードに入った彼を横目に、デュエルポリス2人が手早く声を潜めての打ち合わせにかかる。

「おい鳥居。どー思う？」

「いやいや、どう、って……そもそも喋らせたの糸巻さんじゃないっすか、上司なんだから自分で考えてくださいよ」

「ふむ。アタシの勘だとアイツ、なーんか嘘ついてるようには見えな
いんだよなあ」

「そりゃ俺も同感っすね。ただ、だとするともっとヤバい可能性もありますよ。あの話を自分で信じ切ってるマジもんの妄想癖とかも、俺らじゃなくて精神病院の管轄でしょう」

「つくづくリアリストだなあお前。まあ、アタシも半分は同感だ。万一の時のために拘束用の手錠と警棒、ちゃんとすぐ使えるようにしておけよ」

「そりやもちろん。ん？待ってくださいいよ糸巻さん、ってことは……」
「ああ、しばらくはアイツの話に乗ってやるさ。正直なところアタシも今の話を信じてみたい気持ち半分はあるし……もし奴が頭のネジ吹っ飛んだヤバい奴だとしたら、それこそ1人にさせとく方がまづい。何やりだすかわからんからな」

「あー、監視役ってことっすね。了解です」

あらかたの方針が決まったその瞬間を、ちょうど狙いすましたように。カードシヨップ七宝の扉が開き、スーツ姿の男がずかずかと店内に入り込む。そしてこの瞬間、またしても事態は面倒な回り道へと逸れることになるのだった。

「久しぶりだな、七宝寺の爺さん。おーい巻の字、どうせここにいるんだろ？そこにいるガキ1人、引き渡して欲しいんだが」

当然のようにそう告げる髭面の男に、残念ながら糸巻はよく覚えがあった。何より、彼女に対してこんなあだ名で呼びかけるようなものは1人しかいない。

「朝顔……どうした、自首ならまた今度出直してくれや」

「おう巻の字、人の話ぐらいちゃん聞いてくれ。まだ更年期には早いだろ」

朝顔涼彦。かつてのプロデュエリストとしての通り名は『二色のアサガオ』。それが、このスーツ姿の男の名前である。デュエルポリスを選んだ糸巻とは違うテロリスト加担組の1人であり……そして彼女は知らないが、それを知るものはここにもう1人いる。

折よくぱたぱたと小さな足音と共に、お盆に4つのコップとそれぞれ八分目まで注がれた緑茶を載せた少女が帰ってきた。

「お待たせしましたお姉様……あ、あなたは朝顔さん!？」

「あー、やっぱりここに居たのか。嬢ちゃん、つくづくツイてねえなあ」

仕方ないなあと言いたげな表情の朝顔とは対照的に、危うく手にし

たお盆を取り落としそうになる少女。目を丸くするその表情から何かを感じ取り、ドスのきいた声色で糸巻が向き直る。

「……なんだ朝顔、お前こんな子に手え出したのか？返事次第じゃこの場でしょつ引くぞ」

「嫌な言い方だなあ巻の字、いくらなんでも俺の性癖はもうちよい上だよ」

「そういうえば、お姉様のお知り合いなんですよ。私も、昨日お会いしたんですよ。あの、朝顔さん。先日はお世話になりました！今日は師匠はご一緒ではないんですか？」

最初の驚きも過ぎ去って、元気はつらつに頭を下げる少女。仮にも彼は、目の前の少女に対し一方的なアンティを持ち掛け誘拐までしようとしていた男である。トラウマの発症ぐらいはかわいそうだが仕方がないと割り切ってこの場所に顔を出したのだが、さすがにこの反応は彼にとっても予想外だった。今度は朝顔がそのサングラスの奥で目を丸くしたのちやや居心地悪そうに頬を搔き、また糸巻に視線を移す。

「お、おう。夕顔の奴なら、今日は別行動だよ。あー、なんだ。おい巻の字、これもお前の教育か？」

「いんや、正直アタシもちよつと困ってんだ。アタシにはもう、この子はちよつと眩しすぎてな」

「あ、眩しかったですか？そうとは知らずに失礼しましたお姉様、照明落としてきましようか？」

「……ほらな」

「心中察するぜ、お前さんも大変なんだな。と、今日はそんな話しに来たんじゃねえんだった」

ようやく本来の目的を思い出した朝顔がポンと手を打ち、店内を見回す。いったいどこに行ったのか、清明の姿はいつの間にか店内から消えていた。

「おお、それだ。朝顔、なんかガキがどうか言ってたよな？」

「まーな。遊野なんとかって15、6の野郎だが、これが滅法腕が立つらしくてな。どう聞いても巻の字としか思えない赤髪の女を探して

昨夜からこの街のあちこちで聞き込みしては、調子乗って喧嘩売ったうちの若いのを何人もデュエルで返り討ちにしてるらしい。どうせそいつらも酒の入った馬鹿なんだろうが、さすがに何の落とし前もなしってのは俺らも沽券にかかわるんでな」

「ほーん」

「で、だ。そいつがここに辿り着いたのはわかってるんだ、なあ巻の字。大人しくそのガキ、こつちに引き渡してくれねえか？ どうせ大した知り合いでもないんだろ」

「ちなみに、嫌だつっつたら？」

「まあ、腕づくだろうなあ。俺、巻の字の相手すんのはあんま得意じゃないんだが仕方ねえ」

小さく息を呑む声がして、朝顔は糸巻の目をまつすぐに見つめた視線を逸らさないままに間違いなく目当ての存在がここにいと確信する。純真な少女は、どこまでも正直者だった。

「やっぱそうなるよなあ。おい鳥居、悪いがちよつとこいつの相手してやってくれないか？」

「んんっ!?! げほっ、げほっ……え、俺なんすか？ この流れで？」

「悪いがアタシは今駄目だ。いい加減煙草吸ってないから頭が回らん」

「こんのニコチン中毒!」

一触即発の状態からため息をついた糸巻が振り返ったのは、のんびりと元プロ2人の会話を先ほどもらったお茶を飲みつつ見守っていた鳥居だった。突然の指名にややむせつつも抗議の声を上げる彼に対し、意外にも朝顔本人は乗り気だった。

「そうそう、お前さんのことも聞いてるぜ。前回の裏デュエルコロシアムに潜り込んでニューチャンプになった期待の……いやさ、擬態の新人だつてな。青木のおっさんもロボの野郎も一筋縄じゃいかない相手なんだが、若いのに対したもんだ」

「げー……俺もすっかり有名人っすね」

「そりやそうだろうよ。ま、もう俺らの間にもお前さんの顔は割れてんだ。最初の1回はうまくしてやられたが、もう1回潜り込むのは無

理だと思つときな。センキューな巻の字、ついでにお前のことも一発かましてこれたとありや、俺も臨時ボーナスぐらいは出してもらえそうだ」

乗り気の朝顔に押し付けける気満々の糸巻、そして変に気を使ってデュエルの邪魔にならないよう離れた位置から遠巻きに3人を見守る八卦。そして、店主の七宝寺と仮にも話題の中心なはずの清明の姿はどこにも見つからない。今この場に、鳥居の味方は1人もいなかった。

「えーいもう、わかりましたよ糸巻さん。やればいいんでしょやれば、俺が相手しますよ」

「おう、そうこなくちやな。嬢ちゃん、悪いがデュエルスペース借りるぜ。それと今回も「B.V」だ、ふっ飛ばされて困るもんは今のうちに退けときな」

「は、はいー」

「ひひっ、その必要はないよ朝顔の。もし何か壊れたら賠償は全部アタラ持ちさ……私の頼みだ、まさか嫌とは言うまいね？」

「ぐ……わ、わかったよ爺さん。あんたにや敵わんな、普通にデュエルしよう」

先ほどまでどこにいたのか、突然ふらりと現れて完全に朝顔を威圧する七宝寺。それは糸巻にとつては……いや、彼女と同時期に活動していた元プロデュエリストにとつては何も違和感のない光景だったが、この老人の前職についてそもそも知らない鳥居と、現役引退した元プロということは聞いていてもその全盛期の伝説を知らない八卦はただただ2人してこの百戦錬磨なテロリストが目目の前の小柄な老人相手にぐうの音も出ずに唸るさまを見て目を丸くするしかなかった。

そして店の奥、デュエルスペースとして用意されたぽつかりと広い空間。あの時よりも観客ははるかに少なくはあるが、それでも鳥居は何となくあの裏デュエルコロシアムでの一夜を思い出していた。

「ま、やるとなったらやったりしますか……」『それでは皆様長らくお待ちせいたしました、まずは自己紹介と参りましょう。私こそが当劇団の

支配人にして目くるめく夢の世界への案内人、鳥居淨瑠にてごさいます。どうか皆様、末永くお見知りおきを！」

演劇モードのスイッチを入れ、眠そうな印象すらも与えるいつもの瞳をぱちりと開きオーバリアクションと共に深々と一礼する。そんな突然の彼の変わりようにも、すでにその変化について聞いていた朝顔は驚きはしない。

「おお、悪いなご丁寧に。知つての通り……つつても知らねえんだろうなあどうぞ。二色のアサガオ、朝顔涼彦だ」

そして互いに名乗りを終えたタイミングで、デュエルディスクのラウンド機能が先攻後攻の順番をそれぞれ弾き出す。果たして先に場を固める権利を得たのは、朝顔の方だった。それを同時に確認し、ともに初期手札となるカードを5枚引く。

「デュエル！」

「さーて、まずは俺のターンか」

そう言いつつ、じっくりと手札を眺める朝顔。その様子を完全に傍観者として眺める糸巻の裾を、くいくいと八卦が引っ張った。

「ん、どうしたい八卦ちゃん？」

「あのお姉様。朝顔さんって、どんなデュエリストなんですか？二色の……って、どういう意味なんです？」

少女が先日彼と遭遇した時、その相手となったのは相方の夕顔だった。そのため少女にとつても、これが初めて見る彼自身のデュエルとなる。しかし糸巻はそれに直接答えることはせず、軽く笑うと純粹な瞳で問いかける少女の頭にポンと手を置いて2人のデュエルがよく見えるように自分の横に並べた。これから始まるお楽しみ、その種を自分からばらすような無粋な真似はしないのだ。

……もつとも憧れの対象の真横という特等席を意図せずに入られ、さらにその体に密着する権利まで与えられた少女にとつてはかえって勝負どころではなかったのだが。その理由は主に直立する少女の顔のすぐ真横に圧倒的な存在感と共に鎮座する、行儀悪く机の上に腰かけた糸巻の胸のせいである。彼女が呼吸するたびに必然的にそれに合わせてわずかに動く2つの膨らみは、思春期な少女の注意を

ほぼ全面的に引き付けるには十分なインパクトだった。

そんなことが起きているとは露知らず、男2人のデュエルは今まさに始まるうとしていた。

「まずはこれからだな。俺は手札から、使神官―アスカトルの効果を発動。このターンシンクロモンスター以外をエクストラデッキから特殊召喚できなくなる代わりに、手札を1枚捨てることでこのカードを守備表示で特殊召喚。さらにその後、手札かデッキから赤蟻アスカトルを特殊召喚することができる」

顔の付いた太陽をかたどった杖を手にした半裸の男性神官が現れ、その杖を空に掲げる。すると杖から黄金の光が放たれ、その光に導かれた巨大な赤き蟻がその6本の足をうごめかせながら神官のそばへと歩み寄る。

使神官―アスカトル 守1500

赤蟻アスカトル 守1300

「レベル5の使神官に、レベル3の赤蟻をチューニング。暴虐の太陽昇りしとき、表裏一体の対となる日輪が牙を剥く。シンクロ召喚、太陽龍インティ！」

専用チューナーの元に呼び出されたそのシンクロモンスターは、まさに太陽の龍。先ほど神官が手にしていた杖と同じデザインの太陽の面が宙に浮き、そこから4本もの赤い首が伸びてそれぞれそっくり同じ竜の姿を成した。

☆5＋☆3＝☆8

太陽龍インティ 攻3000

『インティ……とくれば、恐らくは』

「そして魔法カード、アドバンスドローを発動。俺のフィールドからレベル8以上のモンスターをリリースし、カードを2枚ドロウする。手札から死神官―スーパイの効果を発動！このカードもまた俺の手札1枚をコストに守備表示で特殊召喚し、さらにスーパイ1体を特殊召喚できる。シンクロ召喚以外でエクストラデッキからモンスターを呼び出せないデメリットも含めて、アスカトルとほぼ同じ効果だ」

太陽の龍がゆつくりとその首を根本の仮面に収納し、残った仮面も

地中へと沈んでいく。それと同時に店内の照明も次第に暗くなつてゆき、薄闇の中に鬼のような2本角の面をかたどった杖を手にする女神官がその杖によく似た宙に浮かぶ仮面を従えて現れた。

死神官―スーパイ 守1900

スーパイ 守100

「レベル5の死神官に、レベル1のスーパイをチューニング。無慈悲なる月光満ちるとき、表裏一体の対となる月輪が爪を研ぐ。シンクロ召喚、月影龍クイラ！」

同じく専用チューナーの元に呼び出されたもう1体のドラゴンは、先ほど沈んでいったインティに比べるとその体軀はひとまわり小さい。その体色も赤を基調としたあちらとは異なり、全面的に青を押し出したカラーリングとなっている。しかしそのデザインはまさに対、ある一点を除くほぼすべてがインティの姿に酷似している。太陽の龍と月の龍を隔てる何よりの違い、それがその龍の体を伸ばす本体の仮面であった。太陽をかたどったインティに対し、月を人面に見立てた仮面……そしてそれが、先ほどインティの辿ったルートをなぞるようにして天頂へと浮かびあがった。

☆5+☆1=☆6

月影龍クイラ 攻2500

『インティ、そしてクイラ。ともに対となる太陽と月の化身……魔界劇団の今宵の相手は、どうやら大自然の象徴たる昼と夜の顔そのもの。となればそれらを同時に相手取るこの演目名は、さしずめ魔界演目「星落とし」とでもお呼びいたしましょうか。天高く輪廻の孤を描く、昼と夜二色の顔を持つ2つの天体。ならば今こそ我々のエンタメで、星の軌道さえも曲げてみせましょう』

相手のデツキのギミックが分かったところで、鳥居は決して立ち止まらない。それは、彼の魔界劇団に対する誇りと自信のなせるものだ。

しかしまた、その相手たる朝顔もかつては糸巻と同じプロデュエリスト。決して一筋縄ではいかない相手だろうと、改めて気合を入れ直す。

「星落とし、ねえ。はっ、なかなか言ってくれるじゃねえか。さすがはエンタメを名乗るだけのことはある、威勢のいい奴は嫌いじゃないぜ。俺の手札は残り2枚、これを全部セットしてターンエンドだ」
「初手からハンドレスとは、なかなか強気ですね。それでは、私のターン！おや、このカードは……いえ、なんでもございませぬ」

ドロローしたその1枚を見て、やや意味ありげな反応を見せる鳥居。だがそれ以上そのカードに触れることはなく、すぐさま別のカードを使って動き出した。

「まず我々の目指すべきは、天頂に浮かぶあの青き月。そしてこの無謀なる挑戦に、果敢に挑む勇氣ある団員の名を紹介いたしましょう。ライトPゾーンにスケール1、怪力無双の剛腕の持ち主……魔界劇団―デビル・ヒールを、そしてレフトPゾーンにはスケール8、誰もを笑わす最高の奇術師。魔界劇団―ファンキー・コメディアンをそれぞれセッティング！」

彼のデュエルではおなじみの、左右に立ち並ぶ光の柱。それぞれ紫色の巨漢と黄色い肥満体がその中心に、自身の持つ数字と共に浮かび上がる。

「これにて私は手札より、レベル2から7のモンスターを同時に召喚可能。ペンデュラム召喚！舞台駆けまわる若きシヨーマン、魔界劇団―サツシー・ルーキー……そして！この偉大なる挑戦に、やはり彼の名は欠かせません。栄光ある座長にして永遠の花形、魔界劇団―ビッグ・スターの登場です！」

魔界劇団―サツシー・ルーキー 攻1700

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

「サツシー・ルーキーにビッグ・スター、ねえ。それで、どうする気だ？」

「そうですね。いくつか考えられるストーリーはございますが……ここはやはり、お客様の意表をついてこそが華というもの。ビッグ・スターの効果発動！1ターンに1度デッキより魔界台本1冊を選択し、私のフィールドにセットいたします。最初に導き出される演目は、やはりこれがなくては始まらない。台本の中の台本、魔界劇団の

代名詞。魔界台本「魔王の降臨」をセットいたします！」

「何……？」

「ほう」

鳥居が迷いなく選んだ台本は、自分フィールドに攻撃表示で存在する魔界劇団の数まで場に表側で存在するカードを破壊する極めて攻撃性の高い台本、魔王の降臨。そのチョイスに、元プロデュエリスト2人の目が鋭く光る。

「『おやおや、どうやらギャラリーの皆様方はこの選出が不思議なようですね。確かに今現在フィールドを支配する月の化身、クイラには効果がございます。それも魔王の降臨のチェーン不可能力では防げない、被破壊時に自身の対となるインティを蘇生する効果が。ですが、私はこれでもエンターテイナーを名乗る身。当然、これだけでは終わりません。魔王の降臨を発動、この時私のフィールドにレベル7以上の魔界劇団が存在することで相手はこの発動に対しカードをチェーンすることが不可能となり……その破壊対象は、私のフィールドに存在するサッシー・ルーキー！』」

「ええっ!？」

八卦の上げた困惑の叫び声に反応するかのように、ビッグ・スターがすっかりおなじみとなった漆黒のマントによる魔王ルックを身にまとう。その隣で一緒になって黒服を着て胸を張るサッシー・ルーキーだったが、ビッグ・スターがそのマントを勢いよく広げてポーズをとった際に嫌というほどにその振りぬかれた腕に顔面を強打され、そのままその場にひっくり返ってしまった。

「『ですがご安心を。サッシー・ルーキーは1ターンに1度、戦闘及びカード効果によっては破壊されません』」

涙目になりながら頭をさすりつつ起き上がる若き演者に、花形が魔王の格好のまま両手を合わせて謝罪する。気にするなど言わんばかりにその名が示す通りの偉そうな態度でひらひらと手を振り、再び2人の演者が月の龍を前にして並び立った。

「『そして手札より、魔界台本「ファンタジー・マジック」をサッシー・ルーキーに対し発動！このターン選択したモンスターがバトルに

よって破壊できなかつたモンスターは、そのダメージステップ終了時に持ち主の手札へと戻ります。破壊するたびに互いが互いを蘇生しあう太陽と月の輪廻、ならば破壊以外の方法でその輪を断ち切れればいいだけのこと。これぞすなわち、星落とし！』

発動された第2の台本に目を通し黒衣をすぐさま脱ぎ捨てたサツシー・ルーキーが今度は木製の剣と盾を手にし、明るい色のマントにバンダナといったいかにもな勇者の装備に身を包む。星々の軌道を変えるため一時的に手を組んだ勇者と魔王の姿は、少女の目にはひどく頼もしいものに映った。

「あれ？でも、お姉様。最初からファンタジー・マジックのカードが手札にあつたなら、なんで鳥居さんは魔王の降臨を使つたんですか？」
「ネタバレは冷めるからな、とはいえヒントだけは教えとくよ。簡単な話、奴が狙つてるのはサツシー・ルーキーのもう1つの効果さ。それにしても鳥居の奴、2枚も伏せが残つてのにずいぶん強氣でいったな」

意味深な呟きが、当の本人の耳に届いたのかは定かではない。ともあれ、天高くで無慈悲な光を放つ天体の龍へとその先陣を切つたのは勇者サツシー・ルーキーだった。飛び上がりざまにその剣を振り上げ、力任せに振り下ろしにかかる。

「サツシー・ルーキーは破壊された時にデッキからレベル4以下の魔界劇団を1体リクルートする、だろ？確かにこの攻撃でクイラのバウンスが通つちまえば、すでにこのターン破壊耐性を使ったルーキーは戦闘破壊されて後続を呼び、そいつが攻撃力1500以上なら4000以上のダメージが通る計算になる……だが悪いな兄ちゃん、俺は1筋縄じゃいかないぜ？まずクイラが攻撃対象に選ばれた瞬間、クイラ自身の効果を発動！その攻撃モンスターの攻撃力の半分だけ、俺のライフを回復させる！」

『もちろん、その効果も理解しております。ですがいかにライフが回復しようとも、星々の輪廻は表裏一体の月が消えたその時点で断ち切られます。つまり、この星落としは成立する！』

その言葉通り、勇者の振り下ろした剣は今まさにそれを迎え撃とうとする4本の龍の首とぶつかり合おうとしていた。この攻撃によりファンタジー・マジックは、その目的を達成することとなる。

だが、ついにその時は訪れなかった。まさに両雄がインパクトするその瞬間、朝顔が動いたのだ。

「速攻魔法、禁じられた聖槍を発動！俺が選ぶのは当然、俺のフィールドに存在する月影龍クイラだ。これでクイラの攻撃力はこのターン800下がり、さらに魔法も毘もこのターンだけ受け付けない」

『しまった……！』

「ほう。腕は落ちてないみたいだな、朝顔」

後悔するも時すでに遅く、最高のタイミングでのカウンターに糸巻が関心する。勇者の剣が龍の脳天へと激突し、竜の吐く炎が勇者の体を呑み込んだ。

魔界劇団―サツシー・ルーキー 攻1700（破壊）↓月影龍クイラ 攻2500↓1700（破壊）

「これでクイラの攻撃力はサツシー・ルーキーと同じになり、当然相打ちによる戦闘破壊が発生する。そしてファンタジー・マジックの効果は、相手が戦闘破壊された場合には不発となる……もつとも、今回は禁じられた聖槍で耐性が付与されたからどの道バウンスは通さないがな。月影龍クイラの効果、発動！月が大地に沈むとき、世界には再びの昼が訪れる。甦れ、太陽龍インティ！」

クイラの残された仮面がゆっくりと地平線の向こう側へと消えていき、それと入れ替わるように再び太陽の仮面が……そしてそこから伸びる、4本の赤い龍の首が何事もなかったかのように現れる。みるみるうちにまたしても明るくなってきた店内に、くつきりと魔王の影が色濃く浮かんだ。

『ですが、戦闘破壊されたのはサツシー・ルーキーも同じこと。効果発動！デツキより出でよ、魅力あふれる魔法のアイドル。魔界劇団―プリティ・ヒロイン！』

太陽が昇ると同時に勇者のいなくなったフィールドで魔王の隣に呼び出されたのは、緑色の髪をした魔法少女。手にした魔法の鞭をま

るで新体操のリボンのように巧みに操り、その肉球のような両手でポーズを決める。

太陽龍インティ 攻3000

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 守1000

「それで戦線維持したつもりだろうが、ここは一気に畳み込ませてもらう。永続トラップ、竜星の極み！このカードが存在する限り、相手モンスターは攻撃可能ならば必ず攻撃しなければならない。そこな嬢ちゃんには守備表示だから関係ない話だが、隣の花形にはそのまま突っ込んできてもらうぜ」

『ならば、ビッグ・スターで強制攻撃をいたしましょう。意気揚々と布陣を整えて勝負に挑んだ魔界劇団でしたが、結局このターンのうちに太陽と月の運航を捻じ曲げることは不可能に終わってしまいました。しかし、それは魔界劇団の一方的な敗北を意味しているのでしょいか？いえ、断じてそうではございません。再びターンが巡るかぎり、彼らは何度でも立ち上がり再起を図るでしょう！ですがそれまでしばしの間、我々は一時の敗北を認めねばなりません』

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500（破壊）↓太陽龍インティ 攻3000

鳥居 LP4000↓3500

漆黒のマントを広げ太陽の龍へと放った跳び蹴りはしかし、その本体へと届くよりも先に待ち構えていた龍の炎によって焼き尽くされた。

これで鳥居のフィールドには辛うじて生き残ったプリティ・ヒロインただ1人と、この状況では特に何かができるわけでもないPゾーンのカード2枚のみ。圧倒的に不利な状況で、残る手札はただ1枚。

『メイン2では何もいたしません。このままターン終了です』

「そうか。なら、このまま俺のターンだな？フィールド魔法、チキンレースを発動！このカードはターンプレイヤーが1000ライフを払うことで、3つの効果から1つを選択して発動することができる。俺が選ぶのは、1枚ドロウする効果だ」

朝顔 LP4850↓3850

最初の小競り合いで優位に立った朝顔が手にしたカードは、万能ドロースースであるフィールド魔法。このまま残していれば次のターン、鳥居もまたこの効果を発動することができる……だが2人ともすでに公開情報から、それが実現しないことを知っている。それは、使神官アスカトルのコストとして捨てられたネクロ・ガードナーと同様に死神官スーパイの効果を発動するために捨てられた1枚のカード。「墓地に存在する魔法カード、シャッフル・リボーンの効果を発動。このカードを除外することで俺のフィールドに存在するカード1枚をデッキに戻し、追加で1枚ドロースする。ただしこの効果を使うターンのエンドフェイズに俺は手札を1枚除外するデメリットが発生するがそんなもん、手札全部使い切って踏み倒しちまえばないのと同じだな……嬢ちゃんも、デュエリスト志すなら覚えときな。こういうのがデュエリストの腕の見せ所、テクニクってやつだからな」

「は、はいー!」

「オイこら朝顔、アタシの妹分に勝手に変な知識教え込むんじゃねえ」「おうなんだ巻の字、嫉妬か?」

「あん?」

ぎろりと据わった目で睨みつける糸巻とは対照的に、なぜか頬を赤らめてさりげなく立つ位置をずらし、より彼女へと密着する少女。一方でそんな昔馴染み同士の軽口についていけない鳥居はといえば、完全にアウエーの感覚を全身で味わっていた。

そんな彼に、おもむろに朝顔が向き直る。

「さて、と。なあ兄ちゃん、どうやらそろそろ俺の二つ名の理由……二色のアサガオの由来を教えてやるよ」

「由来……? はて、太陽と月の龍、その2種を軸とすることがその理由ではない、と?」

「それもある。だが、それじゃ50点つてとこだな。兄ちゃんも巻の字から聞いたことぐらいあるだろ? プロはデッキに2種類以上の戦術パターンを盛り込んで戦術に幅を持たせてたってな。俺も元プロ、当然その中の1人だった。だが神官のアスカトルとスーパイには、それぞれ効果発動ターンにシンクロ以外でエクストラデッキが使えな

い欠点がある。そしてこの2神官をうまく使えば、基本的に召喚権は余る。となれば、俺が何に活路を見出したと思う?」

『……?』

困惑する鳥居に答え合わせだと言わんばかりに朝顔がその手札から1枚のカードを取り出し、デュエルディスクへと置く。

「時間切れだ。永続魔法、Sin Territory発動!このカードの発動時、俺はデッキからフィールド魔法、Sin Worldを直接発動することができる」

この局面で唐突に発動されたフィールド魔法により、太陽に照らされたフィールドが赤紫色の星空へと様変わりする。インティとクイラによる輪廻から唐突なSinに、流石の鳥居も目を剥いた。そんな思い通りの反応に気をよくし、上機嫌な朝顔が得意げに口を開く。

「そうさ、これが俺の隠し玉。太陽と月の二色と、白黒二色の矛盾の仮面。さあ覚悟しな、Sinパラドクスギアを召喚、そのまま効果を発動するぜ。フィールド魔法が表側で存在する際にこのカードをリリースすることで、デッキからもう1体の歯車を特殊召喚したうえでそれとは別のSinを手札に加える。チューナーモンスター、パラレルギアを特殊召喚!」

Sin パラドクスギア 攻0

Sin パラレルギア 攻0

「相変わらずの大型揃いか。よくまあ、あんな重そうなデッキ回せるもんだ」

「俺に言わせりゃ巻の字、お前のデッキの方が大概だがな。アンワで種族サポートを腐らせて、バジエにドーハスーラにクリスタルウィング……よくあんな性格の悪さがにじみ出たデッキ臆面もなく回せるもんだ」

「お、お姉様を馬鹿にしないでください!」

「へいへい、悪かったな嬢ちゃん。パラレルギアをシンクロ素材にする場合、ルールとして他のシンクロ素材は宇手札のSinモンスターにする必要がある。俺は手札のドラゴン族レベル8、Sinスターダスト・ドラゴンに、閥属性レベル2のSinパラレルギアを

チューニング。太陽沈み月堕ちる時、表裏一体を混濁する冥府の龍がその瞳を開く。シンクロ召喚、冥界濁龍 ドラゴキュートス！」

白黒の仮面をつけた星屑の龍を、手足の付いた歯車の変化した2つの光の輪が包む。そして現れる第3のシンクロモンスターは先ほど沈んだ月の龍を、そして現在もなお天頂に浮かぶ太陽の龍をもはるかに凌駕する圧倒的な巨体の持ち主だった。その腹には頭部とは別にもう1つの巨大な口が開き、かすかに息を吐くと空気の流れと共に大量の瘴気が周りの空気に散布される。

それは太陽も月も関係ない、死の世界より来たる龍。互いが互いを蘇生するインティとクイラのコンセプトに真正面から抗いながら、そのどちらの要素も内包するもう1体のドラゴン。

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4000

「さて、そろそろ終わりじゃないか？バトルフェイズに……」

「いえ。確かに以前までの私であれば、この状況を覆すことは不可能だったでしょう。ですがデッキとデュエリストは、常に進化を繰り返すもの。今の私のこの手には、この危機的状况に対する回答が握られています！」

「何?！」

絶体絶命のピンチにも、鳥居はにっこりと笑う。彼の手に存在する、最後の1枚となるカード……しかしそれを表にする前に、敬意を表すべく深々と優雅な動きでお辞儀する。

「まずはこの場をお借りして、チャンピオン……妖仙獣使いの強敵であつたロベルト、後ろ帽子バックキャップのロブへとお礼申しあげておきましょう。あなたがあの時私のデッキの力を見抜き、その補強のためにくださった1枚のカード。その真の力、今こそこの舞台にてお見せいたしましょう！メインフェイズ終了時に手札より、ホップ・イヤー飛行隊の効果を発動！私のフィールドに存在するモンスター、プリティ・ヒロインを選択してこのカードを特殊召喚し、さらにその2体のみを素材としてシンクロ召喚を行います！それではご登場いただきましょう、これが私の新しい仲間！蒼穹の世界飛び交う小隊、ホップ・イヤー飛行隊！」

2体のドラゴンが支配する戦場に、突如3つの影が空の彼方から舞い降りた。それは、長い耳を翼代わりに自由自在に空中を高速飛行する獣人たちの部隊。この危機的状況を唯一どうにかするだけの力を秘めた、チャンピオンからのもらい物のカードである。

「ロボの野郎、いらんことしやがって……！」

「そちらがあくまでシンクロで攻め込むというのであれば、私も同じ土俵に立って立ち向かうのが筋というもの。まだ私の星落としての演目は、終わったわけではございません。レベル4のプリティ・ヒロインに、レベル2の飛行隊をチューニング！幻界巡りし化天の翼、メタファイズ・ホルス・ドラゴン！」

太陽と死の龍を前に立ち塞がるように、ほのかに光り輝く純白の翼が力強く広げられる。2体の龍よりもずっと小さな存在でしかないその幻竜は、しかしその威圧感にも怯むことなく対峙する。

☆4＋☆2＝☆6

メタファイズ・ホルス・ドラゴン 攻2300

「俺のターンにメタファイズ・ホルスカ。厄介なことしてくれるぜ」

「幻竜とはすなわち、ドラゴンの魂より生まれ出でてその幻界を突破した存在……そう、ドラゴンを越えるために！メタファイズ・ホルス・ドラゴンは、そのシンクロ素材となったチューナー以外のモンスターの種類によつて異なる効果を発揮いたします。プリティ・ヒロインはペンデュラムカード兼効果モンスター、よつて発動される効果は2つ。アセンション・ダブル・ウェーブ！」

ますます強くなる純白の光を放ちながら、メタファイズ・ホルスが高く高くに飛び上がる。光の軌跡を後ろに引き、輝きが太陽と死の龍を照らしてくつきりとその影を地面に落とした。

「まず効果モンスターを素材としたことで、相手フィールドのカード1枚を選択してその効果を無効とする力。私が選択するのは、ドラゴキュートスです！」

「ちっ……止められないな」

「そして本命、ペンデュラムカードを素材としたときの効果。相手は自分フィールドのモンスターを1体選択し、そのコントロールをこち

らに渡さねばなりません。さあ、どちらを選択なさいますか?」

ここで重要なのは、あくまでもコントロールを渡すモンスターを選ぶ権利は朝顔の方にあるという点である。一見それは選択のようにも見える……しかし実際のところは問われるまでもなくそんなこと決まりきっており、それは鳥居自身も百も承知である。

「ほらよ、行ってきな。太陽龍インティのコントロールを移す!そしてバトルフェイズ、ドラゴキュートスで太陽龍インティに攻撃!」

効果が無効になろうとも、その攻撃力は損なわれていない。冥界の龍が、メタファイズの光に幻惑されて軌道を変えた太陽へと裁きの一撃を下す。

冥界濁龍 ドラゴキュートス 攻4000↓太陽龍インティ 攻3000 (破壊)

鳥居 LP3500↓2500

「札を言うぜ兄ちゃん、わざわざコンボの成立を手伝ってくれてな。この瞬間に太陽龍インティの効果が起動する。このカードを戦闘破壊したモンスター、つまり俺のドラゴキュートスはそのまま破壊され、相手プレイヤーにその攻撃力の半分だけダメージを与える!」

沈みゆく太陽が地平線の向こう側に消え去る寸前、その首の1本がおもむろに伸びてドラゴキュートスの首筋に噛みつき共に引きずり込む。そしてほんの1瞬だけ、朝顔のフィールドからモンスターが消えうせた。

鳥居 LP2500↓500

「鳥居さん!」

「だが、こうしなきゃアイツのライフは今のターンで消えてたからな。結果的にドラゴキュートスも勝手に消えてくれたわけだし、消費の重さにさえ目をつぶりやあ今のがベストな手だ」

大幅に減ったライフに悲鳴を漏らす八卦とは対照的に、糸巻の視線はあくまで冷静なままだ。事実彼女はこの時、特に鳥居の心配はしていない。確かに彼の手札はこれで0だが、それは朝顔も同じこと。そして鳥居にはまだ、1と8を示したままのペンデュラムスケールが存在する。致命傷を負いライフ差こそ大きく開いたものの、見た目より

も戦況は悪くない、そう彼女はこの状況を分析する。

彼が本当のデュエリストならば、ここでこのまま押し切られるような真似はしないはずだ。普段辛口な彼女ではあるが、それでもこの部下が本物のデュエリストであることに關しては、全く疑いを持つてはいなかった。

「仕留めきれなかったのはもうしようがねえな、やるだけのことはやった。ターンエンドだ、ターンエンド」

「『それではこれにて私のターン、ドロロー！』」

「スタンバイフェイズ、破壊されたインテイの効果により墓地のクイラを蘇生する。太陽が大地に沈むとき、東の間の黄昏を経て夜が世界に訪れる。甦れ、月影龍クイラ！」

そして再び、フィールドに薄闇が訪れて月の仮面と青き龍が天頂へと昇る。その姿と今引いたばかりの手札を見比べ、わずかな沈黙のち……鳥居は、大きく息を吸い込んだ。わずかな溜めの期間を置き、あくまでも明るい調子を崩さずに口を開く。

月影龍クイラ 攻2500

「『再び月が昇り、夜が訪れ……そして我らが魔界劇場も最終日、星落とし作戦最後の一日がやってまいりました！星々の輪廻には散々てこずらされてきましたが、この長きにわたる戦いにもこのターンをもつて幕を下ろすと致しましょう。ですが、こちらもそれなりに疲弊していることは否定できません。まずは、星を落とすための下準備が必要となりますね。最初に来たるはこのカード、舞台を回す転換の化身。魔界劇団カーテン・ライザーを召喚！そして彼自身の効果によりデッキから魔界台本「火竜の住処」を墓地に送ることで、エクストラデッキより再びビッグ・スターを回収いたします』」

「やっぱり何か思いついたみたいだな。さーて、どう逆転する気かね」
満足げに呟く糸巻の前で、カラフルなテントに顔と手足が生えたような異色の演者が召喚されてメタファイズ・ホルスの横に並ぶ。

魔界劇団カーテン・ライザー 攻1100

「『ここで私はエクストラモンスターゾーンのメタファイズ・ホルス・ドラゴンと、今しがた召喚したカーテン・ライザーの2体を左下、及

び右下のリンクマークにセット！リンク召喚、電腦駆けるデータの翼。LANフォリンクス！』

LANフォリンクス 攻1400

「まずはマーク確保か。まあ、メタファイズ・ホルスが居座ったままじゃ何もできないしな」

『セッティング済みのスケールは1、そして8！ペンデュラム召喚、エクストラデッキから再びサッシー・ルーキーとプリティ・ヒロインを、そしてクライマックスともなれば、なんととってもあの花形は欠かせません。手札からはもう1度、ビッグ・スターの登場です！』

魔界劇団―サッシー・ルーキー 攻1700

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

そして用意したリンクマークをフルに活用して呼び出される、3体の魔界劇団。だが、まだその展開は止まらない。彼の思い描いた星落としのシナリオは、この3体が出揃った今もなおその途上にあつた。

『ビッグ・スターの効果発動！再びデッキより、魔界台本「魔王の降臨」を再上演！3種類の団員が存在することで破壊可能なカードは3枚、私はこの効果によってSin Territory、そして月影龍クイラを破壊します！』

「クイラを選ぶとはいい度胸だ。明日が来ればまた日は昇るって、裏デュエルコロシアムの時に青木のおっさんから聞かなかつたのか？ 甦れ、太陽龍インティ！」

魔王の一撃が赤紫色の宇宙空間そのものを揺さぶり、その頂点に浮かぶ月の龍を陰らせる。再び沈んでいく仮面と入れ替わりに、つい先ほど沈んでいったばかりの太陽の龍が蘇った。

太陽龍インティ 攻3000

「さあ、望みどおりに蘇生してやったぞ。それで次はどうする気だ、兄ちゃん？」

『ならばもう1度申し上げましょう、私の今回の演目は星落とし。なるほど、確かに太陽と月の龍の不死性は恐ろしいものでした。しかし

その力も、決して無尽蔵に使えるものではございません。ここで魔界劇団の心強き仲間、更なるゲストをご紹介いたしましょう」

「ゲスト？」

オウム返しに聞き直す朝顔に対し芝居っ気たっぷりにウインクし、おもむろに高く掲げた指を打ち鳴らす。それを合図に、ビッグ・スターの左右に陣取った2人の団員が飛びあがり空中で交差する。

「私のフィールドに存在する、闇属性ペンデュラムモンスターであるサッシー・ルーキー及びプリティ・ヒロイン。この2体のモンスターをリリースすることで、このカードはエクストラデッキより特殊召喚できるのです。さあ満を持して今こそ出でよ、融合召喚！千の顔持つ蟲毒の竜！霸王眷竜スターヴ・ヴェノム！」

そして重々しい音とともに着地する、緑のラインが毒々しく光る紫毒の龍。その攻撃力ははるか上空にまで上り詰めた太陽にはいまだ届かない……しかし、その瞳は一步も引くことなく直上に輝く太陽の龍を見据えていた。

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2800

「スターヴ・ヴェノムは1ターンに1度互いのフィールド、もしくは墓地に存在するモンスター1体を指定することでその効果および名前を得ます。そして今回私が選ぶのは、その隣に立つ我らが花形。ペルソナ・チェンジ……ドラゴンライダー・ビッグ・スターヴ！」

まるで鳶のような触手を背中から真横に伸ばすスターヴ・ヴェノムに、それをタイミングよく掴んで飛び上がるビッグ・スター。再び体内に猛スピードで収納される触手をロープ代わりにその動きに合わせ宙を舞った花形が、正確にその紫色の背中に飛び乗った。

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム↓魔界劇団ービッグ・スター

「ビッグ・スターとスターヴ・ヴェノムが……合体した!？」

「落ち着け八卦ちゃん、ただの演出だ。あとあの乗っただけっぷりはどっちかつつーと融合だな」

彼曰くドラゴンライダーと化して人馬一体となった2体のモンスターとの共闘に、まんまと彼の演出に乗っかった八卦が興奮して叫ぶ。一方でさすがにプロとしての経歴も長い2人はこのように小手先

の演出には引っかけりはしないが、それはそれとしてデユエリストとしての本能が目を見守ることなくこの経過に興味深げに見続けた。

「さあ、今こそがクライマックスです！ドラゴンライダー・ビッグ・スターヴの効果を発動してデッキより最後の1枚、魔王の降臨を再々上演！たとえ道半ばにして仲間が力尽きようとも……いえ、それだからこそ、竜の力を得て真なる魔王と化したビッグ・スターは決して目的を諦めません。魔王の暴威は空に浮かびしあの星を落とすまで、何度でもフィールドを吹き荒れます！この局面にて魔王の選びし対象は当然、太陽龍インティ！」

「ちいっ……いっ……」

太陽と月の蘇生コンボには破壊以外の除去に弱いというほかにもう一つ、ほんのわずかな隙がある。それが、インティとクイラの効果にあるごく小さな違いである。破壊された場合に即座にインティを呼び戻すクイラと違い、インティ側の蘇生能力には破壊された「次のスタンバイフェイズ」というタイムラグが存在する。

しかしそれは本来、プレイングによつては十分にカバーできる範囲のもの。現に先ほどのターン、朝顔は鳥居が敗北を回避するために使わざるを得なかったメタファイズ・ホルス・ドラゴンの効果を逆手にとつてインティを送り付け、ドラゴキュートスで戦闘破壊することで特大の効果ダメージを与えつつ次のターンを蘇生したクイラで迎え撃つという理想的な流れを見せつけた。当然相手からの効果に頼らずとも、彼のデッキには能動的にインティを破壊してクイラに繋ぐカード、あるいは空いたフィールドに自分からクイラを蘇生し次なる破壊に備えるカードは盛り込まれている。

しかし今この場においてそれらのカードは存在せず、あるのは太陽も月もないぽっかりと空いた空間のみ。星落としては、ここに成就した。

「それでは最後のバトルフェイズと参りましょう。まずはLANフォリンクスによるダイレクトアタックです」

LANフォリンクス 攻1400↓朝顔(直接攻撃)

朝顔 LP3850↓2450

『そして最後を飾るのは、やはりこうでなくては締まりません。ドラゴンライダー・ビッグ・スターヴによるファイナーレの一撃……竜王のフルスロットルオベーション！』

上に乗った魔王がそのマントをはためかせ、スターヴ・ヴェノムが両足で力強く地を蹴って走る。上空からは光の柱でデビル・ヒールとファンキー・コメディアンがエールを送る中、最後に大きくジャンプしての人竜一体となって紫色の炎を纏っての突撃が真正面から朝顔に命中した。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2800↓朝顔（直接攻撃）

朝顔 LP2450↓0

「はー……勝ちましたよ糸巻さーん」

「おう」

演劇の時間は終わり、また素に戻ってのやる気のない勝利宣言に対しこれまたやる気のない返答。普段は真逆のくせにこういった妙なところだけ同調する2人に、デュエルディスクの電源を落とした朝顔がなんとも言えない表情を向ける。

「いやもつと喜べよお前ら、俺だぞ俺。二色のアサガオに勝ったなんて、一昔前ならそれだけで少しは自慢できるレベルだったんだぞ」

「うるせー時代錯誤のテロリスト。ほれ、用が済んだなら負け犬は帰った帰った」

未練がましい言葉にも、しかし糸巻はしっしつと野良犬でも相手するかのようには手で追いついて追いつく。仮にも敵対する組織の、それも「BV」をナチュラルに持ち歩く重犯罪者にもかかわらず身柄拘束といった発想が一切出てこないのは、基本的に何かフォロワーの入れようのないことをやらかすまでデュエリストに対しその重い腰を上げようとしないうちに、彼女なりの元同業者への甘さのなせる業だった。あるいはそれだけ、道は違えどかつての仲間がデュエルモンスターズを悪用などしないということを感じているのかもしれない。

そんなぶつきらぼうな態度から見え隠れするどこまでも甘い彼女の一面を見抜き、朝顔は苦笑いして肩をすくめる。

「へいへい、んじゃ帰りますかね。デュエルポリスとかち合って負けてきたって言っとけば最低限の格好はつくだろうさ。ただ巻の字、できればその遊野なんちやらにはあんま目立つ真似すんなよって伝えといてやってくれ。後始末押し付けられるのは俺らだかな」

「気が向いたらな。アンタの方こそ、もしどっかで巴の奴に会ったら伝えといてくれ。アタシがバーカ、こう言ってたってな」

「巻の字、お前なあ……そんな小学生でも今時やらないような伝言押し付けられる40過ぎのオッサンの気持ち、少しでも考えたことあんのか？ま、気が向いたら言っというてやるよ。んじやな、嬢ちゃんも元気でな」

「はい！今日のデュエルも大変参考になりました、ありがとうございます！……」

「……やっぱ調子狂うなあ。巻の字、この嬢ちゃんにはあんまろくでもないこと教えるんじゃないぞ」

その言葉を最後に、いつの間にかすっかり日が落ちて夜になっていた店の外へと朝顔が出ていく。なんだか疲れが押し寄せた鳥居が大きく息を吐くと、それを合図にしたかのように少年の顔がぴよこつと覗く。

「あ、ぼちぼち終わった？ご苦労様」

「清明？あれ、お前今までどこにいたんだ？」

「外。さっきの人に捕まると大変面倒くさいことになりそうだったからねー」

なんてこともないようにそう述べる彼だが、その状況判断の早さに糸巻は内心うんざりしていた。現状はかなりの要注目人物であると評さざるを得ない言動にもかかわらず、今の逃げ足。ということとはつまり、もし彼が精霊に関する妄想癖を拗らせた結果何かをやらかして彼女たちが捕まえる羽目になったとしても、あの危機回避能力をフルに生かして逃げ回られる可能性があるということだ。

つくづく、面倒なことに首を突っ込んだものだ。改めてそのことを

実感し、糸巻もまた腰を下ろしていた机から立ち上がり出入口へと向かう。この後に何が起こるのかを考えるだけで、煙草を吸わずにはいられなかった。

ターン14 鉄砲水と手札の天使

「じゃ、ぼちぼち行こつかな。んで、おねーさんたちはどうするのかね」

突如現れた朝顔が再び出て行つてから、およそ一時間が経過した。何とはなしに壁にかかった時計を見上げた清明がそろそろ頃合いかと、背伸びしつつ探るような視線を向ける。

「わ、私もご一緒します!」

「アタシも。乗り掛かった舟だ、もうちよい付き合つてやるよ」

「俺も。行きたくはないけどしようがないしな」

返つてきた三者三様の答えに小さく頷き、ふらりと身を翻す。ついてきたければご自由に、ということなのだろう。

「んじや爺さん、姪っ子は重要参考人としてちよいと借りてくぜ」

「おや。天下のデュエルポリス様がそう言うのなら、この老体に反発する気はないよ」

「頼むからやめてくれ、爺さん」

「ひひひ、冗談さね。とはいえ九々乃、今は何かと物騒だからね。こんな時間に出歩くんた、絶対に一人にならないように。いいかい?」

「はい、おじいちゃん……そうだ!」

糸巻の知るその現役時代からつかみどころのない老人ではあったが、その姪に対する愛情は本物なのだろう。かなり真面目な忠告に当の少女も神妙に頷き、直後にさも名案を思いついたとばかりの笑みでとてとてと糸巻の隣に行きその手を伸ばす。

「あん?どうした、八卦ちゃん」

「手を繋ぎましょう、お姉様!私が迷子にならないように、です!」

「え、ええ……?」

いやそれはおかしいだろう。喉まで出かかった言葉を糸巻が寸前で呑み込んだのは、そのあまりにきらきらとした瞳に見据えられたせいだった。さも自信満々に、さあ名案でしょう褒めてくださいお姉様!と言いたげな少女の瞳。自分にはとつくの昔に失われた若さと、生まれた時から持ち合わせていなかった純真さ。自分がないものをま

じまじと見せつけてくるようなこの瞳に見つめられると、どうも彼女は調子が狂う。

結局今回も、のろのろとした動きながらも彼女は自分から差し伸べられた少女の手を取るのだった。

「おふたりさーん、イチヤついてるなら置いてくよー?」

若干の苛立ちを含んだ催促にそれ以上の追及を諦め、満面の笑みと共にがっしりと握り返された自分の手を見つめる糸巻。ため息をひとつ呑み込んで、代わりにこう言うのだった。

「……んじゃ、ま、なんだ。行くか、八卦ちゃん」

「はい!おじいちゃん、行ってきます!」

「さて、と。んじゃ、始めてみますかね」

再び廃図書館に辿り着いて警報装置を切り、先日とは異なりかつての正面入口から堂々と中に入る一行。小さく呟いた清明が取り出したのは、なぜかその言葉とは裏腹に自らのデッキだった。同時に、左腕につけた青い腕輪の一部を押して例の謎技術を用いられたデュエルディスクを展開する。

「おい、何やってんだ?」

そんなちぐはぐな言動を見とがめた鳥居に指を1本口元に立てて黙らせ、パラパラと自分のカードをめくりお目当てらしき1枚を引つ張り出す。好奇心を抑えきれずにその手元を覗き込んだ八卦が、その名前を読み上げる。

「幽鬼^{ゆき}うさぎ……ですか?知ってますよ、レアカードですね」

「そ、いいでしょー。まあレア度はなんでもいいんだけど、女の子の精霊ならやっぱ女の子が適任かなって。おいで、うさぎちゃん」

朗らかに呼び寄せながら探し当てた幽鬼うさぎのカードをモンスターゾーンに置くと、彼の頭上に現れた長い銀髪のと装少女が得物の鎌を片手に一回転しながら着地する。無言で一礼するその身長はこの4人の中では一番背の低い八卦よりもさらに小さいが、血のように赤いその瞳はその体の小ささや華奢な体格から生じる第一印象を打

ち消してなお余りあるほどの凄みを放っていた。

「やつぱり……この感覚は間違いないね。ここには間違いない、カードの精霊がいる。ねえうさぎちゃん、昔を思い出すねえ。あのデュエルアカデミア古井戸の底、はるばる君に会いに行った時も、ちょうどこんな感じがしたもんだ。ただ今回はあの時と違って、それなりに緊急事態だからさ」

「さつきからお前、何ぶつぶつ1人でやってるんだ？」

「どうも、ね……確かに例の精霊ちゃんもこの辺のどこかにはいるんだけど、あんまり人には会いたくないのかな？細かい場所まで探れないからさ。同じ精霊の感覚なら、もうちよつと絞り込めるんじゃないかと思ってね。そういうわけで頼むよ、うさぎちゃん」

その言葉に小さく首を縦に振った幽鬼うさぎが、その名の示す通りの兎さながらに周囲をきよきよと見まわしては耳をそばだてる。ややあつて彼女が無言で指さしたのは、2階へと続く階段だった。

「そういえば……」

少女が思い出したのは、初めて例の幽霊と遭遇したあの1瞬の時である。あの時も半透明の幽霊少女は、こちらの姿を認識するや否やすぐに2階へと駆け出していった。その時に後を追おうとした少女の前に立ち塞がったのが、朝顔と夕顔のタッグである。

「じゃあ行くこうか……あーいや、またお客さん？本当にもう、どうなつてんのこの町は」

ぼやきながらも彼が振り返ったのは、彼らが入ってきた正面入り口とは別にある裏手の従業員入り口のある方角。ちようど八卦も先日の侵入ルートとして使用した、鍵のかかつていない小さなドアのある方向だった。慌てて少女もそちらの方に視線を向けると、すでにデュエルポリスの2人もデュエルディスクを構えて臨戦態勢に入っている。両者ともにいつもの軽口も出てこないところに、その「お客さん」への警戒の高さが感じられた。

そして4つの視線の見つめる先から、ゆつくりと1つの人影が歩み寄る。本棚の影の暗闇にまぎれて視認できなかつたその姿も、足音が大きくなるにつれて窓から差し込んだ月明かりに照らされその足元

から浮かび上がった。その顔を見て、糸巻が忌々しげに吐き捨てる。「なんだなんだ、アンタの面なんぞ拝むなんて今日は厄日か？なあ、おきつねさま。巴光太郎さんよ」

「狐は神獣であると同時に、凶兆の獣でもありますからね。学のない貴女にしては、存外知的な発言ですね。そして知的という概念は、貴女には似合わないことこの上ない。ねえ、赤髪の夜叉。糸巻太夫さん？」

にこやかな笑みを浮かべながら現れたその男が、自分を見つめる視線をぐるりと見渡したのちにゆっくりと一礼する。しかしその目を真正面から見た時、八卦は背筋も凍るような思いがした。一見慇懃にも見えるその態度や口元の笑みは、全て仮面に他ならない。少女は知らない。この男がつい先日 of 裏デュエルコロシウムを巡るデュエルポリス達の戦いにおいて、妨害電波の通用しない新たな「BV」と実体化するカードを武器に糸巻と文字通りの死闘を繰り広げ、実際に彼女を後1歩のところまで追いつめた男だということを。

しかし、その叔父譲りの人間を見極める目は本物である。その目ざとい感覚は、事前知識のない少女にも目の前の男が根からの危険人物だと全力で警鐘を鳴らしていた。

「お、お姉様、この人」

「わかるか、八卦ちゃん。これはアタシの昔の同業者だが……めんどくせえ奴と鉢合わせたもんだ。いいな八卦ちゃん、絶対にアタシの後ろから出るんじゃないぞ」

おきつねさま……巴からは片時も目を離さないままに、糸巻が繋いだままの手をぐっと引っ張って少女の体を自分へと近づける。握られた手から伝わる心臓の鼓動から、彼女の緊張が少女にも伝わってきた。

そして睨みあう元プロデュエリスト2人の視線を断ち切るかのように、鳥居がその間へと強引に割り込む。

「巴光太郎、名前だけは聞いたことがあるぜ。『糸巻さんと並ぶぐらい腕は立つくせに』、性格はとんでもない地雷野郎だつてな」

それだけ吐き捨てて1瞬だけ振り返り、真後ろの糸巻へと必死のア

アイコンタクトを送る。彼の言わんとすることを阿吽の呼吸で察知した糸巻は、視線は外さないままにじりじりと階段の方へと後ずさり始めた。

これは、鳥居が咄嗟に編み出した作戦だった。彼も事後処理の一環で、あの裏デユエルコロシアムで彼が暴れている間に糸巻が何をしていたのかはすでに聞いている。巴の糸巻に対する異様な敵対心と憎悪についても、無論彼の知るところだ。それゆえに彼は今、わざと糸巻の名を引き合いに出したうえで挑発した。巴光太郎という人間が彼の聞いた通りの男であるならば、糸巻と対比したうえでどちらが上ともつかせないようなセリフは何よりも堪えるはずだ。

果たして、その挑発は成功した。眉間にしわを寄せ、あからさまな敵意の乗ったその視線の向く先が糸巻から彼へと移る。

「ああ、誰かと思えば擬態の新人、最後まで自分の正体が秘密のままだと思っていた公権力の犬ですか。どうです、先日の賞金は？何か有意義な使い道は見つかりましたか？例えばそう、昔のごっこ遊びのお友達と旧交を温めるような」

「この野郎、今なんつった……！」

どうやら煽り合いは、巴の方が一枚上手だったらしい。的確に神経を逆なでする挑発の叩き返しに、怒りが瞬間的に膨れ上がる。辛うじてその場での爆発だけは堪えたものの、歯を食いしばって睨みつける目にもそれまで以上の力がこもる。

「糸巻さん、八卦ちゃん、それとそこの。この野郎は、俺が相手します！」

「ちっ……無茶すんなとは言わないからな。よしいいか鳥居、差し違える気で死ぬ気で喰らいつけ！」

言い争う暇はないと判断し、糸巻にしては珍しくあっさりと彼の案に乗る。それは逆に言えば、それだけ巴の存在を重く見ているということの証左でもあった。ともかくそれだけ言い残し、くるりと身を翻して八卦の手を引き階段を駆け上がっていく。清明も空気を読んだらしくその後ろに続いていくのを視界の端で見送ったのち、改めて2人だけとなった戦場で戦士たちは向かい合った。

「一応聞いておこうか、テロリスト。何の用があつてここに？」

「それは無粋な質問ですね。人間の技術力は、ソリッドビジョンに肉体という器を与えることに成功した……しかし、傀儡はあくまで傀儡でなくてはならない。我々が欲しいものはこちらの意思を遂行する人形であつて、自らの力で考える兵士ではない。いかなる理由があつて意志を持つカードなるものが生まれたのか？それを知ることがすなわち、その発生源に蓋をする方法の第一歩ですよ。ここで目撃された「幽霊」はイレギュラーな産物ではありませんが、同時にその突然変異へ至つた原因を突き止めるにはきわめて興味深いサンプルです」

「まあぺらぺらとよく喋る、確かに糸巻さんは嫌いそうなタイプだ……『それでは、残念ながら観客は0といささか盛り上がり欠ける舞台ではございますが。鳥居浄瑠のエンタメデュエル、本日はその目に焼き付けてお帰り願ひましょう！』」

デュエルディスクをほぼ同時に構え、暗い廊下で視線が交差する。外では月に雲がかかったのか、すつと射し込む光が弱まった。そしてそれを合図にしたかの如く、2人の声が響いた。

「デュエル！」

一方、2階へと駆け上がった糸巻らは。この廃図書館の間取りは階段を上げれば横に伸びる廊下があり、かつては読み聞かせなどのイベントが行われていたのであろう小部屋に繋がる扉と2階の大部分を占める閲覧室の大きめに分けて2つの部屋がある。

「ぐわーっ!？」

ちょうど階段を上り終えた彼女の目の前で、閲覧室側の扉を吹き飛ばして人間の体が部屋の内側から吹き飛ばされる。そのまま背後の本棚に勢いよく激突したその体は、大量の埃を巻き上げて一時的に視界を遮る。

「おいアンタ、どうした？大丈夫か……って、おいおい」

「えっと、脈はあるね。頭を打って気絶してるから当面は起き上がりませんよーと。何、おねーさんの知り合い？」

「まあな。アタシもあんま知らん奴だけど、一応は元同業者だ。つまりプロ崩れのテロリストだな。デュエルディスクが起動中つてことは、誰かとデュエルしてたのか」

倒れたままピクリとも動かない人影に駆け寄って生命の無事を確かめ、ついでその腕で起動したままのデュエルディスクに目をやる。そのライフポイントが0を示しているところからしても、ちょうど敗北の瞬間に立ち会ったらしい。

ならば問題は、その相手である。そして誰よりも早い反応を見せたのは、いまだに清明が召喚しっぱなしにしていた幽鬼うさぎだった。赤い目の光と宙に浮かぶ人魂の炎の軌跡を後に引き、辛うじて目で追いかけるのがやっとのスピードで開きっぱなしの小部屋へと飛び込んでいく。その姿を見てすぐさま立ち上がった清明がその後が続いたのを見て、慌てて八卦も糸巻の手を引き後に続く。そこに、彼女はいた。

「あなたは……！」

それは、昨夜に八卦の見たままの姿だった。ただし先ほどの男が持っていたのであろう「BV」の影響か、その体は以前のように透けてはいない。ほのかに青みがかかった癖のない銀髪も、全体的にやや大きめでその小さな体にはいささか持て余し気味な修道服も、誰が見てもいっばいいいっばいなことが見て取れる張り詰めた表情やそれに相応しい今にも決壊しそうなほどに涙を湛え潤んだ大きな瞳や、その左腕に装着されて起動したままのデュエルディスクも、その全てが実態をもつてここにいる。

そんな少女を目を細めて見つめた糸巻が、ややあつてポツリと呟いた。

「儂^{はな}無みずき、だな」

「え？」

「あのモンスターの名前だよ。見覚えがある、確か爺さんのカードショップにも1枚売ってたはずだ」

そう言われ、改めて目の前で警戒もあらわにする精霊少女を見る。確かにあの姿は、少女にも店の手伝いをしている最中に見たことがある。

るような気がしないでもない。しかしそんな精霊少女の存在に誰よりもほっとしたような表情を浮かべたのは、他ならぬ清明だった。「みずきちゃん、ね。やっと見つけた、会いたかったよ。とりあえずうさぎちゃん、説得ゴ―」

おそらく、先ほどの男は下の男ともこの儂無みずきを狙い、それを精霊少女が返り討ちにしたのだろう。となると今の段階では人間の話など聞く耳持たないだろうと、傍らの幽鬼うさぎの頭にポンと手を乗せる清明。すぐさまその仕草に込められた普段から自分で何でもやりたがるこの主には珍しい行動の意図を察し、愛用の鎌を手にしたままに和装の少女が歩を進める。

「……!」

「……」

あからさまに身を震わせたものの、相手が同じ精霊であると感じ取ったのか逃げ出そうとまではしない儂無みずき。無口な精霊同士の声なき会話を、3人の人間は蚊帳の外からなんとはなしに黙ったままに見つめていた。

「……?」

「……!」

そして短い会話は終わり、とてとてと踵を返した幽鬼うさぎが清明の元へと戻る。足元まで来て主を見上げ、何かを伝えようとするのに小さく頷く。

「アンタ、そっちは何言ってるかわかるのな」

「もうだいぶ付き合い長いからね、なんとなくは言いたいこともわかるのよ。最悪、うちの神様が通訳やってくれるしき。ふんふん、なるほどねえ」

「えっと、幽霊さん……じゃない、精霊さんはなんて言ってるんですか？」

「こつちの言い分はわかったけど、まだ信用はできないとき。よつぽど人間不信が強いみたいね、こりや。んで、それから?どこまで本気か見極めたいから、私とデュエルしろって?いいねいいね、メルヘンなのも嫌いじゃないけど、そういう武闘派思考は歓迎するよ。お疲れ

さま、うさぎちゃん」

ぺろりと唇を舐め、デュエルディスクから幽鬼うさぎのカードを戻しつつそのまま構える清明。同時に、精霊少女もまた自分のデュエルディスクを構えていた。

「それじゃあ、デュエルと洒落込もうか。下の様子も気になるし、手加減抜きでいかせてもらおうよ……デュエル！」

「……」

そして先攻を取ったのは、儚無みずきからだ。糸巻も下でただ1人足止めをしている鳥居の様子は気にかかったものの、今は完全に伸びているとはいえないこの階にもいつ目を覚ますかわかったものではないテロリストからの刺客がいる以上は下手に八卦を置いていくわけにもいかない。手錠や警棒といった道具の類は、全て下にいる鳥居が持っているため今の彼女は肌身離さず持ち歩いているデュエルディスクとデッキ、そして煙草の他はほぼ丸腰だ。かといって巴という男の危険性と以前対峙した新型の「BV」を今回も手にしている可能性を考えると、民間人の少女を下までまた連れて行くのはもつと論外である。

結局はどうすることもできず、取り出した煙草に火をつけて目の前で始まったこのデュエルが終わるのを見ているしかなかった。彼女にとつては幸いなことに、今でも鳥居が下で頑張っていることは辛うじて下からの喧騒でわかる。何を話しているのかまでは聞き取れないが、彼なりのエンタメデュエルで巴相手に渡り合っている。

「……」

そして儚無みずきが最初に召喚したモンスターは、青い鎧に身を包み槍を持つ1人の戦士。

竜魔導の守護者 攻1800

「竜魔導の守護者……融合テーマ、ですかねお姉様」

同意を求めると見上げてきた少女に、そうだなと短く返す。竜魔導の守護者は融合に対し便利な効果を2つも兼ね備えているものの、反面その効果を発動するターンには融合モンスターしかエクストラデッキから特殊召喚できないという重い制約を持つからだ。

そして主の声なき声に竜魔導の守護者が応え、手にした槍を床に突き立てる。するとその地点を中心とした魔導陣が展開され、中心から1枚のカードが浮かび上がり少女の手元にそっと届けられた。それを見て、今度は清明がその行為を誰に聞かせるともなく代弁する。

「竜魔導の守護者の効果で手札を1枚捨てて、デッキから融合かフュージョンの魔法カードをサーチした、ってわけね。それで、選ばれたのは簡易融合と」

「……！」

サーチ後にすぐさま発動された簡易融合のカードは、融合召喚に必要な下準備をすべて省き融合召喚を行うことができる代わりに発動時に1000のライフコストが必要となる。いきなり初期ライフの4分の1もの数値をためらいなく支払ってまで呼び出されたのは、オレンジ色のドラゴンとその上にまたがるトカゲの戦士だった。

儂無みずき LP4000↓3000

ドラゴンに乗るワイバーン 攻1700

「……」

仕上げとばかりに発動される永続魔法、補給部隊。そこでターンを終えたらしく、エンドフェイズを迎えたドラゴンに乗るワイバーンは簡易融合のデメリットによって破壊される……だがその破壊をトリガーとして補給部隊の効果が発動し、すぐさま少女はその損失を取り戻す1枚のカードをドロウする。同時に、墓地から角と鱗の生えた龍の仙人のようなモンスターが座禅を組んだ姿勢のまま浮かび上がる。

霊廟の守護者 守2100

「簡易融合の自壊を逆手にとつて補給部隊だけじゃなく、墓地から霊廟の守護者まで蘇生したか。ありや確か、自分のドラゴン族が戦闘か効果で墓地に送られるたびに何回でも出てくる奴だったな。随分面倒な壁を初手に引かれたもんだ」

「だとしても、僕のやることは変わらないね。壁が何回でも出てくるなら、何回だって食い破ってやるまでさ。僕のターン、ドロウ！さあ来い、水精鱗——ネレイアビス！そして僕のフィールドに水属性モンスターが存在することで、サイレント・アングラーを手札から特殊召喚

……そしてこの特殊召喚をトリガーに速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！攻撃力1500以下のモンスター1体の特殊召喚をトリガーに、デッキからさらに2体のアングラーを攻撃表示で特殊召喚。ただしこの時に相手もモンスター1体を選択して、可能な限り手札、デッキ、墓地から同名カードを特殊召喚できる」

水精鱗―ネレイアビス 攻1200

サイレント・アングラー 守1400

サイレント・アングラー 攻800

サイレント・アングラー 攻800

「……」

霊廟の守護者と、竜魔導の守護者。2体の守護者を見比べた儂無みずきが選んだのは、竜魔導の守護者だった。デッキからさらに2体の竜の騎士が選ばれ、フィールドへと放たれる。

竜魔導の守護者 守1300

竜魔導の守護者 守1300

「ありや、3積みだったか……まあいいさ、何回だつて言わせてもらうけど、どうせ僕のやることに変わりはないしね。水族のネレイアビスと魚族のサイレント・アングラーを、それぞれ右下及び左下のリンクマーカーにセット！一望千里の大海洋に、忘却の都より浮上せよ女王の威光！リンク召喚、リンク2！水精鱗^{マールメイル}―サラキアビス！」

水精鱗―サラキアビス 攻1600

左側のエクストラゾーンに、糸巻との戦いでも使用された紫色のビキニアーマーを装備する女王にして戦士であるサラキアビスがリンク召喚される。しかもまだ、清明のフィールドには2体のサイレント・アングラーが残っている。間髪入れずにその2体が水色の光となって飛び上がり、螺旋模様を描きつつ空中で反転して彼の足元に開いた宇宙空間へと飛び込んでいく。

「ネレイアビスがフィールドから墓地に送られた時、僕はカードを1枚ドロ―して手札を1枚捨てることができる。さらに水属性レベル4モンスター、サイレント・アングラー2体でオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。一天四海に響く轟

き、呼びて覚ますは同胞の牙！エクシーズ召喚、バハムート・シャーク！」

☆4＋☆4＝★4

バハムート・シャーク 攻2600↓3100 守2100↓2600

サラキアビスの示す2つのマーカーのうち片方に呼び出されたのは、神話の名を持つ2足歩行の海竜だった。その効果はリンクマーカーが1つ空いている、この状況にあつてこそ最大限の物を発揮する。

「サラキアビスのリンク先に存在するモンスターは、常に攻守が500ポイントアップするよ。伏せカードもないことだし、ここはバトル！バハムート・シャークで攻撃表示の、サラキアビスで守備表示の竜魔導の守護者にそれぞれ攻撃！」

「……！」

海を司る2体の息もつかせぬ連続攻撃に、いかにドラゴンの力を持ち融合を操る戦士といえどもあつけなく粉碎される。モンスターの破壊は補給部隊によつてすぐさまドロウという形のリカバリーがなされたものの、その効果も1ターンに1度しか使えない。

バハムート・シャーク 攻3100↓竜魔導の守護者 攻1800

(破壊)

儂無みずき LP3000↓1700

水精鱗―サラキアビス 攻1600↓竜魔導の守護者 守1300

0 (破壊)

「攻撃終わり、メイン2にバハムート・シャークの効果発動。このカードのオーバーレイ・ユニット1つをコストに、エクストラデッキからランク3以下の水属性エクシーズを1体特殊召喚する、ゴッド・ソウル……大安吉日新年の朝、昇る日の出が勝利を照らす！ランク2、餅カエル！」

バハムート・シャーク (2) ↓ (1)

餅カエル 攻2200↓2700 守0↓500

バハムート・シャークが自身の周りを浮遊する光球の1つに首を伸

ばして食らいつき、その身に秘められた力を解放する。その仲間を呼び寄せ戦線を強化する神話の力に誘われてサラキアビスの空いたリンク先に現れたのは大小2段に積み重なった白いとぼけた顔のカエル2匹と、なぜかその上に載せられた小ぶりなみかんであった。

「バハシャ餅の布陣か……先出しして補給部隊のドローを止めるよりも、ダメージと相手へのプレッシャー優先ってわけだな。だが逆に言えば、餅カエルのコストにできる水族モンスターが奴の手札にいないことの証明にもなる。さあ、こっからどうする気だ？いくら万能のカウンター能力があるからって、安心できるようなもんでもないぞ」

職業柄ついやってしまう鋭い目つきでの解説に、傍らの八卦もよく分からないなりにこくこくと頷く。

「僕は、これでターンエンド」

「……！」

再びターンが変わり、またしても儚無みずきのターンとなる。フィールドだけ見れば圧倒的に不利な状況だが、精霊少女の目に諦めの色はない。そしておもむろに、1枚のカードを取り出した。

「サンダー・ボルトお!?ダメダメダメ、それは絶対通せない！餅カエルの効果発動！手札かフィールドの水族モンスター1体、この餅カエル自身を墓地に送って相手の発動したカード1枚を無効にして破壊、そしてそのカードを僕のフィールドにセットする！」

すべてを破壊する雷撃が放たれる寸前、餅カエルが長い舌を伸ばしてその手から直接サンダー・ボルトのカードをひったくる。そのまま清明の手にカードを吐き出し、気まぐれなカエルはどこかへと跳ねていってしまった。

強力なカードであるサンダー・ボルトは、これで清明の手に渡った。しかしそれは、早くもカウンターが打ち止めになってしまったことを意味している。

「おっと、餅カエルが墓地に行ったことで、その最後の効果を発動。僕の墓地の水属性モンスター1体、サイレント・アングラーを手札に加えるよ」

「……！」

「どうやら今度は、融合モンスターを呼び出す気はないらしい。効果を使わないままに残る最後の竜魔導の守護者と霊廟の守護者が、ともに先ほどの清明がやったのと同じように光の螺旋となって宙に舞う。」

「エクシーズ召喚、となるとランク4か」

「……！」

☆4＋☆4＝★4

ナンバース

No.50 ブラック・コイン号 守1000

そしてサラキアビスとは反対側のエクストラモンスターゾーンに出てきたのは、漆黒に塗られた木造の帆船。力強く張られたその白い帆には大きく「50」の文字が独特な字体で描かれている。

「ナンバース、か」

「……」

帆船に備え付けられた砲台が清明のフィールドを向き、光球のうち1つがその中に吸い込まれる。そして船内から飛び出したアンカーがサラキアビスの体をぐるぐると縛り付け、身動きできない海の女王を強制的に船上へと引き込んだ。

「まずいな。コイン号はオーバーレイ・ユニット1つと自身の攻撃する権利を使うことで自分より攻撃力の低いモンスター1体を墓地に送り、そのモンスターを弾丸にして相手プレイヤーに1000のダメージを与える。だがそれだけじゃない、サラキアビスがいなくなつたことでバハムート・シャークにかけられた強化も消えちまう。おまけに効果が破壊じゃない墓地送りだから、サラキアビスの破壊された際の効果も使えない」

糸巻の言葉通り、放たれた砲弾は強化を失い弱体化していくバハムート・シャークの横をすり抜けて直接清明の足元へと着弾する。

No.50 ブラック・コイン号(2) ↓ (1)

清明 LP4000 ↓ 3000

バハムート・シャーク 攻3100 ↓ 2600 守2600 ↓ 21

00

「ぐわっ!?で、さらにアームズ・ホール?サーチは再融合、と」

無論、これだけでは儚無みずきの反撃は終わらない。デッキトップ

1枚とそのターンの召喚権をコストに任意の装備魔法1枚をサーチまたはサルベージする魔法カード、アームズ・ホール。そして手札に加えられた再融合は、800のライフを支払い融合モンスターを蘇生したうえでその装備カードとなるあの往年の禁止カード、早すぎた埋葬を全体的に調整したようなカードだった。

儚無みずき LP1700↓900

ドラゴンに乗るワイバーン 攻1700

「……！」

「守護竜プロミネシス、随分渋いカード使うな。手札から自身を捨てて、相手ターン終了時までドラゴン1体の攻守を500アップか」

ドラゴンに乗るワイバーン 攻1700↓2200 守1500
↓2000

「で、ドラゴンに乗るワイバーンは……！」

みなまで言うなとばかりに、荒ぶる風を受けけて巨大化したドラゴンが無言の指示を受けたことでその翼を広げて滑空する。またもバハムート・シャークの守りをすり抜けてその奥の清明まで到達し、ワイバーンの振り下ろした竜の剣がその体を咄嗟のガードの上から大きく切り裂いた。

ドラゴンに乗るワイバーン 攻2200↓清明（直接攻撃）

清明 LP3000↓800

「痛たた……ドラゴンに乗るワイバーンは相手モンスターが水、炎、地属性しか存在しない場合、モンスターをすり抜けて相手プレイヤーに直接の攻撃ができる、だっけ？水属性メインの僕はいいかもってわけね」

「私も、クノスペは地属性です……！」

「アタシも不知火が炎でバジエは水だからな。ドーハスーラでも先出しできりやともかく、この中だと誰が相手してもあんま変わらないだろ」

追い込まれているというのにどこかのんびりとした会話をよそに、儚無みずきが1枚の伏せカードと共にそのターンを終えた。このターン中に清明のライフを削りきれなかった以上、当然その返しに彼

は先ほど奪い取ったサンダー・ボルトが使用できる。当然、儂無みずき自身もそれはわかっているはずだ。

だが、まだ少女の戦う意志は衰えていない。となると、と彼は推察する。まあ普通に考えて、あの伏せカードが何か悪さをするのだろう。しかし、せつかくもらえたものを使わない道理はどこにもない。もしも通れば儲けもの、まさかピンポイントなメタカードである避雷針などは入っていないだろう。

「僕のターン。お望みどおりに使ってあげるよ……リバースカードオープン、サンダー・ボルト！このカードの効果で、相手フィールドに存在するモンスターをすべて破壊する！」

「……」

果たしてどんなカードで対応するのか、という視線が注がれる中、天から振り下ろされた雷の一撃がフィールドを焼き尽くしにかかる。しかし誰も予想に反し、その伏せられたカードは最後まで表にならなかった。ドラゴンに乗るワイバーンとブラック・コーン号はともに跡形もなく焼き尽くされ、補給部隊のドロートリガーとなる。だが、それだけだ。他に何も起きない。最初にその違和感に気が付いたのは、やはり糸巻だった。

「……妙だな」

「どうかしましたか、お姉様？」

「コーン号の素材になってた霊廟の守護者は、もうとつくに墓地にいるはずだ。そして今のサンボルは、確かにドラゴン族モンスターのドラゴンに乗るワイバーンを破壊した。なら……」

「何もしてこない、ねえ。となると何か、蘇生させたくない理由があるってこと？霊廟の守護者がフィールドに居座ってたら発動できないカードとか……」

言葉を繋ぎ、足りない脳をフル回転させての推測にかかる清明。彼の直感は、ここでの判断がこのデュエルの行く末を大きく左右すると告げていた。このままバハムート・シャークで攻撃するか、攻撃力800とはいえ先ほどサルベージしたサイレント・アングラーも通常召喚して戦闘に参加させるか、あるいは……そして、彼の腹が決まる。

「魔法カード、スター・ブラストを発動。ライフを500払うことで、僕の手札に存在するサイレント・アングラーのレベルを1つ下げる」

清明 LP800↓300

サイレント・アングラー ☆4↓☆3

いきなり下級モンスターレベルを貴重なライフを払ってまで下げるといふ行動に虚を突かれたのか、困惑したような表情になる儂無みずき。しかし、彼は至って正気だった。

「このターンもバハムート・シャークの効果発動、ゴッド・ソウル！如法暗夜を引き裂くは、沈黙にして悪夢の刃。さあ出ておいで、No.47……ナイトメア・シャーク！」

彼のフィールドに向くりンクマーカーは存在しないが、そんなもの用意せずとも今はサラキアビスが離れたことで彼女のいたエクストラモンスターゾーンに空きがある。その位置へと、悪夢の世界から飛び出てきたような細長い体に鎌のような両手、そして不吉に広がる翼を生やすもはや鮫と呼ぶこともおこがましいような異形の生物が音もなくやつてきた。

No.47 ナイトメア・シャーク 攻2000

「ナイトメア・シャークの効果、発動！このカードの特殊召喚に成功した時、僕は手札か場にいるレベル3の水属性モンスター1体をそのオーバーレイ・ユニットに変換できる。これでレベル3にしたサイレント・アングラーを変換して、そのままナイトメア・シャークの更なる効果を発動。オーバーレイ・ユニット1つを消費して水属性モンスター1体を選択し、そのモンスターの直接攻撃を可能とする、ダイレクト・エフェクト！」

「……！」

No.47 ナイトメア・シャーク (0) ↓ (1) ↓ (0)

ナイトメア・シャークがその効果を発動し、細長い体が闇の中へと音もなく消えていく。それを見た儂無みずきは明らかに思わずといった様子で伏せカードに目をやり、そしてしよんぼりと肩を落とした。どうやら大正解を選んだらしいと察した清明は、それ以上何も言うことなく最後の攻撃宣言を行う。

「バトル。ナイトメア・シャークでダイレクトアタック」

No. 47 ナイトメア・シャーク 攻2000↓儚無みずき（直接攻撃）

「……」

それは、精霊少女の意地による最後の抵抗か。無駄と知りつつも表を向いた伏せカードの名を、八卦が小さく読み上げる。

「エクシーズ・ダブル・バック……」

エクシーズ・ダブル・バック。エクシーズモンスターが破壊されて自分フィールドにモンスターが存在しないターンにのみ発動でき、そのターンに破壊されたエクシーズモンスター1体とそれよりも攻撃力の低いモンスター1体を蘇生させるカードである。そして、サンダー・ボルトを受けた2体のモンスターが蘇る……しかし、その壁が役に立つことはない。音もなく忍び寄った悪夢の刃は、すでに儚無みずきの真後ろの闇へと溶け込んでいた。

No. 50 ブラック・コーン号 攻2100

ドラゴンに乗るワイバーン 攻1700

儚無みずき LP900↓0

「なかなか強かったよ、みずきちゃん。うさぎちゃんの時もそうだったけど、やっぱ精霊は強い子多いね」

「そうなんですか？」

「そうそう。他にもユベルとか、The ザ デイ ス ペア ア ラ ス ス URANUSとか……まあ色々いたけど、みんなみんな強かったもんと、まあそれは昔の話だからどうでもいいのよ」

ほんの少しだけ過去を振り返るかのように遠い目をし、すぐに現実に引き戻る。膝を曲げて目線の高さを合わせつつ、そつと片手を差し出した。

「僕と一緒に、来てくれないかな。もちろんみずきちゃんのためでもあるけど、隠し事は無しでいこう。正直なところを言うと、これは僕のためでもあるんだ。僕は、もつともつと強くなりたい。今のまま

じやまだ足りない、今のままじゃ何も、できやしない……！」

そこで喋っているうちにこみ上げてきた感情を押さえつけるためか、差し出した手はそのままにぐっと目を閉じ奥歯に力を含め歯を食いしばる。こののほほんとした少年の過去に一体何があったのか、それは糸巻や八卦の知るところではない。しかし今の1瞬だけ見えたその表情は、よほど手ひどい地獄を見たのであろう過去の存在をうかがわせる。

そして、かつて「BV」によりそれまでの生活の全てを失った糸巻には、ちょうどかつての自分と目の前の少年の姿がダブって見えた。それだけにそんな訴えが他人事とは思えずに、表情を曇らせ目を伏せる。煙草は、いつの間にか吸い終えていた。

「……だから、お願い。僕と、一緒に来て」

それは、奇しくもかつて彼自身がまだ見た目通りの学生だった頃。今ではすっかり彼のデッキの一員として馴染んだ精霊、幽鬼うさぎを勧誘した時を彷彿とさせるような状況とセリフで。しかしそこに込められた思いの重さは、世間知らずの学生だった頃の比ではない。

彼にとって、永遠にも思えるような時間が過ぎた。とはいえ実際のところ、その間はせいぜい数秒程度だったのだろう。まっすぐに目を上げて清明を見つめた儚無みずきはやがて何かを決心したようにおずおずと近寄り、そつとその手に自身の小さな手を重ね合わせる。さらに空いたもう片方の手を懸命に伸ばし、かがんだままの彼の頭をそつと撫でさする。

「……」

これまでで一番の優しい微笑みを浮かべたその体が明るい光に包まれて消えていくと、残ったのは清明の手の上の1枚のカードのみ。それがこの幽霊騒ぎのそもその原因となった、たった1枚のカードなのだろう。立ち上がった彼がそれをそつと掴んで見つめ、自らのデッキを取り出してその一番上に追加する。

「ありがとう。じゃあ、改めてこれからよろしく」

万感の感謝のこもったその言葉にまたひよつこりと空中から現れ、コクリと小さく頷く儚無みずき。そしてまた消えていく精霊少女を

見送ったのち、後ろの2人へと振り返る。

「さあ、早いところ下に戻って」

しかし、その言葉を最後まで言い終えることはできなかつた。彼の言葉を断ち切るかのように階下からはつきりと聞こえたのは、まぎれもない苦痛の悲鳴。

「ぐ……うわあああーっ！」

「この声……」

「鳥居、どうした!?!チツ、仕方ねえ、行くぞ!」

「まったく、次から次へと忙しいつたらありやしない!」

感慨に浸る間もなく、すぐさま小部屋を飛び出して最初の階段を駆け下りる3人。踊り場に辿り着いたとき見えた光景に、糸巻は息を呑んだ。

ターン15 暗黒の百鬼夜行

「レディース・アインド・ジエントルメイン……は、残念ながらこの場にはいらっしやいせんが。ご安心くださいお客様、私の誇るエンタメデュエルは、いかなる場合においても決してその手を抜かないのが流儀。めくるめく夢の世界へと、明るく激しくご案内申し上げます。」

暗い廊下に、明るい調子の声が響く。声の主は無論、鳥居淨瑠。いつもの調子で始まった彼の得意とするエンタメ節だが、見る者が見ればそこに含まれた微かな違和感にはすぐに気が付いただろう。そしてそれは、彼自身が心の奥底では誰よりもわかっていた。

いつもよりもほんのわずかに、ギアが高い。口上の修飾語はいつもよりわずかに多く、声の調子もやや上ずっている。それはすなわち、彼自身の感じている緊張の裏返しでもあった。かつての演劇デュエルによる場数、そしてまだ日が浅いとはいえデュエルポリスとして何度か経験してきた、プロ崩れのテロリストとの死闘。それらの積み重ねをもってしてなお、この目の前の男……巴光太郎というデュエリストの発するプレッシャーに、彼の体は敏感に反応しているのだ。

「……」

巴はただ何も言わず、薄く口の端を歪めて笑うのみ。ただそれだけで背筋の冷たくなるような感覚を覚えつつも、それを振り払うようなオーバリアクションと共にいつもより声を張り上げる。

「私がここで呼び出しますは、やはりすべての始まり……そう、ペンデュラム！ライト P ^{ペンデュラム} ゾーン、及びレフトPゾーン。フィールドを睥睨するこの両端に光のアークを掲げしは、そのどちらもが数字を操る凄腕のガンマン。スケール2、魔界劇団―ワイルド・ホープをダブルセッティング！」

彼の左右に同時に立ち上る光の柱と、その内部に浮かぶ全く同じガンマンの姿。当然そこに映る光の数字は同じであり、このままではスケールは描かれない。

「……で、す、が。ここにワイルド・ホープの特殊能力が加わればあ

ら不思議。レフトPゾーンよりライトPゾーンへと空を切り裂き飛んでいく贈り物は、スケールを打ち抜く魔の弾丸。ワイルド・ホープのペンデュラム効果発動！反対側のスケールに魔界劇団がセツティングされているときに限り、このターンの魔界劇団以外の特殊召喚を制限する代わりに相手スケールを9へと上書きする、チェンジスケール・バレット！』

宙に浮かんだままのワイルド・ホープが光の柱内部で銃を抜き、カーボーイハットの位置を左手でわずかに上にずらしながら右手で照準を合わせる。1瞬の静寂のちに目にも止まらぬ早業で放たれた弾丸は正確に反対側の光の数字ど真ん中を捉え、その衝撃で数字が2から9へと変化した。

魔界劇団―ワイルド・ホープ スケール2↓9

『これにて描かれしスケールは2と9、よって私はこのターン、レベル3から8までの魔界劇団を同時に召喚可能となりました。それでは皆様お待ちかね、今宵の主役によるご挨拶です！ペンデュラム召喚、栄光ある座長にして永遠の花形！魔界劇団―ビッグ・スター！』

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

三角帽子がトレードマークの、隻眼演者が2人のガンマンの見守る中央で意気揚々と片手で天を指すポーズをとる。その姿はよくRP Gで見るような、ボスの左右を同じ姿の側近が固めているような構図にも見えなくはない。

そこまで考えたところで頭を振り、そんな妄想を追い出した。冗談じゃない、その例でいくと倒れるのは俺の方じゃないか。

『…ビッグ・スターの効果発動！1ターンに1度デツキから台本1枚を選択し、それをフィールドにセットいたします。オープニング・セレモニーというのも1つの手ではありますが…やはりこの状況、いかに花形といえども1人きりで回す舞台はいささか華が足りないというものでしょう。魔界台本「魔王の降臨」を選択し、そのまま即座に発動！攻撃表示の魔界劇団が1体私のフィールドに存在することで、フィールドに表側で存在するカード1枚を破壊いたします。本日魔王の暴威が最初に吹き荒れるのは、レフトPゾーンのワイルド・

ホープ！』

光の柱の1本が消滅すると、その中央からひらひらと1枚のカードが落ちてくる。

『そしてワイルド・ホープが破壊された時、私はデッキから魔界劇団1体のサーチが……』

「させませんよ。手札より灰流うららの効果を発動、そのサーチはこれを捨てることで無効です」

落ちてきたカードに手を伸ばすも、室内だということにもかかわらず掴み取る寸前に吹いたつむじ風がそれを巻き上げてひらひらとどこかに飛ばしてしまう。サーチが無効となった彼に、残る手札は2枚。それを、同時にフィールドに置いた。

『致し方ありませんね。ならばカードを1枚セットして永続魔法、魔界大道具「ニゲ馬車」を発動！空の色が変わるよりもなお速く走るこの馬車は、魔界劇団の団員が乗り込むことで1ターンに1度だけその戦闘破壊を無効とし、さらに団員を選択することで相手ターン終了時までその1体は相手のカード効果の対象となくなります』

どこからともなく現れた魔界の馬車に、華麗な宙返りを決めて飛び移るビッグ・スター。座席に伸びた手綱を握ると、それを引く2頭の馬が同時に蹄を高らかに上げてそれに答えた。

そしてそんな馬車の上、素早く乗り込んだビッグ・スターのすぐ隣の座席の上から優雅に一礼したところで、ターンプレイヤーが変わる。一人ぼっちの戦場で佇むビッグ・スターともども目を凝らして見つめる中、おきつねさまがゆつくりと動き出した。

「では私のターン、ドロー。フィールド魔法、闇黒世界―シャドウ・デリストピアを発動します」

暗い図書館内部をぼんやりと照らす、非常口を知らせる緑の光。それが不意に点滅したかと思うと、すぐにぶつかりと消えた。2人のデュエルディスクの放つかすかな光に目を凝らせば、辛うじて見える闇の中には無数の影法師が揺らめいていた。悪鬼の顔をした闇そのものの切れ端による、天地四方の区別なく響く嘲笑とも怨嗟ともつかない声なき声が空間を埋め尽くす。

『これは……』

「いい声で鳴くでしょう？先のターンでは、なかなか明るい悪魔の演劇を見せていただきましたからね。私からもひとつ、そんなまがい物でない本物の闇黒をご覧に入れて差し上げましょう」

『おや、これはこれは。つまり私の魔界劇団が、私のエンタメデュエルが、まがい物だとおっしゃいますか？』

見え透いた挑発だ。そうは思いつつも、彼はその挑発にあえて乗った。きつかけは何であれ、このまま相手を黙らせていてはどんどんこのプレッシャーに委縮して相手のペースに乗せられてしまう。たとえばそれがデッドボールであつても会話が繋がってさえいければ、まだそちらの方がマシだと踏んだのだ。

「ええ。裏デュエルコロシウムでの録画は見させていただきましたが、あなたのデュエルはどんな相手にも明るく、楽しく、いわば『魅せ』に特化している。世が世なら、人気の高いプロデュエリストにもなれた逸材でしょう。しかしそれは全て、そのデュエルを観ていただけるお客様の存在ありきの物ではない。ひとつお聞きしますがあなた、自分のためにデュエルをしたことはございますか？」

『自分のため、に？』

「ええ。あなたのデュエルスタイルは要するに対戦相手を、そして観客を楽しませるものであつて、あなた自身というものがどうにも薄く見受けられましたのでね。築き上げた全てをかなぐり捨てて、存分に浴びていた歓声が一転して罵声になったとしても、どうしてもただ勝利の二文字を手に入れない……そんな思いをされたこと、きつとありませんよね」

このまま何も答えなければ、ずるずるとテンポを掴まれる。頭ではわかっていても何も答えられずにいる鳥居に対しさらに積みかけるように、巴の言葉が突き刺さる。

「だからあなたの覚悟はまがい物だと、そう言っているのですよ。私は昔も今も、自分のためにだけこのカードを振ります。ですがそれは、1度は他人のために戦うプロデュエリストの世界に身を置いたうえで改めて選んだ結論。最初からエンタメなどという目の前に与え

られた役柄に何も考えずしがみつき、自分の意思で戦う心構えを知ろうともしなかったあなたは違うのですよ」

『……そんなこと』

「ない、そうおっしゃりたいのですか？では、その覚悟……いえ、あなたが覚悟だと思い込んでいるものがどこまで持つか見せていただきましょう。レッド・リゾネーターを召喚し、その召喚時効果により私は手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できます。私が選ぶのは、レベル4の牛頭鬼です」

レッド・リゾネーター 攻1200 炎↓闇

牛頭鬼 攻1700

燃える体のリゾネーターが人魂のように闇に灯り、その明かりに誘われるかのように巨大な木槌を手にした筋骨隆々の牛の魔人が後に続く。

「そしてシャドウ・デイズトピアが存在することにより、場に存在するあらゆるモンスターの属性は闇へと書き換えられます。なにせあなたの劇団員さんに、この効果は意味を成しませんからね。そして牛頭鬼は1ターンに1度、私のデッキからアンデット族モンスター1体を墓地へと送ります。墓場で今しばらくお待ちなさい、九尾の狐よ」

九尾の狐。糸巻から聞いていた、巴のデッキにおける鍵にして彼を代表するカードの名に身構える。しかしその前に、巴のフィールドの2体が動いた。

「レベル4の牛頭鬼に、レベル2のレッド・リゾネーターをチューニング。異邦と化した故郷ふるさとに、悪しき聖霊の夜を引く音がこだまする。シンクロ召喚、オルターガイスト・ドラッグウイリオン」

☆4+☆2=☆6

オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻2200

仮面を張り付けたかのような薄笑いを浮かべる、無数の手と尾を持つ異形の生物。その攻撃力はビッグ・スター相手にはわずかに届かない……だが、そんなことはもはや問題ではない。

「では、九尾の狐の効果を発動。私のモンスター2体をリリースすることで墓地より現世のフィールドへと黄泉帰ります。そしてシャド

ウ・デイストピアの効果により1ターンに1度、1体だけリリースのコストは相手に代わりに払っていただきましょう。私のドラッグウイリオンとあなたのビッグ・スター、この2体の命を糧に九尾の狐を蘇生召喚」

ビッグ・スターとドラッグウイリオンが突如色濃くなった自身の足の影に呑み込まれ、ずぶずぶとその姿が深く暗い闇の中へと消えていく。同時にニゲ馬車を引く2頭の馬の瞳からも生気が消えてゆき、がつくりとうなだれてしまう。それと入れ替わるように闇からゆらりと立ち上ったのは、暗く黒い闇にはあまりにも似つかわしくない白面金毛の妖獣だった。

九尾の狐 攻2200 炎↓闇

「そしてドラッグウイリオンは1ターンに1度、リリースされた場合に自身を蘇生できる」

オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻2200

「さて、どこまで耐えきれますかね？バトル、まずはドラッグウイリオンで攻撃」

「『ならばその攻撃宣言時に永続トラップ、ペンデュラム・スイッチを発動！これは1ターンに1体ずつペンデュラムカード1枚をフィールド、またはPゾーンから異なる位置へと移動させる不可思議なスイッチ。ライトPゾーンより来たれ、ワイルド・ホープ！』」

迫りくる異形の魔法使いの攻撃に割り込むように、光の柱を破って飛び出したガンマンがぽっかりと座席の空いたニゲ馬車へと乱暴に着地する。手綱を引くものが現れて再びその目に光の宿った魔界の馬たちが威嚇すると、狙いに迷ったドラッグウイリオンが1瞬その動きを止める。

魔界劇団―ワイルド・ホープ 守1200

「それで防いだおつもりですか？構いませんよ、ドラッグウイリオン。そのまま攻撃しなさい」

「『ですがニゲ馬車によって付与される体制により、魔界劇団は1ターンに1度ずつ戦闘によっては破壊されません！』」

オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻2200↓魔界劇団―

ワイルド・ホープ 守1200

「承知の上ですとも。では、九尾の狐で連続攻撃。そして墓地より黄泉帰った九尾の狐は、守備モンスターに対する貫通能力を持ちます」

まるでそれぞれが意思を持つ槍であるかのように、妖獣の硬化した伸長自在な9本の尾が迫る。ワイルド・ホープもニゲ馬車の手綱を操りどうにか回避にかかるものの、この場所は広いステージではなく狭い廊下である。辛うじて上から振り下ろされた3本を回避したところで勢い余って壁に激突し、頑丈なニゲ馬車には傷ひとつついていないものの、派手な破砕音と共にあっさりとは大穴の空いた壁の向こう……かつて閲覧室だったのであろう大部屋へと戦場は移った。

普段ならばいくら取り壊しも近い建物とはいえ、器物損壊に顔を青くするであろう状況。しかし鳥居は今、それどころではなかった。気づかぬうちに伸びていた4本目の尾がワイルド・ホープの体を深々と貫き、それと同時に彼自身の腹部にも槍で貫かれるような激痛が襲っていたのだ。

九尾の狐 攻2200↓魔界劇団―ワイルド・ホープ 守1200

(破壊)

鳥居 LP4000↓3000

『ぐはっ……!?こ、これは……!』

「素晴らしいでしょう?彼女から話は伝わっているとは思いますが、これが我々の独自開発した最新式「BV」ですよ」

最新式「BV」。その言葉に彼の、裏デュエルコロシウム後に糸巻から聞いた記憶が呼び起こされる。これまでとはわけが違う痛みをデュエリストにもたらず、デュエルポリスの開発した対「BV」妨害電波の通用しない新たなブレイクビジョン・システム。

そして派手な破砕による瓦礫の向こうからゆっくりと彼を追いやってきた巴が、ニゲ馬車から転げ落ちて床に膝をつく鳥居を冷淡な目で見降ろしたままに語り掛けた。

「その様子ですと、随分と気に入って頂けたようですね。前回行った彼女との試験使用の際は途中でシステムがダウンするという失態を冒してしまいました……今回は、あの時のような無様はさらしませ

んよ」

「……なるほど、こりや糸巻さんの言った通りつすね。こんなもん、間違っても世に出せる、わけがない……!」

エンタメモードの口調を忘れ、素の鳥居浄瑠として吐き捨てる。実体化したニゲ馬車によりかかるようにして腹を押さえながらもどうにか立ち上がり、再び誰もいなくなった座席へと転がり込んだ。荒く2、3度呼吸し、どうにか息を整える。

再び起き上がった時にはすでに、彼はエンタメデュエリストへと戻っていた。

『破壊されたワイルド・ホープの効果により、デツキより呼び出されるは世界に誇る我らが歌姫、魔界劇団―メロー・マドンナにございます。それではこの場をお借りしまして、今宵の演目内容の発表をば致しましょう。今回舞台となりますのは、見ての通りの廃図書館。草木も眠る丑三つ時、闇に紛れしは妖怪変化。それに立ち向かうは皆様おなじみ、魔界劇団の面々にてございます。魔界劇団の悪霊退治、見事恐るべき物の怪に打ち勝ちましたならば、どうぞその時は拍手ご喝采!』

「そう、それですよ。一見あなたのそのそぶりは、どんな時でもスタイルを崩さない誇りと矜持の成せるもののようにも見える。実際、あなた自身もそう信じているのでしょうか。ですが、それは断じて違いますよ?あなたは単に、それ以外のやり方を知らないだけに過ぎない。知らないからこそ変化を恐れ、これまで自分が拠り所にしてきたものにしがみついて目を固く閉じ、身を縮こませてただ震えることしかできない。それでは、私には到底届きませんね」

鳥居はそれに、何も言い返せない。彼の理性は、巴の言動をこちらを動揺させ心に隙を作るための詭弁だと叫んでいた。事実巴光太郎という男が他人の心をえぐることを極めて得意とする危険人物だという話は、糸巻からも何度か聞いている。

しかし頭ではわかっていても、その言葉には一抹の真実も含まれている……そう感じるからこそが罨だとは百も承知だが、それでもその罨から彼の思考は逃れられない。自分のためだけにデュエルをする、

そんなことは彼の人生において1度も考えたことすらなかった。彼のデュエルはまだ子役だった幼少のころから巴の指摘通り観客と共にあり、1人でも多くの人間を楽しませることがデュエルを行う一番の喜びでありモチベーションだった。そこに疑問の余地はなく、事実それでこれまでうまくやってきていたのだ。だからそれを欠点とする巴の言葉に、彼は言い返せるだけの根拠を持ってはいない。「おっと、今はまだ私のターンでしたね。1度この辺にして、最後の処理に移りましょうか。カードを伏せてエンドフェイズ、シャドウ・デリストピアの最後の効果が強制的に発動。ターンプレイヤー、つまり私のフィールドにこのターンリリースされたモンスターの数に等しいシャドウトークンを特殊召喚します」

シャドウトークン 守1000

シャドウトークン 守1000

『俺の……いえ、私の、ターン!』

エンタメモードに入った際の、一人称の取り違い。こんなことは、このスタイルを身に付けて以来ただの1度もなかったミスだ。それがまた、彼の心の動揺を嫌でも物語る。

『それではいよいよこちらのターン、今回この悪霊退治へと志願した勇敢なる戦士たちに、まずは戦いの歌を送りましょう。ライトPゾーンにスケール0、メロー・マドンナをセッティングし、その効果を発動!私のライフ1000を支払い、その妙なる歌声はデッキから更なる団員を私の手札へと誘います。この効果により手札に加えたスケール9、まばゆく煌めく期待の原石。魔界劇団―ティンクル・リトルスターをレフトPゾーンにセッティング!』

鳥居 LP3000↓2000

さらにライフを削りこしたものの、再び張られたそのスケールは0と9。これは、彼に用意できる中ではほぼ最高の数値幅である。そして間髪入れず、そのスケールが生かされる時が来た。

『それではいよいよご登場いただきましょう、こちらが本日の戦士たちです!まずは再びのご登板、魔界劇団―ビッグ・スター……そしてもう1人は怪力無双の剛腕の持ち主、その自慢の筋肉は果たして闇を

住みかとする悪霊に通用するのか!?魔界劇団―デビル・ヒールです
!」

ニゲ馬車の座席、中央に座る鳥居の左右に、それぞれ上空から2体の演者が飛び込みを決める。細身のビッグ・スターはなんてことなくスタイリッシュに着地したものの、巨漢のデビル・ヒールの落下はそれだけでニゲ馬車が軋み馬たちもその衝撃に数歩よろけるほどだった。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000

「そしてデビル・ヒールの効果を発動、ヒールプレッシャー!このモンスターが場に出た際、相手モンスター1体の攻撃力をこのターンの間だけ魔界劇団1体につき1000ダウンさせます。オルターガイスト・ドラッグウイリオン、その恐ろしき異形の魔女にはしばし弱体化願いましょう」

オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻2200↓200

「さて。まずはこのターンもペンデュラム・スイッチの効果により、メロー・マドンナを特殊召喚です」

光の柱からスカートのエンドを押さえつつ飛び降りた黒衣の歌姫もまた、その下で待ち構えていたニゲ馬車の座席へとすっぽり収まるように着地する。しかし当然それだけ座席スペースは狭くなり、ただでさえ巨漢のデビル・ヒールはやや居心地悪そうに身を縮めた。

魔界劇団―メロー・マドンナ 攻1700↓1800

「ビッグ・スターの効果発動、このターンに選択する演目は魔界台本「火竜の住処」。そして即座にこの火竜の住処を、デビル・ヒールを対象として発動!」

それは台本というよりも、飛び出す絵本のように仕掛け満載の立体的な地図だった。ビッグ・スターから投げ渡されたそれに目を通したデビル・ヒールがその太い腕で勢いよく指を鳴らすと、瞬く間に演目に相応しい衣装がその全身を覆っていく。小さな顔と巨大な口だけは外に出ているものの、それ以外の下半身と両腕を丸々包むサイズの赤い棘や鱗をあしらい尻尾と翼までついた衣装に、帽子代わりにその

頭から伸びる竜の首……早い話が、演目名が語る通りの火竜の着ぐるみであった。

『そして私が魔界台本を発動したことにより、またしてもメロー・マドンナの効果が発動いたします。彼女のモンスターゾーンで奏でる歌はデツキの仲間を呼び出し、レベル4以下の魔界劇団1体をこのターンの間だけ登板させる力を秘めているのです。魅力あふれる魔法のアイドル、魔界劇団―プリティ・ヒロイン!』

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500

とんがり帽子の魔女つ子もまたニゲ馬車に飛び乗ろうとして、その寸前ですでに定員いっぱいな状況に気がついて空中制止を掛ける。そのまま呆れ顔で仕方ないなあといわんばかりに手にしたステッキにまたがって、ニゲ馬車上空の斜め後ろからついていくことに決めたらしい。

『さあ、いよいよクライマックスです!このターンはデビル・ヒールにニゲ馬車の耐性を付与し、さらにティンクル・リトルスターのペンデュラム効果を発動!デビル・ヒール以外のモンスターはこのターン攻撃できなくなる代わり、選ばれたデビル・ヒールはこのターンで3度までモンスターへの攻撃が可能となります。竜の力を得たことで一時的に悪霊を焼き尽くすことが可能となったデビル・ヒール、いざ悪霊退治へと出発いたしました!』

2重3重の強化を受け、これ以上ないぐらいのやる気に満ちたデビル・ヒールが今は竜の着ぐるみに包まれたその剛腕をぶんぶんと振り回す。抜け目なく手綱を操るビッグ・スターの号令に従い、ニゲ馬車が再び走り始めた。

『我々魔界劇団は、私のエンタメは、断じてまがい物などではありません!バトル、火竜デビル・ヒールでドラッグウイリオンに攻撃!』
魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000↓オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻200 (破壊)

巴 LP4000↓1200

猛スピードで直進するニゲ馬車から飛び降りることで、その勢いも加わった高所からのドロップキックが弱体化された異形の魔女の体

を軽々と吹き飛ばす。

「ぐっ……!!」

『この瞬間、火竜の住処の効果を発動！発動ターンに対象にとったモンスターがバトルで相手モンスターを破壊した時、相手プレイヤーは自身のエクストラデッキから3枚のカードを選んで除外しなくてはなりません。そして戦闘ダメージの発生したこの瞬間にプリティ・ヒロインの効果発動、メルヘンチック・ラブコール！キュートな彼女の恋の魔法により、相手モンスター1体の攻撃力は今発生したダメージの数値だけダウンいたします。これにより、九尾の狐の攻撃力は0に！』

上空から放たれた星型弾が九尾の狐の周囲を取り囲み、その力を確実に弱めていく。

九尾の狐 攻2200↓0

『さて、もうおわかりですね？デビル・ヒールが続けて攻撃いたしましたのは、九尾の狐！』

2800ものダメージにより苦痛に顔を歪め脂汗を流しつつもエクストラデッキから3枚のカードを取り出す巴には目もくれず、蹴りの反動も利用して着ぐるみの翼をバサバサと振りながら空中で一回転して着地した火竜デビル・ヒールが次に狙いを定めたのは九尾の狐だった。力強く地面を蹴り、竜の頭で人間……もとい悪魔魚雷となつての強烈な頭突きを叩きこみにかかる。

とはいえ実のところ、この攻撃ですべてが終わるなどという甘い期待はしていなかった。この程度でデュエルを終わらせられるほど一筋縄で済む相手なら、あのアササー上司がボロクソ言いながらもその実力に関してだけは嫌々ながらに一目置くはずがないのだ。

そして案の定と言うべきか、その頭突きが命中する寸前に巴の場に伏せられていたカードが表を向いた。

巴 LP1200↓600

「トランプ発動、魂の一撃。戦闘を行う攻撃宣言時、私のライフが4000以下であるときにそれを半分支払うことで発動いたします。4000と現在の自分のライフ差、つまり3400ポイントだけ、九尾

の狐を強化しましょう。これで返り討ち……と言いたいところですが、まずたつた今受けた2800もの弱体化を打ち消す必要があるためにその攻撃力は600減つての2800止まりですね。ですが、それであっても私のライフを残すには十分な数値です」

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000↓九尾の狐 攻0↓2800 (破壊)

巴 LP600↓400

「ぐはっ……！ですが九尾の狐が破壊されたことにより、狐トークン2体を場に特殊召喚です。無論、守備表示でね」

狐トークン 守500 炎↓闇

狐トークン 守500 炎↓闇

「やはり受けきれませんでしたか……ですが火竜デビル・ヒールには、後1度の攻撃権が残っております。そしてデビル・ヒールが戦闘で相手モンスターを破壊したことで、今度は火竜の住処に加え彼自身の効果を発動。墓地に存在する魔界台本、魔王の降臨を私のフィールドに再セットいたします。それではお待ちかね最後の攻撃、ここはレベルも攻撃力も高い方を優先して狙うべきでしょう。最後のターゲットはずばり、シャドウトークンです！」

そして、強烈な飛び込み頭突きを見舞った状態から空中で姿勢制御したデビル・ヒールが、最後にその後ろから迫っていたシャドウトークンへと体を捻りつつのローリング・ソバットを叩きこむ。

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000↓シャドウトークン 守1000 (破壊)

この攻撃は、残念なことにダメージを与えるものではない。しかし火竜の住処はいまだ有効であり、この戦闘破壊も合わせて合計9枚ものエクストラデッキ破壊に成功した計算になる。

それは、デッキの種類によつてはそれだけで詰みかねないほどの一撃。しかし元々エクストラデッキへの依存度がさほど高いわけでもない「シャドウ・デイストピア」にとつて、果たしてこの9枚という数はどれほどの痛手となりえただろうか？

「『デビル・ヒール自身の効果により、火竜の住処を再セット。さて、こ

れにて火竜デビル・ヒールによる悪霊退治の大暴れはひとまず幕を下ろします。えっ、まだ悪霊は残っているって？その通り、ですがご安心ください。火竜の大暴れもいいものですが、やはり私どもの公演はこれが必要なければ終われません。追撃のアンコール上演、魔界台本「魔王の降臨」！これにより今回破壊の対象といたしますのは、残る3体の怨霊及びこの暗黒の世界そのものです！』

ビッグ・スター1人だった1ターン目とは違い、今の鳥居のフィールドには合計4体もの攻撃表示の魔界劇団が存在する。すなわち破壊できるカードもまた、4枚。吹き荒れる魔王の暴威によって残る3体のトークンが、そして闇に閉ざされた空間までもがねじれちぎれて消えてゆき、巴のフィールドもまた完膚なきまでに壊滅していまや1枚のカードも残っていない。ほんの少し明るくなつた閲覧室の片隅で、消えていた非常灯に再び緑の光が点き始めた。

『これが我々の、魔界劇団の力です！ですがここで、ひとつ残念なニュースがございます。確かに目に見える範囲では全ての悪霊の駆逐に成功いたしました。残念ながらまだその奥にはいまだ姿を見せない真の親玉がいるようですね。ならばこの魔界劇団一座、勝ち名乗りを上げ祝杯を挙げるのはやはり相手の大将首を落とすその時までお預けといたしましょう。さあ、第二ラウンドに備え再び戦いの準備です。メロー・マドンナによって呼ばれたプリティ・ヒロインは、このターンが終わると同時に私の手札へと戻ります』

これでニゲ馬車に残るは着ぐるみのままなデビル・ヒールと先ほど着替えた魔王ルックのビッグ・スター、そして必然的に御者役となつたメロー・マドンナと鳥居自身を残すのみとなつた。すでに巴には手札もなく、盤面もまた圧倒的有利。何よりリリース戦法の要となるデリストピアを破壊できたことの戦術的な意味は、計り知れないほどに大きい。

しかし、である。それでもなお、彼の気分は晴れなかつた。理由は彼自身にも分からない。これが我々の、魔界劇団の力……そう高らかに言い切るその声は、むしろ彼自身に言い聞かせるような響きを帯びていなかっただろうか。巴はそれすらも見透かしているかのように

薄い笑みを浮かべつつ、逆転された現状をさほど気にする様子もなく次なるカードに手をかける。

「なるほど。では、私のターン」

圧倒的不利を微塵も感じさせない、気楽な調子でのドロロー。そしてそのカードが、ゆつくりと表を向いた。

「ではスタンバイフェイズ、私は今引いたこのカード……ランクアップマジックR U M |
ザ・セブンス・ワン七皇の剣をあなたに公開します。何かございましたか？」

「『なっ……そ、そのカードは!?!』」

巴のエクストラデッキに眠る、残り5枚のカード。そのモンスターの種類によってはこれほどまでの状況も1枚で逆転することも可能となる、問答無用のパワーカード。それを、引いてしまった。この状況で、引き抜いてみせたのだ。

「その様子ですと、何もありませんね。ではメインフェイズ1、その開始時に発動条件を満たした七皇の剣を発動。デュエル中に1度だけエクストラデッキから特定のナンバーズを特殊召喚し、そのカオスナンバーズを重ねてエクシーズ召喚を行います。こんなこともあるうかと、残しておいてよかったですよ……ナンバーズN O . 1 0 7、ギヤラクシーアイズ・タキオン・ドラゴン銀河眼の時空龍。そして同じくカオスナンバーズC N O . 1 0 7、一超銀河眼の時空龍《ネオギヤラクシーアイズ・タキオン・ドラゴン》！」

ニゲ馬車の前に、暗く赤みがかった体色のどこか機械じみた印象の龍が立ちはだかる。そしてその龍が虚空に吼えたとその体に変形し、不気味な黒い四角錐へと変化する。まるで繭か蛹のようなその中でいかなる変態が行われたのか、再び四角錐が展開されるとその体色は黄金へと変化を遂げ、長い首の数は3つに増えその体そのものもさらに二回りほどの巨大化をしていた。

C N O . 1 0 7 超銀河眼の光子龍 攻4500

「本来ならばこのカードもデュリストピアの管理下でその効果を存分に発動したいところなのですが、そんなくだらない話は無用でしたね。ペンデュラム・スイッチを使ったところで逃がせるのは1体のみ、全てのモンスターが攻撃表示である以上この攻撃を回避することは絶対に不可能」

「く……」

「あいにく私は、末期の句を詠ませる暇を差し上げるつもりはありませんよ。では、さようなら。超銀河眼の時空龍、魔界劇団―ビッグ・スターに攻撃」

3つ首の龍がそれぞれの口から光の奔流を放ち、それらが空中で混じりあって相乗作用でさらにその威力を跳ね上げる。すべてを消し去る光の中にビッグ・スターが、デビル・ヒールが、メロー・マドンナが、そしてニゲ馬車が消えていく。

C N O・107 超銀河眼の光子龍 攻4500↓魔界劇団―
ビッグ・スター 攻2500

鳥居 LP2000↓0

「ぐ……うわあああーっ！」

体中が苦痛を訴え、たまりかねて自然と口から出た悲鳴。光の奔流が収まっても辛うじてまだ、彼の意識は残っていた。いや、むしろ気を失うことすらできなかった、という方が正しいかもしれない。全身の細胞が焼け、苦痛を感じているのか感じていないのかすらもよく分からない。何もわからず崩れ落ちた彼の耳に、いくつもの足音が聞こえたような気がした。しかし、それが幻聴なのか現実なのかも判別がつかない。ただただ、何もわからなかった。

悲鳴を聞きつけた糸巻たちが階下に降りてきて真っ先に感じたものは、人間の肉が焼ける嫌な臭いだった。そして派手に大穴の空いた壁と、そこから見える巴の後ろ姿。その視線の先に無造作に転がる、焼け焦げた塊の正体に気が付いたとき彼女は息を呑んだ。

「鳥居っ！」

「うわあ……おつと八卦ちゃん、見ない方がいいよ」

彼女の背後で遅ればせながら目の前の光景を一瞥した清明が、咄嗟に最後に降りてきた少女の後ろに回り込んでその目を手で覆い隠す。的確な対処だが、今の彼女にはそれに礼を述べる余裕などない。

「デメエ、やってくれたな……！」

「ええ、やってやりました。おかげで、なかなかいいデータが採れました。物理的な痛みよりもエネルギーの塊、それこそドラゴンのブレス攻撃のようなものの方が見ての通り苦痛の効率がいいことなどは、なかなか面白い発見でしたよ」

「ふざけやがってー」

かつての二つ名同様な夜叉の気迫を放ちながら1歩詰め寄る糸巻に、くすくすと上品に笑いながら1歩下がる巴。

「おや、よろしいんですか？そちらの彼、早く病院にでも運んで差し上げないと後遺症がますますひどくなりますよ？」

「なに？待て、どういう意味だ？」

「どういうも何も、言葉通りの意味ですよ。彼はまだ生きています、どこまで復帰できるかは別としてね。わざわざダメーজだけで即死しないように出力を落としておいたのですから、むしろ感謝していただきたいですね」

その言葉に、視線は巴から離さないままに焼け焦げた鳥居の体に近寄る。近くに寄ればそれだけ嫌な臭いも強くなりはしたが、それでも弱々しくその体は動いていることも見て取れた。まだ、呼吸が続いているのだ。そしてその時気が付いたのだが、巴は今なんとも絶妙な位置に立っている。もし彼女がこの場で戦闘を強行すれば、ほぼ確実に鳥居はその余波に巻き込まれるだろう。

わざわざ虫の息で生かすことにより人質としての価値を発生させ、自分はその間に悠々と撤退する……いかにもこの男らしい、抜け目なく嫌らしい手だと齒噛みする。するが、彼女にはその意図が分かっている。止められない。鳥居がかなり危険な状態にあることはまぎれもない事実であり、彼女はそんな彼の上司なのだから。

「3対1……まあやってやれないことはないでしょうが、あまりリスクは好みませんからね。では、御機嫌よう」

それだけ言い残し、闇の中に消えていく。

「ちっ！八卦ちゃん、救急車だー」

「は、はいー」

慌てて携帯を取り出した少女が、清明によって巧みに視線を遮られ

たまま通報を開始する。どうにか巴を追いかけられないかとも思ったが、そんな考えが通用するほど甘い相手ではない。思考を遮るように近くに待機させていたらしい車のエンジン音が響くと、すぐにそれも遠くに消えていった。徒歩でここまで来た彼女たちに、もはや追跡は不可能だろう。

「死ぬんじゃないぞ、馬鹿野郎……」

その言葉に、当の本人から答えが返ることはなかった。

エピローグ

幽霊が出る……きつかけはそんな、夢のような話から始まった。そしてその夢は一夜明け、更なる広がりを見せた。精霊を追う男達、精霊を知る少年。少女の知る世界はわずか1日にしてそれまでとは比べようもないほどに広がった。

しかし昇らぬ朝日がないように、沈まない夕日もまたありはしない。広がりきつた少女の夢は、宵闇と共に悪夢と化した。そして悪夢の戦いから、1週間もの日付が過ぎた。

「よう、鳥居。起きてるか?」

燃えるような赤髪をわずかに揺らし、ゴンゴンとノックの音がかすかに葉臭い廊下に響く。その声の主は、言うまでもなく糸巻である。そしてその後ろには、花束を手に待機する八卦の姿。彼女たちにとっても、あの日以降彼に会うのは1週間ぶりのことだった。あの後呼びつけた救急車によって病院に担ぎ込まれた彼は意識不明の重症と診断され、そのままノータイムで集中治療室に。面会謝絶状態が続き、ようやく今朝になって見舞いの許可が下りたのだ。

しかし、いつまで経っても部屋の中から返事はない。痺れを切らした糸巻がもう1度ノックしようとして考え直し、引き戸の取っ手を掴み慎重にドアを開く。

「鳥居?……なんだ、起きてんのかよお前。まったく、なら返事ぐらいしろよな」

そつと覗き込んだ彼女の視界に入ったのは、ベッドの上で上半身を起こし、ぼんやりと窓の外を見る部下の後ろ姿だった。燃え尽きたと医者から聞いていた髪も再び産毛が生え始めており、背筋も割合しつかりとしている。

「入るぞー」

「し、失礼します!」

「ああ、糸巻さんに八卦ちゃん……ども、お久しぶりっす」

ようやく物思いから我に返ったのか、弱々しい声で振り返る。まだ手ひどい火傷の跡は確認できるだけでも顔面や二の腕に残っている

ものの、彼の年齢を考えれば跡も残らず……とまではいかないまでも、十分に誤魔化せるぐらいまでには回復するだろう。それを見て無邪気に顔を綻ばせる少女と、それとは対照的に渋い顔になる糸巻。確かに彼は、肉体的には復帰も近いように見える。だが、その精神はどうだろうか。

百戦錬磨の彼女は、これまで幾度となくこんな顔をした若者を見てきたことがある。例えば念願叶いプロデュエリストの仲間入りしたものの、相次ぐ敗北にファンもつかずスポンサーも愛想をつかし、やがて表舞台を去っていく時。例えば正義感とデュエル愛に燃えデュエルポリスの門を叩いた方がいいが、そこで自分の実力不足を嫌というほど試験時に叩きこまれた時。人の心がへし折れた時の顔を、彼女は知っている。

「鳥居、お前……」

言葉はしかし、続かなかつた。一見元気そうに見える彼を見て喜ぶ八卦の前に、水を差すようなことが言えなかつたということもある。しかしそれ以上に、彼女自身がそれを口に出すことを嫌がっていたのだ。口に出してしまえば、もう後戻りはできなくなる。ようやく体の傷が治りかかっている彼に、このタイミングで心の傷という現実を突きつけることが正しいことだと言えるだろうか。

らしくもなくまごついてる彼女を一瞥し、優しい声音で鳥居が少女に向き直った。

「ちよつと悪いけど、八卦ちゃん。お使い頼まれてきてくれるかな」

「お使い、ですか？はい、お任せください！何を買ってきましたようか！」

「えつと……んじゃ、『スイートミルクアップルベリーパイとろけるハニー添え』つてのをお願い。この近くのケーキ屋にあるかわからないから、30分探しても見つからなかつたらそんでいいから」

「30分ですね、わかりました。では、失礼しますっ！」

元気よく少女が部屋を後にしてからたっぷり1分ほど待ち、戻ってきていないことを確認した鳥居がようやく口を開く。その声色はさつきまでとは打って変わり、悲壮感と無力感に満ちていた。

「……すみません、糸巻さん。俺ちよつと、もう駄目かもしれないっすわ」

「だろうな。よつつぽど手ひどくやられたんだろ？悪いとは思ったがデュエルディスクの内部データから、どんなデュエルをやったのかは確認させてもらったからな」

先ほどまでは純粹無垢な少女の手前、かなり無理してお得意の演技をしていたのだろう。彼は今、自分の心がどれほど悪い状態にあるのかを客観的に捉えて知っている。それを確認して自らの心配が杞憂であると知った糸巻も、もはや遠慮は不要とばかりに近場の椅子にどっかりと腰を下ろして長い足を組む。懐から煙草を1本取り出したところで、不満げな声はその耳に届いた。

「……………禁煙つすよ」

「怒られるのはアタシじゃない」

「よくわかってるじゃないっすか、俺が怒られるんすよ」

「知るか、馬鹿」

そうは言いつつも言葉とは裏腹に舌打ちし、火をつける寸前の煙草を元通りしまい込む。いつになく素直な女上司のそんな姿に、鳥居がまた力なく笑う。

「なんか今日は随分優しいっすね、糸巻さん」

「馬鹿いえ、アタシはいつだって絵にかいたような善人だぜ」

「なら俺知ってますよ、その絵のタイトル地獄絵図ってんですよね」

いらん一言と流れるような軽口こそいつもの調子だが、そこにはまるで覇気がない。彼自身もそのことを痛感しているのか、何とも言いようのない薄ら笑いを引つ込めて急に話題を変えた。

「ねえ、糸巻さん。糸巻さんは、何のためにデュエルしてるんすか」

「は？」

おもむろに放たれた、哲学的とも思える問い。彼も目の前の反応から自分の説明不足を悟り、思い出さなくてもない記憶を自らの脳裏からサルベージする。

「あの時俺、言われたんすよ。俺のデュエルは、ただ与えられた役割にしがみつくだけのまがい物だって。俺はずっと俺のデュエルを観て

くれるお客さんのためにデュエルをして、それが俺にとつての全部で。自分のために戦うなんて考えたこともなくて……だから、そんなデュエルじゃ届かないって」

「いかにも巴の奴らしいやり口だな……そんなもん、聞き流しとけよ」
「でも俺、自分のことだからわかるんすよ。そうやって言われた時、最初は俺も思いました。これは罠だ、聞く価値なんてない妄言だって。だけど本当は、心の奥底では、あいつの言うことの方が正しいんじゃないかって……！」

途中で言葉が消えていき、顔をくしゃくしゃに歪めて体を震わせる鳥居。彼の中では今、爆発した感情が行き場もなくなっていた。敗北による悲しみ、苦痛、恐怖……しかし圧倒的に大きいものは、何も言い返すことのできなかつた自分自身に対しての悔しさだった。

そしてその気持ちは、糸巻には痛いほどよく分かる。それまでの自分自身を全否定され、だというのにそれを甘んじて受け入れるしかない。かつて、彼女自身もそうだった。ずっと続くと思っていたプロデュエリストとしての日々から一転し、四方から浴びせられた罵声と迫害。自分と同じデュエリストのせいで数多の死傷者と被害が出たのだと遺族に直接詰め寄られた時も、彼女には一切の申し開きができなかつた。ただ唇を噛みしめ拳を握り、その両方から血が出るほどに力を込めるだけ。彼女に、何か言う資格などなかつたのだから。

重苦しい沈黙に包まれる中、やがて鳥居がどうにか落ち着きを取り戻す。

「すみません、糸巻さん。俺らしくもないっすね。今聞いたことは忘れてください……いつかきつと、俺の手で答えを出してみせます」
「おう、そうか。その意気だ」

またしても短い沈黙。いつかきつと、と彼は言った。しかしそのいつか、とは一体いつになるだろうか。たとえ傷が完治したとしても、今の決定的に大切なものをへし折られた彼にまともなデュエルを行うことなど不可能だろう。まして彼が折り合いをつけて答えを出すべきエンタメデュエルは、ただでさえ常人以上の精神力を必要とするものだ。答えの見えない問いが宙に浮き、その不透明さと先の暗さが

のしかかる。

そこでよし、と手を叩いたのは、糸巻だった。彼女にはもう少し目先の問題で、考えるべきことがあったのだ。

「この話はやめだ、やめ。それよか鳥居、お前『アレ』どーする気だ？ その様子だと出るのは無理だろうが、もう1週間もねえぞ」

「あー、『アレ』っすか。正直、俺もノープランです。でも、一応本部からも応援は来るんすよね？」

「そりやまあ打診はしておいたけどな。正直1人出すので精いっぱいらしいから、今からお前の穴埋めなんて出せるかどうかは微妙なところだな。ある程度腕つぶしがよくて、なおかつアタシデューエルボリスら寄りの人間……」

謎めいた言葉を挟み、2人して頭をひねる。ちょうどその時、ドアがババン、と音を立てて勢いよく開いた。そして息せき切った少女と共に、見覚えのある少年が何かの入った紙箱を手に顔を出す。

「ハア、ハア……お、お待ちせしました鳥居さんっ！」

「洋菓子店『YOU KNOW』家紋町支部、店長の遊野清明です。『スイートミルクアップルベリーパイとろけるハニー添え』ただいまお持ちしました。こっちも大概金欠だけど、まあ見舞い品だからオマケしとくよん」

「いたー！」

「……へっ？」

同時に叫ぶ大人2人と、何が何だかわからないという顔で固まり目をぱちくりさせる少年。またしても、何かか動こうとしていた。

File 3―デュエルフェスティバル ―前夜祭―
ターン16 燃える魂鋼の風雲児

「はーん、なるほどねえ」

病室。上体だけ起こしてベッドの上から窺い見る鳥居とその脇にある見舞い客用の椅子で足を組む糸巻が視線を注ぐ中、その視線の中心人物……遊野清明がゆつくりと頷いた。

「デュエルフェスティバル、かあ」

「頼む。アタシともう1人他所から手伝いに送られてくる奴、まあ誰かは知らんが……ともかく2人だけじゃ、さすがに手が回らんからな」

デュエルフェスティバル。それは読んで字のごとく、デュエリストたちの祭典である。少なくとも、名目上だけは。

かつてこの祭典は、プロデュエリストたちとそのリーグが互いの垣根を越えて手に手を取り、3年に1度行われる大規模なものだった。普段ならば絶対にありえない所属リーグやライバル会社をスポンサーに持つ選手同士が組んでのタッグデュエル、プロ1人に対し抽選で選ばれた観客3人という変則マッチ、新型デュエルディスクの発表会やその試遊……ありとあらゆる方面からデュエリストたちの嗜好を満足させる、明るく楽しい3日間のお楽しみ。開催地は毎回違う国が選出され、各国その趣向を凝らして世界中から集うデュエリストと観客を歓迎したものだ。その経済効果は抜群であり、日本円にして10桁は軽く動いたとも言われている。それだけ、デュエルモンスターズは世界の中心だったのだ。

「いいなあ。私も、お姉様の晴れ舞台を生で見たかったです」

「ま、それも昔の話さ。今はせいぜい、アタシらデュエルポリスが主催する町内のちっぽけなお祭りがいいとこだな。徹底的に落とされたデュエルモンスターの評判を少しでも回復させるためとかなんとかで、近くのちびっ子を招待してアタシらのデュエルやソリッドビジョンを体験してもらう。ポジティブキャンペーンってやつさ」

そう小さく笑う糸巻。だがその笑みは寂しげで、自嘲の色を帯びていた。彼女がいつも昔のことを話すときと同じように……もう2度と手に入らない、望まずして失ったかつてを思い返すように。

そしてそんな気配を察知し、かすかに清明が顔をしかめる。その表情の変化には2つの意味が込められており、まずひとつが単純に湿っぽい話は彼の好むところではないという意思表示。そしてもうひとつはこの話の流れと場の空気から、一層断りづらくなったことを察知したためである。そしてそんな機敏な感情の変化を読み取った糸巻が、流石にこの程度じゃなあなあで押し切れねえかと内心で毒づく。

「なあ、どうにかならないかね」

「ああいや、僕としても協力したいのはやまやまなだけどね」

彼女らには知るよしもないが、元来この遊野清明という男はかなりの祭り好きである。それもかなりの行動派で、常々見るアホウよりも踊るアホウでありたいと大真面目に言い出したりもするタイプである。そんな彼がデュエリストフェスティバルの存在を知ってなお反応が薄いのは、また別の理由があった。

「僕、最近はこの近くのケーキ屋で居候させてもらってるんだけどね？そこの親父さんが、今ちよつとばかしトラブっててね。一宿一飯の恩もあるし、僕が用心棒やってないとまずいのよ」

「トラブル？用心棒？……糸巻さん」

「ああ、わかってる。鳥居、お前はそこで寝とけ。面会は終了だ」

何かを通じ合うデュエルポリス2人。その視線が交錯し、ややあつて糸巻が小さく頷いた。

「まあなんだ、とりあえずその店まで連れてつてくれ。用心棒が出張るほどとなると、もしかしたらそれはアタシらの領分かもしれないからな」

そう言い勢いよく立ち上がると、慌てて空箱を持った八卦も続く。「いや見舞いって言ってくださいよ何やらかしたんすか俺」という小声の抗議は、当然のごとくきっぱりと無視された。

3人が病院を後にすると、気持ちのいい秋の青空が広がっていた。閉塞的な空間から抜け出したことに気をよくした糸巻が大きく伸びをする。自然と強調されるふたつの果実へと周囲の視線が一斉に集まる。それ自体はもう慣れたものであり、彼女自身はあまり気にしていない。むしろこれだけ一生懸命見ておいてまだ気づかれていないのもりなのかと、馬鹿馬鹿しさ混じりのおかしみすら感じるほどだ。ただそんな彼女でも、一番熱のこもった視線が自分のすぐ隣から注がれていることにはやや閉口した。顔を動かさずにこつそり横目で窺うと、案の定小さく拳を握りガッツポーズをとる少女の姿がその目に映る。

「……八卦ちゃん」

「……は、はははははい！ なななんでしょうかお姉様!」

「いや、なんつーか……まあ、いいや」

あまりにわかりやすくテンパる少女を前にそれ以上追及する気も失せ、代わりにため息をついてシャツの上から羽織っていたジャケツトの前を止める。肌色の減少に少女は露骨に残念そうな表情になるが、素早く湿った視線を向けた糸巻と目が合うやすぐに取り繕ったぎこちない笑顔に変わる。

「おーふたーりきーん。置いてくよー?」

「は、はいー! だいまー!」

タイミングよく飛んできた清明の声に渡りに船とばかりに飛びついた少女が、ぱつと駆け出してその場を後にする。今の呼びかけは偶然か、それとも計算づくなのか? 考え込む糸巻の目に一瞬、清明の頭上に浮かぶ黒と紫のシャチのような顔が見えた気がした。あれは呆れ顔をしている……そう感じたのは彼女の単なる直感だが、いずれにせよその顔は彼女がはつきりと認識するより先に秋の空へと消えていった。

「……おう、今行くよ」

あまり考えすぎても仕方がない。そんな時は考えること自体をすっぱり諦め切り替える、彼女が人生で得た経験のひとつだった。先行する2人に気持ち足を速めて追い付き、道中より詳しい話を聞こう

と先導する少年の背に声をかける。

「で、だ。とりあえずお前さんの話、もう少し詳しく聞かせてもらおうか」

「はいはい。簡単に話すとその店、1か月ぐらい前に若いチンピラが来店してねー。えらいイライラしてたし、何があつたかは知らんけど最初っから憂さ晴らしでいちやもんつけに来たんだろうねきつと。まあとにかく適当にケーキ頼んでお金払って、そこから即クレームよ」

「クレーム?」

オウム返しする八卦に、大人びた所作で軽く肩をすくめる。しかし糸巻の目は、思い出すだけでよほど腹に据えかねたのか瞬間的に指が白くなるほどに力を込め拳を握りしめていたのを見逃しはしなかった。

「……そ。この店では床にゴキブリ飼ってんのかーってさ。まあ実際、そいつの指さしてた先で黒いのがうごうごしてたのよ」
「うごうご……」

謎擬音について情景を想像してよほど嫌な気分になったのか、少女の顔がやや引きつる。

「ただ、ねえ。僕もずっと後ろでレジ並んでてなーんかピンと来たから、試しに踏んづけてみたのよ」

「ひっ!」

またしても嫌な想像をしたらしく、引きつった表情はそのままに少女の顔が青くなる。

「そしたらそいつ、だいぶ体重乗せたのにびんぴんしてやんの。ただ面白いものが見えてね、潰れない代わりにその恰好にノイズが走ったのさ」

「「BV」か?」

「今思えばそうなんだろうねえ。黒光りするG、飛翔するG、対峙するG……まあなんだっていいけどさ、ともかくその辺のカードを実体化させたのかね」

「なるほどオーケー分かった、「BV」がらみとあつたらそいつは間違

いなくアタシらの縄張りだ」

「それもなんだっていいさ。ただ、僕も実家がケーキ屋でね。うちみたいな飲食にその手の悪評はほんとに死活問題で、それがわかっているからどうしても見過ごせなかったのよ。本物がお客さんの見えるところに出たつてんならまだしも、それじゃあんまりにも浮かばれないからね。で、後は逆切れされたから軽くデュエルして追い払って、そのままお礼されてなし崩しに3食屋根付き生活をさせてもらうことになったってわけ」

「なんつーか、お前も大変なんだな」

糸巻は普段の言動からは勘違いされがちだが、あまり他人のプライベートに土足で踏み込むことを良しとはしない。あくまでも相手が心を閉ざす限界を見極めたうえで、決して一線を越えはしない。

それでも今の会話で流されたいくつかのワードは、彼女の興味を引くには十分なものだった。例えばあの言い方からすると、そのケーキ屋とやらの居候するまでこの男は3食屋根なしの生活を送っていたということになる。彼女が彼に初めてカードショップ「七宝」で出会ったあの日、彼はどこで生計を立てていたのだろう。それに、「BV」はデュエルポリスの管轄であるという国際的な了解も、もつと言えば「BV」に一般人は極力関わらない方がいいという一般常識すらもこの男には欠けている。

「あはは、まーね。わかったらもつと労わってもいいよ」

そして彼自身も自らに向けられた疑心に気が付きつつも、あえて自分からその過去を語るようなことはしない。自分は異世界からやってきましたなどという話は、あの悪夢の一夜を経てなんとなくうやむやとなった自身への狂人疑惑を蒸し返すだけだと彼のブレインたる精霊、地縛神 Chacu Chailhua との話し合いの末に釘を刺されているからだ。

そしてなんととはなしに会話が途絶え、微妙な沈黙があたりに漂い始める。最初にその静寂に耐えきれなくなった幼い少女が何でもいから口火を切ろうとした矢先、清明が目を細めて立ち止まった。

「あ、あのお姉様」

「……ん？待った、なーんか嫌な感じがする」

じつと前を見つめて耳を澄ますことしばし、今度は急に小走りになる。つられて女性陣も小走りについていくと、やがて何かの建物の前を取り囲む人垣が見え始めた。

「まずいなー。その店つてのがあそこなんだけど、僕が離れたのバレちゃったかな？すみませーん、通ります！」

「アタシらも行くか、八卦ちゃん」

「はい、お姉様！」

器用に隙間を押し通り、ひよいひよいと最前列に進む清明。それに続いた糸巻と八卦にも、やがて何を見るためにこれだけの人間が集まっているのかが見えてきた。店の前で、2人の男と1人の女が一触即発状態で睨みあっている。

男の方はまだ若く、どちらもせいぜい20歳程度。女の方はそれよりも一回りは上に見える大人びた雰囲気の理知的な美女だが、今はその端正な顔立ちに不機嫌そうな仏頂面が張り付いている。しかし彼女らの何よりの特徴は、その3人がそれぞれ腕に見覚えのある機械……デュエルディスクを装着していることだろう。このご時世で3人もデュエリストがこうおっぴらに出歩いているとあれば、野次馬が集まっても無理はない。もっともこれだけの数の人間が足を止めた理由の半分は、その女に目を惹かれたからというものもあるだろう。顔立ちに見合った長身で足の長いモデル体型に、ゆったりとしたデザインにも関わらずなおその下のメリハリのあるボディラインを主張させる灰色の縦セーターと群青のロングスカート。カメラやマイクといった機材が存在しないことに目をつぶれば、映画か何かの撮影といっても通用するだろう。

苛立ちを押さえるようにゆる三つ編みの銀髪をかきあげた女が、くいくいと左手の手のひらを上に向けて男を手招きした。

「どちらでも構わないが、早くかかってきたらどうだ？どうしてもと言うのなら、多少のハンデとして2人同時でも構わないが」

「ふ、ふざけやがって……！」

あからさまな挑発に男の1人がデュエルディスクを起動し、いよいよ

よデュエルが始まるのかと人垣がざわめく。遅れてもう1人の男も動き出そうとした機先を制するように、糸巻の鋭い声が響き渡った。

「鼓！何やってんだお前こんなところで！」

「……糸巻か。久しいな、だが話は後だ。すまないが挨拶と手土産は今準備するからもう少し待ってくれ」

「悪いがそうもいかねえな。この町は一応アタシの縄張りだ」

ぽきぽきと拳を鳴らしながら前に進み、赤髪と銀髪が横に並び立つ。口の端に煙草を引っかけて火をつけたところで鼓と呼ばれた美女はわずかに口元を綻ばせ、どこかからかうような響きを帯びた声音で聞き返した。

「ご立派な職業意識だな。で、本音は？」

「何面白そうなことやってんだよ、アタシにも暴れさせろ」

「だろうな。仕方ない、そっちの奴は任せた」

「あいよ。じゃあそっちの、アンタがアタシの獲物だ。どうせ期待はしちゃいないが、精々頑張って足掻いてくれよ？」

そんな互いに気心の知れた仲であることをうかがわせる息の合った会話に、野次馬の1人になっていた少女の胸は大人な女性への憧れで高鳴る。しかし同時にその奥には、どこかチクリとしたものが突き刺さった。少女と知り合ってから以降、彼女はあんな表情を浮かべたことはない。それは、少女にとって初めて見る……そして鼓と呼ばれた美女にとっては見慣れたものらしい、糸巻の一面だった。

「まあなんとなく察しはつくけど……おばさん、すいません遅れました」

「ああ、清明ちゃん！よかったよ、もうおばさんどうしようかと思っただけ困ってたのよ」

少女が初めて感じた嫉妬の欠片に自分でも戸惑う、その傍らで。別の方向に目を向けた清明に声を掛けられて振り返ったのは、いかにも町のケーキ屋さんといったイメージそのままの恰幅のいいエプロン姿の中年女性だった。安堵の表情と共に歓迎の意を表現するその女性に駆け寄った清明が、目の前の出来事について問いかける。

「で、おばさん。これ一体、どうなってます？」

「それがねえ、さつき清明ちゃんが出てつてすぐにあつちの子がお客さんで来たんだけど、そこにあの2人も入ってきてね。お店の中で暴れそうだったからおばさん怖かったんだけど、それをあの子が止めてくれて」

その言葉に、改めて彼は銀髪の女性へと視線を向ける。おそらく年齢は糸巻と同程度かやや下、どう鼻眞目に見ても「子」と評するにはいささか無理のある年齢だが、それは固く口を閉ざしておいた。この世界の人間は、「BV」の危険性は身にしみてわかっている。2人がかりでデュエルディスクを見せびらかしているならば、デュエリストでもないこの店の人間に自衛しろとは最初から無理な注文だ。

「あ、清明ちゃん。あの2人、助けてあげなくて……」

「んー、まあ大丈夫でしょう。というかあの2人、かなり手練れっぽいです。下手したら僕より強いですよ、変に手出ししても邪魔になるだけですよ」

すっかり観戦気分になって見守る他所では、ちょうど4人のデュエルが始まろうとしていた。どちらに注目しようかと一瞬考えて、銀髪の女性に集中する。言うまでもなくお姉様の即席応援団になって拳を振り上げる隣の少女の存在もあるが、単純に糸巻ならばあの程度の相手にはどうせ勝つだろうと踏んだのだ。ならば、手練れなことはその所作から予想がつくものの実力未知数なもう片方のデュエルが気にかかる。

「デュエル！」

先攻を取ったのは、チンピラの男。よほどいいカードでも引けたのか下卑た笑みを浮かべつつ、意気揚々とカードを出した。

「メインフェイズ1の開始時に永続魔法、スローライフを発動！このカードは俺のフィールドにモンスターが存在しないときにだけ発動でき、互いのプレイヤーは自分のターンに通常召喚か特殊召喚のどちらか片方しか行えなくなる。俺はこのターン通常召喚を行い、終末の騎士を召喚！このカードは場に出た際、デッキから閥属性モンスター1体を墓地に送ることができる。俺が選ぶカードはレベル5、異界の棘紫獣だ」

終末の騎士 攻1400

「おつと、せつかくスローライフを発動したのに除去されたらつまらないからな。このカードも発動するぜ、永続魔法遮攻カーテン！このカードは俺のカード1枚が破壊されるとき、このカードを身代わりに破壊することができる。さあ、これでターンエンドだ」

あからさまな下準備に費やされたターンを終え、いよいよ鼓へとターンが移る。満を持してカードを引き……わずかな沈黙の後、少し首を傾げた。

「……ふむ、少し面倒だな。仕方ない、このターンは超重武者ソードキユーキユーキユー999で受けて立つ。そして999は場に出た際、自身の表示形式を変更できる。私はこれでターンエンドだ」

スローライフによりこのターン選んだのは、鼓もまた通常召喚。重量級の和装らしき意匠の施された赤い人型機械が、その太い両腕を打ち合わせて絶対防御の姿勢をとる。

超重武者ソード999 攻1000↓守1800

……え、それだけ？誰も口に出しはしないが、そんな気配があたりにも満ちる。着々と攻め込む準備を進めるチンピラに対し誰がどう見ても防戦一方な1ターン目に、皆が反応に困り何とも言えない微妙な空気に包まれる。まして、そのすぐ隣ではこの通り。

「オラオラオラ、墓地から妖刀―不知火の効果発動！このカードとレベル6の刀神―不知火を除外することでレベル8のアンデット族シンクロモンスターを特殊召喚する、輪廻シンクロ―さらに速攻魔法、逢華妖麗譚―不知火語を発動、手札の馬頭鬼を切ってデッキから逢魔の妖刀―不知火を特殊召喚。逢魔の妖刀をリリースして除外されたカードの中から屍界のバンシーと妖刀―不知火を守備表示で特殊召喚、さらに今捨てた馬頭鬼を墓地から除外して墓地のドーハスーラを……」

絶好調の糸巻によるアンデットならではの展開力を生かした特大ソリティアが行われているのだ。必然的に対照的なその2つの盤面は比べられ、余計になんともいえない雰囲気濃厚になる。

しかし当の本人はそんな気配などまるで気にした様子もなく、い

たつて冷静に待ち構える。

「ん、どうした？サレンダーでもするつもりか？」

「舐めやがって、後悔しやがれ！俺のターン……守備固めか、ならこのカードだ！お前の超重武者ソードー999をリリースして、ヴォルカニック・クイーンは相手の場に特殊召喚できる！この効果での特殊召喚をするターンは通常召喚ができないが、スローライフの効果でどのみちこのターン俺に通常召喚は不可能だ」

ヴォルカニック・クイーン 攻2500

「ほう、デメリットの重複か。少しは戦略があるようだな」

999の姿が溶岩に呑み込まれ、長い体を持つ巨大な炎のドラゴンがその後釜に居座る。その体から垂れる溶岩が鼓のすぐそばの足元に落ちてコンクリートを焼くも、その理知的な美貌はまるで動じた気配すらも見せない。そしてその余裕が、余計に若者の苛立ちを募らせる。

「バトルだ！やれ、終末の騎士！」

「仕方がないな。迎え撃て、ヴォルカニック・クイーン」

黒衣の剣士が剣を構えて突撃し、溶岩の蛇が火炎弾でそれを迎え撃つ。当然その後には考えられるのは、コンバットトリックによる戦闘破壊とダメージ。しかし、そうはならなかった。その剣は炎の体に触れるよりも先に溶岩へ沈み、ついでその本体も炎に呑み込まれ崩れ落ちる。

終末の騎士 攻1400（破壊）↓ヴォルカニック・クイーン 攻

2500

男 LP4000↓2900

「ほう」

「熱いぜ……だがな、俺は正気だぜ。俺のモンスターが戦闘で破壊されたこの瞬間、手札の異界の棘紫竜と墓地の異界の棘紫獣の効果を同時に発動！それぞれ自身を特殊召喚する！」

そしてフィールドに、紫色の茨が伸びる。それぞれ同じ濃い紫の体色を持つ異形の竜と獣が、終末の騎士の亡骸を媒体としてその身を自らの異界から現世のフィールドへと現れる。

異界の棘紫竜 攻2200

異界の棘紫獣 攻1100

「これで、俺のバトルフェイズは終了だ。だがな、ここから俺の攻撃だ！俺はレベル5の異界の棘紫竜と、異界の棘紫獣でオーバーレイ！2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築。エクシース召喚！」

2体の茨を持つモンスターが紫の光となり、螺旋を描いて空中で結合し……そして反転してア落下し、足元に開いた空間へと吸い込まれる。無音の爆発が起きたそこで、赤い体を持つ溶岩の恐竜が産声を上げた。

「灼熱のマグマ噴き上がるとき、空は砕かれ大地はひれ伏す！ナンバース No.6
1、ヴォルカザウルス！」

No.61 ヴォルカザウルス 攻2400

「ヴォルカザウルスか。なるほど、強力なカードには違いないな」
「その余裕、こいつの効果で吹き飛ばしてやるよ。ヴォルカザウルスの効果発動！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手フィールドの表側表示モンスター1体を対象に取り破壊。その攻撃力分のダメージを相手に与える、マグマックス！」

No.61 ヴォルカザウルス(2) ↓(1)

赤色の恐竜の周囲を回る光球のうち1つがその体に吸収され、エネルギーを解放したヴォルカザウルスが胸の期間から超高温の火焰を放つ。その温度はいったいどれほどのものなのか、本来炎を操り溶岩の体を持つはずのヴォルカニック・クイーンが焼かれ、限界を迎え、生物とは思えないほどにドロドロに溶けていく。

「くっ……」

鼓 LP4000 ↓1500

そしてそのダメージは、当然のごとくデュエルポリスの力で中和しきれなかった分の「BV」によってそのコントローラーであった鼓にも降りかかる。無造作に顔をかばった左手にも火の粉がかかり、セーターにいくつかの焦げ目がついた。

しかし、逆に言えばそれだけだ。チンピラが下卑た欲望をもって内

心で期待していた苦悶の呻きも、火傷の苦痛に歪む表情も、求めた反応は何一つ引き出せていない。そのことに不満を覚えつつも、すぐさま次の動作にかかる。

「ちっ、お高く留まりやがってよ。まあいい、魔法カード、希望の記憶を発動！このカードは俺のフィールドにN.O.が存在するとき、その種類の数だけドローできる。ヴォルカザウルスの1枚ドロー……ケツ、やっとな引けたのかよ。永続魔法、ギャラクシー・ウェーブを発動！このカードの効果により、これ以降俺がエクシース召喚に成功するたびに500のダメージが発生するぜ。俺はヴォルカザウルスのオーバーレイ・ユニット1つをコストに、ランクアップ・エクシース・チェンジ！」

号令に従い役目を終えたヴォルカザウルスが赤い光球となり、先ほどと同じく舞い上がってから反転し地表の空間に吸い込まれる。そして新たに生まれたのは赤とは真逆の青、そして雪のような純白。

「このカードはランク5モンスターからオーバーレイ・ユニット1つを取り除くことで、その上に重ねてエクシース召喚ができる。極寒の吹雪荒ぶるとき、大地は枯れ果て海は凍り付く！エクシース召喚、N.O.21！氷結のレディ・ジャスティス！」

N.O.21 氷結のレディ・ジャスティス 攻5000↓1500

「こいつの攻撃力は、自分のオーバーレイ・ユニット1つにつき1000ポイントアップする……だが、そんなことはどうでもいい。このエクシース召喚をトリガーに、ギャラクシー・ウェーブの効果が発動！」

鼓 LP1500↓1000

「まだまだ行くぜ！俺はランク6のレディ・ジャスティスを素材とし、ランクアップ・エクシース・チェンジ！疾風の雷光走るとき、海は砕かれ空は引き裂かれる！エクシース召喚、迅雷の騎士ガイアドラゴン！」

3たびモンスターが光球と姿を変え、レディ・ジャスティスがさらに新たな姿へと生まれ変わる。次いで現れた迅雷のモンスターは、緑を基調とした鎧を纏う龍に騎乗し、それと一体化した半機械の騎士。

迅雷の騎士ガイアドラゴン 攻2600

「そして、またギャラクシー・ウェーブの効果が発動するぜ。どうだ？俺の必殺コンボの味は」

鼓 LP1000↓500

重ね重ね与えられた効果ダメージに、わずか1ターンで鼓のライフは残り500まで削られる。だが、彼女が不利なのはライフだけではない。スロークライフは通常召喚か特殊召喚のどちらかを封じ込め、もう1度守備モンスターを立てて凌いだところで貫通能力を持つガイアドラグーンの前には壁にすらならず、仮に攻撃を耐えきっても次にチンピラがエクシース召喚を行えばギャラクシー・ウェーブのバーン1回すら耐えきれない。そしてそのどのパーツを破壊しようにも、遮攻カーテンは1度だけそれを防ぐ。

どれだけ鼻屑目に見積もっても、彼女に残された逆転のチャンスは次の1ターンのみ。だがスロークライフがあつたとはいえ最初のターンをモンスター1体の召喚のみで終えざるを得なかった彼女に、果たしてまともな逆転の手など打つことができるのか。

それでも不思議と、清明には彼女が敗北するとは思えなかった。なぜ今が初対面な彼女の實力をそこまで信じることができたのか、それは彼自身にもよく分からない。しいて言えば、それが強者を嗅ぎ分けるデュエリストとしての彼の嗅覚なのだろう。

「ターンエンドだな？なら私のターンだ。糸巻、そつちはどうだ？」

「ん？ああ、アタシはもう終わったとこだよ」

「そうか。こちらは今、終わらせる」

「な、なんだと!？」

デュエルが始まる前と何ら変わらない、強い自信に裏打ちされた冷静沈着な態度。あまりにも現状の盤面にそぐわないその会話の内容に激昂するチンピラだが、その口調は尻すぼみに弱々しくなっていた。鼓が少し黙れと言わんばかりに、ぎろりと冷たい視線を向けたのだ。

「では、ラストターンだ。私はレフト ペンデュラム P スケールにスケール1のメタルフォージェ・ゴールドライバーを、ライトP《ペンデュラム》ゾーンにスケール8の超重輝将サンー5をセッティング」

「はあ!? 超重武者にメタルフォーゼだあ!? 一体、何考えてやがる!」
「そう喚くな、少し声大きいぞ。これで私はレベル2から7のモンスターを同時に召喚可能、そして奇遇にも私の手に残る手札4枚のうち3枚は、全てその基準をクリアするモンスターばかりだ。奇跡を起こすエネルギーよ、不動の戦士に大地踏みしめる力を宿せ! ペンデュラム召喚!」

赤熱の斧を手に貴金属のバイクを乗りこなすライダーと、重金属の鎧に身を包む不動なる機械の将。本来交わるはずもない2つの勢力が、天空に立ち上った2つの光の柱によって結びついた。そして両勢力の戦士たちが、完成した光のアークに導かれ共に戦場へと降り立つ。

超重武者ダイー8 ^{ハチ} 守1800

メタルフォーゼ・シルバード 攻1700

超重武者カゲボウーC 守1000

「まず私は、ダイー8の効果を発動。私の墓地に魔法、罫が存在しないとき、守備表示のこのカードを攻撃表示に変更することでデッキから超重武者装留と名の付くカード1枚をサーチする」

そして最初に動いたのは、ローラー型の両足を持ち巨大なリアカーをいとも軽々と引く機械の兵士。関節を伸ばしてリアカーに手を入れ、大量に積み込まれた荷物から1対の副腕のような物体を取り出した。

超重武者ダイー8 守1800↓攻1200

「この効果によって超重武者装留チュウサイをサーチし、そのままダイー8に対し装備。チュウサイはモンスターカードだが場の超重武者に対し手札から装備カードとして装着することができ、装備状態のときにそのモンスターをリリースすることでデッキから更なる超重武者1体をリクルートすることができる。鐘の音響く大地踏みしめ、百万の敵を迎え撃て! 超重武者ビッグベンーK、ここに在り!」

副腕を装着したダイー8の姿が光となって消え、遙かに巨大な鋼鉄の鬼神がその場に仁王立ちした。僧衣を模した装甲に身を包み、得物の薙刀を構えるその巨体には目まぐるしく振れるいくつものメー

ターや断続的に蒸気を吐き出す太いパイプが伸びており、その技術力の高さが垣間見える。

超重武者ビッグベン―K 守3500

「最後の一押しだ、カゲボウ―Cの効果を発動。このカードをリリースすることで、手札から別の超重武者1体を特殊召喚することができる。私が呼び出すのはレベル1、超重武者ツツ―3」

超重武者ツツ―3 守300

「さて、これで最後だ。先ほど、メタルフォーゼの採用に随分と驚いていたようだが……無論、私とて理由もなくこのテーマを採用したわけではない。メタルフォーゼ・ゴールドライバーのペンデュラム効果を発動、私のフィールドから表側表示のカード1枚を破壊することによりデッキよりメタルフォーゼの名を持つ魔法、または罠1枚をセットすることができる。今特殊召喚されたツツ―3を破壊することで……ここまで来たなら何でもいいが、とりあえずメタルフォーゼ・カウンターでも伏せておこう」

呼び出されて即座に、その名が示す通り巨大な鼓の形をしたモンスターが爆散する。しかし、その犠牲は決して無駄ではない。すべての動きは、彼女の手の中にある。

「この瞬間、ツツ―3の効果を発動。このカードがフィールドから戦闘またはカード効果により破壊され墓地に送られた場合、墓地に存在する超重武者1体を蘇生することが可能となる。ソード―999を守備表示で蘇生」

超重武者ソード―999 守1800

「知ってるぜ、超重武者……確か守備表示で守備力を使つての攻撃ができるんだよな？だが、いくらモンスターを並べたところでガイアドラグーンの攻撃力を越えられるのはビッグベン―Kだけ、そして戦闘破壊は遮攻カーテンで防げる！」

1ターン目とはまるで違う、別人のような動きに冷や汗を流しながらも言い放つ。だがそんな空元気を、冷笑ひとつと共に彼女は鼻で笑った。

「30点だな。超重武者の特性について知識があつたことは素直に褒

めておきたいが、いかんせんその知識が浅すぎる。痛い目にあつて学ぶといい、バトルだ。私はビッグベン―Kで、迅雷の騎士ガイアドラグリーンに攻撃する」

腰のメーターが一斉に振り切れ、超重量の巨体が動き出す。大量の蒸気を吐き出しながらその中心で目に光を宿す機械の僧兵が小手に包まれた左腕を全力で地面に叩きつけると、大地が砕けるとともに衝撃波がガイアドラグリーンへとまっすぐ走る。

「ひっ……しゃ、遮攻カーテンだ！」

超重武者ビッグベン―K 守3500↓迅雷の騎士ガイアドラグリーン 攻2600

男 LP2900↓2000

遮攻カーテンが身代わりとなったことで、どうにか破壊の一撃から踏みとどまるガイアドラグリーン。だがほっと息をつくチンピラ目の前でその槍に、鎧に、みるみるうちにひびが入っていく。

「な、なに!?!」

「だから勉強不足だといつたんだ。ソード―999が場に存在する限り、超重武者との戦闘で破壊されなかったモンスターは全てダメージ計算後にその攻守が0となる」

「馬鹿な、それじゃ俺は、最初っからもう……」

「その様子だと、手札誘発も握っていないようだな。ならばこの盤面を許した時点で詰み、だな」

無慈悲な宣告と共に、ついに竜騎士の装備に限界が訪れた。示し合わせたかのようにすべてが粉々に砕け散り、もはやなんの意味も持たぬガラクタが残るのみ。

迅雷の騎士ガイアドラグリーン 攻2600↓0 守2100↓0

「続けよう。メタルフォーゼ・シルバードでガイアドラグリーンにもう1度攻撃」

女ライダーが流線型のバイクを走らせ、駆け抜けざまに手にした鍔金銃を乱射する。無数の光弾に撃ち抜かれ、竜騎士は静かに力尽き地面に沈んだ。

メタルフォーゼ・シルバード 攻1700↓迅雷の騎士ガイアドラ

グリーン 攻0（破壊）

男 LP2000↓300

「最後だな、超重武者ソード―999で攻撃。そうそう、言い忘れたが本来、999に守備表示のまま攻撃できる効果はない。しかしビツクベン―Kが存在する限り、私の超重武者は全て守備表示での攻撃が可能となる」

「なんなんだよ……お、お前え！一体、なんなんだよおお!？」

ズシンズシンと1歩1歩を踏みしめて近づくと、確実な敗北の足音に、腰を抜かしたらしくその場にへたり込んだチンピラが錯乱気味に喚く。その言葉にわずかに眉をひそめた彼女が、ああ、と銀髪を揺らし、小さく頷いた。

「すまないな、私としたことが自己紹介を忘れていた。元プロデュエリストにして現デュエルポリスフランス支部代表、鼓千輪^{せんりん}……『錬金武者』の鼓だ」

その名乗りを聞き、あつと八卦が声を上げる。しばらく前に見たあの記憶、テレビのニュース映像が蘇ったのだ。

「お、思い出した……あの人！」

「んー？どったの八卦ちゃん」

「あの鼓って人、前にテレビで有名になった人です！ほら、フランスでフルール・ド・ラバンク社が摘発された時の！」

そして名乗りを終えるとともに、ちやうどチンピラの眼前へとたどり着いたソード―999が背負った大量の刀を振りかぶった。1瞬の溜めの後、それらを一斉に叩きつける。

超重武者ソード―999 守1800↓男（直接攻撃）

男 LP300↓0

ターソン17 鍊金武者対赤髪の夜叉

「んで？鼓、お前一体何しに来たんだ？」

デュエルが終了してから、わずか10分。敗北したチンピラ2人が這う這うの体で逃げ帰り、見せもんじゃねえぞと睨みを効かせて野次馬を追い払い。経営危機を脱したケーキ屋のおばさんからせめてもお礼にうちのケーキでもとの誘いを受け、それじゃまあと誘われるがままに店内に入り、ずらりと並べられた甘味を前にして糸巻が口火を切るまでの時間である。清明は厨房の方に消えていったため、店内はさながら小規模な女子会の場と化していた。

1つの国を統括するフランス支部代表と、激戦区とはいえ日本の小さな町担当。同じデュエルポリスとはいえ今の立場には天と地ほどに大きな隔たりがあるものの、プロ時代から長い付き合いのある2人の前にそんな地位の違いなど存在しない。いつもの煙草の代わりにイチゴを突き刺したフォークをびしっと赤髪の美女が向けると、指された銀髪の美女もこれまた単刀直入に、マカロン片手に答えを返す。「何を言っている、糸巻。本部に今年はデュエリストフェスティバルするから人員寄せせとのたまったのはお前の方だろう。あの摘発の件もあつて働きづめだったから、有休も余ってたことだしな。リフレッシュがてら故郷、日本の土でも踏んで来いとお達しだ」「ええっ!？」

当然だろうと言わんばかりの返答にすつとんきような声を上げたのは、ちやつかり糸巻の隣の席を確保して生クリームのかけらを頬に付けた八卦である。当然その場にいた全員の視線が向けられたことに気づいてやや赤面しつつも、それでも驚愕の方が勝りおずおずと続ける。

「え、えっと、鼓さん……ですよね」

「ああ。そういう君は？」

ぶつきらぼうな言葉ではあるが、そこに刺々しきや拒絶は感じられない。気さくで荒っぽい糸巻とは対照的なようで、どこか人を引き付ける魅力という点では根が同じものを持つ。それが、鼓千輪という女

である。

だからだろうか。不思議と少女の口からは、すんなりと言葉が出た。

「申し遅れました！私、八卦九々乃と申します。まだまだ半人前の身、及ばずながら糸巻お姉様の元で、一人前のデュエリストになるため精進させて頂いております！」

「ひとつ補足すると、七宝寺の爺さんの姪っ子だな。若いのに大した子だぜ」

「七宝寺さんか、懐かしい名前だな。よろしく……いや待った。糸巻お姉様？糸巻、お前まーた女の子引っかけたのか」

「うるせえ」

「ま、また？」

理知的で整った眉を細めて意味ありげなジト目を送る鼓に、露骨に顔をしかめる糸巻。しかしそれで済まないのが、すぐ隣の少女だった。

「えつと、お姉様？どういう意味かお聞きしてもよろしいでしょうか」
「それには私が答えよう、八卦ちゃんやら。その女は昔から行く先々でとにかく女性受けが良くて、そのくせ鈍感なものだからしょっちゅうファンを勘違いさせる言動を繰り返してな。人の趣味をとやかく言う気はないが、おかげでよくつるんでいた私までそちらの趣味があるんだとまことしやかに噂となり、あの時はどれだけ迷惑したところか」

「へえ……」

その実感のこもった言葉にギギギつと首を曲げ、隣の赤髪にそれまで彼女が見たことがないほどに据わった視線を注ぐ少女。そしてどこか空恐ろしいものを感じながらも気づかぬふりでさりげなく視線を外し、なるべく遠くの皿に手を伸ばす糸巻。そんな2人の様子を眺め、呆れたように鼓が手の中のマカロンを口に放り込んだ。

「もう10年以上経って少しは落ち着いたかとも思ったが、期待するだけ無駄だったようだな」

「お前が誤解されるようなこと抜かすからだろうか！」

「そんなもの、私が当時受けた扱いに比べればなんてこともないだろう。ちなみにだが、私は今でも根に持っているぞ？お前が爆笑しながら見せてきた、レズビアンデュエリストの双極などというゴシップ記事。あれが作られたのも、お前のファンから剃刀の刃を贈られたのも、ついでに私が二日酔いで苦しんだのも。元はと言えば、お前が私を誘って毎晩のように飲み歩いてたからだろうが。男だろうと女だろうと、他にも飲み仲間なんていくらでもいたはずだが」

「それはしゃーない。お前が一番、一緒に酒飲んでアタシが面白かったからな」

「……ふむ。わかるだろう、八卦ちゃん？これで無自覚だ、こいつはこういう女だ。あまり入れ込まないうちに、早々に諦めた方が身のためだぞ」

色々と諦めたような視線に対し、少女もなんとも言えない顔でこくこくと小さく頷く。もつともその表情を見れば、恋に恋する少女の気持ちがいまだ変わっていないことは容易に読み取れたのだが。

だが、今度それで済まなかったのは糸巻の方だった。

「お前なあ、黙って聞いてやりや言いたい放題言いやがって。喧嘩売ってんならアタシはいつでも買うぞ、コラ」

「ほう？そこまで大口叩くからには、当然腕は落ちていないんだろうな。先の一戦なんて、あんなものウォーミングアップとしても認められんぞ」

冷笑と共に返される、売り言葉に買い言葉。わずかな睨みあいの末に2人のデュエリストが席を立ちあがりデュエルディスクを手にしたのは、まるで鏡に映したかのように全く同じタイミングだった。

「え、えっと、あの」

「そゆことするなら外行ってくんないかなあ……ほれ八卦ちゃん、ちよつと下がってようか」

立ち昇る鬨気を察知してか、ふらりとエプロン姿の清明が厨房から帰ってきてわたわたと戸惑う少女を後ろに下がらせる。そのまま2人の間にある甘味いっぱいの机をどかしたそのタイミングで、2人の声が店内に響いた。

「デュエル！」

「よし糸巻、先攻はくれてやろう」

「いい度胸だ、なら貫つてくぜ。アタシのターン、ユニゾンビを召喚！」

ユニゾンビ 攻1300

まず糸巻が初手に繰り出したのは、アンデット族の中核をなす2人1組で肩を組むゾンビ。

「ユニゾンビは1ターンに1度デッキからアンデットを墓地に送り、モンスター1体のレベルを1つ上げることができる。アタシが選ぶのはグロリアップ・ブルーム……そしてブルームは墓地に送られた時、自身を除外することでデッキからレベル5以上のアンデット1体を手札に加えることができる。その時にアンデットワールドが発動していれば、このサーチを特殊召喚にすることもできるがな。アタシが選ぶのはレベル5、ヴァンパイア・フロイラインだ」

「フロイラインか。面倒だが、まあどうにでもなるか」

眉一つ動かさず戦況を分析する鼓とは対照的に、獰猛な笑みを口の端に浮かべつつ糸巻がさらなる一手を打ち出す。彼女の仕込みは、まだ始まったばかりなのだ。

「もう1度ユニゾンビの効果を発動！手札1枚をコストに、モンスター1体のレベルをさらに1上げる。アタシが選ぶのはこのカード、屍界のバンシード」

ユニゾンビ ☆3↓4↓5

「こんなところだな。カードを2枚セットしてターンエンド」

「では、私のターンだな。超重武者装留イワトオシを召喚」

満を持して召喚されたのは、巨大な青い弓のような形をしたモンスター。モンスターとはとても思えない弓そのものの威容が、射線上にユニゾンビの姿を捉える。

攻撃力ではユニゾンビに及ばない1枚……しかし、糸巻はそれを通さなかった。

「っ、させるかよ！アタシはこの瞬間にトラップカード、バージェストマ・カナディアを発動！召喚されたイワトオシには、そのまま裏側守

備表示になつてもらうぜ」

超重武者装留イワトオシ 攻1200↓???

細長い体を持つ古代生物が地中から飛び出し、イワトオシに何重にも巻き付いてその姿を地面に落とす。セツト状態に強制変更されたイワトオシを一瞥し、仕方ないとばかりに息を吐く。

「さすがに通してはくれないか。それにしても、初動潰しとはな。このデツキがフルモン超重武者なら、この時点でだいぶ苦しかったぞ」「つてことは、まだ動けるみたいだな？そう来なくっちゃ張り合いがないな」

「まったく、私よりお前の方がよほど言いたい放題じゃないのか？とはいえ、ご期待に沿えるよう頑張つてみるか。魔法カード、苦渋の決断を発動。デツキからレベル4以下の通常モンスター、メタルフォーゼ・ステイエレンを墓地に送り、さらにその同名カード1枚を手札に加える。そして魔法カード、メタルフォーゼ・フュージョン錬装融合を発動。私の手札に存在するメタルフォーゼモンスター、ステイエレン。そして場のイワトオシを素材として、融合召喚を行う！」

赤熱のライダーと、機械仕掛けの大弓。2つのカードが渦を描いて空中で混じりあい、超重の息吹に触れた卑金属は貴金属へとその真の力を覚醒させる。

「堅牢なる鋼鉄の魂が、輝き纏い昇華する。融合召喚！叫べ、アダマンテ！」

メタルフォーゼ・アダマンテ 攻2500

騎乗していたバイクが変形し、ステイエレンの装甲となる。肩部分から生える燃え盛つたままの2つのタイヤはその回転エネルギーから無限のパワーを生み出し、腰に移動した排気管からは勢いよくジェット噴射ばりに炎が吹き上がる。そのエネルギーの行き先は、彼が手にした2本の剣……赤熱の二刀流を構え、アダマンテがその切っ先を糸巻へと向ける。

「そしてこの瞬間、フィールドから墓地に送られたイワトオシの効果を発動。デツキから超重武者モンスター1体を手札に加える。超重武者ツツ―3を手札に加え、錬装融合の更なる効果を発動。このカー

ドをデッキに戻すことで、カードを1枚ドロウする。ふむ……バトルだ。アダマンテでユニゾンビに攻撃」

大量の爆炎を噴き上げて、炎の軌跡がユニゾンビへと迫る。しかしその剣先が届く寸前、アダマンテの眼前に漆黒の傘がパツと開いた。「モンスターの攻撃宣言時、アタシは手札からヴァンパイア・フロイラインの効果を発動！このカードを守備表示で特殊召喚させてもらう」
ヴァンパイア・フロイライン 守2000

傘の持ち主は、不気味なほど白い肌と絵と対照的に赤く妖しい光を放つ目をした人形のような金髪美女。しかしその足元には、本来存在するはずの影がない。より正確に描写すれば、その手にした傘の影はしっかりと地面に浮かんでいる。だというのに肝心の彼女だけが、地面に影を落としていないのだ。

しかし、それはサーチを見ていた鼓にとっても想定内。「削りだけでも仕掛けておくさ。攻撃対象を変更、そのフロイラインに攻撃」

肩のタイヤが高速回転し、減速した推進エネルギーが再び蘇る。炎の軌跡を描き降りぬかれた細身の剣が、女吸血鬼の傘とぶつかって激しく火花を散らした。

「ならこの瞬間、フロイラインの効果発動！アタシのアンデット族が相手モンスターとバトルを行う時、フロイラインにアタシの血ライフをくれてやることでその攻守を上げる。アタシが払うライフは……まあ500で十分だ、な！」

フロイラインの傘の影から1匹のコウモリが音もなく宙に舞い、糸巻の伸ばした腕にその鋭い牙を深々とめり込ませる。プレイヤーの生き血はヴァンパイアの活力となり、一時的なブーストを得たフロイラインの細腕が錬金のエネルギーと互角の膂力を発揮する。

糸巻 LP4000↓3500

メタルフォーゼ・アダマンテ 攻2500↓ヴァンパイア・フロイライン 守2000↓2500

「ご苦労、アダマンテ。それにしても随分慎重になったものだな、糸巻。昔のお前ならフロイラインの1度に発動できる上限、3000ラ

イフを一気に払って反射ダメージを稼ぎにきてもおかしくなかったが」

「若さゆえの無茶、ってやつだろうな。ま、いくらアタシが若くてもそこまでじゃないってことさ」

「若……？ハッ」

「おう鼻で笑うのやめーや、そもそもお前もアタシとはタメだろが」

自虐めいた軽口の応酬。一見じゃれているだけにも聞こえるが、両者の視線は明らかに言葉のドツジボールが進むたびにその鋭さを増していた。あまりに大人げのないといえばその通りの光景ではあるが、本人たちは大真面目である。静かながらも激しい睨み合いに部屋の気温まで数度下がったような錯覚に襲われ、名実ともにまだ若き少女は小さく身震いした。

ややあつて鼓がふつと、わざとらしい口調で肩をすくめる。

「おや、そうだったか？カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

「待ちな、このエンドフェイズにトラップ発動、バージエストマ・オレノイデス！今伏せたうち右の伏せカード、こいつの効果で破壊させてもらうぜ。そしてこの発動にチェーンして墓地のカナディアの効果が発動、こいつをモンスターとして蘇生する」

バージエストマ・カナディア 攻1200

赤みがかった平たい体の古代生物が床を這って伏せカードに襲い掛かり、その一方で糸巻の場には先ほどイワトオシを縛り上げていたカナディアがフィールドに戻りとぐるを巻く。ターンの移る直前を狙いすました正確な一撃を前に、しかし鼓は動揺の色など浮かべはしなかった。

「残念だったな、糸巻。やはり勘が鈍ったか？お前が今破壊したこの伏せカードは、メタルフォーゼ・コンビネーション。このカードが破壊され墓地に送られたことにより、私はメタルフォーゼモンスター1体……レアメタルフォーゼ・ビスマギアを手札に加える」

「外れ引いちまったか？ま、それならそれで構わないさ。アタシのターン、ドロード。よしよし、素引きできたか。さあ鼓、久方ぶりにアタシの領土に案内してやるよ。生あるものなど絶え果てて、死体が

死体を喰らう土地……アンデットワールド、発動！」

揺れる赤髪を中心に、みるみるうちに周りの風景が変化していく。おなじみの血色の沼地や飛び交う死霊の姿はここが室内ということもあつてか見られないが、それでも壁に床に天井がソリッドビジョンによつて塗り替えられ、崩壊した廃墟の一部屋と化していく。厨房の方から女性の物らしき短い悲鳴と、かなりの怒気を含んだ少年の呻き声が上がった。

バージエストマ・カナディア 水族↓アンデット族

メタルフォーゼ・アダマンテ サイキック族↓アンデット族

「あちらの彼がだいぶ怒っているようだが、糸巻」

「あー……やべ。まあ後だ後、さっさと終われば傷は浅いな。このターンもユニゾンビの効果発動、アンワの効果でアンデット族になったカナディアを対象に馬頭鬼を墓地に送り、そのレベルを1上げる……と言いたいところだがな、カナディアはモンスターとして場にいる限り他のモンスター効果を受け付けない。よつてそのレベルは2のままだ」

「盤面を触ることなく墓地肥やしだけを引き出したか。なるほど、よく考えたものだ」

「このままいくぜ？レベル2のカナディアに、レベル5となつたままのユニゾンビをチューニング。モンスター扱いのカナディアはフィールドを離れる場合除外されるが、そんなことはもう関係ないな。戦場貪る妖の龍よ、屍闘の果てに百鬼を喰らえ！シンクロ召喚、レッドアイズ・アンデットネクロドラゴン真紅眼の不屍竜！」

☆2+☆5+☆7

真紅眼の不屍竜 攻2400↓3300 守2000↓2900

今彼女たちがいる店内は、決して狭いわけではない。それでもなお、糸巻お気に入りのカードであり彼女のエースの一角を務める腐り果てた死骸の龍の巨体は到底その室内に収まるものではない。しかし、デュエルディスクに使われる技術はそんなことでエラーを吐き出したりはしない。デュエルの開始と同時にあらかじめ周囲を自動スキャンし、その空間の容量に合わせてソリッドビジョンのサイズを自

動で調整する機能が備わっているのだ。

すなわち、何が起きるのか。意気揚々と彼女がシンクロ召喚し、呼び出した鬼火の目を持つ死骸の龍。その偉容は店のサイズに合わせ縮尺を大きく縮まされ、出てきたそれはせいぜい大型犬程度のサイズとなっていた。なまじ人型のアダマンテやフロイラインが普段通りの人間サイズで睨みを利かせる中、御大層な口上とともに現れたそのちんまい姿はあまりにもシュールな光景で。

「え、えつと……マスコットみたいでいいですよ、お姉様！」

干支でほぼ2回り年下の少女にまで気を使われた、精一杯のフオーローだった。

「いいんだよ別に、デカけりやいってモンじゃねえ。これだってかわいもんだろ？」

「お前が言うと言得力がないな」

からかうようにそう言い捨てて、意味深な視線をジャケット越しになお抑えきれずに内側から押し上げる彼女の胸元に向ける鼓。何が言いたいのかすぐに合点がいった彼女が無言でジャケットの前を合わせ直すが、そんなことでその存在感が薄まりはしない。

「……さっきのゴシップ記事の話だな、お前のそーいうところも原因だとアタシは思ってるぞ。もうこの話はやめだ、やめ。今墓地に送った馬頭鬼を除外し、墓地のアンデット族を蘇生する。屍界のバンシー、復活！」

腐肉の龍がその小さな翼を目いっぱい広げて上を向き、体軀に似合わぬ空気を揺るがすほどの咆哮を放つ。するとどこからともなく冥界の主の呼び声に応えるかのように、歌うような女性の声が返ってきた。そしてフロイラインの横に現れる、これまた異様に白い肌をしたボロ布のような服を1枚身に着けるのみの薄幸そうな美女。

屍界のバンシー 攻1800

真紅眼の不屍竜 攻3300↓3200 守2900↓2800

「あのカードは確か……アンデットワールドに対象耐性及び破壊耐性を与える、か。やむを得ない、必要経費だな」

「まだまだ、真紅眼の不屍竜の効果！このカードの攻守は常に、互いの場

と墓地のアンデット族1体につき100ポイントアップするぜ。さあ、お待ちかねのバトルフェイズだ！真紅眼の不屍竜でメタルフォーゼ・アダマンテに攻撃、獄炎弾！」

小さな体からは想像もできない火力の、死霊を燃料とした青い火炎弾が放たれる。赤く燃え盛る剣をクロスさせて受けきろうとしたアダマンテだが、徐々にその赤が青に呑み込まれ、食いちぎられ、焼き尽くされていく。

しかし、そこに異を唱える存在があつた。カンカンカンと警鐘を鳴らし、1両編成の小型列車が両者の間に割って入つたのだ。

「この攻撃を通せば、真紅眼の不屍竜の効果でさらに墓地のアンデットを蘇生される。しかし逆に言えば、この攻撃さえ防げば糸巻、お前に攻め手はない。手札から工作列車シグナル・レッドの効果を発動。相手モンスターの攻撃宣言時にこのカードを特殊召喚して強制的に攻撃対象をこのカードに変更、そしてこのカードはその戦闘によって破壊されない……惜しかったな、糸巻」

「さすがに止めどころは弁えてるか、ええ？だがシグナル・レッドは特殊召喚されたことでアンデットワールドの効果を受け、真紅眼の不屍竜はさらにその力を増す」

工作列車シグナル・レッド 機械族↓アンデット族

真紅眼の不屍竜 攻3200↓3300↓工作列車シグナル・レッド 守1300

「そのまま屍界のバンシーでメタルフォーゼ・アダマンテに攻撃、さらにダメージ計算時にフロイラインの効果発動！800ライフを払い、バンシーの攻撃力を800アップ！」

屍界のバンシーが口を開き、歌に乗せて音波を放つ。伴奏を奏でるかのように優雅な動きでフロイラインが傘を広げてコウモリを飛ばし、糸巻の生き血が闇の饗宴を彩つた。

糸巻 LP3500↓2700

屍界のバンシー 攻1800↓2600↓メタルフォーゼ・アダマンテ 攻2500 (破壊)

鼓 LP4000↓3900

「ようやく初ダメージか。まあ、腕が鈍っている割には頑張った方じゃないか？」

「言ってる。アンデット族モンスターの戦闘破壊が発生したこの瞬間に真紅眼の不屍竜の効果発動、レッド・ペイン・マーチ！互いの墓地の中からアンデット族モンスター1体を選択し、アタシの場に蘇生する！さあこつちに来い、アダマンテ！」

音波によって致命傷を受け、吹き飛ばされたアダマンテの物言わぬ死体。しかしその装甲の継ぎ目から、どこからともなく新鮮な肉体の気配を嗅ぎつけた死霊たちが集まり侵食していく。

そして、冒瀆的な再生は完了する。すでに動くことなど不可能なその指がピクリ、と動いた。うなだれたままの首がぎこちなく上を向くと、その眼窩には瞳の輝きのかわりにぼわり、と幽鬼そのものの鬼火が灯る。そして激突した壁に手をつきながら、再びアダマンテの死体が立ち上がった。

「よし、さっそく初仕事だ。シグナル・レッドに追撃！」

メタルフォーゼ・アダマンテ 攻2500↓工作列車シグナル・レッド 守1300(破壊)

シグナル・レッドの戦闘破壊耐性は1度きりであり、皮肉にも先ほど身を挺して庇ったアダマンテ本人の手によって亡霊列車が炎に沈む。これにより守りの札をすべて失った鼓に対し、糸巻のフィールドはいまだ潤沢。しかし両者の表情は、そんな盤面とは真逆だった。淡々とした様子の子の銀髪に対し、むしろ追い詰められた獣のような焦燥感すら滲ませる赤髪。普段強気な姉貴分の見慣れない弱気とも思えるその姿に、それを見つめる少女も不安の影が胸をよぎる。

「ん、どうした？もう終わったなら、早いところ私にターンを譲ってもらいたいのだが」

「……わーってるよ、ターンエンド」

「待ちわびたぞ？ならばエンドフェイズに速攻魔法、緊急ダイヤを発動。相手フィールドのモンスターが私のフィールドのそれよりも多い場合にのみ発動でき、その効果によりデッキからレベル5以上、及びレベル4以下の地属性かつ機械族モンスターを1体ずつ効果を無

効にして特殊召喚する。この発動ターンに私は機械族モンスターでしか攻撃宣言が行えないが、もはや関係のないことだ」

アンデットワールドはフィールドと墓地の種族を書き換えるが、デッキの中に眠るモンスターに対しては無効。そして彼女のデッキには、当然その条件を満たすモンスターが存在する。出陣するは僧衣を模した装甲を持つ機械仕掛けの荒武者に、その武器ともなる巨大なグローブ。

「鐘の音響く大地踏みしめ、百万の敵を迎え撃て。レベル8、超重武者ビッグベン―K！そしてレベル3、超重武者装留ビッグバン！」

超重武者ビッグベン―K 守3500 機械族↓アンデット族

超重武者装留ビッグバン 守1000 機械族↓アンデット族

「やっぱり出やがったか……だが！フィールドのアンデット族が増えたことで、真紅眼の不屍竜の攻守はさらにアップする！」

真紅眼の不屍竜 攻3300↓3500 守2900↓3100

「誤差だな。私のターン、ドロロー。まずこの瞬間、緊急ダイヤのデメリットは解除され……先ほどサーチした超重武者ツツ―3を通常召喚する」

超重武者ツツ―3 攻300

「役者は揃った。超重武者であるレベル8のビッグベン―K、及びレベル3のビッグバンに、超重武者チューナーであるレベル1のツツ―3をチューニング」

あくまでも落ち着きを崩さない、静かな宣告が下される。3体のモンスターのレベル合計は、デュエルモンスターズにおける最高値である12。その放大なレベルに、少女が小さく感嘆の声を上げる。

「レベル12のシンクロモンスター……」

「不動の大地に轍わだちを刻み、無窮の戦場いくさばを駆け巡れ。シンクロ召喚、超重蒸鬼テツドゥー〇！」

☆8+☆3+☆1||☆12

超重蒸鬼テツドゥー〇 守4800 機械族↓アンデット族

真紅眼の不屍竜 攻3500↓3700 守3100↓3300

汽笛の音が鳴り響き、厳つい鬼の面を正面に持つ列車型のモンス

ターが大量の蒸気を噴出しながら停車する。もつとも本来ならば文字通りの列車サイズであろうその姿は、糸巻の真紅眼と同じく店内のサイズに合わせて随分と縮小されていたのだが。

「では、バトルフェイズに入りたいのだが？」

「あーしてこーして……駄目だな、耐えられないか。もつたいねえなあ、メインフェイズ終了時に屍界のバンシーの効果を発動するよ。このカードをゲームから除外して、アンデットワールドをデッキから直接発動する。発動ったって、同じもんを張り替えるだけだがな」

「そしてアンデット族モンスターが1体除外されたことで、真紅眼の不屍竜はパワーダウンする。だろう？」

真紅眼の不屍竜 攻3700↓3600 守3100↓3000

その言葉通りにバンシーの姿が消え、真紅眼が弱体化する。テツドゥーもまた守備表示のまま守備力を使い攻撃ができるモンスターであり、糸巻のライフは度重なるフロイラインへの消費により既に3000を切っている。アンデットワールドの耐性と保険を失うのは痛い、それ以上にここで逃がさない限り、どうあがいても戦闘による敗北は避けられない。やむを得ない状況に追い詰められた糸巻は、こうせざるを得ないのだ。

「では、改めて。真紅眼の不屍竜……いや、それには及ばないな。もう少しの間、エクストラモンスターゾーンを塞いでおいてもらおうとしよう。それよりも、こちらを狙う方が嫌がらせになりそうだ。ヴァンパイア・フロイラインに攻撃する」

鬼面の蒸気列車の側面から巨大な車輪が意志を持つかのように自動的に外れ、猛スピードで回転する重い質量の塊がヴァンパイアの美女へと迫る。フロイラインも先ほどアダマンテの攻撃を防いだ時のように傘を開いて受け止めようとしたものの、今度は先ほどのように糸巻の血によるブーストはない。鉄塊の一撃にはさしもの不死人といえども耐え切れず、爆発と共にその姿は跡形もなく消え去った。

超重蒸気テツドゥー0 守4800↓ヴァンパイア・フロイライン
守2000 (破壊)

「お姉様！で、ですがお姉様のフィールドには、まだ真紅眼の不屍竜が

いますよね？アンデット族モンスターが戦闘破壊されたこの瞬間、不屍竜の効果を言えば」

「ああ、その通りだ。どうする、糸巻？任意効果だ、使うも使わないもお前の自由だぞ？」

少女の言葉に合わせ、口の端にごくごくわずかな笑みを浮かべて心底楽しげに問いかける鼓。その問いに対し等の糸巻は目を逸らし、苦々しげに短く吐き捨てた。

「……使わねえよ、勝手にしろ」

「そんな、お姉様！ヴァンパイア・フロイラインを蘇生すれば、今の戦闘の被害を……」

「まあ、無理だろうな。というよりも、そんな真似やりたくても私が許さない」

「え？」

実際、少女の言葉は正しい。ヴァンパイア・フロイラインに対し真紅眼の不屍竜の効果を言えば、盤面は再び元に戻る。しかし糸巻には、その手段を選べない理由があった。いまだピンと来ていない少女にもわかるようにと、鼓が軽い解説にかかる。

「ふむ。では、私から少し説明しよう。糸巻、お前は少しそこで待っている。八卦ちゃん、私がこのテツドワーをシンクロ召喚するために使ったモンスターは覚えているか？」

「え？えっと、ビツクベン―Kにビツグバン、それにツツ―3……ですよね？」

「その通り。そしてここで今重要なのが、ビツグバンの持つモンスター効果だ。このカードは墓地に存在するときこそ真の力を発揮する、なかなか面白い1枚だな。自分フィールド上に守備表示の超重武者……この場合はルール上は超重武者として扱うテツドワーOが存在して、バトルフェイズ中に相手が何かカードの効果を発動した時、つまり今の糸巻だな。奴は今、君も指摘した通り真紅眼の不屍竜の効果を発動できる状態にあった。しかしその瞬間に、私はこのカードをゲームから除外する。するとその発動は無効となり破壊され、極めつけにフィールドのモンスター全てを破壊して互いのプレイヤー

に1000のダメージを与えることになる」

「ええ!? それじゃあ!」

「先ほど糸巻の奴は、私が攻撃する寸前のメイン終了時に屍界のバンシーの効果を使っただろう? あれも同じこと、バトルフェイズに入ってしまったっては退避のために除外した瞬間に全モンスターを吹き飛ばしていたからな。まったく、流石にそういうところは抜け目がないう奴だ」

苦笑と共に締め、改めて糸巻へと向き直る。実のところ、今の攻撃は彼女がこのターンにやろうとしていることの全てではない。彼女の攻め手は、まだ終わってなどいないのだ。

「すまんな糸巻、待たせたな。メイン2に入り、テツドウー〇の効果を発動。手札を2枚まで……とはいえこの場合は1枚で十分だな。レアメタルフォーゼ・ビスマガアを捨て、アンデットワールドを対象に取り破壊する」

「クソッ……!」

周りの風景が一変し、再び元の明るいケーキ屋店内へと戻る。同時にその呪いから解放された鼓のモンスターたちが、本来の生氣ある姿を取り戻していく。

超重蒸鬼テツドウー〇 アンデット族↓機械族

メタルフォーゼ・アダマンテ アンデット族↓サイキック族

真紅眼の不屍竜 攻3600↓2700 守3200↓2300

「さて、糸巻。お前のデッキ、今はアンデットワールドは何枚入っている? もし3枚ならばまだチャンスはあるが……案外、2枚で止めていたりしないか? だとすれば、私としてはありがたいのだが。テツドウー〇の更なる効果を発動。1ターンに1度ずつ互いの墓地に存在する魔法、罫カードをすべて除外し、その枚数1枚につき200のダメージを与える。私の墓地からは苦渋の決断、メタルフォーゼ・コンビネーション、緊急ダイヤを。お前の墓地からはアンデットワールド2枚とバージュエストマ・オレノイデスを。根こそぎ除外してもらおう」

「そんな……!」

糸巻 LP2700↓1500

決して無視できないほどに大きいダメージが、確実に糸巻のライフを削り取る。しかしそれ以上に破壊したアンデットワールドの再利用すらも徹底的に封殺する容赦のないデュエルに、敬愛するお姉様の圧倒的不利を知った少女が絶句する。

そして、これは当の鼓本人にもはつきりとした確証のある話ではなかったのだが。糸巻のデッキに今、アンデットワールドは2枚しか積まれていない。PSYフレーム・ロードΩやバージェストマ・レアンコイリアといった除外ゾーンの魔法・罠に干渉できるカードを使い墓地に戻したうえで居合ドロウを使うという再利用手段がないわけではないのだが、すでにテツドワーOまで現れたこの状況でそんな悠長な真似を見逃してくれる道理はないだろう。

「ターンエンドだ。さあ、少しはお前の意地も見せてもらおうか。お前がこの程度で立ち止まるほどやわな相手でないことは、私が一番よく知っているからな。ここからが本番だ、そうだろうか？」

「こんなズタボロにしておいてよくまあ言ってくれるぜ、ったくよ。ま、その喧嘩は買った。アタシのターン、ドロウ！」

どれほどの逆境に陥ろうとも、彼女は最後の最後まで諦めはしない。それこそが糸巻太夫という女の持つ何よりの恐ろしさであり、その力の原点だからだ。

「お望み通り、引いてやったぜ？魔法カード、命削りの宝札を発動！手札が3枚になるようにカードをドロウし……モンスターをセット、カードを2枚伏せる。モンスター2体を守備表示に変更し、ターンエンドだ」

メタルフォーゼ・アダマンテ 攻2500↓守2500

真紅眼の不屍竜 攻2700↓守2300

そして当然のように紡がれる、奇跡的な引き。発動ターンの特殊召喚を封じエンドフェイズにすべての手札を墓地に送らせる命削りの宝札を使う上で、下級モンスター1体と伏せカードを2枚伏せるというのはまさに理想的なデッキの並びである。あまりにも強引で理不尽ですらあるそのトップ解決に、半ばわかっていたこととはいえ苦笑

が漏れる。

「本当にまあ、大したものだ。私のターン、ドロー。いきなりテツドウ
—Oの効果を使うのもいいが、まずはこちらも戦況を整えるか。超重
武者テンB—N^ビを召喚、このモンスター^ンの召喚時効果によって墓地に
存在するレベル4以下の超重武者を蘇生する。甦れ、超重武者ツツ—
3」

超重武者テンB—N 攻800

超重武者ツツ—3 守300

「そして機械族モンスターであるテンB—Nとテツドウ—Oを、それ
ぞれ右及び下のリンクマーカーにセット。不動の荒武者、錬金の騎
手。繋がらぬ2つの世界をその手に結べ！リンク召喚、機関重連アン
ガー・ナツクル！」

機関重連アンガー・ナツクル 攻1500

そして現れる、くすんだ黄金色の車体を持つ新たなる列車モン
スター。一見すればそれは、切り札となりうるだけのスペックを備えた
テツドウ—Oをみすみす切り捨てるだけの行為。しかし彼女には、さ
らなる先を見据えた別の考えがあった。

「魔法カード、アイアンドローを発動。私のフィールドに機械族の効
果モンスター2体しかモンスターが存在しないことにより、デッキか
らカードを2枚ドローする。先ほどまでは手札で腐っていたが、アン
デットワールドさえなくなればこの通り使えるものだ」

「ドローカード、お前も握ってやがったか」

「腐っていたがな。そしてスケール8のメタルフォーゼ・ステイエレ
ンを、ライト P ^{ペンデユラム}ゾーンにセッティング、そのままペンデユラム効
果を発動。私のフィールドに表側で存在するカード1枚を破壊し、
デッキ内のメタルフォーゼ魔法、罨1枚をフィールドにセットする。
ツツ—3を破壊し、メタルフォーゼ・カウンターをセット」

「このコンボって、確か……」

それは、つい先ほど見た光景との一致。そのコンボの内容を思い出
し、少女が声を上げる。

「そう。フィールドのツツ—3が破壊され墓地に送られた時、1ター

ンに1度だけ墓地の超重武者を蘇生できる。そして繰り返しになるが、このカードはルールの上では超重武者として扱われる。甦れ、超重蒸鬼テツドウー〇!」

超重蒸鬼テツドウー〇 守4800

「さて、テツドウー〇の効果を使いカードを破壊するのもいいが……これを捨てるのはいささか躊躇われるな。どうせアンデットの守備力などが知れている、バトルだ。アンガー・ナツクルでセットモンスターに攻撃する」

機関重連アンガー・ナツクル 攻1500↓?? 守500 (破壊)

アンガー・ナツクルの鋼鉄の腕が伸び、セットモンスターの上から叩きつけられる。伏せられていたモンスターは、鼓の読み通り確かに守備は極めて低い……しかし彼女はこの時点で、ある読み違いをしていた。糸巻の伏せモンスターは決して苦し紛れの壁などではなく、全てが計算づくだったのだ。そしてもつと言えば、それはアンデットですらない。

「かかったな? 戦闘によって破壊されたマスマティシヤンの効果、発動! カードを1枚ドロウする……さあ鼓さんよ、どうするよ? アタシはどっちでもいいんだぜ?」

「面倒なものを……!」

かすかな苛立ちをにじませて、鼓は思案する。彼女の墓地にあるビッグバンの効果を使えば、確かにこの発動を止めることはできる。しかし、その後が問題なのだ。ビッグバンはバトルフェイズに発動された効果を「無効にして破壊」し、それが成立して初めて全体破壊とバーン効果の処理が発生する。しかし糸巻が今発動したマスマティシヤンはすでに戦闘破壊が成立して墓地に送られており、これを「無効」にはできても「無効にして破壊」することは不可能なのだ。

ちなみに鼓の手に握られた最後の1枚の手札は、超重武者装留フアイヤー・アーマー。手札から捨てることによって場の超重武者1体の守備力をそのターンの間800ダウンさせる代わりに、ターンの間だけそのモンスターに完全破壊耐性を付与する強力な守りの要である。本来彼女の算段では、糸巻が何を仕掛けようともそれをビッグバンで

止め、全体破壊からテツドゥーOをこのカードによって守ることでから空きになったところに守備力4000のダイレクトアタックを叩きこむつもりだった。ここでビッグバンを使えば真紅眼の不屍竜とアダマンテに遮られダメージは通らず、かといって発動を許せば増えた手札から何を仕掛けてくるかは想像もつかないほどにリスクが高い。

迷ったのは、ほんの1瞬だった。

「墓地に存在する超重武者装留ビッグバンの効果を発動。このカードをゲームから除外することで、その発動を無効とする」

「やっぱりここで切ってきたか？まあ、そうだろうな」

「お前の掌で動くのは極めて不愉快だがな。バトルフェイズを続行し、テツドゥーOでメタルフォーゼ・アダマンテに攻撃。それは私のカードだ、いい加減返してもらおうぞ」

「おお、そういえばそうだったか？あんまり長いことこっちにいたから忘れてたぜ」

ターンを凌いだうえで厄介なビッグバンをほぼ無駄打ちに近い形で消費させたことに気を良くし、余裕の軽口を叩く横でアダマンテが巨大な車輪に捻り潰される。しかし、そのダメージは糸巻には届かない。

超重蒸鬼テツドゥーO 守4800↓メタルフォーゼ・アダマンテ 守2500 (破壊)

「昔からとはいえ、心底しぶといものだ。メイン2に入り、テツドゥーOの効果を発動。お前の命削りの宝札、私のアイアンドローを除外して計400のダメージを与える。これでターンエンド」

糸巻 LP1500↓1100

「アタシのターン。へっ、どうやら幸運はこっちに向いてきたみたいだぜ？まず1枚目のトラップ発動、バージェストマ・ピカイア。手札のバージェストマ1枚、今引いたマレーラを捨てることでカードを2枚ドロウするぜ。そしてこっちが本命だ！トラップ発動、幻影騎士団^{フレントムナイト}ロスト・ヴァンブレイズ！このカードの効果で真紅眼の不屍竜はこのターンレベルが2になって攻撃力が600ダウンし、さらにこのカー

ドをレベル2モンスターとして特殊召喚する。そしてトラップの発動にチェーンすることで、墓地のピカイアをモンスターとして特殊召喚！」

幻影騎士団ロスト・ヴァンブレイズ 守0

真紅眼の不屍竜 攻2700↓2100 ☆7↓2

バージエストマ・ピカイア 攻1200

テンポよく発動されるカード群により、見る間に糸巻の場にはレベル2のモンスターが並ぶ。では、その結果生まれるカードといえは？鼓と八卦がその胸中で、同時に1枚のカードの姿を思い浮かべる。もはやその答えは、1枚しかありえないだろう。すなわち凶悪な耐性と使い勝手のいいカード破壊効果を持つ彼女のエースの一角、バージエストマ・アノマロカリスである。しかしそれは鼓にとつても望むところ、なぜならばテツドウー0にはファイヤー・アーマーがついているのだから。

しかし当の本人はそんな予想を読み切ったかのように、わずかに笑ってみせる。果たして彼女の導き出したモンスターは、両者の予想を裏切るものであった。

「アタシはレベル2のロスト・ヴァンブレイズと、真紅眼の不屍竜の2体でオーバーレイ！戦場たゆたう妖の海よ、原初の楽園の記憶を覚ませ！エクシース召喚、バージエストマ・オパビニア！」

☆2+☆2||★2

バージエストマ・オパビニア 守2400

2体のモンスターが光となつて混じりあい、異様に伸びた口吻から呼吸を繰り返す5つの目を持つ古代生物が現世へと蘇る。それは最強の矛である攻めのアノマロカリスと対となる最強の盾、守りと補助に特化したもうひとつのバージエストマ。

「ここでオパビニア……まさか糸巻、お前！」

「当たり前だ、お前の機関車相手にして馬鹿正直に正面突破なんてするわけないだろ！現役時代、何回それでカウンター喰らってきたと思つてやがる！てなわけで、遠慮なく搦め手で始末させてもらうぜ？オパビニアの効果発動、トラップを素材とするこいつはオーバーレ

イ・ユニット1つを取り除き、デツキからバージェストマカード1枚を手札に加える。カンブリアの奉納！アタシが選ぶカードは当然、バージェストマ・ディノミクス……そしてオパビニアの効果により、アタシはバージェストマを手札から発動できる。ディノミクスを発動！フィールドで表側のカード1枚をゲームから除外し、手札を1枚捨てる。失せろ、テツドゥーO！」

テツドゥーOの金属の車体に、するするとまとわりつくように無数の触手が地下から延びる。先端に棘が付きものが挟めるようになっていてそれは車体の窪みや起伏をとつかかりとしてさらにその奥深くへと延びていき、ついには鬼の面すらも見えなくなるほどがんにがらめに縛りあげた。そして完全にテツドゥーOを覆いつくした触手に、一斉に強い力がこもる。いかに分厚い金属の塊といえども全方位から一斉に向けられた力には耐えきれず、徐々に小さくなっていく触手の塊の中から何かがひしゃげて潰れていく嫌な音が響いた。

「テツドゥーO……！」

「だいぶさつぱりしたじゃねえか。だが、まだだ！ディノミクスの発動にチェーンして墓地のマーレラをモンスターとして蘇生、そして今捨てた馬頭鬼の効果を発動。帰ってこい、真紅眼の不屍竜！」

バージェストマ・マーレラ 攻1200

真紅眼の不屍竜 攻2400↓2700 守2000↓2300

エクシーズ召喚でモンスターが減ったはずが、むしろ盤面がさらに増える異常事態。今度追い詰められているのは、一転して鼓の方だった。しかし彼女にもまだ、場のカードの破壊をトリガーとしてデツキからメタルフォーゼをリクルートするメタルフォーゼ・カウンターがある。かなり厳しい戦いではあるが、まだ粘ることも決して不可能ではない。

はずだった。

「アタシの手札は残り1枚……これで終いだ。魔法カード、アンデット・ネクロナイズを発動。アタシのフィールドにレベル5以上のアンデットが存在するとき、相手モンスター1体のコントロールを1ターンの間だけ得る」

アンガー・ナツクルが破壊されることなく場を離れたことで、もはやメタルフォーゼ・カウンターの発動タイミングはない。それはつまり、もはや鼓に打てる手がないということでもある。

勝負はついた。静かに勝敗それぞれの運命を受け入れた女戦士たちだが、むしろ穏やかに言葉を交わす。

「あの状況から捲り返してくるとはな。相も変わらず、理不尽な奴だ」
「劇的な逆転、と言ってくれ。なあ、八卦ちゃん？」

「本当に、あんなピンチを切り抜けるなんて……やっぱりお姉様は、私の目標のデュエリストです！」

「な？」

「やれやれ……この女泣かせめ。本当に心底変わらん、お前は」

興奮のあまり頬を上気させて目を輝かせる少女の純粹な表情を一瞥し仕方がないと苦笑する銀髪に、不敵な笑みで応じる赤髪。対照的な表情を浮かべる2人のデュエルは、今ようやく終わろうとしていた。

「バトルフェイズ。バージェストマ・マーレラと真紅眼の不屍竜で攻撃だ」

バージェストマ・マーレラ 攻1200↓鼓（直接攻撃）

鼓 LP3900↓2700

真紅眼の不屍竜 攻2700↓鼓（直接攻撃）

鼓 LP2700↓0

「やれやれ、お前相手にはなかなか勝てんな。この10年、私も遊んでいたつもりはなかったんだが」

「そりやあれだ、人間の格の違いつてやつだろ？」

「格？……少なくとも、器はお前の方が小さいようだな。胸ならお前の方が大きいだろうが」

「お前なあ。それともなんだ、もう1戦やる気か？」

笑いながら問い返す糸巻に、いや、とゆっくり首を横に振る鼓。先ほど脇に退けられた席に再び腰かけてシュークリームを手に取り、一

口かじつてからすつ、と赤髪の向こう側に見える厨房を指し示した。

「糸巻。ご指名はお前だ」

「あん？……あ」

言われるがままに振り返った彼女が目にしたもの。それは目を細めてニコニコと笑みを浮かべ、指が白くなるほどに力を込めて腕組みをする清明の姿であった。当然その視線だけで人を刺し殺せそうなほど鋭い目を見れば、彼の怒りの度合いはとてよく伝わってくるのだが。

「糸巻さん？」

「お、おう」

笑顔とは元来攻撃的なものであり、最も恐ろしい表情である……そんなどこかで見た文句が、彼女の脳裏に蘇った。目の前に立つ、遊野清明。少年の見掛けにはあまりにも似つかわしくない、幾度となく修羅場をくぐってきた人間特有の研ぎ澄まされた怒りと殺気は、その言葉をまさに体現していた。こいつは何者なんだろう、幾度となく胸をよぎった問いが改めて湧き上がるが、今はそんなことを気にしている余裕は彼女にはなかった。

「営業妨害って言葉について、ちょっとばかり話がしたいんだけど。少しいいかな？」

「あーつと……」

助け舟を求めて、わずかに後ろに視線を送る。当然付き合いの長い鼓ならば、彼女の言いたいことは察したはずだ。

しかし、聞こえてきた会話は無常だった。

「どれ、八卦ちゃん。これも食べるといい、美味いぞ」

「これですか？あつ、本当ですね！」

お前らなあ、と恨み言のひとつでもぶつけようとしたところで、先手を打つように清明が動く。ゆっくりとした動きの手招き。しかしそれは、絶対に逃がさんという気迫に満ちたものでもあった。未練がましく逃げ場所を求めて左右に目を走らせ……最終的に諦め、彼の後について店の奥へと向かう。その足取りは、さながら執行前の死刑囚のように重いものだった。

ターン18 もうひとりのエンターテイナー

「あー……疲れた」

だらしなくテーブルにぐったりと伏せる女、糸巻。数時間にわたりねちねちと厭味つたらしく（本人談）行われた説教からようやく解放され、心底くたびれたという姿勢を隠そうともしない。精神的な疲労に加え煙草を吸う許可も与えられなかったためのニコチン不足もあり、彼女の頭脳は今さながら霧がかかったようにくすんでいた。

「自業自得だな」

そんな抜け殻のようになった腐れ縁の相手をちらりと横目で見据え、ばつさりと切つて捨てる鼓。すでにティータイムを終え、その手には甘味のかわりに湯気の立つコーヒークップが握られていた。

「相手モンスター1体につき500バーナー……」

そしてうわごとのように訳の分からないことを呟く彼女に、見えないと世話を焼くのがまだ14歳の少女である。

「ほらお姉様、このマドレーヌ食べてください！甘いもの食べると元気になりますよ！それとも、こっちのシナモン入りクッキーの方が好きでしたか？」

「うー……悪い八卦ちゃん、あーん」

「ほええっ!?え、えつと、それではお姉様、不肖八卦九々乃、参ります！あ、あーん！」

ぐったりと伏せたまま顔だけ上げて中学生相手に平気な顔して口を開けるいい大人と、それでも幻滅するどころか真っ赤になりつつ緊張のあまり手を震わせながらもその口の中に手にしたマドレーヌをちぎって押し込む少女。退廃的を通り越してある種芸術的ですからあるダメ人間とその製造機の所作の前に、私はこんな女に負けたのかと痛くなってきたこめかみを押さえる鼓。

本人たちの意思はともあれ、それは平和と言えば平和な光景ではあった。しかし、そんな時間は決して長くは続かない。それは闘争に魅入られた彼女たちの業なのか、はたまたデュエルに惚れ込んだ彼女たちの性なのか。

いずれにせよ、短かった沈黙は破られた。店のドアが勢いよく開き、来店を知らせるベルが鳴る音もかき消すほどにハイテンションな大声が響く。

「ハーイ、グッドイブニング！プリティーガールたち、デュエルポリスの糸巻？つていう人を知らないかい？」

明るく顔をのぞかせたのは、本人は普通に笑っているつもりなのだろうが胡散臭いといしか言いようのない笑顔を浮かべ、一目で偽物とわかる金髪のカツラを被り、星条旗カラーに塗られた宴会用と見まごうほどに派手な革ジャンを着た男だった。

「うわ胡散……じゃなかった、いらっしやいませ」

大声を聞きつけてまたも厨房から現れた清明の放ちかけた一言は、まさにその場にいた全員の心情を代弁していた。その名譽のために一言断っておくと彼とて客商売に長けた身、普段からここまで本音を隠せないわけではない。糸巻の精神をもがつつりと削った長時間のねちねちとした嫌味のこもる説教は、彼自身の心もまた荒ませていたのだろう。

しかし明らかに聞こえていたであろう失言にもめげず、エセアメリカ人はテンションを崩さない。ぐるりと店内を見渡してはまだテールブルに突っ伏したままの赤髪に目を止め、その表情をさらに輝かせてつかつかと歩み寄る。面倒くさそうに軽く頭を上げた彼女の目の前に、勢いよくその右手が差し出された。

「お初にお目にかかりマース、セニョール糸巻太夫。まずは友好の証、シェイクハンドしましょう！」

「ああー……？人違い、つてわけじゃなさそうだな。握手は結構だが、まず誰だアンタ」

「ノー、これは失礼いたしました。ある時は胡散臭いエセアメリカ人、またある時は胡散臭いエセ中国人、またまたある時は胡散臭いエセフランス人……」

自己紹介ひとつに挟まる長々しい前口上に、後ろでそれを聞かされる清明と八卦が密かに胡散臭いのは自覚あったんだこの人、と意識をひとつにアイコンタクトをとる。しかし次の瞬間、男の気配ががらり

と変わった。胡散臭い日本語風英語は鳴りを潜め、気取った調子で深々と一礼する。そしてそのポーズに、糸巻は見覚えがあった。

「……しかしそのその正体は？ 劇団『デュエンギルド』元・団員、一本松一段。いっぽんまついちだん ユー相手には鳥居浄瑠の兄弟子、って言った方が通りがいいかな？ 改めてお初にお目にかかる、こんな美人さんの下で働いてあいつも幸せもんだ」

鳥居の兄弟子。さすがの糸巻もこの言葉には不意を突かれ、目を丸くして押し黙る。そしてそれは、清明と八卦も同じこと。同時に、目の前の男から漂う胡散臭さの正体も判別がついた。要するに今彼女たちが見ている姿は、デュエル中の鳥居と同じく演劇モードに入った姿なのだ。ただひとり事情がよく呑み込めていない鼓が探るように全員の顔を見渡し、しかし口を挟むことはせず興味深そうにカップを口に運んだ。

「ん？ ああ、別にそう構えないでくれ。あいつに何があつたのかはミーも知っている、それについて上司のユーに文句を言いに来たわけじゃない。デュエルポリスってのはそういうリスクもある仕事なんだろうし、あいつはそれをわかつたうえでこの職に就いた、そうだろう？ それなのにミーがその結果に文句をつけるのは、あいつの覚悟に對して最も失礼な行為だ。まあ、後で見舞いには行くつもりだがな。今回ミーが弟分より先にユーのところ顔を見せに来たのには、また別の理由がある」

「つまり？」

予想だにしない方面からやってきた来客の衝撃から立ち直り、鋭い目つきで先を促す糸巻。先ほどまでのだらけた様子とはまるで違う抜身の刀のような威圧感にわざとらしく身震いしてみせ、一本松が敵意のないことを示すかのようにこれ見よがしに両手を広げた。

「どうどう。そんなに怖い顔で睨むと美人が台無しだぜ、マドモアゼル？ ミーはただ、純粹に挨拶だけしにきたのよ。デュエルフェスティバル、今年はこの町でやるんだろう？ 鳥居から聞いてるとは思うが、ミーたちデュエンギルドはデュエルモンスターズと演劇のハイブリッドを売りしてきた劇団。つまりミーも、こんなこと言うとなん

だか自慢みたいだがそれなりに腕に覚えはある。ぜひとも出場させてもらいたいと思つてね、主催者のデュエルポリス……つまりユーに直接掛け合うのが手っ取り早いと思つたのさ」

「はあ!？」

唐突な出場申請。想定外の相手から飛び出す全く予想もしなかつた方面に転がり始めた話にたださえニコチン不足がたたり本調子でない糸巻の頭は、この短い間にまたしても意表を突かれたことで困惑の声を上げるのが精一杯だった。

そのタイミングでコーヒー片手に事態を静観していた鼓が、見ていられんとばかりに空になったカップをことりと置いて立ち上がる。

「少し、よろしいでしょうか」

鼓千輪は公私の区別を弁えた女である。この話題はデュエルポリス、つまり仕事の管轄だと判断し、口調も先ほどまでのプライベートなものから改まった形に代わっていた。そんな突然の横槍にもめげず、一本松がぐるりと首を動かして先ほどと同じく大仰な一礼を繰り返す。

「おおうこれはこれは、負けず劣らずお美しいマドモアゼル。ええと、お名前は……?」

「申し遅れました、私もその彼女と同じデュエルポリス。フランス支部代表、鼓千輪と申します」

「おおう、なんとなんと。本物のフランス在住者でしたか。してお美しい方、あなたがなぜこの日本の地に?」

「今年のデュエルフェスティバル、運営としての仕事を命ぜられました。そういうわけでそのお話、ここからは私がお預かりいたしましたよ。参加希望、ということでしたが……失礼ですが、理由をお聞かせいただいてもよろしいでしょうか」

物腰こそ丁寧だが、その言葉の端々からは有無を言わさぬ調子が漂う。あるいはその言葉は、半ば強引に話題を引き継いだ糸巻へ向けたものであったのかもしれない。いずれにせよ一本松はすぐに順応し、改めて鼓へと向き直った。

「いかにも。確かに劇団「デュエンギルド」は14年前、例の事件を

きつかけとして自然消滅。ミー含め団員も散り散りとなり、鳥居のよ
うな例外を除き、ほぼ全員がデュエルモンスターズとは関わりを持た
ない日々を過ごしてきたと思いいねえ。しかしその沈黙を破りミーが
こうして参加を表明するに至ったのは、ちよいとした訳がある。そ
う、あれはある雨の日……」

「要件をお聴きしたいのですが」

「ノー、そりやないぜ綺麗なお姉さん。せつかくミーの舌が絶好調で
回り始めたって時に、お預けなんて。とはいえユーがそこまで聞きた
いというのなら、もう少ししかいつまんで話そうか。まずひとつが、鳥
居が入院したって話を聞いて見舞いにでも、なんて思ったから」

そう言いつつ視線を外し、まるで何かを警戒しているように左右、
そしてガラス越しの店の外にまで視線を飛ばす一本松。全方位を確
認してもまだ警戒は続いているのか、身をかがめて口元に手をやり、
囁くようにしてようやく重い口を開いた。

「そしてもうひとつ、これは多分デュエルポリスもまだ知らない話の
はずだ。ミーは今、流通関連で働いて生活してるんだがな？最近、同
業者の間で妙な話が出回っているんだよ。曰く、べらぼうに高い礼金
で大して重くもない荷物を運ばせたがっている怪しい客があちこち
の運送会社、時には個人にまで掛け合ってる、なんてね。それもいわ
ゆる裏ルート、公には出さないようにとのお話ときたもんだ」

「それで、その話がどのようこの件と？」

「まあまあ、物事には順番ってもんがあるんでね。それで、ミーはまだ
その話を振られたことはない。ないが、実際に金に釣られてそのブツ
を運んだって奴の話を聞く機会があった。かなり念入りに口止めさ
れていたらしいが、彼はその時ひどく酔っぱらっていてね。つまり、
その分だけ口が軽くなっていたわけだ。なんでもそのブツの行き先
はここ、日本の家紋町。しかも、何が何でも今週末までに、とキツク
お達しがあったらしい」

「今週末……デュエルフェスティバル開催日、ですね」

すべての話を横で聞いていた少女が、小さく漏らす。指摘されるま
でもなく、それは2人のデュエルポリスも真っ先に結びつけた点だ。

デュエルフェスティバルはデュエルポリスの主催イベント、何か起きようものならばその影響は決して小さくない。

訪れた沈黙に、だろうか？と言わんばかりにオーバーアクションで肩をすくめた一本松が、また声を潜めて話を再開する。

「実を言うと、ミーがこの話をユーたちに伝えた時点でミーがここに来た意味はほとんど終わってるんだ。だけど不幸なことに、ミーがその運び屋と一緒に飲んだことはかなり大勢が見ている。そのすぐ後に仕事を休んでまでここに来たんだ、わかるだろうか？」

「なるほどなあ。つまり出場したいなんてのは単なるブラフ、アタシらに今の話を持ってくるための表向きの隠れ蓑、ってことか」

真面目な話に復活した糸巻が目を細め、噛みしめるように確認する。こうしている間にも、彼女の頭の中ではいくつもの可能性と今後の展望が目まぐるしく浮かんでは消えていた。まず、この話に信じる価値はあるのか……しかし、それは考えるまでもない。もし本当だった場合の被害を考えれば、たとえ真つ赤な嘘だったとしても信じないという選択肢は存在しないからだ。そして彼自身の安全も考慮するならば、この出場申請を蹴るのはリスクが高いだろう。

ややあつて、同じ結論に至ったらしい鼓が小さく頷いた。

「わかりました。では出場の申請、こちらの方で調整しておきます」

「オーウ、ベリーベリーセンキュー！あのデュエルフェスティバルに出場とあれば、ミーも鼻が高いってもんですね」

「……いや、ちよい待ち」

しかしそこに待ったをかけたのが、ほかならぬ糸巻である。意外な制止にぱつと明るくなった表情を一転して訝しげな顔になる一本松に、最後の疑念を投げかける。

「こう言っちゃなんだがアンタ、デュエルの腕は実際のところどんなもんなんだ？さっきの話しぶりからすると、もう10年以上カードには触れてないんだろう？一応今回のコンセプトは、プロの戦いをデュエルモンスターズを知らない今の世代の前に復活させる、だ。変に弱い奴が1人いるなんて話になったら、逆に悪目立ちしかねないぜ」

「確かに、それは一理ありますね。では、糸巻。最初に言い出したあな

たにテストを行ってもらいます、一本松さん、デュエルディスクは持参していますか？」

「げ、アタシか。まあ言い出しっぺだしな」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。テストテストって、ミーはつまり何をすれば？」

「簡単なことです、単なるデュエルですよ。あなたの実力を軽くで構いませんので確かめさせていただくため、最も手っ取り早い方法です」

勝手に進む話に上がる不安の声に、なんてことはないと言わんばかりの調子で軽く返す鼓。公私を問わず発揮されるこの強引さと、相手の反論を許さない冷たい美貌。それは現役時代から変わらない、彼女の強みのひとつでもあった。

「あ、あのー！」

しかしそこに、おずおずと手を上げて口を挟む少女がひとり。本人に睨みつけているつもりはないのだが冷たい瞳に見据えられて声が上ずるも、懸命に勇気を振り絞る。

つい先ほどその目の前で繰り広げられた、かつてのプロデュエリスト2人の互いに譲らぬ激戦。その熱気の余波が粗削りな少女の闘志に不格好な火をつけ、身の内から溢れ出て止まらない衝動を掻き立てる。その一言を口にさせたのは、デュエリストの本能。まだ幼い少女の、生まれつき手にした才能……あるいはこのご時世、それは呪いなのかもしれない。

「そのデュエル、私に……八卦九々乃に、戦わせてください」

そして、数分後。またしてもテーブルと椅子をどけて作られたスペースの中央で、演者と少女は向かい合っていた。商売あがったりだと色々と諦めた顔で「CLOSE」の札を掲げに行った清明が帰ってくるのを横目に、鼓が傍らの糸巻に話しかける。

「それにしても意外だな、糸巻」

「何がだ？」

「この状況そのものが、だ。お前がデュエルを他人に譲るのもそうだが、その相手があんな小さい子とはな。あの子の片思いかと思っただが、お前の方も随分とお気に入りじゃないか」
「よしてくれ」

最後の一言に含まれたからかうような声音に気づき、小さな呻き声をあげる糸巻。その反応に気を良くした鼓が低く笑みを漏らすのを聞き逃さず、対照的なしかめっ面を浮かべる。

「ただ真面目な話、アタシはあの子にはもつと実戦経験が積ませてやりたいのさ。アンタも見てりやすぐ分かるだろうが、さすがは七宝寺の爺さんの血筋だ。あの子の潜在能力を、アタシはかなり高く買ってるんだよ」

「ほう、お前にそこまで言わせるとはな」

「ありやあ間違いないく逸材だ、だがまだ青い。あの子の未来は、まだ何も決まっちゃいない。だからこそ、見てみたいのさ。デュエリスト八卦九々乃が、一体どこまで行けるのかをな」

「未来、か。私にもお前にも、もう縁のない言葉だな」

「違いねえや」

そこで顔を見合わせ、ほぼ同時に表情を緩める。彼女たちはもう、自らの未来を自分の意思で選び取った身。だからこそ何も決まっていない少女の行く末がほえましくもあり、同時にもどかしくもある。しかしそこで横槍を入れることが本人のためにならないことを知っているからこそ、口出ししたい気持ちをぐっと堪えてただ見守るのだ。

デュエルとは、すなわち人生なり。カードだけが、その答えを知っている。

「デュエル！」

「ワオ、先攻はミーですね。思えばこのデッキを使うのも14年ぶり……ですが、ミーもこれでも昔はそれなりに鳴らした身。ミーがこの舞台へと最初に繰り出すモンスターは、数式導くジーニアス！ マスマティシヤンを召喚し、モンスター効果発動！ ミーのデッキからレベル4以下のモンスター、ブラックフェザー B F | 精鋭のゼピュロスを墓地に送り、

ターンエンド」

マスマティシヤン 攻1500

モンスター召喚時に逐一挟まる極めて短い口上、そしてフィールドを舞台と例えるその大仰な言い回し。細部こそ異なれどもそのスタイルはまさしく鳥居浄瑠が最も得意としていたエンタメデュエルそのものであり、さすがは同門の流派と糸巻が小さく唸る。

そしてそれはこの男も、今ここにはいない鳥居も。14年前の事件以降散り散りになったかつての居場所のスタイルを、片時も忘れることなく引き継いできたということの証左でもある。そこまで大切な居場所を奪ったのは、他でもない自分たちプロデュエリストだ。そう考えるとならしくもなく気まずさが彼女の胸をかすめ、ふっとフィールドから視線を外……すことは、できなかつた。寸前で目ざとく隣の動きと感情の機敏を察知した鼓がおもむろに手を伸ばし、無言でその背中を力強く平手で叩いたのだ。不意打ちにバランスを崩しそうになり目を丸くする糸巻の抗議の視線もどこ吹く風、そんなことなど知る由もなく向かい合うフィールドの2人を顎で指し示す。

本当にすまないと思っているのなら、せめてそのデュエルから目を離さずにいるべきだろう。それが、鼓千輪という女のスタンスである。身勝手な罪悪感を理由にこのデュエルから目を逸らすのは、彼女にとって最も忌むべき行為だった。そんな彼女の人の人柄を思い出し、糸巻もまた改めて気持ちを新たに盤面へと向き直る。断じて口に出しはしないが、心の中で自分を止めてくれた友人への礼を述べながら。代わりに、偶然に目についたものを持ち出して話題を変える。

「……それにしても、随分古いモデルのデュエルディスクだな。あのマーク、10年どころか20年近く前の型だぞ。まだ自動記録機能もついてない頃の奴だ」

「買い替える機会もなかったんだろう。無理もない話だ」

「私のターン、ドローです。魔法カード、増援を発動します。このカードの効果により、デッキからレベル4以下の戦士族モンスターをサーチです。そしてサーチしたこのカード、E・HERO^{エレメンタルヒーロー}ソリッドマンを召喚！」

E・HERO ソリッドマン 攻1200

ソリッドマン。リキッド液体と対となる固体を司るヒーローが、マスマティシヤンと対峙する。

「そして、ソリッドマンの効果を発動します。このカードが場に出た際、手札からレベル4以下のHEROを……」

「ノンノン、それは通せないよ。手札からエフェクト・ヴェーラーを捨て、モンスター効果発動！ソリッドマンの効果は、このターンのみ無効となる！」

足を大股に開き、目の前の地面に強烈なチョップを振り下ろそうとするソリッドマン。しかしその視界を、ふわりと半透明の羽衣が包み込んだ。その頭上には、青い長髪をなびかせる羽衣の主たる魔法使い。

ヒーローを展開する貴重な手段であり、初動となりうるであろうソリッドマンの効果に対してのいきなりのカウンター。しかし少女はそれを見て、青くなるどころかむしろ満足げに微笑んでいた。

「ありがとうございます、ここに効果を使っていたらいい！」

「……ワッツ？」

その年齢に似合わぬ艶然とした微笑みに、一本松の表情が変わる。ここまでは心のどこかでしょせんは子供が相手という思いがあったのだが、今更ながらにどうやらそれは間違いだったことを悟ったのだ。

「チェインして速攻魔法、マスク・チェンジを発動！私のフィールドから地属性HEROのソリッドマンを墓地に送り、同じ地属性のマスクドヒーローM・HEROを変身召喚いたします。英雄の蕾、今ここに開花する。金剛の大輪よ咲き誇れ！変身召喚、レベル8。M・HERO ダイヤン！」

ようやく復帰したグラウンドマンが飛び上がり、空中でまばゆい光に包まれながらおもむろに1枚の仮面を取り出して自らの顔面に装着する。すると、まるで仮面が力を与えているかのごとくその等身が伸び、金剛の武器がその身を覆い、右手には同じく金剛からなる細身の剣が握られる。青いマントを翻し着地したソリッドマンは、もはや全

くの別人へと変化していた。

M・HERO ダイアン 攻2800

「そしてソリッドマンがフィールドを離れたことで、効果解決時に対象の存在しなくなったエフェクト・ヴェーラーの効果は不発……で、いいんですよね、お姉様？」

「あ、ああ……」

肯定する糸巻だが、その声には小さいものはつきりとした戸惑いの色が混ざっていた。しかしデュエルに夢中な少女は、その微妙な感情の機微にまでは気が付かない。

「ならば改めて、ソリッドマンの効果进行处理させていただきます。私が手札から特殊召喚するカードは、私の信じる絶対無敵、最強のヒーロー。来てください、E・HERO クノスペ！」

E・HERO クノスペ 攻800

早くもフィールドに降り立った、少女のフェイバリットカード。固く閉じられた蕾のヒーローとその横に自信満々に立つ少女を順に眺め、感心したように鼓が頭を振った。

「なるほど。増援まで使ってこれ見よがしにソリッドマンを見せられたら、確かにヴェーラーを使わない選択肢はないな。そこまで読んでいたのだとすれば、確かにお前が言うだけの……どうした、糸巻」

素直な賞賛の言葉と共に話を振られた糸巻だが、いまだ彼女は呆然と目を丸くしたままだ。不審なものを感じた鼓に問いかけられ、ようやく我に返る。

「ああ、いや……なんつーか、正直アタシの思った以上に成長スピードが速かったもんでな。最近の子ってのは凄いもんだな、こりやあマジでアタシを抜く日も近いかもな」

「何を弱気なことかを。お前らしくもない……おっと、また動き出したな」

その言葉通り、フィールドでは再び動きがあった。メインフェイズでの展開を終えた少女が、いざバトルフェイズへと入ったのだ。そして最初に動き出したのは、金剛の戦士。

「バトルです。ダイアンでマスマティシヤンに攻撃！」

「ノー！」

M・HERO ダイアン 攻2800↓マスマティシャン 攻1500 (破壊)

勢い良く振りぬかれた剣が、白い髭の数学者をあつかりと両断する。しかし、それだけだ。発生するはずのダメージが、いつまで経つても一本松のライフから差し引かれない。

「グレート。しかしミーは今の攻撃に対し、手札からこのカードを發動していました。痛みさえ操るアクロバット、E^{エンタメイジ}mダメージ・ジャグラー！このカードをバトルフェイズ中に墓地へと送ることで、ミーの受ける戦闘ダメージは1度だけ0となる、ということさ。さらにマスマティシャンが戦闘破壊された時、ミーはカードを1枚ドロウできる」

「で、ですが、そのダメージ無効は1度きり！この瞬間、私もダイアンの効果を発動。ダイアンが戦闘でモンスターを破壊した時、デッキからレベル4以下のHEROを特殊召喚できます。まだまだ来てください、クノスペ！」

「ワーオ……」

E・HERO クノスペ 攻800

「そのまま追撃です！私の必殺コンボ、クノスペシタル！」

E・HERO クノスペ 攻800↓一本松 (直接攻撃)

一本松 LP4000↓3200

E・HERO クノスペ 攻800↓900 守1000↓900

クノスペが飛び上がり、蕾の腕で勢いよく殴りつける。そしてフィールドに戻ってきたとき、その両腕と頭の蕾はほんの少しその頂点に赤みが差していた。

「クノスペが相手に戦闘ダメージを与えた時、その攻撃力は100ポイントアップし、守備力が100ポイントダウンします。そして、それがもう1回です！」

E・HERO クノスペ 攻800↓一本松 (直接攻撃)

一本松 LP3200↓2400

E・HERO クノスペ 攻800↓900 守1000↓900

「カードを1枚伏せ、ターンエンドです。先に言っておきますが、クノスペシャルはここからがコンボの真骨頂ですよ。つまり……」

「ノンノン、ミーはこれでも元エンターテイナー。クノスペ、そのキュートなモンスターの効果はミーも知ってるよ。クノスペと他のE・HEROが並んだ時、相手はクノスペを攻撃対象にできない……つまり、ミーが今攻撃できるのは攻撃力2800のダイアンのみ。なかなか面白いコンボだけれど、今宵の主演はこのミーさ！ミーのターン、ドロロー！魔法カード、コール・リゾネーターを発動！デツキよりリゾネーターモンスター、レッド・リゾネーターを手札に加える。さあカモン、独奏奏でるレッドウエーブ！レッド・リゾネーター召喚！」

レッド・リゾネーター 攻1200

「そしてレッド・リゾネーターは召喚に成功した時、だからレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる。カモンカモン、いつでも明るいパワフルメイジ！Emトリック・クラウン！」

炎を纏うリゾネーターが手にした音叉を独特のリズムで打ち鳴らすと、まるでその音に誘われたかのように丸っこい人影が踊りながら後ろに続く。逆立ちしたまま両足でお手玉をくるくると回すその正体はクラウン……サーカスを専門とするピエロの1種である。

Emトリック・クラウン 攻1600

「そしてミーは墓地から、先ほど捨てたダメージ・ジャグラーの更なる効果を発動。このカードをゲームから除外することで、デツキから名前の異なるEmの仲間を呼び寄せる。そして加わったこのカードは、フィールドにモンスターが2体以上存在するならば手札から特殊召喚できるのさ。カモンカモンカモン、奇術操るマジカルハンド！Emハットトリッカー、特殊召喚！」

どこからともなく手袋、マント、メガネ、そして先が3つに分かれた特徴的な帽子がふわふわと宙を飛んで現れ、それらの小道具が空中で合体してさながら服を着た透明人間のような装いのモンスターへと変化する。

Emハットトリッカー 攻1100

「さあ、ミーのタイムはこれからさ。左下及び右下のリンクマーカー

にチューナーモンスターのレッド・リゾネーター、そしてハットトリッカーをセット！リンク召喚、リンク2！調律極めしクリスタル、クリストロン水晶機巧―ハリファイバー！―

トリック・クラウン1人を残し、レッド・リゾネーターとハットトリッカーが赤とオレンジの渦となり空中に発生したリンクマーカーへと飛び込んでいく。そして登場したのは、銀色に煌めく機械の体とそこから生える水晶の力を持つ戦士。

水晶機巧―ハリファイバー 攻1500

「ハリファイバーがリンク召喚に成功した時、ミィはデツキからレベル3以下のチューナー1体を特殊召喚できる。ただし、そのモンスターはこのターンの間だけ効果を使えない。2体目のレッド・リゾネーターを特殊召喚し、イツ、シンクロタイム！レベル4のトリック・クラウンに、レベル2のレッド・リゾネーターをチューニング！」

「リンク召喚に続き、シンクロ召喚を……」

「おい、アイツ本当に10年もブランクあんのか？」

八卦が息を呑み、糸巻がぼやく。しかしそんな外野をよそに、トリック・クラウンの周囲を2つの光の輪となったレッド・リゾネーターが包み込む。現れたのは素材の2体とは似ても似つかない、なんとなく4つ足な竜の形に見えるドロドロした不定の生命体だった。

「シンクロ召喚、レベル6！全てと混ざるフェイスレス、ドロドロゴン！」

☆4＋☆2＝☆6

ドロドロゴン 守2200

「ドロドロゴン……？」

「そしてこの瞬間、墓地へと送られたトリック・クラウンの効果を発動。1ターンに1度だけミィの墓地に存在するEmを1体選択し、攻守を0にして蘇生できる！ただしその代償として、ミィは1000もダメージを受けなければならない」

Emトリック・クラウン 攻1600↓0 守1200↓0

一本松 LP2400↓1400

「……に来て、さらに自分で1000もダメージを……？」

「こりやあまずいな」

「ああ、違くない」

いぶかしむ八卦とは対照的に、この期に起こる何かを悟り領きあう観客2人。事実、一本松の長い仕込みはようやく終わりを迎えようとしていた。ここまでの全ては、この展開を迎えるため。

「イツツ、フュージョンタイム！シンクロ召喚されたドロドロゴンは1ターンに1度だけフィールドのモンスターを使つての融合召喚ができ、さらにドロドロゴンは融合素材の代わりとして使用することができる！スワンプ・フュージョン……ブラック・マジシャン・ガール！」

ドロドロゴンの体が文字通りドロドロに溶け崩れ、ドロドロの塊はしかしまたすぐに盛り上がって別の体を模り始める。すらりと伸びた足にメリハリのあるボディライン、そして特徴的なとんがり帽子。まさにブラック・マジシャン・ガールそのものとなったドロドロゴんと、甦ったトリック・クラウンが渦を描くように混じりあう。

「融合素材はブラック・マジシャンまたはブラック・マジシャン・ガール、及び魔法使い族モンスター。今こそ始まるショータイム、ミーのエースモンスター！秘術振るいしレジエンドソウル、超魔導師ーブラック・マジシャンズ！」

それは、まさに伝説という言葉を体現したかのような存在。デュエルモンスターズにおいて抜群の知名度を誇る、黒の最上級魔導師とその弟子。その師弟が力を合わせた一体となり、敵を討つためにその魔力を解放させる。

超魔導師ーブラック・マジシャンズ 攻2800

「ブラック・マジシャンズ……ですが、攻撃力はダイアンと同じ！」

「確かに。だからミーは、こんなカードを使つてみる。魔法カード、救魔の標を発動。この効果によりミーの墓地に存在する魔法使い族の効果モンスター1体、エフェクト・ヴェーラー……いや、ハットトリッカーをサルベージ。そしてこの瞬間、ブラック・マジシャンズの師弟魔法を発動！魔法・罨カードの効果が発動された時、1ターンに1度だけカードを1枚ドロロー。そのカードが魔法か罨だった場合即座に

フィールドにセットでき、さらにそのターンのうちに発動が可能となる。オーケーベイバー、ドロー！」

意気揚々と引かれたカードに、その場にいる全員の視線が一斉に集まる。もつともあくまでもドロー効果であるため、その中身を確認することは本人にしかできないのだが。しかしそのカードは、表向きにされた。一本松、会心の笑みと共に。

「オーケーオーケー、まだまだミーの腕は錆びついちゃいないみたいだ。ドローカードの名は、占い魔女 スイーちゃん！このカードはドローされた際に見せることで特殊召喚でき、さらにこの効果での特殊召喚に成功した時、相手モンスター1体を次のミーのスタンバイフェイズまで除外できる！クノスペのうち片方には、しばらくご退場願おうか？」

「クノスペっ！」

悲痛な叫びが少女の口から洩れるが、伸ばしたその手は届かない。青い服の少女が杖を振るうと、ただそれだけでクノスペの姿は音もなくかき消えた。

占い魔女 スイーちゃん 守0

「ここで装備魔法、ワンショット・ワンドを発動。装備モンスターの攻撃力は800アップする……けれど、この杖が生きているのもう少しだけ後さ。墓地に存在するBF―精鋭のゼピュロスの効果を発動！ミーのフィールドの表側表示のカード、ワンショット・ワンドを手札に戻してデュエル中1度だけこのカードを蘇生、そしてミーは400のダメージを受ける」

「このうえ、さらにモンスターを出すんですか!？」

「オフコース。夜空彩るブラックスター、精鋭のゼピュロス、復活！」

BF―精鋭のゼピュロス 攻1600

一本松 LP1400↓1000

「では、改めてワンショット・ワンドをブラック・マジシャンズに装備。イツ、エクシーズタイム！レベル4モンスター、スイーちゃんとゼピュロスでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク4！ユーのデッキはどうやらクノスペを軸としたヒーローデッキ……ならば、このカー

ドが有効と見た。吹雪に踊るヤングレディ、ナンバーズ No.104 神葬令嬢
ラグナ・ゼロ！」

超魔導師―ブラック・マジシャンズ 攻2800↓3600

☆4+☆4=★4

No.104 神葬令嬢ラグナ・ゼロ 攻2400

リンク召喚、シンクロ召喚、融合召喚、そしてエクシーズ召喚。異なる4つの召喚法を巧みに使い分けて盤面を構築するその動きには無駄がなく、基本はペンデュラム一本鎗でたまに他のモンスターも使う、という鳥居のエンタメとはまた違った方面からのアプローチが感じられる。

しかし両者に共通するのは、いずれも一筋縄ではいかない相手だということだ。

「ラグナ・ゼロの効果発動。オーバーレイ・ユニット1つを取り除き、相手フィールドに攻撃表示で存在する元々の数値と異なる攻撃力を持ったモンスター1体を破壊する、ガイダンス・トウ・フューネラル！そしてこの効果でモンスターを破壊した時、ミィはさらにカードをドローできる」

「私のクノスペシャルが……こんなにあっさり……」

呆然とした様子で呟く八卦の目の前で、2体目のクノスペが破壊される。さらにカードをドローされたことで、両者の差はさらに広がった。

No.104 神葬令嬢ラグナ・ゼロ(2)↓(1)

「バトルフェイズ。ブラック・マジシャンズでダイアンに攻撃！」

2人の魔法使いが互いの杖をクロスさせ、強化された魔力弾をその中心から放つ。それを受けるダイアンも金剛の鎧と剣でその一撃を受け止め弾き返そうと力を籠めるも、1歩及ばずにその体が吹き飛ばされた。

超魔導師―ブラック・マジシャンズ 攻3600↓M・HERO

ダイアン 攻2800(破壊)

八卦 LP4000↓3200

「く……い」

「そしてワンショット・ワンドの効果を発動。装備モンスターが戦闘を行ったダメージステップ終了時、このカードを破壊してミィはカードを1枚ドロウする……む？」

超魔導師―ブラック・マジシャンズ 攻3600↓2800

ダイアンが倒れ、八卦の場を守るモンスターは全ていなくなつた。しかし少女の場から、まるでダイアンの忘れ形見であるかのようにHの文字をかたどつたサインが浮かび上がり天井を照らしたのだ。

「なんてこつたい、そんなカードが伏せてあつたとは」

「ヒーロー・シグナル、発動します！私の場でモンスターが破壊された時、手札かデッキからレベル4以下のE・HEROを特殊召喚です。来てください、エアーマン……そしてエアーマンが場に出た時、デッキのHERO1体をサーチできます。私が選ぶカードは、E・HERO シャドー・ミストです」

E・HERO エアーマン 攻1800

「ここまでミィが展開しても諦めない、か。なかなか気に入つたよユー、ユーにはエンタメデュエリストとしての素質がある。だがバトルフェイズは続行だ、続いてラグナ・ゼロで攻撃！」

旋風のヒーローが起こす竜巻も意に介さず、氷の刃を手にした踊り子のようなモンスターが風の中を文字通り舞うように進む。そして逆手に握られたその刃が、エアーマンの体をざつくりと切り裂いた。

No.104 神葬令嬢ラグナ・ゼロ 攻2400↓E・HERO

エアーマン 攻1800 (破壊)

八卦 LP3200↓2600

「このターン中に決めきりたかつたところだが、ともあれこれでラスト。ハリファイバー、ダイレクトアタック！」

水晶機巧―ハリファイバー 攻1500↓八卦 (直接攻撃)

八卦 LP2600↓1100

「うう……ですが、なんとか耐え切りましたよお姉様！」

「グレート。ハットトリッカーをもう1度特殊召喚していれば、ミィの勝ちだったか……とはいえ、これは伏せカードに臆したミィの気合負けか。ミィはこのまま、ターンエンドする。しかし、ここからどう

する気だい？ヒーローの売りは攻撃力加算、しかしミーのラグナ・ゼロは相手ターンでもその効果を発動できる。つまり、かなりの数の融合モンスターはその力が実質封じられたことになるが」

詰め段階で結果的な戦術ミスこそあったとはいえこのターンの一転攻勢により、2人のライフはほぼ互角となる。しかしそれは、ライフ差のみを見た話。手札の枚数は八卦が見えているクノスぺを含め3枚に対し一本松の手には同じく見えているマスマティシャンを含め3枚、しかし両者のフィールドには天と地ほどの差があり、それだけの差をつけてなお3枚ものカードを抱えている一本松の力量がうかがえる。

いずれにせよ見えている妨害札を、いかにして使わせるか。それが、今の彼女にとつては最優先課題だといえるだろう……糸巻はこの状況を、そう分析した。しかし言うのだけは簡単だが、それを行うのは決してたやすいことではない。あまりのフィールドの差に、戦意喪失などしていかないだろうかと軽く心配になる。

「私のターン、ドロー！」

しかし結論から言えば、その心配は杞憂だった。引いたカードを見たその瞬間、少女はほぼノータイムで動き出したのだ。

「魔法カード、闇の誘惑を発動。カードを2枚ドローし、手札の闇属性であるシャドー・ミストをゲームから除外。そして装備魔法、薔薇の刻印を発動！私の墓地から植物族モンスターのクノスぺを除外することで発動できるこのカードの効果で、装備モンスターのコントロールは私が得ます。そして私が選ぶのは……ラグナ・ゼロ、あなたです！」

ラグナ・ゼロの素肌に、茨のような痣が走る。そして全身をのたうち回るかのように侵食したその痣はやがて先端が首元にまでたどり着き、その頂点たるラグナ・ゼロの頬の部分に大輪の花を咲かせた薔薇型の痣がくつきりと浮かび上がった。それと同時に薔薇の刻印に魅入られたラグナ・ゼロがフットワークも軽く振り返り、かつての主人と仲間に対しその刃を向ける。

「ブラック・マジシャンズの効果により1枚ドロー……いいのかい？」

攻撃力の高いブラック・マジシャンズでなくて」

「ええ、構いません。私の狙いは、このラグナ・ゼロをあなたのフィールドから離すこと。これでこのモンスターは、もう私のカードを破壊できません。そして魔法カード、パラレルワールドフュージョン平行世界融合を発動！このカードを発動するターンは他の特殊召喚が行えませんが、除外されたモンスターを素材としてのE・HEROの融合召喚を行います！」

「闇の誘惑を使つてのシャドー・ミストと、ミーが除外した……いや違う、薔薇の刻印でユーが除外したクノスぺか……！」

薔薇の刻印は、発動コストに植物族を求め。そしてクノスぺは植物族でありながらヒーローの一員であり、平行世界融合を組み込むことで除外されてもデッキに戻しつつ多彩な融合レパートリーが可能となる。それはほんの小さな偶然のシナジーが生んだ、少女が操る2つの要素を繋ぎ合わせるための架け橋ともいえるコンビネーション。その薔は、今まさに花開こうとしていた。

「その通りです！英雄の薔、今ここに開花する。龍脈の大輪よ咲き誇れ！融合召喚、E・HERO ガイア！」

床にひびが入り、鋭く走った地割れの中から黒い巨体が立ち上がる。その太い両腕を打ち合わせ足元に叩きつけると、衝撃波がまっすぐに走る。

「そしてガイアの効果を発動！融合召喚に成功したターン、相手モンスター1体の攻撃力を半分にしてその攻撃力を得ます。私が選ぶカードは、超魔導師―ブラック・マジシャンズです！」

「それで攻撃力の下がったところに攻撃するか、はたまたラグナ・ゼロの効果でドローに変換するか、かい？ノンノン、ミーのこのカードを忘れちゃあいけないよ。ミーは今の平行世界融合にチェインして、ハリファイバーの効果を発動していた。相手ターンにこのカードを除外することで、ミーのフィールドにシンクロチューナー1体を選んでシンクロ召喚扱いとして特殊召喚する！」

まっすぐに向かってくる衝撃波に対し、防御姿勢をとる師弟コンビ。しかしそれより先に、ハリファイバーが飛び上がった。その姿が光の粒子となって足元から消えていき、粒子は結集して新たなモンス

ターへと変化していく。それは、ピンクの長髪がたなびく魔法使いの少女。

「カモン、仲間を繋ぐグランドサポーター！ テックジーナス T G ワンダー・マジシャン！」

T G ワンダー・マジシャン 攻1900

「そしてワンダー・マジシャンがシンクロ召喚に成功した場合、魔法か罫を1枚破壊できる。ミーはガイアの効果にチェインしてその効果を発動、対象は薔薇の刻印だ！」

「ほう。ラグナ・ゼロのコントロールを取り返すことで、逆に攻撃力の上がるガイアを破壊しにきたか」

「なるほどなあ、よく考えたもんだ」

それは、通りさえすれば必殺の一撃となりうる効果。事実このターンの特殊召喚が平行世界融合のデメリットによつて封じられた八卦には、このタイミングでのガイアの喪失は致命傷といっても過言ではない。

しかし、少女はここでも驚異的な粘りを見せる。コントロールの奪還を狙われ、渦中のモンスターとなったラグナ・ゼロ。その足元からシウルシウルと恐ろしい素早さで蔦が伸び、その体を締め付けて地中へと引き込んだのだ。

「まだです！速攻魔法、フローズン・ロアーズ冷薔薇の抱香！私のフィールドから天使族のラグナ・ゼロを墓地へと送ることで、デッキからレベル4以下の植物族をサーチします。そして手札に加えたモンスター、クノスペを通常召喚！」

「ここで、またしてもそのモンスターとはね……！」

歯噛みする一本松だが、それはしかし必然である。徹頭徹尾、自分の信じるモンスターと共に。少女のデッキはその全てのパーツがクノスペをいかにして生かすのかを基準に組み立てられており、クノスペのために存在するのだから。なればこそ少女はここ一番の時は必ずクノスペを選び、カードもまたその思いに応えようと懸命に戦い抜く。

超魔導師―ブラック・マジシャンズ 攻2800↓1400

E・HERO ガイア 攻2200↓3600

E・HERO クノスぺ 攻800

「バトルです！まずはガイアでブラック・マジシャンズに攻撃、コンチネンタルハンマー！」

「さあ、通るか？」

最初にその両腕を振りかぶったのは、ガイア。しかし今度の目標は、床などではない。魔法使いの師弟めがけ、圧倒的な質量を持った剛腕が唸りを上げて振り下ろされる。

「ノンノン、ノーン！手札からEmダメージ・ジャグラの効果をこのターンも発動、捨てて戦闘ダメージを1度だけ0にする！」

「やはり握っていましたか……ですが、戦闘破壊は問題なく通ります！」

E・HERO ガイア 攻3600↓超魔導師―ブラック・マジシャンズ 攻1400（破壊）

「イエス。バット、この瞬間に破壊されたブラック・マジシャンズの最後の効果を発動。ミーのデッキからあるモンスター2体を選び、特殊召喚できる！」

「あるモンスター……まさか！」

何かに気が付いた少女の声に、ニヤリと笑みをもって答える一本松。そしてガイアの剛腕が振り下ろされた衝撃で発生した砂煙の中から、2つの人影が飛び出した。

「カモン、常勝不敗のレジェンドコンビ！ブラック・マジシャン！アーンド、ブラック・マジシャン・ガール！」

ブラック・マジシャン 攻2500

ブラック・マジシャン・ガール 攻2000

「ここに来て魔法師弟の揃い踏みか」

「だが、八卦ちゃんだってまだ負けたわけじゃない。これは、いよいよ読めなくなってきたな」

思いのほかハイレベルだった2人の戦いを、楽しげに観戦する2人。そんな背後のくつろぎムードとは裏腹に、真剣そのものの表情で少女が檄を飛ばす。

「お願いします、クノスペ。クノスペは場に他のE・HEROの仲間が存在するとき、相手プレイヤーにダイレクトアタックが可能です！」
その言葉通りに3度呼び出された蕾のヒーローが魔法使い2人を飛び越えて、その奥にいる一本松をまたもや殴りつける。

E・HERO クノスペ 攻800↓一本松(直接攻撃)

一本松 LP1000↓200

E・HERO クノスペ 攻800↓900 守1000↓900

度重なる攻撃や自発的な効果によって確実に減らされていった一本松のライフは、すでに風前の灯火。しかし彼にはいまだ、3体もの魔術師がいる。対して少女は今の攻勢にすべてのカードを使い切り、盤面のみで耐えるしかない状態。次のドローしだいでは、十分に逆転も狙えるといつていいだろう。

「私はこれで、ターンエンドです。そしてガイアの効果は終了し、攻撃力は元に戻ります」

E・HERO ガイア 攻3600↓2200

「ミーのターン、ドロー!だが……」

「このスタンバイフェイズ、スイーちゃんの効果は終了します……ですよね? 帰ってきてください、クノスペ。そして場にクノスペが2体並んだことで、クノスペシャルが復活します」

E・HERO クノスペ 守1000

ガイアにしか攻撃を行えず、たとえガイアを倒してもクノスペ2体が互いに攻撃を抑制する簡易ロック。もしこの処理にまごつけば、返しのターンでもう1度クノスペのダイレクトアタックが決まることは目に見えている。そうすれば、今度こそ一本松の敗北は必至。

しかし、今のドローフェイズを迎えた瞬間。勝負は、すでに決していた。

「さあ、ミーのショーも、いよいよ今がクライマックスだ。それではご覧に入れようか、スペクタクルなカードの力を! 魔法カード、波動共鳴を発動。このカードの効果により、フィールドに存在するモンスター1体のレベルは4になる。ミーが選ぶカードは、ワンダー・マジ

シヤン！そして、手札のハットトリッカーを通常召喚！」

「レベル変更カード？」

TG ワンダー・マジシヤン ☆5↓4

Emハットトリッカー 攻1100

「イツ、エクシーズタイム！ミィはレベル4の魔法使い族モンスター、ワンダー・マジシヤン及びハットトリッカーでオーバーレイ！エクシーズ召喚、ランク4！ミィの本当のエースモンスター、栄光にして永遠のエンターテイナー！カモン、Emトラピース・マジシヤン！」

突如フィールドに現れる、光のロープによって繋がれた空中ブランコ。そこに掴まった笑顔の仮面を浮かべるピエロが、どこからともなく照らしつけるスポットライトの光を浴びて高らかな笑い声と共に飛び出した。

☆4+☆4||★4

Emトラピース・マジシヤン 攻2500

「トラピース・マジシヤン……ですが、そのモンスターでもクノスペシヤルは破れないはず……！」

「ノンノン、お嬢さん。確かにミィの呼び出したモンスターでは、ユーの布陣を破ることは不可能。しかし、デュエルモンスターの勝敗はそう単純なものではないのさ。もともと、クノスペを使うユーには大きなお世話だったかな？魔法カード、クロス・アタックを発動！ミィのフィールドに攻撃力の同じモンスターが2体存在するとき、そのうち1体は攻撃できない代わりにもう1体は直接攻撃できる！」

「直接……攻撃……！」

息を呑む少女だが、もはやそれを止める手立てはない。空中ブランコから延ばされたトラピース・マジシヤンの手を、同じ攻撃力2500であるブラック・マジシヤンが掴み取る。遠心力に従い上昇していく2人の魔術師が、その頂点に達して静止したその1瞬の隙。そのタイミングを見計らい、黒魔導師がその手を放し空中へと飛び出した。そして放たれる高高度からの魔法の一撃は、クノスペもガイアも届かない。

「バトル。ブラック・マジシャンでダイレクトアタック、黒・魔・導ブラック・マジック！」

ブラック・マジシャン 攻2500↓八卦（直接攻撃）

八卦 LP1100↓0

「イエス！」

「うう、負けました……」

ガッツポーズを決める一本松とは対照的に、見るからにしよんぼりと地面にへたり込む少女。両者を見比べた鼓がふむ、と小さく唸り、糸巻の背中をまたも平手で叩く。抗議の表情に対し、お前が行ってやれとばかりに敗北した少女を指し示す。

「あー、八卦ちゃん？まあなんだ、惜しかったな」

「ううう、お姉様あゝ……！」

「あーわかったわかった、わかったから泣くなその顔で引つ付くな！……ったく、もう」

よほど悔しかったのだろう、自分の胸に顔をうずめて本気で泣きじやくる少女。引き離そうと試みるも、がっちり固定された両腕に結局すぐに諦めてさせたいようにさせてやる糸巻。代わりに癖のないさらさらの髪を撫でながら、なるべく優しい口調を意識して語り掛ける。

「よくやったぜ、八卦ちゃん。もうこんなに強くなってたとはな、正直アタシも驚いちまった」

「うう……本当、ですか？」

「ああ、そうさ。それにな、負けて悔しいってのはいいことだ。それだけ真剣に戦ったんだろ？なら、その悔しい思いの分だけ必ず強くなれる。だから楽しいんだ」

「う……うわーん！お姉様、お姉様ー！」

「あーもう、わかったわかった。もう好きなかだけ泣いてくれ、な？」

またしても泣きじやくる少女の頭を撫でながら、一本松の方へと向かった鼓に視線を向ける。そちらでは丁度、またしても仕事モードに切り替わった彼女が一本松に話しかけていた。

「おめでとうございませす。どうかしましたか？」

事務的な祝福の言葉にも答えず、どこかしんみりした表情でデュエルディスクを眺める一本松。問いかけられて、やっとその顔を上げた。

「いや、ミーもデュエルなんて本当に久しぶりなんだが。やっぱり……やっぱり、いいものだったんだなあって、さ」

「……そうですか、何よりです」

そのそっけない言葉には、一体どれだけの感情が込められていたか。しかしそんな内心はおくびにも出さず、淡々と言葉を続ける。

「では出場申請、こちらの方で受理しておきます。失礼ですが、滞在場所をお聞きしてもよろしいでしょうか」

その言葉に、鳥居のいる病院近くのビジネスホテルの名を告げる一本松。デュエルフェスティバルが終わるまではそこにいるつもりだ、との言葉に頷いて、一時の切り上げを宣言する。

「では、後日……そうですね、急な話ですが、明日の午前中にでも正式な申請書類をもってそちらに伺います」

「オフコース。万一ミーがそこにいなくても、その場合は鳥居のところにいると思っておいてくれ。じゃあ、ミーはもうホテルに帰らせてもらうよ。シューアゲイン、ハブアナイステイ！」

その言葉を最後に、騒がしかった男は出ていった。ようやく戻ってきた静かな時間に、まだ泣きじやくっている八卦とその対処に追われる糸巻へと順に視線をやり……鼓は仕事を全部押し付けられた空気を察し、人使いが荒いことだと小さなため息をつくのだった。

夜道を歩く一本松。その足取りは軽く、表情からも上機嫌なことがうかがえる。

彼の上機嫌の理由は、ひとえに先ほどのデュエルである。いまだ自分の腕が鈍っていなかったことへの満足、激戦の末掴んだ勝利の高揚……しかし何よりも大きな理由は、彼自身にも意外なことではあったがデュエルそのものにあつた。劇団が解散して以来、ずっと封印してきた彼の魂のデッキ。14年ぶりにそれを使って思う存分に戦えた

ことはそれだけで彼の心に充足感をもたらし、いかに自分がデュエルが好きだったのかを思い知った。

だからだろうか。その人影の存在に、ぎりぎりまで気が付けなかったのは。

「……む？へい、ユー。そこに立っていられちゃ通れないよ、少し通してくれないかい」

夜中ということもあり、人気などないはずの自然公園。なぜかその道の真ん中に立ちすくむ人影に、上機嫌なまま気さくに話しかける。しかし、その人影は答えない。返事の代わりにおもむろに、その左腕に付けられた機械……デュエルディスクを起動した。

「おいおい、穏やかじゃないじゃないか。勘弁してくれよ」

こんな夜更けにデュエルの勧誘。14年前ならいざ知らず、このご時世にそんなことをするのは「BV」を利用しての通り魔ぐらいのものである。さりげなく徐々に後ずさりながら逃げる隙を伺う一本松の背中に、突然固いものが当たった。

「え？」

咄嗟に振り返るとそこにあっただのは、天まで届かんばかりの分厚い石の壁。いや、それは背後だけではない。気が付けば横にも正面にも張り巡らされた壁によって、彼の退路は完全に立たれていた。そして彼の記憶は、かつても見ることがあるその壁の正体をはじき出す。

「迷宮壁―ラビリンス・ウォール……!」

見覚えのあるその壁は、守備力3000を誇る壁モンスターそのもの。実体化したのを見るのは彼も初めてだが、それでも幾度かこのカードを使うデュエリストとは戦ったことがある。

逃げ出すことは不可能。そう悟り、諦めて自らもデュエルディスクを起動する一本松。しかし、普段の彼ならばここまであっさりデュエルを受け入れはしなかっただろう。勝利の高揚、デュエルの楽しみ。本来ならばプラスであるはずのそんな感情の残滓が、皮肉にも無自覚のうちに的確な判断を狂わせる。

と、ここに来てようやく、沈黙を保っていた人影が口を開いた。といても、その顔が見えたわけではない。影になって何も見えない人

影から、押し殺した声が届く。

「……一本松一段。覚悟」

「ミーの名前を……!? ユー、ただの通り魔じゃないな!」

答えはない。高揚の残滓すら完全に吹き飛ぶほどの嫌な予感を感じながらも、すでにデュエルは始まってしまっている。

そして。

「ノ……ノーツ!!」

それは、ほんのわずかな時間だった。絶叫が夜の静寂を裂くも、その声を聞きつけたものはいなかった。

ターン19 幕間の妖狐

「チツ、おい鼓！そっちはどうだ、何かあったか!？」

幾分か八つ当たり気味に怒鳴りつける糸巻の声が、自然公園に響く。太陽はようやく東の空から顔を出し始め、まだ宵闇の残滓が西の空を染めつつも、急速に東から差し込む陽光によって上書きされていく時間。

そんな時間には似つかわしくない怒声に対し、これまたその声色だけで仏頂面が思い浮かぶほどの不機嫌そうな返事が飛ぶ。

「こっちも駄目だ。あたり一面の草が潰れた後……何か壁のようなものでも実体化させたんだろう。逆に言えば、それ以外何も出てこない。誰かは知らんが、逃走経路を塞ぎつつこの証拠隠滅。相当の手練れだな」

時刻はまだ早い。しかし彼女たちにとっては、それはあまりにも遅すぎた。

一本松一段が全身に大火傷を負い、意識不明の重体で病院に担ぎ込まれたのが昨夜の12時。その尋常ではない怪我の程度と全身が焼け焦げているにもかかわらず現場はその足元すらほとんど燃えた様子が無いという異様な状況から、「BV」によるものだと当たりがついてデュエルポリスの2人に連絡が来たのがその4時間後。それだけでも致命的な伝達の遅れだが、しかしその12時という数字すらも彼が何者かに襲われた時刻とイコールではない。

と、そこで鼓の携帯がシンブルな着信音を響かせた。朝の空気に響き渡るそれをすぐさま手に取り、相手を確認しすぐさま耳に当てる。「はい、こちらデュエルポリス……はい、わかりました。それで、被害者の容体ですが……はい、ありがとうございます。引き続き治療のほど、よろしくお願いします」

「病院か。なんだって?」

通話中にそばに来ていた糸巻が、今にも彼女を揺さぶりかねない勢いで問いかける。

「少し落ち着け、糸巻。まず容体だが、まだ意識は戻りそうにない。た

だ、いいヒントが見つかった。被害者の付けていた腕時計だが、それがどうも襲撃された時間に壊れて針が止まっていたらしい。それによると襲撃時刻は昨夜、午後8時ごろだそうだ」

「8時？アタシらと別れてすぐか。それだけの怪我して丸々4時間も野外で放置……キッツいな」

「辛うじて一命はとりとめたらしいが、まあ危険なことに変わりはないな」

普段の調子はどこへやら、完全に真剣な仕事モードでひそひそと話す2人。普段から時間帯を考慮した周囲の迷惑などお構いなしなこのタッグが珍しく声を潜めているのは、その場にいる3人目の調査者の姿があったからだ。

そして、鼓はともかく糸巻が柄にもなく他人に気を使ったのが悪かったのか。折よくその3人目が、ぎこちなく松葉杖にもたれかかりながらよたよたとやってきた。目の下に隈のできた見るからに陰鬱な、しかしどこか鬼気迫る表情で口を開く。

「糸巻さん、こつちも裏取れました。叩き起こしてやりましたよ……一本松先輩、やっぱりゆうべはホテルに帰ってないそうです」

「お、おう。そうか、悪いな」

その3人目の男は、名を鳥居浄瑠といった。しかし本来、彼もまた先日のカードの精霊事件で受けた怪我が完治しておらず、リハビリ真っ最中の身の上なはずである。当然直属の上司である糸巻も、いくら被害者が彼の知己とはいえ……むしろ知己だからこそ、間違っても彼をこの場に呼びつけて仕事を手伝わせる気などなかった。なんなら、この事件のことすらも彼には可能な限り隠し通しておこうとさえ思っていたほどである。

にも拘わらずそんな彼が自分の体のひどい状態を押ししてこの場に來ていたのには、あるシンプルな理由があった。それに初めて気が付いたとき、糸巻は思わず天を仰いで呻き声を漏らしたものだ。

「にしても、あの一本松先輩が……驚きましたよ糸巻さん、なにせ真夜中にいきなり急患だつてんで飛び込んで來たのが、もう10年以上会ってない先輩だつたんすから」

「だろうなー」

同じ病院への搬送という、馬鹿馬鹿しいほどにシンプルな理由。しかし考えてみれば、それは必然でもあった。そもそも一本松自身が鳥居の入院する総合病院に近いという理由から一夜の宿を選び、そこに戻る途中で襲われたのだ。当然、担ぎ込まれるとしたらその場から一番近いその場所に決まっている。

「じゃあ俺、ちよつと監視カメラの映像洗ってきますわ。さつきここの管理人にも電話して今すぐ管理棟の鍵持ってこいつつといたんで、そろそろこつち着くと思いますんで」

「ああ、わかった」

包帯をあちこちに巻き付け、松葉杖に頼らねばまともに歩くことすらおぼつかない体。エンターテイナーとして、演劇デユエリストとして、舞台を駆けまわっていた彼と同一人物とは思えないその後ろ姿を見送りながら、鼓がポツリと呟いた。

「私はあの男とは初対面だが、控えめに評してもひどい有様だな」

「安心しろ、アタシも同感だ。巴のアホに叩きのめされてだいぶ精神的に参ってた矢先、今回のこれだからな。今はブチ切れてんのと復讐心だけでどうにか前向いてるが、正直かなりヤバイ。絶対こうなるのは目に見えてたから、アイツには知らせたくなかったんだよな」

不満げに唸るが、すでに彼がこの件に首を突っ込んでしまったという事実は覆らない。今すぐ病院に帰れと怒鳴りつけたところで、はいそうですかと素直に言うことを聞くような男でもない。そもそも、彼女らだけでは人手が圧倒的に足りていないのもまた事実。もはや動き始めてしまった歯車は、どうすることもできはしないのだ。

やりきれない思いで近くのベンチに腰掛け、いつも通りに煙草に火をつける。目撃者も証拠もない雲を掴むような現場捜査に嫌気がさしてきたというのもあるが、それでもここまででどうにか確認できた情報を整理したかったというのもある。

「被害者、一本松一段。以下個人情報省略、と。狙われた理由は……まあ、明らかだろうなあ。一応、ただのチンピラの仕業で昨日の話とはなんも関係のない全くの偶然なんて線もあるが……」

「まずないだろうな。焼け焦げた財布の中にボロボロの現金が入っていたそうだし、そもそも昨日のデュエルを見る限り、あの腕前なら大抵の奴は返り討ちに会うのがオチだろう。つまり下手人は、最低でもプロデュエリスト級に腕が立つことになる」

隣に腰を下ろした鼓と共に、つい昨日に一本松本人から聞いた話を思い出す。表のルートに回せない、なおかつデュエルフェスティバルの開始日までにと急ぎで運び込まれた謎の品物。その話を嗅ぎつけたことを察知された、というのは子供でも予想がつく。

「アタシもそう思う。その辺の雑魚が八卦ちゃん以上の腕つぶしと自分のやらかしたことに証拠隠滅するだけの脳味噌付けてみる、そんなもんいくらアタシでも商売あがったりだ」

「違ういな」

煙を吐き出し、朝焼けに照らされたそれが上に昇って消えていく様をぼんやりと眺める。今度沈黙を破ったのは、鼓の方だった。

「ところで糸巻よ。お前は どう思う?」

「どう、つつーと?」

「昨日の話だ。被害者から聞いた謎の荷物について、私たちが知っている、ということについては漏れていると思うか?」

「それなんだよなあ……」

苦々しげに呟き、またしても煙を吐く糸巻。鼓の質問の意図は、彼女もわかっている。

すなわち一本松一段は情報を漏らしたことへの粛清としてこの襲撃を受けたのか、はたまた情報を掴んだことに対する口封じのために襲われたのか、だ。

実際のところ彼女らにはいまだ『この町に謎の荷物が運び込まれた』という点しか情報がない。そのうえで今回の敵……そう、「敵」である……は、そのことをどこまで知っているのか? どう判断し、次にどんな手を打ってくるのか? 今現在企まれているよからぬことは、その計画が悟られた段階で破棄できるようなものなのか、それとも強行してくるのか。

その全てに答えはない。その苛立ちからか、無意識のうちに糸巻の

手にした煙草のケースは握り潰されていた。

「ただどつちにしても、デュエルフェスティバルは中止できないよな。これができればだいぶ楽になるんだが」

「それは私も同感だ。だが、無い物ねだりは見えていて気持ちのいいものではないな」

時期と場所を考えれば、敵の狙いはデュエルフェスティバル一択だと考えるのが自然だろう。もちろん、それすらも隠れ蓑であり本命が別に存在する可能性も捨てきれるものではない……しかし、テロリストの隠れ蓑にしてはあまりにも贅沢すぎるイベントであることも確かだった。今でこそデュエルモンスターズの凋落とともにその名も落ちぶれたデュエルフェスティバルだが、そこは腐っても鯛。「BV」前の世界を知る者にとつて、その名の示す意味はあまりにも大きい。神聖視されている、といってもいい。だから糸巻も鼓も口ではこう言っているものの、たとえ自分たちがどれだけ追い込まれようと、このイベントを中止するなどという判断は最初から選択肢に入っていない。

開催は決定事項。そのうえで、次善の策を練る。

「とはいえ、何狙ってるのかさっぱり見えてこないのが不気味なんだよなあ。会場の爆破か？参加者の闇打ちか？一般客だつて集まるんだ、単に「BV」を起動させるだけでもそれなりに被害は出る」

「だが、我々デュエルポリスが会場に散らばれば妨害電波で……ああいや、そういうえば本部に話が来ていたな。お前が見たとかいう、実体化率がこれまでの比にならない最新式のことか」

「ああ。巴のヤロー、くつだらねえもん作りやがって。デュエリストをなんだと思つてんだ、今度会つたらいい加減マジで締めてやる」

そう息巻いて握り潰したままだった煙草の空き箱をぐつと持ち上げ、ちようど直立した人の首あたりの高さで両手を使いギリギリと締め上げる。万力のような力によつてすっかり原型をなくした空き箱を遊歩道を挟み向かい側の自動販売機近くにあるくずかごに投げ入れたところで、ふと何かに気づいた鼓が弾かれたように立ち上がった。先ほどもとはまるで違う冷たい目つきでデュエルディスクを

起動するその姿にただならぬものを感じ、糸巻も反射的にデュエルディスクの電源を入れてから彼女の視線の先を見る。

その目はすぐに、驚愕に見開かれた。

「おはようございます、いい朝ですね。もっとも私としては、朝一番から彼女の顔なんてもの拝まなくてはいけないので気分は最悪ですが」
敵意はないと言わんばかりに両手を肩の高さまで上げ、これ見よがしに両手を開いて何も持っていないことをアピールしながら近づいてくる存在。その男の名を、彼女たちはよく知っている。

「噂をすれば、か。久しいな、『おきつねさま』……巴光太郎」

「貴女に直接お会いするのは随分と久々ですね、『錬金武者』の鼓千輪さん。フランス支部でのご活躍、拝見させていただきましたよ。まったく面倒なことをしてくれました、おかげで後始末が大変でした」

字面だけ見れば何気ない挨拶にも聞こえるが、両者を隔てる壁は大きい。「BV」付きのデュエルディスクと一本松一段を倒すほどの腕前を持ち、一人を半死半生に追い込んでなおかつ一切の手がかりを残さない用意周到さ。そしておまけに、この家紋町に出現する存在。口に出しこそしなかったものの、2人の中でその容疑者リストのぶつちぎりトップで名前の挙がっていた男。それが、自分の方から彼女たちの前にその姿を現したのだ。どれほど自分が無防備であるとアピールしようが、そんなものは信用するに値しない。

「なんのつもりかはどうだっていい。アンタ、自分に前科がいくつあるのかわかってんのか？ わざわざ顔出すとはいい度胸だな、コラ」

「任意同行を求めても構わないか？ ひとつ断っておくと同行の義務はあるが、拒否する権利をやるつもりはない」

デュエルディスクを構えたまま臨戦態勢をとる、それぞれその二つ名では夜叉と武者とまで称された2人の有無を言わさぬ無言のプレッシャー。常人ならば完全に戦意喪失してその場にへたりこむ、どころか失禁してもおかしくないほどの圧力を前に、しかし巴はまるでそんなもの感じた風もなく、ただ肩をすくめるのみにとどまった。

「ああ、怖い怖い。勘違いしないでいただきたいのですが、今日の私は貴女らデュエルポリスに喧嘩を売りに来たわけではないのです。む

しろその逆ですね」

「逆、だあ？なんだ一体、寝ぼけてんのか」

「……貴女に馬鹿にされるのは人一倍腹が立ちますね。ですが自体は急を要することですし、ここは単刀直入に話しましょう。まず……」

そこまで口にしたところで、またしても鼓の携帯がけたたましい着信音を響かせる。意味ありげな笑みと共にどうぞ出てください、とジエスチャーする巴からは目を離さずに、素早く片手で取り出したそれを耳に当てる。そこから聞こえてきた言葉は、その腕ひとつでデュエルポリスフランス支部長にまで上り詰めた百戦錬磨の彼女にとっても驚くべきものだった。

「この番号、さっきの病院からか？こちらデュエルポリス。すみませんが、少々手短に……なんですって!?!」

電話口に声を荒げると、隣の糸巻が普段目にしない彼女の動揺に眉をひそめる。それでも巴からは決して視線を外さないのは、彼女がプロだからだ。一方その巴はいえば、相変わらずホールドアップしたまますべてお見通しだと言わんばかりに薄く笑う。その表情が気にかかったものの、電話口の向こうで自分よりもひどいパニックに陥っている看護師をなだめる方が先かと気を取り直す。

「……失礼しました。迅速な報告、ありがとうございます。何か被害者の身元を示すものは……そうですか。外傷は……なるほど。では言うまでもないでしょうが、引き続き治療をよろしくお願いします。もし何か判明しましたら、お手数ですがこちらに連絡をお願いします。では」

通話を打ち切り、先ほどまでよりもさらに一段と厳しい目つきで巴を睨む鼓。

「おい、一体何の電話だったんだ？」

「緊急搬送。先だつての一本松一段と同じ、デュエルディスクを装着した男が全身火傷による意識不明の重体で担ぎ込まれた……!」

「はあ!?!昨日の今日で、また誰かやられたってのか!?!」

「ああ。何せ身分証明になりそうなものは全部燃えていたそうだから、まだ身元も不明だがな。だが火傷の具合からいって、同じ手口な

ことは間違いないらしい」

新たな被害者。声を張り上げる糸巻に答えたのは、それまで黙って話を聞いていた巴だった。

「身元特定の必要はありませんよ。被害者は私も、そして貴女がたもよく知る人物です。『二色のアサガオ』、朝顔涼彦。一連の流れによる2人目の犠牲者は、彼です。そしてそれを重く見たからこそ、私はよりによって貴女相手におおて繋いで仲良しごっこをしに来たんですよ」

「朝顔お!?嘘だろ、アイツが?」

朝顔涼彦、かつての二つ名は『二色のアサガオ』。主にこの町の周辺をテリトリーとするプロ崩れの裏デュエリストであり、「インティ&クイラ」と「Sin」の2つの要素を操ってのシンクロ召喚と大型モンスターによる蹂躪を得意とする実力者。フランス帰りの鼓にとつては懐かしい同業者の名前でしかないが、糸巻にとつてはつい先日にも発生した精霊のカード事件で顔を合わせたばかりである。

そして驚愕と同時に彼女が感じたのは、この場に八卦がないことは不幸中の幸いだったという安堵である。廃図書館での暴走を経てあの少女がああ男、そしてその舎弟に対しなぜか懐いていたことは彼女にも見て取れた。そんな存在が意識不明の重体にまで追い込まれたというのは、あまり本人に聞かせたい類の話ではない。

「……この間見た時は、まだアイツの腕は落ちてなかったはずだが。それでも負けたのか」

「ええ、彼は昔と同じくいいデュエリストでしたよ。腕が立ち、度胸もあり、人を惹きつけ場に馴染む力も申し分ない。だからこそ、私も彼に一任していたんです。それが完全に裏目に出ましたね」

「二任?何の話だ?」

さりと出てきた一言を聞き逃さなかった鼓に詰め寄られ、やれやれと嘆息する巴。

「ああ、そういえばそちらはまだ掴んでいないはずの話でしたね。となると、そこから話さなければいけませんか。私の持つ……いえ、持っていた例の新型『BV』。どうも最近、それを狙ってくだらない動

きがありましたね。そちらから見れば私たちは一括りに『BV』を使うテロリストかもしれないませんが、その技術のひとつ下ではこれで結構派閥もあるんですよ」

「……そうだろうな」

その言葉に頷く2人。かつての事件によって職を、地位を、生活を追われすべてを奪われたデュエリストは多い。そのマネージャーや専属記者などの関係者も含めれば、その数は決して馬鹿にならない。もしも復讐者と化したテロリストが一枚岩ならば、いくらデュエルポリスが奮闘しようともソリッドビジョンの実体化、その数の暴力で世界は今よりもはるかに悪い状況に陥っていただろう。

しかし、現実はそのようになっていない。デュエルポリスの発足以降、いつだって世界は薄氷の上で綱渡りするような不安定かつ脆い小康状態をどうにか保ってきていた。

それはつまり、敵の内部で何らかの足の引っ張り合いが今なお行われているということに他ならない。誰も口に出しはしないが、デュエルポリス内部でもその事実は公然の秘密として認識されていた。

「それにアンタの開発した新型、まだ世界のどこでもまともに実用化されてないだろ？あれが出回りさえすれば、認めたくはないがアタシらはもう総崩れだ。デュエルポリスは『BV』を無効化できる、それが一番のアドバンテージだったんだからな」

「ええ。デュエルポリスの壊滅だけなら、本来我々がその気になりさえすれば簡単な仕事でしょう。もっとも、そこで話が終わらないからこそどこの組織も下手に動けないわけですが。あくまでも世界への復讐は、我々にとつて通過点。重要なのは、その後の世界の覇権。私としては正直、どうでもいいんですけどね。そのせいで貴女方デュエルポリスがいつまでものさばっているのは、それこそ本末転倒だとも思うのですが……おっと失礼、話が逸れましたね」

いつの間にか脇道に向かっていた話を軌道修正し、少し間を空けたのちまた口を開く。

「簡潔に話しましょう。我々は今回、あの新型『BV』の技術の一部と引き換えに資金提供を同業の方に打診しました。なにせ、鼓千輪。貴

女がフランスでご活躍されたフルール・ド・ラバンク摘発事件は、少なからず我々の資金繰りに影響を及ぼしていましたからね」

「それは何よりだ」

確かな殺気のこもった視線を受け止めてなお鼓は眉一つ動かさず、平然と短く返す。巴もその反応は予期していたのかそれ以上嫌味を積み重ねるような真似はせず、すぐに話を進めた。

「どこまでこちらの手札を明かさずに済むか、その情報に対しいくら引き出せるか……こちらがそういった作業を任せていたのが、今回の犠牲者となった朝顔です。私が直接交渉の窓口に立つてもよかつたのですが、私よりも彼の方が性格的に適任である点、万一のことがあつた際に技術的なことには疎い彼ならば口を割る心配がないという点を重く見た形になりますね。少々用心しすぎかとも思つたのですが、まさか本当にこんな思い切つたことをしてくるとは」

なんてことないような口ぶりだが、その言葉や表情には隠し切れないう後悔や焦燥の色が浮かんでいた。彼が狂的ともいえるその敵意と憎しみをむき出しにするのは、あくまで糸巻ただ一人に対してのみである。それ以外の存在に対してはえげつないとはいえそれ止まりであり、身内に対してはこうして人並みに責任を感じることもある。だからこそ、身をえぐるような屈辱を押してまで彼女の前に姿を現したのだろう。これは糸巻にも言えることではあるが、本人の強さに頼り切つた恐怖による支配だけでは、決して人は寄つてこないのだ。

「……で。アンタは一体、この後どうしたいんだ？」

「戦争ですよ」

ズバリ切り込んだ糸巻の声に伏せていた顔を上げ、ノータイムで即答する。

「まあ人数の都合上、そこまでの規模にはならないでしょうが。抗争、というのがいいところでしょう。しかし、そんな呼び方はどうだつていい。彼はいいデュエリストでしたし、私の顔に泥を塗つた罪は重い。落とす前は付けていただかないと、ねえ？」

「んなこと聞きたいんじゃないよ。なんでそこに、アタシらを絡ませる必要がある？ 勝手に潰しあつてろアホ」

「私も、できることならそうしたかったんですがね。ただ今回の場合、私の個人的な感情を横に置いてでもデュエルポリスを巻き込んだ方が効率がいいと判断しまして。この町に荷物が運び込まれた、そんな話は聞いていませんか？」

「……！」

一本松一段と、朝顔涼彦。点と点でしかなかった2つの襲撃事件が、1本の線で繋がった瞬間だった。

「その中身、カードですよ。カードショップはもちろん焼き討ちを免れ保存されていた好事家のコレクションや、果ては小学校のタイムカプセルに入っていたデツキまで掘り起こしてかき集められた大量のカード。鎖付き爆弾^{ダイナマイト}、パイナップル爆弾^{ボム}、破壊輪……よくもまあこんなに集めたものだと思いますが、大量の爆薬系カードです」

「そうか、そういうことか……！」

そのラインナップから犯人の狙いを悟った鼓が、やられたと小さく呻く。そしてそれは、糸巻も同感だった。2人の頭に浮かんだ筋書きを、巴がなぞるように言葉にする。

「カードは集められ、『BV』は奪われた。決行はデュエルフェスティバル当日……一斉に実体化されたそれらのカードが爆発を起こせば、どれほどの破壊力を生み出すことか。少なくとも、この町ひとつは軽く吹き飛ぶでしょう。なんなら、この国の地図の形すら変わりがねません。デュエルポリスの権威は地に堕ち、私どもも無事では済まなくなる。まったく、派手なことを思いつくことだ」

「……いや、待て。それだけの爆発を起こすとすると、起動役も無事では済まないだろう。新型『BV』とやらも一緒に吹き飛ばせば、その技術もロストするのでは？」

「いい質問ですね、流石はフランス支部代表。ですが、その点も抜かりはないようです。爆発系カードと同時に少量ですがホーリーライフバリアー、ピケルの魔法陣、バリア・バブルといった防御系カードの流入も確認されていますから、それを利用して自分だけダメージを防ぐつもりなのでしょう。ご丁寧に水陸両用バグロス Mk-3なんてのも1枚混ざっていましたから、この町一帯が水没しても問題な

い、ということですね」

さわやかな朝の日差しが照らす中、重苦しい沈黙が立ち込める。もはや事態は、ただの襲撃事件に留まらない。当初彼女たちが考えていたよりも、はるかに切迫していた。

「……とまあ、私から言えることはこんなところですよ」

そういつて話を締める巴だが、当然それで終わるはずがない。いつたい何桁単位で犠牲者が出るかもわからないような話なのだ、流石の糸巻も真剣にあらゆる可能性を詰めようとする。

「そのアホども、今から開催までにとつ捕まえられないのか?」

「それができるなら我々の手でとづくにやっていますよ、単細胞。かなり派手に動いているはずなのですがどれだけ手を尽くしてもまるで足取りが掴めず、運び込まれたカードどころか奪われた新型『BV』内蔵デュエルディスクの行き先すらわからない。ここまで尻尾を掴ませないとなると、もう当日までにかするのは無理ですね」

「現場を押さえるしかないか。犯人の狙いは、デュエルポリスの権威の失墜と同業他社の壊滅、そして新技術の奪還。となると、起爆のタイミングはデュエルフェスティバルの状況を見て一番盛り上がる瞬間か」

鼓の分析に顎に手を当て、少しの間沈黙考する糸巻。今回の開催地として彼女が押さえたのは、駅前広場。これまでも何度か別のイベントで使用されたことがある、ある程度開けた地である。周辺には小さなビルが立ち並んでおり、中には一般市民の住むマンションも存在する。

「ふむ。そーなると、少しは場所も絞れてくるな。それでも面倒な仕事には変わらないが」

「ちなみに、今回の参加者はどれほど決まっていますか?もしよろしければ、私の方でも息のかかったデュエリストを何人が参加させたいのですか」

「お前の?あー、青木のおっさんとかロボの奴あたりか。あと、朝顔の舎弟とかか?」

「ええ、なので3枠程度ですね。私自ら出ていくのも手ではありません

が、あまり私が表に出るとそちらの彼がうるさいでしょう？」

「……誰のせいなんだかな」

「はてさて。で、どうします？こちらが提供できる情報は、全てお出ししました。あとは貴女が首を縦に振るか、それとも横に振るかですよ」

そちらの彼というのは、言うまでもなく鳥居のことだ。巴とて無論、自分との邂逅が彼の体と心にどれほど深い傷を刻み込んだのかは承知している。

ただ、承知したうえでそれをえぐっていくだけのことである。いくらデュエルポリスとは根本的に敵対する立場にあるとはいえその趣味と実益の両立と公言してはばからないその感性は糸巻との不仲の……特に14年前から顕著になったその関係の、星の数ほどある理由のひとつに数えられる。

「はー……結局、最後はアタシが決めなきゃいけないのか」

「私に振るなよ？……ここはお前の管轄だからな」

「だよなあ……」

もちろん状況と最悪の事態を考えれば、巴とここで手を組まない選択肢はない。それは糸巻自身、頭ではよく分かっていた。しかしそこで即断できずに、彼女にしては珍しく歯切れの悪い調子でぽりぽりと頭をかく。

無論そこには、糸巻自身の巴に対する個人的な嫌悪感もある。だが、彼女とて一応はいい大人である。理由がそれだったならば、ぐつと堪えてこの一大事を乗り切ることできる。事実この場を任されたのが鼓だったならば、彼女はそうして眉一つ動かさずに合理的な判断を下せただろう。

しかし、それでも。まだ糸巻には、わずかに迷うだけの理由があった。

「アイツがなあ、どうなるか」

これもまた、言うまでもなく鳥居のことだ。ただ心が折れて傷を負ったというだけならまだしも、今の彼はそれに加えて目先の怒りと復讐心に囚われたせいで明らかに視界が歪んでいる。そんな状態で

自分と巴が手を組んだなんて話が耳に入った時、ただでさえボロボロになり、危うい均衡の元に成り立っている彼の精神にその事実はどれほどの悪影響を生むだろうか。

彼女の勘は、今この瞬間こそが彼女たちにとって決定的な分岐点になると告げていた。しかしそれは何百何千、下手をすれば万単位の人々の安全と、鳥居浄瑠というたったひとりの男を天秤にかけろという話に等しい。彼女がどれだけ苦しみ悩もうとも、結局のところ結論など最初から決まっているのだった。苦い顔で重い口を開き、予定調和の言葉を絞り出す。

「……わかったよ。お手手つないで仲良くなんざなる気はないが、今回ばっかしは仕方ない。利害の一致だ、手を組もうじゃねえか」

それを口にした瞬間、もう後戻りはできないという思いがその心に重くのしかかる。しかしいくら必然の回答だったとはいえ、それを答えたのは他でもない彼女自身なのだ。

「ええ。貴女なら、そう判断すると思っていましたよ。結局、ご自分の部下のことは裏切るんですよね？懐かしのあの時のように」

含みのある笑みに露骨に嫌な顔をし、しかし何も言い返さずに目を背ける糸巻。そんな彼女の反応をそれとは対照的に楽しげな表情で眺めた巴がでは、と彼女たちに背を向けて、歩き出す寸前にその懐から一枚のメモ用紙を取り出した。

「失敬、大切なことを忘れていましたよ。こちら、今回の件が終わるまでの私の連絡先です。それでは、またお会いしましょう」

その手を離れたメモ用紙はひらひらと宙に舞い、それを鼓が空中で捕まえる。一方の糸巻はその背中が見えなくなるまで、じつと巴の去った方角を見つめていた。

ターン20 独善たる執行者たち

その日の朝は、これまでとは何かが違っていた。すべてを否定され揺れていた鳥居浄瑠とりいじようるの精神はかつての先輩への襲撃を経て限界を迎え復讐へと舵を取り、糸巻太夫いとまきだゆうは犬猿の仲である巴光太郎と不承不承ながらに手を組んだ、そんな日。

そしてその日は、ある少女にとっても何かが変わるきっかけとなる日であった。少女の名は、八卦九々はっけくくの乃。デュエルモンスターズのタブー視とほぼ時を同じくして生まれ育ち、それでもなおカードを愛する少女である。

しかし、そんな予兆が最初からあったわけではない。その日の朝は、少女にとつてはいつも通りの朝だった。

「ではおじいちゃん、行って参りますー！」

「ああ、楽しんでおいで」

店の奥から帰ってきた叔父の声に満足し、元気いっぱいにはドアを開けて青空の下に躍り出る。その手には愛用の通学カバンが握られ、その中では密かにいつも持ち歩いている携帯用デュエルディスクが揺れる。

少女はそもそも、この町の住人ではない。もともと両親と住んでいた町の学校が「BV」によるテロ行為によって文字通りに崩壊し、急遽叔父の住むこの町にやってきたのである。無論その地域にもデュエルポリスは存在したのだが、対応の遅れや担当の実力不足といった要因が重なり合ったせいで被害を食い止めることができなかつた形になる。

そしてそれが、少女が糸巻と出会うほんの3日前のこと。それから3か月も経たないほどの短い期間ではあったが、持ち前の人懐っこさとその明るさで少女はすっかりこの町に順応していた。

「あ、八卦ちゃんー！」

「おはようございませす、竹丸さん」

飛び出した少女の姿にふんわりと花が咲くような笑顔を向けたのは、茶髪を三つ編みに編んだ丸眼鏡の少女。八卦にとつては、この町

に来てから初めてできた友達でもある。

「うん、おはよう」

そういつて差し出された手を、少女もまた手を伸ばし握り返す。そうして雑談しながら通学するのが、ここ最近の少女たちの日常風景だった。といつても、別に大した話をするわけではない。テレビ番組、最近読んだ本、宿題、共通の友人……その時だけ笑って楽しい時間を共有したらそれつきり、もう思い出すこともないような他愛もない話。

しかしその日は、ほんの少しだけ毛色が違っていた。興奮気味に彼女が切り出した話は、少女にも無関係とは言い難かったのだ。

「ねえねえ、八卦ちゃん。知ってる？今この町に、デュエルポリスの偉い人がフランスから来てるんだよ。ほら、1か月ぐらい前にニユースでやってた、フランスの銀行をたつた1人で摘発したつていう鼓さん」

「え、ええ……」

知っているも何も、つい先日には一緒にケーキまでご馳走になった仲である……とは、さすがに言い出せなかった。少女は、自身がデュエリストであるということすら彼女に明かしていない。秘密というわけではないのだが、この友人の趣味は読書で運動神経はからつきしという典型的な文学少女。それなりに激しいスポーツとしての一面も持つデュエルモンスタースの話をするのは、少女にとっても多少の遠慮があった。

そもそも先述したように少女自身が対外的には「BV」、ひいてはデュエルモンスタースによって転校を余儀なくされた犠牲者の身。そういつた目で見られている自覚を持ちつつデュエルモンスタースが大好きであると公言できない程度には、幸か不幸か少女は場の空気を読む能力に長けていたのだ。だから目の前の新しい友人も、普段は完全なる善意から少女の前でデュエルポリスやカードの話をすることは避けていた。今日に限っては、興奮が理性を打ち消したのだ。

そんなぎこちない返事には、気づいているのかいないのか。頬を紅

潮させた竹丸が日頃大人しい彼女にしては珍しく、身を乗り出さんばかりにまくしたてる。

「凄いよね、あの人！外国の最前線で働く格好いい女性、いいなあ、憧れちゃう……」

うつとりと呟くその姿に、まだ人生経験の浅く話を流す技能の足りていない少女はなんと返したものと返答に困る。そして迷った末に、無難な質問でお茶を濁すことにした。

「で、でも竹丸さん。そんな話、どこから聞いたんですか？昨日のニュースにはそんなこと一言もなかったですが」

「あのね、八卦ちゃん。実は私、直接その人を見ちゃったの！本屋さんに行く途中でケーキ屋さんの前に人だからできてたから、なんだろうなあと思つたら」

「へ、へえ……」

ますます自分の笑顔がぎこちなくなっていくのを自覚しつつも、少女はしかしそれを止められなかった。しかし幸いなことに、目の前の相手はそれすらも気づかないほどに興奮していた。

「それでね、それでね！私、お父さんとお母さんからずっと危ないから近づいちゃダメって言われてたからデュエルって見たことなかったんだけど。機械のモンスターがいきなり出てきたり、しかもそれが動き出したり！相手の怖そうなモンスターが攻撃してきても落ち着いて構えて、もう本当に格好いいなあって！」

そう語る友人の顔と混じりけなしの光に満ちたその瞳を正面から見て、始めてデュエルモンスターに触れた時の自分もきつとこんな調子だったんだろうとは容易に想像がついた。その感覚を誰よりも理解できる少女だからこそ、この友人とそれを共有したい。自分にもよく分かる、その言葉を口に出すことができたらどれほどいいだろう。

無論、その感情を止める者など最初から誰もいない。ただ少女自身が幼い感性の中で、どこか負い目と後ろめたさを感じているだけのことだ。

曰く、自分は被害者だというのに、デュエルモンスターを楽しん

でいていいのだろうか？不謹慎、とまで考えたわけではない。でも漠然とした感覚の中で、なんとなくデュエルモンスターズに対し肯定的な感情を表に出すことがはばかられたのだ。

そしてその沈黙を、喋りたかったことをすべて吐き出してようやく少し冷静になった竹丸の頭脳は意味をはき違えて解釈する。曰く、目の前の彼女はデュエルモンスターズのせいでの町に避難する羽目になったというのに、そんなトラウマ（だと彼女は思っている）を踏み抜いた自分は何と無神経だったのだろうか。何も違わないはずの少女たちに生まれたすれ違いは、ぎこちない沈黙として両者の間に横たわった。

「……」

「……」

かたや自らの口の重さを責め、かたや自らの不注意ゆえに軽くなった口を恨む。どこまでも近いくせに、真逆な2人の少女。結局その空気はほぐれることもないまま、気が付けば2人の少女は校門までたどり着いていた。

「わ、私、放送委員の仕事があるから」

「あ……」

嘘だ。竹丸が今年の春、引っ込み思案な自分を少しでも変えたいと一念発起して放送委員へと立候補したことは少女もその友人として知っているが、こんな早朝から放送するようなことなんてあるわけがない。何より嘘をつくのが純粋な八卦の視点から評価してもなお下手な愛すべき友人は、いつも後ろめたいことがあるときに自身の髪をくるくると右手の人差し指で巻き取る癖がある。案の定繋いだ手から離されたその右手は、その明るい茶色の髪を巻いていた。

しかし教室とは逆方向に小走りて去っていくその後ろ姿に未練がましく手を伸ばしながら、少女はついに声を発して呼び止めることはできなかった。気まずい空気から逃れるための優しい嘘を、少女自身も歓迎する気持ちがあそこにあつたからだ。そしてその事実には、2人の少女の心はまたしても静かに痛む。

「竹丸、さん」

呟いたその名前は、もう友人には届かない。その後を追いかけると、……しかし少女は、自らの弱さに折れた。ためらいがちにゆつくりと、しかし足を止めることなく教室へと歩き出していく。もうすぐ朝礼が始まる、だからそれまでには帰ってくる、そう自らに言い聞かせながら。

しかし少女が自分の席に着き、次第に登校してきたクラスメイトが増え、ついにはチャイムが校内に鳴り響き、担任が入ってきても。ついに彼女の席は、ぽっかりと空白のままだった。日頃から真面目で遅刻などしたこともない彼女の不在は、それだけでよく目立つ。

「なんだ、竹丸は休みか？ 珍しいな、そんな連絡なかったはずだが……ちよつと職員室戻ってみるから、お前ら騒ぐんじゃないぞー」

教室に入ってくるなりその異変に気が付いた、まだ壮年の教師が首をかしげながらも回れ右して職員室へと戻っていく。当然の権利のごとくざわつき始める教室の中で、少女にはその喧噪も耳に入らなかった。

(なんで、どうして？ 私の、せいで……)

負い目は悪い想像を生み、悪い想像は最悪の妄想へと繋がる。普段は美德であるその真面目さが仇となり、いっばいいっばいに抱え込んだ少女の瞳には本人も意識しないうちにじんわりと涙が溜まりはじめた。

しかし、現実はそのような少女の葛藤など待つてはくれない。教壇の真上に配置されたスピーカーから突如ザリザリと不快なノイズ音が響き、聞き覚えのない声が飛び出した。

『全校の生徒及び教師、並び事務員諸君全てに告ぐ。これより君たちには、我々に協力してもらおう。拒否権は存在しない。我々の手にはブレイクビジョン……「BV」が存在し、人質がいる。校庭を見ていたまえ、その証拠を見せよう。魔法カード発動、ファイヤー・ボール』

その言葉と共に突然空中の何も無いところから現れた火球が猛烈な勢いで落下し、校庭のど真ん中に命中して爆音とともに小さな焼け跡を作る。教室内に先ほどまでの喧騒が嘘のように重苦しい沈黙が流れ……何が何だかわからないという混乱を経て、じわじわと現実が

その場にいる全員にのしかかる。

すなわち、この学校は狙われたのだ。「BV」を持つテロリストに。その現実を各々が理解するのを待とうというのか、少しの間沈黙を保っていたスピーカーから再び声が流れる。

『よろしいかね？では次に、人質の声を聞かせよう。なに、そう怯える必要はない。ただ君がここの生徒だとわかるように、そうだな。自己紹介でもしてもらおう』

しかし、今度はそれだけでは終わらなかった。最初の声とは違う下卑ただみ声が、そのまま流れてきたのだ。

『おいおい兄貴い、それだけじゃ面白くないだろう？この女、ガキのくせに結構いいもの持ってやがると俺は見たぜ。へへ、そうだな。スリーサイズと下着の色、ついでに喋って……』

『やめたまえ。まったく、女性の羞恥が好みとはどうにも度し難いな。君のその性格、もとい性癖は治らないのかね？』

『でもよお……わかった、わかったよ兄貴。あんたの言うとおりにするから、そう睨まないでくれよ』

下衆な欲望を丸出しに話すもうひとりの懇願を、最初の声が隠そうともしない嫌悪感を込めてきっぱりと拒否する。むき出しになった人の欲に生理的な嫌悪を感じる少女だったが、次の瞬間にはそんな感情も吹っ飛んだ。続けてスピーカーから聞こえてきた今にも消え入りそうな、そしてすぐにでも泣き出しそうな3人目の声は、最悪なことによく知ったものだったのだ。

『に、2年の竹丸……竹丸、夢です。わ、私、助け』

「っ！竹丸さん！」

その瞬間に少女は反射的に勢いよく立ち上がり、スピーカーをきつと睨みつけていた。そんなことをしても向こうに自分の声が届かないし姿も見えないことはわかってはいるが、それでも動かずにはいられなかったのだ。白くなるほどに力を込めて握りしめた両手の拳が、そこに込められた怒りのあまり小刻みに震える。

『いいねえいいねえその顔、たまんねえぜえ。ガキ過ぎるのは間違いないねえが、これはこれで……わかった、わかってるっ！の兄貴』

『どうだかな。さて、ご苦労だった。そのまま大人しくしてくれば、こちらとしても無用な危害を加えるつもりはない。いいね？では、我々からの要求を伝えよう。先生方か、それとも生徒か……いずれにせよこの校内に1人、デュエリストが存在する。その人間を引き渡してもらいたい』

そこで少女は怒りのあまり煮えたぎっていた頭から、いつぺんに冷水をかけられたように血の気が引くのを感じた。頭が回らず立ちすくむ中で、スピーカーの声だけがいやに大きく響いて聞こえてくる。

『デュエルディスクの電波反応……それも、「BV」の組み込まれていないタイプの物だ。あまり正確な位置は特定できないが、この学校の中にいることは間違いない。この放送も聞こえているんだろう、名も知らぬデュエリスト』

もしもこの場にデュエルポリスが存在すれば、何気なく放たれたこの言葉の異常性に気が付いただろう。精度こそ低いとはいえ、デュエルディスクの電波反応をキャッチしてデュエリストの位置を特定する。そのような技術はデュエルポリス、そしてテロリストの両サイドがいまだ開発できていない。だからこそ各地のテロ行為を未然に防ぐことは不可能であり、ひとたび犯罪に手を染めたデュエリストがデュエルポリスから逃げきることも不可能なのだ。これは、そんな常識をひっくり返しかねない。

しかし、いくら糸巻らと親しくともその専門知識までは持ち合わせない少女にはわからない。否、少女だけではない。デュエルポリスと、テロリスト。デュエリスト同士の潰しあい、一般市民にとつてはあまりにも遠い話だと皆が思っている。それこそニュースで見ると、遠い遠い国で起きた話のようなものだ。そしてこれまで遠い話と思い込んでいたその戦いに巻き込まれ、当事者となったときようやく、それがあまりにも甘い認識、馬鹿げた間違いだったことに気が付くのだ。

だから誰も、気が付かない。その言葉に含まれた異常を、気づくことなく見過ごしてしまう。

『5分だ。今から5分間待とう。デュエルディスクとデツキを持ち校

庭の真ん中、先ほどファイヤー・ボールを当てた位置まで降りてきたまえ。私たちも先に行って待っていていよう。もちろん、君もだ。ひとつ忠告しておくが、下手なことはいない方が身のためだぞ。この学校の周辺はすでにフィールド魔法、オレイカルコスの結界で覆われている。脱出も侵入も不可能だ』

その言葉を最後に、始まった時と同じく突然放送が切れる。そして嫌な沈黙の中で、教室内の視線がゆっくりと校庭側へと向けられていく。おそらく、他のクラスもそうなんだろうと少女はぼんやり考えた。全校の視線は今、校庭に向いている。

そしてその視線の中で、ゆっくりと3つの人影が歩み出た。2人の男と、その間に挟まれて歩く1人の少女。幾度も足が止まりそうになるたびに、後ろの男がその背中を小突いてまた歩かせる。明るい茶髪に丸眼鏡、疑い用もない友人の姿だ。そして校庭の中央で足を止めた3人が、校舎をぐるりと見渡す。

「よおおおしーさあ出てきな、デュエリスト！いいか、5分だぞ！もし出てこなかったら、この人質は……来な、バーバリアン・キング！」そう叫んで殿を歩いていた男がデュエルディスクに1枚のカードを置いた、その瞬間。突如、校舎に黒い影がかかった。太陽の光を遮るその巨体は、赤い体と角を持つ蛮族の王。大気を揺るがす雄たけびと共に手にした棍棒を振り上げ、上空で振り回して威圧する。ただそれだけで巻き起こった風圧により、校舎中の窓ガラスが一斉にビリビリと震えた。

先ほどまで何もなかったはずの空間に、しかし今は紛れもなく実体をもって存在するモンスター。生徒はおろかデュエルを忘れた大人たちでさえその光景に呆然となる中で、ひとりの少女が教室を後にしたことに気づいたものはいなかった。

「待っていてくださいい竹丸さん、私が、今……！」

デュエリスト特有の身体能力で階段を足に羽が生えたかのような勢いで駆け下りるその姿は、ほかならぬ八卦九々乃……しかし仮にこの行動を少女が敬愛する姉貴分である糸巻が見ていれば、それは勇氣などという高尚なものではなく、若さゆえの無鉄砲と蛮勇だと断じて

いただろう。後のことを考えずにその場の衝動だけに身を任せるのは、若者だけの特権だ。

そして少女が自らの致命的な過ち……まず第一にやるべきであった、この手の事態の専門家たるデュエルポリスへの連絡を怠っていたことに気が付いたときには、既にすべては手遅れだった。

「お姉様に……しまっ……！」

校庭へと弾丸のような勢いで飛び出してしまった後に今更気が付き、慌てて校舎にとつて帰ろうとする少女。しかしそれを見逃すはずもなく、下卑た声が降りかかった。

「ほおう？なんだ、ガキの方だったか。どうだい、兄貴？」

「少し待て、今確認する……ああ、間違いないな。反応が大きくなつた」

「へへへ、そうかい。女のガキがもう1人つてわけか……」

手元のデュエルディスクに目を落とすもう1人の男からのお墨付きを得て、だみ声の男の目が爛々と輝く。どんなおぞましい想像がその脳内で繰り広げられているかは、推して知るべしだろう。ぞわりと鳥肌を立てながらも、精一杯の虚勢を込めてひとりぼっちの戦場で2人を同時に睨みつける。

確かにお姉様への連絡が頭から抜けていたのは、致命的だ。しかし、まだ終わつたわけではない。全校生徒に供し、これだけの人がいれば誰か1人ぐらいはデュエルポリスへの通報を思いついてくれるだろう。ひとたび連絡さえ繋がれば、きつとお姉様は来てくれる。ならばそれまで時間を稼ぐのは、自分の役目だ。静かに腹を決め、決死の覚悟でデュエルディスクを起動する。

「私が相手です。かかって来てください……！」

「八卦、ちゃん……？」

一時的に驚愕が恐怖を上回つたのか、信じられないとばかりの表情で、人質少女がたつたひとりりで自分のために立ち上がった友人の名を呟いた。デュエルモンスターズなど聞きたくもないほどのトラウマを抱えているとばかり一方的に思っていた彼女が、先ほど半ば喧嘩別れのように自分から一方的に距離を取ってしまった彼女が、カードの

実体化なんて恐ろしい力を持った大人を前に一步も怯まず歯を食いしばって立ちほだかっている。その頬を静かに伝う涙は恐怖によるものか、それとも自分のために危機へと身をさらす友人の姿を見て感極まったものか。それは、彼女自身にも分からなかった。

「ほうほうほう、ガキのわりにいい度胸じゃないか。いいなあその強がった顔、歪むのが今から楽しみだぜ。なら俺が……」

「馬鹿め。お前がデュエルに回ると、誰がこのバーバリアン・キングを維持するんだ？デュエルポリスどもが嗅ぎつける前に終わらせる、相手になろう」

「いいですよ。まずはあなたからですか」

例によって糸巻仕込みの、少女の顔立ちにはあまり似つかわしくないふてぶてしい笑みを浮かべ内心の不安を押し隠す。しかし、駆け引きにはまだ疎い少女は男たちの言葉の裏に隠された意味にまで考えが及んでいなかった。

「へへへ、威勢のいいガキだなあ。わかってるだろうが、下手に頑張らない方がいいぜえ？もしも兄貴にちよつとでもダメージなんて通してみな。もしかしたら俺はびつくりして、そのショックでこのバーバリアン・キングまで手元が狂ってついうっかり！ポーン、なんてことになるかもしれないからなあ？」

「……!?卑怯な！」

「もう遅いぜ、何せそれでいいって言ったのは俺たちじゃなくてそっちの方なんだから、なあ？おっと、こっちのガキに叫ばれたりしたらお楽しみが削がれちゃうからな、少し黙っててもらうぜ」

言葉の意味を理解し、さつと青ざめた顔を見て満足したのかより一層その笑みを深くする男。そしてタオルを取り出すと、竹丸の口周りをぐるりと縛り付けて簡易的な猿ぐつわを作ってみせる。兄貴と呼ばれた方はそんな仲間の外道な言葉に、軽蔑の視線をちらりと向けた……しかし、それだけだ。嫌悪感こそ見せど、リアリストな身内の恥を諷めようとはしない。

勝負として最低限のスタートラインにすら立てていない、絶対に勝てるわけのない絶望的な茶番。その現実に今更ながら気づかされた

ことで、足元の地面が崩れ落ちていくような喪失感が少女を襲う。結局のところ、まだ社会の汚さを知らない少女はどこか性善説が抜けきっていなかったのだ。現実というものはそう悪いものではないのかもしれないが、少なくとも少女が盲目的に信じていたほど綺麗なものでない。

そしてどうにもならない悔しさに目を伏せた、その瞬間。

「派手にやっちゃって、まあ。それならこっちもやらせてもらうよ！ さあおいで、グレイドル・ドラゴオオオンッ！」

どれほど因果を紡ぎ綿密に事を進めようと、時たま世の理不尽はそれらをすべて唐突に、脈絡もなく吹き飛ばす。およそ緊迫した場の空気には似つかわしくない楽しげな、どこかのほほんとした空気すらも漂わせる大声が響き、一斉に声の方向を見る一同。そこには、ありつたけの理不尽が少年の形をとっていた。

それと同時にまたしても空に黒い影がかかり、バーバリアン・キングの巨体に負けず劣らずの体躯を持つ流体金属めいた光沢の龍とは名ばかりの既存生物の特徴をかき集めたかのような生物が空から音もなく着地して蛮族の王とがっぷり四つに組み合い始める。

「ゆ、遊野さん!？」

「ハローハロー、八卦ちゃーん。この感じだと、まあ間に合ったみたいね」

男達のことなど、そして背後で自分が引き起こした大型モンスター同士のぶつかり合いすらも眼中にないかのようにひらひらと手を振り、ウインクひとつかましてゆっくりと歩み寄る少年……遊野清明^{ゆうのあきら}。突然の乱入者に対しまず気を取り直したのは、リーダーの男だった。「デュエルポリス……ではないようだな。何の用だ?と聞くのは野暮だろう。オレイカルコスの結果は、どう破ってきた」

「ああ、あれ?そらもちろん正面突破よ。糸巻さんってば仕事中小のに人使い荒いんだから」

そういつて持ち上げた腕輪の付いた左腕。その手がほんの1瞬だけ濃い紫色のオーラを放ち、服に覆われていない手首から上に同じく紫色の痣が走ったかのように見えた……しかしそのいずれも、次の瞬

間にはもう消えている。この場の誰も知りようがないことだが、その命を繋ぎ止めて偽りの生を彼にもたらしめているダークシグナーの、そして地縛神の力を解放して文字通り力づくに抜けてきたのだ。

しかし、それどころではなかった少女はその不思議にも大して疑問とは思わなかった。

「お姉様が……」

ああ、やはり敵わない。自分がこんなへまをしたというのに、お姉様は私のピンチを見過ごしはしなかった。心からの感謝と感動で胸がじんわりと温かくなり、口元が小さくほころぶ。先ほどまでの心細さは、もうすっかり消え失せていた。

「さ、八卦ちゃん。戦える?」

「はい!」

「オーケイ。てなわけで、ここからは2対2だよ」

並び立つ2人のデュエリストの背後では、巨大モンスター同士の決戦に決着がついていた。両手をがっしりと組みあつたままグレイドル・ドラゴンの尾を構成するコブラが伸びてバーバリアン・キングの岩のような肌にその牙を食い込ませ、わずかに怯んだその隙に頭を構成するアリゲーターの口が開いてさらに噛みつきにかかる。完全に戦意を消失したその巨体から力が抜けていき、拮抗していた力のバランスが崩れたことでドラゴンの細腕が蛮族の王を押し倒す。

「バーバリアン・キング!」

「ご苦労様、ドラゴン」

力尽きたことで実体化が解け、光の粒子となって消えていくバーバリアン・キング。それを見送ったグレイドル・ドラゴンもまた自らの主へと向き直り、その身をカードへと戻していく。

「てめえ……!」

「仕方あるまい。そうだな、タッグデュエルで構わないか? フィールドは共有で墓地は各自別々、手札誘発をえるのは直前のターンプレイヤーのみのルールだ」

「タッグ、ねえ。僕は構わないけど、八卦ちゃんはどうか?」

「いつでもいけます!」

「よしよし、度胸がいい子は嫌いじゃないよ。なら、デュエルと洒落込もうか！」

タツグデュエルを自分から提案したということは、当然彼らのデッキはある程度の統一性が見られサポートを共有できるように最初からなっている可能性が高い。対して少女たちの即席タツグはデッキ傾向も使うカードもものの見事にバラバラであり、お世辞にもコンボ性があるとは言えない。

しかしお姉様成分を間接的に補給してややハイになった少女がほぼ何も考えずに即答すると、そのパートナーも諫めるどころかニヤリと笑って腕輪からデュエルディスクの形をした水の膜を展開する。これが、彼のデュエルディスクなのだ。

「デュエル！」

「先攻は私からです。来てください、ブレイズマン！」

エレメンタルヒーロー
E・HERO ブレイズマン 攻1200

最初のターンプレイヤーとなった八卦が取り出したのは、炎を操るヒーロー。ヒーロー使いにとつては最もベーシックであり、その基本形ともいえる滑り出しのひとつである。

「ブレイズマンが場に出た時、私はデッキから融合を1枚サーチすることができず。そしてこの融合を発動！手札の地属性ヒーロー、クノスペと場の炎属性ヒーロー、ブレイズマンを融合します！英雄の蕾、今ここに開花する。天照らす英雄よ咲き誇れ！融合召喚、E・HERO サンライザー！」

「ほう、いきなり融合召喚か」

感心したような呟きの中、2体の英雄が混じりあいひとつの英雄として開花する。文字通りに太陽のごとき赤と金の鎧に身を包み、青いマントを翻す戦士が着地した。

E・HERO サンライザー 攻2500↓2700

「サンライザーが特殊召喚に成功した時、私はデッキからミラクル・フュージョンを手札に加えることができます。そしてサンライザーが場に存在する限り、私たちのモンスターは全て攻撃力がその属性の数の200倍だけアップしますよ」

「やるじゃねえか……なんて言つてやりたいところだがなあガキ、そんなことして大丈夫かあ？」

「えっ……？」

「シングルデュエルならそれも正解だろうが、これはタッグデュエルだぜえ？ 貴重なエクストラモンスターゾーンをいきなり塞いだりして、そっちの兄ちゃんは大丈夫なのか、ああ？」

にやにやと悪意のこもった笑みと共に放たれた指摘に、少女の時が凍り付く。それは返す言葉もないほどの正論であり、つい普段デュエルをするときの癖でパートナーのことを何も考えずやってしまったことに他ならない。

しかし止まった時を崩したのは、ほかならぬ当の本人だった。

「んー、まあ大丈夫大丈夫。こっちで適当に合わせとくから、八卦ちゃんには気にせずやつちやつてよ」

「は、はい、申し訳ありません」

「いいってことよ。さ、まだ始まったばっかなんだから、もっと気楽にね……というか変に委縮される方が怖いし」

どちらかといえば最後の一言が本音なのか、ぼそつと付け加えて前を向く清明。

「な、なら……そうだ！ このカードをセットして、ターンエンドです」
「よし兄貴、俺から行かせてもらうぜ。ドローだ、来な、アサルト・ガンドッグ！」

アサルト・ガンドッグ 攻1200

そして対する男が繰り出したのは、弾倉を巻き長銃を装着されたドーベルマンらしき犬型モンスター。攻撃力でサンライザーにはるかに劣るそれは、しかし銃口を赤きヒーローへと向けた。

「バトルフェイズだ。アサルト・ガンドッグで攻撃！」

「攻撃？ これは……」

「何かあるんだろうね。八卦ちゃん！」

「はいー！ リバースカードオープン、融合解除！ サンライザーをエクストラデッキに戻し、その素材2体を墓地から蘇生しますー！」

清明の声に合わせて伏せカードを表にし、サンライザーの姿が銃弾

を回避するかのよう消える。次いで現れたのは、先ほど墓地に送られたはずの2体のヒーロー。

E・HERO ブレイズマン 守1800

E・HERO クノスペ 守1000

「ちいつ、躲しやがったか」

「それだけじゃありません。ブレイズマンの特殊召喚に成功したことで、再びその効果を発動。デッキから融合をもう1枚サーチしますよ」

先ほど指摘された、埋めてしまったエクストラモンスターゾーンを空け、なおかつ手札を回復するサーチ効果。無駄のない動きに、ようやく男たちも目の前の少女がただものではないということに気づき始める。

「なるほど、素人ではないようだ」

「少しはやるじゃねえか……だがな、その油断が命取りだぜ！速攻魔法、エネミーコントローラー！このカードの効果でブレイズマンの表示形式を攻撃表示に変更、そのままアサルト・ガンドッグでの攻撃は続行だ！」

アサルト・ガンドッグ 攻1200（破壊）↓E・HERO ブレイズマン 守1800↓攻1200（破壊）

無造作にばら撒かれた銃弾に、炎のヒーローが火の壁を作り出して抵抗する。2つの力のぶつかり合いにより校庭で小規模な爆発が起こり、一時的に少女の視界が失われる。

「相打ちを取りに来た……？」

「いや、違うね。融合解除は完全に裏目、起点にされちゃったか」

面白くなさそうな呟きでそう告げるのを待っていたかのように砂煙の中から更なる銃弾が一斉に撃ち込まれ、それらは残るクノスペをいともたやすく吹き飛ばし、なお余った弾丸が少女の体を容赦なく襲う。実体化した銃弾はさすがに本物のそれよりも威力は劣るものの、それでも無数にできた傷跡にはうっすらと血がにじんでいた。

アサルト・ガンドッグ 攻1200↓E・HERO クノスペ 守1000（破壊）

アサルト・ガンドッグ 攻1200↓八卦&清明（直接攻撃）

八卦&清明 LP4000↓2800

「キヤツ……！」

「へへへ、気の強い女ってのはいいねえ。ガキのわりになかなかどうして、いい声で鳴いてくれるじゃねえか。アサルト・ガンドッグは戦闘破壊された時、デッキから別のアサルト・ガンドッグを可能な限り特殊召喚できる。この効果で呼び出した2体のアサルト・ガンドッグで追撃したってことよ」

悲鳴はこの男を喜ばせるだけだと知り、ぐつと口をつぐむ。ようやく晴れてきた視界には、その言葉通りに2体のアサルト・ガンドッグが控えていた。

「カードを2枚伏せ、ターンエンドだ。さあ、もう片方の野郎は任せただぜ兄貴」

「もう片方で……まったく、扱いが雑だねえ。僕のターン、ドロ。グレイドル・アリゲーターを通常召喚して永続魔法、グレイドル・インパクトを発動。さらに僕の場合に水属性モンスターが存在することで、手札のサイレント・アングラを特殊召喚」

次のターンプレイヤーとなった清明が2枚のカードを場に出すと、それぞれ地面からじわりと染み上がってきた銀色の液体が緑のワニを模した形に擬態し、その背後には空中から勢いよくUFOが落下して派手な破碎音を響かせる。

グレイドル・アリゲーター 攻500

サイレント・アングラ 守1400

「さて、と。グレイドル・インパクトの効果発動。僕のフィールドのグレイドルカード1枚と相手の場のカード1枚を対象に取って破壊する、グレイン・レクイエム！」

UFOの内部からおもむろに先端にレンズの付いた太いコードが伸び、そこから何とも言いようのない色をした怪光線が2本同時に放たれる。それをまともに浴びたアリゲーターの姿が再び液状に溶けていき、同時に受けた男の伏せカードが破壊された。

「へっ、任せただぜ兄貴！チェーンしてそのトラップを発動、深すぎた墓

穴！ガキ、お前の墓地にいるブレイズマンを選択してこのカードを発動するぜ。そして次のスタンバイフェイズ、そのモンスターを俺たちのフィールドに捕縛できるって寸法よ」

「私のブレイズマン……」

「あー、ごめん八卦ちゃん、これは止められないわ。今はこつちを続けるよ、魔法カードの効果によって破壊されたグレイドル・アリゲーターの効果発動！このカードを墓地から装備カードとして相手モンスター1体に寄生させ、そのコントロールを得る。さあこつちにおいて、アサルト・ガンドツグちゃん」

ずぶずぶに溶けて銀色の液状となったアリゲーターが音もなく地表を這い進み、立ちすくむアサルト・ガンドツグの足を伝ってシユルシユルとガンパーツやレーダーといったその体内の機構へと侵入していく。そしてその支配が頭にまで及んだ時、文字通りその目の色が変わった。右目は本来の黄色のままに、左目がグレイドルの素体と同じ銀色に塗りつぶされる。

「よしよし、これで僕の間にはレベル4のモンスターが2体。アサルト・ガンドツグとサイレント・アングラーでオーバーレイ！」

ふわふわ浮かんでいたアンコウとコントロールの移った半機械の猟犬が、それぞれ水色とオレンジの光となって螺旋を描きつつ宙へと昇る。そして反転し落下した2つの光の進む先には、ぽっかりと地面に開いた宇宙空間が。

「千夜一夜の切なる願いに、錨を上げよ救済の方舟！エクシーズ召喚、ランク4。No.101、^{ナシバールズ}S・^{サイレント}H・^{オナリス}Ark ^{アー}Knights！」

2つの光が宇宙空間に飛び込んだ瞬間、まばゆい光が弾けた。そしてその光に包まれて、校庭を丸々覆いつくすほどに巨大な白き方舟がゆっくりと浮上する。

「そして、アークナイトの効果を発動。オーバーレイ・ユニット2つを取り除き、相手フィールドに攻撃表示で存在する特殊召喚されたモンスターの新たなオーバーレイ・ユニットとして吸収する、エターナル・ソウル・アサイラム！」

その声に合わせて方舟の一部が開き、その周辺を衛星のような軌道

を描きつつ浮遊していた2つの光球が格納される。それにより力を解放したアークナイトが開いたままの格納口から勢いよくアンカーを射出し、無数の鎖が最後のアサルト・ガンドッグをがんじがらめに捕縛しすぎさま巻き上げていった。

No. 101 S・H・Ark Knight (2) ↓ (0) ↓ (1)
「さて、さっきの分の借りぐらいは色付けて返してもらおうか。アークナイトでダイレクトアタック、ミリオン・ファントム・ブラッド！」
「ならトラップ発動、聖なるバリアー——ミラーフォース——！攻撃表示モンスターをすべて破壊する、んだが」

「その言い方からすると、わかっつてて発動した……？とはいえこっちもアークナイト単騎なんだ、ここで1発かまさない意味もないか。アークナイトの更なる効果発動、自身の破壊をオーバーレイ・ユニット1つを身代わりに耐えきる！よって攻撃は続行、そのままダイレクトアタック！」

No. 101 S・H・Ark Knight (1) ↓ (0) 攻2
100 ↓ 侵入者 (直接攻撃)

侵入者 LP4000 ↓ 1900

方舟の側面が一斉に開き、その砲門から無数の紫色のレーザーが放たれる。雨のように容赦なく降り注ぐそれは硬い校庭のトラックにいくつもの穴をあけ、その威力は侵入者たちにも降り注ぐ。

「……効くぜえ」

一気にライフを削られるその痛みは、いったいどれほどのものか。隣に立つ清明の顔を盗み見る。少なくとも彼は、自分がいまもたらしめた破壊行為に対して胸を痛めているようなことはないらしい。過去のさっぱりわからない、自分よりせいぜい2、3こ上にしか見えないこの少年は、一体どんな人生を送ってきたのだろう。

「まあこんなもんか、カード2枚伏せてターンエンド」

「直接攻撃を決められたが、最低限モンスターを残し破壊耐性を剥がしたか。ぎりぎり及第点だな、私のターン。このスタンバイフェイズ、深すぎた墓穴の効果によりブレイズマンが蘇る。そして特殊召喚に成功したブレイズマンの効果により、デッキから融合を手札に」

E・HERO ブレイズマン 守1800

「あなたも融合使いですか!」

「私の融合は少々変則的だがな。そしてチューナーモンスター、サイバース・シンクロンを召喚」

サイバース・シンクロン 攻100

「チューナー、それに融合……」

「シンクロか、それともリンク?どちらにせよ、せつかく来てくれたんだ。初陣行くよみずきちゃん、手札から儂無みずきの効果発動!このカードを捨てることで、このターンのメインフェイズとバトルフェイズ中に特殊召喚されたモンスターの攻撃力だけ僕らはライフを回復する!」

2体のモンスターが並んだこのタイミングで清明が繰り出したのは、いつぞやの精霊のカード事件を経て彼の手に渡った精霊を宿すカード、儂無みずき。小さな体で精一杯に両手を広げくると楽しそうに踊るその姿は前回少女が邂逅した時とは対照的に楽しげで、少なくとも今の生活にあの妖怪少女が満足していることが読み取れた。

もつとも、そのことに気が付けたのも少女があのカードには精霊が宿っていることを知っていたからこそだ。最初からそうだった目で見なければ、ただのソリッドビジョンの演出にしか見えないだろう。

「回復用カードか?ならば、この手でいこう。サイバース・シンクロンの効果発動!1ターンに1度、私のモンスターのレベルをその元のレベル分だけ上げる。サイバース・シンクロン自身を選択し、レベル4のブレイズマンにレベル2となったサイバース・シンクロンをチューニング」

レベルが2倍になったことで、その合計値は6。上昇したブレイズマンの周囲を、2つの光の輪になったサイバース・シンクロンが包み込んだ。

「正義は我にあり。闇を食いちぎる捕食者の牙よ、白日の下にすべてを晒せ!シンクロ召喚、レベル6!であえ、ゴヨウ・プレデター!」

サイバース・シンクロン ☆1↓2

☆4+☆2=☆6

ゴヨウ・プレデター 攻2400

そして現れたのは、金属製のずしりと重い十手を手にした獣人。その攻撃力はアークナイトを上回るが、清明は眉一つ動かさない。

八卦&清明 LP2800↓5200

「バトルだ。ゴヨウ・プレデターでS・H・Ark Knightに攻撃」

投げつけられたロープ付きの十手が空を裂き、その先端が方舟を貫通する。もはや耐性を失った方舟に炎が上がり、その中へとゆつくりと沈んでいった。

ゴヨウ・プレデター 攻2400↓No. 101 S・H・Ark Knight 攻2100 (破壊)

八卦&清明 LP5200↓4900

「そしてこの瞬間、ゴヨウ・プレデターの効果を発動。このカードが戦闘で破壊したモンスターを蘇生する。甦れ、満たされぬ魂を乗せた方舟よ」

ゴヨウ・プレデターがロープをぐいと引くと、一体いかなる怪力のなせる業か十手のかえしが引つかかったアークナイトのボロボロになった船体が引きずられてフィールドを移動する。

「儚無みずきの効果発動！」

「承知の上だ、追撃を行う。そしてゴヨウ・プレデターのデメリットにより、この効果で特殊召喚されたモンスターの攻撃によって与えるダメージは半分になる」

No. 101 S・H・Ark Knight 攻2100

八卦&清明 LP4900↓7000

No. 101 S・H・Ark Knight 攻2100↓八卦&清明 (直接攻撃)

八卦&清明 LP7000↓5950

「ふん、このぐらい……！」

「だろうな、この程度で倒れるわけがない。だが確実に、その痛みは蓄積する。これでターンエンドだ」

「とはいえごめん八卦ちゃん、ちよつと不利になったかな。どうにか

巻き返せる?」

ライフこそ増えはしたものの、前よりもフィールドの状況は悪い。多少は責任を感じているのかややばつの悪そうな顔でターンを回してきた清明に、しっかりと頷いてみせる。

「はい！私のターン、ドロー！ナイトローズナイト夜薔薇の騎士を召喚し、効果発動！このカードの召喚時、手札からレベル4以下の植物族モンスター1体を特殊召喚できます。来てください、クノスペー！」

夜薔薇の騎士 攻1000

E・HERO クノスペ 攻600

「そしてこの瞬間……清明さん！」

このタイミングでの声掛け。今度力強く頷き返したのは、その意味を即座に察知した清明だった。

「構わないとも。やっちゃって！」

「はい！攻撃力1500以下のモンスターの特殊召喚に成功したこの瞬間にリバースカード、地獄の暴走召喚を発動です！さらに同名カードを手札、デッキ、墓地から可能な限り特殊召喚できます！」

それは、清明が前のターンに伏せていたカード。これが通りさえすれば少女の最も得意とするコンボ、クノスペシャルが完成する。

しかし、それはあくまで「通りさえすれば」の話でしかない。

「手札から灰流うららを使う。デッキからモンスターを特殊召喚する効果を含むそのカードの発動を無効にしよう」

「む、これも駄目かー」

もし戦っているのが少女1人だったならば、キーカードたるクノスペを並べる手段を潰されたという事実はその心に重くのしかかっていただろう。しかし無効を受けてなおこともなげに呟く相方の姿を見ていると、不思議と少女自身の気持ちも落ち着いてくる。

「まだです！夜薔薇の騎士はチューナーモンスター、私が融合召喚だけの女じゃないことを見せてあげます。レベル3のクノスペに、レベル3の夜薔薇の騎士をチューニング！英雄の蕾、今ここに開花する。華麗なる英雄よ咲き乱れよ！シンクロ召喚、レベル6！スプレンドイツド・ローズ！」

緑を基調とした服に身を包む、華麗なる茨の狩人。少女にとっても初となるシンクロ召喚は、度重なる強者との邂逅によつて更なる進化を求めた少女の手に入れた新たな可能性である。

☆3＋☆3＝☆6

スプレンドейツド・ローズ 攻2200

「まず、スプレンドейツト・ローズの効果を発動！墓地から植物族モンスターのカノスペを除外することで、あなたのフィールドに存在するゴヨウ・プレデターの攻撃力を半分にします。ブレイクダウン・ローズ！」

ゴヨウ・プレデターの足元から細い蔦が勢いよく伸び、その半身に絡みついてがっしりと大地に固定する。力を振り絞つてそこから脱出しようとするも、もはや逃げることは不可能。

ゴヨウ・プレデター 攻2400↓1200

「そして、バトルです。スプレンドейツド・ローズで……ここは、アークナイトに攻撃します」

しかし茨の狩人がまずその狙いを定めたのはせつかく弱体化させたゴヨウ・プレデターではなく、その隣に鎮座する方舟の巨体だった。茨の鞭に巻き付かれ締めあげられて、方舟が再び光届かぬ世界へと沈んでいく。

スプレンドейツド・ローズ 攻2200↓No. 101 S・H・

Ark Knight 攻2100 (破壊)

侵入者 LP1900↓1800

「そしてこの瞬間、スプレンドейツド・ローズのもう1つの効果を発動します。墓地からもう1体植物族のカノスペを除外することで、このカードは攻撃力を半分にして2回攻撃が可能となります」

再び茨を構え直し、次なる敵のゴヨウ・プレデターを鋭い眼光で睨む狩人。対する捕食者もまた同じ狩人として覚悟を決めたのか、茨に拘束されたままでその手にした十手を構え直す。

スプレンドейツド・ローズ 攻2200↓1100

「おいおい、ガキ。もう1回攻撃はいいが、兄貴のゴヨウ・プレデターの攻撃力は半分になつてもまだ1200。それじゃ勝つてつこないぜ

？」

それは単純な算数に裏打ちされた、絶対的な数値の差。同じく攻撃力が半減された者どうしなら、元の数値が高い方が勝つ。それはその通りだ。しかしその結果に横槍を入れたのは、流れをじつと見ていた清明だった。

「だろうね。でも、これは残念ながらタツグデユエルなんだよねこれが。八卦ちゃん、今！」

「はい！トラップ発動、グレイドル・スプリットです！このカードは発動後に私のモンスターへの装備カードとなり、その攻撃力を500アップさせます。これで攻撃力は逆転しました、スプレンドイッド・ローズでゴヨウ・プレデターに攻撃！エアリアル・ツイスト！」

2体の狩人がほぼ同時に放った茨の鞭とロープ付き十手が空中で交差し、互いの体を貫きにかかる。しかしその片方は空中で失速し、目的を果たしたのはもう片方のみだった。勝利したその狩人の名は、スプレンドイッド・ローズ。

スプレンドイッド・ローズ 攻1100↓1600↓ゴヨウ・プレデター 攻1200

侵入者 LP1800↓1400

「やったー……あれ？」

歓喜に湧いた少女の声が、すぐに疑問に変わる。間違いなく茨の鞭は捕食者の体を貫いた……しかし、捕食者の体はなおも倒れない。それどころか自らの体を貫いた茨を掴み、無理矢理に引き抜こうとさえしている。

「その年でここまで腕前、確かに大したものだ。だが私は今の戦闘において、墓地に存在するサイバス・シンクロンの効果を発動していた。エクストラモンスターゾーンに存在する我々のカードが破壊されるとき、このカードを身代わりとして除外できる」

その言葉通りに負けはしたものの、破壊を免れたゴヨウ・プレデター。一応グレイドル・スプリットでの強化は永続的なものであるため返しのターンで即攻撃を受けると決まったわけではないが、このターンで相手フィールドの壊滅を狙っていた少女にとってこの身代

わり効果はかなりの痛手である。

「……エンドフェイズ。スプレンドイッド・ローズの持つ2つの効果は切れます」

ゴヨウ・プレデター 攻1200↓2400

スプレンドイッド・ローズ 攻1600↓2700

「なら、ようやく俺のターンだな。兄貴、兄貴の残したモンスター、大事に使わせてもらおうぜ！」

「好きにしろ」

「へへへ……お許しも出たことだしな、行くぜ！魔法カード、埋葬されし生け贄を発動！このターン互いの墓地からモンスターを除外して、それをリリースとしてモンスターをアドバンス召喚できる。俺たちの墓地からはアークナイトを除外するぜ」

互いのデュエルディスクから、2枚のカードが弾き出される。ここで初めて、清明が少し嫌な顔になった。その表情の変化を見逃さず、男が笑う。

「ざまあみろ。その顔からするとやっぱり入ってやがるんだな、ザ・セブンス・ワン七皇の剣のカードがよお？」

「さてさて、どーだかね。そんなに知りたきやまずは僕らに勝ってみな。ねー、八卦ちゃん」

「は、はい？え、えっと……すみません遊野さん、私その、急に振られるの苦手です……」

「あら残念……おっと、来るよ」

少女の暗い気分を察知し、わざと自分に不利な状況すらも軽口の種に変えてその気分を紛らわそうというのだろう。一見するとわからないほどのパートナーへの気遣いに、いつだって自由気ままという印象しかなかったこの人がそんなこともできたんだと少し意外な気分になった少女である。とはいえその軽口が、今の少女の心にはただただありがたかったのも事実だった。

そしてその余裕が、男にとってはよほど気に入らなかったらしい。「余裕かましてられるのも今のうちだぜ？さあ行くぜ密林の巨人、未

開の地に祀られし蛮族の長！バーバリアン・キング召喚！」

ゴヨウ・プレデターの隣に並び立つのは、先ほども実体化させることでこの学校を物理的に制圧していた有角の巨人。再びその巨体が帰ってきたことで、さるぐつわのせいで言葉を発せない竹丸の目にはつきりと恐怖の色が浮かぶのが確かに少女には見えた。他の3人のデュエリストは、バーバリアン・キングの方に気を取られて気づいていない。勇気づけるようにその目を見て、私に任せてくださいとの思いを込めてしっかりと頷いてみせる……すると幸い友人にも少女の覚悟が伝わったのか、同じように頷きかえした。

バーバリアン・キング 攻3000

「まだまだ！装備魔法、シールドバッシュを発動！このカードは通常召喚されたモンスターにのみ装備できてその攻撃力を1000アップさせ、さらに装備モンスターの戦闘で発生する俺たちへのダメージを0にできる。ヒーローの打点は馬鹿にならないからな、ちゃんと対策はさせてもらうぜ。そして最後にバーバリアン・キングの効果が発動！戦士族モンスターを2体までリリースすることで、その数だけ攻撃回数を増やすことができる。俺は兄貴のゴヨウ・プレデターをリリースし、このターン2回の攻撃を可能にさせる！」

バーバリアン・キング 攻3000↓4000

「攻撃力4000の、2回攻撃……！」

小細工など一切ない、単純にして純粹で……そしてそれゆえに時として何よりも厄介な、力押しの一撃。牙を剥く蛮族の王を見上げ、少女は小さく息を呑んだ。そして次の瞬間、高々と振り上げられたその棍棒が大地をかち割らんとばかりの勢いで振り下ろされる。

「バーバリアン・キングでスプレントイッド・ローズに攻撃、さらに続けてダイレクトアタック、剛腕ワイルドクラッシュ！」

振り下ろされた棍棒は、圧倒的な質量と破壊力を持って直前のターンプレイヤーである少女を襲う……しかしそれは同じ攻撃と一口に表しても、先ほど受けたアサルト・ガンドッグの銃弾とはその威力もスピードもわけが違う。まともに喰らえば良くて骨折、下手をすれば2度とデュエルのできない体になる可能性すらある。

「ああもう、さすがにアレは洒落にならないっほいね！どいて八卦ちゃん！」

立ちすくむ少女の前に割って入ったのは、やはり清明だった。腰を低く構えて両腕をクロスさせることで防御の姿勢を取ると、その全身を覆うようにして灰地に紫の筋模様が入ったフード付きローブがどこからともなく生成される。しかし、それを疑問に感じる暇は与えられなかった。直後、そのガードの上から蛮族の一撃が叩きつけられたのだ。もはや殴打というよりも爆撃音と呼ぶ方がふさわしいほどの轟音が響き、校庭のトラックには清明のいた位置を中心に無数のひび割れが走る。

「ゆ、遊野さんー！」

またしても立ち込めた砂煙のせいで、棍棒の着弾点は見えない。しかしそれも折よく吹いた一陣の風によつてすぐに晴れていき……そこに繰り広げられていた光景に少女は、物も言えなくなった。

「い、い……ぎ……！」

少女が最後に見たままの防御姿勢で歯を食いしばり声にならない声とともに仁王立ちする清明と、そこに渾身の力で棍棒を叩きつけたまま全身の筋肉を盛り上がらせてそれを押し込まんとするバーバリアン・キング。仮にもモンスターと人間、それもざつと16、7倍は体格差のある両者が、単純な馬鹿力だけで張り合っている……そんなシニールな絵面が繰り広げられていたのだ。しかも、当の本人はどちらもいたって大真面目なのだから余計にたちが悪い。

バーバリアン・キング 攻4000↓スプレンドイッド・ローズ

攻2700（破壊）

八卦&清明 LP5950↓4650

バーバリアン・キング 攻4000↓八卦&清明（直接攻撃）

八卦&清明 LP4650↓650

「ゆ、遊野さん……！」

「はいはい、遊野さん、です……よ、っとおー！」

どうにか口を開いて放った掛け声とともに、ローブからわずかに覗いて見えるその両腕を紫色の痣が幾何学模様を描くかのように走っ

たのが見えた気がした。しかしそれもほんのわずかな時間のこと、少女がその異様な姿をはつきりと視認する前にバーバリアン・キングが力比べに諦めたのか棍棒を引つ込め、解放された清明が肩で大きく息をしたことで少女の位置からは見えなくなった。慌てて近づく間にもまるで風に溶けるようにしてローブだけが消えていき、少女が隣に戻った時にはすでにいつも通りの少年が立っているだけだった。

「ぜー、はー……あー疲れた、明日は筋肉痛だこりや。ダークシグナーの力の開放も、もう何年振りだっけ……あ、ほんとチャクチャルさん？前が確か、結局会えなかつたパラドックスとかいう奴追いかけて時間飛んだときだっけ？そっか、あれからもうそんな経つのねー」

「え、えつと……助けていただいて、ありがとうございます……？」

ぶつぶつとよく意味の分からない独り言をつぶやいたのち、近寄ってきた少女に聞かれていたことによくやく気付いたのか疲れ気味の顔でごまかすように軽く笑いかける。

しかしどこか弛緩したそんな時間は、すぐに終わりを告げる。これは少女たちには与り知らぬことだが、今の攻撃を指示した男としては半ば物理的なダメージだけでの殺人も視野に入れ、密かに「BV」の実体化密度設定を最大に引き上げたうえで攻撃宣言を行っていたのだ。それを回避するどころか、生身で受け止めるとは。

「最初のアサルト・ガンドッグの攻撃ダメージがあれだけ通つたつてことは、少なくともあの時点で『BV』妨害電波はどっちのデュエルディスクからも出てねえ。つまり、てめえらガキどものデュエルディスクはデュエルポリス仕様じゃねえつてことだ。だってのに、累計ダメージ4350ポイント分の攻撃を生身で受けてピンピンしてるだど……？どんなトリックを使いやがったかは知らねえが、次はねえぞ！」

「痛ちち……悪いけど、僕の場合は鍛え方が違うんでね」

こちらは男に、どころか隣の少女にとつても与り知らぬことではあるが、存外その言葉はただの軽口だけではない。思い出すのはかつて彼が今のように次元を越えて旅する自由人になる前、デュエルアカデミア在学だった時に経験してきた三幻魔、光の結社、霸王軍、そし

てダークネスの軍勢との長い戦い。

常にダメージが実体化し、敗者は命どころか魂まで無事では済まないような闇のデュエルやその痛み、そして恐怖と隣り合わせの日々は、今もこうして彼の糧となっていた。人生何が幸いするかわかんないねえ、まあ僕の人生ダークシグナーになった時に1回終わってるんだけど、とは本人の弁である。無論まともに口に出せば狂人扱いは避けられないので、身内にだけ密かに明かした胸の内ではあるが。

「で？能書きはいいけど、お前さんはまだ何かやったりするわけ？」

「ああ？……チツ、ターンエンドだよターンエンド」

「ならよし。んじゃ僕のターン、ドロ……よあいよし、まだ僕も運は尽きちやないみたいね。一時休戦を発動、互いにカードをドロして次のターン終了時までには発生する全ダメージが0になる」

「ここで一時休戦だど?!」

全力で嫌な顔をしながらも、渋々といった調子を隠そうともせず乱暴にカードを引き抜く男。しかもこれは、ただ苦し紛れに引いた延命の一手ではない。タツグデュエルの性質上、次のターンは男の相手である兄貴と呼ばれた方になる。つまりここで使い道のある手札誘発でも引かない限り、いくらカードを引いたところで男がその手札を使えるのは3ターンも後になるのだ。一時休戦は普通に使っても強力なカードだが、このルールにおいてはさらにその凶悪さを増す1枚といえるだろう。

「来た来た来た！おいで、グレイドル・イーグル！そのままバーバリアン・キングに攻撃！」

先ほどと同じく地中から銀色の水たまりが沸き上がり、ぶるぶると震えながら黄色い鷹の姿を模して大空へと飛び立つ。直線的なその攻撃は蛮族の王によってあっさりとは撃墜されるも、返り討ちにあって弾けたその体は銀色のしぶきとなって蛮族の全身に張り付き、蠢き、その内部へと潜り込んでいく。

グレイドル・イーグル 攻1500（破壊）↓バーバリアン・キング 攻4000

「一時休戦の効果で、僕が受けるダメージは0。そして戦闘破壊され

たイーグルは、相手モンスターに寄生しそのコントロールを得る！来い、バーバリアン・キング！」

巨体が向きを反転し、先ほどまでの主に牙を剥く。一転して味方に回ったその威圧感に、改めて少女はグレイドルというテーマそのものへの理不尽を感じた。そして今は、それがただ頼もしい。

「もとより一時休戦で攻撃してもダメージは通らないうえ、シールドバッシュの効果で次のターン以降もこのバーバリアン・キングが与えられるダメージは0。とはいえ腐っても4000打点、そう簡単に突破できる数字じゃないね。最後にこのエンドフェイズ、グレイドル・インパクトの効果を発動。デツキからグレイドルカード1枚を手札に加える、ドール・コール！2枚目のインパクトを持ってきて、これでターンエンド」

「なるほど。真っ先にアークナイトを出すことでミラーフォースを踏み抜く手際、それに先ほどのグレイドル・スプリットでのサポート、そして一時休戦からのグレイドルカード。全く大したものだ、真に警戒すべきはお前の方だったか？だが、まだ手ぬるい。私のターン、ドロー」

このターンも一時休戦の効果は続いているため、何を引いたところで勝敗がつくことはない。しかしあの男はこの4人のデュエリストの中で唯一いまだ6枚もの手札を保持しており、最も警戒すべき相手であるともいえる。

「魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札のモンスターカード、ゲート・ブロッカーを墓地に送り、デツキからレベル1モンスターを特殊召喚する。現れるチューナーモンスター、ヘル・セキュリティ！そしてサムライソード・バロンを召喚する」

ヘル・セキュリティ 攻100

サムライソード・バロン 攻1600

「これでいい。レベル4のサムライソード・バロンに、レベル1のヘル・セキュリティをチューニング。正義は我にあり。地獄の果てまで悪を追う追跡者よ、潜む悪魔に鉄槌を下せ！シンクロ召喚、レベル5！であえ、ゴヨウ・チェイサー！」

先ほどのプレデターと同じ系統の和装に、同じような十手を握る次なるゴヨウモンスター。しかしそれはステータスもレベルもプレデターに比べるとひとまわり小さく、バーバリアン・キングの相手をするには明らかに力不足だった。

☆4＋☆1＝☆5

ゴヨウ・チエイサー 攻1900

「そして魔法カード、死者蘇生を発動。私の墓地からゴヨウ・プレデターを蘇生する。ゴヨウ・チエイサーの攻撃力は、自分フィールドに存在するこのカード以外の地属性戦士族シンクロモンスター1体につき300アップ」

ゴヨウ・プレデター 攻2400

ゴヨウ・チエイサー 攻1900↓2200

2体のゴヨウが並んだことで、チエイサーの攻撃力がわずかに上昇する……しかしそれも焼け石に水であり、バーバリアン・キングには依然として届かない。

「では、ようやくこのカードを使わせてもらおう。融合を発動、素材とするのは場の地属性戦士族シンクロモンスター、ゴヨウ・チエイサー及びゴヨウ・プレデターの2体。正義は我にあり。捕縛者たちの頂点に君臨する者よ、断罪の裁きで天地を照らせ！融合召喚、レベル10！であえ、ゴヨウ・エンペラー！」

そして男のデッキコンセプトであろう【ゴヨウ】、その頂点にして異色の存在が満を持してコントロールを奪われたバーバリアン・キングと対峙する。宙に浮かぶ豪華な椅子に腰かけたのは、一見するとまだ年若い少年のようなモンスター……しかしその眼光は、その名が示す通り皇帝の威圧を既に伴っている。

ゴヨウ・エンペラー 攻3300

「そして魔法カード、破天荒な風を発動。私のモンスター1体の攻守を次のターン終了時まで1000アップさせる」

ゴヨウ・エンペラー 攻3300↓4300 守2500↓3500

0
「攻撃力4300、これじゃあ」

「そうだ。これでゴヨウ・エンペラーの攻撃力は、シールドバツシュによる補正を考えてもなおバーバリアン・キングを上回った。一時休戦のせいでダメージこそ通らないが、それでも今この瞬間に攻撃する価値がある。バトル、ゴヨウ・エンペラーでバーバリアン・キングに攻撃」

ゴヨウ・エンペラー 攻4300↓バーバリアン・キング 攻4000（破壊）

「そしてこのカードもまたゴヨウの1体、当然その能力を持つ。戦闘によって破壊し墓地に送ったバーバリアン・キングを、再び我々の手に呼び戻す」

「助かったぜ、兄貴。俺のエース、奪われっぱなしじゃ面白くないからな」

バーバリアン・キング 攻3000

先のターンに清明が苦勞（トップ解決）して奪い取った大型モンスターが、またしてもあつさりど奪い返された。戦況はまたしても逆転し、その全ては少女の肩に託される。

そんな状況でしかし、少女はどこか今この瞬間を楽しんでいる自分があることに気づいていた。自分はおろか親友の安全までかかった敗北は許されぬこの一戦で、なぜそんな悠長なことが言えるのか。そんなことを考えてしまうなんて、やはり自分はどこかおかしいのではないか。そんな不安に襲われ軽いパニックに陥りかけた少女はしかしそこで、じつと自分のことを見つめている清明、そして竹丸と目が合った。その瞳のどちらにも共通しているのは、少女に対しての信頼の色。

ああ、そうか。この人たちは、私のことを信じている。たとえ私の感覚が人と違っていても、そんな私を信じてくれる。ならば、私は間違ってるんじゃない。そう思えると、すつと気分が楽になった気がした。

「それでは不肖八卦九々乃、行きますー！これが最後の、私のターンー！」
カードを引くためデッキトップに手をかけながら、もう1度だけ改めてフィールドの状況を再確認する。バーバリアン・キングとゴヨ

ウ・エンペラー、どちらも打点は高く正面突破は厳しい大型モンスターだ。しかし一方で、それらを守る伏せカードはもう存在しない。搦め手ならば、確実に通用する。

つまり、と今ある手札にちらりと目をやると、そこにあるのはブレイズマンとサンライザーがそれぞれ自身の効果を使いサーチした融合及びミラクル・フュージョン、それともう1枚。今のままでは、この3枚はほぼ使い物にならないだろう。唯一この状況を打破する可能性が残っているとしたら、それはクノスペだ。少女にとって永遠不変のエース兼フェイバリットカードのクノスペをどうにか仲間と共に並べることさえできれば、あるいは勝利の可能性も残っている。いくら強いモンスターが並ぼうと、条件を満たすことでダイレクトアタッカーになるクノスペには関係のない話だからだ。しかしそのクノスペは、すでに3枚中2枚が先ほどのスプレンドィッド・ローズの効果発動コストとして除外されている。つまりデッキに残るクノスペは、1枚のみ。

このドロローに、全てがかかっている。

「……ドロローッ！」

相方がありつたけの思いを込めてカードを引くのを、清明はその横で静かに眺める。その心に、心配などは浮かんでこなかった。彼の眼から見てもこの年若い少女は本物のデュエリストであり、そういった人種は得てしてドロローさえさせておけば大抵何かをひっくり返すものだ。それまでの経験が語っているからだ。

ねえ、そうでしょう？などと遠く離れた親友や後輩、そして忘れられるわけがない大切な人の顔を思い浮かべ、小さく笑う余裕すらあった。

果たして、彼の経験に裏打ちされた予想は今回も当たっていた。恐る恐るカードを確認した少女の顔が、ぱつと明るくなる。

「……行きます！ 召喚僧サモンプリーストを通常召喚し、その際の効果でサモンプリーストは守備表示になります。さらに手札の魔法カード、融合を捨てることでサモンプリーストの効果発動、デッキからレベル4モンスターを特殊召喚します。来てください、2体目のブ

レイズマン！」

召喚僧サモンプリースト 攻800↓守1600

E・HERO ブレイズマン 守1800

「なるほど、そして3枚目の融合をサーチすることで実質今のリクルートをノーコストに抑える手か」

「……確かに、そんな使い方もできますね。ですが私の狙いは、こちらの効果です。ブレイズマンの効果発動！1ターンに1度デッキからE・HEROを墓地に送り、その属性とステータスをコピーします。私を選ぶカードは水のヒーロー、バブルマンです」

E・HERO バブルマン 炎↓水 攻1200↓800 守1800↓1200

ステータスを下げてまでのコピー効果……しかし、少女の狙いはそこではない。重要なのは、これでバブルマンのカードが墓地に送られたという点。

「そして速攻魔法、ジェネレーション・ネクストを発動！こちらのライフが相手よりも少ない時、その数値以下の攻撃力を持つE・HERO、ネオスペーシアン

N、クリボーの中から1体を選択して私の場に特殊召喚します！デッキより来てください、私の信じる最強のヒーロー！」

そして呼び出されるモンスターは、もはやその名を呼ぶ必要すらない。互いのライフ差は850と決して大きくはないが、その縛りをクリアして特殊召喚できる少女の切り札。

E・HERO クノスぺ 攻600

「すべての準備は整いました。魔法発動、ミラクル・フュージョン！私の墓地に存在する炎属性のブレイズマン、そして水属性のバブルマンを除外して融合召喚を行います！英雄の蕾、今ここに開花する。天照らす英雄よ、今再びこのフィールドに咲き誇れ！融合召喚、E・HERO サンライザー！」

1ターン目を再現するかのように、再び太陽の名を持つヒーローが場に現れる。しかしあの時と違うのは、今のサンライザーには大勢の仲間がおり、それによりその力が最大限に開放されるという点であった。

「そしてサンライザーの効果により、私の場に存在するモンスターの攻撃力はその属性1つにつき200アップします。すなわちサンライザー自身の光、バブルマンをコピーしたブレイズマンの水、サモンブリーストの闇、そしてクノスペの地です！」

E・HERO サンライザー 攻2500↓3300

E・HERO クノスペ 攻600↓1400

E・HERO ブレイズマン 攻800↓1600

召喚僧サモンブリースト 攻800↓1600

「これは……」

「く、くそつたれ！俺と兄貴のコンビが、こんなガキなんざ相手によ！」

「ジエネレーション・ネクストは、特殊召喚したモンスターの効果の発動を1ターンの間行えなくするデメリットがあります。しかしクノスペの持つ他のE・HEROが存在する場合に直接攻撃が行える効果は永続効果、よってその制約にもかかりません」

少し息を整え、改めて男たちを精いっぱい力を込めて睨みつける。すでにデュエリストとしての本能が骨の髄までしみ込んでいる自分は、まだいい。しかし目の前の男たちは、それとは全く無関係のこの学校の人たちを……そして何よりも、少女の親友を巻き込んだのだ。

しかし、それもようやく終わる。万感の思いを込めて、最後の指令を口にした。

「私たちの、勝ちです。バトル、クノスペでダイレクトアタック！」

E・HERO クノスペ 攻1400↓侵入者（直接攻撃）

侵入者 LP1400↓0

「はあーっ、ようやく終わりました……竹丸さん！」

「はーい、お疲れさん」

クノスペの手痛い一撃を受け、気絶したのかその場に崩れ落ちる2人の男。それには目もくれずさるぐつつわをされたままの友人へと駆

け付ける少女の背中に、のんびりとしたねぎらいの言葉が飛ぶ。多少もたつきながらもどうにか結び目をほどくと、丸い瞳に安堵の涙をいっばいに溜めたその顔と目が合った。

「竹丸さん……もう、終わりましたよ。遅くなってしまい、すみませんでした」

気のきいたセリフなんてもの、真面目な少女には咄嗟に思いつかない。見ればわかるようなヒーローにはあまり似つかわしくない、しかし常に真面目で真剣で時には空回りもするこの少女らしさの溢れる言葉に、助けられた友人はちよつと微笑んだ。デュエリストというこれまで知らなかった一面も知ることになったけれど、目の前にいるのがまぎれもなく八卦九々乃であることを図らずも再確認できたからだ。

「ううん。ありがとう、八卦ちゃん。助けに来てくれて、ありがとう」
その一方で仲睦まじい少女2人を邪魔しないようにと少し離れたところに気絶した男2人の体を引きずって、さらにその体をどこからともなく取り出したロープで縛りつける清明。頭上の空は、まるで先ほどの勝利を祝福するかのように晴れ渡っていた。

ターン21 歯車たちの不協和音

「さて、と。どうしてくれようかねこいつら」

空き教室のひとつで、清明が腕を組む。こいつら、というのは言うまでもなく、昼間から堂々と校内へと襲い掛かってきたテロリスト2人組のことである。当初は校庭端の適当な木にまとめて縛り付けて尋問の準備だけ整えておこうと思ったし事実そうしていたのだが、場所の都合上ほぼすべての教室から丸見えとなるため全校生徒が常にその一挙手一投足に注目を注いでいる状況に辟易して校内へと引きずり込んだのだ。

「とりあえず、お姉様に連絡を入れるべきではないでしょうか」

おずおずと意見したのは、ちゃっかり彼に付いてきていた八卦である。あれだけ派手に暴れた後でその日のうちに何食わぬ顔して教室に戻れるほど、少女の神経は凶太くない。

「あの、お姉様って……?」

そしてその横で少女の服の端を掴む竹丸が、さらにおずおずと問う。本来ならば彼女は日常に戻った方がいいのではないかと清明自身は思ったりもするのだが、先ほどまでのトラウマやさらされる好奇の目、どのみちどこかで事情聴取に諮りだされるであろう可能性を考えるとこちらに来たくなる気持ちもわからなくはないので何も言わない。少なくとも教に関しては、教室よりも自分たちのそばにいた方が彼女としてもまだマシだろう。

「お姉様……つまり糸巻さんね。とりあえずさつき連絡は入れたけど、向こうは向こうで鼓さんともどもちよつとばかし立て込んでるみたい。一応鳥居君がこっち来るとは言ってたけど、今一つそれがいつになるかはつきりしなくてねえ」

「糸巻さんに鼓さん?それって確か、朝に話したデュエルポリスの人たちだよな。八卦ちゃん、デュエルポリスとも知り合いなの?」

「あー、えっと、その……はい」

目を丸くして問いかける友人にしまったという表情を浮かべ、少女にしては珍しく歯切れ悪く視線を泳がせた末に消え入りそうなほど

小さな声で肯定する。しかし彼女の興味はどちらかといえば、友人の隠し事よりも少しだけズレたところを向いていたようだ。

「そ、それじゃあもしかしてこの人も……？ 私たちとそんなに変わらないように見えるけど」

「いや、清明さんはそういうわけじゃないんですけど……ええつと」

いまだ気を失ったままの縛られた2人組を前に腕を組む清明を指さし、ひそひそと声を潜める少女たち。どれだけ小声になったところで他に何も音のしないこの教室ではいくら離れたところで彼にも丸聞こえなのだが、どちらもそこまで気が回らなかったようだ。彼としてもここで助け舟を出してもよかったのだが、少女が自分について普段どんな印象を抱いているのかという若干意地の悪い好奇心からあえて気が付かないふりをする。

そして困りきつたのが、答えに詰まった少女である。知り合ってかれこれひと月以上経つにもかかわらず、いまだそのはつきりした立ち位置を言い表せないこの青年。学校に通うわけでもなく、さりとして定職についているわけでもない。ケーキ屋で居候して多少の小銭を得ているということは知っているが、それは仕事のうちに入れていいのだろうか。

この人、なんなんだろう。もう幾度となく繰り返してきた問いが脳内をぐるぐると駆け回り、いつまでも答えに窮するその沈黙を彼女はこう受け止めた。

すなわち、あまり人に言えないような立場なのだろう。

「もしかして、お仕事してない人……なの？」

「あー、えーつと……そうかも、しれないですね……」

「待って!？」

ずっとこけそうになった当の本人である。もつともいくら丸聞こえとはいえ、思春期真っ最中の年頃の少女たちのひそひそ話に聞き耳を立てていた天罰が下ったのだという説もある。

「き、聞こえていたんですか!?!びっくりしました!」

「びっくりしたのはこっちだよ! 僕ずっとそんな目で見られてたの!?!」

「えつと……」

「あ、否定はしてくんないのね……」

遊野清明、23歳。少年のままの見た目はともかく実家ではパティシエとしての実績もある叩き上げの洋菓子職人であり、元の世界ではデュエルアカデミア卒業後も近場のデュエル大会にふらりと参加してはそれなりの結果を出して小銭を稼いできた男である。間違っても、ニート疑惑を掛けられるいわれはない。と、本人は思っていた。

ちなみに実際のところ、この世界での彼は住所不定の職業不詳どころかまともな役に立つ身分証さえ持ち合わせていないので、あながちその評価も間違っただけはいなかったりする。

「まーいいや、今度ゆっくりお話ししよーね八卦ちゃん。それよか今はほら、竹丸さんだっけ？君もこっちおいで」

「え？私も、ですか？」

「うん、どうやらお客さんっぽいし。これは、下手に近寄らない方が良さそうだと見たね」

「それってどういう……？」

意味深な言葉の意味をそこまで問おうとしたところで、わずかに遅れて少女にも近寄ってくる異様な気配が察知できた。今にも破裂しそうなほどに張り詰めた、怒りや憎しみでぐちゃぐちゃになった感情の塊。それが、ゆっくりとだが確実にこの場所へと近づいてくる。

「こ、これは」

「さーて、どちらさんですかつと。扉は開いてるよー」

「え？ええ？」

教室の扉を隔て、その気配が止まった。すりガラスのためにいまだ姿は見えず、ぼやけて見えるその恰好からは相手が中肉中背ぐらいの体格であることぐらいしかわからない。そしてそんな得体のしれない気配を前に臨戦態勢を整えるふたりとは違い、いまだに話についていけないのがこれまで争いごととは無縁の生活を送ってきた竹丸である。教室内に扉を通してたちこめるどろどろとした空気にはさっぱり気が付かないが、わからないなりに周りの状況から何かが起きていることだけは察し、しかし何が起きているのか、自分はどうしてい

いのかわからない。

「ほら、ちよつとごめんね」

おろおろする小さな肩を、さりげない動きで清明が手をかけて後ろに下がらせた。思いのほかしくかりとしたその感触を妙に意識して、頬がかあつと赤くなる。当の本人が前方に神経を集中させていたためその変化に気づくことがなかったのは、彼女にとっては幸いだった。

そんな甘酸っぱい思春期少女の機敏などお構いなしに、ゆつくりと扉がスライドする。

「よう」

「……あれ？」

「鳥居、さん……ですよね？」

顔を出したその人影に、警戒していた2人が同時に首を傾げる。現れたその顔は見間違えようもなく鳥居浄瑠そのものであり、先ほどの鬼気迫る気配から彼らが想像していた敵の増援とは真逆の存在だった。包帯を巻き松葉杖に体重を預ける痛々しい姿ではあるものの、人はさほど気にしている様子もない。

「なんだ、俺の顔を忘れたのか？まあいいさ、入るぞ」

その口調は明らかに、いつもの彼と違う。しかし同時に、その違和感を口に出せないような雰囲気は鳥居は漂わせていた。その怪我はどうしたのか、などという当然の疑問すらも口にするのがはばかられるような無言の拒絶。

結局誰も口を開かない沈黙の数秒が続いたのち肩をすくめ、松葉杖を巧みに動かして片足をやや引きずるように教室に入る鳥居。その前に立ち塞がる格好になっていた清明たちが慌てて脇にどいたことで、いまだ縛られて意識のない2人組へとその視線がまっすぐに届く。冷たい視線がその姿を射抜き、ややあつて短い眩きはその唇から漏れた。

「そうか、こいつらか」

「……！」

その言葉を発した、その瞬間。首を傾げながらも警戒を解きつつ

あつた少女の背に冷たいものが走り、同じものを感じ取った清明もその横で反射的に腕輪型に戻したデュエルディスクに手をかける。

2人の戦士をそこまで反応させたなんてことのないその言葉からにじみ出ていたのは、まぎれもない敵意と殺意だった。エンタメデュエルを謳いあくまでも自分で定めたショーマンとしての役に徹していた鳥居浄瑠とは似ても似つかない、抜き身の刃のように研ぎ澄まされた負の感情。

「やつと見つけた、この時期にデュエリストの狩りだと？ タイミング的に考えても、お前たちが手がかりなんだろう？ 管理人も監視カメラも期待外ればかりだったんだ、今度こそまともな情報吐いてもらうぞ……！」

「あの、鳥居さん……？」

狂気的なものさえ見え隠れする目で、カツカツと松葉杖の音を響かせながら気を失った侵入者たちの元へと近寄っていく鳥居。恐る恐るその背中に声を掛けようとした少女を、清明がその途中で無言で首を横に振り止めた。何が起きてこうなったのかはさっぱりわからないがこの調子だと何を言っても無駄だ、それどころか下手に邪魔をするとこちらまで敵認定されかねない……そう判断しての行動であり、そして実際にその見立ては正しい。

そして清明はまた、こうも考えた。これから鳥居がこの男たちに何をして口を割らせにかかるにしても、どう婉曲に表現したところでそれはあまり愉快な光景にはならないだろう。無言で開いたままのドアを指さし、自分と八卦、そして竹丸を順に指し示す。言わんとしていることを理解した少女もややためらいがちに小さく頷き、友人と共にそろそろと教室を後にした。

鳥居が彼らを振り返ることは、最後までなかった。

そして、それとは同時刻。家紋町の繁華街を、2人の男が連れ立って歩いていた。かたや、くたびれたスーツ姿でスーツケースを手にした、髪がやや薄くなりかけている冴えない日本人の中年。かたや身の

丈2メートルはある、がっしりとした体形の外人。どこからどう見てもアンバランスな組み合わせの2人だが、彼らはれっきとした連れである。それも、一部の世界ではそれなりに名の知れた。

日本人の名は、青木勝^{まきる}。外人の名は、人呼んでロベルト・バックキャップ。かつてはそれぞれが『太陽光発電』、『後ろ帽子のロブ』^{バックキャップ}の二つ名と共に表舞台で一世を風靡した元プロデュエリストであり、現在でも様々な事情からデュエルポリス入りを良しとせず、かといってテロリストに直接加担するでもなくフリーランスで裏のデュエル世界をプロとしての実力ひとつで渡り歩いてきた、歴戦の戦士たちである。

「それにしても、家紋町とは。まさかこんなに早く、この町に戻ることになるとは思いませんでしたよ」

「全くだ。俺もお前もこの場所、苦い記憶ある」

「悪い思い出じゃありませんけどね、でしょう?」

「……ああ。そうだな」

彼らの言う苦い記憶とは他でもない、つい先日この町で開かれた裏デュエルロシアムのことだ。開催当初は全くのノーマークだった無名の新人、鳥居浄瑠にその人生経験で遥かに上回る青木ばかりか、裏デュエル界でもかなり上位に位置する猛者としてその名を轟かせてきたロベルトまでもが敗北。あれからしばらくは両者とも一気に落ちこんだ自らの評判を取り戻すため、かなりの苦労を強いられたものだ。

「それでもあれは随分と、楽しいデュエルでしたよ。いつ以来でしたかね、あんな気分で負けを認められたのは」

「ああ」

そう目を細める青木に、ロベルトも先日^の戦いを思い出すように小さく頷いた。しかし、いつまでも過去の記憶ばかりに浸ることはできない。彼らはこの地に遊びにではなく、仕事のため訪れたのだから。雇い主は裏デュエルロシアムの開催者でもあった巴光太郎……しかしその依頼の内容は、あの時とはまるで異なる。

「まあ彼にはこの町にいる限りいずれまた会う機会もあるでしょう

が、それより今はこちらの件ですね。『二色のアサガオ』……あの朝顔さんを簡単に下すほどのデュエリスト、心当たりはありますか？」

そう問いかける青木に、ロベルトが無言で首を横に振って応える。にべもない返答にですよねえ、と嘆息した。近年のデュエリスト人口そのものの減少とそれに伴う質の大幅な低下は彼らもよく知るところであり、悲しみつつもどうにもできないのが現状である。そしてまた、彼らがそれに依存しているのも事実。世代交代がまともに機能していないからこそ、もう現役を10年以上続けている彼らに、いまだ裏の仕事が回ってくるのだから。

「……とにかく、メールだと最低限のことしか書いてありませんでしたからね。早く巴さんと合流して、詳しい話を聞きましょうか。同じ元プロ仲間として、見過ごすわけにはいきませんからね」

「同感。だがその前に手土産、用意できそうだ」
「ちよ、ちよっと!？」

手土産。そう言うが早い、いきなり歩くスピードを引き上げるロベルト。長い足をフルに生かしてがしがしと進む横を、小走りを通り越して半分走りながら青木がどうにかついていく。表通りから裏道に抜け、さらにいくつもの角を曲がり、次第に入り組んだ路地裏へ。彼がその足をようやく止めたのは、三方向を古いビルの壁面に囲まれた行き詰まりに飛び込んでからだった。いくら普段からダメージの実体化するデュエルで鍛えているとはいえ腹も出てきた中年男性に急な運動は厳しかったのか、息を切らしながらも青木がわずかに遅れて顔を出す。

「ま、まったく……急にどうしたん、ですか……」

そう文句を言いつつも、そこにいた連れの姿に青木は目を丸くした。普段は大柄な体に隠れて目立たないが、ロベルトが肌身離さず持ち歩いている自らのデュエルディスク。それが今は起動状態にあり、すでに装着済みでデュエルの始まりを今か今かと待ちわびている。

そしてこの状況を見てなおもなすべきことがわからない、そんなことでは裏の世界を生き抜くことなどできはしない。青木ももはや何も聞かずにスーツケースの中から同じくデュエルディスクを取り出

して起動し、愛用のデッキをセットした。

そして、まるで2人の用意が終わるのを待っていたかのようなタイミングで3人目の人影が路地裏へと現れる。

「あれがあなたの言っていた、『手土産』ですか?」

「愚問だぞ。お前が朝顔を潰した、そうだな?」

それは質問というよりも、確認のための問い。人影はしかしその問いに直接は答えず、その腕に装着したデュエルディスクを起動させた。

「……青木勝。ロベルト・バックキヤップ。覚悟」

「名前を知る。つまり我々の経歴も知っている、だな?にもかかわらず1人で挑むか」

「取りつく島もなし、ですな。仕方がありませんね、随分と軽く見られたのですが、我々にとつても朝顔さんの敵討ちです。ルールはバトルロイヤル、攻撃は一巡後から。エクストラモンスターゾーンは2か所を早いもの順……こんなところでよろしいですか?」

青木の提案に、人影は無言で頷いた。デュエルディスクによつてランダムに定まった先攻1ターン目のターンプレイヤー、つまり最も早く攻撃が可能となるデュエリストはその人影だった。3分の2を外したことで同時に表情が歪む2人だが、すぐに気を取り直していったどんな手で来るのかを見極めるべく神経を集中させる。

「……!」

地雷蜘蛛 攻2200↓3200

人影が最初に繰り出したモンスターは、レベル4の下級モンスターでありながら高い攻撃力と強烈なリスクを併せ持つ昆虫モンスター。さらにそこへ装備魔法、愚鈍な斧が装備されることでその攻撃力は1000上昇する。

「(装備モンスターの効果を無効にする装備魔法、愚鈍な斧にデメリットアタッカー。普通に考えれば「スキドレ昆虫」の類でしょうが……)」

「(あの朝顔を倒した実力。それだけで勝てるはずがない)」

最初に繰り出された2枚のカードからデッキを判別すべく、2人の

プロがアイコンタクトをとる。現時点で最も可能性が高いのは、今出てきた地雷蜘蛛や地獄大百足ヘル・センチピッドなどのデメリット効果の代わりに高い攻撃力を持つモンスターでメインデッキを固め、それをまとめて無効化することで高攻撃力のメリットだけを存分に発揮しつつ相手の厄介なモンスター効果を封じ込める通称【スキドレ昆虫】。墓地で発動する効果にはスキルドレインが及ばないことから、レンナンス・インセクト共振 虫などのサポートカードで戦線を維持しやすいのが強みのデッキである。

しかし2人の元プロは、それだけで朝顔に勝つことはほぼ不可能だと断言する。理由は単純、スキルドレイン下での戦闘では純粋な数値が物を言うからだ。彼の操る【Sin】は当たり前のように攻撃力4000台をはじめ出し、【インティ&クイラ】が互いを蘇生する効果もまたスキルドレインには邪魔されない。【スキドレ昆虫】自体の強弱ではなく、単純に朝顔のデッキとは相性が極端に悪いのだ。

そんな思いを知ってか知らずか、さらに人影は次のカードを出す。

「……」

「超進化の繭、ですか」

速攻魔法、超進化の繭。装備魔法を装備した昆虫族モンスターをリリースし、デッキから昆虫族モンスターをその召喚条件を無視して特殊召喚するカード。速攻魔法ということは当然このターンは伏せておき、相手の除去に合わせサクリアイス・エスケープを狙うことも可能だったはずである。しかしこの人影はそんなことお構いなしに、攻撃できるわけでもない1ターン目に躊躇なく発動した。その真意を推理する暇もなく地雷蜘蛛の姿が裂け、内部から毒々しい色の羽根を持つ巨大な空飛ぶ虫が羽化した。

究極完全態・グレート・モス 攻3500

「……」

そしてそれ以降、何をするでもなくターンが終わる。確かに昆虫族の中でも最強の固定値を誇る攻撃力3500という数値は魅力ではあるが、逆に言えばただそれだけだ。これといったモンスター効果を持つわけでもなく、ただ攻撃力を武器に上から殴るしかないカード。仮にもプロデュエリストを相手に伏せカードの1枚もなくそれだけ

を立てて終わるといのは、あまりにも愚策だった。

「攻撃されなければ生き残る、とでもお考えですか？私のターン、ジェネクス・ワーカーを召喚します」

ジェネクス・ワーカー 攻1200

「そしてジェネクス・ワーカーの効果を発動。このカードをリリースすることで、手札からジェネクス1体を特殊召喚します。我が人生に光を差した、決して消えない不屈の太陽。たとえ幾たび沈もうと、明日が来ればまた日は昇る。我が相棒、ソーラー・ジェネクス！」

ソーラー・ジェネクス 攻2500

太陽光を遮る暗い路地裏に、ひとときわ明るい光が差した。ソーラーパネルを装着した、ジェネクスの中でも珍しいシャープな人型の……そしてぼろぼろのカードそのものについてた無数の傷により、ソリッドビジョンが若干不安定な彼のフェイバリットカード。

「出し惜しみは厳禁ですね。魔法カード、死者蘇生を発動。ジェネクス・ワーカーを蘇生し、もう1度その効果を発動。今度手札から特殊召喚するカードはレベル2、^{アーリー}A・ジェネクス・ケミストリ」

A・ジェネクス・ケミストリ 攻200

わざわざ呼び出したモンスターは通常召喚時にしかその効果を使えず、ワーカーよりレベルもステータスも劣る1枚。しかしこのカードをあえて場に出したのも、青木の戦術の一環だった。

「そしてフィールドのジェネクスが墓地に送られたこの瞬間、ソーラー・ジェネクスの効果発動！相手プレイヤーに500のダメージを与える、ソーラーシユート・^ニNI^チCHIRIN！」

??? LP4000↓3500

ファーストダメージはまだ軽い、牽制程度の一撃……しかしそれは積み重なり、決して無視できない数値でもある。

「魔法カード、ダウンビートを発動。私のフィールドからレベル2の闇属性機械族であるケミストリをリリースすることで、1つレベルが下で同じ種族及び属性のモンスターをデッキから特殊召喚します。レベル1、リサイクル・ジェネクス！」

リサイクル・ジェネクス 攻200

「……そしてケミストリが墓地に送られたことで、再びソーラー・ジェネクスの効果を発動。ソーラーシユート・N I C H I R I N !」

??? LP3500↓3000

「そしてレベル1のリサイクル・ジェネクスを、真下のリンクマーカ―にセット。物言わぬ進化のデータに導かれ、電脳の世界より新たな息吹が命となる。リンク召喚、リンクリボー！」

リンクリボー 攻300

攻撃に対する抑止となりうるリンクリボーが、ソーラー・ジェネクスの隣に立つ。しかしここで重要なのは、リンクリボーそのものではない。その素材としてリサイクル・ジェネクスが墓地に送られたことで、またしてもソーラー・ジェネクスの炉心へと光が集まる。

??? LP3000↓2500

「あとは任せましたよ。最後に装備魔法、ビッグバン・シユートを究極完全態・グレート・モスに装備。装備モンスターの攻撃力は400アップします。私は、これでターンエンドです」

究極完全態・グレート・モス 攻3500↓3900

究極完全態の攻撃力を上げてまで上げられたトスの意味することに気づき、ロベルトが手札を見て小さく笑う。おそらく、青木が狙っているのはこういうことだろう。まったく、もし自分の手札が悪かったらどうするつもりだったのだろうか。

「いや、杞憂か。心得た、俺のターン。永続魔法、炎舞——「天璣」^{テンキ}を発動。発動時効果処理、デツキからレベル4以下獣戦士、加える。疾走^{はし}り抜けよ、妖仙獣 鎌^カ壺^{マイ}太刀^{タチ}！そしてもう1枚永続魔法、修験の妖社。このカードは妖仙獣が場に出る、妖仙カウンターを置く。鎌^カ壺^ニ太刀^{タチ}召喚、効果発動。別の妖仙獣を通常召喚、振り下ろせ、鎌^カ壺^ニ太刀^{タチ}！」

妖仙獣の基盤となる下級モンスター3兄弟のうち、長男と次男である鎌壺太と鎌式太刀がむじ風とともに現れる。その風に誘われるかのように、背後に出現した社の中央では2つのろうそくに火がともる。

「天璣の効果。このカードあるかぎり、獣戦士の攻撃力アップ」

妖仙獣 鎌壺太刀 攻1600↓1700

妖仙獣 鎌式太刀 攻1800↓1900

修験の妖社(0)↓(1)↓(2)

「さらに鎌式太刀の効果、さらに別の妖仙獣を通常召喚。俺はこの、2体のモンスターをリリースする」

ロベルトの猛攻は止まらない。2体の妖仙獣が再びつむじ風と なって消えていき、それとは比較にならないほどの大怪風が狭い路地裏を蹂躪する。人気のないビルの窓は割れかねんばかりに震え、道の角に置いてあった青いポリバケツがすさまじい勢いでどこかへ吹き飛んでいった。

「逢魔が時。妖魔の神域脅かされしとき、その怒り星々さえも揺るがす大怪風となる！アドバンス召喚、解き放て……魔妖仙獣 大刃禍是ダイバカゼ！」

魔妖仙獣 大刃禍是 攻3000

修験の妖社(2)↓(3)

そしてその風の中から、あやかしの長たる4つ足の妖獣が解き放たれる。赤き瞳を光らせて大地を踏みしめ、高く首を上げて堂々たる支配者の咆哮を放つ。

「大刃禍是の効果。召喚及びペンデュラム召喚時、フィールドのカード2枚をバウンス。俺が選ぶのは俺自身の天璣、そして青木のビッグバン・シユートだ」

2つの竜巻がその叫びに追従するように巻き起こり、ロベルトの指定した2枚のカードを天高く巻き上げる。だが、これにより失われたカードは2枚ではない。吹き荒れる風にも負けず対峙していた究極完全態が突然苦しみだし、その6本の足でもがきながらも抵抗空しく次第に姿が消えていく。その様子を冷静に観察しながら、青木が種明かしを行う。

「私の手札にビッグバン・シユートが戻ったことにより、そのもう1つの効果を発動します。このカードがフィールドを離れたことで、装備モンスターはゲームから除外されますよ」

これこそが彼らの狙い。妖仙獣の得意とするバウンスは強力ではあるが、メインデッキに投入されているカードに対しては相手の手札

を増やしてしまうことにもなる。特殊召喚モンスターである究極完全態に対してはそれでも十分な封じ込めではあるのだが、手札コストやレベルを生かしたトレード・インの弾にでもさかれては目も当てられない。

ならばどうするか？さらに手の届かない場所、除外ゾーンへと追いやってしまえばいい。カード種類を問わない大刃禍是のバウンス能力に、ビッグバン・シュートの持つ特異な効果。これらを組み合わせることで、それが可能となる。ロベルト1人のデッキにはそんなギミックを詰め込むだけの余裕がなくとも、青木の力を借りればそれも可能となる。バトルロイヤルという形式をとっているとはいえ、事実上タッグを組んでいるこの2人だからこそ可能なコンボといえるだろう。

「続けるぞ。修験の妖社の効果を発動、妖仙カウンター3つを取り除きデッキより妖仙獣を手札に。応えよ、サレンシンチユウ左鎌神柱！そしてこの左鎌神柱を、そのままレフト P ペンデュラムゾーンにセッティング」

修験の妖社 (3) ↓ (0)

光の柱と共に空中に浮かび上がる、青い鬼の面が取り付けられた巨大な鳥居の片割れ。当然それだけではペンデュラム召喚は不可能だが、ロベルトの狙いはそこではない。これは展開に繋げるための挙動ではなく、布陣を固めるための守りの一手。場の妖仙獣の破壊に対し1度だけ身代わりとして機能する左鎌神柱を置くことで、返しの反撃に備えようというわけだ。

ソーラー・ジェネクスがダメージを与え、大刃禍是が場を荒らす。次のターンには再びサーチ効果の使える天璣を手札に抱え、リンクリボーと左鎌神柱により最低限の防御も確保したことで、もはや勝負の大勢は決したといっても過言ではない状況。

しかし。たった1ターン、それだけで十分だった。

「これは……」

震えた青木の声が、風に流れて消えていった。その横ではロベルトが、拳を握り締めて立ちすくむ。

ソーラー・ジェネクス 攻0

リンクリボー 攻0

魔妖仙獣 大刃禍是 攻0

歴戦の戦士たちの全てが、無に帰った。ソーラー・ジエネクスはもはや光を取り込むこともなく、力なく垂れた両腕からひび割れたソーラーパネルの欠片が散っていく。大刃禍是もまた妖獣の気迫を失い、そよ風程度しかない空気の流れと共に子犬のようにひれ伏して尾が地面に伸びる。そして両者を待ち受けるのは、ただ敗北の2文字のみ。

「よもや、私たちのタッグが……それにそのカード、あなたは……」

「よせ、もはや言葉は無用。来い！」

「……」

覚悟を決めたロベルトの一喝に、人影の場のモンスターが動く。灼熱の光が急速に視界いっぱいに広がっていき、彼らの意識はそこで途絶えた。

青木 LP4000↓0

ロベルト LP4000↓0

「……」

全身を炎に包まれ焼かれ、悲鳴すら上げることができずにその場に崩れ落ちる2人の敗者。一本松一段、朝顔涼彦に次ぐ同じ手口での犠牲者にはもはや一瞥も与えることなく、人影はその場を去っていた。

数時間後。犬の散歩中に偶然焼け焦げた意識不明の怪我人を発見したという通行人からの通報を受け、救急車とともに糸巻が現場に辿り着いた。虫の息で辛うじて生きているだけの元同僚の変わり果てた姿に、拳が白くなるほどに力を込めて両手を握りしめる。

2人を乗せた救急車がその場を後にするのを見送ってから、煙草を取り出して火をつける。そのまま煙を吸っては吐くも、その日の煙草からはまるで味がしなかった。勢いよく手近なコンクリートの壁を殴りつけ、そのまま前に倒れて額を冷たいコンクリートに付ける。

「クソツ、何やってんだ馬鹿野郎！朝顔だけじゃねえ、青木のおっさんにロブもだど!?アンタら全員揃いも揃って元プロデュエリストだろうが、これだけズタズタにされて何がプロだ！」

吐き出されたのはその言葉尻だけ捉えれば、横暴で乱暴なことこの上ない言葉……しかし彼女の声は虚勢こそ張っているものの普段の彼女からは想像もできないほどに震え、誰にも見せないその表情は今にも泣き出しそうに歪んでいる。

「……どいつもこいつも、アタシ一人ばかり置いてきやがってよ……アタシはまだ、許しちゃもらえないのか……？」

ずるずると倒れ込むように漏らした言葉は、嘘偽りのない彼女の本音。普段は決して口にしない、彼女がその命尽きるまで背負い続けるしかない十字架。

しかしその弱音を聞く者は、誰一人としていなかった。

ターソン22 機械仕掛けの地底神

叫びたいだけ叫んだことでようやく少し頭の冷えた糸巻が自らのオフィスに戻ると、朝から別行動していた鼓は先に帰ってきており、一息つこうというのか丁度コーヒを淹れているところだった。挨拶もせずに戻ってきた旧友の顔を一目見て何かあったことを察し、無言で口をつける寸前だった湯気の立つカップを差し出してくる。

「……いや、アタシはいらん」

存外頑固なところのある鼓は放っておくといつまでもその姿勢のまま無言の圧力をかけてくることは経験上理解しているのしぶしぶ口を開いて丁重に断り、その裏ではそんな言葉を聞いて我ながら酷い声だ、と内心顔をしかめる。今の彼女の精神状態がそのまま反映された、不機嫌さを隠そうともしない子供じみた態度。

「ふむ、そうか」

それだけで何か続けて問うでもなく、素直にカップを引つ込めて静かにすすり始める鼓。そこで一度引くあたり、お互いにこのあたりの空気はよくわかってる。そもそも、今回の新たな犠牲者である青木とロベルトは鼓にとっても元同僚なのだ。しばし無言のままにのんびりとその中身を飲み干し、再び口を開く。

「この町の担当はお前だ、事前に報告だけしておくぞ。明日、ここら一帯に網を張らせてもらう。陸路はもちろん空路や海路だろうと、この町の外に出るためには私の目に引つかかるようにな」

さらりと言つてのけたことだが、それがどれほど難しいことかは糸巻もよく理解している。権限の問題もさることながら、家紋町は海に面した街である。町の出入り全てに目を通そうというのであれば車や電車、船といった通常の交通手段はもちろんのこと、彼女たちが相手する「BV」を利用しての水中型や飛行型、果ては地中に潜むモンスターを实体化しての侵入にまで対処の必要があるからだ。

しかし鼓は、それをわずか一日で成し遂げるなどと言う。そんなこと可能なのか、などと無駄な質問はしない。鼓がやると言うならやるんだらう、それ以上疑問を抱かない程度には糸巻はこの旧友を信用し

ている。そもそも彼女たちの仲と立場で、大言壮語を口にする理由などありはしない。言い出しつぺに押し付ける、と言い換えることもできる。

「そーかそーか、頑張ってくれ」

いかにもやる気のない返事に氣勢を削がれつつも、言質はとつたぞと最後に釘をさすことだけは忘れない。そのまま今日はもう寝るとの言葉を最後にオフィスの奥、宿代を惜しんで泊まり込んでいる仮眠スペースへと引っ込んでいった。

残された糸巻は一人になったオフィスでいつものように禁煙の張り紙を横目に煙草を引っ張り出しながら、なんでアタシはまだ起きてるんだろうとぼんやり自問した。

最後までその答えは出なかったが、確かなことがひとつある。結局その日、鳥居が帰ってくることはなかった。

朝。目を覚ました鼓がやや強張った体を伸ばしつつふと目を向けると、自分の椅子の上ですうすうと微かな寝息を立てて舟をこぐ赤い髪が目映った。どうやら昨日は家にも帰らず、座ったまま眠り続けていたらしい。そう若いという年でもないのによくやるものだという現実を思い返してその笑みに自嘲の色が混じる。とりあえずの気休めとして先ほどまで自分が使っていた毛布を雑に被せておき、起こさないように静かに外に出た。

「……やっ」

朝焼けの光に目を細め、取り出したのは一枚の紙。先日巴から去りに際に渡された、彼の連絡先である。しばしそれを眺めたのち、おもむろに携帯電話を取り出した。

それからまた、数時間。おそらく外では、もう日が天頂に来ているような時間だろう。今日は空気も乾燥しており、爽やかな晴れの空が広がっているはずだ……そんなことを考えながら、それとは真逆の湿った空気と薄暗闇の支配する陰鬱で狭い空間に足音が響く。視界の端で慌てて逃げていくのは、丸々太ったネズミだろうか。

彼女の現在地点は、地下。近場のマンホールを開けて潜り込んだ、

幸運にも下水ではなく上水道の内部である。規則的に配置されぼんやりとした光を放つ非常灯と、それよりも強烈な光の筋を描く手にした懐中電灯の明かりを頼りに進みながら、複雑で気が滅入るような道を延々と歩く。

「そろそろか？」

小さく囁いたそんな独り言を聞きつけていたかのように、前方からかすかな駆動音と共に何か近づいてくる気配がした。人間大の「それ」が、鋭く向けられた懐中電灯に照らされて金属特有の光沢を放つ。一見すると、ごくありふれた清掃用ロボット。半自動でこの上水道の中を延々動き回っては老朽化の有無を確認したり簡単な掃除を行う、都市整備用マシンでしかない。

しかし、彼女が探していたこの一台のみは違う。人間の存在を感知してカメラを向けつつ巡回を止めたそれに映るよう自らのデュエルディスクを起動させると、そこに焦点を合わせたロボットが内部で何らかの処理を始めた。それまでの代わり映えない風景での単独行動がよほど退屈だったのか、聞くものなどないと知りつつも無意識に声が出る。

「その様子だと、巴の奴も嘘はつかなかったようだな」

この清掃用ロボ自体は、町の地下を何台も手分けして巡回している何の変哲もない機械に過ぎない。しかし彼女が前にする、この一台。これだけが、清掃会社の所属ではない。これはかつて巴が「BV」のどさくさに紛れて手に入れた同型のものを改造して密かにこの町の地下に紛れ込ませた……そして今なお彼らの活動における抜け道の確保や敵対する侵入者の察知に使われる、上下水道全てを掌握するための監視システムの一環である。

実は、ゆうべ彼女が糸巻に1日でこの町に網を張ると豪語した理由がここにある。無論その時点で確証があったわけではないが、かれこれ13年間も裏稼業を続けているあの男ならばおそらくそれぐらいの情報システムは押さえているだろうと推察したわけだ。先ほどの電話はそれを確認するためのもので、果たして彼女の読みは見事に命中。当然この情報の開示は彼らにとって奥の手ともいえる地下関連

のアドバンテージをデュエルポリスに奪われることになるが、それを差し引いてもこの爆破計画をそのまま通すわけにはいかない。巴は情報を出し渋りはしないだろうとの判断である。

「さあ、さっさと始めようか」

その言葉に反応するかのようには清掃ロボの上部、人間でいうところの顔に当たる部分にはめ込まれた緑色のランプが色を変えて赤く光る。そう、そこまで終わっていればこの一時的同盟の名を借りた水面下での攻防は鼓の、ひいてはデュエルポリスの一方的勝利で終わっていただろう。しかし、巴光太郎。この油断も隙もない老獪なおきつねさまは、この情報を開示するにあたりひとつだけ彼女から譲歩をもぎ取っていた。

それがこの、彼の手による改造によって自衛プログラムをインストールされた清掃ロボとデュエルを行うこと。それも、デュエルポリスの「BV」妨害プログラムを使用しないという条件付きである。この清掃ロボのアクセス権を得るためにはデュエルで勝利する必要があるのだが、そのセキュリティを切るつもりはないとのお達しがあったのだ。

そして、その理由も彼女にはよくわかっている。この情報を渡す代わりに、デュエルポリスフランス支部長である彼女のデュエルデータを丸々手に入れようという魂胆なのだろう。あまり多くのデータを渡せば、それだけ「BV」は進化する。妨害電波の通用しない「新型」の研究も、それだけ進むはずだ。おまけにこのロボが持たされたデッキにもよるが、このデュエルにおいて実体化されるカードは彼女の肉体を容赦なく傷つける。それでも彼女はデュエルポリスとしての使命感……いや、それ以前に多くの人が危険にさらされている状況を見て見ぬふりはできないという単純な義務感から、巴の思う壺だとは承知しつつも、彼女がそういう女だとわかつたうえでの言葉だと理解しつつも、この提案を飲まざるを得なかった。

「ピピピピピ……デュエルディスク、認証。アクセス権限、確認失敗。アクセス権限容認申請と判断、当機はこれよりデュエルモードに移行します。よろしいですか？」

「我々の得た情報と、奴の手に入れる戦闘データ。まあ痛み分けと言いたいところだが、私の受けるダメージがある分こちらがやや損な取引か？どうにも納得がいかないから、お前には少し憂さ晴らしに付き合ってもらおうとしよう。恨むなら主人を恨むことだな」

男とも女ともつかない機械音声が、周囲の壁に反響してどこか不気味に響く。不敵に笑い返した鼓が銀髪をかき上げると、ゆる三つ編みがその動きに合わせてわずかに揺れた。

「デュエル！」

今回先攻を手にしたのは、清掃ロボ。どの程度のAIが組み込まれているのかは知る由もないが、できる限り短期決戦で決着をつけよう……しかし、すぐに彼女はそんな自分の甘さを悔いた。そもそも、巴は過去の知識から彼女のデッキ内容をある程度把握しているのだ。防衛プログラム程度に彼女が負けるとまでは思っていないだろうが、ある程度苦しめるための手は打ってあることぐらい想定してしかるべきだったのだ。

「私のフィールドにモンスターが存在しないことで、手札の時械巫女は特殊召喚ができます。そして時械巫女をリリースすることで、デッキから時械神1体を手札に加えます」

「【時械神】……やってくれたな、巴。随分と過ぎた玩具を持たせてくれたじゃないか」

時械神。カテゴリ内ほぼ全てのモンスターが攻撃力も守備力も0という異色の最上級モンスターで構成され、にも関わらず戦闘を介することでバーン、ドロウ、除去、回復とあらゆる形で豪快にアドバンテージを稼いでいく、神の名に相応しい常に上からの圧殺を得意とするデッキである。当然のことながら、打点を武器に上から殴り飛ばすスタイルを軸とした彼女のデッキとの相性は最悪に近い。

呻く彼女にはお構いなしに、清掃ロボが器用に小型アームを伸ばしカードを掴んだ。

「私を手札に加えるカードは、時械神ライオン。そして自分フィールドにモンスターが存在しない場合、時械神ライオンはリリースなしで召喚できます」

時械神ラツイオン 攻0

薄暗い地下世界を、ぱつと赤い炎が照らす。清掃ロボが最初にその場を任せたのは、両肩から炎を立ち昇らせる巨大な鎧。空洞の中身には巨大な鏡面が埋め込まれ、その内部に髭を蓄えた巨大な人の顔が映り込む。本来このカードをはじめとした時械神はかなり巨大なモンスターだが、狭い上水道内ではソリッドビジョンのサイズにも自動的に補正が入りどうかその体を天井いっぱいまで収めている。しかし逆に言えば今の召喚によってこの通路は完全に塞がれたということでもあり、このデツキチョイスにはいちいち巨大な時械神を盾にすることでデュエルを拒否して強引に突破しようとする不埒な侵入者を足止めする意味もあるのだろう。

「私は、これでターンエンドです」

「……仕方がないな。私のターンだ」

しばし手札を眺めて考えを巡らすも、どうにもならないと諦めてカードを引く。その瞬間、ラツイオンの肩から噴き出る炎が大きく向きを変えて彼女に襲い掛かった。

「くっ……い！」

鼓 LP4000↓3000

咄嗟に息を止めて目を閉じ、体内に炎が入ることは食い止める。すぐに炎は収まったが、文字通りその身を焼かれるというのは間違っても気分のいい体験ではない。

「時械神ラツイオンの効果発動。1ターンに1度相手がカードをドロートしたとき、1000のダメージを与えます」

「ああ、よく知ってるとも。だが、次は私にも反撃させてもらう。来い、超重武者装留イワトオシ！」

超重武者装留イワトオシ 攻1200

巨大な弓そのものの形をしたモンスターが、その矢じりをラツイオンに向ける。もつとも彼女の狙いは、その矢をそのまま放たせることではない。

「そして私は、超重武者モンスターのイワトオシを左下のリンクマーカーにセット。母なる大地に根を張りて、防衛線を指し示せ。リンク

召喚、リンク1。超重武者カカーC」

超重武者カカーC 攻0

機械仕掛けの案山子が、ラツイオンを通せんぼするかのよう
に一本足で立つ。その攻撃力は守備表示になれないリンクモ
ンスターとしては致命的な0、しかしこのカードにはそれをカ
バーするだけの力があることを彼女は知っている。

「まずはこの瞬間、イワトオシの効果を発動。このカード
がフィールドから墓地に送られた時、デッキから超重武者1
体をサーチする。私が手札に加えるのはこのカード、超重武
者テンB-N。そしてカカーCの効果を発動。私の墓地に魔法
及び罫が存在しないとき、1ターンに1度手札のモンスター
1枚をコストにして墓地の超重武者1体を選択、そのカード
を守備表示でリンク先に蘇生する。今サーチしたテンB-N
を捨て、このまま墓地のテンB-Nを選択。甦れ、テンB-N
！そしてこのカードが場に出た時、さらに墓地からレベル4
以下の超重武者を守備表示で蘇生できる。イワトオシを連鎖
蘇生だ」

超重武者テンB-N 守1800

超重武者装留イワトオシ 守0

1枚の初動から3体のモンスターが並ぶが、これだけではラ
ツイオンを突破することは不可能。しかしもとより彼女には、
正攻法でラツイオンを突破する気など最初からない。

「手札からチューナーモンスター、^{アリー}A・ジエネクス・バードマンの効果を発動。私のフィールドからテンB-Nをバウンスし、このカードを特殊召喚する」

A・ジエネクス・バードマン 攻1400

蘇生効果持ちのテンB-Nをバウンスすることで次のターンでの
再度の発動を狙いつつ、チューナーとそれ以外のモンスターを場
に並べるプレイング。そのうえ、イワトオシのサーチ効果にター
ン1制限などというものはない。イワトオシとバードマンの手札
2枚から消費を限界まで抑えつつ戦線を構築する、彼女の得意と
する戦術である。

「レベル4の機械族モンスター、イワトオシにレベル3の機械族

チューナー、バードマンをチューニング。風吹き荒ぶ山を駆け、林のごとく静かに忍べ。シンクロ召喚、超重忍者シノビ^アーA・C^シ！」

☆4+☆3+☆7

超重忍者シノビ^アーA・C 守2800

座禅を組んだ状態で音もなく現れる、超重武者には珍しい丸みを帯びた黒い装甲に身を包むレベル7のシンクロモンスター。薄闇に紛れたその姿は、見る者の意識を逸らす作用を持つ。

「自身の効果によって特殊召喚されたバードマンはゲームから除外されるが……ここで再び、フィールドから墓地に送られたイワトオシの効果を発動。超重武者装留チュウサイを手札に加え、手札からその効果を発動。このカードを場の超重武者モンスター、カカーCに装備し、さらに装備魔法としての効果を発動。装備モンスターをリリースすることで、デッキから更なる超重武者を特殊召喚する。私が選ぶカードは、超重武者装留ビツクバンだ」

超重武者装留ビツクバン 攻1000

「支度は終わりだ、後は最後の仕上げだな。シノビ^アーA・Cの効果を発動、私の墓地に魔法・罫が存在しないときに1ターンに1度、このカードの元々の守備力を半分にするのでこのカードをダイレクトアタッカーとすることができる」

超重忍者シノビ^アーA・C 守2800↓1400

「そして今の私の中には、機械族の効果モンスターが2体のみ。よって魔法カード、アイアンドローを発動。カードを2枚ドロウする代わりに、このターンに私は後1度しかモンスターを特殊召喚できない。もつとも、もうこのターンに特殊召喚を行うつもりはないがな。最後にこのビッグバンは、場の自身を守備力1000アップの装備魔法として超重武者に装着することができる。当然、この効果を使わせてもらおう」

超重忍者シノビ^アーA・C 守1400↓2400

「随分と待たせたな、バトルだ。シノビ^アーA・Cでダイレクトアタックする」

足元の水面へと、座禅を組んだまま垂直に潜っていく超重忍者。そ

の水深とシノビ―A・Cのサイズからいつて本来その全身が完全に水に潜ることなどありうるはずがないのだが、事実それは目の前で起きている。そして清掃ロボの背後へと音もなく浮上し、カメラの死角から機械仕掛けの杖でそのボディ―をしたたかに打ちつけた。

超重忍者シノビ―A・C 守2400↓清掃ロボ（直接攻撃）

清掃ロボ LP4000↓1600

「ピ。ピ。ピ。ピ。……ダメージ、損傷確認。動作率98%に低下、パフォーマンスに低下はないと判断。デュエルを続行します」

「無駄に頑丈なことだ。メイン2にスケール8のメタルフォーゼ・ヴオルフレイムをライト ペンデュラム P ゾーンにセッティング、そのままペンデュラム効果を発動。装備状態のビツクバンを破壊することで、デッキからメタルフォーゼ・コンビネーションをフィールドにセットする。さらにカードを1枚伏せ……そしてこのターン終了時に、シノビ―A・Cの効果も切れる」

超重忍者シノビ―A・C 守2400↓1400↓2800

「私のターンです。スタンバイフェイズ。時械神ラツイオンの効果を発動、フィールドのこのカードをデッキに戻します。そして相手フィールドにのみモンスターが存在することで、手札の時械神サンダイオンはリリースなしで召喚できます」

「もう握っていたか、サンダイオン……」

時械神サンダイオン 攻4000

ラツイオンとその炎が陽炎のように揺らめき消えてゆき、ぽつかりと空いたフィールドを埋めるかのように一層眩しい閃光が走る。その中から出てきたのは、翼めいた6つのパーツを背面に持つ金色の鎧とその中央に存在する十字型の鏡面、そしてそこに浮かび上がる威厳のある顔であった。

「そして、墓地に存在する時械巫女の効果を発動。このカードを除外することで、デッキに存在する攻撃力0の時械神1体を召喚条件を無視して特殊召喚します。私はこの効果で、時械神ザフィオンを選択します」

「甘い、チェーンして手札から増殖するGの効果を発動！このターン

相手が特殊召喚するたび、私は1枚のカードをドロウする」

時械神カミオン 攻0

サンダイオンの前に重なるようにして水柱が立ち上り、女性用と思しきデザインの大なる青い鎧とその中央の鏡面に浮かび上がる女性の顔。水の時械神、ザフィオンである。

「1枚ドロウ。それにしても、随分と躊躇なく時械巫女の効果を使ってきたな。このターンだけならばサンダイオンだけでも十分だろうに、その思い切りの良さはさすがAIといったところか」

彼女の墓地にあるビッグバンはバトルフェイズ中に発動したカードの効果が無効にする能力を持つ、彼女のデッキでは数少ない時械神への対抗策となりうるカードである。しかしその効果は強力な半面制約も大きく、守備表示の超重武者がいなければ発動すら不可能という代物だ。

本来ならば先述のように攻撃力0がほとんどの時械神でシノビーA・Cを突破するためにはどうしてもその効果に頼らざるを得ず、したがってビッグバンの使い所もほぼ確実に存在するはずだったのだが、その理論の数少ない例外となるサンダイオンは一切の効果を使わずに純粋な打点のみでシノビーA・Cを戦闘破壊することができる。他にビッグバンのトリガーとなりうる超重武者の存在しない彼女に他の時械神の効果を確実に通せるのはこのターンしかなく、それゆえに今リクルート効果を使おうという判断なのだろう。そして、実際にそれもまた間違いとは言い切れない。結局のところ戦いの結末は、カードだけが知っているのだから。

「バトルフェイズ。時械神サンダイオンで超重忍者シノビーA・Cに攻撃します」

サンダイオンがその腕で指し示すと、その周囲に無数の光球が一斉に浮かび上がり飛んでいく。相変わらず座禅を組んだまま杖を振ってその攻撃を受け止めようとする超重忍者だが、あまりの光球の数と勢いに少しずつその体が押し込まれていく。すぐにその処理能力は限界を迎え、光の奔流に呑み込まれたその姿は跡形もなく焼き切られた。

時械神サンダイオン 攻4000↓超重忍者シノビーA・C 守2800 (破壊)

「続いて、時械神ザフィオンでダイレクトアタックします」

ザフィオンの作り出した水の渦が、鼓の足をすくう。攻撃力自体は0であるためいくら実体化していてもどうにかその場で足を取られて転ぶような無様は晒さなかったが、彼女のカードの方はそうもいつていられない。伏せられていたメタルフォーゼ・コンビネーションが、そしてPゾーンのメタルフォーゼ・ヴォルフレイムまでもが、まとめて水流に呑み込まれていく。

時械神ザフィオン 攻0↓鼓 (直接攻撃)

「時械神が戦闘を行ったことで、バトルフェイズ終了時にその効果を発動します。まず時械神ザフィオンの効果により、相手プレイヤーの場に存在するすべての魔法、罫をデッキに戻します。そして時械神サンダイオンの効果により、相手プレイヤーに2000のダメージを与えます」

がら空きになった鼓のフィールドを裂くように、サンダイオンの産み出した光の剣が一直線に飛ぶ。辛うじて身を捻ったものの脇腹のあたりを深々と貫いたそれが体の後ろに抜けて消えていくと、物理的にその箇所を突き刺されたような痛みが彼女を襲う。脂汗を流して脇腹を手で押さえながらも、どうにか膝を折ることなく踏みとどまったのは彼女自身の意地と生命力に他ならない。

鼓 LP3000↓1000

「だが、惜しかったな。今の局面、結果論とはいえお前はザフィオンではなくラツイオンをもう1度リクルートし直すべきだった。そうすれば、次のドローフエイズに自動発生するバーン効果でおそらく私のライフは尽きていたからな。私の伏せカードに対し慎重になったのだろうが……このカードは、スケープ・ゴート。私はこれをザフィオンの効果に対しチェーンして発動することで、私の場に4体の身代わり羊を特殊召喚させてもらった」

羊トークン 守0

羊トークン 守0

羊トークン 守0

羊トークン 守0

首の皮一枚でライフが繋がったことで、ふうと息を吐く。しかしラツイオンの再リクルートを防いだのはいいがまだ危機が去ったわけではなく、いまだ彼女が崖つぷち寸前に立たされていることには変わりない。バトルフェイズを終えたにもかかわらず、盤面を前に長考を続ける清掃ロボの態度がそれを物語っている。

「超弩級砲塔列車グスタフ・マックス……その様子だと、やはりエクストラデツキにはあるようだな。機械に言っても仕方のない話だろうが、どうする？」

彼女が口にしたのは、ランク10モンスターの原点にしていまだ現役最前線を突っ走るエクシーズモンスターの名。その豪快にして単純明快な効果は、エクシーズ素材1つを使用しての2000バーン。初期ライフの半分を一度に奪い去るといふ何かを間違えたと思えないその馬鹿げた火力は、多少無理をしても出す価値のあるカードといえるだろう。

そしてそれを辛うじて抑制しているのが、先ほど彼女が捨てた増殖するGの存在だ。すでにザフィオンのリクルートによって1対1交換を許しているこのカードは、そのエクシーズ召喚を行えばさらなるドローを許すことになる。もしその過程で何らかの防御カードを引かせれば、破壊耐性と戦闘ダメージ0の2体を捨て、耐性のない3000打点の壁のみを残したという最悪の状態でターンを回すことになる。そうなれば、このデュエルの流れは一気に逆転するだろう。

「どうした？・AIだからといって、長考はあまり歓迎されないぞ」

からかうような言葉にも、当然清掃ロボは反応しない。これが並みのAIならば最短で相手ライフを削りきるためリスクを恐れず、悪く言えば猪突猛進にエクシーズ召喚を行っただろうが、この清掃ロボに組み込まれているプログラムは伏せカード1枚を対処するためわざわざラツイオンではなくザフィオンをリクルートするなど、どうもかなり慎重な節がある……今の攻防を経て、彼女はそう推測していた。おそらくは元々が侵入者を積極的に倒しにくくよりも、石橋を叩いて

渡るプレイングを続けることで巴らが駆け付けるまでの時間を稼ぐことが目的なのだろう。仮に苦労して倒しきったとしても、そのころには生身の元プロに取り囲まれているというわけだ。いかにもあの男が好みそうな陰湿かつ確実な戦法だ、と独り言ちる。

もつとも、だからこそ彼女の命は繋がれるのだから皮肉なことである。結局、清掃ロボはエクシース召喚を行わず、カードを2枚伏せてターンを終えた。

「いい子だ。私のターン、ドロロー。まずは様子見か、羊トークンの1体を攻撃表示に変更して魔法カード、強制転移を発動。互いにフィールドのモンスター1体を選び、そのコントロールを入れ替える。私は当然、今攻撃表示にした羊トークンを選ばせてもらうが……」

「極めて危険なカードと判断します。速攻魔法、帝王の轟毅ごうぎを発動。私のフィールドに存在するレベル5以上の通常召喚されたモンスターである時械神サンダイオンをリリースすることで、フィールドで表側表示のカードである強制転移の効果は無効化します」

羊トークン 守0↓攻0

サンダイオンの巨体が光となって突撃し、強制転移のカードを破壊する。しかし、その程度で怯むようではデュエルポリスなど務まりはしない。帝王の轟毅は打たれたのではなく、あくまで打たせたのだ。「そして帝王の轟毅の更なる処理として、私はカードを1枚ドロローします」

「妨害1枚、そこまでは想定内だ。あとはそれが何枚あるかだが……考えても仕方がないな。地属性モンスターの羊トークンのうち2体を左下、及び右下のリンクマークにセット。大地の恵みが満ちる時、眠りし命に今再び土の遺志宿る。リンク召喚、崔嵬さいがいの地霊使いアウス。さらに3体目の羊トークンを通常モンスターとして真下のリンクマークにセット、リンク・スパイダー！」

崔嵬の地霊使いアウス 攻1850

リンク・スパイダー 攻1000

「これでフィールドが空いたな。超重武者テンB―Nを通常召喚し、効果を発動。再び甦れ、イワトオシ！」

崔嵬の地霊使いアウス 攻1850

超重武者テンB―N 攻800

超重武者装留イワトオシ 守0

茶髪の魔法少女が続くようにして先ほどと同じ手順により、またしてもイワトオシがフィールドに姿を現す。だがチユナーの存在しないこのフィールドで、今度彼女が狙うのはシンクロ召喚ではない。「ライトPゾーンにスケール1のメタルフォーゼ・シルバードをセッティングし、ペンデュラム効果を発動。蘇生したイワトオシを破壊することで、メタルフォーゼ・フュージョンデツキから錬装融合をセツトする。そしてこれにより墓地に送られたイワトオシの効果により、超重武者装留ダブル・ホーンを手札に。ダブル・ホーンもまた手札から超重武者に装備でき、さらに装備状態のこのカードは装備を解除して特殊召喚できる」

超重武者装留ダブル・ホーン 守300

テンB―Nの存在を介し、巨大な角を模した兜のようなモンスターがジェット噴射で着地する。これで彼女のフィールドには、瞬く間にモンスターが5体……それでいて、いまだ3枚もの手札を保持している。

「リンク2のアウス及びテンB―N、ダブル・ホーンの3体を上、右、右下、下のリンクマーカーにセツト。堅牢なる要塞の絶対防御の逆鱗に触れる愚か者よ、仇なす全てを撃ち落とす弾幕の鎗となるがいい。リンク召喚、リンク4！ヴァレルガード・ドラゴン！」

ヴァレルガード・ドラゴン 攻3000

ドラゴンというよりはどこか恐竜めいた顔立ちの、赤い体に銀の装甲を纏う巨竜。メタルフォーゼと超重武者を軸に戦う彼女にとつて、このドラゴンはまさに隠し玉とも言うべき切り札の1体だった。

「さあ、興が乗ってきたな。ヴァレルガードの効果発動、私のフィールドに存在する魔法、罨1枚をコストとして墓地に送ることでのターン破壊されたモンスターを効果を無効にして守備表示で蘇生する。リワインド・フェイズ！」

超重武者装留イワトオシ 守0

伏せられた錬装融合のカードが弾丸となってヴァレルガードの胴

体にある砲身に装填され、大きく開いた口から延びた砲門へとエネルギーが充填される。そして放たれた弾丸は轟音と共に大地を真下に穿ち、冥府の底に眠るイワトオシを三度現世へとその衝撃で引きずり出した。

「墓地に落ちた錬装融合の効果を発動。このカードをデッキに戻し、カードを1枚ドロウする。ふむ……いいだろう。魔法カード、りょうし霊子もつれを発動。相手モンスター1体を対象に、このターンのエンドフェイズまで除外する。これで場は空いたな、お待ちかねのバトルフェイズだ」

あまりにもあっけなく、清掃ロボの場ががら空きになる。しかし巴謹製のプログラムは、面倒なことにまだ次の手を用意していた。

「ピピピピピピ……危険察知。メインフェイズ終了時に速攻魔法、光神化を発動します。手札より天使族モンスター1体の攻撃力を半分にし、発動ターンの終了時に自壊するデメリットを付与した状態で特殊召喚します。時械神メタイオンを特殊召喚します」

時械神メタイオン 攻0

ラツイオンとはまた異なる、炎の力を持つもう1体の時械神。固有効果は戦闘終了時にフィールドの自身以外の全モンスターへのバウンス、及びその枚数に比例しての微弱なバーン。一見これにより総攻撃を封じられたかに見えた鼓……しかし、清掃ロボの粘りもそこまでだった。彼女は知っている。このメタイオンにはひとつだけ、他の時械神との決定的な違いがある。勝機を見出した彼女の目が、ギラリと凜猛に光った。

「ヴァレルガードの更なる効果を発動！モンスター1体を選択し、その表示形式を表側守備表示に変更する。そして相手はこの発動に対し、いかなるカードを発動することもできない。私が選ぶのは当然、時械神メタイオンだ」

硬質な羽を広げたヴァレルガードが散弾を放ち、その弾幕がメタイオンへと降り注ぐ。神の力を受けたその鎧は物理的なダメージなどで傷がつくことはないが、小型ながらも圧倒的な物量で勝るヴァレルガードの弾幕はその体制を大きく崩させ、ほんの一瞬の隙を作った。

時械神メタイオン 攻0↓守0

「そして速攻魔法、フルメタルフォーゼ・フュージョン重錬装融合を発動！手札及び場の素材モンス

ターを墓地に送り、メタルフォーゼの融合モンスター1体を融合召喚する。手札のメタルフォーゼ・ゴールドライバー2体を素材とし……豪華なる黄金の魂が、輝き放ち進化する。融合召喚！砕け、オリハルク！」

メタルフォーゼ・オリハルク 攻2800

手札から墓地に送られたゴールドライバーのバイクが変形し、本人の体を覆う装甲となった。錬金術による爆発的なエネルギーはそのまま本人の身体能力の向上に回され、特徴的な得物である赤熱した片手斧はサイズこそそのままに二刀流へと進化を遂げる。彼こそはオリハルク、序盤から終盤にかけてオールラウンダーな戦果を挙げる、メタルフォーゼの切り込み隊長にして突撃兵。

「ゆけ、オリハルク！」

オリハルクが両手の斧を両手で組み合わせると、いかなる錬金機構によるものかその2振りが繋がり両端に刃の付いた一振りの巨大な斧となった。2本分の長さを持つそれを、錬金術の力で爆発的に上乘せされた驚異的な腕力で唸りをつけて投げつける。

「時械神はそのほとんどが、戦闘によってプレイヤーに発生するダメージを0とする特殊能力を持つ。だがメタイオンのみは唯一、『攻撃表示の』自身の戦闘で発生するダメージを0にする能力を持つ。通常ならば運用に支障はない、ほんの些細な違いであることは否めないが……私のヴァレルガードならば、寝かしてしまうことができる。そして私のオリハルクには、メタルフォーゼ全てに対し守備表示モンスターを相手にする際倍の貫通ダメージを与える効果を付与する能力がある」

「メタルフォーゼ……」

空気を裂いて飛来する斧がメタイオンの鏡面に突き刺さった。無数のひびが走り、そこに浮かんだ顔も見えなくなる。その様子を眺めながら口にしたのは、彼女にしては珍しい称賛の言葉。

「実に惜しかったな。もし最後に手札にあったのがメタイオン以外の

時械神なら、私もお手上げだった。だがメタイオンならばその特性上、私でも十分相手にできる。お前の敗因は、度胸と運が足りなかったことだ」

0 メタルフォーゼ・オリハルク 攻2800↓時械神メタイオン 守

清掃ロボ LP1600↓0

「こんなところか。こちらも仕事でな、悪く思うな」

一時的に活動を停止した清掃ロボに近寄り、コントロールパネルを開く。デュエルに勝利したことでセキュリティは解除されていたため、内部データ呼び出すのに特別な技能は必要ない。

「ここ最近の地下のデータは、これか。ほう、地上からの出入りもリスト化されている……？なるほど、同型清掃ロボの地上型ともデータの共有をしていたのか。糸巻め、むしろよくこんな情報アドバンテージを握られた状態で仕事になったものだ……ん？」

ぶつぶつと呟きながら、明かされたデータにぎっくりと目を通していく。その視線がふと、情報の洪水のある一点を捉えた。

地上に戻ったのちもあちこち奔走した鼓がようやく帰路に就いたときには、すでに上空には夜空が広がっていた。肌寒い風を感じながらオフィスに戻ると、ドアを開けた瞬間に今日は糸巻が入っていたらしいコーヒーの匂いが漂ってくる。

「今戻ったぞ。私にも寄越せ」

「あいよ、お疲れさん」

うまくいったのか？などという愚問を飛ばすことはない。あくまでもこの友人を、糸巻は信用しているからだ。そして当の本人も、いちいち成功したなどと報告することはない。この友人が自分を信用したうえで何も尋ねてこないことを、彼女もまたよく分かっているからだ。

「気にするな、と言いたいたいところだが、今日は少し興味深いことがわかってな。聞きたい気分ではないだろうが、こちらもそれなりに重要

な話だ。嫌だと言っても聞かせてやろう」

「あー？」

まだ仕事の話が続くと聞き、露骨に嫌な顔になる糸巻。だがその表情の裏には、いまだわずかに隠し切れぬ空元気の影が潜んでいる。鼓もまた目を細めて吟味するようにその反応を眺めるも、結局は何も追及せずに流す。

「これは私も意外だったんだがな……どうも、この一連の襲撃事件。犯人候補が一気に絞れてきてな」

「何？」

そう低く呟いた糸巻の目が、明らかに危険な光を放つ。わかりやすい反応に腕つぶしだけは頼れるが扱いが大変面倒くさくて気難しいこの相手は、いちいち情報を共有するのも一苦労だと胸中で独りごちる。

「ここ数日……私がここに来る前後あたりに、相次いで元プロ級のデュエリストがこの町に入り込んでいる。試しに何人かに当たってみたんだがな、糸巻。これが傑作な話なんだが、どうも全員がデュエルフェスティバル参加の招待状を貰ったからここに来たらしい。わざわざこの日に来い、と日時指定までされてな」

「何……？」

「いやあ、まんまとしてやられたな。仕方がないから話を合わせておいたが、無論お前はまだ参加者の招待なんてしていないんだろう？」

無然とした表情とは裏腹に、どこか楽しそうにそう話す鼓。その意味することが分からないほど、糸巻は馬鹿でも無能でもない。

「つまりその中に1人……かどうかはともかく、犯人が紛れ込んでるってことか。偽の招待状まで作って呼び寄せた残りの奴らはアタシらの捜査攪乱のための囷……」

「あるいは全員がグルか、だな。いずれにせよ、決めつけは危険だ」

「はー……つたく、当のアタシら差し置いて随分好き勝手やってくれるもんだ。これはあれか？アタシが出場者リスト作るのサボることができたせきやつほーいって喜んできやいいのか？もうコイツらがデュエルフェスティバル主催でいいんじゃないかな」

「そもそもお前が、なんでまだそれをやってないんだって話だがな」

煙草に火をつけて呆れたように呟く糸巻に皮肉の釘だけはきつちり刺しておき、少し冷めてしまったコーヒーに口をつける。とはいえいまだに相手のペースとはいえ、前進があつたことには間違いない。「そういえば糸巻、お前の部下はまだ戻つて来てないのか？あの子の学校で起きたという話も、昨日は聞きそびれたからな。詳しく聞きたかつたんだが」

「いや、アタシは見てねーぞ。むしろお前と合流して、一緒に帰ってくるから連絡もせずにはほつき歩いてんのかとばかり」

嫌な沈黙が流れ、赤髪と銀髪2人の美女が顔を見合わせる。無駄口叩く時間も惜しいとばかりに携帯を取り出した糸巻が、登録済みの……もつぱらあちらから掛けてくるばかりで、彼女の方から探すことは極めて珍しい部下の番号へと通話ボタンを押す。

プルルルル、プルルルル。無機質な着信音が、息を呑んで見守る2人のいるオフィスに響く。3回、4回……しかし、音の連鎖は途切れない。まるでカウントでも取っているかのように、その回数に比例して糸巻の表情が真剣味を帯びていく。嫌でも想起される最悪の事態にしびれを切らしかけたその時、唐突に着信音の一定のペースが途切れた。

『……はい。なんすか、糸巻さん』

「鳥……なんすかじゃねえこの馬鹿野郎。アタシが呼んだらさっさと出る、このタコー！」

安堵の声を寸前で呑み込み、通話口に怒鳴りつける糸巻。何とも言えない薄笑いを浮かべてそんな彼女を見つめる鼓のことはきつちり睨みつけ、拳を握って殴りつけるジェスチャーで牽制する。

『ちよつとこつちも今、取り込んでるんすよね。ああ、でもまあ丁度いいつすわ。こつちが片付くまでまだ時間欲しいんで、余ってる有休使わせてもらいます』

「何?」

ぼそぼそと低く聞こえてくる声の調子からただならぬ向こう側の様子を察知し、さすがの糸巻も怪訝な顔になる。そんな彼女にお構い

なしに、電話口の向こうから一方的な言葉は続く。

『もうデュエルフェスティバルとか、そつちのことは全部糸巻さんに任せます。俺は俺のやり方で、先輩の敵を討ちますから。じゃあ、そういうことで』

「おい……あつ、切りやがったなコノヤロー！」

言いたいだけ言って通話を切られた瞬間にもう1度かけ直すも、すでにあちらの携帯は電源ごと切られたらしく繋がらしない。腹立ちまぎれに拳を叩きつけられたデスクがドン、と重い音をたてた。

File 4―デュエルフェスティバル ―開幕!―
ターン23 かくて語り部は神を称える

「さあそこ行くおにーさんおねーさん、じーちゃんばーちゃんにお子様方も。寄つてらっしゃい見てらっしゃい……デュエルフェスティバル、開幕です!」

どこまでも飛んでいけそうなほどに青い秋晴れの空に、清明の声が朗々と響く。演芸場めいた高台とそこに作られた簡易的なデュエルスペースと、全体的に野外ライブ会場めいたステージの舞台袖から糸巻は、本来この呼び込みは鳥居の役目だったんだがなと複雑な思いでそれを見つめていた。

「さあ皆様方、よくぞおいでくださいました!本日はお日柄もよく、デュエリストたちも皆とても気合が入っていることでしょう。この特別ステージをその目で見ることのできるあなた方はとても運がいい、私はそう思いますよ?」

あまり捻りがあるわけではないが、それゆえにかえって当人の興奮と熱気が伝わってくる。本来ならばこの手の口上がいくらでも湧いてくる鳥居はまさに適任だったのだが、最後の電話以降彼とはいまだに連絡が取れないままだ。

どうすつかと頭を抱えていたところに「鳥居が逃げた」と微妙にずれた話を聞きつけた清明が「んじゃ僕にやらせてー」と例によつての軽い調子で売り込みに来て、やりたいやりたいとあまりにうるさいのでよしじゃあお前何かあったら責任取れよと押し付けたのがつい昨日。完全にぶつつけ本番にしては全く恥じらないの、クオリティに目をつむれば妙に堂に入った司会っぷりである。一応本人は当初から叩き売りなら得意だから任せて、と変な自信に満ち溢れていたのだが。

そんな絶好調の彼がふと集まってきた観客の中からある人影を見つけ、意外そうな顔になりながらも手招きした。釣られて糸巻もそちらに目をやるが、そこにいたのは彼女にとっては見知らぬ、いかにも

気弱そうな眼鏡の少女。

「竹丸さん、こんにちわ。来てくれたの？お兄さん嬉しいよー」

「はい！あの、先日は本当に、本当にありがとうございます！」

糸巻も八卦の学校で起きた事件の話はある程度本人の口から聞いてはいたが、彼女は彼女でこの祭りを目的としたテロへの対策やロベルトたちのやられた事件の後処理などで忙殺されていたためあまり突っ込んだ情報までは聞いていない。犯人への尋問まで行った唯一の男である鳥居が理由は不明だがせっかく捕まえた男2人を解放してしまったため、知りたくともそれ以上どうしようもなかったということも大きい。

「それでその、私、デュエルモンスターズのルールってそんなに詳しくないんですけど……」

「ああ、大丈夫。今日はお祭り、あの時みたいなことにはならないからさ。もちろんこのゲーム自体が合う合わないはあるけど……見ててなんとなくでも面白そうだなーなんて思ってくれば、僕も嬉しいかな」

「あ、いえ、だからその、一緒に……いえ、なんでもないです……」

悪気ゼロの爽やか営業スマイルを前に文学少女が精一杯の勇気を振り絞っての誘いの言葉はあっさり空振りし、すぐごと客席へと引き下がっていく。一方で開いた口が塞がらなかったのは、別に聞き耳を立てていたつもりはないがすべて聞こえていた糸巻である。

「……アイツ、どこであんな子引っかけてきたんだ？」

この段階ですでに糸巻及び鼓のデュエルポリス組、そして八卦と清明の一般人組の間には今回のイベントについて致命的な認識のズレが生じていた。そもそも彼女は、この時点で何かおかしいと気が付くべきだったのだ。普段から彼女の後をお姉様お姉様とキラキラした目でついて回り、今回のイベントも楽しみにしていた少女の姿がまだ見えていないことに。

実は糸巻たち、いまだこの2人にはデュエルフェスティバルの裏で蠢いているテロ計画のことを伝えていない。当然一本松をはじめとする、デュエリスト襲撃事件の存在も伏せたままだ。身元を明かすも

のはすべて焼け落ちていたため、ニュースから彼らの名前が漏れることはない。

危ないから？プロの仕事だから？無論、それもあるだろう。しかし彼女らの心の奥底、当の本人すら気づいているか怪しいものであるその本音は、ひとえに失うことへの恐怖だった。彼女たち旧世代のプロデュエリストにとって八卦九々乃は10年以上の長きにわたり待ち望み、ようやく生まれた次世代デュエリスト希望の星だ。これ以上デュエルモンスターズの歴史の闇に触れて欲しくない。自分たちが当たり前のように育んできた、デュエルは楽しいものであるという認識を少女の中でも少しでも強固なものにしたい。だからこそ、このデュエルフェスティバルは純粋な祭りとして受け止めてもらう必要があつた。そこまではつきりとした考えがあつたわけではないが、なぜ情報を秘匿していたのかを注意深く紐解いていけばその結論はそこに帰結する。

その無意識下での判断が余計に問題をこじれさせたことを彼女らが思い知るのは、もう少し後のことである。

「さ、そんなこんなでいよいよデュエルフェスティバル、開幕の時間となりましたね。本日はお日柄もよく、お集まりいただいた皆さんには感謝しかありません。まずは開会にあたりこの町の守護神、デュエルポリスは家紋町代表。糸巻太夫さんより、開会のお言葉をいただきます。ほら糸巻さん、何か喋って」

ちらりと時計を見て急に雰囲気を見まわすものに変えた清明が、さもそれっぽいセリフと共に開会の言葉を丸投げした。無駄に手際の良い動きに押し切られて突き付けられたマイクを受け取ってしまい、やむを得ず咳払いする。視界の端に捉えたしてやったりとばかりの得意げなウインクに拳を無言で握りしめながら、それでもなんとか淀みなく声を張る。

「えー……かつてあの忌まわしい事件により、デュエルモンスターズは一度は忌み嫌われる存在へと堕ちました。そしてそれは、残念ながら今現在においてもあまり改善されているとは言えない状況が続いています。無論、我々デュエルポリスが不甲斐ないせいだと言っ

まあそれまでの話でしょう」

普段の彼女からは想像もつかないほど真面目かつ殊勝な話っぷりに、隣のマイクを突き出してきた張本人が目を丸くしているのが気配から伝わってきた。鼓あたりになんかこれを言うやと鼻で笑われるのだが、彼女とて一応はいっぱしの社会人なのだが。あのアクティブニートのプー太郎はアタシのことを何だと思っていたのかという疑問は一度脇に追いやり、彼女の話に耳を傾ける老若男女の顔をぐるりと見渡す。

決して人数が多いわけではない……少なくとも、かつて彼女のデュエルを見ようとする人々でひしめき合ったプロの舞台と比べれば。それでもこの仕事に就いて以降は久しく感じていなかった現役時代、フアンの期待を背負って戦う心地いい感覚に似たものを感じ、少し気分がよくなった。

「ですが、私は信じています。それでもデュエルモンスターズの本質は、皆が楽しめるものであると。そしてそのことを忘れない限り、必ずかつてのように世界中の人間が同じカードの元に繋がることができると。本日のデュエルフェスティバルは、その決意の一步です。そんな小さな一歩から後に続く二歩、三歩へと踏み出せることを願って、ここに開会の言葉と代えさせていただきます……おう、こんなもんでどうだ」

一礼、そして客席から巻き起こる拍手。柄にもない話をした反動で無性にニコチンが摂取したくなかったが、さすがにこの観衆の前でもおもむろに一服するほど彼女は馬鹿ではない。ここにいるのは普段彼女が相手しているどう思われようが知ったこっちゃない「BV」犯罪者ではなく堅気の人間、このデュエルフェスティバル自体がイメージアップのための仕事なのだから。喫煙者に対する昨今の風当たりの強さは、ヘビースモーカーの彼女自身が一番身に染みて知っている。「はい、ありがとうございます。では堅苦しい挨拶はこれまでとしまして、本日のメインイベント。いよいよ皆様お待ちかね、デュエル大会を開催いたします。まず記念すべき第一試合を飾りますのは……エントリーナンバー6番！眠りし遺物、星守る神の探究者。『考

古学者』の寿ことぶきしんすけ神助さん、どうぞーっ！」

その名を呼ばれた老爺が立ち上がると、拍手の中をおもむろに壇上へと昇り一礼する。年齢の重みを感じさせる深い皺の刻まれた顔の中にあっていかにも度の強そうな分厚いレンズの眼鏡越しに人の良さが透けて見えるような柔和な目が覗く、一見するといかにも好々爺といった風情の小柄で痩せた老人……しかしそんな寿の過去の姿を知る糸巻はもちろん、清明も一目見ただけでそれはこの老人の見掛けに過ぎないことを悟った。確かに衰えてはいるものの無駄のない付き方をした筋肉、きびきびとした動作。それはとりもなおさず、その老人の実力を物語る。元プロの名は、決して伊達ではないのだ。

ある程度拍手が収まったタイピングを見計らい、改めて清明がマイクに口を近づける。すでに事前のくじ引きにより、対戦カードは決まっている。

「そんな寿氏の対戦相手は……皆さんご存じデュエルポリス、家紋町の守護神にして死霊の女番長。『赤髪の夜叉』、糸巻太夫さんです！」

巻き起こった拍手は、先ほどよりも気持ち大きいか。そのあたりはやはりホームの強み、ということなのだろう。今しがた降りてきたばかりの壇上に再び登ろうとした糸巻だったが、その直前にふと気になって清明の方を向いた。

「しかしアタシはともかくとして、よく寿の爺さんのことなんて知ってたな」

「あー、今の？七宝寺さんのところで予習しといたのよ」

なるほどな、と納得する。あの爺さんなら、焼き討ちを逃れた当時の雑誌やなんかを保管していてもおかしくはない。今の口上も、あらかじめそのデュエリスト特集あたりで得た知識を繋ぎ合わせたものだろう。

「まずかった？さすがに映像までは残ってなかったから、今一つ不安なのよね」

「いや、その調子で頼む」

やや不安げな背中をバンと叩いて安心させると、改めてステージの上立ち老人と向かい合う。

「久しぶりですね、こうして舞台に立たせていただくのは」

「ああ、爺さんは引退組だっけか。悪いな、わざわざ呼び出しちまつて」

お互いに10年以上の年月を経ての久々の再会ではあるが、その言葉に遠慮はない。そしてこのデュエルを通じ、もしかつての同僚であつたこの老人こそが爆破テロの片棒を担いでいたことが判明したとしても……彼女の対応に、迷いは生じない。軽い口調の裏に隠れた抜き身の刃のような彼女の本気を感じ取つたのか、老人の眉がピクリと動く。

「……本気でいくぜ、爺さん。終わつてから鈍つてたなんて言い訳は聞きたくないからな？」

「おや。私とて腐つてもプロデュエリストと呼ばれた身、余計な気遣いは不要ですよ」

その言葉は単に彼女の気合を察知しての戦士としてのものなのか、はたまた自分がテロリストであることを暗に認めたくえで彼女を挑発しているのか。判別はつかかなかつたし、すぐにそれ以上考えるのを止めた。無理に言葉の裏まで読み取ろうとするよりも、カードに聞く方がよほど手っ取り早い。それに、その方がずっとアタシ好みだ。

「デュエル！」

糸巻は嘘は嫌いだ。本気と宣言した以上は本気を出すし、大体デツキもそれに合わせてくれる。

「先攻はアタシだ、牛頭鬼を召喚。そしてフィールド魔法……生あるものなど絶え果てて、死体が死体を喰らう土地。アタシの領土に案内しよう、アンデットワールド、発動！」

牛頭鬼 攻1700

荒ぶる獣の雄たけびと共に牛の頭を持つ筋骨隆々の妖怪が木槌片手に仁王立ちすると、周りの風景が彼女の領土へと侵食されていく。分厚い雲があたりを包み、地面からはコンクリートを押しつけてねじれ曲がつた枯れ木が頭をもたげ、いたるところでは瘴気に誘われた靈魂が半透明の姿を見せ、骨ネズミがキーキーと不快な鳴き声と共に駆けっていく。

「あーつとー糸巻選手、いきなり自らの得意とするフィールドに舞台を移しました！アンデットワールドは、戦士や魔法使い、ドラゴンお様々な顔を見せるモンスターの種族を、常に強制的にアンデット族へと書き換えるカード。これでいきなり主導権を握ろうというのでしようか！あ、急遽やることになった実況は引き続き私、遊野清明でお送りします。いえいつー！」

あまり場の雰囲気似つかわしくない明るい声が、死霊ひしめく荒野に響く。しかし、それがかえって功を奏していたことは糸巻も否定できなかった。アンデットワールドの情景に明らかかな怯えを見せていた観客の恐怖が、底抜けに明るい自称実況者によって多少緩和されたからだ。

「あー、そうか。そらそうだよな、ソリッドビジョン自体見慣れてないもんな。いきなりアンワは刺激が強すぎたな」

「ジエネレーションギャップですね。私たちが現役のころは、まだようやく2本の足で立てるようになった子供ですら今ので喜んでくれたものですが」

「軟弱になったのか、それとも健全になったのか……ってか？ま、アタシらの仕事は時代に逆行した化石みたいなもんさ、どっちにせよいつも通りにしかできない哀れな生き物だよ。爺さんだつてその口だろう？続けるぜ、このまま牛頭鬼の効果を発動。1ターンに1度デッキからアンデット族1体、グローアップ・ブルームを墓地へ。そしてこのカードは墓地に送られたその瞬間、自身を除外することで場に死霊の仇花を咲かせる。デッキからレベル5以上のアンデットを1体サーチするが、この時アンデットワールドがあるならばそいつをそのまま特殊召喚もできる。死霊を統べる夜の王、死霊王 ドーハスーラ！」

死霊王 ドーハスーラ 攻2800

「牛頭鬼はともかく、1ターン目からアンデットワールド下でのドーハスーラとは。本当に、手加減というものがありませんね」

「その割には随分余裕そうだな、爺さん。選択ミスったか……？カード1枚セットして、ターンエンドだ」

「はい、今の解説しましょうねー。糸巻選手の発動したアンデットワールドは、先ほど説明した通りモンスターをアンデット族に書き換えます。そしてあのドーハスーラは、アンデット族の効果の発動をトリガーとして強力な効果を発動できるまさに死霊を統べる王様と言わべきモンスター。高い攻撃力と相まって強固なこの布陣を前に『考古学者』、いったいどのような戦術を魅せてくれるのでしょうか!」

「やれやれ、なんだかハードルを随分と上げられた気もしますが。元とはいえどプロデュエリストとしては、ここはやはり乗り越えてみるとうましようか。カードを1枚伏せて魔法カード、パラレル・ツイスターを発動。私のフィールドの魔法、罫カード1枚をコストに、フィールドのカード1枚を破壊。観客の皆様には少々刺激の強すぎるアンデットワールドには、ここで退場願いますよ!」

悔しそうな表情になる糸巻だが、何も言わずに破壊を通す。セットカードをコストにして荒れ狂うパラレル・ツイスターが、死霊の荒野を分厚い暗雲ごと吹き飛ばした。

「あーつとー!ドーハスーラの反応できない魔法カードによる除去で、アンデットワールドが消え去りました!これで種族の書き換えがなくなつたことで、相対的にドーハスーラは弱体化します!」

「そして魔法カード、調律を発動。デッキトップのカードを墓地に送り、デッキからシンクロンモンスター1体を手札に。そして私に加えられたアンノウン・シンクロンは、デュエル中1度だけ相手フィールドにのみモンスターが存在する場合に特殊召喚ができます!」

アンノウン・シンクロン 攻0

先陣切つて寿が呼び出したのは、触覚が付いた機械の目玉のようなモンスター。それ単体ではドーハスーラはおろかすぐ横の牛頭鬼にも及ばない、しかし当然その先がある。

「攻撃力は0……しかし、だからといってそれが弱いということには決して繋がらない。それがデュエルモンスターズというゲームなのです。次に私は、^{スピードロイド}S R ブロックンロールを召喚!」

S R ブロックンロール 攻1000

次いでその隣に、ギターをモチーフとしたらしき機械のモンス

ター。

「チューナーモンスター、そして他のモンスター。これは、まさか！」
もはや実況だか前振りだかわからない清明の声を背後に、寿が手を掲げる。合計レベルは、5。

「レベル4のブロッケンロールに、レベル1のアンノウン・シンクロンをチューニング。星降る空に祈りを託し、集いし加護は天翔ける翼へと昇華する。シンクロ召喚、レベル5。星杯の神子イヴ！」

半透明の青い翼を持つ少女が天から舞い降りると同時に、シンクロ素材となつたはずのブロッケンロールが奏でる者もいないのにひとりで音色をかき鳴らす。

「この瞬間にシンクロ召喚に成功したイヴ、及び素材となつたブロッケンロールの効果を発動。そのシンクロモンスターと等しいレベルを持つSRトークンを特殊召喚し、デッキから星遺物カード……星遺物の守護竜を手札に加えます」

星杯の神子イヴ 攻1800

SRトークン 攻0

「永続魔法、星遺物の守護竜を発動。このカードの発動時、私の墓地に存在する4以下のドラゴン族1体を宇田に加えるか特殊召喚することが可能となります。聖刻龍―ドラゴンヌートを選んで蘇生、そのまま星遺物の守護竜のもうひとつの効果を使います。このドラゴンヌートを対象に取り、その位置を別のメインモンスターゾーンに移動」

聖刻龍―ドラゴンヌート 攻1700

「ドラゴンヌート……おそらくは、先ほど発動された調律によって墓地に送られたカードでしょう。無駄のない蘇生コンボにより、さらにモンスターを増やしにかかる寿氏。これが元プロデュエリスト、『考古学者』の実力なのでしようか!？」

清明の言葉通り、ドラゴンヌートは調律発動時にデッキトップから墓地に送られたものだ。そしてドラゴンヌートが横に1マスずれたことで複雑なルートによるコンボは、ついに大詰めを迎えていた。

「そしてこの瞬間、カード効果の対象となつたドラゴンヌートの効果

を発動。私のデツキか墓地に存在する通常モンスターのドラゴン族を、その攻守を0にして特殊召喚します。ラブドライドラゴン、特殊召喚」

ラブドライドラゴン 攻0 守2400↓0

「ひい、ふう、みい……1ターンで全部揃えやがったか……でもちよつと安心したぜ爺さん、耄碌したアンタなんてアタシも見たくなかったからな」

「ふふ、その減らず口は相変わらずなようでも私も安心しましたよ。私は闇属性ドラゴン族のラブドライドラゴン、風属性機械族のSRトークン、水属性魔法使い族の星杯の神子イヴの3体をそれぞれ左、右、下のリンクマーカーにセット。星降る夜に目覚めしは、眠りし神の終劇もたらず破壊の力。リンク召喚、顕現せよ！星神器デミウルギア！」

3体のモンスターが宙に吸い込まれ、馬鹿馬鹿しいほどに巨大な影が差す。空を覆うほどに巨大な、まるで太陽のような光球と、その周りで弧を描く1対の螺旋と格子模様の付いた外殻。星遺物の集大成にして寿のエースカードが、ドーハスーラの巨体ですらまるで昆虫か何かに見えるような意思なき威圧感をもってその場に浮遊する。

星神器デミウルギア 攻3500

「なんと後攻1ターン目にして、あれほどの大型モンスターを出してみせた！フィールドの主導権を1瞬にして覆された糸巻選手、これはもう絶体絶命か!！」

「ハッ、馬鹿言ってんじゃねえよ」

強気な言葉とは裏腹に、その表情は険しい。デミウルギアの効果は、彼女自身もよく知っている。まして、あの素材は非常にまずい。

「星杯の神子イヴ、その最後の効果を発動。フィールドから墓地に送られたことで、デツキから星杯1体を特殊召喚します。神話を看取った星々の器……星遺物——『星杯』！」

星遺物——『星杯』 攻0

「では、デミウルギアの効果が発動。種族と属性の異なるモンスター3体を素材としてリンク召喚された時、このカードは1ターンに1度

自身以外すべてのフィールドに存在するカードを破壊できる。フェイス・デミウルゴス！」

「黙ってやられてたまるかよ。速攻魔法発動、逢華妖麗譚——不知火語！相手フィールドにモンスターが存在するときに手札のアンデット1体を捨てることで、カード名が異なる不知火1体をデッキか墓地から特殊召喚できる！来い、妖刀——不知火！」

「ならばその妖刀ごと、焼き尽くすまでのこと」

妖刀——不知火 攻800

そして無機質な太陽から、無数の滅びの光が放たれる。雨のように降り注ぐ破壊のエネルギ―は文字通り無差別に降り注ぎ、その前には妖刀はもちろん死霊の王も、そして味方であるはずのドラゴンヌートや星杯も区別はない。後に残ったのは、地表を見下ろす神の器のみ。「まだだ、牛頭鬼の効果を発動！墓地に送られた場合、別のアンデットを墓地から除外して手札のアンデットを特殊召喚する！ドーハス―ラを切つて……」

「逃しませんよ。速攻魔法、墓穴の指名者を発動。このカードの効果によりそちらの墓地から牛頭鬼を除外、そして除外したカードの効果はこのターン無効となります」

「ちっ！」

「すぐさま防御を仕掛ける糸巻選手、その逃げ道を塞ぐ寿選手！強烈な効果を持つドーハス―ラを除外してしまったことが、この先どう響くのでしょうか！」

反撃の手は断たれ、今度こそ糸巻に打つ手はなくなった。そして彼女の頭上で、沈黙を保つ神の器が再び起動する。

「道は開きました。デミウルギアで攻撃、ザ・クリエイション・プロローグ！」

「くっ……！」

デミウルギアの中央の光球がひときわ強く光を放ち、一時的に視界が奪われる。ようやく光が収まってきたときには、すでに糸巻のライフは風前の灯火にまで追い込まれていた。

星神器デミウルギア 攻3500↓糸巻（直接攻撃）

「3500のダイレクトアタックが通ったーっ！しかも糸巻選手の場は完全にがら空き……あーいや、しかしご覧ください皆様。まだ彼女の心は、その闘志は折れておりません！」

「折れてない？少し認識がずれているな」

地下。マンホールの隙間から漏れるかすかな外の明かりとわずかな喧噪に包まれながら、上水道で清掃ロボにもたれかかる鼓が小さく呟いた。同型機からリアルタイムで送られてくる町中のデータ処理しつつ、その声が反響する。一度作業の手を止め、昔を懐かしむようにふと見上げる。

「むしろ追い詰められるほど、手負いの傷が深くなることにより激しく強く燃え上がる。そういう女だ、奴は」

誰も聞く者はおらず、当然目の前の清掃ロボから返事が返ってくるわけもない。すぐに肩をすくめ、再びデータの奔流との格闘を再開する。そして地上では、首の皮1枚で持ちこたえた糸巻に再びターンが移っていた。

「やるじゃねえか、寿の爺さん。でも悪いが現役デュエルポリスとしちゃあ、隠居した爺さんに負けるわけにはいかないんでな。アタシのターン、ドロー！」

先ほどのターンで、すでに仕込みは済んでいる。そして現在の不確定要素は、実は老人に残された手札1枚のみ。実は見かけほど、彼女は追い込まれたわけではない。確かに厄介ではあるが決して突破できないほどではない、それでいて一見すると絶望感溢れる布陣。

そしてそれは、先ほど彼女の牛頭鬼を防いだ墓穴の指名者にしてもそうだ。墓地に妖刀―不知火が送られたのはお互いに見ているのだから、あのターンに戦闘ダメージを与えるのは諦めてでもそちらを狙い打っておけばライフこそ残るものの結果的に今よりも状況は悪くなっていた。しかし、寿はそれをしなかった。

「いいでしょう、かかって来てください」

彼女らの現役時代からこの暗黙の流れをイカサマ、馴れ合いと批判する動きもあった。しかし彼女たちは断じて手を抜いているわけで

はなく、結局のところ観客だつて完膚なきまでの封殺や、相手に何もさせない一方的な勝利の押し付けが見たくて金を払っているわけではないのだ。相手の反撃の余地を残しつつ、かといって馴れ合いでは終わらせず締める所は逃さず締め、己の白星は自力で獲りに行く。このあたりの絶妙なバランスは、観客の前で大立ち回りを長年魅せてきたベテランならではの技といえるだろう。

「墓地に存在する妖刀―不知火の効果を発動。このカードとアタシの墓地のアンデット族、レベル4の不知火の武士もののぶを除外し、その合計と等しいレベルを持つアンデット族シンクロモンスター1体をエクストラから特殊召喚する。戦場切り込む妖の太刀よ、一刀の下に輪廻を刻め！逢魔シンクロ、レベル6！刀神―不知火！」

刀神―不知火 攻2500

「出ました、糸巻選手の不知火、その最大の強みにして根幹！テーマ単位で行われる墓地リソースのみでのシンクロ召喚によって、手札を一切使わずにシンクロモンスターを呼び出しました！」

破壊の光を浴びて地に打ち捨てられたはずの妖刀がふわりと浮き上がり、人型の炎がその柄を握ると和装の剣士の姿へと変化した。顕現した剣豪が鋭いまなざしで頭上のデミウルギアへと居合の構えをとると、それに反応したかのようにデミウルギアが明滅する。するとそんな光の信号に誘われでもしたかのように、大地を割って巨大な金属の冠のような物体がせり上がってくる。

「ならば相手がエクストラデッキからモンスターを特殊召喚したことにより、デミウルギアの更なる効果を発動。デッキから星遺物モンスター1体をリクルートします。星々より降りかかる苦難と決意の標、星遺物―『せいかん星冠』！」

星遺物―星冠 守2000

「星冠……エクストラから出たモンスターの効果発動時、リリースするとそれを無効にして破壊できるんだっけか？読み違えたな爺さん、アタシの狙いはモンスター効果でどうこうすることじゃねえ！ユニゾンビを通常召喚、その効果発動だ。刀神を対象にデッキから馬頭鬼を墓地に送って、そのレベルを1上げさせてもらうぜ」

ユニゾンビ 攻1300

刀神―不知火 ☆6↓☆7

「なんと糸巻選手、またしてもチューナーモンスターを呼び出してそのレベルを操作。これはまさか、連続してのシンクロ召喚を行おうというのでしょうか!？」

「小細工が通用しないなら、正面突破でぶち抜いてやるよ。レベル7のアンデットモンスター、刀神にレベル3のアンデットチューナー、ユニゾンビをチューニング。戦場統べる妖の太刀よ、輪廻断ち切り刃を振るえ!シンクロ召喚、ほむらがみ炎神―不知火!」

☆7+☆3⇨☆10

炎神―不知火 攻3500

ついに抜き払われた糸巻の切り札の一角にして、不知火流の頂点にして開祖でもある炎の軍馬に騎乗した銀髪に白装束の剣士。しかし頭上のデミウルギアは、沈黙を保ったまま動かない。炎神を外敵と認識していないのではなく、そのシステム上の弱点のせいだ。

「デミウルギアのリクルート効果は、1ターンに1度しか使えない。なるほど、効果の隙についてきましたか」

「そうさ。そして発動しない効果なら、ご自慢の星冠も反応できない。バトルフェイズ、炎神でデミウルギアに攻撃……」

その言葉に従うように、炎神が手にした妖刀が純白の炎を纏う。刀身に沿って伸びるそれは一振りの巨大な炎の刃となり、迎撃のためにエネルギーを集中させて不気味な発光を始めたデミウルギアと対峙した。

「……不知火流奥義・蓬萊斬!」

「ザ・クリエイション・プロローグ!」

炎神―不知火 攻3500↓星神器デミウルギア 攻3500(破壊)

この世ならざる炎の剣閃が、世界を肅正する破壊の光が、フィールドの中央で激突する。互いに譲らない力と力の激突は、拮抗状態のまま行き場を失ったエネルギーだけが高まっていく。

「炎神の効果!アンデット族が破壊されるとき、アタシの墓地の不知

火1体を破壊の身代わりに除外できる！」

半透明な刀神がほんの1瞬だけ炎神の前に両手を広げて立ち、暴走するエネルギーを引き受けて消えていく。対して防御機構を持たないデミウルギアはその核を深々と切り裂かれ、次第にその光がくすんでいく。

「はっ、どうだ……」

しかし、その言葉を最後まで言い切ることはできなかった。もはや地に堕ちるのを待つばかりかに思われたデミウルギアだったが、突如として逆再生の動画でも見ているかのように受けたはずの致命傷が元に戻っていったのだ。

星神器デミウルギア 攻3500

「これはどうしたことでしょうか！両者の攻撃力は同じ、しかしその耐性を盾にすることで一方的に炎神が勝利を収めたかに見えたエースモンスター同士の戦い。しかし倒れたはずのデミウルギアが、今再び再起動してフィールドに君臨しています！」

「墓地よりトランプ発動、星遺物の齎もたらす崩界。私のサイバース族リンクモンスターが破壊された際、このカードを除外することでサイバース族リンクモンスターを墓地より蘇生します。私が選ぶカードは当然、破壊されたデミウルギア！」

「最初にパラレル・ツイスターで墓地に放り込んだカード……！」
「残念ながらこのデミウルギアはリンク召喚されたものではないため、フィールド破壊効果は使えません。ですが星遺物呼び起こす効果、そしてモンスター効果を受け付けない耐性ははまだ健在。まだもう少し、粘らせていただきましょうか」

「……前言撤回だ。少しぐらい耄碌してたって良かったんだぜ、爺さん？カードを1枚セツトして、ターンエンドだ」

互いにリソースこそ削れてはいるものの、決定打に欠ける状態。当然寿の立場で真っ先に思いつく次の手としてはもう1度デミウルギアで炎神に攻撃を仕掛け、相打ちで両者が破壊された隙に星冠で直接攻撃を行うことだろう。そうすればこのデュエルは終わる……しかし、糸巻の場にはいまだ伏せカードがある。そして彼女は、不知火の

みならずバージェストマを操るデュエリスト。あの1枚がブラフなどではない何かしらの妨害手段であることは想像に難くなく、デミウルギアの耐性も畏カードに対しては無効。

「ならば……ドローします」

そして引かれたカードを見て、老人がわずかに微笑む。どうやらこのデッキは、いまだ彼に力を貸してくれるらしい。

「墓地に存在する『星杯』の効果を発動。このカードを除外することで、デッキより星遺物カードを手札に。そしてサーチした魔法カード、星遺物を継ぐものを発動。デミウルギアのマーカー先に、私の墓地のモンスターを蘇生します」

星杯の神子イヴ 攻1800

「先ほど寿選手の展開を支えた立役者、イヴが再びフィールドに降り立ちました！このまま一斉攻撃をかけるというのでしょうか、どうなる糸巻選手！」

「確かにこれだけでも戦力としては十分ですが……」

あの伏せが相手モンスターを裏守備にするバージェストマ・カナディアあたりならば、別に迷うことはない。デミウルギアはリンクモンスターであるため裏守備にならず、イヴと星冠の片方を止めたところでもう1体で攻撃すれば済む話だ。しかし問題は、モンスターの攻守を半減させるバージェストマ・ハルキゲニアや【バージェストマ】とも相性のいい迷い風といったコンバットトリック用のカードや、不知火のフィールド荒らし担当の燕の太刀つばくろといったカードで彼女が待ち構えていた場合だ。デミウルギアの攻撃で炎神を突破できなかった場合、残りの2体では攻撃力3500を超えられない。

そういった問題の大部分は、彼が今引いたカードならば無視できる。反面戦術の柔軟性は大きく失われ、読み間違えていた場合のリスクもこのカードを出した場合の方が大きい。

出すべきか、出さざるべきか。迷った末に寿は、ちらりと客席へと視線を向けた。いったいこの膠着状態からどのように戦況が動くのか、固唾を呑んで見つめている人々の顔が見える。予想は裏切り、期待は裏切るな……この言葉を最初に口にしたのは、いったい誰だった

ろうか。彼はプロデュエリスト、エンターテイナーの代名詞。迷いは、消えた。

「この一撃で終わらせましょう。星杯の神子イヴ、星遺物―『星冠』、星神器デミウルギアの3体のモンスターをすべてリリース―!」

「何いつ!?!」

「な、なんと寿選手、3500もの攻撃力を誇るデミウルギアを捨ててまで、さらなるモンスターの展開を選んだ!……って、モンスター3体リリースって、まさか……!」

思わず素の反応が出た清明の驚愕の声を背後に、3体ものモンスターが一斉に消えていく。そして降臨するのは、デミウルギアに負けず劣らずの巨体を持つ更なる神の偉容だった。

「その者、降臨せしむれば、灼熱の疾風大地に吹き荒れ、生きとし生ける者すべて屍とならん。オベリスクの巨神兵よ、今こそ降臨せよ!」

オベリスクの巨神兵 攻4000

「オベリスク……まさかこんなところで見ることになるとはねえ。人生わかんないもんだね、いやまったく」

「……時に、あちらの彼はなぜあそこまで感動しているのかね? オベリスクはそう珍しいカードでもないはずだが」

「アタシも正直、アイツの反応ポイントはよく分かんねえんだよなあ。この間なんて、なんかストレージにぶち込まれてたネオス見て腰抜かしそうになってたし。まあいつものことだから、爺さんもスルーしてやってくれ」

すっかり実況も忘れてしみじみと頷く清明に視線をやりながら、ひそひそ声で寿が問いかける。しかし問われた側の糸巻も、その疑問には答えようもない。彼のいた世界におけるカードの価値はこの世界のそれとは大きく異なり、世界中に1枚しか存在しないカードなんてものもざらにある。その前提条件は、いまだ共有されていない。

「まあいい。カード効果の対象にならないオベリスクならば、バージエストマに入るような罫はほぼ無視できる。攻撃してもダメージはわずか500、しかし今はそれだけあれば十分だ、そうだろう?」

「さて、な」

「バトルだ。オベリスクで炎神に攻撃、ゴツド・ハンド・クラッシュャー！」

おもむろに右腕を振りかぶった神が、大地を砕くほどの勢いでその拳を叩きつける。再び刀に炎を纏わせてそれを真つ向から受け止める炎神……しかしデミウルギアのそれを上回る臂力を前には奮闘虚しく、少しずつその腕が、大地を踏みしめて堪える炎の馬が、じわじわと神の力を前に押し込まれていく。

だが。

「突っ込んできたのがデミウルギアなら、そのまま返り討ちにできたんだがな。でもまあ十分だ、トラップ発動！」

「ダメージステップで？コンバットトリック……それも、ステータス上昇系ですか」

オベリスクで上から押さえつける、その判断自体は決して間違っていたわけではない。リリースされたデミウルギアらの3体で一斉に攻め込むという選択肢とは、どちらも一長一短の関係でしかなかった。ただ寿は、そのどちらも正解だったはずの選択肢での読みを間違えただけだ。それは現役から退いていたゆえのブランクなのか、それとも『考古学者』寿神助のデュエリストとしての限界なのか。いずれにせよ、糸巻はそこを突く。

「バージエストマ・エルドニアの効果で、炎神の攻撃力はこのターンの間だけ500アップする。迎え撃て、不知火流奥義・蓬萊斬！」

オベリスクの巨神兵 攻4000（破壊）↓炎神―不知火 攻3500↓4000（破壊）

爆発的に伸びた炎の刀身はこの日2度にわたり神を討ち、しかしその代償として振り下ろされた拳は最後まで勢いを減じることなくその目的を果たす。神の名を持つ2体の相殺により久しぶりに開けた視界は、なぜだかやたらとだだっ広く見えた。

「……オベリスクまで倒されたとあっては、もはや打つ手はありませんね。ターンエンドです」

「そうか。なら終わりにするぜ、爺さん」

もはや彼女に、カードを引く必要すらなかった。これまでの墓地リ

ソースですでに勝敗は決しており、お互いにそれを見逃すような愚は侵さない。

「墓地から馬頭鬼の効果を発動、このカードを除外してアタシの墓地のユニゾンビを蘇生。ユニゾンビの効果で自身を対象にその効果を発動、デツキから2枚目の馬頭鬼を墓地に送りレベルを1上げる。そしてこの馬頭鬼も同じく効果を発動して、炎神をもう1度現世へと呼び戻すぜ」

ユニゾンビ 攻1300 ☆3↓4

炎神―不知火 攻3500

「久しぶりに戦えて楽しかったぜ、爺さん。それに安心した。アンタは間違いなく、ふざけたこと抜かすテロリストなんかじゃないってのがこのデュエルで伝わってきたからな。バトルだ、ユニゾンビで攻撃」

ユニゾンビ 攻1300↓寿（直接攻撃）

寿 LP4000↓2700

「これでラストだ。不知火流奥義……蓬萊斬」

炎神が騎乗状態のままその妖刀を天高く掲げ集中すると、これまでの静かに、しかし激しく燃え盛る業火とは違う色とりどりの炎がその刀身を中心に燃え広がる。その姿は本人の白装束も相まってそれ自体がまさしく1本の樹……白銀の根、黄金の茎、そして白玉の実を持つとされる伝承の存在、蓬萊の玉の枝のごとし。

そして、その静かに吹き上がる炎が振り下ろされた。

炎神―不知火 攻3500↓寿（直接攻撃）

寿 LP2700↓0

「ええ、私もこうして久々にデュエルができて、楽しかったです」

最後の呟きはごく小さかったが、糸巻の耳には確かにはつきりと届いていた。

ターン24 十六夜の決闘龍会

「第一試合、勝負あり！それでは皆様、最後まで堂々と戦いました2人の選手に精一杯の拍手を！」

司会……清明の声が聞こえる。すぐそばで巻き起こる割れんばかりの拍手の音も、糸巻にはどこか遠くに聞こえていた。感触を確かめるように軽く手を振り、首を振る。今のデュエルによる体への負担は薄い。まったく影響がないわけではないが、この近辺のどこかに奪われた最新式「BV」が存在することを考えると妥当なところだろう。

少なくとも今の一戦は、捜査という観点では外れを引いた形になる……それでもその事実には、どこかほつとしていた彼女がいることも事実だった。少なくとも『考古学者』は、この件とは無関係だったわけだ。

「まだ衰えたつもりはなかったんですが、現役にはさすがに勝てませんね。結果的に、オベリスクを出したことが裏目に出ましたか」

考えに集中している間に近づいてきた寿が、歩んできた年月に揉まれ皺だらけの手を差し出しているのが見えた。一度考えを打ち切つてその手を握り返し、小さく微笑んだ。

「いいや、寿の爺さんは間違つてなかったさ。んで、アタシも間違つてない。それでもどつかで決着がつくのが勝負、だろ？」

「おや、七宝寺さんの受け売りですか？懐かしいものです、彼もよくそんなことを……と、失礼。あまり長居しては、次の対戦の邪魔になりますね」

背を向けて壇上を後にする老人の背中にバレたか、と小さく舌を出す糸巻。実際今のもっともらしく述べたセリフは、彼女が考えたものではない。肩をすくめて彼女もまた戦場を離れたのを見計らつて、清明の声がまた響く。

「それでは続きまして、第二試合！時に天を翔け、時に海を割り、時に地を砕く竜たちの集う場所。かつて十六夜の月満ちる空にデビューを飾つたという妙齡の女性デュエリスト、ささりんどうせんり笹竜胆千利さんです、どうぞーっ！」

「うむ。いよいよわらわの出番かえ」

しやなりと擬音が聞こえてくるような優雅な動きで立ちあがったのは、遠くからでもよく目立つ真つ赤な紅葉柄の着物に身を包んだ和装の美人。糸巻よりもデビュー自体は早い先輩だが、その年齢は不詳。少なくともその艶やかな笑顔は彼女の記憶の中にあるままで、本来刻まれていなければおかしいはずの小皺さえ見当たらない。

「ほほ、待たせたのう皆の衆。ようやっと本命の登場じゃ」

口元に手をやって笑うしなやかで上品な動作のひとつひとつも、あの時からまるで年を重ねたようには見えない。この一見するとイロモノそのものの格好をした時代錯誤のロートル姫さん（糸巻談）はしかし、そんな印象からは想像もつかないほどに大胆かつ繊細にカードを扱う実力者だったというのだから、世の中分らないものである。派手な試合運びから人気も高かった彼女をそのデビュー時の月夜になぞらえて『十六夜の決闘龍会』と呼びはじめたのは、一体どの誰だったか。

そんな彼女が、そのトレードマークである黒地に金のカラーリングが施された和風デュエルディスクを起動する……しかし、なぜか清明は沈黙を保ったままだ。

「これ、そこな司会。わらわをいつまで待たせる気かや」

焦れた笹竜胆の催促に、なぜか小さな笑みを浮かべた清明がようやく口を開く。

「えー、ですがここでお集りの皆様に、ひとつ残念なお知らせがございます。本来この場にてその妙手を振るうはずだったフランス仕込みのクールビューティー、先ほどの糸巻さんと同じくデュエルポリスが一番星。『鍊金武者』の鼓千輪さんですが、本日は急な体調不良により参加を辞退する、との連絡が入っております」

瞬間あちこちで膨れ上がる、あからさまな落胆の声。ざつと客席を眺めまわした糸巻も、明らかに下がった会場のボルテージに仕方ねえな、と嘆息した。フルール・ド・ラバンク社摘発の立役者として、そして理知的な美貌とスタイルから一躍その人気が再燃した鼓の影響力は大きく、今回もその彼女を直接拝めるといのが決め手となって

この場に集まってきた客も多い。

とはいえ、こればかりはどうしようもない……そう糸巻は考えていた。自分がこのデュエルフェスティバルを回しているのと同じように、彼女には現在進行形で地下でやってもらおう仕事がある。この対戦相手は不戦勝で、さくつと次の試合に移る。当然起こるであろう不満は、アタシらのデュエルでカバーすればいい。それは、元プロデュエリストとしての彼女なりの矜持だった。

しかし、そんな裏事情を何も知らない清明「たち」は、もう少し別の悪だくみをしていたのだった。

「おーっと、もちろんそのご不満はごもつともです。しかし皆様、ご安心ください。ここで1名、飛び入り参加のゲストをお呼びしております」

「ん？」

嫌な予感がした。彼女の直感は嫌味なほどよく当たるが、時に嫌味なほどタイミングを外してやってくる。果たして今回がその時だった。

「荒れ果て乾いたデュエル産業、その不毛の地に気高く咲いた一輪の花。伝説の血を引く期待の新星、新世代の切り札。八卦九々乃さん、どうぞーっ！」

「は、はいー！」

ガチガチになった、しかし聞きなれた少女の声に、比喻でなくその場でずっこけそうになる糸巻。今まさに火をつけようとしていた煙草が1本、口の端からポロリと落ちた。同時に客席の方からも「八卦ちゃん!」と驚愕混じりの悲鳴が聞こえてきたが、もうそちらに注意する余裕もない。

「ふ、ふつつか者ですが、本日はよろしくお願ひします!」

緊張のあまり右手と右足を一緒に振りながらぎくしゃくした動きで壇上に現れた少女が、当然注がれる好奇と困惑の視線にますます固くなりながらも大きく一礼する。突然現れた見ず知らずの少女を目を丸くして見つめていた笹竜胆だったが、やがてくすくすと笑いだした。

「ほほ、そう固くならずともよい」

「は、はい！ありがとうございます！」

「やめいと言うに。それにしてもお主、なかなかよい目をしておるな。力強く、どこか懐かしい……これ、司会。先ほど、伝説の血がどうこう言っておったのう」

「はいはい。なんとこちらの八卦九々乃さん、デュエル産業の創始者にして界限の生ける伝説。あの『グラントファアザー』七宝寺守^{しっぽうじまもる}氏、その血筋と魂を誰よりも色濃く受け継いだ実の姪となっております。今回は本人たつての希望もあり、急遽出場を決定いたしました」

偉そうなことを言っただけはいるが、全て古雑誌からの受け売りである。この世界の人間ではない異邦人の彼にとってのデュエルモンスターズの生ける伝説といえば創始者のペガサス・J・クロフォードやデュエルキング武藤遊戯を指す言葉であり、正直七宝寺守に関する伝説はまだピンときていない。

しかしその名前の持つ影響力は、全盛期を遠く過ぎた今もなお大きかったのだ。

「ほう」

「なんと……！」

居並ぶ元プロたちが小さく驚きの声を漏らし、客席でも主に年配の客を中心に小さなどよめきが巻き起こる。もはや、まだ中学生でしかない少女の参加を止めようという者は誰もいなかった。一変した周りの空気になぜだか無性に親友が遠くに行ってしまったような気がして、竹丸が壇上の少女をそつと見上げた。

しかしあいにく、少女はその視線に気づかなかった。気づくだけの余裕がなかった、といった方が正しいか。七宝寺の姪……それを聞いた笹竜胆は先ほどまでの柔らかな物腰から一転して目の前の相手を見定める戦士の目になっており、その視線を前に蛇に睨まれた蛙のよくな状態に陥っていたためである。

そんな本人にとっては何時間にも感じられた数秒間の後、ややあってふつと相好を崩す笹竜胆。和服の袖で口元を隠して小さく笑うその姿は、すっかり元の柔らかな雰囲気に戻っていた。

「ふうむ、あの御仁の姪、とな。確かに、胆力は申し分ないと見える。怖がらせてしまつてすまなかつたのう、よくぞわらわから視線を外さなかつた」

「え？えつと、ありがとうございます……？」

少女なりの素直な返事がよほど面白かつたのか、またしてもくすくすと漏らした笑みで感謝の言葉を受け止める。

「よい、よい……それよりもお主、植物の気けを感じるの。わらわと同じ、よき気質じゃ」

「え……う」

ただ向かい合っただけで初対面の女性に自分のデツキを言い当てられた驚きと、元とはいえどプロデュエリストたる彼女が自分に賛辞を贈つたことを理解しての純粋な喜び。2つの感情が混ぜこぜになり言葉に詰まり目を白黒させる少女をよそに、起動されてからずつと出番を待ちわびていた笹竜胆のデュエルディスクが唸りを上げる。

「ほほ、わかつておる。ではお主、そろそろ始めるとしようかの。これ司会、デュエル開始の宣言をするがよい」

「オーケーです。八卦ちゃん、いいよね？」

「え？あ、はい……いつでもいけますー！」

間髪入れずに飛ぶ、元氣いっぱいの返事。それを見て笹竜胆は、密かに感心していた。先ほどまでのこの少女の緊張つぷりは、間違いなく嘘ではない。しかしデュエルが始まると聞いた瞬間から、急にその気負つた雰囲気が解けた。今の少女の心はすでに、これから始まることへの期待でいっぱいになつている。この切り替えの早さは、並大抵の神経ではない。デュエルモンスターズに対する愛情の深さも含め、いかにもプロ向けのメンタルだ。もし生まれがあと少し早ければ、期待の新星としてこの年頃からでもその名を全国に轟かせていたことだろう。

惜しいのう、喉まで出かかつたその言葉は、寸前でそつと飲み込んだ。なぜか頭を抱えている糸巻の様子から見て、この娘とあの妖怪生意気乳女（笹竜胆談）には何らかの面識があるのだろう。ならば、わらわがとやかく口を出す話ではない。

それより今は、このデュエルだ。カードの前では彼女の持つ元プロの名も、少女の持つ七宝寺の姪という肩書も意味をなさない。1人のデュエリストとしてその力、存分に見せてもらおうとしよう。すつと目を細め、カードを引いた。

「デュエル！」

「どれ、わらわが先攻かの。まずは小手調べじゃ、暗黒界の取引を発動。互いにカードを1枚引き、その後手札1枚を捨てる。さて、どうするか？」

「暗黒界の取引、手札交換のカード……わかりました、ドロウします。そして捨てたカード、エレメンタルヒーローE・HERO シャドー・ミストの効果が発動。デッキから仲間のモンスター、エアーマンを手札に加えます」

「ほう、お主はHEROを使うのかえ。やはり血は争え……いや、つまらぬ話じゃつたな。お主はお主じゃ、あの御仁とは関係ない。そうであらう？ わらわはこのトラップカード、仁王立ちを捨てる。そしてローズ・バードを攻撃表示で召喚！」

頭頂部と両翼の先端に赤いバラを生やす、植物の葉のような翼と体を持つ緑色の鳥型モンスター。一見するとなんてことのない下級アタッカーだが、植物族たるクノスペを軸に気を組む彼女は当然、その効果を知っている。

ローズ・バード 攻1800

「まずは手始め、これでターンエンドといこうかの」

「先攻プレイヤーの笹竜胆さん、まずは様子見ということでしょうか？ それは先輩デュエリストとしての余裕の表れなのでしょうが、それとも何かほかに意図があつてのことでしょうか？ さあ、続きましては八卦ちゃんの……あ、ちよつと、糸巻さん？ 何、痛い、痛いつてばっ！」

ようやくシヨックから立ち直った糸巻が事の重大さに気づき、せめてあの2人にはできるだけ楽しんでもらうためこの裏にある陰謀のことは黙っておこう、という完全に裏目に出た数分前までの自分の氣遣いに呪いの言葉を口の中で吐きながら首根っこを掴み説明のため引きずっていった。何も知らない少女はそれを横目に自分たちの「いたずら」が思いのほかお姉様の逆鱗に触れてしまったと判断し、次は

我が身かと青くなる。

しかし、そこで止まるほど少女は大人しい性格ではない。とにもかくにも勝ち進むしかない……腹を決めたのは、よりにもよって糸巻の望みとは真逆の方向だった。それで罪が軽くなることはないけれど、多少は怒りが和らぐかもしれない。

少女の感性は幼く、純真だったのだ。もはや事態は、そんなレベルをはるかに越えていたのだが。

「私のターンです！エアーマンを召喚して、その効果を発動します。デッキから自身以外のHEROを手札に……そして私が選ぶのは、私の一番のエースカード。E・HERO クノスペです！」

E・HERO エアーマン 攻1800

「ほう、お主のエースカード、とな。わらわの感じた植物の気質の正体はそのカード、というわけじゃの。じゃが、エアーマンの攻撃力ではローズ・バードに相打ちを取るのがやっとじゃのう」

「確かにその通りです。ですが、これだけじゃ終わりませんよ。魔法発動、死者蘇生！このカードの効果により私の墓地からシャドー・ミストを攻撃表示で特殊召喚、そしてシャドー・ミストの効果！このカードが特殊召喚されたことで、デッキからチェンジ速攻魔法を手札に加えます。私が選ぶカードは、マスク・チェンジです」

E・HERO シャドー・ミスト 攻1000

2体のモンスターと、手札に加えられるマスク・チェンジ。ふうむと小さく唸った笹竜胆が、ここで動いた。

「なるほどのう。使わずに済むのなら温存したかったが、そうも言っていられんようじゃの。墓地よりトラップ発動、仁王立ち。わらのローズ・バードを対象に取ってこのカードを除外することで、このターンの間お主のモンスターはこのローズ・バード以外を一切に攻撃対象にすることができなくなる。すまぬが、一斉攻撃は通さぬぞえ」

大きく翼を広げ、戦士たちと相対する植物の鳥。睨みあう両者の中で一番先に動いたのは、他でもないエアーマンだった。空を裂き飛んできた仮面をその手で掴み、自らの顔に押し当てるとそこから光が溢

れ出す。直視できないほどのまばゆさの中でエアーマンの特徴的な扇風機を思わせる翼パーツは風にたなびく純白のマントへと置換され、その全身が新たな戦闘スーツに覆われていく。

「速攻魔法、マスク・チェンジ！私の場のHEROを墓地に送ること
で、よりレベルの高い同じ属性のM・HEROマスクドヒーローをエクストラデッキから特殊召喚します。英雄の蕾、今ここに開花する。薫風の大輪よ咲き誇れ！変身召喚レベル8、カミカゼ！」

「なるほどのう。闇のマスクドではなく、ドローを取りに来たという訳か。それとも、シャドー・ミストの効果を温存するのが狙いかの？」

M・HERO カミカゼ 攻2700

箆竜胆の言葉通り、シャドー・ミストの効果は1ターンにどちらか片方しか使えない。チェンジのサーチ効果を使った今のターンにそのまま闇のM・HEROに繋げて更なるサーチは不可能、というわけだ。一方このカミカゼならば、モンスターを戦闘破壊し墓地に送った場合に1枚ドローする効果がある。そちらでの手札増強が狙いだろう、と踏んでの発言である。

「やつぱりわかっちゃいますか……ですが負けません、バトルです！カミカゼでローズ・バードに攻撃！」

M・HERO カミカゼ 攻2700↓ローズ・バード 攻180

0 (破壊)

箆竜胆 LP4000↓3100

「やった！カミカゼが相手モンスターを戦闘破壊し墓地に送ったことで、カードを1枚ドローしますよ」

「じゃが、わらわもここでローズ・バードの効果を発動させてもらうぞよ。攻撃表示のこのカードが相手の攻撃によって破壊され墓地に送られた時、わらわのデッキから植物族のチューナー2体を特殊召喚できる。ナチュル・ローズウィップ、そしてコピー・プラントを選択じゃ」

ナチュル・ローズウィップ 守1700

コピー・プラント 守0

1ドローと900ダメージに対し素材とすることに何の制限もな

い2体のリクルートと、相対的に見ればやや少女の側が損な取引か。しかも仁王立ちの効果は対象としたモンスターが場から退場しても生きているため、シャドー・ミストでコピー・プラントへの追撃を仕掛けることもできない。

今の攻撃はやや安易だっただろうか？しかし伏せカードもないあの状況は、少女にとって戦闘ダメージを与えドロー効果まで通す貴重なチャンスであったことは間違いない。

「私はこれで、ターンエンドです」

「わらわのターン。ほほ、どうやらわらわの切り札も久々の出番を心待ちにしておるらしい。待っておれ、今呼んで見せようぞ。ナチュル・ローズウィップをリリースし、ギガプラントをアドバンス召喚じゃ。そしてコピー・プラントの効果を発動、自身のレベルを場の植物族1体、ギガプラントと等しくする」

ギガプラント 攻2400

コピー・プラント ☆1↓☆6

「レベル12のシンクロモンスター……？それともランク6、ですか……？」

「惜しいのう。わらわのデュエルは、そんな常識では計り知れぬ。レベル6となったチューナーモンスター、コピー・プラント及びそれと等しいレベルを持つギガプラントを墓地へ。十六夜の月の香に導かれ、今こそ覚醒するがよい。古の龍神のもとへ集え、決闘龍たちよ！アルティマヤ・ツイオルキン！」

☆6—☆6—☆0

アルティマヤ・ツイオルキン 守0

巨大で赤い、肉体を持たないエネルギーが塊を成した龍。その体表には古代文字を思わせる複雑な文様が浮かび上がり、大きく広げられた皮膜のない骨組みだけの翼が先だって降臨したデミウルギアのように地表へと影を落とす。

「レベル0の、シンクロモンスター……？」

「さよう。といっても、便宜上のレベルは12じゃがの。まあそんなことはよい、些細な問題じゃな。とはいえ、これだけではこの龍神も

まともに力を発揮できぬからのう。永続魔法、星遺物の守護竜を発動じゃ。このカードは発動時にわらわの墓地からレベル4以下のドラゴン族を蘇生ないしサルベージできるのじゃが、知っての通りわらわの墓地にそんなカードはありはせぬ」

「なら、どうして……」

「焦るでないわ。わらわが用があるのは、この効果の後半じゃ。星遺物の守護竜は更なる効果により、1ターンに1度だけわらわのドラゴン族モンスター1体の位置を任意のメインモンスターゾーンへと移動できる。アルティマヤ・ツイオルキンを真ん中へと移動、これでエクストラモンスターゾーンが空いたの。カードを1枚セットじゃ」

何気ない動きでカードを伏せた、その瞬間。頭上の赤き龍がまるで何かを誘うかのように、何かを呼び出すかのように一声吼える。果たして、その声に応えるものが現れた。

「アルティマヤ・ツイオルキンは1ターンに1度、わらわが魔法または罫をセットした際にエクストラデッキからレベル7、及び8のドラゴン族またはパワー・ツールの名を持つシンクロモンスター1体を特殊召喚できる。さて、どれにしようかの……」

アルティマヤ・ツイオルキン自身を除く、笹竜胆のエクストラデッキは残り14枚。それを片手で扇か何かのように等間隔で広げ、その中から1枚を取り出して先ほどまで赤き龍の仰臥していた右側のエクストラモンスターゾーンへと置く。

「これにしようかの。運命の振り子揺れる時、描かれし光の軌跡は調律の翼を覇道の先へと導き振れる。レベル8、霸王白竜オッドアイズ・ウイング・ドラゴン！」

霸王白竜オッドアイズ・ウイング・ドラゴン 攻3000

真つ先にアルティマヤ・ツイオルキンの叫びに応じて現れたその姿は、しみひとつない純白の翼に雄々しく輝く二色の眼を持つ霸王の龍。その相貌が眼下のカミカゼを捉えると、よりその眼が激しく強く光を放つ。

「オッドアイズ・ウイング・ドラゴンの効果を発動。1ターンに1度、モンスター1体の効果をターン終了時まで無効とする。カミカゼに

は戦闘破壊耐性もあつたからの」

「カミカゼ……」

「どれ待たせたの、バトルフェイズじゃな。オッドアイズ・ウィングでカミカゼに攻撃、凄風のデファイートストライク！」

風の渦を纏つての突撃が、力を失つた風のヒーローへと高高度から襲い掛かる。その体が大きく吹き飛ばされるまでに、そう時間はかからなかった。

霸王白竜オッドアイズ・ウィング・ドラゴン 攻3000↓M・H
ERO カミカゼ 攻2700（破壊）

八卦 LP4000↓3700

「ぎゃあっー」

暴風の余波が少女を襲い、小さな悲鳴と共に顔を押しさえる。その声を聴いた瞬間に糸巻が反射的に壇上の笹竜胆へと掴みかからんばかりの勢いで立ち上がりかけたが、どうやら悲鳴の原因は巻き上げられた砂ぼこりが目に入ったことだったらしい。風を浴びてその髪や服装が多少乱れてはいるものの、先ほど糸巻自身が寿戦で受けた打ち消しきれなかった分の実体化ダメージと同レベルの被害でしかない。

つまり、あの女もまた外れだったわけだ。とりあえずその事実と、少女の身に今この場で危機が迫っているわけではないということにほつとすると同時に、いよいよ詰めが近いことを察していた。本来参加予定だったロベルト、及び青木の両者が先日の襲撃によってリタイヤしたため、既に残る参加者はたったの2人。しかもそのうち片方は、巴から送ってきた人員である夕顔なのだ。

「ならさ糸巻さん、あれ今すぐとっ捕まえればいいんじゃないの？」

裏手で隠されていた事情をすべて聞き、真面目な顔になった清明がひそひそ声で最後の1人に視線をやって問いかける。実際、糸巻もそれは考えた……だが、駄目だと首を横に振る。

「それができりやアタシも楽なんだがな。もとよりこの参加者名簿は、あちらさんが勝手に用意したもんだ。つまり最初から参加者全員がフェイクの可能性もあつて、アタシらがここで無駄な警戒してる間に悠々と爆破テロの準備を進めてる可能性もあるんだよ」

「……え、それってそもそも、僕ら2人ともここにいて大丈夫なの？」
「だから今も、鼓の奴が頑張ってるんだよ。何か重要な情報を洗い出せないか、清掃ロボのデータとにらめっこしなごらな」

それに鳥居の奴も、と言いかけて、こちらは黙っておいた。いまだに連絡の取れない彼女の部下は、今もどこで油売っているのか皆目情報が入ってこない。鼓の言によればこの町から出た形跡はないらしいので、いまだに家紋町のどこかにいることは確かなのだが。

首を振ってこの答えの出ない話題を頭から追いやり、再び盤上へと目を戻す。とりあえず行われているのは普通のデュエルだ、なら放置しておいても害はないだろう。

一方、その盤上では。ターンを終えた笹竜胆に代わり、少女がカードを引いていた。

「私のターン、ドローです！」

手札と墓地、そして場の状況から、次の行動をどうするか。腹が決まるまでには、そう時間はかからなかった。

「速攻魔法、マスク・チェンジ・セカンドを発動！手札1枚を捨てることで私のモンスターを墓地に送り、属性の等しいM・HEROを特殊召喚します。闇属性のシャドー・ミストを墓地に送り……」

影の名を持つ黒きヒーローが、その姿と同じ漆黒の仮面を装着する。黒い光があたりを包み込むと、その中にかすかに見えるシャドー・ミストの等身が伸び、両腕の爪がより戦闘に特化した姿へと巨大化していくシルエットが見えた。

そしてその爪で闇を切り裂いて、闇のヒーローが2体の龍に立ち向かう格好で現れる。

「英雄の蕾、今ここに開花する。暗黒の大輪よ咲き誇れ！変身召喚、レベル8！行きますよ、闇鬼あんきっ！」

M・HERO 闇鬼 攻2800

「闇鬼、ダメージこそ半分になるもののダイレクトアタッカーじゃったか。じゃが、わらわのライフはそれだけでは……」

「もちろん、それも対策済みです。この瞬間、墓地に送られたシャドー・ミストの効果を発動！デッキより新たな仲間、E・HERO

オネスティ・ネオスを手札に加えます」

「ふむ……」

笹竜胆の目が険しくなる。オネスティ・ネオスは手札から捨てることでヒーローの攻撃力を1ターンのみ2500引き上げる効果を持ち、その戦闘ダメージは下級モンスターの1撃であつても致命傷にまで膨れ上がる。具体的には、闇鬼のデメリットで攻撃力が半減してもなお彼女のライフを大きく奪い去れるほどに。

しかし、これだけではまだ不足。

「永續魔法、増草剤を発動します。1ターンに1度墓地の植物族を蘇生できますが、この効果を使うターンに私は通常召喚できません。いきますよ、これが私の切り札です。甦ってください、クノスペー！」

マスク・チェンジ・セカンドのコストとして墓地に送られた少女を代表する蕾のモンスターが、地中から目を覚ます。そして単体では弱小モンスターに過ぎないクノスペには、それを補って余りある仲間の力がある。

E・HERO クノスペ 攻600

「速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動！私の場に攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚された時、その同名カードを手札、デッキ、墓地から可能な限り特殊召喚します。このとき相手プレイヤーも自身の場の同名モンスターを一斉召喚することができますが……」

「わらわのモンスターは2体ともシンクロ。当然手札にもデッキにも存在しない、というわけかの」

「その通りです。これが私の必殺コンボ、クノスペシャルです！」

E・HERO クノスペ 攻600

E・HERO クノスペ 攻600

その言葉に答えるかのように、さらに2体のクノスペが小さな体を精一杯に広げて恐るべき龍たちの前に立ちはだかる。これまでに何度も彼女がそう使ってきたように、クノスペは他のE・HEROが存在する限り攻撃対象にならない能力と直接攻撃可能な能力を持つ。つまり、彼女の場には4体ものダイレクトアタッカーが並んだことになるわけだ。

これが彼女の選んだ作戦。決闘龍はあえて放置し、その先にいるプレイヤーのライフを先に削りきってしまったおうという寸法だ。どれだけカードが残っていようと、ライフの尽きたデュエリストにそれを操る権利はない。

「まずはクノスペで攻撃！」

これからの4回連続攻撃が全て決まれば、もはやオネステイ・ネオスを使うまでもなく勝負は決する。本当に、このまま勝負がつくのだろうか。こんな簡単に、あっさりと。追いついてるのは少女の側のはずなのに、なぜかぐんぐん好転する戦況とは対照的に焦りばかりが色濃くなっていく。そんな迷いを振り払おうとして、高まるプレッシャーから解放されたくて、少女は一気にケリをつけるべく軽率な勝負を仕掛ける。ここ数カ月で急速に経験値を積んできたとはいえ、まだまだその精神は若かった。

「そしてこの、手札からオネステイ・ネオスの効果を発動しますっ！このカードを捨てることで、クノスペの攻撃力を2500……」

「お主、ちと欲張りすぎたのう。実際なかなか危なかったがの」
確かにその声が届き、背筋が冷たくなる。やはり、罠は張られていた。誘われていたという直感を、本能の鳴らした警鐘を、肝心の自分が信じ切れなかったのだ。

「チェーンしてわらわもトラップ発動、墓地墓地の恨み。ずっと待つておったのじゃよ。お主もまだまだ若いのう」

「墓地墓地の、恨み……」

相手の墓地にカードが8枚以上あるときにのみ発動できる、フリーチェーンで相手フィールド全てのモンスターの攻撃力を0に上書きするカード。

「私の、墓地には」

震え声で、デュエルディスクに目を落とす。墓地のカードが一覧となり、その映像が浮かび上がった。対照的に冷静な笹竜胆の声、その名前を順に読み上げていく。

「死者蘇生、エアーマン、マスク・チェンジ、カミカゼ、シャドー・ミスト、マスク・チェンジ・セカンド、地獄の暴走召喚、ここまでで7

枚。そして今お主が自身の効果を使うためのコストとして捨てよつたオネスティ・ネオス、これが8枚目のカードじゃな」

M・HERO 闇鬼 攻2800↓0

E・HERO クノスペ 攻600↓0↓2500

E・HERO クノスペ 攻600↓0

E・HERO クノスペ 攻600↓0

チェーン処理の関係上、攻撃を仕掛けたクノスペのみはその攻撃力2500として攻撃が続行される。しかしそれだけでは、笹竜胆のライフは削りきれない。追撃を仕掛けるはずだったモンスターたちも、攻撃力が0となってしまつては何の役にも立ちはしない。

E・HERO クノスペ 攻2500↓笹竜胆（直接攻撃）

笹竜胆 LP3100↓600

E・HERO クノスペ 攻2500↓2600 守1000↓900

相手に戦闘ダメージを与えたクノスペの効果によりその攻撃力は100上昇し、代償として守備力が100減少する。だが、それだけだ。それを生かすことのできるカードは、少女の手元にはない。

「カードを伏せてターンエンド、です」

まだまだ、そう自らを鼓舞する。ここで心を折つてはいけない、なぜならまだ戦えるのだから。必殺コンボが破られたからといって、立ち上がれない道理はない。唯一攻撃力を保っていたクノスペからオネスティ・ネオスの加護が失われていくが、少女はしっかりと前を向いていた。

E・HERO クノスペ 攻2600↓100

「わらわのターン。このターンもまず星遺物の守護竜により、オッドアイズ・ウィングの位置を移動させるぞよ」

ひらりと空中宙返りし、二色の眼を持つ純白の龍が赤き古の龍神の隣へと移動する。これでまた、彼女はアルティマヤ・ツイオルキンの効果を使用できる。

「そして、カードをセットじゃ。アルティマヤ・ツイオルキン！」

再び虚空に向けて吼える赤き龍。その声に導かれ、次元の壁を突破

して新たな龍がその姿を見せようとしていた。13枚のエクストラデッキをまたしても広げた笹竜胆が、その中から1枚のカードを選び出す。

「正義求める鋼の勇気の輝きに、幾千の武装が盾となり矛となり呼応する。パワー・ツール・ドラゴン！」

パワー・ツール・ドラゴン 攻2300

2体目に呼び出されたのは、シャベルに置換された右腕にドライバーのくくりつけられた左腕、スコップ状に先端の広がった尾。全身を鋼鉄の装甲に包んだ、決闘龍の中でも異端の機械の龍。

「パワー・ツール・ドラゴンの効果発動、パワー・サーチ。デッキから装備魔法3枚を選び、その中からランダムに1枚を手札に加えるぞよ。わらわの選ぶカードは団結の力が1枚、スーペルヴィス2枚。さあ、どれがよいかの？」

「……真ん中。真ん中で、お願いします」

「ふむ、よかろう」

1枚のカードが手札に加わるが、それつきりで発動される様子はない。もし団結の力であればここで使わない理由がなく、どうにかスーペルヴィスを選べたのだと安堵する。

「さて、先ほどのお主の戦術じゃが」

そう呟きながら、サーチしたそれとは別のカードに細くて白い指が伸びる。通常召喚されたのは、先のターンではその効果によってアルティマヤ・ツイオルキンを呼び出したモンスター。

コピー・プラント 攻0

「無論悪い手ではなかったがの、こうしてわらわのライフを残したのの結果的には悪手じゃったな。レベル7のパワー・ツール・ドラゴンに、レベル1のコピー・プラントをチューニングじゃ」

「普通のシンクロ召喚を……？」

困惑する彼女をよそに、コピー・プラントが光の輪となって機械の龍をぐるりと包む。その全身に細かいひびが入ったかと思うと、その身を覆う鋼鉄の装甲が一斉に弾け飛んだ。

「未来求める龍の魂の輝きに、世界の生命がひとつとなりて呼応する。」

シンクロ召喚、レベル8。ライフ・ストリーム・ドラゴン！」

☆7+☆1=☆8

ライフ・ストリーム・ドラゴン 攻2900

「ライフを直接削るお主のような相手に対しても、わらわには対応の準備ができておる、ということじゃ。ライフ・ストリームがシンクロ召喚に成功した時、わらわのライフを4000へと変動させることができる。これは回復ではないゆえに、そのたぐいのメタカードも機能せぬぞ」

笹竜胆 LP600↓4000

「そんな……！」

盤面を崩すことを放置してまで削ったライフが、初期値にまで蘇る。強大な龍たちの戦線を前に、墓地墓地の恨みによって半壊状態に持ち込まれた少女の布陣はあまりにも無力だった。

「オッドアイズ・ウィングの効果を発動。その攻撃力が1000あるクノスペの効果が無効とすることで、攻撃されない効果と攻撃力上昇効果の両方が使えなくなるのう」

二色の眼がこのターンも煌めき、その眼光に見据えられたクノスペの蕾からみるみる色が引いていく。

E・HERO クノスペ 攻100↓0 守900↓1000

「身を守る効果を持たぬ闇鬼、そして効果を無効としたクノスペ。どれ、このバトルフェイズで幕引きとなるかえ？まずはオッドアイズ・ウィングで闇鬼に攻撃じゃ、凄風のデイフィートストライク！」

再び渦を巻く風をその身に宿し、純白の龍が迫る。しかし力なく立ちすくんでそのまま突き刺されるかに思われた闇鬼の体が、その寸前で動いた。左半身を犠牲にしてもその一撃を受け止め、空いた右腕の爪が迂闊な接近戦を選んだ霸王たる龍の顔面へとカウンター気味に叩きこまれる。

「速攻魔法、決闘融合―バトル・フュージョンです。私の融合モンスターが戦闘する攻撃宣言時、その攻撃力を戦闘相手の攻撃力分だけアップさせます！」

「なるほど。ならば必然として相打ち、かのう」

霸王白竜オツドアイズ・ウイング・ドラゴン 攻3000 (破壊) ↓
M・HERO 闇鬼 攻0↓3000 (破壊)

「じゃが、霸王たる龍は決してただでやられはせぬぞ。オツドアイズ・ウイングはその更なる効果により、破壊されたとしてもわらわのペンデラムゾーンへと移動する」

弾き飛ばされたオツドアイズ・ウイングが、突如として笹竜胆の右に立ち昇った青い光の柱に受け止められる。その中に入り込んだ純白の巨体の下には、光で描かれた10の文字が。

「抵抗も今度こそ品切れかの。ライフ・ストリームでクノスぺに攻撃じゃ、ライフ・イズ・ビューティーホール」

鋼鉄の外殻を纏っていた時の名残か、ドライバーのような武器を装着した左腕が唸りを上げてその切っ先を叩きつける。その言葉通り今度こそ少女に打てる手はなく、蕾の英雄はあえなく串刺しとなった。

ライフ・ストリーム・ドラゴン 攻2900↓E・HERO クノスぺ 攻0 (破壊)

八卦 LP3700↓800

「ぎゃああっ！うう……」

つい先ほどまで風前の灯火だったはずの笹竜胆のライフは4000にまで膨れ上がり、ほぼ初期値のままこのデュエルを進めていたはずの少女のライフが逆に底をつきかける。ひっくり返った戦況、差が開く一方の戦力。改めて、プロの壁の高さを思い知らされた。

「……それでも、私は！」

いつか必ずお姉様に追い付いてみせる、肩を並べて戦ってみせる。それは、少女がその胸の内に秘めた強い思いだった。

先日の学校への侵入者戦は、少女にとっては苦い思い出だ。竹丸を、友達を助けてみせると意気込んで、その結果は頭に血が上ったの短絡的な空回り。もしもあの時清明が来るのが間に合わなければと思うと、今になってもぞつとする。もしもお姉様だったら、援軍を待たずともなく自分1人で決着をつけていたはずだ。

自分はまだまだその域には遠く及ばないけれど、それでも必ず追い

ついでみせる。そのためにも、かつてのお姉様のライバル相手に負けるわけにはいかない。

「先ほど伏せた魔法カード、天啓の薔薇ローズ・ベルの鐘を発動じゃ。デツキより、攻撃力2400以上の植物族モンスターを手札に加える。わらわが選ぶのは、2枚目のギガプラント……これでターン終了じゃ」

そんな細かい思考までは、いくら元プロデュエリストとして相手のわずかな感情の機微を読み取る術に長けた笹竜胆でもわからない。しかし、その目に秘められた強い想いと覚悟は容易に読み取れた。ならば、打てる手はすべて打っておくだけのことだ。

たった今発動した天啓の薔薇の鐘にはもうひとつ、墓地の自身を除外することで手札から攻撃力2400以上の植物族を特殊召喚する効果がある。この効果でギガプラントを特殊召喚すれば召喚権を残した状態で上級モンスターを場に出せ、さらに手札にはデュアルモンスターたるギガプラントの力を最大限に開放するための装備魔法、スーパルヴィスもある。植物族特有の生命力を、余すところなく発揮するための手札。これは、事実上の死刑宣告に等しかった。少女に残された猶予は、わずか1ターン。

「私の……ターン！」

この1ターンで、眼前の敵のライフ4000をすべて削らねばならない。最後の隠し玉だった決闘融合すらも使い切った今、もう1ターンあの猛攻を耐えきることは不可能。残された全リソースを、このターンにできる最後の攻撃につき込むしかない。そしていつでもどんな時も、少女には信じるカードがある。

「魔法カード、置換融合を発動！場のクノスペ2体を素材とし、融合召喚です！」

力を失ったクノスペたちがそれでも飛びあがり、墓地墓地の恨みを振り払うべく新たな姿へと一体化する。そして産み出されたのは闇鬼と同じく墨でもぶちまけたかのような漆黒の色を持つ、HERO2体を素材とする異端の英雄。その後ろでは蘇生対象としたクノスペが場を離れたことで、増草剤のカードがひっそりと自壊した。

「英雄の蕾、今ここに開花する。幻影の大輪よ咲き誇れ！融合召喚、

ヴァイジョンヒーロー
V・HERO アドレイション!

V・HERO アドレイション 攻2800

「じゃが、アドレイションだけでは……」

「私の狙いは、アドレイションの融合召喚じゃありません。私がやりたかったことは、クノスペを墓地に送ること。これで、あなたの発動した墓地墓地の恨みからクノスペたちは逃れることができました。そして、置換融合の更なる効果を発動です。このカードを墓地から除外して墓地の融合モンスター、カミカゼをエクストラデッキに戻し、さらにカードを1枚ドロします……ドロ!」

フィールドを切り替えつつ、即座に手札補充。無駄のない動きによって導かれたカードを見て、少女はわずかに微笑んだ。

「来てください、E・HERO リキッドマン!そしてこのカードの召喚時、私の墓地からレベル4以下のHEROを蘇生できます」

「ふむ、またシャドー・ミストからのマスク・チェンジか?」

「いいえ、違いますよ」

につこり笑い否定する。そちらの方が安定の一手ではあるだろうな、ということも少女にも理解できる。だけど、そんなことがしたくてこのカードをデッキに入れたのではないのだ。このデッキは、全てがこのカードを軸に回転する。そうなるように、少女がカードを選んだからだ。

「もう1度蘇ってください、私の信じる最強のヒーロー。クノスペを蘇生して、地獄の暴走召喚を発動!」

相手の顔を見なくとも、目を丸くするのが分かった。それでも少女は、自分の大好きなクノスペと共に戦い抜くと決めているのだ。

E・HERO リキッドマン 攻1400

E・HERO クノスペ 攻600

E・HERO クノスペ 攻600

E・HERO クノスペ 攻600

「先ほどと同じじゃな。わらわの場に、地獄の暴走召喚に対応したモンスターはおらぬ。じゃがのう、いくらモンスターを並べたところで、実質的に攻撃が可能なのはダイレクトアタッカーのクノスペのみ

じゃ」

そう、その指摘は正しい。先のターンにこそ使う機会がなかったものの、オッドアイズ・ウィング・ドラゴンにはペンデュラム効果がある。その効果を使えば1ターンに1度とはいえ、戦闘を行う彼女のモンスターに相手モンスターの攻撃力をそのまま上乘せすることが可能となるのだ。ターン1であるという点についてのごり押しも不可能ではないが、少女の残り僅かなライフではその迎撃ダメージを受けきることはできない。実質、モンスターとの戦闘は封じられているも同然だった。

「確かに、そうですね。ですがクノスペ以外の攻撃が封じられたというのであれば、クノスペで攻撃をすればいいんです！ 永続魔法、憑依覚醒！ この効果により私のモンスターたちの攻撃力は、その属性1つにつき300アップします。今の私のフィールドには闇のアドレイション、水のリキッドマン、そして地のクノスペで3種類、つまり……」

V・HERO アドレイション 攻2800↓3700

E・HERO リキッドマン 攻1400↓2300

E・HERO クノスペ 攻600↓1500

E・HERO クノスペ 攻600↓1500

E・HERO クノスペ 攻600↓1500

「なんと」

小さな眩きが、妙に大きく舞台に響く。少女の執念とでも呼ぶべき愛情が、勝利をもぎ取った瞬間だった。

「バトルです。クノスペ3体で一齐攻撃、突撃クノスペシャル！」

E・HERO クノスペ 攻1500↓
箆竜胆（直接攻撃）×3

箆竜胆 LP4000↓2500↓1000↓0

「ほほ、見事じゃったのう。わらわの完敗じゃ」

「箆竜胆さん……」

3連撃を受けて乱れた着物の裾を払いつつ、目を細めて笑う箆竜

胆。余裕に満ちた態度とは対照的に疲労困憊、いっばいいっぱいな八卦の様子は、もはやどちらが勝者だかわからないほどだった。

「これ、勝者がそのような顔を見せるでない。ほれ、見てみい」

今にもその場にへたり込みそうな少女にチツチツチツといたずらっぽく指を振り、客席へと鷹揚に手を振ってそちらを見るように促してみせる。釣られてそちらに目を向けると、自分たちを……否、自分を見上げて拍手する観客の姿がその目に映った。やや遅れて、拍手の音が聞こえ始める。それまでは、緊張の糸が切れたせいか耳には届いても脳がそれを認識できなかったのだ。

そんな人生はじめての光景をじっくりと見せてから、そつと隣に立つ。まだぼかんとしている少女の隣で上品な仕草で一礼すると、より一層拍手が大きくなる。

「仕方がないのう、先輩（ここで「お局」と呟いた糸巻の声が届いたので睨みつけた）からのためになる助言というものをしてしてやろうかの。よいか、お主もこの業界に踏み出そうというのであれば、最低限自分が勝った時には胸を張るがよい。それこそ、そこな妖怪生意気乳女のような」

意味ありげに送った流し目に、にやりとふてぶてしい笑みで答える糸巻。お互い口は減らぬのう、と笑い返し、キラキラした目で次の言葉を待つ少女の方へと向き直る。あの女を反面教師とし、この娘には素直な心を忘れないでいて欲しいものなんじゃがの。

「わらわたちの世界は勝負の世界である以上、試合のたびに勝敗が分かれる。ここまではよいな？ たまに引き分けがないわけでもないがの。ともかくその両者に対し鼻負がおり、鼻負が勝てばまるで自分のことのように喜び、敗れば悔し涙する。ありがたいことじゃ。そんな時、鼻負を倒したはずの者が呆けた様子を見せてどうする？ それこそ見ている側の方が反応に困るじやろう。わらわたちはいつだって真剣勝負じゃが、同時に人を楽しませる職だということは肝に命じねばならんぞ。わかったかえ？」

「なるほど……はい、わかりました！ 指導ありがとうございますー！」
深々と勢いよく頭を下げるとその後頭部がちょうどいい位置に来

たので、これ、と軽く手ではたく。キョトンとした顔でを上げた少女に、そうじゃなからうと笑いかける。

「え？……あつ！」

何も言わずともピンとくるあたり、頭の回転は早い少女である。くるり客席へと向き直り、改めて深く頭を下げる。

「皆様、ご観戦ありがとうございます！」

顔を上げたところで一生懸命に拍手を続ける、興奮のあまり頬を紅潮させた親友の姿が目に入った。笹竜胆からたつた今聞いたばかりの話の思い出し、大きく手を振ってそれに応える。それが、八卦九々乃にとって初となる公式戦の顛末だった。

ターン25 熱血指導、大熱血

「やりました、お姉様！見ていてくださいますし……た……か……か……か……」

一礼を終えてもしばらく鳴りやまなかつた拍手が落ち着き、満面の笑みでぱたぱたと降りてくる少女。その狙いは当然、自身が誰よりも敬愛し親愛するお姉様。勝利の高揚は一時的に、先ほど試合中に感じとっていたお姉様の激昂のことすらも忘れさせていたらしい。

「それで？八卦ちゃん、何か言うことは？」

真正面からそれを見つめる糸巻の言葉は、これまで少女が聞いたこともないほどに平坦な声だった。怒り、心配、焦り……そして、それ以外の何か。あらゆる感情がこもっていないながらも、その全てを力づくで抑えつけているかのような爆発寸前の声。目だけがまるで笑っていないにつこり笑顔の後ろ、その死角ではこの少女を「特別ゲスト」としてしれつと参加させた共犯者の清明が「とりあえず逃げて」と真剣な目でジェスチャーを送っている。

そうしたいのはやまやまだだったが、しかし駄目だ。絶対に、このお姉様からは逃げられない。それは理屈ではなく本能であり、この女がその現役時代の二つ名に夜叉の称号を贈られた理由を真に思い知った瞬間だった。

「勝手な真似をして、すみませんでした……」

いくつものもつともらしい言い訳が、数秒の間にくると少女の脳裏を駆け巡る。しかし最終的にそのどれも採用することはなく、精一杯の誠意を込めて頭を下げた。少女たちの行動を差し引いてもそれだけ糸巻の様子は妙であり、何かわからないなりにそこに何かを感じ取ったからだ。

一言も口にしない糸巻に、ひたすら頭を下げ続ける少女。もしそれで糸巻の態度が軟化するというのなら、たとえ10時間でもそうしていただろう。もつとも、その不毛な時間はそこまで長くは続かなかった。2人の間に、呆れたような声が割って入ったからだ。

「これ、そんな妖怪生意気乳女。黙って見ておれば、一体幼子相手に何をやっておるのかえ」

「ん……ああ、時代錯誤のお姫さんか。悪いが、これはアタシとこの子の問題なんでな」

そこに現れたのは、赤い和装と黒地に金の特注デュエルディスクを持つ女性。つい先ほどまで先輩デュエリストとして少女と激闘を繰り広げた笹竜胆ささりんとんである。邪険な糸巻の態度もどこ吹く風と軽く流し、上品に手で口元を隠しながらこれ見よがしに芝居がかったため息をついてみせる。

「お主も変わったものだろう。以前のお主ならば此度のような勝手を怒るどころか、むしろ自分から率先して参加者に放り込んでいたろうに。のう?」

「……さーな」

そっけない返事だったが、笹竜胆はそれで何かを確信したらしい。満足げに頷くと次いでつ、と伸ばした手でいまだ下がったままの少女の頭を持ち上げ、その背筋を伸ばさせる。

「都合が悪いと視線を外し、後ろめたいと口数が減る。お主、現役時代から続くその癖も直さずによく公僕が務まるものだろう。それにまったく、お主もお主じゃぞ」

あつさりと言い捨てると、今度は起こしたばかりの少女へとその矛先を向ける。

「私……ですか?」

「うむ。お主は勝者、それもこの『十六夜の決闘龍会』に正々堂々と戦い勝利を収めたほどのものじゃ。それが、こんな乳ごときに恐れをなしておってはいかんのう。もっと胸を張り、見せつけてやるがよい。こやつのようにただ下品に大きければいいというものでは……もとい、実力のある者が舞台に上がって何の不都合があるのか、とな」

冗談交じりの言葉をそこで一度切り、意味深な流し目を送り付ける。その目は言葉よりもずっと雄弁に、お主が何か隠していることは承知の上じゃぞ、と告げていた。視線と視線がかち合って、両者の間で見えない火花を散らす……しかし、それもほんのわずかな間だった。どうあつても外れようとしないう笹竜胆の眼力に観念し、糸巻が不服そうに低く唸る。その事実上の降参宣言を最後に、ふっと彼女の肩

の力が抜けた。

そして心配そうに見つめる少女へと笑い返したその笑顔は、少女にとってはずっかり見慣れた、ぶっきらぼうだが優しく温かいものに戻っていた。

「……わかったよ、これだからアンタは苦手なんだ。八卦ちゃんも悪かったな、アタシも別にあの飛び入り参加が悪いつつって怒ってるわけじゃないさ。ただ、今回はちょっと時期が悪くてな」

「おおかたまた面倒事でも引つ張ってきただのであるう？せつかくじゃ、わらわたちにも一枚噛ませてもらおうぞ。何を企んで居るかは知らぬが、ここまで来てはもはや無関係ではあるまいて」

「わーった、わーったよ。遊野、アンタは司会やつといってくれ。たった今聞かせたばっかの話だからな、別にアンタはここにいなくても大丈夫だろ」

「はいはい」

肩をすくめ、するりとその場を後にする。背後で糸巻が声を潜めて先ほど自分にした話を繰り返したのを感じつつ、ならば少しでもそこに観客の視線を向けさせないようにするのが最善かと頬を張って気合を入れ直す。

「はい、皆様お待たせいたしました！それではいよいよ第三試合、これより開幕です！」

素早く客席を見渡し、反応を確かめる。最初の時より、やや反応が鈍ってきているだろうか。単純に連戦も3回目ということで見ているだけの客側にも疲れが出てきているというのもあるだろうが、今回の対戦カードもそれに拍車をかけている、そう彼は判断した。

なにせこれまでの試合と違い、この対戦カードときたら両者とも圧倒的に華というものがない。なまじこれまでがそれぞれタイプの違う美女や美少女3人と上品な老紳士とかなり顔面偏差値の高い組み合わせばかり続いてきていたのに対しかたや目つきの悪い、べったりとした前髪を額に垂らす全体的に陰気な男。かたや熱血と無意味に力強い書体で描かれたTシャツの上から革ジャンという、あまり服装には無頓着な清明でさえ仮にも公共の試合を舐めとんのかおのれは

と言いたくなるような兄ちゃん……おまけにその兄ちゃん、厳密にはプロですらない無名中の無名である。おかげで彼も入場用の口上のネタを探すのにえらく苦労したものだ。

「さあ、それでは！毎度恒例の選手紹介と洒落込みましょう！」

しかも糸巻から聞いた話によると、恐らくこの試合はどちらかが無事では済まないだろう。さりげなく左手に付けた腕輪の位置を調整し、いざという時にデュエルディスクとして展開しやすい位置に移動させておく。

「まずはこちらの方から参りましょう。唸る剛力、絶対的な男のロマン。『ワンショットキラー』、蛇ノ目龍作じやのめさんです！」

「……」

紹介を受けた陰気な方の男が、挨拶どころか会釈のひとつもせず爬到虫類じみた目であたりをねめまわす。その視線にどこか空恐ろしいものを感じながらも、続けてそれと相對する熱血シャツの男へと視線を移した。

「……続きまして、なんとこの方厳密にはプロデュエリストではございません。ですが、その位置にかつて最も近かった男。今はなきプロデュエリスト養成施設の名門、HEATデュエルコーポレーションは元主席……」

「ええい、そんなの昔の話だ、まどろっこしい！熱血の前に熱血あり、熱血の後に熱血あり！熱血指導隊長、夕顔燃もゆる！いざ尋常に、勝負しろ！」

「師匠！頑張ってくださいーい！」

「応、任せておけ少女！先ほどのお前の熱血魂、この目でしかと見せてもらったぞー！」

せっかく探し出した口上の途中に割り込んで飛び出し、びしっと正面の蛇ノ目を勢いよく指さす夕顔。さらに背後からは糸巻の話がぶった切つてまで声援を送る八卦まで出てきて、この時点で清明もこれは收拾がつかないと完全に見切りをつけた。無理に司会を継続することを諦め、ひっそりと舞台の端の方へと引き下がる。

そしてツツコミ役がいなくなったことで、いよいよ夕顔の独壇場は

止まらない。普段の彼ならばここからさらに暑（苦し）く燃え上がってその熱血つぷりをいかになく発揮するところだが、この日ばかりは勝手が違っていた。限界まで手を伸ばしてまっすぐに指さしたポーズのまま、険しい顔で問い詰める。

「だが、お前！お前にはこの熱血指導の前に、ひとつどうしても確認しなくちゃならないことがある」

「ほう？」

短い言葉だが、人を小馬鹿にしたような調子。目の前の相手を見下していることを、隠そうともしない視線。ますますその表情を険しくしながらも、夕顔は事態の核心に踏み込んだ。

「朝顔さんを襲ったのは……いや、あの人だけじゃない。ロベルトさんを、青木さんを！それから確か、一本松とかいう奴も同じ手口らしいな。あのデュエリスト襲撃事件は、お前の仕業なのか！俺が知りたいたいの、それだけだ！」

血を吐くような激情を込めた問いに、事態の呑み込めていない観客を含め会場全体が沈黙に包まれる。

「ふっ」

針一つ落ちただけでも音が響きそうなそれを最初に破ったのは、蛇ノ目の皮肉げに歪んだ口元から堪えきれないとばかりに漏れた短い笑いだった。目を閉じて愉快で仕方ないと言わんばかりに肩を揺すって無言の冷笑を浮かべ、その発作が収まったところによやく冷たい目が開く。

「さて。そうだ、と言ったらどうなるかね、若造？」

「……っ！お前は俺が、俺の熱血指導が打ち倒す！言い訳なんざ聞く気はねえ、それだけだ！」

あまりにもあっさりとした肯定に、夕顔の目が見開かれ……ワンテンプ遅れ、その目の中に怒りが満ちていった。指が白くなるほどにその拳を握りしめ、歯が折れそうなほどに力を込めて食いしぼる。

無論、糸巻たちデュエルポリスもその告白をただぼさつと聞いていたのではない。すぐさまイヤホンを片耳に突っ込んだ糸巻が、地下上水道の鼓に向けて小型マイクで連絡を飛ばす。

「聞こえたな、鼓！やっぱり奴だ、蛇ノ目の糞野郎だ！」

『ああ、私にも聞こえたとも。お前はそのまま見張ってる、すぐに奴のこの町での動きを割り出してやる』

それつきりで言葉は途切れたが、猛然としたスピードのタイピング音がわずかに聞こえてくる。いかなれば、今の蛇ノ目の肯定は彼女たちへの宣戦布告。これまでは下手なことをして察知されるとその場で大量の爆発物カードを実体化されかねないという弱みを握られていたためあまり大きく動くことはできなかったが、デュエル中ならば話は別だ。

運び込まれた大量のカードを、ここに蛇ノ目は持ち込んではいない。それはつまり、彼が単独犯ではないということを示している。彼はあくまでも荒事担当、糸巻たちの相手をするのが主な役割だろう。大量のカードに囲まれて起爆の時を今か今かと待つ爆破役は、別にいる。

「巴さんには悪いが、今回ばかりは朝顔さんの仇だ！進化した俺の熱血指導で、骨も残さず燃やし尽くしてやるぜ！」

「燃やし尽くす、か。俺に言わせればくだらん若造の火遊び程度だが、付き合ってやろう」

「火遊びかどうか、灰になってからもういつペン考えな……！」

そしてこのテロリストの狙いが巴率いる同業他社との抗争、及びデュエルポリスの権威の失墜だというのなら、数日前に鼓が指摘した通りその起爆タイミングはひとつ。最大限彼女たちの顔に泥を塗ることができるとき、すなわち彼女たち全員をデュエルという土俵で打ち破ったその瞬間だ。それより前では意味がないが、もしそれ以前の段階で追い詰めていたら破れかぶれになって爆発ボタンに手をかけていたかもしれない。

要するに、実質的に彼女たちはずっとこの辺一帯の人間すべてを人質として取られていたようなものだったのだ。

「デュエル！」

しかし、今ならばそのリスクは限りなく低い。ひとたびデュエルが始まってしまえば、絶対に無効化できないデュエルディスクのブラッ

クボックスのひとつである「特殊な事例を除くデッキ外からのカード遮断機能」が自動適応され、ここにいる蛇ノ目まで一緒に吹っ飛んでしまうからだ。どれだけ防御カードをかき集めていようが、それが意味を成すのはあくまでその実体化ができるという前提ありき。それが意味をなさないうちは、起爆ボタンは押されない。

無論、最初からデッキにそのカードを仕込むという手もある。だが、それはありえない。そんな不純物を入れた状態で勝てるほど、彼に倒された面々は甘い相手ではない。それは糸巻のみならず、鼓と巴も認めた彼女らの共通認識だった。

そして今、ついに反撃の狼煙は上がった。鼓がこの町に来て以降の蛇ノ目の足取りを清掃ロボ群の膨大なデータから漁り、復讐に燃える巴が初手から全力で展開を開始する。

「うおおおおおっ、燃えろ、俺え！新・熱血指導デッキの力を見せてやる！」

「エクストラデッキ、計6枚か。どうした、金がなくて強欲で金満な壺が1枚しか入手できなかったのか？」

「その言葉の屈辱、すぐに倍にして叩き返してやるよ！来い、ギャラクシー・ウイザード銀河の魔導師！」

銀河の魔導師 攻0

「出ました、師匠のデッキのキーカード！」

純白の衣に身を包む魔法使いの姿に、ぐっとガッツポーズする少女。あのカードがどれほど彼のデッキの核だったかは、たった1度とはいえ直に戦った少女が誰よりも知っている。しかしその次に繰り出されたのは、少女も知らないカードだった。

「そして手札より、未領域のビッグフットの効果を発動！手札のこのカードは1瞬だけその姿を見せたのち、また手札の中に隠れちまう。そして相手プレイヤーは俺の手札から1枚を選び、もし隠れたビッグフットを発見することができたらこいつは捨てられる。だがここでビッグフット以外のカードを選んだ場合、そのカードが捨てられる代わりに身を隠したビッグフットはフィールドに躍り出て、さらに1枚ドローすることができる！俺の手札は当然4枚、確率は4分の1。さ

あ、選んでもらうぜ！」

「茶番だな。一番右だ。そしてその発動にチェインし、手札から増殖するGの効果を発動。このカードを捨てることで、お前がこのターン特殊召喚を行うごとにカードを1枚ドロウする」

「はっ、俺が茶番なら、お前はとんだお笑いだな。ひとつ教えておいてやろう、相手のドロウごときを怖れては、熱血の名が泣くということをだ！」

にやりと笑い、選ばれたカードをつまみ上げる夕顔。ゆっくりとそのカードを……そして、その隣のカードをひっくり返して見せつける。

「そして残念だったな、お前が選んだのは魔法カード、ランクアップマジック R U M | アーリエント・カオス・フォース！よってこいつを捨てるかわりに、ビッグフットの召喚は成立だ！」

未界域のビッグフット 攻3000

棍棒を手に持つ巨大な野人が、獣じみた雄たけびと共に巨体に似合わぬ身のこなしでフィールドに着地する。

「特殊召喚の成功により、カードをドロウする」

「そしてまだ、まだだ。さらに手札から、未界域のツチノコの効果を発動！こいつもビッグフットと同じく最初の目撃情報の後にはまた俺の手札に身を隠し、お前が再発見に成功すればそのまま捨てられる」

ここでニヤリと笑い、一言言い添えた。

「もっとも、ツチノコにはさらに固有効果がある。手札から効果で捨てられた時、自身を特殊召喚できる効果がな」

つまり選ばうが選ばれまいが、どうあつてもツチノコはフィールドに現れるのだ。今度は蛇ノ目もツチノコのカードを引き当てたが、ドロウ効果を阻止したというだけでフィールドだけ見ればそこには何の意味もない。

未界域のツチノコ 攻1300

「さらにもう1枚、ドロウ」

「言っただろう、俺はそんなもの恐れはしない！そして俺の熱血は、ここまでが下準備にすぎん！魔法発動、ギャラクシー・クイーンズ・

ライトオオオオッ！」

「出ましたね、師匠の必殺コンボ！」

なぜか後ろで小躍りする少女の声援を背に受けて、ビッグフットの元に銀河の魔導師とツチノコが集う。

「このカードは発動時に俺のフィールドからレベル7以上のモンスターを選択し、全てのモンスターのレベルをその数値に合わせる！ビッグフットのレベルは8、よって俺の場のモンスター3体のレベルは全て8となる！」

銀河の魔導師 ☆4↓8

未領域のツチノコ ☆4↓8

「朝顔さんたちの仇、絶対に許さん！今こそ爆発しろ、俺の熱血！俺は、レベル8の未領域のビッグフット、未領域のツチノコ、そして銀河の魔導師で……オーバーレイイ！」

3体のモンスターが燃え盛る炎のかたまりとなって螺旋を描き、天へと昇り落下する。そして生じる大爆発は、彼の心を映しているかのように真紅に燃えていた。

「俺の心の炎が今、燃えて轟き叫び出す！立てばファイヤー座ればヒート、歩く姿はバーニング！エクシーズ召喚、ランク8ツ！熱血指導王……ジャイアンソン……トレエーエエナアアーツ！」

☆8+☆8+☆8||★8

熱血指導王ジャイアントレーナー 攻2800

剣道、野球、空手道、その他あらゆる武道やスポーツを思わせる意匠が散見する青を基調としたプロテクターで全身を包む巨人が、地響きと共に着地する。フルフェイスガードの下で、その瞳が光を放つ。「増殖するGはまだ生きているぞ」

「そんなこと問題ではない、俺の墓地に存在するエージェント・カオス・フォースの効果を発動！このカードが墓地に存在し、俺の場にランク5以上のモンスターエクシーズが現れた時！墓地のこのカードはデュエル中に1度だけ、手札に回収することができる！」

その言葉通り、エージェント・カオス・フォースのカードを見せつけてから手札に戻す。ここからが彼の真骨頂、熱血指導の開幕だっ

た。持ち主の熱い心に応えるかのように背中から竹刀を引き抜いた巨人が、自分の周りを衛星のように浮遊する3つの光球のうち1つめにかけて力強く振り下ろして破壊した。

「朝顔さんたちにやったように、燃え尽きる覚悟はできているか？ ジヤイアントレーナーの熱血効果発動！オーバーレイユニットを1つ使い、運のデッキからカードを1枚ドロロー。そのカードがモンスターカードだった場合、相手に800ポイントのダメージを与える！熱血指導イチの太刀、青春！」

熱血指導王ジヤイアントレーナー(3) ↓ (2)

もはや叫ぶことすら忘れて頬を紅潮させたまま事の成り行きを見つめる少女と、目の前のテンションについていけず呆然としている大部分の観客。その中央でただひとり熱く燃え上がる夕顔が、力強くデッキの一番上からカードが引き抜いた。

「ドローカードは……未領域のサンダーバード、モンスターカードだ！喰らえ、800のダメージを！」

蛇ノ目 LP4000 ↓ 3200

突如として蛇ノ目の足元の地面が割れ、炎がそこから吹き上がりその体を焼く。その様子を見て、臨戦態勢のまま戦況を見つめていた糸巻の目が獲物の姿を捉えた肉食獣めいて光った。たとえ表情ひとつ変えずとも、今のダメージが実体化していたことは間違いない。つまり巴から強奪された新型「BV」は、蛇ノ目のデュエルディスクに組み込まれている可能性がかなり高いわけだ。

「まだまだまだあ！ジヤイアントレーナーは自身の熱血効果を、1ターンに3度まで使うことができる！次のオーバーレイ・ユニットを取り除いて熱血指導二の太刀、闘魂！」

熱血指導王ジヤイアントレーナー(2) ↓ (1)

竹刀を背に収めた熱血指導王が次に取り出したのは、その巨体に見合ったすさまじい太さと長さを誇る鋼鉄製のヌンチャクだった。片方の端を手に持ち遠心力をつけてその場で縦横無尽に振り回す演舞を一通り行くと、鎖がこすれ合う金属音を微かに響かせながら次の光球を狙いすまして殴打する。

「ドローカードは……ジュラゲド、モンスターカード！喰らえ800のダメージを！」

蛇ノ目 LP3200↓2400

「……」

「まだまだ折り返し、ジャイアントレーナーの熱血効果発動！熱血指導サンの太刀、愛！」

熱血指導王ジャイアントレーナー(1)↓(0)

そして巨人が最後に選んだ得物は、鈍い光沢を放つよく使い込まれた金属バット。大地を大股で踏みしめて素振りも何も行わずにいきなり放たれた腰の入ったフルスイングが、手ごろな位置に浮かんでいった最後の光球を千本ノックさながらに打ち据えた。

「ドローカードは……どうだ、これが新・熱血指導デッキの底力！モンスターカード、未界域のツチノコ！喰らえええ、800のダメージを！」

蛇ノ目 LP2400↓1600

「3回連続でモンスターカードを引き当てるなんて……！さすがです、師匠！」

「ふっ、驚くにはあたらないぞ少女よ。俺のこの新・熱血指導デッキは、見ての通りこの未界域モンスターたちの力によって文字通りに生まれ変わったからだ！手札が多ければ多いほど高い確率でノーコストでの特殊召喚が可能となるこいつらは、しかもおあつらえ向きにビッグフットをはじめとするレベル8のカードまでカテゴリ内に包している。つまりこれらのカードを大量投入することによって熱血指導王のエクシース召喚精度はそのままに、モンスターカードの比率を極限まで高めることに成功したのだ！これにより、このような連続バーンもいとも簡単に成功するようになった……なんて言うと思っただかああっ！」

「え、ええっ!?!」

珍しく馬鹿の一つ覚えな精神論ではない論理的な理由を出してきた、かと思いきや激昂した様子でいきなりそれを自分から否定する笑顔。これはこの場の誰も知る由はないのだが、普段からこうやってボ

ルテージが上がりすぎたタイミングで適切に水を差してくれていた朝顔というブレーキ役の不在は、こんなところにまで影響を及ぼしていた。

「いいか少女よ、覚えておけ！俺の熱血指導に、そんなくだらない確率の問題などは二の次、三の次だ！今俺がモンスターを引くことができたのは、ひとえに俺の熱血魂！熱く燃え滾る怒りと熱血にこのジャイアントレーナーが、そしてこのデツキが、全力をもって応えてくれた、ただそれだけだ！」

「し、師匠……！」

こんな緊迫した事態の真ただ中でさえ繰り広げられる、本人たちだけは真面目なツツコミ不在の熱血劇場。黙って聞いているうちに頭が痛くなってきた糸巻がふと横を見るとわかるわかると言いたげに深々と頷く清明が目に入り、そういえばコイツもそっち側に片足突っ込んだ人間だったと思いつく。

「そして熱血は今、進化する！俺は手札の魔法カード、RUM—アージエント・カオス・フォースを発動！このカードは俺のフィールドに存在するランク5以上のモンスターエクシーズを対象として発動し、ランクが1つ上のCカオスエクシーズX、またはCNカオスナンバースoへトランクアップさせる！俺はランク8のジャイアントレーナーで、オーバーレイネットワークを再・構・築！」

素材を使い果たしたジャイアントレーナーが真紅の光の塊となり、さらなる力を得てその姿を変化させる。夕顔の叫びは、ほとんど獣じみていた。

「もつともつと、燃え上がれ！限界なんざ飛び越えて、熱血の果てのその先へ！唸り貫け熱血道、世界を染めろ俺の魂！カオス・エクシーズ・チエンジイイイイ！」

「あれは、師匠のエースモンスター……！」

「CX！熱血指導神！今こそ出でよ、俺の魂！アルティメットレーナー、ここに在り！」

CX 熱血指導神アルティメットレーナー 攻3800

攻撃力3800を誇る大型モンスター、アルティメットレーナー。

対峙する蛇ノ目が顔色一つ変えず冷めた目で増殖するGの効果によってカードを引きつつ見つめる中、肩で息をしながらも夕顔が最後の一撃に打って出る。

「ぜえ、ぜえ……きあ、どうだ！行くぜアルティメットレーナー、もう少しだ！アルティメットレーナーの超熱血効果、発動！このカードがモンスターエクシーズをオーバーレイユニットとしている場合、オーバーレイユニットを1つ使い、自分のデッキからカードを1枚ドロウ。そのカードがモンスターカードだった場合、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！熱血指導ヨンの太刀、熱血！」
アルティメットレーナーがその6本の腕に炎を纏い、星も砕けよとばかりにその拳を大地に叩きこむ。飛び散った炎の欠片が夕顔の腕に燃え移ったが、当の本人はそんなもの気にした様子もなくメラメラと赤熱した腕をデッキに置く。

「うおおおお、受け取れえええっ！これが、俺の！熱血指導だああっ！」

燃え盛る腕が振り抜かれ、炎の軌跡を描きつつ最後のカードを引いた。そして炎に照らされそこに浮かび上がるカードの名を、高らかに宣言する。

「モンスターカード、銀河の魔導師！喰らえええ、800のダメージを！」

蛇ノ目 LP1600↓800

力尽きるどころかむしろますます勢いを増して燃え盛る右腕はそのままに、ほとんど狂気の域に踏み込むほどに強い光をたたえた瞳があくまで冷めた態度の蛇ノ目を睨みつける。

「ありがとうよ、ジャイアントレーナー……それに、アルティメットレーナー。俺はこれで、ターンエンドだ」

「そうか、長い茶番だったな。しかしいくら貴様が熱血を語ろうと、俺の操る真の炎の前にはその熱も線香の光にすら及ばない程度のものに過ぎない。それを今から教えてやろう……ドローだ」

展開を優先した夕顔は先のターンで増殖するGの効果による4枚ものドロウを許していたため、これで蛇ノ目の手札は9枚。いまだ腕

を燃やしたまま警戒する彼の眼には、確かに目の前の相手がまたしても冷笑を浮かべるのが見えた。

「儀式魔法、ジャベリンビートルの契約を発動。手札からレベル合計が8以上になるようにリリースすることで、同じく手札のジャベリンビートルを儀式召喚する」

「ジャ、ジャベリンビートルうう?」

あまりにも予想外のカード名に、素っ頓狂な声を出す夕顔。聞いたことのないカード、だからではない。むしろその逆であり、それはデュエルモンスターズというカードゲームの中でもその黎明期から存在する、由緒正しい太古の儀式モンスターの1体の名だ。

しかしそれは、有り体に言ってしまうえば現代のカードパワー相手には分が悪いと評せざるを得ない。特別なコンボや専用サポートのあるわけでもない、時代の影にひっそりと隠れつつあったカード。裏を返せば、おカードを選んでデッキに入れるだけの理由があるということだ。最初の意表を突かれた驚きが少し冷めると、警戒心がより一層強くなる。

「レベル2の増殖するG、同じくレベル2のラーバモス、そしてレベル4の地雷蜘蛛。この3体を手札からリリースし、儀式召喚」

「増Gと地雷蜘蛛はまだしも、今度はラーバモスか? ったく、何考えてんだかわかんねえな」

ジャベリンビートル 攻2450

憎まれ口とは裏腹に、その表情は険しい。この作業の最終地点はどこなのか、その狙いは何なのか、なぜ朝顔はこのデッキに敗北したのか……いずれの疑問にも答えは見つからず、何も見えてこないからだ。

「手札からグレート・モスを捨て、使神官―アスカトルの効果を発動。このターンにシンクロモンスターしかエクストラデッキから特殊召喚不可となる代わりにこのカードを守備表示で特殊召喚し、さらにデッキからチューナーモンスター、赤蟻アスカトルを特殊召喚する」

使神官―アスカトル 守1500

赤蟻アスカトル 守1300

「アスカトル……まさか、テメエ！」

次いで繰り出されたモンスターを呆然と見つめていた夕顔が、何かに気づいたように声を荒げる。それを見た蛇ノ目はただ、やつと気が付いたかと言わんばかりに口の端を歪めて笑った。

「ああ、その通り。これはあの男の……朝顔のカードだよ。敗者にはもつたないカードだったんでな」

「この野郎、朝顔さんを病院送りにしただけじゃねえ、そのカードまで盗みやがっただと……？ふざけんじゃねえ、デユエリストのデッキがどれだけ大事なもんか、わかってやってんのか!？」

その時不可思議なことが起こり、間近にそれを見ていた少女は息を呑んだ。いまだ燃えている夕顔の右腕の炎が、その叫びと共に突然その勢いを増して膨れ上がったのだ。

それはあるいは、折よく吹いた風によつて酸素が供給されたことによる偶然の産物だったのかもしれない。しかし少女にはまるで、その炎を彼の右腕にもたらしたアルティメットレーナーが、彼の怒りの爆発に呼応してその火力を跳ね上げたかのように見えた。かつて清明から聞いたカードの精霊の話や、ついさつき夕顔本人が口にしていたデッキが応えてくれた、との言葉がその脳裏に蘇る。

「モンスターゲートを発動。ジャベリンビートルをリリースすることで通常召喚可能なカードが出るまでデッキを上からめくっていき、最初に出たそのモンスターを特殊召喚する。1枚目、儀式の下準備。これは魔法カードだから墓地に。2枚目、ジャイアントワーム。これはレベル8のモンスターカードだが、通常召喚不可能な特殊召喚モンスターだからやはり墓地へ。3枚目、ジャベリンビートルの契約。これも魔法カードだ、4枚目」

あれだけのカードを使って儀式召喚されたジャベリンビートルをあっさりと切り捨て、モンスターゲートが蛇ノ目の場に開く。異空間に繋がる向こう側の見えない穴に次々とめくらられたカードが投げ捨てられ、そして4枚目のカードがめくらられた。

「レベル4モンスター、斬機マルチプライヤー。よつてこのカードを特殊召喚する」

斬機マルチプライヤー 攻500

穴の向こうの異空間から、鈍い光沢を放つ金属の戦士が現れる。その背後では役目を果たしたモンスターゲートが、揺らいで宙に消えていった。

「昆虫軸【推理ゲート】……だが、読めねえな。ありやサイバース族だ、ここにきて昆虫族ですらない、だと?」

糸巻の呟き通り、ここまでで蛇ノ目の使用したカードはほとんどが昆虫族の特殊召喚モンスター。名推理やモンスターゲートといったカードで大量に特殊召喚モンスターを墓地に送り込み、それを利用して戦う【推理ゲート】は、それなりに歴史と伝統のあるデッキのひとつとして彼女もよく知っている。その水増しのために、わざわざ唯一の昆虫族儀式モンスターであるジャベリンビートルもデッキに組み込んでいたのである。

だが、その着地点がサイバース族に関連した効果の持ち主であるマルチプライヤーというのはどういうことなのだろうか?

厄介なことに蛇ノ目に関しては、彼女の過去の知識も何の役にも立ちはない。あの男はかつてのプロデュエリストとしては珍しく、決まったデッキを持たないことで知られていた男だった。毎回のようには手を変え品を変え彼が固執し続けたただひとつの軸は、その二つ名の由来ともなったワンショットキル。ただ一撃をもつて相手のライフをすべて奪い取る、そこに全てを賭けるようなデュエリスト。ゆえに、今回はどこを通したら致命傷となるのかは見当もつかない。そもそも彼女にも、彼のこのデッキが何を目指しているのかははまだ理解できていないのだ。

「レベル5の使神官に、レベル3の赤蟻アスカトルをチューニング。シンクロ召喚、レベル8。シンクロチューナー、炎斬機マグマ」

☆5＋☆3＝☆8

炎斬機マグマ 攻2500

エンターテイメントの一環としてプロの世界ではすっかりお馴染みだったシンクロの口上すらない、あまりにも淡泊な召喚。それは、このマグマでさえ中継地点に過ぎないことを言外に物語っていた。

そして案の定、そのマグマも素材として墓地に送られる。

「レベル4の斬機マルチプレイヤーに、レベル8の炎斬機マグマをチューニング。ちっぽけな羽虫の一飛びが、強固なる要塞を突き崩す嵐となる。シンクロ召喚、レベル12。すべてを打ち砕け、ビー・フォーリスB・F―決戦のビッグ・バリスタ!」

☆4+☆8||☆12

B・F―決戦のビッグ・バリスタ 攻3000

デュエルモンスターズのカードに記載される中では最高位である12ものレベルを誇る、巨大な昆虫要塞。その体と一体化した圧倒的質量と迫力の弩が、その先端を鋭く閃かせる。

「ビッグ・バリスタ……!」

「効果発動。このカードが特殊召喚に成功した時、墓地の昆虫族モンスターをすべて除外することで相手モンスター全ての攻守は除外されている自分の昆虫族モンスター1体につき500ダウンする。ビー・エフェクト・テンペスト」

ビッグ・バリスタがその羽を振動させると、その体内から幾重にも重なった無数の羽音が一齐に響く。不気味な振動が空気を震わせるその光景を前に苦悶し、その場に崩れ落ちていくアルティメットレナーの巨体を一瞥し、糸巻は舌打ちした。

「まずいな。アイツのアルティメットレナーはあらゆる効果の対象にならないが、それ以外には無力。しかも奴の墓地には、今……」

「俺の墓地には増殖するG2枚、ラーバモス、地雷蜘蛛、グレート・モス、ジャベリンビートル、デビルドザー、赤蟻アスカトルの8枚の昆虫族がいる。これをすべて除外することで、お前の散々自慢したそのモンスターは無力となる」

「ア、アルティメットレナー……!」

CX 熱血指導神アルティメットレナー 攻3800↓0

悔し気に歯噛みする夕顔だが、すぐに気持ちを切り替える。確かに攻撃力こそ0にされてしまったが、まだ彼の手には先ほどジャイアントレナーによってドロ―したジュラゲドのカードが存在する。バトルステップ中に任意のタイミングで特殊召喚できライフを100

0回復するこのカードがあれば、彼のライフは実質5000。蛇ノ目の手札1枚が今から特殊召喚して追撃を可能とするモンスターやビッグ・バリスタを強化する何らかの手段だとしても、ビッグ・バリスタの攻撃力3000との合わせ技ではそう簡単に手札1枚から叩き出せる数値ではない……はずだ。

しかしそんな心の動きを見透かしたかのように、冷酷な言葉が突き刺さる。

「なんだ、その様子だとまだ気づいていないようだな」

「何？」

「おかしいとは思わなかったのか？墓地に8体の昆虫族を溜めつつビッグ・バリスタを出したただけならば、わざわざマグマを挟む必要はなかった。ビッグ・バリスタの召喚に素材の縛りはなく、最初から使神官、赤蟻、マルチプライヤーの3体をそのまま使うことでもシンクロ召喚は可能だった」

「……！」

息を呑む。確かに蛇ノ目の言葉は正しく、これまでの流れでマグマを出した意味はない。指摘されてようやくその事実思い至った夕顔に、もつともその神経を逆なでする言葉が投げつけられる。

「ちなみに朝顔は、ビッグ・バリスタを出した時点でその結論に自力で辿り着いていたぞ。もつとも、奴もそこから先の真の狙いにはその目で見るまで気が付かなかったようだがな」

「なんだと……？」

「その理由がこれだ、シンクロキャンセルを発動。ビッグ・バリスタをエクストラデッキに戻し、その素材を墓地から蘇生する」

炎斬機マグマ 攻2500

斬機マルチプライヤー 攻500

「なるほどな。昆虫族の赤蟻アスカトルは、ビッグ・バリスタの効果と一緒に除外されちゃう。シンクロ素材がすべて墓地に揃ってないと蘇生効果を使えないシンクロキャンセルを最大限に生かすためには、サイバー族のマグマを間に噛ませるしかなかったってことか」

同じことを疑問に思っていた糸巻も、ようやく得心したように呟

く。これで蛇ノ目の場には、再びチューナーとそれ以外のモンスターが計2体。

「レベル4のマルチプレイヤーに、レベル8のマグマを再度チューニング。我が復讐の真なる炎よ。研ぎ澄まされし一刀のもと、悲願の覇道を切り開け。シンクロ召喚、レベル12。炎斬機、ファイナルシグマ！」

☆4＋☆8＝☆12

炎斬機ファイナルシグマ 攻3000

「ファイナルシグマだ?!?!これでは、俺の……!」

次に起こることを悟り、悔し気に目を伏せる夕顔。勝負が決したことを、すでに彼は知ってしまったのだ。一方でまだ目の前で何が起きているのかよく分かっていないのが幼い少女と、その隣の司会者である。助けを乞うような両者の視線にさらされて、盤上から目を離さないままに糸巻が大きくため息をついた。

「わかったわかった。だけどな、あんまり愉快的話じゃないぞ。特に、八卦ちゃんにはな。ファイナルシグマはエクストラモンスターゾーンにさえいなけりや無害な3000打点に過ぎないが、あそこにいるときだけはわけが違う。斬機カード以外の効果を一切受け付けないほぼ完全耐性、そして……相手モンスターとの戦闘によって発生するダメージを倍にする、ライフ破壊能力だ」

「ダメージ倍……そんな、それじゃあお姉様、師匠は、師匠は!」

「ああ、単純計算で6000ダメージ。ジュラゲド込みでも耐えきれぬ数字じゃねえな」

遅ればせながら状況を理解してみるうちに顔面蒼白になる少女をよそに、勝利の確定したはずの蛇ノ目がさらに動く。ファイナルシグマに攻撃宣言をするのではなく、その手はなぜかその墓地へ。

「6000か、まだ足りないな。シンクロ素材として墓地に送られた斬機マルチプレイヤーの効果を発動」

「何?!」

次に驚愕の叫びを発したのは、マルチプレイヤーの効果も当然頭の中にある糸巻だった。ファイナルシグマが手にした剣から放つ炎の

勢いが倍増し、その色も従来の赤から真紅へ、そしてその先の純白へと変化していく。

「マルチプライヤーが墓地に送られた場合、エクストラモンスターゾーンに存在するサイバース族1体を対象とすることでその攻撃力をこのターンの間のみ倍にする。そしてファイナルシグマは、ただ斬機カードの効果のみは受け付ける」

炎斬機ファイナルシグマ 攻3000↓6000

「おい、洒落にならねぞこりや……!」

彼女は別に、このオーバーキルそのものに対して怒りを覚えているわけではない。あくまで「魅せ」の一環として、別に使わずとも出せるモンスターや効果をわざわざ使ってより派手に勝負を決めるという考えは彼女にも元プロとして理解できる。あまり敗者への死体蹴りのような真似になるようなことを推奨しようとは思わないが、そこはあくまで適材適所。マナー違反とならない範疇で正しく使うことにより、観客が一層盛り上がるのもまた事実だからだ。

この場合の問題は、このデュエルのダメージが実体化するという点。ファイナルシグマの効果も合わせると、発生するダメージは12000。新型「BV」の力を知る彼女にさえ、いや、むしろその痛みを身をもって知っている彼女だからこそ、その規格外のダメージがどれほどの威力を發揮するのかは想像もつかない。

しかし同時に、ようやく腑に落ちたこともあった。どうして朝顔やロベルトといったこの十数年間を裏の世界で生き抜いてきた猛者たちが、いまだ誰一人目覚めずに集中治療室で生死の境を彷徨うほどの手ひどい敗北を喫したのか。襲撃事件の被害者たちに共通する、目を背けたくなるほどの火傷痕。ライフを守りダメージを抑えるためのあらゆる工夫がまるで通用しない圧倒的なダメージをもって放たれる炎の刃によって、全ての疑問は繋がった。

「……すまねえ、朝顔さん……!」

「案ずるな、今すぐにでも奴の隣に送ってやろう。その温い熱血とやらを、不可逆なほどに破壊しつくしてからな。バトル、ファイナルシグマでアルティメットレーナーに攻撃。Q u o d E r a t

Demonstrandum!

見るからに限界寸前のアルティメットトレーナーがそれでもなお立ちあがり、6つの拳を握りしめて雄たけびと共にファイナルシグマとの一騎打ちに挑む。

しかし、勝負の結果はすでに見えていた。もはや立っているだけで奇跡なほどの限界寸前、ただ精神力のみで振るわれた右腕中段の拳を最小限の体さばきだけであっさりと躲したファイナルシグマの白熱する大剣が、大上段からの一撃でアルティメットトレーナーの体を両腕上段のガードごとその脳天から両断する。一拍遅れ、激しい爆発が起きた。それは最後の瞬間まで熱血に生きた男の、最後の絶叫だったのかもしれない。その体が爆発の余波に吹き飛ばされると同時に、右腕を覆う炎もまた風の中に千切れて消えていった。

炎斬機ファイナルシグマ 攻6000↓CX 熱血指導神アルティメットトレーナー 攻0 (破壊)

夕顔 LP4000↓0

「し……師匠っ！」

真っ先に飛び出したのは、彼を師と呼ぶ少女だった。何度も地面に打ち据えられ、その全身が燃えカス同然の姿となった夕顔に、必死で駆け寄りその横に座り込む。本当はその体を揺さぶって目を開かせたかったが、傷の具合からみて下手に手で触れては余計に悪化することとは、少女の目にも容易に理解できた。

「師匠……」

辛うじて絞り出したその言葉以外、何も口に出すことができなかった。どう見てもすでに意識はないが、むしろその方がまだ本人にとっではいいだろう。全身を襲っているであろう激痛を、たとえこの瞬間だけでも感じずにいられるのだから。

しかし、その瞼がわずかに震えた。浅く弱々しい呼吸に一定のリズムが生まれ、焼け焦げてひび割れた唇がわずかに開きかすかな声を絞り出す。

「少……女、か」

「師匠!? 喋つちやダメです、いまお医者さんを……えつと、竹丸さん！」

「う、うんー!」

目の前で起きた光景のショックから親友の言葉で立ち直った竹丸が、震える手で慌てて携帯を取り出す。救急に連絡を取り始めたのを確認して自分も走りだそうとし、待て、とのかすれた言葉に足を止める。

「師匠、喋つちやダメですつてば!」

「俺、の、熱血指導が……」

「し……」

「勝手なのは、わかって、る……だが、少女よ、頼む……!」

一体、その体のどこにそんな力が残っていたのか。スクラップ寸前のデュエルディスクに手をかけると、セットされていたカードがばらばらと零れ落ちる。その中から目当ての1枚を何度か失敗したのちに震える腕でどうにかつまみ上げ、それだけの動作ですでに途切れそうになる意識を必死にかき集めてその1枚を差し出す。

「熱血、指導王」

「ジャイアントトレーナー……頼む、済まない、少女よ……俺の魂を、朝顔さんの、仇を……!」

ボロボロになったその顔の両目は、もはやまともに見えているかどうかも定かではない。しかしその眼窩からは、悔し涙が溢れていた。自分の手で仇を討てなかったことへの悔しさ情けなさ、こんな少女に危険なデュエルによって後を託そうとしている自分への情けなさ、痛いほどに自覚する無責任さ、卑怯さ。それでも彼はその全ての恥を忍び、自らのエースモンスターを差し出したのだ。

そして少女は、迷いもせずはそのカードを受け取った。自分も泣き出しそうになるのをぐっと堪え、決意を込めた瞳で限界などとうに越している目の前の男の顔を見つめる。

「……安心してください、師匠。私が、全部終わらせますから」

ターン26 復讐の最終方程式

「駄目だ」

「どうしてですか、お姉様！」

断言する糸巻に、ほとんど掴みかからんばかりの勢いで食って掛かる八卦。先ほどのファイナルシグマとアルティメットレーナーの激突の余波でいまだあたりには残り火と煙がくすぶり、あちらこちらから物の焼ける独特な匂いが漂ってくる。

現在彼女たちがいるのは、炎と衝撃によって半壊状態に陥ったステージの成れの果て。被害の比較的少ないその裏手には、現在も彼女たちのために……そして避難のため誘導される観客たちのために、止める間もなく飛び出していつて時間を稼いでいる青年の声が聞こえてくる。

「まだまだあー！希望識竜スパイダー・シャークの効果発動、ラスト・リザレクシオン！このカードが破壊された時、墓地のモンスターを蘇生する。甦れ、グレイドル・ドラゴン！」

「グレイドル・ドラゴン？確かそのカードも、破壊された際に水属性モンスターを効果を無効として特殊召喚する効果があったな。儚無みずきによる莫大なライフ回復といい、その蘇生の連鎖といい。くだらない延命だな」

「その延命でちゃんと時間が稼げてるんだ、文句はないね。ほらほら、悔しかったらはいやく見せてよワンショットキル。やれるもんならね！」

「……ふん」

わかりやすい挑発だが、彼女たちに聞こえてくるその声色は硬い。おそらく、彼自身が悟っているのだろう。その防御と延命にも、あまり猶予が残されていないことを。

糸巻は、だからこそアイツの犠牲を無駄にしないためにもこの戦いはデュエルポリスたる自分の手で終わらせなければならないと決意を新たにしている。その考えを察したからこそ寿と笹竜胆の2人はこの場に残るのではなく、あえて観客への避難誘導を買って出たのだ。し

かし、少女だけはその考えに、身勝手と知りつつも異議を唱える。

「お願いですお姉様、私にやらせてください！早くしないと、遊野さんだって……！」

「だから駄目だっつってんだ。八卦ちゃんこそ早く行きな、アイツが何のためにあそこに残ったと思っただけだ？」

「それは……でも、私は師匠から……！」

「ああ、そうだな！それで、その師匠は今どうなってる？八卦ちゃんまであなりたいのか、あん？」

そう言いつつ、避難の殿を務める寿がおぶっている茶色の物体を顎で指し示す。全身をズタボロに焦がしたそれは、よく目を凝らしてみないと今も微かな呼吸をする生命体だとは、それ以前に人間であることすら気づくことができないだろう。まして、それがつい先ほどまで少女の師匠……夕顔と呼ばれていた男であるとは。仮にこの場を生き延びたとして、彼が立ち直れるかはわからない。あとは医療の進歩と、彼自身の生命力に賭けるしかないだろう。

少女が言葉に詰まった隙に、話は終わりだとばかりに腕を組んで盤面へと視線を移す糸巻。彼女だって少女の気持ちは痛いほどわかるし、それを少女だって理解していることはわかっている。それでもデュエルポリスとして、時代遅れな前時代デュエリストの最後のけじめとして……いや、そんなものは後付けの理由でしかない。個人的な理由からでも彼女は自分が戦うべきだと考えており、間違っても新たな世代を代表するであろう少女をこの最前線に向かわせるわけにはいかなかった。

もう少しだ。ほんの気休めに過ぎないにしろとにかく避難さえ完了すれば、彼女自身が出で戦うことができる。だがそれまでは、彼女には市民の安全を第一に考える義務があり、下手にデュエルの渦中に入り込むわけにはいかない。あんな思いを味わうのは、1度こつきりでも多すぎるぐらいだ。

「ぎゃんっーま、まだまだ……！」

「まだ、か。意地を張るのもいいが、随分と往生際が悪いものだ。早く楽にしてやろう」

悲鳴、そして苦痛を噛み潰したような啖呵。以前のデュエルで感じた彼の実力から考えても、もう長くはもたないだろう。そんなことを考えているうちに、どうにかこの場にいた観客のうち最後の1人を戻ってきた笹竜胆に引き渡す。

「頼んだぞ、姫さん」

「うむ、後のことはわらわに任せるがよい。ほれ、お主もついてまいれ。なに、大丈夫じゃ。『十六夜の決闘龍会』の名において、安全な場所まで送り届けようぞ」

このテロ計画が完遂すれば、安全な場所なんてものはここら一帯には存在しないのは百も承知だ。しかしそんな事実はおくびにも出さず、不安そうな少女を元気づけるように笑う。

「そういうことさ。さ、あとはアタシらデュエルポリスに任せて家に帰りな」

「あ、あのー」

ステージ裏へ誘導されつつ、幾度となく振り返ってその場から立ち去ることを躊躇していた最後の1人。眼鏡の少女は彼女らの励ましにも安心した様子はなく、おずおずと声を上げた。

「あの人は、あの人は大丈夫なんですか!」

目に涙を溜めながら指さす方角からは、断続的に炎が吹き上がった。り何かが切断される斬撃音やその感触が伝わってくる。

「竹丸さん……」

それつきり言葉に詰まる少女と、険しい目つきのまま何も言うことなく視線を逸らす糸巻。誰も何も言わなかったが、その沈黙は十分に答えだった。

「どうして、どうしてですか!私、デュエルモンスターズは怖いものじゃない、楽しいものだからぜひ見に来てねって、それで、それで今日は……なのに、なんでこんなことになるんですか!あんなに痛そうに、怒ったり、苦しんだり……ねえ、どうしてなんですか!」

震え声はやがて感情の昂ぶりと共に、嗚咽混じりの悲痛な叫びへと変わっていく。少女が親友として何か言葉をかけようとして口を開き、結局また押し黙る。デュエルモンスターズの楽しさをこの少女に

説いたことが間違いだつたというのなら、少女自身もそれは同罪だつたからだ。笹竜胆も悲し気に目を伏せ、目の前で起きているこの理不尽への反抗とも取れるその叫びを甘んじて受け入れる。

「どうして、じゃない。だから、さ」

しかし糸巻だけは、その叫びに真つ向から答えた。爆心地ど真ん中の空気にそぐわない静かな声の調子は、溢れ出る激情を抑えきれずにヒステリー寸前に陥っていた文学少女も怒りを忘れて呆気にとられ、百戦錬磨の笹竜胆も思わずその炎に照らされた赤髪を仰ぎ見る。しかし当の本人は集まる視線をもともせず、正面から疑問をぶつけた竹丸の目を見据えた。

「なんでこんなことに、なんてことはもう問題じゃない。こんなことになった、だからアタシらが動く。それだけさ」

「そんな……」

「乱暴な話だと思うか？でもな、結局アタシみたいにガサツな女には、それしかやりようがないんだよ。いや、アタシだけの話じゃない。大なり小なり、アタシらの時代のプロなんてそんなもんだつた」

そこまで言い切つて一呼吸置き、どこか達観した表情で目の前の若者2人を順繰りに見やる。その後ろの笹竜胆の表情は謎めいていて、何も感情は読み取れない。

「その笹竜胆みたいに一戦を退いた奴も、鼓みたいにデュエルポリスを選んだ奴も、巴みたいなテロリストになりやがったアホも……道は違つてもどいつもこいつも対処療法ばかり得意になつちまつてな、質の悪いことになまじそれで何とかなつてきたもんだから、根元を絶つために原因を考えるなんてことは誰もやろうとしなかつた」

言いながら何を他人事のように、と胸のうちで自嘲する。胸の痛みもお構いなしに言葉を発する自分の口が、まるで自分のものではないかのように感じられた。

「何かがどこかで間違つた。もしかしたら、その時に正しく対応できたりや今みたいにはならなかつたのかもしれない。誰かが根元を断てさえすれば、何事も起こらなかつたかもしれない。でもな、アタシらは誰一人としてそうしなかつた。そのツケが、こうやって今に回つ

てきてるのさ」

「……っ」

「だから、こんな馬鹿馬鹿しいことにはアタシらの代でケリをつける。それが未来のある八卦ちゃん、それに竹丸ちゃんだったか？アンタらの代にくれてやれる、せめてものけじめだ。アタシらの背中を追いかけてくるのはいいが、間違ってもその後ろをついてくるんじゃないぞ。アタシらみたいな失敗は、もう二度とデュエルモンスターズの歴史には必要ない。今日のデュエルを見て、少しでも楽しいと思えた瞬間はあったか？その気持ちを大事にして、その瞬間を広げて欲しい。アタシみたいな時代遅れのルートルが、次の世代に言っただけやるのはそれだけさ」

長身の糸巻は、まだまだ成長期の少女よりも頭2つほど背が高い。軽く屈みこんで眼鏡越しに見える少女の瞳と目線を合わせ、気が付けば普段は決して口にしらない心の内をかなり深いところまで明かしていた。そんならしくない物言いには笹竜胆も目を丸くして聞き入っていたが、彼女もそこで茶化すほど野暮な女ではない。

また少し間隔を置き、ちらりと肩越しに後ろを振り返る。いまだ戦闘音が断続的に聞こえてきてはいるが、それも先ほどまでに比べればだいぶ減ってきていた。決着が、いよいよ間近に迫っているのだろう。

「ま、それだってアイツにや全く関係ない話のはずなんだけどな」

その言葉は、口に出すことなくそっと飲み込んだ。実際その場の雰囲気は流しはしたが、今現在戦闘真っ最中のあの男、遊野清明は彼女があれこれ並べてみせた御託とは全く関係ない。アタシもズルい大人になったなあ、口の端を歪めて皮肉に笑う。利用できるものは何でも使う、つまらない人間。たとえそれが、自分自身の良心だったとしても。

「だから2人とも、もう少し離れてな。あとはアタシの時間、選手交代だ！」

糸巻がそう吠えたその時、まるで凶ったかのようなタイミングで戦場でも動きがあった。全身を火傷痕だらけにし、息を切らした清明が

目の輝きだけはなおも力強く、彼のもつとも信じるフェイバリットカードへと声をかける。

「これが、最後のチャンスかな。その攻撃力を越えられるのは、今しかない！霧の王でファイナルシグマに攻撃、ミスト・ストラングル！」
振りぬかれた霧の剣士の手による魔法剣の一撃が、ファイナルシグマの白熱する刃と切り結ぶ。2つの力は拮抗し、水属性の霧の王に炎属性のファイナルシグマ、その冷却と高熱の力が爆発的な量の蒸気を生み出す。視界の全てが白く塗りつぶされた中で、デュエルの勝敗を分ける声が響いた。

「残念だったな、小僧。トラップ発動、ブレイクスルー・スキル。霧の王を対象に取り、その効果をこのターンのみ無効とする」

「……！霧の王は、自分の効果で攻撃力を決めるモンスター。それが無効にされたら……！」

「攻撃力は元々の数値、0になる。そしてファイナルシグマがエクストラモンスタージーンに存在するとき、相手モンスターとの戦闘によって発生するダメージは倍になる」

均衡が崩れる。白い蒸気を断ち切って、二振りの剣のうち片方の切っ先が覗く。その剣の纏う力は、白熱の炎。

「ぐ……！」

表情を歪め、倒れ込むのを拒否しているかのようにふらふらと数歩だけ前に出て……ひどくゆっくりと、清明がその場に崩れ落ちた。その体が地面に横たわる寸前、駆け付けた糸巻が片手で軽々と受け止める。

「よつと。まったく、無茶しやがって」

「……へーい糸巻さん、駄目ねーやっぱ、こんな慣れないことしちゃ」
さも平気そうに軽口を叩きつつ、腕の中でからからと力なく笑う清明。立ち上がろうとして失敗し、また受け止められる。無理もないだろう、そう思った。むしろこうやって、虚勢を張れている今の状態こそが異常なのだ。

「わーったわーった、とりあえずもう喋るなよ。おい姫さん、悪い。寿の爺さん、まだその辺にいるだろ？これもついでに病院放り込んでい

てくれ」

「仕方がないのう、ひとつ貸しじやからの。これ司会、早いところ離れるぞえ」

気分だけでも辺りに入り混じる蒸気の白と煤の黒の煙を追い払おうというのか、ひらひらと袖を振りつつ現れた笹竜胆が腰を下げ、肩に火傷まみれの手を回させてどうにか立ち上がる。酔っぱらいを介抱するかのような頼りない歩調で2人が離れていくのを少しの間見送ってから、ゆっくりと立ち上がってガンを飛ばす。

「悪いな。アタシとしたことが、ずいぶん待たせたみたいだな。さつさとやろうぜ、なあ？」

「朝顔、一本松、ロベルト、青木、夕顔、それに今の若造が遊野、だったか？これまでのすべてが所詮は茶番、デュエルポリス。つまり貴様、そしておおかたこの近くに潜んでいるだろう鼓を焼き滅ぼすまでの前座に他ならないわけだ」

「そしてアンタはその前座相手に粋がって調子乗ったカス、か。まったく、音に聞こえた『ワンシヨットキラ』様が今となつちや不意打ち専門とは、落ちぶれ過ぎて掃除のしがいもないな」

意地の悪い、皮肉たっぷり笑顔を見せる。実はここでほんの少しだけ糸巻は、挑発を普段よりもさらに念入りに行っていた。先ほどの避難誘導中、地下の鼓から入った短い通信。

『特定した。お前も後から来い』

つまり清掃ロボのデータと目の前の男の自白から、この爆破テロ計画の本拠地を突き止めたという訳だ。おそらく今頃彼女は、地下からそこに向かっている最中だろう。この2か所を分断して同時に叩くためには、この男にはもう少しの間だけ鼓がこの近くにいて思っている必要がある。余計なことに考えが向かないよう、あえてそのヘイトを自分に向けさせたのだ。

もつとも、そこには自分の趣味が多分に交じっていることも否定しがたいのだが。ともあれ、糸巻の言葉はその期待通りの成果を上げてくれたらしい。デュエルディスクが向けられ、内蔵された新型「BV」の機構がかすかな唸りを上げる。

「デュエル!」……何!?

イレギュラーに叫んだのは、糸巻だった。この場所にいるはずの人影は、もう2人だけのはずだった。

しかし明らかに、響いた声は3つ。そうなると今のデュエルディスクの設定はタイムマン専門……バトルロイヤルやタッグデュエルといった特殊な多人数形式での想定は最初からされていない状態のため、必然的に余りが生まれる。対戦相手が存在しなかったことを示すランプが点灯する自らのデュエルディスクに目を落とし、次いで第三者の声が生じた自らの後方に困惑した視線を向ける。今の声は、間違えるはずがない。

「八卦ちゃん……!」

青い顔、震える足。それでも精一杯にニツコリと笑い、デュエルディスクを構えていたのは、この場を離れたはずの少女だった。その後ろには小さくうずくまった、しかし目だけはこちらに向けて全てを見届けようとしているその親友の姿もある。

「申し訳ありません、お姉様」

「ほう、これは面白い。どうせこの場にいるのならば、誰から血祭りにあげようとさして変わりはない」

「……話は後だ、今すぐサレンダーしろ!遊びじゃないんだぞ、八卦ちゃん!」

冷酷な言葉だが、そこに嘘やはったりはない。やると言ったらこの男は、本当にこんな少女相手であつても容赦なく牙を剥くだろう。それを察し、すぐにダメージを受ける前にデュエルを終了させる数少ない方法、サレンダーを命じた。

「いくらお姉様のお言葉でも、それはできません!」

しかしそんな糸巻の怒声にも、この少女としては珍しく即座に声を荒げて拒否する。大きく息を吸って少し恐怖も和らぎ落ち着いたのか、乾いた唇をゆっくりと舐める。

「……申し訳ありません、お姉様。私には、何が正しいのかわかりません。ですが、何が間違っているのかはわかります。師匠や遊野さん達を傷つけて、私の大切な友人を悲しませて、何よりお姉様を苦

しませて。その原因を黙って見過ごすなんて、私にはできません！」
「だからって……ええい、クソツ！」

あらん限りの呪いを込めて舌打ちし、もはや使い物にならない自らのデュエルディスクを停止させる。今の短い言葉だけでも、少女の決心の固さは容易に読み取れた。彼女がどれだけ望もうと、もはやこのデュエルは決着がつくまで終わらないだろう。腹立ちまぎれに頭から怒鳴りつきたい衝動をやつとの思いで抑え、代わりにこの状態で打てる最善の一手は何かを模索する。彼女にとって大変遺憾な話ではあるが、下手に否定の言葉を続けて少女の気を散らすのは選択肢としては最悪だろう。

結局、見ていることしかできないのだ。自分の無力さを噛みしめながら、せめてこれぐらいはと半壊したステージの後ろで小さく震えながら成り行きを見守っていた竹丸の近くへと移動する。もし攻撃の余波などが飛んできて、最悪彼女自身が盾となれるように。

「……いいか、八卦ちゃん。やつちまったもんは仕方ない、だから最後にひとつだけ言わせてもらう」

その言葉に、少女が小さく振り返る。その目にはこれから起きることへの恐怖と、彼女の言いつけを守らなかつたことで見捨てられるのではないか、という質の違う恐怖が混じりあっていた。

これが終わったら今度という今度はきつちり締めておこうと決意を固めつつも、今だけは少女が無意識に求めている言葉をかけるにとどめておく。そのあたりの駆け引きは、随分と手慣れたものだ。

「八卦ちゃんの腕なら、十分勝機はある。その瞬間の読みを外すんじゃないぞ」

「……はい」

効果はてきめん、ぱあつと少女の表情が明るくなる。その純粋さ、悪く言えば単純さが、糸巻には眩しかった。彼女の住む世界はどうに、なにもかもがそんな簡単な話ではすまないのだから。

「私の先攻です。来てください、エレメンタルヒーロー E・HERO ソリッドマン！」

E・HERO ソリッドマン 攻1200

いまだ黒煙たなびくフィールドに最初に現れたのは、ソリッド 固体の名を持

つ大地のヒーロー。おもむろに足元の地面へとその腕を突き刺すと、地中から植物の蕾そのものの腕を掴んで引き上げる。

「ソリッドマンが場に出た時、私は手札からレベル4以下の仲間を特殊召喚できます。行きますよ、私の信じる最強のヒーロー。クノスペ！」

E・HERO クノスペ 守1000

まずクノスペを場に出すことから始まる、お決まりの布陣。先攻1ターン目なためダイレクトアタッカーを出すその行為に意味などないようにも見えるが、それでも少女は意気揚々と自らの信じるカードを選んだ。その脳裏をよぎるのは、先ほど見ていたワンショットキル。それに対抗するための策を、頭の中で組み立てる。

「……カードを2枚伏せます。これでターンエンドです」

「俺のターン。笹竜胆、か。プロデュエリストを倒し、自分の実力を勘違いしたか？あの程度の女を下したところで、自慢になりはしない。子供のお遊びとはわけが違うことを教えてやろう……手札より、使神官―アスカトルの効果を発動！手札1枚を捨てることでこのカードを特殊召喚し、さらにデッキよりチューナーモンスター、赤蟻アスカトルを呼び起こす。ただしこの効果を発動するターン、俺はシンクロモンスターしかエクストラデッキからは特殊召喚できない。出でよ、アスカトル」

使神官―アスカトル 守1500

赤蟻アスカトル 守1300

杖を持つ新歓と巨大な蟻のモンスターを前に、ほとんど反射的に少女はデュエルディスクから墓地を確認していた。捨てられたカードは、ADチェンジャー。墓地から発動してモンスターの表示形式を変更する厄介なカードであり、恐らくは守備を固めようとする相手モンスターを強引に攻撃表示にしてワンショットキルを補助するために選ばれたのだろうことは想像に難くない。

「レベル5の使神官に、レベル3の赤蟻をチューニング。シンクロ召喚、レベル8。炎斬機マグマ」

☆5+☆3||☆8

炎斬機マグマ 攻2500

「さらに魔法カード、儀式の下準備を発動。デツキより儀式魔法、ジャベリンビートルの契約及びそのテキストに記された儀式モンスター、ジャベリンビートルを手札に加える。そして契約を発動。手札からレベル8モンスター、究極完全態・グレート・モスをリリースし、ジャベリンビートルの儀式召喚を執り行う」

ジャベリンビートル 攻2450

炎の剣を手にした硬質のボディを持つ剣士の隣に、2足歩行するクワガタやカブトムシのような甲虫じみたモンスターが並んだ。ノコギリクワガタの顎めいた先端の特異な槍を構え、背中の羽根を薄く広げて突撃の指示を待つ。

「そして墓地に存在する赤蟻アスカトル、及び究極完全態・グレート・モス。この昆虫族モンスター2体を除外することで、手札よりデビルドージャーを特殊召喚する」

デビルドージャー 攻2800

地響きと共に大地を砕き、地中から赤い巨大なムカデ型のモンスターが無数の脚を蠢かせて飛び出してきた。2本の触覚が獲物となるヒーローの位置を定めると、開いたその口からべちゃりと涎が垂れる。

「上級モンスターを、もう3体も……」

「言ったはずだ、子供のお遊びとはわけが違う、とな。バトル、炎斬機マグマでソリッドマンに攻撃！」

炎の剣が空気を裂き、灼熱の軌跡が固体のヒーローへ迫る。このまま一斉攻撃を前になすすべなくされるのか、と思われた瞬間、少女は小さく微笑んだ。

「残念ですが、その攻撃は通しませんよ！速攻魔法、マスク・チェンジ・セカンド！手札を1枚捨ててソリッドマンを墓地に送り、同じ属性を持つM・HERO1体を変身召喚します。英雄の蕾、今ここに咲き誇る。金剛の大輪よ咲き誇れ！変身召喚、ダイアン！」

M・HERO ダイアン 守3000

ソリッドマンの装甲が、ベキベキと音を立てて成長する。手足の一

部のみを覆っていたそれはやがてその全身を守る鎧となり、その背からは青いマントが延びて風にたなびく。その右手にはいつのまにかレイピアが握られ、切っ先からダイヤモンドの輝きを放った。

「そしてこの瞬間、魔法カードの効果によって墓地に送られたソリツドマンの効果が発動します。私の墓地からレベル4以下のヒーローを……手札コストによって捨てたヒーロー、クノスペを蘇生です！」
「これでフィールドにはE・HEROが2体。クノスペ2体が互いを攻撃対象に選べなくさせるロックを作り、残るダイアンも3000の守備力ならあのメンツに突破はされない、か。やるじゃねえか、八卦ちゃん」

「私は、絶対に負けません！」

E・HERO クノスペ 守1000

攻撃を封じ込め、返しのターンではダイレクトアタッカーのクノスペでライフを削る。さらに攻撃力2800のダイアンでマグマを戦闘破壊すればその効果により、デッキから3体目のクノスペを特殊召喚しての追撃も可能。予想以上の大量展開こそされてしまったもののおおむねの流れは少女の計算通り、このバトルフェイズさえ乗り切ってしまうえば勝機はぐっと近くなる。

いける。しかしそう思った刹那、その希望もあっさりと打ち砕かれた。

「それで防ぎ切ったつもりか？速攻魔法、バーサーク・スケールズ 蛮勇鱗粉を発動。このターンの間、選択したモンスターの攻撃力を1000アップさせる」

ジャベリンビートルとデビルドージャーが羽と無数の脚を一齐に動かすと赤い鱗粉が周囲に舞い、それがまとわりついたマグマの全身が文字通りマグマのごとく危険な赤色に変色する。その勢いを増した刃が、金剛のレイピアと鎧をいともたやすく両断してその首を跳ね飛ばした。

炎斬機マグマ 攻2500↓3500↓M・HERO ダイアン
守3000 (破壊)

「そんな……！ですが、クノスペのロックはまだ！」

「マグマの効果発動。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した

時、相手フィールドのカードを2枚まで破壊する。俺が選ぶカードはその伏せカード、及びクノスペのうち1体。これでその貧弱なロツクは瓦解する」

「クノスペっ！」

ダイアンの血を吸ったマグマの大剣が灼熱の光を放ち、互いをかばい合っていたクノスペの片方と伏せカードがその光に呑み込まれる。1瞬で守りの布陣を壊滅させられた少女に、2体の昆虫の毒牙が迫る。

「その前に私は今破壊されたカード、クイック・ブースター速攻魔力増幅器の効果を使います……！このカードが相手によって破壊された時、デッキから速攻魔法カード1枚を手札に。私が選ぶカードは、地獄の暴走召喚です」

「次のターンへの布石か？まあいい、ジャベリンビートルで最後のクノスペに攻撃」

ジャベリンビートル 攻2450↓E・HERO クノスペ 守1000 (破壊)

突き出された槍は、蕾の体をあつかりと貫いて消滅させる。これで少女の前に壁はなく、お膳立ての整ったフィールドをデビルドージャーが迫る。

「ひっ……！」

「デビルドージャーでダイレクトアタック」

デビルドージャー 攻2800↓八卦 (直接攻撃)
八卦 LP4000↓1200

「あ……！」

肌食い込むデビルドージャーの牙が、2800のダメージの痛みとして実体化される。その激痛もさることながらそれ以上に間近に迫った巨大な昆虫によって自分の体が咀嚼される原初的な恐怖が体を支配し、少女に悲鳴を上げることすらも許さない。柔らかい皮膚を貫いた硬質の、しかしどこか生々しい生の息遣いを感じる感触と、そこに付着したわずかに粘性のある涎が否応もなく血流を通って自分の中にわずかに流れ込むような……。

しかし始まった時と同じく、唐突にその瞬間は終わった。とりあえ

ず一噛みで満足したのか、ゆっくりと少女を放した赤い巨体が自らのフィールドへと引き下がっていく。その様子をぼんやりと見つめながら、喪失感にぼんやりと膝をつく。

「八卦ちゃん！」

糸巻の、そして竹丸の声が遠くに聞こえる。それでもこの痛み、以前に夕顔と廃図書館でデュエルした際とは比べ物にならないほどの……。

そこまで意識が飛んだ時点で、はっと目を見開いた。そうだ、このデュエルはもはや、自分だけの戦いではない。このまま倒れようなどと、つい先ほどお姉様に切った啖呵はなんだったのか。目の前の男は師匠の、そしてたくさんの人の仇でもあるのだ。ぼやけていた視界が急速にクリアになり、完全に体が崩れ落ちる前にか両手をついて立ち上がる。

「まだ……まだです！」

「ほう。子供のわりには多少は根性があるな。それともただの蛮勇か？ いずれにせよ、デビルドージャーの効果を発動。このカードの戦闘で相手に戦闘ダメージを与えた時、相手のデッキトップのカードを墓地に送る。そしてエンドフェイズ、蛮勇鱗粉の効果を受けたモンスターの攻撃力は2000ダウンする。これでターンエンドだ」

炎斬機マグマ 攻3500↓1500

「私の、ターン！」

少女の場は壊滅状態にあり、ここで引くカードによってはそのまま敗北もありうる。

しかし、そんな心配は皆無だった。少女には自信があった。私のデッキなら、必ず次の一手を引かせてくれる。そして引き抜かれたカードは、果たして少女の祈りに応えた。

「ローンファイア・ブロッサムを召喚し、モンスター効果を発動です。フィールドの植物族をリリースすることで、デッキから植物族1体を特殊召喚します」

ローンファイア・ブロッサム 攻500

ひよっこりと空になったフィールドから芽を伸ばした炎の花の蕾

が、みるみる膨らんでやがて内側から弾ける。そして蕾から生まれたのは、さらなる蕾のモンスターだった。

「この効果で私は、最後のクノスペを特殊召喚。そして私のフィールドに攻撃力1500以下のモンスター1体のみが特殊召喚されたこの瞬間をトリガーとして速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動です！」

E・HERO クノスペ 攻600

E・HERO クノスペ 攻600

E・HERO クノスペ 攻600

トリガーとなったモンスターと同名モンスターを可能な限りその手札、デッキ、墓地から特殊召喚する速攻魔法、地獄の暴走召喚。強力な展開能力の半面デメリットも大きく、相手プレイヤーにも自身の場に存在するモンスターの同名カードを可能な限り展開することを許してしまう。しかし今、蛇ノ目のフィールドには特殊召喚モンスターが3体、いずれも蘇生制限を満たした同名カードが墓地に存在しない。つまり、特殊召喚できるカードが存在せず、実質的にデメリットもない。

「先ほどのお返しです……！クノスペは自身以外のE・HEROが存在するとき相手プレイヤーにダイレクトアタックができ、さらにクノスペの戦闘でダメージを与えるたびに攻撃力を100アップ、守備力を100ダウンさせます。ダイレクトアタック、突撃クノスペシャル！」

E・HERO クノスペ 攻600↓蛇ノ目 (直接攻撃)

蛇ノ目 LP4000↓3400

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

「やいらにあと2体、連続攻撃です！」

E・HERO クノスペ 攻600↓蛇ノ目 (直接攻撃)

蛇ノ目 LP3400↓2800

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

E・HERO クノスペ 攻600↓蛇ノ目 (直接攻撃)

蛇ノ目 LP2800↓2200

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

クノスペの攻撃力では、今はまだ攻撃力の落ちたマグマにすら届かない。それでも3体の蕾はその小さな手足で高く高く飛び上がり、デビルドージャーの巨体をも踏み越えて蕾の拳で精一杯に殴りつける。3回連続の攻撃は、小さいながらも確実に蛇ノ目のライフを削り取っていた。

「これでターンエンドします」

「つまり真似を……俺のターン」

引いたカードに目を通した蛇ノ目が、つまらなさそうにふんと鼻を鳴らす。

「魔法カード、モンスターゲート。俺のジャベリンビートルをリリースし、デツキを上から順にめぐり最初に出た通常召喚可能なモンスターを特殊召喚する。通常魔法、シンクロキャンセル。速攻魔法、超進化の繭。特殊召喚モンスター、グレート・モス。特殊召喚モンスター、ジャイアントワーム。レベル2モンスター、増殖するG。よって増殖するGを特殊召喚する。命拾いしたな」

増殖するG 守200

増殖するGは手札にあつてこそその1枚、そこにあつて初めてその真価を発揮するカードであり、間違っても召喚するような代物ではない。そしてチューナーのマグマと合わせてもそのレベル合計は10と、蛇ノ目のエースたるレベル12のシンクロモンスター、炎斬機ファイナルシグマの召喚にはわずかに届かない。もしあのカードの召喚を許していたら、その完全耐性は攻撃対象にならないクノスペのロックを無視していともたやすく少女のライフを奪い去っていただろう。

密かにほつと息を吐く少女だが、だからと言って気を抜けるわけではないことは先ほどのターンの攻防から身に染みてわかっている。

「超進化の繭の効果を発動。このカードを除外することで墓地の昆虫族モンスター1体をデツキに戻し、カードを1枚ドローする。ジャベリンビートルを再びデツキに戻し、ドロー」

転んでもただでは起きない、というべきか。枯渴した手札を補充し、素早く目を通す。もしここでレベル4、あるいはレベル2の

チューナー以外のモンスターを引かれたら、たった今の延命も何の意味もない。だが、運命の女神は今回も少女に微笑んだようだ。

「ターンエンド」

「私のターン、ドローです」

そしてあと一手が引ききれないのは、少女の側も同じだった。ヒーローの攻撃力を爆発的に上昇させる切り札、オネスティ・ネオス。あのカードを何とかして手札に引き込めれば、クノスペの効果と合わせすぐにでも勝負がつく……そこまでいかずとも、少女のデッキには憑依装着やサンライザーを出すためのミラクル・フュージョン等の強化カードは数多いが、なかなかそれが引き当てられない。ある程度まではデッキも助けてくれるが、それ以上は自力で頑張れということだろう。クノスペ3体の攻撃力合計は2100、あとほんの100だけ上乗せできれば終わる話なのだが。

そこで少女は、ひとつ賭けに出ることにした。

「墓地に存在する魔法カード、シャッフル・リボーンの効果を発動します。このカードを除外することで、私のフィールドのカード1枚をデッキに戻し1枚ドロー。クノスペの1体をデッキに戻しますよ」

先ほどのデビルドージャーの効果によってもたらされたチャンス、失敗すればアタッカーを失うことになる一種のギャンブル。しかしこのみち、この手札と盤面ではこのターン中に勝つことは不可能だった。ならば、こんな手を使うのも悪くない。

「……ドロー……」

引いたカードを見て、わずかに思案する。しかしその迷いも一瞬のこと、すぐさま力強くその1枚をデュエルディスクへと滑り込ませた。

「魔法カード、死者蘇生を発動！私の墓地からローンファイア・ブロッサムを蘇生し、このターンも自身をリリースして効果を使います。来てください、桜姫^{おうひ}タレイア！そしてこのカードの攻撃力は私の植物族1体につき100アップし、さらにこのカード以外の植物族は効果破壊耐性を与えられます」

ローンファイア・ブロッサム 攻500

桜姫タレイア 攻2800↓3100

巨大な桜の花びらの上で艶然と微笑む、色白和装な花の精。自身を含め3体の植物族の存在によりその攻撃力は3000の大台を突破し、フィールド全体でも単独トップに躍り出る。

「それでマグマかデビルドローザか、いずれにせよ戦闘破壊を狙うつもりか？」

「いいえ、違います！」

「なに？」

予想外の言葉に、わずかに蛇ノ目の表情が変わる。そして対峙する少女が取り出したのは最後の手札1枚、このターンの通常のドロウで引いたカード。

「私のフィールドに存在するレベル7以上のモンスター、タレイアを対象として魔法カード……ギャラクシー・クイーンズ・ライト、発動ですっ！」

「おいおい八卦ちゃん、マジかよ……！」

信じられないものを見たそばかりに首を振る糸巻の眩きが、聞こえているのかいなのか。最初に対象に取られたレベル8のタレイアと同じ数値へと、2体のクノスペのレベルが上書きされる。

E・HERO クノスペ ☆3↓☆8

E・HERO クノスペ ☆3↓☆8

「準備完了です。私はレベル8のクノスペ2体、そしてタレイアでオーバーレイ！3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシース召喚！熱血の魂で、私は道を切り開きます！ランク8、熱血指導王ジャイアントレーナー！」

熱血指導王ジャイアントレーナー 攻2800

傷つき倒れた夕顔の手から、最後の力で繋がれた師弟の絆。今再び先ほどの雪辱を果たすべくフィールドへと現れた武道の巨人が、雄たけびと共にバットと竹刀の二刀流で仁王立ちする。

「行きますよ、ジャイアントレーナーの効果、発動！オーバーレイユニットを1つ使い、自分のデッキからカードを1枚ドロウします。そしてそのカードがモンスターカードだった場合、相手プレイヤーに8

00のダメージです！まずは1回目、ドロー！」

熱血指導王ジャイアントレーナー(3) ↓(2)

「……魔法カード、貪欲な壺！モンスターではないため、ダメージは発生しません……！」

「おおかた3回連続でモンスターを引き、俺のライフを0にする目論見だったんだろうが。所詮は子供の浅知恵、1度目から失敗するとはな」

嘲りの言葉に熱くなった頭を、唇を噛んで堪える。ジャイアントレーナーは黙したまま、何も語らない。その背中をじつと見て、何が足りなかったのかを考える。

師匠が私に託したジャイアントレーナーのカード、その力でこのデュエルに終止符が打てなかったのは自分の未熟さに他ならない、そう少女は結論付けた。目を閉じて息を吸い、自分の内側に神経を集中させる。師匠は先ほど、なんとやっていただろう……。

『今俺がモンスターを引くことができたのは、ひとえに俺の熱血魂！熱く燃え滾る怒りと熱血にこのジャイアントレーナーが、そしてこのデッキが、全力をもって応えてくれた、ただそれだけだ！』

これだ！ああ、どうして忘れていたのだろう。一番大切なことは、すでに示されていた。デッキの一番上に手をかけて、ありったけの思いをその中指と人差し指に集中させる。自然とその2本の指に力がかもり、かっと目を見開いた。

「返しの一太刀、熱血効果発動です！師匠、私に力を……！ドロー、だあああああつ！」

次いで2枚目。はたから見れば明らかに必要以上の力と気合を込めて全力で引き抜いたカードを表にすると、その表情がパツと明るくなる。

「見えました、熱血魂！モンスターカード、E・HERO シャドー・ミスト！受けてください、800のダメージを！」

ジャイアントレーナーが満足げに重々しく頷くとその左手のバツトが唸りをつけて空を裂き、重い風切り音と共に振り切られる。あまりの勢いによって発生した衝撃波が、蛇ノ目の体を襲った。

熱血指導王ジャイアントレーナー(2) ↓ (1)

蛇ノ目 LP2200 ↓ 1400

「あと1回！ジャイアントレーナーの熱血効果発動、ドロロー……モン
スターカード、E・HERO リキッドマン！さらに800のダメー
ジです！」

熱血指導王ジャイアントレーナー(1) ↓ (0)

蛇ノ目 LP1400 ↓ 600

両手の竹刀とバットを投げ捨てて、徒手空拳となったジャイアント
レーナーがクレーターを生み出すほどの踏み込みと共にその拳を手
近にいたデビルドローザーに叩きこむ。全力を込めて殴り飛ばされた
その巨体が宙を舞い、派手に蛇ノ目の真上へと崩れ落ちた。しかしさ
ほどのダメージには至らなかつたのか、すぐに無数の脚をばたつかせ
てバランスを取り直し起き上がる。

「その程度か？あいにくだが、俺のライフはまだ残っているぞ」

「承知の上です、貪欲な壺を発動！私の墓地からクノスペ2体、ダイア
ン、ローンファイア・ブロッサム、タレイアをデッキに戻し、カード
を2枚ドロウします。そして融合を発動！手札のE・HERO、リ
キッドマン及び場の炎属性モンスター、ジャイアントレーナーを素材
として、融合召喚！」

自身のオーバードレイ・ユニットを使い切ったジャイアントレーナー
はなんの耐性もなく、このままでは返しターンで成すすべなく倒さ
れるのがオチだろう。すかさず融合素材とし、さらに次への布石を打
つ。空中に浮かんだ渦の中に水と炎、2体のモンスターが吸い込まれ
て混じりあう。

「英雄の薨、今ここに咲き誇る。紅蓮の大輪よ咲き誇れ！融合召喚、

E・HERO ノヴァマスター！」

E・HERO ノヴァマスター 守2100

炎の色をした鎧に身を包む紅蓮の戦士が、片膝をつけて守備の姿勢
をとる。攻撃力だけ見ればこのまま攻撃に繋げれることでマグマ程
度ならば戦闘破壊も狙えるが、あいにくとジャイアントレーナーの効
果を1度でも使用したターン、そのプレイヤーは攻撃宣言が行えな

い。

では、なぜあえて融合召喚を行ったのか。その答えは、その素材にあった。

「リキッドマンは1ターンに1度、融合召喚の素材となった際にカードを2枚ドローし、その後手札1枚を捨てます。この時にシャドー・ミストを捨てることで、その効果を発動。デツキから別の仲間、ヴィジョンヒーローV・HERO ヴァイオンを手札に加えます。そして魔法カード、闇の誘惑を発動！カードをさらに2枚ドローし、手札から闇属性のヴァイオンを除外です」

ジャイアントレーナーの効果も合わせ、これで少女の手札は4枚。手札消費の粗さが弱点のHEROとしては、すでにデュエルが中盤に差し掛かっていることを考えると驚くべき枚数だと言えるだろう。その内容を一瞥し、一気にその全てをデュエルディスクに押し込んだ。

「最後にカードを4枚セット。このエンドフェイズにシャツフル・リボーンの効果により私は手札1枚を除外しなければいけませんが見ての通り私の手札はすでに0。よって、このデメリットは発生しません」

「俺のターン。増殖するGをリリースし、2枚目のモンスターゲートを発動。1枚目、レベル4モンスター、斬機^{ディヴィジョン}。よってディヴィジョンを特殊召喚する」

「あのカードは……？」

斬機^{ディヴィジョン} 攻1500

マルチプレイヤーと同じ金色のカラーリングの斬機、しかし手にした武器が違う。細身の二刀流を構えていたあちらとは対照的に、このディヴィジョンが持つのは自らの装甲と同じく金色に輝く巨大な薙刀だった。

「レベル4のディヴィジョンに、レベル8のマグマをチューニング。ちっぽけな羽虫の一飛びが、強固なる要塞を突き崩す嵐となる。シンクロ召喚、レベル12。すべてを打ち砕け、ビー・フォースB・F―決戦のビッグ・バリスタ！」

☆4＋☆8＝☆12

B・F―決戦のビッグ・バリスタ 攻3000

「ビッグ・バリスタの特殊召喚時、墓地の昆虫族モンスターをすべて除外することで、除外されている昆虫族1体につき500の全体弱体化を行う。ビー・エフエクト・テンペスト！」

あの時と同じ組み合わせから、あの時と同じシンクロモンスター。そして続く効果も、あの時と全く同じ。息を呑む少女の目の前で、ビッグ・バリスタの羽音が不気味に響く。現在蛇ノ目の墓地に存在する昆虫族モンスターは全部で3体だが、弱体化にはすべての除外されている昆虫族が加算されるため、再序盤にデビルドージャーを特殊召喚するため除外された2体も合わせてかかる数値は5体分、つまり2500となる。

「そしてこの発動にチェーンし、デイヴィジョンのモンスター効果を発動。このカードがフィールドから墓地に送られた場合、相手モンスター1体の攻撃力を半分にする」

E・HERO ノヴァマスター 攻2600↓1300↓0 守2100↓0

「さて……ビッグ・バリスタは貫通能力を持ち、このまま攻撃するだけでも勝利はできる。だが、その4枚の伏せカード。おそらくはシャツフル・リボーンのデメリットを回避するためだけのブラフも混じっているだろうが、ここは安定を取るとしよう。シンクロキャンセルを発動し、ビッグ・バリスタをエクストラデッキに戻すことでその素材2体を蘇生する」

炎斬機マグマ 攻2500

斬機デイヴィジョン 攻1500

「このコンボも、あの時と同じ……！」

「その通りだ。ならば当然、次も予想がつくだろう。レベル4のデイヴィジョンに、レベル8のマグマをチューニング。我が復讐の真なる炎よ。研ぎ澄まされし一刀のもと、悲願の覇道を切り開け！シンクロ召喚、レベル12。炎斬機ファイナルシグマ！」

☆4＋☆8＝☆12

炎斬機ファイナルシグマ 攻3000

炎の柱が突如として天高くに立ち昇り、その中央から純白の炎を纏った最後の斬機が歩を進める。高熱のあまり陽炎が発生し周りの風景がゆらゆらと揺らぐ中、硬質な足音と共に近づいてくるその姿だけがただ真つすぐなまま存在し、そこが世界の中心であるかのような錯覚さえも起こさせる。

「ファイナルシグマはエクストラモンスターゾーンに存在する限り、斬機カード以外の効果を受け付けない。反面このまま攻撃しても貫通ダメージを与えられないが、補強の方法はある。墓地よりADチェンジャーの効果を発動。このカードを除外し、ノヴァマスターの表示形式を変更する」

「ノヴァマスター……」

E・HERO ノヴァマスター 守0↓攻0

片膝をついていたヒーローが操り人形のようにぎこちない動きで立ち上がり、ファイナルシグマと強制的に相対する。平常時ならばまだしも、今のノヴァマスターにファイナルシグマの一撃を受けきるだけの力は残されていない。

「バトルフェイズ、ファイナルシグマでノヴァマスターに攻撃。
Quod Erat Demonstrandum!」

処刑の刃が赤熱の軌跡を描き、無防備なノヴァマスターへと振り下ろされる。竹丸がもう見ていられないと目を固く閉じ、糸巻も目を逸らしこそしなかったもののへし折れてしまいそうなほどに強く歯を食いしばる。

誰もが敗北やむなしと感じた最後の瞬間。しかし、当の少女だけはまだ諦めていなかった。

「それでも私は、まだ！リバースカードオープン、融合解除！」

「何!?!」

熱血指導王ジャイアントレーナー 守2000

E・HERO リキッドマン 守1300

このデュエルが始まって初めて、蛇ノ目の声に動揺が混じる。力なく立ちすくむノヴァマスターの瞳に生氣が蘇り、目前まで迫っていた

刃をその元々の姿である炎の巨人と水のヒーローに分離して回避した。

「融合解除はフィールドの融合モンスターをエクストラデッキに戻し、その素材が私の墓地に揃っていればそれを特殊召喚できます。残念ですが私の伏せカードは、あなたのモンスターに影響を与えるものではありませんでした」

「小賢しい真似を……ファイナルシグマ、リキッドマンに攻撃しろ！」

炎斬機ファイナルシグマ 攻3000↓E・HERO リキッドマン 守1300(破壊)

再び発生した炎の軌跡が、いともたやすくリキッドマンを焼き尽くす。だが、その奥の少女は何のダメージも受けていない。

「デビルドローザーでジャイアントトレーナーに攻撃！」

「させませんよ、速攻魔法ピアニッシモ！このターンジャイアントレーナーの元々の攻撃力は1000になり、戦闘でも効果でも破壊されません！」

熱血指導王ジャイアントレーナー 攻2800↓100

デビルドローザー 攻2800↓熱血指導王ジャイアントレーナー 守2000

「つまりん延命だな、運のいいことだ」

「運がいい？確かにそれもありましたが、もっと言うならばあなたの考えすぎでしたね。もしそこにいるのがファイナルシグマではなくて貫通効果のあるビッグ・バリスタのままだったなら、あるいはこのターン中に私のライフが0になっていた可能性もありましたから」

大きくライフこそ減らしたものの、ともあれ少女はこのターンの猛攻も凌ぎ切った。小さく舌を出し、ここぞとばかりに糸巻流の追い打ちの言葉を投げつける。悪い言葉遣いは教わったものではなく、ほぼ毎日通い詰めているうちに自然と身についてしまった悪影響である。

「……………ターンエンドだ」

何も言い返しはしなかったが、その長い沈黙は今の挑発の効力を雄弁に物語っていた。それに対し少女はにっこりと笑い、次のカードを

引く。

「私のターン！永続トラップ、強化蘇生！この効果により私の墓地からレベル3のクノスペをレベル1つ、そして攻守を100アップさせた状態で蘇生します」

E・HERO クノスペ ☆3↓4 攻600↓700 守1000↓1100

少女の手にかかれば、クノスペはあらゆる箇所から何度でも現れる。いくら傷つき倒れようとも、少女が信じる限り何度でも。植物の生命力と英雄の魂を胸に、必ず戦いの場に蘇る。

そして、勝利に向けてその小さな体から秘めたパワーを精一杯に発揮するのだ。

「魔法カード、ヒーローハートを発動。クノスペの攻撃力をこのターン半分にする代わりに、1ターンに2回の攻撃を可能とします」

E・HERO クノスペ 攻700↓350

「2回攻撃……だが、攻撃力を半減だと？」

「こういうことです！魔法カード、受け継がれる力！私のフィールドからジャイアントトレーナーを墓地に送ることで、その攻撃力2800をそのままクノスペに引き継ぎます！」

E・HERO クノスペ 攻350↓3150

ジャイアントトレーナーの姿が実体から炎のように揺らめくエネルギー体になり、その熱血エネルギーがクノスペの内部へと全て吸い込まれていく。自分の何倍もの体躯を持つ熱血巨人の熱血エネルギーを凝縮されて受け継いだクノスペの全身から、燃え盛る炎のオーラが溢れ出る。

「これで最後です！クノスペ、まずはデビルドージャーに攻撃！」

炎を纏った蕾の拳が、恐ろしい巨大昆虫を殴り飛ばす。地響きと共に倒れたその体が見る間に燃え上がり、断末魔の絶叫と共に巨大な火柱と化した。

E・HERO クノスペ 攻3150↓デビルドージャー 攻2800 (破壊)

蛇ノ目 LP600↓250

「くっ……なるほど、確かにもう1度の攻撃でファイナルシグマは倒れるだろう。だが、そこで発生するダメージは150。俺のライフは残り100、それだけあれば十分だ。クノスペの攻撃力はこのターンで元に戻る」

「いいえ、そんなことにはなりませんよ」

これまでの激闘には似つかわしくない、むしろ静かなほどの声で、最後通告が下される。事実今の少女の心中には勝利を掴んだという高揚もなければ、仇を取ったことへの達成感もない。今はただ、やつと終わったんだという思いだけが占めていた。

そしてデビルドージャーに打ち勝ったクノスペの両手と頭の蕾に、炎のオーラに照らされてほんの少しだけ赤みがさしはじめる。

「……お忘れですか？クノスペは相手に戦闘ダメージを与えた時にその攻撃力が100上昇し、守備力が100下降することを。よって次の戦闘で、クノスペの攻撃力は……」

E・HERO クノスペ 攻3150↓3250 守1000↓900

「馬鹿な、この俺が、『ワンショットキラー』たるこの俺が……！」

「いつまでも昔のままではいられると思うなよ、ってこった。アタシらがこうして昔の栄光に立ち止まってる間にも、新しい風はいつだって吹き抜けてくのさ」

どこか憐れむように、糸巻が小さく呟く。その言葉は蛇ノ目と自身、いったいどちらに向けられたものだったか。彼女はただ、達観したような小さな笑みを浮かべるだけだった。

「クノスペでファイナルシグマに攻撃、必殺クノスペシャル！」

再び振るわれた炎の拳は、先ほどのそれよりもほんの少しだけ早く、強かった。それを剣の腹で受け止めようとした爆炎の刃もその勢いを減じさせることすらほとんどできないまま、激突の衝撃で刀身に細かなひびが一齐に走る。次の瞬間には粉々になった刃を突き抜けて、小さな英雄の拳がファイナルシグマのどてっばらに大穴を開けて着地した。

E・HERO クノスペ 攻3250↓炎斬機ファイナルシグマ

攻3000 (破壊)

蛇ノ目 LP250↓0

「……八卦ちゃん」

最初に糸巻が声を掛けたのは声すら上げずにその場に倒れ込んだ蛇ノ目ではなく、ぼんやりとした様子で佇む勝者の少女だった。

「八卦ちゃん！」

お姉様、そして親友の言葉によろやく気が付いたのか、ゆつくりと2人の方へと振り返る。ただそれだけの動作でも先ほどまではアドレナリンがどこかに追いやっていた疲労や痛みが、今更のように少女の全身にのしかかる。それでも、こちらに笑顔を向ける2人の表情はよく見えた。

小さく手を振り、何を言おうかと少し迷ったのち、結局口から出てきたのはシンプルで飾らない、最初に頭に浮かんだ通りの言葉だった。

「……えへへ。やりましたよ、私」

ターソン27 「呪われし」懐古の悲願

広場での長きにわたる決闘が終わりを告げ、新時代の息吹が旧世代を打ち破った、その一方で。

時間は少し巻き戻りその真下、地下の上水道にて。

「特定した。お前も後から来い」

そんな短い呟きをして、薄闇の中を駆ける人影があった。決して広くはない通路にその足音が響き渡り、それに驚いた鼠らしい小さな影が慌てたように自らの住処へと引っ込んでいく。一定の間隔をとって頭上から弱々しく照らす非常灯の光に、銀髪がふわりと揺れる。

その正体は、いまさら言うまでもない。ようやく今回のふざけた計画の根元を掴んだ鼓千輪が、地下のルートを辿りその場所に走っている。走りながらも器用に手元の端末を操作し、立ち止まるのも惜しいとばかりに半ば壁を蹴るようにして強引に方向転換しつつ突き止めたその位置を糸巻へと送信する。

「いったい何が起きて——」

「デュエルポリスの人が——」

一定の距離ごと、地上の世界に通じるマンホールに差し掛かるたびに、地下にいる鼓にも上の混乱が断続的に聞こえてくる。立ち止まっただけでゆっくり耳を澄ましたりその内容を吟味する暇はないが、さぞかし大変なことになっているだろうとは途切れ途切れの単語からでも容易に想像がつく。

「救急車は——」

「ひどい火傷なんだ——」

この様子だと、地上を一手に引き受ける糸巻もしばらくはこちらの援護に来るのは難しいだろう。上の混乱が収まるのを待っていたら、それこそ下手人が逃げてしまう。蛇ノ目は強敵だが、あの糸巻がそうそう後れを取ることもあるまい。ゆえに、こちらは自分が1人で引き受ける。

そう決意を固めながら、頭の片隅では通り過ぎていくマンホールの数を数えていた。この横道に入ってから3つ、4つ、5つ……。

「……と、ここか」

そして、その足が止まる。そこは、とあるマンションの裏手に位置するマンホール。手元の情報によればそのマンションは外周にぐるりと木を植えてあるため、そうそう外から覗かれる恐れもない。まして今は非常事態、住民も反対側のベランダから糸巻たちの戦いを見るのに忙しいだろう。そこまで思考を巡らして鼓は珍しくにやりと笑い、どこかウキウキした気配すら感じさせる様子でデュエルディスクを起動した……ただし、「BV」妨害機能をオフにした状態で。

「真つ当に開けてやつてもいいんだが、あるものは有効活用せねば、な」

誰に言い訳するでもなくうそぶくと、さつと数歩下がって目の前にスペースを空けてから一枚のカードを叩きつける。

「やれ、超重武者ビッグベン―K」

瞬間、何もない空間に実体化した機械仕掛けの僧兵が出現した。腰の排気口から一斉に蒸気を吹き出すと、胸のメーターが緑から限界寸前のレッドゾーンまで一気に針が振れる。そして軋みひとつなく動き出した僧兵は得物の薙刀を手にしていない方の左拳を真上……つまり、頭上のマンホールの蓋へと叩きこんだ。金属同士のぶつかる派手な音とともにその拳はマンホールをその錠ごと力業で跳ね飛ばし、外の光がぼつかりと開いた穴から差し込んでくる。

「よし、ぶっ苦勞」

カードをデュエルディスクから引き上げる。ただそれだけで、先ほどまで空間を占めていた僧兵の姿も煙のように薄れてその質量ごと消えていった。あとは梯子を上り、久方ぶりの地上の空気を吸うだけだ。

まず首から上だけをこつそりと出して、周りの様子を確認する。予想通りあたりに人影はなく、今の騒ぎを聞きつけた人間もない。それを確認してから一息に外に出ると、頭上の眩しさにやや怯む。

軽く服の埃を払った鼓が最初に足を向けたのは、マンション1階の管理人室だった。歩きながら軽く咳払いして、随分久しぶりのオンモードに気持ち切り替える。白いドアをドンドンと強めにノック

し、おそるおそる顔を出した気弱そうな禿げ頭の老人にデュエルポリスの証明書を突きつけながら有無をいう暇を作らせずに畳みかける。「失礼します、私はこの通り、デュエルポリスの鼓と申します。単刀直入に申し上げますと、この物件にはテロリストが潜んでいるとの情報がある筋より手に入りました。よって日本名で言うところの『デュエルモンスターズを用いた犯罪の処罰及び規制等に関する法律』第三章第十一条二節に基づき、当該物件の管理人である貴方には我々に協力していただきます」

淡々と、一切の反論を許さない冷たい言葉が紡がれる。視線を逸らして逃げようにも、相手の目を正面から見据えてまばたきひとつしないう言葉以上に冷たい瞳がそれを許さない。

実はこのとき鼓、その鉄面皮の下ではしれつと犯罪スレスレ、グレー中のグレーに手を染めていた。確かに当該法律自体はちゃんと存在し、言っていること自体もおおむね間違っていない。問題は最後の一言で、実はこの法律は管理人だからといってデュエルポリスへの協力義務なんてものを定めているわけではない。あくまで協力量請ができるというだけの話を、さりげなく自分に有利に聞こえるように改修したのだ。しかも闇雲に話を盛ったのではなく、相手を一目見たうえで法知識は薄いと判断してのことだから余計にたちが悪い。

「後はこちらで終わらせます。市民の皆様には迷惑はおかけしませんので、マスターキーの提出をお願いします」

丁寧な言葉は、拒否権はないと言外に語る。駄目押しに一步詰め寄ると哀れな管理人は酸欠になった金魚のごとく口をパクパクと開け、汗をたらたらと流しながら青い顔で鍵束を取り出した。持ち主の手に合わせて小刻みに震えるそれを受け取ったところで、今度は一步下がって多少なりともプレッシャーから解放してやる。

「ご協力、感謝します。追って連絡を行いますので、それまでこの件は他言無用でお願いします」

下手なことをしたらわかっていいるなと言いたげな……ここで重要なのは先ほどの協力量請と同じく、あくまで明言はしないということだ。脅迫や詐称の寸前で踏みとどまることで、余計な言質を取られる

ことを防ぐ。仮に今の会話が録音されていて出るとこに引き出されたとしても、ふんぞり返って偉そうにこう言い捨てればいい。

『確かに私は言葉足らずだったが、別に間違ったことは言っていないだろう？』

もつとも今回の哀れな管理人の反応を見る限り、そういった面倒に巻き込まれる可能性は低いだろう。まあ、どちらにしても今は関係のない話だ。そして、こんな思考回路だからこそこの女には糸巻の友人などというけつたいな役どころが務まるのだ。

くるりと背を向けてエレベーターに向かい、呼び付けるボタンだけ押して隣の階段へと足を向ける。目当ては4階、そして電光表示によればエレベーターの現在地は6階。とりあえずこのエントランスに呼びつけておけば、もし現場からテロリストの片割れが逃げ出そうとしても多少の時間を稼ぐことができる。

軽い足取りで息ひとつ切らずに登り切り、あまり意味があるとも思えないが一応足音を殺してその部屋……404号室の前で立ち止まる。さあ、問題はここからだ。こうやって追い詰めて、そこからの相手の対応は大きく分けて3つに分けられる。

ひとつが、このまま不意を突ける場合。これは所詮その程度の相手、さほど考える必要もない。厄介なのが残りのふたつで、まずこちらの接近に気が付いた段階で逃亡を図る場合。この手のテロ計画は大体逃亡用のルートが用意してあるものであり、当然その追跡は困難を極める。厄介、というよりもただただ面倒だ。

そしてもうひとつが、こちらを迎え撃つて当初の計画を強行しようとする場合。基本的にはもう後がない破れかぶれの裏返しだが、今回の計画にはカード集めの段階でかなりの金と人員、そして時間が動いている。こちらの選択肢も意識して動くべきだろう。

「……」

デュエルディスクを起動し、対「BV」妨害電波発生装置の出力を最大まで引き上げる。そのまま気配を断ち、音を殺し、合鍵をゆつくりと回す。手の中で、かちりと鍵の開く感覚。

一呼吸あけ、武骨な鉄のドアを最大まで引き開けた。

「デュエルポリスだ、神妙にしてもらおうか！」

最初に鼓の目に飛び込んできたのは、玄関からリビングへとつながる廊下中に散乱した大量のカードだった。セメタリー・ボム、爆導索、機限爆弾……効果もサポートもばらばらなカードたちにただ一つ共通するのは、それが爆発や炎に関するものであるという一点。もしこれが一齐に実体化したら……冷や汗を感じ、小さく唾をのむ。物言わぬカードたちが、ひどくプレッシャーを放っているように見えた。周りに絶えず警戒しながら、ゆつくりと廊下を進む。道中にあつたトイレや風呂場に繋がる扉は全て半開きになっており、そのどこにも人の気配はない。10数えないうちに突き当り、リビングへの扉に辿り着いていた。

「隠れても無駄なんてこと、わかっていると思っただがな。それとも、逃げたの……かつ！」

最後の言葉を言い切ると同時に、土足で木製の扉を蹴り開ける。そこにはまたしても乱雑に積み上げられたカードの山、山、山……そしてその中央で座り込んで鼓を見据える、くすんだ茶髪にワインレッドのジャージ上下といういでたちの小柄な女。立ち上がったとしても、せいぜい鼓の胸ぐらいに頭が届くかどうかだろう。両者の視線がぶつかり合い、先に口を開いたのは部屋の中の女だった。その小柄な体軀からは意外なほどに気だるげな、甘ったるい声が響く。

「来たわね。今、ちょうど蛇ノ目が倒されたところよ。それにしてもデュエルポリスフランス支部長様が直々のお出迎えとは、随分と大きく見られたものね」

「なに、ほんの成り行きでな。それより蛇ノ目の時点だろうとは思っていたが、やはりお前だったか……七曜^{しちよう}」

七曜と呼ばれた女が、鼓の言葉に小さく笑う。積み上げられたカードの山をパラパラと片手で弄びながら、不満げに口を尖らせた。半ば無意識に、そのカードへと視線を向ける。タイム・ボマー、残骸爆破、破壊輪廻。

「あら、私じゃ不満だったかしら？」

「少なくとも、意外性はないな。あの男がよくつるんでいた同業者な

んで、それこそお前ぐらいのものだった」

それもそうねとまた笑いながらも、その目は油断せずに鼓の一挙手一投足を逐一見つめている。もつとも、それは鼓の側も同じことだ。両者の距離はほんの1メートル半、つまりお互いが飛び掛かろうと思えば十分可能なほどでしかない。もしどちらかが隙を見せた場合、両者の会合はデュエル以前に物理的な終焉を迎えるだろう。気軽に聞こえる会話の裏では、すでに心理戦は始まっている。

「彼、昔から私にはご執心だったしね。今回にしたって、ちよつとお願いしたらすぐに首を縦に振ってくれたわよ」

「違くない。目に浮かぶようだな」

さほどおかしくもなかったが、そこで2人同時に笑う。しかし笑えば笑うほど部屋の空気はより重苦しいものになっていき、先に作り笑いを引つ込めたのは七曜だった。

「やめよ、やめ。ねえ、鼓。私としてはね、今度の計画はデモ行為だと思ってるのよ」

「デモ？デーモンの間違いだろう、お前にはぴったりだ」

「あんまり上手くないわよ、それ。デモンストレーション、よ。妨害電波を無視できる新型『BV』と、それを使って引き起こされる大災害。その威力を世界中に知らしめることができれば、各国政府もこちらの要求にノーとは言えなくなる。極端な話、この爆発さえ起こせれば死者傷者なんて0だって構わないの。なんなら、避難誘導だって手を貸してあげるわよ。だから、黙って見ていてくれないかしら？」

「何を言い出すかと思えば。だから手を引けと？身勝手にもほどがあるな」

突然の誘いを、鼓がぼつさりと切って捨てる。しかし七曜はそんな反応も想定の内だったのか、特に怒り出す様子もなく小さく肩をすくめるのみに留めた。そして、また口を開く。

「そう。交渉決裂、ね」

「なんだ、今ので交渉のつもりだったのか。私はてつきり、挑発の役目すらまともに果たせないでいきそこないかと思ったぞ」

「……あなた、最近糸巻に似てきたって言われてない？」

「ふむ、今のほうがよほど効いたな。覚悟しておけ、なかなかお腹が立った」

呆れ顔に皮肉な笑みで返し、互いにデュエルディスクを起動する。お互いにこのまま向かい合っていては襲い掛かる隙などないことを改めて実感し、正面突破に狙いを切り替えたのだ。ぱつと俊敏な動きで立ち上がった七曜が部屋の端、窓際までバックジャンプして距離をとると、近場にあったカードの山がその衝撃に耐えきれず崩れる。ボマー・ドラゴン、大気圏外射撃、ニトロユニット。

「デュエル！」

先攻に選ばれたのは、鼓。素早く手札に目を通すとほぼノータイムでその中から一枚のカードを取り出し、デュエルディスクに置く。最初にマンシヨンの一室に呼び出されたのは、巨大な弩の形をしたモンスター。

「私のターン。超重武者装留イワトオシを召喚する」

超重武者装留イワトオシ 攻1200

「そして超重武者モンスター、イワトオシ1体を左下のリンクマーカーにセット。母なる大地に根を張りて、防衛線を指し示せ。リンク召喚、リンク1。超重武者カカ―C！」

超重武者カカ―C 攻0

イワトオシが渦となつてその頭上に現れた六角形のうち1つの角に吸い込まれる。そして代わりに空中から落下し、ドスリと重い音と共に床へと深々と突き刺さつたのは、機械仕掛けの案山子。

「あら、代わり映えしないわねえ。私もそんなに、人のことは言えないけど」

「この瞬間、フィールドから墓地に送られたイワトオシの効果を発動。デッキから超重武者1体を手札に……」

「はい、灰流うらら。いい加減どこが弱いかはわかつてるわよ、また一昨日来て頂戴」

案山子の周りをどこからともなく湧き上がった桜吹雪がくるくると回り、その視界を塞ぐ。デッキに触るほぼすべての行為に対し明確なメタとなる手札誘発、灰流うららは他の多くのデュエリストと同じ

く鼓に対してもよく刺さる。そして今の鼓は、それに対する更なるカウター手段を持ち合わせていない。

「……ならば、超重武者カカーCの効果を発動！」

機械仕掛けの案山子が、言わら帽子の下でその2つの目を光らせた。左手にくくり付けられたシャイン・クローが、ワキワキとその爪を動かす。

「私の墓地に魔法及び罫が存在しないとき、手札のモンスター1体を捨てることでカカーCはそのリンク先に超重武者1体を守備表示で蘇生できる。コストとして超重武者テンB―N^{ピン}を捨て、このテンB―Nを対象に……」

「あら残念、屋敷わらしよ。墓地のカードに触る効果は、これを捨てることで無効になるわ」

外は昼間だというのに突如として射し込んだ月光に照らされて、起動したはずの機械の案山子が突如としてその出力を落とす。両目からも光が失われ、文字通りただ立ち尽くすのみの鉄くずの塊と化してしまったカカーCの前に、小さく舌打ちする。この再序盤から、いきなり2度にわたる妨害とは。

「カードを伏せ、ターンエンド」

「ふふっ、そんなに眉間に皺を寄せないの。お肌は正直なんだから、そろそろ痕が残り始めるわよ？ 私のターン、ドロ。永続魔法、呪われしエルドランドを発動」

部屋中に所狭しと乱雑に積み上げられたカードが、七曜の位置を中心としてその姿を変化させていく。あるひと山は黄金の騎士像に、床に放り出された数十枚は黄金の階段に……しかしその大部分は、見上げるほどに途方もなく巨大な黄金の宮殿の一部となる。当然そんなものが入るほど、このマンションは大きくない。ソリッドビジョンがすぐ上の天井に、果てしない宵闇の空を投影したのだ。

気が付けば鼓の足元も、いつの間にか黄金に輝く石畳に変化していた。光を感じてふと見上げた宮殿の最上部では、そこに安置された不気味に赤く光る宝石が脈動していた。

「呪われしエルドランドの効果発動。800のライフを払うことで、

デッキからエルドリッチ、または黄金郷1枚を手札に加えるわ。私が選ぶ1枚はモンスターカード、黄金卿エルドリッチ」

七曜 LP4000↓3200

エルドランドの赤い宝石がひときわ強く血の光を放ち、七曜がデッキからレベル10ものモンスターを選んで手札に加える。

「そして手札から、黄金卿エルドリッチの効果を発動。このカードと手札の魔法、または罠1枚を捨てることで相手フィールドのカード1枚を対象に取り、そのカードを墓地に送る。そして私が選ぶのはその伏せカードよ、ミリオネクロ・カース！」

階段の最奥、エルドランドの正面扉が音もなく開き、黄金の衝撃波が空気を震わせ放たれる。それをまともに浴びた鼓の伏せカードが強制的に浮かび上がり、その下側から侵食されるようにベキベキと音を立てて黄金に変化していく。

「ちっ……い！」

黄金製になったカードが、音もなく崩壊した。辛うじて読み取れたそのカードの名は、メタルフォーゼ・カウンター。自分フィールドのカードの破壊をトリガーとしてデッキからメタルフォーゼ1体をリクルートするトラップだったが、そちらを直接狙われては意味がない。

しかし、鼓が舌打ちした理由はそれだけではない。

「超重武者カカーCはプレイヤーの墓地に魔法も罠も存在しないときにのみ、自身の戦闘によって発生する自分へのダメージを0にする効果がある。けれどメタルフォーゼ・カウンターが墓地に送られたことで、その効果も消えた……の、よね？」

「見ればわかるだろう、そんなこと」

「あらごめんなさい。それじゃあ、墓地の錬装融合メタルフォーゼ・フュージョンの効果を発動

するわ。このカードを墓地からデッキに戻して、カードを1枚ドロ」

仏頂面での短い返事に、笑いながら口先だけの謝罪で返す。さりげなくエルドリッチの効果によって負ったディスプレイアドバンテージを回復し、次いでまたカードを伏せる。

「カードをセットして、黄金卿エルドリッチの更なる効果を発動。今伏せたカードを墓地に送ることで、墓地に存在するこのカードを手札に。そして手札からアンデット族を相手ターン終了時まで攻守1000アップ、効果破壊耐性をつけた状態で特殊召喚するわ。ミリオネクロ・ホロウ！」

先ほど鼓のカードが徐々に黄金化していったのとは対照的に、七曜の伏せたそれは間髪を入れず黄金の塊へと変化した。分厚い黄金の板と化したそれが音もなく粉々に砕けて黄金の風となり、エルドランドの内部へと吸い込まれる。

そしてそれと入れ替わるようにして現れた、支配者たる悠然とした足取りで黄金の道の中央を歩む影はエルドランドのたったひとりの主。『成金の女王』と揶揄され、蔑まれ、しかしその実力に羨望をもつて語られた七曜という女をまさに体現するかのような、彼女のエースモンスター。

「誇示する相手もない財宝、呪われた不死なる億万長者。この世ならざる魔性の輝き！黄金と共に来たれ、黄金卿エルドリッチ！」

黄金卿エルドリッチ 攻2500↓3500 守2800↓3800

「本当に、私のことは言えた義理じゃないな。結局、何ひとつ変わってやしない」

「みんな心のどこかではあの時代、私たちが真つ当にプロデュエリストとしてやっていけた時代が懐かしいし、戻れるものならそこに戻りたいのよ。だから口ではなんて言おうとも、みんなデッキの大まかなコンセプトはあの時から変わってない。あなたがそのデッキを今でも大事にしているのも、昔の『鍊金武者』の名前に未練があるからじゃないか？」

これも揺さぶりを狙った心理戦かとも思ったが、すぐにその表情を見て考えを改めた。どうやら七曜は、本気で鼓に問いかけてきているらしい。

しかし、鼓はそんな問答に付き合うつもりなどなかった。もしこの質問をぶつけられたのが糸巻であれば、もう少し効果はあつたらう。

しかし鼓は、自分の仕事や現状に対しては彼女よりも割り切って捉えていた。なにせこれは、鼓自身が選んだ道なのだから。

「……さて、な。精神分析の真似事ならこれが終わってから、牢内でたっぷりやってくれ」

「取りつく島もないわね。だけど、牢内というのは訂正してもらおうかしら。ここで負けるのは私じゃないもの。今エルドリッチの効果を使うため私が墓地に送った装備魔法、黒いペンダントの効果を発動。このカードが墓地に送られた時、500ダメージを与えるわ」

鼓 LP4000↓3500

それは本来ならば、ほんの小さなダメージに過ぎない。しかし、今の鼓の場に存在するのは戦闘ダメージを抑える効果を失った、攻撃力0のカカ―Cが1体のみ。つまらなさそうに七曜が息を吐くとエルドリッチがその両手を水平に上げ、開いた両手の平の先に黄金の光が収束し始める。

「通ればジャストキル……黄金卿エルドリッチで、超重武者カカ―Cに攻撃。ミリオネクロ・ペイン！」

限界まで溜まった黄金の光が、黄金の波紋となって放たれる。しかし鼓は押し寄せるそれを目の前に、慌てず騒がずただ自らの手札へと手を伸ばした。

「相手モンスターの攻撃宣言時、手札から工作列車シグナル・レッドの効果を発動。このカードを特殊召喚して攻撃対象を誘導、そしてその戦闘によってはシグナル・レッドは破壊されない」

工作列車シグナル・レッド 守1000

黄金卿エルドリッチ 攻3500↓工作列車シグナル・レッド 守1000

迫りくる黄金の波紋と棒立ちする案山子の前に、1台の小型列車が割り込んで入る。鉄の車体は波紋を受けたあちこちを黄金に変換されながらも、辛うじてその猛攻を凌ぎ切った。

「そう焦るな、七曜。あまり長いこと会わなかったせいかな、私がつぶといということすら忘れていたようだな」

「あら、今のはほんの挨拶よ。むしろ今の1ターンだけで決着がつい

たりしたら、それこそ自分の目を疑うところだったわ。カードを1枚伏せて、ターンエンド」

ワンターンキルを回避されたというのに、七曜の顔に悔しげな色はない。本人の言葉通り、あくまであれはほんの挨拶程度のつもりだったのだろう。強がりやはったりではなく、当然そうだと思うだけの実力が彼女にはある。

しかし相手がいくら強かろうと、そこで臆しているようでは話にならない。

「私のターン、ドロード。魔法カード、アイアンドローを発動。私のフィールドが機械族の効果モンスター2体のみの時、カードを2枚ドロースる。ただし私はこの後、1度しか特殊召喚を行えない」

「あら、随分と便利なカードを引いたものね。私も欲しいわあ、そういうドロース」

「随分と余裕だな？。だがそちらがエースを出したというのなら、こちらも見せなければ片手落ちというものか。超重武者カカーC、及び工作列車シグナル・レッドをリリース。鐘の音響く大地踏みしめ、百万の敵を迎え撃て。アドバンス召喚、超重武者ビツクベン―K！」

超重武者ビツクベン―K 攻1000

これ以上棒立ちにしておくのは危険なカカーCを最上級モンスターのアドバンス召喚というかなり強引な手法で墓地に送り、代わりにフィールドへと繰り出したのは超重武者の代名詞ともいえる巨体の機械僧兵。鼓としては、ここで一気に勝負に出た形になる。当然その姿は自身のステータスをまるで生かしていない攻撃表示だが、ビツクベン―Kにはまだ効果があった。

「ビツクベン―Kが召喚、特殊召喚に成功した際、その表示形式を変更できる。今こそ守備表示となれ、ビツク……」

「あら、そんなの隙だらけよ。1000ライフを払って永続トラップ、スキルドレインを発動するわ」

「スキルドレイン、もう持っていたか……」

七曜 LP3200↓2200

ビツクベン―Kが超重武者というテーマのそれならば、こちらはモ

ンスター効果無効の代名詞とも言うべき由緒正しい永続トラップだろう。フィールドの全モンスターの効果を一律に無効とするこの効果は、今なおいくつものデツキからお呼びがかかる強烈な拘束力を有している。しかもすべての効果が手札と墓地で完結している七曜のエルドリッチには、効果無効の制約などないに等しい。

ふと気が付けば自分がかかなり不利な状況に追い込まれていることに気づき、じわりと鼓の首元を汗が伝った。

「……ならば、おろかな埋葬を発動。デツキからモンスター1体、超重武者カゲボウ―Cを墓地に送る。そして手札から、超重武者装留シャイン・クローを装備カードとしてビッグベン―Kに装備する」

カカーCの片腕にもくくり付けられていた赤い爪の腕が、ビッグベン―Kの甲冑に副腕として装着される。背中から延びた一對の鋭い爪がその感触を確かめるかのように握りしめられ、そしてまた開く。

「超重武者装留は超重武者の装備カードとなり、その戦いをサポートする。シャイン・クローを装備した時、その攻守は5000アップする」
超重武者ビッグベン―K 攻1000↓1500 守3500↓4000

「さらにカードを伏せ、ターンエンドだ。そしてこのターン終了時にエルドリッチによる強化と破壊耐性は消える、だろう?」

黄金卿エルドリッチ 攻3500↓2500 守3800↓2800

「私のターン。このターンも呪われしエルドランドの効果を発動、800ライフを払って2枚目の黄金卿エルドリッチを手札に。そして手札のエルドリッチと錬装融合を捨てて……そうね、私は安全策が好きな。その伏せカードを狙わせてもらうわ、ミリオネクロ・カース！」

七曜 LP2200↓1400

エルドランドの扉が三度開き、先のターンで鼓の思惑を大きく崩した黄金の衝撃波が再び放たれる。ここで邪魔となるビッグベン―Kではなく伏せカードを狙ったのは七曜の言葉通り本人の嗜好によるものも大きい、鼓が先ほどの行った行動も大きかった。

超重武者カゲボウ―C……特殊能力は墓地にある自身を除外すること、超重武者を対象とするカードの発動を無効として破壊するカウター。除去が無駄となるならば、必然的に狙いはシャイン・クローと伏せカードの2択になる。

「やはりそう来るか？合理的だが、それゆえに読みやすい。私の伏せカードは速攻魔法、フルメタルフォーゼ・フュージョン重錬装融合。どうせ今は使い物にならないからな。こんなもの、欲しければいくらでも持っていけ」

「してやられたわね。まあいいわ、このぐらい。錬装融合をデッキに戻して、またカードを1枚ドロウ。1枚セットして、墓地のエルドリッチの効果を発動。これを墓地に送って自身を回収、そしてフィールドを更なる黄金が埋め尽くすわ。ミリオネクロ・ホロウ！」

またしてもエルドランドの頂点で、血の色をした寶石が脈動する。ビッグベン―Kと対峙するエルドリッチと寸分たがわぬ姿を持ったもう1体のエルドランドの主が、その黄金の体と身につけた無数の寶石に紅の光を反射させつつ現れた。

黄金卿エルドリッチ 攻2500↓3500 守2800↓3800

半ば無意識に、今のコストとして墓地に送られたカードを確認する。通常トラップ、テイタノサイダー巨神封じの矢。相手がエクストラデッキからモンスターを特殊召喚するたびに何度でも墓地からセットすることができ、この手のカードにありがちな再利用時の除外デメリットもない。条件こそ相手依存とはいえ、エルドリッチを何度でも呼び覚ます七曜にはお似合いのカードだろう。

「く……」

「バトル。行きなさい、エルドリッチ」

超重武者の真価は、守備表示にあつてこそそのもの。攻撃表示を固定されて戦い方を忘れてしまったかのように無防備に立ち尽くすビッグベン―Kへと、黄金の輝きが襲い掛かる。その体を守るように、自立した副腕がその両腕をクロスさせた。

黄金卿エルドリッチ 攻2500↓超重武者ビッグベン―K 攻1500

鼓 LP3500↓2500

「あなたのおもちや、随分頑丈ね。持ち主に似たのかしら」

黄金の輝きが収まってもなお、機械の僧兵はその場に立っている。副腕からは煙を吐き、体のあちこちは黄金へと置換され、内部機構にも影響が出たのかメーターはでたらめな針の触れ方を休むことなく続けている。それでも、ビッグベン―Kは黄金の地を踏みしめていた。

「シャイン・クロウの固有効果には、ステータス上昇の他にもまだ続きがある。このカードを装備したモンスターは、戦闘によって破壊されない」

「重錬装融合でなく、そのカードを狙っていればあなたはこの攻撃に耐えきれなかった、と。少し慎重になりすぎたかしらね？ いいわよ別に、まだ攻撃は残っているもの。もう1体のエルドリッチで攻撃、ミリオネクロ・ペイン！」

先ほどをはるかに上回る目も眩むばかりの閃光が、再び僧兵へと襲い掛かった。再びその身を守るべくシャイン・クロウが鋭い爪を組み合わせて壁となるも、黄金の奔流はその勢いで鋼鉄の巨体を後ろに吹き飛ばし、同時に確実にその体を蝕んでいく。

黄金卿エルドリッチ 攻3500↓超重武者ビッグベン―K 攻1500

鼓 LP2500↓500

「ぐ……い！」

気づかぬうちに、あの黄金の輝きの余波を浴びたのか。息を荒げても視線を下ろせば鼓自身の服もあちこちがぼんやりとした光沢を放っていた。もちろん鼓のデュエルディスクはいまだに妨害電波を元気に放っておりこれもソリッドビジョンの一環だろうが、それでも気分のいいものではない。

「カードをもう1枚セット。ターンエンドよ」

「私のターン、ドロー！」

手札は0、スキルドレイン下では攻撃もままならない。状況は最悪に近いが、それでも起死回生の一手を求めカードを引く。

「魔法カード、ハーピイの羽根帚。これでスキルドレイン、呪われしエルドランド、そしてその伏せカードをすべて破壊する！」

ここ一番で引いた、大逆転のカード。後はビッグベン―Kを守備表示にし、攻撃力の落ちたエルドリッチにその特殊能力たる守備力を利用しての攻撃を行えばいい。ここでそれが引けるからこそ、鼓はデュエルポリスフランス支部長たりえる人材なのだ。

だが、しかし。

「トランプ発動、スターライト・ロード！カードを2枚以上破壊する効果を無効にし、エクストラデッキからこのカードを特殊召喚するわ。星々の瞬き、静寂を彩る光。黄金を天まで積み上げ買い取ろう、呪われし都の財となれ！スターダスト・ドラゴン！」

スターダスト・ドラゴン 守2000

エルドランドの上空に、一筋の流星が走る。遙か頭上から黄金の輝きに引き寄せられるように近づいてきたそれは、星屑の残滓を纏う白いドラゴンだった。2体の黄金卿に挟まれて、星色の光が邪悪な黄金色に染まっていく。

だが、今はそれどころではない。重要なのは、これで鼓の反撃の目が断たれたということだ。一応まだシャイン・クロー自体は生きており、その戦闘破壊耐性も残っている……だが、それもいつまで持つか。「……ビッグベン―Kを守備表示に。ターンエンドだ」

超重武者ビッグベン―K 攻1500↓守4000

黄金卿エルドリッチ 攻3500↓2500 守3800↓2800

「惜しかったわね、せっかく最後のチャンスだったのに。こうなっては、いくらデュエルポリスフランス支部長様でも形無しね。私のターン、地砕きを発動。あなたの場の最も守備力の低いモンスター、超重武者ビッグベン―Kを破壊するわ」

やりきれなさそうに目を伏せる鼓の前で、ビッグベン―Kの体が上からなにか目に見えない力で押さえつけられていくかのように軋みます。あちこちのパーツが負荷に耐えきれずに全身から上がる細かな火花と悲鳴のような金属音を断末魔に、唯一鼓の場に残っていた最

後の守りはいともあっさり突破された。もはやエルドランドの黄金の石畳で、銀髪の彼女を守るモンスターは存在しない。

「返り討ち、残念だったわね。でも、これで分かってもらえたかしら？ 今回の計画は、私もそれなりに本気なの……黄金卿エルドリツチで攻撃、ミリオネクロ・ペイン！」

黄金の輝きが、黄金の石畳の上を通りまっすぐに迫ってきた。無言で目を閉じ、すぐに訪れるであろう衝撃を静かに覚悟する。最後に頭をよぎったのは、絶対ここぞとばかりに何かしら言ってくるであろう糸巻になんと言い返そうか、そんなことだった。

「むっ？」

妙だ。いつまで経っても、次に来るはずの衝撃がない。危機の寸前には時間がスローに感じると言っても、さすがに限度というものがあるだろう。ぱつと目を開けた鼓が目にしたものは、驚くべき光景だった。

「これは……！」

黄金の輝きを鼓に当たる寸前の位置で四散させる、鐘のようなシルエットのモンスター。その名を小さく口にする、同じく異変に気が付いた七曜が後を続けた。

「バトル……！」

「フェーダー……？」

相手の直接攻撃宣言時に手札から特殊召喚され、バトルフェイズそのものを強制的に終了させる悪魔族モンスター。当然、鼓のデッキには入っていない。それどころかこの瞬間、彼女には手札すらないのだ。

ならばこのバトルフェーダーは、いったい誰か。その疑問に答えるかのように、起動中のデュエルディスクを装着した第三の人影がベランダの窓を外から開けて部屋の中へと入り込んできた。ソリッドビジョンが外部環境の変化に一瞬乱れ、またすぐにエルドランドの景色を映す。ギプスで固定された片足に松葉杖、体中のあちらこちらに乱暴に巻かれた痛々しい包帯。誰がどう見てもボロボロの、立って歩いていることすら奇跡のような若い男。しかしその目だけは体の状態

と反比例するかのようになり、キラキラと異様な光を湛えている。

鼓には、その顔に見覚えがあった。

「……鳥居浄瑠、だったか。久しぶりだな、糸巻の奴が随分心配していたぞ」

自分の名を呼ばれた男……鳥居が、わずかに鼓へと視線を向ける。刺すような視線に射貫かれて反射的に身構えるが、鳥居の方はすぐに鼓への興味をなくしたように七曜へと向き直った。ゆっくりと開いたその口から、感情を押し殺したかのような低い声が漏れる。

「ようやく見つけたぜ、『成金の女王』」

「あら、私も今頃モテ期かしら。人気者は辛いわね」

口調は軽いのが、視線は冷たく警戒心も露わだ。先ほどのバトルフェーダーもそうだが、鳥居浄瑠というその名前、そして腕に装着された通常モデルより一回り大きなデュエルポリス専用デュエルディスク。七曜にとっては、あからさまに敵の登場だった。

「……」

そしてその敵意は、鳥居の側も隠そうとはしない。無言のままにデュエルディスクとバトルフェーダーを消費したことで1枚減った計4枚の手札を構え、突如として乱入したこのデュエルの継続を促す。

「……ちよつと待ちなさいよ。いきなりやって来て2対1? どうせあなたも倒さなきゃ『BV』は使えないのよね、それにしてもさすがにハンデぐらいは貰うわ。手札3枚とライフ2000の追加、最低でもこれぐらいは呑んでくれなきゃ嫌よ」

「好きにしろ」

乱入の条件として挙げた条件は、あっさりと了承される。というよりもどんな条件だろうともそこへの興味自体がないのだろう、その鼓の目には映った。その傲慢とも取れる態度と、つい数日前、行方不明になる少し前にわずかな時間だけ顔を会わせた時の様子。元同僚が邪険に扱われることへの怒りよりも先に、まず空恐ろしさが湧くのを感じた。

七曜 LP1400↓3400

「……カードを1枚伏せて、ターンエンドよ」

素早く引いた3枚の中から1枚をフィールドにセットし、本来ならばデュエルの終了によって訪れなかったはずのターンエンドを宣言する。スキルドレインとスターダスト・ドラゴンの二重の守りに、謎めいた伏せカード。手札わずか4枚の鳥居に早々突破できる布陣とは思えなかったが、当の本人はそんなことはまるで意に介した様子もない。

「俺のターン、ドロー」

つまらなさそうに、カードへと目を通す。そして流れるように淀みなく、その手がカードを選んだ。

「ライト P ^{ペンデュラム}ゾーンにスケール1の魔界劇団―デビル・ヒール、レフトPゾーンにスケール8の魔界劇団―ファンキー・コメディアンをセッティング。ペンデュラム召喚！来い、サッシー・ルーキー、プリティ・ヒロイン！」

1と書かれた光の柱とその内部の紫の巨漢、それと対になるのは8と書かれた光の柱と黄色の肥満体。その中央に開いた空間の穴からは、2体の劇団員が呼び出される。ペンデュラムデッキならばこれはあまり役に立たないかと、七曜が自分の伏せカード、墓穴の指名者へとわずかに視線をやった。

魔界劇団―サッシー・ルーキー 攻1700

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500

しかし鼓、そして七曜の両者にとっては知る由がなくわかるはずもないことだが、このプレイングは明らかに異常であった。そもそも鳥居浄瑠のスタイルは根っからのエンタメ気質であり、モンスターごとの動きや人格設定を可能な限り活かそうとするそれはいついかなる時も崩れることのない彼の十八番だったはずだ。

しかし、今の彼はどうか。お決まりの召喚口上もなければ大仰な動きもない、無味乾燥なカードを数値と効果でしか見ないデュエルスタイル。それは、彼とはもつとも縁の遠かったもののはずだ。

「閻属性のレベル4ペンデュラムモンスター2体、サッシー・ルーキーとプリティ・ヒロインでオーバーレイ！2体のモンスターで、オー

バーレイ・ネットワークを構築。エクシーズ召喚、霸王眷竜ダーク・リベリオン！」

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻2500

エルドランドの上空に急速な勢いで分厚い暗雲が立ち込め、不気味な雷鳴が轟いた。その暗雲を切り裂いて打ち下ろされた雷鳴の刃が大地を砕き、黄金の石畳を無残に砕いたクレーターの中央では翼を広げ佇む漆黒の龍が眼前の黄金の宮殿へと蔑むような視線を向ける。

「やれ、ダーク・リベリオンで黄金卿エルドリツチに攻撃！」

翼を広げての超低空飛行で高速で接近しつつ、雷のエネルギーと霸王の力を乗せた逆鱗の一撃が空を裂いて不死の億万長者、黄金郷の支配者へと迫る。反逆の一撃を前に不死者もまた白手袋に包まれた黄金の腕を固く握りしめ、その拳が無礼な反逆者を制圧すべく放たれる。フィールドの中央でぶつかり合った白熱の逆鱗と黄金の拳による激しい鏝迫り合いにより、あちこちに撒き散らされる黄金の欠片と暗黒の雷の余波による火花が幾度となくあたりを照らした。

「相打ち狙いかしら？ スキルドレインでそのモンスターの効果は……」

「速攻魔法、禁じられた聖槍。ダーク・リベリオンの攻撃力を800下げ、魔法、畏に対する完全耐性を付与する。これでスキルドレインの効果も無力、そしてダーク・リベリオンの効果を発動」

「!!」

竜の逆鱗へと、その周りを絶えず衛星のように浮遊していた光球が吸い込まれる。その瞬間にダーク・リベリオンの力は飛躍的に上昇し、両者の均衡は完全に崩れた。黄金はその全てが暗黒の雷に呑み込まれ、のたうち回るプラズマの残滓は戦闘が続く両者の足元の、そして呪われし都をその隅々まで構成する黄金に対しても貪欲な侵食の牙を向け始める。

エルドランドが、崩壊しつつあった。

「ダーク・リベリオンがバトルを行う際、オーバーレイ・ユニット1つを使うことで相手モンスターの攻撃力は0となり、その元々の数値だけ攻撃力をバトルの間のみアップさせる。これで終わりだ」

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻2500↓1700↓4200↓
黄金卿エルドリツチ 攻2500↓0 (破壊)

七曜 LP3400↓0

ついに力尽きたエルドリツチの巨体がその場に崩れ落ちると、容赦せず降り注ぐ無数の雷撃に貫かれてその黄金の輝きもみるみるうちに弱まっていく。もはや動くことすらなくなったその体をとどめとばかりに踏みにじり、反逆の牙が凱歌代わりの叫びを高らかに崩壊していくエルドランドに響かせた。

「そんな……あと少しで、また私たちの時代が……」

崩れ落ちたのは、エルドリツチだけではない。七曜もまた激戦による疲労とダメージ、そしてそれ以上に確かに掴みかけたはずの勝利と悲願が手の中から零れ落ちていく感触に耐えきれず、悲痛な言葉を最後に気を失ってその場に倒れ込んだ。

「正直、突然すぎて私としても困るんだがな。ともあれ助かった、礼を言わせてもらう」

ゆつくりと、ソリッドビジョンが消えていく。元のマンションの一室で、倒れた七曜を無表情に見下ろす鳥居へと鼓が頭を下げる。

「……」

「それにしても、一体これまでどこにいたんだ……とは、私からは聞かないでおこう。私の立場であまり聞くのも悪いとは思いますが、どうせ糸巻もここに来たら同じことを聞くだろうからな」

「糸巻さんが？」

共通の知人の名に、ようやく反応を見せる。とにかく不愛想なこの青年との会話のきっかけを見つけた鼓が、気楽そうに肩をすくめる。

「ああ。この場所は知っているからな、すぐに来るさ」

「そうか……」

そして何を言おうとしたのかは、ついに明かされることはなかった。どたどたと走る靴音が2人近づいてきて、躊躇なく玄関扉が開

く。

「来たな、糸……」

「おい、本当にここで合ってるんだろうな？くだんねえ嘘ついたらこの場でぶちのめすぞ」

その瞬間、何か嫌な予感がした。それは理由もない鼓の勘でしかなかったが、歴戦の戦士の勘というものは厄介なことによく当たる。その言葉に嫌味たっぷりに戻した男の声を聴いた瞬間、鳥居の体はつきりと強張った。

「この大量のカードが見えないんですか？まったく無駄口ばかり叩いて、デュエルポリスという職業は脳も足りてないのに柄だけは悪いですなあ。それとも頭も柄も悪いからこそ、そんな仕事しか見つからなかったんですか？」

あちやー、という気分になる。この声は、鼓自身にもよく聞き覚えがある。まったく、なんでよりによってこのタイミングで一緒になってくるんだか。躊躇なく土足で踏み込んで近づいてきた2人が、止める間もなくリビングのドアを勢いよく蹴破った。

「鼓！そっちはどうだ、無事……か……」

「糸巻さん」

リビングに踏み入った瞬間にさっきまでの威勢はどこへやら、まるで浮気現場を押さえられたかのように、顔を青くしてだらだらと冷や汗を垂らす糸巻。互いにそれぞれの事情から固まって言葉も出ない2人に、破滅の元凶がひよつこりと顔を出す。

「そんなところで何をしているんですか？早く……おや、貴方は。これはこれは、お久しぶりですね」

「巴……お前な」

遅れてやってきた第5の人間、巴光太郎に少しは空気を読めと言いかけた鼓だったが、結局は何も言わなかった。どうせこの老獪にして陰険なおきつねさまのことだ、この後でどうなるかは予想もついているだろう。いや、それどころか、こうなることすら予期したうえでわざと顔を出した可能性まである。

果たして、その予想は正解だったらしい。部屋を見渡したのちに巴

は、にんまりと笑みを浮かべたのだ。

しかし修羅場真つ最中の糸巻と鳥居に、そんなことに気づく余裕などあるはずもなく。まず口火を切ったのは、鳥居だった。目の異様な光はそのままに、そのくせひどく落ち着いた口調で目の前の上司に声を掛ける。

「なるほど、糸巻さん」

「あー、久しぶりだな、鳥居。そのな、これはだな」

「俺も結構、いろいろ動いてたんすけどねえ。まったくびっくりですわ、さすがは糸巻さん」

何か言い返す暇もなく、矢継ぎ早に皮肉のこもったナイフのように鋭い言葉を投げつける。そのたびにイライラと床に打ちつけられる松葉杖の先が、カツカツカツと高い音を立て続けた。

「だってそうでしょう？俺たちの仕事は、テロリストの撲滅と『BV』技術の破棄。デュエルコロシアムの時も、精霊のカードなんて代物の時も。そのために、俺たちは戦ってきたと思ってたんですけど。糸巻さん、あんた誰と手を組んでるんすか」

「……」

いかなる言い訳や理屈も無駄だと悟り、完全に押し黙る糸巻。その沈黙をどう解釈したのか、馬鹿にしたような短い笑いを漏らした鳥居が松葉杖の先を突きつける。

「そりゃあ、いつまで経っても俺たちの仕事が終わらないわけだ。デュエルポリスとテロリスト、それも俺の身近なところでこんなはずぶに繋がったとはね。あままったく、これまで全然そんなことにも気づかなかった俺も大馬鹿鹿野郎ですよ」

さすがに反論しようとしたのか、そこでようやく糸巻が口を開く……しかし何か言うより先に鳥居が、黙っていろとばかりに片手を振ってやめさせた。

ただでさえ治らない怪我と不自由な体、巴戦での敗北のショックがその身体と精神を両方から弱めていたところに、かつての同志でもあった一本松への襲撃は完全にとどめを刺してしまったらしい。彼の心はもはや見る影もなくその柔軟性を失い、固く閉ざされてしまっ

ている。たとえ真実がどうであろうとも彼の中では自分の思い描いたシナリオのみが事実であり、他人の話を聞き入れるつもりはないらしい。

「もういいですよ、今日の所はいったん引き下がります。じゃあ、またいつか会うこともあるでしょう」

そう言い捨ててきつと怪我人とは思えないほどの機敏な動きで身を翻して開いたままの窓からベランダに……そして欠片の躊躇もなく、4階のそこから身を躍らせた。

「お、おい！鳥居！」

我に返った糸巻がベランダに駆け込み、かつての部下が飛び越していったその手すりから身を乗り出すようにして下を見る。どこからどうやって抜けていったのか、もはやその姿は彼女の目が届く限りのどこにも見当たらない。

それでも諦めきれず、無益に睨み続ける糸巻の顔を、折よく吹いた風が赤髪を揺らして撫でる。先ほどまで暴れていた蛇ノ目との戦いの残滓が流れてきたのか、その風はわずかに炎の匂いがした。

エピローグ

その日の朝、糸巻と鼓は駅に来ていた。手ぶらで啜え煙草の糸巻に對し、鼓の手には小ぶりな、本人の髪色と同じ銀色のトランクが握られている。その日は、鼓がフランスへと帰る日だった。

何気なく時計に目をやると、次に空港行きの電車が来るまでにはあと少し時間がある。穏やかな2人の表情からは、互いに何の感情も読み取れない。示し合わせたように同じタイミングで改札前のベンチに並んで座り、そこから互いに無言のまま、わずかな時間が過ぎた。

「……熱っ」

静寂を破り小さく呟いた糸巻が、未練がましく限界ギリギリまで吸っていた1本をついに口から離して灰皿に放り込む。どうやらこの場所は駅員にヘビースモーカーでもいるのか、昨今の禁煙ブームに逆らって未だに喫煙ゾーンをいまだ設けているらしい。もとより肩身の狭さなど気にする性質ではないが、それでも糸巻にとっては大変ありがたい話である。

そのままノータイムで次の1本を求めて懐を漁る彼女の視界に、隣から白い手が飛び込んできた。

「あー?」

「私にもくれ」

「アタシより高給取りのくせに、煙草は恵んでもらおうってか?」

「餞別も出せないほど落ちぶれたのか? 悔しかったら出世しろ」

「うるせー……ほれ、火」

ぶつくさ言いながらも追加で取り出した1本を目の前の指に握らせ、ライターに火をつけて先端を差し出す。ん、と短い返答。息を吸い、ゆっくりと煙を吐く。

「……なあ、糸巻」

「おう」

また沈黙。いつになく歯切れの悪い腐れ縁の親友に問うような視線を向けると、ふいっと目を逸らしほとんど聞こえないぐらいの気まぐすそうな声が続いた。

「……その、悪いな。私も本当は、こんなタイミングで向こうに戻りたくはないんだが」

「なんだよ、勿体ぶってそんなことか？ま、気にすんなって」

そもそもこの急な帰国は、まだ決まっただけから丸一日と経っていない。デュエルポリスフランス支部から、鼓がこの休暇で日本に一時帰国してからというものの「BV」の犯罪率が跳ね上がったって現地メンバーだけでは処理しきれない、もう限界だと泣きつかれたのだ。会話は終始フランス語で行われたため横にいた糸巻には何を言っているのかさっぱりだったのだが、少なくとも叩きつけるように電話を切って一通り悪態をついたときの呆れと情けなさが複雑に入り混じったその顔は、彼女にしてみればなかなかの見ものだった。

そんないいものを見せてもらったため、必然的に彼女の返事も丸くなる。

「真面目な話、それだけ『錬金武者』の名前が抑止力になってたんだろうさ。羨ましいよ全く、ここいらのチンピラは『赤髪の夜叉』への敬意一つーもんがないからな」

「私にいつまでも頼られても困るんだがな。帰ったら教育のやり直しだ、たっぷり叩き直してやる」

いつの間にか正面に向き直っていたその横顔を糸巻がちらりと見ると、その目はどうやらかなり本気なようだった。文字通りその根性を叩き直されるであろう顔も知らない彼女の現地の部下たちのことを思い、そつと心の中で合掌する。風にたなびき上空へとゆらゆら上がっていく紫煙を眺めつつ、鼓がまた口を開く。

「本当は、お前以外にもちゃんと挨拶していきたくったんだがな」

「そういうところ真面目だよなあ。ま、あの2人にはアタシから伝えておくさ」

「ああ、頼む。わかりやすく怪我したのは遊野の方だが、八卦ちゃんの方は心に傷を負った可能性もあるからな」

あの後、清明は蛇ノ目戦での火傷が原因で即入院、現在も病院にぶち込まれている。とはいえ糸巻の見立てによれば怪我自体は異様な、明らかに人間離れたスピードで既に完治しており、ただ本人がぐー

たらしめていたから未だに退院していないようにしか見えないのだが。

とはいえ、それは清明の話。八卦ちゃんの方は表面上は問題なく見えたが、そのメンタルに気を配る必要があるのは間違いない……そこまで考えたところで、顔色一つ変えずに言葉が続く。

「お前の場合性格が性格だからそのあたりの機微に反応できるとは私としても欠片も全くそれはもう全然頭のとっぺんから足のつま先までこれっぽっちも期待してはいないが、せめてお前なりにでいいから多少は気を使ってやるんだぞ」

「よし、その喧嘩買った！ いっつもアタシのことどういう目で見てるかよく分かったぞ」

澄ました顔のまま長文の悪口を一息で言い切った鼓に、拳を握って半腰となり向き直る糸巻。険悪な2人の視線が交錯すること数秒、同時にその力が抜けた。2人して小さく笑いながら、ベンチにどさりと体を預け直す。

「……まあ、なんだ。向こうに戻ってもしっかりやれよ、フランス支部長殿」

「お前こそ、私がいないと夜な夜な枕を涙で濡らさないようにな」

糸巻が何か言い返すより先に弾みをつけて立ち上がり、吸殻を灰皿にねじ込んで足元のトランクを握り直す鼓。時計の針は、もうすぐ空港行きの電車が到着することを示していた。

「またな、糸巻」

「おう、鼓」

長々とした別れの挨拶や飾った言葉は必要ない、そういうものだった。差し出された手を一度だけぐっと握り、その手が離れると同時に笑みを浮かべて銀色のゆる三つ編みを揺らして身を翻す。

それつきり振り返らずに改札を通り、電車の中に消え、ドアが閉まり、そしてゆつくりと離れていく様子を、糸巻は最後まで目を逸らさずに眺めていた。

「……はあ」

ゆつくりと息を吐き、その場でぐっと背伸びする。必然的にただで

さえ目立つ2つの膨らみが強調されるが、どうせ誰かが見ているわけでもないし、もし見ていたとしてもそう気にはしない。そんなことよりも彼女の心中は、先ほどの会話が占めていた。

別れの言葉の中で、意図的に出さなかつたのであろう名前、鳥居浄瑠。あの一瞬の邂逅の後、彼はまた音信不通となつて現在もその行方は知れず、不気味な沈黙を保っている。

そしてそのほかにも、考えなければならぬことは山ほどあつた。共闘が終わつたことで再び敵対関係に戻つた巴、病院への搬送中に手を打たれたのか、気が付いたときにはデツキを残して忽然と消えていた蛇ノ目の新型「BV」デュエルディスク、ファイナルシグマの暴れまわつた広場への修繕費の捻出……はまあ、理由が理由のため国にでも丸投げすればいいが、それはそれで必要になるであらううんざりするほどの書類、デュエルポリス本部への報告書。鼓には大きな口を叩いたものの、糸巻の置かれた状況はすこぶる悪い。

「ま、なんとかするさ」

誰にともなくぼつりと口にする肩をすくめ、くるりと駅に背を向ける。さて、これからどうするか。とりあえず病院も近いことだし、清明の見舞いにでも行つてやろう。ロベルトたちも気にはなるが、あちらはまだ面会謝絶が続いているはずだ。

方針を決めて一步を踏み出すと、ふわりと吹いた風に赤い髪がなびいた。

Last File—デュエルポリスの戦い
ターン28 翠緑の谷の逆鱗

病院の自動ドアをくぐると、消毒液の匂いがふわりと糸巻を出迎えた。彼女自身はこれまで毎年の健康診断のときぐらいしか縁のない生活を送っていた場所だったが、ここ数週間の間につきかり通い慣れてしまった感がある。もはや顔なじみとなった受付に会釈し、エレベーターの扉を開けたまま様子を見ていた誰かの見舞いに来たのであろう親子連れに首を振って階段へ向かう。別に先ほどのエレベーターに乗せてもらってもよかったのだが、体に染みついた職業病のようなものだ。

階段を上り、2階、3階。誰もいない廊下を渡り、308と銘打たれた病室へ。引き戸を開けようと手を掛けたところで、部屋の中から話し声が聞こえてきた。特に盗み聞きするつもりはなかったが、誰が来ているのかとしばし耳を澄ませて様子を探る。まず聞こえてきたのは、清明の声だった。

「……もちろん、そういうこともあるよ。でも、そこはほんとに人それぞれよ？自分の弱みを理解したうえでそれを跳ね返すことを意識するのも、あえて対策じゃなくて強みの部分を最大限伸ばしにかかるのも」

次いで聞こえてきたのは、少女の声。

「なるほど……そのどちらかの選択が重要、なんですよね」

「んー、それが、その2択とも限らないのよね。もうひとつ考えられることとして、全く違う要素を取り入れるつてもあり得ない話じゃないからね。単純にやれることの幅が広がるし、ひとつのことだけに凝り固まってたら気づけないことなんて世の中たくさんあるからね。つて言っても、若いんだからまだぴんと来ないか」

「爺臭いなお前、年いくつなんだ一体……よう、清明。見舞いに来てやったぞ」

もう少し聞いていてもよかったが、さすがにツツコミどころかと判

断してノックもせず扉を開ける。ベッドの上で上体を起こして、いた怪我の方は彼女の存在に気づいていたのかいないのか、突然の糸巻にも驚いた様子もなくおいすー、などと笑ってひらひらと手を振る。

ところが、もう一人の話相手の方はそうもいかなかったようだ。ビクリ、と後ろからでもわかるほどはつきりと体を強張らせ、小動物を思わせるおどおどした動きでさっと糸巻の方を振り返る。ふわりとした茶髪に丸眼鏡の少女の顔には、彼女も見覚えがあった。

「あれ、意外だな。竹丸ちゃん、だったか？こいつのお見舞いかい？」
「え、えええつと、はい！そうでしゅー！」

よほどテンパっているのか混乱した目で勢いよく噛みつつ、それが癖なのか右手の指で自分の髪をくるくると巻きながら立ち上がる少女……竹丸。別段糸巻も害意があるわけではないので、落ち着けよとなだめるジエスチャーで多少距離を取って見せた。

「ええと……今日は、八卦ちゃんとは一緒じゃないのかい？」
「は、はい！私一人で、お兄さんのお話を聞きたくて……じゃあ私、今日はこれで帰りますね！お兄さん、貴重なお話ありがとうございました！」

「あ、うん。楽しかったよ、まったねー」

よほど見られなくなかったのか、挨拶もそこそこに顔を真っ赤にしてバタバタと嵐のように部屋を出ていく少女。その足音が完全に聞こえなくなったところで、ゆっくりと少女の出たドアから再びベッドへと向き直り、部屋の主へ説明を視線で求める。

「聞いた通り、お見舞いだった。それとほんの少し、背中を押してあげただけ」

「はあ？」

意味が分からない。困惑のままにもう少し詳細な説明を求めますが、当の清明はにこにここと笑ったままだ。表情こそ柔らかいが、どうやらそれ以上のことを答えるつもりはないらしい。追及は諦め、先ほどまで少女が座っていた椅子に腰を落とす。

「で、糸巻さんこそどうしたのさ。そろそろ退院しろってせつつきに

来た？」

そう笑う清明は一応お義理のように包帯こそ巻いてはいるものの、その姿はどう見ても怪我人のそれではない。何気ない身のこなしの軽さといい、力強い目の光といい、いたって健康そのものだ。探るような視線に肩をすくめ、若干後ろめたそうに言い添える。

「そろそろタダ飯生活も飽きてきたしね、僕もそのつもりよ。骨もくっつけたし、怪我はとつくに治したから大丈夫」

「治したって……正直、アタシもそんな気はしてたけどな」

お前、本当に一体何者なんだ？ 続くその言葉は、口にする寸前で踏みとどまる。それは今日の本題ではないし、この少年が明らかに人間離れしていることは最初から分かっているじゃあないか。ゆっくりと首を振り、改めて切り出す。

「実は、うちの市長から打診があつてな。感謝状をアンタに送りたかって話だったんだが」

「気持ちありがたいけど、遠慮したいかなあ。僕も住民票とか戸籍とか、叩けばいくらでも埃が出てくる身だし……あんま表に出たくない」

「だろうな。そう言うと思って、それはアタシの方から丁重に断つていた」

予想通りの返答には驚きもせず、小さく頷く。

「ただまあ、今回の件ではそれが仕事のアタシらとはともかく、デュエルポリスでもなけりや昔のよしみもないアンタがえらい貧乏くじ引いてくれたのも確かなわけだ。さすがに何もなしたのは、アタシのプライドが許さん。というわけで、まあ何か要望があれば言ってくれ。できればアタシにできる範囲で頼む」

「ふんふん。それ、八卦ちゃんにも言つてあげたら？」

「3時間ぐらい耐久でお姫様抱っこした話、そんなに聞きたいか？」

その時の記憶を思い出したのか若干げっそりした顔で息を吐く糸巻に小さく笑い、ふうむと顎に手を当てて考え込む清明。どこか心ここにあらずといったその様子に、おそらく彼にしか見えないし聞こえない例の神様、とやらと交信しているんだろうとピンときた。やがて

その話し合いも終わったのか、その好奇心溢れる視線が彼女を捉える。

「オーケー糸巻さん、じゃあ頼みがあるんだけど」

「お、おう」

彼女の第六感が嫌な予感を告げていたが、自分から言い出した話なので腹を決めて腕を組む。しかし彼の口から飛び出てきた言葉は、彼女にとっては全くの予想外なものだった。

「糸巻さんの話、聞かせてよ。昔に何があったのか、どうしてデュエルポリスになったのか」

表情が固まったのが、見なくてもわかった。ふてぶてしい自信の仮面がはがれ、ほんのわずかにその奥があらわになる。辛うじて出した咳払いで沈黙を紛らわし、ゆつくりとぎこちなく笑みを浮かべる。これで、誤魔化せるだろうか。無理だろうな。

「……おいおい。思春期の男子つつつたら、もつと他に考えることもあるんじゃないかねえのか？ どうしてまた、アタシの話なんぞ」

「そうねえ……」

そこで一度言葉を切り、出入り口のドアへと視線を走らせる清明。釣られて糸巻もそちらに目を向けるが、誰かがそこにいる気配はない。清明の側も同じ結論に達したらしいが、それでも声を潜めて囁いた。

「僕と同類の匂いがするから、かな」

「同類？」

オウム返しに聞く彼女に、小さく頷く。

「糸巻さんさ、散り返しの付かない致命的な何かをやったことがあるでしょ」

「……」

「無言は肯定の証、だっけ？ 誰が言い出したのかは知らないけど、便利な言葉よね。僕もそうよ、一生かけても償えない、2度と自分を許せない。そんな自分がのうのと生きてることに、また勝手に腹が立つていく……違う？」

「……」

依然として何も答えないその表情の裏側で何を考えているのかは、清明にも読み取ることはできなかった。しかし確かなことは、彼女がその分析を決して否定しなかったということだ。

当事者からすればたつぷり数時間にも感じられる、しかし実際のところはせいぜい1、2分ほどだったのだろう重い沈黙。考えがまとまったのかようやく動き出した糸巻が、どつしりと椅子の背もたれに体重を預けて座り直す。じっとその姿を見つめ続けていた清明の視線に、真つ向から彼女のそれがかち合った。追い詰められた動物のような警戒と敵意の混じった色がほんのわずかにその目に浮かんでいったが、それもやがてふっと消える。そのままの姿勢で、がっくりと頭を落としてうなだれる。

「……………そう、だな。ああ、まったくその通りだよ。参ったな、こいつは鳥居や鼓にも隠してきたことだったのに」

疲れたように、しかしどこか清々しげにそう呟き、真剣な表情でまた顔を上げる。思い返すのは、13年前の記憶。誰にも語ることなく徹底的に秘してきた、決して表には出せない忌々しい過去。文字通り墓場まで持つていくつもりだった過去を、この行きずりの誰とも知らない少年に話す気になったのはなぜだろう。

隠し続けることに疲れた、罪悪感に耐えきれない……………もちろん、それもあるだろう。どこからともなくやって来て、いずれどこへともなく去っていくであろう存在だからこそ、というのも否定はできない。だがそれ以上に、これがこの少年の持つ魅力なのだろう。決して太陽のように中心となつて光り輝くわけではないのに、ただそこに自由にいるだけでなぜか周りを巻き込んでいく。

「いいぜ、話してやるよ。アタシがあの日、何をやったのか。世界に何が起きたのか。デュエルポリスが生まれた日のことを。先に断つておいてやるが、面白い話じゃないぜ？それでもいいってんなら、覚悟して聞けよ」

そのまま、返事も待たずに語りだす。あの日々の記憶は、今でもくつきりと頭の中に残っている。

ありや13年前、まだアタシの肩書が「プロデュエリスト」だった最後の日だ。ちょうど「BV」が開発されてから……そうだな、だいたい一か月ぐらいだっけか？実体化するソリッドビジョン？凄いはわかるがこんなもんだう使えばいいんだよ、つてのがあの時のプロの大まかな総意だったな。まあできちまったものは仕方ねえしポンスーのデュエルディスク開発会社からも頼まれたから、どうにかその仕組みを取り入れてプロ界も変革するかってあれこれ模索してる時期だった。今となつちや信じられないかもしれないがな、最初からテロリストがいたわけじゃないんだぜ？本当に初期の一瞬だけは、どうやって「BV」と共存するか平和にあれこれ考えてる時期もあったのさ。

きっかけは……ある雑誌だ。昔つからあることないことばらまいたり攻撃的な記事書いて話題作りしたりでアタシからは評判悪いとこだったんだが、そこ抱えのライターがある記事を書きやがってな。今にして思えばあれが予言の書つてのが皮肉な話だが、見出しだけでもこんな感じだった。

『警告！プロデュエリストから全権限を取り上げろ！』

内容は簡単に言えば「BV」は危険だ、こんなものを持たせていては悪用されるって話なんだけどな。そこで本体の規制じゃなくてデュエリスト叩きにくってのが……ま、お察しだよ。別にふざけんな馬鹿野郎っていつも通り一蹴すりやよかったし事実そうするつもりだったんだけどな、最悪なことに丁度その発売日、プロの中でも下の下、ランキング最下位争いしてるようになつまんねえチンピラがやらかしたんだよ。何をつて？銀行強盗だよ。あのくそつたれ、計画性も何もないチンピラのくせにモンスターや魔法のゴリ押しだけで成功させやがって。

で、一度そうなつたらもう駄目だ。真似する馬鹿は出る、世間様からの風当たりは強くなる、イメージ商売のアタシらは直角に近い勢いで収入が落ちる、生活に困ったときにふと見れば手元には「BV」が内蔵されたデュエルディスクがある……な？

話しているうちに、当時の記憶がより鮮明に蘇ったのだろう。ここで一度話を止め、豪胆な彼女には珍しい今にも泣き出しそうな痛々しい笑顔で肩をすくめる。さりげない動作で潤みつつあった目元をぬぐい、深く息を吸ってどうにか平静を保ちつつ話の続きにかかる。

……すまんすまん、続けるぞ。もうぐちやぐちやだ、あの時期は本当に何やつても駄目だった。国の偉いさんも、「BV」の利権やらでよっぽど忙しかったのかアタシらには何にもしてくれなかったしな。アタシ？アタシは一応貯金もあつたしな、あと昔はファンも多かったし？細々と公式グッズも売れてたからそつちの収入でどうにかやつてたよ。もしかしたら藁人形に張り付けられて真夜中の神社で五寸釘打ちつけられてたかもしれないが、別にどう使おうとアタシに金が入ってくることに変わりはないさ。

で、そんな調子でしばらく経つてからだ。アタシの所に、同じようにじっと耐えてたプロ仲間や商売あがったりのデユエリスト産業の方々にデモ行進しようって話が回って来てな。暇してたのもあつたし、二つ返事で引き受けたよ。それで何か変わるとは思えなかったが、とにかく何かしたかつたんだ。

……今にして思えば、その時点でもう罨にかかつてたんだろう。おかしいと思うべきだったんだ、100人単位で参加者がいる馬鹿でかい行進なのに主催者の名前が見えてこないなんてな。ともかく、アタシはその日に指定された場所に行った。ひどい曇り空でな、今にも雨が降ってきそうだった。久しぶりに会う知った顔相手に駄弁つたりしてのんびり待ってる間に、どうもおかしいことに誰かが気づいた。周りの視線が冷たいのはそのころには慣れっこだったが、どうもそれだけじゃない妙な緊張感があつた。まるで、何かを待ちかまえてるような……なんか変だなーなんて言いながら、開始時刻の午前10時になった。その時間になつたら一斉にデユエルディスクを起動して、危害を加えないことをアピールしながら歩き出そうって話だった。主催者は相変わらず名乗り出ないから仕方ねえ、なんとなくその場のノリでアタシが音頭を取つたよ。

「よおおし、お前ら！どうせやることはわかってんだ、もう始めようぜ

！」

んでデュエルディスクを起動した、その時き。突然視界がかつと明るくなって、耳が聞こえなくなるような轟音がして。目の前のビルが崩れ落ちてくのが妙にスローモーションに見えて、その時ようやく悟ったね。ああ、アタシらはハメられたんだって。

計画を立てたのが誰なのか、目的は何だったのか……そんなこと、知ったこっちゃやない。ともかくそいつはアタシらの、プロデュエリストのデュエルディスクにしか組み込まれてない「BV」だけが欲しかったんだ。ほら、七曜のバカと蛇ノ目のアホがやろうとしたことと同じだよ。あらかじめ用意した爆発物のカードの所にアタシらがわざわざ出向いて「BV」の効力圏内にしちまったんだ。

笑っちゃまう話だが、最初は何をすればいいのかわからなかった。皆もそうだった。ようやく我に返ったのは、2つ目のビルが倒壊したときだったね。

「……っ、まずい！お前ら、早くデュエルディスクを切れ！」

とにかくこれ以上の被害だけは避けようとして、大声で叫んだ。「BV」さえ切っちゃえば、カードはカードだからな。アタシも含めほとんどの奴はその場で電源を落としたが、1人だけ決死隊みたいな顔でその場から急に逃げ出した奴がいた。アタシも咄嗟に追いかけてうとしたんだが、ちょうど訳も分からず逃げようとする人波の先頭に巻き込まれて思うように前に進めなかった。もたついてるその隙にまた隣のビルでボン、さ。ますますパニックはひどくなる、砂埃が視界を塞いで、コンクリの破片がでたらめに飛んでくる。地獄絵図つてのはまあ、あれのことを言うんだらうな。今にして思うと、よくアタシはその流れ弾に当たらなかつたもんだよ。

結局その逃げ出した奴に追い付いたときにはすっかり周りには廃墟になつてたし、人影なんてアタシらの他には誰もいなかった。昔のアタシよりほんの少し若かったから、多分二十歳にもなつてないガキだったんだらうなあ。

「いったい何のつもりだ、この野郎！」

「何のつもり？いい加減にしてくれよ、それはこっちのセリフだ！」

「あー？悪いな、アタシはアンタの顔も知らねえんだ」

……まあ、あの時は、アタシの言い方も悪かったんだろうな。若かったんだ。案の定この返事がよっぽど気に食わなかったらしくて、余計に表情を歪めて怒りだしたよ。

「ああ、そうだろうなあ。剣順平……俺の名前なんて、お前は知るわけがないよなあ。だけど俺は、お前を知ってるぜ。お前らプロデュエリストのせいで、カードショップをやった俺の親父は廃業に追い込まれた！なあ、わかるか？『赤髪の夜叉』さんよお？」

「……っ、それで、ここにいる全く関係ない人を巻き込んだってのか。その親父さんが聞いたら泣くぜ」

そう言っただけでやった時にそいつが見せたぞっとする表情と来たら、今でもくつきり覚えてるぜ。壊れた笑い、つつーのかね？確かに口の端だけは笑ってるんだが、目ん玉が濁って何の感情も見えてこねえんだ。そのくせじつと見てると、今にも泣きそうなのに涙が出てこなくて苦しんでるみたいにも見えてきてな……ああクソ、久々に嫌なもの思い出しちゃった。まあとにかく、そいつはこう答えたんだ。

「親父はもう泣けねえよ。泣かねえし、笑えねえ。店を潰した次の日、レジの前で首吊ってたのを最初に見つけたのは俺だ。悔しい、苦しい、すまない……それだけ書いた紙切れ一枚、遺書がわりに置いてあった」

「……」

「だから俺は、お前らを許さねえ。親父は普通のどこにでもいる人間で、いつも笑ってカードを売ってたんだ。絶対に、あんな死に方をしないでいいはずがねえ……それにな」

そう言っただけでそいつは、アタシの後ろに視線を向けた。ゆっくり振り返ると、大分晴れてきた砂埃の向こうに廃墟が……きまでビル群だったものが、ぐちゃぐちゃのコンクリートと鉄骨とガラスの塊の地獄絵図があった。それを一つ一つ指し示しながら、そいつは語りだした。

「全く関係ない、なんてことはないんだぜ、『赤髪の夜叉』。親父を苦しめたって意味じゃ、ここにいるやつらは全員同罪だ。そのビルは、大手カードショップ会社の本店。奴らが俺たちの町に支店を開いた

せいで、親父の店の経営は元々落ち込んだ。そこにお前らプロデュエリストがとどめを刺したんだがな。他にも俺たちカードシヨップを反社会勢力の手下だ、武器の販売店だなんて煽りやがった雑誌の本社、最初の銀行強盗以来デュエルモンスターズ産業全般への融資を無条件で打ち切りやがった銀行……これは復讐なんだよ」

完全にいかれてやがる、これじゃ話にならねえ。それで返事できなかったのを、アタシがビビったとでも思ったのかね。急ににやにや笑い出して、こんなふざけたことまで言い出しやがった。

「それにな。もうすぐここに警察も来るだろうが、奴らが見たらこの状況をどう思う？」

「どう？そりやどういう意味だ？」

「おいおい、まだわかんねえかなあ。あのビルを漁ったところで、瓦礫の下から出てくるのは親父の店にあったデュエルモンスターズのカードだけだ。そして今日、この場所でデモを始めたのはブレイクビジョン・システムを持つ唯一の連中、プロデュエリストだ。当然カードはいくら持ってても不思議じゃないし、あのビルに入ってあらかじめカードを仕込むのも難しくはない」

「まさか、アタシらに全部擦り付けようってのか？」

「言っただろ？これは復讐だよ。俺たちを、親父を切り捨てやがった奴らは、親父のカードを実体化させて殺す。だがその元凶になったお前らプロデュエリストは、そんな楽には終わらせてやらねえ。まずは手始め、社会的にぶち殺してやるよ。お前らみたいな目立ちたがり屋どもには、こっちの方が効くだろうからな」

それから急にタガが外れたみたいに笑いだしたそいつを、アタシはやっぱり見てるだけしかできなかつた。誰もいない町のと真ん中でな、どこかで爆発の衝撃でガスでも漏れてるのか、重苦しい空に空気の漏れる音と嫌な臭いが漂って。だいぶ精神的に参ってて壊れる寸前だったんだろうな、発作でも起きてんのかってぐらい身をよじって大笑いしてる男……なんかもう馬鹿馬鹿しすぎて、夢でも見てんのかと本気で考えちまつたぐらいだ。

ま、紛れもなく現実だったんだけどな。

「さあ、来いよ……」

笑い始めた時と同じぐらい唐突に、そいつの顔からふつと表情が消えた。うつろな目つきで取り出したのは、なんだと思う？デュエルディスクだよ、デュエルディスク。あの時代はどこにでも売ってた、ごく普通の大量生産モデルのな。それを腕に付けて起動して、まだ動かないアタシをちよつと苛立った調子で睨みつけてきた。

「どうした、プロデュエリスト様よう。デュエル、しようぜ？だーいすきなカードで、最後に遊ばせてやるよ」

狙いはわかった。アタシがその勝負を受けたら、当然アタシのデュエルディスクは「BV」を起動する。なにせまだ出始めの機能だったからな、オンオフ切り替えなんて便利なもんはついてなかったんだ。

デュエルをすれば、カードは実体化する。警察が来る前に、もうひと暴れして被害を広げようって腹に違いない。どんな挑発を受けようとも、この勝負にだけは乗るわけにはいかなかった。そう、思ったんだけどなあ。そんな決意、次にそいつが動かないアタシに業を煮やして取り出したものを見た瞬間に吹っ飛んじまった。

「……そいつはっー」

「いい反応だな、プロデュエリスト様？その通り、こいつはダイナマイトだ。俺はお前たちみたいカードで何でもできるだなんてこと、最初から信じちゃいなかったからな。当然、それ以外の方法も準備してあるってわけだ。これ以上そこから動かなけりゃ、こいつが火を噴くぜ？このガスだ、俺もお前も辺り一面丸ごと吹き飛ばしてやれるだろうぜ」

……まったく馬鹿げてやがる話だろ？だがな、そいつの目は間違いなくマジだった。間違いなくそこにあるダイナマイトに比べりゃ、デュエルの方がまだマジだ。よく言うだろ、あの手の頭がぶつ飛んじまった奴相手にやとにかく言うこと聞いて下手に刺激しない方がいいって。

結局アタシは、デュエルディスクを起動した。

「……デュエル！」

「人生最後のデュエル、せいぜい楽しもうや。俺のターン、レスキューラビット！そしてこのモンスターを除外することで、レベル4以下の同名通常モンスター2体をデッキから特殊召喚できる。来い、メカ・ハンター！」

瓦礫の隙間から顔を出した、安全ヘルメットをかぶった兎。ぴよんぴよん跳ね回って倒れたビルの窓ガラスの内側に姿を消したかと思ったら、割れた窓のフレームが突然内側からぶち破られた。円盤状の体にいくつもの細い副腕を生やした瓜二つの……要するにだ、メカ・ハンターがリクルートされたんだよ。

レスキューラビット 攻300

メカ・ハンター 攻1850

メカ・ハンター 攻1850

「そして俺は機械族のレベル4モンスター、メカ・ハンター2体でオーバーレイ……回れ歯車。行く手遮る全てを潰す鋼鉄の進撃！エクシーズ召喚、ランク4！ギアギガント X！」

☆4+☆4★4

ギアギガント X 攻2300

赤や青、緑。物々しい口上にしちや随分カラフルな色合いの、いかにもって感じな風貌をした人間大のロボット。鋼鉄の体でポーズを決めたその背中に背負った巨大な歯車に例によってオーバーレイ・ユニットが吸い込まれると、目が覚めたみたいにしていつが加速しながら回り始めたのさ。

ギアギガント X(2) ↓(1)

「ギアギガントは1ターンに1度オーバーレイ・ユニットを使うことで、デッキか墓地からレベル4以下の機械族モンスターを手札に加えることができる。俺が選ぶカードは、ブラック・ボンバー！」

「機械族闇属性を蘇生する効果持ちのチューナー、蘇生対象はたった今墓地にいったメカ・ハンターってか？なるほどな、案外考えてるじゃねえか」

「はっ、今はいいぜ、そうやって自分の方が強いって余裕ぶつてりやよ。すぐに間違ってたことがわかるからな！カードをセットして、

ターンエンドだ」

「ごちやぶごちや抜かしやがって……アタシのターン！」

さんざん言い放題言われて、いい加減アタシも腹立ってたんだろな。つーか、今思い出しても腹立ってくるな。多少押せ押せでいこうって気になったのも、まあそういうことだ。

「不知火の武部もののぶを召喚し、効果発動。このカードの召喚時、ターン内のアンデット以外の特殊召喚を縛るかわりにデッキから妖刀―不知火モンスターを特殊召喚できる。アタシが呼ぶのはもう一振りの刀、逢魔ノ妖刀―不知火！」

赤を基調にした和装の短髪少女が薙刀を振るうと炎の軌跡が尾を引いて、揺らめき踊る炎が現世と幽世の境界を薄く、互いに互いを混じりあわせる。本来ならば「向こう側」にあるべき逢魔の力を受けた妖刀が、たった今馬鹿の手によってできたてはやはやの廃墟に突き立ったのさ。

不知火の武部 攻1500

逢魔ノ妖刀―不知火 攻800

「アンタが初手でエクシーズなら、アタシはシンクロ召喚だ。レベル4の武部にレベル3、逢魔ノ妖刀をチューニング！戦場貪る妖の龍よ、屍闘の果てに百鬼を喰らえ。シンクロ召喚、レッドアイズ・アンデットネクロドラゴン真紅眼の不死竜！」

☆4＋☆3＝☆7

真紅眼の不死竜 攻2400

アタシのエースの一角、鬼火の目を持つ腐敗した黒き竜……ん、どした？何か言いたげだな。ああ、ガス爆発か。不知火の炎も真紅眼の鬼火も、ただの炎じゃないからな。もっとオカルト的なもんだから、これでものが燃えたりはしない。なんでそう言い切れるのかって？あー……ここだけの話だがな、どうにかして召喚のどさくさに紛れて煙草に火がつけられないか何度か試してみたことがあったからな。おい、これ鼓には絶対言うなよ？もう10年以上前の話とはいえ、どんだけ小言喰らうかわかったもんじゃないからな。

よし、いいな？続けるぞ。

「フィールド魔法、アンデットワールド。生あるものなど絶え果てて、死体が死体を喰らう土地。せつかくプロが相手してやるってんだ、アタシの領土に案内してやるよ」

まわりの廃墟に影がかかり、荒廃した雰囲気により一層増していった。別に瓦礫ひとつ、割れたコンクリートの地面ひとつとかのパーツは何も変わってないんだがな、どこがどうとは言いいにくいだが、そこは間違いなくアタシの得意とする場所だった。そしてその中央でただ一匹、真紅の龍が腐敗した吐息と共に天にめがけて吼えたのさ。

ギアギガント X 機械族↓アンデット族

真紅眼の不屍竜 攻2400↓2900 守2000↓2500

「真紅眼の不屍竜の攻守は常に、互いのフィールドと墓地のアンデットの数だけアップする。そしてアンデットワールドがある限り、フィールドと墓地の全モンスターはアンデットに書き換えられる。さあ、バトルだ。真紅眼でギアギガントに攻撃、獄炎弾！」

『赤髪の夜叉』お得意のアンデット戦術、それはお見通しなんだよ！速攻魔法、サイクロン！この効果でアンデットワールドを破壊する！

「何?！」

ギアギガント X アンデット族↓機械族

真紅眼の不屍竜 攻2900↓2700↓ギアギガント X 攻

2300 (破壊)

剣 LP4000↓3600

「けっ、運のいい野郎だ」

舌打ちした理由はわかるよな？真紅眼の不屍竜の攻撃力が落とされたのもそうだが、問題は戦闘破壊されたのが機械族に戻ったギアギガントだったことだ。真紅眼の不屍竜は、フィールドでアンデットが戦闘破壊されたのをトリガーとして互いの墓地からアンデット1体を選んで蘇生できる効果がある。アタシとしちゃそいつを使って墓地に墮としたギアギガントをそのまま蘇生、ダイレクトアタックで一気に削ってやるつもりだったのによ。サイクロンたった1枚で、与える予定のダメージが2500も減っちゃった。

とはいえ、最初のダメージをこつちが取ったことには変わりない。まだ流れはアタシの側にある、そう信じてすぐに気を取り直したさ。「カードをセットして、ターンエンドだ」

「俺のターン。チューナーモンスター、ブラック・ボンバー召喚！効果はさすがにわかってるみたいだから、無駄は省略だ。甦れ、メカ・ハンターさんよお」

漫画みたいな顔がでかでか描かれた真っ黒い爆弾と、その導火線の先に結びつけられたメカ・ハンター。チューナーと、チューナー以外のモンスター1体。どうやらリンク召喚する気はないみたいだったから、次に何が起きるかは嫌でもわかったさ。

ブラック・ボンバー 攻100

メカ・ハンター 守800

「シンクロ召喚……の、前にだ。俺のフィールドに機械族の効果モンスターが2体存在することで通常魔法、アイアンドローを発動。カードを2枚ドロウする」

これもアンデットワールドさえ生きてりや完全に腐った紙切れに変えられたんだが、そのあたりはまあ耐性のない永続カードの宿命だな。お前はいいよなあ、KYOUTOUウオーターフロントはまともな破壊で剥がそうとすると異様に固いんだから。

とと、また話が逸れたな。

「来たか……フィールド魔法、竜の渓谷を発動」

「……で竜の渓谷だと……？」

崩れたビル表面に岩肌のテクスチャが上書きされて、周りの風景が霧深い山の中になった。けどその時は、周りなんて見てる余裕はなかったな。竜の渓谷つついたら、まあドラゴン族のサポートだろ？ドラグニティのサポートでもあるんだが、使われる比率的には九分九厘ドラゴン族だ。

だけどこれまでのデュエルでアタシが見てきたカードは、どう見ても機械族の関連ばかり。ご丁寧にアイアンドローまで入ってるんだから、なおさらだ。

何が狙いなのか？どの道その効果を止める手は持ってなかったか

ら、見てるしかなかったんだけどな。

「竜の渓谷の効果を発動。1ターンに1度手札を1枚捨て、2つの効果から1つを選択する」

まあ何が狙いにせよ、とりあえずは2つ目の効果……デッキのドラゴン1体を選んで墓地に送るのが狙いだろう。そんな安易な考えを、そいつはあっさり超えていった。ああ、認めてやるよ。全く、大したもんだったぜ。決死の覚悟が決まってるやつってのは、やっぱそれだけ強くなれるんだろうな。今この町にうろついているようなチンピラとは、比べるのも失礼なぐらい格が違う。

「俺が選ぶのは、レベル4以下のドラグニティ1体をサーチする効果。レベル1モンスター、ドラグニティーブランディストック！」

「ドラグニティのサーチ……それも、ブランディストックう？」

「ああ、そうさ。そして、そろそろお楽しみみのシンクロ召喚だ。レベル4のメカ・ハンターに、レベル3のブラック・ボンバーをチューニング！起動せよ逆鱗。全ての武器を貪欲に掴む鋼の威容！シンクロ召喚、レベル7……機械龍 パワー・ツール！」

☆4+☆3=☆7

機械龍 パワー・ツール 攻2300

アタシと同じ、レベル4モンスターとレベル3チューナー2体でのシンクロ召喚だった。さすがにそこは偶然だろうし、そもそもだからなんだって話だけだな。

まあとにかく全体的に黒みがかかった黄色の装甲を持つ機械の龍が、土木工事でもやろうってのか左右に広がる竜の渓谷を左手の青いシャベルでぎつくりと掘り、右腕に換装された緑のマイナスドライバーを突き刺して辺りに土塊をぶちまけながら着地した。ソリッドビジョンでそう見えるってことは、つまり現実的には崩れたビルをさらにぶち壊してコンクリートの塊をでたらめに吹き飛ばしたってことだ。

ある意味じゃ大した有効活用だが、ほんつとにやりたい放題好きにやりやがって。

「そして永続魔法、竜操術を発動。1ターンに1度場のモンスターを

選び、手札のドラグニティをそいつに装備できる。そしてドラグニティを装備したモンスターは500アップする。行け、ブランドイストック！」

パワー・ツールの左腕のマイナスドライバーが重い音を立ててパージされて地面に落ち、その代わりにさつきサーチされたばかりのブランドイストック……青みがかかった肌に短い手足、頭頂部に小さいが鋭い金属質の一本角を持つ小型の竜がその両手両足、それに尻尾まで使つてがっちりとその腕に絡みついた。なかなか異様な光景だったが、効果は本物だ。

機械龍 パワー・ツール 攻2300↓2800

「さらにこの瞬間、パワー・ツールの効果発動。1ターンに1度このカードに装備魔法が装着された時、カードを1枚ドロウする。
イクイップ・ボーナス
装備特典！」

手札も補充、攻撃力もアップ。明らかに調子づいてやがったが、アタシにもまだ余裕はあった。アタシの伏せカードはトラップカード、幻影騎士団ロスト・ヴァンブレイズ。対象モンスターのレベルをターン終了時まで2にし、さらに攻撃力も600下げるあのカードを使えば、真紅眼の不屍竜で返り討ちにできる。

でもなあ、そんなことを考えてる時に限って、上手くはいかないもんなんだよなあ。な、アンタならわかるだろ？

「待たせたな、バトルだ……だが、今パワー・ツールにもしものことがあつたら装備状態のブランドイストックまで一蓮托生だな？バトルフェイズ開始時に速攻魔法、封魔の矢を発動だ！」

無数の矢が上空から降り注いだ、その狙いはアタシじゃなければ真紅眼でもない。伏せられたロスト・ヴァンブレイズを固くその場に張り付けやがった。

「この発動に対して一切のカードは発動できず、さらにこのターンの終了時まで互いにあらゆる魔法も、罠も、その効果を使うことはできない。『赤髪の夜叉』もうひとつの戦術、バージエストマを中心としたトラップ連打……そいつも通しやしねえよ！今だ、パワー・ツール！」

「真紅眼！」

迎撃のために吐き出された鬼火の炎弾を右腕のシヤベルでがっしりと受け止め、そのまま横に弾いたパワー・ツール。勢いを止めることなく肉薄して、左腕のブランディストックをその腐った肉にへばりついた竜の鱗めがけて突き出した。いくらドラゴンだったって、今は限界なんてどうに越えたアンデット。元々ガタがきてたからな、いともあっさりその切っ先は背中側まで突き抜けやがったよ。

機械龍 パワー・ツール 攻2800↓真紅眼の不屍竜 攻2700 (破壊)

糸巻 LP4000↓3900

「くくく……まずは『赤髪の夜叉』の代名詞、真紅眼の不屍竜。さあ、次は何を出してくれる？死霊王 ドーハスーラか？それともバージエストマ・アノマロカリスか？どいつからでも構わない、お前のプロデュエリストのプライドごとへし折ってやるよ。見てくれよ親父、ブランディストックの特殊能力！このカードを装備したモンスターは、1ターンに2回の攻撃ができる。この効果は永続効果だから、封魔の矢による制限も受け付けない。ダイレクトアタックだ、フルメタル・デモリション重装解体！」

機械龍 パワー・ツール 攻2800↓糸巻 (直接攻撃)

糸巻 LP3900↓1100

「ぐはっ……！」

どうしようもないんだから、大人しく受けるしかない。唸りをつける金属の腕と、その先端のブランディストックが体に突き刺さる嫌な感触。外傷まではなかったが、痛いもんは痛いさ。突き刺されたのに怪我がないのはおかしいって？昔はまだ「BV」妨害電波の発生システムも完成してない半面、「BV」自体のクオリティもまだそこまで高くはなかったからな。それを今並みに発展させたのが、巴のアホみたいなアホのくせに無駄に技術力ばっか高いアホどもだ。

「カードを伏せる。痛いだろ？だがな、親父の受けた痛みはこんなもんじゃねえ！ターンエンドだ！」

「この程度……すぐ倍にして叩き返してやるよ！アタシのターン、ドロ！まずはトラップ発動、幻影騎士団ロスト・ヴァンブレイズ！対

象は機械龍 パワー・ツール、テメエだ！」

機械龍 パワー・ツール ☆7↓2 攻2800↓2200

幻影騎士団ロスト・ヴァンブレイズ 守0

「そしてロスト・ヴァンブレイズは発動後レベル2、通常モンスターとなつてアタシの場に残る。不知火の隠者かげものを召喚！」

不知火の隠者 攻500

幻影となつた騎士の魂を宿すボロボロの胴当てに、不知火の紋章を刻まれた山伏。反撃の準備が整つたところで、あとは一気に攻め込むだけさ。

「不知火の隠者は場のアンデットをリリースすることで、デツキから守備力0のアンデットチューナー1体を特殊召喚できる。アタシはこの陰者自身をリリースしてレベル2、妖刀―不知火を呼び出すぜ」

妖刀―不知火 攻800

「レベル2のロスト・ヴァンブレイズと、同じくレベル2の妖刀でオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクスシーズ召喚！戦場呼び込む妖の魔猫よ、百鬼呼び寄せその目に見染めた戦乱を打ち破れ！オナバースNo.29、マネキンキャット！」

☆2+☆2=★2

No.29 マネキンキャット 攻2000

奴がシンクロ返しなら、アタシはエクスシーズ返しさ。なんて言い方すると当てつけみたいだが、別にそんなんじゃないさ。この球体関節も露わな猫耳の人形、これがアタシの反撃の狼煙だった。

「マネキンキャットの効果、千客万来の小判振る舞い！オーバーレイユニット1つを使うことで相手の墓地からモンスター1体を選び、相手のフィールドに特殊召喚する。アタシが選ぶのは当然攻撃力が一番低いブラック……いや、メカ・ハンターを攻撃表示だ畜生」

No.29 マネキンキャット(2)↓(1)

メカ・ハンター 攻1850

マネキンキャットが髪飾りの小判を外して上空高くに放り投げると、一拍おいてから雨みたいに大量の小判が竜の渓谷に降り注いできた。するとその黄金の輝きにつられたみたいに、墓地に行ったはずの

メカ・ハンターも蘇ったってわけだ。

とはいえ、アタシとしてこれはあんまり面白くはない。ここで攻撃力100しかないブラック・ボンバーを蘇生させてやればその次の戦闘で大ダメージは必須、そうしてやりたいのはやまやまだったんだが。竜の渓谷のソリッドビジョンのせいで忘れそうになるとはいえ、アタシらがその時デュエルしてる場所は崩れたビル群のど真ん中。まだ止まってないガスも、その頃にはだいぶあたりに溜まってきてたからな。文字通り爆弾型モンスターのブラック・ボンバーなんて呼び出して戦闘破壊なんてかました時にや、最悪の事態まで考えなきやいけなくなる。メカ・ハンターを選んだのは、苦肉の策って奴だ。

「この瞬間、マネキンキャットの更なる効果発動。相手フィールドにモンスターが特殊召喚された時に相手モンスター1体を対象に取り、種族か属性の同じモンスターを手札、デッキ、墓地から選んで特殊召喚できる。百鬼夜行の小判振る舞い！闇属性のメカ・ハンターと同じ闇属性モンスター、お望みどおりに呼んでやるとも。死霊を統べる夜の王、死霊王 ドーハスーラ！」

霧に包まれた竜の渓谷、その光も届かないほど地下深く。ずるり、ずるりと湿った音が、アタシらのいる場所に次第に近づいてきた。蛇のような下半身をうねらせて、死霊どもの怨嗟の声を後ろに。真紅に輝く宝玉の付いた杖を岩肌突き立てて、ドーハスーラがやってきたのさ。

……ククツ、その嫌そうな顔。アンタとのデュエルじゃ、大暴れしてくれたもんな？そうやっていい反応してくれると、多少はアタシの気も紛れるからどんどんやってくれ。どうせこの話、オチはろくなことにならねえんだからな。

死霊王 ドーハスーラ 攻2800

「さあ、バトルだ。ドーハスーラ、パワー・ツールをスクラップにしてやれ！」

ドーハスーラが吼えて杖を差し向けると、あたりを漂う無数の霊魂が強制的に使い捨ての弾丸となって特攻をかけ始めた。ブランドイストックとシャベルで防御姿勢をとるパワー・ツールだったが、まあ

無駄だわな。みるみるうちにピカピカだった装甲は穴だらけになって、これまた金属製の尻尾も根元からぶつちぎれて深い谷底へ真つ逆さまだ。

だが面倒なことに、まーだそれだけじゃ終わらなかつたんだよな。全身がぶち抜かれて鉄くずになる寸前、あちこちの破砕痕から無数のプラズマが不規則にその全身を走り始めた。どこにそんな力があつたのか突然飛び上がって、自由落下の勢いをつけてまだ辛うじてくつついてた左手のシャベルの一撃をドーハスーラにぶちかましやがつたんだ。直撃を喰らって山肌から叩き落とされたドーハスーラは、そのままうねりながら足元の霧に呑み込まれてつた。

「かかつたなー！ トラップ発動、エクシーズ・ソウル！ 発動時に俺の墓地のエクシーズモンスター、ギアギガント X を選択し、俺のモンスター全ての攻撃力をターン終了時までそのランク1 つにつき200 アップさせる。つまり、200 かける4で800だ。そしてその後、選んだギアギガントをデッキに戻せる。どうしたよ、プロデュエリスト様つてのはその程度なのかよ？」

「舐めやがって、このガキ……！」

死霊王 ドーハスーラ 攻2800(破壊)↓機械龍 パワー・ツール 攻2200↓3000

メカ・ハンター 攻1850↓2650

糸巻 LP1100↓900

今にして思えば、すーぐ顔真つ赤にしてたアタシも悪いんだよな、これ。まったく情けないもんだ、アタシともあるうもんが素人相手に真紅眼の不屍竜とドーハスーラ、1回のデュエルでエースを2体も潰されるなんてよ。

「メカ・ハンターも倒せねえか……ターンエンドだ」

機械龍 パワー・ツール 攻3000↓2200↓2800 ☆2
↓7

メカ・ハンター 攻2650↓1850

「俺のターン、ドロー。おいおい、もつと抵抗してみてくださいよ。こんなんじや、親父も浮かばれないぜ」

「……だがな、ドーハスーラはまだ負けたわけじゃねえ。このスタンバイフェイズ、フィールド魔法が存在することでドーハスーラの効果を墓地から発動！このカードを守備表示で蘇生する、甦れドーハスーラ！」

霧深い谷底から、ドスリ、ドスリと山肌に杖を突き立てて。怒り心頭の死霊の王が、再び山を登って現世に復帰した。とはいえアタシもあんだだけ荒れてるドーハスーラを見たのは、後にも先にもあれつきりだ。ちゃんと蘇生できたんだから、そんな怒ることないのになあ。

死霊王　ドーハスーラ　守2000

「マネキンキャットは相手ターンの特殊召喚でも効果を発動できる、だろ？つまりこのターン、わざわざ特殊召喚して壁を増やすお手伝いをしてやることはない。ないが、じわじわと追い詰めてやる。竜の渓谷の効果を発動！手札を1枚捨て、このターンもサーチだ。レベル1、ドラグニティー・コルセスカ。そして竜操術の効果で、このコルセスカもパワー・ツールの武装になる！」

ベージュ色の肌に黒い翼、そして先が3つにわかれた槍状の角だったな。ドラグニティーの次の竜が、死霊の猛攻により傷ついたパワー・ツールの新しい矛としてその体を絡ませた。竜操術の攻撃力アップ効果は重ね掛けできるもんじゃないからそれ以上攻撃力は上がらなかったがそれでもパワー・ツールのドロー効果は生きてやがる、ちやつかり手札も補充しやがった。

「バトル。やれ、パワー・ツール！2回攻撃でマネキンキャットを、そしてドーハスーラを殲滅するんだ。重装解体！」

シャベル、槍、矛。3つの武器を両腕に装着したパワー・ツールが山肌を蹴ってこっちに飛んできて、鋼鉄の弾丸になって全武装をでたらめに振り回しやがった。一撃一撃が重機の暴走みたいなものだ、馬鹿みたいにアスファルトの残骸やらちぎれた鉄筋やら飛び散らせやがってよ……よく火花とかが飛んでガスに引火、両者爆発によるノックアウトではい終了、なんてことにならなかったもんだぜ。

「舐めんなつってんだろクソガキ、手札からヴァンパイア・フロイラの効果を発動！モンスターへの攻撃宣言時、このカードは手札から

守備表示で特殊召喚できる！」

ヴァンパイア・フロイライン 守2000

いくつもの腕と先の武器を揺らしながら、アタシの方に突っ込んできたメカ・ハンター。だけどその道中で急に霧が濃くなったかと思うと、無数の蝙蝠の羽音がその中から聞こえてくる。そんでぱつと漆黒の傘が開き、どこからともなく霧に包まれた渓谷の影に真っ白い肌のヴァンパイアが立ち塞がったのさ。

だけど、アタシの狙いはただ壁を増やそうってだけじゃない。

「そしてこの瞬間、ドーハスーラの効果！このカード以外のアンデットが効果を発動した瞬間、互いのフィールドか墓地からモンスター1体を選んで除外……」

「おっと、速攻魔法、禁じられた聖杯！ドーハスーラの攻撃力を400上げて、その効果を無効にするぜ」

死霊王 ドーハスーラ 攻2800↓3200

「クソが、これも駄目か……！」

いくら攻撃力を上げられようが、自己再生が守備表示限定のドーハスーラには意味のない話だ。結局除外効果も失敗し、2連撃がまずマネキンキャットに襲い掛かった。

機械龍 パワー・ツール 攻2800↓No. 29 マネキン

キャット 攻2000 (破壊)

糸巻 LP900↓100

「これで残るはドーハスーラ、とヴァンパイア・フロイライン……：そーいやあ、そんな奴もお前は使ってるんだっけな。だが、そいつの効果も俺は知ってるぜ？アンデットの戦闘時、ライフを100単位で払うことできっかりその数値分だけ強化を行う。確かに強力だな、『赤髪の夜叉』。だが、今のお前のライフは100、もうその効果のコストは払えない。つまりドーハスーラも、守備力2000程度のただの壁だ！」

いちいち癪に障る言い方ではあったが、実際その通りっちゃあその通りだったな。かなり追い込まれてたアタシに、フロイラインの力を解放するだけの余力は残ってなかった。

機械龍 パワー・ツール 攻2800↓死霊王 ドーハスーラ 守2000(破壊)

「これで壁モンスターは全滅、そしてコルセスカの効果発動。装備モンスターがバトルで相手モンスターを破壊した時、デッキから装備モンスターと同じ種族かつ属性を持つレベル4以下のモンスターを手札に加えることができる。パワー・ツールは機械族の闇属性、よって2枚目のブラック・ボンバーをサーチ！」

「どうだ、大分追い込まれてたろ？……だが、だがな？あいつは全く気付いてなかったようだが、アタシもただ追い詰められてたわけじゃない。この時点で、こつちの仕込みは順調に進んでたんだよ。だが今は、奴のメイン2からだな。」

「まあいいさ、ただの壁とはいえ今のターンを凌いだのは腐ってもプロ、大したもんだ。だがそれも終わる、次のターンに使うのが、これだ」

「そう言っただけで表に向けたカードは、ついさつきサーチしてたブラック・ボンバー。」

「こいつを召喚すれば、墓地のメカ・ハンターをまた蘇生できる。次にシンクロ召喚で俺が呼び出すレベル7モンスターは、ダーク・ダイブ・ボンバー！メインフェイズ1にモンスター1体をリリースすることでそのレベルに応じたダメージを与えるこのカードで、このデュエルも終わらせてやるよ。だが念には念を入れ、カードを伏せておくか。これですます盤石になったわけだ」

「黙ってるアタシの心が折れたとでも見たのか、ぺらぺらといい気になって次の手を明かしてく馬鹿。実際そのとき何を考えてたかつーと……ま、単純にどうぶちのめしてやろうか、ただそれだけだ。別にそう難しいことじゃない、っておい。今随分深々と頷いてくれたじゃねーか、いい度胸だコラ。」

「まあいいさ、続けるぞ？それでアタシはようやく顔を上げて、たった一言だけ言っただけだ。」

「それで終わりか？」

「……なんだと……!？」

その瞬間の、青筋立てた顔ときたら。今にして思えばなかなか傑作だったけど、アタシもその時はいい加減イライラしてて余裕なかったかな。確かにあいつの親父さんとやらは気の毒だと思っし、アタシにもその責任が欠片もないとまでは言わんさ。

だがな、だからってそれをアタシにぶつけてくるのは単なる八つ当たりだ。八つ当たり大いに結構、好きだけやってもらえばいい。いいんだが、勝つだけの力もないくせにあーだこーだと口ばっか達者つてのがどうも気に食わなかったんだな、つまり。ぎゃーぎゃー言いてえんなら勝つてから言えつてことだ、それならアタシも甘んじて受け入れるさ。まだ勝負がついてないのにもう勝った気になってデュエル中にうだうだうだうだ、ぐちぐちぐちぐちと……あー、やっぱ駄目だな。いまだに思い出すと腹立ってくる。

「アタシのターン！ いいか、アンタみたいな馬鹿でもわかるように丁寧に教えてやる。アンタに次のターンはこない、そして勝つのはこのアタシだ！」

「何を言い出すかと思えば、ふざけやがって。盤面を制圧しているのは俺、ライフ差は3800。笑わせやがる！」

「いいから黙って見てな？ どうしてアタシがプロデュエリストなのか、たっぷり思い知らせてやるよ。まずスタンバイフェイズ、このターンも竜の渓谷の存在によりドーハスーラを蘇生」

死霊王　ドーハスーラ　守2000

「手札抹殺を発動。互いに手札を全部切って、その枚数だけカードを引く」

「ブラック・ボンバーを捨てさせるつもりか？ いいさ、せいぜい足掻いてくれよ」

「わっかんねえかなあ……次だ、墓地に眠る妖刀―不知火の効果発動。このカードと墓地のアンデット族、不知火の隠者を除外することで合計レベルと等しいアンデットシンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。妖刀のレベルは2、そして陰者は4。戦場切り込む妖の太刀よ、一刀の下に輪廻を刻め。逢魔シンクロ、刀神―不知火！」

☆4＋☆2＝☆6

刀神―不知火 攻2500

「そして不知火の隠者は除外された時、別の名を持つ不知火1体を帰還させることができる。妖刀再誕！」

妖刀―不知火 攻800

「……なるほど、狙いはさらに上のレベルを持つモンスターのシンク口か。だったらこれだ！トラップ発動、パルス・ボム！俺のフィールドに機械族がいるときにのみ発動でき、このターンの間だけ相手モンスター及びこれから出される相手モンスター全ては守備表示を強要される！」

刀神―不知火 攻2500↓守0

妖刀―不知火 攻800↓守0

「……はっ」

竜の渓谷の全域で電磁波がざわめき、刀神と妖刀がその全身を電磁の網で拘束される。だが、所詮は浅知恵でしかないな。もちろんパルス・ボムも悪いカードじゃないんだが、あの時のアタシをそれ1枚で止めようってんならちつとばかり役不足だ。

「構わねえさ。アタシはアンデット族のフロイライン、ドーハスーラ、刀神、妖刀の4体を左、左下、右下、右のリンクマーカーにセツティング！」

「リンクモンスター、それもリンク4か……！」

わかりきったことに答える道理はない、だろ？最初に変化が起きたのは、竜の渓谷にかかる深い霧だった。ペキペキと微かだが確かな硬質の音がして、ゆっくりと霧が水滴に、そして光を反射し煌めく微細な氷の粒に変化していくさまがはっきりとアタシには見えた。山肌に薄く霜が張り詰めたかと思うと、すさまじい勢いでそれが分厚くなってみるみるうちに視界の全てを白い氷に染め上げられてっちゃう。頭上の太陽までその勢いを弱めて、切れかけの電球みたいな頼りない光をほんのちよびつと届けるだけだった。

「……戦場染め変える妖の白刃よ！凍てつく輪廻を零に還せ！リンク召喚、リンク4ツ！零氷の魔妖―雪女！」

零氷の魔妖―雪女 攻2900

すっかり吹雪吹き荒ぶ雪山へと装いを変えた竜の溪谷に、純白の着物を着た女が1人。その手に持っていたのは、全体を凍り付かせた巨大な薙刀。普段リンク4なんてアタシのデツキじやめつたなことでは出す機会もないんだが、今回あえてアタシがこいつに頼ったのには訳がある。それはおいおい話すとして、まずはいかにしてアタシが勝ったのかだ。

「で、でも攻撃力は2900!たどえメカ・ハンターが狙われても、まだ……!」

「悪いな、アンタさつき自分で言ってたろ?アタシのプライドを叩き潰すつて。だからアタシも、アンタに同じことをしてやるよ。狙いはただひとつ、お前だパワー・ツール!」

そう機械の龍を指さすと、その全身が足元から雪に埋もれ、氷に取り込まれていった。そいつがあまりに急速だったからな、ロクに抵抗すらせずにあれだけ手こずらせてくれたパワー・ツールが2体のドラグニティごとただの氷像に代わっちゃまったよ。

機械龍 パワー・ツール 攻2800↓0

「俺のパワー・ツール……!何をしやがった!」

「簡単な話だよ、屍界のバンシーだ。手札抹殺で捨てたこのカードを墓地から除外することで、デツキからアンデットワールドを発動することができる。アンデットワールド自体にステータスをいじる力はないが、雪女にはそいつがある。互いの墓地からモンスターが特殊召喚された時、または墓地からモンスターの効果を発動した時、相手フィールドのモンスター1体を選択してその攻撃力を0にして効果を無効にする。魔妖流、かくりよのほむらたち幽世焰断!」

機械龍 パワー・ツール 機械族↓アンデット族

メカ・ハンター 機械族↓アンデット族

「だが、まだだ!いくらパワー・ツールが無力化されようと、その攻撃力なら耐えきれ……!」

「いいや、無理だな。速攻魔法、アンデット・ストラグル。このカードはフィールドのアンデット1体の攻撃力を、1000上げるか下げる

かすることができ。よって雪女の攻撃力は……」

零氷の魔妖―雪女 攻2900↓3900

「3,900……」

わかるだろ？ジャストキルって奴だ。雪女が薙刀を振りかぶって飛び、空中からの斬撃が閉じ込めていた氷の塊ごとパワー・ツールを打ち砕いたのさ。

零氷の魔妖―雪女 攻3900↓機械龍 パワー・ツール 攻0

剣 LP3900↓0

「そんな……親父……畜生……！」

聞き取れたのはそこまでだったな。後はもう、ボロボロ泣いてたせいで何言ってるのかさっぱりわからなかった。まだ若いとはいえ大人の大人が泣きじゃくってるのなんざ見たいもんでもないからとりあえず遠巻きに眺めてたが、ややあつて泣き止むとゆ……つくりとした動きで立ち上がった。で、またポケットに手を突っ込んだ。

どうしたかって？何をやるかは予想付いてたからな、先手を打ってアタシから言っちゃったよ。

「やめときな。なんのためにアタシが雪女を出したと思ってるんだ？その物騒なもんは、雪女の影響で完全に凍り付いたはずだ。そうそう爆発なんてさせやしねえよ」

「それじゃ、はじめからそれを狙って……！」

「さあな。それは企業秘密だが、少なくともひとつは教えてやる。アタシを相手にして本気で追い詰めて倒そうなんざ、百年どころか百万年は早いんだよ」

「……とまあ、ここで終わってりやアタシの武勇伝、ちよつといい話で終われたんだがな」

そこで一度話を切った糸巻が、おもむろに取り出した煙草に火をつけた。一服して喋りづめだった喉を休ませ、その間に覚悟を決める。あの日の記憶は、ここからが本番なのだから。

最後の手段であろう爆発が根こそぎ封じられたことで、精神的にも限界が来たんだろうな。その場で気を失ってひっくり返っちゃった野郎の所に、アタシもいい加減疲れた足を引きずって歩いてった。いくら凍り付いて爆発しにくくなつたとはいえ、物騒なものであることに変わりはないわけだからな。さっさと回収して捨てちまおう……そう思った矢先だよ、全部がおかしくなったのは。

「ん……お、おい！待て待て待て……!?!」

雪女の大暴れのせいで間違いなく数度は下がった肌寒い気温の中、何気なくデュエルディスクの電源を落とそうとした時だ。手に、違和感があった。普段はスムーズに動くしメンテもちゃんとしているはずのデュエルディスクが、その時に限って固くて電源が動かなかつたんだ。理由？さあな。ただ、前からちよつとプロの中でも話題になつてたんだ。「BV」を使ったデュエルの後は、デュエルディスクの温度が凄いいことになってるって。昔の「BV」は、現行式とは処理量と負荷も桁違いだった。無茶させまくつたツケが、最悪のタイミングで回ってきたんだろうな。

このままだと、何が起きるかわかつたもんじゃない。あたり一面凍てつかせたとはいえ、風もほとんどない日だったからまだガスはそこから溜まつてる。それでアタシはあの時咄嗟に、とにかくカードを全部引き抜こうとした。実体化させるカードさえ存在しなけりゃ、「BV」といえどもクソスペックの後付け装置でしかない。

だがな、理由はどうあれアタシのデュエルディスクは起動中だったんだ。大体新品買った時、説明書の表紙辺りに目立つようにでっかく書いてあるだろ？『起動中に無理にカードを引き抜かないでください。破損や異常の原因になります』ってな。それなのにアタシはそんな基本も忘れて、とにかく力づくで引っこ抜こうとした。

「真紅眼の不屍竜……!?!」

無理したせいで読み込みに異常が出たのか、消えるどころか呼んでもいない真紅眼がいきなり実体化して現れた。腐敗した体の全身からたなびく瘴気、そしてひとときわ燃え盛る腐り落ちた眼窩を埋める鬼

火の目。攻撃の命令でも入ったことになったんだろうな、あの時。いきなり口を開いたかと思うと火炎弾が発生してみる膨らんでいき、止める暇もなくそいつを足元めがけて撃ち込んだんだ。慌ててその余波を避けながら上を見ると、すでに真紅眼は次の一撃を溜め始めてた。

「や、やめろ真紅眼！」

犬や猫じゃねえんだ、言ったところで聞くわきやねえ。ドン、ドン、ドン……休む間もなく火炎弾があちこちにめくら撃ちされて、そのたびに周りが吹っ飛ぶ。

んでついに、思いつく限り最悪のことが起きた。さっき、真紅眼の鬼火に火をつける力はないみたいな話をしたろ？それは確かにそうなんだが、それはそれとして当然、当たれば爆発するし、その衝撃で火がつく分には何の制限もない。たまたまぶちかました先に飲食店のガス缶か、それとも木炭か……なんにせよ、何か燃えやすいものがあったんだろう。かつと視界が真っ白になって、急速に温度が高くなるのが肌で感じられた。あと1秒もしないうちにここら一帯はアタシごと吹き飛んで、何もわからなくなるだろう……命の危機でスローになった視界の中で、最後にアタシが考えたのはそんなことだった。

何もできなかつた。真紅眼を除いてな。いきなりとどころ骨がむき出しになったボロボロの翼を大きく広げてアタシの上に覆いかぶさって、その体を盾にしてくれたんだ。少なくとも、アタシにはそう見えた。直後の衝撃はそれでもすさまじいもんで、あっという間に気を失っちまったがな。

「う……」

それから、どれぐらい経ったのか。ようやくアタシが目を覚ました時、そこは廃墟の中じゃなかった。白いシーツに明るい天井、さっきまでが嘘みたいな世界。アタシも天国に行けるような人間だったのかとも思ったが、んなこたあない。なんてことない、どっかの病院だったのさ。アタシが目を覚ましたら教えろって言われてたんだろうな、目を開いてじつとしてたらすぐに何人かのスーツ着たおっさんどもが集まってきた。

「……アタシに何か用か？」

「我々は日本政府の人間、とだけ言っておこう。糸巻太夫君、寝起きの所さっそくで悪いが、君にぜひとも了承してもらいたいことがある……」

そこで初めて聞いたのが、デュエルポリスの話だ。近々国の垣根を越えた世界的な機関を作るからお前も入れって、ある意味スカウトっちやあスカウトだな。

最初はなんて答えたかって？そりやもちろん、ふぎけんは今更どの面下げてきたって怒鳴りつけてやったさ。病院のベッドで包帯ぐるぐるに巻かれた女に言われても今一つ迫力はなかったろうが、アタシは本気だった。これまでアタシらがどれだけ苦しんでも国は一切手を差し伸べようとはしなかったし、剣の親父さんみたいな奴だってその時にはもう両手の指じゃ数えきれないぐらいはいたはずだ。剣はその中で、一番行動力があつたつてだけの話さ。それを今更叩き潰すための機関を、それもプロデュエリストを徴兵して昔の仲間と同士討ちさせるだあ？今すぐアタシの前から失せろ、できないんならその骨へし折って外科まで送りつけてやる。安心しな、ここは病院だからそう長くはかからねえからよ。

だけどアタシがそうやって啖呵を切ることも、最初から予想してたんだらうな。頷きあつたかと思うと、奴らはとんでもないものを見せてきやがった。

「……書類？」

「それとこちらの写真だ。その怪我では読むのも一苦労だろうから簡潔に説明すると、君がああの戦いで発生させた被害の総計だな。町ひとつのインフラと箱ものの徹底的な壊滅。これだけでも数千億単位の損害だが、人的被害も死者398人、重体84人、重傷97人、軽傷者まで含めるとその倍は堅いだらう。まったく、人災としては戦後でも5本の指に入るだろうな」

「ちよつと待てよ、それはアタシの……」

「その写真をよく見たまえ。これは爆発の直前の瞬間を、偶然生きていたとある店の防犯カメラがとらえたものだ。紫色の肉体を持つ竜

らしき影が、ごく一部だが写っているだろう？話によれば君は、真紅眼の不屍竜なるカードを好んで使っていたそうではないか」

「違う！アタシはそんなことやってない……！」

「検査はそれを信じるかな？幸い証拠は我々がすべて手を回したため、外部に漏れてはいない。今のところこの話を知っているのは我々を含めた政府内でもごく一部の限られた立場の者と、ほかならぬ君自身だけだ」

「アンタら、アタシを脅迫しようつてののか？」

さすがにそこまでくれば、いくら寝起きでも何のためにそいつらが来たのかは予測できるさ。アタシの首を何としてでも縦に振らせるために、奴らは来やがったんだ。

「よく考えたまえ。仮に君の言葉が真実だったとしても、世間はそうは思わないだろう。斜陽となったデュエリスト産業にとって、たとえ容疑者とはいえ君ほどの有名人の名がこの災厄の下手人として名が挙がるのは致命傷となりうるはずだ。この写真を送り付ければ、たとえ提供者が匿名でも各雑誌や新聞は喜んで記事を書くだろうな」

「デメエら……！」

「もう一度言うが、よく考えたまえ。返答ひとつで君は人殺しの大犯罪者となりデュエルモンスターズ産業を完膚なきまでに亡き者にすることも、あるいは正義のために戦う英雄となることもできるのだよ」

確かに、それでも断ることもできた。証人になる剣は爆発で木っ端みじん、証拠つたつてピンボケした写真ぐらいのもんだ。裁判になつてもかなり不利とはいえ、勝ちの目がないわけじゃない。

でもな、アタシは弱かった。鼓の戦友なんて言ってられるような女でも、八卦ちゃんが憧れるようなヒーローでもない。どうしようもなく、クソみたいな女なんだよ。そうさ、アタシは怖かった！その場で首を縦に振った

さ、アタシ自身のためにな！正直な話、デュエルモンスターズ産業の未来のためなんてのは都合のいい、格好の言い訳でしかなかった。アタシはアタシ自身の身を守るためだけに、プライドを捨てて魂を売

り渡したんだ！

「……悪いな、熱くなっちゃった。だけど、これでわかったら？これが、アタシだ。あれからもう13年になるが、いまだに何も変わっちゃいねえ。人殺しの責任も、街を壊した罪も、全部が全部剣にあるわけじゃない。最後のトリガーを引いたのは、アタシ以外の誰でもない。そのくせ、そこから逃げ続けてる」

神妙な顔で聴いていた清明にふうと肩をすくめ、パイプ椅子に体重を預けてもたれかかる。倦怠感と喪失感が混ぜこぜになり、彼女の体を襲っていた。なにせ13年間、ただの一度も口にすることなく隠し通してきた話なのだ。

ここまで心の内を誰かに明かしたのは、初めての経験だったからだろうか。本来話すつもりがなかった言葉が、続けてぼつりと零れ落ちる。

「……本当のところ、ひとつだけ弱音を吐かせてもらおうとな。今のアタシが一番怖いのは、八卦ちゃんなんだよ。あの子はいい子さ、純粹で、真つすぐで。アタシのことを、正義の味方かなんかだと思ってる」「それでいいんじゃないの？よく言うでしょ、やらない善よりやる偽善って」

「あのな、偽善なんていいもんじゃねえよ。アタシがデュエルポリスを続けてる理由はたったの2つ……そうしなきゃ飯が食えないからだし、これを続けてなけりやいつ利用価値のなくなったアタシが用済みで捨てられるか、つまりあの日のデータを公表されるか、それがわからないからだ。結局、アタシはバッシングを受けるのが怖いのだ。あの日の犠牲になった人の遺族は今でも、まずあの日に何が起きたのかを知りたがってるってのにさ。それでもアタシは、自分一人のちっぽけな安全を取った。あの子に見つめられると、そんな自分の心の汚いものが全部アタシ自身に跳ね返ってくる気がするんだ」

しばらく2人とも黙っていたが、ややあつて先に口を開いたのは清明だった。

「……なるほどねえ」

「おっと、慰めはいらんぜ？自分の正当化は、もう13年間ずっとやってきたんだ。今更付け足してもらおうこともないさ」

「いや、違うよ。僕とは逆だなあ、って」

妙に大人びた、弱々しい笑顔で微笑みかける。ぽつりぽつりと、続けて語りだす。

「うん。僕も、ずっとずっと後悔してる。だけど僕の場合は、ある人を助けられなかったんだ」

「……それで？」

「その人がどれだけの覚悟をもって僕の前に立ちはだかったのか、少し考えればわかることなのに。僕はそんなこと考えすらせずに彼女の厚意に甘えて、せめてその心を楽にする程度のことすらできなかつた。そのあげく、殺しあつてたはずの彼女に助けられる形で今でも生き恥さらして、さ」

「そうか」

過去を語る清明の顔には、ほんのわずかな郷愁の念と……それ以上の苦痛と後悔が、はつきり表れていた。本人の言葉通り、今でも後悔を続けているのだろう。

理由は違えど互いに消えない十字架を背負い、いまだにそこから逃げ続ける身。そんな同族意識だからだろうか、あるいは傷をなめ合おうとでもいうのか。いずれにせよ糸巻は、柄にもない言葉を口にしていった。

「……お互い、大変だな」

「……うん。うん、本当に」

万感の思いを込めて頷きあう。どうせまたすぐに、もはや彼女たちにとつてはそれが日常となった決して消えない罪の意識からくる自己嫌悪と浅ましい正当化の無限ループに心で泣いて、それでも顔だけは笑っていつも通りの日々に戻っていくのだろう。それでもせめて、今この瞬間だけは。

午後の日差しが柔らかに病室へと差し込み、白いシーツに反射して部屋を明るく照らしていた。

ターソン29 雷鳴瞬く太古の鼓動

電気も点いていない、暗い部屋。明かりらしきものは、1か所しかない窓のカーテンの隙間から細く差し込んでくる月明かりぐらいのものだ。そしてそれすらも、排気ガスで汚れた都会の空気は容赦なく薄めていく。結果的にその部屋の中では、辛うじて自分の手元の形が理解できる程度の光量しか確保されていなかった。

……手元？そう、その部屋には人がいる。1人は机の前の椅子の上、目の前に置かれたワイン入りグラスに手も付けずに無言で座り込んでたまま。そしてもう1人が足元もおぼつかない闇の中をもものともせず軽やかに歩き回りながら、座る人影へと声を掛けた。

「さて、おおむねこちらの策としてはこんなところですかね。ご理解いただけましたか？」

「……」

男の声にも、人影は微動だにしない。しかしその沈黙を肯定と受け取ったのか、気にした様子もなく言葉を続ける。

「では、これから貴方にはせいぜい馬車馬のように働いていただくことになるわけですが、その前に」

歩き回っていた足を止め、ぼんやりとした輪郭ぐらいしか識別できないもう1人の首元に顔を寄せる最初の男。全体的にどこか芝居がかったその調子は先ほどまで話に上がっていたらしい「策」とやらへの高揚ゆえか、それとも目の前の人影の神経を逆なでするための彼なりの皮肉なおもてなしか。

もし彼の狙いが後者にあつたのだとしたら、その反応はあまり期待に添えるものとは言い難かつたろう。これまでと変わらず、すぐ近くまで寄ってきた人の気配に対しても身動き一つしない……無視である。

「貴方と私は立場が違う。仕事にかかっていたく前にお互いのためにも、そのところを改めて明確にしておこうと思ひまして。言っておきますが、私は貴方のことを信頼するつもりも、気を許すつもりも欠片たりともありません。ですが私はそれでも、今の貴方は信用に足

る相手だと思っっていますよ。なぜだかわかりますか？」

もし相手に答えるつもりがあつたとしても、それを聞く気はないらしい。口を挟む暇すらも与えず、一方的な話は続く。

「貴方『も』、私に気を許してはいないからですよ。貴方は私を都合よく利用するだけ利用し、見切りをつけたらその場で使い捨てるつもりでいる。ああ、否定なんて結構ですよ。それはお互いさま、私も貴方には限界まで働いていただき、最後には使い潰すつもりで手を組んでいるわけですから。ですが今この瞬間だけは、貴方と私の利害は一致している。そうでしょうか？互いに利用価値があるうちは、つまらない真似はよしませう。貴方には、それを理解するだけの知能はあると私は見込んでいますよ」

言いたいことだけ言ってくるりと半回転して背を向け、締め切られた部屋の出口へと向かう人影。しかし手を掛けた扉が開かれる寸前、ぴたりと動きを止めてもう1度だけ暗闇の中を振り返った。

「無駄な警告でしょうが……この私を相手に『化かしあい』で勝てるなどとは、ゆめゆめ思わぬよう」

扉が開くと、その向こう側で頭上の蛍光灯が放ち続けていた光が男の顔を上から照らす。巴光太郎……『おきつねさま』の名を持つ元プロデュエリストにして現テロリストの向ける皮肉な視線の先に、既に先ほどまでそこにいたはずの人影は存在せず、代わりに開きつぱなしの窓から入り込む風がカーテンを揺らしていた。

「ふうーっ」

そことは違う場所、高級そうな……といえば聞こえはいいが実際にはその華美なしつらえがいささか鼻につく、いかにも成金趣味な書齋で1人、小太りの中年男が息を吐いた。薄くなってきた髪を撫で、今日も仕事が無事に終わったことに安堵の息を吐く。

男の名は、兜大山^{たいざん}。近年デュエルモンスターズの、つまり『BV』被害からの復興産業でメキメキと業績を伸ばしてきた、典型的な成り上がりの波に乗った男である。しかしそんな彼には、もうひとつ裏の顔

がある。書斎の鍵がしつかりとかかっていることを確認した彼がいそいそと本棚の裏の隠し扉から取り出して高級ウイスキーとグラスの隣に並べたのは、デュエルモンスターズのカードである。

「どうれ、今夜も始めようか」

おもむろにウイスキーを注ぎ、ストレートのそれを一口含む。革張りの椅子に深々と腰かけて、手にしたカードを一枚一枚丁寧に確認していく。高級な酒を飲みつつ、自慢のデッキを誰にも邪魔されず調整する……これが、彼にとっては至福のひとときだった。とはいえこの趣味も、始めたのはつい最近からだ。つい最近までこのデッキはどちらかといえばコレクションとしての意味合いが強く、時折眺めることはあっても今のように毎日のごとく取り出してはカードの入れ替えを検討したりなどとはしていなかった。

それが決定的に変わったのは、あの日以来のことだ。今でも彼は、あの時のことを思い出す。自分に出資を持ち掛けられ、会場の提供まで行った裏デュエルコロシアム。それをどこからか嗅ぎつけ、偽の身分まで使い単身この書斎へと飛び込んできた青年、鳥居浄瑠……まったく、まさか彼があのだデュエルポリスだとは思わなかった。

ともかく彼がその時に魅せた、デュエルモンスターズに演劇の要素を取り入れたエンタメデュエルという未知なる概念。それが、兜のデュエリスト魂に火をつけたのだ。あれ以来自分がデュエルをする機会は訪れていないが、それでもなお色あせないデッキを強くすることへの喜び。

「ふむ、このカードまで入れるのはやはり重いだらうか。だがこのカードの枚数を削れば……いや、それでは安定感が落ちて本末転倒か？」

回ってきた心地いい酔いに身を委ねながらぶつぶつと呟き、さらに次の一杯を注ぐべくボトルに手を伸ばす。しかしその手が、途中で止まった。この書斎の床は一面、彼自身が金に糸目もつけずに買って敷き詰めた毛の長い絨毯が覆っており、誰が歩いても足音など響かない。そのせいもあってここまで気が付かなかったが、締め切られたはずのこの部屋に誰か自分以外の人間がいる。視界の端に映った人

間の脚に背筋を凍らせながら、恐る恐る視線を上。その顔を見た時の衝撃は、困惑と安堵のどちらが大きかったのか。彼自身にもよく分からなかった。

「君は……！」

「久しぶりですね、と言いたいところですが。前振りは抜きにして、ビジネスの話をしましょう」

そこにいたのは今まさに思い返していた青年、鳥居浄瑠。だが真つ先に目についたのは、そのどこか異様な風体だった。両腕や服の下からわずかに見える肩口にはすり切れて血の滲んだた包帯が乱雑に巻かれており、片足はうまく動かないのかわずかに全体的な重心をずらしてびっこを引いている。いや、そもそもなぜこの夜更け、密室のはずのこの場所に？

混乱と酔いが思考にノイズをかけ、うまく考えがまとまらない。そんな流れを断ち切ったのは、ほかならぬ鳥居本人だった。勧めもしないのに向かいに腰かけ、テーブルの上で両手を組む。まっすぐにこちらを見つめる瞳は以前とは比べ物にならないほど狂気的な光を放っており、その恰好と相まって今の彼が明らかに異常な状態にあることをよく物語っていた。

「あなたが先日落札した、この近海での海上プラントの建設。あの権利をこちらに譲っていただききたいのですが」

「な、何を……!?!」

海上プラントの建設。確かに兜には身に覚えがある話であり、新しく大口の契約を結んだことでますます事業も安泰になると祝杯を挙げた記憶も新しい。頭の中を回転するたくさんの疑問よりもまず先に口をついて出たのは、1代にして成りあがった彼の矜持であり、社長としての言葉だった。

「……ふざけないでもらおう。何が目的かは知らないが、あれはわが社にとっても計り知れない価値がある」

みるみるうちに冷酷になってきた視線に貫かれながら、きっぱりと拒絶の言葉を吐く。同時に机の下へとなるべく手を這わせ、裏側に密かに設置した警報ボタンを強く押す。ここからはなんの音も聞こえ

ないが、これで警備室へと緊急連絡が入ったはずだ。すぐに、常駐の警備員が駆け付けてくれるだろう。後はそれまで、自分が時間を稼ぎさえすればいい。覚悟を決めた彼の眼のまえに、どきりと音を立ててひとつの機械が置かれた。その形状を、彼はよく知っている。

「デュエルディスク……!?!」

「そう言うだろうと思って、最初から準備はしてきた。もう1度拒否するというのがなら、俺とのデュエルで決めてもらう。警告しておくが、無論『BV』は組み込まれている」

「だ、だが、君はデュエルポリスなんだろう？こんな行為を取り締まるのが仕事のはずでは」

震え声での指摘に対し、わずかな間。しかしその表情が変わることはなく、その答えもない。

「……さあ兜大山、ふたつにひとつだ。あんた自身の身の安全と引き換えに海上プラントに関する一切のアンタの手にした権利を差し出すか、力づくで差し出させるか。俺はどっちでも構わない」

「……いい、だろう」

躊躇したのは、ほんのわずかだった。酒のせいで気が大きくなっていたのもあるし、下手に逆らうと何をするかわからない鳥居の異様な雰囲気を感じたというのもある。時間稼ぎの継続というのも、決して間違いではない。

だがそれ以上に、彼は強化を遂げた自分のデッキに自信があった。それは、デュエリストならば誰もが持ちうる当然の感情。かつて敗北を喫した目の前の男に今度こそ勝てる、そう思った。だから彼はゆつくりと手を伸ばし、そのデュエルディスクを掴んだ。立ち上がり、机を挟んで距離を取り向かい合う。扉は鳥居の後ろ側、警備員が来ればすぐに取り押さえられる位置取り。

「デュエル！」

「せ……先攻は、私が貰う」

「いいだろう、好きにすればいい」

余裕とも無関心とも取れる態度に警戒しつつ、商人としての兜の鋭い目はその短い言葉に隠された違和感を見過ごさなかった。彼の得

意としていたはずのエンタメデュエルは始まる気配すら見せず、以前の彼からはなにか根本を揺るがすほどのことが起きてしまったことは想像がつく。

「……私は手札から、幻創のミセラサウルスの効果を発動。このカードを捨てることで、このターン私の恐竜族モンスターは相手プレイヤーのあらゆる効果を受けない」

様々な恐竜の特徴を組み合わせたような化石の生物が、赤い目を光らせて半透明のオーラを放つ。その姿はすぐに幻想となって消えていったが、放たれたオーラははまだ兜のフィールドに残存している。これでほんの1ターン限りとはいえ、エフェクト・ヴェーラーや幽鬼うさぎといったカードの心配をせずに動くことができる。

「先攻1ターン目から完全耐性の付与か。随分と贅沢な使い方だな」

「私がこのカードを使ったのは、この効果に繋げるためだ！墓地に送られたミセラサウルスの、更なる効果を発動！このカードを含む恐竜族を墓地から任意の枚数だけ除外することで、その合計数と等しいレベルを持つ恐竜族モンスターをデッキから特殊召喚する。私の墓地に存在するのはミセラサウルス1枚、よってレベル1の恐竜族を呼び出す。現れる、珠玉獣—アルゴザウルス！」

珠玉獣—アルゴザウルス 攻0

ミセラサウルスの残したオーラを鎧のようにしてその全身を包む、まるでビーズ製であるかのように大量の球体の集合によって形作られたワニ型生物。しかしこれは人工物などではなく、れっきとした恐竜である。

「アルゴザウルスが場に出た際、その同名カード以外の恐竜族モンスター1体を私の手札かフィールドから破壊することで、指定されたカードを1枚手札に加えることができる。ダイナレスラー・パンクラトプスを破壊し私が選択するのは通常魔法、究極進化薬だ」

「究極進化薬……」

以前のデュエルでも先行1ターン目から使用し、強固な布陣を作り上げるために一役買ったカード。しかし兜自身もそのデッキも、もうあの時と同じではない。

「そしてレベル1モンスター、アルゴザウルス1体を真下のリンクマーカーにセット。リンク1、リンクリボアをリンク召喚……だが、これも中継地点。このリンクリボアは、サイバース族のリンクモンスター。これをそのまま素材とし、左のリンクマーカーにセットする。リンク召喚、セキユア・ガードナー！」

リンクリボア 攻300

セキユア・ガードナー 攻1000

戦闘に強いリンクリボアを切つてまで呼び出されたのは、それとは対照的に効果ダメージに強い能力を持つ新たなリンクモンスター。だが兜の狙いは、効き目があるかも怪しいバースメタなどではない。何かに気が付いた鳥居が、ピクリと眉を動かした。

「究極進化薬の発動コストには、墓地に恐竜族とそれ以外の種族を持つモンスターが1体ずつ必要……なるほどな、無駄のない動きだ」

言葉の内容とは裏腹に、まるで称賛する気などこもっていない冷たい口調。背筋が寒くなるが、だからといってここで止まるわけにはいかなかった。

「わ……私は通常魔法、究極進化薬を発動。墓地から恐竜族のアルゴザウルス、及びサイバース族のリンクリボアを除外することで、デッキからレベル7以上の恐竜族モンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する。山を割り、空を割り、己が信じる覇道を太古の大地に刻め！レベル10、究極伝導恐獣！」

究極伝導恐獣 攻3500

以前この書齋でこのカードを使った時は、ソリッドビジョンのないカードとして机の上に置かれていただけだった。

しかし、今回は違う。ソリッドビジョンとして投影され「BV」が実体化させた恐獣の質量はまごうことなき覇者の威圧感を放ち、その太い脚と強靱な爪が絨毯を力強く踏みにじる。さらにそれだけではなく、まるで主たる兜を守るかのようにその太い尾を回してバリケードを作りつつ、対戦相手の鳥居へと敵意のこめた低い唸り声を放つた。

それは明らかにソリッドビジョンによる演出の範疇から外れた、ま

るで実際の生物であるかのような動き。エースモンスターのそんな動きに戸惑う兜とは対照的に、鳥居がさほど驚いた様子もなく表情を歪めて苦笑いする。

「こ、これは一体？」

「なるほど『BV』の副産物、ごくまれに発生するカードへの意思の発現、仮称『精霊のカード』、か。まさかいつかの儂無みずきよりも前、こんな身近なところにもサンプルが転がっていたとは……まったく、もう少し早く知っていたら、あの廃図書館事件の時も少しは楽にことが進んでいたのかね？」

「精霊の……？私、究極伝導恐獣が？」

余りに常軌を逸した話の内容に呆然とオウム返しに呟いて視線を上に向けると、同じく兜を見下ろす恐獣と視線が合った。思わず頭を下げると、その強面にはまるで似合わない、子犬かなにかを思わせる動きで同じように会釈を返してくる。先ほどから到底信じがたいことばかり起きているが、どうやらこれも紛れもない現実なようだとは信じざるを得なかった。

そしてその現実が頭に染みていくにつれ、驚愕に代わりじわじわと浮かび上がってきたのは喜び。精霊のカード、デュエリストならば誰もが1度は夢見て、そして大人としての常識がいつしか埋もれさせて消えていく稚気じみた憧れ。それが今、自分のような中年の前にいる。兜がこの究極伝導恐獣のカードを手に入れたのは、デュエル産業が凋落したのとほぼ同じ時期のことだ。つまりこのカードは購入以来、この瞬間までただの1度たりともソリッドビジョンに投影されたことがない。

そんなに前からずっと、私のことを見ていてくれたのか。私は君の声に、気が付かなかったというのに。

「君に何があったのか、私にはわからない。だが私はこの勝負、なんとしても勝たせてもらう。それが、この究極伝導恐獣へのせめてもの誠意だ！手札から、ネメシス・コリドーの効果を発動！除外されているミセラサウルスをデッキに戻し、このカードを特殊召喚する」

「ネメシス……？」

ネメシス・コリドー 攻1900

緑色の竜巻が吹き上がり、全身が緑色の鳥人のようなモンスターが降りたつ。しかしその体は即座に、天井から落ちてきた雷に打ち据えられた。

「雷族モンスター、つまりネメシス・コリドーが効果を発動したターンの、私の場から雷族の効果モンスターをリリースすることでこのカードはエクストラデッキから特殊召喚できる。融合召喚……超雷龍―サンダー・ドラゴン！」

超雷龍―サンダー・ドラゴン 攻2600

雷に打たれたネメシス・コリドーが、そのまばゆい光の中でべきべきと音を立てて巨大化していく。両腕は退化して巨大な翼となり、その体色は緑から暗い藍色へ。両足もひとつに退化しさらに長くうねり、いつしかその体は雷を全身に纏う文字通りの龍となっていた。

「サーチ封じと破壊耐性の龍か……面倒だな」

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ」

手札を1枚のみ残した状態でターンを渡す。ただ立っているだけであらゆるサーチ行為を封じる超雷龍に純粋な攻撃力も相まって単体での制圧力がずば抜けた究極伝導恐獣の並びは、確かに強力なものだ……しかし鳥居はその盤面を改めて眺め、カードを引く前にふつと鼻で笑った。

「確かに面倒ではあるんだけどなあ……はつきり言って、前の方がよっぽど強かったんじゃないのかい」

前の時、とは言わずもなが、以前の卓上デュエルで兜が見せた布陣のことである。1度きりとはいえ戦闘、効果両方に対応した破壊耐性持ちの究極伝導恐獣に相手の2体以上の展開を封じるカイザーコロシアム、極め付きにデモンズ・チェーンまで伏せてあったあの時の盤面に比べれば、一概には言えないもののこの状態ですら見劣りすると取られても仕方がないか。

しかしそう言われてなお、兜は胸を張った。変わってしまった目の前の青年に、伸ばした指を突きつける。

「確かに、そうかもしれない。しかし、これが今の私の誇りなのだ。そ

してそれを私に教えてくれたのは、ほかならぬ君だ」

「誇り？俺が？」

ほんのわずかに、表情が動いた。不愉快そうな問い返しに、力を込めて大きく頷く。

「ああ、そうだとも。以前君と戦った時の私は、真に相手のことを見ていなかった。自分のターンの展開だけですべてを完結させ、相手を見て動くという勝負としての基本を見失っていた。相手に返せない布陣というものは、いざ返された際に脆い。それを補強するためにさらに強度を上げ、拘束度を上げ、またそれが突破され……その終わらない繰り返し、いたちごっこに何の意味がある？私はあの布陣を、絶対に返せない構えとして張り巡らせた。だが知つての通り、君はそれを打ち破った。あの時、私は思い知つたよ。『絶対』などというものは存在しない」

「それで、『妥協』したと？物わかり良さそうな言葉でごまかして、ただ諦めただけじゃないのか」

「そうじゃない。相手を、そして観客を楽しませるエンタメデュエルという概念を覚えてくれたのは、ほかならぬ君だ。目の前の相手を見ずに自分とだけ向き合つて、独りよがりに高みだけを目指す……私はそれまで囚われていた芸術作品としてのデュエルよりも、君のような戦い方を極めたいと思つた。君の話術や演出のような技術は到底一朝一夕に身につくものではないが、私の心構えは変わったんだ。先ほど披露したこの究極伝導恐獣の口上だが……なるほどいざ口にするとなると少し照れ臭いが、確かにこれは気持ちのいいものだ」

年甲斐もなく朗らかに笑う兜に……しかし鳥居は、その冷たい視線を和らげることはなかった。

「言いたいことはそれだけか？なら、改めて教えてやろう。兜大山、あなたは……あの時よりも弱くなったという、歴然とした事実を！俺のターン、ドロー！スケール1の魔界劇団―デビル・ヒールとスケール8の魔界劇団―ファンキー・コメディアンを、それぞれレフト、ライト ペンデュラム P スケールにセツティング！」

「やはり、【魔界劇団】……！トランプ発動、アーティファクトの神智。

このカードの効果により、私はデッキからアーティファクト1体を特殊召喚する。レベル5、アーティファクト・モラルター！」

アーティファクト・モラルター 攻2100

突如として空中から現れ机に突き刺さった大剣を、青白い人型のオーラが掴み引き抜く。そのままに手にした刃をひと振りすると、そこから放たれた衝撃波が鳥居の左右に立ち上った光の柱のうち片方に飛んでいき激突、小規模な爆発を起こした。

「相手ターンにモラルターが特殊召喚されたとき、フィールドのカード1枚を破壊できる。私が選ぶのは、ライトPゾーンのデビル・ヒールだ」

「問題ないな。スケール3の魔界劇団―エキストラを、空いたライトPゾーンにセッティング」

「他にも下のスケールが存在したか……だが今私が破壊したデビル・ヒールは、モンスターとしてはレベル8。スケール3のエキストラとスケール8のファンキー・コメディアンの組み合わせでは、もはやペンデュラム召喚は不可能なはずだ」

冷静な指摘は正しい、しかし依然として冷徹な表情は崩れない。残る手札3枚が、叩きつけるようにフィールドに置かれた。

「これでレベル4から7のモンスターが召喚可能……ペンデュラム召喚！」

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

魔界劇団―ティンクル・リトルスター 攻1000

3体のモンスター同時召喚、そしてその中央には彼のエースモンスターたるビッグ・スターの姿。しかしその輝きを増すための口上が鳥居の口から発せられることは、ない。

「やはり、変わってしまったのか……？その召喚成功時、究極伝導恐獣の効果を発動！私の手札のモンスター、ベビケラサウルスを破壊することで相手モンスター全てを裏側守備表示にする！」

究極伝導恐獣がその首をもたげ、大きく吠えた。ビリビリと大気を震わせるその咆哮は、ただそれだけで書斎に破壊の嵐をもたらす。背

後ではかなりの重量があつたはずの本棚が倒れ、天井では照明のほぼ半分がその大音量に共鳴して爆ぜた。壁紙はめくれ、机の上のペン立ては軽々と吹き飛ばされ……しかし、そんなことに構っている余裕はどちらにもない。3体の魔界劇団もその衝撃に耐えきれず、そのソリッドビジョンがぶれて消えていく。

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500↓???

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500↓???

魔界劇団―ティンクル・リトルスター 攻1000↓???

「そして、破壊されたベビケラサウルスの効果を発動。このカードが効果によつて破壊された時、私のデッキからレベル4以下の恐竜族モンスター1体を特殊召喚できる」

デッキを広げ、必死に思案する。これで3体の魔界劇団の動きは封じ込めた……だが、それだけではまだ安心できない。ここは普段ならば万能サーチャーである魂喰いオヴィラプターをリクルートし、さらにその効果で幻創のミセラサウルスを再び手札に加える場面。この方法であれば、少なくとも究極伝導恐獣とオヴィラプターには完全効果耐性を付与することができる。

だがその方法だと天使族であるアーティファクト・モラルタとサイバース族のセキュア・ガードナー、そして雷族の超雷龍が無防備なまま残つてしまう。お互い手札もない今の状況では、取れる手も限られているはず。ならばここは戦線を維持し、次を牽制するのが無難な手か？

兜はまだ、気が付いていない。もはやどんな手を取ろうとも、勝負の大勢はほぼ決していることに。真綿で首を絞めていくかのごとく、確実に敗北がそのすぐ後ろにまで迫ってきていたことに。

「………縄張恐竜、守備表示！」

縄張恐竜 守2000

「この縄張恐竜は1ターンに1度だけ戦闘破壊された際に同名モンスターをリクルートでき、さらにこのモンスターが存在する限りエクストラモンスターゾーンに存在するあらゆるモンスターは効果が無効となる。私のセキュア・ガードナーも、当然この効果を受けてしまう

がね」

だがそれを差し引いても、私のライフは4000。攻撃力5000でのワンショットキルでも狙いに来ない限り、考えなくてもいいだろう……これは口には出さず、心の中で算段するにとどめておいた。

兜に思いついた、これが最善のリクルート先。だがそれを見てなお、鳥居の態度は崩れなかった。

「くだらないな。やはりあなたは、前よりも弱くなっている……魔界劇団―エクストラのペンデュラム効果を発動。相手フィールドにモンスターが存在する場合、このカードは1ターンに1度だけ特殊召喚できる」

魔界劇団―エクストラ 攻300

光の柱のうち片方が消え、その中央に浮かんでいた3人組がふわふわと降りてくる。だがそれは、効果を生かすためではない。すでに、その仕事は終わっている。

「レベル1モンスター、エクストラを真下のリンクマーカーにセット。リンク召喚、リンクリボア。これで縄張恐竜の効果は、リンクリボアが肩代わりする」

「しまった……!」

「さて、俺のモンスターは裏守備にされてしまったわけだが。例えば表示形式が変わろうと、このカードが闇属性のペンデュラムカードという情報は消えはしない。その条件を満たすプリティ・ヒロイン、そしてティンクル・リトルスターの2体をリリースすることで、このカードはエクストラデッキから特殊召喚できる。融合召喚、霸王眷竜スターヴ・ヴェノム!」

縄張恐竜に睨まれて震えあがるリンクリボアの真後ろに2体の魔界劇団が溶け合い、蛍光色のラインを全身に持つ紫毒の竜に変化した。そしてこの局面では、究極伝導恐獣の持つ強大な制圧力がそのまま兜に牙を剥く。

「スターヴ・ヴェノムの効果を発動。互いの場か墓地に存在するモンスター1体を選択することで1ターンの間のみその名前と効果をコピーし、さらに俺のモンスターに貫通能力を与える。ペルソナ・チェ

ンジ……アルティメットコンダクター・ヴェノム！」

スターヴ・ヴェノムが植物の蔦のようなその長い尾をシュルシュルと伸ばし、究極伝導恐獣の体を締め付ける。強靱な太古の覇者の体はその程度の衝撃では揺らぎすらしないが、スターヴ・ヴェノムの狙いは最初から締めあげることでの攻撃ではない。ドクンドクンと脈動するたびに、細長い尾を通って究極伝導恐獣の体を構成する遺伝子情報が竜の体へと流れていく。その手に握られた1枚の仮面が、コピーした情報をもとに徐々に眼前の究極伝導恐獣の顔を模したものに変化していく。

「ああ、危ない！」

警告の声に反応し、ようやく動いた恐獣が力技でスターヴ・ヴェノムの尾を振り払う。しかし時すでに遅し、仮面にはくつきりと恐獣の顔が映し出されていた。そしてそれを、自身の顔に上から当てはめる。

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム↓究極伝導恐獣

「スターヴ・ヴェノムの効果を発動。俺の手札か場のモンスター1体を破壊し、相手フィールドに存在するすべてのモンスターを裏側守備表示にする……だったかな？動けないモンスターに用はない、ビッグ・スターを破壊する」

スターヴ・ヴェノムの尾がまたもしなり、自身の隣に置かれたままの裏側のカードを一瞥すらせず真上から刺し貫く。1瞬だけ心臓の位置を貫かれて痙攣するビッグ・スターの姿が浮かび上がるも、すぐにそれも消えていった。

アークティファクト・モラルタ 攻2100↓???

超雷龍―サンダー・ドラゴン 攻2600↓???

縄張恐竜 守2000↓???

究極伝導恐獣 攻3500↓???

「ああー！」

呆然と手を伸ばす前で、4体ものモンスターが崩れ落ちて消えていく。それは兜のエースである究極伝導恐獣も例外ではなく、残ったのはセキユア・ガードナーと裏側に置かれた4枚のカードのみ。

「リンクモンスター・セキュア・ガードナーはこの効果を当然受け付けない……もつとも、よかつたとはとてもじゃないが言えないだろうがな。さらに究極伝導恐獣は、相手モンスター全てに1回ずつの攻撃ができる。まずはセキュア・ガードナーに攻撃！」

「くっ……セキュア・ガードナーの効果発動！私が受けるダメージは、1ターンに1度だけ0になる！」

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2800↓セキュア・ガードナー
攻1000（破壊）

「だが、それだけだ。続けてアーティファクト・モラルタに攻撃、そしてこの瞬間に究極伝導恐獣のもう1つの効果を発動！このカードが守備モンスターを攻撃するダメージステップ開始時に相手に1000のダメージを与え、その相手モンスターを墓地へと送る！」

スターヴ・ヴェノムが仮面の奥の口から吐き出した紫の炎が、モラルタのカードを容赦なく焼き尽くす。それだけでは収まらないその余波が、兜の体をも焼きにかかす。

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2800↓???
兜 LP4000↓3000

「ぐう……い！」

「まだだ。続けて超雷龍に攻撃、もう1度効果を発動する！」

またしても自由意思があるかのように伸びたその尾が、焼かれていくモラルタの隣にあったカードを串刺しにする。喉元を貫いたその先端が後頭部から貫通した超雷龍の姿が映し出されるも、それもまた消えていく。

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2800↓???
兜 LP3000↓2000

「縄張恐竜に攻撃、効果発動！」

さらに隣のカードに向け、スターヴ・ヴェノムがその片腕を伸ばす。するとその腕からは茨のような無数の触手が伸び、獲物を捕らえた蛇のように裏側のカードに巻き付いたかと思うとなんのためらいもなくそれを締め潰した。

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2800↓???

兜 LP2000↓1000

「私の、カードが……!」

「……さて、いよいよ次が最後の攻撃なわけだが。何か言い残したことはあるか?」

最後の攻撃宣言の前に1度手を止めるが、兜は答えず鳥居を……正確にはその後ろにあるドアをじっと見ていた。おかしい、いくらなんでも時間がかかりすぎている。警報は送ったというのに、警備員は何をしている?なぜ、せめて様子ぐらいいは見に来ない?

そんな焦りを、視線の動きから察したらしい。冷笑を浮かべた鳥居がポケットの中に手を入れ、ガサゴソと漁りだす。やがて取り出したのは、財布ほどの大きさの機械。乱暴に引きちぎられたのか、コードの切れ端が伸びている。

「もしかして、探しているのはこれか?あいにくだが、警報装置はここに来る前に無力化させてもらった」

そういつて床に放ったそれを、すぐさま踏み潰す。土壇場で助けがやってくるという最後の希望さえ目の前で潰え、急に視界が下がった。これまでに受け続けた3000ポイント分の実体化したダメージのせいもあり、立っていられるだけの力が抜けてその場に膝をついていたのだと理解できるまでには、少し時間がかかった。本来ならばそれを支えてくれたであろう究極伝導恐獣も、今はもう動けない。

そして、最後通告が放たれる。

「攻撃、そして効果発動。最後のな」

それまで本人は動かぬままに触手や炎で攻撃を仕掛けていた霸王眷竜が、ついに宙に舞った。鉤爪を閃かせ、最後のカードへと強襲をかける。ライフが0になるよりも先に、兜の意識は消えていた。

霸王眷竜スターヴ・ヴェノム 攻2800↓???

兜 LP1000↓0

「クソツたれがあ……あー面倒くせえ、まったくもって面倒くせえ!」

翌日。最初に通報を受けた地元警察からの連絡によって共同捜査

に駆り出された糸巻は、当然のように朝から荒れていた。基本的に彼女の人柄やその口の悪さは割と広くに知れ渡っているので、あちこちの壊れた調度品や床に散らばったカードを注意深く調べている鑑識の人たちもいちいち反応したりはしない。せいぜいまたか、といった呆れ半分、いつもの調子なことに安心半分の視線を時折送るぐらいのものである。

「だいたいなあ、兜建設つてのがもうアレなんだよ。裏デュエルコロシラムんときのこと考えると絶対碌なことにならないっつーか、下手に首突つ込むと面倒事に巻き込まれるのが目に見えてんだよなあ」

これは心の中でだけばやく。いつぞやの裏デュエルコロシラムの件については彼女も表沙汰にはしておらず、ここの社長が裏のデュエル界限と繋がりがあることもここにいる連中に知られてはいない。そのまま顎に手を当て、しばし思考にふける。

「だがわからねえのは、なんでこのタイミングでこのオツサンが襲われる必要があった？鳥居の奴を参加させたことへの粛清……の線は、ないだろうな。巴はあの時鳥居の存在を逆利用してやがったぐらいだし、粛清にしちやタイミングも遅すぎる」

迷惑そうな鑑識の姿も目に入らずに部屋の中をうろうろと歩き回っていると、吹き飛ばされてひっくり返った重そうな机の脚に何かが挟まっているのが偶然目についた。軽く振り返るが、鑑識はこの存在に気づいてはいないらしい。好奇心に突き動かされ、その布の切れ端を強引に引っっこ抜く。目を細めるまでもなく、その正体は想像がついた。

「破れた包帯……？それに、ここは兜建設……ちつ、嫌な予感がするな」

「糸巻さん、少しいいですか」

「あー？」

最悪の想像が徐々に形になってきたところで、後ろから馴染みの鑑識に声を掛けられた。まだ若いが、よく気が付く男である。

「おう、どうしたい」

「部屋の奥から衝撃で吹き飛ばされたんじゃない、明らかに人為的に

こじ開けられた金庫が見つかりまして。今被害者の秘書って人を呼んできてますので、何が盗まれたかわかりそうですよ」

「そうか、ならアタシも同席しよう。いいよな？」

「でなきや呼びませんよ……あ、今行きます先輩」

部屋の隅、くだんの金庫の前で早く来いと手招きされ、慌てて近寄る。年配の鑑識が半開きの扉を開き、残った書類を慎重に取り出してスーツ姿の秘書がそれに目を通す。1枚また1枚とめくるにつれて、その顔が徐々に青くなっていく。

「な、ないです！ありません！」

「落ち着いてください、一体何がなくなってるんです？」

「うちの社長が先日取ってきた、海上プラント建設の資料や権利書が、全部なくなってます！」

「海上プラント、ねえ……」

しかめっ面のまま、糸巻が誰に言うでもなく呟く。特大の揉め事が起きる、彼女の勘はそう告げていた。

ターン30 幻影の最終防衛ライン

「というか、アタシはどうもよく分からないわけだが」

開いた金庫の前でパニックを起こす兜大山の秘書と、それをなだめようとする鑑識。さらにその背後で、ふっと糸巻が片手をあげた。

「はい？」

「書類が盗られたのはわかったし、確かにそりや問題だ。でもそれにしたって、まだ昨日の今日の話だろ？ さつさと先方に連絡入れれば、理由も理由だしそう大事にはならないと思うんだが？」

「いやあのそういう問題じゃないですよ、糸巻さん」

何言ってるんだこの人は、これだから常識知らずのデュエルバカは……と言いたげな鑑識の視線を無視し、顔面蒼白でついにはその場へたり込んでしまった秘書に詰め寄る糸巻。制止させる暇を与えずにその胸ぐらをつかんで捻り上げ、無理矢理立ち上がらせる。

「それに、な。確かにアタシにや門外漢な話だがな、それを差し引いてもどーもアタタのその慌てっぷりは気になるんだよ。一体その書類とやら、何が書いてあったんだ？」

「ちよ、ちよつと糸巻さん！ 一歩間違えれば脅迫ですよそれ！」

「ならアタタの方から上に報告しときな、始末書ならそのうち書いてやるさ。さあ秘書さんよ、アタシは今、気が短いんだ。さつさと答えの方が身のためだぜ」

至近距離から喧嘩腰に目を覗き込んでやると、これまで殴り合いなんてできません、虫を殺すのもかわいそうでとてもやれませんが、といった絵に描いたように善良な人生を送ってきたであろう秘書の目にはつきりと恐怖の色が浮かんだ。もう一押しか、と踏み、視線を逸らすことを一切許さず締めあげる手もそのままにまばたきひとつせずに目を合わせ続ける。

実際に数秒もしないうちに、震えながらのか細い声が聞こえてきた。

「……この案件は、どうもきな臭かったんです……トリプルシエル、なんてこれまで聞いたこともない、まるでこの海上プラントを作るため

だけに設立されたような相手会社に、それに……」

「それに？」

「……その、相手からの強い要望で、具体的な建設位置は絶対に外部に漏らすな、と言い含められてまして、私ですらその場所は知らないんです。こ、この金庫に入っていた、社長が嚴重に保管していた書類、そこにだけ目的の座標が……」

そして指し示されたのは、こじ開けられた元金庫。これだけ怯えていては、嘘をつこうなどは考えもしないだろう。ゆつくりと腕の力を抜いていき、呼吸をしやすくしてやりながら考える。

「なるほどなあ。となると権利荒らしじゃなくて、建設予定地そのものが目的だったってことか？ちなみに秘書さんよ。その海上プラントってのは、そもそも何をするための施設なんだ？」

「か、海底にレアメタルを極めて高い純度で含まれた岩盤が見つかったので、それを発掘するためだと私は聞いています……念のためわが社でも裏は取りましたが、それについては間違いないと……」

「そこはまあ矛盾はないってわけか。だがな秘書さんよ、すこーし詰めが甘かったな。もしこいつが『BV』絡みの案件だった場合、それこそ海底に適当な金属のカードでも発動させればいくらでもデータは誤魔化せる。なにせいくらソナーで調べたところで、見つかるのは本物の金銀財宝なわけだからな。例えば……待てよ？」

そこまで言ったところで、不意に糸巻の動きが止まった。彼女の頭の中で、何気ない自分の言葉をきっかけにして急速に思考の点と点が繋がっていく。もはや周りからの奇異の視線どころか目の前の秘書すら目に入らず、力の抜けた手から滑り落ちたその体がずるとその場にへたり込んだ。ぶつぶつと呟きながら、漠然とした思考を言語化する作業に没頭する。

「黄金……黄金郷……呪われしエルドランド……」

「成金の女王」、七曜。思い浮かんだその顔は、忘れもしないつい先日のデュエリストフェスティバル。そもそもなぜ、あの女はここにいた？言うまでもない、爆破テロを引き起こし……そこで糸巻の脳裏に、鼓から聞いた話が蘇る。今回の爆破は、新型『BV』のデモンス

トレーションだと言ったらしい。

だが、そもそもだ。本当に狙いがそれだけならば、もつと大きなイベントなど世界中いくらでもある。全盛期の賑わいははるか昔、落ち目のイベントであるデュエリストフェスティバルを狙う理由がどこにある？

「アタシは無条件で、その部分に疑問を持たなかった。腐ってもデュエリスト、デュエルモンスターズのイベントを無意識に求めていたんだ、そう思ってた。だが」

もし、そうではないとしたら。この地を、家紋町の近辺を離れたくない何らかの理由が別にあっただとすれば。例えばそう、エルドランドを一時的にでも海底に実体化させ、黄金やレアメタルの存在を確認させるような……。

「……おい。アタシは少し用ができた、悪いが後はうまいことやつといてくれ」

「ちよ、ちよつとお!?」

言うが早いが身を翻し、困惑混じりの抗議の声を背中で受け止めて外に出ていった。

15分後。糸巻が現れたのは家紋町の端、人もあまり寄り付かないような場所に位置する拘置所だった。

逮捕、起訴を受け刑が確定するまでの犯罪者が拘留されるこの施設、かつては全国にも限られた数しかなかったと聞く。それが爆発的に増えたのも、『BV』によつて様変わりした世界の在り方のひとつだ。どれほど警備を重ねようが、人間では実体化したカードには勝てない。どれほど分厚い壁だろうと、城壁壊しの大槍を用いての正面突破からミスト・ボディを使つての壁抜けまで、突破方法はいくらでもある。施設そのものの数を増やすことで一か所辺りにぶち込む犯罪者の数そのものを減らし、脱獄リスクを薄める……その場のぎにすぎない稚拙な方法だが、効果がないわけでもない。

「どうだ、二元気してるか？」

面会へのくだらない手続きは非常事態だの一言とデュエルポリスの証明書の合わせ技で半ば強引に突破し、七曜が収容されている部屋の前。知らない仲ではないゆえによく身に染みているが、この抜け目ない女の前で隙を見せるとどこまで譲歩を迫られるかはわかったものではない。密かに気合を入れ直し、何気なく遊びに来た風を装って鉄格子越しに声を掛ける。

「あら、珍しい顔ね」

壁に掛けられたカレンダーをぼんやりと眺めていたくすんだ茶髪の女が、振り返って気だるげに笑う。檻の中というシチュエーションも相まってどこか退廃的な空気すらも漂っている笑みだが、糸巻の目はさりげなく胡坐をかいたズボンの下に、今の今まで手にしていた針金らしき金属片を滑り込ませたのを見逃しはしなかった。

呆れ混じりにため息をつき、頭を搔いて煙草を取り出す。ライターに火をつけた段階で禁煙よ、とでも言いたげな視線を送ってきたが、火をつけたそれを口にするまで直接とがめることはしなかった。代わりに糸巻へと座ったまま向き直り、最初の煙を吐き出すのを見計らって興味深げに目を細める。

「それで、こんなところに一体何の用かしら？ あいにく、お茶のひとも出せないのだけど」

「それがだな……んー、駄目だ。やつぱアタシにや、遠回しな話は向いてない」

最初はこの軽口に軽口で返そうかという考えが糸巻の頭をよぎったが、すぐに面倒になって却下した。

「……さすがに、もうちよつとぐらい努力してみたら？ まだ挨拶しかしてないじゃない」

「大きなお世話だつての。なあ七曜、お互いまどろっこしい能書きはなしだ。単刀直入に聞かせてもらおう、トリプルシエル、とやらはアンタも一枚噛んでた案件なのか？」

「さて、ね。どうだったかしら？ なにせここに來てから随分経つものだから、すっかり脳も老化しちゃったのよ。年って嫌ねえ」

前置きをすべて飛ばして件の会社名を直接叩きつけても、七曜の表

情や態度には何の変化もない。しかしその気だるげな表情とは裏腹に鋭い眼光は、何か知りたければまず対価を支払いなさいな、と無言のままに促していた。

ここで厄介なのは、こちらがどんな対価を用意したとしても本当にまともな答えが返ってくるのかは不確定だという点である。何か知っているのか、あるいは本当に彼女と今回の事件は無関係なのか。その程度のことすらも、糸巻から先に何かを差し出さない限り知る術はない。予想していたとはいえ案の定な返答に苛立ち紛れに煙草をくゆらせて癩癩を抑え、ここに来る前あらかじめオフィスに寄って取ってきたあるものをカバンから取り出した。

「それ、私のー!」

「ご明察、デュエルポリスで預かってたアンタのデュエルディスクだ。当然デッキもいじってないぜ?もしアンタが色々と聞かせてくれるってんなら、その話に夢中になったアタシはこいつをうっかりその中からでも手の届く場所に放置して、しかもそれを忘れたうえで帰っちゃうかもなあ」

探るような視線が、糸巻の全身に絡みつく。このデュエルディスクを渡す、ということとはつまり、『BV』を使用可能にするということに等しい。そして七曜のエースモンスター、黄金卿エルドリッチならばこの程度の牢はその両腕の怪力だけでいともたやすくひん曲げてしまえるだろう。

これは言外に「逃がしてやるから情報をよこせ」というグレーゾーン、どころかどこをどう見ても真つ黒でしかない司法取引の意思表示であり、その意図が理解できないほど七曜は愚かではない。たつぷり数秒間思索し、最終的に腹を決めたのかゆっくりとその口を開いた。「……いいわ、わかったわよ。そもそもあなたが今ここに来たってことは、何かあのプラントに不測の事態があったのよね?」

「兜建設のおっさんが誰かに襲われた。書類も全部パーだよ」

取引が成立したのであれば、もはや隠す理由はない。どうせ、外に出れば一面のニュースなのだ。デュエルモンスターズによって敗北したという点は情報統制によってどうにか漏洩を防いで単なる物盗

りが偶然鉢合わせた社長に大怪我を負わせて逃げた、ということになつてはいるが、裏のデュエル世界に精通した七曜のような人間が見ればすぐに嘘だとわかるだろう。

とはいえあまりといえればあまりの単刀直入さとその内容は、これまで内心を巧妙に隠し明らかにしてこなかった七曜の本心を引つ張り出すには十分なインパクトがあったようだ。目を丸くして大きく息を吐き、背を向けてずるずると鉄格子によりかかる。

「やってくれたわね……」

「心当たりが？」

「あるに決まってるでしょ。だから私、ああいう手荒な真似はやりたくなかったのよね。下手にちよっつかいかけたら最後、絶対あの狐男ときたら、しつこくねちっこくやり返してくるに決まってるんだから」

「巴、か」

狐。元プロデュエリストの彼女たちにとって、そのワードが指す相手はたった一人しかない。

「アイツ、アンタらに朝顔の奴がボコられたのはだいぶキレてたからな。抗争だつたぜ」

「だーから、あれは私の案じゃないのよ。あなたならわかるでしょうけど、組織って結構難しいのよ？アンタらなんて言い方はやめて、こつちにまで火の粉が飛んでくるわ」

そこまで言つて、だいぶうんざりしたように首を振る。そんな理屈が通じる相手でないことは、彼女自身もよく分かっているのだろう。「ん、でもおかしくないか？兜建設は、いつぞやの裏デュエルロシアムには全面協力してた、いわば巴にとつちや仲間だろ？いくらアイツでも、そんなところを襲つたりするか？」

「そうじゃないわね。あそこは結構前から私たちの世界でも評判だったのよ、デュエルモンスターズ産業のためなら割と財布の紐が緩いつて。ここ数年あちこちの裏大会でスポンサーや建設予定地の提供をしてくれるから、表の世界でもあちこちから仕事を振つてあげたの。だからここ数年で、あんな大企業になつたのよ。特定の所属なんてことはないの。だから巴の側も、ビジネス相手ではあれど仲間意識

なんてものはなかったんでしょね」

にべもなく言い切り、口を挟む暇もなく話題が変わる。

「私たちが作ろうとしていた海上プラントは、建前では海底のレアメタル採掘が目的ってことにしておいたけど、実のところはプラントというよりファクトリーね。生産品目はただひとつ、例の新型『BV』よ」

「またそれか……もうお前らしい加減懲りてくれよな」

今度うんざりした声を上げたのは、糸巻の方だった。その表情は暗い。これまでも散々煮え湯を飲まされてきた新型「BV」……これまで一点ものの試作品でしかなかったあれに工場ができるということは、ついにその量産のめどがついてしまったということだろう。

ところが糸巻の呻き声とは対照的に、七曜の態度は妙に静かだった。

「量産、というのは少し違うわね。巴がどうやってあんなものを作らせたのかはわからないけれど、あれはやっぱりオーパーツよ。私たちの時代にできていいようなものじゃない」

「ん、どういうことだ？」

「何かの鳥だか昆虫だかに、本来この体の構造からして飛べるはずがない種類がいる、って話、聞いたことはあるかしら？物理的にあり得ないのに、外を見れば確かに空を飛び回っている。一説によれば、自分が飛べると信じ切っているからなぜか飛べるんだなんて話もあるぐらい。それと同じことよ。ここだけの話あの新型はね、部品のひとつからネジの一本に至るまでをどうチェックしても、デュエルポリスの妨害電波をもつもしないあのエネルギーがどこから出てくるかさっぱりわからないの」

「はあ？そんなものために、わざわざ工場ひとつ作ろうってのか？」
「完全コピーするだけなら、あれと同じものはできそうなのよ。もつともあの試作品、あの実物を見た私としてはいくらコピーしても同じ機能が再現できると思っちゃったと思う難いわね。その場合でも、いざとなれば別のやりようはあるけれど」

「別のやりよう？」

「あら、この話はまた別料金よ？今はプラントとしての機能の話。それで話を戻すけれど、トリプルシエル本社にはもう行って見たかしら？いくら実体のない企業でも体裁は必要だから、その辺の貸しビルをひと部屋借りてそれっぽく整えてるはずよ」

「ふむ……」

鉄格子によりかかったままの七曜の小さな背中を見つめ、今の言葉の裏を考える糸巻。別のやりよう、とやらも気にはなるが、もうこの件についてはさらに何かを提供しない限りこの女は絶対に口を割りはしないだろう。実体のない企業の本社。そこに何があるのだろうか。それが罫である可能性と、何らかの情報が手に入る可能性。あるいは、その両方ということもありうる。

とはいえ、七曜の組織と今回の一件がどっぷり繋がっていることが分かっただけでも大収穫だ。襲撃犯が巴の息のかかった相手というのも、状況とあの男の言動、思考パターンから考えてほぼ間違いないだろう。

「ま、それ以上は行ってから考えるさ。ほらよ、一応アタシが出てつてから使ってくれや」

格子越しにデュエルディスクを投げつけると、素早くそれをキャッチする七曜。背を向けて歩き出す糸巻に、ふと顔を上げて声を掛けた。

「ねえ、糸巻」

「あー？」

「私ね、ここでこのデュエルディスクの充電が切れてる、とか、そういうことしないあなたは割と好きよ」

「……らしくないな、悪いものでも食べたか？」

「茶化さないで。せいぜい気を付けなさいな、って話よ。それと私はほとぼりが冷めるまで身を隠すから、また何か聞き出そうなんて思っても無駄だからね」

自分でも、これは柄でもないと思ったのだろう。最後まで背を向けたままに放たれた別れの言葉に見えないことは承知で片手を上げ、それつきり出ていった。突如として拘置所の一室の壁が内側からの強

い力によって粉碎され中にいた女が脱走したのは、それからたつぷり1時間後のことだった。

再び外に出た糸巻は、もう寄り道することもなく。無言のままに街を歩き、年季の入ったビルの前で足を止めた。この貸しビルの一室に実体なき企業、トリプルシエルの本拠地がある。

「……よし」

一切迷うことなく、そのまま中に入る。老朽化した狭いエレベーターを無視し、薄暗い蛍光灯が上から照らす階段を選ぶ。3階廊下の突き当り、会社名だけの書かれたシンプルな看板のかかった扉をもつと言わずにこじ開ける。そこに鍵はかかっておらず、拍子抜けするほどにあつさりと開いた扉の奥には簡単に机と椅子が並べられ、それぞれパソコンとそれらしき書類の並んだいかにもなオフィスが広がっている。そして最奥の上役らしき席には、ただひとり座り込む男。

……知らない顔では、ない。その腕に装着されたデュエルディスクも、彼が元プロデュエリストであることを物語っていた。

「デュエルポリスか、巴か……お前の方が早かったか、糸巻」

「アンタがここの責任者か、本源氏？」

「ははは、責任者、か。そうだな、社長だ。部下はいないがな」

そう低い声で笑う男、本源氏わたち轍。がっしりとした体格に頬にざつくりと走る古傷の痕も相まってまさに「その筋」の人間に見えるが、これでも現役時代はれっきとした堅気だった。皮肉にも、今の彼が手を染めたのはまさにその見た目通りの職なのだが。年は糸巻よりも10は上、その割には髪に白いものが混じっていないが、もしかしたら染めているのかもしれない。

周囲への警戒は解かぬままに、デュエルディスクを構える糸巻。それを見てまた笑い、本源氏もその場で立ち上がった。

「せっかくの再会だが言葉は無用、か。ここに来たということとは、何か嗅ぎつけてきたんだろう？ それにしてもたった1人でやってくるとは、相変わらずの度胸だ」

「アンタこそ大したもんだぜ。兜建設の話聞いてから、ここの部下を全員退避させたな？巴のバカが来るか、アタシが先に辿り着くか。どっちにしても、アンタ1人で迎え撃とうってか？」

「蛇ノ目も七曜もないとなると、腕つぶし担当の人材難は否めないからな。俺のようなおっさんがここまでこき使われる羽目に追い込むとは、まったくデュエルポリスもひどいもんじゃないか」

まるで緊張のそぶりも見せず、手慣れた動きでデュエルディスクを起動する。自信に満ちたその動作のひとつひとつからはここに来たのが糸巻だろうが巴だろうが残さず返り討ちにするという気迫がにじみ出ており、無言のプレッシャーを正面から受け止めた彼女は……気が付けば無意識のうちに、獰猛な笑みを浮かべていた。

「悪いなあ……アタシにしてみりや、アンタらのどつちがこの抗争とやらの勝つてもろくなことにならないからな。この三つ巴の戦いは、デュエルポリスに制させてもらうぜ」

「デュエル！」

「俺のターン。どうだ糸巻、腕は鈍っていないか？魔法カード、おろかな副葬を発動。この効果によりデッキからトラップカード、ファントム・ナイフ幻影騎士団ミストクロウズを墓地に。そして幻影騎士団クラックヘルムを召喚。そして自分フィールドの戦士族モンスターをリリリースすることで、手札のこのカードは特殊召喚できる。ターレット・ウオリアー！まずは軽い腕試し、これでターンエンドだ」

ひび割れた兜がゆらりと宙に浮かび上がり、両肩にそれぞれ砲門を装着した人型の戦士がそれを自身の小さな頭に乗せる。ターレット・ウオリアーはその効果による特殊召喚に成功した際、その攻撃力をリリース要因の攻撃力だけ上げる効果を持ち、これだけでその攻撃力は最上級モンスターにさえ匹敵するほどになった。

幻影騎士団クラックヘルム 攻1500

ターレット・ウオリアー 攻1200↓2700

「腕試し、ねえ。事故ってんなら事故って言った方が身のためだぜ、アタシのターン！よし、不知火の武部ものくを召喚、効果発動だ」

不知火の武部 攻1500

糸巻が呼び出したのは、薙刀を手にした赤い和装の少女。その薙刀を床に打ちつけると、炎の渦がその周りを揺らめきはじめる。

「召喚時に妖刀―不知火モンスターのリクルート、ただし発動ターンのアンデット縛り、か。その発動にチェーンして、手札から増殖するGの効果を発動。特殊召喚するたび、俺は1枚ドロ―する」

「く……チューナーモンスター、妖刀―不知火！」

妖刀―不知火 攻800

意表をつく手札からの伏兵に表情を歪めながらも、一振りの妖刀が武部の隣にふわりと浮かぶ。その代償として1枚のドロ―を許してしまった形になり、今は単なる手札交換に過ぎないがこれ以上のモンスター特殊召喚は一方的な本源氏のアドバンテージとなる。それを分かったうえで、圧をかけてきているのだ。

だが、赤髪の夜叉はその程度で止まりはしない。

「はっ、だったら特殊召喚してやらないまでさ。魔法発動、黄金の封印櫃！デツキからカードを除外し、2ターン後のスタンバイフェイズにそいつを手札に加えるぜ」

「む……」

すぐさま発動された魔法の効果により、糸巻の場にウジヤト眼のデザインされた黄金の箱が鎮座する。何を除外されるのか理解した本源氏が渋い顔になる中、その蓋がゆっくりと開いて中に1枚のカードが吸い込まれていった。

「アタシが選ぶカードは当然、不知火の宮司^{みやつかさ}。そして宮司が表側でゲームから除外された時、フィールドで表側のカード1枚を破壊できる！爆殺されちまいな、ターレット・ウォリアー」

巨人の機械戦士が、その足元から炎に包まれて崩れ落ちる。空いたフィールドに、右手には薙刀を手にしたまま左手に妖刀を構えた武部が切りかかった。

「バトルだ。やれ、妖刀！武部！」

「承知の上で飛び込んできたか。相手の直接攻撃宣言時、墓地より幻影騎士団ミストクロウズの効果を発動！墓地に存在するレベル4以下の幻影騎士団1体を蘇生し、さらにこのカードを蘇生したモンス

ターと同じレベルのモンスターとして特殊召喚する。甦れ、クラックヘルム」

幻影騎士団クラックヘルム 攻1500

幻影騎士団ミストクロウズ ☆? ↓4 守0

二刀流を構え大上段から飛び掛かった武部の一撃を、金属製の鉤爪が受け止めた。伸ばした腕の主は、成仏しきれない青白い魂が纏った黒装束。

「……ならー改めて武部でミストクロウズに攻撃ー」

不知火の武部 攻1500 ↓幻影騎士団ミストクロウズ 守0 (破壊)

巻き戻しのシステムを利用してミストクロウズを妖刀で撃破、そのまま武部でクラックヘルムと相打ちを取ることもできる場面。しかし攻撃力わずか800の妖刀を攻撃表示で残して次の反撃をどうにかなると過信するほど、彼女は猪突猛進ではない。まして最初のターレット・ウォリアーは本源氏本人も言っていた通りあくまで腕試し、ほんの挨拶程度のものでしかないのだから。

そして武部の振るう妖刀による返しの一太刀が、薙刀と鍔迫り合いを続けていたミストクロウズのガードをすり抜けた。

「自身の効果でモンスターとして特殊召喚されたミストクロウズは、フィールドを離れる場合除外される。しかしこの瞬間、手札から幻影騎士団フラジャイルアーマーの効果を発動。俺のフィールドで幻影騎士団が破壊された場合、このカードを特殊召喚できる」

あつさりと断ち切られた装束に代わり、長年無造作に風雨にさらされて脆くなった鎧が青白い魂を宿して立ち上がる。相手ターンだというのにまるでモンスターが途切れず、それどころかその数を増やしていく。どれほど追い込まれようとも幻影騎士団は倒れないし、本源氏轍は踏みとどまる。その防御性能の高さはかつての一時代に「最終防衛団長」とまで称されたこの男の、現役時代からまるで衰えを知らない体さばきそのものだった。

「さすがに、ダメージは通させてくれやしねえか……アンタが錆びついてなくて何よりだ」

「褒め言葉として受け取っておこう。それで？お前の方はどうなんだ、糸巻？増殖するGはまだ生きているぞ」

「わかってらい。カードをセットして、ターンエンドだ」

「では俺のターン。レベル4の閥属性、クラックヘルムとフラジャイルアーマーでオーバーレイ。立ち上がれ騎士と猛禽、満たされぬ2つの魂の残滓よ。この地より後に道はなし、最終防衛ラインにて殲滅を行う！エクシーズ召喚、ランク4！レイダース・ナイト！」

幻影となった騎士たちのかつての装備品が2つの光となって螺旋を描きつつ天に昇り、すぐさま反転して足元に開いた宇宙空間へと吸い込まれる。そして幽鬼のような青白い炎を噴き上げる、幻影の騎士が同じく幻影の馬に騎乗して音もなく戦場に現れた。

レイダース・ナイト 攻2000

「そしてレイダース・ナイトの効果発動、フェローズ・ポゼッション！オーバーレイ・ユニット1つを使うことで、レイダース・ナイトに対しランクが1つ異なる仲間の魂をエクストラデッキからその身に宿す。ランクダウン・エクシーズ・チェンジ、幻影騎士団ブレイクソード！」

レイダース・ナイト(1)↓(0)

幻影騎士団ブレイクソード 攻2000

レイダース・ナイトの姿が幻影となって霧のようにぼやけていき、その体に新たな騎士の姿が重なって二重になる。レイダース・ナイト自身の姿がどんどん薄れていくのとは対照的に、もう1人の騎士の姿は次第にはつきりとしたものに変化していく。そしてへし折れた大剣を振り上げ、新たな騎士が戦場に鬨の声を上げた。

「ブレイクソード……また厄介なもんを」

「それも褒め言葉と受け取ろう、ブレイクソードの効果を発動。1ターンに1度オーバーレイ・ユニットを1つ使い、互いのフィールドにあるカードを1枚ずつ選択して破壊する。俺が選ぶのはその伏せカードとブレイクソード自身だ」

「自壊に繋げようってか？させるかよ！アンタの選んだカード、禁じられた聖衣をチェーン発動！ブレイクソードはこのターン攻撃力が

600ダウンして効果の対象にならず、効果によって破壊されないぜ」

幻影騎士団ブレイクソード(1) ↓(0) 攻2000 ↓1400
ブレイクソードがその折れた剣の切っ先を地面に叩きつけると、そこから地面を割って衝撃波が飛ぶ。そのままの勢いで糸巻の伏せた右側のカードを吹き飛ばした。

「不知火の武部に自爆特攻する意味も薄いか？そして妖刀は墓地に送られた次のターンからその効果を使用可能、ならこの場で潰す必然性も薄いか。カードを伏せてターンエンド、それと同時に禁じられた聖衣の効果は消える」

幻影騎士団ブレイクソード 攻1400 ↓2000

「どうにか凌いだか……アタシのターン！」

「シンクロ召喚、あるいはリンク召喚か？どちらにしてもこのターンは大人しくしてもらおう、永続トラップ発動、ヴァニティー・スペース虚無空間。このカードが存在する限り、互いにモンスターの特殊召喚は不可能となる……ははは、その表情を見る限り、どうやらこのカードを破壊する手段はないようだな」

本源氏の言葉は正しい。本来虚無空間はその極めて高い性能と引き換えに、デツキかフィールドからカード1枚が墓地に送られるだけで破壊されるといって極めて脆い性質を持つカードである。しかし糸巻の手札には適当に発動して墓地に送ることができるカードすらもなく、その唯一の方法はあのブレイクソードに妖刀か武部のどちらかを自爆特攻させるといって極めてリスクの高いものしか残っていないかったのだ。

「そんな事やってられるかよ……ここは賭けるしかないか、イピリア召喚！このカードが場に出た際、アタシはカードを1枚ドロウできる！」

イピリア 攻500

「なるほど、うまく使い切りの魔法辺りが引ければ御の字、か。だが、そううまくいくかな？」

「アタシの引きを舐めんなよ？ドロウ……ぐっ!？」

不敵に笑って引いたカード。だがいかに引きの強い彼女といえど、幸運の女神もそう毎回は微笑みはしない。結局せつかくの盤面を生かせず、引いたカードをそのまま伏せることしかできなかった。

「カードを3枚セットして、妖刀を守備表示に。ターンエンドだ」

妖刀―不知火 攻800↓守0

「なんだ、やはり腕が鈍っていたか？今のタイミングで引けないとはな、『赤髪の夜叉』の名が泣くぞ。このエンドフェイズ。レイダース・ナイトの効果によって特殊召喚されたブレイクソードは自壊し、カードが墓地に送られたことで連鎖的に虚無空間もまた自壊する……しかし、そこからでも幻影騎士団は立ち上がる。このカードが破壊された時、墓地に存在するレベル4以下の幻影騎士団2体を蘇生し、そのレベルを1つ上げる。ただしこの効果の発動後、ターン終了時まで俺は闇属性以外の特殊召喚が不可能となるがな。レベル5となって三度甦れクラックヘルム、フラジャイルアーマー！」

幻影騎士団クラックヘルム ☆4↓5 攻1500

幻影騎士団フラジャイルアーマー ☆4↓5 守2000

「俺のターン、今こそ時は満ちた。ライフを2000支払い魔法発動、超越融合！俺のフィールドのモンスターのみを使用し、チェーン不可の融合召喚を行う！」

本源氏 LP4000↓2000

超越融合。それは本来エクシーステーマである【幻影騎士団】には、入るはずのないカード。しかし彼は、それをデッキに入れた。そこから導き出されるは、彼の持つもうひとつの力。かつての彼が選んでデッキに入れ、ともにプロの舞台を戦い抜いた、もうひとつの切り札。「戦場に響け、勝利の咆哮。大気を震わせ大地を揺るがす、数多の騎士の勝鬨よ。最終防衛ラインに刻め、我らが勝利の一番星！融合召喚、覇勝星イダテン！」

覇勝星イダテン 攻3000

西洋騎士の遺物といった出で立ちの幻影騎士団とは打って変わって、豪槍を片手で難なく振り回す中華風の出で立ちをした偉丈夫。だが、まだまだ。まだ、彼の軍は揃っていない。

「そしてイダテンの効果により、デツキからレベル5の戦士族モンスターを手札に加える。天融星カイキを手札に。そして墓地より、超越融合の更なる効果を発動。墓地のこのカードを除外してこのカードによって融合召喚されたイダテンを選択することで、その素材となったモンスターを効果無効、攻撃力を0として蘇生する！」

「またクラックヘルムとフラジヤイルアーマー、ってか？もう見飽きたぜ、そいつらの顔は」

「そう言ってくれるな。戦う者の魂は不滅、幻影騎士団は倒れないということだ。さらにトランスファミリアを召喚、このカードは1ターンに1度、自分モンスターの位置を変えられる。エクストラモンスターゾーンに呼び出したイダテンを、1つ後ろのメインモンスターゾーンに移す」

幻影騎士団クラックヘルム 攻1500↓0

幻影騎士団フラジヤイルアーマー 攻1000↓0

トランスファミリア 攻0

「これでエクストラモンスターゾーンが空いた、そして召喚条件は闇属性モンスター2体以上。クラックヘルム、フラジヤイルアーマー、トランスファミリアの3体をそれぞれ右、右下、左下のリンクマーカーにセット」

浮かび上がる六角形の指定された3か所に、闇の渦となった3体のモンスターが飛び込んでいく。3つの頂点がオレンジ色に光輝き、条件を満たしたことで開かれた異空間への道の向こうから飛び出した新たな騎士がその錆びついた戦斧を手にイダテンの斜め前、右のエクストラモンスターゾーンへと着地した。

「数多の苦難になお折れぬ、誇りも高き騎士の道。最終防衛ラインよ、戦線を再び突き進め！リンク召喚、リンク3。幻影騎士団ラストイ・バルディッシュユ！」

幻影騎士団ラストイ・バルディッシュユ 攻2100

「ラストイ・バルディッシュユの効果。1ターンに1度デツキの幻影騎士団モンスターを墓地に送り、ファントム魔法・罫カード1枚をフィールドにセットする。ゆけ、幻影騎士団ティアースケイル。そし

てフィールドにセットするのは、フアントム・フォッグ・ブレード 幻影霧剣だ」

「モンスター1体への効果無効、攻撃対象への抑制、そして攻撃抑制か。面倒なもの伏せてくれるな、ったく」

「これくらいしておかないと、お前相手では心もとないからな。墓地よりクラックヘルムの効果を発動、このカードを除外する……そして俺の墓地から幻影騎士団が除外されたことで、ティアースケイルを蘇生することができる」

幻影騎士団ティアースケイル 守1600

「ティアースケイルの効果発動。手札1枚を捨て、デッキから幻影騎士団またはフアントム1枚を墓地に送ることができる。この天融星カイキを捨てて幻影騎士団ダステイローブを墓地へ、そしてダステイローブは墓地から除外することでさらに後続の幻影騎士団をサーチできる」

引き裂かれた布鎧、風雨にさらされ傷んだローブ、隠密用に作られたものの使う者もとうに果てて土に戻るのを待つばかりだったブーツ。戦士たちが確かにそこにいた証拠の、しかし消えつつあった品々に再び不屈の魂が宿り、戦場を自在に闊歩する。

「アンタが今サーチしたサイレントブーツは場に幻影騎士団がいる場合に特殊召喚ができ、さらにラスティ・バルディッシュのリンク先に闇属性のエクシーズモンスターが特殊召喚された時、フィールドのカード1枚を破壊できる……だろ？ やらしゃあしないさ、トラップ発動、小人のいたずらー！ このターン、互いの手札に存在するモンスターのレベルは1下がるぜ」

サイレントブーツのレベルはティアースケイルと同じ3……しかしこの発動により、ティアースケイル自体のレベルは変わらぬままにサイレントブーツのレベルだけが一方的に2へと下がる。これで、このターンのエクシーズ召喚は不可能。リンク召喚に繋げる手は残っているが、それを選ぶ気はないようだ。

「小癩な手を……では望み通り展開は終わりだ、バトル。まずはラスティ・バルディッシュでイピリアを攻撃」

無造作に振りぬかれた傷だらけの戦士による重い戦斧の一撃が、そ

の足元を這いまわる爬虫類を強かに打ち据える。

幻影騎士団ラストエイ・バルディツシュ 攻2100↓イピリア 攻500 (破壊)

糸巻 LP4000↓2400

「くっ……！」

「これで終わりか、呆気ないがそんなものか？ 覇勝星イダテンで不知火の武部に攻撃する」

妖刀を失い薙刀を両手で構える少女に迫る、その体躯で遙かに上回る偉丈夫。両者の攻撃力の差は1900と本来糸巻のライフをすべて奪うには足りていないが、イダテンにはそれを補って余りあるだけの効果がある。

「覇勝星イダテンが自身よりもレベルの低いモンスターとバトルを行うダメージ計算時、効果発動。そのモンスターの攻撃力を0にする、天地覇星の儀！」

イダテンの全身から放つプレッシャーと覆せないレベル差を前に、懸命に薙刀を構えてその一撃を防ごうとしていた武部の手から力が抜けていく。その1瞬の隙を見逃さず、流星のように速く剛槍が伸びた。

「させるかよ……！ダメージステップにトラップ発動、バージェストマ・ハルキゲニア！この効果で、ターン終了時までイダテンの攻守は半分になる！」

覇勝星イダテン 攻3000↓1500↓不知火の武部 攻1500↓0 (破壊)

糸巻 LP2400↓900

「凌ぎ切られたか。いいだろう、腕は鈍ったという言葉は撤回する。そしてターンを終えるこの瞬間にイダテンの攻守は元に戻り、先ほど除外されたクラックヘルムの効果により墓地の幻影騎士団、フラジヤイルアーマーを手札に回収する」

覇勝星イダテン 攻1500↓3000 守1100↓2200

「ご丁寧に妖刀だけフィールドに残しやがって……だが、無駄な努力だったな？ 永続トラップ、闇の量産工場を発動！アタシのフィールド

から妖刀を墓地に送り、カードを1枚ドロウする」

墓地発動の効果を持つ妖刀を無理矢理墓地に送り込みつつ、さらに手札を補充する。さらに通常のドロウで、もう1枚。それを目にしたとき、糸巻の目がギラリと輝いた。

「アタシのターン……やつと来たな！まずスタンバイフェイズ、発動から2ターンが経過したことで黄金の封印櫃から不知火の宮司の封印が解かれるぜ。そしてこの宮司1枚をコストに捨てて魔法カード、一撃必殺！居合ドロウを発動！アンタのフィールドに存在する枚数だけアタシのデッキからカードを墓地に送り、さらに1枚をドロウ。そのカードによって、2種類の処理から自動的に次やることが決定される。さあ、お祈りするなら今のうちに済ませときな」

「祈る？それは俺ではなく、自分でやることだろう？どちらにせよチェーンするものはない、好きにしてくれ」

いつ、いかなる時でも一発逆転の目を秘めた魔法カード、居合ドロウ。デッキトップに手をかけ一呼吸置き、一気にカードを引き抜いた。

「アンタの場に存在するカードはイダテン、バルディッシュ、ティアースケイル、そして伏せてある幻影霧剣の4枚。よって上から4枚、アンデットワールド、バージェストマ・オレノイデス、バージェストマ・カナディア、不知火の隠者を墓地に送り……さつきは偉い目にあつたがな、今度こそアタシなりのデュエルを見せてやるよ。ドロウ！」

ここで居合ドロウの2枚目を引き当てれば、その追加効果によりフィールドのカードをすべて破壊、さらに墓地に送った枚数1枚につき2000ものバーンを与えて問答無用のオーバーキルが成立する。当然糸巻自身も隙あらばその方法での勝利を狙ってはいるのだが、先ほどのターンと同じように彼女の引きがいくら強いといっても、そう都合よく奇跡が起こせるほどのレベルには達していない。

しかし、それで十分だった。幸運の女神は明確なキスではなく、ただ微笑みだけを残していく。それを見逃しはしないのが、この糸巻だ。

「死霊王 ドーハスーラ……よし。なら居合ドロウの更なる効果によ

り、今落とした数と同じ枚数のカードを墓地からデッキに戻す。バー
ジエストマ・ハルキゲニア、不知火の宮司、不知火の武部、黄金の封
印櫃を戻させてもらうぜ。生あるものなど絶え果てて、死体が死体を
喰らう土地。久々にアタシの領土に案内してやろう、アンデットワー
ルド！」

幻影騎士団ラステイ・バルディッシュ 戦士族↓アンデット族

幻影騎士団ティースケイル 戦士族↓アンデット族

覇勝星イダテン 戦士族↓アンデット族

全ての生命の輝きが塗りつぶされて、不浄にして不条理な動く死骸
に書き換えられる土地。生命への冒瀆に満ちていながら、それでいて
同時に最も生命らしい動乱の巻き起こる場所。そこではあらゆる理
不尽が道理に置き換わり、理屈は偏屈に入れ替わる。

そしてその全てを統べる女帝こそが、糸巻太夫という女だった。

「さあ、とつとと終わらせようぜ？墓地から妖刀―不知火の効果を発
動！このカードとアンデット1体を除外することで、そのレベル合計
と等しいレベルのアンデットシンクロモンスター1体を特殊召喚す
る。アタシが選ぶのはレベル4、不知火の隠者だ」

先ほどラステイ・バルディッシュによって折られてそのままになっ
ていた妖刀の切っ先が、触れる者もないのにふわりと宙に浮く。そ
の周りをどこからともなく点火した炎の渦がぐるりと囲み先ほど消
滅したはずの部分が、そしてそれを掴む新たな使い手の腕が、炎の中
で形になっていく。

「戦場切り込む妖あやかしの太刀よ、一刀の下に輪廻を刻め。逢魔シンクロ、レ
ベル6。刀神―不知火！」

☆4+☆2=☆6

刀神―不知火 攻2500

超常的な炎の力によって完全に修復された不知火と、それを手にす
る炎の中から現れた壮年剣士。しかし、まだ足りない。この力だけで
は、まだ届かない。その時、刀神の手にした妖刀がひとりでに更なる
炎をその刀身に纏った。

「ゲームから除外された不知火の隠者は、同じく除外された不知火1

体を帰還させることができる。復活、妖刀―不知火!」

妖刀―不知火 攻800

「チューナーの帰還、か」

「さあ、連続シンクロといこうじゃないか。レベル6の刀神に、レベル2の妖刀をチューニング! 戦場に影落とす妖の魔竜よ、光と闇の狭間を溶け合わせろ! シンクロ召喚、レベル8! 混沌魔龍 カオス・ルーラー!」

☆6+☆2||☆8

混沌魔龍 カオス・ルーラー 攻3000 ドラゴン族↓アンデット族

光と闇の力を持つ魔龍が、アンデットワールドの空に舞う。本来は死を振りまくはずのその能力も、元より死人だらけのこの地にあつてはそこかしこの死体を活気づかせるための降り注ぐ闇に他ならない。

「カオス・ルーラーはシンクロ召喚に成功した時……」

「デッキの上5枚の中から光、闇属性モンスター1体を選び手札に加え、残りのカードはすべて墓地に送る、だろう。これは……止めざるを得ないか。永続トラップ発動、幻影霧剣。このカードの対象とするモンスターは攻撃することもされなく、その効果は無効化される」

アンデットワールドの闇を裂き、影のように薄い闇の剣が飛ぶ。カオス・ルーラーの体を貫いたそれはいかなる原理かその体をも空中に縫い留め、その身動きを封じ込めた。

「そうさ、アンタはそうせざるを得ない。ここで、その幻影霧剣を消費せざるを得ないのさ。だが、アタシの前でトラップを発動する代償は払ってもらうぜ? フィールドでトラップが発動された時、墓地のバージェストマ・カナディアの効果を発動。その発動に直接チェーンし、このカードをモンスターとして特殊召喚する」

「……結局はお前の手のひらの上、か」

バージェストマ・カナディア 攻1200 水族↓アンデット族

糸巻は今の攻防において、カオス・ルーラーとカナディアの事実上の2択を迫ったのだ。当然本源氏の側もその意図に気づいてはいた

が、アンデット使いにとって墓地リソースの意味は極めて大きい。それを知っているからこそ、わかっているながらもカオス・ルーラーを止めるほかはなかったのだ。

「ああ、その通り。そして、アンタの判断は決して間違っちゃいない。だがな、そいつもやっぱり悪手だぜ？アタシはアンデット族のカオス・ルーラーとカナディアの2体を、左下及び右下のリンクマーカーにセツト。戦場いくさばに笑う妖あやかしの魔性よ、死体の手を取り月光に踊れ！リンク召喚、ヴァンパイア・サッカー！」

ヴァンパイア・サッカー 攻1600

アンデットワールドの荒廃した雰囲気には一見似つかわしくない、しかしよく見れば何よりもその場に馴染んでいる少女の形をしたモンスター。口の端からわずかに覗く白い犬歯が、光を反射してきらりと光った。

「ヴァンパイア・サッカー……いや、さつき引いていたのは……そうか、そういうことか！」

ここに来てようやく糸巻の真の意図に気がついた本源氏が絶望の唸りを上げるが、それもはや遅すぎた。尤も気づいていたとして、どうにかできた保証はないのだが。

「ようやく思い出したみたいだな。そうさ、ヴァンパイア・サッカーがいる限り、アタシはアンデット族のアドバンス召喚をする際のリリース要因を相手フィールドのアンデットから賄うことができるのさ。幻影騎士団ラストイ・バルディッシュと覇勝星イダテンをリリースし、アドバンス召喚だ！死霊を統べる夜の王、死霊王 ドーハスーラ！」

死霊王 ドーハスーラ 攻2800

本源氏の操る東西モチーフ混成軍の最前線に構えていた2体の強力な戦士たちが、成すすべなくアンデットワールドの腐った大地にその足元から呑み込まれていく。それと入れ替わるように血の沼地の奥底から浮上して大蛇のような体を地面に引きずる湿った音と共に現れたのは、数多の死霊をその強大な力でいとも簡単に操ってのけるアンデットワールドの重鎮だった。

彼が先ほど手札に回収したフラジャイルアーマーは、幻影騎士団の破壊に応じて手札から壁として特殊召喚できる……しかしそんな都合のいい未来など決して訪れないことを、本源氏は知っている。目の前のこの女は最後の最後でそんなつまらないプレイングミスをするようなデュエリストではなく、こちらの手を知ったうえで動いてくるということとは、当然それなりの備えがあると思われるからだ。

「装備魔法、ラプテノスの超魔剣を発動。このカードをアンタのティアースケイルに装備するぜ……バトルだ。そしてバトルフェイズ開始時、ラプテノスの超魔剣の効果によって装備モンスターの表示形式を変更し、モンスター1体を召喚する」

幻影騎士団ティアースケイル 守1600↓攻600

牛頭鬼 攻1700

ティアースケイルが強制的に攻撃の姿勢を取り、その姿を間髪入れず解き放たれた死霊の奔流が押し流す。ドーハスーラの一撃が、最終防衛ラインを突破した。

死霊王 ドーハスーラ 攻2800↓幻影騎士団ティアースケイル 攻600（破壊）

本源氏 LP2000↓0

「終わったか……立てるか？」

「老骨に余り鞭を打たないでくれないか」

大の字に倒れたままピクリとも動かず、しかし存外元気そうに返事する本源氏。その様子なら大丈夫そうだと判断し、糸巻もまた嵐の後のような部屋の中でどうにかひっくり返っていない手近な机の上に座り込む。お互い外傷の出るようなカードこそ使いはしなかったが、今のデュエルで体に蓄積されたダメージは決して無視できるほどのものでもない。

だが腰を下ろした直後に糸巻は、息をつく暇もなく歯を食いしばって再び立ち上がった。デュエル前の会話から、ある可能性に思い至ったのだ。疲労と痛みで反応の鈍い体を引きずるように、本源氏の体を

引き起こす。

「立てるか？なんて聞いてられねえなこりゃ。おいコラ、立つてくれ。巴の奴がここに来てもおかしくないんだろ？最終的にはお縄に付けてやるが、今はアタシが責任もってデュエルポリスで保護してやるよ」

「……ああ、そうだな。俺もだいぶ年か、まだやれるつもりだったがこのまま連戦は無理そうだ」

現役時代の彼からは、想像もつかないような弱音。何も言い返しはしなかったが、聞かされる側の糸巻としては思うところもあり、若干表情が歪む。

「七曜の奴も、同じようなこと言ってたなあ。どいつもこいつも年が年が、つてよ……ほれ、おぶつてやるぜ爺様よ」

「ははは、そこまで年を食った覚えはない。ただ、肩だけは貸してくれ……あつつ」

よろよろと手を取って立ち上がり、もたれかかってくる男の体。依然として筋肉質ではあるが、それでも心なしか昔の記憶にあつたそれよりは小さくなっているようにも思えた。

「(アタシもいつか、近いうちにこーなんのかね)」

それは近い将来、こんな無茶な仕事をしては確実に訪れる未来なのだろう、と思う。そうなったからといって、自分が逃げている過去に対しての何の贖罪になるわけでもない。

但至少なくとも、それは今じゃない。扉を開けて外に出た、少し見ただけでは酔っぱらって肩を組んでいるだけのように見える2人の姿は、すぐに町の雑踏の中に紛れていった。

ターソン31 新世代の蕾、育むは水源

「おう、さつきは悪かったな。アタシの方はこのまま別件だ。ああ、ちよいと面倒なことになってな。仕事だよ仕事、薄給激務なデュエルポリス様のお仕事だ。いつも通り、そっちの方で口裏合わせといてくれると助かる……悪い、恩に着る。んじやな」

オフィスの電話を切った糸巻が振り返ると、先ほど入れた茶を飲みながら冷静な目でこちらを窺う本源氏と目が合った。先ほどのデュエルの後で彼を保護するとは言ったものの処置に困り、とりあえず彼女のホームであるこの場所に連れてきたのだ。問うような視線に肩をすくめ、言い訳がましく口にする。

「警察だよ。元々アタシは今日、兜建設の現場検証に駆り出されてたのを放り投げて爺さんとこに来たわけだから……ああわかってる、別にチクったりはしねえよ」

警察、と口にした瞬間からみるみる険しくなっていく目つきに閉口し、慌てて最後の一言をぼそつと付け加える。だが当の本人は、そうではないと首を横に振る。

「先ほども言ったと思ったがな、まだ老人扱いはやめてくれ」

「そりゃ悪かったな、爺さん？」

間髪入れぬ返答は、無論わざとである。期待した通りの反応、苦虫を噛み潰したような表情を見て、くつくつと低く笑みがこぼれる。我ながら意地の悪いことをしていると少し自分でも驚いたが、すぐに思い直した。いくら自分から招き入れたこととはいえ、とんでもない爆弾を抱えることになったのだから、その留飲を多少下げたところで、罰は当たらないだろう。

糸巻も自分の分の茶を注ぎながら、そんな本源氏の正面に座りこんだ。

「さて、ぼちぼち無駄話はしまいにしよう。アンタの身の安全はアタシが手を回して保証してやるが、その代わりにいくつか聞きたいことがある。まず、」

「お姉様！お願いがあります！」

「えっと、し、失礼します」

しかし珍しく糸巻が自分から仕事をしようとした最初の言葉は、バーンとドアを勢いよく開けながら雪崩れ込んできた少女の声によって中断された。さらにその後ろからおずおずと顔を出す丸眼鏡に茶髪の少女。今更ながらに鍵を閉めていなかったことを思い出しあちやーとこめかみに手を当てる糸巻とは対照的に、突然の小さな乱入者に奇異と好奇の目を向ける本源氏と、先ほどまで静かだったオフィスの中では一斉に視線が交差する。

一方でその場に固まったのが、飛び込んできた当の少女……八卦である。このオフィスが普段客人や来訪者などまずやつてこない場所であることは、これまで毎日のように入り浸ってきた少女はよく知っている。先日までここにいた鼓もフランスへと帰り、部下である鳥居も長期の研修に出た、少なくともそう聞いている。当然今日も、この場所にいるのはお姉様こと糸巻だけだろうと最初から思い込んでいたのだ。だからこそ、勝手知ったるこの場所へと今日は友人を連れてきたのだが。

「え、えっと、失礼しました！ 仕事で来たんですね、お姉様！」

「いやいや、楽しんでいてくれ。邪魔しているのは俺の方だからな」
くるりと踵を返した少女の背中を、本源氏が呼び止める。口調こそ気さくだがその彫りの深い顔にぎっくりと走った古傷は、笑っていてもその迫力が薄れるわけではない。振り返って即座に表情を強張らせた少女を見て、糸巻はかつての現役時代に聞いた笑い話を思い出していた。彼のデュエルがテレビ中継された時には、嘘か本当か彼の顔がアップになるたびに「子供が泣いた」という趣旨の苦情の電話が入ったという……。

もちろん、これが噂話に過ぎないことは糸巻も承知している。プロデュエリストは単なる実力だけでは生き残れない世界、少なくとも試合のたびに苦情が来るようではスポンサーが寄り付くわけがない。それでもそんな冗談が成立するほどに、若かりし頃から本源氏の強面っぷりには定評があったのだ。そしてあれから幾星霜、その顔つきは柔和になるどころかますます凄みを増していた。それこそ、過去の

笑い話が笑っていいものかどうか判別が難しくなる程度には。

「……まあ楽しんでくれ、八卦ちゃん。それからそっちの、竹丸ちゃんだっけか。外は寒いだろ、入っておいで」

「は、はい」

いつもの活発さはどこへやら、借りてきた猫のようにそろそろ糸巻の隣に座る少女。それを見て、まだ玄関から様子を窺っていたもう1人の少女も慌てて寄ってきて親友の隣の席をキープする。

「……」

「……」

興味深そうに机を挟んだ向かい側の3人を見つめる本源氏に、いまだに表情硬く糸巻の隣にびったりとひつつく八卦、その八卦にさらに身を寄せる竹丸。なんとなく誰も話し出さないままの空気に耐えかね、糸巻がその場の口火を切った。

「それで、八卦ちゃん。今日はどうしたんだ、友達まで連れてきて」

「え、ええと……」

歯切れも悪く、ちらりと本源氏へと視線を向ける。本人はいいと言っているものの、本当に自分たちの存在が迷惑になっていないかと不安になっているのだろう。

「この人はな、あー、アタシの……」

歯切れが悪いのは、立場の違いが脳裏にちらついたからだだった。かつての糸巻と本源氏ならば、自信をもってこの男は同業者であり、年の離れた友人であると言い切れただろう。しかし今の彼女はデュエルポリスであり、いまだ社会に対して戦いを続ける彼とは対極に位置する関係だ。

そんな自分に、彼を友と呼ぶ資格などあるのだろうか。そんな逡巡だらけのセリフの後半を引き取ったのは、ほかならぬ本源氏だった。「古い友人、だよ。もう何年も会ってはいなかったが、糸巻の話は何度も耳にしていた」

「爺さん……」

「年寄り扱いはよしてくれ。まあそんなわけで、色々あったが久しぶりにこうして顔を見ているわけさ」

「お姉様のお友達、ですか。お初にお目にかかります、不肖お姉様の妹分を務めております、八卦九々乃と申します」

「た、竹丸夢です。八卦ちゃんのお友達です」

ようやく緊張が少し溶けたところで、そろそろ本題に入る頃合いかと判断した糸巻が、なぜか引つ付いたままの姿勢からは動こうとしない隣の少女の背中をポンと叩いて促してやる。

少女の側もそれで自分がここに来た目的を思い出したのか、ようやくその口が開いた。

「実は、竹丸さんが最近、デュエルモンスターズをはじめまして」

「ほう……！こんな若い子がこのご時世に、ああいや、すまない。悪かった悪かった、おじさんが悪かったから続けてくれ、な？」

「おじさんだあ？こんな子供の話の腰折つといた挙句なーにサバ読んでやがる、お・じ・い・さ・ん？」

急に鋭くなった視線と飛び掛からんばかりの勢いで急に口を挟まれ、またしても口をつぐんでしまった少女。本源氏も無論悪気があったわけではないが、糸巻から結構本気で睨みつけられたうえに今は完全に自分が悪かったという自覚もあるためすっかり小さく縮こまってしまふ。

それでもなお震える少女がまた口を開いたのは、よしよしとその頭を糸巻がたつぷりと撫でてなだめてやってからのことだった。

「そ、それで、せっかくだからお姉様にデュエルの指南をしてもらおうと……」

「アタシに？七宝寺の爺さんとか、一段落ちて清明とかじゃなくてか？どうせどつちも暇してるだろ」

七宝寺……かつて伝説と謳われたデュエリストの名に、またしても本源氏の目が興味深げに細まる。しかしそこで口を挟まないのは、さすがに彼も学習したからだ。

「それなんですけど、実は……」

「私のこのデッキを作るときに、清明さんと葵ちゃんの大叔父さんに色々教えてもらったんです。それで、最初に強い相手と戦って勉強するのがいいって教えられたので」

「それで私が相談されて、最初にお姉様のことを思いついたんです。やっぱりお姉様が私にとって、最強のデュエリストですから！」

「そ、そうか……」

キラキラと輝く目でまっすぐに敬愛するお姉様の顔を見つめる少女に、いつものこととはいえその視線を直視できず居心地悪そうに目を逸らす糸巻。そして、普段学校で見っていた姿とはまるで違う子犬のような一面を見せる親友の様子にどうしたものかとおろおろする眼鏡少女。

「愛されてるな、糸巻。では、こういうのはどうだろう」

そこでポン、と手を叩いたのが本源氏である。また泣かせたら承知しないぞ、という冷たい視線もどこ吹く風に、しかし先ほどのように急に距離を詰め、無駄に怖がらせたりはしない。

「……で、なーんでアタシがこんな？自分で言い出したんだから自分でやりやーいいじゃねえか」

「なに、せつかく4人もデュエリストがいるんだからな。子供の相手なんて10数年ぶりなんだ、たまには昔を思い出させてくれてもいいだろう」

「爺さん、アンタほんつと裏稼業向いてないよなあ。その顔で」

「顔も年も余計なお世話だ」

「お二方、よろしくお願いします！負けませんよ、ねっ、竹丸さん！」

「え、ええ……う、うん、そうだね……」

数分後。気楽に軽口を叩きあう大人2人のタッグとそれに対し元気いっばいに胸を張る少女、そしてそんな3人とは対照的に遠目からでもわかるほどガチガチに緊張したもう1人の少女は、机や椅子を隅によせて無理矢理オフィス内に作りだされたスペースで向かい合っていた。

『タッグデュエルだ。タッグはいいぞ、必ず役に立つ時がくる』

そんな言葉に乗せられて、あれよあれよという間に気づいたときにはこの状況。デュエリストという人種がいかにアグレッシブなのか

を知らなかった、竹丸の迂闊であった。どこか隣に立つ親友が遠くの存在に見えてきた少女にそれにしても、と糸巻がふと顔を向けた。

「竹丸ちゃん、よくデュエリストになるうだなんて思ったな。いや、もちろん歓迎はするさ。ただアタシが言うのもなんだけど、これまで口くなく目にあつてなかつたんだろ？」

その言葉は身も蓋もないが、それでも真実ではある。竹丸のデュエルモンスターズとの関わりが始まったのはごく最近、それもファーストコンタクトは学校への不法侵入者からの人質というトラウマ待たなしの役どころである。その言葉に、八卦も少し浮かれた気分を抑えて横目で親友の顔を見る。少女自身その点は気になっていたのだが、下手なことを言つてトラウマを刺激する可能性を恐れてなかなか聞き出せなかつたのだ。

しかし当の本人は意外なことに、その言葉に表情が曇るところかむしろその顔を赤らめた。

「それは、その……確かに今も、本当はちよつと怖いんですけど。でもこのカードたちを持っていると怖くないと言いますか、むしろ勇気が湧いてきて……」

「ふーん？まあいいさ、よくわからんがその様子なら大丈夫そうだな。

それと八卦ちゃん」

「はい、お姉様！」

「覚悟しなよ？初心者とのタッグだからって、アタシは一切遠慮しないぜ？」

「はい、お姉様！」

「大人気ないな」

寸分の迷いなくいい返事をする少女とは逆に、子供の初心者相手だぞ？と目で諫めてくる本源氏。しかし糸巻は何を頓珍漢なこと言つてやがる、と言いたいのを、あえてぐつと飲みこんだ。竹丸の実力は未知数だが、少なくとも八卦はすでに元プロとも互角以上に渡り合うだけの力をつけてきている。初めて出会った時から糸巻ですら一目置かざるを得なかつた天性のセンスとドロ―運に、唯一足りなかつた場数もこのところ急速にこなしている。すぐに本源氏も、子ども扱い

して舐めてかかってはそのまま押し切られることに気づくだろう。

その瞬間が見たい、という若干意地の悪い欲望にかられたせいで反論もせず黙ったままのパートナーを今の一言のせいで拗ねてしまったのかと解釈し、当の本源氏がやれやれと息を吐く。

「では、先攻1ターン目は俺から行こう。ルールは通常通りライフ、場、墓地の共有、攻撃できるのは2ターン目以降、手札誘発が使えるのは直前のターンプレイヤー。構わないな？」

「えっと、これとこれが私と八卦ちゃんです共有で……？」

「大丈夫ですよ、竹丸さん。ルールは大丈夫ですね？私も、タッグデュエルはまだ2回目なんです。お互い、楽しんでデュエルしましょう！」

「八卦ちゃん……うん、そうだね」

仲睦まじい友情に、なぜかダメージを受けた気分になる汚れ仕事の大人2人。気を取り直し、元プロ同士对学生コンビのタッグデュエルが幕を開けた。

「俺のターン。魔法カード、融合を発動。手札の光属性戦士族、天遊星カイキとそれとは属性の異なる闇属性戦士族、ファントムナイツ幻影騎士団ステンドグリーブを素材とし、融合召喚。堅牢なる盾、そして頑強なる矛。2つの力宿りし鋼鉄の闘士よ、最終防衛ラインより敵を通さず切り伏せろ！鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード！」

鋼鉄の魔導騎士―ギルティギア・フリード 攻2700

初手から本源氏が呼び出したのは、魔法使いのローブの上から戦士が使う鋼鉄の分厚い防具を組み合わせたという独自の格好をした魔導戦士。斧と剣を組み合わせたような格好の巨大な武器を地面に突き立て、まだ自分1人しかいないフィールドを睥睨する。

「まずは小手調べ。カードを2枚伏せ、ターンエンドだ」

おい、コラ爺さん。アンタ今のターン、絶対もつと展開できたらうが……このターンの動きをじっと見ていた糸巻はそんな言葉を辛うじて飲み込み、次のターンプレイヤーになったららしい八卦の方へと視線を向ける。これで後攻ワンキル決めてくるようならもうその時はその時だ、アタシは悪くないと腹を決めたのだ。

「私のターン、ドロロー！魔法カード、成金ゴブリンを発動。相手ライフを1000回復させ、カードを1枚ドロローします」

「そのデッキで成金？なかなか思い切ったもの入れたな八卦ちゃん、キーカードを早く集めたい気持ちはよく分かるがな」

本源氏&糸巻 LP4000↓5000

冷静な糸巻の分析の横で、彼女らのライフが増えていく。その引き換えに手にした1枚のカードを見て、少女の表情がほころんだ。

「では、行きますよ。E・HERO エレメンタルヒーロー ソリッドマンを召喚、そして効果を使います。手札からレベル4以下の仲間を特殊召喚です……来てください、私のエースモンスター！E・HERO クノスペ！」

E・HERO ソリッドマン 攻1200

E・HERO クノスペ 攻600

八卦の得意とする戦法、大地のHEROであるソリッドマンから同じく大地の力を持ち、植物の蕾を擬人化したかのようなHEROであるクノスペの展開。となると、すでにあのカードは手札に握っていることになる。相変わらず自身のコンボを通すという意味では絶好調の引きの良さに内心舌を巻く糸巻……そして案の定、彼女の予想通りのカードが勢いよく場に出された。

「そして相手フィールドにモンスターが存在し、私のフィールドに攻撃力1500以下のモンスター1体のみが特殊召喚されたこの瞬間。速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動します！私はこのクノスペを、更に可能な限り除外以外のあらゆる箇所から特殊召喚し……」

「本来なら俺も、俺のフィールドのモンスターの同名カードを可能な限り特殊召喚できる。だが俺のフィールドにいるのはエクストラデッキにしか2枚目のいないギルティギア・フリードのみ、よって特殊召喚は不可能か」

「さすが、お姉様のご友人。その通りです、そして行きますよ、私のクノスペたち！」

E・HERO クノスペ 攻600

E・HERO クノスペ 攻600

「さあ、ここからです！私も魔法カード、融合を発動！手札の闇属性H

ERROであるシャドー・ミスト、そして場の地属性HERROであるソリッドマンを素材とし、融合召喚。英雄の蕾、今ここに開花する。天照らす英雄よ咲き誇れ！融合召喚、E・HERRO サンライザー！」
今まさに地平線から現れて闇を裂く、燃え盛る太陽のように赤い鎧のHERRO。その力は味方の指揮を向上させ、さらに戦線を拡大させる。

「融合召喚に成功したサンライザーの効果にチェーンして、フィールドから魔法の効果によって墓地に送られたソリッドマンの効果を発動です。墓地からレベル4以下のHERRO、シャドー・ミストを守備表示で蘇生し、デッキからミラクル・フュージョンのカードを手札に加えます。そしてシャドー・ミストが特殊召喚に成功した時、デッキからチェンジ速攻魔法1枚を手札に加えられます。マスク・チェンジを私の手札に！」

「……っ、ちよつと待て糸巻、最近の子供ってのはみんなこうなのか!？」

「言わんこつちやない……ま、今の表情はなかなか傑作だったがな。考えてもみろよ本源氏さんよお、この子は七宝の爺さんの姪っ子だぜ？わかって甘く見てたんならどう考えてもアンタのミスだぜ。だから言つたら、アタシは遠慮しないって」

「次からはもう少しわかりやすいヒントをだな。ああすまない、俺からすることは何もない」

「では、サンライザーの効果です。このカードが存在する限り、私の全モンスターの攻撃力は私のフィールドの属性1種類につき200アップします。サンライズ・スクラメイジ！」

「八卦ちゃんのフィールドには、地、光、闇の3種類……!」

E・HERRO サンライザー 攻2700↓3300

E・HERRO クノスペ 攻600↓1200

E・HERRO クノスペ 攻600↓1200

E・HERRO クノスペ 攻600↓1200

E・HERRO シャドー・ミスト 攻1000↓1600

「八卦ちゃん、凄いい！」

「ありがとうございます、竹丸さん。さあ、バトルですよ！クノスペは自分以外のE・HEROの仲間がいる場合、相手プレイヤーにダイレクトアタックが可能です。3体のクノスペで連続ダイレクトアタック、必殺クノスペシャル！」

左右、そして空中の3か所にばらけて飛んだ蕾の英雄たちが、ギルティギア・フリードをすり抜けてその奥の本源氏へと一齐に飛び掛かる。そしてその背後からは、サンライザーがその金色の角から鋭い光線を放ち援護する。

「さらにサンライザーは、自身以外のHEROが戦闘を行う攻撃宣言時にフィールドのカード1枚を破壊できます。この効果でその伏せカードを……」

「ははは、ここまでやるか？もう笑うしかないな。なるほど、これは糸巻が警戒するわけだ。だがここからは、俺も本気を出させてもらう。トラップ発動、ファンタム・ウィング幻影翼。この効果によって俺のギルティギア・フリードはこのターン攻撃力が500アップし、さらに1度だけ破壊されない」

「攻撃力上昇と破壊耐性……ですが、クノスペの真価は直接攻撃。どれだけ相手モンスターが強大でも、プレイヤーを狙えば問題ありません」

「それが、問題あるのさ」

そう低く笑うと同時に、ギルティギア・フリードが動いた。自身の周囲を羽衣のように渦を巻いて包もうとしていた幻影の翼はその重たい得物の一振りによつてあつさりとは断ち切れ、その衝撃波は先ほどのビームのお返しとばかりにサンライザーへと向かう。回避など間に合うはずもなく、太陽の戦士が地に倒れ伏した。

「い、一体……!?!」

「惜しかったな。ギルティギア・フリードは1ターンに1度自身を対象に取る効果を無効にし、さらにフィールドのカード1枚を選んで破壊できる。そしてサンライザーが破壊されたことにより、当然その効果による強化も消える」

大型融合モンスターの攻防の裏で、クノスペ3体による連撃が本源

氏の体を打ち据える……しかしその勢いは、飛び掛かった瞬間に比べると明らかに勢いが落ちてきている。事実、与えられたダメージもその半分にはすぎなかった。

E・HERO クノスペ 攻1200↓600↓本源氏&糸巻（直接攻撃）

本源氏&糸巻 LP5000↓4400

E・HERO クノスペ 攻1200↓600↓本源氏&糸巻（直接攻撃）

（直接攻撃）

本源氏&糸巻 LP4400↓3800

E・HERO クノスペ 攻1200↓600↓本源氏&糸巻（直接攻撃）

（直接攻撃）

本源氏&糸巻 LP3800↓3200

「そんな……で、ですがクノスペは相手に戦闘ダメージを与えた時、攻撃力が100アップし、守備力が100ダウンします」

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

E・HERO クノスペ 攻600↓700 守1000↓900

「なら、せめてもう一太刀。今のサンライザーの破壊によって、私たちの確保していたエクストラモンスターゾーンには空きができました。速攻魔法、マスク・チェンジを発動です！」

期待しただけのダメージを与え損ねた少女の手が、手札の1枚……先ほどサーチしたマスク・チェンジへと伸びる。守備の姿勢をとったまま戦況を窺っていたシャドー・ミストが、その恰好と同じく漆黒の光を放つマスクを自らの顔に装着した。

「英雄の薨、今ここに開花する。暗黒の大輪よ咲き誇れ。変身召喚、レベル8……M・HEROマスクドヒーロー 闇鬼あんき！」

M・HERO 闇鬼 攻2800

「バトルフェイズ中に特殊召喚されたこの闇鬼は、このターンこのまま攻撃が可能です。ここは闇鬼の効果により、戦闘ダメージが半分となる代わりにダイレクトアタックをします」

M・HERO 闇鬼 攻2800↓本源氏&糸巻（直接攻撃）

闇鬼がその漆黒の鉤爪をふりかざし、ギルティギアの反応よりも素早くその背後に回り込む。そして振るわれたその右腕が、無防備な魔導騎士の背中ではなくその背後の本源氏を切り裂いた。

「あれ？でも八卦ちゃん、ギルティギア・フリードの攻撃力は2700。闇鬼の方が上だから、そっちに攻撃してもよかつたんじゃない？」

「ああ、それは……」

首を傾げる竹丸に、答えようとした八卦。だがそれよりも早く、ギルティギア・フリードの使い手である本源氏がにやりと笑った。

「その様子だと、闇鬼とギルティギアのもうひとつの効果はどちらも知らずに言ったな？初心者でライフアドよりボードアドの重視、それができるなら大したものだ。なかなか見込みがある……だが、今の場面においては俺でもああするだろうな。ギルティギア・フリードは自身が戦闘を行う際に1度、墓地の魔法1枚を除外することでその守備力の半分だけ攻撃力を強化する効果がある。そして、ギルティギア・フリードの守備力は1600だ」

「ええ。今の私の手には、残念ですが闇鬼の攻撃力を上げるカードはありません。ですから攻撃はできなかつたんですね。私はこれで、ターンエンドです」

「自分の使わないカードの効果まで……八卦ちゃん、凄いなあ」

素直に目を丸くする親友に、そのうち慣れるのでゆっくりでいいですよ、と苦笑する八卦。今すぐにもカードを引きそうな初心者少女を押し止めて、糸巻が一步前に入る。

「ま、次はアタシのターンだがな。しっかし爺さん、こりゃひでえな。もう半分まで割りやがって」

「……すまん。確かにお前の言うとおりだったな、なかなかどうして手は抜けない」

「だろー？さて、どうすつかね……ドローー！」

鋭い眼光で手札と今引いたカード、さらに本源氏の残した伏せカードを一瞥して、そこから可能な最善手を模索する。

「うし、決めた。覚悟しな八卦ちゃん、アタシ相手に防御札なしでターンを回したこと、後悔させてやるよ」

「お姉様……で、ですが、私のフィールドにはクノスペシャルの布陣が完成しています。他のE・HEROが存在する限り自身への攻撃を許さないこのカードが3体並んだことで、お姉様は闇鬼にしか攻撃できませんよ」

「ああ、だから全部ぶっ潰してやるよ。まずは下準備からだ、召喚条件はエクストラモンスターゾーンのモンスター1体、ギルティギア・フリードを左下のリンクマーカーにセット。リンク召喚、グラビティ・コントローラー！」

重装備の魔導騎士の姿が消えて現れたのは、重力を操る近未来的な白い全身スーツに身を包んだ軽装の戦士。これで糸巻は、そのマーカーの向く中央のメインモンスターゾーンにカードを置くことが可能となった。

「不知火の宮司を召喚、そしてその効果を発動！手札から別の不知火1体、妖刀―不知火を特殊召喚する」

不知火の宮司 攻1500

妖刀―不知火 守0

明るいオレンジ色の清掃に身を包む宮司が目の中の虚空に向かった真言を唱えると、どこからともなく浮かび揺らめいた明るい炎の塊から一振りの刀が生み出される。この効果によって呼び出された妖刀にはフィールドを離れた際の除外デメリットが発生するもの、今から糸巻のやろうとしていることに支障はない。

「カード借りるぜ爺さん、幻影騎士団ロスト・ヴァンブレイズ発動！宮司の攻撃力を800下げてレベルを2にし、さらにこのカードをレベル2の通常モンスターとして特殊召喚する」

「レベル2が、3体……！」

不知火の宮司 攻1500↓700 ☆4↓2

幻影騎士団ロスト・ヴァンブレイズ 守0

妖刀を呼び出した宮司がさらに真言を唱え続けると、先ほど輝いた明るいオレンジ色とは違ってかわって青白い炎の塊がもうひとつ燃

え上がる。その炎から呼び出されたのは、喪われもはや顧みる者もなくなつた名もなき戦士の鎧。

「3体のレベル2モンスター、不知火の宮司、妖刀―不知火、幻影騎士団ロスト・ヴァンブレイズの3体でオーバーレイ！いくさば戦場呑み込む妖のあやかし海よ、太古の覇者の記憶を覚ませ。エクシース召喚、バージエストマ・アノマロカリス！」

☆2＋☆2＋☆2＝★2

バージエストマ・アノマロカリス 攻2400

青い甲殻に巨大な鋏を持つ古代生物の海の覇者、糸巻のエースモンスターの一角。その1ターン目からの召喚に改めて本人の宣言通り一切の手加減をする気がないことを感じた八卦が、ごくりと小さく唾をのんだ。

「まずは1体、アノマロカリスの効果発動。オーバーレイ・ユニット1つを使い、カード1枚を破壊する。まずはクノスぺ、お前からだ！」

バージエストマ・アノマロカリス (3) ↓ (2)

アノマロカリスの周囲を漂う3つの光球のうち1つがその口元へと軌道を変えて吸い込まれ、力を解放したアノマロカリスが交差させた鋏をひと振りしてX字型の青い衝撃波を放つ。右端にいたクノスぺにその一撃が直撃し、寸断されたその姿が消えていった。

「クノスぺ……！」

「おろかな埋葬を発動。この効果でデッキのモンスター1体、牛頭鬼を墓地に。そして墓地に送られた牛頭鬼は墓地のアンデットモンスター1体を除外することで、手札からアンデットを特殊召喚できる。たつた今オーバーレイ・ユニットとして墓地に送られた不知火の宮司を除外し、手札の馬頭鬼を特殊召喚だ！」

馬頭鬼 攻1700

いまだロック効果の生きているクノスぺには攻撃できず、唯一攻撃できる闇鬼には肝心の攻撃力が届かない。一見何の意味もないような特殊召喚に竹丸が首を傾げるが、今何が起きたのかを理解した八卦の顔は強張つた。はじめからその狙いは、馬頭鬼の方ではない。

「このカードがゲームから除外された時、不知火の宮司の効果を発動。」

表側のカード1枚を破壊する、2体目のクノスぺも破壊！」

「ああっ！」

クノスぺの守りが失われ、もはや残ったのは効果を封じられたに等しい最後のクノスぺと闇鬼のみ。ペロリ、と糸巻が捕食者の舌なめずりをした。

「だから言ったら、後悔させてやるってよ。バトルだ、グラビティ・コントロールで闇鬼に攻撃！」

上空に重力を向けて垂直に飛び上がったグラビティ・コントロールラーが、たつぷりと飛んだ後に闇鬼の位置に次の重力を向けて自由落下によるハイキックをまっすぐに敢行する。上空を見上げてそれを迎え撃とうとする闇鬼だったが……両者が接触する寸前、2体のモンスターは姿はともに跡形もなく消え失せた。

「グラビティ・コントロールラーがエクストラモンスターゾーンのカードと戦闘を行う時、その戦闘を行う2体をデッキに戻す。これで邪魔者は消えた、やれ、馬頭鬼！アノマロカリス！切り裂け、抜刀乱舞カンプリア！」

斧を手にした馬の頭を持つ筋骨隆々の鬼と、太古の海の覇者による連携攻撃。重たい斧の一撃がクノスぺの体を両断し、間髪入れず振るわれた鋏の一撃が邪魔されることもなく通った。

「きやあああーっ!？」

馬頭鬼 攻1700↓E・HERO クノスぺ 攻700（破壊）

八卦&竹丸 LP4000↓3000

バージエストマ・アノマロカリス 攻2400↓八卦&竹丸（直接攻撃）

八卦&竹丸 LP3000↓600

「大逆転、だな。それに……いや、なんでもない。残りの手札2枚を全部伏せて、アタシはこれでターンエンドだ」

糸巻が若干謎めいた言葉と共にエンド宣言をしたことで怒涛の逆転を受けたターンが終わり、次のターンプレイヤーは竹丸。すでにライフはお互いに風前の灯火という初心者少女にはいささか厳しい状況で、恐る恐るカードを引く。

「わ、私のターン、です」

「竹丸さん！お姉様のバージェストマ・アノマロカリスはトラップカードをオーバーレイ・ユニットに持っているとき、あの破壊効果を相手ターンでも使うことができるようになります。まずはそれをどうにかして、自由に動けるようにしましょう」

「う、うん。装備魔法、リビング・フォツシルを発動します。私たちの墓地からレベル4以下のモンスター……えっと、八卦ちゃんのシャドー・ミストを選んで特殊召喚し、このカードを装備です」

注目の中で縮こまりながら、親友のアドバイスを受けて最初に竹丸が手に取ったカードは効果無効、攻撃力ダウン、除外デメリットと三重苦を抱えながらも貴重な装備魔法による蘇生ができるリビング・フォツシルのカード。それにより、先ほど墓地に送られたシャドー・ミストが場に蘇る。

E・HERO シャドー・ミスト 攻1000↓0

「……しゃーないな、アノマロカリスの効果発動。オーバーレイ・ユニットを1つ使って、蘇生前にリビング・フォツシルを破壊する」

「ならリビング・フォツシルのデメリット効果で、シャドー・ミストは除外されます」

バージェストマ・アノマロカリス(2) ↓(1)

誘導されていることは糸巻としても重々承知だったが、ここで効果を使わないという選択肢もない。融合、シンクロ、エクシーズ、リンク、あるいはアドバンス召喚や儀式のためのリリース。蘇生されたシャドー・ミストをどのように使うのかわからない以上、先手を打って潰すしかない。

しかしその時、竹丸がかすかに微笑んだ。眼鏡の奥の目に光るのは、安堵と同時に成功への喜色。

「魔法カード、三戦の才を発動します！相手が私のメインフェイズにモンスター効果を発動したターン、3つの効果から1つを選びますよ。私が選ぶのは、バージェストマ・アノマロカリスのコントロールをエンドフェイズまで得る効果です」

「……っ、案外やるじゃねえか」

アノマロカリスが向きを変え、その鍔を自らの主へと向ける。馬頭鬼との攻撃力の差は、700。

「バトルです。アノマロカリスで馬頭鬼に攻撃！」

バージェストマ・アノマロカリス 攻2400↓馬頭鬼 攻1700
(破壊)

本源氏&糸巻 LP1800↓1100

「最初の成金ゴブリンがなければ、もう残りライフは100……アタシも別に手を抜いた覚えはないんだが、それでもここまで追い込まれるとはねえ。アノマロカリスの効果を撃たせたうえでのコントロール奪取、いい戦術だ。仮にもアタシら元プロ相手に食らい付いてくるとは、初心者にしちやたいしたもんだよ……だが、三戦の才の効果はエンドフェイズまで。処理できないなら、アタシのアノマロカリスは返してもらうぜ。さあ、何かその手のカードはあるのかい？」

「う……カードを1枚伏せます。それとモンスターも1体セットして、ターンエンドです」

この状況で召喚できるようなリンクモンスター、あるいは上級モンスターは手元にはないのか。何もせずターンを終えたことで三戦の才の効果は消え、アノマロカリスが空中を泳ぎ再び主の元へと戻る。

「俺のターンだな。まずはアノマロカリスの最後のオーバーレイ・ユニットを使い、伏せカードを破壊する」

バージェストマ・アノマロカリス(1)↓(0)

三度放たれた斬撃の衝撃波が伏せられたカードを破壊する。しかし墓地に送られたそのカードの情報に目を通した時、本源氏が目を見開いた。

「サルベージ、だど？」

通常魔法、サルベージ。効果は単純明快、墓地に存在する攻撃力1500以下の水属性モンスター2体の回収。そんなものを相手ターンに伏せる意味があるとすれば、それはただひとつ。

「ブラフか……！」

糸巻が悔し気に吐き捨てる。彼女も本源氏も、元プロと遜色ない実力を誇る八卦ならばまだしも、よもやまだ初心者であるこの気弱そう

な眼鏡の少女がいきなりブラフなどという高等戦術を使いこなすとは思ってもいかなかったのだ。

もちろん、敗北を前に足掻く初心者が苦し紛れで適当に伏せただけという可能性もある。だがプロの目線からすれば、それはまずありえないことだった。なぜなら竹丸は前のターン、まずサルベージを真っ先に伏せたうえで思い出したようにモンスターを出したのだ。だからこそ、彼らは油断した。初心者が何よりも優先して伏せたカードならそちらが本命だろう、そう無意識のうちに思い込まされたのだ。

「一杯食わされた、か。だが、まだこちらの手が尽きたわけではない。糸巻、カードを借りるぞ」

「おうよ、アタシもそのつもりでわざわざ伏せてやったんだからな。これでさっきの借りは返してやるから、感涙にむせびアタシに感謝して使うこつたな」

「凄く使いたくなくなってきたんだが？まあいい、リバースカード、強欲で貪欲な壺を発動。デツキトップ10枚を除外し、カードを2枚ドロウする。墓地に存在するステンドグリーブを除外することで手札の幻影騎士団を特殊召喚し、さらにそのレベルを1つ上げることができる。ラギッドグリーブを特殊召喚し、さらにレベル4の幻影騎士団フラジヤイルアーマーを通常召喚」

「レベル4のモンスターが、2体……」

幻影騎士団ラギッドグリーブ 攻800 ☆3↓4

幻影騎士団フラジヤイルアーマー 攻1000

「レベル4の闇属性モンスター、ラギッドグリーブとフラジヤイルアーマーでオーバーレイ。2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚。堅牢なる門を閉ざす盾、頑強なる扉を守る矛。最終防衛ラインの守護神よ、絶対防御の鍵となれ。No.6 ナンバース 6！覇鍵甲虫マスター・キー・ビートル！」

巨大な手袋と破れた鎧によって生み出されるエクシーズモンスターは、つい先ほどの戦いにおいて使用されたレイダーズ・ナイトとはまた別のカード。黄金の外殻と鍵のような角を持つ、人間よりも巨大なカブトムシだった。

「そしてこのエクシード召喚時、ラギッドグローブの効果を発動。このカードを素材として呼び出された闇属性のエクシードモンスターは、召喚成功時に攻撃力が1000アップする効果を得る」

No. 66 覇鍵甲虫マスター・キー・ビートル 攻2500↓3500

「マスター・キー・ビートルの効果を発動。オーバーレイ・ユニット1つを使い、俺のフィールドからバージェストマ・アノマロカリスを選択。このカードがフィールドに存在する限り選択したカードは効果によつて破壊されず、さらにマスター・キー・ビートルが破壊される場合にはその代わりに選んだカードを墓地に送ることができる」

No. 66 覇鍵甲虫マスター・キー・ビートル (2) ↓ (1)

黄金のカブトムシが角の先から金の光線を放ち、それを浴びたアノマロカリスもまた黄金のオーラを全身から立ち上らせる。火力と物量で一気に押し潰しに来た本源氏に対し、相対する竹丸の表情は読み切れない。かなり緊張していることは隣の八卦から見ても明らかだったが、かといつて絶望しているわけでもない。そもそも八卦自身竹丸のデッキ内容も、この伏せられているモンスターの正体も知らないのだ。少なくとも後者に関してはタッグを組んでいる彼女ならばその中身を見ることも容易なのだが、この追い込まれつつある状況ではそれを知るのが怖い気がして、どうも手を伸ばす気になれなかった。無論このまま負けてしまったとしても、それで親友を責めるつもりは全くないのだが。

「バトル。バージェストマ・アノマロカリスで攻撃！」

黄金のオーラを纏ったアノマロカリスが、凶悪な鋏を伏せカードの上から勢いよく叩きつける。

バージェストマ・アノマロカリス 攻2400↓?? 守1500

(破壊)

確かな手ごたえと共に、爆発。そして重い爆砕音の瞬間飛び散ったのは、緑がかった銀色の飛沫だった。壁といわず天井といわず飛び散ったそれは、意志を持つかのようにひとりでにマスター・キー・ビートルの足元へと結集していく。その光景に、八卦だけは既視感があっ

た。

「まさか竹丸さん、あの伏せてたモンスターって……」

驚きのあまり目を丸くして親友の方へと向き直る八卦に、大人しい彼女にしては珍しい大輪の笑みで竹丸が首を縦に振った。

「はい！私のセットモンスター、グレイドル・アリゲーターの効果を発動します！私のフィールドのこのカードが戦闘か魔法の効果で破壊された時、相手モンスター1体の装備カードとなってそのコントロールを貰いますよ。私のところに来てください、マスター・キー・ピートル！」

すっかり甲虫の体の下に潜り込んだ銀の液体が、殻に守られておらず柔らかい腹やその関節からその体の中へと入り込んでいく。がくがくと小刻みに全身を震わせた後、その黄金の目の色がぐるりと銀色に塗り替えられた。その様子を誇らしげに見つめながら竹丸は、あの日このカードの元の持ち主、遊野清明と交わした話を思い出していた。

あれは彼が退院したほんの少し後、ケーキを買うためと理由をつけて様子を見に行った時だったか。自分もデュエルがしたいということや、そのための心構えについてはお見舞い中にも何度か話をして……1度はちようど糸巻さんと鉢合わせて、悪いことをしているわけでもないのに思わずパニックになってしまったこともあった。ともかく、もう少し突っ込んだ話を聞いて貰ったのだ。

『なるほど……グレイドルの使い方を見せて欲しい、と』

『は、はい』

『いやー、僕が言うのもなんだけど……本当にこのテーマでいいの？割とやってることは正義の味方どころか、どー見ても悪魔の化身とか地獄の使者方面だよ？』

腕組みしてそんなことを、しかしその内容とは裏腹に自分のカードへの愛情のこもった声音で言う彼に、珍しく一生懸命になって自説をぶつけたときのことを思い出すと今でも顔が赤くなる。あの学校でのタッグデュエルの時、自分を助けてくれたのは他ならぬ彼とグレイドルカードだったこと。そしてそれを見たことが、デュエルモンス

ターズのプレイヤーに一步を踏み出してみようと思ったきつかけであつたこと。相手モンスターの力を利用して戦うのは立派な戦術であり、自分の目には理知的で格好いいものに映つたこと。

今になつて思い返しても、なぜあそこまで自他ともに認める内気な自分があそこまで必死になつたのかは彼女自身にも分からない。グレイドルの動きがそれだけ気に入つたのかもしれないし、あるいは冗談交じりとはいえ自分を助けてくれたヒーローの自虐的な言葉に、それを否定したいという衝動がこみ上げてきたのかもしれない。いずにせよしばらく何か悩んだ後で、おもむろに彼は自分のデッキを取り出した。その中から何枚ものカードを一枚ずつ丁寧に抜き出し、最後にそつと親指で撫でてからそのカードの束を差し出した。

『あの、これは……？』

『昔、僕の親友は一枚のカードをある人に貰つて、こんなことを言われたらしいんだ。ラッキーカードだ、これが君の所に行きたがつている……そしてそいつはそのカードと一緒に戦い続けて、いろいろ辛いこともあつただろうけど、それでも最後には世界でも指折りの実力を持つヒーローになつた。もしかしたら僕も同じことを、今まさに生まれようとしているデュエリストの背中を押すためにこの場所に来た……いや、この場所自体に引き寄せられたのかもね』

かすかに微笑んで昔を懐かしむような声に背中を押されるように、そつとそのカードをひっくり返す。

『グレイドル、カード……』

『光の結社とわーわーやつてた時だから、もう6年ぐらいの付き合いだっけ？これまでありがとう、皆。今日からは、この新しいデュエリストの力になつてあげて……それと、竹丸ちゃん。使い方とか動かし方の前に、まずこれだけは覚えておいて。デュエリストがカードを、そしてカードがデュエリストを互いに最後まで信じることができれば、必ずデッキは応えてくれるってことを、ね』

『はいーありがとうございます、ずっとずっと大事にします！』

そして、今である。せつかくだからとちよつとしたいたずら心が芽生え、この出来事については八卦にも黙つていた。目を丸くして驚い

たその顔を見ていると、どうやらそんな努力も無駄ではなかったらしい。

「……魔法カード、モンスターゲートを発動。俺のフィールドからアノマロカリスをリリースしてデッキをめくり、最初に出た通常召喚可能なモンスターを特殊召喚する。1枚目、幻影騎士団シャドーベイル。2枚目、闇の誘惑。3枚目、置換融合。4枚目……沼地の魔神王。よってこれを場に出す」

沼地の魔神王 守1100

「そして、今墓地に送られた置換融合の効果を発動。墓地のこのカードを除外して同じく墓地の融合モンスター、ギルティギア・フリードをエクストラデッキに戻し、カードを1枚ドロウする」

マスター・キー・ビートルとアノマロカリスの攻撃力には、ラギツドグロブによる増強込みで1100もの差が開いていた。ほぼ確定していたかに思われた敗北の盤面を首の皮1枚で変化させ、最後の抵抗とばかりにドロウまで行う。この土壇場の異様な粘り強さ、どんな状況にあってもただ負けることなく、ぎりぎりまで制を次のターンに託すため戦い続ける力。これこそが、彼を長年「最終防衛団長」との二つ名をほしいままにさせてきた理由である。

そして引き抜かれた最後のドロウカードを、表情ひとつ動かさず場に伏せる。

「カードを伏せ、ターンエンド」

誰も口にはしないが、たったひとつの明確な事実だけは初心者の方丸ですら痛いほどに理解していた。次のターンで、全てが決まる。

「ありがとうございます竹丸さん、後は私にお任せください。私のターン、ドロウです」

このデュエル大詰めの場面においては、ほんのわずかな読み違いすらも死を招く。心配そうな親友に虚勢を張り、カードを引く……今のドロウでハーピイの羽根帯カードを引きつけたのだが、あいにくその願いも届かなかった。

しかし少女の手には、先ほどのターンで倒れたサンライザーが最後に遺した1枚がある。

「魔法カード、ミラクル・フュージョンを発動！」

「チェーンして永続トラップ発動。召喚制限―パワーフィルター！」
パワーフィルター……このカードが存在する状態で特殊召喚されたモンスターがすべて攻撃表示となり、そのターンの攻撃を強要されるカード。このタイミングでの発動に嫌な予感が八卦の胸をよぎるも、発動されたミラクル・フュージョンは止まらない。

「やるしかないなら、やってやりましょう！墓地に存在するクノスベ2体を素材として除外し、融合召喚！英雄の蕾、今ここに開花する。龍脈の大輪よ咲き誇れ！来てください、E・HERO ガイア！」

大地の名を持つ黒い巨体の英雄が、金色の甲虫と並び立つ。その足元から鋭い地割れが沼地の魔神王の元へと走り、大地を通じてそのエネルギーが吸収されていく。

「ガイアが融合召喚に成功した時、相手モンスターの攻撃力の半分を自分のものとして吸収します」

沼地の魔神王 攻500↓250

E・HERO ガイア 攻2200↓2450

「そして、マスター・キービートルの効果発動！最後のオーバーレイ・ユニットを使い、ガイアに効果破壊耐性を与えます」

No.66 覇鍵甲虫マスター・キー・ビートル(1)↓(0)

再び放たれた黄金の光線が、ガイアの全身を金のオーラで包む。本当はこれでもまだ不安は残るが、パワーフィルターが存在し手札にアドバンス召喚できるモンスターが存在しない以上、どこかで腹をくくって攻撃しなければいけないのも確か。

大きく息を吸い、ゆつくりと吐く。きつと正面を向いたときには、すでに少女の顔から躊躇いは消えていた。

「バトルです！ガイアで沼地の魔神王に攻撃！」

「糸巻、もう1枚も使わせてもらうぞ。トラップ発動、戦線復帰。俺の墓地のモンスターを守備表示で特殊召喚する、甦れ天融星カイキ」

1ターン目に融合素材として墓地に送られていた、体中に矢を突き立たせ、それでもなお戦場へと繰り出す修羅の渴望を持った荒武者。

天融星カイキ 守2100

「そしてカイキの特殊召喚に成功した時、500のライフを支払うことで戦士族の融合召喚が可能となる。俺が選ぶのはこのカイキ自身、そして融合素材の代用モンスターとして扱える沼地の魔神王！」

「おつ、爺さん本気だね。ついにあのカードを出すのかい？」

「確かにまだ粗削りだが、ここまでの素質を持つ相手だからな。それぐらいしないと失礼というものだろうか？」

そう言っている間にもカイキ、そしてドロドロに溶けてまったく別のモンスター……中華風の出で立ちをした偉丈夫の形を模していく沼地の魔神王がさらに空中で混じりあい、異形の人型へと変貌していく。

「戦場に轟け、修羅の咆哮。天地を下し冥府を裁く、三面六臂の軍神よ。最終防衛ラインより、覇者たる頂へ軍を導け！融合召喚、霸道星シユラ！」

それは紛れもなく人型、しかし明らかに異形の存在。首のあるべき場所には逆三角形を形作るように位置する3つもの面がそれぞれ2つずつの目で戦場を見下ろし、その体からは左右2本、計4本もの太い腕が伸びる。手にした武器もまた大まかにはかつての得物たる槍の形こそしているものの、ずっしりと重量のある膨らんだ両端を持つその形状はむしろ棍のそれに近いという歪なバランスを保っている。それこそが軍神、霸道星シユラ……本源氏の持つ、隠し玉たる戦士の姿だった。

霸道星シユラ 攻0

「シユラの効果を発動！バトルフェイズに1度だけ相手の全モンスターの攻撃力を0にする、天地滅星の儀！」

シユラがその棍を掲げるとその先端から目も眩むばかりの光が放たれ、ガイアとマスター・キー・ビートルの力がその光の中へと吸い取られていく。しかしマスター・キー・ビートルはまだしも、パワーファイターの呪縛を受け続けているガイアはふらつきながらもその両腕を叩きつけることしかできない。

E・HERO ガイア 攻2450↓0

No.66 覇鍵甲虫マスター・キー・ビートル 攻3500↓0

「……ガイアでシユラに攻撃、コンチネンタルハンマー……！」

そう言うしかない。ミラクル・フュージョンを発動した時点で、その結末はもはや確定していたのだから。そして棍から放つ光を収めたシユラが、改めてガイアの一撃をがっしりと受け止める。

「シユラの更なる効果を発動。モンスター同士が戦闘を行うダメージ計算時、それぞれの攻撃力はレベルの200倍だけアップする。天地凱星の儀！」

お互い攻撃力が0となった関係上、レベルの差がそのまま戦闘の結果に直結する恐るべき効果。ガイアのレベルも6と決して低いわけではなく、この状況下においても1200の数字は確保できる。

しかし、修羅の渴望はその遥か上に行く。最上級レベルを持つ融合モンスター、霸道星シユラ。そのレベルの数値は……12。

E・HERO　ガイア　攻0↓1200（破壊）↓霸道星シユラ
攻0↓2400

八卦&竹丸　LP600↓0

「うう、すみません竹丸さん……あと一步のところで、私が軽率だったせいで……」

「そ、そんなことないよ！むしろ、私の方が八卦ちゃんの足を引っ張っちゃって……」

長かったタッグデュエルが終わり、お互いに向かい合ってぺこぺこと頭を下げ続ける少女2人。すたすと近寄った糸巻が、両者の頭を掴んで無理矢理に直立させる。

「はい、そこまでだ。デュエル歴もアタシらの比にならないぐらい短い、それも即席タッグで10年以上も最前線にいたアタシらをあそこまで追い込めたんだ。いつまでもそんなしみつたれた反省会開いてないで、もつと胸張ってドーンと構えてな」

「お姉様……」

「糸巻さん……」

「振り返りは確かに大事だが、それがあら探しになるぐらいならやら

ない方がマシだ、つてのがアタシの持論でな。まあなんだ、まだまだこれからなんだから、そんなに気負わなくてもいいってことだ」
「はー」

相変わらずのいい返事に満足したところでふと視線を感じ振り返ると、にやにやと笑う本源氏と目が合った。互いにデツキを引つ張り出してきやいきやいとガールズトークを始めた少女たちを残し、煙草に火をつけつつそちらへと距離を詰める。それに合わせて数歩下がりはしたが、笑みを引つ込める気はないらしい。

「……んだよ、文句でもあんのか？」

「いいや。ただ、昔と比べて随分と丸くなったと思ってな」

「アタシが？」

糸巻がしかめっ面で煙を吐くと、対照的に本源氏のにやにや笑いはさらに深くなる。

「とぼけるな。本来ならこのデュエル、お前のターンの時点で終わらせることもできただろう？」

「さて、何のことやら、だ」

口ではとぼけながらも、その視線は鋭く少女2人の方を向いている。しかし当の本人たちはいまだデツキ談議に花を咲かせており、糸巻と本源氏の話が聞こえている様子もない。同じものを確認した本源氏が、ゆつくりと腕を組んで壁によりかかった。

「とぼけるな、俺のカードのことだぞ。アノマロカリスでのダイレクタアタックが通った時、俺たちの墓地にはまだ幻影翼があった。あのカードは一時的な破壊耐性と火力をモンスターに与えるほかに、墓地から除外することで墓地の幻影騎士団1体を蘇生する効果がある。あの時俺たちの墓地には既に、攻撃力1300のステンドグリーブのカードが存在していた。あの流れで蘇生効果を使い、追撃を仕掛けていればそれで終わりだったはずだ」
「……」

凶星だった。どことなく気まずい沈黙を、本源氏がまた破る。

「お前ほどのデュエリストが、それを見落とすなんてことがあるはずがない。だがあえてそれを見送り、元々このデュエルを始めるきつか

けになったあの4人目のプレイヤーまで順番を回した。そんなまともな感性があったとは、本当に丸くなったものだ」

「……なあ、ちよつと待て。昔のアタシ、そこまで偏屈だったか?」

「ははは、何を言う。俺の記憶の中のお前なら、迷いなく削りきったあげく『悪いなあ、だけど現実つてもんは厳しいんだよ』などのたまつていたな」

「うーん、いや、そうか?」

その言葉に糸巻も深く煙を吸い、吐き出し、たつぷり数分間かけて現役時代の自分の言動を思い返してみた。今よりとんがっていたことも、何かと敵を作りやすかったことも否定はできない。しかし、そこまでのことをやるかと問われれば……。

「……ま、アタシもそれだけいい女になったってことにしといてくれ」
ほぼ間違いない、過去の自分ならそれぐらいのことは平気でやっていただろう。しづしづそう結論付け、誤魔化すように携帯灰皿に残り短くなった煙草を突っ込んだ。

「なら、そのいい女にひとつ情報をやろう」

「あー?」

眩しそうに目を細め、少女2人を見つめる本源氏。ちようどどちらかが冗談でも言ったのか、カードを片手に楽しそうに笑いあっていたところだった。

「俺たちが裏で戦ってる間にも、ちゃんと表の世界でも新世代のデュエリストは育っていた。そう思うと、急に『BV』だなんだとやっていることが馬鹿らしくなってきたな」

「……気づくのが遅いんだよ、爺さんや」

「まあそう言うな、それと、まだそう年でもない」

よほど面白いのか、まだくすくすと笑う少女たちにつられたように微笑を洩らし、本源氏が口を開く。そこからもたらされた情報は、彼女の捜査に極めて有用なものだった。

ターソン32 鉄砲水と古代の叡智

心地よいエンジン音。波を蹴立ててまっすぐに進みつつ、それでも常にわずかに揺れる船体。そして見渡す限り一面に張った雲のせいで鉛色となつた空に海、海、海。

八卦たちとのタツグデュエルから一夜明け、糸巻は小さなモーターボートで海に出ていた。本当は昨日のうちに出了かったのだが、ボートを借り受けるための手続きで多少難航したのだ。先日のデュエリストフェスティバルの際にはまだ涼しい程度で済んでいた風は、あれからさらに深まった秋に海上という場所も相まって、寒風へと変わり彼女の肌から容赦なく体温を奪っていく。

無論そんな時期に彼女が海に出たのは、季節外れのクルージングを楽しむためではない。目だけは絶えず何の変哲もないように見える海面へと走らせ、スピードを落とすことなく海面を爆走しながら彼女は、昨日のデュエル後に本源氏から聞いた話を思い返していた。

『これが何かわかるか、糸巻?』

『何って……馬鹿にしてんのか?海図だろ?それも、この右端がここ
の港だな。この海岸の形は見覚えがある』

いきなり携帯を取り出し、小さな海図を目の前に投影する本源氏。突如として始まったクイズに意味が分からないながらに即答した糸巻へと重々しく頷くと、おもむろに手を伸ばして海図のある箇所に向けて印をつける。

『よし、なら話が早い。お前が探している今回のヤマ、そして俺たちの切り札であるプラントは、今はこの位置にある』

『……』

なんてことなく口にされたその情報に、さすがの糸巻も言葉を失つた。これは本当の情報なのか?そんな無意味な質問で時間を無駄にするほど、彼女と本源氏の仲は浅くない。それゆえに、この男が嘘をついていないことは即座に理解できたのだ。

『俺が……いや、俺たちが昨日を向いている間に、いつの間にか明日の方を見られる次の世代が育つてて、しかも実力はじきに俺たちのレベ

ルなんて追い越すことになる。恥ずかしい話だがな、糸巻。俺はそんなこと、この13年間考えたこともなかったんだよ』

遠い目をして少女2人を眺め、古傷をぼりぼりと指で搔いて付け加える。どこか疲れたような、燃え尽きたような笑みを浮かべ、こう自分の言葉を締めくくった。

『俺たちはもう、過去の遺物になりつつある。少なくとも、これからはそうなっていく。ははは、これでもずっと一線を張ってきたつもりだったんだがな。だがそう考えると、この計画もこれ以上進めるのがなんだか馬鹿らしくなってきたな。お前がそれを潰してくれるというのなら、それも悪くない』

『……自分でやれ、馬鹿。隠居するのは勝手だが、立つ鳥跡を濁さずつていい言葉が世の中にはあるんだぜ』

『老兵は死なず、ただ消え去るのみとも言うぞ。もうひとつ言うとな、なんだか今のデュエルは疲れたんだよ。楽しかったが、最後にシユラを融合召喚したあの瞬間に俺の中で、なにか決定的なものが燃え尽きた気がしてな。だが悔いはない、あの子供たちが最後の相手でよかったよ。お前の言うとおり、俺はもう老人だったんだな。なら、後はもうフェードアウトしていくのが最後の仕事というわけだ』

「……つたく、辛気臭せえ爺さんだ。そんな柄でもねえくせによ」

思い出したくない部分まで思い出してしまった後悔に小さくぼやいて首を振り、はためいていたコートを体に巻き付ける。風の冷たさもさることながら、最後に本源氏が浮かべた弱々しく燃え尽きたような、しかし穏やかな笑みを思い出して無性に腹が立ち、なんでもいから体を動かしたくなかったのだ。しかしあの笑みの何に対しこれほどまでに苛立つものを感じるのか、糸巻自身にもはつきりと答えを出すことはできなかった。

そして、その時間もなかった。先ほどまで曇天とはいえ視界は良好、水平線がくつきりと見えていた海面に白いもやが出てきたとみるや、みるみるうちに視界が乳白色の霧に遮られてきたからだ。同時に持ち込んだコンパスがぐるぐると無茶苦茶な回転を始め、GPSの映像にノイズが走り何も見えなくなる。

『あのプラントには、「BV」電波塔の特大サイズがある。あの辺の海にはそれを使って何体かのレベル9シンクロモンスター、ミスト・ウォームを实体化させてあるはずだ。それが出す迷いの霧に遮られて、衛星写真やドローンでも見つかることはない。ただ逆に言えば、その霧が出てきた場所の近くにプラントはある。あの霧は方向感覚が乱されるから簡単に見つかるとは思わないほうがいいが、場所の大まかなヒントぐらいにはなるはずだ』

霧の中を進みながら、そつとスピードを落とす。暗礁が起きるような海域ではないが、出発前に受けた警告が蘇ったのだ。

『油断するな、糸巻。遅かれ早かれお前がプラントに辿り着くことは、巴も……あるいは俺たちの上も、どちらにせよとつくに織り込み済みのはずだ。歓迎の人員を割られる可能性は高いぞ』

『はっ、なら三角の旗振って先導でもしてもらおうかね』

糸巻はいつだって強気な女ではあるが、決しておろかな女ではない。おろかな埋葬はよく使う。本源氏の前ではいつもの不敵な憎まれ口を叩いたものの、その警告の重要性は理解している。視界の閉ざされた霧の中で神経を張り詰め、極力音を殺してどこから何が来ても対応できるように少しずつ進んでいく。

そして、その警戒態勢が功を奏したのだろう。ごくわずかな異音が聞こえてきた瞬間、なにか考えたりその方向を確かめるより先に糸巻の両腕はモーターボートに組み付き、ほぼ反射的に舵を右に切っていた。船体が横倒しになりかねない勢いで急なカーブを描くと、直後足元の海が大きく揺れた。何かが浮かんできたわけではないところを見ると、魚雷のたぐいか。敵は、海中から仕掛けてきていた。

「ええい、熱烈歓迎ありがとよっ！」

聞こえないだろうとは思いつつも一応怒鳴りつけ、第2、第3の攻撃に備えるためジグザグにボートを走らせる。すでに居場所がばれているのならばこそそそする必要もないと再び加速したその真後ろで、またしても水柱が上がる。

「ごんの……！」

右、左、右、右、正面からくる、減速……一気に加速。魚雷の浮上

する音は、モーターの爆音に打ち消されて聞こえない。にもかかわらず糸巻が次々に襲い来る攻撃をどうにか回避し続けていられるのは、ひとえにデュエリストとして散々鍛えられた勝負勘のたまものだった。

海面上の孤軍奮闘は、いったいどれだけ続いたろうか。当然時計に目を通す暇もなく右に左にと舵を回していくうちに、ふと彼女の脳裏を嫌な考えがよぎった。この調子で、このボートの燃料はいつまで持つだろうか？燃料計……駄目だ、その前に右にカーブ。次はまた右、また加速……ほんの1瞬たりとも、よそ見をするような余裕はない。

しかし現実問題として、こんな無茶な運転をしていては燃料切れも時間の問題でしかない。そうなったら最後、先ほどから執拗に自分を狙うこの爆発がこんなボートなど真つ二つにしてしまうだろう。波しぶきとは違う冷たい汗が首筋を伝うが、それをぬぐう余裕もない。

じりじりと追い詰められていく彼女の視界の端で、ほんのわずかに光が見えた。罨の可能性もあるが、このままではどうせおしまいだ。その光の正体も確認せず、思い切りそちらの方向へと舵を切る。一気に加速する後ろで爆発を感じながら次の瞬間、視界を防いでいた霧を突っ切って大海原のど真ん中へと飛び出していた。

「クソッ、振り出しかよ……！」

1瞬これで偶然にもプラントに辿り着けたのかとも期待したが、そこまでうまく話もなく。迷いの霧の外に出たことで再び位置を指し示したGPSとコンパスで現在地が霧に飛び込んだ地点から数キロ程度離れた場所であることを確認し、案の定残り少なくなっていた燃料にも目を通す。ここからどうするにせよ、一度出直す必要があるらうだ。

「……で、僕？」

「おう。鼓は帰っちゃったし鳥居もアレだし、アタシらの世代が残したゴミの始末に次の世代の八卦ちゃん達なんて間違っても引つ張り出せないしな。他の人員なんて本部に申請してうだうだ会議やって

……なんての待ってたらそれこそ手遅れだ。その点アンタなら腕もたつし、アタシにや想像もつかない不思議な技だつてできるだろ？頼むよ、1人どうにかしてくれりや後はアタシでもどうにかできる。バイト代出すからさ」

再び家紋町の地を踏んだ糸巻が真っ先に向かったのは、町中のとあるケーキ屋。厨房の奥からエプロン姿で顔を出した少年、遊野清明を半ば強引に引きずり出してこれまでの経緯を簡単に説明し、協力を要請する。

正直なところ糸巻は、この説得にはある程度時間がかかると踏んでいた。何せ危険度は未知数、おまけに清明自身には彼女の手助けをする義理はない。しかし本人も口にしたように今更新しい人員を要求するのはあまりにも非現実的であり、彼女1人ではどうにもならないのは先ほどの邂逅が証明している。たとえどれだけ渋られようと、ここで妥協は許されない。そんな覚悟を持つての来店であった。

それだけに、こともなげな彼の返事には喜ぶより先に拍子抜けした。

「そりゃまあ、面白そうだしいいけどさ。え、危険？いやまあ、これまでもっとヤバいところも多かったし今更……」

そう言つてなぜか遠い目になる少年は、見た目よりも急にひとまわりほど年を取っているように見えた。これまで、の内容がほんの少し気になった糸巻だが、聞いたところで頭が痛くなるような話しか出てこないだろうとも予想がついたのでこの件についてのこれ以上の追及はやめておく。理解も想像も追いつかない世界の話に対しほいほい手を伸ばすには、彼女は大人になりすぎた。35年間生きてきたこの世界、自分たちの世の中だけで手いっぱいなのだ。代わりに右手を差し出すと、ほわほわという擬音がよく似合う笑顔と共に握り返される。

「ま、頼むぞ」

「よしきた。バイト代、忘れないでよね」

対する清明の顔からは、抑えきれない好奇心が透けて見える。たつた今糸巻が感じた自分の限界など、まるで考えたこともないような

顔。能天気なアホ面と言ってしまうのは簡単だが、それがどこか眩しくも思えた。

しかし、それは今やるべきことではない。それ以上の感傷は振り切って、即席タッグは再びモーターボートへと乗り込んだ。1度辿り着いた場所ゆえに、霧の出始める場所までも最初よりは早く着くことができる。

「始まったぞ、頼む……」

ぞ、と言いかけたところだとぶん、とかすかな水音がボートの後部から聞こえてきた。サムズアップする右手だけが海面から突き出ていたが、それもすぐに黒い水底へと沈んでいく。あとは勝手にやる、ということだろう。

この水の下に誰がいるのかは定かではないが、先の強襲時にあそこまでしつこく追いかけてきたところを見るとおそらく歓迎役はあの1人だけ、そう糸巻は見立てていた。もし他にも誰かいるのであれば、成すすべなく逃げ回っていた先ほどの彼女をさらに追い詰めに来なかった理由がない。

「後は、アタシがうまいことやるだけか」

呟いて1メートル先も見えないほどの濃霧、あたり一面を覆いつくす迷いの霧を睨みつける。加速するモーターボートが、その中に消えていった。

海に飛び込んだ瞬間、体の感覚が切り替わるのを感じた。ごく当たり前の陸上仕様から、水中仕様へ。僕に命をくれたシャチの地縛神、チャクチャルさん固有の加護。ダークシグナーの力を発揮することで、僕は水中を自在に動き回って呼吸をし、あるいは水面を歩くこともできる。

どんどん沈みながらも海流に揺らめく服を覆うようにして、灰色の地に紫色の幾何学模様が入ったフード付きローブが生成される。僕自身には見えないけれど既にこのローブの下の体にも無数の同じ模様が走って、両目は黒目と白目がひっくり返って紫に染まっているこ

とだろう。海底に辿り着いたときには、僕の姿はすっかり地縛神官
フアツシヨンになっていた。

『考えてみれば、こうしてマスターと海に潜るのは初めてだな』

僕よりも数段呑気なチャクチャルさんの声が、頭の中に響く。今回の僕の仕事は、上を爆走する糸巻さんの援護。この海の中から何か仕掛けてきてるやつを探してぶちのめす、非常にわかりやすくいい。場所は海底、それに上空は曇り空ということもあって辺りは暗いけれど、まあ何も見えないほどではない。例えばそう、背後から飛んできた魚雷らしき細長い飛翔体、丸まったポスターほどの大きさのそれを識別できる程度には。

「危なっ!？」

水中特有の浮遊感に体を躍らせ、大きく海底を蹴つての水中3回転飛び。飛び上がった真下を通り抜けた小さな魚雷がそのまま真っすぐ飛んでいったのを確認し、それがやってきた方向へと向き直る。改めて目を凝らす必要は、もうなかった。そこにいたのは、強烈なライトの光で海中を照らす小型の潜水艇。そのガラス張りになった正面からは、逆光で顔は見えないものの1人の人影がこちらを覗いていた。あんなモンスターはこれまで見たことがないから、恐らくあれは本物の潜水艇なのだろう。

……なんかもうこの世界に来てから、猫も杓子もカードの実体化だ。精霊の世界とはまた違う感覚に、正直どれが本物でどれが実体化……『BV』なのか、境目が分からなくなってきている。

そんなことを考えていると、潜水艇の上部からメガホンらしきものがせり上がってきた。何か喋りたいらしいけど水中でメガホンなんて使えるだろうかと心配したのもつかの間、大きなお世話だと言わんばかりに神経質そうな男の声が聞こえてきた。

「糸巻が釣れたかと思ったら、なんです君は。海底に、生身で？なんのカードを使って潜り込んだのかはわかりませんが、デュエルポリスの人材難も著しいようですね。どこのどいつとも知れぬ馬の骨まで駆り出さなければいけないとは、敵ながら嘆かわしい」

『カードの実体化という点では、まあ間違っではない……のか？な

んにせよよかったなマスター、勝手に勘違いしてくれたおかげで面倒な説明が全部省けたぞ』

わかりやすい挑発に、僕にしか聞こえない茶々を間髪入れず差し込んでくるチャクチャルさん。地縛神という肩書からは想像もつかないほどにポジティブな言葉に思わず笑ってから拳を打ち鳴らし、左手の腕輪に組み込まれた意匠を押しつけてデュエルディスクを展開する。

「デュエルディスク。見たこともないモデルですが、確かにそうですね。つまりこの私、徳川学三郎とくがわがくさぶろうにデュエルを売ろうと、そういうことですか？」

少しづつこちらに降り注ぐライトの光に目が慣れてきて、潜水艇からこちらを見下ろす男の姿も次第にとらえられるようになってきた。そしてようやく拝めたその顔は、スカした言葉遣いや神経質そうな声色から思い描いていたイメージ通り。角ばった眼鏡に常に何かにいらいらしているようなツンとした顔つき、そして七三分けの髪。何もかもが予想通り過ぎて、また吹き出しそうになったぐらいだ。

と、そこでまたチャクチャルさんの声が出た。

『いまだマスター、軽く挑発を入れておけ。あの手の輩は自分より下と見た相手と戦うことを嫌う傾向が強い半面、煽り耐性もないから少しからかうとすぐ乗ってくる。ここまできてデュエルをしない、なんてことになってみる、それこそ面白い草だ』

「……えーと……徳川、学三郎？悪いけど、テロリストの人材難も著しいみたいね。どこの誰かもよくわかんない馬の骨まで駆り出さないと駄目だなんて、敵ながら嘆かわしいってやつかね」

咄嗟に振られたものだから、たつた今言われたことを叩き返すぐらいしかできなかつた。僕ですら聞き流せたこんな挑発にいい年した大人が乗ってくれるだろうか、そんな不安は潜航艇の中の徳川とやらの顔を見上げた瞬間吹き飛んだ。間違はなく効いていることを確認し、こんなちよろいので大丈夫なんだろうか、といらぬ心配までしうになる。しそうになるだけだけど。おーおー、顔真っ赤にしちやつてまあ。

「知らない？この私を!?人呼んで『ロストテクノロジスト』の徳川学三

郎をですよ!？」

当然、異邦人の僕が知るわけない。それにしても二つ名持ちということは、この人も元プロか。やがて怒りをどうにか抑えたのか、息を荒くしながらも徳川とやらがデュエルディスクを構える。同時に潜水艇が海底へと着地し、煙のように砂を巻き上げた。腰を据えてやりあおうってわけか、いいじゃない。それなら、デュエルと洒落込もうか。

「デュエル!」

「先攻は貫った、僕のターン」

海中でカードを引き抜くが、これでカードが駄目になるようなことはない。この服だって、陸に上がればすぐに乾く。うちの神様は、そういう細かい気配りのできる神様なのだ。だから僕は、それを全面的に信頼する。

「ライトハンド・シャークを通常召喚!そしてこのカードの召喚に成功した時、デッキからレフトハンド・シャークのカード1枚を手札に加えることができる」

ライトハンド・シャーク 攻1500

体の上部にきっかり5本、まるで爪のようなひれを生やした青い鮫。魚族では珍しいアドバンテージを稼げる効果によって、僕の手札にその対となる左手の名を持つ鮫が加わる。無論これだけではシンクロもエクシーズも不可能だけど、僕の手札にはこのカードがある。「そして水属性モンスターが僕の場に存在することによって、このカードは特殊召喚できる。おいで、サイレント・アングラー」

サイレント・アングラー 守1400

そして現れる、チョウチンアンコウのような姿のモンスター。これでレベル4モンスターが2体揃ったから、このままバハムート・シャークをエクシーズ召喚することができる。さらにその効果で先攻1ターン目から餅カエルを出してやれば、相手にとって鬱陶しいこと極まりないだろう。

しかし、そこで潜水艇の内部から動きがあった。

「特殊召喚、しかしチェーンブロックを組まないものでしたか。なら

ば、今使いましょう！手札より増殖するGを捨て、効果発動！このターン君がこれ以上の特殊召喚を行うたび、カードを1枚ドロウできます」

「うー……」

思わぬところから入った横槍に、2体の魚を見てしばし考える。まず大前提として、この2体をこのまま放置するのはさすがにリスクが高い。しかし当初予定していたバハムート・シャークからの餅カエルを呼び出すコンボは、必然的に2枚のドロウを許してしまう。まだ相手のデッキもわからない中、その枚数はあまりにも大きい。

特殊召喚を0にしたくはない、しかし2回行うのもまた危険が過ぎる。となると、次善の策をとるしかない。間を取って1回だ。

「……水属性のレベル4モンスター、ライトハンド・シャークとサイレント・アングラーでオーバーレイ。そして2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築。三千世界を張り巡れ、海原に紡がれし一筋の希望！エクシーズ召喚、ランク4！ナンバーズNo.37、希望織竜スパイダー・シャーク！」

☆4＋☆4＝★4

No.37 希望織竜スパイダー・シャーク 攻2600

リンク2と迷った末に僕が選んだのは、僕にとつて初めてのエクシーズモンスターでもある1枚。希望を織り紡ぐ竜、スパイダー・シャーク。その純白の体が滑らかに海中を走り、赤い水晶体が海中を暖かな光で照らす。だが、それだけじゃない。ここでリンク召喚ではなくエクシーズを選んだことには、もうひとつ大事な意味がある。

「水属性モンスターのみを素材としたエクシーズ召喚のオーバーレイ・ユニットになったライトハンド・シャークの効果。この時エクシーズ召喚されたモンスターは、戦闘によって破壊されない効果を得るよ」

「しかし増殖するGの効果により、ここで1枚ドロウしますよ」

元より戦闘には強いスパイダー・シャークに、その強みを補強するような戦闘破壊耐性。まだ不安がないわけではないが、やはりこれ以上の展開はできない。

「……ターンエンド」

「私のターン。後悔させてあげますよ、この私の名すら知らずにここに来たことを。先史遺産^{オーバース}ゴルディアス・ユナイトを召喚し、効果発動。この召喚成功時に私は手札の先史遺産を特殊召喚し、さらにこのカードのレベルをそのモンスターに合わせるができます。レベル4、先史遺産トウспа・ロケット！」

先史遺産ゴルディアス・ユナイト 攻300 ☆3↓4

先史遺産トウспа・ロケット 攻1000

岩石製の巨大な結び目のような彫刻が、海底の砂を巻き上げて浮上する。その全身が鈍い光を放つと、それに目印としたかのようにはるか上の水面から、同じく岩石製のロケットのような飛翔体がその隣に着陸した。手札にわずかに視線をやるが……いや、まだだ。先史遺産、カードショップ七宝でぼんやり眺めてた時に何気なく見た僕の記憶が正しければ、あのデッキにこのカードを使うタイミングは今じゃない。

「効果を発動します、トウспа・ロケットのね。このカードが場に出た際にデッキ、またはエクストラデッキより先史遺産1体を墓地に送り、そのレベルまたはランクの200倍だけモンスター体の攻撃力をエンドフェイズまでダウンさせるのです。私が選ぶカードは、当然君のスパイダー・シャーク。そしてこちらから選ぶカードは先史遺産クリスタル・ボーン、レベル3！」

トウспа・ロケットの前面に光が収束し、放たれた怪光線がスパイダー・シャークの肌を灼く。苦悶の唸り声に、僕まで胸が痛くなった。

0 No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク 攻2600↓200

「さて、下準備はこんなところですかね。君のような無名の者に私のエースの一角を見せてあげるのだから、せいぜい感謝しなさい。レベル4の先史遺産、ゴルディアス・ユナイトとトウспа・ロケットでオーバレイ！2体のモンスターでオーバレイ・ネットワークを構築、エクシード召喚。絶えて久しき人類の英知よ、無知蒙昧なる輩にその偉容の片鱗を示せ！No. 36、先史遺産―超機関フォーク||ヒュー

ク！」

☆4+☆4||★4

No. 36 先史遺産―超機関フォーク||ヒューク 攻2000

重い地響きを立て、海底が揺れた。それとほぼ同時に、突然の浮遊感。何が起きているのかとあたりを見渡そうにも、この衝撃で大量の砂が海中に巻き上げられてほとんど何も見ることができない。

「……チャクチャルさん！」

『半径10メートルほどの円状に、マスターたちの足元が浮かび上がっているな。この形からして人工物……おや、建物らしきものまで見えてきたぞ』

「建物？超機関フォーク||ヒューク……なんだ、そういうことか」

「どうやら君にも理解できたようですね。その通り、この海底に浮上した都市こそが私のモンスター、フォーク||ヒューク。そして、そのモンスター効果を発動。相手モンスター1体の攻撃力を0にする……無論、オーバーレイ・ユニット1つを使う必要こそありますがね」

No. 36 先史遺産―超機関フォーク||ヒューク(2) ↓(1)

No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク 攻1800↓0

ようやく収まってきた砂煙の向こう側に、チャクチャルさんの指摘した古代都市の建物が僕にも見え始める。幾年もの歳月にさらされて滅んで久しかったはずのその機関には再び光が灯り、あたりをぐるりと取り囲む石造りの堅牢な屋根にバチバチと激しいプラズマが走る。

警告の声など、間に合うはずもなく。海底の古代都市の中央で、次の瞬間に周囲から一斉に放たれたエネルギー波がスパイダー・シャークの全身を縛り付けた。先ほどの比ではない怒りと苦悶の声なき声が、水中を震わせる。

「ははは、どうですかフォーク||ヒュークの力は！」

「スパイダー……ここしかない！フィールドのモンスターが効果を発動したこの瞬間、手札から幽鬼^{ゆき}うさぎの効果が発動。このカードを捨てて、フォーク||ヒュークを破壊する！」

気泡を纏って僕の隣に現れた、銀髪赤目の妖怪少女。これが、温存

していた僕の切り札。もつと早く、それこそゴルディアス・ユナイト召喚の時点で破壊することもできたのだが、それだとこのエクシーズ召喚を確実に止められた保証がない。しかも僕は事前情報で、「先史遺産」がエクシーズテーマであることを知っていた。エクシーズモンスターはその性質上、オーバレイ・ユニットがないと100%の力を出し切れないことが多い。ならばあえて召喚を待ち、エクシーズ素材ごと墓地に叩き落としてやる方が効果的だと踏んだのだ。

海中を銀色の風となって、滅びた都市の石畳を駆ける幽鬼うさぎ。その道中で振り回される鎌の一撃が年月の重みに耐えてきた堅牢な建物を切り裂き、周りの海水をもとせずに揺らめく鬼火が機関の中央部で爆ぜ、なにか動力部に致命傷を与えたらしい。あちこちで小規模な爆発を引き起こしながら、浮かび上がったフォーク||ヒュークがゆつくりと撃墜されて元の海底に沈んでいく。

「さあ、(自慢の)オーパーツはまた歴史の闇に逆戻り。次は何を見せてくれるね、ええ?」

「おのれ……!」

消えていくソリッドビジョンの都市を横目に、ひと暴れしたあげく大物を潰して満足げな幽鬼うさぎがびよんびよんと足取り軽く僕の元へと帰ってくる。こちらが掲げた手にジャンプからのハイタッチを決め、その姿が気泡となって消えた。ハイタッチにも付き合ってくれるとは、いつもクールぶってるあの子にしては本当に機嫌がいいらしい。

そして、それとは対照的にこめかみをひくつかせ、首に青筋立てて切れかけているのが潜水艇の徳川だった。からかいがいがあるが面白く言えば面白いけど、あいにく今はそんな気分じゃない。糸巻きさんがどうしてるかも知りたいし、このまま終わってくれるならそれが一番いいんだけども。

しかし残念ながら、というべきか、そうでなきゃ面白くない、というべきか。またしても怒りを呑み込んだらしい徳川が、次の手札へと手を伸ばした。

「私のデツキをただの【先史遺産】だと思ってもらっては困ります。し

かしここまでの流れに関しては、心から称賛してあげましょう。少々私の方も、無名の馬の骨だからと手を抜きすぎましたからね」

「負けるやつは大体みんなそう言うのさ、手を抜いてたってね」

「では、そのジンクスを打ち破る最初の男としてこの私が名を残してみましよう……魔法カード、化石融合ーフォツシル・フュージョンを発動。融合召喚を行う代償として私の墓地の岩石族モンスター、先史遺産クリスタル・ボーンと君の墓地のレベル4以下のモンスター、幽鬼うさぎを除外する……！」

「化石融合……！」

脳裏をよぎる、かつてデュエルアカデミアにいた男の姿。だけど目の前の男は、彼とは違う。わかっている。

そして墓地のモンスターが素材となり、母なる海へと産み落とされたのは恐竜と人間の骨格がないまぜとなったかのような骨の体に骨の鎧を着こみ、骨の槍を手甲に装着した戦士の姿だった。

「かつて栄華を極めた騎士の末裔、薄まり穢れどもその高貴な血の片鱗で敵を貫け！融合召喚、新生代化石騎士 スカルポーン！」

新生代化石騎士 スカルポーン 攻2000

「バトルだ。当然、スカルポーンでスパイダー・シャークにな」

槍を掲げたスカルポーンが海底をその両足で力強く踏みしめ、いまだエネルギー波の影響で動きの鈍いスパイダー・シャークへと迫る。そしてスカルポーンは、モンスターに対し毎ターン2回攻撃の能力を持つ。フォーク||ヒュークで相手モンスターを無力化し、化石融合の爆発力でライフを削る……あのデッキのコンセプトは、おそらくそういうことだろう。だけど、僕だつてただやられるためにはるばるこんな海の中まで来てやったわけではない。

「モンスターの攻撃宣言時にスパイダー・シャークの効果発動、オーバー・レイン！オーバーレイ・ユニットを1つ使い、相手モンスター全ての攻撃力を1000ダウンさせる！」

No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク (2) ↓ (1)

新生代化石騎士 スカルポーン 攻2000 ↓ 1000 ↓ No.

37 希望織竜スパイダー・シャーク 攻0

清明 LP4000↓3000

衛星のように周りを飛んでいた光球がスパイダー・シャークの口元に向きを変え、まともに動かない体でそれに食らいついたスパイダー・シャークがその力を一時的に解放する。噴出する純白の糸が四方八方に張り巡り、スカルポーンの体を、槍を絡めていく……しかし、その動きを完全に封殺するには至らない。直後、スパイダー・シャークが受けた槍の一撃と同じ痛みが僕の体にも降りかかる。

「ぐ……い」

腹に穴をあけられたような感覚。無論穴なんてできていないけれど、痣ぐらいはできてもおかしくない。歪んだ表情を見下ろして、徳川が僕よりもよっぽど歪んだ笑みをこぼす。

「裏目に出ましたねえ、その戦闘破壊耐性。おかげで私のスカルポーンは、もう1度君のそのモンスターに攻撃ができます」

新生代化石騎士 スカルポーン 攻1000↓No. 37 希望
織竜スパイダー・シャーク 攻0

清明 LP3000↓2000

その言葉通り、振るわれる二の矢が再びスパイダー・シャークを打ち据える。次に打ち据えられたのは前ヒレの部分だったからか、こちらにも腕が痺れるような痛み。でも、まだライフは残っている。もしスパイダー・シャークの効果が生きていなかったらきつかり4000ダメージでジャストキルを受けていたことを考えると、十分以上だろう。

「まだまだっ！」

「せいぜい頑張りなさい、その悪あがき。ターンエンドですが、その前にカードを1枚伏せさせてもらいます」

スパイダー・シャークに降りかかった二重の弱体化は、そのどちらも期限がターン終了時まで。ようやく復活した純白の狩人が、音もなく海中に浮かび上がり僕からの指示を待つ。

No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク 攻0↓2600

新生代化石騎士 スカルポーン 攻1000↓2000

「僕のターン。2回も殴ってくれちゃって……今度はこっちの番だ、

ツーヘッド・シャークを召喚！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200

僕が呼び出したのは、上下2つに分かれた口を持つ青い鮫。下級アタッカーの基準にも満たない攻撃力しかないこのカードだが、その攻撃性能でこれまでも幾度となく切り込み役を買って出てくれた頼れる子だ。

「このままバトル。スパイダー・シャークでスカルポーンに攻撃、さらに最後のオーバーレイ・ユニットを使いもう1度効果を発動！スパイダー・トルネード！」

No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク(1)↓(0)

No. 37 希望織竜スパイダー・シャーク 攻2600↓新生代

化石騎士 スカルポーン 攻2000↓1000

徳川 LP4000↓2400

渦を巻く海流を身にまとい、スパイダー・シャークがスカルポーンへと迫る。再び放つ粘性の高い糸がその動きを確実に鈍らせ、鎧の間、無防備な首筋へと捕食者の牙が深々と食い込んだ。

「ちいっ……！」

吹き飛ばされるスカルポーンに、潜水艇の中でダメージがフィードバックしたらしい首を押さえる徳川。いや待て、吹き飛ばされたスカルポーン？消滅していないということは、戦闘破壊が発生していない？

『アレは……なるほどな。なんてことはない、あの伏せカード。あれはメタバースだ、マスター』

「私は今の攻撃宣言時にトラップカード、メタバースを発動していました。デツキからフィールド魔法1枚を手札に加えるか直接発動することができます。私が選んだ1枚の名は、岩投げエリア。1ターンに1度自分モンスターとの戦闘破壊を、デツキの岩石族に背負わせることのできる優れたものです」

チャクチャクさんの言葉を裏付けるかのように、フィールドゾーンにいつの間にか置かれていたカードをこちらに見せつけてくる徳川。なるほど、あれで戦闘破壊を防いだってことか。

「そして、それだけではなく。私がデツキより墓地へと投げた、今の戦鬪の身代わりとなってくれた岩の名は風化戦士^{ウエザリングソルジャー}。このカードが墓地へと効果で送られた時、デツキから化石融合またはその名がテキストに記されたカード1枚を手札に加えられる。手札に通常魔法、タイム・ストリームを」

「逆進化のカード……だとしても、攻め込まない理由はない！岩投げエリアの効果はもう使えない、ツーヘッド・シャークで追撃！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓新生代化石騎士 スカルポーン 攻1000（破壊）

徳川 LP2400↓2200

「ふっ、やはり名も知れぬ野良犬程度の知識しかないようですね。知らないようですので教えて差し上げますが、化石の名を持つ融合モンスターがフィールドで破壊された時、墓地の化石融合は手札に戻すことができますのですよ」

「そっちこそ、知らないようだから教えてあげるよ。ツーヘッド・シャークは、1ターンに2回の攻撃ができる！それもモンスター限定なんてちやちなもんじゃない、制限も条件もない混じりっ気なしの2回攻撃さ。ツーヘッド・シャーク、ダイレクトアタック！」

ツーヘッド・シャーク 攻1200↓徳川（直接攻撃）

徳川 LP2200↓1000

「ひ、ひいっ!」

青い弾丸のように突っ込んできたツーヘッドの頑丈な顎に強かに噛みつかれ、さすがに壊れこそはしなかったもののがっしりと牙を受けた潜水艇のガラスにひびが走る。忘れがちだけどここは海の底、もし本当に噛み破りでもしたら徳川はえらいこと、などと形容するのとはばかられるようなことになる。

……さすがに目覚めが悪いし、そうなたら海上まではどうにかしてあげよう。そう決めてエンド宣言をすると、どうやらあちらさんはパニック状態でちらりと見えた僕の表情がよほど気に食わなかったらしい。潜水艇を器用に操って崩れかけていたバランスを取り戻し、一時的に恐怖を上回ったらしい怒りがパニックを押しつけて表に出

る。

「ええい、なんですその顔、その目！まったくもって腹立たしい。先ほどよりもさらに強く、後悔させてあげますよ！私のターン、ドロー！メインフェイズ開始時に魔法カード、貪欲で無欲な壺を発動。カード2枚をドローする代償として私の墓地の種族が異なるモンスター3体、昆虫族の増殖するG、岩石族のゴルディアス・ユナイト、機械族のフォーク||ヒュークをデッキに戻し、さらにこのターンにバトルフェイズを行う権利を支払います」

便利なドロースース、しかしこのターンバトルを行えないという制約の意味は大きい。戦闘によって相手ライフを削りきる化石融合は、このターン動けないからだ。

「スカルポーンの効果を墓地から発動、自身を除外することで2枚目のタイム・ストリームを手札に加えます……おや、どうやら君にも、このカード3枚の持つ意味は理解できるようですね。化石融合—フォッシル・フュージョン！私の墓地の岩石族、トウスパ・ロケットとあなたの墓地のレベル4以下のモンスター、ライトハンド・シャークを除外します」

「想定内！この瞬間、手札から儂無みずきの効果を発動！このターンのメインフェイズとバトルフェイズ中に相手が効果モンスターを特殊召喚するたびに、その攻撃力分だけ僕はライフを得ることができ

る」
「なるほど？まあ、どうぞご自由に。2体目のスカルポーンを融合召喚」

新生代化石騎士 スカルポーン 攻2000

清明 LP2000↓4000

妙に余裕たっぷりなその態度が気にかかったが、みずきちちゃんの発動を止めるようなカードが出てくるわけではないようだ。どこか嫌な予感がぬぐえないものの、ともあれ僕のライフが一気に初期値まで回復する。

「タイム・ストリーム。この効果により、今より前の世代の化石モンスターを化石融合の効果として融合召喚します。ただし、その世代の化

石モンスターをリリースする必要はありますがね。凋落の一途を辿りし騎士の直系、その誇り高き血統の輝きを見せつけるのです！中生代化石騎士 スカルナイト！」

中生代化石騎士 スカルナイト 攻2400

清明 LP4000↓6400

一見するとそれは、人間の骸骨が鋼の剣と岩の盾を持ち、恐竜を模した兜をはじめとする鎧マントを身に着けたような姿の騎士。しかしその膝当てからのぞく両足の形は明らかに強靱な肉食恐竜のそれであり、マントに隠れて見づらいがその背面からは確かに尾の骨が伸びている。

「タイム・ストリーム！」

そしてまた、呼び出された直後だというのにスカルナイトの姿が変化する。体軀はさらにひとまわり大きくなり、骨しかなかったその体には肉が蘇っていく。といってもこれまでのくすんだ茶色から本来の色であろう黄金の骨製へと本来の姿を取り戻した鎧の覆う面積も同時に増えていったため、結果的にはその顔しか拝めなかったのだが。背中のマントも姿を変えて金と赤のトリケラトプスのエリマキのような装飾へと変わり、そこに立っていたのはもはや最初のスカルポーンとは比べ物にならない、いかにも王者の風格漂わせる騎士だった。

古生代化石騎士 スカルキング 攻2800

清明 LP6400↓9200

「……随分回復させてくれるじゃないの、有難いね」

「もつと差し上げますよ、そんなライフが嬉しいのならね。スカルキングをリリースし、先史遺産ソル・モノリスをアドバンス召喚。さらに魔法カード、おろかな埋葬を発動。デツキから^{デステニーヒーロー}D―HEROディアボリックガイを墓地に送り、その効果を発動します。このカードを除外し、同名カードを特殊召喚ですね」

先史遺産ソル・モノリス 攻600

D―HERO ディアボリックガイ 攻800

清明 LP9200↓10000

ディアボリックガイ。かつて何度か戦った相手の印象が強いカードだけど、それはそれ、これはこれだ。そしてそれより重要なのは、この特殊召喚によってついに僕のライフが5桁の大台に突入したという事。何を狙っているのかは依然としてわからないままだけれど、ここまで特殊召喚を躊躇わないとなるともはや不振を通り越してうすら寒いものすら感じてくる。

「レベル6のソル・モノリスと、ディアボリックガイでオーバーレイ。これこそ古代の英知の結晶。人の身に余る神の遺産よ、その名のもとに裁きの鉄槌振り下ろしなさい！エクシース召喚、ランク6！No. 6、先史遺産アトランタル！」

☆6＋☆6＝★6

No. 6 先史遺産アトランタル 守3000

清明 LP10000↓12600

またしても海底が揺れ動き、地の底に眠っていた「それ」が目覚めます。しかしそのサイズは、先ほど歴史の闇で覚めない眠りについたフオークⅡヒュークとは比べ物にならないほどのものだった。山ひとつですら丸々その肩にはまるほどの、腰から下が海底に埋まっているにもかかわらずその頭が海面上につき出ないことの方が不思議になってくるほどの巨人。

巨人が腕を振る……ただそれだけで海水が渦を巻き、危うく足元をすくわれそうになった。あまりといえばあまりのスケールの大きさに小さく毒づくが、これでもまだ終わらせるつもりはないらしい。

「そろそろ、締めに取り掛かりますよ。R U Mーヌメロン・フォース。私のフィールドのエクシースモンスターをランクが1つ上で種族の等しいカオス体へとランクアップさせ、さらにフィールドで表側表示のカード全ての効果を無効にします」

「……！」

表側表示のカード全て。それはつまり、ライトハンドによって直接付与されたパイダー・シャークの戦闘破壊耐性が消えるということだ。徳川の岩投げエリアもその影響を受けるはずだが、もはや戦闘破壊を気にするような盤面ではないということだろう。

そして先ほどの比ではない地響きと共に、アトランタルの体が不気味な発光と共に脈動する。やがてその姿はオレンジ色の光の塊となり、光の中で巨人の姿はさらに大きく、より戦闘に特化したものへと……拳は肥大化し、木々の生い茂る緑の山は常に炎吹き出す活火山となり、全身から溢れ出るエネルギーは溶岩となって体表を覆い、それでも抑えきれないほどのエネルギーを持つ溶岩がまるで生きている鞭のように噴出し……これまで以上の異形の巨人へと、移り変わっていった。

「原初の英知に神の御業が降りるとき、無知と無力の罪を犯した文明を焼き滅ぼす巨人の怒りが解き放たれる。世界に終末を刻むのです、カオス・エクシーズ・チェンジ！ランク7、カオスナンバーズCNo.6！先史遺産カオス・アトランタル！」

CNo.6 先史遺産カオス・アトランタル 守3300

清明 LP12600↓15900

「さて。最後に魔法カード、死者蘇生。甦りなさい、スカルクキング」

化石の名を持つ王者が、カオス・アトランタルの体から噴出する溶岩の橋を伝ってひよいひよいとフィールドに降りてくる。腰の鞘から引き抜いた大剣を構え、こちらにその切っ先を向ける……しかしまた特殊召喚、しかも死者蘇生か。バトルのできないこのターンにまであのカードを使う理由、儂無みずきのことを忘れたかのような特殊召喚の乱発……駄目だ、想像もつかない。

古生代化石騎士 スカルキング 攻2800

清明 LP15900↓18700

「では、そろそろお楽しみみの時間に取り掛かりましょうか。私も正直気分が高揚しますよ、いくら野良犬相手とはいえ初めての経験ですからね、それだけ膨れ上がったライフを一度に削り取るのは」

「……？」

言葉の意味は分からないけれど、その異様な雰囲気から少なくとも徳川が嘘をついているわけではないことだけは理解できた。しかし何が飛び出してくるか見当もつかないでいる僕の前で、カオスアトランタルがゆつくりとその手をこちらに……いや、正確には僕のフィー

ルドのスパイダー・シャークへと伸ばす。その腕といわず手のひらといわず、無数に噴出した溶岩の鞭が天から降り注ぐ火の雨のごとくスパイダー・シャークへと一斉に襲い掛かった。

「ああっ!？」

「カオス・アトランタルの効果を発動。1ターンに1度、相手モンスターを攻撃力1000アップの装備カードとして自身に装備できるのですよ」

CNo. 6 先史遺産カオス・アトランタル 攻3300↓4300

海中で回転し、急浮上と急速潜航を巧みに使い分け、さらには咄嗟に噴出させた純白の糸を盾にして……しかし、そんな抵抗も長くは続かない。回避されても防がれても減じることなくその数と勢いを増す溶岩の鞭は、やがてスパイダー・シャークを縛り付けてゆつくりとカオス・アトランタルの胸部へと引きずり込んでいく。いったいどれほどのパワーが込められているのかゆつくりと、しかし確実にその体が吸い込まれ、その上からとどめとばかりに溶岩が降り注ぎ……ようやく噴火が収まったそこには、石像と化したヒレの先端と頭部。それに背中の一部だけを露出したスパイダー・シャークの成れの果てが、ただ埋め込まれているだけだった。

「スパイダー・シャーク!」

「なんだ、これが返して欲しいですか? いいでしょう、返してあげますとも。カオス・アトランタルの更なる効果を発動、パニッシュメント・ゲート! コストとして支払うのはこのカードのオーバレイ・ユニット3つ、及び自身の効果によって装備したNo. の全て。これらを墓地に送ることで、100に書き換えるのさ……君のライフをね!」

『18600の「削り」だと……!?!』

CNo. 6 先史遺産カオス・アトランタル(3) ↓(0) 攻4300↓3300

さしものチャクチャルさんも、こんな桁違いな数値の変動は驚愕に値するものらしい。無論、僕だってそうだ。効果ダメージでも戦闘ダメージでもなく、数値そのものの書き換え。18700のライフを、

100に。そんな無茶苦茶な効果が最後に控えていたのなら、儂無みずきの効果すらも通用しない。ライフを回復して守りを固めた気になる僕の姿は、徳川の目からすればさぞかし滑稽に見えたことだろう。

思わず後ずさる僕の前で、カオス・アトランタルの火山に溶岩の鞭が一斉に吸い込まれる。不気味な沈黙、死刑宣告までのわずかな間のち、山が文字通りに噴火した。海水による冷却をもともせず、赤熱する火山弾が、僕をめぐって無数に降り注ぐ。

『さすがに荷が勝つな。下がっているマスター!』

言うが早い。僕の頭上、迫りくる火山弾の雨との間に半透明の巨大なシャチ、本来の姿を現した地縛神 Chacu Chailhua が立ちはだかった。その全身から濃い紫色のオーラが立ち上ると、こちらに向けて直撃コースで降り注いでいた火山弾が見えない壁に誘導されたかのように途中で向きをわずかに変えて数メートルほど離れた場所に着弾した。それでも視界が真っ白に染まり、爆音で何も音が耳に入らなくなる。砂煙と耳鳴りがようやく収まった時には、あたり一面に月面もかくやというほどにクレーターだらけの惨状が広がっていた。これを完全に捌ききるとは、さすがは守りと権謀術数の地縛神。

清明 LP18700↓100

「わお……ありがとね、チャクチャクさん」

『少し過保護だったとは思いますが、まあ念のためな』

照れ隠しなのかつれない言葉を残し、また引つ込んでいくチャクチャクさん。一方こんなことをしてかしてくれた徳川はというと、どうやら僕がまだちゃんと2本足で立てていることにご立腹だった。どうやらあまりの噴火の激しさに、うちの神様が直撃を防いでくれた様子は向こうから見えなかったらしい。

「なんだなんだ、どうしてまだびんぴんしている？全く不愉快なことこの上ない、せっかく人がいい気分でライフを書き換えたというのに！カオス・アトランタルがモンスター効果を使ったターン、君はあらゆるダメージを受け付けない。そしてバトルを行うことも不可能、な

「ぜなら貪欲で無欲な壺を使ったからね。よって、私はターンエンド」なるほど、それなりのデメリットはあるということか。さすがにあの効果の使用後に戦闘ダメージまで与えられたら、さすがの僕でも勝負を投げたくなる。

「だけどターンが回ってくる限り、僕はまだ戦える。僕がデッキを信じていれば、デッキもそれに応えてくれる。これに関しては、たとえ世界を越えようとも絶対に変わらない。」

「僕のターン、ドロロー！サルベージを発動、墓地から攻撃力1500以下の水属性、儂無みずきとサイレント・アングラーを手札に。そして同じく魔法カード、強欲なウツボを発動！手札から水属性モンスター2体、レフトハンド・シャークと儂無みずきをデッキに戻して、カードを3枚ドロローする」

手札増強のコンボによって、僕の手札はサイレント・アングラーを合わせて3枚。徳川には手札も伏せカードもないから、もう何か妨害や牽制が飛んでくる心配はない。そして場には先のターンを生き残れたツーヘッド・シャーク……よし、これならいける。このデュエル、僕の勝ちだ。

『ああ、先ほどやりたい放題してくれた礼だ。見せてやれマスター、本物の理不尽というものをな』

「水属性モンスターのツーヘッドが存在することでサイレント・アングラーを特殊召喚し、そのままレベル4のツーヘッド・シャークと、サイレント・アングラーでオーバーレイ！千夜一夜の切なる願いに、錨を上げよ救済の方舟！エクシーズ召喚、ランク4。No.101、サイレント・オナズ・アーキナイト！」

☆4+☆4=★4

No.101 S・H・—Ark Knight 攻2100

「Ark Knight……しかし、私のカオス・アトランタルは守備表示。一方そのカードで狙うことができるのは攻撃表示の特殊召喚されたモンスター、スカルキングのみですね。無駄な足掻きには見えませんがね」

「言つてな、アークナイトの効果発動！オーバーレイ・ユニット2つを

使いスカルキングを自身のオーバーレイ・ユニットに吸収する、エターナル・ソウル・アサイラム！」

No. 101 S・H・—Ark Knight (2) ↓ (0) ↓
(1)

純白の方舟、アークナイトの船体から飛び出した数本のアンカーが、化石騎士の王者の手足と腰をその鎖で締めあげるそのまま巻き上げ機構によってアンカーが格納されると、そこに結びつけられたスカルキングもまたアークナイト内部へと強制収容された。

これで、まずは1体。そして、次はカオス・アトランタルの番だ。「といっても、正攻法なんて使う気はないけどね！魔法カード、妨げられた壊獣の眠り！フィールドのモンスターをすべて破壊し、デツキから壊獣2種類を1体ずつ互いの場に攻撃表示、かつ強制攻撃のデメリットを付与した状態で特殊召喚する！」

「私の……カオス・アトランタルを……！」

「海の底から出てくるのは、昔から大怪獣って相場が決まってるもんさ。古代都市にはやっぱり、歴史の闇で大人しくしてもらおうよ！」
力強い大渦、壊獣の眠りを妨げるエネルギーの塊が、クレーターだらけになったあたりの砂をまたしても巻き上げる。破壊の嵐はカオス・アトランタルのみならず、僕の場合のアークナイトさえも巻き込もうとして……。

「いまだ、アークナイト！このカードが破壊される場合、そのオーバーレイ・ユニット1つを身代わりにできる返すよ、スカルキング」

No. 101 S・H・—Ark Knight (1) ↓ (0)

再び放たれたアンカーが、そこら中に開いたクレーターの縁に引つかる。これにより僕の方舟は破壊の嵐に吹き飛ばされることを免れたが、カオス・アトランタルはそうもいかない。巨体の内側から溢れ出る無尽蔵かに思われたそのエネルギーも絶え間なく押し寄せる海水によって強制的に冷やされ、奪われ、急激な温度の低下によって脆くなったその体が次第に崩れていく。最初はほんの砂程度、しかしその全身に入り巨体を蝕むひび割れは加速度的に広がった。落ち行く砂は石になり、その石のかけらもまた、より大きな岩に。巨人の体

が、ゆつくりと崩れ落ちていった。

「さあ、おいで！雷撃壊獣サンダー・ザ・キング、粘糸壊獣クモグス！」

雷撃壊獣サンダー・ザ・キング 攻3300

粘糸壊獣クモグス 攻2400

3つの首を持つ帯電した雷龍は僕のフィールドへ、陸地で構える巨大な蜘蛛の姿をしたもう1体の壊獣は徳川のモンスターゾーンに。僕の可愛い壊獣が、フィールドを一気に埋める、

しかしこれが理不尽とはえらい言われよう、大変遺憾である。

「さて、大分僕好みのフィールドになってきたわけだけど」

「ひっ！」

ぎろりと睨みつけると、潜水艇のガラス越しに徳川が身を固くする。もつとも、それも無理はない。ここまで盤面が出来上がってしまったばもはや敗北が確定したことぐらい、小学生でも理解できる話からだ。

「このまま攻撃すれば、それだけで終わるわけだけど……散々好きに言ってくれたうえ、1万オーバーのライフをここまで書き換えてくれたんだ。それじゃあ、僕の気が済まないよねえ？」

何か言おうとして言葉が出ないのか、パクパクと酸欠の金魚のように蒼白になった顔で口を開いては閉じる徳川。申し訳な……くはなけれど、あと一手だけ付き合ってもらおうとしよう。

「アークナイトとサンダー・ザ・キングをリリース。これが僕の切り札、その攻撃力はリリースしたモンスターたちの合計値。アドバンス召喚、霧の王！」

霧の王 攻5400

満を持して、まあ今回に限っては出す意味が戦術的には特にないけれど、ともあれ僕の切り札にして最高最大のフェイバリットカード。霧の魔法剣士がカオス・アトランタルやフォークIIヒューク、化石モンスター^{モンスター}の骨鎧の残骸とその大暴れした証拠であるたくさんのクレーターに溢れる海底へと音もなく着地した。

「バトル……の前に。そろそろ空気も恋しくなってきたし、上に行こうじゃないの。下手に抵抗して逆に変なところに当たったら目覚めも

悪いしね。クモグス、頼むよ」

そうウインクすると、やつぱりかわいいうちの子には言いたいことがちゃんと伝わったらしい。細長い脚を器用に動かして潜水艇を持ち上げ、内側からの抗議の声も構わず背中に乗せてひらりと水中に身を躍らせて浮上していく。

『親バカだな』

そんな言葉を後ろに聞きながら、同じく海底を蹴って水面へと飛ぶ霧の王の手に掴まって僕もその後を追うように浮上した。僕が自力で潜った時よりもはるかに速いスピードによって周りの風景がぐんぐん明るくなり、すぐに水面に顔が出る。

さて、これで多少の無茶をしてもまあ命にかかわることはないだろう。隣で同じく立ち泳ぎの姿勢で頭だけ水面に出している霧の王に領くと、もう1度水を蹴って水上へと飛び出した。水しぶきを立て、大上段に構えた剣がクモグスの背に転がった潜水艇へと叩きつけられる。

「やつちやえ霧の王！最後の攻撃、ミスト・ストラングル！」

霧の王 攻5400↓粘糸壊獣クモグス 攻2400（破壊）

徳川 LP1000↓0

悲鳴がしたような気もしたが、それも真つ二つにされた潜水艇が爆発、炎上する派手な音にかき消されてほとんど聞こえなかった。その直後、徳川の首根っこを掴んで炎から飛び出した霧の王。

「……さて。どーしようかねこれから」

デュエルが終わった今、次に何をするか考える必要がある。とりあえず足場が欲しいと実体化してもらった海亀壊獣ガメシエルの甲羅の上で胡坐をかき、傍らに浮かぶ壊れた潜水艇とその上で途方に暮れる徳川を見る。まあどうしようと言ったって、こんこまで首突っ込んでおいて終わったから帰ろうなんて選択肢はないわけだけだ。

「へいへーい、ちょっと聞きたいんだけど。この迷いの霧、どうやってら抜けられるのさ」

「馬鹿馬鹿しいね。そんなこと教えるはず……!」

「え、なに、それ沈めてもいいって?」

まだ抵抗できるのは偉いけれど、もう少し自分の立場というものを考えて欲しい。これ見よがしに耳に手を当てて聞いてやると、徳川から最後の空元気がみるみる抜けていくのが感じられた。救難信号を出したのは見ていたが、だからといってこんな海のと真ん中に助けが来るまでにはまだ時間がかかる。その間ずっと1人で浮いていることのリスクに、今更思い至ったのだろう。

そこからは、特に語ることはない。やはり知っていた霧の抜け方を聞き出し、この手のことには適任のチャクチャルさんに嘘をついている様子がないか確認してもらい……この野郎見かけによらず粘りよる、案の定でたらい教えてやがったので潜水艇の残骸に本気でとどめを刺そうとすると、今度こそようやく観念したのかやつと正しい道順を教えてくれた。

「じゃ、行くとしますかね。頼むよガメシエル、糸巻さんとどっちが早く着くかな?」

再び霧の中へ踏み出そうとして、少し振り返る。ま、いいか。あの様子なら、救助が来るまでは持ちこたえられるだろう。なんだか浦島太郎にでもなった気分になりながら、甲羅の上でまるで見えない前方を見据えてのんびりと進みだす。

ターン33 過去からの迷いし刺客

「いえーい、とうちゃーく。ご苦労様ガメシエル、ゆつくり休んでてね」

分厚く濃密な霧の壁にぐるりと囲まれた、3本の黒い鉄の塔ともいうべき異様な物体。その頂点は霧に遮られて塔がどこまで伸びているのかを見ることはできないが、ぼんやりと見えるシルエツトから真ん中のひとつがやや短く、両端の2本がそれよりも高くほぼ同じサイズであることはわかる。そして絶え間なくあたりに響く、重く低い機械音。糸巻のようなデュエルポリスがそれを一目見れば、目の前にそびえ立つ鉄塔こそが巨大「BV」電波塔なる代物だとはすぐに理解できただろう。それも、わずかに短い中央の1本。両端にそびえる2本は当初の目的、異常出力を持つ試作品デュエルディスクの量産用の場所だろう。もしかしたら何か他の生産ラインがあつて資金稼ぎに使われていたのかもしれないが、それはもはや関係のない話だ。

そんな海上プラントに、乗り込む巨大な影がひとつ。その影の上からより小さな影が飛び降りたかと思うと、巨大な方の影は嘘のようにその場で消えていった。

影の名は無論、遊野清明。つい先ほど脅迫まがいに聞き出した正規ルートからミスト・ウォームの吐く迷いの霧を抜けてきたこれでも御年23、外見年齢は永遠の14歳な少年である。

周りをきよろきよろと見まわし、途中で別れた糸巻のモーターボートを求めて視線が彷徨う。さすがに正規ルートを通ってきたこちらの方が早いかと納得しかけた瞬間、何かに反応してふと後ろを向く。波の音にかき消されるほどにかすかなエンジン音が、やがて次第に大ききはつきりとしたものに。

「ごつちごつちー、でも思ったより早かったね、糸巻さん」

「おーう。それでもずいぶん苦労したけどな、もう燃料も半分切っちゃまった。悪いな、わざわざ待ってて……っつと」

手を振って誘導する清明と、それに気づき船首をそちらに向ける糸巻。エンジンを切ったモーターボートからひよいと飛び降り、そこで

ふと何かに気づいたように、ジト目ですつと距離をとる。

「え、何、なに」

「あんまりアタシもこういうこと疑いたくはないんだがな、最初にこれだけは聞かせてもらおう。アンタ、本当に遊野清明なんだろうな」

「あー、そこから……？」

うんざりしたように首を振る清明に対し、糸巻の目はいたって真剣だ。敵地のど真ん前で行うにしてはあまりにも緊張感のない会話ではあるが、その重要性は彼とて理解できる。なにせ「BV」の力はカードの組み合わせと同じく無限大であり、ここにいるのが清明の姿をコピーした偽物であるという可能性は決して笑い飛ばせるほどに小さくはない。

ただそもそもの問題として、自分から誘っておいてその言い草はあんまりではないかとちやらんぼらんな清明なりにそれなりに不満は覚えるのだが。

「悪いな。正直アタシもこの10年以上ずっと単独行動ばっかだったからな、そういう発想自体完全に抜けてたわ」

「いやいやだからっておかしいでしょ、糸巻さんのデュエルディスク！それ、なんか妨害電波が出せるって聞いたよ!？」

「アホか。こんなバカでかい電波塔、アタシも10年以上この仕事やって初めて見たような代物だぞ？このデュエルディスクに入るようなアンチ『BV』妨害電波じゃ出力が違いすぎて焼け石に水、引っぱがすどころかノイズを起こすこともできないわい。というかそもそもな、そんなもんこの霧突っ込んでからも何回も試してんだよ」

食って掛かる清明を一蹴し、距離だけは保ったまま目の前で不気味に稼働し続ける3つの塔を見上げる糸巻。両端の大きな方にはその床、つまり今彼女たちが立っている位置から入れるように鋼鉄製のドアがはめ込まれているが、中央の塔には見た感じ入り口らしきものはない。この手の建物にはあつてしかるべき、非常口や非常階段すら彼女の位置からは確認できなかった。

次いで上に目線を動かすと、存在しない入り口の代わりだろうか。左右の塔の中腹辺りから渡り廊下が伸びることで、中央と行き来する

経路が確保されている様子が見えた。つまりこの3つの塔には、合計でもたった2か所しか出入口が存在しないことになる。

「つたく、ガキの落書きでも実体化させたのかよ?とんでもねえな」
もし火事でも起きた場合にどうなるかを考えるとこれはとんでもない違法建築だが、同時にこの塔は外観だけで糸巻にいくつものことを物語ってもいた。この中の人間の安全を一切考慮しないつくりは、裏を返せばこの場所は本来、人が働くことを想定されていない……つまり生産ラインの全自動化、完全機械化が成り立っていることになる。突き詰めればそれは、このプラントの所有者がそれだけの機械を動かすことができる唸るような資金の持ち主であるということの証明だった。

改めて巴が最初に叩き売り、やや遅れて自分も乗り込んだこの喧嘩のスケールの大きさを思い知る糸巻。もつとも、だからといって怯みも物怖じもしない。それはこの女の美点でもあり、時に話にならないレベルの欠点でもあった。バカの頭脳はプレッシャーを感知しない、そう言ったのはどこの誰だったか。

しかし面と向かって糸巻にそんなことを言う人間は極めて限られ、その数少ない人間である巴や七宝寺も今この場所にはいない。そのため誰にも邪魔されることなくじっくりと考えを巡らし、ややあつてゆつくりと口を開いた。

「……じゃあ、こんなのはどうか?見た感じ、入り口はこことそっちの2か所だけみたいだ。どうせ2人で固まってカチコミしてももう片方から逃げられるだけだし、挟み撃ちしてやろうぜ」

「僕が偽物でも、少なくとも後ろを取られることはないってわけね」
「飲み込みが早くて助かるぜ。当然違う道に行くからには、どんな理由があろうともアンタが後ろから来た時点で問答無用で叩きのめすからな」

「……それ僕が言うのもなんだけどさ、もしこの僕が偽物で後から本物が追いかけてきた場合、すんごいかわいそうなことにならない?」
そう呆れながらも、そこから反論する様子はない。だから糸巻も冗談めかしてニヤリと笑いながら、しかしきっぱりと大真面目に返す。

「おう。だからここにいるアンタが本物なことを祈つといてやるぜ」
「僕はケーキ屋さん兼神官。祈るのは僕の仕事よー？」

ぶつくさ言いながら、清明も3つの塔と2つの入り口に視線を移す。

「んで、糸巻さんはどっち行きたいの？」

「なんだ、アタシが選んでいいのか？んじやアタシ左な」

「んじや僕右ね。うちの神様に生半可な変装は通用しないのよ。だからこの糸巻さんは、紛れもなく本物の糸巻さんだよ」

「……その電波つぷり、アタシもアンタが本物に見えてきたな。ま、どっちにしろ挟み撃ちはやるけどな。いよいよ最後の大喧嘩だ、ド派手にかましてやろうぜ？」

「いいねえ、どうせ乗り掛かった舟なんだ。元々僕はデュエルがしたくてはるばるここに流れ着いたんだし、このままどーんと暴れさせてもらおうよ」

糸巻太夫、そして遊野清明。普段の価値観はまるで異なるもののおおざっぱでいい加減でやらんぽらんで人生をハプニング込みで楽しんでる節があり、そして強い相手とデュエルできるのであれば多少の不具合には目をつぶる筋金入りのバトルジャンキー……ろくでもない点でばかり意見が一致するものだから、確かに話だけは早いが巻き込まれる側としてはたまったものではないコンビであった。

「んじや、中央でまた会おうじゃないの」
「おう、途中で返り討ちになんてされるんじやねえぞ」

それつきりで分かれ、それぞれ左右の扉へと近づいていく。感知機能が生きているらしく無音で上へと開いた鋼鉄製の扉に、2つの影がためらうことなく吸い込まれていった。

塔の内部へと入り込んだ糸巻の背後で、すぐに扉が再び閉まる。ここから先は彼女一人、頼れるものは自分のみ。しかし、それは彼女にとって日常であったはずだ。半年前、鳥居が彼女の部下として配属されるまで、彼女は家紋町唯一のデュエルポリスとしてチンピラやプロ

崩れ相手に睨みをきかせていたはずだ。

だというのに、なぜこんなにも背中が涼しいような気がするのだろうか。前に1人だった時には、感じることもなかった感覚。鳥居がこの町に来てからも、やはり覚えることのなかった感覚。にもかかわらず、今この時に限って……。

「……アホくさ」

思考を打ち切り、代わりに足を動かし歩を進める。余計なことに思考を裂いていては、見えたはずのものも見えなくなる。

本来はずらりと工業用機械が並ぶのであろうスペースも今はまだがらんと空いたままであり、機能性のみを追求したデザイン皆無の内装と相まってなんだかひどく殺風景な光景が彼女の前に広がっていた。その中で唯一目につくものといえば、塔の中央からまっすぐに伸びたエレベーターとそれにゆったりと巻き付くような構造で2階へと伸びる螺旋階段。

そこまで認識した時点で立ち止まったことに、さしてはつきりした理由があつたわけではない。強いて言うならば、これもデュエルポリスの勘だ。そして、その勘が正しかったことはすぐに分かった。エレベーターのランプが突然点灯し、糸巻の目の前でその扉が開いたのだ。

「お出迎えか？ わざわざ悪いな、手土産ぐらい持つてきてやりやよかったか」

「……」

周りの風景のせいもあつてどこか抗菌服を連想させる白いスーツに、首から上をすつぽりと包み顔を隠すペストマスク、そしてそんな奇天烈な格好を一気に現実的な存在に落とし込むアイテム、左腕にデュエルディスクを装着した男。ぴっちりとその手を隠す白手袋まで身に着けているせいでまるで素肌が見えず、糸巻の観察眼をもつても性別は不詳なのだが、もしあれが男装の女だとしたら何がとは言わないかとある部分はかなり大きな方ではあるがあくまでまだ中学生レベルの竹丸や、下手をすると同年代の平均以下である八卦にすらサイズで劣るほぼ壁のレベルであるという点から男だと思ってお

くことにした。

そして深い意味はないが自分の胸に手を当て、色々と視線を集めることの多い肉の塊がそこに今日もぶら下がっていることを確かめる。今日も邪魔な代物ではあるが、ともあれそれは間違いなくあるべき場所にあった。

「つと、そうじゃねえな。医者だか何だか知らねえが、さっさとやろうぜ」

デュエルディスクを構えると、ペストマスクも同じようにデュエルディスクを起動する。糸巻の知る限り、あんな珍妙な格好をしたプロデュエリストはいない。これまでの知識の通用しない未知の相手ではあるが、本拠地のこの場所を任せられたということはそれだけ腕の立つことは間違いないとみていいだろう。

……面白い、腕が鳴る。

「デュエル！」

「……」

あくまで一言も喋るつもりはないらしく、無言のままに初期手札の5枚を引くペストマスク。元から口がきけないのか、それとも喋れない理由が別にあるのか。例えば、もし口を開いたらその声だけで糸巻にそのペストマスクの下の正体が感づかれてしまうような。

しかし、いくら本人が黙つていようとカードは嘘をつかない。糸巻の頭の中には過去のプロデュエリストのことは大体入っており、デュエルを続けていけば使用カードや妨害を撃つタイミングなどの思考パターンからマスクの下の正体を見極めることも決して夢物語ではないはずだ。

「……」

マスク越しに手札を一瞥したペストマスクが無造作にモンスターを伏せ、さらに伏せカードを置く。ただそれだけで、ターンが糸巻に移ったことをデュエルディスクは示していた。そんな不気味なほどの沈黙に警戒しつつ、軽く探りを入れながら自分もカードを引く糸巻。

「おいおい、アタシにカードを見せちゃくれないのか？リバーズ戦法

の使い手なのか、防御から始まるようなデツキなのか……それとも、恥ずかしいぐらいに事故つてんのか？」

ついでに挟まれた軽い挑発は、単に彼女の趣味である。尤も彼女の基準からすれば、こんな程度は挑発の内にも入らないのだが。

「アタシのターン。さて、どうすつかね？ 屍界のバンシーを召喚だ」

屍界のバンシー 攻1800

青白い肌に腰まで伸びた白髪、そしてそんな体に負けず劣らず青白い布切れのような服。薄幸美人という言葉のよく似合う涙目の女性型モンスターが、ぽつかりと空いた製造ラインに呼び出される。

「まずは様子見……屍界のバンシーでセットモンスターに攻撃、涙雨のリフレイン！」

屍界のバンシー 攻1800↓???

守1800

すうと息を吸ったバンシーが、開いた口からソプラノボイスと共に衝撃音を放つ。セットモンスターめがけて飛んでいったそれは攻撃対象を表にし、しかしその破壊には至らず伏せられていた小さな緑のドラゴンの姿を露にするだけにとどまった。糸巻としては今の攻撃で戦闘破壊、ついでにその衝撃でペストマスクを引きはがせないかとの目論見もあったのだが、さすがにそれは虫が良すぎたようだ。

しかしそんなことよりも彼女の気を引いたのは、今の攻撃によつてその姿を見せた小さなドラゴンだった。あまりに予想外なその一枚に、小さく眉をひそめる。

「風征竜——ライトニングだと？」

風征竜——ライトニング。かつて一世を風靡した結果として牙をもがれ翼を失い、爪を引きちぎられてなおも欠損箇所をダーククマターで補って戦い続けたとまで揶揄された4種8体のドラゴンのうち1匹、その名の示す通り風属性のライトニング。しかしその本分はあくまで手札から発動する自身の効果であり、よほどのことがない限り通常召喚されるようなことはないカードでもある。

「……おいおい。まさかほんとにその手札、ライトニングを伏せなきやどうしようもないぐらいに大事故起こしてるのか？」

警戒半分、呆れ半分といった調子の呟きにも、ペストマスクは一言

も反応しない。

もつとも、本気で手札事故を起こしているなどとは糸巻も信じてはいない。本番でそんなへまをやらかすほどにデッキとの息があつていないのならば、それはもうプロデュエリスト以前の問題だというのが彼女たちの共通認識だからだ。つまりあれは、全て予期された何も問題のない動き。だが、何のため？

よくできたロボットでも相手にしているような感覚に陥りながら、気を取り直して次へと繋がる一手を打つ。

「まあいいさ、そっちが事故つてるならそれでよし、だ。だろ？アタシは勝手にやらせてもらうぜ、メイン2にカードを4枚セット。そして魔法カード、命削りの宝札を発動。このターン特殊召喚ができず相手にダメージを与えられない代わり、アタシの手札が3枚になるまでカードをドローすることができる」

「……」

妨害を使うならここしかないと言わんばかりの、パワーカードによる露骨な誘導。しかしペストマスクは微動だにせず、その伏せられたカードも沈黙を保ったまま動かない。結局何事もなく3枚ものカードを引いた糸巻が、ちらりと目を通してそのうち1枚を追加で伏せる。

「そして最初に伏せたカード、おろかな副葬をリバーズから発動。デッキから魔法、罫1枚を墓地に送る。アタシが選ぶカードは、不知火流 才華の陣。そしてエンドフェイズ、命削りの宝札のデメリットが発動。アタシの手札をすべて墓地に置く」

捨てる手札は2枚、しかし当然そこは抜け目ない。彼女が捨てたカードは妖刀―不知火、そして馬頭鬼。アンデット族お馴染みの、墓地に置かれてこそ真の力を発揮できるモンスター2体だった。

「……」

しかし、それを見てなおペストマスクの奥からは何の感情も読み取れない。かといってこの2枚が墓地に送られた意味が理解できないというわけでもないようだ、糸巻はそう直感した。その超然とした態度からはむしろ、ここまでの動きはすべて想定内であるという余裕が

感じられる。やはり、普段の彼女とそのデッキのことをよく知る人物の線が強いか……しかし、それだけではまだ情報が足りなさ過ぎて候補を絞りようがない。

何を狙っているのか、どこに勝算があるのか。ライトニングのセツトという謎めいたプレイングもあり全てが不透明な相手にターンを移そうとした刹那、おもむろにその伏せカードが表を向いた。

「……」

「ようやく動くのか？ って、ライトニングってことは、当然テンペストも入ってんだろ？ それでなんだ、今度は岩投げアタックだ?!」

ようやく自分からカードを発動したペストマスクが伏せていたのはコストでデッキの岩石族1体を墓地に送り、相手に500ダメージを与える通常トラップ。コストと効果とは名ばかりの、墓地送りこそが本命でそのおまけに軽バーンがついたという一般認識を持たれる数ある墓地肥やしの中でも癖の強い1枚である。

そして岩石族のサポートという性質上、風属性へのサポート効果を持ちドラゴン族であるライトニングとのシナジーは限りなく薄い。糸巻の困惑は、デッキから抜き取られたカードを見えますます深まってきた。

「おいおい、今度は迷宮壁——ラビリンス・ウォール——かよ、つくづく読めねえ奴だな」

糸巻 LP4000↓3500

守備力3000を誇る、文字通り壁となる通常モンスター。しかし糸巻はそこで何かに勘付いたのか、ターンが移ったことでカードを引くペストマスクに対して突然ニヤリとふてぶてしく笑いかけた。

「いや、なるほどな。ライトニングの裏に見えるテンペスト、それにラビリンス・ウォールか。カードのチョイスがいちいち渋いせいで戸惑っちゃまったが、ようやくアタシにもそのデッキのからくりが見えてきたぜ」

「……」

やはり何も言わず掲げられたカードは、封印の黄金櫃。デッキからカードを1枚除外し、2ターン後に手札に加える通常魔法。続いて

デッキから嵐征竜―テンペストのカードが除外されたことにより、そのモンスター効果が発動される。

「デッキから風属性のドラゴン族1体が無条件でサーチする……もう、アタシにも分かるぜ。この局面で持つてくるべき風ドラゴンなんて、あの1体しかいないんだからな。アンタが口をきく気がないってんなら、アタシが代わりに宣言してやるよ。そのカードの名は、デブリ・ドラゴン！」

「……」

デブリ・ドラゴン 攻500

迷宮壁―ラビリンス・ウォール― 守3000

まるでその声に応えたかのように、ペストマスクがデッキからさらに1枚のカードを抜き取って公開する。サーチされたそのカードの名は、糸巻の宣言通りのデブリ・ドラゴン。召喚成功時に墓地から攻撃力500以下のモンスター1体を蘇生する、対応範囲の広さが売りの強力なチューナーモンスター。

そして即座に召喚されたその効果によって、2人の足元から石造りの迷宮が地響きを立てて生えてくる。

「岩投げに対応する分他の種族よりも墓地に送りやすく、なおかつデブリの蘇生範囲でもある珍しいレベル5モンスター。なかなかの着眼点だ、そこは褒めてやるよ」

「相変わらずの上から目線。年は取っても変わらないな、糸巻」

「……っ、なんだ、ちゃんと喋れたんじゃないか」

ぱちぱちと鷹揚に手を叩く糸巻に、ついにペストマスクがその沈黙を破る。マスク自体に何らかの加工が入っているらしく、不自然にくぐもったその声だけでは目の前にいるのがやはり男だったということしかわからないが、それでも彼女の記憶の奥で何か反応した部分があった。間違いなく、この男にアタシは会ったことがある。それも1度や2度ではなく、もっと高い頻度でだ。

しかし、思い出せたのもそこまでだった。プロデュエリストとしての記憶をすべてひっくり返しても、この声の持ち主と一致する対戦相手の顔が思い浮かばない。プロ、アマ、あるいはイベントで特別に

戦った子供を含む素人さん。1度でもデュエルをした相手のことは鮮明に覚えているはずの糸巻だったが、それでもこの声の主がどうしても出てこない。喉まで出かかっているのが彼女自身わかるだけ余計にもどかしいが、いくら掴もうとしても記憶はするりと彼女の脳から消えて行ってしまう。

そして、ペストマスクの方は、あまり長く考える時間を与えるつもりはないようだった。レベル4と、レベル5。チューナーと、それ以外のモンスター。シンクロ召喚によって呼び出されるレベル合計は、9。もとより数の少ないレベル帯であるうえに、デブリ・ドラゴンはそのデメリットによってドラゴン族以外のシンクロ召喚に使用することができない。となると、自然とその選択肢は限られる。

「……」

☆5＋☆4＝☆9

蒼眼の銀龍 攻2500

再び口をつぐんだペストマスクから無言のうちに呼び出されたのは、白銀の体に青い目を持つ老練なドラゴンの姿。素材指定は、チューナー及びそれ以外の通常モンスター。塔全体を揺るがすほどの咆哮と共にその全身が、そして隣のライトニングまでもが純白の光を放ちだす。

「蒼眼の銀龍が特殊召喚に成功した場合、自分のドラゴン族に次のターンが終わるまで効果の対象と効果破壊に対する耐性を付与する。だろ？だがそいつは誘発効果だ、4伏せ相手にンなもん通るとでも思ってるのか？チェーンしてトラップ発動、バージェストマ・ハルキゲニア！この効果でこのターンの間、蒼眼の銀龍の攻守は半減だ！」

細長い緑の体を持つ古代生物が純白の光に阻まれるよりも前に蒼眼の銀龍の足元に飛びつき、ギリギリとその体を巻きつける。さすがにその全身を縛り付けるにはあまりにもサイズが違いすぎたが、いくつもの触手や鉤状の棘を絡めてなんとかしても放すまいとしがみついたハルキゲニアは生半可なことでは外れはしない。そしていくら広い塔の内部とはいえ、ドラゴンが見境なく大暴れできるほどのスペースがあるわけでもない。あまり無理に引きはがそうとすると、『BV』に

より実体化した蒼眼の銀龍がこの塔ごと崩してしまおうだろう。

蒼眼の銀龍 攻2500↓1250 守3000↓1500

「……」

蒼眼の銀龍 攻1250↓2500 守1500↓3000

屍界のバンシーの攻撃力は、蒼眼の銀龍のそれを一時的にとはいえ上回る。ペストマスクもわずかに思案するようなそぶりを見せたのち、このターンは大人しく待つことに決めたらしくあっさりターンを終えた。

そしてそれは、合理的な判断でもある。バージェストマ・ハルキゲニアの効果は糸巻自身も言及したように1ターン限り、つまり黙っていれば勝手に切れるものでしかない。フィールドでも締め付けていたハルキゲニアとそれに耐える蒼眼の銀龍の耐久合戦に決着がつき、力尽きたハルキゲニアが拘束を解いてシユルシユルとどこへともなく去っていった。

しかしその合理的、というところに裏がある。それこそが糸巻の狙い、彼女にとって最も都合のいい展開なのだから。

「アタシのターン……の前に、アタシもエンドフェイズに効果を使わせてもらうぜ？ 屍界のバンシーは場か墓地から除外することで、このカードを手札かデッキから直接発動することができる」

密室のはずの塔内部に、ごうと陰気な風が吹いた。染みひとつない磨き抜かれた金属製の壁が、床が、天井が、暗くて穢れて澱んだ空間へと置き換わる。死者の王国、亡者の天国にして無間地獄。しかしそれは皮肉なことに、無菌室のようであった先ほどまでの風景よりもむしろ活気に満ちたものでもあった。

「生あるものなど絶え果てて、死体が死体を喰らう土地。アタシの領土へ案内しよう。アンデットワールド、発動！ このカードが存在する限り、フィールドと墓地にモンスターは全てアンデットに書き換えられるぜ」

蒼眼の銀龍 ドラゴン族↓アンデット族

風征竜―ライトニング ドラゴン族↓アンデット族

敵地真ただ中から一転、ここはすでに『赤髪の夜叉』の領土。周

りに瘴気が増していくのとは対照的に、蒼眼の銀龍たちの放つ光は急速に弱まり消えていく。ドラゴン族を守る効果の恩恵を、アンデット族が受けられるはずもないからだ。

「改めてアタシのターン。少しばかり危険だが、黄金櫃のターンカウントが進むのはもつと気に入らねえよな？ トラップ発動、バージェストマ・レアンコイリア！ この効果により除外されているカード1枚を選択し、持ち主の墓地に戻す。アタシが選ぶ1枚は、アンタのテンペストだ。そしてトラップが発動されたことで、墓地からハルキゲニアの効果が発動！ このカードをモンスターとして、アタシのフィールドに特殊召喚する！」

バージェストマ・ハルキゲニア 攻1200 水族↓アンデット族除外されたカードを枚数こそ1枚限りとはいえその種類、さらにはプレイヤーすらも問わず墓地へと送り返すカード、レアンコイリア。ハルキゲニアを特殊召喚するだけならばわざわざテンペストを狙う必要もなく自前の屍界のバンシーを再利用できるようにしてもよかつたのだが、糸巻にはもう一つ狙いがあった。

「さらにアタシは、墓地に存在する妖刀―不知火の効果を発動。このカードと墓地のアンデット族、つまりレベル4の馬頭鬼を除外することで、その合計レベルと等しいレベルを持つアンデット族シンクロモンスターの1体をエクストラデッキから特殊召喚する。戦場這いずる妖の皇よ、我が宿敵を跪かせろ！ 逢魔シンクロ、デスカイザー・ドラゴン！」

☆4+☆2||☆6

デスカイザー・ドラゴン 攻2400

2体の腐ったドラゴンと対峙する、突如として立ち昇った熱を持たない炎の中から這い出てきた第3の龍。胸元に赤く輝く宝玉を持つ、青白い燐光を立ち昇らせる屍の存在だ。やがてその燐光が揺らめき、集まり、さらなるモンスターの姿へと変化する。渦を巻く風の化身、属性を司る4大征竜の一角。

「デスカイザーの特殊召喚成功時、こいつは相手の墓地からアンデット1体を選択してアタシの場に特殊召喚できる。つまりこのアン

デットワールドの下、アンタの墓地の全てがこの効果の圏内だ。せつかく墓地に送りつけてやったんだ、アタシのために働きな！嵐征竜―テンペスト！」

嵐征竜―テンペスト 攻2400 ドラゴン族↓アンデット族

「まだだっーリバースカードオープン、アンデット・ネクロナイズ！アタシのフィールドにレベル5以上のアンデットが存在するとき、相手モンスター1体を対象にそのコントロールをこのターンの間だけアタシが貰う。蒼眼の銀龍、アンタもアタシの下僕になりな」

光の加減で血のような赤色に見える髪を揺らめかし、糸巻が指を鳴らす。ただそれだけで生前は誇り高かったであろう銀龍の骸は頭を垂れ、死霊の主たる糸巻の元へと媚びるようにひれ伏した。

「よし、それでいい。そしてアタシは、不知火の武士^{ものふ}を召喚する」

不知火の武士 攻1800

オレンジ色の和装に身を包んだ青年剣士が、駄目押しとばかりに呼び出される。炎を模したその刀を抜いて中段に構えるその姿を見ても、ペストマスクは揺らがない。

「バトルだ。まずはテンペストでライトニングを攻撃するぜ」

嵐征竜―テンペスト 攻2400↓嵐征竜―ライトニング 守1

800（破壊）

嵐の征竜と、風の征竜。同位種ではあるもののパワーの差は歴然、すぐに嵐が風を呑み込んだ。

「バージエストマ・ハルキゲニアでダイレクトアタック！」

「……」

そして始まるうとしていた終わりを告げる一斉攻撃の寸前、やはり慌てた様子もなく発動されたのは1枚のトラップ。その中身に素早く目を通した糸巻が、小さく舌打ちする。

「通常トラップ、ダメージ・ダイエツト……！」

発動ターンにプレイヤーが受けるあらゆるダメージを半減するカード。つまりこのターンに戦闘ダメージだけでペストマスクのライフを削りきるには、単純計算であと8000もの攻撃力が必要な計算になる。不知火の武士は墓地コストを払い攻撃力を600アップ

させる効果を持っているものの、それを使ったとしても糸巻の場で攻撃の権利を残した3体の合計攻撃力は6200とわずかに届かない。「だとしても、せめてもう一手削らせてもらうぜ？トラップの発動にチェーンして、墓地からバージェストマ・レアンコイリアをモンスターとして呼び起こす。こいつも連続攻撃に加わってもらおう！」

バージェストマ・レアンコイリア 攻1200 水族↓アンデット族

平べったい甲羅を被ったような体と、裏側に生えた無数の昆虫めいた足。棘付きの鞭のような1対の赤い触腕をワキワキとうごめかせ、追加で呼び出されたレアンコイリアがペストマスクへと迫る。

バージェストマ・ハルキゲニア 攻1200↓ペストマスク（直接攻撃）

ペストマスク LP4000↓3400

バージェストマ・レアンコイリア 攻1200↓ペストマスク（直接攻撃）

ペストマスク LP3400↓2800

不知火の武士 攻1800↓ペストマスク（直接攻撃）

ペストマスク LP2800↓1900

3連直接攻撃に、成すすべなくどつきまわされ翻弄されるペストマスク。そのスーツは見るも無残に汚れ、あちこちボロボロになってはいるが、存外根性があるらしくまだ悲鳴のひとつも漏らしはしない。しかし、糸巻の場にはまだ蒼眼の銀龍が残っていた。その攻撃を命じる前に一拍置き、すつと指さしてまた笑ってみせる。

「残念だったな、アタシを甘く見てたんじゃないか？ダメージ・ダイエットはフリーチェーンだ。このレアンコイリアを発動したタイミングでさっさと使つとけば、次の追撃は避けられたのにな。変に出し惜しみるから、余計なダメージを受けることになるんだぜ。蒼眼の銀龍、攻撃しろ！」

蒼眼の銀龍 攻2500↓ペストマスク（直接攻撃）

ペストマスク LP1900↓650

「……しまった！」

銀龍のブレスが空を裂き、一層派手にペストマスクを吹き飛ばす。その衝撃で被っていたペストマスクがちぎれて明後日の方向へと飛んでいき、奥に隠された素顔が明らかになった。

「おっと、ようやく見せてくれる気になったか。さあ御開帳、一体アンタはこのどい……つ……」

次第に声が弱々しくなる。途切れていく。はたから見ればさぞ無様な姿だろうとぼんやり思ったが、糸巻自身さすがにそこに見えた顔には驚いた。ペストマスクの奥から現れたその顔は彼女の予想通り、よく知る顔。埃まみれ傷だらけのスーツでゆっくりと立ち上がったその男が、ふんとつまらなさそうに息を吐く。

「そして乱暴、粗雑。本当に、何も変わらん」

「アンタは……」

絞り出すような声が出る。会ったことがあって当たり前だ、13年前はほぼ毎日のように顔を合わせていたのだから。思い出せなくて当たり前だ、今まで彼女が思い浮かべていたのは、過去にデュエルをした相手の顔だけだったのだから。

男の名は、引戸^{ひきど}卿士^{きょうし}。これまで糸巻が相手してきたような、プロデュエリストではない。しかし、その戦いがある意味では一番よく知る人物でもある。

そのかつての職業は、プロデュエリスト糸巻太夫の専属マネージャー。計算は常にどんぶり勘定、することなすこと大雑把な彼女を、どうにかまともな社会人の端くれとして成り立たせていた男である。『BV』でデュエルモンスターズ界の在り方が様変わりしてプロのマネージャーという概念が消滅して以降は消息不明になっていたのだが、裏社会で自分がデュエルをする側にシフトしていたとは。

しかし今は、旧交を温める場面ではない。重要なのは彼がプロ時代の糸巻のデュエルの癖や使用カードを完璧に、下手をすれば当時のライバルよりも高い精度で把握しているということだ。

「あの爆発事故から、俺もすっかり仕事がなくなてな。自粛中、何度も伝えたろう？ 収入はグッズ販売でしばらく食い繋ぐ程度には持つ、お前なんかはコンビニに行くだけでいちいち目立つんだから頼むから何

もしないで家で寝ていてくれと。それをデモ行進なんかに参加して……まあ、口うるさく言ったぐらいでお前が大人しくしているなんて思った俺も馬鹿だったわけだが。らしくもないミスだったな、あれは」

「あの時は……その、悪かったよ」

「全くだ。お前はデュエルポリスに引き抜かれたが、俺はあの一件で完全に干されたからな」

罪悪感からやや目を逸らし、13年越しに口にした謝罪の言葉は、しかし当然のごとくばつさり切り捨てられた。

「とはいえ、今更恨み言を言うつもりはない。それどころか、お前には感謝していることもあるんだぞ？それが、これだ。食っていくために苦し紛れに手にしたカードだったが、お前を見慣れていたおかげで不思議と周りの奴らのレベルが低く感じてな。荒稼ぎして今じゃ『ノーネームド』なんて面白みもない仇名まで貰ったよ」

そう言って左腕のデュエルディスクを軽く持ち上げ、ポンポンと軽く叩いてみせるペストマスク……引戸。

ノーネームド、そう呼ばれる経歴不詳の裏デュエリストがいるという話だけは、糸巻も話の種にぼんやりと聞いたことはあった。とはいえ噂は噂と話半分に聞き流していたのだが、つくづく世の中は狭いものだと実感する。

「それから少し前までは本源氏や七曜と同じところに所属していたんだがな、つい先日巴からヘッドハンティングを受けてな。どうやら奴は、俺の前職がすぐにピンときたらしい。お前の相手に送りつけるには最適だとも思ったんだろう。どうせこの組織もそろそろ見限るときが来ていたし、受けてやったのさ。お前の顔も、13年ぶりに拝みたかったしな」

「結局巴のクソ狐かよ……残念だぜ、アンタとはこんな形で会いたくなかったのによ」

「そうか？俺は割と、お前とはいつか戦ってみたかったがな。さて、そろそろデュエルに戻るとするか。お前はさつき俺のダメージ・ダイエットの発動タイミングをミスのたぐいだと思ったようだが、それは

違う。馬頭鬼でもバンシーでもなくテンペストにレアンコイリアを使ったプレイングといい、お前は強気で突っ張ってくるタイプだと信じていたよ」

「……何が言いたい？」

嫌な予感に声を低め、呟くように問いただす。引戸はそれにただ口の端を歪めて笑い、1ターン目からずつと伏せられていたままのカードが表になる。

「すでにリソースは使い切った、なら次はわかるな？・当然、俺が攻める番だ。トラップ発動、イタチの大暴発。合計攻撃力が俺のライフの数値以下になるよう、相手プレイヤーはそのフィールドからモンスターをデッキに戻さなければならぬ」

「くっ！わざと殴らせた……ってのか？ライフを削らせるために？」

「当然だろう？俺のライフは650、攻撃力650以下になるようにフィールドを調整してもらおうか」

糸巻のフィールドでもっとも攻撃力の低いバージェストマ2体でさえ、その攻撃力は1200ある。すなわちこの効果が通れば、彼女のフィールドに存在するモンスターは全てデッキへと戻される。勝負を決めかねない反撃の一手に、しかし糸巻は抵抗する。

「……させるか！トラップ発動、亜空間物質転送装置！アタシのフィールドからデスカイザー・ドラゴンを、ターンの終わりまで除外する！」

デスカイザーが辛うじて退避したものの、他のモンスターにまでは手が回らない。蒼眼の銀龍、テンペスト、不知火の武士、そして2体のバージェストマが、激しい爆発に巻き込まれて消えていく。

「これでも1体は残したか。さすがに一筋縄ではいかないな」

「当たり前だ馬鹿、素人に毛の生えたレベルの奴がアタシ相手に1本取ろうなんて百年早いんだよ」

「あと87年か。さすがに待てないから、これまでの13年で勘弁してもらおう。俺のターン、ドロー」

フィールドに唯一残ったモンスターが特殊召喚時以外はただのバニラであるデスカイザー1体のみと、その状況はかなり悪い。それは

糸巻自身が誰よりも理解しており、言葉こそ強気ではあるが、その態度が虚勢でしかないことも付き合ひの長い引戸には見透かされていたために軽く流される。それに対し引戸の方は、ここに来て調子が上がってきているようだった。

「2体目のデブリ・ドラゴンを召喚し、このターンもラビリンス・ウォールを蘇生する」

デブリ・ドラゴン 攻500 ドラゴン族↓アンデット族

迷宮壁―ラビリンス・ウォール― 守3000 岩石族↓アンデット族

そして繰り出されるのは、先ほどのターンと同じ戦術。アンデットワールドの効力によって呼び出された瞬間に種族を書き換えられるものの、素材指定の関係上エクストラデッキに返された蒼眼の銀龍を再びシンクロ召喚することに支障はない。

しかし次に引戸が出したカードは、糸巻にとっても不意打ちの一手だった。

「なんだ、まさか先ほどと同じ戦術で来るとでも思ったか？それこそお前らしくもないな。それとも、相手を見る目が鈍ったか？蒼眼の銀龍を再び出したところで、どうせお前相手には通用しない。ならば、さらに次を出してやるまでのことだ。専用装備魔法、迷宮変化をラビリンス・ウォールに装備する！」

「迷宮変化……!?!」

「さらに迷宮変化を装備したラビリンス・ウォールをリリースすることで、デッキからこのカードを特殊召喚できる。いでよ、ウォール・シャドウ！」

ウォール・シャドウ 守3000 戦士族↓アンデット族

再びせり上がった迷宮の壁の一部が突然盛り上がり、壁と一体化した緑の体に無数の目、鎌状の両腕を持つ異形の化け物の上半身が姿を覗かせる。

「レベル7のウォール・シャドウに、レベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング。シンクロ召喚、星態龍！」

☆7+☆4=☆11

星態龍 攻3200 ドラゴン族↓アンデット族

「専用装備での実質レベル変動、うまいこと考えたもんだな。だが、魅せプレイで飯食ってくわりに召喚口上もなしってのはいただけいな」

「あいにく、俺にその手のセンスはないからな。それに、お前たちのようにカードを出すたびにいい年して臆面もなく人前で叫ぶ度胸もない。正直なところお前のマネージャー時代から薄々思ってたんだが、プロデュエリストってのはその辺の羞恥心はないものなのか？」

「はっ、笑わしてくれるなよ。アタシらはあくまで夢売る立場、そこで現実見てどーすんだ？もつと地に足つけずに浮いてみる、踊るアホウに見るアホウ、同じアホなら踊らにや損。存外楽しいもんだぜ？」

これはつまり、両者の根本的なスタンスの違いなのだろう。即答しながらも糸巻は、そう感じていた。単純に「お約束」として場を盛り上げ、自分も割と叫んで楽しい召喚口上に対する拒否反応はその最たる例で、良くも悪くもリアリストよりのこの男はプロデュエリストという概念には向いていない。仮に13年前のあの時代にマネージャーからプロに転向していたとしても、実力は高いが人気は伸び悩む新人程度の扱いで止まっていたはずだ。

しかしこの価値観の違いは、大なり小なり同じ世界観の中での戦いに順応した糸巻ら元プロに対してこと勝敗という点ではかなり有利に働く。動きが読めず、培ってきた間合いが通用しないからだ。それに対し無効は、理解こそできないものこちらの世界がどういいうものをよく知っている。立ち位置の違いからくるアドバンテージを一方的に握っていたからこそ、勝敗と実力がより重視される裏の世界においてのし上がってこれたのだろう。

「俺には理解できないな。まあいい、俺は墓地から風属性のデブリ・ドラゴン、地属性のラビリンズ・ウォール、そして闇属性のウォール・シャドウを除外。異なる属性のモンスター3体を除外することで、手札のこのカードは特殊召喚できる。アークネメシス・プロトス！」

アークネメシス・プロトス 攻2500 幻竜族↓アンデット族
体に4色のラインが走る、金を基調とした東洋の龍のような姿を持

つ原初のネメシス。終焉のエスカトスとはあらゆる面において対比する、アークネメシスの1体だった。その展開に、心の中で糸巻が目を見張る。彼女とて無論、ラビリンス・ウォールと迷宮変化によってウォール・シャドウを特殊召喚できることは知っていた。だが地属性のラビリンス・ウォールと闇属性のウォール・シャドウ、ともに共有できるようなサポートがほばない2体を、むしろその違いを武器にまとめてくるとは。

「行くぞ、プロトスの効果を発動。1ターンに1度フィールドに存在する属性を1つ宣言し、その属性のモンスターをすべて破壊。さらに次のターン終了時まで、その属性を持つモンスターを互いに特殊召喚できない」

「デスカイザーは、炎属性……！」

だが、引戸はそれに小さく笑う。油断も隙もない女だと独り言ち、心底おかしそうに苦笑する。

「とぼけるな、糸巻。お前の墓地にはフリーチェーンで除外しアンデット1体に完全効果耐性を付与するトラップ、不知火流 才華の陣が落ちているだろうが。どうせこのターンでライフを削りきれないのならば、警戒すべきは妖刀のない不知火よりもむしろ……俺が宣言するのはプロトス自身の属性、闇！しかしプロトスは、カードの効果によって破壊されない」

プロトスの頭頂部に伸びた角からバチバチと電磁波がフィールドを包み、闇属性の存在を許さない簡易的な力場が発生する。当然それはプロトス自身にも襲い掛かるが、引戸の言葉通り体表をのたうち回る自身の電磁波に対してもプロトス自身は平然としたままだ。「……炎を宣言して才華の陣を使わせる、ってのもありだったと思うぜ。本当に闇でいいのか？なんなら、今からだって」

「惨めなものだな、あまり笑わせるな。俺がどれだけ、お前のデュエルを見てきたと思ってる？ヴァンパイア・フロイライン、死霊王ドーハスーラ、そして真紅眼の不屍竜……一見お前のデッキは不知火とバージエストマの混成構築だが、最終的に好んで出すカードは闇属性の比率が大きい、だろうか？」

「……」

今度押し黙ったのは、糸巻の方だった。実際にこうして闇属性を封じられると、彼女に遺された展開可能な大型モンスターはクリスタルウイング・シンクロ・ドラゴンや炎神―不知火、バージェストマ・アノマロカリスなどごく一部に限られる。そしてそのどれも特殊召喚には下準備が必要であり、次のドロー1枚からホイホイと呼び出せるような代物ではない。だからこそ闇属性を宣言されることは避けたかったのだが、そんな考えはお見通しだったらしい。

「待たせたな、バトルだ。アークネメシス・プローツでデスカイザー・ドラゴンに攻撃！」

アークネメシス・プローツ 攻2500↓デスカイザー・ドラゴン 攻2400（破壊）

糸巻 LP3500↓3400

「この程度のかすり傷！」

「当然本命は次だ、星態龍でダイレクトアタック。そして星態龍が攻撃を行う時、このカードはあらゆる効果を受け付けない！」

星態龍 攻3200 アンデット族↓ドラゴン族 攻3200↓

糸巻（直接攻撃）

糸巻 LP3400↓200

星態龍 ドラゴン族↓アンデット族

「が……っぐぐ、ぐぐぐ……っ!!」

残りライフを一気に200まで削られる特大ダメージに、今度吹き飛ばされたのは糸巻の体だった。金属の床から生えていたアンデットワールドの枯れ木をへし折り、それでもまだ衝撃を抑えきれず床をバウンドして叩きつけられる。そこからでも即座に置き上がったのは彼女の常任離れた意思力のたまものだったが、それで骨が折れていないのはほとんど奇跡だった。

「これで俺もお前も、手札もなければ伏せカードもない。俺の知るお前なら、まだもう少しは足掻くのだろう？ ターンエンドだ」

「い痛っ……なーにが上から目線だ、お前も人のこと言えたもんじやねえだろが。やってやるから目え見開いてしっかり見とけよ……ド

ロー！」

派手に打ちつけられた全身の痛みをきつぱりと無視して、たった1枚からの逆転の可能性を求めカードを引く。まだ、彼女の闘志は消えていない。

そしてそこで粘るからこそ、彼女はプロデュエリストなのだ。

「お望み通り、見せてやるよ。命削りの宝札、2枚目を発動！もう1回、アタシの手札が3枚になるまでカードを引くぜ」

「まったく、本当にとんでもないな。いいだろう、勝手に引けばいい」「ああ、そうさせてもらおうとも。カードを3枚ドロウ……そしてモンスターをセット、カードを2枚伏せる。おっと、こいつも忘れちゃいけないよな。墓地の魔法カード、アンデット・ネクロナイズの効果を発動。除外されている馬頭鬼をデッキに戻すことで、このカードを除外デメリット付きでフィールドに再セット。ターンエンドだ」

「引いたカードを全て活用できる、まさに理想の一手だな。俺のターン、ドロウ。このターンもプロトスの効果により、闇属性を宣言する！」

一時は消えていた力場が、プロトスの雄たけびにより再び張り巡らされる。そして流れるように、星態龍がゆっくりと動き出した。

「セットモンスターに星態龍で攻撃。攻撃を行うことにより、再び完全効果耐性を得る」

星態龍 攻3200↓??? 守0 (破壊)

「破壊したカードは……グローアップ・ブルーム、墓地に送られた場合にレベル5以上のアンデットを呼び出す効果だったか。もしプロトスの効果を最初に使っていなければ1体のリクルートを許していた、まったく油断も隙も無いな」

「アタシのデッキに、レベル5以上のアンデットはドーハスーラとフロイラインの2体のみ。どっちも闇属性だから、ブルームの効果は使えない」

「ならば、この一撃で決める。アークネメシス・プロトスで攻撃」

「悪いがな、もうちよつとだけ付き合ってもらおうぜ！トラップ発動、バージェストマ・カナディア！プロトスを裏守備にする！」

アークネメシス・プロトス 攻2500↓???

青い鱗を持つ単眼の蛇のような古代生物が、今まさにブレスを放とうとしていたプロトスへと巻き付き動きを止める。その動きは先ほどのハルキゲニアに酷似していたが、この場合はステータスの下降ではなく裏守備にするため攻撃そのものを抑えつけることができる点で異なる。

「本当に往生際が悪いな？メイン2にプロトスを反転召喚……いや、プロトスの守備力は3000。ならばこのまま伏せたままに……」

裏守備となったプロトスの挙動に、ごくわずかに揺れる引戸。確かにこのままセットしておけば高い守備力によって戦闘には強く出ることができるが、反面効果破壊耐性は使えない。ステータスを取るか、耐性を取るか。そして糸巻のデッキは、そのどちらも可能なくなりとなっている。一長一短の選択肢だが、だからこそ頼れるものは自分の勘しかない。

そして引戸が選んだのは、効果耐性だった。手札1枚、たった今引いたばかりのカードの存在にやや強気になっていたということもある。

??? ↓アークネメシス・プロトス 攻2500

「……反転召喚。カードを伏せ、ターンを……」

「おっと。トラップ発動、バージエストマ・オレノイデス！今伏せたそのカードを破壊する！」

しかし引戸の慢心は、たとえどれほど小さくてもその隙を決して逃さない狩獵者、糸巻の目からは逃れられなかった。赤茶色の三葉虫が飛び掛かって伏せられたばかりのカードを押しつぶし、同時にバージエストマ共通効果によりカナディアがモンスターとして蘇ることで場に最低限のモンスターを残す。破壊したカードを何気なく見て、糸巻がふうと安堵の息をついた。

「岩投げアタックの2枚目か？危ないもん伏せてやがるな、アタシのライフじゃ500バーンでも十分な引導火力だぜ」

「戦闘と効果、二段構えでとどめを刺せる布陣だと思ったんだがな。」

2つとも平気な顔で乗り越えてくるとは、その化け物じみた生命力は健在か」

「褒めてんのか馬鹿にしてんのかはつきりしてくれ。だが、今のターンは実際惜しかったな。アタシ相手に1ターン防御で手いっぱいさせたのは見事だった、一緒に仕事してた時もアンタがこんな強かったとは思わなかったぜ」

「お前が相手のことを褒めるようなときは、大体ろくなことを言い出さないから素直に喜べないな。それで？今度は何を言い出してくれるんだ？」

「あー？別に、単純な話だよ」

どこか和やかな、旧友同士がじゃれあうような会話。半ば諦めたように肩をすくめる引戸に対し、糸巻が彼女にしては珍しく毒気のない笑みを浮かべつつゆつくりとデッキトップに手をかける。

「さっきのターンで仕留めきれなかった以上、アタシは今から反撃する。残念だったな、最後のチャンスもこれで時間切れだ」

そして引き抜かれた、最後のドロークカード。当然のような顔で、その1枚がフィールドに繰り出される。

そしてそれは比喻ではなく、彼女にとっては実際に当然のことだった。彼女がこのデュエルに敗北する可能性があったのは、先ほど引戸が攻勢に転じていた1ターンのみ。そこを耐えきったことにより、全ての流れは彼女へと傾くことになる。それを当然とする力こそ、彼女を『赤髪の夜叉』として一線級のプロの地位を欲しいままにしてきた最大の理由。結局のところ最後に物を言うのは、どれだけ流れを自分に引き寄せるかなのだ。

そしてことその分野に関して、彼女の持つて生まれたセンスはずば抜けていた。

「まず、イピリアを召喚。1ターンに1度、このカードが場に出た時にアタシはカードをドローできる」

イピリア 攻500 爬虫類族↓アンデット族

次に引いたカードを一瞥し、指先だけでそれを表に向ける。対で呼び出されたモンスターは、白いコートに身を包み、白い帽子を目深に

かぶった保安官風のモンスター。

「光属性モンスター、サイバース・ホワイトハット。このカードはアタシのフィールドに同じ種族のモンスターが2体以上存在するとき、手札から特殊召喚できる」

サイバース・ホワイトハット 攻1800 サイバース族↓アンデット族

「アンデット族が3体、か。それにサイバース・ホワイトハット……これは、最後の最後で俺の読み違い、か」

「そういうことだな。ま、やっぱりアタシに挑むには百年早かったってこった。アンデット族となったバージェストマ・カナディア、イピリア、サイバース・ホワイトハットの3体をそれぞれ上、左、下のリンクマーカーにセットする」

召喚されるのは、アンデット族2体以上を素材に指定する闇属性ではないリンクモンスター。アンデットワールドに揺らめきだした明るいオレンジの炎が、女領主の赤髪を照らし出す。

「戦場いくさばに開く妖あやかしの大輪よ、暗き夜を裂き昏き世照らす篝火となれ！リンク召喚、リンク3！麗神うるわしがみ——不知火！」

麗神——不知火 攻2300

炎を放つ両刃の薙刀の軌跡が、ゆらり揺らめく円を描いた。その持ち主は腰まで届くつややかな黒髪をうしろに靡かせる、1人の女性。芯の強そうな顔に決意を秘め、歩を進めるたびに音もなく彼女の炎の色をした和装と、そこに浮かんだ不知火流の紋様が揺れる。ちりん、と頭に付けた鈴の髪飾りが、狂気と動乱のアンデットワールドには似つかわしくないほど透明な音を立てて鳴った。あるいはそれぐらいの我を通すことができるからこそ、この地にあつて正気を保ち続けていられるのかもしれない。

「そして、リンク素材として墓地に送られたサイバース・ホワイトハットの効果を発動。このターンに限り、相手モンスター全ての攻撃力を1000ダウンさせる」

アークネメシス・プロトス 攻2500↓1500

星態龍 攻3200↓2200

今さらぐだぐだと長話をするつもりは、お互いがない。そもそも引戸側もサイバース・ホワイトハットが出た時点でもはや自分の結果的なプレイングミスとその代償が敗北という形で支払われることはわかっており、それ以上の言葉は蛇足でしかなかった。

だから彼はただ糸巻とほんの1瞬目を合わせ、小さく頷いて目を閉じる。最後の1撃を行う側も、それを受け入れる側も、不思議と気分は穏やかだった。

「麗神でアークネメシス・プロトスに攻撃、かぐよのたけわり輝夜ノ竹割！」

麗神―不知火 攻2300↓アークネメシス・プロトス 攻1500（破壊）

引戸 LP650↓0

「……アタシに1戦で2回も命削りを使わせた相手なんざ、現役の時もそうはいなかった。本当に、大したもんだったぜ。あばよ、マネージャー。いつかまた、物騒なのは抜きで昔話でもしようや」

気を失ったのか声も発さずその場に崩れ落ちていくかつての仕事仲間に、自分でも驚くほど優しい声音で別れを告げる。本当ならば介抱したうえで逃げ出さないようにその辺に縛り付けるのが正しいやり方なのだろうが、あいにく手持ちの手錠は1つしかない。それに、糸巻は引戸のことを人間的に信頼していた。彼はやるだけやって負けたのだから、たとえ目を覚ましたとしても逃げ出したりはしないだろう。

改めて引戸の降りてきたエレベーターと階段を見て、迷うことなく階段に足を向ける。ここでエレベーターに乗り込んだが最後、十中八九こちらの動きは掴んでいるであろう巴が道中で電源を落とすし閉じ込めにかかるだろう。彼女は巴のことを人間的に信用していたが、それは引戸に対するものとは180度逆。あいつならそういうことも平気な顔してやるだろうという負の感情だった。

カツカツという足音は糸巻の姿が2階に消えてもまだしばらく1階フロアに小さく響いていたが、やがてそれも小さく消えていく。引

戸の眠りは、誰にも邪魔されることはなかった。

ターソン34 退路なきエンターテイメント

明るい電灯が煌々と照らす、広い空間。そのうちの壁一面に分割された、無数のモニターの光。光量こそふんだんであるもののどこか寒々しいその光景の中で、それを見つめる男がひとり。彼が見つめるモニターでは、ちょうど糸巻が麗神―不知火のカードをリンク召喚しているところだった。

「あの局面でイピリア、そして追加のドロウカードはサイバース・ホワイトハット……どちらも、あの状況からターソンでの逆転を可能とする数少ない組み合わせ」

忌々しげに、しかしどこか楽しげにそう吐き捨てる彼の名は、巴光太郎。

「明らかに、状況を打破するためのカードを引きよせている。どうやら彼女、全盛期の腕を取り戻しつつあるみたいですね」

くるり振り返り、今まさにとどめの一撃を放とうとしていた監視カメラの映像に背を向ける。その視線の先には気絶したうえで両手両足を縛り付けられ、さらにさるぐつわまで噛まされた男が倒れている。人間である以上はこの男にもなにかしらの名があるだろうし、事実巴自身も先ほどデュエルで勝利して気絶させる前に名乗られたような気もするのだが、巴にとってはもはや過ぎたこと、大事の前の小事であるがゆえにすでにその名は脳裏から忘れ去られていた。

本来、この倒れた男も警察関係者が見たら目を丸くするような人材ではある。長年裏社会で暗躍し、その息のかかった者が警察やマスコミなどあちこちに潜り込んでいるほどの大物組織の幹部。巴たちが健在身を寄せる組織にとっては、長年目の上のたんこぶであった男である。

そんな彼が、なぜこのプラントに転がされているのか。理由は単純、彼がここの本来の持ち主、プラント建設の出資者だからである。新時代を司る新たな兵器となりうる新型「BV」奪取のためデュエルフェスティバルに送りつけた七曜と蛇ノ目が返り討ちにあつたばかりか、そのまとめ役でありデュエルモンスターズ担当の責任者でも

あつた本源氏とも連絡がつかなくなったことに業を煮やし、正確な座標が秘匿されていたはずのこのプラントを拠点とすべく訪れた。そこを兜建設の襲撃、機密書類の強奪を経てこの場所を割り出し先回りしていた巴一行に急襲され、こうして無様な姿をさらしているのだ。「それと、こちらの彼は、と」

しかし巴は倒れた男に一瞥すらも与えることなく、別のモニターへと視線を移す。ちょうどそこでは彼のいる階下の部屋で、待機させていた彼の部下が最後の一撃を受けてライフを0にされる光景が映っていた。

「遊野清明。一切の情報なく、数カ月前突然に何もない空中から湧いて出たと思えない人間……興味はありますが、今来られても困りますね。それにしても、彼がこちらで彼女があちらを選ぶとは。あちらの盤面も大変面白そうではありますが、まずは私の番ですかね」

そう言いざまにモニターと反対の壁、この部屋に1つだけ見えるドアへと視線を向ける。勢いよく外側から蹴り飛ばされて派手に開いたそこに見えたものは、糸巻のいる塔と同じく設置された階段を駆け上がってきた黒目黒髪の少年が蹴り足を下ろす姿だった。

「へいへーい。お前さんに恨みはないけど、せつかくだからデュエルと洒落込もうじゃないの」

「私も貴方への恨みは特にはないですが、ここまで来ていただいた以上は歓迎しないというのも礼節に欠くというもの。肩慣らし程度には付き合っていたらダメでしょう」

プラントの実験を奪う際にしばらく電源を落としていたデュエルディスクを再起動させて巴が椅子から立ち上がると、清明もゆっくりと距離を詰めつつ、その腕輪に触れて水のデュエルディスクを展開する。

2匹の獣が互いに飛び掛かる隙を窺っているかのようにじりじりと、一定の距離を保ちつつ円を描いて半周ほど。両者のはち切れそうなほどに張り詰めた空気が限界に達した瞬間、2人はともにカードを引いていた。

「デュエル！」

一方その頃、隣の塔では。清明にやや遅れ、糸巻も上階に辿り着いていた。次の区画に繋がる扉を勢いよく押し開けると、そこには1メートル先すらも見えないほどの暗闇が広がっていた。

「うおっと」

小さく声が漏れ、そんな自分に心の中で舌打ちする。下の下位が過剰に眩しい照明で照らされていた白い空間だったせいで、こちらも似たような風景が広がっているだろうと思いついていたのだ。光源のひとつもない闇の中はまるで見通せないが、息詰まるような気配はない。なるほど、この闇の中の広さは下と同じくらいありそうだ。つまり、全力でデュエルを行ってもめつたなことで壊れはしない。

「……」

彼女が今昇ってきた階段には、ごく普通の電灯がともっている。ドアを開けた瞬間差し込んだその光は、嫌でもよく目立つだろう。この部屋に誰かいるとしたら、とつくに糸巻の存在には気づいているはずだ。何らかのアクションを起こしてくるかと慎重に10秒、20秒……飽きた。元より糸巻は、何かを待つという行為が好きではない。

「おうコラ、どうせ誰かいるんだろ？アタシを無視たぁいい度胸だ、邪魔するぜ！」

威勢のいい叫びを闇に放り投げ、わざとどかどかと靴音を立てて闇の中に踏み込む。距離が縮まったせいかわ、見えないなりになんとなく人の気配は漂ってきたものの、それがどこにいるのか、そしてどんな存在かまでは掴めない。ますます苛立ちを募らせる糸巻の足の下で、何か小さく固いものを踏みつけた感触とともにかちり、とごくわずかな音がした。

「ちっ！」

何を踏んだのかを考えるより先に、大きく後ろに飛びのいて警戒態勢に入る。もっとも今度は、何か起きるのを待つことにはならなかった。飛びのいた彼女の目に、天井から暗闇を裂くように突然差し込んだ1本のスポットライトによる光の柱がはつきりと見えたからだ。

そして自分が踏みつけたのがそのスイッチだったと理解するより先に、糸巻の目はその光が差す先に吸い寄せられていた。斜めに差し込む光の柱の下、糸巻の位置より高い壇上にぼつりと置かれた机に、1人の男が座っている。ボロボロの薄汚れた包帯の、若い男……半ば覚悟していたからだろうか、不思議とその顔を見ても糸巻は驚かなかった。

だからただ、その名のみを口にする。

「鳥居、浄瑠」

「遅かったつすね、糸巻さん？待ちくたびれましたよ」

そこにいたのは、鳥居浄瑠。しかし糸巻にとってはやや意外なことに、以前の取り付く島もない様子は影を潜めている。むしろ今の鳥居は、その恰好を除けば行方不明になる前と何ら変わらないようにさえ彼女の目には見えた。

そして鳥居の方もそんな表情を読み取ったのか、やはりいつもの調子を保ったままで苦笑する。

「ま、確かに怒ってましたけどね。今はもう、そういうところはとつくに通り過ぎてるんすよ」

「そうかいそうかい、アタシは今忙しいんだ。自分語りなら他所でやってくれ」

「ねえ、糸巻さん。俺、糸巻さんはああいうことしない人だって、割と本気で信じてたんすよ」

「……聞いちやいねえ」

小さく毒づくが、もう一度その言葉を遮ろうとはしなかった。思えば、彼女がこうして鳥居の心の内をまともに聞くのはこれが初めてかもしれないなかった。

「ああいうってのはあれですよ、つまり巴さんと、大義名分があったとはいえ手を組むなんて真似ってことです。俺としちや糸巻さんに限ってそんなこと、って思ってたんすけどね」

むすつとしたまま、糸巻は答えない。ああしなければ、デュエルフェスティバルにテロ行為をぶつけられる可能性は極めて高かった。あそこで利害の一致した巴と糸巻が手を組んだからこそあの程度の

被害で済んだことは、否定する余地がない厳正たる事実だ。

しかし、彼女はそんな言い訳をうだうだと並べるような女ではない。悪魔の誘いをそれと知りつつ乗ったのは紛れもない糸巻自身であり、当然そのリスクもある程度までは想定済みだ。

「デュエルポリス。まあ世界規模の組織である以上、どうしたってあの程度の腐敗は避けられない。そりゃあまあ、俺だってもうガキじゃないわけっすからね、わかってんですよ。でも糸巻さんだけは、そこに手を染めるような人じゃないって思ってたよ」

「それでアンタも……いや鳥居、お前アタシよりタチ悪いからな？ 兜建設の社長、当面入院生活だつてよ」

その言葉に、わずかに鳥居の表情が揺らぐ。すぐ元に戻ったものの、そのほんのわずかな揺らぎを見逃さなかった糸巻が密かにほっと息をつく。少なくとも傷むだけの良心は、彼の中にもまだ残っていることがわかったからだ。

「……あれぐらいやらないと、巴さんの目は誤魔化せませんでしたからね。あの人の誘いに乗ってこの計画に参加した時点で、俺が動きやすくなるためにほんの少しでも疑念の芽を摘んでおく必要があったんすよ」

「動きやすく、ねえ。正直アンタの女々しい正当化なんざ聞きたくもないが、まあ一応聞いてやるよ。鳥居よ、一体何企んでんだ？」

「言えるわけないでしょう、もう。あえて何か言うとしたら、世界を変えられること、っすかね」

「すかしてんじやねえ、タコ！ もういい、もう聞きたくない。お前が何考えてようが、どうせくだらねえ話なのはよく分かった。交渉決裂だ、1発といわず5、6発ぶん殴って本土に連れ戻してやるよ」

呆れ顔で肩をすくめる元部下に、ついにただでさえ小さな糸巻の堪忍袋が爆発した。実は彼女、本人が酸いも甘いも知り尽くしてきたタイプゆえかこの手の世の中舐めた言動は割と嫌いである。暗闇にもお構いなしに怒りのオーラを立ち昇らせながらデュエルディスクを構えると、スポットライトの中で気取った動作で鳥居もまた構える。

「ま、こうなりますよね。すんませんが糸巻さん、俺も今更後には引け

ないんですよ」

「デュエル！」

流れるように始まったデュエル。初手を取ったのは、糸巻だった。

「不知火の武部もののべを召喚し、効果発動。デツキから妖刀―不知火モンスター1体をリクルートする代わりに、このターンアンデット族しか場に出すことができない。来い、妖刀！」

不知火の武部 攻1500

妖刀―不知火 守0

オレンジの和服に身を包む短髪の少女が漆黒の暗闇の中で手にした薙刀を振るうと、その剣さばきに誘われたかのようにどこからともなく灯った炎に包まれ、一振りの刀が宙に浮く。

まずはこの効果を通ったことで、糸巻の場にはモンスターが2体。2体のレベル合計は6であり、アンデットしか特殊召喚できない縛りの中であつてもヴァンパイア・サッカーをはじめとするリンクモンスター、あるいは刀神―不知火を筆頭とするシンクロモンスターに繋げることも可能ではある。しかし怒りの真つただ中にあつても冷静に戦況を見つめる糸巻のデュエリストとしての理性が、それを思いとどまらせた。鳥居浄瑠の操る「魔界劇団」は、あらゆる状況に対して粒ぞろいのモンスター効果と多様な魔界台本を使い分けてあの手この手で相手を翻弄する。制圧用のカードが出せるわけでもないのに頭数を減らすことこそ、愚の骨頂に他ならないか。

「……カードを2枚セットし、ターンエンドだ」

結局エクストラデツキには触れずターンを終えた糸巻に代わり、鳥居が俊敏な動作でずつと座っていた机の上に土足で立ち上がったかと思うやいなや、すうと息を整える。外口を開くと、暗闇にはそぐわないよく通る明るい声が飛び出した。

『ようこそおいで下さいました、まずはこの私、鳥居浄瑠より心よりお礼申し上げます。赤い髪したたった一人のお客様？決して退屈はさせないことを、ここに誓約いたしましたよう』

暗い階層にただ一点、差し込む丸い光源の下で、鳥居が大仰に一礼してみせる。それは、彼の最も得意とする演劇とデュエルを組み合わ

せたエンタメスタイルの立ち上がりには他ならない。当然それを楽しむつもりなど毛頭ない糸巻の視線はどこまでも怒りに満ちて冷たいが、鳥居にとて本人がそう口にしたように既に引けないところまで来ており、彼なりの覚悟をもってこの場に臨んでいる。

だからこそ、あえて一度は捨てたこのスタイルを再び選んだのだ。なにせ鳥居は『赤髪の夜叉』、糸巻の理不尽な強さをよく知っている。それでもあえて怒りに燃える彼女に対し戦いを挑むとしたら、それはこの彼の信じるエンタメデュエルをもってしかありえない。

『さて。私とあなた、たつたふたりの大舞台には、いささか殺風景な空間だと思いませんか？それではお目にかけてみましょう、よりふさわしき舞台に生の息吹が宿るさまを！フィールド魔法、魔界劇場「ファンタステイクシアター」！』

これ見よがしに掲げた一枚のカードをフィールドゾーンに置いた瞬間、突如としてあたり一面に光が弾けた。あまりの眩しさに思わず目をつむる糸巻の耳に、やたらと明るい楽しげな音楽が聞こえ始める。いまだ暗闇に慣れた目にはまぶた越しですら強すぎる光に顔をしかめつつも思い切つて目を開けた糸巻の目に飛び込んできたのは、コウモリ型の風船が乱れ飛び色とりどりのライトが照らす劇場の姿だった。

左右を見れば、彼女の周囲には無数の客席らしき椅子が。そして見上げれば、その先の壇上で満面の笑みをたたえながら両手を広げたポーズをとる鳥居の姿。まさしくそこは、鳥居を主役としたワンマンショーの舞台だった。

『ファンタステイクシアターは1ターンの1度手札で出番を待つ団員の紹介、及び台本1冊の予告を行うことで、更なる追加演目の魔界台本をデッキから手札に加えます。私はこの通り魔界劇団・サツシー・ルーキー、及び魔界台本「火竜の住処」の存在を告知することで魔界台本「ロマンティック・テラー」の公開予告を行います』

手札2枚を明かすことで行われるサーチ。一見すると得た1枚よりも失った情報アドバンテージの方が大きいようにも感じられるが、もとより手札消費の荒くなりがちな、つまり手札をそれだけ使うこと

ができるペンデュラムテーマにとってはさほど痛手でもない。

鳥居があのだ2枚を躊躇なく明かしたのもロマンティック・テラーのカードが欲しかったというよりも、見せた2枚をどうせこのターン中に使ってしまった準備ができているからだろう、糸巻はそう推察した。

「さあ、いよいよ舞台も整いました。万雷の拍手をもって我らが劇座の団員たち、その雄姿をお迎えくださると幸いです。ライト P ペンデュラムゾーンにスケール3、路傍に佇む要石。魔界劇団―エキストラをセツティングし、対となるレフトPゾーンにはスケール2。数字を操る凄腕の新人、魔界劇団―ワイルド・ホープをセツティング!」

ペンデュラムカード2枚の発動により舞台の両端に光の柱が立ち上り、その中にそれぞれ魔界劇団たちの姿が浮かび上がる。与えられたスケールは3と2とペンデュラム召喚には不向きだが、無論そんなことは問題とはならない。

「そして取り出しましたるはライトPゾーンよりエキストラ、そのペンデュラム効果を発動! 相手フィールドにモンスターが存在するとき、このカードをモンスターゾーンに特殊召喚いたします!」

魔界劇団―エキストラ 攻100

舞台の右端に立ち上った光の柱がすぐに消え、その中央に浮かんでいた円盤状の物体とそこから顔を出す三つ子のようにそっくりな3人のエキストラたちがふわふわと降りてくる。その円盤を空中でキャッチしたのが、いつの間にもやら飛び出していたやせっぽっちの団員だ。

「次いで通常召喚、舞台駆けまわる若きシヨーマン。魔界劇団―サツシー・ルーキーです!」

魔界劇団―サツシー・ルーキー 攻1700

「ペンデュラムモンスターが、2体……!」

「おっと、さすがはデュエルポリス。ここまですれば、私の狙いもお見通しですね。それでは今こそ呼びましょう、今宵の舞台を彩るゲスト。私はエキストラとサツシー・ルーキー、このペンデュラムモンスター2体を左下、そして右下のリンクマークにセットし、リンク召

喚を行います！振り子とふいごの錬金術師、ヘビーメタルフォーゼ・エレクトラムです！」

ヘビーメタルフォーゼ・エレクトラム 攻1800

バイクの車体を羽根のようにして背面に広げ、両手に赤熱の刃を伸ばす2丁の拳銃を握りしめたライダースーツの女性。普段の鳥居はあまり使わないカードだが、今度ばかりは彼も戦力の出し惜しみをするつもりはない。

そのタイヤが自動的に回転を始め、産み出されるエネルギーがエレクトラムの体を赤く染める。

『エレクトラムの効果を発動いたします。彼女が一声呼びかければ、デッキの振り子に魂が宿る。錬金の力に導かれたペンデュラムカード1枚を、デッキという名の舞台裏からエクストラデッキという名の舞台袖へと引き寄せるのです。私の選ぶ演者はこちら、我らが誇る世界の歌姫！魔界劇団―メロー・マドンナでございます。そして、そのまま続けて第2の効果を発動！私のフィールドで表側となっているカード1枚を破壊することで、エクストラデッキからペンデュラムモンスター1体を手札に加えます。レフトPゾーンのワイルド・ホープを錬金し、手札に還るは我らが歌姫』

左側の柱も砕け散り、鳥居の場からPゾーンのカードは両方とも消え去った。しかし錬金術とはよく言ったもの、そんな彼の手には回収、さらにドローと次から次へと新たな手札が溢れ出す。

『この瞬間に破壊されたワイルド・ホープの効果、さらにエレクトラム最後の効果を発動。Pゾーンのカードが破壊された際にエレクトラムの効果により1枚のカードを引き、さらに破壊された際にホープの効果によりデッキより新たな魔界劇団の仲間を手札に呼び寄せます……おっと失礼、少々下準備が長引いてしまいましたね。それではお待ちいたしました、いよいよ魔界劇場は第一幕、皆の姿をお目にかきましょう！ライトPゾーンにスケール0の魔界劇団―メロー・マドンナを、レフトPゾーンにスケール8の酸いも甘いも知り分けた古老、魔界劇団―ダンディ・バイプレイヤーをセッティング』

再びそびえ立つ2本の光の柱。先ほどと違うのは、そこに刻まれた

光の数字だ。スケール0と、スケール8。

「これによりレベル1から7のモンスターが同時に召喚可能、ペンデュラム召喚！まずはエクストラデッキからエレクトラムのリンク先に、ワイルド・ホープとサッシー・ルーキーのご両名！そして手札より呼び出されるは、わが劇団のエースオブエース。栄光ある座長にして永遠の花形……魔界劇団―ビッグ・スター！」

魔界劇団―サッシー・ルーキー 攻1700

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

魔界劇団―ワイルド・ホープ 攻1600

3つのスポットライトが追加で灯り、エレクトラム含めた4人の演者を照らし出す。その影に紛れ、そつと糸巻が自らのデュエルデスクに手をかける。差の先にあるのは、彼女自身が先ほど伏せた2枚のカード……だが、まだだ。このカードを使うべきは、今ではない。

「このペンデュラム召喚に成功したことで、ダンディ・バイプレイヤーのペンデュラム効果を発動。エクストラデッキに残っていた最後の団員、エキストラを手札へと呼び戻します。そしてビッグ・スターが放つ効果は、魔界劇団の演目を決める座長の一手。デッキより新たな演目を発表し、その1枚を私のフィールドにセットします。私の選ぶ1枚は、皆様お待ちいたしました。当劇座でもひととき人気の高い一幕、魔界台本「魔王の降臨」！」

「……ここか。トラップ発動、バージェストマ・カナディアー！ビッグ・スターには、そのふぎけた台本の封切り前に裏守備になって寝込んでもらうぜ！」

天高く伸ばした手の中に現れた台本を今まさに読み込もうとしていたビッグ・スターを、まさにその瞬間に客席から飛び掛かったカナディアが押し倒す。左右に控えるサッシー・ルーキーとワイルド・ホープがわたわたと何もできないでいるうちに、ビッグ・スターの姿は裏側に置かれたカードにすっかり変わってしまった。

とはいえ、これはあまりいいカナディアの使い方とは言い難い。糸巻としても本当は、ビッグ・スターの効果を使われる前に裏守備にして効果の発動そのものを止めておきたかった。それを許さなかった

のが、ビッグ・スターのもう一つの効果である。自身の召喚、特殊召喚成功時に相手の魔法、罾の発動を封じるこの効果によって、この花形はより確実に魔界台本をフィールドに呼び込む。

「ああ、なんとというハプニングでしょう。我らが座長は急遽体調不良のため出演辞退、これではせっかくの魔王の降臨も画竜点睛を欠くというものです。はてはて、一体どうしましょう？」

攻撃表示の魔界劇団の種類に応じて発動時の破壊枚数を増やし、さらにレベル7以上が存在すると相手のチェーンすら許さない魔王の降臨。やらないよりは遥かにマシではあるが、あまり有効的とは言えない一手。しかもそんな糸巻の神経をさらに逆撫でするのが、まるで堪えた様子のない余裕綽々な……本心を巧みに隠しているだけかもしれないが、少なくともその様子を外には出さずいささかも崩れない鳥居のエンタメスタイルである。

そしてもつと言えばその怒りには、つい「台本の封切り前」などと、彼のエンタメに乗っかるような形になってしまった自分への苛立ちも多少なりとも含まれる。

そんな糸巻の感情を知ってか知らずか、鳥居は壇上で快活に笑う。いや、気づいていないということはないだろう。彼は紛れもなく、よく鍛え上げられたエンターテイナーなのだから。

「ならば答えは単純明快。ここは降板した座長に代わる、更なる特別ゲストをお呼びしましょう！私は闇属性のレベル4ペンデュラムモンスター、サツシー・ルーキーとワイルド・ホープでオーバーレイ！」

伏せられたままの魔王の降臨はあえて沈黙を保ったままに、壇上に遺された2体の団員が紫の光となって飛び上がる。螺旋を描き、床にぽっかりと空いた宇宙空間へ通じる穴へと吸い込まれ……無音の爆発とともに壇上に着地したのは、雷鳴の逆鱗を煌めかせる漆黒の龍。

「2体のモンスターで、オーバーレイ・ネットワークを構築。エクシーズ召喚、ランク4！覇者の裁きをもたらす龍、霸王眷竜ダーク・リベリオン！」

☆4＋☆4＝★4

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻2500

「ダーク・リベリオン、殺意の塊……ちっ、そっちが本命か……！」

その漆黒の龍を前に、苦々しげに舌打ちする糸巻。おそらく鳥居は、彼女が最初のターンに2枚の伏せを残した時点でビッグ・スターらによる一斉攻撃だけで勝負が終わるなどとは最初から思っていなかったのだろう、と今更ながらに彼の狙いが読めてきた。

つまり、こうである。今回の鳥居にとって、はじめからビッグ・スターは囷にすぎなかった。魔王の降臨による一掃からの一斉攻撃という決して無視できない、途中で妨害せねばどのみち糸巻のライフが尽きるような展開をこれ見よがしに見せることで少しでも彼女の妨害を消費させ、一撃必殺の火力を持ったダーク・リベリオンの通る可能性を引き上げる。油断も隙もない、2重の罠。

「ご明察。今宵の魔界劇団は、いつもとは少々趣向を変えてお送りさせていただきました。そしておあつらえ向きに、ダーク・リベリオンの攻撃力2500に対し不知火の武部は1500。ワンシヨットキルの妙技をば、これよりお目にかきましょう。バトルフェイズに入りまして、ダーク・リベリオンにて不知火の武部に攻撃！」

漆黒の龍が死の翼を広げ、客席側の少女へと迫る。大上段から振り下ろされた放電する逆鱗の一撃が、和装少女の繰り出した薙刀と正面からぶつかり合う。

「そしてダメージ計算前に、ダーク・リベリオンの効果を発動。モンスターとのバトル時にオーバーレイ・ユニット1つを使うことでその相手モンスターの攻撃力は0となり、その数値を自身の攻撃力として吸収し……おや、なんと」

またもポーズをとってこのデュエルの終わりを告げようとしていた鳥居の口から、その寸前に感嘆の声が漏れる。今なお鏢迫り合いを続ける漆黒の龍と炎の少女剣士だったが、その戦況に明らかに奇妙な現象が起きていた。

不知火の武部 攻1500↓0

妖刀―不知火 攻800↓0

バージェストマ・カナディア 守0

「あーっと、これはどうしたことか！カナディアがモンスターとして

現れたということは、トラップが発動された。そして不知火の武部の攻撃力が0に。これらの符号が導きだす答えは』……さすがつすね糸巻さん、やっぱ不意打ちだけじゃ落とされませんか」

最後の一言だけ素に戻った鳥居は、どうやら何が起きたのか把握しづらい。表を向いた最後の伏せカードを前に、ニヤリと笑う糸巻の赤髪が燃える炎と弾ける火花によって断続的に照らされる。

「当たり前だろう？こんなんで終わってやるほど、アタシは甘くねえよ。トラップ発動、アルケミー・サイクル……アタシのモンスターは全て元々の攻撃力が0になり、そいつらが戦闘破壊されるたびにアタシはカードを1枚ドロウできる。いくらダーク・リベリオンだろうと、攻撃力0の攻撃力を吸うことはできないからな」

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻2500↓不知火の武部 攻0

(破壊)

糸巻 LP4000↓1500

やがて少女の薙刀が逆鱗の負荷に耐えかねてへし折れ、そのまま振られる返しの一撃によって貫かれる。雷撃の余波は糸巻の体にも襲い掛かるが、それには持ち前の頑丈さでどうにか凌ぎ切った。

「アルケミー・サイクルの効果で、カードを1枚ドロウだ」

「妖刀―不知火は同じくアルケミー・サイクルの効果を受けているため、今攻撃すればさらにドロウを許してしまいます。なのでヘビーマタルフォーゼ・エレクトラムで、バージェストマ・カナディアに攻撃！」

ヘビーマタルフォーゼ・エレクトラム 攻1800↓バージェスト

マ・カナディア 守0 (破壊)

「自身の効果で特殊召喚されたカナディアは、場を離れた時に除外される」

「果たしてあのひと振りの妖刀は、次のターンにいかなる怪奇を引き起こすのか？恐るべきあやかしの力に立ち向かうべく、勇気をもたらす勝利への凱歌を謡いましょう。メイン2にメロー・マドンナのペンデュラム効果を発動！我らが歌姫は1000のライフを支払うことで、このターン魔界劇団以外が特殊召喚できなくなる代わりに更なる

団員を手札へと呼び寄せることができるとのことです。魔界劇団デビル・ヒールを待機させ、カードを3枚セット。いましばらくのターンエンドといたしましょう』

鳥居 LP4000↓3000

さらに1枚手札を増やし、またも一礼してターンを終える鳥居。同時にビッグ・スターのデメリット効果によって、伏せられていたものの結局使われなかった魔王の降臨が墓地に送られた。切り札の無駄打ちと考えれば悪くはないが、魔王の降臨は鳥居のデッキに当然3枚フル投入されている。これが抑止力とはなる前に、このデュエルは終わってしまうだろう。

「なら、アタシのターンだな。屍界のバンシーを召喚！」

屍界のバンシー 攻1800

『おおっと、これは予想外の展開です。なんと妖刀の隣に名乗りを上げたのは、泣き妖精の異名を持つ屍界のバンシー！舞台と客席で睨みあう2人の女性歌手、これは我々が歌姫メロー・マドンナに対する挑戦状でしょうか!?!』

「言つてな。アタシは妖刀―不知火と屍界のバンシー、チューナーを含むモンスター2体を左下、そして右下のリンクマーカーにセットする。戦場差し込む妖の光、生者も死者も等しく照らせー！リンク召喚、リンク2。水晶機巧―ハリファイバー！」

エレクトラムと対となるエクストラモンスターゾーンに、鋭い水晶を生やした機械の体を持つ戦士が着地する。すかさず糸巻が、そのデッキに手をかけた。

「エレクトラムのリンク召喚成功時、アタシはデッキからレベル3以下のチューナー1体をリクルートできる。来い、ゾンビキャリア！」

ゾンビキャリア 守200

「さあて、こんな華やかな舞台はアタシには似合わないよな？どうも居心地が悪いから、墓地に存在する屍界のバンシーの効果を発動！このカードを除外し、1枚のカードを発動する」

『1枚……そのカードは』

呟く鳥居の周囲で、ファンタステイクシアターが変化していく。

糸巻以外に誰もいなかったはずの客席は実体のない、性別も年代もばらばらな死霊の影が埋め尽くし、華やかなステージはスポットライトの光量こそそのままだが所々に蜘蛛の巣が張り、一部が崩れ落ち、取れない血の跡が浮かび上がる。流れるBGMもいつの間にかやらおどろおどろしげなものに変化しており、ラップ音が時折混ざる。そして極めつけは、ポルターガイスト現象によって音もなく浮遊しだした椅子や書き割りといった小道具のたぐいだろう。

「アンタの領土だけでやりあうなんて不公平だからな、アタシの領土にも案内してやるよ。フィールド魔法、アンデットワールドをデッキから直接発動！このカードがある限り、フィールドと墓地のモンスターはアンデットに書き換えられる！」

水晶機巧—ハリファイバー 機械族↓アンデット族

ヘビーメタルフォーゼ・エレクトラム サイキック族↓アンデット族

霸王眷竜ダーク・リベリオン ドラゴン族↓アンデット族

「これでいい。そのままアンデット族となったハリファイバーとゾンビキヤリアを上、右、下のリンクマーカーにセット。戦場を開く妖の大輪よ、暗き夜を裂き昏き世照らす篝火となれ！リンク召喚、リンク3！麗^{うるわしがみ}神—不知火！」

麗神—不知火 攻2300

傷つき倒れた不知火の武部が、新たな炎の力を受けてその身に秘めた才能を開花させる。先ほどの勝負に決着をつけた長髪の女剣士が、アンデットの巣窟と化した劇場を照らす爆炎の中から現れた。

「まだまだ！墓地のゾンビキヤリアは手札1枚をデッキトップに戻すことで、除外デメリット付きでの組成が可能となる。そして甦ったゾンビキヤリアと麗神—不知火を右、右下、左下、左のリンクマーカーにセットするぜ……！」

「リ、リンク4……!?!」

2体のモンスターが4つの光となって空中に浮かんだ八角形の指定された箇所に入り込んだ瞬間、先ほどまでの炎とは違ってかわつて極寒の吹雪が巻き起こる。白く染まりゆく世界の中で、ただ1点だけ

色を失わない赤い髪が揺れた。

「恐れおののき感謝しな？アタシはこいつを、めったなことじゃあ使わないんだ。それを出してやるってんだからな！戦場染め変える妖の白刃よ、凍てつく輪廻を零に還せ！リンク召喚、リンク4ツ！零氷れいひょうの魔妖まやかし―雪女！」

零氷の魔妖―雪女 攻2900

糸巻らしくもない連続リンク召喚により、氷を操る純白の女性が冷酷な笑みを浮かべ現れる。だが、これで終わらせるつもりはまだ彼女にはないらしい。残る手札2枚のうち、1枚がゆつくりと表を向いた。

「魔法カード、生者の書―禁断の呪術。これでアタシの墓地からアンデット1体を蘇生し、さらにアンタの墓地からモンスター1体を除外させてもらう。麗神を蘇生しワイルド・ホープを除外、そしてこの蘇生により雪女の効果を発動する。魔妖流……幽世かくりよのほむらだち焰断」

麗神―不知火 攻2300

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻2500↓0

「『ああなんとということでしょう、なんと我が龍、迫りくる敵のライフを刈り取る一撃必殺のダーク・リベリオンが！雪女の手にした薙刀の一振りによって、物言わぬ黒き氷像となってしまうました！』」

「雪女がいる状態で墓地のモンスターの蘇生、または墓地のモンスターが効果を発動した場合、1ターンにつき2回まで相手モンスターの効果と攻撃力を零に還すことができる。これで終わりだ、鳥居！まずは麗神でエレクトラムに攻撃、輝夜かぐよのたけわりノ竹割！」

麗神―不知火 攻2300↓ヘビーマタルフォーゼ・エレクトラム

攻1800（破壊）

鳥居 LP3000↓2500

ふわりと赤い軌跡を白い世界に描いて飛んだ麗神が、赤熱する薙刀を振るう。対するエレクトラムも二丁拳銃を交差させてそれを受けようとするが、炎の対決は麗神が制した。そして、この攻撃によって鳥居のライフは2900を下回る。

「追撃だ、雪女でダーク・リベリオンに攻撃！」

「『恐るべき極寒の地に、魔界劇団これにて終幕か!? いえいえお客様、そうとは限りません。どのようなピンチだろうとも、魔界劇団は輝くのです。さあ、あの空をご覧ください。あれは鳥か、飛行機か? いえいえ、そのどちらでもございませぬ。リバーズカードオープン、ヒーロー見参! 相手モンスターの攻撃宣言時、遅れてやってきたヒーローを私の手札から場へとノーコストで呼び出すことが可能となるのです。そして、見ての通り私の手札は2枚。当然、その正体は覚えていらつしやいますね?』」

「まあ、な」

しぶしぶ頷く糸巻。そう、彼女には今鳥居の手にある2枚の正体がわかつている。ひとつは攻撃力100のレベル1モンスター、魔界劇団―エキストラ。だがもう1枚は攻撃力3000を誇るレベル8モンスター、魔界劇団―デビル・ヒール。この2択のうちエキストラを引けば糸巻の勝利が決定するが、デビル・ヒールを選んでしまったならばこのデュエルはまだ続くことになる。鳥居の頭上に浮かんだ2枚のカードの裏面、確率50%の賭け。

普段の彼女であれば迷いなくあのどちらかを選び、そして正解を引き当てることができるだろう。だが、それは単なる運の問題ではなく糸巻が勝負の流れをその手に握ることができるからだ。流れさえつかめば、おのずとすべての事象は彼女のために動き出す。しかしいくら気に食わなかりうとも強者であることは間違いない鳥居とのこの一戦、まだ勝負はどちらにも傾きかねない。

「……右だ!」

意を決した糸巻が吼え、鳥居がそれを笑う。選んだカードをゆつくりと表にすると、糸巻の顔がしくじった、と歪んだ。

「待機していた我らがヒールが、劇座の危機に空の彼方より立ち上がる! 怪力無双の剛腕の持ち主、魔界劇団―デビル・ヒールの登場です!」

体を丸めくると回転しながら劇場の壁をぶち破り、ダーク・リベリオンの氷像の前に両手を広げて着地する紫の巨漢。大きく広げた分厚い手のひらから放たれる衝撃波が、冷酷な笑みを浮かべ氷像に

迫っていた雪女の足を止めさせる。

『デビル・ヒールの効果発動！このカードが場に現れたターンに相手モンスター1体を選択し、ターン終了時までその攻撃力を魔界劇団1体につき1000ダウンさせます、ヒールプレッシャー！』

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000 悪魔族↓アンデット族

零氷の魔妖―雪女 攻2900↓1900

「さっきのターン、アンタの手札5枚の内4枚のタネは見切れてた。何せサーチやらなんやらで火竜の住処、ロマンティック・テラー、エキストラ、デビル・ヒールはアタシにも見せてくれてたからな。残り1枚ならそれも台本の可能性は十分あると踏んだんだが……ヒーロー見参とはな、一杯食わされたぜ」

『お褒め頂き光荣でございます』

「だが、弱体化はまだ1000ポイント。雪女、どうせとどめ刺せないなら効果も使えないダーク・リベリオンは放置でいい。せめてその横で寝込んでる座長、ビッグ・スターをぶち抜いてやれ！」

零氷の魔妖―雪女 攻1900↓??? 守1800（破壊）

糸巻の指示に従った雪女が、デビル・ヒールの隙をついてその横に伏せられた1枚を氷漬けにする。1瞬だけ氷の内部に固まったポーズのビッグ・スターが見えた気もしたが、すぐにその氷の塊も粉々に弾けてキラキラと光の粒を辺りに撒き散らした。

「アタシの手札は残り1枚……こいつをセットして、ターンエンドだ」

零氷の魔妖―雪女 攻1900↓2900

『ビッグ・スターの機転によって敗北の憂き目を免れた魔界劇団、しかし座長も倒れ大ピンチには違いない！さあ御用とお急ぎでない方はご覧あれ、はたして魔界劇団はこの不利を跳ね返すことができるのでしょうか！』

「アタシは御用でお急ぎなんだ、見てやらねえからそこをどけ！」

『ノンノンお客様、私のショーはこれから本番です。私のターン、ドロ―！闇の誘惑を発動し、カードを2枚ドロ―。そして闇属性モンスター、エキストラを除外します。さらにこのターンも1000のライフを払い、歌姫の効果によって団員を手札に』

鳥居 LP2500↓1500

これで、鳥居の手札は3枚。警戒を強める糸巻の前で、今再びペンデュラム召喚が行われようとしていた。

「それでは次なるターンのテーマは、魔界劇団反撃の時。セツティング済みのスケールによる、ペンデュラム召喚を行います！まずはエクストラデッキより不死鳥のごとく復活を果たした座長、魔界劇団―ビッグ・スター―そして手札からは魅力あふれる魔法のアイドル、魔界劇団―プリティ・ヒロイン―そして波乱を起こすアドリブの達人、魔界劇団―コミック・リリーフの登場です！」

三角帽子の座長を先頭に、一足先に睨みをきかせていたデビル・ヒールの隣に魔法少女と瓶底眼鏡の小男が並ぶ。この大量展開こそがペンデュラムの真骨頂であり、糸巻の目から見ても間違いなく鳥居はそれを熟知していた。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500 悪魔族↓アンデット族

魔界劇団―プリティ・ヒロイン 攻1500 悪魔族↓アンデット族

魔界劇団―コミック・リリーフ 攻1000 悪魔族↓アンデット族

「そしてこのターンも、ビッグ・スターの効果が発動！今宵呼び出す演目は……」

そこで少しだけ、考える。これで並みの相手ならば、2枚目の魔王の降臨をもってきてチェーン不可の破壊を行い糸巻のモンスターを一掃、一斉攻撃で今度こそとどめを刺しに行くのがベターだろう。だが、先ほどのターンにそれでワンターンキルを防がれた苦い経験は忘れようとしても忘れられない。そして今回の伏せカードも、あの時と同じく2枚。強力ゆえに読まれやすい魔王の降臨に対抗できるカードを引きこんでいる可能性は、十分に考えられる。

「……魔界台本「ファンタジー・マジック」をフィールドにセットし、そしてこちらを即座に発動！今作にて勇者として選ばれた団員の名は、コミック・リリーフでございます！」

「何!？」

やはり魔王の降臨読みだったのか、意外そうな声を上げる糸巻の前でコミック・リリーフ専用サイズに調整された勇者の剣にマント、そして魔界劇団のシンボルが刻まれたドワーフの盾が舞台袖の衣装箱より飛び出してくる。飛び上がったコミック・リリーフがあわただしく新衣装をキャッチし、そのままバランスを崩して大仰な動作で一度転んでみせたりしながらも素早い動きでそれを装着し中年勇者と似た装いとなる。仕上げにハチマキの代わりなのかどこからともなく取り出したネクタイをぎゅつと頭に巻き、短い手足で剣を掲げポーズをとって見せた。

『フアンタジー・マジックの効果を受けた勇者コミック・リリーフは、このターンバトルを行ったモンスターの戦闘破壊に失敗した場合にそのモンスターを手札に戻す効果を得ます。そして勇者コミック・リリーフは元々のモンスター効果により、自分の戦闘によって発生する私への戦闘ダメージを0とすることができるのです!』

「自爆特攻で無理やりこじ開けるつもりか……?」

いよいよ大詰めだった。糸巻の場の伏せカードがまたバージェストマのたぐいであれば、止められるとしても1枚につき1体のみ。攻撃力の高いデビル・ヒールとビッグ・スターを無力化されたとしても、バウンス能力を得たコミック・リリーフならば雪女をエクストラデッキに送り返すことができる。ペンデュラム召喚されたプリティ・ヒロインとフアンタスティックシアターがあればモンスター効果も1度は牽制できるため、1ターンはどうか持ちこたえられるだろうと目算をつける。

「(他に考えられるカードとしては不知火側のサポートであるアンデット版ゴッドバードアタックこと燕の太刀、あるいはダメージを完全にシャットアウトする輪廻の陣。後者を仕込まれてたらどうしようもないけれど、フィールドのアンデット1体を除外するコストは今の糸巻さんの場の状況では重い。前者なんて持っているなら、メロー・マドンナの発動時にPゾーンを真っ先に狙うはず)」

それ以外の選択肢は薄い。あの局面で完全に無意味なカードを引くとは欠片も思っていないが、このプラントは糸巻にとって敵地

ど真ん中、使い慣れていないカードをわざわざデッキに入れて持つてくるような真似をするとも考えにくかった。万一ミラーフォースのような逆転のカードなど伏せられていた場合でも、鳥居の手札には今さつき闇の誘惑でドロウした永続トラップ、ペンデュラム・スイッチが存在するためそれを駆使すればもう1ターンぐらいは稼げるはずだ。

勝ちを急げば、赤髪の夜叉はその瞬間にこちらを食らい尽くしに来る。守りに入れば、お構いなしにそれを突き崩す。理不尽の権化のよなこの元上司と相對するためには、常に崖っぷちで綱渡りのバランスを保ち続けなければならない。その認識に誤りはなく、鳥居に油断はない。ゆえに勝ちを焦らず、しかし確実な石橋を叩いて渡るような勝利の道を踏みしめていく。

『それではこれにて攻勢、一気にバトルと参りましょう。まずは最初の一撃、勇者コミック・リリーフで零氷の魔妖―雪女へ攻撃!』

またもや舞台袖から転がってきた自分の身長よりも大きな、とてもせいぜいビッグ・スターと同程度のサイズのボールに飛び乗ったコミック・リリーフが、玉乗りで一気に客席へと飛びそのまま雪女を上から押し潰そうとする。

だが、である。結局のところ対策を講じようとした時点で、既に思考のドツボにはまっているのだ。その瞬間に糸巻が浮かべた表情……獲物に飛び掛かる寸前の肉食獣の笑みに、鳥居の背筋が冷たくなる。

「待つてたぜ、ノコノコ突っ込んできてくれる時をよ!速攻魔法、異次元からの埋葬!アタシがゲームから除外したモンスター、屍界のバンシーとゾンビキヤリアを選択して墓地に戻す。そして墓地から、屍界のバンシーの効果を再発動!デッキから2枚目のアンデットワールドを直接発動だ!」

『く……ならば、ファンタスティックシアターの永続効果!このカードとペンデュラム召喚された魔界劇団が私のフィールドに存在するとき、相手モンスターが発動した効果は1ターンに1度だけ「相手フィールドにセットされた魔法、罫カード1枚の破壊」に書き換わり

ます！」

ファンタステックシアターの照明が瞬き、上空を飛び回っていたアンデットワールドの死霊のうち1体が軌道を変えて鳥居のセットカードへと突撃する。しかし、糸巻はといえば落ち着き払ったものだった。

「効果を書き換える、ねえ。大した効果だとは思うが、それだけだ。1ターンに1度だけ、プレイヤーの意思にかかわらず強制的に適用される効果。つまり、雪女の効果のトリガーとしちや十分ってことだ」

「！」

声にならない声。それとも、悲鳴を急速に膨れ上がった吹雪がかき消したのかもしれない。足元から急速に成長した氷柱に呑み込まれ、コミック・リリーフもまた氷漬けとなる。そこにゆっくりと近づいた雪女が氷の薙刀を掲げ、無造作にも思える動作で突きを放つ。自慢の戦闘ダメージを0とする効果も、無効となっては何の意味もなく。モンスター効果ではないゆえに影響を受けない付与されたバウンス能力も、その前にプレイヤーのライフが尽きていては適用のタイミングが訪れることはない。

魔界劇団―コミック・リリーフ 攻1000↓0（破壊）↓零氷の

魔妖―雪女 攻2900

鳥居 LP1500↓0

「大人しくしときな、鳥居。アンタはアタシと違ってまだ若いし、いくらでもやりようはあるさ」

「……結局、俺じゃ駄目だったんすかね。裏取引だらけの世の中を続けていくしか、デュエルモンスターズが生き残る方法はないんですか？」

消えていくファンタステックシアターの中で大の字に倒れた鳥居が、よろめきながらも2本の足で立つ糸巻に問いかける。いつになく素直に彼女なりの答えを答える気になったのは疲労がたまっていたせいかな、それとも鳥居の声色から伝わってくる、10年以上経った

今でも裏稼業的な立ち位置に甘んじているデュエルモンスターズ界への悲哀に対して何か思うところがあつたからか。本人にも、よく分からなかつた。

「さあ、な。少なくとも、それを考えるのはアタシじゃない。アンタみたいな若いのが、八卦ちゃん達次の世代のデュエリストたちさ。アタシみたいな時代錯誤の老兵に、今残された役目はただひとつ。いまだにこの稼業に居座って過去の栄光を追い求める老害どもに、引導を叩きこむことだけさ。アタシらの世代がまいた種は、アタシらが刈り取ってやんなきゃな。ゴミはゴミ箱に、だろ？」

もつとも、自分の出した結論が詭弁に過ぎないことは糸巻自身が誰よりもよくわかつていた。もつともらしい理屈をつけて偉そうに語ってはいるが、やっていることは結局ただの責任逃れ、考えることの放棄でしかない。

しかしそんなどうしようもない、戦うことしか能のない自分であっても。鳥居のようなちゃんと自力で考える頭を持ったデュエリストのために、まだやってやれることはある。

だがその前に、彼女にはひとつ確認したいことがあつた。

「ちなみに鳥居よ、お前ここで一体、何やらかすつもりだったんだ？」
「……あのデュエルフェスティバル騒ぎの時、大量に爆発物のカードがありましたよね。あれ、あの後俺が回収して巴さんに渡したんすけど。その時にいくらかちよろまかしてこの中央棟、動力部に隠してあるんすよ」

敗北に観念したのか、それとも演劇モードが切れて素に戻ったせい。素直に口を開いた鳥居が、自身の計画を語りはじめた。

それは簡単に言ってしまうと、あの時七曜たちが行おうとしていた爆破テロの逆。そもそもこのプラントは巴の持つ異常出力の「BV」量産のために作られた場所でありそのことは糸巻も知つたうえで乗り込んできていたのだが、万一その計画が失敗に終わったとしても他の仕事ができるようにリスクマネジメントが行われていた。

「それが、糸巻さんも見たでしょう？この巨大電波塔ですよ」

あの電波塔のサイズならば、異常出力のデュエルディスクには劣る

ものはかなり強力な「BV」システムを電波の届く限り撒き散らすことができるという。それを聞いて糸巻も、迷いの霧を打ち消そうとして自らのデュエルディスクを起動しても「BV」妨害電波がまるで役に立たなかったことを思い出した。そして恐ろしいことにこのプラント、実は水面下に動力部があり海上であれば移動ができるらしい。「おいおい、それじゃ何か？この馬鹿でかい電波塔を力業で世界中に動かして、デュエルポリスの妨害電波を上から塗り潰そうってのか」「移動コストも馬鹿にならないうえ、リスクも特大なんてもんじゃないです。だからこれはあのデュエルディスクの量産に失敗した場合の、本当に万一の時の奥の手だったらしいっすけどね」

「なんつーか、もうスケールがまるで違うな。アタシの給料ひとつ出し渡るうちのお偉いさんとは偉い違いだぜ、ったくよ」

「あはは……でも逆に言えばここにはプラントの生産ラインを動かす、なおかつプラントごと移動を可能にするだけの莫大なエネルギーが溜まっている、とまあそうなるわけですよ」

「そいつをぶつ飛ばせば、裏稼業連中にとっちゃいい見せしめになるってわけか」

「さらにうまくやれば、あの異常なデュエルディスクの開発が原因で大爆発が起きたってことにもできるわけじゃないっすか。そうすれば、デュエルモンスターズそのものから手を引くところだって出てくる。一度この癒着を切り離さないと、デュエルモンスターズの再生なんてもう無理なんすよ」

そう締めくくった鳥居の話をじっくりと頭の中で反芻し、そこから得た情報を考える。そして、これから糸巻自身がやろうとしていることも。少し甘いかな、とも思う。アタシも年を取ったのか、と自嘲する。しかし、この言葉だけはどうしてもこの男にかけておきたかった。

「……なあ、鳥居」

「なんすか、糸巻さん。お縄に付けるってんなら、さっくりお願いしますよ」

『潜入捜査』ご苦労だったな、鳥居

「え……」

不意な言葉に信じられないものを聞いた、といわんばかりの顔つきで、頭を起こして糸巻をまじまじと見つめる。あいにく当の糸巻はそんな鳥居に背を向けており、両者の視線が合うことはなかった。

「もちろん、アンタが兜の社長にやったことなんかの罪が消えるわけじゃねえ。それでもアタシがこう言つとけば、多少は減刑を考える考慮材料ぐらいにはなるはずだ」

「でも、俺」

「アンタが今までやってたのは『アタシが上官命令で行かせた潜入捜査及び工作』だ。他に何も言うことはねえ」

「糸巻……さん……」

半ば呆然とその名を呼び、さらに何かを言いかけける鳥居。しかし、その言葉よりも早く第三者の声が部屋に響いた。

「麗しき上司と部下の信頼関係、ですか？なかなかの三文芝居でしたが、お涙ちようだいは……特に演者に貴女がいると思うだけで、私は虫唾が走る性質です」

「痺れを切らしてラスボス様のご登場か、巴？つて、おいおい……」

その声の主は、紛れもなく巴光太郎。しかし、そこに現れたのは一人ではない。それを見た糸巻が、思わず呻いて頭を抱えた。

彼が乱暴に襟を掴んだ状態ですると片手で引きずっているのは断じてぼろ雑巾などではなく、そこにいたのは黒目黒髪の少年。激闘の末にこの男の前に敗北し、そのまま気を失った遊野清明の姿だった。

ターン35 家紋町の戦い（前）

もはやエンタメ性の欠片も残っていない殺風景な広間に踏み込んだ巴が最初にしたことは、片手で引きずってきた清明をぼろ雑巾か何かのように投げ飛ばすことだった。

「邪魔です」

細腕からは想像もつかないほどの力で床を転がされ、何度か打ちつけられて糸巻の近くまで来てようやく止まる清明。今の衝撃で目が覚めたのか、体を震わせながらどうにか起き上がろうとして……結局は、その場に無様に倒れ込んだ。

それでも倒れたまま無理に顔を上げ、糸巻の方へ顔を向ける。

「…………ごめん。負けちった」

「見りやわかるわ。もういいから寝とけ」

言うだけ言ってまたがつくりと崩れ落ちる清明を見下ろしながら、巴がゆっくりと歩き出す。単に急ぐ意思がないというよりも、まるで何かを待っているかのように妙に緩慢な動作。

「そこの彼も前評判からすると、もう少し楽しめるかと思っていたんですがね。というより、明らかに普段の半分も力が出せていない風でした。何か理由あってデツキに不自然な弱体化を入れたのか……それとも、最初から勝つ気がなかったんですかね」

「アンタにしちや随分珍しいな、精神分析の真似事か？ 一体何企んでやがる。前置きなんざ今更だ、さっさと始めようぜ」

そして、腐つてもライバルである男の違和感に気づけないほど糸巻は鈍くない。むしろ、どこまでも相容れないこの男のことであるからこそ、かえって勘が冴えるというべきか。剣呑に睨みつける鋭い視線に肩をすくめ、巴が足を止めることなく返事代わりに軽く片手を上げる。

するとその瞬間、広間中の明かりが一斉に消えた。まるでこの部屋に最初に入った時のような暗黒に包まれる中で、咄嗟に反応できなかったことを悔やむ糸巻の耳に声が響く。

「まあ、そう急ぐこともないでしょう。がさつな貴女には理解できない

い感覚でしょうが、私にも矜持というものがありません。そのひとつが、糸巻太夫。貴女を倒すときにはこの私の手で、最大限の屈辱を与えたいのでその心をへし折ると決めてるんです」

それは、妄執としか形容しようのない思い。しかし、そんな歪んだ思いのたけを聞いた糸巻は衝撃を受けるでもなく、それどころか深々と頷いていた。今の言葉が、普段めつたなことでは表に出さない巴光太郎という男の本心であり、同時に自分がこの男に対し抱いているそれであることを理解したからだ。

本来、糸巻太夫と巴光太郎は同じ世界に同時に存在してはならないものであった……と言え、他人はそれを笑うだろう。だが彼女と彼、糸巻と巴の2人にとっては嘘偽りなく、疑問をさしはさむ余地のない厳然たる事実なのだ。

「そんなわけで、ひとつ貴女に見ていただきたいものがあるんですよ。おそらくは、もう少しで始まるはずですよ」

パチンと指を弾く音が響くと、暗闇の中に突然四角いスクリーンが浮かぶ。映写だ、とはすぐに分かった。映画と同じ原理で、この広間のどこかから適当な壁めがけて何らかの映像を流している。

そして画面に映っていたのは、ある街の風景。カメラ自体が移動しているらしく、一定の速度で周りの光景が後ろに流れていく。そしてその街並みに、糸巻は見覚えがあった。遅れて気が付いたらしい清明と鳥居が、小さく息を呑む。

「解説の必要はなさそうですが、一応補足しておきましょう。この映像は以前のデュエルフェスティバルの際に貴女方にも提供した、清掃用ロボのカメラから送られてくるリアルタイムの映像です。そして今向かっているのが、と。ああ、どうやら到着しましたね。カードショップ『七宝』、我々元プロデュエリストにとつての生ける伝説、『グランドファザー』七宝寺守の隠れ家……そして、あなたの妹分も住んでいる場所ですね」

「テメエ、何する気だ!?!」

「まあ、少し黙っていてくださいよ。今が一番大事なところなんです……と、もう始まっていますか。予想より早いな」

ぼそりと呟き画面を仰ぐ巴の迫力に有無を言わさぬものを感じ、スクリーンの明かりを頼りに把握した位置めがけ飛び掛かろうとしていた足からどうにか力を抜く糸巻。壁に穴が開くほどの気迫で壁を睨みつけていると、徐々にその店内へと向けられたカメラのピントが合ってきた。何か興奮した様子で、激しく声を張っている。

「……だから！ 一体あなたたち、なんなんですか！」

後ろで小さく震える友人、竹丸を小さな体で必死に庇いながら、自分も泣き出したくなるのを堪えてきつと睨みつける八卦。本人の脳内にあったイメージ画像としては悪人を震え上がらせる仕事モードな糸巻の眼光が念頭にあつたのだが、対峙する男たちの表情を見る限りではあいにくその迫力とは程遠い表情にしかならなかったようだ。

少女たちが学校帰り、最近の日常となったカード談義やデュエルを行うために家紋町では貴重なカードショップである七宝にやってきたときは、まだいつも通りの日常だった。店主であり少女にとつては叔父にあたる七宝寺老人はどこかに出かけているのか店の扉は閉ざされていたが、当然自分の家の合鍵は所持していたためそれを開いた時も、やはりいつもの毎日だった。

そんな日常が崩れたのは、閉められたはずの店内の暗がりにも2人組の男が息をひそめていたことに気づいた時だった。

「あ、あなたたち……!?!」

咄嗟に少女が視線をやったのは、店内唯一のレジ。早い話が強盗だと考えてのことだったが、レジスターを無理にこじ開けたり持ち去ろうとしていた様子はない。それどころか自分たちの姿を見られたことに慌てたり逃げ出そうとするでもなくデュエルデスクを構えてじりじりとにじり寄ってきたことでようやく自分たち、いや偶然居合わせただけの竹丸は関係ない、自分こそがこの男たちの狙いなのだと気づいたときには、すでに後ろに回り込んだ男の片方によって退路が塞がれていた。その顔が暗がりから出たことで判別がついたのだが、片方の男はマスクで顔を隠しているが、もう1人の若い男は素顔を丸

出しにしている。

事態は何ひとつ呑み込めないが、この2人の不審者にはこちらへの害意があることだけはわかる。そして幸いにも、ここでデュエルをする気だった少女たちの通学カバンの中にはデツキとデュエルディスクが入っている。

少女たち？ そう、少女「たち」だ。いかに才気溢れる八卦九々乃といえど、2対1となると苦戦は否めない。この場にいるもう1人の少女も、もはや守られるだけの立場ではいられない。糸巻、八卦、清明。いきなり屈指の実力者たちの戦いから実戦を知った文学少女は、この場で一番の初心者でありながらも秘められていたセンスとパワーレベリングの成果によって急速に花開きつつあった。

だから、竹丸は声を掛ける。自分をかばおうとする目の前の少女に、助けてもらった借りを返すために。もうあの時の自分とは違うのだと、自分の足で前に出る。

「竹丸さん……？」

背後の動きに気が付いた八卦がキョトンとした顔で振り返ると、少女と背中合わせの状態で背後の不審者と対峙した竹丸が眼鏡の奥で小さく笑った。その様子から言いたいことを察した少女が、言葉よりもなお雄弁にその本心を語る不安と心強さの入り混じった複雑な笑顔で返す。清掃用ロボが店の外からカメラをひっそりと向けていることには誰も気が付かないままに、4つの声が同時に響いた。

「デュエル！」

「八卦ちゃん……！ それに竹丸ちゃんまで……！」

一方画面の向こう側、それを見つめる糸巻は、我知らず指が白くなるほどに拳を握りしめていた。感情むき出しにする宿敵の様子にやや呆れつつ、鳥居が先を促した。

「貴女にも、そんな人間らしい表情ができたんですね」

「アンタの……アンタの差し金か」

「おや、ようやく口をきいたと思っただらそんなつまらないことを。そ

もそも、貴女は何に対しても無頓着なんですよ。13年前のあの時、貴女が動いたからこそデモ行進に賛同したデュエリストがいた。つい先日の鳥居かれにしたって、私は貴女が職務放棄したアフターフォロウをしたまでのことです。そして今も、少し考えればわかりそうなものでしょう。あの少女は貴女の妹分だ、私なら何かしら目を離さないようにしますがね」

「……」

反論できず押し黙る糸巻にしてやったりと酷薄な笑みを浮かべ、顎で画面を指し示す鳥居。

「ほら、そんなことを言っている間に。始まりますよ」

「俺のターン。先行は貫った！永続魔法、スローライフを発動！これにより互いのプレイヤーは1ターンのうちに、通常召喚か特殊召喚のどちらかを行ったらもう片方の行動はとれないぜ。俺がこのターンに選ぶのは、通常召喚だ！メタルフォーゼ・ゴールドライバーを召喚し、さらにフィールド魔法、メタモルフォーメーション F を発動！この効果によって俺のメタルフォーゼは攻守が300アップだ」

錬金術の叡智の決勝により産み出された未知なる金属製のバイクにまたがり、赤熱した片手斧を手にするライダーが豪快なウイリー走行で店内に現れる。その顔を少女たちは知らないが、画面の向こうにいた糸巻と鳥居には見覚えがあった。ここ数カ月の間立て続けに起きている一連の騒動の始まり、裏デュエルコロシウム事件。その情報を自らの保身のため最初に彼女らデュエルポリスにもたらしたのが、コンビニ強盗に手を出したチンプラ崩れのこの男だった。

そして彼のデツキは、その時と変わらず「メタルフォーゼ」……どうやら糸巻にこつぴどく敗北したのちも、特にデツキを改造したりはしてこなかったらしい。

メタルフォーゼ・ゴールドライバー 攻1900↓2200 守500↓800

「さらにスケール8のレアメタルフォーゼ・ビスマギア2体をそれぞれぞ

れライトPゾーン、レフトPゾーンにセッティングし、ビスマギアのペンデュラム効果を発動だ。もう片方のビスマギアを破壊し、デツキからメタルフォーゼ魔法、または罫を直接セットできる。俺が選ぶカードは、メタルフォーゼ・カウンター！」

カードの破壊という緩いトリガーによってデツキから後続のメタルフォーゼを一切の制限なくリクルートできるトラップ、メタルフォーゼ・カウンター。これで最低でも、2体の壁が男の場に揃ったことになる。

「そして俺のPゾーンにメタルフォーゼが存在することで、メタモルフの更なる効果が解禁される。俺のメタルフォーゼモンスターは、相手モンスターのあらゆる効果を受け付けない！ターンエンドし、エンドフェイズに破壊された方のビスマギアの効果を発動。デツキからメタルフォーゼ・シルバードを手札に加えるぜ！」

さらに後続を手札に加え、ターンが終わる。今回のデュエルはやや変則的な、バトルロイヤルとタッグを足して2で割ったようなルールの下に行われており、普段のタッグデュエルとは違いプレイヤーそれぞれが固有のフィールドとライフを持ち、墓地も各人で別れている。そして次のターンプレイヤーである八卦は、まだターンの回ってきていないもう1人の男と竹丸には攻撃できないものの、メタルフォーゼ使いの目の前の男に対してはすでに攻撃が可能。

そしてそれが、彼にとつての不幸だった。聡い少女は、自分が狙われているという時点でこれは糸巻への人質の意味があるのだと推測を立てていた。かつて精霊のカード事件の際に同じことをされかけた際には未遂に終わったが、今再びそれをやろうというのだろうか、と。そもそもお姉様に実力で勝てないからと自分を人質にとるという行為がまだまだ青い少女の正義には我慢のならない行為だったし、それでお姉様に迷惑がかかるだろうということを考えるだけで胃が縮み上がる。さらに今は自分だけではなく、全く関係のない竹丸まで巻き込んでしまっている。デュエルをするたびに毎回変なことに巻き込まれ、この親友がデュエルを怖がってしまったらどう責任を取ってくれるのだろうか。要するに今、糸巻のいない心細さをひと先ず脇に押

しのけることができる程度には少女も真剣に怒っていたのだ。

「私のターン。魔法カード、融合を発動！手札のE・HEROであるエレメンタルヒーローシャドー・ミスト、そして地属性の薔薇恋人バラ・ラヴァーで融合をします。英雄の薔、今ここに開花する。龍脈の大輪よ咲き誇れ！融合召喚、E・HERO　ガイア！」

ゴルドライバーと対峙するように床を破って地中から現れたのは、黒い大地の巨体を持つ巨漢のヒーロー。地属性というクノスペと一致した属性を素材として要求する都合上、いわゆる属性HEROの中でも特にこの少女が愛用する融合の1体である。

E・HERO　ガイア　攻2200

「E・HERO　ガイア、融合召喚成功時に相手モンスターの攻撃力の半分を吸収できるってんだろ？へっ、俺の話聞いてなかったのか？メタモルフとセツティング済みのメタルフォーゼがある限り、そんなモンスター効果は聞かないんだよ！」

「申し訳ありませんが、うるさいので黙っていてください！シャドー・ミストが墓地に送られた時、デッキから更なる仲間1体を手札に加えることができます。この効果で……」

「サーチは通せないなあ！手札から灰流うららの効果発動、そのサーチ効果は無効となるぜ！」

どこからともなく灰の色をした桜吹雪が舞い上がり、八卦の姿を包み込む。しかしサーチを封じられてなお、その表情に焦りの色はない。

「問題ありません。でしたら魔法カード、E－エマージェンシーコールを発動します！これによりデッキからE・HEROの1体、オネステイ・ネオスを手札に。そして墓地の薔薇恋人を除外し、効果発動です。手札から植物族1体を、このターンのみトラップへの耐性を付与したうえで特殊召喚します。来てください、私の信じる最強のヒーロー。クノスペ特殊召喚です！」

E・HERO　クノスペ　攻600

そして満を持して呼びだされる薔のヒーロー、少女のエースオブエース。普段の彼女ならばここで地獄の暴走召喚からの必殺コンボ

へと繋ぐのがお決まりの流れだが、今日の流れは一味違う。

「魔法カード、ヒーローハートを発動します。クノスペの攻撃力はこのターン半分となり、2回攻撃が行えますよ」

E・HERO クノスペ 攻600↓300

「2回攻撃い？おいおい、攻撃力半分じゃ意味ないだろ？しかも600が300って、話にならないな？」

「……話にならないのはどちらの方か、今この場で教えてあげますよ。私の場に他のE・HEROが存在するとき、クノスペは相手プレイヤーにダイレクトアタックができます。そしてその伏せカードがメタルフォーゼ・カウンターなことはもうわかっているんです！バトル、クノスペで攻撃……そして手札から、先ほどサーチしたオネステイ・ネオスの効果を発動！このカードを捨てることで、私のHERO1体の攻撃力を1ターンの間だけ2500アップさせます！」

「な、なんだと!？」

E・HERO クノスペ 攻300↓2800↓男（直接攻撃）

男 LP4000↓1200

天使の翼を生やしたクノスペが天井すれすれまで飛び、一気に向きを変えてゴルドライバーの頭上を跳び越す滑空からのフライングパUNCHを決める。衝撃のあまりよろめく男を殴りつけた勢いでその後ろまで飛んで言ったクノスペが、空中で翼を羽ばたかせることなくぐりりと向きを変えた。その狙いは当然、かがみこんでせき込む男の無防備な背中。蓄の拳が空を切る音に気がついて振り返った時にはすでに遅く、最後に見開かれた目には衝撃と恐怖がはつきりと映っていた。

「クノスペは相手に戦闘ダメージを与えるたびに、攻撃力を1000アップさせ守備力を1000ダウンさせます。続けて連撃です、クノスペ！」

E・HERO クノスペ 攻2800↓2900 守1000↓9

00

E・HERO クノスペ 攻2900↓男（直接攻撃）

男 LP1200↓0

「こんな……子供に……」

小物感あふれる捨て台詞と共に気を失った男がその場に倒れて、そのフィールドに存在していた5枚のカードがすべて消えていく。さすがにワンターンキルによって多少は疲れたのか肩で息をしながらも、少女がしつかりともう1人の男に向かって本人なりに精一杯に悪そうな笑みを浮かべてみせる。どれほどの効果があつたかと問われれば、せいぜいが子犬の威嚇程度の役にしかたたなかつただろうが。

そしてターンが終わることにより、クノスペに生えた天使の翼が消えていく。

「子供だからって、甘く見ないでくださいね。さあ、これで残ったのはあなた1人ですよ!」

E・HERO クノスペ 攻2900↓3000↓800 守900↓800

「なるほど、な。まあそこで倒れてるやつも大したデュエリストではなかつたわけだし、私も戦力にカウントしてはいなかつた、が……ともあれ敬意を表して、その忠告は受け取っておこう」

平然と返した男が、3人目のプレイヤーとしてカードを引く。しかしその言葉を正直に受け取るならば、たつた今のワンターンキルを見ていてなおこの男は2人の少女を同時に相手取り、そして勝つつもりだというのだろうか。その瞳に迷いなく、引いたばかりのカードを発動する。

「さて、と。永続魔法、ドン・サウザンドの契約を発動。発動時の処理として、全てのプレイヤーは1000のライフを支払いカードを1枚ドロウする」

男 LP4000↓3000

八卦 LP4000↓3000

竹丸 LP4000↓3000

変則的なドロウソースによって、3人のプレイヤーがそれぞれ手札を補充する。しかしメタルフォーゼ使いの男が倒れたことにより不審者サイドは実質2対1、無差別にドロウを行うこのカードでは単純に考えても発動した男にとってデイスアドバンテージとなるはずで

ある。それを意に介さぬほどに自信があるのか、そんなことを言っていられないほど手札が悪いのか……やはりマスクの下の視線からは、少女には何も読み取れなかった。

「そしてドン・サウザンドの契約が存在する限り全てのプレイヤーはドローカードを公開しなければならず、この効果によつて魔法カードを見せているプレイヤーはモンスターの通常召喚が不可能となる。俺の引いたカードは……永続トラップ、量子猫だ」

「……魔法カード、戦士の生還です」

「え、えつと、グレイドル・アリゲーター！モンスターカード、です」
三者三様のドローカードを公開し、互いにそれに目を通す。召喚不可のデメリットが発生したのは八卦のみだった。

「量子猫を含む3枚のカードをセット。ターンエンドだ」

「私のターン、ドローします」

「ドン・サウザンドの契約の効果。そのカードも見せてもらおう」

普段の調子で裏向きにカードを引いた竹丸に、口調こそ穏やかだが鋭い指摘が飛ぶ。ビクリと震え萎縮しながらもおおざと表に向けたカードは、グレイドル・イーグル。またしてもモンスターカードであるため、召喚不可のデメリットはない。

「も、モンスターをセットします。ターンエンドです」

そして伏せられたのは、先ほどドローさせられたグレイドル・アリゲーター。非公開情報からの奇襲という最大のチャンスを失ったのは、竹丸にとつてはかなりの痛手である。

そしてそれがわかってしまうからこそ、もうひとりの少女の心には焦りが生まれる。

「任せてください、竹丸さん。私のターンです！ドローカードは……通常魔法、ミラクル・フュージョンです」

しかし思いが空回りしたのか、またしても引いたカードは通常魔法。先に引いた戦士の生還もあわせ、この2枚を使い切らないことは通常召喚が不可能。素早く手札と墓地のカードを頭に思い浮かべ、いかにしてこの縛りを解除するかを考える。

「……でしたら！まずは戦士の生還を発動、墓地に存在する戦士族モ

ンスターを手札に戻します。帰ってきてください、オネステイ・ネオス！そしてこのオネステイ・ネオスを捨て、このターンもクノスペの……」

「トランプ発動、墓穴^{ほけつ}ホール。手札か墓地で発動したモンスター効果を無効とし、2000ダメージをプレイヤーに与える」

「きゃあああっ!?!」

八卦 LP3000↓1000

その焦りが、文字通りの墓穴を掘った。先のコストも合わせて3000ものライフロスが、まだ一度も攻撃を受けないうちから少女に襲いかかる。

あるいはここで立ち止まって一息入れていれば、もう少し違った未来があつたのかもしれない。しかし頭に血が上った少女は、焦りが更なる焦りを呼びこむ思考のドツボに入り込む。

「ミラクル・フュージョンを発動！私のフィールドから地属性のガイア、そして墓地から光属性のオネステイ・ネオスを除外し、融合召喚を行います！英雄の蕾、今ここに開花する。天照らす大輪よ咲き誇れ！融合召喚、E・HERO サンライザー！」

E・HERO サンライザー 攻2500↓2900

E・HERO クノスペ 攻800↓1200

燃え盛る太陽のような真紅の鎧に身を包む英雄が、ガイアに代わりクノスペの横に着地する。立ち昇る黄金のオーラが2体のヒーローを覆い、その力を増幅させた。

「サンライザーが存在する限り、私のモンスターの攻撃力はその属性の種類1つにつき200ずつアップします。そして見せていた2枚の魔法カードがなくなつたことで、もうドン・サウザンドの契約の効果を受けません。閻属性モンスターのにん人を通常召喚し、この効果をさらにアップです！」

にん人 攻1900↓2500

E・HERO サンライザー 攻2900↓3100

E・HERO クノスペ 攻1200↓1400

まさに手足と胴体の生えたニンジン^{ニンジン}の化け物といった風情の人型

モンスターがクノスぺに並び、サンライザーの発する黄金のオーラがさらにその勢いと輝きを増した。そしてサンライザーにはこのほかに、自身以外のHEROが戦闘を行う攻撃宣言時に場のカード1枚を破壊する効果がある。

八卦の考えとしてはまずクノスぺのダイレクトアタックで確実にダメージを与えつつ、サンライザーで伏せカードのうち1枚を破壊する。それで量子猫ではないもう1枚のカードを破壊してしまえば、守備力2200のトラップモンスターである量子猫はにん人の攻撃で突破できる。最後にサンライザーで直接攻撃し、こちらにもワンターンキルを仕掛けるつもりでいた。それが完璧な計画だと、疑いすらしなかった。

「バトルです。クノスぺでダイレクトアタックし、さらにこの攻撃宣言時に私から見て右の伏せカード、量子猫ではない方にサンライザーの効果を発動です！」

クノスぺが小さな体で先陣切って飛びかかり、さらにサンライザーが太陽の輝きを持つ光線で援護射撃を行う。狙うは1枚、伏せカード。

しかしそれは、あまりにも素直で単純な一撃。サンライザーの光線が届くより先に、その対象となったカードが表を向く。

「……トラップ発動、魔法の筒」
マジックシリンダー

「しまっ……い！」

八卦 LP1000↓0

あまりにも有名、あまりにも古参。攻撃を無効にし、その攻撃力分のダメージを与える、シンプルゆえにいつの時代も引導火力足りうる攻防一体のバーンカード。すでに限界寸前な少女のライフでは、この罠を回避できない。

唇を噛んでうつむく少女の腕で、デュエルディスクの数字が減っていく。その変動がようやく止まったのは、表示された数字が0になった時だった。ゆっくりと倒れていくその背中に、男がマスク越しに賞賛とも慰めともつかない言葉をかける。

「子供の割にはよく戦った。そこで休んでいるがいい」

「すみません、竹丸さん……」
謝罪の言葉を最後に、少女の意識は途切れた。

ターン36 家紋町の戦い（後）

「八卦ちゃん……！」

当然本人に聞こえるはずもないのだが、画面の前で倒れた少女の名を呼ぶ糸巻。2対2で始まった変則バトルロイヤルも、これで残るは正体不明の男と初心者の竹丸のみ。明らかに怯えの色を浮かべて後ずさる少女の足は、しかし八卦から興味をなくしたかのように最後の生き残りへと振り返った男の視線に射すくめられて止まる。それは決してポジティブな感情によるものではなく、足がすくんで動けなくなったのだ。

「八卦……ちや……！」

親友の名を呼ぼうとするも、極度の緊張と恐怖に乾いた舌はうまく回らない。そんな情景を見せつけられ、しかし何もできない現実には顔歪める糸巻には、巴もまたこの光景に喜ぶどころか、むしろ訝しげな表情を浮かべていることには気づかなかつた。そして画面の中で、男がゆつくりと口を開く。

「デュエルを続けよう。それとも、サレンダーするかね？」

「え……？」

「サレンダー、降参だ。残念ながら見逃すことはできないが、少なくともこれ以上痛い思いをすることはしない」

予想外の言葉に、呆然と立ち尽くす。

「サレンダー勧告？ ずいぶん優しい提案のできる奴を送り込んでくれたもんだ、その気配りに涙が出るぜ」

竹丸にとってこの勝負の行く末は暗い、それは糸巻のプロとしての視点でも認めざるを得なかった。並のプロ相手なら互角に渡り合える八卦をいともたやすく手玉に取ったこの男、見ない顔ではあるが實力は間違いない。ここまでの流れを見たところ凄まじい引き運や必殺のコンボがあるわけではないが、とにかく場を作る能力に長けて勝負の流れを自分の所に手繰り寄せる手腕がある。典型的な「なぜ勝っているのかわからないがいつのまにか勝っている」タイプだと彼女は見た。このタイプは得てしてとにかくまぐれ勝ちを拾い難く、隙を見

せないことを前提に実力で叩き伏せる以外の対策がない。

元プロの糸巻ですら言うは易く行うは難いというのに、まして竹丸はまだ初心者に毛が生えた程度。そのうえ、心が既に折れかかっている。無理もないことだ。

だからこの勧告は、むしろ真つ当なものであるはずだ。それでも糸巻は、心に刺々したものが生じるのを感じていた。我ながら身勝手だと思う。理不尽だと思う。しかし勝負を捨てることを良しとしない戦士としての感覚が、目の前の光景に対する本能的な嫌悪感をどうしようもなく生じさせていた。

「いえ……妙だ」

「あー？」

しかし巴はどこか上の空、皮肉たつぷりの糸巻の言葉にもいつもの毒舌を返さない。

「そもそも彼は、私がスカウトした中でも切り札級の男。確かプロデュエリスト養成校からデビュー寸前のところまでいった期待の新星、という触れ込みでしたか」

「切り札？まあそこそこやるようだが、まだアンタの方が強いだろう？」
「貴女に面が割れていない、というのが重要だったんですよ。彼ならプロデュエリスト相手にもそこそこやれるだけの實力があり、しかもどこに出してもデュエルポリスから目を付けられる恐れがない。どこで使おうかと思うと、そして貴女がどれだけ被害を受けるのかを考えるだけで胸が高鳴るような珠玉の逸材。この計画に、それもあちらの部隊に使うつもりは間違ってもなかったのですが……どうも気に食わないことに、私とは異なる指示系統が存在するようですね」

予想外の事態がよほど苛立たせているのか、いつになく簡単に情報を明かす巴。その言葉に含まれた矛盾とも思える箇所、糸巻が眉をひそませる。

「ん？ちよつと待て。そんな大した奴だから、人質を取りに行かせたんじゃないのか？」

「それは違います、むしろ真逆ですよ。いいですか、私は貴女が大嫌いです。今こうして同じ空間と時間を共有し同じ地球の空気を吸って

いるという事実を感じるだけで、頭痛と吐き気と腹痛がします」

「そーかいそーかい、これが終わったらアタシの公式グッズ、プロマイドの在庫全部留置所に送り付けてやるから覚悟しとけ」

「ですが、だからこそ貴女とのデュエルは他の要素が混じってはいけないんですよ。純然たる実力差によってあらゆる抵抗を叩き潰し、二度と立ち上がることもできないほどに心の底から絶望と敗北を刻みつける。そうでなくてはいけないし、そうあるのが世界の正しい形です」

「気色悪っ。新興宗教の先生か何かか？」

片端から入る当の本人からの茶々入れは聞こえているのかいないのかまるで意に介さず、熱に浮かされたような目つきで吐き捨てられる声にも次第に力がこもっていく。

「なんというか、すんごいラブコールよね。むかーしあれぐらい歪んだ愛の形を撒き散らしてた人……人？と殺りあったことがあるけど、あれと匹敵しそう」

「……俺には巴さんと同レベルの人がほかにもいる方が怖い。世界って広いんだな」

「……うん、まあ、人というか男というか女というか。結局どっちだったんだろ」

いつの間にか復活していた清明が、画面に注意を払ったまま芋虫のように床を這いずって倒れたままの鳥居を束の間の話相手に選ぶ。ひそひそ声で距離をおく男2人の動向には気づきすらしないほど、巴は自らの演説に集中していた。

「そもそも人質を取ること自体、こと貴女とのデュエルに関しては私は反対だったんですよ。貴女はそれこそ『お優しい』ですからね、効くに決まっています。だが、そこに意味はない。美しい勝利とはなりえない。これを言い出したのは私の今のパトロン、『BV』目当てにすり寄ってきた薄汚いマフィアの頭です」

「フン、だから僕ちゃん悪くないんでしゅーってか？」

「これでも組織勤めは、色々と面倒事があるんですよ。表と裏、世界の違いこそあれど貴女もそうでしょう？だから最低限のメンツは立て

て、なおかつその上で敗北してもらい人質作戦は失敗に終わる。その程度の弱者を適当に見繕っておいたのですが、今頑張っている彼はどこからどんな命を受けて入り込んだのか。ああまったく、不愉快極まりませんね」

デュエルをしている男自身ではなく、その後ろに存在だけが透けて見える第三者への激しい苛立ち。吐き捨てるような言葉の激しきは、巴は巴なりの価値観の元にデュエルモンスターズと、そして眼前の糸巻と真剣に向き合っていることの裏返しでもあった。

「私、は」

そしてはるか離れた海上プラントで、そんな会話が行われているとも露知らず。すっかり青い顔になってしまった文学少女が、眼鏡の奥の瞳に怯えの色を浮かべて小さく途切れ途切れに声を出す。

痛いのは怖い。怖いのは嫌だ。まして八卦ちゃんを倒した相手、私に勝てるわけがない。私はただ、皆と一緒にこのデュエルモンスターズというカードゲームをやりたいだけなのに、どうしてこんなことに。色々な感情がぐちゃぐちゃに溢れ、視界が涙で滲みだす。

それでも最後の最後、サレンダーしようとする少女を躊躇わせていたのは、まさにその傷つき倒れた親友の姿だった。せめて、せめて彼女のためにも一矢報いたい。

だけど、自分にそれができるのか？自分の内側から発せられる冷徹な言葉が、重く心にのしかかる。膝が折れそうになる。その場に立っていられなくなる。

『いやいや、私としてはそこで踏ん張ろうって気になれるだけでもすつごく偉いと思いますよ？私も待機していた甲斐がありました、まじはこの場を一緒に乗り切りましょう！』

何の前触れもなく響いたのは底抜けに明るい、まるでこの場にそぐわない声。この場に誰が来てくれたのかと左右を見渡すが、誰も電氣をつけていなかったため薄暗い店内には少女自身と男、そして氣を失った2人しか存在しない。

それどころか目の前の男が、まるで今の大声に反応していない。まるで、最初から何も聞こえていないかのよう。

「え……？」

幽霊。そんな言葉が脳裏をちらつき、ぐちゃぐちゃと頭の中で散らかっていた全ての感情が背筋も凍るような恐怖に一時的に上書きされる。

『ああ、申し遅れましたね。私です私、手札の右から2番目！グレイドル・スライムですよ、私！いえいつ！』

「え、ええっ!？」

右から2番目の手札に反射的に目をやると、そこには確かにグレイドル・スライムのカード。ただのイラストでしかないはずの巨大な黒目が、カードの中でぱちりとウインクしたように見えて思わず竹丸はその目をしばたかせた。

『いやー、宇宙のどこかで私の同胞が生まれる!……ような気がしたんですが、どうも空模様が悪くて結局まだ見ぬ同胞とは会うことができず。聞くも涙語るも涙な傷心の旅のさなか……と、今はそんな場合じゃないですね。話は後です、とにかく勝ちますよ!』

「え、ええと……？」

『サレンダーなんて、する必要はありません!というよりも、私は元々あなたに死相が見えたからマスターさん……あ、遊野清明さんのことですよ、あの人に無理言つて一時的にこっちに身を寄せさせてもらっただんですから。死亡フラグなんてポイですよポイ、きっぱり勝ちに行きましょう!』

「清明さんに……」

その名前を聞いて、ようやく気持ちが固まった。このグレイドル・スライムを自称する自分にしか聞こえないらしい声からは全く害意を感じなかったというのもあるが、それ以上に成り行きとはいえ自分を救ってくれた清明の名前を出されたことが大きかった。ころころと表情が変わったり突然あちこちを見まわしていた少女に奇行にやや警戒のそぶりを見せていた男に、改めて向き直る。

「サレンダーは、しません。お待たせしました、デュエルを続けてくだ

さい！」

「警告はした。2度同じことは聞かないから、な」

ハッキリとした返答から気持ちの違いを感じ取ったのか、それ以上は何も聞かずにカードを引く男。八卦のライフが尽きたことで、次のターンプレイヤーに強制的に移り変わったからだ。

「お、竹丸ちゃん、折れなかったか」

1人の人間としては心配げな顔つきではあるが、それでもどこか嬉しそうなのは戦士としての、デュエリストとしてのどうしようもない性か。

「うまいことやってくれたみたいね、よかったよかった」

うんうんと訳知り顔に頷く清明を横目に、祈るような気持ちで画面へと目を戻す。再開したデュエルでは、ちょうど男の引いたカードがドン・サウザンドの契約の効果によって表になったところだった。

「俺のターン。ドローは魔法カード、強欲で金満な壺。メイン1の開始時にこれを発動し、エクストラデッキからランダムに6枚を除外することでカードを2枚引く。このドローはどちらもモンスターカード、マジエスペクター・クロウ及びマジエスペクター・キャット。まずはクロウを通常召喚する」

マジエスペクター・クロウ 攻1000

男が召喚したモンスターはデフォルメチックな姿で描かれた、赤いマントを靡かせる紫のカラス。単純なステータスではグレイドル・アリゲーターに劣る1枚に、竹丸はさらに後続のモンスターを何らかの手段によって展開するのかと警戒する……しかし、グレイドル・スライムの反応は露骨だった。

『うぎやっ!?!』

「ど、どうしたんですか!?!」

なんとも形容しがたい悲鳴に肩を震わせ、手札を取り落としそうに

なる少女。しかし精霊の声が聞こえない男からすれば、おとなしそうな少女が追い詰められて以降突然に相次いで奇行を繰り返しているようにしか見えない。あからさまに引き気味の視線を送られたことに気づいてみるみる顔が赤くなるが、切迫した叫びの理由を知りたいという気持ちは恥ずかしさを上回った。

『マジエスペクター、マジエスペクター……どどどどうしましょう、もしかしたらちよつと駄目かもわかんないです』

「え、えええっ……!?」

先ほどまでの自信はどこへやら、一転して震えだす気配。嘘偽りのない震え声に、訳も分からないまま竹丸までつられて震えだしてしまふ。

あの娘なんか既視感あると思ったらうちのスライムに変なところ似てたんだね、と画面の向こうで呟かれていることなどお互い知る由もなく、わかっているスライムとわかっていない少女が同じようにデフォルメされたカラスを前にわたわたと混乱する。

そんな絵面を前にしても、男の攻め手は止まらなかつた。そもそも、クロウの攻撃力では先ほどセットされたことが見えているグレイドル・アリゲーターの守備力である1500には届かないのだ。

「召喚成功時、マジエスペクター・クロウの効果を発動。デッキからマジエスペクター魔法1枚を手札に加える」

「サーチ効果……な、なら手札から、灰流うららの効果を発動しますっ！このカードを捨てて、その効果は無効です」

『……駄目です！』

停止の声は一步届かず。場に出た瞬間にアドバンテージを稼ぐシンプルなサーチ効果に対し、室内に舞うは灰色の花吹雪。シンプルゆえに強力な無効効果が、サーチを止める。

だが。出がかりを潰されたはずの男はまるで堪えた風もなく、それどころかその口元に薄い笑みさえ浮かべていた。

「い、いったい……?」

『今のは、私も遅かったですね。相手はマジエスペクター、そして私たちの場には見えているアリゲーター、召喚されたのは攻撃力1000

のクロウ……おそらく今のサーチ効果は、ただの誘い水。本命の次を通す前に灰流うららがあなたの手札にないかを探るためのブラフ、です」

「フィールド魔法、マジエステイック P。^{ベガサス}このカードが存在する限りマジエスペクターの好守は300アップするが、本題はもうひとつの効果だ。1ターンに1度風属性の魔法使い族をリリースすることで、デッキからレベル4以下のマジエスペクターを特殊召喚できる」

『やはり、すでに握っていましたか……』

諦観したようなつぶやきは、少女と画面の向こうの清明にしか届かない。花吹雪を吹き飛ばすかのような風の渦に包まれたクロウの姿が、その中でまったく別の動物へと入れ替わる。渦を突き抜けて飛び出したのは、金の毛並みを持つデフォルメされた狐の姿だった。

マジエスペクター・フォックス 攻1500↓1800 守1000↓1300

「マジエスペクター・フォックスは、クロウと対となる効果を持つ。デッキよりマジエスペクタートラップ1枚、マジエスペクター・テンプストを手札に。そしてバトルフェイズ、そのセットされたグレイドル・アリゲーターに攻撃する」

マジエスペクター・フォックス 攻1800↓??? 守1500 (破壊)

金の狐がひよいと飛び、両前足で伏せられたグレイドル・アリゲーターのカードを勢いよく踏みつぶす。守備表示なため当然ダメージは入らず、代わりに弾けたカードから勢いよく銀色の液体が飛散した。

「戦闘破壊されたグレイドル・アリゲーターの効果です！相手モンスター1体の装備カードとなり……」

「涙ぐましい努力だ。だが無駄だ、な」

弾けた銀の液体が空中で向きを変え、一齐にフォックスめがけて四方から襲い掛かる。しかし金の狐は落ち着いたもの、四肢を踏ん張って空高く一声鳴くと、たちまちその体が風の渦に包まれた。

「あっ!?!」

驚きの声が響く。小さな狐を守る大きな風の流れは、液状と化して寄生にかかろうとしたグレイドルを完全に弾き飛ばしたのだ。さらに細かな水滴になるまでちぎられて吹き飛ばされたその破片が、床に壁に溶けるようにして消えていく。

『駄目なんですよ、マジエスペクターは。あのヒトたちは常に風の魔法で守られていて、こちらの効果の対象にできないうえにこちらの効果では破壊できないんです』

「効果の対象にも、効果破壊も、ですか……？そんな」

『なので当然、私たちグレイドルとの相性は最悪です。うう、力不足ですみません』

対象をとる寄生効果を軸に立ち回り、切り札のドラゴンはこれまた対象をとる破壊効果が持ち味のシンクロモンスター。およそグレイドルの全要素に対し喧嘩を売っているかのような耐性を知らされてたじろぐ少女に、男がダメ押し of 伏せカードを仕込む。

「カードをセットする」

『あの伏せカード、十中八九先ほどサーチしたマジエスペクター・テノペストですよ。確か魔法使い族の風属性モンスターをリリースすることで、モンスター高架化特殊召喚のどちらかを無効にして破壊できるカードだったはずですよ。そして、先ほどのターンからずっと伏せてあるあの1枚は……』

「忘れるところだった、永続トラップ、量子猫を発動。このカードは守備力2200のモンスターとして特殊召喚されるが、その際に俺が種族と属性を自由に決められることができる。当然魔法使い族の風属性となるが、な」

量子猫 守2200

最初のターンにドン・サウザンドの契約によってドロウされていた量子猫が、ここにきて呼び出される。しかしそれは、壁モンスターなどという消極的な召喚ではない。これ見よがしに見せつけられた、フォックスを維持したままテンペストを発動するための発動コストだった。

しかし、彼女の心に先ほどまでの不安や恐怖はない。

「私のターン、ドローカードは……魔法カード、ハーピイの羽根帚！メインフェイズ、これをすぐに発動します！」

「む……！」

『おおつ、これはまだわかりませんよ！マジエスティックP、ドン・サウザンドの契約、マジエスペクター・テンペスト、それに量子猫。これを1枚で一掃できるのは大きいですよ！』

その言葉通りに4枚のカードが一度に破壊され、男の場に残るのは下級モンスターにしては強力な耐性と貧弱なステータスを持つフォックスただ1枚のみとなる。

マジエスペクター・フォックス 攻1800↓1500 守1300↓1000

「これでもう、ドローカードが見られることもなくなりますね。続けて魔法カード、強欲なウツボを発動します。手札の水属性モンスター、グレイドル・スライムとグレイドル・イーグルの2枚を見せてデッキに戻し、カードを3枚ドローします！」

ドン・サウザンドの契約でドローカードが筒抜けになることを躊躇うあまり手札で腐っていた、強欲なウツボにより手に入れた3枚のカード。それと元からある2枚を見比べ、反撃が許されたこの貴重なターンに少しでも優位に立つための戦略を練る。

『これならば、今は少しでもダメージを稼ぐべき、です！』

「はい！永続魔法、王家の神殿を発動です。これにより私は1ターンに1度、伏せたターンでもトラップを発動することが可能になります。グレイドル・コブラを召喚してカードをセット、そして今伏せたグレイドル・スプリットを発動！このカードは、攻撃力を500上げる装備カードとなって私のモンスターに装備できますよ！」

グレイドル・コブラ 攻1000↓1500

「そして、グレイドル・スプリットの更なる効果を発動です。このカードを墓地に送り装備モンスターを破壊することで、デッキから2体までのグレイドルを特殊召喚しますね。私は先ほどデッキに戻したグレイドル・スライム、そしてグレイドル・イーグルを再び特殊召喚します！」

「せめてもの、だ。スプリットにチェインして手札から増殖するGを捨て、効果発動。このターン相手の特殊召喚1回ごとにカードをドロウする、まずはこのリクルートによって1枚だ」

『ふっふっふ。私、登場しちゃいましたよ！』

既存生物を模写しては溶け崩れ、分裂し、さらに2体が増えるグレイドル。2つに増えた銀の水たまりのうち片方からはグレイ型宇宙人の上半身が、そしてもう片方は黄色の鳥の形が浮かび上がる。

グレイドル・スライム 守2000

グレイドル・イーグル 守500

『私はチューナーモンスター、そしてイーグルとの合計レベルは8！』
「はい！レベル3のグレイドル・イーグルに、レベル5のグレイドル・スライムをチューニング。導く言葉は『変幻自在』。宇宙の果てにあるものは、あなたたちからのメッセージ！シンクロ召喚、グレイドル・ドラゴン！」

☆3＋☆5＝☆8

グレイドル・ドラゴン 攻3000

3体のグレイドルが寄せ集まった集合体、寄生能力に頼らずとも自らの力だけで並み居る敵の殲滅も狙えるほどの戦闘個体。その効果は依然としてマジエスペクターには届かないが、それでもドラゴンにはこの場に反撃の狼煙を上げられるだけの力があつた。

「増殖するGの効果により、さらにドロー」

「いきます、グレイドル・ドラゴンで攻撃です！」

グレイドル・ドラゴン 攻3000↓マジエスペクター・フォック

ス 攻1500 (破壊)

男 LP3000↓1500

杖の先についた髑髏の目が不気味に光り、赤い怪光線が放たれる。先ほどと同じく風の渦を呼び起こして耐えようとしたフォックスだったが、その壁をいともたやすく貫いた光線に射抜かれると同時にその風も四散して消えていった。

『やりましたね、先制攻撃です！』

「はい！メイン2にカードをセットし、ターンエンドです！」

「……よもや、こんな子供に最初の一撃を入れられるとは、な。俺も少々、相手を侮っていたらしい」

吹き飛ばされた男がデュエリスト特有の頑丈さでゆらりと立ち上がり、カードを引く。先ほどとは比べ物にならないほどの闘気に、喜びの気持ち竹丸の中でみるみるしぼんでいった。

「だがそれも、今のターンで最後だ。俺のターン、ドロー……スケール2のマジエスペクター・キャットをライト^{ペンデュラム}Pゾーンに、スケール5のマジエスペクター・フロッグをレフトPゾーンにセッティング」
『レベル3から4のペンデュラム召喚……仕方ありませんね、増殖するGを通しちゃいましたし』

「ペンデュラム召喚！エクストラデッキからは左側のエクストラモンスターゾーンにマジエスペクター・クロウ

を、そして手札からはマジエスペクター・ラクーン及び2体目のマジエスペクター・フォックスを一度に特殊召喚する」

圧巻の光景だった。場に1枚もカードが残っていない状況から、左右に立った光の柱とその中にそれぞれ浮かぶデフォルメされた猫とカエルに見守られ、一斉に動物たちが現れる。

マジエスペクター・クロウ 攻1000

マジエスペクター・ラクーン 攻1200

マジエスペクター・フォックス 攻1500

「そして特殊召喚に成功した3体の効果を、フォックス・クロウ・ラクーンの順に発動。それぞれデッキからマジエスペクター魔法、罨、そしてモンスターを手札に加える」

「3枚の……サーチ」

「マジエスペクター・フロッグ、マジエスペクター・トルネード、マジエスペクター・ストームの3枚を手札に。そして通常魔法、マジエスペクター・ストームを発動。魔法使い族かつ風属性のクロウをリリースし、相手モンスター1体をデッキに戻す」

『ううー、やはり破壊はしてくれませんか……』

足元から巻き上がる魔力を乗せた風の渦に飲み込まれ、ドラゴンの姿が消えていく。だが、竹丸にそれを嘆く余裕はない。

「マジエスペクター・フロッグを通常召喚。このカードの効果により、デッキからマジエスペクター魔法か罠を1枚選びセットできる。俺が選ぶのはマジエスペクターの効果が無効化されなくなる永続トラップ、マジエスペクター・スーパーセル。もつとも、このターンはどうせ発動できないがな。だが、このフロッグにはクロウが抜けた穴を埋めるという意義がある」

マジエスペクター・フロッグ 攻1300

「バトルだ。マジエスペクター・ラクーンで……いや、グレイドル相手ならば。マジエスペクター・フォックスでダイレクトアタックだ」

『う、さすがに読まれてますね。ですが、もはやこのターンに使える妨害手段がないことも分かっていますよ！』

「永続トラップ、グレイドル・パラサイトを発動します！このカードの効果により、相手の直接攻撃宣言時にデッキからグレイドル1体を攻撃表示で特殊召喚できます。グレイドル・イーグルです！」

どろりと床に沸き上がった銀の水たまりが黄色い鳥の姿を模し、翼を広げて突撃してきたフォックスの前に立ちはだかる。しかしフォックスはひるむどころか風をまとった爪で真つ向からイーグルへと勝負を挑み、イーグルもまたそれに応えて翼を丸めてのインファイトの姿勢にかかる。金と黄色の弾丸2発のようにそれぞれ相手めがけて突っ込んでいった両者の衝突は、決着がつくことなく終わる。

マジエスペクター・フォックス 攻1500（破壊）↓グレイドル・イーグル 攻1500（破壊）

「寄生可能な対象がないため、イーグルの効果は発動しない。そしてグレイドル・パラサイトの効果はターンにつき1度きりだが、俺にはまだラクーンとフロッグが残っている」

「ひっ……」

『すみません、ここはどうか耐えてください！』

スライムの悲鳴が聞こえると同時に、竹丸の視界が大きく揺れた。2つの強風が少女の体をたやすく巻き上げ、上下も左右もなく放り飛ばしたのだと脳が理解できた時には、すでに床へ叩きつけられていた。これが糸巻、清明といった場慣れしている相手であれば、空中で

受け身をとったり姿勢を制御して物理ダメージを最小限に抑えることもできたろう。まだ実戦経験では両者に劣る八卦も、持ち前の運動神経で同じことができたはずだ。だが文学少女の悲しき、いくら頭がよからうとも反射神経と運動神経が足りていない。

マジエスペクター・ラクーン 攻1200↓竹丸（直接攻撃）

竹丸 LP3000↓1800

マジエスペクター・フロツグ 攻1300↓竹丸（直接攻撃）

竹丸 LP1800↓500

「う、うう……」

『すみません反応が遅れて、ついついいつもの癖で』

「いえ、ありがとうございます……」

それでも骨や内臓に異常が起きなかつたのは、とつさに腕のデュエルディスクから実体化してこぼれ出た銀の液体が地面に落ちてグレイ型宇宙人の細い腕を伸ばし、最低限のクッションとなったからだつた。それでも痛みから立ち上がれずにいる少女を見下ろした男が、また口を開く。

「カードを2枚、マジエスペクター・トルネードともう1枚をセットする。まだやる気か？いくら立ち上がろうとも、自分に合っていないデッキを使っているようでは勝てるはずがないというのに」

「え……う」

痛みのせいで集中しきれず、今かけられた言葉の意味がよく理解できない少女。子のデッキが、グレイドルが、自分に合っていない、とはどういう意味だろう。混乱する思考を頼みのスライムは助けられるどころか、むしろ深刻な声色でその意見に同調した。

『やはり、あの人も気づいていましたか』

「あ、あの」

『……ここしばらくあなたのことを陰ながら見守ってきましたが、あなたはすごく地頭がいいんですよ。私たちグレイドルは自分から盤面を積極的にコントロールすることももちろんできますが、その本質は受け身なものです。私たちとあなたの相性が悪い、とは言いません。初心者のうちから複雑なカードの応酬についていけ、多角的に盤

面を検討できるあなたは、間違いなくコントロールデッキ向きです。ただあなたの美点を最大限に生かすことができるのは私たちのような受け身のコントロールではなく、より積極的に流れを作りに行く攻めのコントロール、だと思います』

ぽつりぽつりと語られる言葉の意味が、少し遅れて少女に染み渡っていく。しかし不思議なことに、それをひどいとは思わなかった。むしろ、足りないピースが埋まっていくような奇妙な充足感とその胸中から湧き上がってくる。自分に合ったカード、自分に合ったデッキ。これまで周りのデッキ分布が素直なビートダウンばかりに固まっていた竹丸にとって、コントロール色の極めて強いマジエスペクターとの邂逅は全く新しい未知の刺激だった。こんな状況でなければ、それをもっと喜ぶこともできただろう。

『あなたが私たちを最初のデッキに選んでくれたことは、私もうれしく思います。だから私も、あなたに感じた死相の原因を突き止めるまで一時的に清明さんのところを離脱してこちらに来ました。ですがあなたが最初に私たちを選んだのには、グレイドルへの興味だけでなく清明さんへの憧れが入り混じっています。あの人は学生のころからそこそこ程度にモテてましたからね……と、それは置いておいて。もう一度、考えてみるのもいいかもしれませんよ』

とはいえまずはこの状況をどうにかしないとですね、と言い添えるのも忘れず、スライムの気配が引いていく。話を聞くうちにようやく体が動くようになり、壁に手をつけて店内のショーケースにもたれかかりながらも、どうにか立ち上がる。

「私のターン、です！私が攻めのコントロール向きだというのなら、今できる最大限のことは……グレイドル・イーグルを召喚して、墓地からグレイドル・スライムの効果を発動です！場のグレイドルカードであるイーグルとパラサイトを破壊して、このカードを蘇生召喚します。そして自身の効果によって特殊召喚されたスライムの効果で、墓地のアリゲーターを蘇生します！」

『はい！私、復活です！』

グレイドル・スライム 守2000

グレイドル・アリゲーター 守1500

「ここか。トラップ発動、マジエスペクター・トルネード。魔法使い族かつ風属性のラクーンをリリースすることで、グレイドル・スライムを除外する」

『シンクロ前に私を潰しに来ましたか……ですが！』

「はい！まだ私には、召喚権が残っています。場のアリゲーターをリリースして2体目のスライムをアドバンス召喚し、さらに通常魔法、浮上を発動です。今リリースされたアリゲーターを、再び墓地から蘇生します」

「ち……い」

グレイドル・スライム 攻0

グレイドル・アリゲーター 守1500

シンクロする前に素材を潰そうとした判断を裏目にさせるリカバリーで、再び2体のモンスターが場に残る。しかし、男もまた巴が認める実力者。さらにもう1枚、伏せられたカードが表を向く。

「だが、グレイドル・ドラゴンを出そうとも無意味。トラップ発動、和睦の使者！発動ターンに俺が受ける戦闘ダメージは0となり、俺のモンスターは戦闘破壊されない！」

『通常の構築ならばこれだけで詰んでいてもおかしくありませんでしたが……あなた、なかなか渋いシンクロモンスターを選びましたね。お目が高いです』

「このカード、ですか？」

『ええ。おあつらえ向きすぎて私もびっくりです。これもまた、カードが応えてくれているんですよ』

フィールドから振り返って竹丸と視線を合わせ、それに、と続けるスライム。

『あなたもこのカードを信じたからこそ、15枚しかないエクストラデッキを任せたんでしょう？なら、大丈夫です。私たちモンスターは、それに応えるためにどこまでも戦います』

「……わかりました。ふふっ、なんだか清明さんと同じようなこと言ってますね」

『そうでしょうそうですね、長い付き合いですからね』

和気あいあいとした雰囲気、殺伐とした室内に1瞬だけ流れる。そして再び場の空気が戦場のそれに戻った時、スライムとイーグルが同時に飛び上がった。

「申し訳ありませんが、これで終わりです！レベル3のグレイドル・イーグルに、レベル5のグレイドル・スライムをチューニングです！導く言葉は『栄枯盛衰』。驕れるものよ、死の痛みはあなたのもとに訪れる！シンクロ召喚、ブラッド・メフィスト！」

☆3＋☆5＝☆8

ブラッド・メフィスト 攻2800

漆黒のマントに細い体を包み込み、シルクハットをかぶり杖を手にした悪魔。通常構築の「グレイドル」にはまず入らないこの1枚こそ、竹丸の個性であり声なき自己主張でもあった。

彼女は、スライムの言葉通りこの1枚のことを信じて選んだのだから。そしてその効果は、相手ターンのスタンバイフェイズごとに発生する、相手フィールドのカード枚数に応じたバーン能力。

「レベル8のシンクロモンスターに、あえてそのカードを選んだと……？」

「はい。グレイドルの能力が効かない相手はこちらの展開力の低さをついてたくさんのカードを出したところに、このカードの効果を生かす。このまま攻撃はせずに、カードを1枚伏せます」

「だが、まだだ。次のターン、ドローフェイズにモンスター除去の速攻魔法、マジエスペクター・サイクロンを引かせえすれば……」

男の言葉通り、決してまだ終わったわけではない。ドローフェイズに即使える速攻魔法の除去カード、あるいは禁じられた聖杯のような効果無効のカード。引きさえすれば敗北を回避するばかりか逆転勝利もゆうに狙える選択肢は、確かにまだ存在する。

しかしその可能性を、少女は許さない。

「させませんよ。お忘れですか、私のフィールドにはまだ、王家の神殿が残っていることを！今伏せた永続トラップをそのまま発動、魔封じの芳香！」

「魔封じの、芳香……！」

あらゆる魔法カードが、1度場に伏せたうえで次のターンを待たねば発動することができなくなる永続トラップ。環境が変わるたび幾度もメタカードとして注目されてきた古参兵が、ここでもその効力をいかんなく発揮する。

「く……ドロー……！」

ドローカードを見る男。そこにあつたのはつい先ほどまで彼自身が切望していた1枚、今となつては何の役にも立たない紙切れではない1枚。

「マジエスペクター・ストーム……！」

「これが私の、私なりの、攻めのコントロールです。スタンバイフェイズ、ブラッド・メフィストの効果を発動。相手フィールドのカード1枚につき、300のダメージを与えます！」

今の男の場に存在するのはペンデュラムゾーンの2枚にモンスターゾーンの2体、そしてセットされたままのマジエスペクター・スーパースェル。スーパースェルは今からでも発動できるが、永続トラップであるためフィールドのカード枚数を減らす役には立たない。

悪魔が哄笑してその杖を一振りすると、先端についた髑髏の瞳から視界を染める赤い怪光線が放たれた。

男 LP1500↓0

「や、やった……！」

『おめでとうございませう！あらら、大丈夫ですか？』

自分の勝利がまだ信じられないのか、それとも緊張の糸が切れて力が抜けてしまったのか。呆然とした顔でその場にへたり込み気を失う少女に、スライムが祝福の言葉をかける。当人たちは知る由もないが、祝福ムードは遠く離れた海上プラントでも同じだった。

「よくやった、竹丸ちゃん！」

「おめでとう竹丸ちゃん、スライムもお疲れ様！」

笑顔を交わす糸巻と清明の横で、不測の事態こそあつたものの最終

的にはどうにか計画通りに事が進んだことにほつと息を吐く巴。清掃ロボの中継カメラを切り、広間の電気を復旧させる。

「さて、これで人質は取れなくなりました。後始末も、少しばかり心当たりを呼んでいます。ああ、『こうなれば仕方がない』。私が実力だけで貴女を倒して見せましょう」

「よく言うぜ、そんなに嬉しそうな顔しやがってよ？だがまあアタシも異論はねえさ、アンタとはどつかで必ず、ガチで殺りあいたかったんだ。そしてアタシが勝つ！」

ついに、因縁の対決に終止符が打たれる時が来た。

だが、本当にこれで本土側での戦いは終わりなのだろうか？予定調和に人質作戦をはねのけてめでたしめでたし、あとは糸巻と巴の最後の一騎打ち……いや、断じてそうはならない。この時に巴が犯したのは、普段の彼らしくもないミス。この一連の流れに不測の事態が発生し、第三者の意思が介入している。それが明らかになった時点で、何を差し置いてもまず異分子の正体を突き止めようとしていれば……いや、それでも何も変わらなかつたろう。

カードシヨップ『七宝』では、床に倒れたままの男が途切れ途切れの意識で、なおも通信機に手を伸ばそうとしていた。

「く……まだ、まだだ……この近くには、まだ『BV』所持者が腐るほどいる、そいつらを呼び寄せれば……」

「そうか。だが、それは無理な相談だな」

「ひどい有様じゃのう。これ鼓よ、こちらは終わらせたぞよ」

「き、貴様らは……!？」

応答はひとつもなく、雑音のみを返す通信機。そして突然の乱入者とその正体に、男の顔が驚愕に歪む。

「デュエルポリスフランス支部長、『錬金武者』の鼓千輪つづみせんりん。この近くにいるチンピラどもがこの店を狙っていると匿名の通報があつてな。信用するに値しないとデュエルポリス本部は動いてくれなかつたから、仕方なくボランティアでフランスから日本にとんぼ返りだ。まったく、巴のやつも随分としやれた嫌がらせをしてくれるものだ」

『十六夜の決闘龍会』、笹竜胆千利ささりんどうせんり。わらわはデュエルポリスとは何

の関係もないのじゃが、貴女手が空いているでしょうとある狐の奴めに呼びつけられてのう。ま、そちらで倒れておるおなごにはデュエルフェスティバルの借りもあつたことじゃしの」

「そういうわけで、この町のチンピラどもは一斉摘発させてもらった。糸巻がさぼり倒してきたツケをなぜか私が払った、ともいえるな。まだやりあうというなら止めはしないが、当然私もこのストレスは対戦相手のお前に全力で叩き付けさせてもらう。それが嫌ならば、お前も観念することだ」

「そん……な……」

今度こそ気力が限界にきたらしく、その場にどうと崩れ落ちる男。荒れ狂う暴風で文字通り嵐の後のようになった店内を見渡して、鼓がやれやれと息をつく。

「まったく、まだ時差ボケも治りきっていないというのに。巴も人使いが荒い」

「妖怪生意気乳女といい勝負じゃな。まさかこの町から一番近くに住んでいるというだけで、現役を退いて久しいわらわまで駆り出されるとはのう。それでのこのこ出向くあたり、あの狐めのいいように使われておる気もするが」

「私も人のことは言えないな。何のかんの言いつつ、どうせ来ると思ったからこそ奴も私たちに白羽の矢を立てたのだろう」

「とりあえず、この子供らを布団にでも寝かせて、後始末はわらわたちで……おや」

そこで手にしていた扇をぱちりと閉じ、すいと流し目を薄暗い店内の一角に送る笹竜胆。それと同時に鼓も、剣呑な目で同じ方向を凝視していた。

「まだ残党がおったようじゃの。手間がかかるのう」

「なら、私一人で終わらせてもいいんだぞ?」

「嫌じゃ。この前のデュエルフェスティバルでの一戦で、消えかけていたわらわの焰が再び勢いを増してきたの。やはり、デュエルはよきものじゃ。おぬしに独り占めはさせぬぞえ」

「そうか」

目だけは真剣なままに緊張感のない会話の後、デュエルディスクを構える2人の女戦士。その後の戦いの行方は、グレイドル・スライムだけが知っている。ほんのわずかな時間ののち、銀色の液体となって音もたてずに扉の隙間から外に抜け、何が起きているのかを伝えるため、そして元の持ち主である清明へと助けを求めるために全速力で海へと這っていったスライムだけが。

ターン37 白面金毛の悲願

「では、始めましょう。今度こそ、私と貴女の戦いを邪魔するものはない……そして願わくば、これが最後であらんことを」

「その高慢ちきな鼻っ柱、ただへし折るだけじゃ足りないよなあ？昔のよしみだ、土下座のライブ映像はたっぷり全国生中継してやるよ」
遠く離れた家紋町でイレギュラーな事態が着々と進みつつあることなど、この場の誰も知る由もなく。心底愉しそうに笑い、心底おぞましいものを見る目つきでにこやかに呪詛を吐き連ねる2人はやはりどこか似た者同士であり、互いがそれに同族嫌悪を感じていることが手に取るようにわかるがゆえにその憎悪は加速する。

ドロドロした感情で息が詰まりそうな空気に若干引きつった顔の清明が、まだ思うように体を動かせない鳥居の体を軽々と背負って部屋の入り口、安全圏とはいえないまでも観戦に支障はない程度の位置まで下がっていく。その様子を視界の端に捉えつつも糸巻も巴もすでに意識するようなこともなく、そこは戦場の爆心地となった。

「デュエル！」

全く同じとしか思えないタイミングでデュエルディスクを展開し、初期手札を引き抜き、鬨の声を上げる2人。ランダムに決められるはずの先攻、後攻ですら、極限まで冴え渡りもはや未来予知のたぐいまで達していた彼女らの勝負勘は察知していた。

「アタシのターン……さあて、どうしてやろうか……？あんまりモンスターを展開するのも、それはそれでつまらねえよな？カードを2枚セツトし、イピリア召喚。このカードが場に出た時、アタシはカードを1枚ドロローできる」

「自由だ」

イピリア 攻500

先陣切って召喚されたのは、甲高い鳴き声を放ち灰色の体と長い尾を持つ爬虫類。派手さはないが堅実なドロロー効果で先攻の数少ないディスクアドバンテージである手札を補充し、引いたカードをロクに見もせずにくぐさまセツトする。これで糸巻のフィールドには、伏せ

カードが3枚。

なんてことのない、どちらかといえば彼女にしては大人し目な立ち上がり……しかしそれは、目の前の相手を知り尽くしたうえで行動だった。

「そして私のターン、ですか。ならば手札から、悪王アフリマの効果を発動。このカードを捨てることで私のデッキからフィールド魔法、闇黒世界―シャドウ・デイズトピア―を手札に加えます。そしてそのまま発動、このカードが存在する限り全てのフィールド上モンスターは闇属性となります」

イピリア 地属性↓闇属性

前触れもなくチカ、チカと断続的に、天井の明かりが点滅し始めた。明度が落ちたことで四方から忍び寄ってきた闇はにじみ出る悪意を隠そうともせず、周りを侵食し、ドロドロとした質量すらも持つ光を通さない闇の粒子が粘着質に垂れ下がる。

周りを埋め尽くして漂うのは霧状の、気体の闇。足元からどろりと湧き上がり、あるいは天井から断続的に落ちて汚らしく広がるのは液状の、液体の闇。そして先ほどまで壁や床だったはずのものにとつて代わる、何者も通さない濃縮された質量を持つ固体の闇。留まる者の心を蝕み……いや、そもそも蝕むとは何だろう。ここには初めから、闇しかなかったというのに。全ての定義を塗り潰し、あらゆるものを上書きし、ただひとつの概念に全てを収束させていく。そこにあるものは、ただの闇だった。

そしてそんな闇の中から、巴の朗々とした声が響く。

「速攻魔法、緊急テレポートを発動。デッキからレベル3以下のサイキック族モンスター、レベル2のクレボンスを特殊召喚します」

クレボンス 攻1200

「さらに牛頭鬼を通常召喚。このカードは1ターンに1度、デッキからアンデット族を墓地に送ります。私が選ぶカードは当然……九尾の狐」

「来やがったか……」

「ここまで妨害はなし、ですか。せつかく3枚も伏せておいて、その

カードは飾りなんですかね？」

「そんなに気になるなら、踏みつけるまで突っ込んで来いよ」

探りを入れに来た巴を、不敵に笑い飛ばす糸巻。意味ありげな目つきでほんの1秒足らず思案したのち、すつと上に向けた手の動きに従って2体のモンスターが宙に浮く。

「いいでしょう。レベル4の牛頭鬼にレベル2のチューナーモンスター、クレボンスをチューニング。異邦と化した故郷ふるさとに、悪しき聖霊の夜を引く音がこだまする。シンクロ召喚、オルターガイスト・ドラッグウイリオン！」

☆4＋☆2＝☆6

オルターガイスト・ドラッグウイリオン 攻2200

闇の沼の一角が沸き上がり、漆黒の液体を全身から滴らせる異形の魔法使いが浮上する。笑顔の仮面を張り付けたような顔面に、この世の生物とも思えないような部位に配置された、それでいてその機能がなんなのかは理解できてしまう人とも動物とも取れない無数の手足。

それは例え打点が低くとも、強烈な制圧効果を持たずとも、レアリティが低いコモンカードであろうとも。遙か昔のプロデュエリスト時代より巴が愛用し、彼の戦いになくってはならない中核をなす1枚。全てを出し尽くすこの戦いには、欠けてはならないピースのひとつ。

「そこだな？永続トラップ、ディメンション・ゲート。アタシのワールドのモンスター1体を選択し、ゲームから除外するぜ」

糸巻のフィールドから、イピリアの姿がかき消える。それを見て、巴が小さく賞賛の笑みを漏らした。

「なるほど、シンクロ召喚まで繋いだこのタイミングで、ですか。実に小賢しい話ですが……ここは大したものですよ、と言っておきましょう」

「アンタのお褒めの言葉なんざいらないね、虫唾が走る。だがま、アタシもひとつ褒めてやるぜ。その様子だと、自分が何されたのかを理解する脳味噌はちゃんとついてるみたいだしな」

「……虫唾が走りますね」

お互いに、相手の打つ手は知り尽くしている。つまり、こうだ。

シャドウ・デイズトピアの1ターンに1度リリースのコストを相手の閻属性に肩代わりさせる効果によって、モンスター2体をリリースすることで自己再生のできる九尾の狐の蘇生召喚。これによりイピリアを除去しつつモンスターを展開でき、さらにドラッグウイリオンは自身の効果により1ターンに1度だけリリースで場を離れた際に自己再生が可能となる……それが巴の狙いだった。

そしてその定番コンボを知り尽くしていた糸巻は、だからこそこのタイミングまでデイメンション・ゲートを温存していたわけだ。素材を並べたタイミングでイピリアを逃がしてしまつては、シンクロ召喚を取りやめてその2体から自前のコストのみで自己再生を使う手もあったろう。一見するとそれでも大差はないのだが、その場合物を言うのがシャドウ・デイズトピアのもうひとつの効果、エンドフェイズごとにそのターンリリースされたモンスターの数までシャドウトークンをターンプレイヤーの場に発生させる能力である。それでは巴の場には最終的に、蘇生召喚によって貫通能力を得た九尾の狐とシャドウトークンが2体が残る計算となる。

だが、もしもシンクロ召喚を終えたこのタイミングまでイピリアをわざと置いておいたならば。それらすべての目論見は崩れ去り、コスト不足によって九尾の狐も効果を使えずドラッグウイリオンのみが棒立ちした状態でターンを終えざるを得なくなる。

「……バトルフェイズ。ドラッグウイリオンでダイレクトアタックです」

「トランプ発動、バージェストマ・カナディア！ドラッグウイリオンには裏守備になつてもらおう」

「まあ、通してはくれませんよね」

他にすることもない巴は、そのまま攻撃宣言を行うしかない。しかし仮にも初期ライフの半分を上回る数値によるダイレクトアタックを通すほど糸巻も甘くはなく、細長い体の古代生物が床を這い、無数の脚で糸巻の元へと走り込んでいたドラッグウイリオンの全身をその足先から締め上げた。杖を振り回してもがきながらの抵抗も空しくその体が1枚の裏向きのカードとなつて沈黙したことで、互いの

フィールドに動くものはいなくなつた。

「カードを伏せ、ターンエンドです」

「アタシのターン。速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動！アタシの場のデイメンション・ゲートと、この辛気臭いフィールド魔法を破壊する」

「伏せカードではなく、デリストピアの方を狙ってきましたか」

言葉の割には驚いた風もなく、悪意に満ちた闇が晴れていく。もとより、あまり長時間にわたりこのフィールドを維持できるとは彼も期待していない。

そして相手のことを知り尽くしているのは、彼もまた同じだった。

「そしてデイメンション・ゲートが破壊された時、この効果で除外されたモンスターは場に特殊召喚される。そしてイピリアが特殊召喚されたことで、このターンも1枚ドロー。さらに、不知火の宮司を通常召喚だ」

イピリア 攻500

不知火の宮司 攻1500

次いで召喚されたのは、オレンジの和服を纏う神主然としたモンスター。本来は召喚時に手札か墓地の不知火1体を連鎖的に特殊召喚する効果を持つカードだが、今回はその効果を使うつもりはないらしい。

代わりに彼女の頭上へ浮かび上がったのは、8つの三角形が均等に配分された円。言わずと知れたリンクマーカーに、2体のモンスターが渦となって吸い込まれる。

「召喚条件は、炎属性モンスターを含む2体。アタシは地属性のイピリアと炎属性の宮司を、それぞれ右下及び左下のリンクマーカーにセット。戦場燃え盛る妖の霊術よ、燃え尽きた魂に今一度生命の火を灯せ！リンク召喚、灼熱の火霊使いヒーター！」

灼熱の火霊使いヒーター 攻1850

勝気な表情を浮かべた、大胆なへそ出しルツクの赤髪魔法少女。わざわざダブル・サイクロンを使いシャドウ・デリストピアの属性変更を解除してまでこのリンク2を呼び出すことに繋がれたことには、当然

ながら意味がある。

「ヒータの効果を発動。1ターンに1度、相手の墓地に存在する炎属性モンスターをアタシのフィールドに特殊召喚する。九尾の狐は貫っていくぜ」

「そんな横暴、道理が通りませんね。よって拒否します、リビングゲツドの呼び声を発動。その発動にチェーンし、九尾の狐を私のフィールドに蘇生召喚します」

蘇生効果を不発にさせつつ自分の場にモンスターを呼び出す、最高のタイミングでのリビングゲツド。しかも墓地から蘇生された九尾の狐はその方法問わず貫通効果を得るため、安易な守りも許さない。

だが。糸巻はそれを見て、悔しがるところか口の端を歪めて笑ってみせた。

「いつぞやの裏デュエル大会の時は、確かにアタシもだいぶ鈍ってたがな……このところは、やたらと調子がよくってな。今のアタシは全盛期以上だぜ？そんな程度で止められると思うなよ、ライフを半分払い、手札からトラップ発動！レッド・リブートで、そのリビングゲツドを無効にしてもう1度セットさせる！」

「糸巻さんー」

糸巻 LP4000↓2000

遠巻きに2人の戦いを見ていた鳥居が、ぐっと拳を握りしめる。チェーン3で手札から奇襲気味に発動されたレッド・リブートにより、巴が流れを掴みかけていた状況は再び一変した。ライフコストこそ決して安くはないものの、ここで得られるリターンはその大きさに見合っている。

ただしそれは、あくまで発動に成功した時の話。カードの応酬を制されたことを悔しがるでもなく、むしろ皮肉気な笑みを浮かべた巴がおもむろに手札1枚を表向きにして見せつける。

「ライフを半分支払い、私もレッド・リブートを手札から発動。貴女のレッド・リブートは発動が無効となりフィールドにセットされ、その後貴女はデッキからトラップ1枚を選択してさらにセットすることができます」

「何!？」

「うっわあ……」

巴 LP4000↓2000

勝ち逃げは許さないとばかりに同じくその身を削って発動された、このデュエル2枚目のレッド・リブート。はたから見れば、それは単なるカウンター合戦としか映らないだろう。しかし、その場にいる全員にははつきりと理解できた。今のリビングデッドの呼び声、そしてレッド・リブートの2枚は単なるカードではなく、巴がこの戦いにかけて想いの証そのもの。全てを賭してこの場に立つ彼の、維持と執念の具現化とも言うべきカード。

そしてその想いの強さに応えるかのように、空中にぼわりと紅い火が灯った。熱を持たず、宙を揺らめき、しかし確かにそこにある。もはや集めた味方もすべて倒されたひとりぼっちの戦場で、なおも単身その両足で地面を踏みしめる巴を導く狐の炎。

「さあ、甦りなさい。九尾の狐!」

九尾の狐 攻2200

「……レッド・リブートの効果で、アタシのデッキから通常トラップ、不知火流―燕の太刀をセットする」

「ええ、構いませんよ。さあ、それで?」

「……バトルフェイズ。ヒータでセットされたオルターガイスト・ドラッグウィリオンに攻撃だ」

低く重く、吐き捨てるように呟く。魔法少女の炎が、異形の魔法使いを焼き滅ぼす……だが、それだけだ。守備表示モンスター相手では、当然ダメージは発生しない。残り半分となった巴のライフを減らすことはできず、ヒータの攻撃力は九尾の狐に届かない。

誰が見ても明らかに、勝負はいつの間にか巴の側に傾いていた。それが誰よりも理解できていながらも、糸巻にはその流れを止めることができない。

灼熱の火霊使いヒータ 攻1850↓???
守1200 (破壊)

「ターンエンド……」

「では、私のターン。手札が少しよくないですね、せつかくなので貴女

にもチャンスをおあげましょう」

「あー？喧嘩売ってんのか？」

「いかにもその通りですが？せいぜい足掻いてみてください、手札抹殺を発動。これにより互いにすべての手札を捨て、その枚数だけドロ。墓地にカードを送ってあげますから、少しは楽しませてくださいよ？」

言いながら手札2枚をパラパラと墓地に送り、2枚のカードを引く。巴。糸巻が苦い顔なのは、実際この手札抹殺によって多少なりとも救われた面があることを否定しきれないからだ。今の彼女の手札1枚では、次のドロを考えても逆転のできる可能性は低かった。

「ああ、これでよし。悪王アフリマを通常召喚し、効果を発動。闇属性であるこのカード自身をリリースすることで、カードを1枚ドロします」

悪王アフリマ 攻1700

召喚権を使い、やっていることはただの手札交換。しかし当然、それだけで済むはずもない。一度は祓われたはずの闇が、再びその場に満ちていく。消え失せたはずの漆黒が、そこかしこからとびきりの悪意と共に滲み出る。

その中央で赤く輝く知性を持った2つの光は、闇黒の世界の主の瞳。千切れた鎖が地面をこすり、泣き声のような甲高い不快な音を立てる。

「そして闇属性モンスターが私のフィールドからリリースされたことにより、墓地から闇黒の魔王ディアボロスの効果を発動。このカードを特殊召喚します」

闇黒の魔王ディアボロス 攻3000

「ちっ、もうディアボロスまでお出ましか？」

「もう少し何かしたいところですが、これぐらいでいいでしょう……バトルフェイズ、ディアボロスで灼熱の火霊使いヒータに攻撃、アプター・ザ・カタストロフ」

黒い炎が大地を舐め、光さえも通らない闇の中に赤髪の魔法少女が飲み込まれる。インクをぶちまけたかのような炎の余波が、両手で防

御姿勢をとった糸巻の姿も、その悲鳴さえも包み隠した。

闇黒の魔王ディアボロス 攻3000↓灼熱の火霊使いヒータ
攻1850 (破壊)

糸巻 LP2000↓850

「糸巻さんー!」

「うるせえ、ヒータの効果発動!リンク召喚したこのカードが相手に破壊された時、守備力1500以下の炎属性モンスターをデッキから手札に加える!」

闇の炎を振り払い、その内部から糸巻の燃えるような赤髪が覗く。生々しい火傷の跡も、なおも力強いその瞳の光を消してはいない。

「不知火の武部、ですか。もっともそのカードを使うにしても、まずこの攻撃を防いでからの話ですが。貴女のことですから、どうせその伏せカードに何か仕掛けがあるんでしよう?ならばその防御札、剥がさせていただきますよ。九尾の狐でダイレクトアタック、九尾槍!」

白面金毛の妖狐の尾が、生物の毛並みから瞬間的に金属の光沢に代わる。どこまでも伸びる大妖怪の槍が、糸巻めがけ鋭く突き出された。

糸巻のフィールドには、現在伏せカードが3枚。そのうち2枚はレッド・リブートと燕の太刀であることをお互い承知しているが、まだ1枚未知のカードが残っている。当然その1枚により、この攻撃を耐え凌ぐことを巴は知っている。それぐらいのこともできないようでは、彼女に彼のライバル足りうる資格はないからだ。

果たして糸巻は、そんな歪んだ信頼に見事応えて見せた。

「トラップ発動、恐撃!アタシの墓地からモンスター2体、イピリアとヒータを除外して、九尾の狐の攻撃力は0になる!」

「ディアボロスの効果の対象にできない……それさえなけりや、糸巻さんもここまで追いつめられなかつたつてのに!」

「やっぱ強いねえあの人。糸巻さんも全く退く気はないみたいだけど!」

九尾の狐 攻2200↓0↓糸巻 (直接攻撃)

「そして通常トラップの発動にチェーンして、墓地からバースト

マ・カナディアの効果を発動。このカードをモンスターとして特殊召喚する」

バージエストマ・カナディア 攻1200

鋭く唸った九尾の尾は、不可視の壁に阻まれて糸巻の体を貫けな
い。さらにステータスこそ下級相当とはいえ壁となるモンスターま
で増やした糸巻に対し、悔しがるところかそれでいいとばかりの微笑
を浮かべた巴が最後の手札に手をかける。

「そう、それぐらいはやってもらわなくては。メイン2に魔法カード、
おろかな副葬を発動。デッキから墓地に魔法・罫カード1枚、ハイ
レート・ドローを送り、その効果を発動。私のフィールドのカード1
枚を破壊し、このカードをフィールドにセットします。リビングデッ
ドの呼び声が破壊されたことにより、その効果で蘇生していた九尾の
狐もまた破壊」

力を失った九尾の狐が、音もなく狐火となってどこからともなく吹
いた風に溶けていく。しかし体の大部分が消えたのちも、小さく揺ら
ぐ2つの炎の塊だけはその場に残り続けていた。

「九尾の狐が破壊されたことにより、攻守500の狐トークンを2体
特殊召喚します」

狐トークン 守500

狐トークン 守500

「そして、墓地より九尾の狐の効果を発動。モンスター2体を贄とし
てリリースし、墓地より還れ九尾の狐！」

2つの狐火が突如として膨れ上がり、1つの業火となって辺りを怪
しく照らす。やがて炎の塊は音もなくその姿を変えてゆき、火の粉を
散らしながら白面金毛の大妖怪が再び現世に舞い戻った。

九尾の狐 守2000

「ターンエンドです」

一進一退といえれば聞こえはいいが、要は互いに互いの手を知り尽く
しているがゆえに先読みに先読みを重ねお互いの次の行動をひたす
らに潰しあう攻防。この2人のデッキには1度まともに回り始めれ
ばたかだか4000程度のライフなど瞬きする間もなく消し飛ばせ

るだけの力があるがゆえに、当然初見殺しが通用しないとなればどうしてもこういった一見すると地味な展開が続くことになる。そして清明と鳥居のどちらも、この水面下での息詰まるような戦いがわからないほど素人ではない。

「いやー、見てるだけで胃が痛くなってくるね」

「すっげえ楽しそうにしか見えないんだが」

余裕があるのではなく、今更この戦いに当事者として首を突っ込む余地はないとの判断だろうか。どうすることもできない以上、せいぜい他人事として最後まで見届けるしかない。負け犬2人がそんなことを喋っている間に、糸巻がカードを引き抜いた。

「アタシのターン。行くぜ、不知火の武部！このカードの召喚成功時、デッキから妖刀―不知火モンスターを特殊召喚できる。来な、妖刀！」

不知火の武部 攻1500

妖刀―不知火 攻800

まず召喚されたのは、先ほどヒータが最後の力で手札に加えさせた炎属性の少女。九尾の狐が残したものはまた性質の違うこの世ならざる炎が渦を巻き、1本の妖刀が宙に浮かび上がった。そしてその場所を中心に、あたりの空気が一変していく。

「さつきはアンタの辛気臭い闇を見せつけられたからな、今度はアタシの領土に案内してやるよ。墓地の屍界のバンシーを除外することで、デッキからこのカードを直接発動することができる。フィールド魔法、アンデットワールド！」

「視界のバンシー、私の手札抹殺で捨てさせたカードですか」

返答替わりに鼻で笑う横で、しだいにアンデットワールドの風景が広がっていく。床は瘴気に溢れた大地と化し、湿って痩せた土地にはねじくれた枯れ木と鮮血の沼が思い出したように広がる。天井は切れ目ひとつない分厚い雲に覆いつくされ、どこまでも広がる荒野に時折骨をむき出しにした小動物や半透明の霊魂が彷徨う姿が見え隠れする。

「アンデットワールド、死霊が死霊を喰らう土地、ですね」

「おいおい、他人のセリフを取るのはご法度だぜ？アンデットワールドがある限り、互いのフィールドと墓地に存在するモンスターはすべてアンデット族に書き換わる。アタシのカナディアも、アンタの魔王様もな」

バージエストマ・カナディア 水族↓アンデット族

闇黒の魔王ディアボロス ドラゴン族↓アンデット族

「そしてレベル合計は8、と」

「ああ、そうさ！アンデット族モンスターかつレベル2のカナディアとレベル4の武部に、レベル2の妖刀をチューニング！戦場切り裂く妖の太刀よ、冥府に惑いし亡者を祓え！シンクロ召喚、戦神―不知火！」

☆2+☆4+☆2=☆8

戦神―不知火 攻3000

浄化の炎による二刀流を構える剣士が、死霊と化した魔王と対峙する。その全身から立ち上るのは、決して消えることのないこの世ならざる炎の技。

「戦神の効果発動。特殊召喚時にアタシの墓地のアンデット1体を除外することで、ターン終了時までその攻撃力を加算する。アタシが選ぶのは攻撃力1500の武部、不知火流・火鼠の皮衣！」

戦神―不知火 攻3000↓4500

「そして武士がゲームから除外されたことで、その効果を発動。カードを1枚ドロし、手札1枚を捨てる」

「む……ならばハイレート・ドロを発動！私のフィールドから2体以上のモンスターを任意の数だけ破壊することで、その数2体につき1枚のカードをドロします」

「おっと、リバースからレッド・リブートを発動だ。デッキから1枚トラップを伏せてもいいが、その発動と効果は向こうとして再セットさせてもらうぜ」

先ほど止められた恨みとばかりに、今度こそ発動に成功したレッド・リブートがハイレート・ドロで先にモンスターを破壊してのダメージ回避を封殺する。炎の軌跡がアンデットワールドの空を裂き、

闇の魔王めがけて打ち振るわれた光の弧が、その欠片たりとも逃さず炎の中に焼き滅ぼす。

戦神―不知火 攻4500↓暗黒の魔王ディアボロス 攻3000
(破壊)

巴 LP2000↓500

「大きく削った……でも……」

「ああ。正直かなりまずいぜ、これは」

巴のエースの一角でもある闇黒の魔王が倒されたことは間違いなのだが、素直にそれを喜ぶ気にはなれない外野2人。もつとも、それは糸巻本人にとつても同じだった。逆転したというのにその様子は晴れやかなものではなく、むしろ憔悴といった表現そのものの表情を隠そうともしない。

そして実際、糸巻にとつて今の状況はお世辞にも褒められたものではない。そもそもディアボロス是自己再生が極めて容易なモンスターであり、1度や2度戦闘破壊した程度ではあまり痛手となりはしない。そしてこのターン中にとどめを刺すことができなかつたということは、つまり巴のターンがもう1度回ってくるということ。しかもレッド・リブートのデメリットにより彼はデッキから場に1枚のトランプ、砂塵の大竜巻をセットしている。

戦神―不知火 攻4500↓3000

「ターンエンド」

「私のターン。ドロローをし、まず砂塵の大竜巻を発動！この効果により、場の魔法・罫カード1枚を破壊します」

「……」

ごうごうとアンデットワールドに竜巻が唸り、はためく風が巴と糸巻の髪を、服を激しく揺らす。糸巻の場に存在する破壊可能なカードは、3枚。

「すでに見えている燕の太刀、アンデットワールド……ですが、それだけではありませんよね？先攻1ターン目に伏せたきり、いまだ頑なに発動されていないそのカード。自己再生能力を持つ私のディアボロス、そしてもとよりアンデット族である九尾の狐の前にアンデット

ワールドは大した意味をなさず、それぞれ相手の効果の対象にならないか破壊時にトークンを場に遺す彼らにとつて燕の太刀もまた恐れに足らず。私がレッド・リブートで伏せるカードに砂塵の大竜巻を選んだのは、その1枚をただ消し去るため。したがって、選ぶまでもありません」

「……」

糸巻は険しい目で眼前の竜巻を睨みつけたまま、何も喋らない。砂塵の大竜巻が不浄の大地を巻き上げて、次第に彼女の元へと近づいてくる。その沈黙の意味を、誰もが確信した。何を伏せているにしても、これですべての望みは断たれることとなる。

「砂塵の大竜巻よ、私から見て右側にあるその伏せカードを破壊しなさい！」

明確に対象を定められた竜巻が、意思を持つかのように軌道を変え、伏せカードが風にあおられ、めくられ、吹き飛ばされてバラバラになる……そして最後まで、そのカードがチェーンされることはなかった。

「……なあ、巴よお」

「はい？」

それを見送った糸巻が、ようやく口を開いた。普段の調子に似合わない妙に神妙な様子に、わずかな違和感を覚えた巴がつい素の反応でそれに返す。

「アンタは、本当に大した奴だよ。絶対認めたくはないけど、まあ1回ぐらいは認めてやる」

「……いきなりなんですか、気色悪い」

「いや、別に。アンタはアタシの動きを読み切ったうえで、この状況に持ってきたんだろ？アタシの伏せるカードにブラフはない。いつだってアタシは前のめり、破壊待ちなんてまだるっこしいもん使うぐらいなら、自分が攻め込むためのカードをぶち込む。その辺の理解は、ひよつとしたらアタシ自身よりもアンタの方が深かったのかもな」

「……」

今度沈黙したのは、巴の方だった。糸巻がこの突然の独白で何を言わんとしているのかその真意を測りかねたというのもあるが、まさにそれはこのデュエルにあたって巴がデッキを調整する鎖に意識してきたことそのものであったからだ。いつだって前のめりで、停滞した時には自分から試合を動かしかかる。熱しやすく冷めやすい変なところでクレバーで、最近はやや錆びついていたとはいえ化け物じみた引きの強さを誇る。他にもあらゆる要素を、それこそ2枚の伏せカードがある際にサイクロンを手にした場合右と左のどちらを破壊することが多いかに至るまで徹底的に計算したうえで彼はこの場所に立っている。

そしてそんな趣味嗜好のひとつが、相手に依存するカードを好まないという点であった。ゆえに彼女の繰り出すカードにブラフはなく、見えないままの1枚も常に最も効果的な発動の瞬間を狙っているだけにすぎない……それが、彼の得た糸巻太夫という女の結論だった。ゆえに、彼は自分のカードがレッド・リブートにより止められた際、真っ先にデッキから直接セットするカードに砂塵の大竜巻を選んだ。闇のデッキ破壊ウイルスよりもより確実に、見えないカードを打ち抜くために。

その判断に迷いはないし、間違っているとは思わない。目の前の相手が糸巻太夫であるがゆえに、それは最適解となる。

「だからアタシは、ひとつだけ賭けに出た。アタシ自身よりもアタシのことを理解して、読み切って、その上でそれを上回るアンタを信じてな」

「何を……」

「本当は仕込み爆弾や不運の爆弾あたりのカードが欲しかったんだがな、なにせその辺のカードは例のデュエリストフェスティバルの時に大量回収されたあげく、どっかのバカがどさくさに紛れて持ち出しやがったからな。探しに探して、ようやくこれ1枚しか見つからなかったんだよ」

じろりと遠巻きに見守る鳥居に視線を送ると、無言で首をすくめて小さくなる姿がわずかに彼女の目に入った。それを見て小さくくす

くすと笑い、吹き荒れる風の中で改めて巴と向かい合う。

「アンタが破壊した1枚、アタシがずっと伏せてたカード。ちよいとばかり古いのは否めないが、それでもしつかり仕事はできるもんだ。ただやっぱ駄目だな、こういうのはアタシの性に合いそうにない」

言いながら、その1枚をゆつくりと引き出して表を向ける。少し自嘲気味に、笑いかけた。

「だから、やっぱり最初で最後だ。有難く思っただけに焼き付けとけよ？これぐらいの奇策じゃないと、通用しないと思っただけだからな」

「その……カードは……！」

「ゴザツキーの自爆装置。このカードが破壊された時、破壊したプレイヤーに1000のダメージを与える」

アンデットワールドの中央で、何かが臨界点を越えた。無音の中で炎が弾け、1瞬遅れて天地を揺さぶるような轟音が響く。

「アンタは、『読み』ならアタシの上を行ってたさ。だがな、『読み合い』なら……アタシの勝ちだ」

清々する、というよりはむしろ悲しげな声がかんたかに響く。

「結局、アンタでも駄目なんだな。どうやらアタシは、まだまだ戦い続けなきゃ許してもらえないらしい」

巴 LP500↓0

「糸巻さ……うおっ！」

誰かが何かを叫んだかもしれないが、それは誰の耳にも届かなかつた。ゴザツキーの自爆装置1枚にしては明らかにオーバーなこの大爆発が、鳥居がこのプラントを爆破するため隠し持ってきた大量のカードが一斉に連鎖反応を起こして実体化したものであることは、誰も知らない。

この場にいた全員の視界は、そして聴覚は、すべて白い炎によって埋め尽くされた。

ターン38 パラダイムシフト

「ヒーローバリアー！」

低く凜とした声が、その時響いた。その熱量と光量からその場にいる人間すべての視界を白く染め、爆発的な勢いで広まろうとしていた炎が、ちつぽけな人体を飲み込む寸前に突如として実体化された1枚のカード、高速回転するプロペラのような壁に阻まれる。

「なにっ!？」

「こ、これは……」

押し寄せる炎からもっとも近い場所にいた糸巻と巴が、ほぼ同時に困惑の声を上げる。そして、彼女らは見た。床を壁を未練がましく舐めては一定の位置から不可視の壁に阻まれる炎の向こう側に、1人の人影が立っているところを。メラメラと荒ぶる照り返しが、その顔をくつきりと照らす。

「爺さん?」

「ご老体……?」

その男の事は、この場にいた全員が知っていた。いや、むしろかつてそこにあった栄光の時代……デュエルモンスターズが栄え、政界や財界と並びカードゲーム界が世界を構成する概念として存在し、かつての糸巻や巴がそこにいた世界を知るものであれば、彼を知らぬものなどいないだろう。13年の歳月はその風貌にきっちり刻まれているが、確固たる意志の力は依然として衰えていない。

単なるカードゲームに過ぎなかったデュエルモンスターズを、ゲームを超えて世界を支配する概念にまでの上げた伝説の男。生ける伝説、プロデュエリストという職業の原点にして頂点。

『「グランドファザー」……』

「……七宝時、守」

ここにいるはずのない、すでに現役を退いて久しい元プロデュエリスト。今では一介のカードショップ店長でしかないはずの彼が、なぜこの地図にもない海上プラントに平然と来ているのか。

「……いや、聞くだけ野暮だったな。助かったぜ、爺さん」

諦めたように、糸巻が首を振る。裏の顔として情報屋も営むこの地獄耳の老人なら、何を知っていても不思議はない。そして炎の中を平然と歩いてきた七宝寺が、急ぎ立てるように身振りで促す。

「ひひっ、妙なところでの思わぬ再会だが、話は後にしようとも。今の爆発は、まだまだ小規模……このまま放置していたら、比べ物にならないぐらいにここ一帯が吹き飛ばよ」

「どういう意味です、ご老体」

「巴の、この施設に随分無茶させたみたいだねえ。ここを乗っ取ったばかりのアンタには理解できてなかったみたいだが、そもそもここはまだ未完成もいいところだったのさ。冷却施設がまともに機能しないとところをフル稼働させたうえに、こう何度も何度も短期間でカード実体化の繰り返しだ。侵入者退治でドンパチャやってる間に、中央部はもうオーバーヒート通り過ぎて融解寸前まできてるんだよ」

「なんですって……!?!」

「底抜けのアホ」

突然の通告に言葉を失う巴に、ここぞとばかりに間髪入れず駄目押し of 嘲笑を浴びせかける糸巻。しかし彼女にとっては残念なことに、そこで悪戯をした子供を叱りつけるような目つきでじろりと睨みつけられたため、続く煽りの言葉は口の中で消えていった。やはり、この老人には頭が上がらない。

「さあ糸巻の、それに巴の。話は終わりだ、アンタらはその若いのや途中で倒れてる奴らを連れて、もしものことが起きる前にここを抜け出しな」

「おいちよつと待て爺さん、アンタはどうする気なんだ?」

「私かい? ひひっ、私はここで、次の大爆発をどうにか抑えられないか試してみるよ。なに、最悪の場合でも私だけならどうにかする手はあるから待つてなくていいからね」

「な……!」

「さあ、行った行った。機械も碌にいじれない脳筋と、いっばしの技術者面して行くせに自爆寸前まで不調に気づかないようなのに残られてもやらせられることはないよ」

「……結局、これで終わりなんすかね」

「そうあつて欲しいもんだ。そら、無駄口叩いてると舌噛むぞ」

不規則に電灯がついたり消えたりする階段を鳥居と清明、そして糸巻の手首から延びる手錠に繋がれた巴が駆け降りる。それぞれの背にはいまだ気を失ったままの巴がここに配置していたデュエリストたちがおぶされているためスピード自体はあまり出ているとは言い難いが、それでも懸命に足を動かしていた。

彼女たちの目的地は無論、糸巻がここに乗り込んできた際に使用したモーターボートである。爆発の規模はまるで読めず、一番このプラントの構造に詳しい巴は先ほどの指摘が、というよりもむしろそんな事態に気づくことができなかつたことがよほど堪えたのか、いつもの嫌味な饒舌さも影をひそめて黙ったまま足を動かしているだけで話を聞こうにも頼りになりそうにもない。

その巴が、久方ぶりにぼつりとつぶやいた。

「……やはり、おかしい」

「あー？いきなり喋るんじゃないやねえ、アンタの声聞いとると耳が腐る」

「誘爆はまあいいでしょう、確かにコザツキーの自爆装置の実体化の影響で多少の被害が出ること自体はあり得なくもない。だが、融解？オーバーヒート？そんな事態が起きていて、この私が気づかないうちにそこまで進行していた？どう考えても不自然すぎる」

「よーやく口開いたかと思えば自己保身か？言い訳なら独房の壁にやってくれ、気が済むまでな」

そう切り捨てて先を急ぎながらも、鳥居の目は糸巻の表情が一瞬だけ揺らいだことを見逃さなかつた。

彼女は知っている。この男は、こんな場面で無意味な保身に走るような性格ではない。だが、それを聞き入れるということはすなわち、七宝寺の言葉とその判断に異を唱えるということだ。あの爺さんが判断を間違えるなどはもつと考えづらい、そう感じるだけの信頼と信用の積み重ねがああ老人にはあつた。

「……行くぞ」

だから一抹の不安を感じつつも、結局はまた前に進もうとする。その判断に何も言わず、また足を速める鳥居。しかしそこに待ったをかけたのが、ほかならぬ遊野清明だった。そして結果的に、この異邦人の一言が世界の運命を大きく動かすことになる。

「ごめん、ちよつとだけ待って。どうしたのスライム、竹丸ちゃんのところにはいたんじゃ……はあ!」

半分警戒、半分「また電波が始まった」という視線も意に介さず、虚空に耳を傾ける清明。のほほんとした表情が一変してみるみる真剣な顔つきになっていく。ややあつて小さく舌打ちし、半ば詰め寄るように糸巻へと向き直る。

「糸巻さん、どうなってるのこれ!? ついさつき家紋町で、七宝寺さんが竹丸ちゃん達……鼓さんと笹竜胆さんをデュエルでぼっこぼこにしてこつちに來たって……!」

「はあ!? ちよ、ちよつと待てお前! 本気で何言ってるんだ?」

「僕もわかんないよ。でも、今言った通りのことが起きてるって……」
「大体、鼓はフランスだろ? 笹竜胆の奴もどこで何してるのかわかったもんじゃないがこの辺の出じゃないし、なんで家紋町にいるんだよ」

「信じがたい話ですが、あながち出鱈目とは言い難いですね」

お互いに突然飛んできた情報に混乱しながらの言い合いをじつと耳を澄まして聴いていた巴が、そこで冷酷に切り込んだ。

「この際ですから、正直に明かしましょう。まず鼓千輪、笹竜胆千利。この両者を家紋町に呼び付けたのは、私です。これは先ほども言った通りですが、私はあの子供を巻き込むことについては否定的でした。貴女との殺し合いは、より純粹なものであるべきですから。なので何があつても対応してもらえよう、あの子供と縁の深いあの両者が適当なタイミングで間に合うように計算しました」

「そんなわけわからんことやってたのか……男の妄執は怖い、通り越して気持ち悪いぞ」

「その貴方がどうしてあの両者の名前を出したのか、まあ聞かない

でおきましよう。ですがその名前を出した時点で、彼女たちが今この時に家紋町にいるという事実をどうやってか知っているということに他ならない。当てずっぽうで出るはずのないその事実を知ることのできる情報網を持っているという時点で、今の話には信憑性が感じられます」

「……」

「糸巻さん……」

気に入らないという表情を隠そうともせずにくつと押し黙る糸巻。何か言いかけた鳥居も、その心中でさまざまに巡る思考を察して結局何も言えずに1歩下がる。ややあつて、その口が開いた。

「……わかった。爺さんのことはアタシが見て来よう。それと……」

言いさしてポケットから1本の鍵を取り出し、自分と巴の手首を繋いでいた手錠を開く。意外そうな顔で自由になった手首を折り曲げる巴に、地獄の底から差し込むような鋭い視線を投げつけた。

「アンタは、融解寸前とかいうその中心部の確認。どうせ気になつてんだろ？」

「おや、よろしいのですか？私を自由にしても」

「はっ、そんな気もねえくせによく言うぜ。少なくともアンタの性格なら、嫌だつってもそれが終わるまでは逃げる気なんてなかっただろ？お高くとまった研究者として、無意味にバカ高いそのプライドが許さねえだろうからな」

「ふむ。愚問、でしたね。貴女の指示でこの私が動くというのは吐き気が出そうな事実ですが、私の生涯の汚点として残しておくに留めておきますよ。それと、そういうことでしたらその貴方。『BV』を使わずにカードを実体化するその能力、役に立つかも知れません。彼は借りていきますよ」

そう言つて清明を指さすと、そう言われることは想定内だったのかあつさり頷く糸巻。言われた本人も特に不満はないらしく、はいはいと気軽に了承して巴の後をついていくのを確認し、残る1人に向き直る。

「それと、鳥居。アンタはこの辺の人間かき集めて、最悪お前だけでも

すぐ逃げられるようにアタシの乗ってきたボートで待機しとけ。いつでも出せるようにしておけよ……いいな、頼んだぞ」

そして、糸巻は元来た道を走りだす。いつも通り、ひとりぼっちの戦場へと赴くために。その姿を呆然と見送った鳥居の背で、彼の背負っていた男がかすかな呻き声と共に身じろぎした。

「う……」

「爺さん、いるか……う？」

糸巻が再び中央の広間に戻った時、まだ先ほど彼女自身が巻き起こした炎はごうごうと燃えていた。幸いにも空調が全力で空気を循環させているためか、それでも息苦しさは感じない。天井のスプリンクラーが水を吐き出してはいるものの、鎮火にはまだしばらくかかりそうだ。

「いや、空調止めた方が早いんじゃないか？酸素送ってどうすんだよ」「ひひひっ、もうしばらくは消えてもらおうと困るのでな」

1人佇んで背を向けていた老人の背中に、呆れ声を掛ける。広間に足を踏み入れてから1度も振り返りこそしなかったものの彼女の存在自体には気が付いていたらしく、別段驚いた様子もない声が帰ってきた。

「……そうか。あー、それでな、爺さん」

「なあに、皆まで言うことはないさね。なあ、糸巻の。アンタがここまです戻ってきたってことは、つまり、気づいたんだろう？それとも存外、まだ嫌な予感止まりかい？」

「……」

ただそれだけで、彼女には理解できた。理解、できてしまった。清明の与太話のような言葉は、巴の覚えた違和感は、決して間違っただけではなかったのだと。間違っていたのは、そこから目を逸らそうとしていた彼女自身なのだ。

悠長に会話している場合ではない。それはわかっていた。でもどうしても、聞かざるを得なかった。13年前のあの時よりも前、黄金

の時代を作り上げた男の言葉を。隠居の身となつてなお、デュエルポリスに情報を提供し彼女をサポートしてくれた、この老人の言葉を。

「どうしてなんだ、爺さん？なんでアンタが、こんなことを？」

「なんだ、そこからかい？違う違う、そうじゃない。アンタが私に聞くべきは、私が何をやろうとしているのか。なぜ、ではなく何、だ。そうだろう？」

心底愉快そうにひひひつと笑い、両手を広げる。糸巻にはその姿が、かつて彼自身がプロデュエリストの大舞台で大観衆を前におどけてみせた時の記憶と重なって見えた。

「実のところ糸巻の、私が付いた嘘はほんの一部だ。この施設がまだ未完成なのは本当だし、大分中枢があつたまっけてきているのも本当だよ。ただ、だからといって今すぐ融解するほどじゃない。そもそもこのプラントの情報をどこから手に入れて、なんでそんなことまで知っているのか……聞きたそうな顔だけど、まさかにそんなつまらないこと、今更口にはしないだろうね？私の情報源に口を出さない、そこは今まで通りやっていこうじゃないか」

「……」

「さて、それじゃあ話を戻そうか。なんでそんな手の込んだことをしたかというと、『B V』発生装置のある特性に用があつたからさ。これはデュエルポリス、テロリスト側双方でもかなりの上層部にしか知らせていないたぐいの機密なんだがね、この装置の出力は安定状態にあるほど低く、限界を迎えるほどに分子固定や物質操作、常識改編の力が強まるのさ。まして、このプラントのサイズだ。もしそれがオーバーヒート寸前の状態になつたとすると、そのエネルギー量はどのようなと思う？」

さもクイズのように問いかけるが、はじめから糸巻の答えは求めていないのだろう。口を開く様子のない彼女にもなんら反応することなく、またしても楽しそうに笑う。

そしてその笑顔に、彼女はふと引っかかるものを感じた。今、この老人は何と言つただろう。上層部にしか「知らせていない」？その物言いでは、まるで……。

「それこそ、世界を変えるほどの力がある。ブレイクビジョン……デュエルの常識を打ち破り、ワンランク上に世界を引き上げる力。私がかつて望み、そして辿り着いた力」

「ちよつと待てよ、爺さ……」

「ブレイクビジョン・システムの生みの親は、私だよ。私が研究し、産み出した」

それは頭を棍棒で殴りつけられた、糸巻にとってはそう錯覚するよ
うな衝撃だった。

どこからともなく情報を手に入れる、常に何でも知っている老人。昔も今も世話になり続けてきた、頭の上がらない生ける伝説。そして過ぎたこととして半ば諦めてはいたものの憎んでも憎み切れない、自分のいた世界全てを、デュエルモンスターズを落ちぶれさせた大戦犯。呪いの技術である「BV」の生みの親。2つの人物が突如として同一のものだと明かされ、床が抜け落ちていくかのような感覚を感じる。確かに固い床を踏みしめているはずの両足が、ひどく頼りないものに感じられた。

「意外かい？だがね、ひひっ。ほんの少しでもいい、考えてもみるといいさ。デュエルモンスターズがいくら優れていると言っても、所詮カードはカード。なぜ、世界はそれにあそこまで熱狂できた？なぜ一介のゲームに過ぎないものが、世界情勢を左右するほどの一大ムーブメントになった？仮にデュエルモンスターズそのものにそれだけのポテンシャルがあったとして、ではなぜこの私が表舞台に立つまでそうはならなかった？遙か昔に、私がそう願ったからさ。あらゆる不可能を可能とする錬金術のカード、賢者の石―サバティエルを実体化させて、ね」

「嘘だー」

自分のいる世界全ての前提が、絶対に手出しされないはずの部分から根こそぎぼろぼろと崩れ落ちていく。そしてそれを、糸巻にはどうすることもできなかった。

「残念だがね糸巻の、嘘じゃないよ。あの時、デュエルモンスターズを歴史の中枢に潜り込ませるといふ願いを叶えた際、サバティエルの実

体化の膨大な負荷に耐えきれずに最初の『BV』は完全に消滅し、あの技術の再現には長い時間がかかった。何年もプロデュエリストとして資金を稼ぎ、そのほとんどを研究に充て、また失敗し。ようやく不完全な再現に成功した13年前のあの時、私はそれを世界に公表した。あるいは私の思いもよらなかつた進化がデュエルモンスターズに起きるかもしれないとの願いを込めて、ね。そうさね、私は見誤っていた……まさか、あんな馬鹿げたことが起きるとは。テロリストの出現を読めなかつたのは、紛れもなく私の失態さ。糸巻の、アンタらにはこの13年間、本当に苦勞を掛けたね。こんな言葉じゃあ、何の足しにもならないだろうが……」

すまなかつた。深々と頭を下げてそう告げた老人の顔には、積み重ねてきた年月と苦勞の重みが深く刻まれている。それは、この荒唐無稽な与太話がまぎれもない真実であると告げていた。

「だけど、それもここで終わる。今からこのプラントに極度の負荷をかけ、本当に融解させる。糸巻の、アンタの部下が持ち込んできたあれだけの爆発物のカードを一斉に実体化させたうえで直接起爆させれば、火力としちや申し分ないだろうさ。ひひっ、いい花火だろう？そして完全にメルトダウンを起こす最期の瞬間に、このカードを世界規模で実体化させるのさ」

馬鹿げている。だがそうは口にさせない氣迫が、もはや妄執と言つても過言ではないほどの異様な力がその言葉にはこもっていた。見知った老人、怪しくはあるが善人だと思っていた好々爺。彼はその心の内に、ずっとこの狂気を飼っていたのだろうか。告白の衝撃も相まって口をきくことすら敵わない糸巻の目線が、自然とその引っぱり出したカードに向けられる。

「タイム・ストリーム……？」

「本来このカードは、化石モンスターの専用サポートでしかない。だがね、考えても見るといい。なにせ新生代を中生代に、中生代を古生代にするカードだ。効力を拡大解釈すれば、これは時間を巻き戻すカードに他ならない。これで、世界をあの時に戻すのさ。13年前のあの時に。私が犯した、最大の失敗をやり直すために」

やっとの思いで口を開くも、糸巻の口からは乾いた息が漏れる音しかしなかった。あまりにも多すぎる情報量に、いかに百戦錬磨な赤髪の夜叉といえども情報量が追いつかない。そもそも、口には出さねど彼女がプロデビューしたその時からずっと信じてきた男の正体の告白すらもまだ受け止め切れていないのだ。

何も口に出せない彼女に疲れたように笑いかけ、老人がゆっくりと背を向ける。

「それじゃあね、糸巻の。万事がうまくいったら13年前、もう一度あの栄光の時代でまた会おうじゃないか」

「ま、待てよ」

やつと声が出た。ひどく乾いた、力のない声だった。足を止めて怪訝そうな顔で振り返る老人に、必死になって問いかける。

「そんなこと……そんなこと、できると思ってるのか、爺さん」

「ひひっ、不安かい？らしくないね。でも確かに、成功率は高くはない。理論的には間違いないが、本当にメルトダウンする直前のコンマ数秒しか必要な出力を確保できる猶予はないからね。仮にそこを突破したとしても、うまく『BV』の効力が世界全体に広がらなければ意味がない。無論、私の理論が間違っている可能性だってある。なにせ、お試しや実験なんて余裕はなかったからね。正直、不確定要素でいっぱいさね。だから糸巻の、私はね。逃げな、と言ってるのさ」

「なら、なんで……」

「これは私の贖罪さね、糸巻の。プロデュエリストの、そしてそこに関わった様々な人々の人生を狂わせ、拳句全てを奪い去った、ね」

そう言ってもう1度歩き出したその小さな背中には、絶対にやり遂げて見せるという覚悟と妄執が満ちていた。その重みに圧倒されかかっていた糸巻だったが、それでも必死に言葉を繋ぐ。

「……なら！アタシは聞いたぜ、鼓や箏竜胆の話！ありや一体、どう説明付けるんだ！」

「あの2人には、悪いことをしたね。だけどあの場にいられた以上、知らぬ存ぜぬじゃすまないだろう？下手に勘繰られて色々首を突っ込まれるよりは、いつそことが終わるまで静かに眠ってもらう方がいい

と踏んだのさ」

言外にあの元プロデュエリスト2人、それも片方は今も現役のデュエルポリスフランス支部長をまとめて実力で下したという事実を突きつけられてやや怯むも、すぐに納得する。なるほどこの老人にいまだ全盛期の腕前があると仮定すれば、それもさほど難しい話でもないだろうからだ。

「だったら、八卦ちゃんはどうなんだ？ 爺さん言ってたよな、あの子は筋がいいって。それも全部なかったことにするんじや、なんのためにデュエル教えてたんだよ！ それに爺さんが失敗したら、あの子は一体どうするってんだ！」

「悪いね、糸巻の。でも、私は可能性に賭けたいんだ。全部うまくいった世界で、あの子ももう1度それを望む……そんな、全てが都合よくいった夢を見たいんだよ」

「くっ！」

糸巻自身にも、なぜこれだけ自分が必死になっているのかはわからなかった。この老人の言葉通りに事が進むのならば、それは彼女も望んだ世界の再来となるはずだ。デュエリストが虐げられ、すべてが転落したあの時代以前の姿。とうに諦めそれでも焦がれ、望郷の念を煙草の煙と共に吐き出し、ニコチンで必死にもみ消してきたかつての記憶。分が悪い、そんなことは問題ではないはずだ。例えほんのわずかにでも可能性があるのならば、そこに賭けて最後まで勝利を掴み取りに行くのがデュエリストなのだから。

だが、それでも。

「……っ！」

左腕を真横に伸ばし、デュエルディスクを起動させる。燃え盛る炎によって決して無音とは言い難いはずの広間に、その起動音がひどく大きく響いたような気がした。前に行く背中がぴたりと止まり、まるで初めて糸巻の存在に気づいたかのような目でゆっくりと彼女へと向き直る。

「……なるほど、糸巻の。君は私を止めるんだね？ その理由が、私には理解しがたいがね」

「アタシにも分かんねえよ、んなもん。なんでなんだろうな、ほんと」
首を振りつつ吐き捨て、デュエルディスクを構える。自分のしていることが正しいかどうか、彼女自身にも分からなかった。しかし、少なくとも間違っているとも思わなかった。

「でもな、爺さん。やっぱり、そりや無法が過ぎるってもんだぜ。13年の歳月は、いくらなんでも重すぎる。これはもう、爺さんひとりが自由にいじくっていい話じゃない。過ぎたことを否定するのは、13年間のアタシの、八卦ちゃんの、鳥居の……それに爺さん、アンタ自身の全てを否定するってことなんだ」

「少なくとも私の13年は、今日という日のこの瞬間のためだけに費やしてきたものだよ。それを否定するのなら、それこそ私の全てを否定することに他ならないさね」

「とぼけやがって、ならもう1回聞かせてもらうぜ。だったらどうしてアンタは、どうせなかったことになると思ってたくせに八卦ちゃんにデュエルを教えたんだ？」

「言っただろう？ 私は私の夢を追うのさ。あの子を仕込んでおけば、なんだかんだと面倒見がよくて人肌恋しい赤髪の間抜けはそっちにかりきりになってくれるからね。おかげで、私も一番大事な詰め新时期に自由に動くことができた。これだけ強大な出力を持つ『BV』電波塔の建設なんて、糸巻の。アンタみたいに勘の鋭いデュエルポリスが暇してる目と鼻の先で動き回っていたら、さすがの私も隠し通すのは骨が折れたらうからね」

「そんな理由で、八卦ちゃんに……？」

愕然とする糸巻を鼻で笑い、なんてことないように口にする。

「糸巻の、アンタは気持ちいいぐらい素直に動いてくれたよ。私のことなんて気にしなくなるぐらい、たくさんあの子に構ってくれた。なに、あの子についてはやり直した世界で、またゆつくりと教え直すさね。あの子に天性のセンスがあるのは、本当だよ」

「ちっ……」

悲しいことに、糸巻はよく理解していた。嫌でも思い出さざるを得なかった、といった方が正確かもしれない。喋りながらデュエルディ

スクを構えた老人の姿が、まるで2倍にも3倍にも大きく見える。

無論、それは目の錯覚だ。全身からゆらりと立ち昇る鬨気が、視線だけで人を射殺せそうなほどに鋭くなった眼光が、格の違いを戦う前から彼女の全身に嫌というほど叩きつけている。ふと気が付けば、彼女自身も意識しないうちにその両足は今にも倒れ込みそうなほどに震えていた。

普段の糸巻ならばそんな自分の無様さを、心のどこかで歓迎さえしていたかもしれない。これでようやくアタシは負けられる、精いっぱい戦って、それでも力及ばず負けることができる。そうすれば、この13年間の苦しみから解放されるんだと。だが、それは今の彼女にはできない相談だった。この戦いは、負けるわけにはいかなかった。たとえ世界が滅びようが知ったことではないが、全てを否定することはそれ以下の冒険に他ならない。

だから、彼女は息を吸う。自分1人では、運命は変えられない。ならば、どうする？ 答えは決まっている。どんな手を使っても、彼女はここで勝たねばならない。この13年間の世界の歩みがどれだけデュエルモンスターズへの侮辱と恥辱にまみれたものだとしても、その果てである今には一筋の光が生まれていることを証明するために。世界の歴史は、断じて間違っていないんだと証明するために。

だから、彼女はその名を叫ぶ。この13年間の彼女の象徴たる肩書き、デュエルポリスとして迷いなく。

「鳥居っ!! いるんだろうが、とつとと出てこいこの野郎!」

「ここに。つーか糸巻さん、いつから気づいてたんすか?」

そして鳥居浄瑠が、デュエルポリス糸巻太夫いちの部下が、何食わぬ顔してその隣に現れる。呼びかけに応え突如として現れた男にふんと小さく鼻を鳴らし、その背中を平手で無造作に叩く。

「最初からだ、馬鹿。おおかた引戸の……マネージャーの差し金だろ?」

「……バレてましたか。あの人、糸巻さんが出てってすぐに目を覚まして。脱出準備は俺がやっておくから、だそうです。それと、ひとつ伝言っすよ」

「伝言？アタシに？」

「俺は裏方、お前は表舞台。昔と何も変わらないだろう、まさかミスなんてするわけないよな？だそうで」

「はっ、あの野郎。マネージャーの分際でアタシをこき使おうたあ、随分『赤髪の夜叉』も舐められたもんだ。あーだこーだと口やかましくて、妙などこだけ小賢しい。奴もアンタも、そういうところは本当そっくりだよ」

口ではそう言いつつも、表情の方はくすくすと小さく笑う。気が付けば、足の震えは止まっていた。

「……なるほどねえ、糸巻の。彼が、この13年間で得たもののひとつかい？」

「まあな。情けない話だが、タイムマンでアンタに勝てるとはアタシも思わねえよ。だから、使えるもんは使わせてもらう。行くぜ、鳥居。へますんじゃねえぞ」

行けるか？ではなく、行くぞ。いまだ鳥居は先ほどのデュエルのダメージが抜けきれていないことは、糸巻もよく承知している。だがそれでもなおその言葉は勧誘や要請ではなくぶつきらぼうで彼女らしい、鼓舞だった。わかっているのだ、彼もまた彼女と同じ気持ちでここに立っている。そしてこの場で栄光の過去ではなく傷だらけの未来を掴むため、堂々と戦うことを選んでみせると。

だから鳥居もまた、その無条件の信頼に応えてみせる。なんののかんと減らず口を叩こうと、たとえ一時は心離れていても、それでも彼らはパートナーだった。

『さあさあそれではお立会い、今宵の舞台は世界を救う大公演！この戦場に立ち残るものが、世界の行方を左右する！大スペクタクルエンターテイメント、これより開演のお時間です！』

「……已むをえまい。なに、痛いのはほんの1瞬さね」

短時間に2人も反対を受け、さすがに悲しげな眼をしてデュエルディスクを構える。しかし老人に、ここで退くなどという選択肢は残されていない。世界があるべき姿に戻すため、よりよい未来を掴み直すため。これこそが、その唯一の道だと信じて。

ターン39 伝説の復活

「よし、まずはアタシの……」

「待ってください、糸巻さん。ここは、俺から行きます」

カードを引こうとした糸巻を手で制し、鳥居が1歩前に出る。氣勢をそがれた糸巻がその意図が読めない困惑に目をしばたかせている間に、すでにデュエルは始まっていた。

「ほう、まずは若いのからかい？ひひっ、若いねえ。その年齢だと、私の名前は知らないかな？」

「これは私の不手際、誠に申し訳ありませんが。確かに貴方のことはわたくし、存じ上げません……ですが」

すうと息を吸い、胸を張って前を向く。ただそれだけで、彼も感知できていた。先ほど糸巻を圧倒しかかりその心を迷わせすらもした、伝説の男と対峙するということの意味を。ただ立っているだけで息が無性に苦しくなり、いくら空気を吸おうとしてもまるで酸素が体に入ってくる気がしない感覚を。

それはまるで13年前、生まれて初めてエンタメデュエルの……劇座「デュエンギルド」の舞台に立った日のように。しかしこの日の勝負にかかっているのは、観客からの大喝采ではない。それでもこの舞台で先陣を切るこの意味は、一体なんだろう。

贖罪のつもり？罪悪感？確かにそれもないとは言えない、しかし今の彼がいまだ本調子からは程遠いボロボロの体を演劇の鎧と仮面で隠し前に出る理由は、もはやそんな小さなものではなかった。どれほど辛いものであろうともすでに進んでしまった時計の針、世界の歴史。控えめに形容してもくそつたれだった人生を本来こうあるはずだった過去の栄光から守るため、エンタメデュエルが幕を開く。

『さあさお立会い、伝説のお方。今宵のキャッチコピーは単純明快、シンプルイズベスト……魔界劇団、世界を救え！たとえば世界がそれを知らずとも、我々のしてきた選択が間違っていないことを示すため！私のターン！』

「ひひっ、威勢がいいことだねえ。だがこれは1対2の変則デュエル、

まずルールの確認をさせてもらうよ。本来ならば人数に差があることでその差に応じて初期手札とライフを増やした状態でデュエルを開始できる……だがね、あいにくだがそれはいららないよ。わずかばかりのハンデだと思っておいてくれ」

「……随分余裕じゃねえか、爺さん」

「これぐらいしてあげなきや、糸巻の。ただ2対1にしただけじゃまともな勝負になりやしないのは、ようくわかつているだろう?」

なんてことないように歯をむき出して笑う七宝寺の言外に滲む、圧倒的なまでのその実力に対する自負。何よりも恐ろしいのはそこに傲慢の色は一切なく、ただ何気なく事実を口に出しているという一点だった。だからこそ普段ならば嬉々として噛みつく糸巻も、その時ばかりは何も言い返さない。言い返せなかった、という方がむしろ正しいかもしれない。

彼女にも無論、自分が強者であるという誇りはある。特にここ数カ月での相次ぐ強敵との死闘はその勝負勘からデュエルポリスとしての生活の間にすっかり腕を鈍らせていた錆を落としきり、今の糸巻はあの当時をも上回る今が全盛期だと認めることすらやぶさかではない。そしてその隣の鳥居の腕のほどやそれを本番でいかに発揮してのける勝負強さとクソ度胸も、やはり彼女は高く買っている。

だが、それでもなお、目の前のこの老人には。一切のハンデがないこの状態で純粋に2対1で殴り掛かって……それでもなお、確実に勝てるかと問われれば躊躇する。

「恐れるがいい、そして畏れるがいい。『グランドファザー』、七宝寺守のデュエルをね」

どうせすぐに終わるんだ、それまでせいせい足掻いてみるがいい。

『くっ……それでは全ての始まり、未来を掴む第一幕。まずはレフト

ベンデユラム

P ゾーンにスケール0、世界に誇る我らが歌姫！魔界劇団―メロー・マドンナを。そしてライトPゾーンにはスケール9、まばゆく煌めく期待の原石！魔界劇団―ティンクル・リトルスターをセツティング！』

そしてその始まりを司るのは、立ち昇った光の柱の中央で佇む黒衣

に身を包んだ女性。まるで指揮棒を振り上げるかのように鳥居が手を伸ばす動作に合わせて光の中で息を吸った歌姫の口から、妙なる調べが流れだす。

『メロー・マドンナのペンデュラム効果を発動。我らが歌姫がこの戦場に奏でる調べは、はたして勝利を暗示する凱歌となるか、はたまた破滅に向けた鎮魂歌となるか。1000ポイントのライフと引き換えに、デツキより新たな魔界劇団の演者を1名私の手札に呼び寄せます！』

鳥居 LP4000↓3000

コストがかさむとはいえ毎ターンのサーチという、極めてシンプルで、強力で……そして同時に、この上なく分かりやすい止めどころ。何か妨害が来るか、とわずかに身構えたが、その心配は彼の杞憂だったようだ。

『そして私が選ぶカードは、やはりなんといっても外せません。彼こそが魔界劇団の顔にして、この大一番を戦うにあたり最も相応しい演者の中の演者、言わずと知れたあの男。それでは皆様お待たせしました、満を持しての登場です。刻まれしスケールは0と9、よってレベル1から8の魔界劇団が同時に召喚可能。ペンデュラム……召喚っ！』

大仰に両手を広げ、手元に残る3枚のカードを一斉にデュエルディスクに叩きつけるように置く。無論、彼が自らの商売道具であり5本目、6本目の手足ともいべきカードが痛むような真似をするはずもなく。

いかにして最小限の刺激で観客をはっとさせるような音を響かせるか、つまりカードの下部にどれだけ多くの空気を含ませて叩き付けるか。要するにメンコと同じ小手先の、しかし大切なテクニクである。

そして彼の両サイドに立った2本の光の柱の間から、3つの光が降り注ぐ。

『まずはご存じ、怪力無双の剛腕の持ち主。魔界劇団―デビル・ヒーロー！』

最初にその姿を見せたのは、3つの中でもひととき巨大な光。劇団員というよりもボディビルダーのようなポーシングで、モリモリと筋肉を誇示してみせる。

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000

『続いて、数字を操る凄腕のガンマン。魔界劇団―ワイルド・ホープ！』

そして今度はその逆に、3つの中でも特に小さな光がその姿をあらわにする。ハットにガンベルト風の模様のついた衣装と、全体的に西部のガンマンめいたその演者が手にした光線銃をくるくると巧みなガンスピンド回して見せ、スチャリと腰に収めて一礼する。

魔界劇団―ワイルド・ホープ 攻1600

『そして今こそご覧あれ、魔界劇団の誇る顔、栄光ある座長にして永遠の花形。世界を救うべく立ち上がった、その花形の晴れ姿！魔界劇団―ビッグ・スター！』

2体の魔界劇団に挟まれるフィールドの中央に、満を持して最後の光が落下する。無論その光の正体は、ひよろりと長く極端に細い手足が特徴的な隻眼の座長。魔界劇団の、そして鳥居にとってもエースオブエースであるあのカード以外にあり得ない。アピールに余念のなかった前2体とは違い、対戦相手たる七宝時相手に深々と仰々しいお辞儀をしてみせた。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

『おいおい鳥居、いきなり手札5枚ぶん投げて……って、随分前のめりじゃねえか』

「そりゃあ、俺だってわかりますよ。守備固めなんて悠長なことやってたら、ぶっ倒れるのはこっちの方だって。『それでは、ビッグ・スターの効果を発動！座長たる彼は毎ターン、デッキより任意の演目たる魔界台本を選びフィールドにセットする公開予告を行うことで、そのターンに公演する演目を決定します。やはり先攻1ターン目といえば、何かが起きる始まりの時間。果たして我々の世界は今後「過去」に進むのか、はたまた「未来」へ舵を切るのか？たとえどちらの行路に運命の女神が微笑むとしても、その始発点たる「現代」にできるこ

とはただひとつ。できる限り華々しく、その戦士たちを戦いの場へと送りましょう！ビッグ・スターの効果によって魔界台本「オープニング・セレモニー」をセットし、通常魔法たるこのカードを即座に発動！私のフィールドに存在する魔界劇団1体につき、500ライフを回復いたします！」

色とりどりの風船が宙を舞い、様々な形のバルーンアートが視界を埋め尽くす。パン、と小気味いい音とともに頭上ではくす玉が弾け、その中身だったらしいカラフルな紙吹雪がデュエリストとモンスターたちの上に華々しく降り注いだ。

鳥居 LP3000↓4500

「それではこれにて第一幕、プロローグをば締めさせていただきます。いよいよ本格的な活劇となります第二幕、その幕が上がる時をしばしお待ちください！」

一礼してターンを終える鳥居。今回は人数が3人ということもあり普段行われることの多い盤面や墓地を共有するタッグデュエルのスタイルではなく、3人がそれぞれ別の盤面を持ち行われるバトルロイヤル方式でターンが動く。もつとも、事実上糸巻と鳥居がタッグを組んでいることを考えれば事実上2対1のデュエルであるのだが。

そして勢いをそのままに、ターンを引き継いだ糸巻が動き出す。

「悪いが爺さん、アタシもアンタが相手とあつちやあ加減できるほど余裕はねえ。本気でぶつ飛ばさせてもらうぜ、アタシのターン！」

口調こそ勇ましいが、表情は険しい。カードを引き抜く手の動きにも、心なしか虚勢が混じっている。それほどまでに、伝説への畏れはかつてのプロデュエリストの心の奥深くに刻まれ、この老人が表舞台から消え場末のカードショップ店長となってからの13年のうちにも、それは肥大こそすれ減少することはない。

「相手フィールドにモンスターが存在することで速攻魔法、逢華妖麗譚―不知火語を発動するぜ。手札からアンデット族1体を捨てて、デッキか墓地から捨てたモンスター以外の不知火1体を特殊召喚する」

バトルロイヤル2番手の強み、それは相手がフィールドにカードを

出していないという事実上先攻でありながら後攻特有の初動が打てること。墓地にあつてこそその力を発揮する馬頭鬼を墓地に送り込みつつ、先を見据えての展開が始まった。ゆらりと立ち上るオレンジ色の炎が人型をなし、和装に身を包む青年剣士が腰の刀に手をかけて居合の構えをとる。

不知火の武士 攻1800

「武士……？面白い。続けてもらおうか、糸巻の」

墓地からアタッカーを蘇生するというのでもなければ、基本的に不知火語のカードは初動札、不知火の隠者をリクルートしてさらに自身の効果に、そして更なる墓地肥やし能力を持つユニゾンビへと連続リクルートを繋げるのが不知火のみならずアンデット族全般の基本パターンであり、当然それは七宝時も熟知している。だが糸巻は今回、あえてそれとは違う手を打った。それをミスではなく何か別の思惑があるのだと即判断したのは、長年の付き合いからくる信頼ゆえか。「さて、な。そんな面白いもんが出せるかどうかはわからんが、せいぜい爺さんのお眼鏡にかなうようにやらせてもらうさ。不知火の武部を召喚し、効果発動。デッキより妖刀―不知火モンスター1体を特殊召喚する。来な、妖刀！」

次いでもう一つ、明るい色の炎がぽつと立ち上る。次いで現れたのはどこか武士と似通った装束の和装少女。しかし決定的に違う点として、その手に握られた得物は刀ではなく巨大な薙刀だった。

不知火の武部 攻1500

妖刀―不知火 攻800

「ふむ？」

「そしてアンデット族モンスターの武士、武部、妖刀の3体を上、下、左のリンクマーカーにセット。戦場に開く妖の大輪よ、暗き夜を裂き昏き世照らす篝火となれ！」

3体のモンスターがそれぞれ3つの火柱と化し、さらにそれが中央の武部を軸として溶け合いひとつの巨大な炎へと生まれ変わる。短く揃えられた髪は肩までかかる艶やかな長髪に、纏う装束は炎のそれを基調とした色合いはそのままにより絢爛な正装に、そして手にした

薙刀もまた炎の力を得て一回り大きなものへ。

「リンク召喚、リンク3！麗神うるわしがみ―不知火！」

麗神―不知火 攻2300

明るく輝く炎が不確かで、そして間違っても順風満帆なものではない未来を、それでもなお照らす篝火のように燃え上がり、糸巻とその隣の鳥居のフィールドを染める。

このまま彼女たちが敗北すれば、世界は何も知らないままに過去を、現在を、そして未来を変えられる。もはや自分たちの時代は明確な終わりを迎えており、これからはようやく芽吹き始めたばかりの新たな世代である八卦たちのものだ。人生の先輩として助言ぐらいはするだろうが、未来の在り方そのものに手を加える資格はすでに自分らにはない。それがすでに幾度となく口にしてきた糸巻の人生哲学であり、このデュエルへの最大の原動力だった。

そしてそれが、七宝寺には理解できない。高い実力と、人目を引く勝気な美貌にスタイル。彼自身自分の娘ほども年の離れた糸巻に対し邪な感情を持ったことはないが、彼女が人前に立つ勝負師としての天性の才能を持っていることはかつてプロ志望としてこの世界の門を叩きにきたその時から一目で理解できた。その見立てが間違っていないことはほかならぬ彼女自身が証明してくれたし、13年前の事故の後も決して腐ることなく常に全てのものに対し悲しくも美しく突っ張っていくその姿からは彼女こそ新たな時代、本来あるべきだった今から取り戻そうとする未来を引っ張っていくにふさわしい人間だと思いすらした。

それだけに、それがわからない老害と成り果てたかつての英雄の姿がただただ悲しかった。

それだけに、未来から心を閉ざしそれを否定したかつての新世代の姿がただただ悲しかった。

「残念だよ、糸巻の」

「アタシも残念だよ、爺さん。カードを伏せてターンエンドだ」

だから、赤髪の夜叉は思う。せめて、戦い続けて狂気に引き込まれた哀れな老人に引導を渡さねばと。

だから、グランドファアザーは思う。この全ての歯車が狂ってしまった世界をあるべき姿に戻さねばと。

「私のターン。さて、まずはそちらの君からかね、ひひっ」

6枚の手札を抱えて老人がぐるりと顔を向けたのは、鳥居。場慣れしたプロの精神力すら上回る本能的な恐怖によつて蛇に睨まれた蛙のように固くなった1瞬を逃さずに、狙いを定め一気に攻め込む。

「E・HERO エレメンタルヒーロー ソリッドマンを召喚し、効果発動。手札から更なる

HERO、エアーマンを特殊召喚。その効果で、デッキからさらに別のHERO1体を手札に加えるよ」

「【HERO】……」

E・HERO ソリッドマン 攻1300

E・HERO エアーマン 攻1800

鳥居にとつても見覚えのある大地の英雄が、ここ数か月で幾度となく目にしてきた風の英雄を引き連れてフィールドに呼び出された。それはあの天真爛漫な少女が愛用しているカード群とまったく同じものであり、呆然と口から出た言葉を聞き逃さなかった老人がおや、と少し意外そうな顔で返す。

「なんだ糸巻の、それに九々乃もか。誰も、私のデッキについては喋ってなかったのかい？ 考えてもみるといい、誰があの子にデュエルを教え込んだと思っていたのさ？」

「……そういや、お前は知らないんだったな。生ける伝説、プロデュエリストの生みの親。『グランドファアザー』、その使用デッキは【HERO】、それも」

「おつと糸巻の、そこまでにしてもらおうか。せつかくのお楽しみをこの爺いから奪わないでくれよ、ひひっ。エアーマンで手札に加えるカードの名は……E・HERO ネオス。あの子がクノスペを使うように、これが私のデッキの核さ。覚えておきな、冥途の土産にね」

宇宙の力を秘めたヒーロー、ネオス。それを切り札と呼んで手札に加えた老人が、さらに場の2体を動かす。

「そして戦士族モンスターソリッドマン、エアーマンの2体を右下、左下のリンクマークカーにセット。運命が淑女を翻弄するとき、淑女も

また運命を弄ぶ。紡ぐがいい、運命の英雄譚。リンク召喚、リンク2。聖騎士の追想 イゾルデ！」

聖騎士の追想 イゾルデ 攻1600

金髪の大柄な美女と、それよりもやや小柄で真っ白な肌の薄幸そうな美人。2人の女性が天を仰いで祈りを捧げると、どこからともなく降り注ぐ光がその全身を照らす。

「イゾルデがリンク召喚に成功した時、デッキから戦士族モンスターを手札に加えることができる。ただしこの効果でサーチしたカードとその同名モンスターはこのターン表側表示で場に出すことも効果を発動することもできないがね。これで2体目のネオスを手札に。さらにイゾルデのもうひとつの効果によって装備魔法、インスタント・ネオスペースをデッキから墓地に送りレベル1の戦士族モンスター、焰聖騎士―リナルドを特殊召喚する」

焰聖騎士―リナルド 攻500

「リナルドの効果を発動。特殊召喚成功時、墓地か除外されている炎属性の戦士族か装備魔法1枚を手札に戻させてもらおうよ。これで、今さつき送ったインスタント・ネオスペースは私の手に……」

「そいつは通してやるが、リナルドとイゾルデでのリンク3は作らせねえぜ！トランプ発動、呪言の鏡！デッキから特殊召喚されたモンスターを破壊し、アタシはカードを1枚ドロウする」

イゾルデのそばに現れた焰の騎士が、まだ着地したかしないかのうちに破壊され消えていく。追加のドロウ効果によって一切のディスプレイアドバンテージなしにモンスターを破壊し後続を止めてみせた糸巻の顔が晴れないのは、今のイゾルデとリナルドによる墓地を経由した事実上装備魔法をサーチするコンボを止められなかったからか。呪言の鏡はモンスターを破壊こそするが、その召喚そのものを無効にする能力まではない。

「ま、これは後でのお楽しみ、さ。魔法カード、融合を発動！ひひっ、さあ満を持しての登場だ。手札に存在する通常モンスターのHERO、ネオス2体を素材とするよ」

「来やがったか……！」

手札に存在する、レベル7の最上級ヒーロー2体による融合。デュエル開始と前後して急に安定しなくなった照明の落とす弱々しい光によって薄暗い廃棄施設とも取れる様相を呈したプラントに、全てを満遍なく照らし出す黄金の光が差し込んだ。

「世界を支えし数多の歴史、歴史を紡ぐ数多の世界。世界は変わる、あるべき姿に！融合召喚、E・HERO グランドマン！」

E・HERO グランドマン 攻0↓4200 守0↓4200

イズルデのリンク先に召喚される、両手首に直接装着されるタイプの小型銃を仕込んだヒーロー。その姿はスーツの色合いも含め、まるで黎明期の「HERO」をつくり支えてきた原初の英雄たちがひとつになったかのように。その使い手にふさわしい、歴史の重みが不可視のプレッシャーとなって対戦相手に降りかかる。

「攻撃力、4200……！」

「そうさね。グラントマンの攻守は本来0だが、自身の効果によって融合素材とした2体のレベル合計、その300倍の数値となる」

鳥居の場で最大の攻撃力を持つモンスターは、デビル・ヒールの3000。イズルデの攻撃力ではワイルド・ホープと相打ちに持っているのがやっとなことを考えれば、まず狙われるのはそこか、毎ターン新たな魔界台本を持つてくるビッグ・スターか。いずれにせよ、ターンが返ってくればペンデュラム召喚で挽回は可能。

だが、生ける伝説はそんな予想を軽々と超えていく。

「さて、バトルといこうかね。グラントマンで、魔界劇団―ワイルド・ホープに攻撃だ」

「ダメージ優先、ですか？だとしても、私のライフはまだ残ります。ワイルド・ホープの持つ破壊された際に次なる団員を私の手札に呼び寄せる効果も合わせ、第2幕にてフィニッシュとさせていただけ……」

「させるか、爺さん！」

1瞬のにらみ合いの後、どちらが先ともとれぬガンマン2体の射撃対決。先手を取ったのは、腰の光線銃を引き抜いたワイルド・ホープ……しかし、それはグラントマンの手のひらの内だった。狙い澄まし

ての正統派な早撃ちを、白い翼を広げ軽く体をひねり余裕綽々といった態度であつさりと回避したグランドマンが、射撃直後の隙を狙い両腕の銃から正確に一発ずつの閃光を放つ。

わずかに回避が遅れ、突き進む閃光の前に無防備な体をさらすワールド・ホープ。しかしその間にバツと、目も覚めるような鮮やかな赤色が割って入った。

「えっ!?!」

「ほう」

あまりに予想外の出来事について素の反応を覗かせてしまう鳥居とは対照的に、鋭い反応で声の主……糸巻を睨みつける七宝寺。そうしている間にも赤い和装の麗神が薙刀を構え、ワイルド・ホープを守るべく立ちはだかる。

「なるほどな、糸巻の。さすがに、ここで大人しくしている玉じゃあないか」

「アタシを置いて楽しそうなことやってたんでな、仲間外れつてのはよくないんじゃないか?トラップ発動、立ちはだかる強敵。相手の攻撃宣言時にアタシのモンスター1体を対象に、このターン全ての攻撃表示モンスターはそのアタシのモンスターに攻撃をしなきゃならない。炎属性モンスター全員に対し戦闘破壊耐性を与えるリンクモンスター、麗神―不知火をな」

「糸巻さん、何を……」

いまだ理解の追いつかない鳥居に何か答えようとした糸巻だが、瞬時に頭を切り替えてまずは立ちはだかる強敵により地震へと襲い掛かるダメージに対し耐えきることが先だと決めたらしい。歯を食いしばり足を大腿開きにして衝撃に備える赤髪の夜叉に、見据える老人が苦笑を漏らす。

「グランドマンの攻撃でダメージを受ける代わりに、続くイゾルデの強制攻撃は返り討ちにしてダメージを稼ぐ魂胆か。肉を切らせて骨を断つ……もう若くもないだろうによくやるねえ、糸巻の。命がいくつあっても足りなさそうだよ」

嘆息とも称賛ともとれる言葉はしかし、だがね、と続いた。生ける

伝説は、彼女の予想よりもさらに一枚上手だった。

「果たして、そううまくいくかな？ 速攻魔法、星遺物を巡る戦い。イズルデをエンドフェイズまで除外し、麗神の攻守をその数値だけダウンさせる！」

『……っ！』

麗神―不知火 攻2300↓700

2人のイズルデの姿がフィールドから一時的に消えていき、降りかかった呪いによって麗神の動きがやや鈍る。

もし糸巻が呪言の鏡と立ちはだかる強敵を使わなければ、鳥居だけではこのターンを耐えしのぐことが果たしてできたかどうか。そのことが今のわずかな、しかし息詰まるような攻防だけで分かってしまったがゆえに、鳥居が小さく息をのんだ。

そしてついに、グランドマンの放つ光線が薙刀の一閃とぶつかり合う瞬間が訪れた。

E・HERO グランドマン 攻4200↓麗神―不知火 攻70

0

糸巻 LP4000↓500

「ぐっ……がはっ……！」

「糸巻さん！」

「……ごたごた言ってるじゃねえ、やかましいから喚くなよ……！」

実体化された、3500もの特大ダメージ。一体それは、今の弱った彼女の体にとってどれほどの負担となるだろう。事実糸巻の顔色は明らかにこのプラントへ踏み込んだ時と比べて悪く、呼吸も弱々しか荒いかの二極化が激しい。

しかし、いまにも倒れそうなその体ははまだ地に落ちない。大きく開いた両の足でどうにか床を踏みしめて何かに身を任せることなく立ち、疲れこそ色濃く出ているもののいまだ燃え上がる闘志の炎を宿した目で盤面を見据える。

「残念だったな、爺さん。ワンキルなんてつまんないことやってないで、まだまだアタシらと遊ぼうぜ？」

そして額に脂汗を浮かべながらも、ニヤリと笑ってみせた。それに

応え、老人もまた口元を小さくほころばせる。

「まったく、年寄りをあまり熱くさせるものじゃないよ。つつい年
甲斐もなく張り切っちゃうじゃないか、糸巻の。それと若いの、命拾
いしたね。カードを1枚セットして、ターンエンドさね」

ターン40 幕開け、あるいは幕引き

「残念だったな、爺さん。でもよ、せっかく13年ぶりのドリームマッチなんだ。そんなあつけない終わらせ方じゃなくて、まだまだアタシらと遊ぼうぜ？」

「まったく、年寄りをあまり熱くさせるものじゃないよ。ついつい年甲斐もなく張り切っちゃうじゃないか、糸巻の。それと若いの、ほんの少しだけ命拾いしたね。カードを1枚セットして、ターンエンドさね」

ターン終了の宣言とともに先ほど星遺物を巡る戦いによって除外されていたイゾルデがメインモンスターゾーンへと帰還し、長い長い1ターンが終わりを告げた。

今の猛攻の代償として老人の手札は2枚、それもそのうち1枚は見えているインスタント・ネオスペースのみだが、場には依然としてイゾルデ、そして攻撃力4200ものグランドマン……さらに、その正体を明かささない伏せカード。

並び立つ英雄の前に、糸巻の機転によってかろうじて敗北を避けた鳥居がカードを引くためデッキトップに手をかける。その前にちらりと糸巻の方を見るが、視線に気が付いた意固地で姉御気質なこの上司は肩で息をしながらも気にすんな集中しろといわんばかりに軽く手を振ってみせた。

言いたいことはいろいろとあつたが、どれも糸巻の意思に反するだろう。すべて堪えて劇者の顔に戻り、カードを引く。

「さあ始まりは第二幕。ついに姿を現した英雄の中の英雄、グランドマンの猛攻を前に、どう立ち向かうか魔界劇団！まず取り出したるは魔法カード、名推理！こちらは今宵のお客様にも参加していただき、その答えによつては今後のストーリーが大きく変化いたします。ご準備のほどはよろしいですか？」

名推理。相手プレイヤーがレベルを1つ宣言し、ついでプレイヤーがデッキの上から通常召喚可能なモンスターが出るまでカードを順にめくっていく。もし最初に出たモンスターのレベルが宣言通りな

らばそのカードは墓地へ、しかしそれ以外の数字が出た場合はそのめくられたモンスターが特殊召喚される。

もつともそんな説明、この老人には必要としないのだが。

「ふむ、では……おそらく魔界劇団のレベル分布から考えれば、4を宣言するのが最も特殊召喚の確率を抑えられるだろう。だが、ひひつ。上振れを引かれたらたまったものじゃないからね、ここは7を宣言させてもらおうよ」

「ありがとうございます、ご老体。では、宣言されたレベルは7！それでは皆さんご注目、私のデッキから出てくるカードは……」

「待った待った、もうひとつ保険をかけさせてもらうよ。名推理にチェーンする形で手札から、増殖するGの効果を発動。このターン若いのが特殊召喚するたびに、私もカードを引かせてもらう」

抜け目なく増殖するGを切ったことで、彼の言うとおり最低限の保険がかけられる。もしレベル7であるビッグ・スターかメロー・マドナが出たとしてもドロローが可能。どちらに転ぶのを狙うかは微妙なところだが、そんなことはおくびにも出さずデッキトップからカードを引き抜いた。

「それでは気を取り直しまして1枚目……あーつと、出た、出ました！意外や意外予想外、なんとデッキトップでは、すでに出番を今か今かと待ちわびていた演者がスタンバイしておりました！それではその名を高らかに呼びましょう、彼の持つレベルは4！ステージの上に登場です、魔界劇団カードン・ライザー！」

魔界劇団カードン・ライザー 攻1100

オレンジと黄色を基調としたパラソルに手足が生えたかのような団員が、既に存在する3体の横に並んで召喚される。スポットライトに照らされて大きく傘を広げるカードン・ライザーだが、その裏で七宝寺がカードを引くのは見逃してはいなかった。

「そしていよいよ我らが座長、ビッグ・スターの効果を発動！デッキよりこのターンに行われる演目の魔界台本を、このターンもまたフィールドへと直接セットします……それでは皆様ご一緒に！当劇

団の鉄板演目にして切り札的一幕、地上に降り立つ魔王様御一行による恐怖と混沌の笑いあり、涙ありの物語！その名は……魔界台本「魔王の降臨」！』

ならば、これ以上手札を増強させることは避けたいところ。そして幸いにも、今の彼の場合には十分なだけの戦力が揃っている。ビッグ・スターの掲げた手の中に周囲から黒い光の粒子が集まり、それが1冊の仰々しい台本となった。魔界劇団のシンボルマークが刻まれたそれに、舞台の花形がいざページをめくるべくゆっくりと表紙に手をかける。

魔界台本「魔王の降臨」……もはや説明不要ですらある切り札中の切り札、魔界劇団の真骨頂。攻撃表示で存在する魔界劇団の数だけ表側のカードを破壊するその効果は対象を取りこそするものの、レベル7以上の団員であるビッグ・スターが存在することによりその追加効果……発動に対して一切のチェーンが封じられる能力が生きる。

「今のフィールドに攻撃表示の魔界劇団は4体、そしてビッグ・スターの効果に同名ターナー1の縛りは存在しない。仮にこの伏せカードで私がそれを凌いだとしても、私がドロウすることにさえ目をつぶればビッグ・スターを素材に適当なモンスターをリンク召喚してから、改めてペンデュラム召喚による展開を行うことでもう1度魔王の降臨をフィールドにセットするところからやり直そうというわけか。このターナーにメロー・マドンナのペンデュラム効果を使っていないのも、それを行うと魔界劇団以外の召喚が封じられてしまうから。このわずかな時間でそこまで考えるとは……なるほど、伊達じゃない」

グランドマン、そしてイズルデ。いずれも耐性を持たないモンスターばかりを従える七宝寺にとって、それを指を啜えてただ見ていることはこのターナーでの死を意味する。並のデュエリストであれば、耐えきえることは不可能だったであろう。しかし伝説と呼ばれた男は、それを通しはしない。

「ならばだよ。ひひっ、こうしてみようか。永続トラップ、王宮の勅命！」

『ぐわっ?!』

「げっ!？」

「名推理を通して油断したかい？生憎だが、私もあの時はドロウがしたかったんでね」

伏せカードが表を向いた瞬間、鳥居のみならず糸巻までもが苦渋の声を漏らす。王宮の勅命……互いのスタンバイフェイズごとに700、この3人バトルロイヤルでは1周2100ポイントと決して安くはないライフコストこそかかるものの、フィールドに存在するあらゆる魔法カードを一切のチェインブロックすら組まず強制的に無効化する効果はそのリスクを補ってなお余りあり、チェイン不可の魔王の降臨でさえも紙と化す。

だが、両者が唸ったのはあのカード1枚によって自分の受ける影響の強さからだけではない。

「爺さん、本気か？」

1ターン目から七宝寺は融合、そして星遺物を巡る戦いと魔法カードを連発してこの盤面を作り上げてきた。彼の得意とするE・HEROは融合テーマ、魔法カードとは切っても切れない縁がある。

確かに魔界台本どころかペンデュラム効果まで取り上げられた鳥居に対しては、これはきわめて有効な選択だろう。だが、これはバトルロイヤルなのだ。糸巻のデッキもその中核にはアンデットワールドや命削りの宝札といった強力な魔法カードの存在があるが、それでもメインデッキのパーツ全てが罨モンスターであるバージュエストマに対しては碌な拘束力がない。それをすべて切り捨てるかのようなこの王宮の勅命という選択に、糸巻が信じられないとばかりに問いかける。

「そんなに驚くことはないだろう、糸巻の。これでも、この爺いは用心深いのさ」

『……なんですって?』

顔中に深く刻まれた皺を一層深くしてにやりと笑う老人に、今度は鳥居が問いかける。含みのある言い方に、本能的な警戒心が働いた。

「考えてもごらん、若いの。この私は、13年前の正式発表以前から『BV』に誰よりも近い所にいた男だよ。なぜ、この13年間でそう

じゃないと思えたんだい？」

「おい待てよ爺さん、まさか」

同じく嫌な予感を本能で感じ取ったのか、糸巻がその話を遮ろうとする。しかしその隙すらも与えずに、老人の口からは明かされることのなかった真実が紡がれていた。

「ねえ、糸巻の。各地で行われた裏デュエルコロシウム、どうしていち地方のカードショップ店主に過ぎない私が把握できていたと思う？情報網も何もない、あれは全て元を辿ればこの私が、七宝寺守が胴元さ。可哀そうなことをしたデュエリストたちにせめてもの生活の糧を与え、デュエルモンスターの恐ろしさを定期的に見せることで各国を委縮させ、そして私自身が「BV」開発のための戦闘データを取得……この一石三鳥を得るために開催し、同時にある程度の情報はデュエルポリスに売り込みそれを壊滅させることで世論やデュエルモンスターズ撲滅派の政治家どもへのガス抜きを行いつつテロリスト側の増長を防ぐ。このバランスを取り続けるのは、随分苦労したものだよ」

「そんな、自分勝手な都合だけで……！」

「そう熱くなりなさんな、糸巻の。それに、そう大きく出れる立場じゃないはずさね。なにしろ私が定期的にマッチングした試合の情報を流してあげたからこそ、デュエルポリスだって飯が食べれていたんだからね」

「ふ……」

「ふざけんなー！」

息つく暇もなく明かされた真実に、呆然としてから強く拳を固める糸巻。だが彼女の口から罵声が飛び出すより先にそれよりも早く、そして深く激昂した鳥居がごう、と響き渡るほどの大音声で叫んだ。

予想外の出来事に口をつぐむ糸巻に目もくれず、演劇者としての仮面が外れるほどの怒りの感情を隠そうともしないとおおよそ普段の彼らしくもない姿をあらわにしたまま、変に力がこもるあまり小刻みに震える指で老人を指し示す。

「アンタが……アンタのせいだ！アンタは確かにデュエルポリスとテ

ロリスト、その両者だけならバランスをとっていたかもしれない。だがな、デュエルモンスターズ界はそれだけじゃなかったんだ！」

13年前のあの時、全てが狂った瞬間からずっと積もり続け、しかしそれを吐き出すことなく自分の中に呑み込んできた感傷。完璧に隠し続けてきたはずのそれが、今になって時を越え彼の中から溢れつつあった。止められない、止められない。

「13年前のあの日以来どこに行っても俺たちの……デュエンギルドの演劇は断られ続け、仕方なくそこらの河川敷や公園で演つても観客も、拍手も何も無い。いや、それだけならまだよかつたさ。石を投げられ、通報され、この町から出ていけデュエリストどもめ、だなんて唾を吐きかけられたりもした。それでも俺たちはみんな自腹で道具の手入れを続け、台本を用意し、デュエルの腕を磨いてきた。なあ、アంతにそんな気持ちかわかるか？いつの日かデュエルモンスターズのことを笑つて語れる日が来たらまた復活公演しよう、そう言いながら最後の最後、どうやつても立ち行かなくなってサラ金どころかヤクザですら一銭の金すら貸してくれなくなるほど借金漬けになるまでいつの日か、いつの日かつて泥をすすって生きてきた俺たちが、アంతの目には見えていたのか？」

「……」

誰も、何も言わなかった。七宝寺は当然だが、糸巻にすら明かしてはいなかった鳥居淨瑠という男の過去。金、金、金、カネ。常に夢が金に対し敗北し続けてきた、地獄の10年弱。

膨れ上がる一方の借金を背負うため、ある団員は家を、家財道具の全てを二束三文で捨てた。ある団員は自分の借金や違法スレスレな金稼ぎのリスクを背負わせないためにと、泣いて呼び止める妻子に本人も泣きながら離縁状を叩きつけた。

鳥居本人が今こうして五体満足でいるのは、彼本人の意思ではない。俺が一番若いから一番高値で売れる、売れる臓器もこの通り揃つてる。俺も力にならせてくれ、そう泣き叫ぶ彼を殴り倒して止めたのは他でもないかつての彼の兄弟子、一本松一段だった。

『ユーは大きな勘違いをしている、2度とそんなこと口にするんじゃない』

ない。ミーたちの資本は、まずカードだ。そして、スペクタクルなショーを作るため舞台を駆けまわるこの体だ。その2つを守るために、ミーたちは死に物狂いでやっている。それをなんだ、売る臓器がある？もしミーの……いや、先輩方誰か1人でも耳が届くところでそんなふざけたことを次に抜かしてみろ、ユーは劇団「デュエンギルド」からは永久除名、2度とミーたちと関わり合うな。いいな？」

「それを、今なんつった？裏デュエルコロシウムを開き、デュエルモンスターズへの風当たりを強め続け、あげく言うことが『バランスを取ってやった』だど!？」

殺気の籠った目で睨みつけ、デュエルディスクに手をかける。エンタメデュエルをかなぐり捨てた彼を今動かしているのは、積もり積もった憎しみと……その矛先をようやく見つけたという、後ろ向きで暗い歓喜だった。

「魔法カードが使えないからって、それで勝ったとでも思ったか？レベル4の闇属性ペンデュラムモンスター、ワイルド・ホープとカーテン・ライザーをオーバーレイ！」

ガンマンとパラソル人間が共に濃紫の光となり、螺旋状に交差しながら天井まで上っていく。そして向きを変え落下した光の向かう先は、鳥居の足元にぽっかりと空いた、まるで彼の心を駆り立てるどす黒い意思を映し出したかのような深淵の穴。無音の爆発が彼の髪を逆立て、しかし爛々と不気味に輝く目だけがそのままだった。

「エクシーズ召喚、ランク4！覇者の裁きをもたらす龍、霸王眷竜ダーク・リベリオン！」

☆4＋☆4＝★4

霸王眷竜ダーク・リベリオン 攻2500

そして生まれたのはプラズマを身にまとう、漆黒の体にエネルギーのラインが走る龍。その一撃必殺の破壊力がまさに他者との対話の一切を拒否する、彼の勝利への渴望を現したかのようなどす黒い輝きとなつて黒翼を広げた。怒りに満ちる咆哮が空気を震わせ、びりびりとその場全員の肌を刺す。

「ほう」

圧倒的な暴力を前に、しかし老人は小さく感嘆の声を漏らしたのみだった。そしてまた、増殖するGによってその手札が増える。その余裕そうな態度から、糸巻がほかの誰にも聞かれなほど小さく舌打ちする。この攻撃は確かに通りさえすれば老人のライフを一撃で0にできる、しかし通らないだろうと確信したからだ。

怒りによるパワーは、確かに凄まじい爆発力を秘めている。反面、それはその鋭さに比例して極めて脆いものだ。彼女はそれを、痛いほど思い知っている。そして何を言ったところで、鳥居は聞く耳を持たないだろうということも。ちょうど彼女自身が13年前のあの日、マネージャーの忠告に耳を貸さなかった時のように。

「やれ、ダーク・リベリオン！ グランドマンに攻撃しろ！」

漆黒の龍が超低空を滑空し、死神のそれを思わせる黒翼をもって英雄に飛び掛かる。ダーク・リベリオンがモンスターとバトルを行うダメージ計算前、その身に宿るオーバーレイ・ユニット1つを使用することで相手モンスターの攻撃力を0にしたうえでその元々の数値を自身の攻撃力に加算することができる。グランドマンの攻撃力は自身の効果によって発生したものであるためいくら0にしたところで吸収は不可能だが、彼のフィールドにはまだビッグ・スターとデビル・ヒールが依然として控えている。たかだが4000程度のライフなど、紙切れか何かのように吹き飛ばす数値だ。

「ま、当然通らないんだがね。ひひっ。私相手に2枚も引かせたんだ、当然だろう？ 手札から工作列車シグナル・レッドの効果を発動。相手の攻撃宣言時にこのカードを特殊召喚し、さらにその攻撃モンスターとこいつで強制的にダメージ計算を行わせるよ」

漆黒の巨竜の前に、突如として赤いランプを点滅させる小型車両が割り込んだ。主の怒りに任せて突き進んでいたダーク・リベリオンはもはや止まるには勢いがつきすぎており、鋭い逆鱗がバチバチと放電しながらその車両を深々と貫く。

……そして、グランドマンにはその一撃が届かない。

霸王黒龍ダーク・リベリオン 攻2500↓工作列車シグナル・レッド 守1300

「そしてシグナル・レッドは、自身の効果によって行う戦闘では破壊されない」

「だったらー！デビル・ヒールはイズルデに、ビッグ・スターはシグナル・レッドを叩き潰せ！」

座長の命に従い、2人の大型団員が一斉に飛び掛かる。先に攻撃目標へとたどり着いたのは、その巨体の分だけ一步ごとのリーチも長いデビル・ヒールだった。

魔界劇団―デビル・ヒール 攻3000↓聖騎士の追想 イズルデ
攻1600（破壊）

七宝寺 LP4000↓2600

紫の剛腕が唸りを込めて振りぬかれ、金髪と銀の手、2人のイズルデがなすすべなくまとめて片手で持ち上げられて投げ飛ばされる。力こぶを作るデビル・ヒールの手の中には、いつの間にもやら一冊の本が握られていた。

「デビル・ヒールが戦闘でモンスターを破壊した時、俺の墓地から魔界台本1冊を選んでフィールドにセットすることができる。さつき使ったオープンング・セレモニーを、もう1度セットだ」

次いで、ビッグ・スターがその長身からスタイリッシュな回転飛び蹴りをシグナル・レッドの車体に大きく空いた穴、先ほどダーク・リベリオンが深々と刻んだ傷跡へと叩きこむ。先のバトルこそ辛うじて持ちこたえた工作列車も、この追撃にまでは耐えられない。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500↓工作列車シグナル・レッド
守1300（破壊）

だが、それだけだ。もう、彼にこれ以上の手は打てない。せめても
の抵抗としてカードを1枚伏せターンエンドを宣言するとともに、
ビッグ・スターが呼び寄せた魔王の降臨が煙となつて音もなく消えて
いく。ビッグ・スターが取り出した魔界台本は、もしフィールドに
残っているならばターンの終わりに墓地へと送られるからだ。

そして続いているのターンプレイヤーは、糸巻。しかし彼女がカードを
引くより前に、なぜか深い微笑みと共に老人が喋りかけた。

「惜しかったねえ、若いの。今のターンは、君にとって最初で……そし

て、最後のチャンスだった。私に勝利する、ね」

「……？」

名指しで呼び付けられた鳥居のみならず、糸巻もカードを引こうとしていた手を止めて耳を澄ます。聞いてはいけない、向こうのペースにはまるだけだ。そう思いつつも、老人の口調にはどこか抗いがたい雰囲気があった。

「魔界劇団―デビル・ヒール、実にいいカードだよ。先日の裏デュエルコロシウムでも大活躍だった、あれは私の記憶にも新しいよ」

ダーク・リベリオン、ビッグ・スターと共に鳥居のフィールドを守るデビル・ヒールを指さし、賞賛の言葉を口ずさむ。先の読めない話に、困惑ばかりが深まっていく。

「戦闘破壊時の魔界台本回収効果？コストとした魔界劇団の分だけ相手モンスターの攻撃力を下げるペンデュラム効果？違うだろう、そのカードの一番の強みがそこじゃないことは若いのが、君もよくわかってるはずだ。そのカードが持つ最初のモンスター効果、場に出た際に自身を含む魔界劇団1体につき1000ポイント、相手モンスター1体の攻撃力をターンの終わりまでダウンさせる効果。ヒールプレッシャー、そう君は称していたね。実際に強力ではあるが、あくまで召喚、ないし特殊召喚した際にしか発動はできない」

そこまできて、まず糸巻がピンときた。その様子を楽しそうな眼で眺め、また口を開く。

「若いのが、裏デュエルコロシウムで優勝を遂げた君の名誉のためにひとつフオローを入れてあげようかね、ひひっ。君は今、頭に血が上っている。うまく思考がまとまらないだろう？もつとも、私がそう仕向けたわけだがね。よりはつきり言ってあげるとだね……今の君のターン、君はまずリンク召喚を行えばよかった。デビル・ヒールを含む組み合わせなら、リンク2でも3でも構わない。私が発動している王宮の勅命はフィールド上のあらゆる魔法効果を無効にするが、なにもペンデュラムスケールまでなかったことにするわけじゃない。スケール0のメロー・マドンナとスケール9のティンクル・リトルスター、今君が用意しているその組み合わせならばレベル8のデビル・

ヒールでさえもペンデュラム召喚は可能だったはずだ、違うかね？」
「……！」

そこまで言われてようやく、鳥居が自分のミスに思い至って息を呑んだ。

こんな簡単なことすらも、使い手である彼自身が気が付かなかつたとは。悔やんでも悔やみきれない後悔、自分自身への深い失望、絶対に負けられないこの一戦で致命的なミスをした恐怖……あらゆる高濃度の感情が一緒くたに押し寄せて、怒りと憎しみが燃え滾っていた彼の心を一瞬で暗闇の底に突き落とす。

「場には4体の魔界劇団、それだけいれば私のグランドマンの攻撃力は4200から2000まで落ちることになる。例え初撃をシグナル・レッドで止めようと、ビッグ・スターとデビル・ヒールでイゾルデとグランドマンに攻撃していれば？その合計ダメージは、軽く4000を超えていたろうねえ」

絶望が色濃く滲み出た鳥居に、駄目押しとばかりに事実を列挙するだけの言葉が重くのしかかる。

そのまま今にもその場に崩れ落ちそうな彼を寸前で止めたのは、横にいる赤髪の上司の言葉だった。指摘された事実の大きさを前に小さく汗を垂らしながらもいつも通りに、いやいつも以上に不敵で皮肉で、そして何よりも頼もしい口の端を歪めての笑み。

「なるほどなあ、確かに御説ごもつとも、仰る通りだよ爺さん。鳥居、お前もそこはマジで反省しとけよ……だがな。アタシは今の話を聞いて、少しばかり安心したぜ」

「え？」

「ほう？」

さすがのような視線と好奇の表情の両方に注目されながら、口の端を舐めて唇を湿らせる糸巻。そのトレードマークでもある赤い髪をかき上げ、後ろになびかせながら老人の顔をまっすぐに見据えた。

「アタシは正直なところ、ちよつと疑問に思ってたんだ。このターンの最初に爺さんがぶつこんできた特大の爆弾。確かに衝撃的な話だったのは間違いないさ、だがな、なんであのタイミングでそんな話

をする必要がある？つてな」

視線を一切逸らさず瞬きもしないまま、ひとつひとつの言葉をかみしめるように老人へと叩きつける赤髪の夜叉。グランドファザーの表情は、好奇の笑みをたたえたまま変わらない。

「なんのことはない、正体見たり枯れ尾花、さ。要するに爺さん、かなり崖っぷちだったな？手札のシグナル・レッド1枚とセットした王宮の勅命だけじゃ、鳥居がミスしない限りどうあがいてもこのターンを耐えきれそうにない。つまり、生き残るためにはなんとしても鳥居にミスさせなくちゃならない。だが、この演劇馬鹿の仮面を剥ごうつてのは並大抵のことじゃない。それでもそいつを成立させるために、あれぐらいとんでもない秘密を明かさなくっちゃいけなかったわけだ。違うか？」

「……ひひっ、さすがに長い付き合いだけのことはあるね、糸巻の。できれば老獪、と言って欲しいものだがね」

「はっ、物は言いようだな？老害、の爺さんよ。なんてことはねえ、自分が負けそうだからつてなりふり構わなくなってきただけじゃねえか。なあ爺さんよ、アンタが他に切れる手札は何がある？『BV』の生みの親、裏デュエル界の実質支配……まったく、大した爆弾2つも抱え込みやがってよ。だが、もう手品のタネは切れたろう？」

「……」

沈黙は、肯定の何よりの証拠だった。こちらの動揺をもう1度誘えるような事実の持ち合わせは、いかに化け物じみた老人といえどもこれ以上は存在しない。探偵の真似事も、もう終わりだ。大きく鋭く息を吸い、裂帛の気合と共に宣戦布告の声を張り上げる。

「さあ爺さん、ここからは真正銘の2対1だ。アンタには長年のよしみもあるが、それ以上にアタシには全プロデュエリストとデュエルモンスターズ界を代表して、この13年間の恨みを晴らす義務がある！遠慮せずに数と……」

ここでわずかに言葉を止め、横で糸巻の大見得に呑み込まれていた鳥居と目を合わせる。全くなんて顔してやがる、そう心の中で苦笑した。こういうのは本来、お前の役目だろうが。アタシみたいな時代遅

れのロートルに、看破と論破なんて知性派な真似させるんじやねえよ。

「数と、質。この2つをもつて、完膚なきまでにぶちのめしてやるぜ！」

言われた鳥居が、ぎよつとして目を見開く。数と、質。その言葉の意味するところが分からないほど、彼は馬鹿ではない。

糸巻太夫と、鳥居浄瑠。2対1という数で七宝寺を上回り、そのデュエリストとしての質ですらも伝説と謳われた老人を凌ぐコンビ。そこまで言わせてなお立ち直れないようでは、彼もそこまでの人間だろう。それだけの覚悟をもって、糸巻はそう言い切った。

「なかなか大きく出たねえ、糸巻の。じゃあまずはそんな後輩がどう出るか、じっくり見せてもらおうじゃないか」

「ああ、そうしてやるよ。アタシのターン！」

ある意味では、今回のバトルロイヤルという形式のおかげで助かったともいえる。糸巻はカードを引きながら、そんなことを心の片隅でふと考えていた。おかげで自分が戦うこの1ターンの間、鳥居には誰にも邪魔されずに今かけた発破を呑み込んで自分の中で折り合いをつける時間が与えられる。

とはいえ、あまり状況はよろしくない。糸巻の手札は、これで3枚……しかしそのうち1枚はデュエル開始時から存在する魔法カード、命削りの宝札だ。展開を優先したために先のターンには使えなかったけれど、今も手札で無意味にくすぶり続けている。

「このスタンバイフェイズ、王宮の勅命の維持コストとして700ラIFを支払うよ」

七宝寺 LP2600↓1900

王宮の勅命の維持コストには、払わずに自壊させるという選択肢はない。スタンバイフェイズごとにライフが1でも残る限り払い続けなければならず、その際に700未満であれば問答無用で敗北となる。すなわち糸巻たちが勝利するために削らなければならない七宝寺のライフは、事実上残り1200。

場の状況、ドロークカード、使い物にならない魔法、そして前のター

ンから準備しておいた墓地リソース。それらすべてを思い浮かべ、糸巻は何かに納得したように小さく頷いた。

「さあいくぜ爺さん、アタシのメインフェイズだ。墓地に存在する妖刀―不知火、効果発動！」

星遺物を巡る戦いによってその力のほとんどを失い、薙刀を地面に突き立て肩で息をする麗神。その背後に音もなく、炎に包まれた妖刀がふわりと浮かび上がった。

「墓地に送られて1ターン以上経ったこのカードと墓地のアンデット族1体を除外することで、その合計レベルと等しいアンデット族シンクロモンスターを特殊召喚する！アタシが選ぶのは、レベル4の不知火の武士だ」

妖刀を包む炎が爆発的に広がり、しかし現世の炎のような熱気や爆ぜる音は一切伝わらない。この世ならざる幽炎が、人の形を取って妖刀の柄を握りしめた。次いでオレンジ色の装束が、頭頂で結わえられた髪が、その姿を描き出す。

「戦場切り込む妖の太刀よ、一刀の下に輪廻を刻め！逢魔シンクロ、刀神―不知火！」

☆4＋☆2＝☆6

刀神―不知火 攻2500

「まだだ！この瞬間、ゲームから除外された武士の効果を発動させてもらう。墓地に眠る不知火モンスター1体、つまりこの不知火の武部を手札に加えさせてもらう。もう1回出番だ、不知火の武部！」

不知火の武部 攻1500

刀神と同じ流派の装束を着込む、このデュエル2度目の登場となる短髪の少女。初手と同じく、その周りをまたしても無音の炎が取り囲んだ。ただしあの時とは違い、その炎の色は妖刀のもたらす明るい色ではない。より禍々しい、静かなる青い炎。

「こいつの効果は忘れちゃいないよな？発動ターンにアタシはアンデットしか呼び出せない代わりに、召喚時にデッキから妖刀―不知火モンスター1体を手札かデッキから特殊召喚できる。手札から来い、逢魔の妖刀―不知火！」

逢魔の妖刀―不知火 攻800

「そして、逢魔の妖刀の効果を発動！このカードをリリースすることで、不知火含む除外されているアンデット2体を効果を無効にし、守備表示で特殊召喚する。今こそアタシの命に従い、冥界よりもなお遠い。異界への門よ今こそ開け！」

二振り目の妖刀が、その刀身を中心として青い炎を爆発的に燃え広がらせる。青一色に染まった風景の中で、鳥居の目には唯一そんな炎の輝きにも染まらない糸巻の赤い髪だけがひとときわ目立って見えた。「帰ってこい、妖刀！武士！」

妖刀―不知火 守0

不知火の武士 守0

「待たせたな爺さん、長い長い準備もこれで大詰めだ。レベル6の刀神に、レベル2の妖刀をチューニング」

逢魔のシンクロではない、場のチューナーとチューナー以外のモンスターによって行われる普通のシンクロ召喚。シンクロ召喚の原点に還る、レベルとレベルの足し合わせ。

「戦場切り裂く妖の太刀よ、冥府に惑いし亡者を祓え！シンクロ召喚、いくさがみ戦神―不知火！」

☆6+☆2=☆8

戦神―不知火 攻3000

その右手には揺らめく妖刀を、その左手には炎の形を模したオレンジ色の剣を。銀髪に色白な肌の色も相まって幻想的な雰囲気漂わせるその剣士は二刀流を操る、不知火の火力担当。これが糸巻が選んだ、この場を任せるに相応しい1枚だった。

「戦神の特殊召喚成功時、その効果を発動できる。アタシの墓地からアンデット族1体を除外して1ターンの間その攻撃力を得る、不知火流・龍頸の太刀！」

戦神―不知火 攻3000↓5500

左手の剣を体の前に構え、目を閉じて集中する戦神。すると何の変哲もなかったはずの剣がその内側から発光し、目も眩むような爆炎を放つ。先ほどまでの数倍の長さを持つに至った炎の刀身、そこから放

たれるその一太刀はまさに一撃必殺、竜の首でさえもただ一太刀で刎ね飛ばすほどの破壊力を誇ることは容易に想像がついた。

「そして、ゲームから除外された刀神―不知火の効果を発動。相手モンスター1体を選択し、その攻撃力を500ダウンさせる」

エレメンタルヒーロー
E・HERO グランドマン 攻4200↓3700

それ自体が意志を持つかのように飛び掛かる火の粉がグランドマンに降り注ぎ、確実にその動きを鈍らせる。消えない炎と、堕ちた英雄。今まさに限界を超えて燃え盛らんとする炎と、傷つき揺らぐ英雄の輝き。対照的な両者を挟んで糸巻と七宝寺が、デュエルポリスとテロリストが睨みあう。

口火を切ったのは、糸巻だった。伸ばした指をまっすぐに突きつけて、戦神へと指示を飛ばす。

「バトルフェイズだ、やれ！戦神―不知火でグランドマンに攻撃、不知火流秘伝・五閃の難題！」

炎を纏ったことで自らの背丈よりも巨大になった自らの剣を、まるで重さなど感じさせない滑らかな動きで構えた戦神が、強く一步を踏み込んだ。と見る間にその姿はたちまちグランドマンの目前にまで迫っており、肉薄したその姿勢から炎の軌跡が5つ同時に走る。剣を振るあまりの早さに残像が生じ、一振りしかないはずのそれが5つに分裂したかのように見えているのだ。青から赤、そして白とそれぞれ炎の色も異なるそれが、同時に英雄へと襲い掛かる。

……だが。その5つの炎は、そのいずれも眼前の獲物には届かなかった。虚しく空を切った刃からは宿っていた炎がたちまち消えていき、元の形に戻ったそれを手に戦神が、糸巻が、同時に上を見る。「まさかー！」

「惜しかったねえ、糸巻の」

老人の声が、無常に響く。果たして、グランドマンは上にいた。天井すれすれまで飛びあがり、背中からは先ほどまで影も形もなかったはずの純白の翼、天使の両翼が生えている。それが、英雄の飛行を可能にしている。

「E・HERO オネステイ・ネオス。このカードを捨てることで、

ヒーローの攻撃力は2500アップする。この意味が、分かるね？」
「くそっ……！」

子供に言っただけ聞かせるような、優しさすらも感じさせる口調。そして戦場では、上空に退避して必殺の一閃を回避したグラントマンがゆっくりと反撃に打って出ようとしていた。両手の銃を構え、いまだ剣を振りぬいた姿勢から立ち直りきれていない戦神の無防備な背中に狙いをつける。

「互いのモンスターが攻撃表示だった場合、より攻撃力の高い側がバトルに勝利する。これがこのゲームのルールだよ、糸巻の」

身を捻り体の前に剣を構えて、正義を自称する英雄の弾丸をどうにか防ごうとする戦神……しかしそれよりもなお早く、その引き金は絞られた。

戦神―不知火 攻5500（破壊）↓E・HERO グランドマン
攻3700↓6200

糸巻 LP500↓0

「……残念だねえ、糸巻の。久しぶりに、真剣な勝負がしたかったんだが。先のターンにそっちの若いのをかばったせいで、たった700のダメージも受けきれないとは」

「い、糸巻さん！」

気が付いたときには、鳥居はすでに駆け出していた。がくりとその場に崩れ落ち、膝をつく糸巻の傍らに屈みこんで肩を貸し、その体をどうにか受け止める。まるで死体を担いでいるかのような嫌な重みと感触は、それだけ彼女自身に自分の体を支える力がないことを如実に表していた。

「起きてくださいいよ、糸巻さん！」

「耳元でわーわーがなるんじゃねえ、このタコ……」

いつも通りに口は悪いが、声音にはまるでいつもの覇気がない。のろのろと、普段の彼女からは考えられないほどじれったい動きで鳥居を押しつけようとして……それすらも叶わず、むしろ中途半端にバランスが崩れたことでがくりと前につんのめる形になった。それでもまた立ち上がろうとして倒れ込み、弱々しく舌打ちする。

「はっ、ざまあないな。負けるのなんて、少なく見積もっても13年ぶりだ……アタシはこの13年間、ずっと死神に好かれてた。あんなに負けたかったのに、どうしても勝っちゃってな」

「糸巻さん、無理しちゃダメですよ……少し動かないで、しばらく」

「上司の命令だ、黙って聞いとけ。いいか、鳥居？爺さんはグチグチ言うだろうしお前もお前でどうせまたうじうじするだろうから気に入んなとはアタシも言わねえが、お前これ以上デュエルに私情持ち込みやがったら承知しねえからな」

「糸巻さ……」

「返事」

今にも倒れ込みそうで、焦点もぼぼ合っていないような目。最後の力で首を起こしたそれが、鳥居の顔をきつと睨みつけた。その迫力に負け、半ば押し切られるように首を縦に振る。

「……はい」

「よし。アンタはいつか抜かしたよな？たえその場で骨がへし折れようが、公演中にそれを客に気取らせるようじゃ三流だ、つてよ。アタシとアンタのこの大舞台、まだ幕引きには早いからな？アタシはもう退場だが、勝手にバッドエンドなんかで締めやがった日にはブーイングなんかじゃすまないからな」

およそ直情傾向の彼女らしくもない小洒落た激励のしかたに、自分でもらしくないとでも思ったのだろう。無理に口の端を歪めて笑みのような表情を作り、喉の奥で笑いらしき唸り声を漏らす。

それが、今の彼女にできる精一杯だった。

「どうせ、あの爺さん相手に正面から勝とうなんて最初っから分が悪い話なんだ。だがな、アタシらに可能性があるとするりゃアンタだよ、鳥居。アンタのエンタメデュエルなら、爺さん相手にも互角以上に渡り合える」

これまで決してかけられることのなかった、彼女が手放してエンタメデュエルを認める言葉。その重みを受け止めた鳥居は……まず空いた左手で、ぐつと自らの目を乱暴にぬぐった。滲んだ涙は、舞台に立つうえで必要ない。今から始まるのは鳥居浄瑠のエンタメであ

り、お涙ちようだいの悲劇ではないのだから。

その様子を満足げに見て頷いた糸巻が、行け、と声にならない声でゴーサインを出す。そこでいよいよ無理に話し続けた限界が訪れたのか、意識までもが急速に薄れていく。視覚が、聴覚が、触覚が遠く暗く染まっていく中で、最後に彼女が聞いたのは舞台の再開を告げるエンターテイナーの宣言だった。

一方そのころ、プラント中央部では。精密機械が立ち並ぶ箇所にはあまりにも不釣り合いな、剣戟や硬い何か、生物的なものが力づくでこじ開けられるような音があちこちで響いていた。その中心にいたのは灰色の地に紫の幾何学模様が入ったフード付きローブを頭から被り、水の膜が飛び出たデュエルディスクを構え大きく肩で息をする少年の姿だった。その全身にはローブと同じ紫色の痣が走り、眼球は白目と黒目が反転している。

明らかに異常な状態にある彼……遊野清明はしかし、そんな異常を感じさせない意識のはっきりした声で後ろに向かい大声で問いかける。

「ねえちよつと、まだなの!?!」

「もう少し粘れませんか?こちらでも手一杯なんです、やってくれましたねあのご老体、こちらで設定しておいた緊急時用のコマンドがすべて強制的に遮断される……!」

苛立ちを多分に含む声でそう返したのは、かつて『おきつねさま』の名で知られたプロデュエリスト、巴光太郎。大量の基盤とモニターにかじりつくように向かい合い、狂ったような動きで何事かを手元のキーボードに打ち込んではすぐに消去して、また新しいものを打ち込んでいく。しかしそのスピードとは裏腹に、状況は芳しくないらしい。

そもそも彼らが何をしているかといえば、元はといえば巴の抱いた疑問のせいである。「BV」の融解という言葉に疑問を抱いた彼が自らの目で真実を見極めるために、ついでに何かの役に立つだろうと清

明を引つ張つてわざわざ中心部まで戻ってきたのだ。

そして、そこで彼らが見たものがこれである。

「霧の王^{キングミスト}」

主の命に代えて宝剣が降りぬかれる風切り音が鳴り、霧の魔法剣士めがけて襲い掛かってきていた古生化化石騎士 スカルキングがその鎧ごと両断される。音もなく消滅していくそれに残身する暇すらもなく、大きく後ろに振られた剣がその背後に迫っていたアークネメシス・プロトスのブレスを弾く。

これらのモンスターは、いずれも巴がこの地での決戦のためかき集めたメンバーの愛用していたカードだ。その戦闘データが暴走しつつある「BV」の影響を受けて実体化し、動くものすべてに襲い掛からんと蠢いていたのだ。

「どうせ精霊も宿つてない、ガワだけの搾りかすみみたいなもんだけど……さすがに、この量の相手を実体化で凌ぐのは……」

「仕方ないでしょう、『BV』に無理が来ているのに私がそれを使ってどうするんですか。私がこの本体をどうにか止められないかやってみる、その間に貴方がそのオカルトじみた力で周りの雑魚を相手する。そう言いましたよね？」

「そうは言うけどさあ……」

疲弊しきった様子で巴に向き直るその背後から、床の中に潜んでいたらしいウォール・シャドウがその上半身を音もなく突き出して鉤爪を閃かせる。視覚外からの不意打ちはしかし、その体に届く前に空中で停止した。その腕に、体に、無数の蜘蛛の糸が絡みついて縛り上げ、完全に動きを封じ込めたのだ。床に潜りなおすこともできず、脱出も不可能となりびくびくと体を震わせるしかできない獲物の上に、その体を縛り付けた糸の持ち主である粘糸壊獣クモグスと希望織竜スパイダー・シャークが着地してその毒牙と鱗めいた爪を一齐に食い込ませる。

軽く片手を上げて感謝の意を表し、うんざりしたように天井を見上げる清明。その先では、今も糸巻と鳥居が何かしているのだろう。

「早いところお願いね、2人とも……」

そんな切実な願いは、またしても飛んできたものの弾かれて見当違いの方向に着弾したブレスの轟音にかき消された。

「……さあ、大変長らくお待たせいたしました。少々アクシデントにつき大変不快なお時間を取らせてしまったこと、心より謝罪申し上げます。ですがこの鳥居浄瑠、これ以降のシヨをより一層素晴らしいものとして何よりのお詫びとすることを、ここに宣言いたします！ エンタメデュエルシヨ、これより満を持しての再開です！」

空元気でも虚勢でもない、張りのあるよく通る声。こんな風に喉を開いて声を出すのはいつぶりだろうと、頭の片隅でぼんやりと思う。こんな基礎中の基礎を、どうして忘れていたんだろう。ここ最近彼自身がやっていたエンタメデュエルは、ほんの表面だけをなぞった真似事に過ぎない。

久しぶりにエンターテイナーに戻った彼は、もう迷わない。退かない。惑わない。これまで相手していた彼とは一味も二味も違う心境の変化を読み取ったのか、眼前の老人の顔がやや引き締まった。

そして最初に動いたのは、グランドマン。いつの間にか翼を収めて地に降り立っていたその姿が光の粒子に包まれ、直視することすら難しいほどに輝いていく。

「……なるほど、やってくれたね糸巻の。若いのに発破をかけるために、自分の身を犠牲にしたか。常々世代交代を口にしていた、らしいと言えばらしい話じゃないか。だがね、いくら思いが強かろうと、それだけで何ができるわけでもない。教えてあげるよ若いの、世界の広さというものを。グランドマンが戦闘でモンスターを破壊したことで最後のモンスター効果を発動、ヒーローズ・クロニクル！」

「グランドマンの、効果……！」

「そうさ。戦闘破壊耐性を持つ麗神に、立ちほだかる強敵とのコンボ。思えば糸巻のは、ずっとこの効果を使わせなかったために立ち回ってきていたからね。これまで私も使う機会がなかったが、今なら存分に使えるというものさ。自身を墓地に送ることで、E・HEROの融合モン

スター1体を召喚条件を無視して特殊召喚する！」

光の中で、グランドマンの姿が変化していく。機械的なシルエツトの両翼が生え、体全体がひとまわり大きく筋肉質なものとなり、頭部の形も変化して。その右腕には新たな得物である、巨大なドリルが2本装着された。

「宇宙に満ちる星々の果て、遠き星雲の守護者がきたる。紡がれし歴史よその名を告げよ！E・HERO　ネビュラ・ネオス！」

E・HERO　ネビュラ・ネオス　攻3000

光がゆつくりと消えていき大宇宙、その中でも星雲の名を持つその英雄の姿が白日の下にさらされる。魔界劇団の一行を前に一步も引かず、ひとりぼっちの戦場を死守するその姿はまさにその主の妄執の生き写しのようにも見えた。

「さて、ネビュラ・ネオスの効果発動さね。このカードの特殊召喚に成功した時、相手フィールドのカードの数だけドロし、さらにカード1枚の効果を無効にさせてもらうよ」

『……ああ、なんとということでしょう。魔界劇団の煌めきは、宇宙に輝く大鉱脈。しかしその輝きは今回、私ではなく伝説のお方の前にその光を導いたというのでしょうか？私のフィールドに存在するカードはPゾーンのメロー・マドンナとティンクル・リトルスター、そしてモンスターゾーンのダーク・リベリオン、デビル・ヒール、ビッグ・スター。そして先ほど伏せました、魔界台本「オープニング・セレモニー」とこの伏せカードの計7枚。それが今、私に対して牙をむこうとしております……ならばせめて、その枚数を減らすことにいたしましょう。トラップ発動、闇霊術―欲！私のフィールドから闇属性のビッグ・スターをリリースすることにより一時の間だけ舞台袖へと下げまして、カードを2枚引かせていただきます』

闇霊術には本来相手が手札の魔法1枚を公開することでドロ効果が発せられる大きなデメリットがあるものの、ドロする直前のこのタイミングならば老人の手札は0。咄嗟に被害を最小限に食い止め軽い調子で合わせはしたものの、内心で頭を抱える鳥居。これまでのデュエルにおいて2対1という圧倒的有利な状況であっ

てなお自分たちを翻弄し続けていたこの老人に、ここにきて5枚もの追加ドロ。しかも糸巻はもう戦えない、それを自分1人で全て受け止め切らなければならぬとは。

それでもそれを態度には出さなかったのは、すっかり忘れていたとはいえ腐つても演者、長年かけて培ってきた技術の賜物といえるだろう。

「そして、だ。ひひっ、若い。今のタイミングがいつだったか、覚えてるかい？」

そんな問いかけに合わせるかのように、ネビュラ・ネオスのドリルがおもむろに回転を始めた。最初はゆっくりと、しかし次第に加速していき、かすかだが不気味な音を響かせる。

そして鳥居がそれに応えるよりも先に、先手を打つように老人が笑う。

「今はエンドフェイズだ、それも君のでもなければ私のもない、糸巻の、ね。なにセターンプレイヤーが敗北したんだ、強制的にそのターンは終わる……そして、ネビュラ・ネオスはこの瞬間に動き出す」

回転するドリルを天高く掲げたネビュラ・ネオスが、その右腕を足元へと振り下ろす。プラントの床を紙切れか何かのように貫いたその穴は、しかし真下の階には繋がっていないかった。そこに開いていたのは、ぽっかりと広がる大宇宙。無限に広がる黒い空間と、いくつもの星々だった。

「ネビュラ・ネオスは毎ターンのエンドフェイズごとに、エクストラデッキへと強制的に帰還する。そしてその際に、フィールドに存在するカード全てを裏側で除外する！スターボウ・フラッシュュー！」

全体裏除外という無差別で、そして最高峰の除去を前に、思わず手札に目をやる鳥居。彼の視線の先にあるのはレベル2モンスター、ホップ・イヤー飛行隊。相手ターンに自分のモンスター1体を選択して手札から特殊召喚し、そのモンスターと2体のみでシンクロ召喚を可能とする攻防一体の強力なチューナーである。

この効果が使えれば、デビル・ヒールをこの除外効果から逃がしつつレベル10のシンクロモンスターを呼ぶこともできる……しかし、

それはできない。彼のエクストラモンスターゾーンには先ほど彼自身に怒りに任せて呼び付けたダーク・リベリオンが陣取っており、これ以上エクストラデッキからモンスターを呼び出すことができないからだ。自業自得、その言葉が重くのしかかる。

そして、宇宙がすべてを飲み込んだ。ネビュラ・ネオスの開いた宇宙空間へと繋がる穴へと魔界劇団一行が、そして老人自身の王宮の勅命までもが、抵抗する間もなく吸い込まれていく。それどころか穴はどんどん広がっていき、床を、壁を、天井を侵食する。気が付いた時には、鳥居と七宝寺はもはや上も下もない宇宙空間にただ2人浮かんでいた。

「そして、私のターンだ。まずはE・HERO リキッドマンを召喚し、効果発動。墓地に存在するエアーマンを蘇生し、そのエアーマンの効果によってデッキから3枚目のネオスを手札に加える」

宇宙空間に、水と風のヒーローが現れる。これで老人の手札は、7枚。

E・HERO リキッドマン 攻1400

E・HERO エアーマン 攻1800

「戦士族モンスターのリキッドマンとエアーマンを、右下及び左下のリンクマーカーにセッティング。2体目の聖騎士の追想 イゾルデをリンク召喚し、その効果を発動するよ。デッキから装備魔法、フェイバリット・ヒーローを墓地に送り、その枚数と等しいレベルを持つ戦士族モンスター1体をデッキから特殊召喚させてもらう」

聖騎士の追想 イゾルデ 攻1600

焰聖騎士―リナルド 攻500

そして特殊召喚されたリナルドの効果によって、墓地に送られたばかりの装備魔法、フェイバリット・ヒーローが老人の手札に加えられる。それは、1ターン目にも彼が狙いこそしたものの糸巻の妨害を受けたことで不完全なままに終わったコンボ。しかしもはやフィールドのカード全てを失った鳥居に、あの時の彼女のような真似は出来はしない。

「リンク2のイゾルデと、このリナルドを上、右下、左下のリンクマ―

カーにセット。世界を紡ぐ龍脈の渦が、あるべき姿に歴史を描く。私の描く未来図に、ね。リンク召喚、リンク3。天威の龍拳聖」

天威の龍拳聖 攻2600

「そして魔法カード、融合を発動。先ほど加えた手札のネオスと、このレベル4モンスター。ステイセイラ・ロマリンで融合を行わせてもらうよ」

そして次に手札から出てきたのは、HEROとは不釣り合いな植物族の少女。困惑する鳥居をよそに、その融合はすでに成立していた。上半身の筋肉がより一層盛り上がり、格闘戦に特化したネオスの進化した姿。

E・HERO ブレイヴ・ネオス 攻2500↓3400

「ブレイヴ・ネオスの攻撃力は、私の墓地の^{ネオスベージアン}N 及びHERO1体につき100アップする。本来私の墓地にその適用範囲となるカードは7枚しかないがね、ステイセイラ・ロマリンがカード効果によって墓地に送られた時、私はデッキかエクストラからレベル5以下の植物族を墓地に送ることができる。この効果で私のエクストラからレベル4、N・ティンクル・モスを墓地に送ったから、合計8体で800ポイントさね」

これで、大型アタッカーが2体。だが、まだ老人の手にはカードが残っている。果たしてそのうち1枚が、デュエルデイスクに続けて置かれた。

「魔法カード、ミラクル・コンタクト。私の墓地から指定されたモンスターをデッキに戻し、コンタクト融合体を融合召喚するよ。当然この3枚のネオスのうち1体と、たった今墓地に送ったルール上グロー・モスとしても扱うティンクル・モスの2枚をね。ブレイヴ・ネオスの攻撃力は多少下がるけれど、これぐらいなら安いものだろう?」

彼がその姪でもある八卦の師であることを嫌でも彷彿とさせる、植物族ならではのサポートカードを駆使してのヒーロー展開によって宇宙の果てから光の体を持ったネオスの進化体が戦場へと現れる。その手にした光の槍が、あの純粋な少女が得意としていた植物とヒーローの合わせ技のルーツを見せつけられて苦々しいものを感じる鳥

居の心中とは裏腹に漆黒の宇宙にあってなお引き立つように輝いた。

E・HERO グロー・ネオス 攻2500

E・HERO ブレイヴ・ネオス 攻3400↓3200

「そしてレベル6以上のヒーロー専用装備魔法、フェイバリット・ヒーローをブレイヴ・ネオスに装備。ひひっ、もつとも今は何も起きやしないがね」

ブレイヴ・ネオスの全身に明るい黄色のオーラが立ち上るが、老人の言葉通り特にそれによってステータスに変化が訪れたわけではない。しかし、それで準備はすべて整ったようだ。

「ひひっ、年甲斐もなく張り切ってしまったよ。待たせたね若いのが、そしてこれで最後にしよう。まずバトルフェイズ開始時にフェイバリット・ヒーローの効果によりデッキからフィールド魔法、融合再生機構を発動。フィールド魔法が存在することによりフェイバリット・ヒーロー装備モンスターの攻撃力は、その守備力分だけアップする」

バトルフェイズへの移行を宣言すると同時に、周りの宇宙に無数のスペースデブリが漂い始める。封の空いた簡易融合、砕けたフュージョン・ウエポンの破片、魔神王の契約書の石板の欠片……いずれも融合モンスターやその召喚に関連したものばかりだ。

「ブレイヴ・ネオスでダイレクトアタック、ラス・オブ・ブレイバー！」
飛び上がったブレイヴ・ネオスが、宇宙のそのものすらも切り裂くかのような鋭い手刀で鳥居へと迫る。本来七宝寺がこのデュエルに勝利するだけならば、この一撃で全てが終わるほどの破壊力。しかし老人はそれを良しとせず、さらに天威の龍拳聖とグロー・ネオスを並べてみせた。これは勝利を確信したが故の魅せプレイやオーバークル狙いなどではない、そう鳥居は分析する。

おそらく、彼はこう思っているのだ。この一撃だけでは、あの若いもののライフは削り切れないと。九分九厘勝利を掴んだような状況に持っていきながらも最後まで油断のない、優れた狩人に特有な神経質なまでの用心。そしてそれこそが、彼に伝説の……『グランドファザー』の名をほしいままにしてきたのだろう。

だがしかし、鳥居淨瑠にも意地がある。それはデュエルポリスとし

てのものでもあり、いちエンタメデュエリストとしてのものでもある。そして何より、彼は仕事は碌にしないわこちらの言うことは聞かないわ、そのくせ独断専行ばかり繰り返す腐れ縁の……しかしパートナーである上司から、この場を託されたのだ。用心に用心を重ねられたからと言って、はいそうですかとそのまま押し切られるわけにはいかなかった。

『圧倒的な物量を持って正義の鉄槌を下さんとばかりに押し寄せる英雄たち、対する魔界劇団は大宇宙を前に壊滅状態。ですが、しかし！この我らが劇座開幕以来の大ピンチに、思わぬ援軍が現れました！大スペクタクルサーカス団、E Mエンタメイトよりお越しいただいた頼れる小さな援軍の名を、今こそここにご紹介いたしましょう！』

言いながら、彼の手元に残った貴重なりソースである手札1枚をデュエルディスクに置く。その場に召喚されたモンスターの名を、一拍置いて高らかに宣言した。

『まああるい小さな帽子屋さん、EMクリボーダー！彼は相手モンスターの直接攻撃宣言時、その身を戦場へと躍らせます！そしてその攻撃モンスターと自身とで、強制的にバトルを行わせるのです！』

E・HERO ブレイヴ・ネオス 攻5200↓EMクリボーダー
攻300（破壊）

鳥居 LP4500↓9400

『じゃーん！どうです、これこそがクリボーダー最後の特殊能力！彼が自身の効果によって行った先頭によって発生するダメージは、なんとそのすべてが私のライフとして回復に置き換わるのです！ピンチを転じてチャンスと成す、これで私のライフポイントは、なんと1万の大半すらも見えてくるほどになりました！』

『ならばこちらもブレイヴ・ネオスの……そしてフェイバリット・ヒーローのもう1つの効果を発動！まずブレイヴ・ネオスが戦闘でモンスターを破壊したことで、デッキからネオスの名が記されたカード1枚を手札に加える。そうさね、どうせ今すぐ使いたいようなものはない、ネオス・フュージョンでも持ってきておこうかね。そしてフェイバリット・ヒーローを装備したモンスターがモンスターを戦闘破壊し

た時、このカードを墓地に送ることで装備モンスターはもう1度攻撃ができる。ラス・オブ・ブレイバー・セカンド!」

再び立ち上がったブレイヴ・ネオスが、またしてもネオスペースを駆ける。その全身から黄色のオーラが抜けたことでそれ相応に攻撃力が下がりこそしたものの、その一撃は今度こそ鳥居を打ち据えた。

E・HERO ブレイヴ・ネオス 攻5200↓3200↓鳥居(直接攻撃)

鳥居 LP9400↓6200

「ぐつ……!ですが、まだまだです!」

「あいにくだが若いのが、こちらもまだまだなんですね。グロー・ネオスで攻撃、ライトニング・ストライク!」

次いで飛び出したのは、グロー・ネオスが投げつけた光の槍。もはや防御手段のない鳥居の腹に、それが深々と突き刺さって消滅する。

E・HERO グロー・ネオス 攻2500↓鳥居(直接攻撃)

鳥居 LP6200↓3700

「天威の龍拳聖!」

最後に放たれる、幻竜の力を宿した格闘家の一撃。骨どころか内臓までイカれたような衝撃が走り、宇宙空間を吹き飛ばされた鳥居の体が、あくまで映像によって上書きされただけで実際に消失したわけではないプラントの床にごろごろと転がった。

天威の龍拳聖 攻2600↓鳥居(直接攻撃)

鳥居 LP3700↓1100

「何かしてくるとは思ったが、クリボーダーとはね。だが1度盤面をひっくり返された状態で、そのデッキがどこまでやれるかな?メイン2に装備魔法、インスタント・ネオスペースをグロー・ネオスに装備。これにより、グロー・ネオスはエンドフェイズにエクストラデッキへと戻る効果を発動しなくともよくなった。最後に融合再生機構の効果でこのターン融合素材となったステイセイラ・ロマリンを手札に回収し、ターンエンドだよ」

七宝時の言葉は、あながち悲観的な観測でもない。一度崩されてもPゾーンとエクストラデッキに加わったペンデュラムモンスターさ

え無事ならば立て直しの目があるのがペンデュラムの強みだが、今の彼にはそれもほぼ存在しない。手札以外に唯一残ったのは、エクストラデツキのビッグ・スターただ1枚のみだ。

しかし、そこで笑うのがエンタメデユリストだ。エンタメの心を取り戻した彼は、この状況にあつてなお晴れやかに笑つてみせる。ほんの一瞬だけその笑顔が横に倒れる糸巻の若かりし頃と重なって見えた気がして、老人の胸がわずかにざわついた。

「確かに今の私は絶体絶命、ですがまだ逆転勝利の目がないわけではございません。魔界劇団がお届けするものは不滅のエンタメ……まして今宵の演目の主題は、魔界劇団世界を救う。史上最大のスケールでお送りされるこの大義を果たすため、見事逆転の一手を手繰り寄せましたらご喝采。それではいよいよ参ります……ドローー！」

もはやクリボーダーのようなカードはなく、もう1ターン老人に攻撃の機会が巡ってきたらそれを受けきることは不可能。正真正銘これが最後の、反撃可能なラストターン。

「来ました、強欲で貪欲な壺を発動！私のデツキトップからカードを10枚除外し、さらなる可能性を導くカード2枚を私の手札に補強いたします！」

土壇場でのドロース、3枚から4枚に増える手札。そして希望の道筋は、繋がった。妄執に囚われた伝説を下し、未来をつかみ取るための最後の一手。

「1ターン目に引き続き、もう1度名乗らせていただきます。ライトPゾーンにスケール0、我らが誇る世界の歌姫！魔界劇団—メロー・マドンナをセツティングし、最後の凱歌を歌いましょう！私のライフ1000をコストに、デツキより呼び出すはスケール8。誰もを笑わず最高の喜術師、魔界劇団—ファンキー・コメディアンをレフトPゾーンにセツティング！」

鳥居 LP1100→100

左右に立ち上る、光の柱。0と独特な字体で刻まれた右側のそれには黒衣の歌姫が、対となる8と刻まれた左側のそれには丸々と太る4本腕のコメディアン。召喚可能なレベル帯は、1から7。

「今こそ満を持し、彼らの名前を呼びましょう！世界を救いに現れた、栄光ある座長にして永遠の花形！ペンデュラム召喚、再び舞台に甦れ！魔界劇団―ビッグ・スター！」

どこからともなく差し込んだ何本ものスポットライトの中央に、長身隻眼の座長が深く腰を落としての優雅な一礼とともに現れる。先ほど対峙していたネビュラ・ネオスのように、圧倒的な戦力を前にただ一人。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500

「ペンデュラム召喚したモンスターが1体だけならば、まだ私は……」
「花形ビッグ・スターによる満を持しての大舞台、まずはその前口上をお楽しみくださいませ。先ほどは王宮からの要請につき緊急公開停止に追い込まれました魔界劇団を代表する演目、魔界台本「魔王の降臨」をデッキからセットし、そのまま発動！レベル7以上の魔王ビッグ・スターが存在するため一切のチェイン不可の状態で、1枚のカードを破壊いたしましたしょう。魔王の号令によってひれ伏すこととなるカードの名は、天威の龍拳聖！」

先ほども持ってきていた台本を手にするビッグ・スターが、その全身に漆黒のマントを巻きつける。頭に乗った三角帽子からも二本の角が生え、魔界の花形は魔界の王となった。

「そして波乱を起こすアドリブの達人、魔界劇団―コミック・リリースを通常召喚。そしてファンキー・コメディアンのペンデュラム効果発動、ハイテンション・エール！コミック・リリース1体をリリースし、このターンの間だけビッグ・スターにその攻撃力の数値を加算いたします！」

魔界劇団―コミック・リリース 攻1000

魔界劇団―ビッグ・スター 攻2500↓3500

「ブレイヴ・ネオスの攻撃力を超えたところで！」

吠える七宝寺に、相対する鳥居。ホップ・イヤー飛行隊ともどもその手に握られた最後の手札が、このデュエルを終わらせるために勢よく発動される。

「これが私の、最後の1枚！魔法カード、トイ・パレード発動！」

「トイ・パレード……！」

老人の顔が、察してしまつた絶望に歪む。そのカードの効果を知らないままでいるには、彼のキャリアは長すぎた。それへの抵抗手段がないということすらも、理解できてしまうほどに。

「私のエクストラデッキから特殊召喚された闇属性モンスター、つまりこのビッグ・スターを選択し、このターン私はこのビッグ・スターでしか攻撃宣言できない代わりに、相手モンスターを戦闘破壊し墓地に送るたびに何度でも攻撃を繰り返すことが可能となります。さあ今こそ、勝利へのパレードを走るクライマックスシーンの始まりです！」

ビッグ・スターが指笛を吹くと、宇宙の彼方から1頭の馬が走り寄ってくる。むき出しの白い歯に赤く光る瞳、そして4つの蹄を包む紫の炎。普段魔界大道具「ニゲ馬車」として使われているうちの1頭が、その花形の勝利への道を飾るために放たれたのだ。そこにひらりと飛び乗ったビッグ・スターが素早く手綱を絞り向きを変えさせ、英雄たちへと進路をとつた。

その正誤善悪はともかく、たったひとりで長いこと戦い続けてきた伝説のデュエリストなのだ。その花道は、せめて華やかなものであつても罰は当たらないだろう。

「ビッグ・スターによる、これが最後の凱旋行進です！バトルフェイズ、まずはブレイヴ・ネオスに攻撃！」

魔界劇団―ビッグ・スター 攻3500↓E・HERO ブレイヴ・

ネオス 攻3200（破壊）

七宝寺 LP1600↓1300

「トイ・パレードの効果により、続きましてはグロー・ネオスに攻撃！」

魔界劇団―ビッグ・スター 攻3500↓E・HERO グロー・

ネオス 攻2500（破壊）

七宝寺 LP1300↓300

「ぐうぐうっ……この瞬間に装備魔法、インスタント・ネオスペースのもう1つの効果を発動！装備モンスターがフィールドを離れたこ

とにより、デツキからネオス1体を特殊召喚する！」

E・HERO ネオス 攻2500

がら空きになったフィールドで、それでも最後まで立ち上がる傷だらけの英雄。それに何の意味もないことなど、本人が一番よく分かっているというのに。

ネオスの攻撃力では、さらなる攻撃の権利を得た今のビッグ・スターから耐えきることは不可能。ならばと守備表示で出したところで、魔王はそれを蹂躪したうえでまたもう1度攻撃する権利を得るだけのこと。仮にオネストやオネステイ・ネオスのようなコンバットリックを行うカードがあるというのならば、なぜそれをブレイヴ・ネオスやグロー・ネオスの時に使わなかったという話になる。

結局のところ、これは悲しき意地の行為でしかない。今まさに全てを失い敗北しようとしている老人が、最後に自らの魂とまで呼んだカードと共にあろうとする生き様を、どうして無駄と切り捨てられようか。

鳥居は馬上のビッグ・スターに視線をやり、ビッグ・スターもまた自らの主の意思を確認するかのように視線を飛ばす。2つの目が、そこに宿った意思が、確かに噛み合ったように彼には感じられた。

「ネオスに向けて最後の攻撃……クライマックスワンマンショー！」

人馬一体となったビッグ・スターが、4つの蹄から炎の軌跡を引きながら宇宙を駆ける。ネオスもまた宇宙空間を蹴り、弾丸のように真っ向からそれを迎え撃つ。最後の邂逅は、ほんの1瞬のことだった。

魔界劇団―ビッグ・スター 攻3500↓E・HERO ネオス
攻2500

七宝寺 LP300↓0

今度こそ力尽きた宇宙の英雄が、墓標代わりのスペースデブリの中に崩れ落ちる。悲鳴すら上げず、老人の姿が吹き飛ばされる。2つの体が倒れこむと同時に、周りの宇宙空間が何の変哲もないプラント内

部の風景へと戻っていった。

「終わっ……たあ……」

疲労と安堵が入り混じった感情から今すぐにでもその場にへたり込みたい衝動にかられた鳥居だったが、そうはさせまいと言わんばかりのタイミングで彼のデュエルディスクに通信が入る。どうにか通信機能をオンにすると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『ハローハロー、こちら清明。そっち何かやった？さつきから糸巻さんにも連絡とってもらってるんだけど、全然出ないのよねあの人』

『彼女の程度の低さ……失礼、幼稚さ……失礼、くだらないことに心血を注ぐ極めて稀な才能から考えて、連絡を取っているのが私だから無視しているのかと思いましたが、どうもそうでもなさそうですので貴方の方に連絡をつけさせてもらいました。ちゃんと連絡が取れるあたり、上司の悪癖は引き継いでいないようで何よりです』

『さつきまでこっちもドンパチやってたんだけど、たった今急に終わっちゃったのよね。まあ、そのおかげで助かったんだけど』

『どうもご老体、こちらからは一切の操作を受け付けなくさせた代わりに自身の敗北とプラントのシステムを紐づけさせていたように。こちらは何もしていないのに、プラントの『BV』全体に緊急停止がかかりましたよ。それで本題ですが、残念ながら少しばかり勝負を決めるのが遅かったようですね。ご老体が言っていたよりは小規模なもので終わりそうですが、この施設は爆発します。脱出、できそうですか？』

これで世界は救われた、のだろうか。もしかしたら七宝寺が勝っていた方が世界への、デュエルモンスターズへの、そしてそれを生業とする人々の救いにはなっていたのかもしれない。そんな感傷に浸る暇さえくれない最後の難題に、ふらつく頭で周りを見回す。七宝寺も糸巻も完全に気を失っているのか、いまだ倒れたままピクリとも動かない。抱え上げて運ぼうにも、そもそも彼本人がすでに体力も気力も限界に近い。

「……いや、こっちは」

『はい、わかりました。だそうですよ、荒事はあなたの領分でしょう？』

そのために貴方を連れてきたのですから、馬車馬のように働いてもらいましょうか』

『へいへい、人使いの荒いこつて。そこ動かないでよ、危ないから……ゴ―、チャクチャルさん！ミッドナイト・フラッド！』

瞬間、プラントが足元から大きく揺れた。エネルギーの塊がおもむろに床を突き破り、呆然とする鳥居の眼前に空いた巨大な穴から漆黒に紫のラインが入った巨大なシャチのモンスターが浮上する。その背には、案の定たった今まで通話越しに話していた2人組の姿。

「あ、いたいた。迎えに来たから、早くボートまで戻るよ！ごめんね、さすがに本土まで実体化を保たせるのは、僕の方が潰れる……」

「……はははっ」

規格外、常識外れ。あまりといえばあまりの力技っぷりに、もはや乾いた笑いしか出てこない。デウス・エクス・マキナ、物語を強制的に終わらせる機械仕掛けの神。

仮にも劇者としては存在自体を恥ずべき概念ではあるが、それはきつとああいうやつのことを指すのだろうとふと思った。

エピローグ

「えー、それじゃあ、この度の大勝利を祝しまして、だ。せーの」
「「かんぱーい！」」

糸巻が音頭を取り、それに合わせてその場にいる面々が一齐にグラスを上げる。酒類がどのグラスにも注がれていないのは、時間帯と参加メンバーを考慮してのことだ。

土曜日の昼間少し過ぎ、まだ日も高い午後3時。普段は清明が居候しているケーキ屋は事実上の貸し切り状態となり、彼女たちだけの祝勝会が始まった。糸巻、鳥居、八卦、竹丸、鼓、笹竜胆、そして遊野。好むと好まざるとにかかわらず、この度の長い戦いにデュエルポリス側として首を突っ込んだ人間がそこには勢揃いしている。無論、蓋を開けてみれば極めて複雑怪奇な勢力図によるものだったこの海上プラント戦で、最終的な勝者となった一部勢力の人間に限定されるのだが。

「すみませんでしたお姉様、私、あの時負けちゃって……」

乾杯も早々に空のグラスを片手にとこととやって来て、糸巻の顔を大きく潤んだ目でおずおずと見上げる八卦。よくよく見ればかすかに赤みがさしたその頬を見た瞬間、かつてないほどに早く今回の宴席をセツティングした男、遊野清明に殺気を込めた視線だけで問いかける。

「（オイ、本当にちゃんとジュース入れたんだよな？アルコール入りなんてこんな子供に注いでたらこの場で病院送りにするからな？）」

「（待つて待つて待つて！僕何もしない！ちゃんとスーパードで買ってきたオレンジジュースだし！）」

首と手を全力で横に振る少年の態度に疑心がほんのわずかに揺らぎ、改めて目の前の少女を見下ろす糸巻。

即座に後悔した。ぼつちりと目が合ったのだ。それも、まんまるに開いた両目を決壊寸前にまで潤ませた捨てられた子犬のような目と。

「でもお姉様ー、私がお甲斐ないせいで……ふええええん！」

「わかった、わかったから泣きながら抱き着くなって八卦ちゃん！あ

あもう、べつとべとになっちゃって……おいコラ清明。今殴りに行くからそこで正座しとけ」

「ノー！僕無実！」

もはや完全に出来上がった酔っぱらいオーラを隠そうともせずにべたべたと引つ付きに来る少女のいつもより数割増しで高い体温を引きはがしながら、据わった目でじろりと睨みつける……そんな3人をずっと横から騒がしいものだ、と呆れ半面面白半分、さりげなく巻き込まれない程度の距離を保ちつつ眺めていた鼓が、ふと何か言いたげなもうひとりの少女に気が付いた。

「あ、あの、えつと……」

「どうした？私でよければ、言ってみてほしい」

「ひいつ!?……あ、鼓さん……」

おずおずと話しかけようとしては、糸巻の気迫に気圧されてうまく声が出ない竹丸。その小さな背中がビクリと跳ね、こっちもこっちで今にも泣き出しそうないっぱいっぱいの少女が振り返った。

「安心しろ、これでも奴とは古い仲だ。今無理に話しかけるとほぼ確実に返事の代わりに拳が飛んでくるだろうが、奴がまず人体のどこを狙ってくるか私は理解している。問題なく躲せるとも」

「……突っ込むのも野暮じゃが、そっちなのかえ？そちらなら話を聞いてくれる、とかではなく？」

もぐもぐとドーナツを頬張りながら冷めた目とともに飛んできた笹竜胆の一言は黙殺し、それで、と少女の先を促す。おずおずと話始めたその手には、何やら紙箱が握られていた。

「じ、実は八卦ちゃん、このチョコレートを食べってから調子がおかしくなって、それであんな風に……」

「どれどれ？む」

横文字の並ぶ、チョコレートの写真がプリントされたそれを何気なく受け取った鼓が、くぐもった声を漏らすなりぴたりと押し黙った。たっぷり10秒ほどその状態のまま、すらりと伸びた長身に端正な表情も相まって女神像か何かのように動かなくなる。

「あ、あの……う？」

「ふむ、何事か気が付いたようじゃの。ま、放っておくがよい。こやつも悪い御仁ではないのだがのう、どうもあの妖怪生意気乳女が絡むと昔から隙が多くて困る。ところでお主、そのちょこれいとの入った『まふいん』をひとつ、取ってくれぬかの？。ついでに、もうちいとばかりわらわのそばに寄ってまいれ。その位置は少し、あの妖怪乳女どもに近すぎて危ないからの」

「は、はい。どうぞ……？」

言われたとおりにマフィンを手近寄ると、その雅な雰囲気はそのままにバリバリの洋菓子を受け取る年齢不詳の美女。両手に持つ物がマフィンとオレンジジュース入りのコップでなければ、さぞかし絵になる光景だったろう。

「うむ、すまぬのう。ほれ、そろそろ面白くなりそうじゃぞ」

「つーづみー？お前今の言葉もいっぺん言ってみろオラ」

言い切るのとほぼ同時に、糸巻の割とキレ気味な声が妙に大きく店内に響く。

ほらの、と愉快そうに目を細めつつどこからともなく取り出した扇子を半開きにして口元に添え上品に笑みを隠す笹竜胆とは対照的にわけもわからずおろおろするばかりの竹丸だったが、すぐにその疑問は解消された。つい先日にもニュースで見るとまったく同じ理知的でぶつきらぼうな口調で、当の鼓が形だけごくごく軽く頭を下げつつ平然と丁寧の説明してのけたからだ。

「む、もう一度か？仕方ないな、すまん糸巻。その子が食べたウイスキーボンボン、それ私が税関で適当に見繕って買ってきた土産だ。一番安かった奴だがな」

「……アタシ言ったよな？子供ガキがいるんだから酒は無しだぞって」

「安いだけあって期限が切れかけていてな。私一人では喰い切れないところだったからな。かなり度数がきつい奴だとは聞いていたが、まさかここまでとはな」

「ほーねえしやまー、わたひのほうをむいてくらさいよー」

「あのなあ!?!あーわかったわかった、わかったから八卦ちゃん、ちよつと待ってくれ……!」

今一ついつもの威勢がないのは、とろんとした目と真つ赤な顔で隙あらば密着しにかかる少女をどうにか押しとどめながらだろう。しかし、酒の力にもいつかは終わりが来る。騒ぐだけ騒いでついに限界が来たのか抱き着こうとする格好のままずると倒れ込みながら、消え入りそうな声で最後の言葉をつぶやいた。

「らつてわたひには、もうおじいちゃんがなくなっちゃったんですもん……」

「っー」

言葉を失い、固まる糸巻。

彼女とて、わかつてはいたのだ。あの老人、狂った哀れな七宝寺に引導を渡すということが、少女にとってどんな意味を持つのかということは。それでも、彼女たちはやらなければならなかった。それだけのことだ……などと、割り切れたら楽なのだが。

彼はこれから、国家権力の元でその罪を償うことになるのだろう。すべては彼自身の自業自得とはいえ突然に肉親を奪われ、それでも少女は今日まで気丈にふるまっていた。糸巻や鳥居へも恨み言ひとつ口にせず、これまで同様の態度で毎日のように顔を見せていた。しかし、八卦九々乃はまだ多感な中学生の少女だ。ここ13年間で必要以上の辛酸をなめつくし回想の全てがセピア色に染まった糸巻たち旧世代のデュエリストとは違い、人生が希望に満ちているべき子供。

堪えていない、訳がない。力尽きた少女がやすやすと寝息を立て始めても、しばらく彼女はその場を動けなかった。これ以上何か壊れてしまうのを、怖がっているかのように。

「……」

そしてそれは竹丸も、鼓も、笹竜胆も同じだった。そもそも、彼女たちがカードショップ『七宝』での戦いに勝利していれば……無論それは、無意味な仮定だ。そもそも最前線の現役デュエルポリスが2人がかりでようやく辛勝できたような化け物相手に現職フランス支部長の『錬金武者』はともかく、現役を退いて久しい『十六夜の決闘龍会』ではさすがに荷が重いだろう。事実、彼女たちはあの時あの場所で老人に負けたのだ。それでも、そう割り切れるほど彼女たちの心は

強くはない。割り切って目を背けるほど、弱くはないのと同じように。

全員が全員後ろめたそうに目を伏せ、なんとはなしの沈黙と微妙な空気が立ち込める。そんな空気をぶち壊したのは、日頃から糸巻との付き合い方を心得ているがゆえに彼女が荒れだしたとみるや光の速さでその場を離れトイレを口実に店の奥まで緊急避難を決めていた鳥居の足音だった。

「い、いと、糸巻さん！ちよつとこつちでもテレビつけてください！ニュース、今ヤバいことになってるんすよ」

「あー？ちよつと悪いな八卦ちゃん、ゆつくり寝ててくれ……んで、ニュースがどうしたつて？」

「はいはい、ちよつと待ってねりモコンは……つと」

居候だけあつて慣れた手つきで店内のテレビの電源を入れた清明の後ろから、なんだなんだと内心話が逸れたことにほつとしながら全員で画面を覗き込む。だが次の瞬間、そんな弛緩した空気は吹き飛んだ。

『えー、こちらは事件現場、数日前に逮捕された凶悪犯罪者……デュエルモンスターズを介したテロ行為における重要参考人である七宝寺守氏、及び巴光太郎氏の護送車で発生した爆発事件の付近まで来ております！この両名はかつてプロデュエリストとしても活動しており、キヤツ!』

黒煙を上げる力尽きた護送車を遠巻きに、画面越しにでも伝わってくる現地の混乱。そして唐突に吹いた台風もかくやというような豪風を浴び、手にしたマイクに必死に叫ぶレポーターの短い悲鳴。

「糸巻さん！なんでこんな大事な時に有休なんてとつてんすか!？俺も糸巻さんが取れつていうからこつち来たんすよ!？」

「アタシじゃねえよ、ありや警察のお偉いさんからの意向だ。デュエルポリスにこれ以上手柄を渡したくないから、護送は警察の連中だけでやりたかつたんだとよ。あとさんざ好き放題やりやがった奴が何言つてやがる」

「……残念ながら、その通りだ。一応護送にデュエルポリスがいない、

なんて情報は漏れないように日本警察にも上から話は通しておいたんだが、まあ無駄だったな」

いっぺんに仕事の顔つきになった鳥居と糸巻の会話に、仏頂面の鼓が補足する。お互いに今回の決定について面白くは思っていないが、デュエルポリスに表立って国家権力に異を唱えるような権力はない。

結局、どこまで行ってもこの世界におけるデュエリストは虐げられる側なのだ。武力担当として非常時には泣きつかれ、脅され、最前線で戦えど、ことが終わればそれでおしまい。手柄はすべて取り上げられ、またひとつデュエリストの評判が落ちたという事実だけが後には残る。

「み、皆さん、その……」

その場の空気に何か言いたげな竹丸に気づき、糸巻はくたびれた笑顔を向けた。

「あー、まあいつものことさ。13年間変わりやしない、な」

「そういう仕事だ。だが、私はこれが必要な仕事だと思うよ」

「糸巻さん、鼓さん……」

「なんじゃ、すっかり物わかりのいいセリフを吐くようになって。それともそれは、あの時デュエルポリスになることを拒んだわらわへのあてつけか?」

言葉とは裏腹に面白がるように扇子で口元を覆い笑う笹竜胆に、2人のデュエルポリスが応えたのは全くの同時だった。

「いや、アンタ（お前）の方がアタシ（私）よりずっとまともな感性だった、って話さ」

ここまで地に堕ちたデュエルモンスタースにしがみついている時点で結局はみな同じようなものだ、そう皮肉気に彼女たちは笑う。

守るべき世界からの迫害に耐え、常に後手で火消しに回る自分たちデュエルポリスも。散発的に暴れつつ、同時にその世界から飯の種を拾うバラテロリストも。裏の世界にしがみついてまで、いまだ見世物としてのデュエルにこだわり続けるロベルトら裏稼業としてのデュエリストも。そしてこのご時世にデュエルモンスタースに手を

染めた八卦や竹丸だつて、結局はどこか頭のねじが抜け落ちているとしか思えないのだから。

「それでも、今回やったことは無駄じゃなかったでしょ？あのプラントは潰したし、裏デュエルコロシウム？だっけ？も、胴元がいなくなつたならそれなりの打撃にはなるでしょ？そんな難しい話はおしまいにしようよ」

「いなくなつたつたつて、巴のアホ狐も七宝時の爺さんも逃げ出したんだからこれでまた振り出しだろ？」

『あつ！現場から速報です！護送車の中に、まだ人が残っていました！』

まるで糸巻の反論に異を唱えるかのようなタイミングで、画面の中のレポーターが叫ぶ。嫌でも全員の視線が引き込まれた先で、恐る恐るマイク片手に近寄つたレポーターと付き添いのカメラがその残つた人とやらを映し出す。

『おや、ブン屋かね？それも、生放送、か。ひひっ、ならちよつとそのマイク借りるよ。なあに、今話題の凶悪犯からの生放送さ。どこの局かは知らないが、箔がつくつてもんだらう？……さて糸巻の、それに九々乃。聞いているかい、聞こえているかい？七宝寺だよ』

「おじいちゃん！」

寝息を立てていた状態からいきなりはね起きた少女が、テレビの中央に映る老人に駆け寄る。まさかその声が届いたはずもないが、合わせたかのようなタイミングでレポーターから奪つたマイク片手に老人がカメラをまつすぐにのぞき込んだ。

『初めにひとつ言っておくと、私は自分が間違つていたとは思わないよ。ただ、それでも敗北した。それが、カードの出した答えさ』

しんと黙りこくつた店内に、老人の声が画面越しに響く。糸巻でさえ、いつになく神妙な表情でそのひとことひとことを、かつて伝説と呼ばれた男の最後の言葉を噛みしめるように聞き入っていた。

『実を言うかね、さっきここを出て行った巴には私も誘われたんだ。私に対しては色々と思うところもあるが、それでも昔は世話になつた身だからってね。でも、見ての通り私はここに残つた。私のカードは

私にすべてを諦めろと伝えたかったのか、それとも今はまだその時
じやないと教えたかったのか。少し、ゆつくりと考える時間が欲し
かったからね』

「爺さん……」

『九々乃。自分の姪一人大事にできなかつたおじいちゃんが何を言お
うと九々乃の心には響かないかもしれないが、それでもこれだけは覚
えておいておくれ。カードは、決して裏切らない。これから九々乃が
どんな道に進むかを私が見ることはできないけれど、少なくとも九々
乃がデュエルモンスターズを愛した心は本物だった。そのことを忘
れなければ、いつだってカードは味方だよ……デュエリスト、八卦
九々乃』

「おじい、ちゃん」

静かに涙を流し声を詰まらせながら、テレビの前にへたり込む少
女。そして画面の中の老人が、言いたいことは言い切ったとばかりに
手持ちぶさたになっていたレポーターにマイクを差し出した。

『そら、返すよ。そうそう、ついでに私の護送はいつ再開するのも警
察に問いただしてきてくれないかね、ひひっ。この壊れた護送車だ
と、空調も効かなくてね』

『え？えっと、はい……あっ！い、以上現場からお送りしました！』

慌てたようにそう締めると、画像が今までこの中継を見ていたので
あろうスタジオに移り変わる。こんなものを生放送で流されて、今頃
局内はてんやわんやだろう。しかしそれをどう収集つけるのかこの
まま見ていたいなどは誰も言わず、むしろ逆に最初と同じく清明が
無言でテレビの電源を落とした。

そして再びしんとした店内で、がっくりと膝をついていた少女が
ゆっくりと立ち上がる。気丈に袖で涙をぬぐい、赤く潤んだ瞳で笑顔
を浮かべてみせる。

「あの、お姉様！」

「……おう」

「私、これからもデュエルモンスターズ、続けます！ずっとずっとクノ
スぺ達とデュエルして、もっともつと強くなってみせますから！」

真つすぐに目を見てそう言い切られた糸巻はここでどう返すべきかとほんの少し迷ったが、すぐにそんなこと考えるまでもないかと気持ち切り替える。幼い少女は少女なりに老人からの別れの言葉を受け止め、そのうえで結論を出したのだ。そこに口を挟む権利は彼女にも、無論ほかの誰にもない。

だから彼女はあえて笑う。明るくふてぶてしく、かつて数多のファンを魅了してきた『赤髪の夜叉』の表情で。

「……そうか。なら、やってみな？もつとも、アタシはまだまだ八卦ちゃんには負けないけどな」

エンディング

「そうそう、少し言っておきたいことがあって。僕、ここをそろそろ出ようと思うんだ」

それは、海上プラント戦での打ち上げパーティーから数日後。鼓や笹竜胆もそれぞれの場所へと帰っていき、家紋町にまた束の間の平和が戻ったある日のことだった。輝いていた日も徐々に傾き始め、ゆっくりと西日がオレンジ色の光を差し込んでくる時間。どこかまつたりのした空気の中で、いきなりとんだ爆弾を放り込んできた少年がいた。遊野清明、その人である。

「はっ？」

糸巻の言葉は、その場にいる全員の心境を極めて簡潔に言い表していた。小心者ならばそれだけで怖気づきそうなそれを受けて、しかし少年は慌てる様子もなくひどく大人びたしぐさで小さく肩をすくめ、なんてことないように言葉を続ける。

「少しばかり急な話だけど、次元の揺らぎがこの近くに発生しそうですね。この機を逃すと、次に他の世界まで飛べるのはいつになるか見当もつかないのよね……あーわかったわかった、わかったからそんな目で見るのやめてって。要するに、旅に出る時期なのよ」

「清明さん、いなくなっちゃうんですか……!?!」

まるで要領を得ない説明に、真っ先に反応したのはこの日も当然の権利のごとく学校帰りにデュエルポリスのオフィスまで遊びに来ていた八卦である。もつとも彼女のこの反応の早さは、どちらかといえばその隣に今日もついてきていた親友のため、という方が強い。現にその視線は清明本人よりも、むしろその横で顔面を蒼白にしつつこの世の終わりを見たかのような表情で立ちすくむ親友の方に多く向けられている。

「……………え……………」

絞り出すようにそれだけ口にした文学少女にあわあわと処置に困りながら、とにかくの助けを求め彼女が最も信頼するお姉様、つまり糸巻に視線で助けを求め。

もつとも、この場合他に選択肢がないというのものもあるが。本来ここにいるはずのもう1人のデュエルポリス、鳥居浄瑠は現在外出中である。

それはさておき、そのままたつぷり数秒後。欠片も逸らされない純粹な、そして切実な視線に耐えきれなくなった糸巻が頭を掻きつつ観念して立ち上がった。

「なあ清明さんよ、そこでフリーズしてる子のためにも、もうちよつと何か言うことはないのか？」

「そうは言ってもねえ。元々ここにだって、最後の挨拶だけしに来たつもりだったし。後で八卦ちゃんのお店に寄れば竹丸ちゃんにも会えると思ってたから、むしろここで会えてラッキーだったな……と……」

後半になればなるほど声が小さくしどろもどろになっていくのは、女性陣から容赦なく浴びせかけられる氷点下の目線にようやく気が付き始めたからだ。ちなみにその裏では頼みのブレイン、地縛神 Chacu Chalhua にテレパシーで助けを求め、説明下手なのが悪いとぼつさり切り捨てられたりもしているのだが、無論精霊の認識能力を持たないこの場の3人にそこまでは知る由もない。

もつとも、彼とて決してその場の思い付きや風向きからこんなことを言い出したわけではない。元居た世界を離れこの地に降り立ったのはほんの偶然だが、そこからかれこれ半年近く。長く住み着いたことで、それなりに愛着もある。

それでも、当てのない旅に出ようと決心するだけの理由が彼にもあった。ため息ひとつして近くの来客用ソファーに身を投げ出し、普段はめつたに見せることのない真面目な表情でその場にいる3人の顔を眺めまわすと、明らかに場の空気が変わったことを文学少女も敏感に感じ取り、ようやくショックから多少立ち直った。

「まずおかしいなと思ったのが、この子のこと」

すつと持ち上げた指2本の間には、いつの間にやらデッキから抜き取られた儚無みずきのカード。言わずと知れた、そもそも彼がデュエルポリスと接触するに至ったある意味はじまりの事件。精霊のカー

ド騒動の中心となった1枚である。

「そもそも精霊のカードがあつちこつちにいること自体がおかしいのよ、本来。もともと僕がいたところは、この辺よりもカードの力が強くてね。封印されて鍵までつけられた強大なカードが学校のすぐそば、というか同じ島の中にあつたり、なんか賢い人が頑張れば人工的に次元を越えてカードの精霊世界に行けたりとか、まあそういうところだつたんだけど」

「内容以前にアンタのその説明がすでに頭悪そうなんだが」

「精霊が多かつたところから来たの。これでいい？で、カードの精霊ってのは呼び水みたいなものでね。なんか1人出ると、それに触発されるのかそのカードを起点に精霊世界との繋がりが生まれるからか、割とそのあとまあちこちで生まれやすくなるのよ」

混ぜっ返しにもいつも何も考えていないような能天気な反応では返さず、変わらぬ真面目な調子を保つたままに。本人なりに、この問題については長いこと考えていたことが垣間見えた。

「たぶんこの子は……いや、下手するとなんかすごい『BV』だっけ？これはあんまし言いたくなかつたんだけど、あれだつてどうも精霊持ちの僕がこの世界に来たから生まれたような気配がするのよね」

「……あー？ちよつと待て、どういう意味だそれ」

すつと、糸巻の目が細まる。先ほどのおふぎけ交じりなそれではなく、本気の『赤髪の夜叉』の向ける視線に、部屋の気温さえも数度ほど下がったような錯覚がした。もっとも、彼女にしてみれば当然だろう。永遠のライバルたる巴とともに突如として彼女の前に現れ、その理不尽さをもって散々な目に合わせてきた異常出力のイレギュラー。その生まれた要因が、これまで彼女に協力してきたこの異邦人にあるという。

……冗談にしては、あまりに笑えない。しかしその視線を、清明は真正面から受け止めた。

「僕もあのプラントであの人と1回デュエルしたただけだけど、あれはなんか……『こつち側』の代物っぽい気がする。エネルギーが強すぎて妨害電波が効かないんじゃないやなくて、闇のデュエル発生装置だよあれ

は。そもそも原理が別物だから、最初から効くわけないっていうか」「それが本当だとして、じゃあアタシらはどうしろってんだ？」
「だから言ってるのよ、僕がここを出るって。多分、そうすればそのうちあのデュエルディスクからもオカルトパワーは抜けてくと思うし。これ以上変なアイテムやいわくつきのカードが生まれると、どこで何が起きるやら」

その言葉に嘘はなく、彼が本気でこの世界のことを案じているのがわかる。そして糸巻は、まさにその世界を守るためのデュエルポリスだった。ゆつくりと息を吐き、後ろで息を殺し自分たちのやり取りを見守っていた少女2人と目の前の少年の顔を見比べ……もう一度、大きくため息をついた。

「ったく、やだねえ年上つてのは。こういう面倒なことを言わなきゃならないのは、いつだってアタシの役目かよ。わかった、まあ元気でな」

「そんな……な、なら！ 私も、連れて行ってください！」

飛び掛からんばかりにしていつもの奥手さからは想像もつかないような粘りを見せる親友に、目を丸くする八卦。しかし、恋する少女にはそれを気にする余裕もない。

そして、当の清明本人は。激情に駆られた少女の本気にほんの一瞬だけ後ろ髪引かれるように目を閉じて、しかしすぐに真つすぐな視線を合わせる。

「それは、無理。ごめんね、竹丸ちゃんは悪くないんだけど」

光の加減か、それともこれも年の功か。糸巻の目にはまず一言でばつさりと拒否したのち、ほんのわずかに清明の表情が歪んだようにも見えた。これまで自分から開示することなく、彼女自身もわざわざ問い詰めてこなかった少年の過去が垣間見えたことにわずかに意地の悪い好奇心が刺激され、あえて助け舟は出さず腕を組んだままに耳を澄ます。

「……………僕は昔っから、大事な人を目の前で亡くすことが多くてね。生後3か月目には実の母親、それからしばらく経って高校の時には、もう数えるのも思い出すのも嫌なほどに。ごめんね、わかってるん

だ、そんなの偶然だつて。でも皆、僕を生き残らせるために命を捨てて何かを託していった」

もう散々に泣いたのだろう、その両目からは涙が流れこそしなかったものの、どれだけ平静を装っていてもわずかな声の震えを糸巻は聞き逃しはしなかった。そしてそれは、彼女よりずっと人生経験の浅い少女たちにも伝わったようだ。

「だから、ごめん。そのお願いは、ちよつと聞けないかな。親御さんや八卦ちゃん心配するとか、本当はそういうことを言うべきなんだろうけど……正直に言うとは僕には、それが何より怖い。どんなところに出るのかも、何が起きるのかもまるで予想がつかないから。また目の前で誰かが僕を生き残らせようとするのが、それで会えなくなるのが」

「清明、さん」

「あんなの僕は、もう怖い……」

感情を吐き出すような、震える弱音。それは、この世界で彼女たちが見てきていた姿からは想像もできないようなものだった。

そしてそんな姿と隠れていた本音を前に、恋する少女は。急に見た目の年齢、自分たちと大差ない程度にまで小さく見えるようになった背中に手を伸ばそうとして……しかしその手が触れる前に、また彼の背筋は伸びた。口元にはいつも通りの温和な微笑みを浮かべ、もう声も震えてはいない。

「とまあ、ことういうわけだね。まあ、もう一生会えないわけじゃない……と思うよ、うん。何かの拍子で縁があつたら、その時はまた遊びに来るよ」

そう告げる彼の様子からは、もう弱さはまるで感じられない。もしも少女の伸ばした手が彼が本心を取り繕うより先に届いていれば、何かは変わったのだろうか？

しかし、それはもはやあり得ない仮定の話に過ぎない。唯一にして最後の機会は、もはや永遠に失われた。それを聴い少女は、感じ取った。理解してしまった。

「なら……」

視界が潤む。両目に力を込めて、必死にそれが溢れ出るのを堪える。彼の顔を、最後までではつきりと見つめるために。最後の頼みを、自分の言葉で届けるために。

「なら、清明さん。せめて私と、最後にデュエルしてくれますか。全力で、私と戦ってくださいますか」

「竹丸さん!」

この言葉は予想外だったのか、親友の名を驚きとともに呼ぶ八卦。その驚きは、半分は喜びの声でもあった。彼女はまだ、自分と同じくデュエルモンスターズに魅せられていることがその一言だけで理解できたからだ。出会いからして楽しいことなど何一つなかったであろうに、まだカードのことを考えるほどに。その気持ちがよくわかるからこそ、喜びもまたひとしおで。パツと表情を明るくし、誘われた清明の方へと目を向ける。

そして彼もまた、思いは同じだった。ほんのわずかに目を丸くしたのちにふっと笑い、左腕の腕輪が展開する。デッキの中に先ほど抜き出していた儂無みずきのカードを滑り込ませると、展開されたデュエルディスクの骨組みに水の膜が張る。ひらりと軽やかに立ち上がってオフィスの端まで距離をとり、自然体に構える。

「いいよ、本気でやろうじゃないの。うんと楽しく、とびっきりのをね。さあ、デュエルと洒落込もうか!」

「……はいっ!よろしく、よろしくお願いします!」

「へー、そんなことがあったんすか。それで、どうなったんです?」

そして日は沈み、時刻はすっかり夜。子供たちは家へと帰り、いまだオフィスにいるのは相も変わらずため込んだ残業と格闘する糸巻と、それに付き合わされる鳥居の2人。コンビニで買ってきた夕飯を袋から取り出しながら、つい先ほどまでこの場所で起きていた顛末に耳を傾けていた鳥居が問う。

「ああ、大したもんだったぜ。遊野の奴はもちろんだが、やっぱり竹丸ちゃんの才能はとてつもないな。トラウマにでもなってるのかと

思つてちよつと心配だったが、結果的にはヒリヒリした実践に放り込まれたのも良かったらしい。前に見た……つつつてもアンタは見えないのか、まあとにかくその時よりカードの使い方も引きのキレも上がつててな。ありや八卦ちゃんどころか、アタシやアンタもうかうかしてたら危ないぞ?」

「へえ。それで……」

どちらが勝つたんです、と喉元まで出てきた質問を、すんでのころで飲み込んだ。どうせこの上司は答えないだろう、というのもあるが、それ以上に彼自身がそれは重要などころではない、と感じたからだ。代わりに、もうひとつ別に気になったことを聞いてみる。

「あいつ、もう行つちやっただんです?」

「ああ、らしいぜ。突然ふらつと来て突然いなくなるんだもん、なんか夢でも見てた気分だ」

「そこは同感つすね。あー、だからか」

「あん?」

上司のなにかあるならさつきと話せ勿体ぶるなど言わんばかりの視線に肩をすくめ、おにぎりの包装を破りつつさつきと口を開く。別にこんなこと、わざわざ溜めるような話でもない。

「いえね糸巻さん、俺さつき……多分そのデュエルが終わつてお開きになつた時つすね、写真屋から出てきたところ、ちようどあいつと会つたんすよ。なんか妙に話しかけてくるなーとは思つたんすけど、あれ別れの挨拶のつもりだったんすね。おかげで、ちようどこれも渡せたんですけど。あ、こつちは糸巻さんの分です」

「お、現像終わったのか。悪いな……明日来たら、八卦ちゃんと竹丸ちゃんにも渡してやらなきゃな。鼓と笹竜胆にも、ちと面倒だけど送つてやるか。着払いでな」

鳥居の差し出したそれを受け取り、指の間に挟んでしげしげと眺める。今頃は清明も、どこともつかない空の下でこれと同じものを眺めたりしているのだろうか。先日のパーティー終了時、全員で並んで撮つた集合写真の笑顔を見つめながら、ふとそんなことを考えた。

PS. デュエルポリスの軌跡

世界観について

まあ、まずはここから始めましょう。オリキャラいっぱい……とい
うか前作と違ってオリキャラオンリーのオリジナル世界だし。

改めておさらいしておく、作中舞台は日本……のどこかにある海
辺の町、家紋町。そうたいして栄えた町ではないといういきなりタイ
トル詐欺みたいな展開だけど勘弁してください。考えてみりや恐ろ
しいことに摩天楼1回も書いてねーなこいつ。

それはさておきもう少し細かい話をすると、基本的にはこの世界と
同じようなものです。日本、フランスといったおおまかな地名も一致
していますし、歴史にもさほど違いはなく、カードプールは現行のも
のそのままです。もっともルールに関しては私がいつまで経っても
遅々としたペースでしか更新しなかったせいで新マスタールールで
止まっていますが。おかげで途中からはしよつちゆう「だーっ、ここリ
ンクメーカー向いてないからモンスター並べさせられねえじゃん！
書き直し！」ってなりました。反面「まいったな、ここ本気出せばもっ
と展開できる……そうしたらコイツこのターンで余裕で勝っちゃう、
何かプレミの原因作らなきゃ……あ、メーカー先増やすほどの余裕は
ないからどう頑張ってもここで展開終わりじゃんラッキー」となるこ
ともあったのでまあ良し悪しですね。

閑話休題。大まかな歴史は先述の通り大して変わりありませんが
どこかで歯車が別の回り方をした結果デュエルモンスターズ（「遊戯
王」ではない）がこちらの世界以上アニメ（DMとVRAINSまで
の総称。SEVENSはゴーハデュエルの細部不明なのでちよつと
除外）未満といった発展を遂げ、デュエルディスクによるソリッドビ
ジョンシステムまでは実用化されるに至った世界。

そして、ここからはちよつと裏話。作中での重要ワードであり、タ
イトルにも使われた『BV』ことブレイクビジョンですが、まあ要す
るにネタ元はARK-Vでおなじみのリアルソリッドビジョンシス
テムですね。モンスターと共に地を駆け宙を舞い、フィールド内を駆け

け巡り……はしませんが、鳥居たちはかつてそれを実際に夢見ていました。

そもそも私がこの話を書き始めたところかかりが「質量をもったソリッドビジョン、ってヤバくないか？」というシンプルな感想からで、試しに挙げてみるとまあ悪用方法が出るわ出るわ。幸いあちらの世界ではその技術が悪用された世界線は分離され一部を除き跡形もなくなりましたがそれをもう少し狡猾に、明確な悪意をもって世界に広がった場合どうなるか、というある意味では私なりのあの世界の再構成です。それを作中で体现したのが鳥居浄瑠であり、エンタメデュエルと『BV』の可能性を一時だけでも信じ魔界劇団を操る彼の姿はまさに同作でのデュエルモンスターズとリアルソリッドビジョンを純粋なパフォーマンスの一環に昇華させた世界の善性を体现しているとも……言えなくもなくもない、のかもしれない。実際他のキャラもやれ超重武者だそれ妖仙獣だと、どこかで見たようなテーマが多めですよね。そもそも記念すべき初デュエルからして同作の象徴、ペンデュラムテーマのメタルフォーゼですし。

世界観としてはひとまずここまで。続きまして、キャラクターです。

キャラクターについて

別名デュエリスト名鑑。時系列順に……の前に、まずはこの2人。

1、赤髪の夜叉：糸巻太夫いとまきだゆう

言わずと知れた本作主人公。味方にすれば頼れる姉御肌、敵に回せば何するかわからない動く爆薬庫。猪突猛進な直情傾向……に見えて決して頭の回転が鈍いわけでもなく、敵の裏を読む能力にも長けたしたたかさを併せ持つ赤髪ロング。元プロデュエリストでも実力、人氣共にトップクラスのプレイヤーであり、主に元プロ同士の？がりがらあちこちに顔が効く。

ということ糸巻さんです。まあ彼女はある意味では動かしやすい、そしてある意味では作者である私自身にも底知れない女でした。というのも彼女、上記の設定からもわかる通りかなり言動の幅を広くとってあるんですよね。これは前作主人公だった遊野清明でストー

リーを作るうえでちよつと反省していたことなんです、ストーリーの進みを重視してガンガン話を進める際には「ほんとにコイツこの場でこんなこと言うのかな？」みたいな解釈違い、と言ってしまう。ちよつと大げさですが、微妙にキャラがぶれているのではないかと？でもここでこっちに舵を取らないとストーリー進まない……みたいな状況がどうしてもあったりなかったりするわけですよ。まあそんなときには大体チャクチャルさんがいい感じに思考誘導かましてくれましたが。

だから心機一転舞台一新、新たに主役に続べた彼女の場合はもう少し話を進めるうえで（こっちが）やりやすくしようと思筋から策士、すつとこどつこいから理論家まで幅広くキャラクターの範囲を取ろうとしたわけですね。学生だった清明とは違いこちらは栄光から転落、酸いも甘いも知る女ということで始めたキャラでしたしちよつどいいかなあと。

それが吉と出たのか凶と出たのかは正直、書き終えた今でもわかりません。確かに何を言い出しても違和感はないから便利ではあったんですけども、果たしてこの女は心の内で何を考えているのか。飄々とした態度の裏で、どんな感情を燃やして閉じ込めているのか。仮にも生みの親である私にすらそれを容易に見せてくれなくなった彼女は、いつも不敵にただ笑う。なればこそ病院で語った過去（ターン28）、そして最終決戦で見せた感情の爆発（ターン40）の炎をより一層激しく燃え上がらせて見せてくれたのでしようから。

自分に苦しみ、過去に囚われ、時と共に膨れ上がる一方の重石から逃れるために完全敗北を心のどこかで望みながらも、それすら10年以上もの長きにわたり与えられなかった勝利の二文字に呪われる女。それでも嫌いな自分から目を逸らさずに最後は必ず立ち上がり、ただ胸を張り最前線で背中語る。いい女ですよ、彼女は。

2、エンタメデュエリスト：鳥居浄瑠とりいじょうる

言わずと知れた本作もう1人の主人公。ある意味では本作全ての始まりともいえる『BV』事件の被害者となったことから、彼の人生は大きく動き出した。新米デュエルポリスではあるが腕は本物であ

り、数多の元プロデュエリスト相手に大立ち回りを繰り広げるだけの確かな実力と胆力を持つ。

はい鳥居です。ある意味本作一番の被害者、今だから言えるけど彼にはほんとうすまんかった。そのことについて釈明する前にまず彼の生い立ちから話していくと、まあARK―Vですね。あまりいい話を聞かないこの作品ですが、私個人としては悪しざまには言いたくないんですよね。こと1年目だけで話をすれば、今でもあれは間違いなく遊戯王の最高傑作だったと思っています。2年目以降もちよいちよい面白いところはあつたし、絶対に素材自体は悪くなかったと思うんですよ。色々と言われがちなエンタメデュエルに關しても、これは絶対に向まく魅せることができるはずだと。

……結果？察してください。エンタメデュエル、予想以上に難しい題材でした。これは反省しかないのもうほとんどん具体例も出しちゃいますが、最初のうちはよかったです。鳥居も確かな経験とそこからくる自信に裏打ちされたエンタメをノリノリでやってくれたのでこちらも筆が進む進む。具体的にはFile1の裏デュエルコロシム全般からFile2の朝顔戦(ターン13)、ここまでですね。巴戦(ターン15)、ここからなぜか歯車が狂い始めました。そもそもあの試合、当初の予定ではあそこまで派手に負けさせるつもりじゃなかったんですよ……うまいこと理由付けて中断に持っていか、負けるにしてもせめてもうちよつと深刻じゃない、前向きに闘志を燃やせる負けっぷりにするか。書いていくうちにどんどん深刻に重くなっていつて、再登場の際(ターン19)にはまだ傷も癒えていないポロポロの姿で精神的にも駄目押しを喰らうという。なんでこの人こんなポロクソに墮とされてんの……?いや書いたのは全部私です。

おそらくですが(なぜか他人事)、エンタメデュエルは特性上明るく楽しくを第一に観客へのショーに徹するという都合上、極端な陽に傾きがちなんだと思います。陰陽のバランスがおかしい。だからこそ、何かのきっかけで1度転げ落ち始めるともう止まらないのでしよう。現に彼は、私が当初描いていた想像も想定も全部ぶち抜いて、墮ちる

ところまで堕ちていってしまいました。最終的にはどうにか軌道修正して再び主役の片割れに返り咲きましたが、正直あれもかなり無理のある展開だったと思っています。

書きたいものは間違いなくあったのに、その裏にある闇に気が付くことができなかった。これは物書きとしての私の明確な敗北であり、何かの形でリベンジしたいものです。

……と、まあこの2人はやっぱり別格の位置に置いておきましょう。続いては時系列順に、ストーリーと登場キャラについて振り返ります。

File 1―裏デュエルコロシウムについて

本シリーズ始まりの地。コンセプトとしては世界観に触れつつキャラ紹介もしつつとにかくいっぱいデュエルすること。初手大会編というなかなか変則的なスタートでしたが、おおむね書きたいものは書きましたね。主約2人はもちろん後のシリーズでも大きな役割を果たすことになる七宝寺、八卦、巴もここで出せましたし、前作はGX沿いという都合上なかなか書くわけにもいかなかったシンクロ召喚以降の召喚法もたっぷり使えました。余は満足であるぞ。

3、名無しの権兵衛―チンピラ

Q、なんでこいつが3人目なんです？

A、だって初デュエルの相手だし……一応再登場もして出番2回もあるし……名前はないけど。

「メタルフォーゼ」使いのチンピラ。伝統と信頼のお約束、初デュエルは3000打点の継承者。糸巻曰く年は若いらしく、彼女の手によって1度は返り討ちにあうものの苦し紛れに吐いた裏デュエルコロシウムの情報を取引材料に逃げ出させてもらう。巴を代表とする元プロを多数抱え持つ裏世界の組織……の末端中の末端であり、後のカードショップ「七宝」襲撃にも参加している。

デュエリストとしては2流どまりで、灰流うららや超融合といったパワーカードを所持しているものいかんせん本人の実力がカードパワーに追い付いてはいないイメージ。それでもハマした時に足がつきにくい末端構成員としてはマシな方であり、それなりに使われる

立ち位置のつもりで書いた人。平たく言えば有象無象の上澄み。

4、戦う違法社長―兜大山^{かぶとたいざん}

『BV』被害からの復旧事業でうまいこと財を成した成金企業、兜建設の初代社長。冴えない太った好々爺といった風貌ではあるが商才は高く、デュエルモンスターズに關しても理解と造詣が深い。巴と手を組んで裏デュエルコロシアムの海上確保から資金供給、そうかと思えばそれとは組織の対立する七宝寺と手を組んで海上プラントの建設までやってのけた。カードに対してはかなり思い入れもあるらしく、隠し持っていたエースカードたる究極伝導恐獣^{アルティメットコンダクターティラノ}は精霊の付いたカードであることが終盤明かされ、本人には自覚はなかったがその事実がまた鳥居のことを精神的に追い詰めていた。

この人は一見するとあちこちに振り回されたあげくやさぐれた鳥居によって大怪我まで負わされた被害者だけでも、作中の事件を色々考えると割とこの人が悪いよなあ。この人さえいらんことをしなければ……まあその場合でも、巴に七宝寺なら別の手段で遅かれ早かれ同じようなことをしていたでしょうが。そう考えれば糸巻のいる町で全ての歯車が回りただけマシだったのでしよう。

単体で見れば決して悪人じゃないけどもロクなことしない人、いまずよね。そういう人です。

5、蕾の中のHERO―八卦九々乃^{はっけくくの}

みんな大好きサブヒロイン。主拵2人を筆頭にどいつもこいつも現実世界の荒波に飲まれて感性も何も擦り切れに擦り切れた中、突如として現れた毒氣の一切ない純粹な天使。七宝寺、糸巻と作中トップ勢に囲まれての無自覚パワーレベリングによってメキメキと才能が開花していったが、それでもまだまだ経験の浅い蕾の段階。大輪の花を咲かすべく、今日も意気揚々と己の魂とも呼ぶべきカードであるクノスペを操る。

糸巻と鳥居は干支ひとまわりほど年が離れています、さらにそこからもう1周下の新世代代表。生来の性根と育ちの良さ、そして何より若さが生んだ純真さからくる行動力はまさにメインキャラの人たちに欠けているもので、そういう意味でも動かしていて楽しい娘……

というよりむしろ今作では一番自分の意思でしゃべったり動いたりしてくれたキャラクターで、彼女がメインの間は私からストーリーを作らずともこの子らしいやり方でお話を進めてもらうことも多々ありました。糸巻さんのことを過剰なまでに慕うその姿は少々アヤシイ気配も漂いますが、当人に元々そっちの気質があつたのか両親と離れ離れになったことで欠けていた母性を無自覚のうちに彼女に求めていたのか、はたまた恋に恋する少女ならではの自分の想いの読み違いなのか。その辺は、私からはノーコメントで。

ちなみに余談ですが彼女が得意とし、またその代表格ともいえる攻撃ロツクコンボ、通称クノスペシャル。あれはまさに彼女の未熟さの表れでもあり、一定以上の実力を持つ上位勢には通用しないように描写してきました。事実あのロツクは登場するたびに返しのターンで単体除去だの効果無効だったのであっさり突破されていて、唯一維持できたのは元から攻撃する気がない夕顔戦（ターン10）のみなのは密かなこだわりポイントだったり。

6、グランドファザー：七宝寺守しっぽうじまもる

職業：プロデュエリストの先駆けにして頂点、界限では文字通りの生ける伝説。『BV』の台頭とほぼ時を同じくして隠居の身となり、長らく姿を隠していたが実は家紋町で小さなカードショップを営んでいた。裏事情に独自の情報ルートを持つているらしく、世界中で行われる違法デュエルの情報は筒抜けといってもいい。

……はいここまで表の顔。その実態は『BV』開発者で、その際には世界全ての認識を歪めデュエルモンスターズとカード界を政界、財界とためが張れるレベルの一大事業にのし上げさせたとんでもない男。元凶も元凶、大元凶ですね。

この老人の正体については既定路線です……ともあながち言い切れないかも。間違つてはいないけどね。もう少し詳しく説明すると、最初からこの人が元凶でラスボスにしようとは決めてました。けどまさか、ただのカードでしかなかったデュエルモンスターズを文字通り1瞬のうちに世界中に歴史レベルで広めてのけたほどの人だとは。こんなに壮大な話にするつもりはなかったのですが、ねえ。この

人のおかげでこの世界の歴史も運命も文字通りに様変わりしたので、もし彼が居なければ糸巻さんはただの気丈な美人、鳥居も無名の劇団員で生涯を終えていた可能性は多分にあります。たくさんの才能を発掘し表舞台に引き込んだ功と、それすらもかすんで見えなくなるほどの罪。そんな常人ならば頭のおかしくなるような清濁を呑み込んでなお平然としていられる、その精神力こそが二つ名の『グラントファザー』たる所以なのかもしれません。

プラントでの最終決戦における立ち回りについてはもう少し後でまた喋らせてね。

7、お山の大将―山形仁鈴やまがたにすす

誰？という人も多いでしょうが、なんてことはなく裏デュエルコロシアムの1回戦、潜入中の鳥居が最初に戦うこととなったチンピラの大將です。一応名前付きなのに手下のチンピラより出番の少ない人。

彼のデッキは私の作品としては珍しくモチーフや特定テーマが存在せず、なんとなく思いついたコンボの元をそのまま形にして叩きつけたタイプですね。伝説のフィッシュヤーマン3世のダメージ倍加能力に2000打点ダイレクトアタッカーのヴァンドラをレベル5戦士族という点で組み合わせ、相手がバトルフェイズに追加モンスターを出そうとも確定ワンショット（初期ライフが4000のため）。今では3世の特殊召喚も登場時点に比べはるかに簡単になったことで、割と実際に組んでもいい感じで回りそうだなーなんて久々に読み返してちよつと自画自賛気味に思ったりしました。

キャラクターとしては典型的なやられ役、というかもつと言えればあの場面での鳥居の引き立て役なので正直語るところが……。ただまあいちいち最高の反応を素で返してくれるあたり、パフォーマーとしての適性は割とありそう。本人は不本意だろうけど。

8、多重結界のショーマン―蜘蛛くも

裏デュエルコロシアムの開催を糸巻に嗅ぎつけられたことに気が付いた巴がとりあえず牽制代わりにぶつけた雇われの賞金稼ぎデュエリスト。本名は不詳、蜘蛛の呼び名の由来は対戦相手をじわじわと身動きできない状況に絡めとる戦闘スタイルから。

この人にも謝らなければいけないことがあって、単純に彼はもう1回ぐらい出番作るつもりだったんですね。具体的にはカードシヨップ七宝襲撃メンバー、あそこに入れようと当初は思っていました。詳しくは後々話しますが、結局その案が没になったことで彼の物語は半端なところで宙ぶらりんにもっとも元プロの人たちとは異なり始めから裏街道のデュエリストとして始まった彼に関しては、あまり表で進めるようなものではないのかもしれませんが。それにしたってモブでいいから後半で何かしらのセリフぐらいは言わせておけばよかったです。

9、太陽光発電―青木勝あおきまさてる

私の書く話にしては珍しい、特定のカードありきのデツキ使い。まあ八卦ちゃんもそのタイプですが。薄幸というか間が悪いというか要領が悪いというか、常に損な役回りを押し付けられて、それでもぐっと耐えながら人生歩んでいく感じの人ですね。個人的には好印象ですが、それはそれとして絶対人生交代したくはないタイプ。言動から隠し切れない「いい人」感が滲み出るような言葉遣いを意識してやっていたような覚えがあります。それで最後は大火傷して意識不明の入院だからやっぱり報われない。この人はもちろん後述のロブや朝顔、それに一本松ですが、一応エンディング前後でどうにか意識は戻り怪我からも復帰して元の暮らしに戻っていったという設定はあります。どこにも書いてないだけで。

しかし前作が学生ばっかだった反動なのかプロは全員大なり小なり落ちぶれたという設定のせいなのか、やたら苦労人の比率が高いなあ。

10、おきつねさま―巴光太郎ともえこうたろう

元凶その2。といっても彼の場合どちらかという時代には振り回されて翻弄され、彼なりに足掻いて自分の居場所を自分のやり方で死守しようとしていただけなのでむしろ被害者といってもいいのかもですね。

それはともかく、彼は糸巻さんのライバルであり、正反対の宿敵であり、ある意味では鏡写しの存在です。女と男という性別から始まり

豪放磊落な彼女に対する慇懃無礼。種族操作のアンデットワールドに対する属性書き換えのシャドウ・ディスプレイ。その他もろもろエトセトラ。

ですが皮肉なことに、その価値観の相違からくる憎悪には同時に同族嫌悪も混じっています。彼は間違いなく彼女にも負けないほどの身内想いであり、一度自らの傘下に入り込んだ人間に対してはなんのかんの言いつつも全力で向き合います。ただの嫌味な奴ではなく、そういうところがあるから彼の側にもいつだって誰かしら人がついてくるわけです。

基本的には糸巻さんの逆を行きつつ、根っこの部分には同じところがあり、それでいて最終的には真逆の結論に至る。ありふれたキャラ付けといえそうですが、彼と彼女はどこかでなにかが一步違えばお互いに逆の道を歩んでいた可能性もあるわけで。ある意味ではお互いの存在こそが、お互いを自分の道から迷わずに進ませた原因といってもいいのかもですね。

もつと平たく言えば糸巻さんが最後まで闇落ちしなかった最大の原因。逆も真なりですがそれやっちゃうといよいよいつと同じになっちゃうし、彼を書くことでその手の欲求が全部発散できていたの……。なので今だからぶっちゃけると、作者の立場として彼には割と感謝しています。

11、バックキャップ 後ろ帽子のロブ・ロベルト・バックキャップ

「身の丈2メートルの寡黙な大男」を、この作者は実力者の符号として使いたがる節があるんですよねどうも。その原点がどこにあるかというとまさにこの男、元をただせばロベルト・バックキャップのせいです。

というのもこの男、かれこれ10年は前に書いていた一時創作の短編。その主役の設定をそのまま流用したんですよね。いやー懐かしい。オリジナルの世界では探偵でしたが、こちらの世界ではめでたくデュエリストになりました……あ、今はたとえ探しても読めませんのであしからず。ですが裏デュエルコロシウム鳥居サイドの大ボス、それも魔界劇団のデュエルを書く上でやっぱり外せないであろう対妖

仙獸。そんな大一番に持つてくるあたり、なんのかわの私も彼のことは頭の片隅で気にしていたんでしようねえ。

寡黙で知恵が回る大男、トレードマークは後ろ向きに被った帽子。本名不明経歴不詳、ついたあだ名が後ろ帽子バックキャップのロブ。そんなわけで、ある意味では彼がこの作品の中で清明を抜いてぶつちぎりの古参キャラともいえる人間です。まあだからといってどうということもありませんが。

12、錬金武者―鼓千輪つづみせんりん

実質的には次の次の章からの人間ですが、一応彼女の初出はこのエピソードですのでこちらで語ります。銀髪ロングのゆる三つ編み、クールな口調と芯のある性格の切れ者、灰色の縦セタにロングスカート、そして何がとは言わないけれどでつかいの。この時点で再登場することと最終決戦前に離脱することはもう確定事項だったので、どうせ活躍期間が短いならと遠慮なく私の性癖ぶち込みました。

そういった欲望ダダ洩れな出自が影響しているのか、この人は書いていて良くも悪くも素直なキャラクターでしたね。ここに出せば当初のシナリオ通りに話を進めてくれる、というか。私の予想を決して下回らず、かといって飛び越えることもないというか。戦力的には糸巻さんたちの補強でしたが、ストーリー的にはむしろ私の補助でした。自由に書いてるとすぐ思い通りに暴れようとして収集付かなくなるんだもんあの人たち。

ただ逆に、もうちょっとはつちやけてくれても良かったなあ……なんて言うのは贅沢でしょうか。自我が私に近いところで常に安定していた反面想定以上の上振れを見せてくれることもなかったのもう少し彼女に関しては底を掘り下げたかった気がします。

File 2―精霊のカードについて

全力で雑にまとめると現れる敵をただ返り討ちにするチュートリアル的な裏デユエルコロシム編も終わり、いよいよ自前の物語を動かし始めたころ。八卦ちゃんの一言から始まるストーリー、ちらりと除く糸巻さんの過去、前作からは元主人公の再登板、そして完全に私にとっても予想外だった鳥居の離脱と、まあ短いのにイベント盛りだ

くさん。

ただある意味では、一番糸巻さんたちの戦力が充実しておりわざわざ何ひとつなかつたこの章が一番楽しかったかもしれない。今となっては、ですが。

13、欲望の対価―男

糸巻さんには名前を覚えてもらえなかったものの、デュエルポリスとしての新人時代にデュエルを通しての対話から彼女に鮮烈な印象を植え付けた元プロ……から、『BV』売春事業の斡旋役にまで堕ちた男。とはいえ完全に魂を売りきつたわけでもなく、プロ時代からずっと愛用してきた蟲惑魔カードに関して誰にどれだけ金を積まれようと頑として実体化を断ってきたらしい。もつともこれを聞いても彼女は認めるどころか余計に怒るだろうな、とも思うけれど。辛いから嫌だ？なにアンタだけいいカツコしようとしてんだ、そんな資格ないんだよアンタには、って感じで。

ちなみに心折れてこのような道に走った彼女に対して彼女が答えた「消え去らない、往生際の悪い老兵に引導を渡す」というひとつめの行動理念ですが、これは後述の（時系列的にはもう少し前の）デュエルポリス糸巻の誕生秘話で彼女がこの職を選んでからの苦しみと良心の呵責と負い目引け目、そういったあらゆる負の感情に押し潰されないうように考えに考え苦し紛れに縋った言い訳です。何度も自分にそういう聞かせて行為を正当化し続けることで、いつしか本当にそんな気になるという自己暗示。もうひとつの「現状のデュエルモンスターズは間違っている、未来のため」……こちらはより綺麗事ですが、それだけに彼女の本心に近いです。このふたつの言葉はともに彼の心に届きはしましたが、だからといって既に歩みを止められないところまであの時の彼は来てしまっていたわけですね。

14、オール・フォー・熱血指導―夕顔燃^{ゆうがおもゆる}

シリアスやった反動なのか想定のお割増しぐらい弾けてしまった男。まあそんなこともあるよね。「熱血指導」だけで勝利する……これもまあ、ライフ4000制ならではの勝機のある遊びですよ。5回決めれば勝ち。それまでに削りきられたら負け。せつかく厳密に

はOCGルールと違う制度でやっているから、こういう書いていて楽しいデッキを書きたかった。最初はジャイアントレーナーの口上も2つ目以降は特に考えてなかったのに、いいや熱血だ！って脳内のこいつが叫ぶもんだから急遽エクシーズ召喚のたびに毎回違う口上を考える羽目に。

でもこの馬鹿馬鹿しさのおかげで、数話連続でシリアスに寄りつつあった作品のバランスを一時的にでも反対側に傾けることができたから面白いものです。蛇ノ目戦(ターン25)では初登場時にさんざんはつちやけていた彼が本気で怒り、そして力及ばず返り討ちに合う姿を見せることで八卦ちゃんの覚悟を決めるという大役も果たしたことですし。作中戦績は振るいませんでしたが、決める所はきっちり決めてくれたできる男です。

15、二色のアサガオ―朝顔涼彦あさがおすずひこ

巴サイドの右腕兼苦勞人ポジジョン。奴は有能だけどいかんせん対人となれば神経逆撫で待ったなしなので、基本的な交渉や雑務はすべてこの男がこなして緩衝材の役割を果たしていた。プロ歴の長さから顔が広く人望も厚い、デュエルの腕前も糸巻と巴の両者が一目置くレベルで、頭も回り身体能力も高いと実は相当なハイスペックなのよこの人。ただし極端な羞明を患っていて、夜だろうが常に遮光用のサングラスを付けていないと碌に周りが見えなくなる。このあたりを生かした描写を、具体的には襲撃されるあたりに入れようと思っていた(罠に嵌められたことは悟るも光で目を眩ませられ退路を封じられたためやむを得ず実力行使に出た等)けども、さすがに冗長になりすぎるのであえなくカット。結果として本編の描写だけではなぜか室内でもグラスンを付けただけの人に。

巴も自らのすぐ煽りたがる悪癖と、それを承知の上でうまく立ち回ってくれるうえに何かあっても自力で活路を切り開くだけの實力がある彼のことは相当信頼していました。だからこそ彼1人で、かえって足を引っ張りかねない護衛も抜きに敵対組織との交渉に向かわせた(ターン19)わけですが……ただいかんせん、元プロだけあってエンターテイナーとしての戦い方、ある程度ターン数をかけて殴り

合いの攻防を繰り広げる癖が体に染みついていたわけで。それが裏目となり、蛇ノ目のワンショットキルを前に不意を突かれる形で初見殺しをまんまと食らいました。その結果として次章、デュエルフェスティバル編の事件は起きることとなるから何が災いになるかわからないものです。

大人というより大きくなった子供みたいな人間の多いこの作品で、数少ないまともな大人です。それだけに苦労も多かったようですが、なんのくんの人生を楽しむ方法とそのコツもちゃんと知っている人だと思えますよ。

16、鉄砲水の神官―遊野清明ゆうのあきら

登場させたときはもうちよつと叩かれるかと思っただけど、案外そんなこともなかった前作主人公。時系列は前作最終回のちよつと後。敵方ばかり後から後から出てくるのに味方の加入ペースは遅々として増えない本作ではゲストだからといって容赦も遠慮もなく、即戦力になる彼は精霊の視認能力というこの世界にはそぐわないオカルトパワーも駆使してがんがん実戦に駆り出させてもらいました。戦力的にはともかくとして、まだ年若い八卦ちゃんを大人の抗争に積極的
に駆り出すほど糸巻さんは落ちぶれてはいないのです。その点この男、見た目は15、6ですが実年齢はこんなんでも23ですし。それでも実は鳥居より若いという。

あと前作と決定的に異なる点として、前作ラストで叩きこまれた恋人関連のトラウマの存在があります。さすがに前作のネタバレまでするのはここでは遠慮しておきますが、なんだかんだ自分のトラウマや苦しみをどつしり受け止めて苦しむ糸巻さんとは違い、彼の場合は傷が癒えていないのに化け物じみた精神力だけで無理やり上から抑えつけています。この新旧主人公、自己嫌悪という点ではお互い様ですが、時にはどつしり腰と覚悟を据えて自分の暗部と正面から向き合える彼女に対し未だ前すら向けず心の中のドロドロしたものをひたすら溜め込んで抑えつけてばかりの彼の方が精神的にはよほどまづい所にいるんですよね。少なくとも、まだ彼の物語は終わってはいません。書く気が起きるかどうかは別として。

それと、これは完全に余談ですが。久々に彼を書いていて思ったのは、意外にも一抹の寂しさでした。前作は一部の話を除きずっと彼の一人称で話を進めてきたのですが、あの時に比べこの男が明らかに動かしにくくなっていったんですね。どうも私の中での彼のキャラ像がぶれてきたというか、成長した彼とのずれが私の中で生じたというか。以前はこちらの思考と彼の動きがシンクロしていたのに、今ではそれに一拍の遅れが出るようになったというか。この感覚を説明するのはちよつと難しいですが、とにかくあの時よりも確実に書きにくい、動かしにくいキャラクターに成長してしまいました。それはそれで喜ぶべきことかもしれないませんが、やっぱり寂しいものは寂しいですね。

17、カードの精霊―儂無みずき

まあ一応キャラクターではあるし、ということでのこの章が始まった全てのきっかけで、元はといえば廃図書館の本棚の裏にでも偶然落ちていて忘れ去られていたカード。たまたまその近くに清明が次元の壁を越えて現れたことでその余波を受け精霊が目覚め、さらに近場でドンパチやっていたデュエルポリスとテロリストのデュエルに使用された『BV』の余波で強制的に受肉されたという偶然の三重奏。なのでこの一件に関しては本気で誰一人として意図的な関与は行っていません。『BV』によるソリッドビジョン実体化のエネルギーが切れたことで徐々に消えていく肉体に訳が分からないなりに本能的な恐怖を感じ、とにかくどうかしようとする誰か頼るものもない中で一人ぱたぱたとしていたところを一般人に何度か目撃され、その話に尾ひれがついて結果的に冒頭の幽霊騒ぎが出来上がったわけですね。

File 3&4―デュエルフェスティバルについて

正直ここ分割する意味はそこまでなかったよね、なデュエルフェスティバル編。最初はデュエルフェスティバル編だったけども、やっぱり実在のあれと被るのはよくないよなあと直前になって変更した思出。

そんな裏話はさておき、お話としては鳥居が徐々にフェードアウトする反面鼓さんが正式なメンバーに加入する前半と、ひたすら大会進

行の裏でデュエルポリス2人が町の平和を守るべく奮闘する後半の王道ストーリー（自称）。祭りを何事もなく終わらせてやりたいデュエルポリス達、手段と目的はともかく実行犯が気に食わない巴サイド、今後の計画を進めるためにもこの第一歩をなんとかとしても成し遂げたい七曜サイド、そしてギリギリまで何も知らなかった少女コンビと4勢力の書き分け……できてたかなあ。私の頭の中ではどうにか大きく破綻することもなく仕上げられたつもりですが、読者の皆様はどうだったでしょうか。

18、もうひとりのエンターテイナー——いっほんまついちだん一本松一段

鳥居の設定上当然いるはずの、彼がまだ子役だった頃の兄弟子。せっかく元劇団員なんて設定にしたからには、どこかで出したかった旧メンバーですね。腕が立ち、頭が回り、フットワークも軽く、デュエルポリスに肩入れする理由もあると、まさに情報のタレコミ役をやってもらうにはうってつけの人間だったので満を持してここを出しました。もつとも、彼が倒れたせいで鳥居の闇は急速に深まることになりましたが。登場を決めた時の私はそこまで頭が回らなかったのです。

まあ気を取り直してこの男についての話を続けると、やはり同門の兄弟子であるからには鳥居のエンタメと通じるところがどこかに欲しかったんですね。オーバーに芝居がかった口調も（鳥居はデュエル時のみ、彼は四六時中と若干の違いはあるもの）そうですが、モンスターモンスターの召喚時にはたとえ即素材になるのが仕事の下級であつてもいちいち二つ名をつける反面エースモンスターであつても特に長々とした召喚口上を述べたりしないのはデュエングルド特有の代々続くスタイルです。曰く、デツキに選んで入れたカードならばその全てが主役であり、みな平等であるとの信念の表れらしいですよ。

19、ワンショットキラー——じやのめりゆうさく蛇ノ目龍作

朝顔の項でもちらりと触れたプロデュエリストの弱点である短期決戦の弱さとは、一方的な試合展開や問答無用の蹂躪は盛り上がり欠けるし、何より放送時間とかの関係でスポンサーから好まれないという理由があります。少なくとも私の世界ではそうなってます。テ

レビ等での中継も、せつかく時間が取つてあるのに5分で終わりではあんまりですしそうおかしな設定ではない……と、思います。プロ時代の彼はそれを逆手に取つて多少下準備に時間がかかったとしてもとにかくワンショットキルに拘り続け、「次はどんなギミックを持ち出すのか」に観客の興味をすり替えさせて自分の地位と需要を確保したわけです。魅せたいものがワンショットキルである以上、1つのデツキを使い続けるようなこともありません。むしろ、それをやっていたらすぐにファンが離れるであろうことを知っていたのは他でもない彼自身です。

そしてそんな努力の日々は、テロリスト側についた現在に最悪の形で実を結びました。ダメージが実体化する『BV』下でのワンショットキルはもはや兵器の域であり、デツキをころころ変える特性は下手人の特定を難しくし、何より魅せるための殴り合いのスピードに慣れたプロにワンショットのスピードは初見殺しにもほどがあります。今にして思えばなにからなにまで自分の磨いてきた技能と相性のいいこの世界は、むしろ彼にとつては天国だったのかもしれないですね。

20、夢見て跳ねる文学少女―竹丸夢たけまるゆめ

彼女、結構いろいろな事情があつて生まれたキャラクターなんです。初期プロットには影も形も存在しない子だったし。まず、めつちやいい子がどうしても書きたかった。作中の良心が、なんだかしだいはつちやけ始めてた八卦ちゃんだけじゃカバーしきれなかった。これはバランスを取るためにどうしても必要なキャラクターだったのです。

というのが最初の、そして最大の理由。極端な話として攫われヒロイン相手に八卦ちゃんが奮闘する話を書くだけだったら相手はモブでもいいわけだし、私としてはあえてネームドにした時点で今後もある番を作るつもり満々でした。だから主に私のモチベーションのため年齢の割に出る所は結構きつちり出てるなんて設定も付けたわけで（小声）。逆に同じ話で初登場したタッグデュエルの相手2人は特に出す気も凝った設定もなかったのが最後まで名無しのモブでした。

次に、デュエルフェスティバルの目的が明かされた時点でふと、そ

れを体現するためのキャラクターが欲しいなあと思ったこと。あれを見てデュエルは楽しいんだと思い、新しくその世界に足を踏み入れる……そんな具体例が欲しくなったわけですね。特に今回、世界設定の都合上完全に真っ白な初心者はなかなか出しづらい感じでしたから。

そして実際のところ、八卦ちゃん以上に過酷なパワーレベリングもありめきめき上達する彼女の成長は、私としても結構楽しかったです。本編時はずっと借り物のグレイドルを使っていました。新エースとして位置づけられたブラッド・メフィスト。それに叶わなかった、けれど大切な初恋の思い出を胸に彼女はこれからもどんどん伸びていくでしょう。

21、考古学者―ことぶきしんすけ寿紳助

……時系列的には次は清掃ロボだけど、あれの解説とか書くこと特にないから飛ばしてこの人。正直この爺様にも書くほどのことがあるわけでもないけども、これは丁度この時期私が凝っていたブロックンロールでシンクロしたモンスターと生成したトークン、あと1枚何か上級を使ってフルパワーデミウルギアのリンク召喚を消費抑えつつ行う方法をそのまま使うにあたりそれっぽいキャラクターを考え結果こんな人になりました。星遺物の物語を追い求める語り部の老人。

次に紹介する笹竜胆もそうですが、この2人にはなにも世のプロデュエリスト全員がデュエルポリスとテロリストに二分されたわけじゃないよ、というのを示して欲しかったのもあります。当然デュエルモンスターズから足を洗った元プロもいるし、そういう人はそういう人でまた自分の人生を歩んできたんだよ、と。それでも結局カードから完全には離れられず、だからこうしてこの場に戻ってきてデュエルを観客に魅せているわけですが。

22、十六夜の決闘龍会―ささりんどうせんり笹竜胆千利

ロリではないけどのじゃが書きたかった。時々こういうこつてこての口調が強いキャラ出したくなるんですよ。なんかこの小説、こんな理由でキャラ付けが決まる子多くない？特に女子。まあ済んだ話

だしいい……ですよね。

そんな彼女の使用デッキ、言うなれば植物軸ツイオルキン。これは私はずっとどこかで書きたかったデッキのひとつで、八卦ちゃんの「クノスペシャル」ともども割と長いこと温めてきたものです。だからなんだという話ですが、前作だとGXという都合上シンクロもH E R O 被りもなかなかやる機会がなかったんですよ。

ちなみに彼女、実を言うと最終決戦時以降の家紋町に再登場させる予定はありませんでした。やや好評だったものだから急遽出番が増えただけで。いやあ、何がどうなるかわからないものです。

23、成金の女王―七曜菊しちようきく

何気に下の名前はここが初公開の七曜さん。皆名字でしか呼ばないんだもん。

紛れもない加害者ではあるのですが、作中では巴の目を掻い潜りながらカードを集めることに成功するも陽動に放った蛇ノ目が返り討ちになり、同時に自身の潜伏場所も探知され一気にピンチに陥るも一足早く殴り込みに来た鼓相手に一歩も引かず冷静に説得から当たり、それでも駄目ならとやむをえず実力行使でどうにかしようとして事実あと一歩まで彼女を追いつめるもそれを乱入者の闇堕ち寸前な鳥居に阻まれ、ならばと乱入の承認と引き換えに手札にライフの補充という要求を通してみせ、どうにか有利を保ったまま相手になるも普段ならば絶対されないであろう理不尽を押し付けるタイプのワンキルを叩きこまれ敗北からの逮捕、と徹底的に可哀そうな目にしかあっていない人。本人は何も悪手を取っていない、それどころかその場で生きる中では常に最善の判断を重ねていたのに健闘虚しく結果がこれというのがなんとも物悲しいですね。そういう絶妙に不幸な星の元に生まれ、やさぐれながらそれでも精一杯突っ張って生きている人です。ちなみに現役時代は貴重な喫煙女子？がりもあって、割と糸巻きさんとは仲良かったのよ。あの人の場合は元々歯に衣着せない物言いをしてくるタイプの方が（参考：鼓、朝顔等）ウマが合いやすいので、そういう意味でも何かとその合法ロリ体形とは真逆のアンニユイな彼女はつるんでいて心地よかったですのう。脱獄教唆のシーン

(ターン30)にはそういう昔馴染みならではの仲の良さが書けているといいなあと思いながら会話させてました。

Last File—デュエルポリスの戦いについて

これまで散々振りまいてきた伏線や謎がついに収束する、泣いても笑つても最終章。この後語りまで含めても全46話と前作の136話に比べてえらく早い幕引きのように思えるかもしれませんが、通しで見ると割と短めの話にする、というのは書き始める前から決めていた既定路線でした。というか当初の予定だと1年以内に全部終わらせる予定だったのに、なぜにこれほど時間が伸びた……？いや私のせいですが。

この章を書くにあたり決めていたこととしては、「糸巻の過去」「鳥居の帰還」「竹丸の成長」「巴との因縁の終わり」そして「一連の事件にケリをつける」、この5つです。やっぱり、終わらせるならきっちりやりきってからじゃないとエンディングなんて胸を張って言えまんからね。

まあ過去話の経緯だとか、あのふたりにしかできなかった巴戦のラストだとか、色々と言いたいことはありますが、あえて語りたことをひとつに絞りました。ずばり、最終決戦の展開です。主役2人とラスボスとの変則マッチ、無敵だった糸巻の作中初敗北、そして全てを終わらせた鳥居の一撃。どうでしょう、皆様の期待を裏切らず、それでいて予想を裏切ることはできたでしょうか。読者の皆様がどう思ったかはさておき、あれもかなり初期からこんな感じにしようと思っていた流れに大体沿った形です。

まず最初にあの戦いで、七宝寺が鳥居の方から先に潰そうとした理由は明確にあります。彼にとつて、糸巻太夫という女はプロ時代に幾度も相手をし、それ以降のデュエルポリスとなつてからも交流のある、いわば勝手知つたる相手です。それに対し鳥居の情報は、直前の裏デュエルコロシアムで優勝した際の記録しか持ち得ていない。つまり、より不確定要素の大きい相手だったわけです……これ逆に言えば、彼は糸巻相手ならば確実に勝てるかと踏んでいたという何よりの証拠になるんですね。タイマンなら負けることはないからこそ、そち

らを放置することになってもほんのわずかにでも可能性がある方を真っ先に叩く。

ただ彼にとつて想定外だったのは、糸巻もまた同じことを考え同じ理由から全力で鳥居を守りにかかったことです。戦闘破壊耐性を持つ麗神を真っ先に立て攻撃誘導まですることで自分のライフ減少もいとわずにグランドマンの攻撃をいなしつつ鳥居のライフを守り、返しのターンではあえて除去ではなく打点での正面突破を図ることでおそらく引いているであろうと読んでいたオネスティ・ネオスを自分に対し使わせ手札と勝機を少しでも削る。またこれがどこまで計算づくだったかは本人以外には定かではありませんが、さらに自分が敗北する様を見せつけることで鳥居の心に残っていた怒りとためらいすらも打ち消してみせる、と、徹頭徹尾この1戦での彼女は鳥居のサポート役に回りました。その読み違いこそが、あの七宝寺が最終決戦で犯した唯一のミスだったわけですね。無論、糸巻が自分たちの時代はもう終わりであると考え新たな世代への交代を求めていることは彼自身もずっと前から承知していましたが、どうしてもかつてのやり直しと復興に妄執を燃やす老人にはそれが理解できず、ゆえに対策を取ろうとすら思えなかった。それがあの戦いの全てです。

24、復讐者―剣順平つるぎのしゅんぺい

彼個人がなにをどうしようが身の回りの破滅を止められなかったという点では、この男こそが作中一番の被害者といってもいいのかもしれないですね。どうすればよかったのか、という問いに対し、明確な回答を与えることが私にはできません。犯した罪をその命で償うことになり、何が起きたかもわからないうちに苦しみもなく父親の元へ行ったことを、救いと称していいものか。

25、幻影の最終防衛ライン―本源氏ほんげんじ轍わだち

前話が前話で書いてるうちにこっちのメンタルにも傷をつけていったものだから、今度は人間的に成熟した安定感のあるダンディズムが書きたかった……すーぐバランスとろうとしてキャラ付けするなこいつ。でもそういつた誕生経緯もあって私の個人的な受けはよかったのか、しれつと2話連続で出番があるうえにきっちり白星まで

拾っていったとレギュラーメンバー以外ではかなり優遇された人。最後には世代交代の時期が来たことを認めて新たなデュエリストたち以後を託して去っていきましたが、その姿は糸巻さんからすると羨ましいものでもあったでしょう。誰かに面と向かってそう問われると、本人は頑として認めないでしょうが。

26、ロストテクノロジスト―徳川学三郎とくがわがくざぶろう

プラント近辺の海中に潜み、ミスト・ウォームを実体化させることで迷いの霧を起こしていた張本人。割とそれ以上でも以下でもない。時系列的に巴の組織も七曜のいた組織もかなり長いことドンパチやっていたせいであらうから戦略上超重要拠点とはいえこの地に割けるだけの実力者がだいたい不足しており、彼のような2軍、とまではいわないまでも1,5軍程度のデュエリストですら動員せざるを得ないという事情があった。

27、ノーネームド―引戸卿士ひきどきょうし

糸巻の元マネージャー。元同僚のプロ崩れは散々いろいろな形で出てきたので、1回ぐらいいは出したかったそれとは違う斜め方向での過去からのアプローチ。やっぱ糸巻大夫という女は気を回す立場に置いてこそこの仕事はできるけどこの人や鼓のようにその性格をよく知り手綱を握れるフォロ―役を別に立てて自由に動かす方が何かとうまくいくのよね。

ただこの人の場合語りたいたいの、そのキャラクター性よりもむしろ使用デッキの方ですね。登場回(ターン33)にも書いてますがあれは私にしては珍しく、というか前作合作させても唯一私自身でギミックを考えたオリジナルなものではないです。あれはツイッターの方で大変お世話になったある方の原案に私が口を出して完成したもので、まあ色々あった結果ただでさえその人には何かとお世話になりっぱなしだったのにこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない、と私の方から一方的に距離をとっているため今ではすっかり疎遠になっていますが……。

エンディングについて&総括

どちらかといえば糸巻たちよりも清明を軸に締めた今回のエン

ディング。以前もちらりと書きましたが、本来はこの場に彼ははいないはずでした。元々のプロットでは糸巻と鳥居のタツグで七宝時の執念を打ち破ることにこそ成功するもののそこに時間をかけすぎたせいでもはやプラントの大爆発は避けきれず、その規模とエネルギーからいつて海を隔てた家紋町にまで深刻な影響が出ることは容易に想像の付く、しかしもはや手の打ちようもないためせめて避難誘導のため一同がプラントを脱出した……というところで実は単身その場に残っていた清明がダークシングナーの能力を限界以上に駆使してプラントを丸々取り込むサイズの巨地上絵、というか海上絵を作成。「デュエル終了まで何人たりとも出入り不可」の性質を生かしてその結界の内部だけで爆発のエネルギーを無理やり押し込める荒業で家紋町の、ひいては日本の危機を救うも、紫色の炎の線が海上から消えたときそこに清明の姿は跡形もなく……という大変ヒロイックなお話が展開される予定でした。まあ結果的にやめたんですが。やめて正解だったような、やっぱ書いとけばよかったような。まあ上述のように清明の物語はまだ終わっていませんので、そっちを選んだ場合でも吹き飛んだ肉片から再生するもチャクチャルさんが力を使い果たして休眠状態になる生存ルートだけは用意するつもりでしたが。

……そう考えるとすっごい平和に終わりましたよね、本編。

ただどちらにせよ今にして思えばちよつと反省しているのが、清明の出番が多すぎることに。勝率自体はぶっちゃけ大したことないんですが、これは単なるゲストキャラの存在感ではない。ちようど入れ替わりで鳥居がややこしいことになり、糸巻さんも裏デュエルコロシアムのころの余裕がやや薄れ、主役2人が揺らいでいた時期だったのでやや書きにくくなったとはいえ長年主役張ってきたアドバンテージのある彼に無意識のうちについ頼ってしまっただけですよ。いっそ精霊のカードについての話が終わったら早々に離脱させておくべきだったか。

それでは、これにておしまいです。この話は続けようと思えばいく

らでも続けられるものですが、それでもこれにて閉幕させていただきます。

正直なところ、ああすればよかったこうすればよかった、そういった思いや後悔は尽きません。が、それは裏を返せば彼女ら彼らが単なる私の意思でのみ行動する人形などではなく、自分の意思で動く確固たる人格を持つ存在だということなのかもしれないとも思います。ひとつの人格だからこそ間違えることもあるし、はたから見ているれば無駄や無意味にしか思えない行動を取ることもある。しかしこれまで綴ってきたこの物語は、この世界の人々にとっては紛れもないその人たちの人生のかたちです。

糸巻大夫、鳥居浄瑠、その他たくさんキャラクターたちへ。ありがとう、そしてご苦労様でした。これからも、その人生を悔いなく生き抜いてください。

そして読者の皆様。途中で著しく執筆ペースが落ちるわ1年で終了の予定がどんどん遅れるわ、なにかとグダグダなペースでしか更新のできなかった本作に最後までお付き合いいただき、謹んで感謝申し上げます。